絆が紡ぐ運命の軌跡

伊集院龍也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
絆が紡ぐ運命の軌跡

【Ｎコード】
Ｎ３１０６Ｌ

【作者名】
伊集院龍也

【あらすじ】
【ＦＣ編】ゼムリア大陸に存在するリベール王国。この国は『導力革命』により急速に成長し豊かになった。しかし、その王国の水面下で独裁国家を作らんとせん陰謀が進んでいた。一方、ある少女と少年は『遊撃士』と呼ばれる民間人の安全と平和を守る団体に所属しようとする。その後に陰謀に巻き込まれることになる。
【ＳＣ編】無事に陰謀を阻止した少女。しかし、事件解決のすぐ後に少女の前から少年は姿を消すことになる。さらに阻止した陰謀の陰に《結社》という組織が存在し、少女は消えた少年を探すと同時

に事件の真の解決を志す。

【零の軌跡編】クロスベル自治州。この自治州は大陸有数の貿易拠点であり、わずか数年で目覚ましい発展を遂げた。一方で大陸の二大国であるエレボニア帝国とカルバード共和国はその利益を独占しようとクロスベル自治州国内で睨みあっていた。この問題を人は『クロスベル問題』と呼んでいた。発展の陰で様々な事件を抱えることになる。

※ＦＣ・ＳＣ編完結しました。現在は、『零の軌跡』編です。

第1章　父、旅立つ（1）（前書き）

絆が紡ぐ運命の軌跡　開幕です！
これからどんどん楽しませていきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いします！

第1章　父、旅立つ（1）

―ブライト家

「……う～……まぶし……」

栗色の髪の毛と赤い瞳を持つエステル・ブライトは窓から差し込んでくる日光の眩しさのために目を覚ました。

「ふわあああああああああっ～～～」

背伸びをしてベッドから体を起こす。

「ん～～っ、よく寝たぁ～～っ！」

少し寝すぎたせいか体が鈍っているような気がした。

「……えっと……今朝の当番は父さんだったっけ」

ブライト家では家族が朝食等の準備は当番制になっている。

「それじゃあ……ヨシュアはまだ寝ているのかな？」

その時、外からハーモニカの音が聞こえてきた。

「あは、起きてるみたいね？よーし……あたしも早く支度しよっと！」

そう言って、エステルはベッドから出て支度をし始めた。

―ブライト家　テラス

ヨシュアはハーモニカを奏でていた。

「ひゅーひゅー！やるじゃない、ヨシュア」

エステルは拍手をした。

「おはよう、エステル」

漆黒の髪と琥珀色の瞳を持つ少年、ヨシュア・ブライトは起きてきたエステルに挨拶した。

「ごめん。もしかして起こしちゃった？」

ヨシュアが申し訳なさそうに言った。

「ううん。ちょうど起きたところよ」
そう言うと、エステルはヨシュアの横に立った。
「でも、ヨシュアってば朝っぱらからキザなんだから～。や～、お姉さん、思わず聞きほれちゃったわ？」
そう言ってエステルはヨシュアをからかった。
「なにがお姉さんだか。僕と同い年のくせにさ」
ヨシュアは呆れた顔をした。
「チッチッチッ、甘いわね。同い年でも、この家ではあたしの方が先輩なんだから。言うなれば姉弟子ってやつ？」
エステルは指を振りながら自慢げに言った。
「はいはい、良かったね」
ヨシュアはどうでも良さそうに言った。
「あ～、なんか投げやり」
エステルは不満そうに言った。
「でも、ホント良い曲よね。明るいんだけど、どこか切なくて……。他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな。あれ……何て名前だったっけ？」
エステルは考え込んだ。
「星の在り処だよ」
ヨシュアが言った。
「そうそう、『星の在り処』。あーあ、あたしもハーモニカ、うまく吹けたらいいんだけどな。簡単そうに見えてこれがけっこう難しいのよね～」
エステルは溜息をついた。
「君がやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……。要は集中力の問題だと思うよ」
ヨシュアは説明した。それだけではないと思うけど……
「うーん、全身を使わない作業って何だか眠くなるのよね～」
エステルは苦い顔をした。
「ヨシュアも、ハーモニカもいいけどもっとアクティブに行動しな

くちゃ。ヨシュアの趣味って、あとは読書と武器の手入れくらいでしょ？今時インドアばっかりじゃ女の子のハートは掴めないわよ～？」

エステルは威張りながら言った。上から目線が嫌ですね。

「悪かったね、ウケが悪くて。そういう君こそ趣味に偏りがあると思うけど。釣りとか虫取りとかスポーツシューズ集めとか」

ヨシュアは言った。

「むぐっ……いいじゃん、好きなんだもん。って言うか、虫取りなんかとっくの昔に卒業したってば」

エステルはヨシュアを軽く睨んだ。

「うーん、本当かなぁ？」

ヨシュアが疑った。

その時、バルコニーの下から男の声がした。

「おーい。エステル、ヨシュア」

「あ、父さん、おはよ！」

「おはよう父さん。朝食の用意、もう出来たんだ？」

2人が返事をした。この男性がエステルとヨシュアの父、カシウス・ブライトである。

「ああ、バッチリだぞ。2人とも、冷めないうちにとっとと降りてこい」

カシウスが2人を呼んだ。

「りょーかい！」

「すぐに行くよ」

2人はすぐに食卓へと向かった。

「ごちそうさま～！うーん。お腹いっぱいになっちゃった」

エステルはお腹をさすりながら満足げに言った。

「朝からよく食べるなあ……」

ヨシュアは半ばその食事っぷりに呆れている。
「いいじゃん。食う子と寝る子は良く育つよ♪」
エステルは自慢げに言った。太ることは気にしていないのか？
「まあ、しっかり喰ってせいぜい気合いを入れるんだな。お前たち、今日はギルドで研修の仕上げがあるんだろう？」
カシウスが2人に尋ねた。
「うん。今までのおさらいだけどね」
ヨシュアが言った。
「それが終われば、あたしたちも父さんと同じ『遊撃士』よ。もう、子供扱いさせないんだから！」
エステルは高らかに言った。
「フフン、まだまだ青いな。最初になれるのは《準遊撃士》。つまり見習いにすぎん。一人前になりたかったら早く《正遊撃士》になることだな」
カシウスがまだまだと言わんばかりに説明した。
「むむっ、上等じゃない」
エステルはむっとした。
「見てなさいよ～。いっぱい功績を上げまくって父さんを追い越してやるんだから！」
エステルは負けじと言った。
「はっはっはっ。やれるもんならやってみろ」
カシウスは高らかに笑った。
「なに張り合ってるんだか……。エステル、油断は禁物だよ。今日は最後に試験だってあるんだからね」
ヨシュアは言った。
「え？」
「……試験って、ナニ？」
エステルは何も分かっていない様子だった。
「ま、まさか……覚えていないとか言わないよね？研修が身に付いているかどうか確認するためのテストだよ。合格できなかったら補

習だってシェラさんが言ってたじゃないか」
ヨシュアは完全に呆れ顔だ。
「やっぱ～……カンペキに忘れてたわ……。そういえばシェラ姉がそんなこと言ってたような気も……。まーでも、何とかなるって☆」
エステルは楽観的だ。
「はあ、君って子は……ノンキというか、そそっかしいというか」
ヨシュアは溜息をついた。
「まったくもって嘆かわしい。この楽天的な性格はいったい誰に似たんだろうな」
カシウスも溜息をついた。
「し、失礼ね～。父さんほどじゃないってば！」
エステルは反論した。
「まったく、似たもの父娘だな。まあいいや。エステル、そろそろ町に行こう。ギルドでシェラさんが待ってるよ」
ヨシュアが言った。
「ん、わかった。シェラ姉を待たせると恐いもんね」
そう言って、エステル、ヨシュアは席を立った。
「あ、そうだ父さん。今夜の食事当番、あたしだけど何か食べたいものでもある？リクエスト、受け付けとくよ？」
エステルが言った。
「ふむ、食べたいものか……」
カシウスは考えた。
「……。ルーアン風、魚の蒸し焼きバルサミコ酢風味なんてどうだ？」
カシウスが考えた末に言った。なんだよ、その食べ物は！？
「な、なにソレ？」
エステルは全く訳が分からなさそうだ。いきなり言われたら、当然そうなるね。
「それはエステルにはちょっと無理だと思うけど……」
ヨシュアは苦笑した。

「うむ、言ってみただけだ。いつもと同じ、魚のフライかオムレツでいいさ。無理をしないで喰えるものだけ作ってくれ」
カシウスは笑って言った。ちょっと失礼だな。
「し、失礼なオヤジねぇ。反論できないのが悔しいけど……」
エステルは不満顔だ。
「ああ、そのかわり頼みがある。雑貨屋で『リベール通信』というニュース誌を買ってきてくれ。今日、最新号が入荷するはずだ」
カシウスが言った。
「わかった。雑貨屋で『リベール通信』ね」
そう言うと、カシウスはエステルにお金を渡した。
「残ったら小遣いにしていいぞ。ただし、無駄遣いはするなよ?」
カシウスが言った。
「やった、ありがと!」
エステルは喜んだ。
「それじゃあ父さん、行ってくるよ」
ヨシュアは言った。
「おお、しっかりやれよ。シェラザードによろしくな」
カシウスがそう言うと、2人は家を後にした。

第1章　父、旅立つ（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

準遊撃士になるため、最終試験に臨む2人。エステルは無事合格できるのか！？

第1章　父、旅立つ（2）

―地方都市ロレント

「ちょうどいい時間だね。早すぎもせず、遅すぎもしないってとこかな」

ヨシュアが言った。

「うう、教会の日曜学校を卒業したばっかりなのに……。遊撃士（ブレイサー）になるためにこんなに勉強させられるなんて夢にも思わなかったよ～……」

エステルは気だるそうに言った。

「それも今日が最後じゃないか。好きで志望したんだからこのくらいは苦労して当然だよ」

ヨシュアは言った。

「それもそっか」

「……よし！最後くらい気合いを入れてシェラ姉のシゴキに耐えるぞっ！」

エステルは気合いを入れた。前向きでいいですね～。

「気合い、入ったみたいだね」

「それじゃあ、すぐそこにある遊撃士協会（ブレイサーギルド）に入ろうか」

ヨシュアが言った。

―遊撃士協会ロレント支部

「あら、おはよう。エステル、ヨシュア」

遊撃士協会の受付をしているアイナである。

「アイナさん、おはよう！」

「おはようございます」

2人が挨拶した。

「シェラ姉、もう来てる？」
エステルがアイナに尋ねた。
「ええ、2階で待ってるわ。今日の研修が終われば晴れてブレイサーの仲間入りね。2人とも頑張って」
アイナが励ました。
「うん、ありがとう！」
「頑張ります」
2人は2階へと向かった。

―遊撃士協会2階
「……」
「『星』と『吊し人』……」
「『隠者』と『魔術師』……」
「そして逆位置の『運命の輪』……」
「これは難しいわね。どう読み解いたらいいのか……」
タロットの前で考えている銀髪の女性こそシェラザード・ハーヴェイである。「銀閃」の異名をもつ正遊撃士である。
「シェラ姉、おっはよー！」
エステルが元気良く現れた。
「あら、エステル、ヨシュア。めずらしいわね。こんな早くに来るなんて」
シェラザードは意外そうな顔をした。
「えへへ、最後の研修くらいはね。とっとと終わらせてブレイサーになってやるんだから！」
エステルは言い張った。
「はあ……いつも意気込みはいいんだけど。ま、その心意気に応えて今日のまとめは厳しく行くからね。覚悟しときなさい」
シェラザードは言った。

「え～っ、そんなぁ……」
エステルは疲れた顔をした。萎えるのが早すぎるよ、エステルさん……。
「お・だ・ま・り。毎回毎回、教えたことを次々と忘れてくれちゃって……」
「そのザルみたいな脳みそからこぼれ落ちないようにするためよ」
シェラザードはエステルに厳しく言った。
「え～ん、ヨシュアぁ！シェラ姉がいぢめるよ～！」
エステルがヨシュアにすがった。
「大丈夫ですよ、シェラさん」
「確かにエステルは物覚えが悪くて。ついでに無闇とお人好しで余計なお節介が大好きだけど……」
「カンの良さはピカイチだからオーブメントも実戦で覚えます」
ヨシュアがシェラザードに言った。
「はあ、こうなったらそれに期待するしかないわね……」
シェラザードは溜息をついた。
「ちょっとヨシュア……」
「なんか全然フォローしてるように聞こえないんですけどっ？」
エステルがヨシュアを白い目で見た。
「心外だな。君の美点を正直に言ったのに」
ヨシュアは笑った。
「まったくもう……」
エステルが肩をすくめた。
「あ、ところでシェラ姉。タロットで何を占ってたの？なんだか難しい顔してたけど」
エステルがシェラザードに尋ねた。
「ああ、これね。近い将来、身の回りで起きる事を漠然と占ってみたんだけど……」
「ちょっと調子が悪いみたい。読み解くことが出来なかったわ」
シェラザードはタロットカードを見つめた。

「読み解くことが出来ない??」
「へえ……そんな事ってあるんですか?」
2人は不思議そうな顔をした。
「あまりに意味深な形になると逆に解釈に困ることがあるのよね」
「まあ、それはいいわ。最後の研修を始めるわよ」

「今まで習ったことを一通りおさらいするわよ。ブレイサーとして活動するのに必要な最低限の常識だからね」
「特にエステル。ちゃんと聞いておきなさい」
シェラザードはエステルに釘を刺した。
「うい〜っす」
適当な返事をエステルはした。大丈夫かいな。

「まず、オーブメントについて」
「《導力》と呼ばれるエネルギーで動く機械仕掛けのユニットが《導力器》よ。七耀石(セプチウム)を加工した結晶回路(クオーツ)が中に組み込まれていて、その機構に応じてさまざまな現象を引き起こすことができるわ。最初に発明されてから50年くらいしか経っていないけど……今では証明、暖房などの日用品から兵器、魔法、飛行船まで、あらゆるものにオーブメントの力が利用されているのよね。ちなみに、この技術革新は一般的に《導力革命》と呼ばれているわ」

「次に、遊撃士について」
「遊撃士(ブレイサー)というのは、地域の平和と民間人の保護のために働く調査と戦闘のスペシャリストよ。魔獣退治や犯罪防止だけでなく荷物の護衛から落し物の捜索まで様々な形で地域に貢献する仕事ね。各地

の遊撃士を束ねているのが大陸全土に支部を持つ遊撃士協会（ブレイサーギルド）よ」

「最後は、リベール王国についてね」

「あたしたちの住む、このリベールはゼムリア大陸の西部に位置する豊かな自然と伝統に育まれた王国よ。大陸でも有数の七耀石（セプチウム）の産地で、それを利用したオーブメントの開発でも高度な技術を誇っているわ。リベールにとってオーブメント技術は周辺の大国と渡り合いながら独立を守っていくための重要な柱ね。１０年前、エレボニア帝国に侵略された時も最後に王国軍を救ったのは、導力機関（オーバルエンジン）で空を駆ける飛行船を利用した作戦だったわ。まあ、帝国とは今も微妙な関係だけどアリシア女王陛下の優れた政治手腕もあって今のリベールは、おおむね平和と言えるわね」

「さてと……復習はこれくらいで勘弁してあげるか。今日はやることが山ほどあるんだからとっとと実地研修に進むわよ」

シェラザードが言った。

「ねえ、シェラ姉。実地研修って今までの研修と何が違うの？」

エステルがシェラザードに尋ねた。

「実地っていうのは現場を体験してもらうってことよ。これから２人には遊撃士の仕事に必要なことを一通りやってもらうわ」

シェラザードが説明した。

「……それってつまり。机でお勉強、じゃないってこと？」

エステルが目を輝かせた。

「ええ、もちろん違うわよ。あちこちに出かけていって実際に体を動かしてもらうわ。たっぷり汗かいてもらうつもりだから楽しみにしてなさい」

シェラザードが言った。

「えへへ、助かったわ～。体を動かせるんなら今までの研修よりず

ーっとラクよ。もう、心配して損しちゃった」
エステルは楽しそうだ。この変わり身は素晴らしい。
「なんだか急に元気になったね」
ヨシュアが言った。
「その笑顔が最後まで続くといいんだけど……」
シェラザードが先行き不安そうな顔をした。
「……さて、と最初の実地研修に行きましょうか」
シェラザードが席を立った。
「おう！」
エステルが元気良く言った。

第1章　父、旅立つ（2）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ始まる最後の研修。エステルは余裕の気持ちが出てきたが、果たして！？

第1章　父、旅立つ（3）

―遊撃士協会1階

「最初の研修は仕事内容の確認よ。……その前に、まず2人に渡すものがあるわ。アイナ、もう用意できてる？」

シェラザードはアイナに尋ねた。

「ええ、いいわよ」

アイナが答えた。

「じゃ、2人ともももらってきなさい」

そうして、エステル、ヨシュアはアイナのところにいった。

「大切なものだからなくさないようにね」

2人は手帳のようなものを受け取った。

「それはブレイサー手帳といって仕事の記録を残すための公式な手帳よ。どんな話を聞いたのか、どこで何を見つけたのか……。些細な出来事が手掛かりになることも多いわ。細かいことでも必ず記録を残すようにね」

シェラザードは説明した。

「分かりました」

とヨシュア。真面目ですね。

「げっ、ちょっと面倒かも……」

とエステル。こっちは不真面目。

「あら？気のせいかしら。返事がひとつしか聞こえなかったけど？」

シェラザードはエステルを見た。

「あ、あははは……」

エステルは苦笑した。

「記録を残すことはブレイサーの大事な義務よ。面倒くさがらず、しっかりやりなさい」

シェラザードは念をおした。

「はぁ～い、分かりました」

エステルは渋々返事をした。
「ふむ、分かればよろしい。じゃあ、そこの掲示板に依頼が載っているから、手帳にメモしなさい。その次は、工房で勉強するわよ」

―メルダース工房
「ここでは工房の利用法を勉強するわ。工房では、導力魔法（オーバルアーツ）を使うための専用のオーブメントを改造したり支援用のクオーツを合成したりできるの。アーツには多彩な効果があるから使いこなせるようになれば色々と便利よ。ブレイサー稼業っていうのは危険と隣り合わせの職業だから工房とも長いお付き合いになるわ」
と、シェラザードが説明した。
「……ま、工房で説明できるのはこれくらいか……。あとは自分達で色々試してみるのがいいわ。さあて、次はいよいよお待ちかねの認定試験ね」
シェラザードが言った。
「……え？し、試験って、なにそれ？」
エステルが不思議そうな顔をした。もう忘れているエステル……。
「……まさか、本気で忘れたの？今朝も話したばっかりじゃない」
ヨシュアは呆れ顔だ。
「あ……。そういえば、聞いたような聞いていないような……」
エステルは顔を赤らめた。
「はあ……ホント期待を裏切らない子ねえ。まあいいわ。とにかく試験場に行くわよ」
シェラザードが言った。
「えっ！？も、もう！？ちょ、ちょっと待って、まだ心の準備が……」
エステルは慌てた。
「ほらっ、きりきり歩きなさい」

シェラザードが有無を言わさず、エステルの首を掴んで引きずって工房を後にした。
「ヨシュア、お助け～」
外からエステルの声が聞こえる。
「メルダースさん、フライディさん。色々とありがとうございました」
ヨシュアはエステルを無視した。
「こらー、ヨシュア！覚えときなさいよ～！」
外からエステルの叫び声……。

―ロレント市　地下水路入口
「ようやく研修も大詰めね。これから2人に認定試験を受けてもらうわ。今までの研修の成果が発揮されることを期待しているからね」
と、シェラザード。
「はい」
ヨシュアが返事をした。
「……」
エステルが口を開けたまま周りを見渡した。
「エステル、どうしたの？」
ヨシュアが尋ねた。
「……ねえ、シェラ姉」
エステルがシェラザードに尋ねた。
「なに？」
シェラザードが答えた。
「……もしかして、試験ってペーパーテストじゃないの？」
エステルが不思議そうに聞いた。
「はあ？エステル、あんたさっき掲示板を見たでしょ」
シェラザードは呆れ顔だ。

「うん、見たけど？」
と、エステル。
「地下水路の捜索をするって書いてあったと思うんだけど。あれが最終試験よ」
とシェラザード。
「……」
「はああ～、良かったあ～～。ああ、空の女神（エイドス）さま……。地下水路を作って下さった情け深いお心に感謝を捧げます」
エステルは安堵の息をついた。そんなことで感謝された女神は呆れ顔をしているだろう。
「ひょっとして……筆記試験だと思ってたの？だから工房であんなに騒いでたのか……」
ヨシュアは呆れていた。
「ふっ、懐かしいわね。今となってはいい思い出だわ」
エステルは調子が良さそうに言った。
「はあ、本当に僕たち、ちゃんと卒業できるのかな……」
ヨシュアは不安そうだ。
「な～によ、失礼しちゃうわね」
エステルは噛み付いた。
「はいはい、２人ともお喋りはそこまで。試験前なんだから、もっと緊張感を持ちなさい。試験に落第したらキツイ補習を受けてもらうわよ」
シェラザードは言った。
「えへへ、大丈夫だってば。さっ、早く試験しちゃいましょ！」
エステルはさっきとは打って変わって調子が良さそうだ。ホンマ、色々と表情を変える忙（せわ）しない人ですね～。
「ま、自信があるなら結果で証明してもらいましょうか。……さて、掲示板にもあった通り、試験の課題は地下水路内の捜索よ。捜索対象はどこかにある宝箱の中身でそれを回収することが目的になるわ。水路の構造はすごく単純だから迷う心配はないと思うけど……。本

物の魔獣がうろうろしているから油断してると痛い目に遭うからね」
シェラザードが説明した。
「よしっ、気合入れていこう！」
エステルが言った。
「そうだね。実戦だと思って慎重に行動しよう」
2人は地下水路に入った。

―ロレント市　地下水路内
エステル達が魔獣を倒しつつ、奥に進むと宝箱があった。その中には小箱が2つ入っていた。
「ふ～ん、宝箱の中にまた箱がしまってあるなんて変ね。2つってとこも気になるし、う～ん、中には何が入ってるんだろ？」
エステルが宝箱を調べている。
「エステル、今回の任務は捜索と回収だよ。対象の調査は任務に入ってなかったと思うけど」
ヨシュアがエステルを制した。
「もう、ヨシュアってホントお堅いんだから。仕事じゃなく純粋な好奇心の問題よ。……。……ねえ、誰も見てないし、ちょっと開けてもバレないわよね？」
エステルは小箱を開けようとした。
「……。落第したいんだったら止めないけど……」
ヨシュアは冷ややかに言った。
「ら、落第ぃ！？」
エステルは悲鳴を上げた。
「そういう可能性もあるってこと。もし、これが本当の仕事だったら、それは依頼者の持ち物だからね。非合法の物でもない限り、中身を確認する権利は無いはずだよ」
ヨシュアは説明した。

「あ、それはそうかも……」
エステルは納得した。
「どうしても気になるなら、あとでシェラさんにお願いしてみれば？……さて、それじゃ、帰り道も集中していこう」
ヨシュアが言った。
「オッケー！」
2人はさっさと地上へと戻った。

―ロレント市　地下水路入口
「2人ともお疲れ。一応、規則があるんで捜索対象を確認させてちょうだい」
そうして小箱を2つシェラザードに渡した。
「……うん、本物ね。途中で開いた形跡もなし、と」
シェラザードが小箱をチェックした。
「（あ、あぶな～～）」
「（……やっぱりね）」
と2人。
「2人ともおめでとう。実技試験は合格よ」
シェラザードは労った。
「ふふん、あのくらい楽勝よ。……で、シェラ姉。その小箱には何が入ってるの？」
エステルは尋ねた。
「それは研修が終わってからのお楽しみ。さあ、お喋りはこれくらいにしましょう。まだ研修は終わったわけじゃないんだから」
シェラザードは言った。
「あれ、そうなの？だって試験は合格なんでしょ？」
エステルは不思議そうに言った。
「最後に報告についての研修が残っているわ。お疲れのところ悪い

けど、このままギルドに戻るわよ」
シェラザードが先に歩きだした。
「はあ、まだあるのかぁ。でも、仕方ないわ。ここが踏ん張りどころね」
「そうだね。あとちょっとみたいだし」
エステルとヨシュアもついて行った。

―遊撃士協会　ロレント支部
「最後の研修は報告の仕方についてね。どんな仕事でも、達成したら必ずギルドに報告しないとだめよ。どう解決したのか、その経過を報告するのもブレイサーの仕事なんだから。報告を受け付けるのは各ギルドの窓口よ。このロレントなら、２人ともよく知ってるアイナがその担当ね。あ、ちなみに報酬もそこで支払われるから」
シェラザードが説明した。
「今後ともよろしくね、お２人さん」
アイナが言った。
「じゃ、とにかく自分達で報告してごらんなさい」
２人は受付へ向かった。

「お疲れさま。無事に目的を達成できたみたいね。仕事中の手際によっては報酬が増減することもあるから注意してね」
アイナが説明した。
「さあ～て、残るは最後の仕上げね。ようやくギルドの２Ｆにもどれるわ。じゃあまたね、アイナ。忙しいトコごめん」
と、シェラザードはアイナに言った。
「ううん、気にしないで。大事な戦力を育てるためだもの。２人に

はバリバリ働いてもらうつもりだし」
アイナは爽やかに言った。
「ば、バリバリ……」
「……覚悟しといた方がいいみたいだね」
2人は呟いた。

―ギルド2F
「2人とも、お疲れさま。これで研修の全課程は修了よ。あとは実際の経験で身に付けるようにね。さて……と」
シェラザードは2つの小箱を取り出した。
「あ、その箱は……」
エステルが身を乗り出した。
「そう、さっきの試験で回収してもらった小箱ね。中に何が入ってるのか随分、気になってたみたいだけど」
シェラザードは言った。
「ひょっとして、もう開けていいの？」
エステルが尋ねた。
「ええ、いいわよ。2人とも中身を確かめてご覧なさい」
と、シェラザード。
「えへへっ、やった」
エステルは喜んだ。
「それでは……」
2人は小箱を開けた。
「この紋章（エンブレム）は……」
「じゃあ、これで僕たちも？」
2人は驚いた。
「……コホン。エステル・ブライト。ヨシュア・ブライト。本日をもって両名を『準遊撃士』に任命する。以後は遊撃士協会の一員と

して人々の暮らしと平和を守るため、そして正義を貫くために働くこと。……2人ともおめでと。これからはお仲間ってわけね」
シェラザードが言った。
「やったねヨシュア！これで晴れてあたしたちもギルドの一員よ☆」
エステルは喜んだ。
「そうか、僕がブレイサーか……。……。はは、少し不思議な気分だな」
ただ、ヨシュアは複雑な気持ちのようだった。
「もう、ヨシュアったら～。しんみりしてないで、もっとパーッと喜ばないと！ひゃっほー、やったあっ♪」
エステルはいきなり騒ぎ出した。正直、うるさい。
「はしゃぎすぎだよ、エステル」
ヨシュアはエステルを制した。
「ふふ、さてと……あたしはそろそろ失礼するわ。たまってた仕事を片付けなくちゃいけないしね」
シェラザードが席を立った。
「そっか、忙しい合間に毎日付き合ってくれたんだ。シェラ姉、ホントありがとね」
「お世話になりました」
エステルとヨシュアが礼を言った。
「ま、新人を育てるのもブレイサーの義務ってやつよ。あたしも昔、カシウス先生に研修でお世話になったもんだわ」
シェラザードが昔を振り返った。
「あ、それで父さんのこと先生なんて呼んでるんだっけ？」
と、エステル。
「それだけが理由じゃないけどね。あんた達も早く一人前になって後輩を指導できるようになんなさい。そして、ゆくゆくは先生みたいな立派なブレイサーになれるようにね。それじゃあ、またね」
そういって、シェラザードは降りていった。

「うーん、判らないわね」
エステルは唸った。
「なにがさ？」
ヨシュアが尋ねた。
「『銀閃のシェラザード』といえば若手ブレイサーの中でも1，2を争う凄腕って聞いてるけど。どうして父さんのことあんなに高く買っているのかな？娘のあたしが言うのも何だけど、しょっちゅう家を留守にしてる不良中年にしか見えないんだけど」
と、エステルは言った。
「不良中年ね……。まあ、エステルから見れば、そう見えるのも無理はないけど」
ヨシュアは目を瞑って言った。
「えっ？」
エステルはヨシュアに聞き返そうとした。
「……いや、何でもない。さあ、今日は早く家に帰ろう。無事にブレイサーになれた事を父さんに報告しなくちゃ」
ヨシュアが言った。
「うん、そうね！」
そうして、2人は遊撃士協会を後にした。

第1章　父、旅立つ（3）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

見事、準遊撃士資格を得てブレイサーの仲間入りを果たした2人。

しかし、その矢先に事件が起こる！

第1章　父、旅立つ（4）

―ロレント市内
「おーい、早く来いよ～！」
活発に走り回っている少年はルックだ。
「ま、待ってよ～！」
一方でルックを追いかけている少年はパットである。
「あれ、あんたたち……」
エステルがルックとパットに話しかけた。
「げげっ、エステル！？」
ルックが驚いて飛び跳ねた。
「あ、ヨシュアお兄ちゃん」
パットは冷静だ。
「失礼ね～。なによ、その『げげっ』ってのは？急いでるみたいだけど、どこかに遊びに行くつもり？気をつけないとダメよ～。街道には魔獣もいるんだからね」
エステルが言った。
「ふんだ、うっさいな。オトコのやることにオンナが口を出さないでくんない？ブレイサーでもないくせにさぁ」
ルックはエステルに噛み付いた。
「ふっふっふっ……甘い！甘すぎるわよ、ルック！パーゼル農園のミルクより甘いわ！」
エステルは胸を張った。なんやねん、そのたとえは！？
「へっ……？ま、まさか……」
ルックが後ずさりした。
「ホホ、つい先程をもちまして、あたくし遊撃士資格を得ましたの。正真正銘、本物のブ・レ・イ・サ・ぁ☆」
エステルはしてやったりといった顔だ。
「見習いみたいなもんだから威張れるような立場じゃないけどね」

ヨシュアは後ろから言った。
「そこ、水をささないの！」
エステルはヨシュアをたしなめた。
「わ、すごいすごい！お姉ちゃんたち、やったね！」
パットは拍手をした。
「あー、パットはいい子ね～。小生意気な悪ガキやヒネクレたお兄さんと違って」
エステルはルックとヨシュアを見た。
「そ、そんな……オレの方が先にブレイサーになるハズだったのに……。ヨシュアにーちゃんならともかく、エステルなんかに先を越されるなんて……」
ルックはうなだれた。
「なによう！その『なんか』ってのは！大体ねえ、１６歳以上じゃないとブレイサーにはなれないんだから！教会の日曜学校に通ってるお子ちゃまには無理なんだからね！」
エステルは頭にきて、怒った。
「大人げないなぁ。本気で張り合ってるし……」
ヨシュアは呆れて溜息をついた。
「くっそ～、覚えてろよ！オレも秘密基地で特訓して、すぐにブレイサーになってやる！」
ルックはいきり立った。
「パット、行こうぜ！」
ルックはパットの手をとった。
「う、うん……」
「お姉ちゃんたち、またね！」
そう言うとルックとパットは行ってしまった。
「まったく、ルックったら……すぐ突っかかってくるんだから。あたし、嫌われてるのかなぁ？」
エステルは疲れた顔をした。
「いや、むしろ逆だと思うけど」

ヨシュアが言った。
「ギャク？」
エステルは不思議そうに言った。
「ま、男の子ってことさ」
ヨシュアは分かっているみたいだ。
「それにしても秘密基地か。ちょっと気になるな……」
ヨシュアが暗い顔をした。
「うんうん！なんか、そそられる響きよね。幼いころのピュアなハートを揺さぶられるっていうか……」
逆にエステルは楽しそうだ。
「いや、気になるってのは、そういう意味じゃないんだけど……」
ヨシュアがエステルの方を向いて言った。
町を出ようとしたその時、後ろからアイナの声がした。
「エステル、ヨシュア！いいところで見つけたわ！」
アイナが走ってきた。
「あれっ、アイナさん？」
「どうしたのですか？やけに慌ててますけど」
2人は息を荒げているアイナに尋ねた。
「少し面倒なことになったの。今日はカシウスさん、自宅にいらっしゃるのかしら？」
アイナが尋ねた。
「うん、家で書類の整理をするとか言ってたけど」
「ねえ……何かあったの？」
エステルは深刻そうに聞いた。
「ルックとパット、知ってるわよね？」
アイナが聞いた。
「もちろん。さっき会ったばかりだし」

エステルが答えた。
「彼らがどうかしたんですか？」
ヨシュアがアイナに尋ねた。
「それが……ユニちゃんが教えてくれたんだけど」
「2人して、北の郊外にある《翡翠（ひすい）の塔》に行ったらしいのよ」
アイナが重苦しく言った。
「《翡翠の塔》！？あそこ、たしか魔獣の住み処になっていなかったっけ！？」
2人は驚いた。
「ええ、その可能性が高いわ。シェラザードも出かけているからカシウスさんに保護を頼みたいの」
アイナが言った。
「なに言ってんの、アイナさん！今すぐ追いかけなくちゃ！あたしたちが連れ戻してくるよ！」
エステルが即答した。
「でもねぇ……あなたたちは資格を取ったばかりだし……」
アイナは苦い顔をした。
「アイナさん。ここはエステルが正しいと思います。急げば、塔に着く前に追いつけるかもしれません」
ヨシュアが冷静に言った。
「……。わかったわ。責任は私が持ちます。遊撃士協会からの緊急要請よ。一刻も早く子供たちの安全を確保して」
アイナは少々考えたが後、決断して2人に頼んだ。
「了解っ！」
「わかりました」
2人は答えた。
「翡翠の塔は、マルガ山道の途中を西に折れた先にあるわ。私はギルドで待機しています。何かあったら連絡してちょうだい」
そう言うと、アイナはギルドへ戻っていった。

「さっそくの初仕事ね……。ヨシュア、急ぎましょ！」
エステルはヨシュアに言った。
「ああ！」
そうして、２人は急いで翡翠の塔へ向かった。

第1章　父、旅立つ（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ルックとパットが危険な状況に遭うかもしれない。エステルたちは無事ルックたちを救えるのか！？

第1章　父、旅立つ（5）

―翡翠の塔　入口

「翡翠の塔まで来たけど……。山道にいなかったってことは、あの子たち、中に入っちゃったのかな？」

エステルがヨシュアに尋ねた。

「その可能性が高そうだね。中に入ろう。……急ぐ必要がありそうだ」

「うん……そうね！」

エステルは頷いて翡翠の塔へと入っていった。

―翡翠の塔　1階

奥の方から声が聞こえてきた。

「く、暗いよ～っ……。……こわいよ～っ……」

パットの声だった。

「……そんなに恐がるなよ～！……まだ最初の階じゃないか……」

そして、ルックの声も聞こえた。

「やっぱり入ってたか……。すぅぅ～～っ……」

突然、エステルは大きく息を吸い込んだ。

「エステル？」

「ルック！パット！聞こえるなら返事しなさーい！」

エステルは思いっきり叫んだ。しかし、返事はなかった。

「あ、あんにゃろども～！あたしを無視するつもり！？」

「いや、ひょっとしたら……2階に上がったのかもしれない。とにかく奥に進んでみよう」

2人は2階へと向かった。

―翡翠の塔　2階
2階に上がると、突然奥から悲鳴が聞こえた。
「うわわわわわっ！？」
「た、助けてぇぇっっ！」
ルックとパットが魔獣に囲まれていた。
「ヨシュア！」
「了解！」
2人は武器を構え、声のする方向に突入した。

「あ、あっち行けよ、おまえら～！！」
「うわあああん。来ないでよ、バカぁあああっ」
ルックとパットが魔獣に詰め寄られている。
その時、エステルたちが突入し、魔獣の一部を倒し、ルックたちの前に立った。
「エステルねーちゃん！？」
「ヨシュア兄ちゃんだぁ！」
2人は喜ぶが、まだ危機が去ったわけではない。
「あんたたち！危ないから下がってなさい！」
「すぐに片付けるからね！」
そうして2人は魔獣に立ち向かった。

しばらくして、エステルたちは魔獣を倒した。
「よっしゃ、片付いたわね」
「うん、みんな無事でよかった」

2人はルックたちの無事を確かめ、安堵した。
「それに、突入のタイミングもなかなか良かったと思うよ」
ヨシュアがエステルを褒めた。
「えへへ、そっかな？」
エステルは褒められて赤面した。
「お、終わったの……？」
「すっげえええっ！」
ルックたちが後ろから出てきた。
「エステル、けっこう強いんだなぁ！オンナのくせにやるじゃんか！」
ルックは騒いでいる。
「このオバカ！」
エステルがルックを叩いた。
「いってぇ、何すんだよー！」
ルックが言った。
「まったく、あんたはもう！乗り気じゃないパットまでこんな所に連れてきたりして……」
その時、ルックが蒼い顔をして逃げようとした。
エステルは逃げようとするルックの首を掴まえた。
「反・省・し・な・さ・い！」
「いたた、やめろってば！暴力オンナ！馬鹿エステル！」
ルックはあんまり反省していない様子だった。
「おまけに命の恩人に対して、その口の利きよう……きついオシオキが必要みたいね～」
エステルは手に力を入れた。
「いたたたたたたっ。エステルねーちゃん！許して、ボクが悪かったです！」
ルックが謝った。
「あ、あの……お姉ちゃん。そのくらいで許してあげてよ」
パットはルックを不憫に思い、言った。

「いーのよ、この悪ガキにはこれくらいした方が身のため……」
その時、エステルの背後から魔獣が忍び寄ってきた。
「エステル、後ろ！」
それに気づいたヨシュアが叫んだ。
「え……」
魔獣はすぐそばまで来ていた。
「やば……」
エステルは武器を出そうとするが、間に合いそうになかった。
「……ちぃッ！」
ヨシュアが踏み出そうとしたその時、魔獣の背後から男性が神速の如き速さで魔獣を一蹴した。エステルの父、カシウスだった。
「……へ？」
エステルは状況が飲み込めていない様子だった。
「よかった、来てくれたんだ」
ヨシュアは、ほっとした。
「まだまだ甘いな、エステル。見えざる脅威に備えるため、常に感覚を研ぎ澄ませておく。それが遊撃士（ブレイサー）の心得だぞ」
カシウスがエステルをたしなめた。
「と、父さん！？ど、どうしてここに？」
エステルはカシウスに尋ねた。
「なに、アイナから話を聞いてな。すぐに塔に向かった行動力と、とっさの判断は評価できるが……。詰めが甘かったようだな、ん？」
「ううう、面目ないです……」
エステルが頭を垂れた。
「助かったよ、父さん。ゴメン、僕が付いていながら」
ヨシュアが申し訳なさそうに言った。
「まぁ、守ることに関してはお前もまだまだということだ。精進すればそれでいい」
「うん……」
ヨシュアは頷いた。

「それでは帰るとしよう。おーし、坊主ども、歩けるな？」
カシウスはルックたちに聞いた。
「は、はい……！」
「か、かっくいい……。カシウスおじさん！エステルの何倍もかっこいいよ！」
ルックは目を輝かせて言った。
「はっはっは、あたりまえだ。それじゃあ町に戻るぞ」
カシウスはそう言って、ルックたちと先に行ってしまった。
「……む～……。助けてくれたのは感謝するけど……。なんで父さんが、いいところを全部持っていっちゃうのよ～！？納得いかなーい！」
エステルは悔しそうに言った。
「はは、それは仕方ないよ。何といっても……カシウス・ブライトだからね……」

―遊撃士協会　ロレント支部受付
ロレントに戻ったときは既に夕方になっていた。
「ふふ、大変だったみたいね」
「まったく父さんたら……。町に到着するなり、『報告は任せた』とか言ってとっとと家に帰っちゃうし……。ホント、いい性格してるよね」
エステルは疲れた声で言った。
「まあ、いいじゃない。あの子たちも無事だったんだし……とりあえず、報告は以上です」
「初任務、お疲れさまでした。報告を聞いた感じだとあなたたちも頑張ったみたいね。胸を張ってもいいと思うわよ」
「そ、そうかな？」
エステルが恥ずかしそうに言った。

「大丈夫、次はもっと上手くやれるわ。また何かあったらよろしくね」
アイナは笑った。
「……ン……」
エステルは泣き出しそうだった。
「……。それじゃあエステル帰ろうか？」
ヨシュアは切り出した。
「そうね～……。帰って夕飯の支度をしなくちゃ」
エステルたちは帰ろうとしたその時、アイナが2人を呼び止めた。
「あ、ちょっと待って。カシウスさんに手紙が届いてたの。さっき渡しそびれてしまったから届けてもらえないかしら？」
アイナは手紙を渡した。
「……仕事関連の連絡かな？」
手紙を見て、エステルは言った。
「そうだと思うわ。外国の支部からみたいだけど」
アイナは言った。
「外国の支部……ですか？」
ヨシュアは不思議そうに言った。
「遊撃士協会があるのはリベールだけじゃないからね。カシウスさんは顔が広いからそういう手紙は時々届くのよ。それでは、よろしくお願いね」
2人は気を取り直して遊撃士協会を後にした。

―エリーズ街道（ロレント市とブライト家を結ぶ街道）
「ね、ヨシュア……」
エステルは元気なくヨシュアに尋ねた。
「ん、なにさ？」
「……。あたし……遊撃士に向いてるかなぁ」

エステルが下を向きながら言った。
「……。まあ、父さんゆずりの武術の腕もそれなりのレベルだと思うし……。困っている人がいたら放っておけないお節介な性格にも合ってると思うけど」
「えへへ、そっか……」
エステルは微笑んだ。
「ひょっとして……塔での出来事を気にしてる？」
「うん……。あの時、あたしの不注意でルックまで巻き込むとこだった。父さんが来てくれなかったら、大ケガを負わせてたかもしれない。これから先、こんな調子でやっていけるのかなって……」
エステルは小さな声で言った。
「……。何、らしくない事言ってるかな」
ヨシュアが微笑んだ。
「えっ……」
「今日の失敗は、明日取り戻せばそれでいいじゃないか。明日より先のことを考えて尻ごみするなんて君らしくもない。ずっと憧れていた仕事だろ？この程度でへこたれてどうするのさ」
ヨシュアが慰めた。
「ヨシュア……。……。うん、そうだよね……。こんなの、あたしらしくないよね！」
エステルは元気になったようだ。
「そうそう、エステルに深刻な顔は似合わないから。能天気に笑ってる方が自然だよ」
「って、どういう意味よっ！まったく、一言多いんだから……」
エステルがむくれた。
「はは、それは認める」
ヨシュアは笑った。
「まあいいや……ありがと、元気づけてくれて。それじゃあ、早く家に帰りましょ。なんか急にお腹が減って来ちゃった」
エステルには、さっきまでの深刻そうな雰囲気はまったくなかった。

「（やっぱり能天気だ）」
ヨシュアは心の中で呟いた。エステルの本質＝能天気は決定的のようだ。

―ブライト家
書斎にカシウスがいた。
「ただいま～、父さん。報告、終わらせてきたよ」
エステルがカシウスに言った。
「うむ、ご苦労だった。報告内容は、各支部で検討されて報酬や昇給などに影響してくる。これからも忘れずにな」
カシウスはエステルに念を押した。
「分かってますって。そうだ父さん。『リベール通信』買っといたから。それと、ギルドからの預かり物」
そう言って、エステルはリベール通信とカシウス宛の手紙を渡した。
「ふむ、手紙か……」
カシウスは手紙を受け取った。
「それじゃ、あたしは夕飯の支度があるから」
そこで、エステルは足を止めた。
「あ、そうだ。……今日はありがとね。危ないところを助けてくれて」
エステルはカシウスに礼を言った。
「ほう、いつになく殊勝だな？ようやく父の偉大さを理解してくれたようで嬉しいぞ。さあ、遠慮するな。どーんと胸に飛び込んでくるがいい」
カシウスが笑いながら言った。この父親もお調子者だ。
「調子に乗んないの！まったく、うちの男どもは減らず口ばかり達者なんだから……」
エステルはぶつぶつ言いながら書斎を出て行った。

「思っていたよりも落ち込んだでいないようだが……ヨシュア、お前のおかげか？」
カシウスはヨシュアの方を見て言った。
「大した事はしてないよ。ちょっとハッパをかけただけさ。もともと強い子だからね」
ヨシュアが言った。
「ふん、まだまだだ。ブレイサー稼業をしていれば、迷ったりすることは幾らでもある。それを乗り越えてこそ一人前だ」
カシウスが真面目に言った。
「くす、相変わらず娘想いだね」
その時、厨房からエステルの声が聞こえてきた。
「あっちゃあ～っ……もう1回やりなおしだよ～……。いきなり挑戦するのは、さすがに無理があったかも……。否、料理は気合い！何度でも挑戦あるのみよっ！」
これを聞いて、カシウス、ヨシュアは呆れた。
「まったく……落ち着きのないやつだ」
カシウスは呟いた。
「少し手伝ってくるよ。あの調子じゃ、いつ食事にありつけるか分からなさそうだし」
そう言って、ヨシュアは厨房へと向かった。
「ふふ……。……さてと」
カシウスは手紙の封を切った。そして、その内容に目を通す。
「ふむ……帝国方面からの連絡か……。……」
しばらく目を通していると、カシウスの顔が険しくなっていった。
「……」
そして、カシウスは突然声をあげた。
「……なんだと……！」

第1章　父、旅立つ（5）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

カシウス宛に届いた手紙。その内容に驚いたカシウス。この後、カシウスはどうなるのか？また、エステルたちの取る行動は！？

第1章　父、旅立つ（6）

―ブライト家　夜の食卓

「ほう、驚いたな……」

カシウスがエステルの作った料理に感心した。

「どうよ、エステル特製、ふわふわ玉子のチキンオムライス！心して味わいなさいよねっ♪」

エステルは胸を張った。

「うん。美味しくできてるよ、これ。やるじゃない、エステル」

ヨシュアも満足そうだ。

「ふふん、これが真の実力よ。やー、色々あったけど今日はすごくいい一日だったなぁ。遊撃士の資格も貰ったし……初めての任務も経験したし……。オムライスも成功したしね♪」

エステルは満足げに頷いた。

「ふむ……初めて作ったわりには喰えるな。覚悟していたのに拍子抜けだ」

カシウスは笑った。

「失礼ね～。素直に美味しいって言ってよ」

エステルはカシウスを睨んだ。

「いや、こんな上出来なものが出発前に喰えるとは思わなかった。やるじゃないか、エステル」

カシウスはエステルを褒めた。

「えへへ……。……。……出発前？」

エステルはカシウスの言葉に疑問を持った。

「父さん、ひょっとして……」

ヨシュアはカシウスを見た。

「うむ。急な仕事が入ってな。しばらく家を留守にするぞ」

カシウスは2人に言った。

「ちょ、ちょっと待ってよ！それって……いつからなの？」

エステルは驚いて問い返した。
「明日からだ」
カシウスは答えた。
「あんですって～っ！？いくらなんでも急すぎるわよ！」
エステルは叫んだ。
「さっきの手紙だね……なにか事件でも起こったの？」
ヨシュアはカシウスに聞いた。
「なに……単なる調査だ。色々な場所を回るから1ヶ月くらいはかかるだろう。そういう訳で、留守を頼んだぞ」
カシウスはそう言った。無責任だな、オイ……。
「なにが『そういう訳で』よ！」
エステルは怒って声を荒げた。
「まったくもう、いつもいつも勝手なんだから……」
エステルは落胆した。
「仕方ないよ、エステル。頼まれたらそれに応えるのが遊撃士の仕事なんだから」
ヨシュアが言った。
「それは判ってるけど……ロレント支部の仕事はどうすんの？依頼とか、受けてるんじゃない？」
エステルはカシウスに尋ねた。
「5、6件ほどな。そこで考えたんだが……。お前たち、俺の代わりに幾つか依頼を受けてみないか？」
カシウスは2人に提案した。
「えっ……。それって、父さんがやるはずだった仕事のこと？」
エステルは驚いた。まさかこうなるとは思いもしなかったからだ。
「うむ、新米のお前たちでもやれそうな仕事を回してやろう。難しそうなのはシェラザードに頼むことにする。どうだ？」
カシウスは2人に聞いてみた。
「やってみたいけど……失敗した時のことを考えると……。本当に、あたしたちみたいな新人でもできるような仕事なの？」

エステルは不安そうだ。
「比較的簡単なものばかりだが、中には人の命を預かる仕事もある。強制はしない。よく考えてみることだな」
カシウスは言った。
「……。ヨシュアはどう思う？」
エステルは隣に座っているヨシュアに尋ねてみた。
「僕は賛成だよ。良い経験になると思うしね。たしかに僕たちは半人前だけど２人合わせれば１人前くらいにはなる。お互いにフォローし合えば、何とかこなせるんじゃないかな？」
ヨシュアはやる気だ。
「２人合わせれば１人前……。うん、そうだよね！父さん！あたし、やってみるよ！って言うか、凄くやってみたい！」
エステルの迷いは吹き飛んだようだ。
「決まりだな。明日、出発前にギルドに話を通しておこう」
カシウスは言った。
「ところで父さん。明日はどっちの飛行船に乗るの？王都行き？それともボース行き？」
ヨシュアはカシウスに尋ねた。
「王都行きだ。朝の１０時に出発だな」
カシウスは答えた。
「だったら明日はちょっと早起きしなくちゃね。目覚まし時計、セットしとこっと」
エステルが言った。結構、話が決まるのが早いですね、この家は……。

―ブライト家　外
「……父さん」
エステルが寝た後、ヨシュアが、外で酒を飲んでいたカシウスに話

しかけた。
「ヨシュアか」
カシウスは振り向いた。
「あんまり飲み過ぎると、またエステルに叱られるよ」
ヨシュアがカシウスを窘めた。
「旅立ち前の景気づけさ。どうだ、お前も付き合わんか？」
カシウスがヨシュアに酒を勧めた。
「遠慮しとく。ていうか、未成年に酒を勧めないでよ。シェラさんじゃないんだから」
ヨシュアは断った。
「はは……あれは俺以上のウワバミだからな。……」
カシウスは突然黙った。
「……。……かなりの事件みたいだね？」
ヨシュアが沈黙を切り出した。
「まだ確証はないが……帝国の方で動きがあるらしい」
カシウスは重く言った。
「エレボニア帝国で……。キナ臭いね、それは」
ヨシュアが言った。
「目立った動きではないが……それが却って気にかかる。まずは帝国大使館に探りを入れてみるつもりだ」
カシウスが言った。
「わかった。エステルのことは任せてよ」
ヨシュアは言った。
「あまり甘やかすんじゃないぞ？遊撃士になったからには自分の面倒くらいは見られないとな」
カシウスは忠告した。
「エステルなら大丈夫だよ。天性のカンを持っているし、荒削りだけど、武術も天才的だ。きっと一流の遊撃士になれる」
ヨシュアはカシウスに言った。

「今は、世間知らずのヒヨっ子さ。いずれ自らの意志で進むべき道を選ばなくてはならん。……ヨシュア。それはお前にも言えることだ」

カシウスはヨシュアに言った。その途端、ヨシュアの顔がかげった。

「……」

ヨシュアは何も言わない。

「もう5年になるか……。正直、あっという間だったな」

カシウスは想いを馳せた。

「うん……。本当にあっという間だった」

ヨシュアは口を開いた。

「あの時の言葉……まだ撤回するつもりはないか？」

カシウスはヨシュアに尋ねた。『あの時の言葉』？

「……」

「僕にとって最後の一線だから。それすら守れなかったら、僕は……自分が許せなくなるから。だから……ゴメンなさい」

ヨシュアはカシウスに謝った。

「……謝る必要はない。だがな、これだけは覚えておけ。お前がどんな道を選ぼうと、この5年間を消すことはできん。俺もエステルも、お前の家族だ。どんな事があろうともな」

カシウスが厳かに言った。

「……うん……。……ありがとう……父さん……」

ヨシュアは微笑んだ。

第1章　父、旅立つ（6）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

帝国に向かうことになったカシウス。エステルたちは本格的なブレイサー稼業を開始することになる。

第1章　父、旅立つ（7）（前書き）

カシウスが帝国へ向けて出発します。それと同時にエステルたちの遊撃士としての仕事が始まる！

第1章　父、旅立つ（7）

―次の日　ロレント発着場
エステル、ヨシュア、シェラザードとカシウスがいた。
「さて……そろそろ時間だ。エステル、あまり無茶をしてヨシュアの手を焼かせるんじゃないぞ」
カシウスがエステルを見て言った。
「もう、耳タコだってば～。父さんも無理しちゃだめよ。もう若くないんだからね」
エステルが言った。
「ふん、まだまだ若いもんには負けられんさ。シェラザード、お前にも急な仕事を押しつけてすまんな」
カシウスがシェラザードに言った。
「いえ、気にしないでください。先生の代わりが務まるか、自分ではちょっと心配ですけど」
シェラザードは控えめに言った。
「謙遜するな、銀閃の。ついでに悪いが、何かあったら2人を頼むぞ」
カシウスはエステルたちを見て言った。
「フフ、それは任せてください。決して甘やかさずに厳しく見守ればいいんですね？」
シェラザードはさらりと怖いことを言った。
「さすが判ってるじゃないか」
カシウスは笑いながら言った。
「なによそれぇ……」
エステルはむくれた。
「はは、このあたりが師弟だね」
ヨシュアが言った。

その時、案内放送があった。
一王都方面行き定期飛行船、《リンデ号》、まもなく離陸します。
ご利用の方はお急ぎください。

「おっと、いかんいかん……」
カシウスが慌てて飛行船に乗った。
「父さん、行ってらっしゃい。こっちの事は心配いらないから」
ヨシュアが言った。
「仕事が終わったら遊んでないでとっとと帰ってきてよね」
エステルが言った。
「人聞きの悪いことを言うな。だがまあ……なるべく早く帰ってくるさ。それでは、2人とも元気でな」
カシウスがそう言うと、飛行船は離陸した。

「行っちゃったね」
ヨシュアが空を見て言った。
「うん……」
エステルは悲しい顔をした。
「寂しそうな顔しなさんな。どうせすぐに戻ってくるわよ。何の調査かは知らないけど、先生だったらあっと言う間だわ」
シェラザードはエステルに言った。
「さ、寂しくなんかないってば！父さんが留守にするなんていつもの事だもん」
エステルはシェラザードに言い返した。
「はいはい。そういう事にしといてあげる。それじゃ、あたしは先生から引き継いだ仕事を片づけるけど……」
「困ったことがあったら遠慮なく頼ってきなさいよ？」
シェラザードは2人を見て言った。

「うん、でも最初のうちは自分たちの力で頑張ってみるよ。どこまでやれるか試してみたいし」
エステルは言った。
「フフ、ナマ言っちゃって。まあ、ヨシュアが付いていれば、それほど心配することもないか。2人とも頑張りなさいよ」
そう言うとシェラザードは発着場を後にした。ヨシュア君、期待度大ですね……。
「うんっ！」
「頑張ります」
2人はそう言った。

「さてと……どうする？さっそくギルドに行こうか？」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「うん、どんな仕事をするのかアイナさんに聞いて確かめなきゃ」
「それじゃあ、レッツ・ゴー！」
エステルは元気良く言った。

―遊撃士協会　ロレント支部
「あら、エステル、ヨシュア。カシウスさん、もう出発したの？」
アイナが尋ねた。
「うん、さっきね。それで早速、父さんがやるはずだった仕事を紹介してもらおうと思って」
エステルが仕事について聞いた。
「わかったわ。あなたたちにお願いする仕事は全部で3つあるんだけど……」
「まず最初は西にある農園に行って欲しいの」
アイナが言った。

「西の農園って、ティオの家に？」
エステルが驚いた。
「ティオ？聞いたことがあるような……」
アイナが首を傾げた。
「僕たちと同級生だったティオ・パーゼルのことです。パーゼル農園の娘なんですよ」
ヨシュアが説明した。
「ああ、そうだったの。ええ、そのパーゼル農園で魔獣退治をしてもらいたいのよ」
アイナが2人に説明した。
「ええっ……魔獣が出たの！？」
エステルがまた驚いた。
「幸い、ケガ人は出てないけど、畑が荒らされて困ってるらしいわ。それでギルドに要請があったのよ」
アイナが経緯を説明した。
「そんな事があったんだ……」
「うん、わかった！すぐにでも向かってみるわ！」
エステルが言った。
「では、これを渡しておくわ」
アイナが封筒を渡した。
「あなた達が、ギルドから派遣されたという証明書よ。農園のご主人に渡してちょうだい」
エステルはギルドの紹介状を受け取った。
「ティオのお父さんたちなら知ってるから必要ないと思うけど……」
「まあ一応、受け取っておくわね」
そう言うと、エステルたちはパーゼル農園に向かった。

―パーゼル農園

「はぁ～。いつ来ても、のどかな場所よね。魔獣に襲われるなんて、ちょっと信じられないけど……」
エステルは背伸びをした。
「たしかに今は、それらしい気配は感じないな……」
「とにかく事情を聞いてみよう」
ヨシュアが周りを見て言った。
「ティオ、どこにいるのかな？」
エステルはそう言うと、ティオを探し始めた。

「やっほー、ティオ！」
「やあ、久しぶりだね」
2人はティオを見つけると、挨拶した。
「エステル？それにヨシュアまで……」
「もしかして遊びに来てくれたの？」
ティオは驚いて2人に聞いた。
「ううん、ブレイサーの仕事よ。なんでも魔獣が出たそうじゃない？」
エステルはカシウスの仕事を代わりに引き受けた事を説明した。
「研修が終わったんだ……おめでとう、良かったじゃない」
「うん、あなた達だったら何とかできるかもしれないわね」
ティオはエステルたちを賞賛した。
「やっぱり出るの、魔獣？」
エステルはティオに尋ねた。
「ええ、ここ数日ずっとよ。おかげで私まで寝不足になっちゃって……」
ティオは眠そうにした。
「という事は……魔獣は夜に出没するんだね？」
ヨシュアが言った。
「ご明察。まあ、詳しい話はお父さんたちに聞いてみて。そろそろ

配達から戻ってくると思うんだけど……」

―ティオの家

そこにはティオの両親がいた。

「こんにちは！おじさん、おばさん」

「ご無沙汰しています」

2人はハンナおばさんとフランツおじさんに挨拶した。

「おやまあ……エステルとヨシュアじゃないか」

「こりゃ久しぶりだね。ティオに会いに来たのかい？」

ハンナとフランツは2人に言った。

「あ、ティオとはさっき会ったばかりよ」

エステルが言った。

「今日は、遊撃士協会の用事で来ました」

エステルたちは紹介状を渡して、カシウスの仕事を代わりに引き受けた事を説明した。

「……なるほど、事情は分かったよ」

フランツは説明を聞いて言った。

「でも、あんたたちだけで魔獣退治なんて、ちょいと危険じゃないかねぇ？」

「そうだなぁ。君らにケガをさせるわけには……」

2人は渋った。

「心配しないで。これでも一応ブレイサーだもん。魔獣退治だったらお手のものよ」

エステルは言った。

「ギルドの許可も得ています。どうか任せてもらえませんか？」

ヨシュアが頼んだ。

「うーむ……」

「よし、それではお任せしようか」

フランツは少々考えたが、納得した。
「ありがとう、おじさん♪それで……どんな魔獣が出たの？」
エステルは尋ねた。
「正体はよく判らないが……丸っこい猫のような魔獣でね。夜中に3，4匹くらい現れて畑の野菜を喰い散らしていくんだ。凶暴じゃなさそうだけど、とにかく動きが素早くってねぇ。捕まえようとしてもすぐに逃げられちまうんだよ」
フランツとハンナは説明した。
「ふーん、なんか変な魔獣ね」
エステルは考えて言った。
「夜中に現れるということは、それまで待つ必要がありますね」
ヨシュアが言った。
「ああ、夜になるまでゆっくりと寛(くつろ)いでいてほしい」
「もちろん2人とも夕食に付き合ってくれるだろう？」
フランツたちが言った。
「えへへ、もちろん♪ハンナおばさんの料理ってとっても美味しいから楽しみ」
エステルは嬉しそうだ。
「嬉しい事を言ってくれるじゃないか。それじゃ、期待に沿えるようはりきって作るとしようかねぇ」
ハンナが気合を入れて料理の支度を始めた。

―夕食後　ティオの寝室
「はあ、美味しかったなぁ。ハンナおばさん、相変わらず料理が上手よね」
エステルは満足そうに言った。
「ふふ、うちの母さん、お客さんが来ると張りきるから。それより、ヨシュアには悪いことをしちゃったわね。チビたちの相手をさせち

やって」
ティオが言った。ヨシュアはリビングで子供の相手をしている。
「あはは、いいんじゃない？ヨシュアって意外と子供になつかれる事が多いし。どちらかと言うと、堅苦しいタイプなのに不思議よね」
エステルが言った。
「あら、そんな事ないわよ。たしかに礼儀正しくて他人行儀な雰囲気もあるけど……。いざ知り合ってみると、けっこう面倒見がいいのよね。さりげない気配りがまたポイント高いっていうか」
ティオがヨシュアのことを分析した。やたらと詳しいですね……。
「そ、そうかなぁ？」
エステルは不思議といった感じだ。
「加えて、整った顔立ちと神秘的な琥珀の瞳、漆黒の髪……。女の子に好かれるのも当然よね」
ティオがうっとりとした。
「……」
「ヨシュアってモテるの？」
エステルは呆然とした。
「なにを今さら……。交際を申し込んだ子は1人や2人じゃないって噂よ。彼、全部断ったみたいだけど」
ティオは呆れ顔だ。
「し、知らなかった……。ヨシュアってばあたしに何の相談もしないで……。まったく秘密主義というか、水臭いというか、薄情なんだから！」
エステルはむくれた。
「ま、同性ならともかく異性に相談する話でもないし。それに……エステルには尚更ねぇ」
ティオが言った。
「へっ……なんで？」
エステルは全く理解できていない様子だ。
その時、扉をノックする音が聞こえた。

「エステル、いいかい？そろそろ見回りの時間だよ」
ヨシュアだった。
「あ、うん……わかった。それじゃ、お仕事を片付けてくるわ。今の話、また後で聞かせてね？」
エステルがティオに言った。
「あー、はいはい。気を付けて行ってきなさい」
そうティオが言うと、エステルは部屋を出て行った。
「相変わらずこの手の話には疎いと言うか、鈍いと言うか……。こりゃ、ヨシュアも苦労してるわね」
ティオは呟いた。

「どうやら魔獣はいつもこの時間に現れるみたいだ。さっそく見回りを始めようか」
ヨシュアがエステルに言った。
「……（じーっ）」
エステルはヨシュアを睨んでいる。
「な、なにさ？」
ヨシュアは焦った。
「ねえ、ヨシュア。あたしに隠しごとしてない？」
エステルはヨシュアに言った。
「え……。なんだよ、やぶから棒に？」
ヨシュアは意味が分からないようだ。
「ヨシュアが家に来てから……あたしたち、いつも一緒だったよね？いっぱいケンカもしたけど、それだって、いい思い出だし……。あたし、ヨシュアのこと本当の意味で家族だと思ってる」
エステルがしんみりと言った。
「エステル……」
ヨシュアが微笑んだ。
「だから……何かあったら相談に乗るからね！ええとその……例え

ば……青春の悩みとか」
エステルは恥ずかしそうに小さく言った。
「ハァ？」
ヨシュアは拍子抜けな声を出した。
「は、話はそれだけ！とっとと見回りを始めましょっ！」
そう言ってエステルは先に行ってしまった。
「ティオに何か吹き込まれたのかな？」
「……」
「……隠しごと、か……」
ヨシュアは下を向きながら呟いた。

―パーゼル農園　夜　外
「うわ～、さすがに暗いわね。ねえ、ヨシュア。どういう風に見回ればいいと思う？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「そうだね……。家の周り、畑、牧舎、温室を一通り回ってみるといいかもね。農園全体をカバーできると思う」
ヨシュアが言った。
「ん、わかった。それじゃレッツ・ゴー！」
2人は見回りを開始した。

―畑
「静かね～……虫の音しか聞こえないわ」
エステルが言った。
「まだ農園の中に入ってきてないみたいだね。僕たちを警戒してるのかな」
ヨシュアが言った。

「ねえねえ、ヨシュア。小さいころ聞かされなかった？赤ちゃんってキャベツ畑で生まれるって」
エステルがヨシュアに聞いた。
「また唐突だね……。僕は、銀の翼を持つ天使が届けてくれるって聞かされたけど」
ヨシュアが答えた。
「ふーん、土地によって違うのね」
「……」
エステルは黙った。
「……」
ヨシュアも何も言わない。お互い何も言わず沈黙が流れる。
「見回り、続けようか？」
ヨシュアが切り出した。
「うん」
そうして再開した。

一牧舎
「……魔獣、いないみたいね」
「そうだね、他を回ってみよう」

一温室
「……」
「さすがに中には入り込んでないか」
ヨシュアは周りを見て言った。
「でも、オーブメントの光が幻想的な雰囲気でイイ感じよね。ちょっと得した気分かも」
エステルは緊張感がない。
「ノンキだなぁ、君って……」

ヨシュアが言った。
「ヨシュアがトーヘンボクすぎるの！」
エステルが怒った。そうではないと思うが……。

温室の外を出ると、エステルが声を上げた。
「あっ……」
魔獣が農園に入ってきた。
魔獣はこちらに気づくと、すばやく逃げた。
「あっ、逃げたっ！待ちなさいよ、こらあっ！」
エステルが追いかけた。
「まだ気配は消えていない……。農園内に留まっているみたいだ」
ヨシュアが言った。
「ふん、上等じゃない……。絶対に捕まえてやるんだから！」

エステルは魔獣の背後から忍び寄って追い詰めた。
「やった、捕まえたわ！あとは懲らしめてやるだけね！」
エステルは笑った。
「ここからが本番だ。気を抜かないようにね！」
そうして、2人は魔獣に立ち向かった。

魔獣を捕獲した2人はパーゼル一家を外に呼び寄せた。
「いやはや、さすが遊撃士だ。このすばしっこい連中を見事、捕まえてしまうとはね」
クランツは2人を賞賛した。
「えへへ、それほどでも。ところでコイツら、どうしよう？……退

治しなくちゃダメかな？」
エステルが悩んだ。
「あたりまえだよ、エステル。僕たちは魔獣退治に来たんだから」
ヨシュアは言い張った。
「で、でも……」
エステルは納得いかない様子だ。
「ブレイサーの使命は人を守り、正義を貫くこと……。魔獣に情けをかけるのは筋違いだよ」
ヨシュアはエステルに言った。
「うう……そうなんだけどさぁ……」
エステルは悩み続けている。
「……」
「ま、被害にあったのはうちの野菜だけなんだし……。見逃してもいいんじゃない？」
ティオが言った。
「そうだねぇ。これだけ痛い目に遭ったらさすがに懲りるってもんだろう」
ハンナが言った。
「ティオ、おばさん……」
エステルが2人を見た。
「ですが……」
ヨシュアは反対のようだ。
「……私も殺すのは反対だ。彼らも私たちも同じ土地で暮らしている存在だ。ある程度、折り合いをつけて暮らしていく必要があると思う。ヨシュア君……今回は見逃してくれないかな？」
クランツがヨシュアに頼んだ。
「……」
「……わかりました。被害に遭われたみなさんがそう仰るのなら反対はしません」
ヨシュアがしばらく考えて言った。

「すまないね。せっかく来てもらったのに。私たちも、柵を強化したりして被害が起こらないように工夫しよう」
クランツが2人に礼を言った。
「それじゃ決まりね」
エステルが魔獣の方を向くと、
「そういう事だから、みんなに感謝しなさいよ?今度やったら地獄見せるからね！」
エステルが魔獣に向かって棒を振りかざした。
そうすると、魔獣は悲鳴を上げて帰っていった。
「さて、これで一件落着だ。今夜はもう遅いから寝るとしよう。君たちもぜひ泊まって行ってくれ」
クランツが2人に言った。
「はーい」
「お世話になります」
2人が答えると家の中に入っていった。

―パーゼル家　寝室
「はー、もうクタクタだわ。もう夜も遅いし、さっさと寝るとしますか」
エステルは疲れた様子で言った。
「……」
ヨシュアは俯いている。何か悩んでいる様子だ。
「あれ……。どうしたの、ヨシュア？」
エステルは俯いたままのヨシュアに聞いた。
「……ごめん。みんなに嫌な思いをさせた」
ヨシュアが謝った。
「え、さっきのこと？バカね～、そんなこと思ってる人なんていないわよ。普通に考えたらヨシュアの意見が正しいもんね」

エステルは気にしていない様子だ。
「正しいわけじゃない。……ただ、心が冷たいだけさ。今だって、情けをかけずに退治すべきだったと思っている。エステルやティオたちと違って可哀想という気持ちが湧かないんだ」
ヨシュアが下を見たまま重く言った。
「……」
エステルは黙って聞いている。
「こういう時……自分がたまらなくイヤになる。人として不完全じゃないかって。はは、心のどこかが壊れているのかもしれないな……」
ヨシュアは自虐的に言った。
それを聞いたエステルは、ヨシュアに向かって怒って叫んだ。
「ヨシュアのばかっ！勝手に自分のこと決め付けるんじゃないわよっ」
ヨシュアはびっくりして後ずさりした。
「エ、エステル？」
かまわずエステルは続ける。
「この5年間、あたしはヨシュアのことをずっと見てきた！良いところ、悪いところは誰よりも知っている自信がある！たぶん、ヨシュア本人よりもね！」
力強く言った。
「……」
ヨシュアは驚いて声が出ない。
「そのあたしを差し置いてふざけた事、言わせないからね！壊れてるだなんて……絶対に言わせないんだからっ！」
エステルは泣きかけだ。
「……」
「ごめん、バカなことを言った」
ヨシュアは小さく言った。
「分かればよし」

「……」
「……」
「ふふ、でも……」
「ちょっと嬉しかったな」
エステルは微笑んだ。
「えっ？」
ヨシュアが驚いた。
「ヨシュアってさ。いつも1人で溜め込むじゃない。苦しい時も、悩んでいる時も……。平気そうな顔をしながら1人で解決しようとするのよね。それって……やっぱり家族としては寂しいよ」
エステルが悲しそうに言った。
「……」
「エステル、僕は……」
ヨシュアが苦しそうに言った。
「でも今日は、自分をさらけ出して弱い部分を見せてくれたじゃない。少しは、あたしのことを頼りにしてくれたんでしょう？だから、ちょっと嬉しいんだ」
エステルは笑った。
「な、何言ってるんだか……。そんな恥ずかしいセリフ、よくさらっと言えるもんだね」
ヨシュアは呆れている。
「ふふん、任せなさいって♪さ、今日はもう寝ましょ？さんざん走り回って疲れちゃった」
エステルが言った。
「そうだね……おやすみ、エステル」
「……それから、ありがとう」
ヨシュアが言った。
「どういたしまして」
「おやすみなさい、ヨシュア」
そうして、夜が更けて行った。

第1章　父、旅立つ（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

初めて本格的な仕事を終えたエステルたち。このまま順調に依頼をこなせるのか！？

第1章　父、旅立つ（8）（前書き）

仕事が1つ終わり、次の仕事が始まります。

第1章　父、旅立つ（8）

―次の日　パーゼル農園

「ありがとう。今回は本当に助かったよ。それと悪かったね。中途半端な結果にしてしまって」

クランツが礼と謝罪をした。

「気にしないでください。色々と勉強させてもらいました。また困ったことがあったら遊撃士協会に連絡してください」

ヨシュアが言った。

「是非、そうさせてもらうよ」

クランツが言った。

「エステル、ヨシュア。今度は仕事抜きで遊びに来てね」

「また泊りがけでおいで。ご馳走させてもらうからさ」

ティオとハンナが言った。

「ありがと、ティオ、おばさん」

「必ずお邪魔させてもらいます」

2人が言った。

―ミルヒ街道

「さてと、ギルドに戻ろうか。今回の報告をしてから次の仕事を紹介してもらおう」

ヨシュアが言った。

「おう、がってんだ！次もこの調子で行くわよ～っ！」

エステルが返事した。自信がついてきたようだ。

―遊撃士協会　ロレント支部
「ご苦労様、農園での仕事うまくいった？」
アイナが尋ねた。
「うん、色々あったけど……」
「一応報告しておきます」
2人は報告した。
「なるほど。魔獣を逃がしてあげたのね。甘いとは思うけど……それは不問としておきましょう」
アイナは言った。
「え、いいの？」
エステルは驚いた。
「遊撃士の使命は人を守り、正義を貫くこと……。だけど守り方は色々だし、正義も星の数だけ存在するわ。それを見極めるのもあなたたちの仕事ってわけ」
アイナは説明した。
「なるほど……ずいぶん奥が深いんですね」
ヨシュアが頷いた。
「まあ、魔獣退治だけじゃなくて国家間の争いも調停する組織だから。上位ランクの遊撃士だと戦闘力以上に、総合的な判断力と柔軟な問題解決能力が要求されるのよ」
アイナが言った。
「判断力と問題解決能力、ですか」
ヨシュアは難しい顔をした。
「ひょええ～……一流への道は険しそうだわ」
エステルはいかにも大変だ、という顔をした。
「ふふ、日々精進あるのみよ。さてと……次の仕事をお願いしようかしら」
アイナが言った。
「待ってました！どーんと来いってもんよ。それで、今度も魔獣退治系？」

エステルが尋ねた。
「いいえ、物品運搬の仕事よ。依頼主は、何とクラウス市長」
アイナが言った。
「えっ、市長さんからの？」
エステルは驚いた。
「いいんですか？僕たちに任せてしまって」
ヨシュアが言った。
「簡単な仕事と聞いているわ。まあ、詳しい仕事内容は市長さんから伺ってちょうだい」
アイナがそう言うと、２人は市長邸に向かった。

―ロレント市長邸
「さてと……市長さん、いるかしら？」
「忙しい人だからどこかに出かけてるかもね」
２人が話していると、階段から男性の声が聞こえた。
「おお……エステル君とヨシュア君か」
クラウス市長だった。
「あっ、市長さん」
エステルが言った。
「お邪魔してます。今日は遊撃士協会から来ました」
ヨシュアが説明した。
「うむ、話は聞いておるよ。カシウスさんの代わりに仕事を引き受けてくれるそうじゃな？」
クラウス市長が言った。
「うん、そのつもりだけど……。ごめんね、市長さん。父さんがいい加減な約束して」
エステルが謝った。
「いやいや。カシウスさんほどの人であれば、多忙を極めるのは当

然じゃろう。それより……こんな所で話をするのもなんだな。詳しい話は書斎でさせてもらうよ」
そうして、エステルたちは2階の書斎へ行った。

―ロレント市長邸　2階　書斎
「……頼みといっても、そんな難しい事じゃあないんだ。正直、ギルドに頼むのも厚かましいとは思ったんだがね。なかなか手が空かないものでな。つい頼んでしまったんじゃ」
クラウス市長が言った。
「運搬の仕事と聞きましたけど、なにを運べばいいんでしょうか？」
ヨシュアが尋ねた。
「うむ、北のマルガ鉱山から七耀石（セプチウム）の結晶をここに届けて欲しいんじゃ」
クラウス市長が依頼の説明をした。
「セプチウムっていうと……。あたしたちが良く手に入れる『セピス』と同じものよね？」
エステルが考えた後に言った。
「正確には、宝石にするほど大きくない七耀石（セプチウム）の欠片をセピスっていうんだ。このセピスを精製・加工したものがオーブメントに付ける結晶回路（クオーツ）ってわけ」
ヨシュアが説明した。
「なるほど……なんとなく理解できたかも」
エステルが頷いた。
「昔から、マルガ鉱山では、そのセプチウムの一種である翠耀石（エスメラス）が採れるんじゃが……。大きな結晶が採掘されたので鉱山長に保管してもらっておるのさ」
クラウス市長が言った。
「その結晶を、鉱山長から受け取ってここまで運んでくればいいん

ですね？」
ヨシュアが言った。
「その通りじゃ。どうかな、頼めるかね？」
クラウス市長が尋ねた。
「宝石の運搬か……。魔獣退治とは違って、別の意味で緊張しそうだけど……」
「うん、でも何とかやってみるわ！」
エステルは承諾した。
「ありがたい。それではこれを持っていってもらおうかの」
クラウス市長は喜んで、市長の紹介状を渡した。
「それを見せれば鉱山の中に通してくれるじゃろ。よろしく頼んだよ」
クラウス市長が言った。
そうして、２人はマルガ鉱山へと向かった。

―マルガ鉱山
入口には、鉱員ラングがいた。
「よう、ここはマルガ鉱山だ。関係者以外は遠慮してもらおうか」
鉱員ラングが言った。
「ふっふーん、関係者だもんね」
「ロレントのクラウス市長に頼まれて、七耀石の結晶を受け取りに来ました」
エステルたちは市長の紹介状を見せた。
「ふーん、なるほどなぁ。そういうことなら話は別だ。悪いが、中に入って親方に直接聞いてくれないか？俺は、ここで番をしてるからよ」
鉱員ラングが言った。
「いいけど……親方って？あたしたち、鉱山長に会いに来たんだけ

ど」
エステルが不思議そうに尋ねた。
「へへ、その鉱山長ってのが俺たち鉱員を束ねるガートン親方よ。七耀石の鉱脈を発見するのが三度のメシより好きな穴掘りだ。今日も地下の坑道に潜ってると思うぜ」
鉱員ラングが言った。どれだけ好きやねん！
「わかりました。それでは捜してみます」
ヨシュアがそう言って、２人は鉱山の中に入った。

―マルガ鉱山　地下
奥に親方らしき人がいた。
「おや、嬢ちゃんたちは……」
ガートン親方が振り向いた。
「あなたが鉱山長さん？よかった、やっと見つけたわ」
「遊撃士協会の者です。クラウス市長の代理として来ました」
２人は市長の紹介状を鉱山長に渡して、経緯を説明した。
「ほお、なるほどねぇ。お前さんたちが遊撃士か。若いのに大したモンじゃないか」
ガートン親方が褒め称えた。
「えへへ、それほどでも。それで……結晶はどこにあるの？」
エステルは早く結晶を見てみたいそうだ。
「ああ、ちょいと待ってくれ。なにぶん、滅多にお目にかかれない貴重なシロモノだからなぁ。肌身離さず保管しているわけさ」
そうして、ガートン親方は懐から大粒の結晶を取り出した。
「うわ～っ……。こんな大きな結晶、見たことないわ」
「すごい……。内部から光が弾けているみたいだ」
２人は幻想的な緑の輝きに見惚れている。
「セプチウムの１つ――風の力を秘めた翠耀石（エスメラス）の結晶だ。これだけ

大きいと宝石としての価値は莫大なものになる。間違いなく市長さんに届けてくれよ」
そう言って、ガートン親方はエステルに結晶を渡した。
「う、うん……」
「はあぁぁ～……キレイ……。妖精を持ってるみたいな感じね～……」
そう言ってセプチウムを手のひらの上に乗せながら、エステルは辺りを歩き回った。
「あはっ、面白～い！見て見て、ヨシュア！」
エステルははしゃいでいる。
「たしかに綺麗だけど……。そのくらいでストップ。落としたりしたら大変だよ」
ヨシュアがエステルに注意した。
「ちぇっ。張り合いがないんだから」
エステルはそう言うと懐に結晶をしまった。
「これでよしっと……。それじゃあ親方さん。間違いなく市長さんに届けるわね」
エステルが言った。
「おう、よろしく頼んだぜ」
「ん……？」
その瞬間、ガートン親方が何かを感じ取ったようだ。
「どうしたの？」
エステルがガートン親方に聞いた。
「……妙だな。空気の流れが変わりやがった……」
ガートン親方が呟いた。
「空気の流れ……？」
エステルは分からない顔をした。
「（この匂いは……）」
ヨシュアは顔を引き締めた。

次の瞬間！
地震のような揺れが襲った！
「んなっ！！」
「きゃあっ！？」
「……」

数秒後、揺れは収まった。
「お、収まったみたいね……」
エステルはほっとした。
「今のって、ひょっとして地震？」
エステルが尋ねた。
「いや……坑道のどこかで崩落が起きたらしい。地盤の緩い場所にブチ当たったか？こりゃあ、被害状況を確認しないと……」
ガートン親方が言った。

その時、ヨシュアが武器を構えた。
「エステル、気をつけて！」
ヨシュアがエステルに言った。
「えっ……」
魔獣が突然襲い掛かってきた！

難なく魔獣は退治できたが、
「ど、どうして魔獣が……」
「親方さん、ここって魔獣とか出るの？」
エステルはガートン親方に尋ねた。
「こんな奥に出たのは初めてだ！魔獣はセプチウムの輝きに惹きつけられる性質がある……。だから、今までも入口近くに迷い込んでくることはあったが……」
ガートン親方が説明した。
「ひょっとしたら……さっきの崩落で、坑道の一部が魔獣の巣に繋

がったのかもしれません」
ヨシュアが言った。
「ま、魔獣の巣ですって～！？」
エステルが声をあげた。
「考えられない事じゃない……。こ、こりゃいかん、作業している連中を脱出させねえと！」
ガートン親方が慌てて言った。
「そういう事なら任せてよ！あたしたちも手伝わせてもらうわ」
エステルが言った。
「な、なにぃ！？」
ガートン親方は驚いた。
「魔獣退治ならお手のものよ。一刻を争う時だから遠慮しないで」
エステルが言った。
「すまん……力を貸してくれ」
ガートン親方が言った。
「ちなみに、鉱員さんたちは全部で何人くらいいるんですか？」
ヨシュアがガートン親方に尋ねた。
「地下で作業していたのは……たしか４人だったはずだ」
ガートン親方が言った。
「了解、大急ぎで助けに行きましょ！」
エステルたちが助けに向かった。

しばらくして、４人の鉱員を救出したエステルたち。地上に上がろうとしたその時、
「ひいいいいっ！」
「こ、こんなつもりじゃ……」
「助けてぇ～～～～っ！」
奥から悲鳴が聞こえた。

「なんだと！まだ残っていやがったのか！？」
ガートン親方が言った。
「早く助けに行かなくっちゃ！」
エステルたちは声のした方向へ向かった。

最後の１人を助けたエステルたち。
「た、助かったぜ……」
鉱員見習いがそう言った。
「安心して、もう大丈夫だからね。遊撃士（ブレイサー）の手にかかれば、魔獣の１匹や２匹、軽いもんだわ」
エステルが言った。
「ブ、ブレイサぁ！？どうしてこんなところに……」
鉱員見習いが驚いて言った。
「おや、お前さんは……たしか昨日入った新入りだったな。どうして地下に掘りに来てるんだ？」
ガートン親方が鉱員見習いに言った。
「そ、それが……。少しでも先輩がたの仕事ぶりを見学しようと思ったんですよ……。そしたら、いきなり壁が崩れて向こうの方から魔獣がドバーッと！」
鉱員見習いが言った。
「やはり魔獣の巣に繋がったのか……兄ちゃんの推測通りだったみてぇだな」
ガートン親方が言った。
「ええ……」
ヨシュアが頷いた。
「こ、この先は危険ですぜ。魔獣がウヨウヨしてますからね。そ、それじゃあ俺はこれでっ！」
鉱員見習いは脱兎のごとく走り去った。

「すっごい逃げ足……よっぽど恐かったみたいね」
「……そうだね」
2人は言った。

―地下エレベーター前
「親方さん、もう全員助けた?」
エステルはガートン親方に聞いた。
「ああ……大丈夫なはずだ」
ガートン親方は答えた。
「それじゃあ僕たちも上に登りましょう」
ヨシュアが言った。

―地上エレベーター前
「親方、大丈夫ですか!?」
「ひえぇ~っ、よく無事だったなぁ!」
鉱員達は口々に言った。
「この嬢ちゃんたちのおかげだよ。ところで、全員揃っているな?」
ガートン親方が鉱員達を見回した。
「へい、全員いますぜ」
「さっき、見習いのヤツが慌てて走り去っていきましたが……」
「よっぽど恐かったんだなぁ、あいつ」
鉱員達が言った。
「そうか……こんな事で挫けなきゃいいんだが。とにかく、地下にはまだ魔獣が残っている可能性が高ぇ。安全の確認が取れるまでエレベーターは使うんじゃないぞ」
ガートン親方が鉱員達に言った。

―マルガ鉱山　入口

そこには鉱員見習いが1人いた。

「まったくとんだ誤算だぜ……。魔獣は湧き出してくるわ、遊撃士まで出張ってくるわ。はあ、仕方ねえ……正直に報告するしかなさそうだな」

そう言うと、どこかへ行ってしまった。

―マルガ鉱山内

「今回はすまなかったな。余計な仕事までさせちまって。そのうちギルドに連絡してちゃんと礼をさせてもらうからな」

ガートン親方が2人に礼を言った。

「あはは、気にしないで。当然のことをしたまでだもん。これも修行のウチってやつよ」

エステルが笑いながら言った。

「ところで……地下はどうするつもりですか？」

ヨシュアが聞いた。

「何とか自分たちでケリをつけるさ。爆薬を使って魔獣の巣穴を塞いじまうっていう手もある。ま、よほど困ったことがあったらギルドの手を借りるかもしれねぇ」

ガートン親方が言った。

「うん、その時は任せてね。それじゃあ、あたしたちは市長さんに結晶を届けるわね」

エステルが言った。

「エステル……落としたりしてないよね？」

ヨシュアがエステルに言った。

「失礼しちゃうわね。そこまでウッカリしてないってば。ほーら、ここに……」

「……」

エステルは黙ってしまった。

「ま、まさか……」

「お、落としたのか!?」

ヨシュアとガートン親方は青ざめた。

「なーんちゃって♪ちゃんとありますよーだ。さ、とっとと届けに行きましょ」

エステルは笑いながら結晶を取り出して言った。お調子者だ。

「まったく君ってヤツは……」

ヨシュアは呆れている。

「心臓に悪いぜ、嬢ちゃんよう……」

ガートン親方は胸を押さえている。

そうして、エステルたちはロレント市に帰って行った。

第1章　父、旅立つ（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

なにやら不穏な鉱員見習い。一体何者なのか！？

第1章　父、旅立つ（9）

―ロレント市長邸

市長邸の書斎には制服姿の少女がいて、クラウス市長と話をしていた。

「なるほど……あの時計台にはそんな逸話が。わたくし、とても感動しましたわ」

制服の少女が言った。

「戦争の悲惨さを語るのはたやすい。大切なのは、哀しみを乗り越えて平和を築こうとする強さだと思うのじゃ」

クラウス市長が厳かに言った。

「……おや？」

クラウス市長がエステルたちを見つけた。

「例の品を届けに来たんだけど……」

「えっと、お邪魔だったかな？」

エステルが遠慮がちに言った。

「おお、エステル君たちか。邪魔なんて事があるもんかね。ちょうどいい、紹介しよう。こちらはジョゼット君。ジェニス王立学園の学生さんじゃ」

クラウス市長が制服の少女を紹介した。

「ジェニス王立学園……」

エステルが言った。

「聞いたことがあります。ルーアン地方にある全寮制の高等教育学校ですね」

ヨシュアが言った。

「ええ、その通りですわ。お初にお目にかかります。ジョゼット・ハールと申します」

ジョゼットが挨拶した。

「あたしはエステル。よろしくね、ジョゼットさん」

「ヨシュアです、よろしく」
2人も挨拶した。
「実はこの2人、ブレイサーでのう。個人的なことで仕事をお願いしていたところなんじゃ」
クラウス市長がジョゼットに説明した。
「ブレイサー!?あの、いかなる権力にも屈しない、平和を愛する誇り高き自由騎士!?ああっ、感激ですわ!本物の遊撃士に巡り合えるなんて!」
ジョゼットが感動した。大げさな……。
「そ、そんなに感激されるとくすぐったくなっちゃうわね……。ところで……あ、ジョゼットって呼んでいい?」
エステルがジョゼットに言った。
「ええ、そう呼んでくださいな」
ジョゼットが笑って言った。
「ジョゼットはどうしてここに?市長さんと知り合いなの?」
エステルがジョゼットに尋ねた。
「いえ、お目にかかったのは今日が初めてですわ。わたくし、自主研究の一環として各地の重要文化財を調べているんです。それで、お忙しいとは思ったんですが市長にお話を聞かせていただこうと……」
ジョゼットが説明した。
「ふーん、勉強熱心ね。それじゃあ、邪魔しちゃ悪いかな?」
エステルが遠慮がちに言った。
「いえいえ。もう充分お話は伺いましたから。それより……わたくしの方がお邪魔でしょうか?」
ジョゼットが言った。
「いやいや、そんなことはないよ。エステル君、せっかくの機会じゃから、例の品を彼女にも見せてくれないかね?」
クラウス市長がエステルに言った。
「あ、うん。ちょっと待ってね……」

エステルは懐から結晶を取り出した。
「まあ……！それはセプチウムですわね。なんて素晴らしい輝きかしら……」
ジョゼットは見惚れている。
「うむ、見事な大きさじゃ。まさにロレント市民全員の感謝を表すにふさわしい贈り物じゃ」
クラウス市長が高らかに言った。
「贈り物？」
エステルが疑問に思った。
「感謝を表すにふさわしい……。なるほど、生誕祭の贈り物ですね？」
ヨシュアが言った。
「鋭いのう、ヨシュア君。これを使ったオーブメント細工をアリシア女王陛下に贈るつもりじゃ。６０歳におなりになる陛下へのロレント市民の感謝のしるしとしてな」
クラウス市長が言った。
「ええっ、女王様への贈り物！」
エステルが驚いた。
「まあ、素晴らしいですわ！」
ジョゼットが言った。
「我々リベール国民は、女王陛下にいつもお世話になっておるからなぁ。定期飛行船が簡単に利用できるのも王家が援助してくれているおかげじゃ」
クラウス市長が説明した。
「リベール国内の遊撃士協会も王家の援助を受けていると聞きます。確かに……色々な形でお世話になっていますね」
ヨシュアが言った。
「うわ～っ！それってなんかすごい！ねえ、ヨシュア、どうしよう！？。あたしたち、女王様への贈り物をこの手で運んじゃったよ！？」

エステルが騒いだ。そこまで感動するか？
「あまつさえ、思いっきり振り回してたもんね」
ヨシュアが言った。
「あ、バラしちゃだめだってば！」
エステルが焦った。
「くすくす……」
「はは、エステル君らしいのう」
ジョゼットとクラウス市長が笑った。
「も、もう……」
エステルがしゅんとした。
「それじゃあ、市長さん。間違いなく渡しておくわね」
エステルはセプチウムの結晶を市長に渡した。
「うむ、確かに受け取った。それでは謹んで……」
クラウス市長は席を立った。
そして金庫の中に結晶をしまった。
「……これでよしと。あとはメルダース工房でこれを使ったオーブメント細工を仕上げてもらうだけじゃな。今から仕上がりが楽しみじゃのう」
クラウス市長が笑った。
「あ、ずるい市長さん！完成したら、あたしにもみせてね？」
エステルがクラウス市長に言った。
「ああ、残念ですわ……この目で確かめられないなんて。でも今日は、お話に加えて素敵なものを見せていただきました。もう、お礼の言葉もありませんわ」
ジョゼットが言った。
「いやいや、これくらい市長の務めじゃよ」
クラウス市長が言った。
「本当にありがとうございました。それでは……わたくしはこれで失礼します」
そう言ってジョゼットは帰ろうとした。

「待って、ついでだからあたしたちも失礼しちゃうわ」
「そうだね。市長、それでは失礼します」
2人が言った。
「うむ、お世話になったのう」
クラウス市長が礼を言った。

―ロレント市長邸　外
「それじゃあ、明日にはもう定期船で帰っちゃうんだ？」
エステルがジョゼットに言った。
「ええ、そうなんですの。すぐに学校も始まってしまいますし」
ジョゼットが言った。
「なるほど、学校の休みを利用して調べに来てたんだね」
ヨシュアが言った。
「あーあ、残念だな。せっかく仲良くなれそうだったのに。また会えるといいね？」
エステルは残念そうだ。
「はい……わたくしもそう願っております。それではご機嫌よう。エステルさん、ヨシュアさん」
そう言ってジョゼットは行ってしまった。

「やー、いい子だったわね～。良い所のお嬢さんっぽいのにそれを鼻にかけたところがないし」
エステルが品定めするように言った。
「……うん……」
ヨシュアは悩んだ顔をしている。
「ヨシュア？あれれ、ひょっとして～。今みたいなのがタイプだっ

たり？」
エステルが言った。
「えっ……！」
「な、なに変なこと言ってるのさ！」
ヨシュアが言い返した。
「あせってる、あせってる♪やー、お姉さん驚いちゃったな。ヨシュア君の好みがお嬢様タイプだったなんてね～。今度会う時までに、気の利いた口説き文句を用意しとかなきゃね」
エステルがはしゃいでいる。
「フン、勝手に盛り上がってなよ。まったく、人の気も知らないで……」
ヨシュアが重く言った。
「えっ？」
エステルが聞き返した。
「……なんでもない。それより、ギルドに報告に行こう。父さんの代理の仕事も次で終わりだよ」
ヨシュアが話題を変えた。
「あ、そっか……。うん、気合を入れて行こうね！」
そう言って、２人はギルドへ戻った。

第1章　父、旅立つ（9）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

無事、結晶を届けた2人。しかし、ヨシュアは暗い顔だった。果たして、その理由とは!?また、最後の依頼とは何なのか!?

第1章　父、旅立つ（10）

―遊撃士協会　ロレント支部

「ご苦労さま。鉱山では大変だったみたいね」

アイナが言った。

「え、なんで知ってるの？」

エステルが不思議そうに言った。

「鉱山から連絡があったのよ。あなたたちにとても感謝していたわ。そのあたりも含めて報告をよろしくお願いするわね」

2人は鉱山での出来事を報告した。

「ふふ……期待以上の仕事をしてくれたわね。突発的な事故に対処するのも、ブレイサーとしての使命の1つよ。これからも頼むわね」

アイナが褒め称えた。

「うん、どーんと任せてね☆」

エステルが胸を張った。

「まあ、エステルの場合は頼まれなくても首を突っ込むけどね」

ヨシュアが横で言った。

「そうそう……。って、人のことをお節介みたいに言わないでよ！」

エステルが怒った。

「見たいも何も、ズバリそのものだし。お人好しと、野次馬根性と直情的性格のなせるワザだろうね」

ヨシュアがエステルの性格を分析した。

「う……ヨシュア、なんかツッコミ激しくない？」

エステルがヨシュアをじっと見た。

「気のせいじゃないの？」

ヨシュアがさらりと言った。

「ほらほら、ケンカしないの。じゃあ、カシウスさんの代理の最後の仕事を紹介するわね。《リベール通信》って知ってる？あそこの取材に協力して欲しいのよ」

アイナが言った。
「えっ、それって……この前買ったあの雑誌じゃない。へ〜、面白い偶然もあるもんねぇ」
エステルが感嘆した。
「取材協力というと……具体的に何をすればいいんですか？」
ヨシュアがアイナに尋ねた。
「危険な場所に取材に行くから腕の立つ案内人が欲しいそうよ。詳しくは、本人たちから聞いてみて。雑誌社の記者とカメラマンが《ホテル・ロレント》に滞在中だから。あ、これはギルドからの紹介状ね」
アイナは説明して、ギルドの紹介状を渡した。
「それじゃあ、早速ホテルを訪ねてみよっか？」
エステルがヨシュアに言った。
「そうだね、行ってみよう」
ヨシュアが言った。

―ホテル・ロレント
エステルたちはホテル・ロレントに着くと、受付のヴィーノに尋ねた。
「ヴィーノさん。ちょっと聞きたいんだけど……。雑誌社の記者さんってここに泊まってるってホント？」
エステルがヴィーノに聞いた。
「おや、よくご存知ですね。なにかご用件でも？」
ヴィーノは2人に尋ねた。
「実は、ギルドの仕事で取材に協力することになったのです」
ヨシュアがヴィーノに言った。
「ほう、それはそれは。ですが、今はお2人ともお出かけになっていますよ」

ヴィーノが言った。
「そうなんだ。どこに行ったか知ってる?」
エステルが聞いた。
「記者の方は、酒場に行ってくると仰っておりましたね……。そちらを訪ねてみてはいかがです?」
ヴィーノは言った。
「酒場ね、ありがとう」
「失礼しました」
2人はそう言って、酒場へ向かった。

―居酒屋　アーベント
2人はカウンターにいた無精髭の男に話しかけた。
「あん、何だお前さんたちは?」
不精髭の男は面倒くさそうに言った。
「あなた、ひょっとして……《リベール通信》の記者さん?」
エステルが言った。
「その通りだが……なんで知ってやがるんだ?俺は人を取材するのは好きだが、人から詮索されるのは嫌いでね。どういう用件だ、いったい?」
不精髭の男が言った。
「遊撃士協会から来ました。護衛の依頼をされたそうですね?」
ヨシュアが言った。
「おお、ようやく来たか!ホント待ちくたびれちまったぜ。それで……」
「カシウス・ブライトはどこだよ?」
不精髭の男は辺りを見回して言った。
「それなんだけど……本人、別の仕事が入っちゃったの。それでロレントを離れちゃって……」

エステルが申し訳なさそうに言った。
「な、なんだとぉ!?」
不精髭の男が愕然とした。
「せっかくだから。噂の遊撃士に取材してやろうと思ったのに……。ちっくしょう……アテが外れちまったじゃねえか!」
不精髭の男はがっくりと肩を落とした。
「よく判らないけど……まあ、そんなに悲観しないでよ。あたしたちがしっかりと代わりを務めさせてもらうから♪」
エステルが言った。
「ちっ、仕方ねえな……今回はそれで手を打つか……。……。……いま、なんて言った?」
不精髭の男は聞き返した。
「『そんなに悲観しないでよ』?」
エステルが言った。
「そうじゃねえ!『代わりに務めさせてもらう』だ!どういうことだ、そりゃあ」
不精髭の男が言った。
「だから、あたしたちが代理のブレイサーなんだけど。あ、これ紹介状ね」
エステルが紹介状を渡した。
「おいおい、冗談キツイぜ……。お前らみたいなガキどもがブレイサーだっていうのかよ?」
不精髭の男が言った。
「ガ、ガキですってぇ?乙女に向かってなんて言い草よ!」
エステルが怒った。
「なーにが乙女だ。色気のねぇ格好をしやがって。悔しかったらスカートでもはいて、年頃の娘らしくしてみやがれ」
不精髭の男は言いたい放題言って笑った。
「これは棒術用の服装なの!スカートだと見えちゃうでしょ!まったく、失礼なオジサンね……」

エステルが言った。
「お、俺はまだ２０代だっ。オジサン呼ばわりするんじゃねぇ！」
不精髭の男も怒った。コントみたいな様子だ。
「……とにかく記者さん。僕たちがブレイサーでギルドから派遣されたのは確かです。他の人を紹介してもいいですけど、その場合、いつになるか判りませんよ？」
ヨシュアが耐えかねて言った。
「う、うむむ……これ以上、締切は伸ばせねぇし……。仕方ない、背に腹は替えられねぇか。喜べガキども、お前らに任せてやるよ」
不精髭の男が上から目線で言った。
「偉そうなオジサンねぇ……」
エステルは不満顔だ。
「まあまあ……。僕はヨシュアといいます。こっちの女の子はエステル。あなたの名前も教えてくれますか？」
ヨシュアが紹介した。
「ナイアル・バーンズ。《リベール通信》きっての敏腕記者だ。短い付き合いとは思うがよろしくな」
不精髭の男はナイアルと名乗った。
「ふんだ、そう願いたいわね。で……どこに案内すればいいの？たしか危険な所に取材に行くから腕の立つ案内人が必要ってことよね？」
エステルがナイアルに聞いた。
「《翡翠の塔（ひすいのとう）》って遺跡だ。名前ぐらい聞いたことあるだろう？」
ナイアルが言った。
「な～んだ。聞いたことがあるどころかこの前、仕事で入ったばかりよ」
エステルが言った。
「おっ、そりゃあ都合がいいな。具体的には、その塔の屋上に俺たちを案内してもらいたいんだ。雑誌に載せる写真を撮りたいんでね」
ナイアルが仕事内容を説明した。

「ふーん、ずいぶんと物好きねぇ」
エステルが言った。
「『俺たち』っていうことは他にも同行する人がいるんですね？」
ヨシュアが言った。
「相棒のカメラマンがいる。オーバルカメラの調子が悪いんで工房に行っているはずなんだが……。ったく、ずいぶん遅いじゃねぇか」
ナイアルが舌打ちした。かなり待たされている様子だ。
「急いでるんだったら、工房まで迎えに行った方がいいんじゃない？どうせ、このまま取材に行くんでしょ」
エステルが提案した。
「それもそうだな……。よし、工房でヤツを拾ってから、そのまま塔に向かうとするか」
3人は工房へと向かった。

―メルダース工房
そこには、眼鏡の女性が騒いでいた。
「ああ、どうかそれだけはっ！どんな事でもしますから、カメラだけは返してください！命よりも大切なものなんですぅ！」
かなり必死だった。カメラが命より大事とはスゲェなあ、オイ。
「な～んか揉めてるわね」
「ひょっとして、あの人が？」
2人はナイアルに尋ねた。
「……まあな」
「こら、ドロシー！いつまで待たせやがるんだ！？」
ナイアルが眼鏡の女性―ドロシー―に怒鳴った。
「ああ、ナイアル先輩！いいところに来てくれましたぁ！うう、どうか助けてください～！」
ドロシーがナイアルにすがった。

「今度は何をやらかした？無駄遣いして、カメラの修理代が足りなくなったんじゃねえだろうな？」
ナイアルがドロシーを見据えた。
「わっ、びっくりですぅ！どうして分かるんですかっ？先輩、ひょっとして超能力者！？」
ドロシーは驚いた。そんなワケあるか！
「同じことを繰り返されればアホでも分かるに決まってるだろ！」
ナイアルがまた怒鳴った。
「お客さん、この人の関係者？それじゃあ悪いけど修理代、立て替えてくれますかね？」
工房のフライディが言った。
「仕方ねぇ……経費で落とさせてもらうぜ。いくらだ？」
ナイアルが財布を取り出して聞いた。
「ええと……。カメラと飾り時計の修理でしめて２０００ミラですね」
フライディがナイアルに請求書を見せた。
「ちょっと待て！カメラはともかく……飾り時計ってのはなんだ！？」
ナイアルがお金を出すところで手を止めて言った。
「あの、修理してもらっている間、店内を見学させてもらったんですよぉ。で、キレイな置き時計があったんで手にとって見てたら壊しちゃって……」
「でもでも、よかったぁ。それも経費で落とせるなんて～」
ドロシーが笑いながら言った。
「そんなもん経費に入れられるか！ち、ちくしょう……自腹切って立て替えるしかないか」
ナイアルは怒ったり悲しんだり忙しそうだ。
「ほらよ、２０００ミラだ」
ナイアルがお金を払った。
「はい、これは領収書」

フライディがナイアルに領収書を渡した。
「（な、なんか……すごい組み合わせのコンビね）
と、エステル。
「（たしかに。でも、立て替えてあげるあたり、わりと面倒見がいい人みたいだね）」
と、ヨシュア。
「おお、待たせたな。ちょいとトラブっちまった」
ナイアルが疲れた顔をして戻ってきた。
「あれ、先輩、この子たちは？」
ドロシーがナイアルに尋ねた。
「護衛兼、案内役のブレイサーだ。予約していたカシウス・ブライトの代理だとよ」
ナイアルが説明した。
「わっ、こんな若い子たちが……」
ドロシーが驚いた。
「あたしはエステル、よろしくね」
「僕はヨシュアといいます」
2人は自己紹介した。
「エステルちゃんにヨシュア君か。若いけど頼もしい感じねぇ。わたし、ドロシー・ハイアット。《リベール通信》に入ったばかりの新人カメラマンなの～。目下、ナイアル先輩の下で鍛えてもらっている最中でーす」
ドロシーが笑いながら言った。
「なんで俺様が、こんなトンチキ娘の面倒を見なくちゃならねえんだ……。まったく、あのヒゲ編集長め……」
ナイアルが肩を落とした。
「まあまあ～。そのうち良いことありますよ」
ドロシーがナイアルの肩を叩いた。
「お前が言うな、お前が！ハア、まあいい……。メンツも揃ったことだし、とっとと取材に向かうとするか」

ナイアルが言った。
「目的地は《翡翠の塔》ですね」
「それじゃあ、レッツ・ゴー！」
「おーっ！」
エステル一行は翡翠の塔へと向かった。

第1章　父、旅立つ（10）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

最後の代理の仕事を請けたエステルたち。クセの強い人達と共に翡翠の塔へ向かう！

第1章　父、旅立つ（11）

―翡翠の塔　入口

「わあ……けっこう高い建物ですねぇ。これって、何階建てなのかなぁ？」

ドロシーが感嘆した。

「うーん、この前は2階までしかいかなかったから……」

「でも、規模からいって5～6階くらいじゃないかしら？」

エステルが言った。

「5階建てのはずだよ。ウチにある資料に書いてあった。かなり前に調査されたけどその後、放置されたみたいだ。そういえば、他の地方にも似たような塔があるみたいだけど」

ヨシュアが言った。

「ああ、その通りだ。ボース、ルーアン、ツァイスにも同じ様式の塔が建っているらしい。なんでも、リベール王国が建国された時代のものらしいぜ」

ナイアルが言った。

「へ～、そうだったの。歴史のロマンを感じちゃうわね」

エステルが感心した。

「それを伝えるのが今回の仕事だ。ドロシー、ローアングルで何枚か撮れ」

ナイアルがドロシーに命じた。

「は～い！」

ドロシーはそう言ってカメラを構えた。

「さあ……行くわよ」

「……」

……」

ドロシーは集中しているようだ。

「（す、すごい気迫……カメラを持つと性格が変わる？）」

「（さすがプロだね）」
2人は感心している。
「……。……。……。すか～っ……Ｚｚｚ……」
どうやら、ドロシーは立ちながら寝ていたようだ。
怒ったナイアルが近づいて、ドロシーを思いっきり叩いた。
「しくしく……」
「先輩、痛いですよぅ……」
ドロシーは痛がっている。
「お約束すぎるんだよ！格好つけてないでいつものスタイルで撮りやがれ！」
ナイアルが叱った。
「てへ、やっぱり慣れないことをするもんじゃありませんね～。それじゃあ……」
ドロシーは再びカメラを構えた。
「おおっ、いい顔してますねー」
パシャッ！
「セクシーですねぇ。とってもキュートですぅ！」
パシャッ！
「行きますよー、ハイ、チーズ！」
パシャッ、パシャッ！変な撮り方しますねえ……
「な、なんで？人物を撮るわけじゃないのに……」
「でも、違和感はないよね……」
2人はその様子を眺めている。
「景色の”表情”が見えるんだとさ。あんなアホなやり方で息を飲むような写真を撮りやがる。ま、一種の天才だわな」
ナイアルが呆れながら言った。
「はあ……人は見かけによらないわね」
エステルが言った。
「はい、お待たせしましたっ」

ドロシーが、翡翠の塔の外観を撮り終えたようだ。
「よしっ、中に入るとするか。目指すは塔の屋上だ。頼んだぞ、新米ブレイサーども」
ナイアルがエステルたちに言った。
「ふふん、任せなさいって。どんな魔獣が現れたってあんた達には爪一本触れさせないから」
「僕たちの後ろから離れないようにしてくださいね」
そうして、４人は翡翠の塔の中に入って屋上を目指した。

―翡翠の塔　屋上
「まぶし……」
「やっと屋上に到着したわね～」
エステルが体を伸ばした。
「うわー、いい景色ですねぇ！」
「ほう、こりゃ驚いた。予想以上にいい絵が撮れそうだな」
ナイアルたちは喜んでいる。
「そして、あっちが例のブツか……」
ナイアルが目の前にある何かの装置を見た。
「あれって、何なのかな？」
エステルが見て言った。
「なんか、オーブメント仕掛けのでっかいお釜って感じですねぇ」
ドロシーが言った。
「資料によるとどうやら古代の装置らしいぜ。使用目的は判っていないらしいがな」
ナイアルが言った。
「ふーん……」
「ねえ、ヨシュア。こんな物があるって知ってた？」
エステルがヨシュアを見て尋ねた。

「……」
ヨシュアは目を瞑って黙っている。
「ヨシュア？」
エステルが聞いた。
「……隠れても無駄です。出てきた方が身のためですよ？」
ヨシュアが柱の方に向かって鋭く言った。
「へっ……」
エステルが柱の方を向いた。
「で、出て行きます！今すぐ出て行きますからっ！」
そこから、男性が慌てて出てきた。
「な、なにこのヒト……」
「なんと、先客がいたのかよ」
「うわあ、びっくり～。ヨシュア君、よく気付いたねぇ」
「……あなたは……」
一同は驚いた。
「すみません、ごめんなさいっ！手持ちのミラは全部あげますから、どうか命だけは助けてくださいっ！」
眼鏡の男性が焦りながら言った。
「ちょっとオジサン……盗賊か何かと勘違いしないでよ。この紋章を見れば分かるでしょ？」
エステルはギルドの紋章を見せた。
「おお、それは遊撃士協会の……」
「ひょっとして……君たちはブレイサーですか？」
眼鏡の男性が言った。
「えへへ、その通りよ。あたしは、エステル。こっちの男の子はヨシュア」
「で、俺たちは《リベール通信》の記者だ。この塔の取材をするためにこいつらに護衛してもらっている」
各自挨拶した。
「はあ～～っ。もう、驚かさないでくださいよ……」

「こんな場所に入り込んでくるから怪しい人達と思ったじゃないですか」
眼鏡の男性が息をついた。
「そういうあなたも充分、怪しいと思いますけど……」
「いったい何者なんですか？」
ヨシュアが男性に尋ねた。
「これは申し遅れました。私、考古学者のアルバと言います。古代文明の研究のために、この塔を調べに来たんですよ」
眼鏡の男性は、アルバと名乗った
「たった1人で？よくここまで無事でしたねぇ」
ドロシーが感心した。
「いや、ははは。遺跡調査は慣れていますからね。魔獣から逃げ回る足腰には自信があるんです」
「……さすがに今回は死にそうな目に遭いましたけど」
アルバ教授が溜息まじりに言った。
「む、無茶苦茶な学者さんね～」
エステルが呆れた。
「しかし、考古学者ってことはこの塔の由来には詳しいのかい？」
ナイアルがアルバ教授に尋ねた。
「まあ、人並み以上には……」
「調査を始めたばかりなので判っていない事も多いのですが」
アルバ教授が言った。
「それでいい。何か面白そうな話はないか？記事のネタにさせてもらうぜ」
ナイアルが言った。
「ふむ、そうですね……」
アルバ教授が少し考えた。
「皆さんは《セプト＝テリオン》という言葉を聞いたことがありますか？」
アルバ教授が言った。

「それって、教区長さんから教わったことがあるような……」
エステルが思い出そうとする。
「古代人が女神（エイドス）から授かったという、力を秘めた『七の至宝』のことですね？」
ヨシュアが言った。
「ええ、その通りです！彼らは、この至宝の力を借りて海と空と大地を支配したそうです。さらに、生命や時間の神秘すら解き明かしたと伝えられるのですが……」
「およそ１２００年前、謎の災厄によって古代文明が滅びた時、《セプト＝テリオン》も失われました」
アルバ教授が説明した。
「七耀教会（しちようきょうかい）の聖典にも記されている伝説だな。で、それがこの塔とどう関係するんだ？」
ナイアルがアルバ教授に尋ねた。
「七至宝の１つが、このリベールに眠っているという伝承があるんです」
「――その名も『輝く環』（オーリオール）」
アルバ教授が言った。
「『輝く環』……なんだか不思議な響きの言葉ね」
エステルが言った。
「その伝承が本当ならば、リベール最古の遺跡である、この塔に何か手がかりがあると睨みましてね。それで調査に来たわけなんですよ」
アルバ教授が説明した。
「はー、夢のあるお話ですねぇ」
ドロシーが感心した。
「そうでしょう！？古代のロマンを感じますよね！？いやあ！判ってくれる人がいて嬉しいなあ！」
アルバ教授が喜んだ。
「それで……手がかりは見つかったんですか？」

ヨシュアがアルバ教授に尋ねた。
「い、今のところは……」
「そこの装置の謎が解明されれば、何か分かるとは思うんですがねぇ」
アルバ教授がしどろもどろ言った。
「面白いと話とは思うが、現状では憶測止まりってことか。話してもらって悪いが記事にするにはイマイチ弱いな」
ナイアルが言った。
「そうですか……ガックシ」
アルバ教授が肩を落とした。
「ふーん、意外。案外マジメに記事書いてるのね？」
エステルがナイアルに言った。
「不確実なニュースソースを記事にするわけにはいかねぇからな。ゴシップ載せてもヨタは載せねぇのが、《リベール通信》のポリシーなんだ。まあいい、予定通りに行くとするか。ドロシー。ロレント全景を収めたショットを数枚。それ以外は、お前の感性に任せた。あちこち動き回って思う存分、いい絵を撮りまくれ」
ナイアルがドロシーに言った。
「わっかりました！不肖ドロシー・ハイアット、おもいっきり撮りまくりまーす」
そう言って、ドロシーは歩き回りながら写真を撮りはじめた。
「学者先生、せっかくだから俺たちと一緒に町まで帰らないか？この2人、見てくれはガキだが、護衛としてはそこそこ役に立つぜ」
ナイアルがアルバ教授に言った。
「引っかかる言い方ねぇ……」
エステルは不満顔だ。
「はは、ご一緒させて頂けるなら、私としては願ったり叶ったりです」
アルバ教授が言った。
「決まりだな。それじゃあ、撮影が終わるまで、しばらく休憩する

ことにしよう」
ナイアルが言った。

「うわ〜、いい眺めねぇ。この高さからだと、ロレント地方全体が見渡せるわ。こんなに景色が良いんだから観光名所にしたら儲かるかも……」
エステルがヨシュアに言った。
「うん……そうかもね」
ヨシュアは小さく言った。心なしか元気がない。
「……」
「どうしたの？なんか、元気なくない？」
エステルがヨシュアの様子を見て言った。
「はは、君はごまかせないな。屋上に出てから……ちょっと気分が悪くなってね」
ヨシュアが言った。
「だ、大丈夫なの？」
エステルが心配そうに言った。
「うん、少し風に当たったら、すぐに良くなると思うから……」
「せっかくの機会だから、君はいろいろと見学してきなよ」
ヨシュアが言った。
「で、でも……」
エステルは迷った。
「こうした機会に見聞を広めるのもブレイサーとしての心構えだよ。何か面白いことがあったら、あとで僕にも聞かせて欲しいな」
ヨシュアが言った。
「もう、口が上手いんだから……」
「わかった、少しうろついてくる。ただし……辛くなったら、ちゃんと呼んでね？」

エステルが言った。
「了解」
ヨシュアが笑って言った。

エステルはアルバ教授に話しかけた。
「おや……エステル君といいましたか。お連れの方はどうしたんですか？」
アルバ教授が尋ねた。
「うん……少し風に当たりたいんだって」
エステルが言った。
「そうですか。ここは良い風が吹いてますからね。しかし、君といい彼といい、その若さでブレイサーとは凄いですね。たしか遊撃士資格が取れるのは１６歳以上だったと思いますが……」
アルバ教授が感嘆した。
「へ～、よく知ってるわね。うん。あたし達もちょうど１６歳よ」
エステルが言った。
「いいですねぇ、若いという事は。それだけで無限の可能性につながる。私も、あと１０歳若ければ、大陸全土に眠る古代遺跡の謎をこの手で解き明かしてやるんですが」
アルバ教授が言った。
「大陸全土とは大きく出たわね。ということは、教授ってリベールのひとじゃないんだ？」
エステルが指摘した。
「ええ、北方の生まれです。あ……エレボニア出身ではありませんよ？」
アルバ教授が言った。
「あはは、心配しなくても大丈夫よ。戦争は絶対にイヤだけど……帝国の人が憎いわけじゃないしね」

エステルが悲しそうに言った。
「……誰か大切な方を？」
アルバ教授が察した。
「……」
「うん……お母さんをね」
エステルが言った。
「申しわけない……立ち入った事を聞きましたね。
アルバ教授はすまなさそうに言った。
「ううん、気にしないで。１０年も前のことだもん。あれから新しい家族も増えたしね」
エステルが言った。
「なるほど。それが、先程の少年ですか」
アルバ教授が言った。
「えへへ、弟みたいなものね。ヨシュアにしてみればお兄さんのつもりかもしれないけど」
エステルが言った。
「フフ……」
アルバ教授が小さく笑った。
「やだ、なんでこんな事まで喋っちゃってるんだろう……」
「他の人に聞かせる話でもないのに」
エステルが照れた。
「いいじゃないですか。仲良きことは美しき哉、ですよ」
アルバ教授が言った。

「ところで教授……この塔のこと、何か判りそう？」
エステルが教授に尋ねた。
「いえ、今のところサッパリ。どうやら他の塔とあわせて比較調査する必要がありそうです」
アルバ教授が言った。

「他の塔っていうと……ロレント以外にある3つの塔ね」
エステルが言った。
「ええ、その通りです」
「ボース地方の《琥珀(こはく)の塔》……」
「ルーアン地方の《紺碧(こんぺき)の塔》……」
「ツァイス地方の《紅蓮(ぐれん)の塔》……」
「どの塔も、この《翡翠(ひすい)の塔》と同じ時代に建てられたそうですよ」
アルバ教授が説明した。
「さすが詳しいわねぇ。でも、調査するのはいいけど、あまり無茶しないでね。少し費用はかかると思うけど、ブレイサーを雇った方がいいわよ?」
エステルが言った。
「はは、貧乏学者なもので……」
アルバ教授が苦笑した。

次にナイアルに話しかけてみた。
「ふわ〜、タバコが美味いな。ロレントなんて田舎の取材、最初は気乗りがしなかったが……。たまには悪くないかもしれん」
ナイアルが言った。
「む、失礼しちゃうわね。だったら来なきゃいいのに」
エステルがむくれた。
「編集長の命令なんだよ。トンチキ娘の教育も兼ねてな。そうじゃなかったら、今ごろスクープを求めて王国全土を駆け回ってる最中だぜ」
ナイアルが面倒くさく言った。
「ふん、スクープって言っても、どうせゴシップ記事じゃないの?」
エステルが馬鹿にしたように言った。
「ゴシップも嫌いじゃないが報道記事の方が圧倒的に多いぜ」

「……そういう意味で今一番興味があるのはボースだな」
ナイアルが言った。
「ボース地方？何か事件でもあったの？」
エステルが尋ねた。
「でかい強盗事件が相次いでいる。犯人の正体は判ってないが、どうやらアシを持った連中らしい」
ナイアルが説明した。
「アシ……飛行船のことね。ひょっとして、空賊ってヤツ？」
エステルが言った。
「その可能性が高いな。だが、エレボニア帝国による偽装工作というセンもありえる」
ナイアルが言った。
「ええっ……そんな！平和条約だって結ばれたのに！」
エステルが驚いた。
「確かに１０年前の戦争じゃ帝国も痛い目にあったからな。大陸諸国の目もあるし、滅多なことは出来んだろうが……。イヤガラセの可能性はありえる」
ナイアルが考えた。
「……」
エステルは悲しい顔をした。
「いまだ真相は闇の中さ。そして、それを明らかにするのが、俺たちブン屋のお仕事ってわけだ」

「他にも、王国軍方面で新しい動きが色々とあるしな。まったく、いくつ身体があっても足りないくらいだぜ」
ナイアルが言った。
「新しい動きって？」
エステルが尋ねた。
「若手の将校にキレ者がいてな。人材不足で、旧態依然の王国軍に

色々と新風を吹き込んでいるらしい。なんとかアポを取りたいんだが……」
ナイアルが言った。

しばらくして、エステルはヨシュアに話しかけた。
「ヨシュア、まだ気分が悪い？」
心配そうに尋ねた。
「いや、だいぶ良くなった。もう普通どおりに動けると思う」
ヨシュアが言った。
「よかった……一体、何が原因だったのかな？塔の中で酸欠になったにしては、あたしたちは大丈夫だったし……」
「突発性の高所恐怖症だったりして」
エステルは笑った。
「そ、それは無いと思うけど」
ヨシュアが否定した。
その時、ドロシーが撮影を終えたようだ。
「エステルちゃん、ヨシュア君！」
ドロシーたちが来た。
「あれ、撮影終わったの？」
エステルがドロシーに聞いた。
「まっかせて！いっぱい撮りまくっちゃった♪」
ドロシーは楽しそうだ。
「これで取材は終わりだ。そろそろ町に引き上げるとしよう。新米ども、帰りもよろしく頼むぜ」
「よろしくお願いします」
そうして、翡翠の塔を後にした。

―ロレント市
「――いやぁ、助かりました。こんなに安全に遺跡から帰れたのは初めてです。エステル君、ヨシュア君。本当に何とお礼を言ったらよいやら」
アルバ教授がエステルとヨシュアに礼を言った。
「いえ、当然の義務ですから」
「できれば、次の調査では最初からブレイサーを雇ってよね」
エステルたちが言った。
「はは、財布と相談してみます。それではみなさん……またどこかで合えるといいですね」
そう言って、アルバ教授が行ってしまった。
「さてと……俺たちもここで失礼させてもらうぜ。最初はどうかと思ったが、なかなか良い働きをしてくれたな。一応、礼を言っておこう」
ナイアルが礼を言った。
「ふふん、これが実力よ☆」
エステルが胸を張った。
「アホ、勘違いするんじゃねぇ。俺が知っているブレイサーと較べたら、お前なんざヒヨっ子もいいところだ。せいぜい精進するんだな」
ナイアルが言った。
「う……肝に銘じておくわ」
エステルがしゅんとした。
「ところでお2人はすぐに雑誌社に戻るんですか？」
ヨシュアがナイアルたちに尋ねた。
「いや、今日1日くらいはロレントでゆっくりするさ。原稿も書かなきゃならねえらしな」
ナイアルが言った。
「わたしは工房に行って、さっそく現像してきますねー。それじゃ、

まったねー！エステルちゃん、ヨシュア君」
そう言って、ナイアルたちは行ってしまった。
「父さんから引き継いだ代理の仕事もこれで終わりか……」
「思った以上に結構やりごたえがあったわね～」
エステルが感慨深そうに言った。
「うん、そうだね。それと、戦いだけがブレイサーの本分じゃないことが少しだけ判ったような気がする」
ヨシュアが言った。
「またまた格好つけちゃって～。でも、うん……あたしも判るような気がするよ」
エステルも頷いた。
「まだまだ先は長そうだけど……」
「とりあえず、ギルドに報告に戻ろうか？」
ヨシュアが言った。
「うん、そうしましょ」
「あ、そういえば調子はどう？また気分、悪くなったりしてない？」
エステルがヨシュアに言った。
「あ、うん……」
「すっかり良くなったみたいだ」
ヨシュアが大丈夫と言った。

そうして、最後の代理の仕事を終えた2人は遊撃士協会に報告に向かった。

第1章　父、旅立つ（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

最後の代理の仕事を終えた2人。しかし、この後、事件が起こる！

第1章　父、旅立つ（12）

―遊撃士協会　ロレント支部
そこには意外にもシェラザードがいた。
「あら、エステル、ヨシュア」
シェラザードが振り向いて言った。
「あれ、シェラ姉？」
「珍しいですね。いつも飛び回ってるのに」
2人が言った。
「先生から引き継いだ仕事がようやく終わったところでね。ちょうど報告をしてたってわけ」
シェラザードが説明した。
「あ、シェラ姉も終わったんだ」
エステルが言った。
「まあ、なんとかね。アイナから聞いたんだけど、あんたたちも頑張ったみたいね？やれやれ、毎日苦労してシゴいた甲斐があったもんだわ」
シェラザードが言った。
「えへへ、感謝してます。それじゃあ、あたし達も報告しちゃおうかな？」
エステルたちが報告しようとした。
「いいわよ、話してちょうだい」
アイナが言った。

エステルたちは記者たちの護衛について報告した。

「はい、ご苦労さまでした。どうかしら、シェラザード。なかなか頑張っていると思わない？」
アイナがシェラザードに聞いた。

「新人にしてはやるわね。でも、ここで満足しちゃダメよ。特にエステル。あんたはすぐ調子に乗るタチなんだから」
シェラザードが2人に言った。
「はいはい。ちゃんと分かってますってば」
エステルが言った。
「ふふ、エステルとヨシュアもシェラザードもご苦労さまでした。カシウスさんの抜けた穴がこんなに早くカバーできるなんてね。これでしばらくはのんびり出来るんじゃないかしら?」
アイナが言った。
「それはそれで少しタイクツな気もするけど……」
エステルが言った。
「街道の巡回や魔獣退治みたいな細かい仕事はあるから大丈夫だよ」
ヨシュアが言った。
「むふふ……久しぶりにゆっくりできるわね。よーし、今夜は思いっ切り飲むぞぉ!エステル、ヨシュア。あんたたちも付き合いなさいよね」
シェラザードが宣言した。
「え〜っ……酔っ払ったシェラ姉の相手すんの?」
エステルが不満の声をあげた。
「あら、エステル。あたしの誘い、断るつもりね?ふーん、いい度胸してるじゃない」
シェラザードがエステルを睨んだ。
「だ、だってシェラ姉って酒グセ、めちゃめちゃ悪いんだもん!騒ぐし、踊るし、脱ごうとするし……」
「確かに……目のやり場に困るんだよね……」
2人は嫌がっている。相当酒グセが悪そうだ。
「シェラザード……未成年相手に何をしているのよ」
アイナがシェラザードを窘めた。
「なによう、酒の余興じゃない。ふんだ、そんなにイヤならエステルは勘弁してあげるわよ」

シェラザードが仕方なさそうに言った。
「え、ほんと？」
エステルはほっとした。
「ええ――」
「かわりに、あんたの分までヨシュアに付き合ってもらうから」
シェラザードがヨシュアの肩の上に置いた。
「え……」
「あ、あの、シェラさん……？」
ヨシュアが後ずさりした。
「ちょ、ちょっとぉ！」
エステルが怒った。
「んふふ、どうもヨシュアはしっかりしてそうで奥手だからね。酒にしても、その他にしてもお姉さんが色々仕込んであげよっか？」
シェラザードの目が危険だ。
「い、色々……？」
ヨシュアが言った。
「ちょっとヨシュア……なに鼻の下伸ばしてんのよ？」
エステルがヨシュアを見て言った。
「ご、誤解だってば！」
ヨシュアが焦って否定した。

その時、ギルドに人が駆け込んできた。
「た、大変じゃあ！」
クラウス市長だった。
「あれ、市長さん？」
エステルたちが振り向いた。
「ぜいぜい、はあはあ……」
「エステル君とヨシュア君……おお、シェラザード君もいるか！」
クラウス市長が息を切らしている。かなり慌てて来たようだ。
「（ちょっと助かった……）どうしたんですか、そんなに慌てて？」

ヨシュアがクラウス市長に尋ねた。
「い、一大事なんじゃ！」
「家を強盗している時に、私が留守に入ったらしいのじゃ！」
クラウス市長が言った。かなり慌てているため、言葉がおかしい。
「へ？」
エステルが素っ頓狂な声をあげた。
「市長さん、まずは落ち着きなさいよ。大きく息を吸って、ゆっくり吐いて」
シェラザードが言った。
「う、うむ……」
「す～～っ……はぁ～～～っ……」
クラウス市長は深呼吸をした。
「……」
「……実は、私が留守にしている時に、家に強盗が入ったらしいのじゃよ」
クラウス市長が言った。
「えええ～～っ！？」
「……」
「穏やかじゃないわね、それは」
3人が驚いた。
「教区長と話すことがあって、先程まで教会におったんじゃが……」
「家に帰ったら誰も出てこないので、おかしいと思って調べてみたら、強盗が押し入った後だったんじゃ」
クラウス市長が説明した。
「ちょ、ちょっと……ミレーヌおばさんたちは！？」
エステルが慌てて言った。
「大丈夫、全員無事じゃよ。屋根裏に閉じ込められていただけじゃ」
クラウス市長が言った。
「よ、よかったぁ……」
エステルが安心した。

「人に被害がなかったのは不幸中の幸いだったわね……」
「ここにいてもラチが明かない。市長さん、現場を見せてもらえる？」
シェラザードがクラウス市長に言った。
「うむ、よろしくお願いする」
クラウス市長が頼んだ。
「待って、あたしたちも行く！」
「そうですね。何か役に立てるかもしれません」
2人が言った。
「ふう、仕方ないか……」
「アイナ、あたしたちは事件の調査に入るわ。何か面倒が起こったら全部リッジに押しつけてやって。酒場でノンビリしてるはずだから」
シェラザードがアイナに言った。
「ええ、わかったわ。みんな気をつけてちょうだい」
アイナが言った。
そうして、3人はロレント市長邸に向かった。

―ロレント市長邸
2階の書斎は見事に荒らされていた。
「うわ～、メチャクチャだわ」
「これはまた……見事なほどの荒らされっぷりね」
一同は驚いた。
「ああっ、金庫が！？」
セプチウムの結晶をしまっていた金庫が空けられていて盗まれていた。
「……女王陛下に贈るはずだったセプチウムも盗まれてしまったよ。せっかく君たちが運んでくれたのに申し訳ない……」

クラウス市長が謝った。
「謝ることないですよ。悪いのは犯人たちなんですから」
「ところで……他の部屋の様子はどうですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「他の部屋はほとんど荒らされておらんよ。家内たちが押し込められていた屋根裏部屋が散らかった程度じゃ」
クラウス市長が説明した。
「ふむ……」
「……」
「エステル、ヨシュア。頼みたいことがあるんだけど」
シェラザードが2人に言った。
「なに？」
エステルが答えた。
「あたしは市長さんから事情聴取をさせてもらうわ。その間、あんたたちは屋敷の内部を調べて欲しいの」
シェラザードが言った。
「え、それって……いわゆる現場検証ってやつ？」
「僕たちに任せていいんですか？」
2人が言った。
「せっかく人数がいるんだもの。分担した方が効率的でしょうが？」
シェラザードが言った。
「わかった。できるかぎり頑張ってみるわ！」
エステルが張り切った。
「慎重に、そして確実にね。それじゃあ市長さん。応接間で話をきかせてくれない？」
シェラザードがクラウス市長に言った。
「うむ、何から話したものか……」
そう言って、シェラザードとクラウス市長は書斎から出て行った。
「現場検証か……なんかドキドキしてきちゃった」
エステルが言った。

「早速、この部屋から調べてみようか。それと、屋敷の人たちから、犯行当時の証言を聞いてみよう」
ヨシュアが言った。
「うん、オッケー！」
そうして、２人は現場検証を始めた。

第1章　父、旅立つ（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

最後の依頼を終えた2人。しかし、その矢先に市長邸に強盗が入った。

果たしてその犯人とは！？

第1章　父、旅立つ（13）

―書斎　金庫

「ああ、せっかく届けた女王様への贈り物がぁ～……。犯人ども、ぜったいに許すまじ！」

エステルがセプチウムのなくなった金庫の前で憤慨した。

「こうして見てみると……扉を壊したわけじゃなさそうだ。暗証番号を解析して開けたのか、それとも……」

ヨシュアが金庫を見て言った。

「解析なんてできるの？」

エステルがヨシュアに聞いた。

「不可能じゃないけど、プロの技術者じゃないと難しい。もっと簡単な方法で番号を調べたとしか思えないな」

ヨシュアが言った。

「簡単な方法……？」

エステルが考えた。

「そうだな……。たとえば、特殊なパウダーをボタン全体にまぶしてやるんだ。そのパウダーは、吸着性があって、しかも微細なため目には見えない。ただ、青い光に当てると発光する」

ヨシュアが考えられる方法を説明した。

「ふんふん」

エステルは頷いている。

「そのパウダーが付いている状態で、市長が暗証番号を入力するとしよう。すると、ボタンの上のパウダーが指にくっついて取れてしまう。これで、どのボタンが押されたのか分かるっていう寸法さ」

ヨシュアが説明した。

「ちょっと待って。それ、順番までは判らなくない？」

エステルが指摘した。

「いや、そうでもないんだ。指についたパウダーが増えると、ボタ

ンから取れる量が減っていく。つまり、発光量が少ない順からボタンを押していけばいいんだ。数字が重複していたら難しいけど、大体の番号は予測できるはずさ」
ヨシュアが言った。
「なるほど……ヨシュアって天才？」
エステルが言った。
「こんなのは基本だよ。とにかく、ボタンを調べてみよう」
ヨシュアが金庫のボタンを調べた。基本ではないと思うが……。
「……やっぱりあのパウダーだ。さっき説明した方法で開けたのは間違いないと思う」
ヨシュアが断言した。
「そ、そっか……」
「問題は、誰がそのパウダーをボタンにまぶしたかってことね。少なくとも、この屋敷を訪れたことのある人だろうけど」
エステルが言った。
「そうだね……それが問題だ」
ヨシュアが頷いた。

―書斎　床

本が大量に散らばっている。
「メチャクチャに荒らされているわね～。リタさんが見たら卒倒しちゃいそうだわ」
エステルが言った。
「本棚に並んでいた本が散らばっているみたいだ。あまり意味のある行動とは思えないけど……」
ヨシュアが言った。

―屋根裏部屋
そこには何かの葉が落ちていた。
「あれ、これって……」
エステルが葉を拾った。セルベの葉だった。
「こんな所に葉っぱなんて、ちょっとおかしいかも……」
「しかも、このあたりの木に生えているものじゃないわ」
エステルが葉を見て言った。
「鋭いね、エステル。ここは屋敷の人たちが閉じ込められていた場所だ。閉じ込める時、犯人たちが落としたものかもしれない」
ヨシュアが言った。
「重要な証拠物件ってヤツね」
エステルがセルベの葉をしまった。

―テラス
そこには手すりに傷があった。
「あれ、手すりに傷がある」
「本当だ……しかもまだ新しいね。金属製の何かを引っかけたような跡みたいだ」

―屋敷の人たちの証言　（ミレーヌ夫人）
「ミレーヌおばさん、大丈夫？」
エステルがミレーヌ夫人に尋ねた。
「ええ、心配いりませんよ。乱暴されたわけじゃありませんからね」
ミレーヌ夫人が言った。
「あの、侵入者たちについて何か気付いた事はありませんか」

ヨシュアが尋ねた。
「覆面をしていたから特徴とかは分からないけど……」
「そういえば、たしか玄関には鍵がかかっていたはずなのよ。ウチの人が教会に出かけて女2人だったから用心のためにね。あの人たち、いったいどこから入ってきたのかしらねえ?」
ミレーヌ夫人が言った。

―屋敷の人たちの証言　（リタ）
「もう、びっくりですよ～！屋根裏を掃除していたら、いきなり覆面の男たちが入ってくるんですもん！」
リタが興奮して言った。
「覆面の男たち……ってことは、単独犯じゃないんだ」
エステルが考えた。
「何人ぐらいの集団でしたか?」
ヨシュアがリタに尋ねた。
「そうですね……3、4人だと思いましたけど。あ、そういえば1人は背が低かったんですよ。女性だったかもしれませんね」
リタが思い出しながら言った。

一通り調べ終えると、応接間へと2人は向かった。
「市長さんから一通り事情を教えてもらったわ。あんたたちは、何か収穫あった?」
シェラザードが2人に聞いた。
「うん、色々判ったわ」
エステルが言った。
「それじゃあ……1つ1つ確かめて行くわよ」

「まず、犯人たちが狙ったのは？」
シェラザードが尋ねた。
「金庫の中のセプチウムね」
エステルが答えた。

「犯人たちの規模は？」
シェラザードが尋ねた。
「3～4人のグループです」
ヨシュアが答えた。

「どこから侵入したの？」
シェラザードが尋ねた。
「2階のテラスよ」
エステルが答えた。

「ずばり、今回の犯行に関係すると思われる人物像は？」
シェラザードが尋ねた。
「最近訪ねてきた旅行者だと思われます」
ヨシュアが答えた。

「へえ、よく調べたじゃない。これで犯人は特定できそうだわ」
「……市長さん。ここ2、3日の間で初対面の人物を書斎に通した？」
シェラザードがクラウス市長に尋ねた。
「そ、そうじゃな。何人かいることはいるが……」
「雑誌社の記者諸君もそうじゃ」
クラウス市長が答えた。
「なんだ、あの人たちも市長さんを訪ねていたんだ」
エステルが言った。

「犯行当時、彼らは僕たちと《翡翠の塔》に行っていました。容疑者からは除外できると思います」
ヨシュアが言った。
「なるほどね……市長さん、それ以外には？」
シェラザードが再び尋ねた。
「それ以外というと……ジョゼット君しかおらんが」
「ははは、でも、まさかのう」
クラウス市長が笑って言った。
「あはは、さすがにあの子が犯人ってのは無理があるよね。何と言っても王立学園の生徒だし」
エステルは笑った。
「犯罪者が分かりやすい格好をしているとは限らないわ。制服なんて、その気になればレプリカを作ることもできるしね」
シェラザードが言った。
「でも、本当にいい子なんだってば。人当たりが良くてお嬢様ぽくって……」
「ね、ヨシュア？」
エステルがヨシュアに同意を求めた。
「生憎だけど、僕の意見は逆だよ」
ヨシュアが言った。
「へっ……」
エステルが意外そうな声をあげた。
「あの時――市長さんがセプチウムを金庫に入れた時、あの子、まるで狩人のような獲物を見る目をしていたんだ。もちろん確証はなかったから問い質せなかったけど……。少なくとも、僕の目にはただの女学生には見えなかった」
ヨシュアが言った。
「そ、そんな……」
「信じられんのう……」
エステルとクラウス市長は信じられないといった様子だった。

「どちらにせよ、その女の子には話を聞いてみる必要がありそうね。その子、どこにいるか知ってる」
シェラザードは2人に聞いた。
「たしかホテルに泊まっているはずだけど……」
「でも、今日あたりにロレントを発つって言ってたわ」
エステルが言った。
「フン、急ぐ必要がありそうね。エステル、ヨシュア。まずはホテルを当たってみるわよ」
シェラザードが言った。
「う、うん……」
「分かりました」
2人は返事をした。
そして、エステルたちはホテル・ロレントへと向かった。

第1章　父、旅立つ（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

強盗の犯人はジョゼットと思われる。しかし、信じられないといったエステル。

ジョゼットが本当に犯人なのか！？

第1章　父、旅立つ（１４）（前書き）

この１４部目で第１章が終了します。感想お待ちしています。
それでは、お楽しみください。

第1章　父、旅立つ（14）

―ホテル・ロレント
エステルたちは受付のヴィーノに尋ねた。
「エステルさん、ヨシュアさん。おや、シェラザードさんまで……。どうかなさいましたか？」
ヴィーノが3人に聞いた。
「ジョゼットって知ってる？ここに泊まっているはずの王立学園の学生さん」
エステルが聞いた。
「もちろん存じていますが……。つい先ほど、チェックアウトされたばかりですよ」
ヴィーノが言った。
「ちっ、一足遅かったわね」
シェラザードが舌打ちした。
「発着場に行きましょう。まだ間に合うかもしれません」
ヨシュアが言った。
「うーん、悪い子には見えなかったんだけどなぁ」
エステルが落胆した。
「？？？」
ヴィーノは首を傾げている。

―ロレント発着場
受付のアランに話を聞こうとした。
「た、大変申しわけありません！まもなく到着すると思いますので今しばらくお待ちください！」
アランは慌てて言った。

「アランさん、あたしたちだってば」
エステルが慌てているアランに言った。
「なんだ、エステルたちか。おや、シェラザードさんまで。いったい、どうしたんだい？」
アランが尋ねた。
「このあたりで制服姿の女の子を見かけませんでしたか？」
ヨシュアが尋ねた。
「制服姿の女の子？それって、どこの制服？」
アランが尋ねた。
「ジェニス王立学園だけど……」
エステルが言った。
「ああ！あそこの制服は可愛いんだよね。清楚で可憐な白のスカートと、紺のハイソックスのコントラスト。うーん、ロマンだよねぇ。男子の制服は忘れちゃったけど」
アランが持論を展開した。ただのエロだな、こりゃ。
「り、理解不能なこだわりね……」
エステルが呆れた。
「それが男のサガってやつよ。で、その王立学園の制服を着た子を見なかった？」
シェラザードが気を取り直して聞いた。
「いや、ここ1カ月ばかりはお目にかかってないけど……。乗客の出入りはチェックしてるから少なくとも飛行場には来てないよ」
アランが言った。
「ということは、飛行船を使わずに街道沿いでロレントに来たのか……」
「ふむ、困ったことになったわね」
シェラザードが苦い顔をした。
「一気に捜索範囲が広がりましたね。考えてみれば、仲間がいるはずだからそいつらが潜伏する場所があるはず……」
ヨシュアが考えた。

「あ、そういえば……！」
エステルが突然声をあげた。
「どうしたの、エステル？」
シェラザードがエステルの方を向いた。
エステルは屋根裏部屋で見つけたセルベの葉を取り出した。
「コレ、拾ってたのを忘れていたわ。何かの手がかりにならないかな？」
エステルがセルベの葉を見て言った。
「そうか……それがあったね。シェラさん、この近くでセルベの木が生えている場所を知りませんか？」
ヨシュアがシェラザードに聞いた。
「セルベの木か……。たしか、ロレントの南にあるミストヴァルドに生えていたわね」
シェラザードが言った。
「ミストヴァルド……家の反対方向にある森ですね」
ヨシュアが言った。
「行ってみる価値がありそうね。そうと決まれば、町の南口から街道に出ましょ！」
エステルが言った。
「盛り上がってるねぇ。よくわからないけど頑張りなよ」
アランが3人に言った。

発着場を出たところで、娘の声が聞こえてきた。
「先輩、危ないですってばぁ。そんなに無理して走ったら……」
次に男の声。
「こ、これが……走らずにいられるかってんだ！」
ドロシーとナイアルだった。
「はあはあ、ぜいぜい……」

「ち、ちくしょう……タバコを減らすべきかもな……」
ナイアルは息苦しそうだった。
「何やってるの、お2人さん?」
エステルが話しかけた。
「おお、お前たちか。実はな、これからボースに行かなきゃならねぇんだ」
ナイアルが言った。
「でも、定期船はまだ来てないみたいですけど?」
ヨシュアが言った。
「ああ、知ってる。だから街道を通っていくんだよ。さすがに時間はかかるが、歩いて行けない距離じゃねえしな」
ナイアルが言った。
「そりゃ、ご苦労さまね。ひょっとしてスクープ狙いなの?」
エステルが聞いた。
「ああ、とびっきりの極上物だぜ」
「こうしちゃいられねぇ!なんとか今日中に着かねえと!」
そう言って、ナイアルは走り出した。
「先輩、ほんとに大丈夫かなぁ」
「あ、それじゃあまたね~!エステルちゃん、ヨシュア君」
そう言って、ドロシーもナイアルを追いかけて走り出した。
「にぎなかな連中だこと。あんたたちの知り合いなの?」
シェラザードが2人に聞いた。
「例の雑誌社の記者たちよ。父さんの代わりに塔に案内した。何か事件でもあったのかな?」
エステルは首を傾げた後、再びミストヴァルドへと向かった。

―ミストヴァルド
「ここからがミストヴァルドね」

暗くて湿った森である。
「シェラさん、なにか判りますか?」
ヨシュアが尋ねた。
「……」
「……間違いないわね」
「ほんの少し前に、複数の人間がこのあたりを通った気配があるわ。十中八九、アタリかもしれない」
シェラザードが道を調べて言った。
「そ、そんなこと判るんだ?」
エステルが感心して声をあげた。
「逃亡犯の追跡(トレース)もブレイサーに必要な技術だからね。とにかく森の中を調べるわよ。あんまり大きな声を出さないようにね」
シェラザードが言った。
「らじゃ~!」
「了解しました」
そうして、3人は森の中を探索し始めた。

―ミストヴァルド　奥
「ふっふっふ……まったくチョロイもんだよね。あの程度の下準備で、こんな極上品が手に入るなんて。これで兄ぃたちに自慢できるよ」
ジョゼットの声が聞こえてきた。
「しかし、お嬢にはビックリだぜ。いくら制服着てたからって、あんな演技ができるなんてよ」
仲間の1人と思われるレグが言った。
「さすが元・貴族令嬢だねぇ」
同じくディノが言った。
「フンだ……昔の事はどうだっていいだろ。しかし、この格好をし

てりゃ大抵のヤツは騙せるから助かるよ。あの、お人好しの市長といい、脳天気な女遊撃士といい……。あはは、おめでたいヤツら！」
ジョゼットが高笑いした。
他の3人も笑った。

「（あ、あんですって～っ！？）」
陰に隠れたエステルがむかっとした。
「（落ち着いて……もうちょっと話を聞いてみよう）」
ヨシュアが制した。
「（むう……仕方ないわね）」
エステルはとどまった。

「でも、あのガキどもけっこう手強そうでしたぜ？鉱山に現れた魔獣をことごとく退治してたし……」
鉱員見習いだった男は強盗のライルだった。
「鉱山？ああ、キミが失敗したやつか。成功してたら、ボクがわざわざ猿芝居を打つことなかったのにさ」
ジョゼットがライルに言った。
「す、すまんお嬢……」
ライルが謝った。
「まあ、そう気にすんな。終わり良ければ全て良しだよ。それにしても……あんな連中が遊撃士とはまったく笑わせてくれるよね。特に、あのノーテンキ女！ボクのことを毛ほども疑わずに『仲良くなれそう』だってさ！あははは！笑いをこらえるのに必死だったよ！」
ジョゼットが笑うと、3人も盛大に笑った。
「……何がおかしいのよ」
エステルたちが武器を構えながら姿を現した。

「ア、アンタたちは……」
ジョゼットが驚いた。
「黙って聞いてりゃあ脳天気だの、おめでたいだの好き放題言ってくれちゃって……」
「覚悟はできてんでしょーね!?」
エステルは怒り心頭といった様子だ。
「遊撃士だと!?」
「どうしてここに……」
強盗たちは焦った。
「屋敷からセプチウムを盗んだ手際は見事だったけど……」
「フフ、詰めが甘かったみたいね?」
シェラザードが言った。
「遊撃士協会規約に基づき、家宅侵入・器物損壊・強盗の疑いであなたたちの身柄を拘束します。抵抗しない方が身のためですよ?」
ヨシュアが言った。
「あわわ……」
「お、お嬢、どうすんだ!?」
強盗たちが後ずさりした。
「ビビることはないよ! いくら遊撃士とはいえ、しょせんは女子供の集まりさ! ボクたち《カプア一家》の力を骨の髄まで思い知らせてやるんだ!」
ジョゼットが叫んだ。
「なにが女子供よ! 自分のことを棚に上げておいて! も~アッタマきた! 絶対ギャフンって言わせてやる!」
エステルがキレた!
「それはこっちのセリフだね! キミたち、やっちゃいな!」
ジョゼットが言った。
「がってんだ!」
強盗3人が叫んだ。

しばらく後、エステルたちはジョゼットたちを打ち負かした。
「そ、そんなバカな……」
ジョゼットが地面に手をつきながら言った。
「ふふん、参ったか♪遊撃士を舐めるんじゃないわよ。さて、アレは返してもらうからね」
エステルはジョゼットからセプチウムの結晶を奪い返した。
「ああ、ボクの七耀石（セプチウム）……」
ジョゼットが未練がましく言った。
「あんたのじゃなくて、ロレントの人たち全員のもの！まったく図々しいんだから……」
エステルが呆れながら言った。
「さて、結晶も取り戻したことだし、告白タイムと参りましょうか。面白い名前を言ってたわね？たしか《カプア一家》とか……」
シェラザードはジョゼットに近づいた。
「ギクッ……」
「さ、さあね、なんのことやら」
ジョゼットははぐらかした。
「フフ、強情じゃない。そういう子は嫌いじゃないわよ」
シェラザードはジョゼットの目の前で鞭を打った。
「ひゃあっ！あ、危ないじゃないのさ！」
ジョゼットが飛び退いた。
「口を開くつもりがないなら、身体に聞くしかないじゃない？大丈夫、優しくしてあげるから」
シェラザードが微笑みながら言った。
「ひ……。ち、近寄るな、あっちいけーっ！」
ジョゼットが青ざめながら喚いた。
「（シェラ姉、絶対楽しんでるよね）」
「（触らぬ神にたたりなし、だね……）」

2人はその様子を眺めている。
その時、ヨシュアが叫んだ。
「シェラさん、あぶない！」
シェラザードが素早くよけた。
「導力砲（オーバルガン）！？」
シェラザードが驚いた。
「シェラ姉、大丈夫！？」
エステルが聞いた。
「平気よ！それより上に注意しなさい！」
シェラザードが言った。
上から飛行艇が降りてきた。
「ひ、飛行艇！？」
エステルが驚いた。
「あはは、形勢逆転だねっ！」
ジョゼットが笑いながら言った。
中からジョゼットと同じ姿をした男が扉から出てきた。
「ジョゼット、大丈夫か！？」
その男が言った。
「キール兄！ずいぶん遅かったじゃないか！まあいいや、早く加勢してよ！」
ジョゼットは兄であるキールに言った。
「いや、ロレント進出はお預けだ。お前がいない時にボースで面倒な事が起きたんだ」
キールが言った。
「め、面倒なこと？」
ジョゼットが不思議そうに言った。
「いいから早く乗りな！グズグズしてると置いていくぞ」
キールが急かした。
「く……」
ジョゼットが飛行艇に乗った。

「ま、待ちなさいよ、こらぁ！」
エステルが叫んだ。
「勝負はおあずけだ！これで勝ったと思わないでよ！いずれ決着をつけてやるからね！」
ジョゼットがそう言うと飛行艇が飛んで行ってしまった。

「……」
エステルは黙った。
「参ったわね……あんなモノまで出してくるとは。あはは、一本取られちゃった」
シェラザードが苦笑した。
「笑い事じゃないってば！う～っ、くやしいよ～っ！！」
エステルが顔をしかめた。逃がしたことより、馬鹿にされた事の方が悔しそうだった。
「まあ、いいじゃない。セプチウムも取り戻せたんだし。それにしても……彼らは空賊だったみたいですね」
ヨシュアが深刻そうに言った。
「ええ、間違いなさそうね。どうやらボース地方を根城にしてる連中みたいだけど……」
「まさかロレントみたいな田舎に出張してくるとは思わなかったわ」
シェラザードが言った。
「空賊だろうが山賊だろうがどうだっていいわよ！あの生意気ボクっ子、今度会ったら、ギタギタのパーにしてやるんだから！」
エステルが言った。山賊とは古い……。
「ギタギタのパーって……」
ヨシュアが苦笑した。

こうして市長邸から強奪されたセプチウムの結晶は無事に取り戻された。
結晶を市長に返したエステルたちは事件の報告をするため、ギルドに戻った。

―遊撃士協会　ロレント支部
「大変なことがあったわね。まさか空賊が現れるなんて……。逃がしてしまったのも無理ないわ」
アイナが言った。
「いや、今回はあたしのミスだわ。もっと用心してしかるべきだった。まだまだ先生の域には遠いわね……」
シェラザードが悔しそうに言った。
「シェラ姉の責任じゃないってば。頭に血が上ってたあたしのせいだと思う……」
「……僕も迂闊でした」
2人がシェラザードをかばった。
「いや、あんた達はよくやったわ。市長邸の現場検証も完璧だったしね」
「アイナ……推薦してもいいんじゃない？」
シェラザードはアイナに向き直って言った。
「そうね、私もそう思います」
シェラザードとアイナは意味深なことを言った。
「推薦？」
「どういうことですか？」
2人も意味が判らないようだ。
「その前に、まずは今回の調査の報酬を渡しておくわね」
アイナが言った。

「それと……これを受け取ってちょうだい」
アイナは《正遊撃士資格の推薦状》を2人に渡した。
「こ、これって……」
2人は驚いた。
「今のあなたたちは準遊撃士。つまり見習いみたいなものね。正遊撃士になるためには王国にある全ての地方支部で推薦を受ける必要があるの。これはロレント支部の推薦状よ」
アイナが説明した。
「い、いいの?そんなもの貰っちゃって……」
「正遊撃士になるにはそれなりの実績を上げる必要があるって聞きましたけど……」
2人が言った。
「代理の仕事、今回の活躍。実績としては充分だと思うわ」
「……ただし、あくまでロレント地方での実績だけどね」
アイナが言った。
「他の支部でも実績を上げて推薦をもらう必要があるってわけ。ボース、ルーアン、ツァイス。そして王都グランセル……。まだまだ道のりは長いわよ~」
シェラザードが言った。
「でもでも、すっごく嬉しい!一生懸命やった甲斐があったわ!ねえヨシュア、こうなったら他の地方にも行くっきゃないよね!」
エステルが喜びながら言った。
「はは、言うと思った。賛成だけど……僕たちだけじゃ決められないよ。父さんが帰ったら相談してみよう」
ヨシュアが言った。
「うん!」
その時、支部の電話が鳴った。
「あら……」
「あ、それって通信器よね?」

アイナが受話器を取った。
「はい、こちら遊撃士協会。リベール王国・ロレント支部です」
「あら、ご無沙汰してます」
「……」
「……本当ですか？」
「そ、それは……大変なことになりましたね」
アイナが応答している。なにやら何か起こったようだ。
「何かあったのかな？」
「うん、そうみたいだね」
2人はその様子を見ている。
「ええ、確かに先日から出張で出かけておりますが……」
「……」
「なんですって！？」
アイナが突然声を上げた。
「し、失礼しました。にわかには信じられませんが……」
「ええ、わかりました。家族には私から伝えておきます」
「……大丈夫です。本人たちも遊撃士ですから」
「はい……何か判ったら宜しくお願いします」
そして、アイナは受話器を置いた。
「アイナさん、何かあったの？」
「珍しいこともあるもんね。あんたがそこまで驚くなんて。で、どこからの連絡だったの？」
一同はアイナを見て言った。
「ボース支部からよ。……大変なことが起こったわ。定期飛行船の《リンデ号》がボース地方で消息を絶ったの」
アイナが重苦しく言った。
「ええっ！？」
「どういうことですか？」
エステルたちが驚愕した。
「まだ詳細は判らないわ……。現在、王国軍が出勤して大規模な捜

索をしているそうよ。そのせいで、他の定期船も運航を見合わせているらしいの」
アイナが説明した。
「なるほどね……それで発着場が混雑してたのか」
シェラザードが言った。
「そ、それで……」
「……」
アイナが急に閉口した。
「アイナさん？」
エステルがアイナの顔を見た。
「エステル、ヨシュア。気をしっかりもってちょうだい」
「……行方不明になった定期船にカシウスさんが乗っていたらしいの」
アイナが重苦しく言った。
「……」
「……え」
「まさか……！」
「う、嘘でしょう！？」
エステルとヨシュア、シェラザードは信じられないといったばかりに驚いた。
「乗客名簿に名前があったらしいの」
「リベール遊撃士協会、ロレント支部所属、正遊撃士……」
「カシウス・ブライト、４５歳って……」
一同は静まり返った。

第1章　父、旅立つ（14）（後書き）

これで、「第1章　父、旅立つ」は終了です。
ここまでの感想や文の構成、内容の分かり易さ、良い所・悪い所など、この小説の批評、評価をお願いします。皆様の評価をもとに、次の第2章を書き進めたいと思います。
どうか、よろしくお願いします。

第2章　消えた飛行客船（1）

―ブライト家　夜

エステルは自分の部屋に籠っていた。

「……」

ヨシュアがエステルの部屋の前で立ち尽くしている。どう声をかければいいか迷っているようだ。

「エステル、いいかな？」

ヨシュアが扉をノックした。

「……ヨシュア？」

エステルが返事した。

「食事の用意、出来たから。ちなみに今夜は、ローストチキンのバジル風味とオニオンスープのグラタン」

ヨシュアが言った。

「……美味しそうだね……」

「うん、後で行くから先に2人で食べててよ……」

エステルは部屋から出ようとしない。

「そっか……。わかった。冷めないうちにおいでよ」

そう言うと、ヨシュアはリビングに降りた。

「『運命の輪』……またこのカードが出たか。やはり、何かが起きているのは疑いようのない事実……。その何かが未だに見えてこない」

シェラザードがタロットで占っていた。

「あら、エステルはどうしたの？」

シェラザードがヨシュアの方を向いて聞いた。

「先に食べててくれって……あまり食欲がないみたいです」

ヨシュアが俯きながら答えた。

「そっか……。さすがにあの元気娘も今回ばかりは応えたみたいね」
シェラザードも俯いた。
「……無理、ないですよ。なんだかんだ言って、仲のいい父娘ですから……」
ヨシュアが言った。
「そうね……」
「……」
ヨシュアが席に着いた。
「シェラさんはどう思います？今回の件、事故なのか、それとも事件なのか……」
ヨシュアがシェラザードに尋ねた。
「……正直、何とも言えない。先生は一流の遊撃士よ。こと危機管理に関してはケタ外れの能力を持っている。事故だろうが、事件だろうが、その場に先生がいるんだったら、すぐに解決されているはずだわ。だけど実際、定期飛行船は先生ごと行方不明になった……」
シェラザードは考えて言った。
「ありえない事が起きた……つまりそういう事ですよね」
ヨシュアがまたも難しい顔をして俯いた。
「ふふ、そんな顔しなさんな。あんたはどっしり構えてエステルを支えてやんなさい。明日、あたしの方で動いて……」
その時、エステルの声が聞こえた。
「はぁ～、いい匂い～っ。もうガマンの限界だよ～」
エステルがリビングへやってきた。
「えっ……？」
「エステル……あんた、大丈夫なの？」
2人は意外そうな顔をした。
「もーダメダメ。お腹空いて倒れる寸前よ。うわ、美味しそーじゃん！」
そう言って、エステルは席に着くと食事を始めた。そういう意味で聞いたのではないと思う。

「いっただきまーす！あれ、２人とも食べないの？美味しいよ、スープグラタン。オニオンの甘みが利いてて。さっすがヨシュア。いい仕事してるじゃない♪」
エステルは元気そうにヨシュアに言った。
「そ、そりゃどうも……」
ヨシュアは相変わらず呆然としている。
「ほらほら。シェラ姉も遠慮しないで。あ、父さんが隠し持ってる秘蔵のブランデーでも飲む？確か《スタインローゼ》の２０年物だったかなぁ……」
エステルがシェラザードに言った。
「ス、スタインローゼ？しかも２０年物ですってぇ！」
シェラザードが飛びついた。
「ちょっと、シェラさん」
ヨシュアがシェラザードに言った。
「……はっ。コホン、遠慮しときます」
シェラザードが我に返った。酒には目がないらしい。まあ、大酒のみなら当然だろう。
「ところで、何をしてたのよ？ヨシュアが呼んでも降りて来なかったじゃない」
シェラザードがエステルに言った。
「んー？ああ、替えのパジャマを探してたの。奥にしまったお気に入りがなかなか見つからなくってさ～」
エステルが言った。
「パ、パジャマぁ？」
ヨシュアが意味が分からない様子だ。
「それと旅行用具一式。どれだけかかるか判らないし、備えあれば憂いなしってやつよ」
エステルが言った。
「あ……」
ヨシュアが意味を理解したようだ。

「あんた、もしかして……」
「先生の消息を確かめに、ボースに行ってみるつもり？」
シェラザードが言った。
「モチのロンよ。あの悪運の強い父さんに何かあったとは思えないけど……。じっとしてるのは性に合わないし、ちょっくら行って確かめてくるわ」
エステルが言った。
「はは……まったく君って子は……」
「前向きっていうか、神経が図太いっていうか……」
ヨシュアが苦笑した。
「なによ～、失礼しちゃうわね。どうせ、ヨシュアも付き合ってくれるんでしょ？」
エステルがむっとしながら言った。
「あたりまえだよ。でも、定期飛行船は軍の捜索活動が終わるまで運航中止になってるみたいだ。ボースまで、街道を使って歩いていくしかなさそうだね」
ヨシュアが言った。
「歩いてボースまでか……どのくらい時間がかかるのかな？」
エステルが考えた。
「遊撃士の足だったら、急げば半日くらいのもんよ。しかしまったく……そういうことなら話は早いわね。その話、あたしも乗せてもらうから」
シェラザードが言った。
「えっ……シェラ姉も来てくれるの？でも、仕事が忙しいんじゃ……」
エステルが言った。
「こら、あたしは先生の弟子よ？師に何かあったと聞いて、留守番なんかしてられますかっての。協会の仕事は、アイナに頼んで他のメンバーに回してもらうわよ」
シェラザードが言った。

「シェラ姉……」
「シェラさん、ありがとう」
2人がシェラザードに感謝した。
「礼を言われる筋合いはないわ。これだけの事件を新人だけに任せるわけにはいかないってこと」
シェラザードが2人に言った。
「む～、悔しいけど、その通りかもしれない。まあいいや、シェラ姉が一緒だったらすごく心強いし」
「よろしくお願いします」
2人が言った。
「フフ、こちらこそ。とりあえず、明日の朝、出発前にギルドに寄りましょ。アイナに事情を説明しなくちゃね」
シェラザードが微笑みながら言った。
こうして、慌しい事件が解決し、一日が過ぎていった。

第2章　消えた飛行客船（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちが父、カシウス・ブライトの旅に出た。カシウス・ブライトはどうなったのか！？

第2章　消えた飛行客船（2）

―遊撃士協会　ロレント支部

エステル、ヨシュア、シェラザードの3人は、アイナに事情を説明した。

「――話はわかりました。正直、カシウスさんに続いてシェラザードに抜けられると、かなり人手不足になるけど……」

「他ならぬカシウスさんの事だもの。遠慮せずに行ってきてちょうだい」

アイナが言った。

「恩に着るわ、アイナ。ま、せいぜいリッジのヤツをめいっぱいコキ使ってやって。普段の仕事量の3倍は行けるはずだから」

シェラザードは笑いながら言った。

「さ、さすがに可哀想じゃない？」

エステルが苦笑した。

「ふふ、いざとなったら王都支部に応援を頼むから心配しないでね」

「ところでシェラザード。少しだけ時間をもらえない？あなたが請けるはずだった仕事についてちょっと……」

アイナがシェラザードに言った。

「ん、わかったわ。エステル、ヨシュア。2階で待っててくれる？すぐに終わらせてきちゃうわ」

シェラザードがエステルたちに言った。

「はい、わかりました」

ヨシュアが頷いた。

「……」

「ね、シェラ姉。待つんだったら、時計台の前でもいいかな？ちょっと……挨拶したい人もいるし」

エステルが言った。

「……？」

ヨシュアが首を傾げた。
「そっか……うん、そうだったわね。それじゃあ、時計台の前で待ち合わせという事にしますか。用事が済んだら、すぐにあたしも行くからね」
シェラザードが言った。
「りょーかい。ヨシュア、行こ？」
エステルがヨシュアに言った。
「あ、うん……」
そうして、エステル、ヨシュアは時計台へと向かった。

―ロレント時計台前

《七耀暦１０７５》
リベール王家、七耀教会、ロレント市の合同で建立される。
《七陽暦１１９２》
百日戦役中、ロレント攻囲にてエレボニア帝国軍の砲撃により倒壊。
《七陽暦１１９７》
市民の協力により再建される。

時計台にはそう刻まれていた。
「ここの時計台を見るたびに思うんだけど……」
「戦争でいったん壊れた後、よくここまで直したものだね。ロレント市民の気概を感じるな」
ヨシュアが感心しながら言った。
「……」
エステルは目を閉じながら黙っている。
「エステル？」
ヨシュアがエステルを見て言った。

「……ね、ヨシュア。シェラ姉が来るまで、ちょっと上に登ってみない？」
エステルがヨシュアに言った。
「時計台の上？別に構わないけど……」
ヨシュアが不思議そうに言った。
「それじゃ、行きましょ」
2人は時計台の上に登った。

「はあ～。朝の空気が気持ちいい……。ねえ、ヨシュア。ここからだと家（うち）が見えるよ」
エステルは楽しそうだ。
「本当だ、屋根が見えるね。でも、いつもはここに登りたがらないのに、どういう風の吹き回しだい？この場所、君はあんまり好きじゃないと思ってたけど」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「……」
「この場所は好きだよ。でも、気軽には登れないんだ」
「お母さんが……亡くなった場所だから」
エステルが重く言った。
「……え……」
ヨシュアが絶句した。

「１０年前の戦争の時ね……」
「ロレントを包囲した帝国軍が市民の降伏をうながすために象徴である時計台を砲撃したの」
「その頃、父さんは王国軍の軍人として戦っていて……」
「あたし、父さんが戦っている相手がどういう人たちなのか見たくてこの時計台に登っていて……」

「逃げるヒマもなく巻き込まれてい」
「でも、気付いた時には、あたしはほとんど無傷だった」
「お母さんがね、助けてくれたの」
「腕の中にあたしを抱き締めて、たくさんの瓦礫から守ってくれて……」
「それから泣きじゃくるあたしに大好きな子守歌を唄ってくれて……」
「それで……それで……」
「瓦礫が取り除かれた時には……」

「……」
「……戦争が終わって、ここは元通りになったけど、あまり来ないようにしていた」
「辛い思い出があるからじゃないの」
「この場所に来ると、心のどこかでお母さんに頼っちゃいそうで……」
「頼ってばかりじゃ、お母さんみたいに強くなれない気がして……」
エステルが目を閉じながら言った。
「エステル……」
ヨシュアはかける言葉が見つからない。
「でも、いいよね？今日くらいは頼っても……」
「父さんが無事に帰ってくるようにお母さんにお願いしても……」
「父さんを守ってあげてってお母さんにお願いしても……」
エステルが言った。
「……当たり前だよ。大丈夫……父さんはきっと無事でいる。君のお母さんが守っているんだ。無事に決まってるじゃないか」
ヨシュアがエステルに近づいて言った。
「……」
エステルは黙っている。

「万が一、無事じゃなくてもエステルが助けてあげればいい。お母さんに助けられた君が、今度は、父さんを助ければいい。僕も一緒に手伝うからさ」
ヨシュアがエステルを励ました。
「……ヨシュア……」
エステルが呟いた。
「君の悲しみを、完全に分かち合う事はできないけど……」
「こうして……側にいることはできるから。僕の胸でよかったらいくらでも貸してあげるから」
「だから……」
ヨシュアが言った。
「……」
「……ふふっ」
エステルが笑い声を漏らした。
「えっ？」
ヨシュアが驚いた。
「あははは～っ。ヨシュア、カッコつけすぎ～！も～、そんなこと軽々しく言ったりしないのっ」
エステルが思いっきり笑った。
「えっ、ええっ……」
ヨシュアは後ずさりした。
「他の女の子だったら完全に誤解してるとこだって。ヨシュアって、将来絶対、色恋沙汰で苦労するタイプよね。は～。お姉さん、心配になってきちゃった」
エステルは溜息をついた。
「わ、悪かったね、軽々しくて！なんだよもう……人がせっかく心配してるのに」
ヨシュアががっくりした。
「えへへ……ありがと、励ましてくれて。なんだか元気、出てきちゃった」

エステルが喜んだ。
「フン、そう言ってくれると、カッコつけた甲斐がありますよ。まったくもう……ブツブツ」
ヨシュアはかなり不満そうだ。
「いじけない、いじけない。これでも感謝してるんだから。さてと……そろそろ下に降りよっか？。シェラ姉が待ってると思うし」
エステルが言った。
「そうだね、戻ろうか」
そう言うと、ヨシュアは先に降りていった。

「……」
「（ねえお母さん。あたし、やっと気付いたよ……）」
「（あたしが遊撃士を目指したのは、お母さんみたいに、誰かを守れるくらいに強くなりたいからだって……）」
「（だから待っててね）」
「（絶対に……父さんを連れて帰るから！）」
エステルは心の中で強く誓った。

―時計台前
シェラザードは先に待っていた。
「むふふ、お2人さん。良いムードだったわねぇ。おねーさん、思わず赤面しちゃったわ」
シェラザードがからかった。
「えっ……。ま、まさか覗いて……！？」
ヨシュアが青ざめた。
「なにを人聞きの悪い。時間を見ようと上を見たら目に入ってきただけよ。あー、オーバルカメラでも持っていれば良かったわぁ」
シェラザードが後悔混じりに言った。

「ううっ……」
ヨシュアは目を伏せた。
「も～、何言ってんのよ。単なるスキンシップじゃない。酔っ払ったシェラ姉の抱きつきグセと同じだってば」
エステルが気にしていないとばかりに言った。
「……ふう……」
ヨシュアが大きな溜息をついた。
「ん、どうかしたの？」
エステルが不思議そうに言った。
「はあ、あんたって子は本当からかい甲斐がないわね。まあいいわ。レナさんに挨拶してきたの？」
シェラザードがエステルに言った。
「……うん。ちゃんとお願いもしてきたよ。父さんを、守ってあげてって」
エステルが言った。
「そう、だったら大丈夫。レナさんの加護は空の女神（エイドス）にも匹敵するからね。カシウス先生の無事は保証されたようなもんだわ」
シェラザードが言った。
「あはは、それは幾ら何でも持ち上げすぎだと思うけど……」
エステルが苦笑した。
「そういえば、シェラさんはエステルのお母さんと会ったことがあるんですよね？」
ヨシュアがシェラザードに尋ねた。
「ええ……子供の頃にお世話になったの。あたしがまだ一座にいた頃ね」
シェラザードが言った。
「一座？」
ヨシュアが首を傾げた。
「巡業サーカスの一座よ。シェラ姉、踊り子やってたんだ。もうずいぶん前、ロレントに巡業に来た時に知り合いになったの」

エステルが説明した。
「正確には12年前ね。あたしが11でエステルが4つ。その時の縁で、遊撃士になる時にカシウス先生に弟子入りしたわけよ」
シェラザードが言った。
「そうだったんですか……」
ヨシュアが聞き入った。
「ま、そのあたりのことは、いずれゆっくり話すとして……。そろそろボースに出発するとしますか。定期船が運休している以上、ボースに行くには街道を通るしかないわ。まずは、ボース地方との境にあるヴェルテ橋の関所に行くわよ」
シェラザードが言った。
「西のミルヒ街道の終点ですね」
ヨシュアが言った。
「それじゃあ、レッツ・ゴー！」
そうして、エステル、ヨシュア、シェラザードによるカシウス・ブライト探しの旅が始まった。

第2章　消えた飛行客船（2）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちはボースに到着する。果たして事件はどうなっているのか！？

第2章　消えた飛行客船（3）

―ヴェルテ橋

「やあ、ご苦労さん。ボースまで行くつもりかい？」

兵士のスコットが言った。

「その通りだけど……どうして分かるの？」

エステルが言った。

「君たちみたいな連中が、今日は何人も通っているからさ。普段の通行量の数倍はあるね」

スコットが言った。

「ボース上空の飛行制限が行われているのが原因ですか？」

ヨシュアがスコットに聞いた。

「その通りだよ。忙しいったらありゃしない」

スコットがぶつぶつ言った。

「ま、飛行制限をしているのは、あんたたち王国軍なんだから。文句を言える立場じゃないわね」

シェラザードが意地悪そうに言った。

「うっ、その通りなんだけどさ……」

スコットがたじろいだ。

「そうだ、この関所でも一応通行規制が行われているんだ。通りたいんだったら、隣の受付で隊長から通行許可証を貰ってくれ」

スコットが言った。

「ん、オッケー」

そう言って、エステルたちは通行許可証をもらいに、兵舎へと向かった。

―ヴェルテ橋　兵舎

「エステル君……それにヨシュア君じゃないか」
アストン隊長が驚いた。
「アストンさん、こんにちは」
エステルがアストンに挨拶した。
「そちらの人は……確かシェラザード君だったか？」
アストンがシェラザードの方を向いて言った。
「ごきげんよう、隊長さん。ボース地方に渡りたくて通行許可証を貰いたいんだけど」
シェラザードが言った。
「ひょっとして……例の事件に関係しているのかね？」
アストンが言った。
「うん……」
エステルは目を伏せて頷いた。

エステルたちは行方不明になった定期船にカシウスが乗っていた事を説明した。

「なんと、カシウスさんが……」
「それは一大事だ。すぐに通行許可証を発行しよう」
アストンはそう言って大急ぎで通行許可証を発行した。
「ありがと、アストンさん。でも、いいの？こんな簡単に発行しちゃって」
エステルがアストンに言った。
「なに、君たちは顔見知りだ。それに、王国軍としても遊撃士協会に協力は惜しまない。ああ、ただ……」
アストンは急に喋りにくそうにした。
「え？」
エステルはアストンを見た。
「……北にあるハーケン門に用事がある時は注意したまえ。君たちが遊撃士であることは伏せていた方がいいかもしれん」

アストンが言った。
「どういうことですか？」
ヨシュアがアストンに言った。
「すまない、これ以上は私の口からは言えないのだ。だが、事件を調べるつもりなら、くれぐれも慎重に行動したまえ。私もカシウスさんの無事を空の女神（エイドス）に祈っているよ」
アストンは3人に言った。

通行許可証を貰ったエステルたちはスコットにそれを見せた。
「はい、貰ってきたよ」
スコットが通行許可証を受け取った。
「お、ずいぶん早く済んだな。それじゃあ開けるとしようか」
スコットはリモコンを操作した。
「さあ、通ってもいいぞ。一度通ったら、向こう側で通行許可証を貰わないかぎり、こちらには戻ってこれないからね。そこんところ、注意してくれよ」
スコットが説明した。
「りょーかい」

そうして、エステルたちはヴェルテ橋の関所を通過して、ボース地方へ入った。

―東ボース街道　途中
「あれ……」
エステルは前から運搬車が来るのを見つけた。
「よう！シェラザードじゃないか」
グラッツがシェラザードに言った。
「グラッツ、久しぶりね。何してるの、こんなところで？」

シェラザードがグラッツに尋ねた。
「見ての通り、護衛の仕事さ。例の事件のおかげで定期船が運休してるのは知ってるだろう？それで積荷を、こうして陸路で王都まで運んでいるってわけさ」
グラッツが説明した。
「なるほど、ご苦労さまね」
シェラザードが言った。
「そういうお前さんは若いの連れてどうしたんだい？まさか……例の事件を調べるつもりかよ？」
グラッツが言った。
「そのつもりだけど。……何かあるの？」
シェラザードは不思議そうにグラッツに聞いた。
「まあな……」
「詳しくは、ボース支部にいるルグラン爺さんから聞いてくれや。それじゃあ、またな」
グラッツはそう言って行ってしまった。
「アストンさんといい……なんか引っかかる言い方よね」
「事情がありそうだね。それも遊撃士協会がらみで」
エステル、ヨシュアが言った。
「ま、彼の言うとおりボース支部で聞けば分かるわ。さあ、先を急ぐわよ」
シェラザードが言った。

そうして、３人は再びボースを目指した。

―商業都市ボース　北街区
「やっと到着したわね。ここがボース地方の中心地、商業都市ボースよ」

シェラザードが言った。
「うわ～……いかにも都会って感じね」
エステルが感心している。
「リベール五大都市の中では、王都に次いで大きな街らしいね。確かにロレントと較べると、建物が石造りで大きい感じだな」
ヨシュアが言った。
「ね、あそこにでーんとあるめちゃめちゃ大きな建物、何かな？」
エステルが指差した。
「あれはボースマーケット。色々な店が集まった屋内市場ね。食料品、衣類、雑貨、家具、書籍……。武器やオーブメントを除いた、大抵の買物はあそこでできるわよ」
シェラザードが説明した。
「さすが商業都市って言われるだけはあるわね～。あーあ……買物目的で遊びに来たかったな」
エステルが残念そうに言った。
「それはまたの機会にね。まずはギルドの支部に寄って、事件がどうなったか確かめよう」
ヨシュアが言った。
「うん……」
エステルが頷いた。
「ちなみに、遊撃士協会のボース支部はこのすぐ近くよ」
シェラザードが言った。

―遊撃士協会　ボース支部
受付には年輩の老人がいた。
「おお、シェラザード。思ったよりも早く着いたな。わざわざロレントから歩いてご苦労さまだったのう」
その老人がルグラン爺さんだった。

「ルグラン爺さん、久しぶりね。もしかして、あたしたちが来るっていう連絡があったの？」
シェラザードがルグラン老人に言った。
「うむ、先程アイナからな。それでは、そこの嬢ちゃんたちがカシウスの子供たちというわけか」
ルグラン老人がエステル、ヨシュアを見て言った。
「ええ、お察しの通りよ」
シェラザードが頷いた。
「えっと、初めまして。エステル・ブライトです」
「ヨシュア・ブライトです。よろしくお願いします」
2人がルグラン老人に挨拶した。
「わしはボース支部を預かる、ルグランというジジイじゃ。お前さんたちの親父さんとは色々懇意にさせてもらっている。ルグラン爺さんと呼んでくれ」
ルグラン老人が言った。
「うん、ルグラン爺さん。それで……例の事件がどうなってるのか、さっそく教えてくれないかな？」
エステルが言った。
「ウム、それなんじゃが……」
ルグラン老人が口ごもった。
「王国軍による捜索活動はいまだに続けられておるらしい。じゃが、軍の情報規制によって状況が全く伝わって来ないのじゃ。一般市民だけでなくギルドにも何の音沙汰なしでなぁ」
ルグラン老人が重く言った。
「ええ～っ！？なんでよ、軍とギルドって協力関係にあるんじゃないの？」
エステルが驚いた。
「ま、それはあくまで建前ってヤツよ。実際には、様々な局面で両者が対立することは多いのよね」
シェラザードが言った。

「つまり、縄張り争いですね」
ヨシュアが言った。
「残念ながらその通りじゃ。しかも、今回の事件に関しては、モルガン将軍が絡んでいるらしい」
ルグラン老人が言った。
「げ、モルガン将軍……それは面倒な話になってきたわね」
シェラザードは驚いて言った。
「なに、そのモルガン将軍って？」
エステルが言った。
「１０年前、帝国軍の侵略を撃退した功労者として有名な人さ。歴史の教科書にも出てたはずだよ？」
ヨシュアがエステルに説明した。
「うーん、見事なくらい記憶にないわねー。で、その有名人がどう問題なの？」
エステルが言った。
「聞いた話だと、その将軍……大のブレイサー嫌いらしいのよ。遊撃士協会なんか必要ないって日頃から主張してるらしいわ」
シェラザードが溜息をつきながら言った。
「む、無茶苦茶なオッサンね～。じゃあ何、その将軍のせいで情報が入ってこないってわけ？」
エステルが不満そうに言った。
「……それどころではない。軍が調査している地域にはブレイサーを立入禁止にしよる。おかげで、他の仕事にも支障を来しておるのじゃよ」
ルグラン老人が言った。
「そ、そんなぁ……せっかくロレントから来たのに。こうなったら、その将軍と勝負して、どっちが事件を調べるか決めるしかっ！」
エステルがいきり立った。
「なに無茶苦茶言ってるかな……」
ヨシュアが呆れた。

「まあ、そう焦るでない。実は、今回の事件に関してボースの市長から依頼が来ておる。軍とは別に、ギルド方面でも事件を調査して欲しいとの話じゃ」
ルグラン老人が言った。
「あら、それは心強いわね。ボース市長の正式な依頼があれば、こちらが動く大義名分になるわ」
シェラザードが言った。
「なるほど、渡りに船ってやつね。ルグラン爺さん。あたしたち、その依頼を受けるわ」
エステルがルグラン老人に言った。
「うむ、いいじゃろう。と、その前に……お前さんたちは準遊撃士じゃろ」
ルグラン老人はエステル、ヨシュアに言った。
「ん、そうだけど？」
エステルは不思議そうな顔をした。
「準遊撃士とは、言うなれば、各支部に所属している見習いじゃ。つまり、それぞれの支部に監督されている身分なわけじゃ。そして、現在のお前さんたちは、ロレント支部の所属になっておる」
ルグラン老人が説明した。
「と、いうことは……」
「こちらの仕事を引き受けるには所属を変える必要があるんですね？」
エステル、ヨシュアが言った。
「その通りじゃ。ほれ、この転属手続きの書類にサインするがええ」
ルグラン老人は転属手続きの紙をエステルとヨシュアに渡した。
「う、うん……」
「ここに名前を記入と……」
エステルとヨシュアは転属手続の書類にサインした。
「うむ、よかろう」
「遊撃士エステル、ならびにヨシュア」

「本日をもって両名のボース支部所属を承認する」
「……これで、お前さんたちはボース支部所属となったわけじゃ」
ルグラン老人が言った。
「ちなみに、正遊撃士になったら所属に関係なく仕事ができるわよ。ま、義務と責任が増えるんだけどね」
シェラザードが言った。
「なるほど……」
「まだまだ半人前ってことかぁ……」
エステルたちが言った。
「まあ、これで市長の依頼をお前さんたちに任せられるわい。市長の屋敷は西口の近くにある。行って話を聞いてくるとよかろう」
ルグラン老人が言った。
「うん！」
「了解しました」
そうして、エステルたちはボース市長邸に向かった。

第2章　消えた飛行客船（3）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

事件の状況の把握のために動き出したエステルたち。一体、事件はどうなっているのか！？

第2章　消えた飛行客船（4）

―ボース市長邸
「うわ～、豪華なお屋敷……。みてみて、あのシャンデリア！」
エステルが興奮している。子供だな。
「はしゃがないの、エステル」
ヨシュアが窘めた。
「どうやら、ここがボース市長のお屋敷みたいね。当の市長さんはいるのかしら？」
シェラザードが周りを見渡した。
その時、屋敷から執事らしき人物が現れた。
「おや、お客様ですかな？」
「いらっしゃいませ。ボース市長邸へようこそ。どちら様でいらっしゃいますか？」
執事メントスが尋ねた。
「遊撃士協会の者よ。こちらの市長さんに依頼されて詳しい話を伺いに来たんだけど」
シェラザードが言った。
「おお、話は伺っております。しかし申しわけありません。市長は留守にしておりまして……。教会に礼拝に行っているのです」
執事メントスが謝った。
「いつごろお戻りになりますか？」
ヨシュアが尋ねた。
「左様でございますね……。実はもう、お戻りになってもおかしくない頃合なのですが」
執事メントスが言った。
「あ、それじゃあさ。あたしたちが教会に行って市長さんを呼んでくるのはどう？」
エステルが言った。

「し、しかし……お客様の手を煩わせるわけには」
執事メントスは焦った。
「気にしないで。お互い手間が省けるんだし。ところで……市長さんってどういう外見？やっぱり金持ちそうなヒト？」
エステルが尋ねた。
「外見ですか……うむむ」
「ご立派と申しますか、美しく成長されたと申しますか。これで良いご縁があれば、わたくしも安心して隠居が……」
執事メントスが想いを馳せた。
「は？」
エステルは何を言っているのか分からない様子だ。
「はっ……失礼しました」
執事メントスが我に返った。
「ああ、それよりも市長にはメイドが1人同行しております。それを目印にされた方が宜しいかと」
執事メントスが言った。
「メイドさんを連れた人……それは判りやすそうですね」
ヨシュアが言った。
「早速、教会に行きましょ」
3人は教会に向かった。

―七耀教会　ボース礼拝堂
そこにはメイド服を着た女性がいた。
「メイドさん、みーっけた！」
エステルが言った。いきなりそれはアカンやろ。
「貴方がたは……？」
メイドが言った。
「エステル、いきなり失礼だよ」

「すみません、遊撃士協会の者です。依頼内容の確認のために、市長さんを探しているんですが」
ヨシュアが溜息をついて、改めて言った。
「ああ、なるほど……。申し遅れました。私、メイドのリラと申します。市長の身の回りの世話を仰せつかっております」
リラが自己紹介をした。
「身の回りの世話……なんか住む世界が違うわね～。それで、当の市長さんは？お祈りに来てるんじゃないの？」
エステルが感心して言った。
「……サボリです」
リラが小さく言った。
「へ？」
エステルが聞き返した。
「おそらく、マーケットの視察をなさっている最中だと思います。私に、ご自分のぶんまでお祈りするように申しつけてから、先ほど出て行かれたばかりですので」
リラが説明した。
「何ていうか……けっこうユニークな人ですね」
ヨシュアが苦笑した。確かに、そのような人は相当珍しいと思う。
「ふふ、面白そうな人じゃない。市長が務まるかどうかは別にして」
シェラザードが言った。
「有能な方には違いありません。少々、破天荒な所はございますが」
「……そろそろ私、市長を迎えに行こうと思います。大変申しわけないのですが、市長邸の方でお待ちいただけませんか？すぐに市長をお連れいたしますので」
リラが言った。
「うーん、ここまで来て手ブラなのもつまらないし……。よかったら付いて行ってもいい？」
エステルがリラに言った。
「市長を迎えにですか？私の方は構いませんが……。ではさっそく、

町の中央にあるボースマーケットに参りましょう」
リラがそう言うと、４人はボースマーケットに向かった。

―ボースマーケット
「はー、ずいぶん広いよね。市長さんはどこにいるのかな？」
エステルが辺りを見回した。
「何しろ目立つ方ですから、すぐに見つかると思います……」
「……ああ、やっぱり思ったとおり」
リラが言った。
リラの視線の先には若い女性が何か言っていた。
「貴方たち、恥を知りなさい。この大変な時に食料を買い占めて、値をつり上げようとするとは……。ボース商人の風上にも置けなくてよ」
若い女性が２人の商人に叱っている。
「し、しかしお嬢さん……」
「僕たちはボースマーケットの売り上げアップを考えてですね……」
２人が言い返した。
「お黙りなさい！他の品ならいざ知らず、必需品で暴利を貪ったとあっては、わがマーケットの悪評にも繋がります。即刻、元の値段に戻しなさい！」
若い女性が有無を言わせず言い放った。
「は、はい……」
「わかりました……」
２人が頷いた。
「……わたくし、貴方たちのボースマーケットにかける情熱を疑っているわけではありませんわ。ただ、判って欲しいのです。商売というものが、突き詰めれば、人と人の信頼関係で成立している事を。大丈夫、貴方たちだったら立派なボース商人になれますから」

若い女性が2人を諭した。
「お、お嬢さん……」
「はい、頑張ります！」
2人は感動しながら去って行った。
「ふう……」
若い女性が一息ついた。
「お嬢様……」
リラ達が若い女性に近づいた。
「リラ……来ていたの。恥ずかしい所を見せてしまったわね」
若い女性が照れた。
「いえ……相変わらず見事なお手並みです。それよりお嬢様。こちらの方々が用がおありだそうです。すぐにお屋敷にお戻りくださいませ」
リラが言った。
「あら、その紋章は……。ひょっとして依頼したブレイサーの方々かしら？」
若い女性が言った。
「うん、そうだけど……」
「ひょっとして貴女が……」
エステルたちが勘付いた様だ。
「ふふ、申し遅れました。わたくしの名は、メイベル。このマーケットのオーナーにしてボース地方の市長を務めています」
若い女性がメイベルと名乗った。

―レストラン　アンテローゼ
「た、高そうなお店……こんなところで打ち合わせするの？」
エステルが肩身狭そうにしている。
「よく商談に使いますの。味の方も、なかなかのものですわ」

メイベル市長が言った。
「しかし、ボースの市長が女性なのは聞いていたけど……。ここまで若いとは思わなかったわね」
シェラザードが感心した。
「見たところ、あたしと4、5歳くらいしか違わなさそう」
エステルが言った。
「実際、まだ若輩者に過ぎません。亡くなった父が前市長で、ボースマーケットの事業権と共に政治基盤を引き継いだだけですわ」
メイベル市長が言った。
「何というか……ずいぶん率直な自己評価ですね」
ヨシュアが言った。
「所詮は商人の娘ですし、気取っても仕方ありませんから。それでは改めて、依頼内容を確認してもよろしいでしょうか？」
メイベル市長が言った。
「うん、オッケーよ」
エステルが身構えた。
「お願いしたいのは言うまでもなく、定期船消失事件の調査と解決です。わたくし、今回のような事件では軍よりもブレイサーの皆さんの方が結果を出してくれると思うのです」
「戦争をするわけではなく、謎を解き、解決するわけですから」
メイベル市長が言った。
「あら、光栄ね。買いかぶってくれるじゃない？」
シェラザードがメイベル市長を見て言った。
「商人としての目利きですわ。実際問題、消えた定期船にはボースの有力商人が乗っています。それにこのまま、王国軍によるボース上空の飛行制限が続いたら、こちらの商売が成り立ちません。せっかく、女王生誕祭を前に景気もかなり好調でしたのに……」
メイベル市長が残念そうな顔をした。
「なるほど。経済的な要請という事ですね」
ヨシュアが指摘した。

「ええ、とても軍だけに任せておくわけにはいきません。どうか、お願いできないでしょうか？」
メイベル市長が言った。
「こちらにも理由があるし、引き受けたい所ではあるけど……。今回の事件に関しては軍が、あたしたちブレイサーを締め出そうとしてるみたいなのよね。そのあたり、市長さんの立場から何とか働きかけられないものかしら？」
シェラザードが溜息をついた。
「モルガン将軍ですわね……。あの方、昔からブレイサーがお嫌いでいらっしゃるから」
メイベル市長が言った。
「あれ、市長さん。その将軍のことを知ってるの？」
エステルが言った。
「亡くなった父の友人ですの。一応、顔見知りではありますわ。ですから……何とかできるかもしれません」
メイベル市長が言った。
「と言うと……」
ヨシュアが尋ねた。
「リラ」
メイベル市長がリラを呼んだ。
「はい、お嬢様」
リラは懐から万年筆と便せんを出してメイベル市長に渡した。
「……」
「……」
「……こんなものですわね」
「では、これをお持ちください」
メイベル市長は手紙を渡した。
「なに、この手紙？」
エステルが尋ねた。
「モルガン将軍への依頼状です。ボース地方の責任者として今回の

事件についての情報を請求する旨をしたためました。ある程度なら、軍が掴んだ情報を教えてくださると思いますわ」
メイベル市長が言った。
「なるほど……。でも、ブレイサー嫌いの将軍があたしたちに会ってくれるかな？」
エステルが言った。
「もちろん、皆さんの身分は伏せた方が無難だと思いますわ。ただ、市長からの使いだと名乗るだけでいいかと存じます」
メイベル市長が言った。
「う、ちょっとイヤかも。なんか騙しているみたいで……」
エステルが嫌そうな顔をした。
「騙してるわけじゃないよ。本当のことを言わないだけさ。一刻を争う状況なんだから、ここは割り切るべきだと思う」
ヨシュアが言った。
「うーん、確かにそうね。ところで、モルガン将軍ってどこに行けば会えるのかな？」
エステルがメイベル市長に尋ねた。
「ボースの北、帝国方面の国境に《ハーケン門》という砦があります。そこに将軍はいらっしゃいますわ」
メイベル市長が言った。

―ボース市　北街区

「……それでは皆さん。どうかよろしくお願いします」
メイベル市長がお願いした。
「うん、任せといて！何か判ったら知らせに行くから」
エステルが言った。
「朗報に期待していますわ。それでは、ごきげんよう」
「……失礼いたします」

メイベル市長とリラは行ってしまった。
「さて、さっそく行くとしますか。ハーケン門は、東ボース街道から北のアイゼンロードに抜けた先よ」
シェラザードが言った。
「つまり、東口から出て、北に向かえばいいんですね」
ヨシュアが言った。
「それじゃ、レッツ・ゴー！」
3人はハーケン門へと向かった。

第2章　消えた飛行客船（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ハーケン門へと向かったエステルたち。遊撃士嫌いのモルガン将軍から情報を得られるのか！？

第2章　消えた飛行客船（5）

―アイゼンロード

そこには、王国軍兵士が2人立っていた。

「ちょっと待て。この先、ハーケン門方面は現在、通行禁止となっている」

「関係者以外は通行禁止だぜ」

王国軍兵士たちがエステルたちの前を遮った。

「残念でした、関係者だもんね」

エステルは得意気にメイベル市長の手紙を見せた。

「これは、メイベル市長の……」

王国軍兵士がそれを見て驚いた。

「市長の依頼で、モルガン将軍に捜索状況をうかがいに来ました」

ヨシュアが言った。

「ちなみに正式な依頼書だから。通してくれなかったら、後々、面倒なことになるわよ？」

シェラザードがダメ押しで言った。

「う、うーむ……。仕方ない、通行を許可しよう」

「おい、いいのかよ？」

「メイベル市長といえば、ボース地方全体の責任者だぞ？さすがに無視はできないだろう」

「そりゃ確かに……」

「……おい、あんたたち。許可してやるが、くれぐれも問題は起こすなよ？」

「大変な時期だし、何といっても帝国との国境にある場所だからな」

王国軍兵士たちは仕方なしに言った。

「はいはい、分かりました」

「それじゃ、通らせてもらうわね」

そうして、エステルたちはアイゼンロードを通った。。

―ハーケン門
「こ、これがハーケン門……。メチャメチャ大きいわね～！」
エステルがハーケン門を見上げて言った。
「帝国への唯一の玄関口にして、その脅威から王国を守る防壁……。10年前の戦争で破壊されてから、さらに堅牢なものが築かれたのよ」
シェラザードが説明した。
「ってことは、この向こう側はもう、リベールじゃないんだ……」
エステルが言った。
「そうだね……。《黄金の軍馬》を紋章に掲げるエレボニア帝国の領土だよ」
ヨシュアが言った。
「エレボニア帝国……」
エステルが呟いた。
「……」
「さてと。早速、モルガン将軍と面会しようか。門の脇に兵舎がある……あそこにいるんじゃないかな？」
ヨシュアが言った。
「ん、オッケー！」
エステルが向かおうとした。
「その前に……。2人とも、胸に付けている遊撃士の紋章を外しておきなさい。モルガン将軍に見つかると面倒だからね」
シェラザードが言った。
「あ、忘れてた……」
エステルたちは準遊撃士の紋章を外した。
「な、なんだかしっくりしない気分かも……」
「確かに、少し違和感があるね」

エステルとヨシュアが言った。
「ふふ、それだけあんたたちが遊撃士として馴染んだ証拠でしょうね」

シェラザードがそう言ったあと、エステルたちは兵舎の脇にいる王国軍兵士に声をかけた。

「あんたたち……いったいどこから入ってきた？アイゼンロードの検問はまだ解除されてないはずだろう」
衛兵が不審者を見る目で言った。
「自分たちは、ボースのメイベル市長の使いで来ました」
「モルガン将軍への取り次ぎをお願いできないでしょうか？」
遊撃士の身分は明かさずに市長から依頼された事を話した。
「なるほど……。そういう事なら取り次げるけど、あいにく、将軍閣下は不在でね。捜索活動の陣頭指揮を取ってるのさ」
衛兵が言った。
「タイミングが悪かったわね……」
「いつごろ戻ってくるのかしら？」
シェラザードが衛兵に聞いた。
「うーん、今日中に戻るとは思うけど。向こうにある休憩所に酒場があるから、そこで待っててくれ。閣下が戻ってきたら教えてあげるよ」
衛兵が言った。
「酒場って、さっきの所ね。どうしてあんなものがあるの？」
エステルが衛兵に聞いた。
「なにせ帝国との国境だからな。入国・出国共に審査が厳しくて足止めを喰らう旅行者が多いんだ」
衛兵が答えた。

「なるほど、そういう事なら宿酒場のような施設は必要ですね」
ヨシュアが頷いた。
「それじゃ、お言葉に甘えて酒場で待たせてもらうとしますか」
3人は酒場へ向かった。

―ハーケン門　宿酒場
カウンター前に座っている金髪の青年がいた。
「フッ、驚いたな……。本場のリベール料理を食べるのは初めてだが、なかなかの美味だ」
金髪の青年が言った。
「ほう、嬉しいことを言ってくれるじゃねえか。街に行きゃ、美味いリベール料理を食わせてくれる店は色々とあるぜ。旅行中、楽しみにしてるこったな」
マスターのノーランが言った。
「もちろん、そのつもりだよ。場末の酒場の料理でこれだ。今から期待できるというものさ」
金髪の青年が言った。
「ヘッ、場末の酒場で悪かったな。ついでにワインでもどうだ？安物だけど、けっこうイケルぜ」
ノーランがワインを注いだ。
「フム、いただこうか……」
金髪の青年がグラスを受け取った。
「（この人、ひょっとして……）」
「（帝国から来た旅行者みたいだね）」
エステルとヨシュアが耳打ちした。
「やあ、ごきげんよう。リベールの人のようだが、帝国には旅行に行くのかな？」
金髪の青年が尋ねた。

「ううん、あたしたちはヤボ用でここに来ただけなの。帝国に行くわけじゃないわよ」
エステルが言った。
「そういうあなたはエレボニアの人みたいですね。王国には旅行に来たんですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「フッ、仕事半分、道楽半分さ」
「しかしヤボ用ときたか……君たちの正体が見えてきたよ」
金髪の青年が意味ありげに言った。
「え、正体？」
エステルが首を傾げた。
「ずばり、遊撃士だろう？」
金髪の青年が言い切った。
「ど、どうして……遊撃士の紋章は外してるのに！」
「もしかして、あんたも同業者？」
エステルたちが驚いた。
「確かに帝国にもギルドはあるが、生憎、ボクは遊撃士ではない。ただ、ギルドに何人か知人がいてね。彼らと似たような匂いがしたからひょっとしたらと思っただけさ」
金髪の青年が言った。
「大した観察力ですね……とても素人とは思えない。本当にただの旅行者ですか？」
ヨシュアが金髪の青年を睨んだ。
「フフ、そんな風に睨まないでくれたまえ。冷たく煌めく琥珀の瞳……まるで極上のブランデーのようだ。思わず抱き締めてキスしたくなってしまうよ」
金髪の青年が怪しい目でヨシュアを見た。
「なッ……！？」
ヨシュアが後ずさりした。
「ま、大胆」

シェラザードが絶句した。
「ちょ、ちょっとぉ！あんたそーいう趣味のヒト！？」
エステルが怒った。
「フッ……美しいモノに目がないだけさ」
「玲瓏（れいろう）たる美女。水もしたたる美少年」
「天上の調べ、心洗われる風景。匠の傑作、魂震わせる物語」
「そして極上の酒と料理……」
「そうしたもの全てがボクの興味の対象たりえるのさ」
金髪の青年が言葉を並べ立てた。
「単なる節操ナシじゃない！」
「呆れ果てた快楽主義者ね」
エステルたちは言葉を失った。
「ハア、いつの時代でも天才は理解されないものだね。ガラスのように繊細なボクのピュアハートはブロークンだよ。黒髪のキミ……どうかボクを慰めてくれたまえ」
金髪の青年はヨシュアに向かって言った。
「謹んでお断りします」
ヨシュアがきっぱりと言った。
「（妙に話が弾んでやがるな……）」
ノーランは静観している。
その時、外から衛兵の声が聞こえた。
「おーい、あんたたち」
衛兵が宿酒場に入ってきた。
「あら、さっきの兵士さん」
エステルたちが振り向いた。
「つい今しがた、将軍がお戻りになったぞ。あんた達のことを話したら、すぐに会ってくださるそうだ」
衛兵が言った。
「え、ホント！？」
エステルが言った。

「至急、兵舎まで来てくれ」
そう言って、衛兵が先に行ってしまった。
「思ったよりも早かったですね」
「ええ、ようやく情報が手に入るわね」
エステルたちが兵舎に向かおうとしたその時、
「フッ……それでは行ってみるとしようか」
金髪の青年まで付いてきた。
「って、なに自然に付いてこようとしてんのよっ？」
「また絶妙のタイミングで会話に割り込んできたわね……」
エステルたちがオリビエの方を見た。
「フッ、バレたか。何だか面白そうだから見物させてもらおうと思ってね」
「さ、ボクのことは気にしないで将軍とやらと話してくれたまえ」
金髪の青年はさも事も無げに言った。
「気にするに決まっとるわー！」
エステルが頭にきて叫んだ。
「ほら、さっさと戻りなさいってば！」
エステルは金髪の青年を追い払った。
「ケチ」
金髪の青年はしぶしぶ宿酒場に戻っていった。
「とんでもない人だな……本当に、何者なんだろう？」
ヨシュアが呆れて言った。
「タダ者じゃないのは確かね。何というか、色々な意味で」
シェラザードが言った。確かに……。
「あんな変人、放置した方が世のため人のためだっての！とっとと将軍に会いに行こっ！」
エステルたちは気を取り直して兵舎へ向かった。

第2章　消えた飛行客船（5）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよモルガン将軍と対面することになったエステルたち。情報を得ることができるのか！？

第2章　消えた飛行客船（6）（前書き）

モルガン将軍と初対面～。

第2章　消えた飛行客船（6）

―ハーケン門　兵舎前

「言い争っているのが聞こえたが、他の旅行者とケンカしたのかい？」

衛兵が尋ねた。

「そ、そんな大ごとじゃないわよ。それよりも……将軍さんにあわせてもらえる？」

エステルが言った。

「ああ、入ってくれ。閣下の執務室は、廊下の左奥だ。関係のない場所には、なるべく入らないでくれよ」

衛兵はそう言ってエステルたちを兵舎の中に通した。

―ハーケン門　兵舎内

「廊下の左奥……どうやらここが将軍の部屋みたいだね」

ヨシュアが言った。

「一応ノックしてと……」

エステルがノックした。

「……メイベル嬢の使いか？」

男性の声が聞こえてきた。

「あ、はい、そうです」

エステルが答えた。

「うむ、入ってくるがいい」

男性が言った。

「では、失礼します」

3人は中に入った。

「よく来たな。わしの名はモルガンという。アリシア女王陛下から

ハーケン門を任されておる者だ」
威厳がある風格に兵士たちとは異なる王国軍の服に身を包んだ老男性。この男性こそがモルガン将軍だった。
「初めまして。メイベル市長の代理の者です」
「ご多忙な所を失礼します」
エステルたちが挨拶した。
「なに、メイベル嬢のことは彼女が幼いころから知っておる。まして市長としての話ならば尚更、聞かぬわけにはいかんだろう」
モルガン将軍が言った。
「えっと、それじゃあ、まずはこれを読んでください」
エステルはメイベル市長の手紙を渡した。
「……」
「ふむ……やはり例の事件についてか。本来ならば部外秘なのだが、あの子の頼みとあっては仕方ない。判っていることは全て教えよう」
モルガン将軍が言った。
「やった、ラッキー☆」
エステルが喜んだ。
「……？どうしてお主が喜ぶのだ？」
モルガン将軍がエステルを見て言った。
「（まずっ……）」
エステルが焦った。
「市長も今回の事件については、ずいぶん心配されているようです。それで、僕たちもできるだけ力になりたくて……」
ヨシュアがうまくカバーした。
「そうか、メイベル嬢も良き協力者に恵まれて何よりだ。早速、捜索状況について説明しよう」
モルガン将軍が言った。
「謹んで拝聴させていただくわ」
エステルたちは身構えた。
「……定期船の《リンデ号》はボース国際空港を離陸してからロレ

ントに向かう途中で失踪した。現在、各方面の部隊が捜索中だが、いまだに発見されてはおらん」
モルガン将軍が言った。
「ということは、魔獣の被害や事故の可能性は少なそうですね。わりと大きな船ですから、墜落したら初期の捜索活動で発見されているはずですし……」
ヨシュアが言った。
「その通りだ。実際、ボース―ロレント間の空路は比較的見晴らしのいい平原の上にある。ヴァレリア湖はもちろん、海に落ちた可能性も少ないはずだ」
モルガン将軍が言った。
「は～っ、よかったぁ。最悪の事態になってなくて……」
エステルが安堵した。
「そうなると、人為的な理由で飛行船が奪われた可能性が高そうね。考えられる目的は、積荷の強奪と乗員乗客を人質にした身代金要求……」
シェラザードが言った。
「いわゆる、ハイジャックですね。あと、地理的条件を考えると帝国軍による秘密工作の可能性もあるかもしれません」
ヨシュアが言った。
「は、話が大きくなってきたわね」
エステルが言った。
「……」
モルガン将軍は黙っている。
「どうしたの、将軍さん？」
エステルが向き直って言った。
「いや、民間人にしてはなかなか見所があると思ってな。我々も、帝国軍が関与している可能性もあると判断したため、徹底した情報規制を行っていた。国際問題、いや下手をすれば戦争まで発展しかねんからな」

モルガン将軍が言った。
「戦争……」
エステルが俯いた。
「だが、不幸中の幸いと言うべきか。今朝になってその可能性は消えた。ある組織が、王家と飛行船会社に犯行声明を送りつけた上で乗客の身代金を要求してきたのだ。その組織の名は《カプア一家》」
モルガン将軍が言った。
「《カプア一家》？そ、それってまさか……」
エステルが気付いたそうだ。
「……間違いなさそうだね」
ヨシュアも同様だ。
「首領の3兄妹に率いられたボース地方で暗躍する空賊団だ。どうやら、名前くらいは聞いたことがあるようだな？」
モルガン将軍が言った。
「聞いたことがあるどころかロレントでやり合ったばかりよ。あいつら～、まさかここまで大きな事件を起こすなんて……」
エステルが口を滑らせた。
「エステル……！」
ヨシュア、シェラザードが制したが、手遅れだった。
「あ」
エステルがしまったという顔だ。
「ロレントでやり合った？奴らの一味が、ロレント地方に出没したという話は聞いたが……」
「……」
モルガン将軍はエステルたちの正体に気付いたようだ。
「あっちゃあ……」
「はぁ、おバカ……」
エステルたちは落胆した。
「……なるほどな。素人とは思えぬ口を利くからおかしいとは思っていたが……。まさか、こんな女子供が遊撃士だとは思わなかった

ぞ」
モルガン将軍が言った。
「な、なによ、女子供って！」
エステルが怒った。
「一応、メイベル市長から依頼されたのは本当ですけど……」
ヨシュアが言った。
「黙れ、姑息なマネをしおって！者ども、出会えいッッ！」
モルガン将軍が怒鳴った。その声に、エステルたちは飛び上がった。
「す、すごい大声……」
「これは筋金入りみたいね」
エステルたちがある意味感心している。
「閣下、どうしました！？」
「この連中が何か！？」
王国軍兵士が入ってきた。
「遊撃士諸君がお帰りだ！即刻、外につまみ出せ！！」
モルガン将軍が兵士に命じた。

エステルたちはつまみ出された。
「ちょ、ちょっと何よ！犬を追っ払うみたいにしてっ！」
エステルが怒っている。
「フン、同じようなものだ。わざわざ身分を隠して、情報を盗み出そうとするとは……。そういう姑息な真似をするから遊撃士など信用できんのだ！」
モルガン将軍が言った。
「ぬ、盗むってなによ！？そもそも、そっちがギルドに情報をくれないのが悪いくせに！」
エステルも相当頭にきているようだ。
「たわけ、これだけの事件をたかが民間団体に任せられるか！まっ

たく……メイベル嬢にも困ったものだ。このような女子供を雇って捜索活動の邪魔をさせるとは……」
モルガン将軍は呆れている。
「……いい加減にしなさいよ。どうしてあたしたちがわざわざロレントくんだりから出張ってきたと思っているわけ？あんたたち軍人が、肝心な時に役に立たないからでしょうがっ！」
シェラザードが完全に切れた！
「な、なにぃいいい！？」
モルガン将軍が真っ赤になった。
「（うわ……）」
「（シェラさん、マジギレだね……）」
エステル、ヨシュアは見守っている。
「ここ数ヶ月、ボース地方で空賊の仕業と思しき強盗事件が相次いでいたのはご存じよね？それを、ロクに捜査もしないでギルド任せにしていたのはどちら？今回みたいな事件が起こったとたん、偉そうな態度で仕切ったりして……。しかも未だに、人質はおろか船の行方すら掴んでいない始末。恥ずかしいと思わないのかしら？」
シェラザードが挑発した。
「黙るがいい、小娘！組織の規律に支えられた軍隊は気軽に動かせるものではないのだ！後先考えず動いたあげく、連中の一味を取り逃がしたくせに小生意気な口を叩くでない！」
モルガン将軍も切れた。
「言ってくれるじゃない……」
シェラザードが怒鳴ろうとした。

その時、後ろから青年の声が聞こえた。
「フッ、悲しいことだね」
金髪の青年がリュートを携えていた。
「争いは何も生み出さない……ただ不毛な荒野を広げるのみさ。そんな君たちに、歌を贈ろう。心の荒野を潤して、美しい花を咲かせ

られるような、そんな優しくも切ない歌を……」
そう言って、金髪の青年はリュートを奏で始めた。

「流れ行く　星の軌跡は……」
「道しるべ　君へ続く……」
「焦がれれば　思い寂しさと」
「苦しさを　月が笑う……」
「叶うことなどない　はかない望みなら」
「せめてひとつ　傷を残そう……」
「はじめての接吻（くちづけ）　さよならの接吻（くちづけ）……」
「君の涙を　琥珀にして……」
「永遠の愛　閉じ込めよう……」

全員呆れた。
「フッ……みんな判ってくれたようだね。何よりも大切なもの……それは愛と平和だということを。今風に言えば、ラブ&ピース」
金髪の青年は自己陶酔している。その瞬間、全員があきれ果てた。
「ゴ、ゴホン……。そろそろ各地の捜索部隊から報告が入ってくる頃合だな？」
モルガン将軍がわざとらしく咳払いをして、衛兵に聞いた。
「は、はい。仰るとおりであります！」
衛兵は我に返って言った。
「では、わしは任務に戻る。そやつらを二度と入れるでないぞ」
モルガン将軍が衛兵に言った。
「それから……アイゼンロードの検問は解除しろ。いつまでも、そこの連中に居着かれたら目障りでかなわん」
モルガン将軍がそう言い残し、兵舎へ戻っていった。
「りょ、了解しました！」
衛兵が言った。
「（あ、逃げた……）」

「（気持ちは判るけどね……）」
エステルたちは溜息をついた。
「フッ、どこの国でも軍人が無粋なのは同じだな。やはり、キミたちの方がボクの審美眼に叶っているよ」
金髪の青年が言った。
「さ、さーてと。あたしたちも帰ろっか？」
「そ、そうだね」
「トラブルはあったけど、一応、情報は入手できたし……。一旦、ボースに戻ってから今後の対策を立てるとしますか」
そう言って、エステルたちはそそくさとボースに戻ろうとした。
「おや……。ちょっと、キミたち。どこに行こうというのかね？ま、待ちたまえ。いや、どうか待ってください！」
金髪の青年がエステルたちを追いかけた。

―ハーケン門　宿酒場
金髪の青年は何とかエステルたちを引き止めて、宿酒場に入った。
「―改めて自己紹介をしよう。オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして演奏家でね。知っての通り、エレボニア人でリベールには巡業旅行に来たのさ」
金髪の青年がオリビエと名乗った。
「あたしはエステル……」
「って、なんで自己紹介なんかしなくちゃいけないのよっ！？」
エステルがつっこんだ。
「まあ、やり方はともかく、あの場を仲裁してくれたんだし。あ、僕はヨシュアといいます」
ヨシュアが自己紹介した。
「あたしはシェラザードよ。さっきは、あたしも頭に来て熱くなりすぎてたから助かったわ。いちおう、礼をいっておくわね」

シェラザードが言った。
「フッ、礼には及ばないよ。美と平和を愛するものとして、当然のことをしただけさ……。しかし是非にと言うのであれば、ボクと一日デートに付き合って、」
オリビエが言った。
「そういうのはお断り。第一、そんなヒマは無いしね」
シェラザードが一蹴した。
「それは残念だ。では代わりに、ヨシュア君に付き合ってもらうとしようか」
オリビエがヨシュアの方を向いて言った。
「なんでそうなるんですか……。タチの悪い冗談はやめて下さい」
ヨシュアは呆れている。
「心外だな。冗談のつもりじゃないんだが」
オリビエが何でと言わんばかりの顔だ。
「余計にタチが悪いですね」
ヨシュアがひいた。真剣にそう言えるところがすごい……。
「ちょっと待ちなさいよ。なんで、あたしは誘わないの？」
エステルがむくれた。誘ってほしいのか、こんなヤツに？
「キミ？素材は申し分ないが、色気に欠けているのが問題だな。少しは、この2人を見習うといい」
オリビエが言った。
「むっかー！色気がなくて悪かったわね！しかも、男の子のヨシュアを見習えってどういうことよっ！？」
エステルが怒った。
「お、落ち着いて。エステルは充分可愛いと思うよ。まあ、確かに……色気は少ないかもしれないけど」
ヨシュアが言った。あまりフォローになっていない。
「あ、あんですってー！？」
エステルがヨシュアを睨んだ。
「やれやれ……。まあ、さっきも言った通り、あたしたちは忙しい

身なのよ。ロクにお礼も出来なくて悪いけど、そろそろ失礼させてもらうわ」
シェラザードが席を立った。
「ふむ、だったら……。ボクも、ボースという街まで同行させてもらえないだろうか？何しろリベールは初めてでね。道案内を頼みたいのだよ」
オリビエが言った。
「ま、そのくらいだったら別に構わないけど……」
シェラザードが言った。
「ちょっと、シェラ姉！」
エステルは嫌そうだ。確かに、普通は嫌がるわな。
「そのくらい良いじゃない。どうせ目的地は一緒なんだし。それに道案内というのも遊撃士の仕事のひとつよ」
シェラザードが言った。
「うー、しょうがないなぁ。でもでも、コイツの毒牙にヨシュアが狙われたりしたら……」
エステルが不安そうに言った。毒牙って……。
「あの、エステル？」
ヨシュアが言った。
「ヨシュア、心配しないで！間違いが起こらないよう、あたしが守ってあげるからね！」
エステルが言った。
「何の心配をしてるのさ……」
ヨシュアが呆れた。
「人をケダモノみたいに言わないでくれたまえ。どちらかというと愛の狩人と呼んで欲しいね。恋泥棒も悪くないが、フフ……」
オリビエがまたも自己陶酔した。
「のーみそ膿んでる？」
エステルたちが呆れた。
「さてと、それでは早速ボースに出発するとしようか。キミたち、

よろしく案内を頼むよ」
オリビエが言った。
「さりげなく仕切ってるし……」
「っていうか、あんた！少しは人の話を聞きなさいよっ！」
エステルが怒った後、４人はボースに向かった。

第2章　消えた飛行客船（6）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

メイベル市長たちに報告するためにエステルたちはボースへ帰る。

これで飛行船を見つけることはできるのか！？

第2章　消えた飛行客船（7）（前書き）

オリビエ、ボースで豪遊を始める！

第2章　消えた飛行客船（7）

―ボース市　北街区

「ほう、ここがボースか。思ったよりも都会じゃないか。あそこにある大きな建物がボースマーケットというわけだね？」

オリビエが辺りを見渡して言った。

「ふーん、詳しいわね。リベールは初めてなんじゃないの？」

エステルが言った。

「フッ、旅に出る前に観光ガイドブックを買ったのさ。《リベール通信社》とかいう、こちらの出版社が出しているヤツ」

オリビエが言った。

「ガ、ガイドブック～？そんなものまで売ってるの？」

エステルが驚いた。

「なんていうか……便利な時代になったもんだね」

ヨシュアが言った。

「それで早速、マーケットで買物するつもり？」

シェラザードがオリビエに尋ねた。

「ああ、一通り冷やかしてからディナーと洒落込もうと思ってね。ガイドによると、この街には三ツ星のレストランがあるそうだが？」

オリビエが見渡した。

「あー、あたしたちが市長と打ち合わせしたところね。てゆうか、この建物がそうだけど」

エステルが言った。

「《アンテローゼ》ですね。本格リベール料理を出すっていう」

ヨシュアが言った。

「うん、ここで間違いなさそうだ。フフフ……今から楽しみだよ」

オリビエは楽しそうだ。

「でも、まともに食事をしたら、かなりのミラを取られるはずよ？普通の酒場をお勧めするけどね」

シェラザードが言った。
「心配ご無用。路銀はそれなりに持ってきたさ。それに余裕が無くなったら、ボクの特技で稼げばいいからね」
オリビエが言い張った。
「特技って……あの歌と演奏のことですか？」
「あ、あれでミラを稼ぐつもり？」
エステルたちが怪訝そうな顔をした。
「フッ、帝都の大劇場ではオペラの主演を務めた事もある。あの時はたしか、一晩だけで百万ミラを稼いだものだった……」
オリビエが過去を振り返った。
「（ウソくさ～……）」
エステルは全く信じてない様子だ。
「では諸君、ご苦労だったね。運命が再びボクたちを巡り合わせるまでしばしの別れだ。アディオス・アミ～ゴ！」
そう言って、オリビエは楽しそうにどこかに行ってしまった。
「は～……とんでもないヤツだったわね。エレボニアの人間って、みんなあんな変人なのかなぁ？」
エステルは疲れたような呆れたような顔をした。
「あ、あれを一般的な帝国人と思われても困るけど……」
ヨシュアが言った。
「え？」
エステルが聞き返した。
「いや、もうちょっと真面目な人間が多いと思うよ。質実剛健を尊ぶ気風って何かの本で読んだことがあるし」
ヨシュアが言った。
「ふーん……。それじゃあ単に、芸術家だから変わり者っていうだけなのかな？」
エステルが言った。
「こらこら。世の芸術家が聞いたら怒るわよ。さてと……将軍から聞き出した情報をルグラン爺さんに報告しなくちゃね」

シェラザードが言った。
「あと、メイベル市長にも知らせた方が良さそうですね」
ヨシュアが付け足した。
「ギルドと市長邸か……。それじゃ、早速行きましょ」
エステルたちはギルドと市長邸へ向かった。

―遊撃士協会　ボース支部
「おお、お前さんたちか。何か事件のことは判ったかね？」
ルグラン老人が言った。
「えへへ……重大な情報を手に入れたよ！」
エステルたちは将軍から入手した情報をルグラン老人に詳しく説明した。
「空賊団の《カプア一家》……それは確かに重大な情報じゃな！これで遊撃士協会としても方針が決められるというものじゃ。しかし、モルガン将軍というのも噂以上に遊撃士嫌いらしいのう」
ルグラン老人が言った。
「うん、ビックリしちゃった。遊撃士って、ロレントじゃみんなに親しまれてる職業だから、あそこまで嫌われてるなんて……」
エステルが肩を落とした。
「まあ、モルガン将軍は例外じゃ。普段は王国軍とギルドも、それなりに協力関係を保っておる。ただ、今回ばかりはお前さんたちに余計な苦労をかけることになりそうじゃのう」
ルグラン老人が言った。
「ま、こちらが出来ることを地道にやっていくしかないわね。しかし、近ごろの強盗事件も例の空賊団の仕業だったみたいね？」
シェラザードがルグラン老人に尋ねた。
「うむ、ロレントの事件と合わせて考えると決定的じゃろう。しかし、強盗とはいってもセコイ事件が多かったんじゃが……。まさか、

これほど大胆不敵な犯罪を犯すとは思わなんだぞ」
ルグラン老人が言った。
「言われてみればそうかも。ロレントで起きた事件だって割としょーもない強盗だったし」
エステルが言った。しょーもない事件か？
「それが、定期船を乗っ取って王家を相手に身代金要求か……。たしかにリスクが高すぎますね」
ヨシュアが言った。
「ふむ、そのあたりを踏まえた上で捜査すべきかもしれないわね」
シェラザードが結論付けた。

―ボース市長邸
ボース市長邸の前にナイアルとドロシーがいた。
「なあ、お譲ちゃん。頼むからそこを通してくれよ。市長から一言、コメントをもらうだけでいいんだからさ」
ナイアルがリラに言った。
「そうそう、ついでに写真も撮っちゃいますけど～」
ドロシーが言った。
「そう仰られましても……市長は多忙を極めておりまして。アポイントメントのない方はお引き取り願っているところです。どうかご了承ください」
リラが言った。
「そこを何とか！これほどの大事件なのに判ってることがロクにねぇ……。読者に何か伝えてやりたいんだ！」
ナイアルは食い下がらない。
「ですが……」
リラは困った顔をした。
「そうそう、そうですよー。噂の美人市長が表紙を飾れば部数倍増

も間違いナシですし～」
ドロシーが言った。
「……」
リラは黙った。
「こ、こらドロシー！なに失礼なこと言ってやがる！」
ナイアルが慌てた。
「え、ナイアル先輩が言ったんじゃないですかぁ？ネタがないんだったら美人市長を客寄せのアイドルに仕立てて紙面を稼いじまえーって」
ドロシーが気にせず喋り続ける。軽い口ですね。
「わ、バカッ！」
ナイアルがドロシーを制した。
「……」
リラは相変わらず黙って聞いていた。
「あ、あの、メイドさん？」
ナイアルがリラの様子を見た。
「ずいぶん面白いお客様ですね……。お2人の話は、出来るだけ詳細にメイベル市長に伝えておきますので。今日のところはお帰りください」
リラが言った。
「ま、待ってくれ！これはちょっとした誤解なん、」
ナイアルが誤解だと言おうとしたが、
「お・帰・り・下・さ・い」
リラが有無を言わせず言った。
「はい……」
ナイアルはしゅんとした。
「あれ、美人市長の写真、撮らなくていいんですかぁ？」
ドロシーは状況を分かっていない。
「頼む……頼むから……これ以上喋らないでくれ……」

ナイアルはものすごく疲れた顔をして1人で去っていった。哀れなり、ナイアル・バーンズ……。
「セ、センパーイ！待ってくださいよ～！」
ドロシーが追いかけた。
「ふう……」
リラが溜息をついた。
「……あら？」
リラがエステルたちに気がついたようだ。
「こんにちは、リラさん」
エステルがリラに挨拶した。
「まあ、ブレイサーの皆さん。ハーケン門からお戻りになったのですか？」
リラが聞いた。
「うん、まーね。ところで今の人たちって……」
エステルがリラに聞こうとした。
「不届き者です」
リラが言った。
「へ……」
エステルが素っ頓狂な声を出した。
「お嬢様を利用しようとする不逞（ふてい）の輩だと申し上げたのです。私の目の黒いうちは指一本たりとも触れさせません」
リラがきっぱりと言った。
「あ、あはは……そう」
「し、仕事熱心なんですね……」
エステルたちは呆れた。
「それが私の務めですから。さ、皆さんはどうぞ中へ。市長がお待ちになっています」
リラが案内した。

―ボース市長邸　執務室
「市民からの苦情の処理……」
「ボース上空の飛行制限によるマーケット商品の納入遅れ……」
「下水道設備の修理について……」
「女王陛下への贈答品の選定……」
「アンセル新道での魔獣被害……」
「もう～、いつになったら書類の処理が終わるんですのー！」
メイベル市長が叫んだ。彼女の頭のキャパシティーを超えたようだ。
「あのー……」
エステルが割り込んだ。
「あ、あら……？オホホ、皆さん。戻っていらしたんですか？」
メイベル市長が気まずそうに言った。
「お忙しそうですけど……お邪魔してもよろしいですか？」
ヨシュアが言った。
「コホン、もちろんですわ。モルガン将軍からの情報ですね？早速、伺わせていただきます」

エステルたちはメイベル市長の所へ近づいて、モルガン将軍から得た情報を詳しく説明した。

「……ご苦労様です。大体の状況は飲み込めました。空賊団によるハイジャック。そして身代金の要求ですか……。思った以上に深刻な事態ですわね」
メイベル市長が話を聞いた後、言った。
「遊撃士だってバレなければ、他にも掴めたと思うんだけど……」
エステルが肩を落とした。
「いえ、墜落事故でないことが判明しただけでも助かりましたわ。

これでボース市としても対策が立てられるというものです。早速、市民へのアナウンスと乗客の家族への対応を考えないと……」
メイベル市長が満足げに言った。
「大変ですね……ただでさえお忙しそうなのに」
ヨシュアがメイベル市長の様子を見て言った。
「ふふ、それが市長の責務ですわ。ところで、犯人の正体は明らかになったわけですが……。引き続き、事件の調査と解決をお願いしてもよろしいでしょうか？」
メイベル市長が言った。
「もちろん、そのつもりよ。あたしたちも例の空賊団とは一度やり合った因縁があるからね。遊撃士協会のメンツに賭けて、王国軍だけに任せてはおけないわ」
シェラザードが言った。
「うん、そうだよね！父さんのこともあるし、今度こそ決着をつけなくちゃ！」
エステルが言った。
「……」
ヨシュアは黙っている。
「ん、どうしたの？難しいカオしちゃって……」
エステルがヨシュアの方を向いて言った。
「うん……色々と考えてみたんだけど。どう考えても信じられなくてさ」
ヨシュアが言った。
「信じられない？」
エステルが聞き返した。
「あの父さんが空賊に遅れを取ったことだよ。ロレントに現れた連中だけで実力を判断するのも何だけど……」
ヨシュアが腑に落ちない様子で言った。
「確かにそれは言えるわね。あの程度の集団だったら、先生なら軽くあしらえるはずよ」

シェラザードが頷いた。
「もー、ヨシュアもシェラ姉も父さんを買いかぶりすぎだって。確かに、けっこう腕は立つけど、集団相手じゃキツイと思うし……」
エステルは手をひらひらさせた。
「……」
「あの、ちょっと宜しいかしら？」
メイベル市長が言った。
「エステルさんたちのお父様も例の船に乗っていらっしゃったの？」
メイベル市長が尋ねた。
「あ、話してなかったっけ……。恥ずかしながらそうなの。しかも遊撃士っだったりして。カシウス・ブライトっていうんだけど……」
エステルが言った。
「カシウス・ブライト……今、そうおっしゃいまして！？」
メイベル市長が驚いていきなり席を立った。
「え……うん？？ひょっとして知り合いとか？」
エステルはたじろいだ。
「直接の面識はありませんが。ですが、お話は伺っていますわ。そう……そうだったのですか……。これはひょっとして軍との交渉に使えるかも……」
メイベル市長は独り言を言い出した。
「市長さん？」
エステルが不思議そうに言った。
「……失礼しました。皆さんの胸中、お察ししますわ。事件の解決に役立つのなら、どのような協力でも惜しみません。何かご入用になった時には遠慮なく申しつけてくださいませ」
メイベル市長が言った。

―ボース市　北街区

「うーん……市長さん、どうしたのかな？父さんの名前が出たとたん、やたらと驚いてたみたいだけど」
エステルが言った。
「そうだね……何となく想像はできるけど。市長さん、モルガン将軍と昔からの知り合いらしいからね」
ヨシュアは分かっているようだ。
「？？？」
対して、エステルは全く分からない様子だ。
「ま、それは置いておきましょう。それよりも問題なのは、これからどう動くかってことよ」
シェラザードが言った。
「うん……。ただ飛行船や空賊団の行方を闇雲に捜してもしょうがないよね。そんな事で見つかるくらいなら軍がとっくに発見してるはずだし」
エステルが考えて言った。
「……」
「……」
ヨシュアとシェラザードが驚いた様子をしている。
「ん、どうしたの2人とも？」
エステルがヨシュアとシェラザードを見て言った。
「エステル、成長したね……。これまでの君だったら『しらみ潰しに探せばいーのよ』とか言ってそうなところだけど……」
「まさかエステルの口からそんな言葉が聞けるだなんて……。おねーさん、感無量だわ……」
ヨシュアとシェラザードが感動している。
「どーいうイミよっ！まったく失礼しちゃうわね！」
エステルが怒った。
「はは、誉めてるんだってば」
ヨシュアが言った。
「確かに、ロレントとは違ってボース地方はかなりの広さよ。何か

手掛かりが欲しいところね」
シェラザードが言った。
「手掛かりかぁ……。そうだ、さっき市長邸の前でナイアルたちを見かけたよね？記事のネタには困ってたみたいだけど……何か知ってる可能性ないかな？」
エステルが言った。
「確かに、僕たちより一足先にボース入りしているはずだからね。聞いてみる価値はあると思うよ」
ヨシュアが言った。
「あの2人、どこ行ったのかなぁ？」
エステルたちは事件の手掛かりを探すため、ナイアルたちを探し始めた。

第2章　消えた飛行客船（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ第2章も中盤突入です。空賊団の手掛かりを探すため、エステルたちが行動を起こす！

第2章　消えた飛行客船（8）（前書き）

ナイアルの情報がエステルたちにきっかけを与えることになる！

第2章　消えた飛行客船（8）

―居酒屋　《キルシェ》

そこには酔っ払ったナイアルが机に臥せっていた。

「ういー……チクショウ……。ったく冗談じゃねーぞぅ……。……うーん……ヒック……」

完全に酩酊状態だ。

「見つけはしたけど、ベロンベロンに酔ってるわね～。取材拒否されたことがそんなにショックだったのかな？」

エステルが言った。

「男のクセにだらしないわね。酒は呑むものであって、呑まれるものじゃないのに」

シェラザードが言った。あんたが言っても全く説得力なし。

「底なしのシェラ姉と一緒にされてもねぇ……」

エステルが溜息をついた。

「失礼ね、底なしっていうのはアイナみたいな女を言うのよ。あの女、いくら飲んでも顔色変わらずに平然としてるしね。あたしみたいに気持ちよく酔っ払う酒飲みと一緒にしないでちょうだい」

シェラザードが言った。

「よくゆーわよ。いくら酔っても潰れずに、ひたすら周囲を巻き込むくせに」

エステルが言った。

「シェラさんがザルとしたら、アイナさんはタガって感じかな。どちらも底なしには違いないと思いますけど……」

ヨシュアが言った。

「むう……」

シェラザードが黙った。

「……うーん……」

「うー。ここは……？」

ナイアルが目を覚ました。
「目、醒めたみたいですね。飲み過ぎは体に良くないですよ?」
ヨシュアが言った。
「く……頭がズキズキしやがる……。……ってなんだぁ?新米遊撃士どもじゃねえか。おいおい、なんで俺がロレントなんかにいるんだ!?たしかボースまで歩いて……」
ナイアルはボケている。
「なに寝惚けてんのよ。あたしたちもボースに来たの」
エステルが言った。
「ふぃーっ……まったく驚かせやがるぜ……。おっと、こらまた色っぽい姉ちゃんと一緒だな」
ナイアルが言った。
「初めまして、記者さん。シェラザード・ハーヴェイよ。この子たちの先輩にあたるわ」
シェラザードが自己紹介した。
「シェラザード……。おい、もしかして『銀閃のシェラザード』か?」
ナイアルが尋ねた。
「あら、光栄ね。あたしの名前を知っているの?」
シェラザードが嬉しそうにした。
「ああ、噂くらいだがな。若手遊撃士の中じゃあ、1、2を争うらしいじゃねえか。となると、お前さんたちも例の事件を調べに来たわけだな?」
ナイアルが言った。
「まあ、ね。そっちは何か情報集まった?市長さんちの前で見かけたけど、なんだか困ってたみたいじゃない」
エステルたちが言った。
「くそ、あれを見られてたのか……。ああ、そうだよ!ネタが無くて困ってたところさ!」
ナイアルが逆ギレした。

「あ、やっぱり？」
エステルが言った。
「なにせ、軍による情報規制のせいで事故かどうかも判らない状況なんだ。直接、モルガン将軍に会いにハーケン門に行こうとしたら検問に引っかかるし……ならせめて、噂の美人市長にインタビューしようと思ったら、メイドから門前払いを喰らうし……。おまけに、あのトンチキ娘は事あるごとにヘマをしでかすし……。おお、女神（エイドス）よ！俺が何をしたっていうんですか！」
ナイアルが悲壮な顔をした。もはや、貧乏神つきだな。
「追い詰められているわね～。そんなに情報が知りたければ、教えてあげないでもないけど……」
エステルが言った。
「へ……？」
ナイアルが振り向いた。
「あたしたち、メイベル市長に協力する形で事件を調べてるの。市長さんの紹介があったから一応、モルガン将軍にも会ったわよ」
エステルが説明した。
「……マジで？」
ナイアルが驚いた。
「うん、マジで」
エステルが得意げな顔をした。
「おおおおお！これぞ女神の助けだぜっ！どうか頼む！その話、俺にも教えてくれっ！」
ナイアルが目を輝かせ、深々と頭を下げた。
「それは構いませんけど……。ナイアルさん、こういう時のルールを忘れていませんか？」
ヨシュアが言った。
「……え？」
ナイアルがぽかんとした。
「フフ……情報はタダじゃないってこと。代価が必要だって言って

るわけ」
シェラザードが言った。
「ミ、ミラを取るつもりかよ？自慢じゃねえが、取材費なんざとっくに使いきっちまったんだ！」
ナイアルが青ざめた。
「情報屋じゃないんですからミラを取ったりしませんよ。ナイアルさんは事件直後にボース入りしていましたよね？色々と、面白そうな話を耳にしているんじゃないですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「チッ、大人しそうな顔をして、なかなか喰えない小僧だぜ。言っておくが、こっちのネタはそれほど大したもんじゃねえぞ？」
ナイアルが言った。
「事件に関係あることだったら、どんな些細な情報でも構いません。ただし……出し惜しみは止めてくださいね？」
ヨシュアが冷ややかに言った。
「わかった、わかりましたよ！こちらが出せるネタは2つある。そいつで手を打ってくれ！」
ナイアルは必死だ。
「決まりですね」
ヨシュアが言った。
「（ヨシュア、ノリノリだわ）」
「（フフ、こういう駆け引きはなかなか向いているみたいね）」
エステルとシェラザードはやり取りを眺めていた。

改めて座り直したエステルたち
「最初のネタは、西の方にあるラヴェンヌ村での目撃情報でな。ちょうどボースを訪れていた村人から聞いた話なんだが……。事件があった夜、空飛ぶ大きな影がある村人によって目撃されたらしいん

だ」
ナイアルが言った。
「空飛ぶ大きな影？そ、それって……」
エステルが身を乗り出した。当然、定期船のことだろう。
「ああ、例の定期船だって誰が聞いたって思うだろ？だが実際、軍の部隊が行っても何も見つけられなかったらしい……」
ナイアルが言った。
「なーんだ。期待して損しちゃった」
エステルが席に座った。
「つまり、単なる見間違い？」
シェラザードが言った。
「だから言っただろうが！大したネタじゃないって！こんなネタでも、情報規制下じゃ集めるのに苦労したんだからな！」
ナイアルが吠えた。
「ご苦労さまです。それで、もう1つのネタは？」
ヨシュアが尋ねた。
「くっ……。……もう1つは、軍の情報部が動き始めているらしいってことだ」
ナイアルが言った。
「情報部？」
エステルが聞いた。
「噂は聞いたことがあるわね。最近、王国軍に新設されたばかりの情報収集・分析を行う集団だって」
シェラザードが言った。
「ああ、王室親衛隊と並ぶほどのエリート組織だって触れ込みだぜ。司令を任されているリシャール大佐という人物がこれまたキレ者っていう噂でな。今回の事件も、彼にかかったら解決確実と囁かれているらしい」
ナイアルが言った。
「ふーん……。でも、あたしたちの捜査には役に立たない情報のよ

ーな」
エステルが言った。
「悪かったな、役に立たなくて！だが、約束は約束だ！お前たちも喋ってもらうからな！」
ナイアルが言った。
「ええ、それはご心配なく」
ヨシュアが言った。

エステルたちはロレントで起きた事件やモルガン将軍から聞いた情報を一通りナイアルに伝えた。

「空賊団の《カプア一家》……王家と飛行船会社に身代金要求……。それだ！そーいう決定的なネタが死ぬほど欲しかったんだよっ！」
ナイアルが満面の笑みを浮かべた。
「気に入ってもらえましたか？」
ヨシュアが尋ねた。
「おうよ！これで記事が書けるってもんだ！こうしちゃいられねえ……ドロシーのヤツを見つけないと！それじゃあ、またなッ！」
ナイアルは居酒屋を飛び出していった。
「す、すっごい勢い……」
エステルは驚いている。
「よっぽどネタに困って追い詰められてたんだろうね。協力できて良かったよ」
ヨシュアが言った。
「よくゆーわね。ノリノリで交渉してたクセに。まったく、人が悪いんだから」
エステルがちょっかいをかけた。
「心外だな。ギブ&テイクを前提にしたネゴシエーション（交渉のこと）ってやつさ」
ヨシュアが笑いながら言った。

「ふふ、一理あるわね。遊撃士(あたしたち)が相手にするのはまっとうな善人ばかりじゃない。クセのある相手との交渉ではしたたかさも必要になってくるわ」
シェラザードが言った。
「うー、あたしには向いてないような気がする……。……あ、それよりもさ！空飛ぶ大きな影の話、なんだか気にならなかった？」
エステルがヨシュアとシェラザードに尋ねた。
「ラヴェンヌ村の目撃情報だね。軍の調査が入ったってことは何もない可能性が高いと思うけど」
ヨシュアが言った。
「でも、その調査が完璧とは限らないじゃない？モルガン将軍じゃないけど、軍人ってアタマ堅そうだから見落としてることもありそうだし」
エステルが言った。
「確かに……。ダメもとで調べてみる価値はありそうだね」
ヨシュアが言った。
「ふふ、あんたたちも色々身に付いてきたじゃない。ラヴェンヌ村は、西にある果樹栽培が盛んな小さな村よ。西ボース街道の途中から北に向かう山道の先にあるわ。さっそく行ってみるとしますか」
シェラザードが説明した。
「うん！」
そうして、エステルたちは空飛ぶ大きな影の真偽を確かめるため、ラヴェンヌ村へと向かった。

第2章　消えた飛行客船（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちはラヴェンヌ村へ向かうことになった。手掛かりを得ることはできるのか！？

第2章　消えた飛行客船（9）

―ラヴェンヌ山道

「あれ……？」

エステルが声を上げた。

「おっと……」

前から赤毛の青年が現れた。

「シェラザードか。珍しいところで会うもんだな」

赤毛の青年がシェラザードに言った。

「それはこっちの台詞だわ。王都方面にいたと思ったけど、あんたも事件を調べに来たクチ？」

シェラザードが尋ねた。

「いや、ヤボ用でな……。そういや、例の事件は空賊の仕業だったらしいな？しかし、お前が来たんだったら安心して任せられるってもんだ。せいぜい頑張ってくれよ」

赤毛の青年が言った。

「なによ、冷たいじゃないの。先生が捕まったかもしれないって、あんたも聞いているはずでしょう？」

シェラザードはむっとした。

「捕まった？あのカシウス・ブライトが？ははは！冗談キツイぜ！あの喰えないオッサンが空賊ごときに遅れをとるもんか！なんかの間違いに決まってるさ」

赤毛の青年が笑って言った。

「あたしもそう信じたいけど……」

シェラザードが溜息まじりに言った。

「（何なのかしら、この人……）」

「（分からないけど……遊撃士であるのは確かみたいだね）」

エステルとヨシュアが囁いた。

「ところで……そこのガキどもはなんだよ？見たところ、新入りみ

たいだが」
赤毛の青年が言った。
「ふふん、聞いて驚きなさい。カシウス先生のお子さんよ」
シェラザードが言った。
「こりゃ驚いた……あのオッサンの子供かよ。ふーん、こいつらがねぇ……」
「……」
赤毛の青年がエステルとヨシュアを見回した。
「な、なによ？じろじろ眺め回しちゃって……」
エステルが言った。
「黒髪の小僧はともかく……そっちの娘はドシロウトだな。本当に、オッサンの娘なのか？」
赤毛の青年が言った。
「あ、あんですってー！？」
エステルがむかっときて言った。
「彼女は正真正銘、カシウス・ブライトの娘です。僕の方は、養子ですけど」
ヨシュアが言った。
「ふーん、そうなのか？ま、そんな事はどうでもいいか」
赤毛の青年は興味なさそうに言った。
「ど、どうでもよくないッ！」
エステルが言った。
「じゃあな、シェラザード。ガキどもに足を引っ張られないよう、せいぜい気を付けるんだな」
赤毛の青年はエステルの言葉を無視して言った。
「はいはい。あんたこそ突っ張りすぎて痛い目に遭わないよう注意なさい」
シェラザードが言った。
「はは、肝に銘じとくぜ」
そう言って、赤毛の青年が去って行った。

「な、なんなのアイツ!?めちゃめちゃムカつくんですけどー!」
エステルが頭にきて言った。
「なるほど……今の人が《重剣のアガット》か」
ヨシュアが言った。
「《重剣のアガット》?」
エステルが聞き返した。
「アガット・クロスナー。遊撃士協会の正遊撃士よ。特定の所属支部を決めずに各地を回りながら活動してるわ。得物は、魔獣を一刀両断できるほどの質量のある大剣……。言っておくけど、かなりの凄腕よ」
シェラザードが説明した。
「ふん、凄腕だろうが失礼なヤツには違いないわよ。そういえば、アイツも父さんの知り合いみたいだったけど……」
エステルが言った。
「父さんの実力は認めているけど、好意的とはいえない態度だったね」
ヨシュアが言った。
「色々と事情があってね……。先生に対して突っ張ってるのよ」
シェラザードが言った。
「ふーん……。まあ、どうでもいいか。あんな失礼なヤツのことなんか。ラヴェンヌ村へ急ぎましょっ!」
エステルたちは再びラヴェンヌ村へ向かった。

―ラヴェンヌ村
「ここがラヴェンヌ村……ずいぶんのどかなところよね。あ、果樹園があるんだ」
エステルが辺りを見渡して言った。
「果物の生産で知られてるけど、その昔は採掘で賑わったそうよ。

北の方に、廃坑になった七耀石の鉱山があるって聞いたわ」
シェラザードが説明した。
「ずいぶん詳しいですね。前にも来たことがあるんですか？」
ヨシュアがシェラザードに尋ねた。
「正遊撃士になるために、修行の旅をしていた頃にね。あの時は、飛行船に乗らずに王国全土を歩き回ったもんだわ」
シェラザードが過去を振り返った。
「え、どうして？飛行船を使った方が便利なのに」
エステルが言った。
「『飛行船は確かに便利だが、五大都市しか行き来していない』」
「『その便利さに慣れてしまうと他の場所に目が行き届かなくなる』」
「『まずは、自分が守るべき場所を実際に歩きながら確かめてみろ……』」
「――そんな風にカシウス先生に勧められたのよ」
シェラザードが言った。
「へえ、父さんが……」
エステルが感心した。
「確かに、事件が起こった時、そこが行ったことのない場所だと手遅れになる可能性もありますね。あと、犯罪者を追いかける時にも地理を知っていた方が有利ですし……」
ヨシュアが言った。
「ふふ、そういうこと。さてと、それはともかく……。例の目撃情報について調べてみるとしましょうか」
シェラザードが言った。
「とりあえず、村の人全員に声をかけてみればいいのかな？」
エステルが言った。
「いきなりだと不審に思われるよ。まずは、ここの村長さんに話を聞いてみた方がいいと思う」
ヨシュアが言った。

「ん、わかった」
エステルたちはラヴェンヌ村の村長に話を聞いてみることにした。

―ラヴェンヌ村・村長宅
「ほう、見かけない顔じゃな。果物の買付にでも来たのかね？」
ラヴェンヌ村の村長であるライゼン村長が言った。
「いいえ、商人じゃないわ。遊撃士協会から来た者よ。あなた、この村の村長さんね？」
シェラザードが言った。
「うむ、まあ一応、そういう事にはなっとるが……。遊撃士協会と言ったな。もしかしてアガットの仲間かね？」
ライゼン村長が尋ねた。
「ま、たしかに同僚ではあるけど、一緒に行動してるわけじゃないわ。顔見知りといったところかしら」
シェラザードが言った。
「そうか……。相変わらず1人でいるのか」
ライゼン村長は寂しげに目をつむった。
「？？？どうしたの、村長さん？」
エステルが尋ねた。
「や、こりゃあ失礼した。それで、ブレイサー諸君がこの辺鄙（へんぴ）な村に何の用事かね？まさか、このあたりで手配魔獣でも出おったか？」
ライゼン村長が取り直して言った。
「いえ、実は……定期船消失事件について調べている最中なんです。こちらで目撃情報があったという話を聞いたのでお邪魔しました」
ヨシュアが説明した。
「なんじゃ、その話かね。先日、王国軍の兵士たちも調べにきておったが……。結局、このあたりを調査してそのまま帰っていきおったぞ？」

ライゼン村長が言った。
「やっぱりそうなんだ……。ところで、空飛ぶ影ってのを目撃したヒトって誰なの？」
エステルが尋ねた。
「村の子供でな。ルゥイという男の子じゃ。事件があった夜に怪しげな影を見たらしいが……。なにぶん、子供のことじゃ。寝ぼけて夢を見たのかもしれん」
ライゼン村長が言った。
「うーん、夢か……」
エステルが考え込んだ。
「とりあえず、その子からも話を聞いた方がよさそうだね」
ヨシュアが言った。
「ん、そだね。村長さん、お邪魔しました」
エステルが言った。
「なんのなんの。何かあったらまた来なさい」
そうして、エステルたちはルゥイという子供を探した。

―ラヴェンヌ村　池の桟橋
そこに男の子がいた。
「あれ、お姉ちゃんたち、見かけないカオだね……。フルーツ買いに来た商人さん？」
男の子が言った。
「ふっ、それが違うのよね。何を隠そう、遊撃士（ブレイサー）よ！」
エステルが気取って言った。
「ブレイサー？アガットお兄ちゃんと同じ？でもお姉ちゃん、そんなに強そうには見えないけど……」
男の子が言った。
「うぐっ。はっきり言ってくれちゃって……。でも、この華麗な棒

術を見て果たして同じことが言えるかしら！」
そう言って、エステルは棒を取り出し、回転させた。
「わ、わわ！クルクル回ってすごいや！」
男の子が驚いた。
「むふふ、思い知ったかね。それじゃ、もっと凄い技を……」
エステルが得意そうにそう言った時、
「エステル、はしゃぎすぎ。それよりも……もしかして君がルゥイ君？」
ヨシュアが尋ねた。
「あ、うん……。どうして名前を知ってるの？」
ルゥイが怪訝そうな顔をした。
「村長さんに聞いたんだ。君が、空飛ぶ影を見たってね。その時のことを聞きにきたんだ」
ヨシュアが言った。
「え、でも……。兵隊さんが調べて何も見つからなかったって……」
ルゥイが言った。
「うん、それでもいいんだ。僕たちにも教えてくれないかな？できる限り詳しくね」
ヨシュアが言った。
「う、うん……」
「……」
「あのね……ボク、星を見るのが好きなんだ。それで、夜中に家を抜け出して、ここで星を見たりするんだけど……。このあいだの夜、夜空に２つの影が動くのを見かけたの」
ルゥイが思い出しながら語り始めた。
「え、ちょっと待って……。空飛ぶ影って２つもあったの？」
エステルが尋ねた。
「うん……。あっ、大きさは違ったよ。まるで親子連れみたいだった」
ルゥイが言った。

「大きさの違う2つの影……」
エステルが考えた。
「定期船と空賊艇……そう考えると辻褄が合うわね」
シェラザードが言った。
「確かに、森に現れた船は定期船よりも小型でしたね」
ヨシュアが言った。
「それで、その2つの影は北の方に飛んで行っちゃって……。そのまま見えなくなっちゃった」
ルゥイが言った。
「北っていうと……」
エステルが呟いた。
「村の裏口からさらに山道が続いているわ。ずいぶん昔に廃坑になった七耀石の鉱山があるみたいね」
シェラザードが言った。
「兵隊さんたち、北の山道をテッテイ的に調べたんだけど、なにも見つからなかったって……。だから、ボクが寝ぼけて夢を見たんだろうって言って……。それで……バカにしたように笑って……」
ルゥイの目がジワッと潤んだ。
「ああ、もう……男の子が泣いたりしないの！あたしたちは兵隊とは違うよ。君の話が夢なんかじゃないって、ちゃんと証明してあげるんだから！」
エステルがルゥイに言った。
「ほ、ホント……？」
ルゥイが顔を上げた。
「ホントもホント。どーんと任せなさいって！だから君もベソかいちゃダメだからね？」
エステルが言った。
「う、うん……。お姉ちゃん、いいヒトだね！」
ルゥイが喜んだ。
「（フフ、相変わらず子供に好かれやすいみたいね）」

「（ええ……あれも人徳かもしれませんね）」
シェラザードとヨシュアが呟いた。
「ん、どうしたの？」
エステルが振り向いた。
「いや、何でもないよ。それよりも、やるべき事は決まったみたいだね」
ヨシュアが言った。
「うん！早速、村の裏口から出て、北の山道を調べてみましょ！」
そうして、エステルたちは北の山道へ向かった。

第2章　消えた飛行客船（9）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちは北の山道と廃坑を調べることになった。果たしてどうなるのか！？

第2章　消えた飛行客船（１０）

―廃坑

エステルたちはラヴェンヌ山道を抜けて廃坑に辿り着いた。
しかし、廃坑の入口は頑丈な鎖が巻きつけてあり、南京錠によって封鎖されていた。
「ここが廃坑の入口みたいだね」
ヨシュアが言った。
「確かに、マルガ鉱山と同じような雰囲気は残っているけど……。ずいぶん寂れちゃってるわね～」
エステルが言った。鍵と鎖は錆びている。
「ずいぶん昔に閉鎖されたそうよ。鍵と鎖も錆び付いているわ。最近、開かれたことは無さそうね」
シェラザードが入口を見て言った。
「という事は、空賊たちが出入りした可能性もない……。だから軍も調べなかったのかな？」
ヨシュアが言った。
「確かに、岩山の中を調べても、何かの手掛かりが見つかるわけ、」
「……」
エステルが急に黙った。
「どうしたの、エステル？」
シェラザードがエステルに尋ねた。
「気のせいかもしれないけど……。中から、風が吹いてきてない？」
エステルが言った。
「中からって、廃坑の奥から？」
シェラザードが不思議そうな顔をした。
「うん、そう」
エステルが頷いた。
「ちょっと待って……」

ヨシュアは人指し指を口に含んでから、そっと立てた。
「……」
「本当だ……微かだけど風が吹いて来ている」
ヨシュアが言った。
「あ、やっぱり？」
エステルが言った。
「あんたって、時々驚くほどカンが冴えることがあるわねぇ。さすが先生の娘ってところかしら」
シェラザードが驚いた。
「父さんは関係ないってばぁ。それよりこの中……メチャメチャ気にならない？」
エステルが言った。
「確かに、どこかに通じてる可能性があるかもしれないね。調べてみる価値はありそうだ」
ヨシュアが言った。
「よーし、そうと決まったら、さっそく鍵をブチ破って……」
エステルが武器を構えた。過激ですね……。
「こらこら、止めなさい。とりあえず村に戻って、村長さんに相談してみるわよ。鍵を持ってるかもしれないわ」
シェラザードが言った。
「ちぇーっ、残念」
エステルが悔しそうに言った。それで扉を破壊できるとは思えないが……。
エステルたちはいったんラヴェンヌ村に戻った。

―ラヴェンヌ村
村長は墓の前にいた。
「村長さん、ここにいたんだ」

エステルが言った。
「おお、遊撃士の諸君か」
ライゼン村長が振り向いて言った。
「……ずいぶん立派なお墓ね」
シェラザードが言った。
「１０年前の戦争の犠牲者を弔うために建てたものじゃ。ボース地方は、帝国に近いから一番の激戦地となってなぁ……。この村も、戦火に巻き込まれて、何人かの犠牲者を出したのじゃ」
ライゼン村長が言った。
「そうなんだ……」
「……」
エステルとヨシュアは目を伏せた。
「はは、あんたたちまでしんみりするこたぁないさ。今では、ここの掃除をするのが、わしの日課になっとるんじゃ。ところで、どうしたね。わしに用があるんじゃないのか？」
ライゼン村長が言った。
「あ、うん。相談したい事があるんだけど。えっと、その前に……」
エステルが墓を見て言った。
「これも縁だし、あたしたちもお参りしてもいいかしら？」
シェラザードが言った。
「花はありませんけど……せめてお祈りくらいは捧げさせてください」
ヨシュアが言った。
「おお、そうか……。もちろん構わんとも。あやつらも喜ぶじゃろうて」
エステルたちはしばし黙祷した。

―ラヴェンヌ村・村長宅

エステルたちは鉱山に手掛かりがあるかもしれないことを説明した。
「ふむ、あの廃坑に手掛かりがあるかもしれんか。……確かに兵士たちは、あの中までは調べなかったのう」
ライゼン村長が言った。
「ルゥイって子の話を聞いてどうしても気になっちゃって……。念のため調べてみたいから、入口の鍵を貸してくれないかな？」
エステルはライゼン村長に尋ねた。
「あの南京錠の鍵か。ちょっと待っておくれ……」
ライゼン村長は立ち上がって引き出しの中を調べた。
「確か、この引き出しに……。おっと、あったあった」
ライゼン村長が鍵を見つけてエステルに渡した。
「ほら、これでいいんじゃろ？」
エステルは廃坑の鍵を受け取った。
「うわ、ゴツそうな鍵……。ありがと、村長さん！」
エステルが喜んだ。
「本当に助かります」
ヨシュアが言った。
「いやいや、遊撃士協会にはいつも世話になっとるからな。これくらい協力するのは当然じゃ」
ライゼン村長が言った。
「ふふ……村長さんみたいな人ばかりだと、あたしたちも助かるんだけど」
シェラザードが笑いながら言った。
「何か見つかったら、ちゃんと報告させてもらいます」
ヨシュアが言った。
「うむ、よろしくお願いする」
そうしてエステルたちは再び廃坑に向かった。

―廃坑

「さっそく、村長さんから借りた鍵を使わなくちゃ……」

エステルは廃坑の鍵を使って南京錠を開けた。

それから巻き付けられていた鎖をはずした。

「ふー、堅い扉だったわね～」

エステルは一息ついた。

「さてと……早速、中を調べてみようか」

ヨシュアが言った。

「空賊はともかく、魔獣がいそうな気配はするわね。気を引き締めて行くわよ」

エステルたちは廃坑の中へと入っていった。

第２章　消えた飛行客船（１０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

廃坑の中に入ったエステルたち。その先で見たものとは！？

第２章　消えた飛行客船（１１）（前書き）

これで１０００００文字突破です。１つの区切りですね。

第2章　消えた飛行客船（11）

―廃坑　外の谷間

エステルは廃坑の外に出た。どうやら谷間のようだ。

「まぶし……。ん、あれって……」

エステルが何かを発見したようだ。

「（静かに、エステル……）」

ヨシュアが囁いた。

「（これは、大ビンゴね……）」

そこには定期飛行船の《リンデ号》と空賊艇があった！

「重い資材は放っておいて、食料品と貴重品を優先するんだ。できるだけ急げよ。グズグズしてると連中が来る」

空賊団3兄妹の1人、キールが言った。

「がってんだ、キール兄貴」

空賊が言った。

「（こ、こんな所に定期船が……。あの子の話はやっぱり夢じゃなかったんだ……）」

エステルが驚いて言った。

「（ここは……露天掘りをしていた谷間ね……。うまい隠し場所もあったもんだわ）」

シェラザードが言った。

「（簡単に見つからないわけですね。あれは、定期船の積荷を空賊艇に運び込んでいるのかな？）」

ヨシュアが言った。

「（考えるのはあとあと！また逃げられる前に、なんとか捕まえな

くちゃ！）」
エステルが言った。

「はあ、これで三往復目かよ……。まったく兄貴ときたら弟使いが荒くてたまらないぜ。まあいいや、これが終わったらゆっくりと身代金の交渉を……」
キールが嘆きながら言ったその時、
「そこまでよっ！」
エステルたちが突入した！
「なにっ！？」
キールと空賊たちが驚きながら振り向いた。
「この世に悪が栄える限り、真っ赤に燃える正義は消えず……」
「ブレイサーズ、ただいま参上！」
エステルが高らかに叫んだ。
「……」
エステル以外の全員が静まり返った。
「あり？」
エステルが周りを見た。
「なんなの、ブレイサーズって……」
「まったくもう。すーぐ調子に乗るんだから」
ヨシュアとシェラザードが呆れている。
「な、なによう……ちょっと外しちゃっただけじゃない」
エステルが真っ赤になった。
「お前たちは……ジョゼットがやり合った連中！？は、話が違うじゃないか！どうしてこんな早く来るんだよ？」
キールが焦った。
「話が違う？早く来る？なにワケ判んないことを……」
エステルが不思議そうな顔をした。
「遊撃士協会の規定に基づき、定期船強奪、乗客拉致の疑いであな

たたちを緊急逮捕するわ。覚悟はいいかしら?」
シェラザードが言った。
「ちょ、ちょっと待て。ひょっとしてお前ら……3人だけで捕まえに来たのか?」
キールがエステルたちに尋ねた。
「何よ、見ればわかるでしょ?」
エステルが言った。
「ふーん、なるほどね。あの連中とは関係ないわけか。だったら話は早い……しばらく眠っていてもらおうか!」
キールたちはエステルに取り掛かった。

「いたた……なかなかやるじゃないか。ジョゼットを負かしただけはある」
キールが言った。
「おだてても何も出ないもんね。ほれ、とっとと降参して乗客たちを解放しなさいよっ!」
エステルがキールに言った。
「ははは!本当に何も知らないらしい。まったくおめでたい連中だぜ」
キールが笑いながら言った。
「あ、あんですってー!?」
エステルが怒った。
「……気をつけて!」
ヨシュアが突然言った。
キールが立ち上がると何かを投げつけた。
そこから煙が視界を覆った。
「な、なにこれ……」
「しまった、煙幕!?」

エステルたちは何も見えない。
「あーっははははっ！積荷を残したのは残念だが、そのくらいは我慢してやるさ！あばよ、ブレイサーの諸君！」
キールは高らかに言った。

視界が開けたとき、空賊艇は空を飛んでいた。
「ごほっ、ゲホゲホ……。ちょっと目にしみた～……」
エステルが咳き込んでいる。
「大丈夫、毒性はない……普通の発煙筒だったみたいだね」
ヨシュアが言った。
「……見えなくなったわね。やれやれ、一度ならず二度までも取り逃がしたか。こりゃあ、あたしの方は降格されても文句言えないわね」
シェラザードは溜息をついた。
「もう、シェラ姉ってば……。そんな風に、自分一人が悪いような言い方やめてよね」
エステルが言った。
「僕たちにだって逃げられた責任はあります。悔やんでいる暇があったら、今できる事をしておかないと……」
ヨシュアが言った。
「フフ、まったく……これじゃあ立場が逆だわね。幸い、定期船は取り戻せたし、さっそく調べてみるとしますか。中に乗客がいるかもしれないわ」
シェラザードが言った。
「……うん！」
そうしてエステルたちは定期船の中を調べ始めた。

―定期船　内部

「うわ～……ガランとしてるわね。積荷がひとつもないわ」
エステルが内部を見て言った。
「どうやら、空賊たちに運び去られたみたいだね。この様子じゃ……」
ヨシュアが俯いて言った。
「……とにかく、一通り調べてみるわよ」
シェラザードが言った。

―リフトカー
「これ、リフトカーよね」
エステルが言った。
「発着場で見かけるものと同じタイプみたいだね。多分、これを使って積荷を外に運び出したんだ」
ヨシュアが言った。

―コントロールパネル
「これって何かな？」
エステルが何かの機械を見て言った。
「導力機関（オーバルエンジン）のコントロールパネルね。導力は完全に落ちてるみたいだけど……」
シェラザードが言った。

―操縦室
「船長さんが座る席みたい。いつもだったら喜んで座っちゃうトコ

だけど……」
エステルが残念そうに言った。
「座ったりしないの」
ヨシュアが呆れた。

「これ、操縦用の舵輪よね」
「操縦していた人……どこいっちゃったのかな？」
エステルが蛇輪を見て言った。

―展望室
「まぶし……光が差し込んでる……」
エステルが言った。

「一通り調べてみたけど、誰もいないみたいね……」
エステルが残念そうに言った。
「どうやら、彼らの船で連れ去られた可能性が高そうだ。……たぶん、連中のアジトに」
ヨシュアが言った。
「うん……。せっかく手がかりを見つけたと思ったのに……」
エステルが残念そうに言った。
「ほらほら。そんな辛気くさい顔しないの。まだ、手がかりが完全に無くなったわけじゃないわ。あの連中、どうしてこんな場所に定期船を隠したんだと思う？」
シェラザードがエステルに尋ねた。
「え……？」

エステルが不思議そうな声をだした。
「見たところ、船内の導力は完全に止まっている……。これはつまり、導力機関（オーバルエンジン）が抜き取られたことを意味しているわ。オーブメントの導力は時間が経てば回復するものだからね。さらに連中は、大量の積荷を何度も往復して運び去っている。その手間とリスクを考えたら定期船ごとアジトに運んだ方が、はるかに効率がいいと思わない？」
シェラザードが言った。
「あ、確かに……。それなのに、この場所に定期船を隠していた理由か。うーん、考えられるとしたら……。アジトが特殊な場所にあるため、かな？」
エステルが言った。
「そう、まさにその通りよ。推測するに、彼らのアジトは少し特殊な場所にあるのだと思う。１０～１５アージュ……。つまり、空賊艇程度の小型船のみ着陸できるような特殊な場所にね」
シェラザードが説明した。
「な、なるほど……」
エステルが大きく頷いた。
「山岳や峡谷のような高低差の激しい入り組んだ地形……。そういった場所が怪しそうですね」
ヨシュアが言った。
「ええ、あたしもそう思う。ただそうなると……あたしたちだけでは限界だわ。歩いて辿り着けない場所にアジトがある可能性もあるからね」
シェラザードが言った。
「ど、どうするの？」
エステルが言った。
「そうね……。不本意だけど、事情を説明して軍に協力を要請すべきかもしれない。彼らは警備飛行艇を持っているから」
シェラザードが残念そうに言った。

「え～っ……いまさら軍の連中に頼るの！？」
エステルはおおいに不満そうだ。
「どのみち、この定期船のことを連絡しないわけにはいかないさ。彼らの態度がどうであれ、ここは協力した方がいいと思う。それで人質が戻ってくるんならね」
ヨシュアが言った。
「うーん、そうね……。こだわってる場合じゃないか」
エステルが言った。
「とりあえず、ギルドへ戻ってルグラン爺さんに報告しましょう。ギルドの導力通信を使えば、ハーケン門に連絡できるはずよ」
そうして、３人はギルドへ戻ろうとしたが、定期船を出た時、

「え、ええ～っ！？こ、これってどういうコト！？」
エステルが叫んだ。
「ハハ、これはさすがに予想外だね」
ヨシュアが苦笑した。
「うーん、連絡する手間が省けたと喜ぶべきかしら……」
シェラザードも同様だった。

エステルたちの前には王国軍兵士が大勢いて、取り囲んでいた。
「武器を所持した不審なグループを発見！」
「お前たち！大人しく手を上げろ！」
王国軍兵士がエステルたちに向かって叫んだ。
「まったく世も末だぜ。こんな女子供が空賊とは……」
そのうちの１人が言った。
「だ、誰が空賊ですってぇ！？この紋章が目に入らないの！？」
エステルが遊撃士の紋章を見せた。
「フン、遊撃士の紋章か……。そのようなものが身の潔白の証になるものか」

モルガン将軍が現れた。
「モ、モルガン将軍!?」
「どうしてここに……」
エステルたちは驚いている。
「各部隊の報告に目を通して調査が不十分と思われる場所を確かめに来たのだが……。まさか、おぬしらが空賊団と結託していたとは思わなんだぞ」
モルガン将軍が言った。
「言いがかりをつけるのは止めていただけないかしら?我々は、そちらより一足先にこの場所を捜し当てただけだわ」
シェラザードが言った。
「ならば、空賊どもはどこだ?その中に人質たちはいるのか?」
モルガン将軍が言った。
「空賊には後一歩のところで逃げられてしまいました……。人質の乗客もここにはいません」
ヨシュアが言った。
「フ、語るに落ちたな……。大方、我々がやって来ることをおぬしらが空賊に知らせたのだろう」
モルガン将軍が嘲笑した。
「ちょ、ちょっとぉ!いいかげんにしてよねっ!」
エステルが頭にきて叫んだ。
「それはこちらの台詞だ!者ども!こやつらを引っ捕らえい!」
モルガン将軍が怒鳴った。

エステルたちは王国軍に捕らえられてしまった……。

第2章　消えた飛行客船（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

無実の罪で捕まえられたエステルたち。このままＧＡＭＥ　ＯＶＥＲか！？そんなことはありません。

第2章　消えた飛行客船（12）

―ハーケン門　兵舎内の牢

「明朝、将軍閣下自らの手で、あんたたちの尋問が行われる。そこで無実が証明されれば2、3日で釈放されるはずさ。ま、しばらくそこで頭を冷やしておくことだな」

王国軍兵士が言った。

「はあ、冗談じゃないわよ……。こちらの言い分も聞かないで、こんな場所に放り込んでさ……」

エステルが疲れて言った。

「軍が空賊団を逮捕できれば疑いは晴らせるだろうけど……。こうなると無理かもしれないな」

ヨシュアがうなだれた。

「え、どうして？」

エステルが尋ねた。

「廃坑で戦った空賊リーダーの言葉を覚えているかい？『話が違う』、『来るのが早い』って」

ヨシュアが言った。

「そういえば、そんなこと言ってたかな。あ、まさかそれって……軍の部隊のことだったの！？」

エステルが言った。

「十中八九、そうだと思う。そしてそれが意味するのは……」

ヨシュアが言おうとしたとき、

「軍内部に空賊のスパイがいる。もしくは情報を流す協力者のような人物がいる」

「つまり、そういうことね？」

シェラザードがヨシュアに言った。

「はい」

ヨシュアが頷いた。

「そ、それが本当だったら絶対に捕まらないじゃない！やっぱり、あたしたちが頑張るしかないっていうのに……」
エステルが悔しそうに言った。
「八方塞がりってやつね。こんな時に、先生だったらどう切り抜けるかしら……」
シェラザードがうなだれた時、隣から声が聞こえてきた。
「フフフ……。どうやらお困りのようだね？」
青年の声のようだ。
「あれ……ヨシュア、何か言った？」
「いや、僕は何も……」
「隣から聞こえてきたわ。しかも何だか聞き覚えのあるような……」
エステルたちは首を傾げている。
「おお、つれない事を言わないでくれたまえ。この艶のある美声を聞いたら誰だかすぐに判るだろうに……」
青年が嘆いた。
「こ、この根拠のない自信……」
「そして自分に酔った口調……」
「ひょっとしなくても、オリビエ？」
エステルたちが言った。
「ピンポ～ン」
「ああ、こんなところで再会することができるとは……。やはりボクとキミたちは運命で結ばれているらしいね」
オリビエが言った。
「あ、あんた……どうしてここにいるのよ？ボースに案内したハズでしょ！」
エステルが言った。
「しかも、こんな牢屋に閉じ込められてるなんて……。一体、何をしでかしたわけ？」
シェラザードが尋ねた。
「まーまー、そう一度に質問しないでくれたまえよ。これには海よ

りも深く、山よりも高い事情があるのさ」
オリビエが言った。
「あっそ、だったら聞かない。ていうか聞いちゃったらものすごく疲れそうな気がする」
エステルがきっぱりと言った。
「偶然だね、エステル……僕もそんな予感がするんだ」
ヨシュアが言った。
「そういうわけで、話してくれなくても結構よ。あたしたちの健康と美容のために」
シェラザードが突っぱねた。
「はっはっはっ。そんなに遠慮することはない。一部始終聞いてもらうよ……ボクの身に起きた悲劇的事件をね」
オリビエが言った。
「（聞いちゃいない……）」
エステルが溜息をついた。
「キミたちと別れた後……。ボクは、マーケットを冷やかしてから、レストランの《アンテローゼ》に入った。そして、存分に舌鼓を打った後、余興にグランドピアノを弾いたのさ。すると、レストランの支配人が身を震わさんばかりに感激してね……。レストラン専門のピアニストとして雇いたいと頼み込んで来たわけだよ」
オリビエが語った。
「どうでもいいけど……あんた、リュート弾きじゃないの？」
エステルが尋ねた。
「フッ、天才というのは得物を選ばないものだよ。それはともかく……ボクはある条件を出してそのオファーを受けたわけだ。ミラの代わりに、料理とワインを毎日タダでご馳走してくれってね」
オリビエが言った。
「何て言うか……オリビエさんらしいですね。でも、それがどうしてこんな牢屋に入れられることに？」
ヨシュアが尋ねた。

「ああ、ここからが聞くも涙、語るも涙の話なのさ。その夜、さっそくボクはシェフに作らせた鴨肉のソテーに舌鼓を打っていたのだが……」

「血を使ったソースがまたたまらなく濃厚な味わいでねぇ。どうしても普通の赤ワインでは物足りなく感じてしまったのだよ」

オリビエが嘆きながら語った。

「なんか無性に殴りたくなってきたわね……。それであんたはどうしたの？」

エステルは我慢しながら聞いている。

「貯蔵庫の奥に保存されていた良さそうな一本を拝借したんだ」

「《グラン＝シャリネ》１１８３年物」

オリビエが言った。

「《グラン＝シャリネ》……しかも１１８３年物ですって！？王都のオークションに出た幻のワインじゃない！」

シェラザードが驚愕した。

「ほう、シェラ君はなかなか詳しいみたいだね。ボクも噂を聞いて、かねてから飲んでみたいと思っていたのさ」

オリビエが言った。

「オ、オークションって……どのくらい値段がついたの？」

エステルが恐る恐る尋ねた。

「聞いた話じゃ……５０万ミラで落札されたそうよ」

シェラザードが言った。

「ご、５０万ミラ～！？たかがワイン一本に！？」

エステルが驚いた。

「とんでもない世界だね……。オリビエさん。まさかそのワインを……」

ヨシュアが尋ねた。

「フッ、言うまでもない。美味しく頂かせてもらったよ」

「鼻腔をくすぐる馥郁（ふくいく）たる香り。喉元を愛撫（あいぶ）する芳醇（ほうじゅん）な味わい」

「ねえキミたち、信じられるかい？薔薇色に輝く時間と空間が確か

にそこには存在したんだ……」
オリビエがさも嬉しそうに語った。
「……ダメだこりゃ……」
「……やっぱり疲れたね……」
「……呆れてモノも言えない……」
エステルたちはやっぱりという感じだ。
「しかし、そうなると今度は料理の方が物足りなく感じてねぇ。ワインに合うくらいの逸品をシェフに作らせようとした時にちょうど支配人が帰ってきたんだ。ボクもケチじゃないからね。彼にも相伴（しょうばん）してもらおうと気前よくグラスを勧めたんだか……」
「なぜか激しく立腹し始めてねぇ。あれよあれよと言う間に、兵士たちがやって来たのだよ」
当たり前だろ！
「……それで……なんと……」
「……これがまた……」
「……」
オリビエはかまわず1人喋り続けた。よく口の回るヤツだ。
「以上が、ボクをここに送った涙なしでは語れぬ悲劇的事情さ」
「さあ！思う存分同情してくれたまえっ」
オリビエが高らかに言った。
「……くーくー……」
「……すーすー……」
「……うん……バカ……」
しかし、エステルたちはすでに寝ていた。
「……おや？ちょっとキミたち……。その『くー』とか『すー』とか『うん、バカ』というのはなんだね？」
「いいかい？話はここから面白くなるのだよ？ここに連れてこられてからも更なる試練がボクを待ち受けて……」
「……」

「もしもーし？ちょっと聞いてますかー？」

―兵舎　牢屋内　早朝

「おーい！あんたたち、起きてくれ」

王国軍兵士が言った。

「うーん……ふわわ……。んー、眠いぃ～……」

と、エステル。

「……どうしたんですか？」

と、ヨシュア。

「あふ……こんな朝早くから尋問なの？さすがに勘弁して欲しいわね」

と、シェラザード。

「いや、その反対だ。あんたたちを釈放する」

王国軍兵士が言った。

「えっ……。ど、どうして急に……」

エステルが驚いている。

「何か理由でもあるんですか？」

ヨシュアも同じ様子だ。

「……こういう訳ですわ」

そこからメイベル市長とモルガン将軍が現れた。

「し、市長さん！？」

「あらら。珍しい場所で会うじゃない」

エステルたちが驚いた。

「皆さん、大変でしたわね。ですが、もう安心して下さい。皆さんの疑いは晴れましたから」

メイベル市長が微笑んで言った。

「フン、まだ完全に納得した訳ではないがな……。まあ、メイベル嬢たっての頼みだ。せいぜい彼女に感謝するといい」

モルガン将軍が言った。
「えっと、それって……。市長さんが、あたしたちをかばってくれたっていうコト？」
エステルが尋ねた。
「かばったわけではありませんわ。ただ、皆さんの事情について閣下に説明しただけですから」
メイベル市長が言った。
「あたしたちの事情……？」
エステルが首を傾げた。
「……そこの2人。おぬしらに1つ質問がある。カシウス・ブライトの子供というのは本当なのか？」
モルガン将軍がエステルとヨシュアに尋ねた。
「へっ……」
「はい、仰るとおりです。彼女はエステル・ブライト……。僕は養子のヨシュアといいます」
エステルが驚き、ヨシュアが説明した。
「そうか……。確かに、そちらの娘にはレナ殿の面影が残っておるな」
モルガン将軍がエステルに言った。
「！！！」
「お母さんを知ってるの！？」
エステルが再度驚いた。
「ロレントの家を訪れた時に何度か手料理をご馳走になった。フフ、赤ん坊だったおぬしにも会ったことがあるぞ」
モルガン将軍が微笑して言った。
「ちょ、ちょっと待って……。モルガン将軍って父さんの個人的な知り合い？父さんが昔、軍にいたのはあたしも知っているけど……」
エステルがモルガン将軍に尋ねた。
「フン……遊撃士としてのヤツは知らん。わしが知っているのは軍人としてのカシウスだけだ。稀代の戦略家と呼ばれた、な」

モルガン将軍が言った。
「戦略家？」
エステルが首を傾げた。
「まったく、何を好んで遊撃士協会などに……」
「……ええい！思い出すだけで腹の立つ！わしはこれで失礼する」
モルガン将軍はぶつぶつ言いながら去って行った。
「ど、どうなってんの？」
エステルは訳がわからない様子だ。
「フフ……。エステルさんのお父様は優秀な軍人だったそうですわね。退役する時、何度も引き留めたと将軍閣下から伺ったことがありますわ」
メイベル市長が言った。
「そ、そうだったんだ……。なんだか信じられないけど」
エステルが言った。
「しかし、そうなると……。将軍の遊撃士嫌いは先生が原因かもしれないわね。目を掛けていた部下に去られた悔しさから来ているのかも……」
シェラザードが言った。
「なんかそれっぽいですね」
ヨシュアが言った。
「じゃあ何、父さんのせいであたしたち苦労しているわけ？あ、あんの極道オヤジぃ～っ！」
エステルが身を震わせた。
「フフ……。さて、それでは皆さん。ボースに戻ると致しましょう。定期船が見つかった事で、事件は新たな局面を迎えました。色々と相談したい事があるのです」
メイベル市長が言った。
「あ、うん……」
「……」
エステルが急に黙った。

「あら、どうなさったの？」
メイベル市長がエステルに尋ねた。
「帰るのは賛成なんだけど、何かを忘れているような……」
「そういえば……」
「何だったかしらね……？」
エステルたちは首をひねった。
「ああ……人は何と無情なのだろう。一夜を共にした仲間のことをいとも簡単に忘れ去るとは……。なんという悲劇……何というやるせなさ……。いいさ、ボクはこの暗き煉獄で一人朽ち果てて行くとしよう……」
オリビエが寂しそうに言った。できればそう願いたいと思う人もいるだろう。
「アレがいたか……」
「うーん……完全に忘れ去っていたわね」
「気の毒とは思うけど、さすがにどうすることも……」
エステルたちが言った。
「そちらの方は……噂の演奏家の方ですわね？《グラン＝シャリネ》を勝手に飲んでしまったという」
メイベル市長が言った。
「フッ、いかにも……。しかしレディ。勘違いされては困るな。あれは前払いだよ。華麗なるボクの演奏に対するね」
オリビエが言った。とてもそうには思えない……。
「フフ、面白い方ですわね。まあ、ついでですから貴方も釈放していただけるよう将軍に掛け合って差し上げますわ」
メイベル市長が笑って言った。
「ほう……？」
オリビエが呟いた。
「さ、さすがにそれは無理があるような……」
「レストラン側が訴えれば、少なくとも訴訟にはなるはずよ」
エステルたちは苦笑した。

「ふふ……その心配はありませんわ。あのレストランのオーナーはわたくしですから」
メイベル市長が言った。
「え……」
エステルが驚いた。
「あの《グラン＝シャリネ》もわたくしが競り落としたもの。これならば問題ないでしょう？」

そうしてエステルたちとオリビエは無事に釈放され、一同はボースへと戻った。

第2章　消えた飛行客船（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

無事釈放されたエステルたち。しかし、エステルたちが捕らえられている間に、ボースでは事件が起こっていた！

第2章　消えた飛行客船（13）

―ボース市長邸
「まさか本当に釈放されちゃうなんて……」
エステルは呆れて呟いた。
「まったく、大した悪運だこと」
シェラザードも同じ様子だ。
「はっはっはっ。そんなに誉めないでくれたまえ」
当のオリビエは周りの様子を全く気にしていない。
「しかし、タダであのワインを飲んだとあっては心が咎めるな。契約通り、レストランでピアノを弾かせていただこうか？」
オリビエがメイベル市長に言った。少しは反省しているようだ。
「それは遠慮しておきますわ。さすがに、あの騒ぎの後だと色々と気まずいでしょうから」
メイベル市長が断った。
「（うーん、コイツだったら全然気にしないと思うけど……）」
「（確かに図太そうだしね……）」
エステルとヨシュアは冷ややかにオリビエを見ている。
「まあ、今回のことはお互い不幸な事件と割り切りましょう」
メイベル市長が締め括ろうとしたが、
「しかし……それではボクの気が済まない」
オリビエが割り込んだ。
「ふむ、そうだな……。ちょうど、エステル君たちが何かの調査をしているようだね。ワインの礼に、彼らの手伝いをするというのはどうだろうか？」
オリビエが提案した。
「ハア？」
エステルが素っ頓狂な声をあげた。
「あら、それは面白いですわね。お願いしてもいいでしょうか？」

メイベル市長が賛成した。
「フッ、お任せあれ。そう言うわけだ。キミたち、よろしく頼むよ」
オリビエが爽やかに言った。
「ちょっと待って……どーしてそうなるのよっ！？」
エステルが反対した。
「素人に付いてこられても正直言って迷惑なんだけど……。足手まといにならない自信は？」
シェラザードはオリビエに尋ねた。
「銃と魔法にはいささか自信がある。無論、ボクの天才的な演奏と一緒にされても困ってしまうが」
オリビエが相変わらず自己陶酔的に言った。
「そーいうセリフが激しく不安を誘うんですけど」
エステルが呆れて言った。
「でも、悪くないかもしれないね。軍が当てにならない以上、僕たちも人手不足な気がするし」
ヨシュアは賛成のようだ。
「……」
「まあ、いいわ。協力してもらうとしますか。ただし、足手まといになると判断したら外れてもらうけど……。それでもいいかしら？」
シェラザードが条件をつけてオリビエに尋ねた。
「フッ、構わないよ。決して失望させたりしないから、どうか安心してくれたまえ」
オリビエが自信たっぷりに言った。
「うーん、失望するもなにも最初からそんなに期待してないし」
エステルが酷いことを言った。
「フフ……話がまとまって何よりですわ。それはそうと、皆さんに報告する事があるのです」
メイベル市長が言った。
「報告すること？」
エステルが興味を示した。

「そういえば、ここに来るまでに街が騒がしかった気がするわね。何かあったの？」
シェラザードが尋ねた。
「はい……。実は昨晩、ボースの南街区で大規模な強盗事件があったのです。武器屋、オーブメント工房をはじめ、何軒かの民家が被害に遭いました」
メイベル市長が説明した。
「ええっ！？」
エステルが驚いた。
「やっぱり……例の空賊たちの仕業ですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「今のところは不明ですが、その可能性は高そうですわね。現在、王国軍の部隊が調査を行っている最中ですわ」
メイベル市長が言った。
「なるほど、あたしたちもすぐに調査した方が良さそうね」
シェラザードが言った。
「ええ、お願い致します。ここまでの調査のお礼はギルドにお支払いしておきますわ。当座の調査費用として、どうぞお役に立ててくださいな」
メイベル市長が言った。

「また軍の連中に邪魔されそうな気がするけど……。ま、そうなったらその時だよね」
エステルが前向きに言った。
「邪魔されるのはともかく……。こちらが情報を掴んだとしても、軍には伝えない方がいいと思う。本当にスパイがいるとしたら空賊たちに筒抜けになるからね」
ヨシュアが言った。
「不本意だけど仕方ないわね。とにかく、慎重に行動しましょう」
シェラザードが言った。

「フッ、それでは諸君。さっそく南街区に行くとしようか」
オリビエが割り込んで仕切り始めた。
「だ～か～ら！どうしてあんたが仕切んのよっ！」
エステルが言った。
オリビエの仕切りの性格がわずらわしい。

とにかく、エステルたちは被害状況を調べるため、オリビエと共にボース南街区に向かった。

第2章　消えた飛行客船（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

空賊たちの悪行はとどまる事を知らず、続いている。エステルたちは調査に乗り出すが、オリビエが加わった。これからどうなるのか！？（色んな意味で……）

第2章　消えた飛行客船（１４）

―ボース南街区　ルシール工房

「ふう、可愛く撮れたっと。ナイアル先輩～。こんな感じでいいですかぁ？」

ドロシーがナイアルに尋ねた。

「ああ、そんなもんだろ。しかしこりゃあ、根こそぎやられちまったようだな」

「……ん？」

ナイアルがエステルたちに気付いた。

「こんにちは。さっそく取材ですか？」

「ご苦労さんね、あんたたちも」

エステルたちがナイアルたちに言った。

「おっと、お前さんたちか」

ナイアルが振り向いた。

「あー！エステルちゃんとヨシュア君！よかったねぇ、釈放されたんだ」

ドロシーが喜びながら言った。

「聞いたぞ。軍の連中にとっ捕まったんだってな。いっや～、ホント心配したぜ」

ナイアルがどことなく能天気に言った。本当に心配したのか？意外と笑っていたんだりして。

「なに他人事みたいに言ってくれちゃってるかな～。ナイアルの情報を元に村に行った結果なんですけど？」

エステルが呆れながら言った。関係ないと思う。

「おいおい、そりゃ逆恨みだろ」

ナイアルが自分のせいではないと主張した。

「ナイアルさんたちも廃坑には行ったんですか？」

ヨシュアが尋ねた。

「そうだよ～、昨日のうちにね。ヨシュア君たちは連行されちゃった後だったけど」
ドロシーが言った。
「しかし、逮捕の現場にいたら面白い写真が撮れたんだが……。ホント、惜しいことをしたぜ」
ナイアルが笑いながら言った。本当に他人事のようだ。
「こ、これだからマスコミの人間ってのは……」
エステルがナイアルに突っかかりそうな勢いだ。
「それよりも、この有様はやはり空賊の仕業なのかしら？」
シェラザードがナイアルに尋ねた。
「ああ、そうみたいだな。軍の連中も手がかりを調べているらしいが……。正直、何もないみたいだぜ」
ナイアルが言った。
「そう、やっかいね……」
シェラザードが溜息をついた。
「記者君、ちょっといいかい？空賊たちは、街のどこから侵入したのか分かるだろうか？」
オリビエが突然尋ねた。
「ああ、目撃情報によると西口方面に去ったらしいが……」
ナイアルが答えた。
「フム、それはおかしいな。西口に入ってすぐの所には、市長邸やマーケットもある……。それらを襲った方が遥かに実入りが良さそうだが……」
オリビエが疑問点を指摘した。
「言われてみれば確かに……」
「……ところで、あんたダレ？」
ナイアルが今頃尋ねた。
「フッ、よくぞ聞いてくれたね。オリビエ・レンハイム。漂泊の詩人にして天才演奏家さ」
「噂くらいは聞いているだろう？」

オリビエがお決まりの自己陶酔的自己紹介をした。
「あ～、高級レストランでワインを飲み逃げしたっていう。お目にかかれて光栄ですぅ」
ドロシーは興味津々だ。光栄か……？
「ははっ、照れるぢゃないか。インタビューならいつでも受け付けてあげよう」
オリビエが調子に乗り出した。
「うわー、いいんですかぁ？」
ドロシーが身を乗り出した。こんなヤツ、インタビューしても意味がないと思うが……。
「アタマ痛くなってきた……」
「何て言うか……ある意味同じタイプかもね」
「なんで一緒に行動してるのかは聞かないでおくことにするぜ……」
「ま、それが無難でしょうね」
エステルたちはその様子を見て、ただただ呆れた。

色々、家を回って聞き込みをしようとしていると、
「おい、お前たち！」
王国軍士官がエステルたちを呼び止めた。
「ん、どうしたの？」
エステルが答えた。
「一言、忠告しようと思ってな。いくら市長の代理とはいえ、お前たちはあくまで民間人だ。我々が調査している最中にウロウロしないでもらおうか」
王国軍士官が言った。
「あ、あんですって～！？」
「忠告というよりも、警告ですね」
エステルたちはむっとした。
「分をわきまえろと言っている。そんなに調べたいのだったら、我

々が引き上げた後にするんだな。あまりワガママが過ぎると、また牢屋に招待させてもらうぞ？」
王国軍士官が脅した。
「むっ……」
エステルが頭にきたようだ。
「気にしないの、エステル。どうせ何もできやしないわ」
シェラザードが冷ややかに言った。
「フッ、虎の威を借る狐とはよくぞ言ったものだね」
オリビエがさらに挑発した。
「な、なにぃ！？」
王国軍士官が真っ赤になった。
その時、
「……何をやっているのかね」
前から黒服の将校がやってきた。
「こ、これは大佐どの！？」
王国軍士官が焦った。
「栄えある王国軍の軍人が善良な一般市民を脅すとは……。まったく、恥を知りたまえ」
黒服の将校がたしなめた。
「で、ですがこいつらはただの民間人ではありません。ギルドの遊撃士どもです！」
王国軍士官があわてて言った。
「ほう、そうだったのか……。だったら尚更だろう。軍とギルドは協力関係にある。対立を煽ってどうするのだ？」
黒服の将校が言った。
「し、しかし自分は将軍閣下の意を汲みまして……」
王国軍士官が言い訳をした。
「やれやれ……モルガン将軍にも困ったものだ。ここは私が引き受けよう。君は部下を連れて撤収したまえ」
黒服の将校が王国軍士官に命じた。

「し、しかし……」
王国軍士官は納得いかない様子だ。
「早朝から始めているのだ。もう充分に調査しただろう。将軍閣下には後で私が執り成しておく。それでも文句があるのかな？」
黒服の将校が尋ねた。
「りょ、了解しました……」
「撤収！ハーケン門に戻るぞ！」
王国軍士官が部下を連れて去って行った。
「さて、と……」
「遊撃士の諸君。軍の人間が失礼をしたね。謝罪をさせてもらうよ」
黒服の将校が謝った。
「これは、どうもご丁寧に。ま、こちらも挑発的だったし、お互い様としておきましょう」
シェラザードが言った。
「そう言ってくれると助かるよ」
「……先程も言ったように軍とギルドは協力関係にある。互いに欠けている部分を補い合うべき存在だと思うのだ。今回の、一連の事件に関しても君たちの働きには期待している」
黒服の将校が言った。
「フフ、失望させないようせいぜい頑張らさせてもらうわ」
シェラザードが微笑みながら言った。
「（な、なんか……すごくマトモそうな人ね）」
「（うん……誰なんだろう？）」
エステルとヨシュアが囁いた。
「大佐……そろそろ定刻ですが」
後ろに控えていた女性士官が言った。
「おお、そうか。それでは諸君……これで失礼させてもらうよ」
黒服の将校が去ろうとした時、
「……そういえばまだ名乗っていなかったな。王国軍大佐、リシャールという。何かあったら連絡してくれたまえ」

そう言い残して去って行った。
「リシャール大佐って……どこかで聞いたことあるような」
エステルが考えた。
「ナイアルさんが言ってた人だね」
「王国軍情報部を率いるキレ者の若手将校だっていう」
ヨシュアが言った。
「あ、そうだった☆うーん、軍人にしてはけっこう話が判るヒトだったね」
エステルが感心しながら言った。
「ふむ、歳は30半ばくらい、ルックスも悪くないと来たか……。軍人より政治家に向いていそうね」
シェラザードが勝手に分析した。
「おーい、お前さんたち」
ナイアルが工房から出てきた。
「今の黒服の軍人、誰なんだ？なんか見覚えがあるんだが……」
ナイアルが首を傾げながらエステルたちに尋ねた。
「なんだ、顔は知らないんだ。ナイアルが言ってた、情報部のリシャール大佐だってさ」
エステルが言った。
「な、なにーーーっ？おいおい、そりゃホントか？」
ナイアルが思いっきり驚いた後、半信半疑で尋ねた。
「う、うん……。本人がそう名乗っていたから間違いないと思いますけど……」
エステルたちがナイアルの驚きようにたじろいだ。
「まさかこんなところで噂の人物に出くわすとは……。こうしちゃいられん！ドロシー、追いかけるぞっ！」
ナイアルがドロシーに言った。
「アイアイサー！よくわかりませんけど～」
そう言って、ナイアルたちはリシャール大佐を探して走っていった。
「は、張り切ってるわね～。インタビューでもするのかな？」

エステルはナイアルの様子を見て言った。
「ふふ、確かに記事にしたら受けそうな人物ではあるわね」
シェラザードが言った。
「……ふむ……」
オリビエが久々に口を開いた。なにやら考えていたようだ。
「ん、どうしたの？珍しく真剣な顔しちゃって」
エステルがオリビエに尋ねた。
「いや、今の大佐なんだが……。なかなかの男ぶりであるのはボクも認めるに吝かではない……。しかし……」
オリビエが突然閉口した。
「しかし……なんですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「ボクのライバルとなるにはまだまだ役者不足だと言えよう。より一層の精進を期待したいね」
オリビエがアホなことを言った。
「聞くんじゃなかった……」
「その自信がどこから湧いてくるのか不思議ですね」
エステルたちが疲れた顔をした。
「ふふ、さてと……。兵士たちが居なくなった所で、調査を再開するとしますか。さっき、話を聞けなかった住民たちから話を聞くわよ」
シェラザードが言った。
「ん、りょーかい」
そうして、エステルたちは再び聞き込みを再開した。

第２章　消えた飛行客船（１４）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちのもとに現れた王国軍情報部をまとめるリシャール大佐。彼のおかげで諍いは回避できた。エステルたちは気を取り直して調査を再開する。

第2章　消えた飛行客船（15）

―聞き込み　セシル婆さんの家

「おや、アンタたちは……。さっき話を聞きに来ていた遊撃士さんたちじゃないか」

セシル婆さんが言った。

「あ、はい」

エステルが頷いた。

「すまなかったねぇ。さっきは相手ができなくて。それで、あんたたちも昨晩の話を聞きに来たのかい？」

セシル婆さんが尋ねた。

「はい。伺ってもよろしいですか？」

ヨシュアが言った。

「ああ、いいとも」

一同は机に座った。

「昨日の夜中のことさ。扉の外で何やら物音がしてね。あたしゃ、こんな時間に亭主が帰ってきたのかと思って扉を開けて怒鳴りつけてやったんだ。だが、そこにいたのは向かいの工房から出てきた覆面の男たちだったのさ！あの時ばっかりは心臓が止まるかとおもったねぇ。もっとも、向こうも驚いて北の方に逃げていったけどさ」

セシル婆さんが語った。

「なるほど……それが空賊たちだったのね」

エステルが頷いた。

「じゃあ、ここのお宅は特に被害はなかったんですね？」

ヨシュアが尋ねた。

「ああ、不幸中の幸いだったよ」

セシル婆さんが頷いた。

「ひとついいかしら?ご主人が遅かったというのは酒場でも行ってたということ?」
シェラザードが尋ねた。
「それだったらまだ許せるんだけどねぇ……。ウチのは飲んだくれに加えて大のコレ好きと来たもんだ」
セシル婆さんは右手を差し上げるような動作をした。
「???」
シェラザードは分けが分からない様子だ。
「あ、判った♪ずばり、釣りね?」
エステルが言った。
「ああ、なるほど……」
シェラザードが理解したようだ。
「そう!これがまたキがつきほどの釣り好きでね。昨日もカサギを釣るとかで南の湖畔に行っちまったんだよ。しかも、まだ帰ってきやしない」
セシル婆さんが溜息をついた。
「え、それじゃあ……まだ事件のことは知らないの?」
当然そうなるだろう。セシル婆さんは頷いた。
「その通りさ。まったくあの宿六……帰ったらタダじゃおかないよ!」
セシル婆さんは相当頭に来ているようだ。
「おーい、帰ったぞ~っ」
外から老人の声がした。
「はー、やれやれ……。朝から粘ったのにボウズに終わっちまったよ。お、なんだ、お客さんかい?」
クワノ老人が帰ってきた。
「このスットコドッコイ!」
セシル婆さんが思いっきり怒鳴った。
「な、なんだってんだ。いきなり大声出しやがって。お客さんに失礼じゃねえかよ」

クワノ老人が驚いて飛び上がった。
「失礼なのはアンタの方だよ。まったく、この大変な時に呑気に遊び呆けてるなんてさ」
セシル婆さんが大きく溜息をついた。
「あん、大変な時？」
クワノ老人は状況が分からない様子だ。
「実は……」

エステルたちは、昨晩起こった強盗事件についてクワノ老人に一通り説明した。

「は～、空賊による強盗ねぇ。そりゃ大変な事があったなぁ。しかし、コイツの怒鳴り声で逃げてったってのは傑作だぜ。わはは、空賊も災難だったよな」
クワノ老人はどこか他人事のようだ。
「なんだってぇ！？」
セシル婆さんがまた怒鳴ろうとした。
「お、落ち着いて、お婆ちゃん」
エステルがセシル婆さんを制した。
「しかし、夜闇に紛れて現れてどこかに消える空賊どもか……。アイツの言ってたことが、もしかして関係あるのかねぇ？」
クワノ老人が上を向きながら言った。
「アイツ……どなたのことなんですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「ああ、オレの釣り仲間でな。南の湖畔にある宿屋に滞在してるヤツがいるんだよ。そいつが、宿屋の近くで妙な連中を見かけたらしいんだ」
クワノ老人が説明した。
「妙な連中……」
「興味深いわね。詳しく話してもらえない？」

エステルたちが身構えた。
「構わんが……言っておくが又聞きだぞ？」
「なんでも夜釣りをした時に、偶然見かけたらしいんだが……。真夜中に、宿屋の出口から街道に出た連中がいたらしい。しかも、宿の人間に聞いてみると、そんな連中は泊まってないそうだ」
クワノ老人が語った。
「それは……たしかに妙な人たちですね。その宿、強盗事件とか起こったりはしていませんか？」
ヨシュアが尋ねた。
「そういう物騒な事件はまったく起きちゃいねえよ。静かでメシの美味い、なかなかオススメの宿だぜ。何といっても良い釣り場だし」
クワノ老人が太鼓判を押した。

―ボース南街区
「肝心の強盗事件については手がかりはなかったけど……。なかなか興味深い話が聞けたわね」
シェラザードが言った。
「ふむ、同感だ。特に宿屋の食事が美味だというのが気に入った」
オリビエがどうでもいいことを言った。
「そういう話じゃないってば。ま、あたしも釣りにはちょっと心惹かれるけど……。何も事件が起きてないんじゃ調べてみる価値はなさそうね」
エステルが言った。
「いや、それは逆だと思うよ。ヘタに事件を起こしたら、軍に徹底的に調査されてしまう。逆に、何も起きていない場所こそ空賊たちが現れる可能性は高い」
ヨシュアが分析して言った。
「そっか……そういう考え方もあるか」

エステルが頷いた。
「確かに、この一連の事件……。軍にスパイがいるかはともかく、空賊たちは相当に抜け目がないわ。起きた事件を調べるだけでは連中を追い詰めることは難しい。連中の動きを読んだ上で一歩先を行く必要がありそうね」
シェラザードが言った。
「なるほど……守りより攻めの姿勢ね？」
エステルが言った。
「フッ、それでは行こうか……。リベールの真珠と唄われし麗（うるわ）しのヴァレリア湖のほとりへ」
オリビエが言った。本当にやる気があるのだろうか？
エステルたちは南の湖畔の宿屋へと向かった。

第2章　消えた飛行客船（１５）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

空賊が現れると思われる宿へ向かうエステルたち。これは当たりとなるか！？

第2章　消えた飛行客船（16）

―ヴァレリア湖畔

「ここがヴァレリア湖の北岸か……。なかなか雰囲気がいい場所ね」

エステルが辺りを見て言った。

「そうだね。宿も立派そうだし」

ヨシュアが言った。

「前に仕事で泊まった事あるわ。酒は美味しいし、部屋も良い、文句のつけられない宿だったわね」

シェラザードが言った。

「うーん、遊びに来たんだったら言うことなしだったんだけど……」

エステルが残念そうに言った。

「あれ、違うのかい？ボクはそのつもりだったけど。昼はボートに揺られうたた寝し、夜は酒と料理に舌鼓を打つ……。これぞバカンスというやつだね」

オリビエがバカなことを言った。お決まりの言動だ。

「……」

エステルが怒ったように睨む。

「……」

ヨシュアは呆れたような視線で見る。

「……」

シェラザードは冷ややかな視線をぶつける。

「ハッハッハッ。ちょっとしたジョークさ。バカンスはいつでも楽しめるが、空賊退治は今しか楽しめない……。このオリビエ、優先順位はちゃんと弁えているつもりだよ」

オリビエが取り繕って言った。ホンマかいな。

「楽しむ、楽しまないの問題じゃないと思うんだけど……」

エステルが溜息をついた。

「ふふ、まあいいわ。本気でやってくれさえすれば」

「早速、ご老人が言ってた釣り好きの滞在客を探すわよ」
シェラザードが言った。
「おとといの夜、怪しい人たちを目撃したっていうお客さんですね」
そうしてエステルたちはその客を探し始めた。

―ヴァレリア湖　桟橋
釣竿を持つ男性がいたので声をかけてみた。
「……」
男性は集中している。
「あのー、ちょっといいかな？」
エステルが男性に声をかけてみた。
「……」
「……」
全く耳に入っていないようだ。どれだけ集中してるねん。
「（あら、反応が無いわね……）」
「（よっぽど集中してるんでしょうね……）」
ヨシュアとシェラザードがあまりの集中力に感心している。
「（……なるほど、これが釣りバカというものか）」
「（フッ、なかなか興味深い人種のようだ）」
その様子を見たオリビエが呟いた。
「（あんたほどじゃないと思うけど……）」
とにかく、その人から離れて別をあたってみた。

―川蝉亭
調理場にいた男性、レナードに声をかけた。

「川蝉亭（カワセミ）へようこそ。皆さん、泊まりに来たのかい？」
レナードが尋ねた。
「えっと、一応そうだけどそれだけじゃないって言うか……」
エステルが歯切れ悪く言った。
「ある人を探しているんです。こちらに滞在しているお客さんで釣り好きの方はいらっしゃいますか？」
ヨシュアが代わりに尋ねた。
「うーん、釣りだったら大抵のお客さんは楽しんでるけど」
レナードが言った。
「昨日、ここに泊まったご老人の釣り仲間って聞いたわ。心当たりはないかしら？」
シェラザードが言った。
「ああ、クワノ爺さんのことか。その釣り仲間といったらロイドさんの事じゃないか？」
レナードが手を打って言った。
「ロイドさん？」
エステルが聞き返した。
「王都から来ているお客さんで、プロのアングラーだって話だよ。《釣公師団（ちょうこうし）》とかいう、王都にある団体のメンバーらしいんだ」
レナードが説明した。どうやらクセのありそうな人のようだ。
「な、なんか凄そうなヒトねぇ。ところで、それって裏手で釣りをしてるオジサン？」
エステルが苦笑して言った。
「ああ、たぶんそうだと思うよ。大声で名前を呼んだら気付いてもらえるんじゃないかな？」
レナードが言った。そこまでしないと気付いてもらえないのかいっ！

―桟橋

「……」
相変わらず男性は釣りに集中している。
「ええっと……。おじさんが、王都から来てるっていうロイドさん？」
エステルが男性に話しかけた。
「……」
「……」
全く耳に入らない。
「すごい集中力だね……魚以外目に入らないみたいだ」
ヨシュアが感心している。ここまでいくと素晴らしいとすら思えてくる。
「フッ、仕方ない。ここはボクの出番のようだね」
オリビエが前に出てきた。
「へっ……」
エステルが場所を空けた。
「……ふう～っ……」
オリビエは男性の耳に息を吹きかけた。
「ひゃああっ！？」
男性は驚いて悲鳴を上げた。
「な、なんだね君たちは！？い、い、いつからそこにっ！？」
男性はかなり焦っている。
「エ、エゲツな～……」
「見ているコッチも思わず鳥肌が立っちゃったわね……」
エステルたちはオリビエを冷ややかに見ている。
「やあ、ごきげんよう。先程から声をかけていたんだが、さすがプロ、凄い集中力だねぇ」
オリビエが褒め称えた。
「あなたがロイドさんですね？」
ヨシュアが男性に尋ねた。
「あ、ああ、その通りだが。はて、どうして私の名を？」

ロイドが首を傾げた。
「とあるご老人からあなたのことを聞いたのよ。少し時間をいただけないかしら？」
シェラザードが尋ねた。

エステルたちはクワノ老人の話を説明した。
「なるほど……クワノさんから聞いたのか。ああ、確かに見たよ。おとといの夜、奇妙な連中をね」
ロイドが言った。
「やっぱり……。その話、あたしたちにも詳しく教えてくれないかな？」
エステルがロイドに言った。
「……その前に。君たちは遊撃士だって？何か事件に関係することかい？」
ロイドが逆に尋ねた。
「断言は出来ません。ですが、可能性はあります」
ヨシュアが説明した。
「わかった……そういう事なら協力しよう」
「おとといの晩……ボートで夜釣りに出た時のことさ。ヌシとの格闘に明け暮れた私はクタクタになって宿に戻ってきてね。すっかり夜も更け、宿の者全員が眠りに就いている時間になっていた」
ロイドが説明を始めた。
「ちょっと待って。……そのヌシっていうのは？」
シェラザードが割り込んだ。しかし、この質問がミスだった。
「よくぞ聞いてくれました！」
ロイドが声を張り上げて喜んだ。待ってましたとばかりに。
「ヌシというのはこのヴァレリア湖に住む巨大マスのことでねっ！もう１０年以上も前から我々釣り愛好家のあいだで畏怖されている

魚なんだよっ！」
ロイドが興奮しながら熱く語り始めた。
「（しまった……）」
「（マニア心に火をつけましたね……）」
シェラザードとヨシュアが後悔して溜息をついた。
「そ、そんな凄いヤツなんだ！？」
エステルは感心している。さすが釣り好き。
「ああ、私は5年近くヤツを追っているのだが……。なにせ、広大なヴァレリア湖をあっちに行ったりこっちに来たりと気まぐれにエサ場を変える魚でね。最近、この辺りに現れた事を知って、私も王都から追っかけてきたわけさ」
ロイドがしゃべりまくっている。
「フッ、大した情熱だ。その気持ち、判らなくもないよ。ボクも気に入ったものがあったら、何としても手に入れたくなる口でね」
「たとえば《グラン＝シャリネ》とか」
オリビエのアホ発言。
「あれは手に入れたんじゃなくて飲み逃げしたたげでしょーが」
エステルがつっこんだ。
「コホン……話を戻すわよ。それで、ロイドさん。夜釣りから戻ってきてどうしたの？」
シェラザードが再び尋ねた。
「あ、ああ……。それで、ボートを戻して宿の中に入ろうとしたんだが……。奇妙な二人組が、宿の敷地から街道に出て行くのを見かけたんだよ」
ロイドが言った。
「街道って……そんな真夜中にですか？」
ヨシュアが言った。
「ああ、間違いない。アンセル新道に出て行ったよ。最初は、街から遊びにきた連中が戻るところなのかと思ったけど……」
「さすがに時間が遅すぎるし、次の日、宿の人間に聞いてみたらそ

んな連中知らんと言うじゃないか。幽霊でも見たんじゃないかって思わず背中がゾーッとしたものさ」
ロイドが震える仕草をした。
「ゆ、幽霊!?そ、そんなの出るの、ここ!?」
エステルが悲鳴を上げた。どうやら、エステルは大の幽霊嫌いらしい。
「はは、何せその二人組、若い男女のカップルだったからね。もしかしたら、周囲に認められずに心中したカップルだったのかも……」
ロイドが声をひそめて言った。
「あぅぅぅ～、や、やめてよぅ！」
エステルが耳をふさいだ。
「やれやれ……相変わらず幽霊話には弱いのね」
シェラザードがそんなエステルの様子を見て言った。
「そのクセ聞きたがるんですよ。怪談とか、世にも奇妙な物語とか」
ヨシュアが言った。
「ふふ、エステル君もそうやって恐がってる分には、なんとも可愛らしいじゃないか。寒さに震える子猫のようだよ？」
オリビエの変態発言炸裂！
「ふーっ、噛み付くわよ！？」
エステルがむかっとした。
「ははは……まあ、幽霊っていうのは冗談さ。だが、訳ありのカップルというのはもしかしたら本当かもしれないんだ。女の子が変わった服を着てたからね」
ロイドが言った。
「変わった服……というと？」
ヨシュアが尋ねた。
「後姿しか見ていないから確実とは言えないんだが……。学生服を着てたみたいなんだ」
ロイドが言った。これは、まさか！？
「学生服って、まさか……」

「ジェニス王立学園ですか？」
エステルたちが驚いた。
全員、ロレントでの事が頭に浮かんだようだ。
「ほう、良く知っているね。私の姪も通っているんだが、それとソックリだったよ」
ロイドが言った。
「なるほど……これで一気に怪しくなったわね」
シェラザードが言った。
「怪しいどころかゼッタイ、あの生意気娘だって！とうとう尻尾を掴んだわよ～っ」
エステルはロレントでの怒りを再燃させている。エステルの頭の中ではジョゼットのことばかりだろう。
「なんだ……君たちの知り合いだったのか？だったら、あの2人が思い詰めて早まったことをしないよう注意してやってくれ。たしか、今夜あたりにまた来るような事を話していたからね」
ロイドが言った。これだけの事をよく覚えているね、ロイドさん。
「それ、本当ですか？」
ヨシュアが聞き返した。
「ああ、2日後にまた来るぞって若い男の方が話していたんだ。真剣な口調だったから気になってね」
ロイドが言った。これだけの事を聞いて覚えていたね、ロイドさん……。
「なるほど……。貴重な情報、感謝するわ。後は我々に任せてちょうだい。絶対に悪いようにしないから」
シェラザードが確信を持って言った。
「ホッ、そうか……そう言ってくれると助かる。何だか肩の荷が下りた気分だよ」
「……安心したら今度はボート釣りがしたくなってきたな。こうしちゃいられん！君たち、私はこれで失礼するよ！」
ロイドは早速釣りの準備に取り掛かりにいった。

「相当な釣りバカね……あたしなんか足元にも及ばないわ」
エステルが半ば呆れて言った。
「《釣公師団》とか言ってたけど、どういう集まりなんだろうね」
ヨシュアが言った。
「それで結局、そのカップルがどう事件に絡んでくるんだい？事情を知らないボクにも懇切丁寧に教えてくれたまえ」
内容が把握できていないオリビエが尋ねた。
「そうね。かいつまんで説明すると……」

エステルたちは、ロレントに現れた空賊団の妹、ジョゼットについて説明した。

「なるほど……それは確かにビンゴのようだね。となると、今夜というわけか」
オリビエが状況を理解したようだ。
「ええ……。念のため、あたしたちも部屋を取った方が良さそうね。真夜中まで待つ必要があるし」
シェラザードが言った。
「うん。宿の受付で部屋を取りましょ」

エステルたちは、空賊たちを待ち伏せするため、宿の部屋を取りに向かった。

第２章　消えた飛行客船（１６）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ついに手掛かりを掴んだエステルたち。いよいよ大詰めです。

第２章　消えた飛行客船（１７）（前書き）

今回は結構感動モノだと個人的に思います。お楽しみください。

第2章　消えた飛行客船（17）

―川蝉亭

「あら、お泊りになられますか？」

受付のソフィーナが言った。

「うん、そのつもりだけど……」

エステルが言った。

「エステル、ちょっと待った。やり残している事があったら、今のうちに済ました方がいいよ。いったん部屋を取ってからボースまで戻るのも何だしね」

ヨシュアが止めた。

「うーん、確かに……。でも、大丈夫よ。部屋を取りましょ」

エステルが部屋を取った。

「かしこまりました。それでは皆さん。お部屋にご案内します」

ソフィーナがエステルたちを案内した。

「こちらの部屋になります。では皆さん、夕食までごゆっくりお過ごしください」

そう言い残して、ソフィーナは戻っていった。

「なかなか良い部屋だね。街のホテルにはない趣があって」

ヨシュアが部屋の中を見て言った。

「うん、イイ感じよね。値段もそんなに高くなかったし」

エステルが相槌を打った。

「ふふ、さてと……。夜が更けるまであたしたちもゆっくりしますか」

シェラザードが言った。

「おお、ナイス提案だ」

オリビエが喜んだ。

「え、嬉しいけど……ゆっくりしちゃっていいのかな？」
エステルがシェラザードに尋ねた。
「休める時に休んでおく。それも遊撃士の仕事のうちよ。食事するなり、散歩するなり、しばらく自由行動にしましょう」
シェラザードがそう言うと、エステルたちは自由に行動し始めた。

エステルとヨシュアは外へ出た。
「うわ～。すっごくキレイな眺め……。まるで湖が光ってるみたい」
エステルがヴァレリア湖の様子を見て感動した。
「対岸に王都があるはずだけど、霞んでいてよく見えないな……。さすが王国最大の湖だね」
ヨシュアが言った。
「うーん、釣りをしたらめちゃめちゃ楽しそうだけど……」
エステルが悩んだ。
「やってきたら？いい気分転換になると思うよ」
ヨシュアが言った。
「うん、そうしよっかな。ヨシュアはどうするの？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「僕は、そうだな……。読みたい本があるし、そこの席でゆっくりするよ」
ヨシュアはエステルと違って消極的だ。
「もー、ジジくさいなぁ。男の子だったら、もうちょっと体を動かさないと」
エステルがつれないヨシュアに言った。
「あはは……そういうのは君に任せるよ」
ヨシュアは近くのテーブルに座った。
「ちぇっ……付き合いが悪いんだから。まあいいや。さっそく場所を決めよっと」
「うーん、そこの桟橋あたりが良さそうだけど……」

エステルが桟橋の周りの様子を確かめた。
「うん……やっぱりここがベストみたい。ふっふっふ、早速始めよっかな？」
エステルが釣りを始めようとした時、
「しまった……あたし、竿持ってない。宿屋のヒトが貸してくれないかな？」
エステルは宿屋の人に竿を借りに行った。

「あの……。貸し竿ってありませんか？」
エステルがソフィーナに尋ねた。
「ええ、ございますよ」
ソフィーナは竿を取り出した。
「こちらになります。宿泊の方には無料です」
ソフィーナはエステルに竿を渡した。
「え、本当？ラッキー？」
エステルは貸し竿を受け取った。
「へー、貸し竿にしてはなかなか良いロッドね。それじゃ、遠慮なく借りちゃいます」
エステルは桟橋に向かった。
「ふふ……楽しんできてくださいね」

再び桟橋
「さてと、早速始めましょうか」

エステルはしばらくの間、のんびりと釣りを楽しんだ。

「ふ～、もう夕方か……」
「うん！なかなかの戦果ね。見て見て、ヨシュア。こ～んなに釣っちゃったわよ！」
エステルは後ろのテーブルに座っているヨシュアに声をかけた。
しかし、ヨシュアの姿はなかった。
「……あり」
「ヨシュア？」
エステルはヨシュアが座っていたはずのテーブルに走っていった。
「あれ、これって……」
テーブルの上には『実録・百日戦役』という本があった。
「ヨシュアの忘れ物かな？いつも澄ましてるクセに割と抜けてるトコがあるのよね～。仕方ない、あたしが届けてやるか。それにしても、ヨシュアってばどこに行っちゃったのかな？」
エステルはヨシュアを探し始めた。

―外れの桟橋
「……」
そこには無言でヨシュアが佇んでいた。
「よっ、少年。こんなところで何をたそがれておるのかね？」
エステルがヨシュアの方へ向かっていった。
「はは……たそがれてなんかいないけどね。もう、釣りはいいの？今からが入れ食いじゃない？」
ヨシュアが言った。
「うん、もう充分。久しぶりに堪能しちゃったわ。あ……そうだ」
エステルはヨシュアに『実録・百日戦役』を差し出した。
「も～、読書するとか言って置きっぱなしにしちゃってさ。勿体ないオバケが出るわよ～」

エステルが少し古い言い回しをした。
「……ああ……ちょうど読み終わったばかりでさ」
「目が疲れたから気分転換に散歩してたところなんだ」
ヨシュアが言った。
「こーら」
エステルがヨシュアに近づいた。
「な、なに？」
ヨシュアが一歩後ずさった。
「まーた1人だけでなにか溜め込もうとしてるな？分かるんだってば、そーいうの」
エステルがヨシュアを白い目で見た。
「……」
ヨシュアが閉口した。
「大体ね、フェアじゃないわよ」
「ヨシュアだって、あたしが落ち込んだ時には慰めるクセに」
「あたしじゃ父さんみたいに頼りにはならないと思うけど……」
「それでも、こうやって一緒にいてあげられるんだから」
エステルがヨシュアの隣に立った。
「……」
「……ごめん……」
ヨシュアが呟いた。
「こういう時には、ありがとう、でしょ？ヨシュアって頭はいいけど肝心なことが分かってないんだから」
エステルが指摘した。
「はは、本当にそうだな」
「ありがとう……エステル」
ヨシュアが笑った。
「うむうむ、苦しゅうない」
「あ……そうだ！ハーモニカを1曲。お礼はそのあたりでいいわよ」
エステルが言った。

「おおせのままに……」
ヨシュアがハーモニカを取り出した。
「『星の在り処』でいいかな？」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「うん」
エステルが頷いた。

そして、ヨシュアが吹き始めた。

「えへへ、なんでかな。ハーモニカの音って夕焼けの中で聞くとなんだか泣けてくるよね」
エステルが目元を拭った。
「……」
「相変わらず……何も聞かないんだね」
ヨシュアが目を背けて言った。
「……」
「あは……約束したじゃない。話してくれる気になるまであたしからは聞かないってね」
エステルが言った。
「それに5年も経つんだもん。なんか、どーでも良くなったし」
エステルが前向きに言った。
「そう……5年もだよ」
「どうして何も聞かずに一緒に暮らせたりするんだい？」
「あの日、父さんに担ぎ込まれたボロボロで傷だらけの子供を……」
「昔のことをいっさい喋らない得体の知れない人間なんかを……」
「……どうして君たちは受け入れてくれるんだい……？」
ヨシュアがエステルに向き直って言った。
「よっと」

エステルが腰を上げた。
「そんなの当たり前じゃない。だってヨシュアは家族だし」
エステルが事も無げに言った。
「……」
ヨシュアはただ口を開けている。
「前にも言ったけど、あたし、ヨシュアのことってかなーり色々と知ってるのよね」
「本が好きで、武器オタクで、やたらと要領がよくて……」
「人当たりはいいけど、他人行儀で人を寄せつけないところがあって……」
エステルがべらべらと並べ立てた。
「ちょ。ちょっと……」
ヨシュアが制した。
「でも、面倒見は良くて実はかなりの寂しがり屋」
エステルは笑って言った。
「……」
ヨシュアのがまた口開いたままになった。
「もちろん、過去も含めて全部知ってるわけじゃないけど……」
「それを言うなら、父さんの過去だってあたし、あんまり良く知らないのよね」
「だからと言って、あたしと父さんが家族であることに変わりはないじゃない？」
「多分それは、父さんの性格とか、クセとか、料理の好みとか……」
「そういった肌で感じられる部分をあたしがよく知ってるからだと思う」
「ヨシュアだって、それと同じよ」
エステルが満面の笑みを浮かべた。
「……」
「本当に……君には敵わないな。初めて会った時……飛び蹴りをくらった時からね」

ヨシュアが静かに言った。
「え……。そ、そんな事したっけ？」
エステルがたじろいだ。
「うん、ケガ人に向かって何度もね」
ヨシュアが言った。
「あ、あはは……幼い頃のアヤマチってことで」
エステルが苦笑しながら言った。
「はいはい。……ねえ、エステル」
ヨシュアがエステルに向かって言った。
「なに、ヨシュア？」
エステルが向き直った。
「今回の事件、絶対に解決しよう。父さんが捕まっているかどうか、まだハッキリしてないけど……。それでも、僕たちの手で、絶対に」
ヨシュアが真剣な眼差しで言った。
「うん……」
「モチのロンよ！」
エステルが力強く頷いた。
「ふふ……そろそろ宿に戻ろうか？食事の用意もできてる頃だろうし」
ヨシュアが言った。
「うん、お腹ペコペコ～。しっかりゴハンを食べて真夜中に備えなくちゃね」

そうして、エステルとヨシュアは宿に戻ろうとしたその時、
「あ、忘れてた」
「ヨシュア、この本……」
エステルが途中で立ち止まり、ヨシュアに本を差し出した。
「ああ……。もう、読み終わったんだよな……。かさばるし、どうしようかな」
ヨシュアが迷った。

「難しい本みたいだけど……あたしでも頑張れば読める？」
エステルが本を見て言った。
「大丈夫だと思うよ。よく知ってる内容も多いから。エステル、読んでみる？」
ヨシュアが言った。
「うん、挑戦してみようかな」
エステルは『実録・百日戦役』を貰った。
そして、宿へと戻った。

第2章　消えた飛行客船（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回はエステルたちが見回りを開始します。

第2章　消えた飛行客船（18）

―川蝉亭　1階食卓

そこには机に突っ伏したオリビエがいた。

「君たち……助けてくれたまえ……。さ、さすがに……もう限界だ……」

オリビエが完全に酩酊状態に陥っていた。

「うっわー、すごい。少しだけ見直しちゃったわ」

エステルはオリビエの心配することなく言った。

「確かに、シェラさんに付き合って意識が残っているのは珍しいかもね」

ヨシュアも同様だ。少しは心配するべきところだと思う。

「んふふ……いいところに来たじゃな～い♪おね～さんと一緒に飲みましょ？いいでしょ、いいでしょ、ね～ん？」

シェラザードが駄々をこねだした。こちらは相変わらず酒グセが悪いうえに、タチが非常に悪い。

「あ、あたしたちはこれからゴハン食べるからダメだってば」

エステルがきっぱりと拒んだ。

「やだやだ～っ。一緒に飲むったら飲むの～っ！飲んでくれないと暴れてやる～っ！」

最悪だ。子供よりさらにタチが悪い。

「だ、駄々っ子モードに入った……」

エステルはお手上げだ。

「シェラさん、オリビエさんがまだ大丈夫みたいな感じですよ。付き合ってもらったらどうですか」

ヨシュアがオリビエにパスした。意外と冷酷ですね、ヨシュア君……。

「……（ジー）」

「な～んだ、まだイケルわね？」

シェラザードがオリビエの様子を見て微笑んだ。
「ひっ……」
「ヨ、ヨシュア君……あんまりな仕打ちじゃないか？」
オリビエが真っ青になった。
「さ、さすがに可哀想じゃない？」
エステルが言った。
「そうかな？」
ヨシュア、酷い！
「でも意地悪なキミも……小悪魔的で……ステキだ……。……うふふ……」
お決まりのオリビエの変態発言。まだまだいけそうな様子だ。
「確かに心配なさそうね」
「それじゃあ僕たちは、カウンターの方に行こうか。邪魔するのもなんだしね」
「うん、そうね」
エステルとヨシュアはオリビエたちをほったらかして行ってしまった。
「シェラ君……お願いだから、それ以上は注がないで……」
「……ＡＡＨＨＨ

エステルはオリビエの様子を見て言った。
「いやあ、飲んだ飲んだ。最近色々あって飲めなかったから、久しぶりに堪能しちゃったわ？」
シェラザードはもうすっかり酔いがさめている様子だ。
「もう完全に素面（しらふ）だし……。シェラさん、何か特殊な訓練でも受けているんじゃないんですか？」
ヨシュアがその様子を見て言った。確かに、そう思いたくなる。
「うーん、ゲテモノ酒のたぐいは一座にいた頃から飲んでたけど。サソリ入りとか、マムシ入りとか。それで酒に強くなったのかしら？」
シェラザードが笑いながら言った。そんな酒、子供の頃からよう飲めましたね……。
「いや……それは違うんじゃないかなぁ」
ヨシュアは苦笑して否定した。
「それよりもコイツ、どうするの？しばらく使い物にならないわよ」
少しは心配しましょうよ、エステルさん……。
「このまま寝かせておきましょう」
「……ここから先は、空賊たちと直接対決になる可能性が高いわ。やっぱり、ただの民間人を巻き込むわけにはいかないからね」
シェラザードが言った。さっきの大酒飲ませは、それを考えての行動だったのか！？
「え、もしかして……。付いて来させなくするために、わざとオリビエを酔わせたとか？」
エステルが言った。
「えっ……。……。あ、当ったり前じゃない。深慮遠謀のタマモノってヤツよ」
シェラザードが少し間を空けて慌てて言った。そんな事は考えていなかったようだ。
「その間は何なのよ……」
「絶対ナチュラルに楽しんでたね」

2人は呆れて言った。
「さてと、夜も更けてきたわ。早速、宿の周辺を回りながら張り込みを始めるとしますか」
シェラザードがエステルたちの発言を無視して言った。
「あ、ごまかした」
エステルが言った。
「ええい、おだまり」
理不尽だ。
「とりあえず、昼間に話を聞いた外れの桟橋まで見回りをするわよ」
シェラザードが言った。
「はい、わかりました」
ヨシュアが返事した。
「それじゃ、レッツ・ゴー！」
エステルたちは見回りを始めた。

第2章　消えた飛行客船（18）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ、空賊団と本拠地で本格戦闘が始まります。ついに来たという感じですね。第2章ももうすぐ完結します。

第2章　消えた飛行客船（19）（前書き）

いよいよ空賊団アジトに潜入です！

第2章　消えた飛行客船（19）

―外れの桟橋

「うーん、誰もいないわね～。何の用事か知らないけどあの兄妹、本当に現れるのかな」

エステルが呟いた。

「確かに確証はないけど……ロイドさんの情報が正しければ、きっと現れるんじゃないかな」

ヨシュアが言った。

「でも、あまり動き回ったら見つかって逃げられる可能性があるわ。空賊たちは、街道から来るみたいだし、そちらを見張っておいた方がよさそうね」

シェラザードが言った。

「確かに……それじゃ、どのあたりで見張ろうか？」

エステルが尋ねた。

「街道方面がチェックできて、向こうには気付かれない場所……。そんな場所が良さそうだね」

ヨシュアが言った。

エステルたちはヨシュアが言った場所を探した。

そして、川蝉亭のテラスで見張ることにした。

しばらくして、エステルが何かを見つけたようだ。

「あ、あれは……」

空賊団兄妹のキールとジョゼットが街道から現れた。

そのまま、外れの桟橋へ向かった。

「さてと……少し早い時間に着いたか」
キールが言った。
「そうだね。あーあ、昼間だったらここで食事とか出来るのにサ」
ジョゼットがつまらなさそうに言った。
「無茶言うなよ。俺たちゃお尋ね者なんだぞ？ほれ、さっさと行くぞ」
キールが先に歩き出した。
「あ、待ってよ、キール兄！」
ジョゼットが慌てて追いかけた。

「……やっぱりあいつらか」
エステルがビンゴという感じで言った。
「外れにある桟橋の方に向かったみたいだね。何をするつもりなんだろう？」
ヨシュアが言った。
「それは見てのお楽しみってね。気付かれないように近づくわよ」
エステルたちは兄妹の後を静かに追った。

―外れの桟橋
「さすがにまだ来てないか。しかし、あの連中、いつも時間通りに来るよな」
キールが言った。
「ボク、あいつらキラーイ。なんか偉そうだし……それにちょっと恐いんだもん」
ジョゼットが言った。
「確かに……得体のしれん連中ではあるな。だが仕方ないさ。ドルン兄貴の命令だからな」

キールが言った。

「（ここなら大丈夫そうね……）」

「（うん、会話もバッチリ聞こえる……）」

エステルたちが陰からうかがっている。

「……」

「ねえ、キール兄……」

「ドルン兄、最近おかしくない？」

ジョゼットがキールに尋ねた。

「……」

キールは黙っている。

「だいたい変だよ。定期船を乗っ取ったのだって」

「確かに実入りは良かったけど、軍が本腰入れて介入してきたし……」

「遊撃士なんていう生意気な連中まで絡んでくるし……」

「それに人質を取って身代金まで要求するなんて……」

「さすがに、やりすぎだと思う」

ジョゼットがキールに言った。

「何だかんだ言って、お前も女の子なんだなぁ……。心底、悪党には成りきれねぇか」

キールが溜息まじりに言った。

「なっ！？」

ジョゼットが驚いた。

「誉めてるんだよ、これでも。辛いんだったらお前だけでも故郷に戻っていいんだぜ？高望みさえしなけりゃ、あそこは暮らしやすい場所だ。この国（リベール）よりは、ちと寒いけどな」

キールがジョゼットに諭すように言った。

「い、いくら兄ぃでも怒るぞ！？」
「だいたいボクがいなかったら食事も洗濯もままならないクセに。ボクがロレントに行ってた時の惨状を繰り返すつもりかよっ！？」
ジョゼットが怒りながら言った。どういう状況だったのかはご想像にお任せします。
「ぶるるっ……そいつはゴメンこうむりたいが。でも、ちったあ考えておけ。これ以上引き返せなくなる前にな」
キールが真剣に言った。
「……」
ジョゼットは黙った。
「ま、それはそれとして。確かにドルン兄貴の様子がちょいと変というのは同感だ」
「身代金の額を釣り上げるために時間を稼ぐってのも限度がある。その見極めがつかないほど兄貴はバカじゃないと思うが……」
キールが悩みながら言った。
「やっぱりさ……アイツが来てからじゃないの？そうとしか考えられないよ……」
ジョゼットが言った。
「確かに……連中を紹介したのもヤツだしな。何か吹き込まれたのかもしれねぇ」
キールが言った。どうやら、空賊兄妹の中でも問題があるそうだ。

「（アイツ？ヤツ？）」
「（ふむ、誰のことかしらね）」
エステルとシェラザードは考えている。
「（あ、あれは……）」
ヨシュアがなにかを見つけたようだ。
「（どうしたの？）」
エステルがヨシュアの方を向いた。

「（……来たみたいだよ）」
向こうからボートがやってきた。

「よう、おいでなすったな」
「相変わらず時間通りじゃねえか？」
キールがボートの上の仮面をかぶった黒装束の男に言った。
「フン、少しは遅れてくるなり早く来たりすればいいのにさ。まったく可愛げがない連中だよね」
ジョゼットが言った。
「フ……時間厳守が我々の習いでね。気に障ったのなら謝罪しよう」
黒装束の男が言った。
「た、単なるイヤミだよっ！ホント可愛げがないんだから……」
ジョゼットがムカッとして言った。イヤミはまったく通用しないらしい。
「こら、話が進まねぇだろ」
キールがジョゼットをとがめた。
「とりあえず……さっそくビジネスの話と行こう。その後の進展はあったのかい？」
キールが黒装束の男に向き直り尋ねた。
「ああ、ついに陛下が動かれた。ご自分の資産から身代金を拠出するおつもりだ」
黒装束の男が言った。
「そ、そうか……女王さんの財布からかよ……。いよいよ大詰めってわけだな」
キールがちょっと焦った。女王陛下の財布とは途方もない話だからだろう
「王国軍の方はどうなの？」
「ボクたちのアジトの場所に気づいたような気配はある？」
今度はジョゼットが尋ねた。

「まだのようだな。しかし、時間の問題だろう。遊撃士協会のメンバーが動いているという情報もある」
「いずれにせよ、成功の暁にはアジトを捨てることになるぞ？」
黒装束の男が答えた。
「ああ……どうせ偶然見つけた仮宿だ。兄貴だって未練はないはずさ」
キールがどうってことはないと言った。

「（また怪しげなのが現れたわね）」
「（シェラ姉、どうする？突入して一気にケリ付けようか？）」
エステルがシェラザードに尋ねた。
「（ふむ……それより良い考えがあるわよ）」
シェラザードが言った。
「（良い考え？）」
エステルが尋ねた。
「（あの兄妹が現れたってことは近くに空賊艇が停泊してるハズ）」
「（また逃げられたらかなわないし、先にそちらを押さえるのはどう？）」
シェラザードが言った。
「（なるほど……まずは足を奪うってことね）」
「（あたしは賛成だけど、ヨシュアは？）」
エステルが隣のヨシュアに尋ねた。
「（……）」
ヨシュアは険しい目つきのまま黙っている。
「（ヨシュア……？）」
エステルがヨシュアに再度尋ねた。
「（あ、ああ……）」
ヨシュアは気がついたようだ。
「（空賊艇を先に押さえる案か。うん、僕もその方がいいと思う）」

ヨシュアは何も無かったかのように言った。
「（……どうしたの？）」
「（なんか、顔が強張ってない？）」
エステルが心配そうにヨシュアに尋ねた。
「（いや……）」
「（うん、きっと気のせいさ）」
ヨシュアが自分自身に言い聞かせるように言った。
「（……？）」
エステルはヨシュアの方を見ている。
「（あまり時間はないわ……）」
「（彼らの話が終わるまでに街道に出て空賊艇を探すわよ）」

エステルたちは早速空賊艇を探し始めた。
空賊艇が停泊できそうな場所を調べていった。
そして―

「なるほど《琥珀の塔》の前か。確かに街道から外れてるから停泊場所としてはうってつけね」
岩陰に隠れながらシェラザードが言った。
「《琥珀の塔》ってロレントの《翡翠の塔》と同じような塔だったっけ？」
エステルが尋ねた。
「《四輪の塔》と呼ばれている古代遺跡の１つだよ」
「それでシェラさん……すぐに彼らを制圧しますか？」
ヨシュアがシェラザードに尋ねた。
「そうね……。前に遭遇した時と較べて手下の人数が倍以上いるけ

ど……」
シェラザードは迷っている。下手をするとタイムリミットになる可能性があるからだ。
「大丈夫だって。制圧できない数じゃないよ。このまま一気にケリを……」
エステルが言おうとした時、
「フッ……それはどうかと思うけどね」
オリビエが草陰から飛び出してきた。
「やあ、待たせてしまったね？」
オリビエはいたって元気そうに言った。
「オ、オリビ……」
エステルが驚いて大声をあげそうになった。
「静かに……あいつらに気付かれるよ」
ヨシュアが止めた。
「……（コクコク）」
エステルは口をふさいで頷いた。
「驚いたわね……。あの酔いつぶれた状態から、よくそこまで回復したもんだわ」
シェラザードが感心している。
「フッ、任せてくれたまえ。胃の中のものをすべて戻して、冷たい水を頭からかぶってきた」
オリビエ、執念の復活をここに遂げたり。
「あ、ありえない……」
「なんと言うか、執念ですね……」
全員呆れている。
「こんな面白そうな事を見逃すわけにはいかないからね。ちょうど宿から出たところで街道に出るキミたちを見かけて、ようやく追いついたという次第さ」
オリビエが笑いながら説明した。
「ツメが甘かったわね……。火酒に一気飲みでもさせておけば良か

ったかしら？」
シェラザードは残念そうに言った。それは危険すぎます……。
「それは確実に死ねるんで勘弁してくれたまえ……」
オリビエが顔面蒼白になった。
「それよりもキミたち。ここで空賊たちと戦うのは少々面白くないと思わないか？」
オリビエが気を取り直して言った。
「別に面白くなくてもいいの！」
エステルが怒った。
「いや、これは真面目な話」
「ここで戦って、ついでにあの兄妹を捕らえたところでだ。彼らがアジトの場所について口を割らない可能性だってある。それどころが、人質をタテに釈放を要求してくるかもしれない」
オリビエが真剣な眼差しで言った。
「何事にもリスクは付きものだわ。それとも、リスクを回避できるいいアイデアでもあるのかしら？」
シェラザードがオリビエに尋ねた。
「フッフッフッ……諸君、耳を貸したまえ」
オリビエが不敵な笑みをうかべた。
「いいけど……。息を吹きかけたりしたら、マジでぶん殴るからね？」
エステルが念を押した後、オリビエが説明した。その方法は後ほど。

「兄貴、お嬢！」
「お帰りなさい！結構かかりましたね」
「話が長引いたんスか？」
空賊たちが口々に言った。
「ああ……いよいよ大詰めだからな。王国軍の動向を含めて、かな

りの情報を仕入れてきた」
キールが言った。
「それじゃ、いよいよ……」
空賊たちが期待を膨らませた。
「うん、数日のうちに身代金をいただけそうだよ。ボクたちの夢に向かって一歩前進といったところだね」
ジョゼットが言った。
「ひゃっほーっ！」
「やったぜっ！」
空賊たちが快哉（かいさい）をあげた。
「こらこら。まだ喜ぶのは早いっての。とりあえずアジトに戻ってドルン兄貴に報告するとしよう」
「みんな、急いで撤収だよ！」
キールとジョゼットが空賊たちに言った。
「がってんだ！」
空賊たちが期待を胸に叫んだ。
どうでもいいけど、この合言葉みたいなものは何とかできないのか？
正直、子供じみていると思う……。

―空賊艇　山猫号
「気温２１度、湿度１５％」
「南南西、風速１２アージュ」
「周囲の導力反応は無しだよ」
ジョゼットが言った。
「軍の巡回は無さそうだな……。オーバルエンジン始動。船体各部への導力伝達を開始」
キールが空賊たちに言った。
「アイサー。オーバルエンジン始動」

「各部への導力伝達を開始」
「オーバルフローター作動開始」
「オーバルドライバー作動開始」
「スタビライザーもＯＫっす！」
空賊たちが着々と発進の準備をしていった。
「よーし……。カプア空賊団所属、《山猫号》――離陸（テイクオフ）！」
キールが叫んだ。
「アイアイサー！」

そうして、真夜中に《山猫号》は空に飛びだった。

「駆動率を４０％に固定。そのまま巡航速度を維持せよ。ただし、いつでも戦闘速度に切り換えられるようにしとけよ」
キールが言った。
「アイサー」
空賊が了解した。
「やーれやれ。夜明け前には戻れそうだね」
ジョゼットが言った。
「ああ。とっとと眠りたいところだがドルン兄貴に報告しないとな」
キールが言った。

―エンジン室
「……あれ……」
「なんか音がしなかったか？」
空賊の１人が何かに気付いたようで別の空賊に聞いた。
「いや？聞こえなかったけど」
もう１人の空賊が言った。
「妙だな。たしか船倉の方から……」

空賊が船倉の方へ降りて行った。
「うーん……ネズミでもいるのかな？ヒマを見て掃除でもするかね」
そう言って戻っていった。

階段の下に隠れていたエステル。かなり緊張していた様子だった。
ヨシュアたちもどこかに隠れていたのだ。いわゆる忍び込みをしていたのだった！

―空賊団アジト
次々と降り立っていった空賊たち。
「ふわ～、眠い、眠い。ここに来てから昼夜逆転の生活だからな」
見張り役の空賊ライルが欠伸（あくび）をしながら言った。
「まあ、もう少しの辛抱でこんな生活ともオサラバさ。ドルンのお頭に付いていけば間違いなしってもんだぜ」
もう1人の空賊ロイルが言った。
「しかし最近のお頭……ちょっとばかり変じゃねえか？おっかないっていうか気安く話せねえっていうか」
ライルが言った
「お前ね……そんな滅多なこと言うなよ。兄貴やお嬢に聞かれたらぶっ飛ばされるぞ？」
ロイルが言った。
「で、でもよ……」
ライルは納得いかない様子だ。
「寝不足で疲れてるんだよ。とっとと片づけを終わらせて、ゆっくり休むとしようぜ」
ロイルが言った。
その時、
「今すぐ休んでもオッケーだけど？」

エステルたちが武器を構えて出てきた。
「あ」
「お前たちは……！」
空賊たちが驚いた。
「遅いってば！」
エステルたちが突入した。

難なく空賊たちを片付けたエステルたち。
「フッ、無事、潜入できたようだね」
オリビエが言った。
「まったく……こんなに上手くいくとはね。今回ばかりはあんたに感謝しなくちゃいけないわね」
シェラザードがオリビエに言った。
「で、でもさ～。メチャメチャ焦ったわよ。隠れてる所を発見されたらどうするつもりだったの？」
エステルが言った。エステルはピンチでしたね。
「いや、発見されたとしても、その時は空賊艇を制圧すればいい。飛行船の内部は狭いから多数との戦いにも有利に働くしね。オリビエさん……そこまで考えていたんですか？」
ヨシュアがオリビエに尋ねた。恐いことをさらりと言いますね、ヨシュア君。
「いや、まったく」
オリビエがすぐさま返答した。
「敵地潜入というシチュエーションが単に面白そうだと思っただけさ～」
オリビエが言った。どこまで面白さを求めるヤツなんだ？
「あ、あんたねぇ……」
エステルが呆れ顔をした。

「まあ、いいじゃない。こうして無事潜入できたんだし。それよりも……ここは《霧降り峡谷》みたいね」
シェラザードが周りを見て言った。
「《霧降り峡谷》ってボースとロレントの境にある？そっか……だから外が白く霞んでるのか」
エステルが納得した。霧降り峡谷は年中霧が深い、複雑な構造を持つ峡谷である。
「それと、大型船は侵入できない高低差の激しい入り組んだ地形……。シェラさんの推測、どうやら当たってたみたいですね」
ヨシュアがシェラザードに言った。
「ま、せっかくの推測もあまり役に立たなかったけどね」
「さてと……あまりグズグズできないわ。空賊たちを制圧しつつ、監禁されている人質の安全を確保するわよ。もちろん……カシウス先生もね」
シェラザードが言った。
「うん……！」
「了解です！」

エステルたちは早速アジト内部へ潜入した。

第2章　消えた飛行客船（１９）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよアジト侵入を果たしたエステルたち。人質解放と空賊逮捕は成功するのか！？

第２章　消えた飛行客船（２０）（前書き）

なんだかんだで、第２章が２０話まで行っちゃいました。次回で第２章が完結します。て、言うか完結させようと思います。次回に乞うご期待！！

第2章　消えた飛行客船（20）

―空賊アジト　部屋の1つ
男たちの話し声が聞こえる。
「手下がいるみたいだね。……突入してみようか？」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「モチのロンよ！」
エステルたちが突入した。

「あん……？」
「なんだ、新入りか？」
空賊の1人アロンが呑気に言った。バカだ……。
「ガクッ……そんなわけないでしょ！」
「緊張感のない連中ねぇ」
エステルが拍子抜けに言った。
「え、でもよ……それ以外に誰がいるって、」
「……」
「……あの、まさか侵入者？」
気付くのがあまりにも遅い。状況判断能力は最低のようだ。
「ピンポン？」
オリビエが言った。
「遊撃士協会の者です。降伏した方が身のためですよ」
ヨシュアが空賊たちに言った。
「じょ、冗談じゃねえ！」
「返り討ちにしてやらあ！」
空賊たちが武器を構えてかかってきた。

「ううう……」
空賊たちが倒れた。
「ちょっと！人質はどこにいあるの？正直に言わないと、ひどい目に遭わすわよ！」
エステルが空賊アロンに尋ねた。
「か、勝手にしやがれ。誰が喋るもんかよ……」
アロンは口をつぐんだ。
「あーら、そう。エステル、どいてなさい」
シェラザードの目が剣呑（けんのん）に輝いた。
「う、うん……」
エステルがどいた。
シェラザードが鞭でアロンを打った。
「ぎゃっ……！」
アロンが痛そうに叫んだ。
「ふふ、手加減しているから簡単に気絶できないでしょう？素直に話してくれればゆっくりと寝かせてあげるわ」
酷い。
「ひ、ひいいいい……。この下の階にいるっ！俺たちの仲間が守ってるんだ！」
アロンは後ずさりしながら口を割った。
「素直でよろしい。キールとジョゼットっていう首領格の連中はどこにいるの？」
シェラザードが続いて聞いた。
「ふ、ふざけるなっ！誰がそこまで喋るかよっ！」
アロンは今度は喋ってくれなさそうだ。けっこう忠義が厚いですね。
「ふーん、人質はともかく自分たちのボスは売れないか」
「仕方ない、勘弁してあげるわ」
シェラザードは次の瞬間、アロンに飛び掛って鞭で思い切り打った。
「う～ん……」

空賊が吹っ飛んで気絶した。酷すぎる！
「うっわ～……相変わらず容赦ないわね」
エステルがえげつな～といった様子で見ていた。
「失礼ね。これでも手加減してるんだから」
シェラザードが言った。果たしてそうか？
「確かに、そこはかとなく気持ちよさそうな感じではあるね」
オリビエが言った。それが今の様子を見たセリフか？
「あら、試してみる？」
シェラザードが鞭を構えた。
「いや、またの機会に」
オリビエがきっぱりと断った。
「人質が監禁されているのは下の階みたいですね。急ぎましょう」
エステルは下の監禁部屋へと向かった。

下の階へ降りたところでエステルが口を開いた。
「それにしても……ここって一体なんなのかな？あいつらが造ったにしては大きすぎるし、古めかしいけど」
エステルが言った。
「大昔の城塞のような雰囲気ね。その頃の隠し砦を、アジトとして使っているんじゃないかしら？」
シェラザードが言った。
「《大崩壊》から数百年以上、戦乱の世が続いたそうだからねぇ。こういうものが残っていてもそれほど不思議ではないだろう」
オリビエが言った。
「《大崩壊》？」
エステルが聞きなれない単語を尋ねた。
「１２００年前にあったっていう古代ゼムリア文明の崩壊のことだ

よ。天変地異が原因と言われているんだ」
ヨシュアが説明した。
「ああ、前にアルバ教授が言ってた……」
エステルが頷いた。
「しかし、発見されにくいとはいえ、アジトにするには少々悪趣味だわね。魔獣までうろついてるし……男所帯なんてこんなモノかしら？」
シェラザードがヨシュアとオリビエを見て言った。
「あの、シェラさん……」
「それは激しく違うと思うよ」
ヨシュアとオリビエが呆れて言った。
何はともあれ再び監禁部屋へとエステルたちは向かった。

―監禁部屋前
男たちの話し声が聞こえる。
「また話し声が聞こえる。……突入してみようか？」
ヨシュアが尋ねた。
「迷ってられないわ、行くわよ！」
エステルが頷いた。
「お、お前たちは！？」
「遊撃士ども！？」
「ど、どこから入ってきた！？」
空賊たちが慌てた。
「どうやら、その奥の部屋に人質が監禁されているみたいね。大人しく降伏すればよし。さもなくば……」
シェラザードが鞭をならした。
「ふ、ふざけるな！」
「やっちまえ！」

空賊たちが飛びかかってきた。

―その頃　監禁部屋内の奥

「な、なんや……外で何が起こってるんや？」

トリノが言った。

「ふむ、ケンカというわりには、いささか派手すぎるようですな」

グラント船長がどことなくのんびりとした口調で言った。

「みんな、無事！？」

エステルたちが急いで入ってきた。

「遊撃士協会の者よ。皆さんを救出しに来たわ」

シェラザードが言った

「ほ、ほんまか……ワイら、助かったんか！？」

トリノが言った。なぜか大阪弁……

「見張りは片付けました。とりあえず安心してください」

ヨシュアが言った。

「ほ、本当か……！？」

「た、助かったの！？」

人質たちは半信半疑でも喜んでいる。

「私は、定期船の《リンデ号》の船長を務めるグラントという。本当にありがとう……何と礼を言ったらいいか」

グラント船長が言った。

「お礼は脱出の後でね。ところで……」

エステルが辺りを見渡した。

「……あれ？あれれ？」

エステルが見回してもカシウスの姿がなかった。

「いないみたいだね……」

ヨシュアが言った。

「どうかしたのかね？」

グラント船長が尋ねた。
「え、えっと……。人質のヒトって、これで全部？」
エステルが尋ねた。カシウス・ブライトが見当たらないようだ。
「ああ、その通りだが……。《リンデ号》に乗っていた乗客・乗員はこれで全部だよ」
グラント船長が言った。
「うそ……」
エステルが呆然とした。ここまで来たのにと言った感じだ。
「カシウス・ブライトという人が定期船に乗っていませんでしたか？遊撃士協会の人間なんですが……」
ヨシュアが尋ねた。
「カシウス・ブライト……？どこかで聞いたことがあるような」
グラント船長が首をひねった。
「あ、あの船長……あのお客様じゃありませんか？離陸直前に船を降りられた……」
乗務員クラリスが言った。
「ああ！そう言えばそんな人がいたな」
グラント船長が手を打った。
「ど、どーゆうこと！？」
エステルが尋ねた。かなり慌てている。
「いや、ボースを離陸する直前に船を降りたお客さんがいたんだよ。王都から乗ってきた男性で確かに、そんな感じの名前だった」
グラント船長が言った。
「あ、あんですってー！だ、だって乗客名簿には……」
エステルが驚いた。
「なにせ離陸直前の下船だったから、書類の手続きが間に合わなくてね。ロレント到着後に手続きするはずが空賊に襲撃されて、そのままなんだ」
グラント船長が言った。
「……（パクパク）」

エステルは言葉を失っている。
「なるほど、そういう事ですか。父さんが空賊に捕まるなんて変だとは思っていたけど……」
ヨシュアは納得している。
「ふう……ようやく疑問が氷解したわね」
シェラザードが言った。
「ハッハッハッ、それは重畳（ちょうじょう）」
オリビエが笑った。
「ちょ、ちょっと待ってよ。そ、それじゃ……父さんは何をしているわけ？これだけの騒ぎになってるのにどうして連絡を寄越さないの！？」
エステルが周りに意見を求めた。今は到底分かることではない。
「落ち着いて、エステル。確かにそれは気になるけど、今ここで考えても仕方がない。ここにいる人たちの安全を確保するのが優先だよ」
ヨシュアがエステルに言った。
「あ……うん。わかった、今は忘れる」
エステルが言った。
「皆さん、我々はこれから空賊のボスの逮捕に向かうわ。申し訳ないけど、もう少しだけここで辛抱していてちょうだい」
シェラザードが人質に言った。
「あ、ああ……どうかよろしくお願いする」
グラント船長が言った。
「こうなったら腹くくったわ。ワイらの命、アンタらに預けたる。せやから、あんじょう頑張りや！」
トリノが言った。大阪弁が連発や。
「うん、まかせて！」
エステルたちは空賊のボスの部屋を探し始めた。

―空賊団アジト　最下層
聞き覚えのある声が部屋から聞こえてきた。
「ここは……」
「うん……ここが首領の部屋みたいだね」
エステルたちは様子を見て突入することにした。

「ぐふふ……女王が身代金を出しやがるか。これで貧乏暮らしともオサラバだな」
カプア空賊団首領のドルンが言った。
「兄貴、油断は禁物だぜ。身代金が入るのはこれからだ」
「うん、まずは人質解放の段取りを決めなくちゃね」
キールとジョゼットが言った。
「人質解放？おいおい、どうしてそんな面倒くさいことをしなくちゃならねえんだ？」
ドルンが不思議そうに言った。
「え……」
ジョゼットが呆然とした。
「そんなもん、ミラだけ頂いて皆殺しにすりゃ済む話じゃねえか。生かしておく必要はねえだろう」
ドルンが言った。
「ド、ドルン兄……？」
「じょ、冗談キツイぜ……」
ジョゼットとキールは焦った。予想外の発言に対応できない様子だ。
「連中には俺たちの顔をしっかり覚えられてるんだぜ？リベールから高飛びしても足がつくかもしれねえだろうが」
ドルンが言った。
「だ、だって年寄りとか小さな子供だっているんだよ？本当に殺し

ちゃうつもりなの!?」
ジョゼットが必死に引き止めた。
「まったく、おめぇときたらいつまで経っても甘ちゃんだな。ママゴトやってんじゃねえんだぞ?」
ドルンは全く聞き入れない。
「そ、そんな……ボク……」
ジョゼットは愕然としてうなだれた。
「兄貴……悪いが俺もそれだけは反対だ。そこまでやっちゃあ空の女神(エイドス)だって許しちゃくれん」
「それに……血塗れのミラで故郷を取り戻したくないんだよ」
キールが言った。
「……」
「キールよ、おめぇ……いつからそんな偉くなったんだ?」
ドルンが静かに言った。
「えっ……」
キールが聞き返した。
「なめた口叩くんじゃねえ!」
ドルンが手元にあった瓶をキールに投げつけた。
「がっ!」
キールに瓶が直撃し、その場でうずくまった。
「キール兄!?」
ジョゼットがキールの元に駆け寄った。
「がはは、なにが故郷だ!」
「せっかく大金が入るのに今更あんなしみったれた土地を取り戻してどうするつもりだよ? ハッ、南のリゾートあたりで豪遊するに決まってるだろうが!」
ドルンが言い張った。
「なん……だって……?」
キールがうずくまったまま言った。
「それでミラが無くなったら、また飛行船を強奪すりゃあいい。そ

れが、これからの《カプア空賊団》ってやつだぜ」
「ぐわーっはっはっはっ！！」
ドルンが大声で笑った。正直、イカれたおっさんだな、聞く限り。
「ドルン兄……どうしちゃったの……？」
「本当にどうしちゃったのさぁ！」
ジョゼットが叫んだ。
その時、
「お取り込み中のところを悪いんだけどさぁ……」
「兄妹ゲンカは後にしてくんない？」
エステルたちが突入した。
「あ、あんたたち！？」
「遊撃士どもっ！？ど、どうしてこの場所に……」
空賊3兄妹が驚いた。
「フッ……薄情なこと言わないでくれ。キミたちがあの船で運んでくれたんじゃないか」
オリビエが言った。
「バ、バカな……何をふざけたこと言ってる……」
「……まさか」
キールが思いついたようだ。
「琥珀の塔の前に飛行艇を泊めてたでしょ？スキを見て忍び込んで船倉に隠れてたってわけ。いわゆる密航ってやつね？」
エステルが笑いながら説明した。
「ず、ずっこいぞ！この脳天気オンナっ！！」
ジョゼットが叫んだ。
「だ、誰が脳天気よ！」
「この生意気ボクっ子！！」
エステルがむっとした。そして負けじと言い返す。
「な、なんだと～っ！？」
「単純オンナ、暴力オンナ！」
ジョゼットも言い返す。

「あ、あんですって～！？」
子供だな。
「はいはい。口ゲンカはそのくらいで」
「……人質は解放したし他のメンバーも倒しました。残るは、あなたたちだけです」
ヨシュアがきっぱりと言った。
「遊撃士協会の規定に基づき、あなたたちを逮捕・拘束するわ。逆らわない方が身のためよ」
シェラザードが言った。
「うう……」
「くっ、くそー……」
怯むキールとジョゼット。
「キール、ジョゼット……。てめぇら、何やってやがる？」
その後ろでドルンが言った。
「す、すまねぇ兄貴……」
「ゴメンなさい……」
キールとジョゼットがドルンに謝った。
「ぐふふ、まあいい。大目に見といてやるよ。こいつらをブッ殺せば、それで済むわけだからなぁ」
ドルンが言った。
「あ、あんですって～っ！？」
エステルが怒った。
「がはは、馬鹿な連中だぜ！その程度の人数でこのドルン・カプアを捕まえようとするとはなぁ！」
ドルンが大砲のような武器を構えて撃った。
「きゃあ！？」
「導力砲を軽々と……！」
エステルたちが飛び退いた。
「キール、ジョゼット！さっさと得物を取りやがれ！」
ドルンが叫んだ。

「こいつらを血祭りにあげるぞ！」
恐いことを言うねえ。
キールたちが武器を構えて飛び掛ってきた。

何とかドルンたちを倒したエステルたち。
「つ、強い……。これが遊撃士か……」
キールが膝をつきながら言った。
「く、くっそ～……こんな女に負けるなんて～」
ジョゼットが悔しそうに言った。
「ふふん、思い知ったか？」
エステルが胸を張って言った。
「さてと、決着もついたし、大人しく降伏してもらうわよ。抵抗したりしたら……わかってるでしょうね？」
シェラザードは鞭をしごいてジョゼットに微笑んだ。
「ひっ……やだ、勘弁してくださいっ！」
ジョゼットが後ずさりした。
「トホホ……こんな終わり方ありかよ……」
キールは悲しそうに言った。同情の余地なし。
「……うーん……」
「あいたた……どうなってやがる。身体のあちこちが痛ぇぞ……」
「なんで俺……導力砲なんざ持ってるんだ？」
「……はて？」
ドルンが気絶から目を覚ましたようだ。しかも、意味不明なことを口走っている。
「兄貴？」
「ドルン兄？」
キールとジョゼットが不思議そうにドルンに話しかけた。
「おお、ジョゼット！ロレントから帰ってきたのか？こんな早く帰

ってきたって事は、やっぱ上手くいかなかったんだな」
ドルンが笑いながら言った。
「ふぇっ……？」
ジョゼットが素っ頓狂な声をあげた。
「がっはっは、ごまかすな。まあ、これに懲りたら荒事は俺たちに任せておけよ。ちまちました稼ぎだが、なあに、気長にやりゃあいい」
ドルンが相変わらず笑いながら言った。さっきとは全く様子が違う。
「ド、ドルン兄、何言ってるの？」
ジョゼットが焦った。
「あ、兄貴、しっかりしろよ」
「ジョゼットはとっくにロレントから戻ってきただろう。定期船を襲った直後に俺が迎えに行ったじゃないか？」
キールがドルンに説明した。
「はあ？定期船を襲うだとぉ？なに夢みたいな話をしてやがる。そんな危ない橋、渡れるわけないだろうが」
ドルンが言った。どういうことなんですかねえ？
「……」
「……」
キールとジョゼットは開いた口がふさがらない。
「（何言ってんの、コイツ？）」
エステルが危ない人を見るかのような目で見て、ヨシュアに尋ねた。
「（うん……言い逃れじゃなさそうだけど……）」
ヨシュアが囁いた。
「さっきから気になっていたんだが、この奇妙な連中は何者なんだよ？まさか新入りじゃねえだろうな？」
ドルンがキールたちに尋ねた。どうして空賊たちは新入りが大好きなんだろうか。
「残念ながら違うわね。あたしたちは遊撃士協会の者よ」
シェラザードが言った。

「はあ！？」
「な、何でこんな所に遊撃士がいやがるんだ！？」
ドルンが驚愕して叫んだ。
「ダメだこりゃ……ホントに忘れてるみたいね」
エステルがあきれて言った。
「ハッハッハッ。面白い展開になってきたねぇ」
オリビエが笑った。面白いか？
「忘れていようといまいと、逮捕することに変わりないわ」
「定期船強奪、人質監禁、身代金要求など諸々の容疑でね」
シェラザードが言った。
「定期船強奪……人質監禁、身代金要求だと！？キール！ジョゼット！こ、こりゃあ何の冗談だっ！」
ドルンが青ざめてキールとジョゼットに助けを求めた。
「ドルン兄ぃ……」
「聞きたいのはこっちだよ……」
「だが、兄貴のおかげで……チャンスができたぜ！」
キールがいきなり身を起こすと発煙筒を投げた。廃坑の時と同じものだ。
あたりがすぐに真っ白になった。
「ああっ！」
「しまった！2度も同じ手に……」
エステルたちはあわてている。
「お、おい……！」
「キール兄！？」
「話は後だっ！とにかくここを脱出するぞ！」
ドルンたちはその隙に逃げ出した。

「ごほごほ……」
「け、煙がノドに……」
オリビエが咳き込んでいる。

「早く部屋から出ましょう！」
ヨシュアがそう言うとエステルたちは部屋から出た。

「あいつら～。どこにいったの！？」
エステルがあたりを見渡した。
「上だ……飛行艇で逃げるつもりだよ！」
ヨシュアが言った。
「あ……！」
エステルが焦った。
「ここまで追い詰めて取り逃がすわけにはいかないわ！全力で追いかけるわよ！」
シェラザードが言った。
「うん！！」
「了解です！」
エステルたちが頷いた。
「ごほごほ……た、助かった……」
「ああ、何たる悲劇！ボクのデリケートな鼻腔が……」
今頃オリビエが出てきた。そしてアホ発言。悲劇というほどのものでもないな。
「ほら、オリビエも！急がないと置いていくわよ！」
エステルがオリビエを急かした。
「あわわ……ま、待ってくれたまえ！」
オリビエがあわててエステルたちを追いかけた。

そうして、エステルたちは急いでドルンたちを追いかけた。

第２章　消えた飛行客船（２０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ、空賊たちを追い詰め、そして倒した。しかし、詰めが少々甘かったようで、その場を逃げられた。空賊たちは飛行艇で逃げようとしている。果たして、エステルたちは追いつき、そして逮捕できるのか！？次回、空賊編最終回！！乞うご期待！！

第2章　消えた飛行客船（２１）（前書き）

いよいよ第2章が完結します。昨日は多忙のため更新できませんでした。
その分、今回は長めです。
それではお楽しみください。
感想、評価等お待ちしています。

第2章　消えた飛行客船（21）

―空賊団アジト　地下2階（1）
「待ちな、てめえら！」
「ここから先には行かせねえ！」
さっき倒したはずの空賊たちが行く手をさえぎった。
「も、もう復活したの？」
「なかなかタフな連中だね」
「ふん、どかぬと言うなら力づくで押し通るまでよ！」
エステルたちが感心した。

漆黒の牙　（ヨシュアの技）
「これで終わりだ……」
一撃必殺！

―空賊団アジト　地下2階（2）
「おっと！ここから上には行かせねえ！」
「人質を連れてとっとと帰りな！」
またもや空賊たちが現れた。
「また現れたか……一度負けたのに懲りないヤツら」
エステルが溜息をついた。
「首領たちを逃がすために時間稼ぎをするつもりですか？」
ヨシュアが空賊たちに尋ねた。
「へッ、兄貴たちにはいろいろ世話になったからな」
「恩返しをさせてもらうぜ！」
空賊たちが向かってきた。

漆黒の牙
「これで終わりだ……」
一撃必殺！

―空賊団アジト　地下1階
「けっ、おいでなすったか……」
「勝とうとなんて思うな！兄貴たちが逃げるまでの間、時間稼ぎができればいいんだ！」
空賊たちが叫んだ。
「フッ、自らを盾にして主人のためにつくすか……。愚かではあるが、なかなか天晴な心意気だ」
オリビエが言った。
「こちらも全力で応えるのが礼儀というものかしらね……。いくわよ！」

漆黒の牙
「これで終わりだ……」
一撃必殺！

―空賊団アジト　地上
そこにはドルンたちを確保した王国軍兵士たちがいた。ついでに、ナイアルとドロシーまでいた。
「へっ……」
「これは……」
エステルたちが驚いた。
「くそっ、まさか軍にここの場所を知られるとは！あの野郎、話が

違うじゃないか！」
あの野郎とは黒装束の男のことだろう。
「こ、こらっ！気安くボクに触るなよっ！」
ジョゼットが兵士たちに言った。
「おいおい……何がどうなってるんだぁ！？」
ただ1人、ドルンだけが状況を全く把握できていなかった。
そのまま王国軍兵士たちが警備飛行艇にドルンたちを連行した。
「は～、あの人たちが空賊さんたちのボスですか。女の子もいるなんて、なんかビックリですねぇ」
ドロシーが感心している。
「無駄口叩いてないで、とにかく撮りまくれっ！こんなスクープ、滅多にあるもんじゃねえ！」
ナイアルがドロシーを急かした。とにかく必死だった。

その時、リシャール大佐とモルガン将軍が現れた。
「どうだ、ナイアル君。いい記事は書けそうかな？」
リシャール大佐がナイアルに尋ねた。いつの間に知り合ったんだか……。
「そ、そりゃあもちろん！連れてきてくれて、ほんっとーに感謝してますよ！あっ、ついでですから大佐も撮らせてもらえませんかねぇ？」
ナイアルが頭を下げた後、リシャール大佐に尋ねた。図々しいったらありゃしない。
「ふむ……閣下、よろしいですか？」
リシャール大佐がモルガン将軍に尋ねた。
「勝手にするがいい。今回の作戦はお前の立案だ。正直、大した手並みだったぞ」
モルガン将軍がリシャール大佐に言った。
「いや、情報部のスタッフの分析が正確だったからです。それと、そこにいる諸君の協力のたまものでしょうね」

リシャール大佐がエステルたちの方を向いて言った。
「なに……？」
モルガン将軍が驚いた。気づいてなかったんかい！
「えっと……まだ状況が掴めないんだけど。コレ、どうなっちゃてるの？」
エステルが言った。無理もないだろうね。
「お、お前たちは……」
「わぁ、エステルちゃんたちだ！」
ナイアルたちが振り向いた。こちらにも気づいてない者がいた。
「ゆ、遊撃士ども！？なぜ貴様らがここにいる！？」
モルガン将軍が慌ててエステルたちに尋ねた。
「念のため言っておくけど、また一足先に潜入していたの。このアジトもすでに制圧済みよ」
シェラザードが言った。
「逃げた空賊の首領たちをここまで追ってきたんですが……。まさか王国軍の警備艇が来ているとは思いませんでした」
ヨシュアが言った。
「ぐぬぬぬ……また出過ぎたマネをしおって」
モルガン将軍が怒り始めた。長生きしないね、この将軍。
「お言葉ですが、閣下。彼らがいたから、我々の突入もここまで上手くいったのです。その功績は認めるべきかと」
リシャール大佐がモルガン将軍を制して言った。
「……くっ」
「まあよい。後の指揮はおぬしに任せる。わしは一足先に船に戻って空賊どもを締め上げてくるわ」
モルガン将軍がそう言って引き上げていった。
「承知しました」
リシャール大佐が了解した。
「相変わらず頑固オヤジね～」
エステルが溜息をついた。

「悪い人ではないのだがね。いささか柔軟性には欠けるな。ところで、他の空賊たちと人質の方々はどこにいるんだね？」
リシャール大佐がエステルたちに尋ねた。
「他の手下たちはそこらで転がっているはずよ。人質たちには、監禁されていた部屋で待機してもらっているわ」
シェラザードが言った。
「そうか……。いや、本当にご苦労だった。人質や積荷の移送を含め、後のことは我々に任せて欲しい。行くぞ、カノーネ大尉」
リシャール大佐が副官のカノーネ大尉に言った。
「承知しましたわ」
そう言って、リシャール大佐はさっさと行ってしまった。
「あ、ちょっと大佐！」
ナイアルが焦って言った。
「お前さんたちにもインタビューしたいんだが、今回ばかりはあっちが優先だ。機会があれば、よろしく頼むぜ！」
「まったね～！エステルちゃん、ヨシュア君」
ナイアルたちもエステルたちにそう言い残して行ってしまった。
「いやはや、美味しいところを根こそぎ持っていかれた気分だね」
オリビエが言った。
「うーん、確かに……」
エステルが残念そうに言った。
「フフ、いいじゃないの。遊撃士の本分は縁の下の力持ちというもの。無用に目立っても仕方ないわ」
シェラザードが言った。
「確かにそうですね。父さんも、そのあたりには気を配っていたみたいですし」
ヨシュアが言った。
「あれ、そうだったっけ？」
「……」
「ああっ、父さん！」

エステルが突然大声をあげた。
「うん……その問題を考えなくちゃね。父さんが今、どこにいて何をしているのか……」
「どうして連絡をくれないのか」
ヨシュアが俯きながら言った。
「うん……」
エステルも力なく頷いた。
「ここで、あたしたちが出来ることはもう無さそうね。とりあえず、ボースに戻って事件の報告をしておきましょう。先生の事を考えるのはそれからよ」

そうして、エステルたちはボースへと戻った。

―遊撃士協会ボース支部
「――本当にご苦労さまでした。やっぱり、わたくしの目は間違っていなかったようですわね。みなさんだったら絶対に解決してくれると思いましたわ」
メイベル市長がエステルたちを褒め称えた。
「でも、軍に良い所を持っていかれちゃったしなぁ。解決したとはいえないかも……」
エステルが言った。
「そんなことはありませんわ。仮に、皆さんがいなかった場合、軍の突入も上手くいったかどうか。逆上した空賊たちに人質を傷つけられたかもしれませんから」
メイベル市長が言った。
「うむ、お前さんたちが潜入してアジトを制圧していたおかげじゃ。胸を張ってもいいと思うぞ」
ルグラン老人が言った。

「そ、そっかな……えへへ」
エステルが照れた。
「確かに人質は解放されて空賊たちも逮捕されたけど……。幾つかの謎が、解明されぬまま残ってしまったのが悔やまれるわね」
シェラザードが言った。
「湖畔に現れた男たちと空賊の首領の奇妙な態度ですね。この事件、まだ裏があると考えた方がいいかもしれません」
ヨシュアが言った。確かに……。
「まあ、そのあたりは王国軍に任せるしかなさそうじゃのう。連中の身柄を拘束された以上、こちらとしては調べようがない」
ルグラン老人が言った。
「とにかく、人質たちが全員無事に戻ってきただけでも幸いですわ。空賊逮捕のニュースのおかげで街にも活気が戻りつつあります。感謝の気持ちに、少しばかり報酬に色をつけさせて頂きました」
メイベル市長が言った。
「え、いいの？」
エステルがメイベル市長に尋ねた。
「ふふ、もちろんですわ」
「オリビエさんも……本当にありがとうございました」
メイベル市長がオリビエに向かって言った。
「フッ……《グラン＝シャリネ》分の働きが出来たのであればいいがね」
オリビエが言った。
「ええ、お釣りが来るほどですわ」
そうかぁ？
「それでは皆さん、ご機嫌よう。何かあったらまたお願いします」
「……失礼いたします」
メイベル市長とリラが去って行った。
「うーん、何だかものすごく感謝されちゃったわね」
エステルはまだ照れている。

「あれ以上事件が長引いていたら流通はさらに混乱しただろうからね。市長さんが喜ぶのも当然かもしれないな」
ヨシュアが言った。
「えへへ、何だか嬉しいな。あたしたちが頑張ったことでみんなのお役に立てたんだったら遊撃士冥利に尽きるってもんよね♪」
エステルが喜びながら言った。
「フフ、ナマ言っちゃって。でも、確かにあんたたちももう新人とは言えないわね。正直、今回は色々驚かされたわ」
シェラザードが言った。
「えへへ、そっかな？」
また照れた。
「とりあえず、今回の事件の査定と報酬を受け取るがいい」
「市長が言っていた分、報酬には色をつけておいたぞ」
「それとこれは……わしからお前さんたちにじゃ」
ルグラン老人はエステルとヨシュアに正遊撃士資格の推薦状を渡した。
「これって……ボース支部の推薦状！？」
「あの、いいんですか？」
エステルとヨシュアは驚いた。
「うむ、これだけの事件を解決してくれたとあっては推薦せぬわけにはいかんじゃろ。どうか受け取ってもらいたい」
ルグラン老人が言った。
「ありがとう、ルグラン爺さん！」
「推薦状に恥じないよう、これからも頑張ります」
エステルたちは喜んだ。
「ふふ、良かったわね。カシウス先生が聞いたらさぞ喜ぶと思うんだけど……」
シェラザードが言った。
「……うん……」
「……そうですね……」

エステルとヨシュアの顔が曇った。
「カシウスか……一体何をしておることやら。ギルドはおろか家族にすら連絡の1つもよこさんとはなぁ」
ルグラン老人が言った。
「そうね……先生らしくもない。ボースで突然降りた後、いったいどこに行ったのかしら」
シェラザードが呟いた。
その時、
「ごめんくださ～い！」
青年が入ってきた。
「飛行場の受付の……。なんじゃ、どうしたね？」
ルグラン老人が尋ねた。
「実は、例の空賊に奪われていた定期船の積荷が戻ってきましてね。その中に遊撃士協会あての郵便物が幾つかあったんですよ。それでお届けに伺ったんです」
受付係のテッドが説明した。
「それはご苦労さんじゃった」
「いや、待てよ……。ボースから出発した船に、どうしてウチ宛のものがある？」
ルグラン老人が首を傾げた。
「いえ、違うんです。ロレント宛のものなんですけど。えっと、こちらにカシウス・ブライトという方の御家族はいらっしゃいますか？」
受付係テッドが尋ねた。
「ええっ！？」
「僕たちがそうですけど……」
エステルたちが驚いた。
「ああ、ちょうど良かった！いや、ロレント支部に連絡したら、こちらに来ていると聞きましてね。それじゃあ、受け取ってください」
エステルは手紙と小包を受け取った。

「この手紙は……うん、父さんの字だわ。宛先は、ロレント支部のあたしとヨシュアになってる」
「どうやら船を降りる直前に書いたものらしいね。父さん、ちゃんと僕たちに連絡するつもりだったんだよ」
「そっか……」
エステルは安心した。
「ふふ、良かったわね。そっちの小包も先生から送られてきたもの？」
シェラザードが尋ねた。
「ううん、他の誰かが父さんに送ったものみたい……」
「……あれ、おっかしいなぁ？」
エステルが小包のまわりを見た。
「うん……差出人がどこにも書いてないね」
ヨシュアが言った。
「では、確かにお渡ししましたよ」
受付係テッドが出て行こうとした時、振り返って、
「ああそれと……空賊逮捕、本当にご苦労さまです。いやあ、さすが遊撃士ですねえ」
そう言って再び去って行った。
「まさか、定期船の積荷に手がかりがあったとはのう。ここで読むのもなんじゃ。2階の休憩所を使うといい」
ルグラン老人が言った。
「ありがと、ルグラン爺さん！」
エステルが礼を言った。
「フッ、それではさっそく中身を拝見させてもらおうか」
オリビエがさりげなく言った。

―ギルド2階

「……って、またどうしてあんたがちゃっかりいるわけ？」
エステルが席に座るとオリビエに言った。
「いやあ、純然たる興味さ。どうして君たちの父上が出発前に船を降りたのか……。このままお預けをくらったら、気になって夜も寝られないよ」
オリビエが言った。
「そ、そんなこと言われても」
エステルが迷った。
「ああ、一緒に冒険したのに仲間外れとは何と薄情な……。アジトに潜入できたのは誰のおかげかな～っと」
オリビエがわざとらしく言った。
「うぐっ……」
エステルが言葉に詰まった
「まったくタチが悪い男だこと」
シェラザードが言った。
「仕方ありませんね……。ただ内容次第では席を外してもらいますよ？」
ヨシュアが釘を刺した。
「フッ、もちろんだとも」
オリビエが笑った。
「はあ、気を取り直して……」
エステルはまず手紙の封を切った。

エステル、ヨシュアへ
そろそろ代理の仕事を終わらせた頃合だろうか？
最初は蹟（つまず）く事もあるだろうが、一歩一歩確実にこなせばいい。
お前たちなら必ず出来るはずだ。
さて、こちらの仕事のほうだが少々困ったことが起こってな。
どうやら、しばらくの間家に帰ることが出来そうにない。

そうだな……女王生誕祭が終了するまでは帰ってこられないと考えてくれ。
お前たちには申しわけないが、まあ、いまさら親の留守を寂しがるような歳でもなかろう。
――俺が戻るまでの間、お前たちがどう過ごすかはお前たち自身で決めるといい。
ロレントで仕事を続けるもよし。
正遊撃士の資格を得るために旅に出るのもいいかもしれん。
16歳という実り多き季節を悔いなく過ごすといいだろう。
それではな。シェラザードとアイナによろしく伝えておいてくれ。
カシウス・ブライト

「……先生らしい文面ね。軽そうだけど、あんたたちへの思いやりに満ちあふれているわ」
シェラザードが言った。
「うん……」
「そうですね……」
エステルとヨシュアが頷いた。
「ふむ、女王生誕祭か。聞いた話によると、まだしばらく先のようだね」
オリビエが尋ねた。
「2、3ヶ月は先のことよ。確かにちょっとした旅行なら出来そうな期間だけど……。本当に、いったいどこで何をしてらっしゃるのかしら」
シェラザードが言った。
「……」
「……」
エステルとヨシュアは黙った。
「それはともかく……そちらの小包はどうだい？差出人不明という

ところが何とも興味深いじゃあないか」
オリビエが言った。
「まあ、確かに気になるけど。父さん宛のものを勝手に調べるのもちょっと……」
エステルがためらった。
「しかし、考えてもみたまえ。父上の失踪の時と同じくして届けられた差出人不明の小包だ。何か関係があるかもしれないよ？」
オリビエが指摘した。単に見たいからそう言ったのかもしれない。
「そ、そっかなぁ……」
エステルが揺れた。
「ちょっとオリビエ……。自分が興味あるからってそそのかすんじゃないわよ」
シェラザードがたしなめた。
「いや、オリビエさんの言うことも確かに一理あります。父さんが帰ってくるまでずっと放っておくのも何だし……。調べた方がいいかもしれません」
ヨシュアが賛成した。
「……」
「わかった、調べてみよ！」
エステルは差出人不明の小包を開いた。

小包の中からは漆黒に光る半球状の装置が現れた。

「こ、これって……」
「オーブメントだね。用途はよくわからないけど。メモには、えっと……」

例の集団が運んでいた品を確保したので保管をお願いする。
機会を見て、Ｒ博士に解析を依頼して頂きたい。
Ｋ

「こ、これだけ？」
「うん……他には何も書かれていない。シェラさん。このＫとかＲ博士とかいう人に心当たりはありませんか？」
ヨシュアがシェラザードに尋ねた。
「うーん……残念ながら判らないわね。先生はとにかく顔が広いから外国人という可能性もあるし」
シェラザードが頭をふった。
「ヒントがこれだけじゃ正直、お手上げって感じよね。この黒いオーブメント、いったい何なのかな？」
エステルがその物体を見て言った。
「形状からいって一般的な用途に使われるものじゃなさそうね。戦術オーブメントあたりに少し雰囲気は似ているけど……」
シェラザードが言った。
「いや、それとも違うな。普通のオーブメントには結晶回路（クオーツ）を嵌（は）めるスロットが付いている……。だが、これには何もついていない。これはひょっとしたら……《古代遺物（アーティファクト）》かもしれないね」
オリビエが言った。
「アーティファクト？」
エステルが尋ねた。
「現在造られているオーブメントの原型となった古代文明の導力器のことさ。たまに遺跡から発見されて七耀教会に保管されることが多い。まあ、いわば骨董品だね」
オリビエが説明した。骨董品とはどうかな？
「でもこれは、見たところそんなに古いものじゃないわ。最近造られたものみたいだけど」
シェラザードが指摘した。
「それは確かに……。ただ、訳アリの品であるのはどうやら間違いなさそうだね」
オリビエが結論付けた。

「あ～まったくもう。あの不良親父ときたらっ！心配ばっかりかけてくれちゃってもう！」
エステルがいきなり大声をあげた。
「エ、エステル？」
ヨシュアが驚いて声をかけた。
「こんな差出人不明の怪しげな品が送られてきて……」
「一体、どんな事件に首を突っ込んでるんだか……」
エステルが悲しそうに言った。
「エステル……」
シェラザードが下を向いた。
「……」
ヨシュアがエステルに言った。
「……えっ……？」
「ヨシュア？」
エステルとシェラザードが顔を上げた。
「父さんの手紙にも書いてあったじゃないか。正遊撃士の資格を目指して旅をするのもいいだろうって」
ヨシュアが言った。
「う、うん……それは確かにそうだけど」
エステルが頷いた。
「僕たちは、ロレントとボースで推薦状を貰ったよね。残るは、ルーアン、ツァイス、王都グランセルの３つだけだ。ギルドの仕事をしながら、これらの地方を回っていけば……。ひょっとしたら……父さんの行方が判るかもしれない」
ヨシュアが言った。確かに、可能性としてはありうるだろう。
「あ……」
エステルが気付いたようだ。
「父さんの実力を考えたら余計な心配だとは思うけど……。それに

外国に行っている可能性だってあるんだけど……。それでも、ただ待っているより遥かにマシなんじゃないかな。それにR博士だって見つけられるかもしれないしね」
ヨシュアが言った。
「……」
「……ねえ……ヨシュア……」
「なに？」
「ヨシュアってば天才！」
エステルがヨシュアの耳元で叫んだ。
「ちょ、ちょっとエステル？」
ヨシュアが困惑した。
「それ、一石二鳥どころか十鳥くらいあるじゃない！も～、憎たらしいくらいに頭が冴えてるんだからっ」
エステルがいきなり元気になった。
「それって……賛成と考えてもいいのかな？」
当然だろう。
「賛成、賛成、大賛成っ！正遊撃士めざして修行しながらリベール中を歩き回って……。ついでにあの不良中年が何をしてるのか暴いてやるわ！」
エステルが叫んだ。人を悪人呼ばわりしすぎじゃない？
「あの……微妙に目的がズレてきてない？」
ヨシュアが呆れた。
「ふふ……完全に調子が戻ったみたいね」
「フッ、これにて一件落着だね」
シェラザードとオリビエが言った。

―ボース国際空港
「それじゃ、あたしはこれでロレントに戻るけど……。うーん、や

っぱり心配ねぇ。本当に付いていかなくていいの？」
シェラザードが不安げに言った。
「も～、大丈夫だってば。一応、正遊撃士を目指す旅だもん。シェラ姉がいたら修行にならないよ」
「シェラさんまで帰らなかったらロレント支部も大変でしょうし。大丈夫、何とかやっていけます」
エステルとヨシュアが言った。
「まあ、そこまで言うなら……。あんたたちの歳で正遊撃士を目指すのは珍しいんだからくれぐれも無茶しないようにね。それと、困ったことがあったらロレント支部に連絡するのよ。あんたたちがどこに居ようとすぐに駆けつけて行くからね」
シェラザードが言った。面倒見がいいね。
「うん……ありがとね、シェラ姉。シェラ姉の方こそあんまり飲み過ぎないでよね。あたし、それだけが心配なんだから」
エステルが言った。それだけか……？
「タハハ……まあ、気を付けておくわ」
シェラザードが苦笑した。
「フッ、心配しないでくれたまえ。何といってもシェラ君にはこのボクが付いているのだから！」
オリビエが胸を張った。
「……で、どうしてあんたもロレントに行くわけ？しかもシェラ姉と一緒に……」
エステルが言った。
「フッ、ボースの郷土料理はとりあえず全部味わったからね。そろそろ他の地方に足を向けてみようと思ってね。ロレントの料理は、野菜が絶品と聞いているから今から楽しみだよ」
オリビエの方はエステルと違って食べ歩き王都一周をするそうだ。
「――てな感じで、美味しい店を紹介しろって言って聞かないのよ。あんまりしつこいから居酒屋で酒に付き合うのを条件に付いてくることを許可しちゃった？」

シェラザードが舌を出した。
「うっわ～……」
「オリビエさん……あの、本当に大丈夫なんですか？」
エステルとヨシュアは心配そうに言った。
「フッ、このオリビエ、美人と美食のためなら死ねるさ。本当は、ヨシュア君にも付いていきたいところなのだがね。迷った挙句の苦しい選択だった……」
オリビエが口惜しそうに言った。アホ……。
「迷われても困るんですけど」
ヨシュアが溜息をついた。
「まったく懲りないヤツ……ロレントの治安を乱さないでよね。あと、仕事明けのシェラ姉って本当にリミッター外れちゃうから。マジで注意した方がいいわよ」
エステルが忠告した。
「なによぅ、失礼ねぇ。アイナは付き合ってくれるもん」
シェラザードが言った。
「あの人だって底ナシでしょ！」
エステルが言った。アイナは最強の酒豪だ。
「リミッターが外れる？あの、それって……この前よりもスゴイのかい？」
オリビエが尋ねた。
「……何というか。比較にならないと思います」
ヨシュアが顔を伏せた。
「ふーん、そうなんだ……」
「え！？」
オリビエがいきなり驚いた。状況を理解したそうだ。

ロレント方面行き定期飛行船、まもなく離陸します。
ご利用の方はお急ぎください。

「あら、もう出発か。ほらオリビエ、急がないと」
シェラザードがオリビエの服を掴んだ。
「シェ、シェラ君。ちょっと待ってくれたまえ。少し考える時間をくれると嬉しいな～って……」
オリビエが言った。
「出発直前になって、な～にを言ってるのかしら」
「男だったらグダグダ言うな！」
シェラザードが叫んだ。
「ひえええ～っ！」
オリビエがシェラザードに引きずられていった。
「シェラ姉、まったね～！ロレントのみんなによろしく！」
「2人ともお元気で！」
エステルとヨシュアが別れの挨拶をした。

そうして定期船は飛び立って行った。

第２章　消えた飛行客船（２１）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

「第３章　白き花のマドリガル」が始まります。是非ご期待ください。

第3章　白き花のマドリガル（1）（前書き）

いよいよ第3章が開幕です。更なる展開にご期待ください。

第3章　白き花のマドリガル（1）

―飛行船　外

男性の声―

「……以上が王国北方で起こった空賊事件の顛末（てんまつ）さ」

「……」

「ああ、没落したカプア一家の連中がこんなところに流れてくるとはね。王国から問い合わせがあるかもしれないから適当にあしらってくれ」

「……」

「うん、結局彼には会えなかった。どうやらトラブルが発生したらしい。空賊事件との関係はいまだ不明だが別の勢力が動いているのは間違いない」

「……」

「フッ、そうでもないのさ。面白い連中と知り合いになれたよ。料理も美味いし、美人も多い。この国はなかなか肌に合ってる。いっそ永住しちゃおうかな～なんて」

オリビエだった。なにやら通信をしているようだ。

「わかった、わかった。そんなに恐い声をださないでくれ。そちらの方は引き続き頼む。くれぐれも宰相殿に気付かれるな」

「また連絡するよ……親友」

そうして、オリビエは通信を切った。

「フフ、相変わらずからかい甲斐のある男だな。融通の利かないところが可愛いというか何というか……」

その時、不意にオリビエの後ろから声がした。

「……携帯用の小型通信機ね。ずいぶん洒落たものを持ち歩いているじゃないの」

シェラザードだった。
「シ、シェラ君……」
オリビエが驚いた。
「ツァイスの中央工房ですら実用化していないオーブメントを持っているなんてね……。あんた、いったい何者なの？」
シェラザードがオリビエに問い質した。
「フッ、水くさいことを言わないでくれたまえ。漂泊の詩人にして天才演奏家、オリビエ・レンハイムのことはキミも良く知っているはずだろう？だが、もっと知りたいのであれば所謂（いわゆる）ビロートークというやつで……」
オリビエがはぐらかした。
「悪いけどマジなの。道化ゴッコは通用しないわよ。エレボニア帝国の諜報員さん」
シェラザードが真剣に言った。
「……」
「フフ、《銀閃》の名はどうやらダテじゃなさそうだね。エステル君たちの前では気付かぬフリをしていたわけか」
オリビエが言った。
「これ以上、あの子たちに余計な心配をかけたくないもの。それじゃ、詳しいことをサクサクと喋って貰おうかしら。あんたの目的は？どうやってリベールに潜入したの？」
シェラザードが単刀直入に聞いた。
「その前に……2つほど訂正させてくれるかな。まず、道化ゴッコはしていない。ボクの場合、これが地の性格でね。擬態でも何でもなかったりする」
オリビエが笑って言った。
「あー、そうでしょうね。ワインをダダ飲みしたのだって飲みたいからやったんでしょうよ」
「ただしその後、門に連行されて情報を集めることまで計算してね。あたしたちと合流する事まで狙っていたとは思えないけど……」

シェラザードが言った。
「フフフ……そのあたりは想像にお任せするよ」
「訂正するのはもう1つ……この装置はオーブメントじゃない。帝国で出土した《古代遺物(アーティファクト)》さ。あらゆる導力通信器と交信が可能で暗号化も可能だから傍受の心配もない。忙しい身には何かと重宝するのだよ」
アーティファクト!?それは、個人所有は七耀教会で禁止されているはず!
「アーティファクト……七耀教会が管理している聖遺物か。ますますもって、あんたの狙いが知りたくなってきたわね」
シェラザードがオリビエを睨んだ。
「イヤン、バカン。シェラ君のエッチ。ミステリアスな美人の謎は無闇に詮索するものじゃなくてよ」
オリビエの変態発言。
「……」
「本物の女に近づきたい?あたしの鞭で手伝ってあげるけど」
シェラザードが微笑んだ……か?鞭をしならせている。
「や、やだなあシェラ君。目が笑ってないんですけど……」
オリビエが慌てた。
「まあ、冗談は置いとくとして」
そして、いきなり真顔になったオリビエ。
「ったく。最初から素直に話なさいよ」
シェラザードが鞭をしまった。
「お察しの通り、ボクの立場は帝国の諜報員のようなものさ。だが、工作を仕掛けたり、極秘情報を盗むつもりはない。ある人物に会いに来ただけなんだ」
オリビエが説明した。
「ある人物……?」
シェラザードがさらに尋ねた。
「キミも良く知っている人物だよ」

オリビエが言った。
「王国軍にその人ありと謳われた最高の剣士にして、稀代の戦略家」
「大陸に5人といない特別な称号を持つ遊撃士」
「《剣聖》――カシウス・ブライトその人さ」

―ボース北街区
「さてと、王国全土を回るなら次の目的地はルーアン地方ね。どういうルートで行けばいいのかな？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「それなんだけど……本当に定期船は使わないのかい？歩いて行ったらかなりの遠回りになると思うけど」
ヨシュアがエステルに聞いた。
「シェラ姉が言ってたじゃない。まずは自分が守るべき場所を実際に歩いて確かめてみろって。あ、これって父さんの言葉だっけ？」
エステルが言った。
「まあ、確かに時間はあるからのんびり行くのも悪くはないか。定期船の運賃も節約できるしね」
ヨシュアが納得した。
「そーそー、運賃が浮いた分はボースマーケットで買い物しましょ。なにせ空賊騒ぎの時は落ち着いて買い物できなかったし。出発はそれからでもいいんじゃない？」
エステルが言った。買い物好きですね。
「それは構わないけど……あんまり無駄遣いしないようにね。ちなみに、ルーアン地方に入るには西のクローネ峠を越える必要がある。買い物が済んだら西口から出よう」
ヨシュアが説明した。
「オッケー、西口ね」
エステルが頷いた。

第3章　白き花のマドリガル（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

正遊撃士を目指し、次の都市を目指し始めたエステルたち。いったい何が待ち構えているのか！？

第3章　白き花のマドリガル（2）

―クローネ峠　関所　外

長い西ボース街道とクローネ峠を越えて、エステルたちは関所に到着した。

「は～、やっと着いたみたい。あれが関所の建物なのかな？」

エステルが関所を見て言った。

「そうみたいだね。あれを越えたらルーアン地方だ。でも参ったな……もうすぐ日が暮れる。今日はここに泊めてもらった方がいいかもしれない」

ヨシュアが言った。確かに、日が暮れ始めている。ここからさらに峠を降りて歩かなければルーアン市には行けない。このまま行けば、夜道を歩くことになる。

「別にいいけど……。急いで峠を降りて、麓の宿に泊まる選択肢もあるんじゃない？」

エステルがヨシュアに尋ねた。

「夜の峠越えは危険だよ。視界も悪ければ足場も悪い。夜行性の魔獣に襲われたら崖から落ちる可能性だってある。あんまりお勧めできないけどな」

ヨシュアがエステルに危険性を説明した。

「ぶるるっ、確かに危ないかも。とりあえず関所の兵士さんに事情を説明するしかないか……」

エステルが身を震わせた。

とにかく関所に入ることにしたエステルたち。

そこで、門番の兵士がエステルたちに気付いた。

「おっと、珍しいな。こんな時間にお客さんなんて。ハイキングに来て道に迷っちまったのか？」

兵士のカドルスがエステルたちに尋ねた。

「ううん、違うわ。あたしたち、一応、遊撃士なんだけど」

エステルはそう言って準遊撃士の紋章を兵士に見せた。
「へえ、あんたたちの歳で遊撃士ってのは驚きだなぁ。それじゃあ、仕事で来たのかい？」
兵士カドルスが感心して尋ねた。
「いえ、実は正遊撃士を目指して王国各地を回るつもりなんです。」
「で、どうせだったら修行を兼ねて飛行船を使わずに歩こうかな～って」
ヨシュアとエステルが事情を説明した。
「歩いて王国一周するのか!?は～っ、若いって言うか気合が入っているって言うか」
兵士カドルスが感嘆した。
「えへへ、それほどでも」
エステルが照れた。
「しかし、いくらなんでも今から峠を降りるのは危険だぞ。最近、このあたりではやたらと魔獣が発生してるからな。旅人用の休憩所があるから今夜はそこに泊まっていくといい」
兵士カドルスがエステルに休憩所を紹介した。ありがたいこっちゃ。
「やった、ありがと☆」
「助かります」
エステルたちが礼を言った。
「なんのなんの。休憩所を使うときはウチの隊長に声をかけるといい。手前の詰所にいるからさ」
兵士カドルスが言った。
エステルたちは早速関所の中に入った。

―関所　中
エステルたちは詰所の中にいた隊長こと、ゼルスト隊長に声をかけた。

「うん、君たちは……」
ゼルスト隊長が振り向いた。
「どうも、お邪魔しています。実は……」
エステルたちは事情を話して、泊まらせてもらえるように頼んだ。
「そうか、構わないよ。遊撃士なら身元も確かだしね。隣の休憩所を自由に使ってくれ」
ゼルスト隊長は快く了承した。
「ありがとう、隊長さん！」
エステルたちは礼を言って隣の休憩所に向かった。

―休憩所
「ここが旅行者用の部屋ね」
「うん。まずは暖炉をつけようか」
ヨシュアが暖炉に火をつけた。部屋がすぐに暖かくなった。峠の夜は冷えるため。その暖かさが身にしみる。
「は～、あったかい……。やっぱり薪を使った暖炉って落ち着く感じがする……」
エステルが言った。
「そうだね。導力ストーブも出回ってるけど、暖かさでは暖炉には敵わないかな」
ヨシュアが言った。
「ま、あれはあれでお手軽でいいんだけどね～」
エステルがそう言った時、扉のノック音が聞こえた。
「おーい、お邪魔するぞ」
副長のセーロスが入ってきた。
「隊長から話は聞いたぜ。今夜は泊まっていくんだって？夕食、俺たちのメシと同じでよけりゃご馳走するけど、どうする？」
副長セーロスがエステルたちに尋ねた。
「え、いいの？」

「すみません、何から何まで」
いたせりつくせりとはこの事を言うのだろう。
「なあに、定期船が就航してから通行人がめっきり減ってな。ヒマを持て余しているから正直、客人は大歓迎なのさ」
副長セーロスが言った。
「えへへ、そういうことなら遠慮なくご馳走になろうかな？」
エステルが喜んで言った。
「よし、それじゃあ少しの間待っててくれや。もっとも軍隊のメシだから、あまり味に期待しないでくれよ？」
そう言って、副長セーロスは部屋を出て行った。
「空賊団騒ぎでは王国軍と張り合っていたけど……。1人1人の兵士さんはやっぱり親切な人が多いよね」
エステルが言った。
「確かにそうだね。まあ、軍人が親切なのはリベールくらいだと思うけど……」
ヨシュアが含みのあることを言った。まるで、他の国ではそうではないかのように。
「え？」
「いや……とりあえず荷物を置こうか」
エステルが聞き返したが、ヨシュアは話題をそらした。

―夕食後
「は～、お腹いっぱい。期待しないでとか言ってたわりには、かなり美味しかったと思わない？」
エステルが満足そうに言った。
「そうだね。軍で出る食事とは思えないな」
ヨシュアが言った。
「ちょっと失礼するぞ」

セーロス副長が入ってきた。
「あ、副長さん。すっごく美味しかったわよ♪」
「ご馳走さまでした」
エステルたちが礼を言った。
「お粗末さま。口に合ったようで何よりだ。ところで……もう1人客が来たんだが、相部屋でも構わないかい？」
セーロス副長がエステルたちに尋ねた。
「来客……こんな夜中にですか？」
ヨシュアが言った。外は既に日が暮れて真っ暗だ。
「ずいぶん度胸があるヒトねぇ。あたしたちは構わないけど？タダで泊めてもらってる身分だし」
エステルは了承した。
「そう言ってくれると助かるよ。ま、嬢ちゃんたちの同業者だから気兼ねする必要はないだろうけどな」
セーロス副長が笑った。同業者？というと、遊撃士ということか？
「え？」
「同業者？」
エステルたちが首を傾げた。
「フン……どこかで見たような顔だぜ」
青年が部屋に入ってきた。赤毛の青年、アガットだった。
「あ、あんた……」
「《重剣のアガット》……」
エステルたちが驚いた。まさか再会するとは思いもしなかっただろう。
「なんだ、知り合いだったのか。ところで、アガット。お前さん、メシはどうする？」
セーロス副長がアガットに尋ねた。
「いや、せっかくだがさっき喰っちまったばかりだ。寝床を貸してくれるだけでいい」
アガットが答えた。

「わかった。ベッドは適当に割り振ってくれよ。それじゃあ、おやすみ」
そう言って、セーロス副長は部屋を出て行った。
「さてと……オッサンの子供たちだったか。何だってこんな場所に泊まってやがる？シェラザードはどうしたんだ？」
アガットがエステルたちのところに寄って来て言った。相変わらず、ぶっきらぼうだ。
「シェラさんはロレント地方に帰りました。今は僕たち2人で旅をしています」
「正遊撃士を目指して王国各地を回ろうと思ってるの。修行を兼ねて自分の足だけでね」
エステルたちが答えた。
「正遊撃士？歩いて王国一周だぁ？ずいぶんと呑気なガキどもだな」
アガットが呆れた口調で言った。
「あ、あんですってー！？」
エステルが頭にきたようだ。
「お前らみたいなガキが簡単に正遊撃士になれるわけねぇだろ。常識で考えろよ、常識で」
アガットが言った。
「こ、これでもあたしたち空賊逮捕で活躍したんだから！推薦状だって貰っているし、子供扱いするのやめてよねっ！」
エステルが反論した。
「その話か。ルグラン爺さんから聞いたぜ。それじゃあ聞くが……仮にお前らしかいなかったらその事件、解決できたと思うか？シェラザードの手を借りずにお前たち自身の力だけでだぞ？」
アガットが尋ねた。そう言われると、困るな……。
「そ、それは……」
「……難しかったと思います」
エステルたちは口ごもった。
「ま、当然だろうな。お前たちは新米で、しかもガキだ。力もなけ

りゃ、経験も足らねえ。とっさの判断も出来ねえはずだ。それを忘れて浮かれてるといつか必ず足元をすくわれるぞ」
アガットが言った。
「う、浮かれてなんかないもん。あんたの方こそ、こんな時間に峠越えなんて危なっかしいことしちゃってさ。人のこと言えないんじゃないの？」
エステルがアガットに言った。
「アホ、鍛え方が違うんだよ。それに俺の方は仕事だ。物見遊山の旅と一緒にすんな」
アガットが反論した。
「仕事？遊撃士協会のですか？」
ヨシュアがアガットに尋ねた。
「ああ、お前らのオヤジに強引に押し付けられた……」
アガットが答えようとしたが、
「え……？」
「父さんが押し付けた？」
エステルたちが身を乗り出した。
「……」
「さてと、明日は早いし、とっとと休ませてもらうぜ。お前らも喋ってないで寝ろや」
アガットは途中で口を閉じ、ベッドへと寝転んだ。
「あー、ごまかした！？」
「そこまで露骨すぎると余計に気になるんですけど……」
エステルたちが追求した。
「あーもう、うるせえな。ガキが余計なことに首を突っ込んだら火傷するぞ。とっととルーアンに行って掲示板の仕事でもしていやがれ」
「それが……ふぁあ……お前らにはお似合いだぜ」
「……」
そのまま、アガットは寝てしまった。

「ちょ、ちょっと……」
「もう寝ちゃったみたいだね。エステル並みに寝つきがいいなぁ」
ヨシュアが感心した。エステルの寝つきとはどのようなものなのか。
「一緒にしないでってば！」
エステルが怒った。
「もー、何なのよコイツ！？ケンカ売ってるとしか思えないんですけどっ！？」
エステルが疲れた顔で言った。
「まあまあ。僕たちが新米なのは確かだし。ひょっとしたら、心配してわざとキツく言ってるのかも……」
ヨシュアが言った。
「……」
「ねえ、ヨシュア。ほんとーにそう思う？」
エステルが納得いかない目でヨシュアを見た。
「ゴメン、あまり自信ない。でも、そろそろ僕たちも寝た方がいいのは確かだよ。明日の峠越えがあるんだし」
ヨシュアが言った。
「うー、ムシャクシャが納まらないけど仕方ないか……。あ、せめてコイツの顔にラクガキしてから寝るのはどう？安眠間違いなしだと思うけど」
エステルが言った。スゲー低レベルですね……。やったとしても、明日の朝にボコボコにされますよ。
「止めなさいってば……」
ヨシュアが制した。

第3章　白き花のマドリガル（2）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

関所に泊まることにしたエステルたち。しかし、その夜中に突如、事件が起こる！

第3章　白き花のマドリガル（3）

―深夜　ボース側関所の外
「待たせたな。そろそろ交替の時間だぞ」
兵士アッシャーが兵士カドルスに声をかけた。
「ああ、もうそんな時間かよ。しっかし、誰も通らないのに見張りをする必要があるのかね。いっそ夜はゲートだけ閉めときゃいいんじゃねえか？」
兵士カドルスが面倒そうに言った。
「決まりだからしょうがないさ。この前の空賊騒ぎといい、最近、なにかと物騒だからな……」
その時、兵士アッシャーが周りを見渡した。
「なんだ、どうした？」
兵士カドルスが尋ねた。
「なんか音がしないか？こう、ザワザワと……」
しかし、何もない。
「風の音じゃないのか？」
その時、峠側から唸り声がした。これは、獣の声……！
「お、狼の群れ！？」
「おいおい、マジかよ！？」
兵士たちが慌てた。

―休憩所
「今、何か聞こえなかった！？」
「何かあったみたいだね」
エステルたちが話していた時、アガットが目を覚ました。起きるのが早いね。

「様子を見てくる。お前らはとっとと寝とけ」
そう言って、さっさと出て行った。
「あ……ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」
「念のため、僕たちも行った方が良さそうだね」
「うん、モチのロンよ！」
エステルたちも現場に向かった。

―ボース側関所　外
「狼の群れ……！」
「た、大変！早く加勢しなくちゃ！」
エステルが加勢しようとした時、
「……コラ、やめとけ」
アガットが止めた。
「な、なんで止めるのよ！？あんた、それでも遊撃士なの！？」
エステルが怒った。
「勘違いするんじゃねえ。関所を守るのは軍の仕事だ。ここの連中は錬度も高いからすぐに撃退できるだろうよ。余計なお節介ってモンだろうが」
アガットが言った。
「そ、そんなこと……」
エステルは納得できないようだ。
「彼の言う通りだ！これは自分たちの仕事さ！」
「嬢ちゃんたちは中に入ってな！」
兵士たちが言った。
「で、でも……」
その時、ルーアン側の警報が鳴った。
「……ちいっ！」
アガットが向かって行った。

「ど、どうなってるの！？」
エステルが慌てた。
「エステル、反対側だ。ルーアン方面の出口でも何かが起こったらしい」
ヨシュアが言った。
「あ、あんですって～！？」
エステルたちも急いで向かった。

―ルーアン側関所　外
兵士が狼の群れに襲われていた。１人だったため、兵士は傷ついている。
狼の群れが兵士に襲おうとしたその時、アガットが突入して、重剣で狼を両断した。
「す、凄い……！」
「噂以上の破壊力だね」
エステルたちが感心した。

「ハッ、包囲するつもりかよ。犬ッコロのくせにわりと知恵が働くじゃねえか」
狼の群れがアガットを包囲した。
「……加勢するわよっ！」
エステルたちもアガットに加勢した。
「コラ、引っ込んでろ！」
アガットがエステルたちに言った。
「ふ～んだ。あたしたちの勝手だもんね」
「邪魔にならないように手伝わせてもらいますから」
エステルたちが言った。

「チッ、勝手にしやがれ……。せいぜい、俺の《重剣》に巻き込まれないよう注意しとけよ！」
狼の群れが襲い掛かってきた！

「ふう……なんとかやっつけたわね」
「うん、数も多かったしなかなか手強い相手だった」
エステルたちが一息ついた。
「……」
「フン……思ったよりもやるみたいだな。ま、あのオッサンの手解きを受けていたんだったら当然か」
アガットがエステルたちに言った。
「え」
エステルが驚いた。
「勘違いするなよ。あくまで新米としてはだ。まだまだ正遊撃士には遠いぜ」
アガットが言った。
「おーい！そっちは大丈夫か！？」
ゼルスト隊長とセーロス副長が来た。
「ああ、問題ない。一匹残らず片付けたぞ。気絶していたヤツはどうだ？」
アガットが尋ねた。
「思ったよりも軽傷だ。お前がいてくれて助かったよ」
「さすが《重剣のアガット》だぜ」
ゼルスト隊長たちが言った。
「大したことはしてねぇよ。それに、このガキどもがそこそこ働いてくれたからな」
アガットが言った。
「そうなのか……嬢ちゃんたち、ありがとうな」

セーロス副長が礼を言った。
「う、うん……」
エステルがぎこちなく返事をした。
「自分たちは、念のため周辺をパトロールするつもりだ。君たちは中に入ってゆっくりと休んでくれ」
ゼルスト隊長が言った。
「ああ、気をつけろよ」
アガットがそう言うと、兵士たちはパトロールを始めた。
「さてと、寝直すとするか。もう危険は去ったはずだ。お前らも大人しく寝ておきな」
アガットはさっさと関所に入っていった。
「ど、どうなってんの？あの口の悪いヤツがあたしたちを誉めるなんて」
エステルが意外そうに言った。
「少しは、僕たちの実力を認めてくれたのかもしれないね。思ったよりも真っ直ぐな人なんじゃないかな？」
ヨシュアが言った。
「うーん……とてもそうは思えないんだけど。……まあ、たしかにデカイ口を叩くだけはあるわね」
エステルが言った。少しは納得したか？
そして、エステルたちも関所に入って寝直した。

「エステル。……エステルってば」
ヨシュアがエステルを起こしている。
「ふわ～～っ……もう、なんなのよ～……」
エステルが目を開ける。
「あれ、ヨシュア……。もうギルドに行く時間だっけ？」
完全に寝ぼけている。

「なに言ってるんだか。ここはクローネ峠の関所だよ」
ヨシュアが呆れている。
「そうだった……夜中に魔獣騒ぎがあって……」
エステルが体を起こして思い出している。
「あれ……」
エステルがアガットの姿がないことに気付いた。
「あの赤毛男はどうしたの？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「朝早くに出発したみたいだ。急ぎの仕事があったらしいね」
ヨシュアが言った。
「そうなんだ……。せっかく昨日は協力して魔獣を撃退したのにさ……。挨拶もしないで行くなんて、やっぱり失礼なヤツよね」
エステルが溜息をつく。
「まあまあ。それよりも僕たちも支度しよう。昼過ぎには峠を越えたいからね」
ヨシュアが言った。
「ん、わかった。いよいよルーアン地方ね！」

「兵士さん、おはよ～！」
「おはようございます」
エステルたちがセーロス副長に挨拶した。
「やあ、お早うさん。昨日は本当にご苦労さんだったな」
セーロス副長が労をねぎらった。
「えへへ、それほどでも。兵士さんたちの方こそあの後、パトロールに出て危険なことはなかったの？」
エステルが尋ねた。
「ああ。何の異常も無かったぞ。しかし……妙なんだよな」
セーロス副長が顎に手をあてた。

「妙って、何が？」
「街道や関所にある照明に魔獣を遠ざける効果があるのは知っているだろう？関所に近づく魔獣がいたとしても、普段は多くて2、3匹程度なんだ。昨日みたいに大量に群がってくるのは初めてだぜ」
セーロス副長が説明した。
「それは確かに奇妙ですね……」
ヨシュアが真剣な顔つきになった。
「ま、帝国軍にくらべりゃ、魔獣なんて可愛いもんだけどな。拠点防衛の良い演習になったと思えばいいか」
えらい前向きな考えですな。
「そ、そういう問題なの？」
エステルがつっこんだ。
「俺たちにとっちゃあ、そっちの方が気がかりだからな。魔獣どもが何を考えてるのかは嬢ちゃんたち遊撃士に任せるさ」
「それはそうと……そろそろ出発するんだろう？通行手続きをしちまうかい？」
セーロス副長が尋ねた。
「はい、お願いします」
エステルたちはルーアン地方に入る手続きをした。
「……これでよしっと。それじゃあ……」
セーロス副長は開閉装置を操作した。
「青い海と白い花に彩られたルーアン地方にようこそ！」
セーロス副長が元気よく言った。
「そうそう、嬢ちゃんたちはルーアン市に向かうんだろ？」
セーロス副長が思い出したように言った。
「うん、そのつもりだけど……」
エステルが振り向いた。
「昨日の件についてはギルドの支部に報告しておくよ。軍から謝礼金が出るはずさ」
セーロス副長が言った。

「えっ、いいの？」
エステルが驚いた。
「まあ、アガットのやつと山分けになるとは思うがな。それじゃあ、正遊撃士目指して頑張れよ」
セーロス副長が言った。
「うん！」
「色々お世話になりました」
そうして、エステルたちはルーアン地方に入った。

第3章　白き花のマドリガル（3）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよルーアン地方に入ったエステルたち。この先の話にご期待ください。

第3章　白き花のマドリガル（4）（前書き）

今回は、知る人ぞ知る制服の少女初登場です。

第3章　白き花のマドリガル（4）

―マノリア間道

エステルたちはクローネ山道を抜けて、マノリア間道に入った。

「わあっ……！」

エステルはいきなり感動した。

「エステル？」

ヨシュアがエステルの方を向いた。

そして、エステルが走っていった。

「見て見て、ヨシュア！海よ、海！」

エステルは海を見て感動したようだ。

「はいはい。言われなくても判ってるよ」

ヨシュアはやれやれといった様子だ。

「青くてキラキラしてメチャメチャ広いわね～。それに潮騒の音と一面に漂う潮の香り……。うーん、これぞ海って感じよね」

エステルがロマンを感じている。

「エステル、海を見るのは初めて？」

ヨシュアが尋ねた。

「昔、父さんと定期船に乗った時、ちらっと見た記憶があるんだけど……。こんなに間近で見るのはひょっとしたら初めてかもしれない」

エステルが言った。

「そっか……。僕も海は久しぶりだな……。定期船を使わずに歩いてきた甲斐があったね」

ヨシュアが微笑んだ。何か引っかかる言い方……。

「うんうん。何だか達成感があるよね！」

エステルたちは再び歩き始めた。

―マノリア村
「は～っ。やっと人里に着いたわね。なんだか、白い花があちこちに咲いてるけど……」
エステルが一息ついてあたりを見渡した。
「ここって何ていう村だっけ？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「マノリア（Ｍａｇｎｏｒｌｉａ）だよ。街道沿いにある宿場村さ。あの白い花は、木蓮の一種だね」
ヨシュアが説明した。
「ふーん、キレイよね～。それに潮の香りに混じってかすかに甘い香りがするような。うーん……何だかお腹が空いてきちゃった」
エステルが言った。どうしてそうなるんだか……。
「あはは、花の香りで食欲を刺激されるあたりがエステルらしいって言うか……。まさに花よりダンゴだね」
ヨシュアがエステルに言った。言い得て妙なり。
「だって、育ち盛りなんだもん。ちょうどお昼だし、休憩がてらにランチにしない？」
エステルが言った。
「いいけど……何か手持ちの食料はあったかな？」
ヨシュアが荷物を探った。
「あ、ちょっとタンマ。どうせだったら落ち着ける場所で、できたての料理を頼まない？せっかくルーアン地方に来たんだし」
エステルがヨシュアに提案した。
「たしかにそうだね。それじゃあ、宿酒場を探そうか」
エステルたちは宿酒場を探した。

―宿酒場　白の木蓮亭

「ようこそ、《白の木蓮亭》へ。見かけない顔だけど、マノリアには観光で来たのかい？」
受付のレックスが尋ねた。
「ううん。ルーアン市に向かう途中なの」
「ボース地方からクローネ峠を越えて来たんです」
エステルたちが答えた。
「クローネ峠を越えた！？は～、あんな場所を通る人間が今時いるとは思わなかったな。ひょっとして、山歩きが趣味だとか？」
レックスが聞いた。
「うーん……。そういう訳じゃないんだけど。ところで、歩きっぱなしですっごくお腹が減ってるのよね」
「何かお勧めはありますか？」
エステルたちが尋ねた。
「そうだな……今なら弁当がお勧めだけど」
レックスが言った。
「お弁当？」
エステルが聞き返した。
「町外れにある風車の前が景色のいい展望台になっていてね。昼食時は、うちで弁当を買ってそこで食べるお客さんが多いんだ」
レックスが説明した。それは贅沢ですね。
「あ、それってナイスかも♪聞いてるだけで美味しそうな感じがするわ」
「それじゃ、そうしようか。どんな種類の弁当があるんですか」
エステルたちは賛成した。
「スモークハムのサンドイッチと魚介類のパエリアの2種類だよ。どちらもウチのお勧めさ」
レックスが言った。
「うーん、あたしはサンドイッチにしようかな」
エステルはサンドイッチを選択した。
「それじゃ、僕はパエリアを」

ヨシュアはもう一方のパエリアを選んだ。
「まいどあり。しめて１２０ミラだよ」
エステルたちはお金を払い、特製ランチボックスを手に入れた。
「ついでにサービスでハーブティーもつけておいたよ。これもウチの名物でね」
気前のいい人だな。
「わ、ありがと？」
「それじゃ、展望台に行こうか？」
「うん！」
エステルたちは展望台へと向かった。

「ここはさっき調べたばかりね。雑貨屋さんにも居なかったし……」
「困ったわ……どこに行っちゃったのかしら」
制服の少女が何かを探しているようだ。
「ヨシュア、ほらほら早く！」
「ちょっとエステル。前を向いて歩かないと……」
エステルはいきなり前を向いたため、制服の少女とぶつかった。
「あうっ……」
「きゃっ……」
２人とも地面に手をついた。
「あいたた……。ご、ごめんね、大丈夫！？あたしが前を見ていなかったから……」
エステルが制服の少女を起こした。
「あ、いえ、大丈夫です。すみません、私の方こそよそ見をしてしまって……」
制服の少女が謝った。
「あ、そうなんだ。じゃあ、おあいこって事で♪」
エステルが笑った。
「まったく……エステル、何やってるのさ」

「……」
ヨシュアが制服の少女を見るなり、いきなり黙った。
「???」
制服の少女が不思議そうな顔でヨシュアを見ている。
「ヨシュア、どうしたの?」
エステルがヨシュアを見た。
「い、いや……。ごめんね。連れが迷惑かけちゃって。どこにもケガはないかな?」
ヨシュアが制服の少女に言った。
「はい、大丈夫です。私も人を捜していて……。それでよそ見をしてしまって」
制服の少女が申し訳なさそうに言った。
「え、誰を捜してるの?」
エステルが尋ねた。
「帽子をかぶった10歳くらいの男なんですけど……。どこかで見かけませんでした?」
制服の少女が風貌を言った。
「帽子をかぶった男の子……。ヨシュア、見かけたりした?」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「いや、ちょっと見覚えがないな」
ヨシュアが言った。
「そうですか。どこに行っちゃったのかしら……。私、これで失礼します。どうもお手数をおかけしました」
制服の少女は去って行った。
ヨシュアはその少女を見続けている。
「ヨシュア?ねえ、ヨシュアってば」
エステルは呆けているヨシュアの肩をゆすった。
「え、ああ……どうしたの」
ヨシュアが我に返った。
「どーしたもこーしたも」

エステルは呆れている。
「あ、もしかして……。なるほど、そーゆーことか？」
突然、エステルが1人相槌を打った。
「……なんか、激しく勘違いしてない？」
ヨシュアが意を得たようだ。
「照れない、照れない♪一目会ったその時から恋の花咲くこともあるってね」
それは早とちりというものだろう。
「ち・が・い・ま・す。ただ、昔の知り合いにほんの少し似ていただけだよ。それで、ちょっと驚いただけさ」
昔の知り合い？
「へえ、ほう、ふーん。昔の知り合いに似ているね～。口説き文句としては30点かな？」
エステルが勝手に採点した。なんやねん、それは。
「ところでエステル。あの子の制服、見覚えない？」
ヨシュアが怒った口調で言った。
「そういえば……。ジョゼットが変装に使ってた何とか学園ってところの制服!?」
何とか学園って……。物覚えが悪いなぁ。
「ジェニス王立学園だよ。このルーアン地方にあるらしいから見かけても不思議じゃないけどね」
ヨシュアが説明した。
「ふーん、今のが本物なんだ。なんか清楚で礼儀正しくて頭も良さそうだったわね～。生意気ボクっ子とは大違いだわ」
そのセリフ、確か前にも言ってたよね……。
「何言ってるんだか。ジョゼットと最初に会った時、完全に騙されていたくせに」
ヨシュアがきつくあたった。
「うっ……」
エステルが言い返せずに黙った。

「そういや、あの時も僕の事をからかっていたよね。ま、それでまんまと騙されたら世話ないんだけど」
ヨシュア君、恐いですよ……。エステルにからかわれたこと、かなり怒っているね。
「ううう……」
全く言い返せないエステル。
「人をからかう暇があったら、もうちょっと観察力を養った方がいいんじゃないの？」
ダメ押しの一言！
「わかった、わかりました！もう、からかったりしません！」
エステルがヨシュアに謝った。
「分かればよろしい」
ヨシュアがエステルを許した。
「さてと、それじゃ展望台でお昼ご飯にしようか？」
「ふあ～い」
急に元気のなくなったエステル……。

第3章　白き花のマドリガル（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回はエステルとヨシュアの昼食シーンに焦点をあてています。

第3章　白き花のマドリガル（5）

―風車小屋前　展望台
「うわ～っ、絶景ねぇ！」
「うん、海が一望に出来るね」
そこは、青い海に囲まれているかのような場所だった。
「こんな場所で食事なんて、すっごく贅沢な気分じゃない？」
「確かに、気持ち良さそうだ。さっそくランチをいただこうか？」
「うん♪あ～、お腹空いちゃった！」
いきなり元気になったエステル。
エステルたちはベンチに腰掛けてランチボックスを開いた。
「あたしのはスモークハムのサンドイッチね。うーん、香ばしい匂いがする」
「僕のは……魚介類のパエリアだね。サフランのいい香りがするな」
それぞれ弁当を分けた。
「それじゃ、いっただきまーす」
「いただきます」
エステルたちが手を合わせた。
「それじゃ、まずは一口と……」
エステルがサンドイッチを口に入れた。
「もぐもぐもぐ……ごっくん。わ、香ばしくて美味しい！レタスもシャキシャキしてる」
エステルが驚いた。
「パエリアも美味しいよ。サフランの香りが利いてて。バーテンさん、いい腕してるな」
ヨシュアも満足そうだ。
「あ、ちょっと一口ちょうだい。あたし、パエリアってちゃんと食べたことないのよね」
エステルがヨシュアのパエリアに興味を示した。

「いいけど……ランチボックスを交換しようか？」
ヨシュアが言った。
「うーん……手が塞がってるから面倒だし。ヨシュアが食べさせてよ」
エステルがさらりと言った。
「食べさせてって……」
ヨシュアがひいた。
「もちろん、あ～ん？」
エステルが口を開いた。
「それは……ちょっと恥ずかしいんだけど」
ヨシュアがためらった。
「いいじゃない。誰も見てないんだし。子供っぽいことしても笑われる心配はないってば」
そういう問題か？
「……そういう意味で恥ずかしいんじゃないんだけど。まったく仕方ないな……」
ヨシュアはパエリアをすくってエステルに食べさせてあげた。
畜生、めっちゃ羨ましいぞ！
「むしゃむしゃ……ごっくん。うーん、デリ～シャス？これぞ海岸地方の代表料理よね。なんていうか、独特の香りが食欲をそそっちゃうというか……」
エステルが言った。
「はいはい、よかったね」
ヨシュアはどうでも良さそうだ。
「あ、なんか投げやり。えーい、これでも喰らえッ！」
エステルはヨシュアの口にサンドイッチの残りを突っ込んだ！
「むぐっ……。モグモグ……コクン」
「……いや、美味しいんだけどいきなり口に突っ込まないでよ」
畜生、めっちゃ羨ましいぞ！（2度目……）
「ふっふっふっ、参ったか♪」

何、得意気な顔してんだか……。

「は～、美味しかったぁ」
「サービスでもらったハーブティーも絶品だったね」
エステルたちは満足そうに言った。
「うん、身体が温まって軽くなってくるっていうか……。潮風も気持ちいいし……なんだか眠くなってきちゃった」
エステルが眠そうに口を押さえた。
「食べた直後に寝ると牛になるよって言いたいところだけど……食後の昼寝（シエスタ）もたまにはいいかもしれないね」
ヨシュアが言った。
「うんうん……」
エステルが頷いたその時、
「……あれ？」
大きな白い鳥が飛んでいった。
「ねえねえ、今の鳥！カモメにしては大きくなかった？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「そうだね。翼の形も違うし、嘴（くちばし）も鋭かった。タカかワシなんじゃないかな？」
ヨシュアが言った。
「白いタカ……珍しいものを見ちゃったね。うーん、何か良いことが起こりそうな気がしてきたわ」
エステルが楽しそうに言った。そんなものか？
「はは、そうだといいね。ところで……眠気は無くなったんじゃない？」
ヨシュアがエステルを見て言った。
「あ……。うーん、残念ながら」
残念か？
「なら、そろそろ出発しようか。今日中にルーアン支部で所属変更

の手続きがしたいしね」
「それもそっか……。うん、わかった。名残惜しいけど出発しましょ」
エステルは展望台を後にした。

第3章　白き花のマドリガル（5）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちは昼食を終えてルーアン市に向かおうとするが、その時エステルに…！

＞追記＜

最近、作者が多忙のため、更新が遅れる可能性があります。更新を待っている読者様にはご迷惑をおかけします。こちらとしても最善を尽くしますので、どうかご了承ください。

第3章　白き花のマドリガル（6）（前書き）

昨日の分までお楽しみください。

第3章　白き花のマドリガル（6）

「あうっ……」
「わわわっ！」
エステルは突然走ってきた少年とぶつかった。
「な、なんだか今日はやたらとぶつかる日ねぇ」
エステルが地面に手をつきながら言った。
「ゴメンゴメン。ちょっと人捜しをしててさ。あれ、姉ちゃんたちこの辺で見かけないカオじゃん？」
帽子の少年が言った。
「そりゃそうよ。この町の人間じゃないもん。あれ、それよりキミって……」
エステルが帽子の男の子のことを思い出したようだ。
「……な、なんだよ？」
「さっき制服姿のお姉ちゃんが帽子をかぶった男の子を探しているって言ってたけど……。キミ、なんか心当たりある？」
エステルが帽子の少年に言った。
「あー、そうそう。オイラが捜してる人と一緒だよ。どこで会ったの？」
帽子の少年が尋ねた。
「宿酒場の近くだけど……。ちょっと前のことだから、どこに行ったか判らないわよ？あたしたちも一緒に捜してあげよっか？」
エステルのお節介。
「い、いいよ。どこに行ったか見当つくしさ。そんじゃ、バイバイ！」
帽子の少年はさっさと行ってしまった。
「元気な子ね～。ロレントのルックに少し感じが似ているような……。あの子たち、今頃何してるのかな」
エステルが想いを馳せていると、ヨシュアは黙って何か考え込んで

いた。
「ヨシュア、どうしたの？」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「うん……。気のせいならいいんだけど。エステル、なにか失くしてない？」
「失くす？何を？」
「身に付けている物だよ。財布とかアクセサリーとか」
「なによ、やぶから棒に？財布は……ある。髪飾りも……ＯＫ。遊撃士の紋章は……」
エステルが突然手を止めた。
「……」
肩を落としたエステル。
「やっぱりね……」
ヨシュアが言った。
「えええ！？一体どうなってるの！？峠越えをする時に落としちゃったとかっ！？」
途端に慌て始めたエステル。焦ったところで出てくるわけがない。
「落ち着いて、エステル。ランチを食べていた時にはちゃんと左胸に付けていたよ。失くしたとすれば……この場所でしか考えられない」
ヨシュアが言った。
「で、でも……どこにも落ちてないけど」
エステルが周りを見たが、どこにもない。
「ま、まさか……」
エステルが思い当たったようだ。
「たぶん、さっきの子だろうね。不自然なぶつかり方をしたから、もしかしたらとは思ったけど……」
子供にすられたエステル……。注意力無いなあ～。
「あ、あんですって～！？ど、どうして遊撃士の紋章なんかを！？」
エステルが怒り始めた。

「確かに、子供が持ってても何の意味もないものだからね。イタズラの可能性が高そうだ」
いたって冷静なヨシュア。
「むむむ～……イタズラ小僧、許すまじ！絶対に捕まえてお仕置きしてやるんだからっ！」
一方、怒り心頭のエステル。
「まあ、お手柔らかに。とりあえず、あの子がどこに行ったのか調べてみよう」
そうして、エステルたちのスリ実行犯捜索が始まった……。

「あら、どうしたの？」
エステルは花屋のサティに尋ねた。
「ちょっと聞きたいんだけど……。この辺で、帽子をかぶった男の子を見かけたことないかな？」
「帽子をかぶった男の子……。ああ、王立学園の生徒さんの連れがそうだったかしら」
サティが答えた。
「うん、まさにその子よ！」
「どこの子かご存知ありませんか？」
エステルたちがさらに尋ねた。
「この町の子供じゃないわね。孤児院の子だと思うけど……」
サティが考えた。
「孤児院……？」
エステルが首を傾げた
「『マーシア孤児院』と言ってね。テレサ院長っていう女の方が運営してらっしゃる福祉施設よ。東のメーヴェ海道の途中にあるわ」
サティが説明した。
「あの子、孤児院に住んでるんだ……」
複雑な気持ちになったエステル。

「さっそく訪ねてみようか」
エステルたちは『マーシア孤児院』に向かった。

―メーヴェ海道
エステルたちは看板を見つけた。
「……」
エステルが看板の前に立ち尽くしている
「どうやらこの先にあるみたいだね」
ヨシュアが先を見て言った。
「うーん……」
「……」
エステルがうなっている。何か悩んでいるようだ。
「どうしたの、エステル？」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「よし、決めた！境遇うんぬんは関係ない！人の物を取るのは悪いこと！見つけたらきっちりお仕置きしてやるんだから！」
エステルが宣言した。決断遅いな、おい。
「はは、悩んでそう結論するのがエステルらしいっていうか……。とりあえず、お手柔らかにね」
ヨシュアが呆れた。

―マーシア孤児院
エステルが孤児院に入ると、３人の子供たちがいた。
「クラムったらどこに行ってたのよ、もう！クローゼお姉ちゃん、すごく心配してたんだからね！」
子供の１人、マリィが帽子の少年に言った。

「へへ、まあいいじゃんか。おかげでスッゲェものが手に入ったんだからさ」
帽子の少年はクラムというそうだ。
「なんなの、クラムちゃん？」
もう1人の子供、ダニエルが尋ねた。
「にひひ、見て驚くなよ～。ノンキそうなお姉ちゃんから、まんまと拝借したんだけど……」
その時、
「……だ～れがノンキですって？」
「へっ……」
クラムが振り返ると、エステルたちが入ってきていた。
「ゲッ、どうしてここに……！」
クラムがあせった。
「ふふん。遊撃士（ブレイサー）をなめないでよね。あんたみたいな悪ガキがどこに居るのかなんてすーぐに判っちゃうんだから！」
エステルが得意気に言った。
「く、くそー……。捕まってたまるかってんだ！」
クラムが逃げ出した。
「こらっ、待ちなさーい！」
そう言って追いかけるエステル。
「あのう、お兄さん……。どうなっちゃってるんですか？」
「クラムちゃん、また何かやったの～？」
マリィとダニエルが不安げにヨシュアに尋ねた。
「ええっと……騒がしくしちゃってゴメンね」
ヨシュアが肩身狭そうに言った。
その時、エステルがクラムを捕まえたそうだ。
「ちくしょ～！離せっ、離せってば～っ！児童ギャクタイで訴えるぞっ！」
クラムが暴れている。
「な～にしゃらくさい事言ってくれちゃってるかなぁ。あたしの紋

章、さっさと返しなさいっての！」
エステルがクラムの首を掴みながら言った。
「オイラが取ったっていう証拠でもあんのかよ！」
クラムが抵抗しながら言った。
「証拠はないけど……。こうして調べれば判るわよ！」
エステルはクラムの脇腹をくすぐった。
「ひゃはは……！や、やめろよ！くすぐったいだろ！エッチ！乱暴オンナ！」
クラムはくすぐったそうだ。
「ほれほれ、抵抗はやめて出すもの出しなさいっての……」
その時、娘の声がした。
「ジーク！」
そして、エステルの目の前を鳥が通り過ぎた。
「わわっ！？なんなの今の！？」
声の主は、制服の少女だった。鳥が制服の少女の肩の上にとまる。
「その子から離れて下さい！それ以上、乱暴をするなら私が相手になりま……」
「……あら？」
制服の少女が目を丸くした。
「あ、さっきの……」
エステルも同じだ。
「マノリアでお会いした……」
「ピュイ？」
その鳥はシロハヤブサだった。
「助けて、クローゼお姉ちゃん！オイラ、何もしてないのにこの姉ちゃんがいじめるんだ！」
クラムがエステルから離れた。
「な、なにが何もしてないよ！あたしの紋章を取ったくせに！」
「へん、だったら証拠を見せてみろよ！」
クラムは往生際が悪い。

エステルは再びクラムを捕まえようとした。
「あ、くすぐるのは無しだかんな」
「うぬぬぬ～……」
エステルは悔しそうにしている。
「やあ、また会ったね」
ヨシュアが制服の少女、クローゼに言った。
「あ、その節はどうも……。すみません、私てっきり強盗が入ったのかと思って……。あの、それでどういった事情なんでしょう？」
クローゼが困った顔で尋ねた。
「クローゼお姉ちゃん。そんなの決まってるわよ。どーせ、クラムがまた悪さでもしたんでしょ」
マリィが言った。
「ねー、おねえちゃん。もうアップルパイできた～？」
ダニエルがクローゼに尋ねた。今は関係ないだろう……。
「あ、もうちょっと待っててね。焼き上がるまで時間がかかるの」
クローゼが微笑みながら言った。
「この悪ガキ！」
「乱暴オンナ！」
その横ではエステルとクラムが言い争っていた。
「まったく、クラムってばいつまで経ってもガキなんだから」
「アップルパイ、まだかな～」
各自、他人を気にせず自由気ままに話している。
「……なんだかややこしい事態になってるね」
「あ、あはは……私もそんな気がします……」
ヨシュアとクローゼが苦笑した。
「ピュイ」
シロハヤブサが鳴いた。
「あらあら。何ですか、この騒ぎは……」
その時、孤児院の中から女性が現れた。
「テレサ先生！」

この女性こそが孤児院運営者のテレサ院長だった。
「詳しい事情は判りませんが……。どうやら、またクラムが何かしでかしたみたいですね」
テレサ院長が困った様子で言った。
「し、失礼だなぁ。オイラ、何もやってないよ。この乱暴な姉ちゃんが言いがかりをつけてきたんだ」
「だ、誰が乱暴な姉ちゃんよ！」
さっきと何も変わらない2人。
「あらあら、困りましたね。クラム……本当にやっていないのですか？」
テレサ院長がクラムに近づき言った。
「うん、あたりまえじゃん！」
この期に及んでまだそう言えるのがすごい。
「女神様（エイドス）にも誓えますか？」
「ち、誓えるよっ！」
「そう……。さっき、バッジみたいな物が子供部屋に落ちていたけど……。あなたの物じゃありませんね？」
「え、だってオイラ、ズボンのポケットに入れて……」
クラムがズボンのポケットに手を入れた。
「はっ……」
カマをかけられたようだ。
「や、やっぱり～！」
エステルが声を出した。
「まあ……」
「見事な誘導ですね……」
クローゼとヨシュアが感心した。
「クラム……。もう言い逃れはできませんよ。取ってしまった物をそちらの方にお返ししなさい」
テレサ院長がクラムに言った。
「ううううう……。わかったよ！返せばいいんだろ、返せば！」

クラムは悔しそうに紋章をエステルに放り投げた。
「わっと……」
「フンだ、あばよっ！」
クラムはどこかに行ってしまった。
「あっ、クラム君！」
「大丈夫、頭が冷えたらちゃんと戻ってくるでしょう」
テレサ院長がクローゼに言った。
「それより……ここで立ち話をするのも何ですね。詳しい話は、お茶を飲みながら伺わせていただけないかしら？」
テレサ院長がエステルたちを孤児院に招き入れた。

エステルたちは、お茶とパイをご馳走になりながら自己紹介をして先ほどの出来事について説明した。

「そうですか……そんな事を。あの子も、悪気はないのですがイタズラ好きに加えて無鉄砲で……。本当にすみませんでした。保護者としてお詫び申し上げます」
話を聞いたテレサ院長が頭を下げた。
「あは、もういいですよ。紋章もちゃんと戻ってきたし。美味しいハーブティーとアップルパイでチャラってことで」
エステルが笑いながら言った。
「ふふ、ありがとう。エステルさん、ヨシュアさん」
テレサ院長が微笑んだ。
「でも、本当に美味しいお茶ですね。町の酒場で淹れてもらった物と同じような味がしますけど……。ひょっとして表で栽培されているものですか？」
ヨシュアがテレサ院長に尋ねた。
「ええ、ハーブの栽培は私の趣味のようなものでしてね。それを、宿酒場のご主人がご好意で仕入れて下さるんです」
テレサ院長が説明した。

「そうなんだ……。さっき食べたアップルパイもすっごく美味しかったんですけど」
エステルが言った。
「ふふ、あれは私ではなくこの子が作ったものなんですよ」
テレサ院長がクローゼを見た。
「え、クローゼさんが？」
エステルが驚いてクローゼを見た。
「恥ずかしながら……。あの先ほどは本当に失礼なことをしました。私、とんでもない勘違いをしてしまって……」
クローゼがすまなさそうに言った。
「気にしなくっていいてば。あたしもあの子を捕まえた時にちょっと荒っぽくしちゃったし。でも、さすがにあの白いタカには驚いたけどね」
「あ、ジークのことですね。あの子、シロハヤブサなんです」
「シロハヤブサ……たしかリベールの国鳥だったね。よく訓練されているみたいけど、君のペットなの？」
ヨシュアが尋ねた。
「いえ、私が飼っているわけじゃありません。仲のいいお友達なんです」
「は～、すごい友達もいたもんね。そういえば、クローゼさんってジェニス王立学園の生徒よね？なのに、ここに住んでるの？」
エステルが感心して尋ねた。
「いえ……私は学園の寮に住んでいます。あまり遠くないので、休日などについ遊びに来てしまうんです。ご迷惑かとは思うのですけど……」
クローゼは少しばかりすまなさそうに言った。
「あらあら。迷惑だなんてとんでもない。あなたが来てくれるおかげで私も、色々と助かっていますよ。子供たちも喜んでいますしね」
テレサ院長が言った。
「テレサ先生……」

「でも、こちらに構いすぎて学園生活を疎(おろそ)かにしないようにね。まあ、あなたに限ってそんな心配はないでしょうけど」
「はい、肝に銘じておきます」
クローゼが頷いた。
「うーん、学園生活か……。そういうのも一度は経験してみたかったわね」
「確かに、教会の日曜学校は週に一回しかなかったからね。でも、王立学園の入学試験はかなり難しいっていう話だけど？」
「あう、あたしには逆立ちしたって無理か……」
エステルは肩を落とした。
「ふふ、そんな事ないです。遊撃士になる方がはるかに難しいと思いますよ。しかも、その若さで……。私の方こそ憧れてしまいます」
クローゼが言った。
「えへへ……何だかくすぐったいわね。遊撃士とは言ってもまだ見習いみたいなもんだし」
「一人前の遊撃士を目指して王国各地を回っている最中なんです。しばらく、このルーアン地方で活動することになると思います」
エステルたちが言った。
「だったら、何かの機会にお世話になるかもしれませんね。あの子たちも喜ぶでしょうし、是非、また来て下さいな。お菓子とお茶くらいはご馳走させてもらいますよ」
そうして、エステルたちはお暇(いとま)することにした。

「うーん、テレサ院長ってあったかい感じのする人よね」
「そうだね……お母さんって感じの人かな」
「ふふ、子供たちにとっては本当のお母さんと同じですから」
その時、シロハヤブサのジークが来た。
「ジーク。待っていてくれたの？」
「ピュイ」

「うん、そうなの。悪い人たちじゃなかったの。エステルさんとヨシュアさんっていってね。あなたも覚えていてくれる？」
「ピューイ！」
「ふふ、いい子ね」
クローゼはジークと会話しているようだ。
「す、すごい。その子と喋れるの？」
「さすがに喋れませんけど、何が言いたいのかは判ります。お互いの気持ちが通じ合ってるっていうか……」
「ほえ～……」
エステルはただただ感心するばかりだ。
「相思相愛ってわけだね」
「はい」
クローゼが頷いた。
「こんにちは、ジーク。あたしエステル、よろしくね？」
「ピュイ？」
「ピュイ――――ッ」
ジークは飛び立って行った。
「ああっ……。しくしく、フラれちゃった」
「はは、残念だったね」
「クスクス。そういえば、エステルさんたちはルーアン市に行かれるんですよね？」
「うん、ギルドの支部で転属手続きをするつもりなの。そうしないとお仕事できないし」
エステルが頷いた。
「ルーアンのギルドでしたら私、何回か行った事があります。よかったら案内しましょうか？」
「わ、いいの？すごく助かっちゃうけど」
エステルが喜んだ。
「君の方は大丈夫？すぐに学園に戻らなくて」
ヨシュアが尋ねた。

「はい。今日一日は外出許可を貰っていますから。夜までに戻れば大丈夫です」
「それじゃ決まりね♪ルーアンに向けてレッツ・ゴー！」

第3章　白き花のマドリガル（6）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いろいろあったが何はともあれ、いよいよルーアン市に入ることになったエステルたち。そこには何があるのか！？

第3章　白き花のマドリガル（7）

―メーヴェ海道

マーシア孤児院を出たところで草むらから少年の声がした。

「……クローゼ姉ちゃん」

クラムが出てきた。

「クラム君？」

「あ、イタズラ小僧！」

クローゼとエステルが声を上げた。

「もう……こんな所で遊んだらダメよ。魔獣に襲われたらどうするの？」

クローゼがクラムをたしなめた。

「オイラ、クローゼ姉ちゃんにどうしても謝りたくってさ……。何もしてないなんて嘘ついたりしてごめんなさい」

「ふふ……怒ってないから安心して。それに、本当に謝りたい人は他にもいるんだよね？」

「ギクッ……。そ、そんなことないもんね！」

図星だったようだ。

「？？？」

当のエステルは何も分かっていないようだ。

「あなたが良い子なのは私、よく知ってるから。ね……ちゃんと謝ろう？」

クローゼがクラムに言った。

「……」

「クローゼ姉ちゃんの頼みなら仕方ないや……。悪かったよ。遊撃士の姉ちゃん。ゴメン……なさい」

クラムがエステルに近寄り、謝った。

「あ、あはは……。あたしに謝りに来たんだ。素直なとこ、あるじゃない？」

「か、勘違いすんなよ!?クローゼ姉ちゃんに頼まれたからだってば!大体なぁ、遊撃士のくせに注意力が足りないんじゃないの?オイラみたいな子供に簡単に取られてどうするのさ?」
クラムの鋭い指摘がエステルに突き刺さる。
「うぐっ……」
エステルは反論できない。
「バイバイ!せいぜい修行しろよな!」
クラムは孤児院に戻っていった。
「や、やっぱり可愛くない!」
「まあまあ。ただの照れ隠しだってば。それに、あの子の言う通り注意不足だったのは事実だしね。修行が必要なのは確かだと思うよ?」
ヨシュアの追い討ち。
「ううう……。ヨシュアはもっと可愛くない!」
2人にもダメ出しを食らったエステルはうなだれた。
「クスクス……。エステルさんとヨシュアさんってとっても仲がいいんですね。まるで本当の姉弟みたいです」
「そ、そうかな~?」
エステルは照れた。
「面倒を見る割合からいうと姉弟っていうより兄妹だけどね」
「む、失礼しちゃうわね」
エステルはむくれた。確かにそうだな。
「ふふ、うらやましいです。私は一人っ子でしたから。だから、あそこの雰囲気に憧れてしまうんですけど……」
クローゼは下を向きながら、小さく言った。
「え?」
「あ、いえ……。それではそろそろ出発しましょうか。このまま、海岸沿いにまっすぐ行けばルーアンです」
クローゼは何事もなかったかのように言った。
「オッケー。それじゃあ、行きましょ」

―海港都市ルーアン　北街区
「うわ～……。ここがルーアンか。なんていうか、キレイな街ね」
「海の青、建物の白……。眩しいくらいのコントラスト。まさに海港都市って感じだね」
エステルとヨシュアは初めて見る海港都市に見惚れた。
「ふふ、色々と見所の多い街なんです。すぐ近くに、灯台のある海沿いの小公園もありますし。街の裏手にある教会堂も面白い形をしているんですよ。でも、やっぱり1番の見所は《ラングランド大橋》かしら」
クローゼが見所を挙げていった。
「《ラングランド大橋》？」
エステルが尋ねた。
「こちらと、川向こうの南街区を結ぶ大きな橋です。巻き上げ装置を使った跳ね橋になっているんですよ」
「跳ね橋か……。それはちょっと面白そうだな」
「あと、遊撃士協会の支部は表通りの真ん中にあります。ちょうど大橋の手前ですね」
「オッケー。まずはそっちに寄ってみましょ」
エステルたちは遊撃士協会ルーアン支部に行った。

―遊撃士協会ルーアン支部
「こんにちは～、って。あれ、受付の人は？」
受付には誰もいなかった。むなしく響いた挨拶だった。
「おや、お嬢ちゃんたち。なにか依頼でもあるのかい？」
掲示板を見ていた女性が言った。

「あ……」
「受付のジャンは2階で客と打ち合わせ中なんだ。困ったことがあるならあたしが代わりに聞くけど？」
「えっと……。客じゃないんだけど」
エステルが言った。女性はエステルの胸元にあった遊撃士の紋章に気付いた。
「ん、その紋章……。なんだ、同業者じゃないか。あたしの名はカルナ。このルーアン支部に所属してる。見かけない顔だけど新人かい？」
女性はカルナと名乗った。
「うん。あたしは準遊撃士のエステル」
「同じく準遊撃士のヨシュアです。よろしくお願いします」
エステルとヨシュアが自己紹介した。
「エステルとヨシュア……」
カルナが顔に手を当てた。
「そうか、あんたたちがロレントから来た新人だね？ボースじゃ、シェラザードと大活躍したそうじゃないか」
カルナが思い出して言った。結構、情報が流れているね。
「あ、あはは……。それほどでもないけど」
「僕たちが来ることをご存じだったんですか？」
「ああ、ジャンのやつが有望な新人が来るって言ってたからね。しかし、転属手続きをするなら彼の用事が終わらないとダメだねぇ。しばらく、街の見物でもして時間を潰してきたらどうだい？」
どうやら、すぐには転属できないようだ。
「そうですね……。ただ待っているだけも何ですし」
「あたしも賛成！あ、そうだ……。ね、良かったらもう少し付き合ってくれないかなぁ？せっかく知り合いになれたのにここでお別れも勿体ないし……」
エステルがクローゼに向き合って言った。
「あ……喜んで。お邪魔じゃなかったらぜひご一緒させてください」

クローゼが言った。
「やった♪」
「決まりだね。それじゃあ僕たち、ルーアン見物に行ってきます」
ヨシュアがカルナに言った。
「しばらくしたらまた来るわね」
「ああ、楽しんでおいで」
エステルたちはルーアン見物を始めた。

第3章　白き花のマドリガル（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ルーアン市に着いたエステルたち。次回からルーアン支部所属となって活動開始です。

第3章　白き花のマドリガル（8）（前書き）

不良グループとダルモア市長と秘書ギルバードが登場！

第3章　白き花のマドリガル（8）

―ラングランド大橋

「うわぁ……。これが《ラングランド大橋》か……」

ラングランド大橋は全長１０８アージュという壮大な長さを誇る。

跳ね橋で、巻取りには工房都市ツァイスで造られたオーブメントを搭載している。

「やっぱり大きいわねぇ。ヴェルテ橋の倍くらいはありそう」

エステルは

「この橋が作られたのは４０年ほど前のことだそうです。それまでは、渡し船を使って両岸を行き来してたんですって」

クローゼが解説してくれた。

「え……。どうして橋を作らなかったの？」

「このルビーヌ川は海と湖を結ぶ唯一の川だからね。湖畔にある王都に向かう船が通れないと困るからじゃないかな」

ヨシュアが指摘した。確かに、跳ね橋でないと大型の船が通れないね。

「はい、ご明察です。５０年前の導力革命によって、これほど大規模な跳ね橋を建造することが可能になったそうです」

「なるほど……。オーブメント様々ってわけね。しかし、それは実際に跳ね上がる所を見てみたいな」

「跳ね橋が上げられるのは日に三回と決められています。今からだったら……夕方には見られると思いますよ」

「よ～し、それは絶対に見逃さないようにしないと！」

「だね」

エステルはかなり期待しているようだ。

―ルーアン市　南街区
「なんか、大きな建物がいっぱい並んでるわね～」
そこには、家ではなく何かを保管しておくような建物が多くあった。
「ここは倉庫区画ですね。外国から運ばれてきた荷などが保管されているんです」
「ふーん……。でも、少し寂しい場所ね」
「飛行船が普及してから水の上に浮かぶだけの船は少なくなりましたから……。昔と較べると、荷卸しの量も減ってしまったようです」
「そうなんだ……」
エステルは寂れた倉庫を見て呟いた。
「使われていない倉庫もありそうだね」

―倉庫区画　最奥
倉庫の前に赤いバンダナを頭に巻いた男が立っていた。
「……ど、どうしてこんな場所に若い女の子たちが……。やいやい、ここは立ち入り禁止だ！て、てめえらみたいなガキどもが入っていい場所じゃねえんだよ！」
男は緊張しながら怒鳴った。
「いや、別に入りたいなんて一言も言ってないんだけど……。ところでお兄さん、なんでそんなに緊張しちゃってるわけ？」
エステルが純粋な疑問を投げかけた。
「や、やっぱり緊張してるように見える……？……じゃなくて、とにかくここは立ち入り禁止だ！とっとと向こうに行っちまえ！」
相変わらず緊張しているようで、歯切れが悪そうに怒鳴る。
「（これは、そっとしておいてあげた方がよさそうだね……）」
「（うーん、カッコも妙だし、いったいどういう人なのかしら？）」
ヨシュアとエステルがささやく。
「（……）」

クローゼだけが困った顔をしていた。

北街区に戻ろうとした時、
「待ちな、嬢ちゃんたち」
若者が3人こちらに来た。
「え、あたしたち？」
「おっと、こりゃあ確かにアタリみたいだな」
3人のうちのディンが言った。
「ふん、珍しく女の声が聞こえてきたかと思えば……」
もう1人のロッコが言った。
「あの、なにか御用でしょうか？」
クローゼが尋ねた。
「へへへ、さっきからここらをブラついてるからさ。ヒマだったら俺たちと遊ばないかな～って」
下品な口を叩くディン。どうやら、まともな人ではないことは確かだ。
「え、あの……」
困惑するクローゼ。
「なによ、今時ナンパ～？悪いけど、あたしたちルーアン見物の最中なの。他をあたってくれない？」
エステルは呆れたように言った。
「お、その強気な態度。オレ、ちょっとタイプかも～？」
最後の1人、レイスがこれまた下品な口調で言った。
「ふえっ？」
エステルが素っ頓狂な声をあげた。
「見物がしたいんだったら俺たちが案内してやろうじゃねえか。そんな生っちろい小僧なんか放っておいて俺たちと楽しもうぜ」
ロッコがヨシュアの方を見て言った。

「……」
ヨシュアは何も言わない。
「ちょ、ちょっと！何が生っちろい小僧よ！？あんたたちみたいなド素人、束になってもヨシュアには……」
エステルが言おうとした時、
「いいよ、エステル。別に気にしてないから。君が怒っても仕方ないだろ？」
ヨシュアが制した。
「で、でも……」
エステルは納得いかない様子だ。
「なに、このボク……。余裕かましてくれてんじゃん」
「むかつくガキだぜ……。上玉２人とイチャつきやがって」
「へへ、世間の厳しさってヤツを教えてやる必要がありそうだねぇ」
ディン、ロッコ、レイスがヨシュアに歩み寄ってきた。ヨシュアの実力に気付かないようでは大した使い手ではなさそうだな。
「ちょ、ちょっと……！」
「や、止めてください……！」
エステルとクローゼが叫ぶ。
「……僕の態度が気に入らなかったら謝りますけど」
ヨシュアが冷静に言う。
「彼女たちに手を出したら……手加減、しませんよ」
そして、３人に近づききっぱりと言った。
「なっ……」
「な、なんだコイツ……」
「ハ、ハッタリだ、ハッタリ！」
ヨシュアの威圧に負けて押された３人。やっぱり大した者ではないな。
「へッ、女の前でカッコ付けたくなる気持ちも判るけどな。あんまり無理をしすぎると大ケガすることになるぜ……」
ディンが言ったその時、

「お前たち、何をしているんだ！」
青年がラングランド大橋から来た。
「ゲッ……」
「うるせえヤツが来やがったな……」
3人は面倒そうに言った。
「お前たちは懲りもせず、また騒動を起こしたりして……。いい年して恥ずかしいとは思わないのか！」
青年が言った。
「う、うるせぇ！てめぇの知ったことかよ！」
「市長の腰巾着が……」
3人が忌々しそうに言った。
「なんだと……」
青年が言おうとした時、
「……おや、呼んだかね？」
男性が1人現れた。
「ダ、ダルモア！？」
「ちっ……」
これまた面倒そうな視線を向ける3人。
「（だ、誰なのかな……。すごく威厳ありそうな人だけど）」
エステルが男性を見る。
「（ルーアン市長のダルモア氏です。お若い方は、秘書をされているギルバードさんといったかしら……）」
クローゼが囁いた。
「このルーアンは自由と伝統の街だ。君たちの服装や言動についてとやかく文句を言うつもりはない。しかし他人に、しかも旅行者に迷惑をかけるというなら話は別だ」
ダルモア市長が言った。
「けっ、うるせえや。この貴族崩れの金満市長が。てめえに説教される覚えはねえ」
ディンが言った。ひどい言い様だな。

「ぶ、無礼な口を利くんじゃない！いい加減にしないと、また遊撃士協会に通報するぞ！？」
青年改め、秘書ギルバードが言った。
「フン……何かというと遊撃士かよ。ちったあ自分の力で何とかするつもりはないわけ？」
レイスが言った。まあ、そう言いたくなる。
「たとえ通報されたとしても奴らが来るまで時間はある……。とりあえず、ひと暴れしてからトンズラしたっていいんだぜぇ」
ロッコが言った。
「悪いんだけど……。通報するまでもなくすでにここに居たりして」
エステルが残念とばかりに言った。
「な、なにぃ？」
3人がエステルたちの方を向く。
「はあ～、この期に及んでこの紋章に気付かないなんてね。あんた達、目が悪いんじゃない？」
エステルは、左胸に飾った準遊撃士の紋章を指差した。
「そ、それは……！？」
「遊撃士のバッジ！？」
「じゃあ、こっちの小僧も……」
3人がヨシュアを見る。
「そういう事になりますね」
ヨシュアが言う。
「（ど、どうすんだ？まさかこんなガキどもが遊撃士なんて……）」
「（なあに、構うもんか！遊撃士とはいえただの女子供じゃねえか！）」
「（ば、馬鹿野郎！見かけで判断するんじゃねえ！ついこの間、3人がかりで女遊撃士と戦ってのされちまったのを忘れたのか！？そ、それに何と言っても……”あの人”と同じなんだぞ！？）」
3人が話し合う。ディンは賢明だな。女遊撃士とはカルナのことだろうが、”あの人”とは誰だろうか？

3人が青ざめると
「きょ、今日の所は見逃してやらあ！」
「今度会ったらタダじゃおかねえ！」
「ケッ、あばよ！」
どこかに行ってしまった。
「なんて言うか……。めちゃめちゃ陳腐な捨て台詞ね」
「まあ、ああいうのがお約束じゃないのかな？」
エステルたちは呆れている。
「済まなかったね、君たち。街の者が迷惑をかけてしまった。申し遅れたが、私はルーアン市の市長を務めているダルモアという。こちらは、私の秘書を務めてくれているギルバード君だ」
「よろしく。君たちは遊撃士だそうだね？」
ダルモア市長と秘書ギルバードが挨拶した。
「あ、ロレント地方から来た遊撃士のエステルっていいます」
「同じくヨシュアといいます」
「そういえば、受付のジャン君が有望な新人が来るようなことを言っていたが……。ひょっとして君たちのことかね？」
ダルモア市長が推測して言った。
「えへへ……。有望かどうかは判らないけど」
「しばらく、ルーアン地方で働かせて貰おうと思っています」
「おお、それは助かるよ。今、色々と大変な時期でね。君たちの力を借りることがあるかもしれないから、その時はよろしく頼むよ」
ダルモア市長が言った。
「大変な時期……ですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「まあ、詳しい話はジャン君から聞いてくれたまえ。ところで、そちらのお嬢さんは王立学園の生徒のようだが……」
ダルモア市長がクローゼを見た。
「はい、王立学園2年生のクローゼ・リンツと申します。お初にお目にかかります」

「そうか、コリンズ学園長とは懇意にさせてもらっているよ。そういえば、ギルバード君も王立学園の卒業生だったね？」
「ええ、そうです。クローゼ君だったかい？君の噂は色々と聞いているよ。生徒会長のジル君と一緒に主席の座を争っているそうだね。優秀な後輩がいて僕もＯＢとして鼻が高いよ」
秘書ギルバードは色々情報を持っているようだ。
「そんな……恐縮です」
「ははは、今度の学園祭は私も非常に楽しみにしている。どうか、頑張ってくれたまえ」
「はい、精一杯頑張ります」
「うむ、それじゃあ私たちはこれで失礼するよ。先ほどの連中が迷惑をかけたら私の所まで連絡してくれたまえ。ルーアン市長としてしかるべき対応をさせて頂こう」
そう言って、ダルモア市長と秘書ギルバードは去っていった。
「うーん、何て言うかやたらと威厳がある人よね」
「確かに、立ち居振る舞いといい市長としての貫禄は充分だね」
「ダルモア家といえばかつての大貴族の家柄ですから。貴族制が廃止されたとはいえ、いまだに上流貴族の代表者と言われている方だそうです」
クローゼが言った。
「ほえ～……。なんか住む世界が違うわね。しかし、それにしてもガラの悪い連中もいたもんね」
いきなりアレでは驚くのも当然だな。
「そうですね。ちょっと驚いちゃいました。ごめんなさい、不用意な場所に案内してしまったみたいです」
クローゼが謝った。
「君が謝ることはないよ。ただ、わざわざ彼らを挑発に行く必要はなさそうだね。倉庫区画の一番奥を溜まり場にしていみたいだからなるべく近づかないようにしよう」
ヨシュアが言った。

「うーん……。納得いかないけど仕方ないか」
エステルは腑に落ちないようだ。
とにかく、３人は北街区に戻ることにした。

第3章　白き花のマドリガル（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回からルーアン支部の一員として働き始めます。

第3章　白き花のマドリガル（9）（前書き）

皆さん、お久しぶりです。

第3章　白き花のマドリガル（9）

―遊撃士協会ルーアン支部
「いらっしゃい。遊撃士協会へようこそ！おや、クローゼ君じゃないか」
受付の男性が気前よく挨拶した。
「こんにちは、ジャンさん」
どうやらこの男性がジャンのようだ。
「また、学園長の頼みで魔獣退治の依頼に来たのかい？ああ、判った！学園祭の時の警備の依頼かな？」
やたらと早とちりして、よく喋る人だな。
「いえ、それはいずれ伺わせて頂くと思うんですけど。今日は、エステルさんたちに付き合わせて貰っている最中なんです」
早合点するジャンに説明した。
「あれ、そういえば……。学園の生徒じゃなさそうだけど。……待てよ、その紋章は……」
エステルたちが受付の前に立った。
「初めまして。準遊撃士のエステルです」
「同じく準遊撃士のヨシュアです」
「ああ、君たちがエステル君とヨシュア君か！いや～、ホント良く来てくれた！ボース支部から連絡があって今か今かと待ちかねていたんだ」
ジャンは嬉しそうだ。
「そっか、ルグラン爺さん、ちゃんと連絡してくれたんだ」
「感謝しなくちゃね」
根回しのいいルグラン爺さんだった。
「僕の名前はジャン。ルーアン支部の受付をしている。君たちの監督を含め、これから色々とサポートさせてもらうよ。２人とも、よろしくな」

「うん！よろしくね、ジャンさん」
「よろしくお願いします」
「はは、君たちには色々と期待しているよ。何といっても、あの空賊事件を見事解決した立役者だからな」
「空賊事件って……。あのボース地方で起きた？私、《リベール通信》の最新号で読んだばかりです。あれ、エステルさんたちが解決なさったんですか？」
クローゼはかなり驚いている。
「あはは、まさか……。手伝いをしただけだってば」
「実際に空賊を逮捕したのは王国軍の部隊だしね」
「謙遜することはない。ルグラン爺さんも誉めてたぞ。さっそく転属手続きをするから書類にサインしてくれるかい？」
ジャンが書類を差し出した。
「さあさあ、今すぐにでも」
多少、強引そうに突き出すジャン。
「う、うん……？」
「それでは早速」
エステルとヨシュアは転属手続の書類にサインした。
「うんうん、これで君たちもルーアン支部の所属というわけだ。いやぁ、この忙しい時期によくルーアンに来てくれたよ。ふふ……もう逃がさないからね」
ジャンの目が危なく輝く。
「な、なんかイヤ～な予感」
「先ほどから聞いてるとかなり人手不足みたいですね。何か事件でもあったんですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「事件という程じゃないけどね。実は今、王家の偉い人がこのルーアン市に来ているのさ」
ジャンが溜息をついた。
「王家の偉い人……。も、もしかして女王様！？」

エステルが期待して尋ねた。
「はは、まさか。王族の1人であるのは間違いないそうだけどね。何でも、ルーアン市の視察にいらっしゃったんだとさ」
「へー、そんな人がいるんだ。でも、それがどうして人手不足に繋がっちゃうの？」
「何と言っても王家の一員だ。万が一の事があるといけないとダルモア市長がえらく心配してね。ルーアン市の警備を強化するよう依頼に来たんだよ」
「なるほど、先ほど2階で話し合っていた一件ですね。それにしても市街の警備ですか」
ヨシュアが頷いた。
「まあ、確かに港の方には跳ねっ返りの連中がいるからね。そちらの方に目を光らせて欲しいという事だろう」
「跳ねっ返りって……。さっき絡んできた連中のことね。うーん、確かにあいつら何かしでかしそうな感じかも」
「なんだ、知っているのかい？」
ジャンが不思議そうに尋ねた。
「実は……」
エステルたちは先ほどの出来事を説明した。
「そうか……。倉庫区画の奥に行ったのか。あそこは《レイヴン》と名乗ってる不良グループのたまり場なんだ。君たちに絡んできたのは、グループのリーダー格を務める青年たちだろう」
「《レイヴン（渡りカラス）》ねぇ……。なーにをカッコつけてんだか」
エステルは不満そうに言った。
「少し前までは大人しかったんだが最近、タガが緩んでるみたいでね。市長の心配ももっともなんだが、こちとら、地方全体をカバーしなくちゃならないんだ。とまあ、そんなワケで本当に人手不足で困っていてね。君たちが来てくれて、感謝感激、雨あられなんだよ」
「あはは……。期待に沿えるといいけど。それじゃあ、明日からさ

っそく手伝わせてもらうわ」
エステルが照れた。
「何かあったら僕たちに遠慮なく言いつけてください」
「ああ、よろしく頼むよ！」

外に出た時は既に夕方になっていた。夕陽が照りつける港町
「わあ、もう夕方か……。すっごくキレイな夕陽ねぇ！」
「ここの夕陽は格別だな。白い町並みに良く映えてる」
「ふふ、私も大好きです。そうだ……。そろそろだと思いますよ」
クローゼが思い出したように言った。
「え、何が？」
その時、ラングランド大橋がゆっくりと跳ね上がった。
「はぁ～、なんていうか圧巻ね。あれ、どのくらいの間跳ね上がっているものなの？」
エステルが尋ねた。
「３０分くらいだと思います。早朝、昼前、夕方の３回、通る船が無くなるまでですね」
クローゼが言った。
「なるほど、比較的人通りの少ない時間帯だね」
「ふふ、初めて来られた方は最初は戸惑われるみたいですけど。あ、そういえば……。エステルさんたちは今夜の宿はどうされるんですか？」
「うーん、ギルドの２階に泊まらせてもらう手もあるけど。やっぱり最初くらいは優雅にホテルに泊まりたいかも」
「だったら、急いで部屋を取った方がいいかもしれません。今は観光シーズンですからすぐに一杯になってしまうと思います」
「そうか……。だったら急いだ方が良さそうだね」
「うん、ホテルに行きましょ」

エステルたちはホテルに向かった。

第3章　白き花のマドリガル（9）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ホテルに向かったエステルたち。しかし、そこには不幸が待ち受けていた！

第3章　白き花のマドリガル（１０）（前書き）

ホテルでエステルたちに降りかかる災難……。しかし、読んでる方としては結構面白い内容ですよ。
１００００アクセス突破しました！読者の皆様に感謝です！

第3章　白き花のマドリガル（10）

―ホテル・ブランシェ

「いらっしゃいませ。ホテル・ブランシェへようこそ。ご予約のお客様でいらっしゃいますか？」

受付のアーネストが尋ねた。

「ううん。そうじゃないんだけど……」

「今からでも部屋は取れますか？」

エステルたちは部屋が空いているかどうか尋ねた。

「お客様、いいタイミングでしたね。つい先ほど、最上階の部屋がキャンセルされたばかりなんです。よろしかったら、そちらにご案内しますが如何（いかが）でしょう？」

アーネストが言った。ナイスタイミングだな。

「最上階の部屋……。うーん、いいかもしんない」

「でも、最上階ともなるとかなりお高いんじゃないですか？」

当然そうだろう。

「キャンセル空きですから通常料金と同じで構いません。それに拝見した所、お客様がたは遊撃士でいらっしゃるご様子……。いつもお世話になっているのでサービスさせて頂きますよ」

アーネストが言った。遊撃士がこんな所で有利に働くとは……。

「えへへ、そこまで言われたらお言葉に甘えちゃうしかないわね」

エステルの顔がほころんだ。

「それじゃあ、その部屋をお願いします」

「かしこまりました」

アーネストが手続きを行った。

「ふふ、良かったですね。エステルさん、ヨシュアさん。それでは私、そろそろ学園の方に戻ろうかと思います。急がないと、寮の門限に間に合いそうにないので……」

「あ、そっか。夕方までって言ってたよね。うーん……名残惜しい

けど仕方ないか」
エステルが残念そうに言った。
「よかったら学園まで送ろうか？」
「ふふ、大丈夫です。通い慣れている道ですから」

―ルーアン市北街区
「今日は付き合わせてもらってありがとうございました」
クローゼが礼を言った。
「えへへ、やだな。お礼を言うのはこっちだってば」
「そうだね。案内してくれてありがとう」
「そんな、大したことはしてません。そうだ、お２人はしばらくルーアン地方にいるんですよね？よかったら、来週末にある学園祭にいらっしゃいませんか？」
「ガクエンサイ？」
「名前から察するに何かの行事みたいだね」
この２人、学園祭というものを知らないのか？
「ええ、学園側の許可を貰って、生徒が自主的に開くお祭りです。王立学園の伝統行事なんですよ」
クローゼがご丁寧に説明した。
「あ、そーいうのあたしメチャメチャ好きかも！出店とか演し物はあるの！？」
それがなかったら学園祭とは言えないだろう。
「ふふ、もちろんです。けっこう本格的なんですよ」
「行く行く、ぜーったい行く！ていうか、あたしも一緒にお祭りの準備がしたいくらい！」
ノリのいいエステル。
「ちょっとエステル……。さっきギルドで、忙しくなるって聞いたばかりなのを忘れたのかい？」

ヨシュアがはしゃぐエステルを制した。
「うう、それがあったか……」
途端に気落ちするエステル。
「まあ、学園祭の当日だけならいい息抜きになると思うし……。それまでしっかり仕事しようね」
「ふあ～い」
「クスクス……。エステルさん、ヨシュアさん。それでは私、そろそろ失礼しますね。近いうちにまた……」
「うん、またね！」
「気をつけて帰ってね」
そうして、クローゼは帰って行った。
「うーん、可憐な雰囲気なのに凛とした所もあって頼もしい……。あたしが男だったら間違いなくホレちゃってるわね」
やたらと人を品定めするエステル……。
「まあ、それはともかく……。何か企んでいそうな様子もないし、いい子であるのは確かみたいだね」
対して、人を冷静に判断するヨシュア……。
「そんな、どこぞの空賊娘じゃないんだから」
ジョゼットか。
「でも、出会いには恵まれたし、最上階の良い部屋も取れたし……。やっぱり、マノリアの展望台でジークを見たのがよかったのかも」
「はは、そうかもしれないね。……それじゃ、さっそく部屋に荷物を置いちゃおうか？」
「うん、最上階よね♪」
エステルたちはホテル・ブランシェに入った

―ホテル・ブランシェ最上階
「うわ～、ひっろーい！」

そこは、2人で使用するにはもったいないくらい豪華絢爛（ごうかけんらん）だった。
早速、部屋を物色するエステル。
「へえ～、こっちが寝室なんだ」
「最上階で、しかもスイートか。通常料金で泊まらせてもらうのが申しわけなくなってくるね」
「ま、せっかくの申し出だし、せいぜい堪能させてもらいましょ」

―バルコニー
「すごいな……。こんなバルコニーまであるんだ」
ヨシュアが驚いている。
「うん……。さすが絶景よね。でも確かに、あたしたちだけで使うにはもったいない部屋かも……。……父さんも一緒だったら良かったのに」
「そうだね……。本当に……どこで何をしているのだろうな」
エステルとヨシュアの顔が翳（かげ）る。

その時、部屋の中から声がした。
「ほほう……。なかなか良い部屋ではないか」
男性の声のようだ。
「なに、今の？」
「うん、部屋の中から聞こえてきたみたいだけど……」

「それなりの広さだし調度もいい。うむ、気に入った。滞在中はここを使うことにする」
貴族風の男性が言った。
「閣下、お待ちくださいませ。この部屋には既に利用客がいるとのこと……。予定通り、市長殿の屋敷に滞在なさってはいかがですか？」

黒服の男性が焦って言った。
「黙れ、フィリップ！あそこは海が見えぬではないか。その点、この海沿いのホテルは景観もいいし潮風も爽やかだ。バルコニーにも出られるし……」
貴族風の男性は寝室を出て、バルコニーに向かおうとした。が、エステルとヨシュアが寝室の前にいた。
「な、なんだお前たちは！？賊か！？私の命を狙う賊なのか！？」
めちゃくちゃだな、このオッサン。
「何をいきなりトチ狂ったこと言ってるのよ。オジサンたちこそ何者？勝手に部屋に入ってきたりして」
エステルが憮然（ぶぜん）とした様子で言った
「オ、オジサン呼ばわりするでない！フン、まあよい……。お前たちがこの部屋の利用客か？ここは私が、ルーアン滞在中のプライベートルームとして使用する。とっとと出て行くが良い」
過去最大の自己中心的発言炸裂！
「はあ？言ってることがゼンゼン判らないんですけど。どうして、あたしたちが部屋を出て行かなくちゃならないわけ？」
「事情をお伺いしたいですね」
エステルとヨシュアが言った。まあ、普通はそう言いますね。
「フッ、これだから無知蒙昧（むちもうまい）な庶民は困るのだ……。この私が誰だか判らぬというのか？」
自信たっぷりに背を反る貴族風の男性。
「うん、全然。なんか変なアタマをしたアジサンにしか見えないんだけど」
エステルがその自信をコナゴナにした。アタマとは髪型のことか、それとも中身のことか？
「へ、変なアタマだと……！」
慌てて頭の上に手を乗せる貴族風の男性。
「エステル……。いくら何でもそれは失礼だよ。個性的とか言ってあげなくちゃ」

「なるほど、物は言いようね♪」
さらに、失礼だと思いますよ、ヨシュア君……。
「ぐぬぬぬぬ……。フッ、まあ良い。耳をかっぽじって聞くが良い。……私の名は、デュナン・フォン・アウスレーゼ！リベール国主、アリシア?世陛下の甥にして公爵位を授けられし者である！」
威厳たっぷりに言った貴族風の男性。
「……」
「……」
エステルとヨシュアは口をあけたまま何も言わない。
「フフフ……。驚きのあまり声も出ないようだな。だが、これで判っただろう。部屋を譲れというそのワケが？」
「ぷっ……」
「はは……」
「あはははははは！」
思いっきり笑い出したエステル。ヨシュアも笑いをこらえている。
「オジサン、それ面白い！めちゃめちゃ笑えるかも！」
既に笑ってる人にいわれてもなぁ……。
「よりにもよって女王様の甥ですって～！？」
笑いが止まらないエステル。
「あはは、エステル。そんなに笑ったら悪いよ。この人も、場を和ませるために冗談で言ったのかもしれないし」
ヨシュアが笑いながら言った。
「こ、こ、こやつら……」
震える貴族風の男性改め、デュナン公爵。
「……誠に失礼ながら閣下の仰ることは真実です」
後ろに控えていた黒服の男性が言った。
「え……」
エステルが笑うのを止めた。
「これは申し遅れました。わたくし、公爵閣下のお世話をさせて頂いているフィリップと申す者……。閣下がお生まれになった時から

お世話をさせて頂いております」
黒服の男性がフィリップと名乗った。
「は、はあ……」
エステルは状況を飲み込めていない様子だ。
「そのわたくしの名誉に賭けてしかと、保証させて頂きまする。こちらにおわす方はデュナン公爵……。正真正銘、陛下の甥御にあたられます」
執事フィリップが断言した。
「（し、信じられないけど……。そのオジサンはともかく、あの執事さんはホンモノだわ）」
いまだオジサン扱いのデュナン公爵……。
「（そういえばジャンさんが言ってたね……。ルーアンを視察に来ている王族の人がいるって……）」
その王族の人がこんなオジサンなんて……といわんばかりのエステルとヨシュア。
「ふはは、参ったか！次期国王に定められたこの私に部屋を譲る栄誉をくれてやるのだ。このような機会、滅多にあるものではないぞ！」
人の気も知らず喋り続けるデュナン公爵。
「ふ、ふざけないでよね！いくら王族だからといってオジサンみたいな横柄な……」
エステルが言おうとしたその時、
「あいや、お嬢様がた！どうかお待ちくださいませ！」
フィリップが駆けつけてエステルを制した。
「え？」
「しばしお耳を拝借……」
フィリップがデュナン公爵に聞こえないように壁際までエステルたちを誘導した。
「失礼ながら、お嬢様がたにお願いしたき儀がございます。これで部屋をお譲り頂けませぬか？」

老執事は、札束になったミラを懐から取り出して差し出した。
「し、執事さん……」
「何もそこまで……」
「閣下は一度言い出したらテコでも動かない御方……。それもこれも、閣下をお育てしたわたくしめの不徳の致すところ……。どうか、どうか……」
老執事は、土下座せんばかりの勢いでエステルたちに頭を下げた。
「ふう、仕方ないか……。あんまり執事さんを困らせるわけにもいかないし」
「部屋はお譲りします。ただ、そのミラは受け取れません」
「し、しかしそれでは……」
「いいっていいって♪あたしたちにはちょっと豪華すぎる部屋だし。あのオジサンのお守り大変とは思うけど頑張ってね？」
「お、お嬢様がた……。どうも有り難うございます」
執事フィリップが頭を下げた。
「こら、私をのけ者にして何をコソコソ喋っているのだ？」
「別にな～んにも」
「どうもお騒がせしました。部屋は公爵閣下にお譲りします」
「おお、そうか！わはは、最初から素直にそう言えばいいのだ♪その謙虚な心がけをこれからも忘れるでないぞ」
調子のいい公爵だな。
「まったくもう……」
疲れた顔をするエステル。
「それでは失礼します」
エステルとヨシュアは部屋を後にした。

―1階　受付
「そうですか……。公爵閣下には事情を説明してお断りしたはずだ

ったのですが。本当に申し訳ありません。このようなことになってしまって」
アーネストが謝った。
「いいって、いいって。悪いのは全部あのワガママ公爵なんだし」
「ところで……。代わりの部屋はありますか？普通の部屋で結構ですから」
ヨシュアが尋ねた。
「そ、それが……。つい先ほど、全ての部屋が満室になってしまいまして……」
アーネストが申し訳なさそうに言った。
「げっ……」
「少し甘く見てたか……」
「どうかご安心ください。今回の件は私どもの不手際です。他に泊まれる場所がないか責任をもって手配させて……」
その時、後ろから知っている声がした。
「よ、なんか困ってるみたいだな？」
ここにきて、ナイアル・バーンズ登場！
「エステル、ヨシュア。空賊アジトで会って以来だな」
ホテル内は禁煙ですよ……。
「あ、ナイアル！？」
「こんばんは。意外な場所で会いますね」
「そりゃこっちの台詞だぜ。お前さんたちもルーアンに来ていたとは思わなかった。それより、どうした？何かトラブルでもあったのかよ？」
「実は……」
先ほどの一件をナイアルに説明した。
「ハッハッハ！相変わらず面白いことに巻き込まれてるじゃねーか！」
大笑いするナイアル。
「あのねぇ……。笑い事じゃないんだけど」

「そういう事なら話は早い。俺の部屋に泊めてやるよ」
「え？」
ナイアルもここに泊まっているということか？
「ベッドに空きがあるからな。よう、フロントさん、それでも構わないだろう？」
「もちろんですとも。そうして頂けると助かります」
アーネストは歓迎した。
「よし、決まりだな。地下1階の奥の部屋だ。遠慮せずに付いて来いよ」
ナイアルは一足先に行ってしまった。
「うーん、いのかなぁ？」
「せっかくの申し出だし受けてもいいんじゃないかな。まあ、泊めてもらう代わりに何かネタは要求されそうだけど」
今までのことから考えるとありそうだな。
「うーん……。メチャメチャありそうね。まあ、それくらいは仕方ないか」
とにかく、部屋に向かうことにした。

第3章　白き花のマドリガル（１０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

宿は何とか確保できたエステルたち。遊撃士の仕事は明日の朝から開始することになった。

第3章　白き花のマドリガル（11）（前書き）

ルーアン地方で事件が起こる！

第3章　白き花のマドリガル（11）

―地下1階　ナイアルの部屋

「おお、よく来たな。空いているベッドを適当に使ってくれや」

「泊めてくれるのはありがたいんだけど……。ちょっとサービス良すぎるんじゃないの？」

「おっと。変な勘繰りをするなよな？この前は、お前さんたちのおかげでスクープをモノに出来た。感謝のシルシってやつだぜ」

「空賊逮捕のスクープですね。どのくらい反響がありました？」

「それがよ、もうバカ売れ！特に、リシャール大佐と情報部の活躍を取り上げた記事が大反響でな。空賊事件そのものよりも大佐に稼がせてもらった感じだぜ」

ナイアルが笑いながら言った。最高に良かったそうだ。

「へえ……。あの人、そんなに人気あるんだ？」

「噂じゃ、今回の事件で陛下から勲章まで貰ったらしい。王都あたりの市民の間じゃ人気うなぎ登りっていう話だぜ。今度ウチでも、リシャール大佐の独占インタビューを載せるしな」

国民的英雄になりつつあるリシャール大佐。

「それは凄いですね……」

ヨシュアも感心している。

「まあ、あのルックスに加えて知的で頼りがいのある雰囲気だ。俺も、実際に話してみて好感の持てる人物だと思ったぜ。ただなぁ……」

そこで突然、ナイアルは黙った。

「どうしたの？」

「いや……。ま、それはどうでもいいか。記事のおかげでボーナスも出たし、ようやくお守りからも解放された。リシャール大佐様々ってやつだぜ」

「お守りから解放されたって、ひょっとしてドロシーのこと？」

「そういえば……。一緒じゃないんですか？」
「元々、新人研修の一環としてしばらく面倒見てただけだしな。今回のスクープをもってめでたくコンビ解消ってわけだ」
ナイアルとしてはまさにめでたい事だな。
「ふーん……。でも、あのヒトって1人にしたらかえって心配のよーな」
エステルがもっともらしいことを言った。
「言うなっての……。考えないようにしてんだから。まあ、そういうわけでボーナスを使ってバカンスを楽しんでいる最中ってわけだ」
「とか言って、どうせまたスクープを狙ってるんでしょ？あ、ひょっとして……。あの公爵を追ってたりとか？」
「ああ、デュナン公爵か。お前たちも災難だったな。聞いた話だと、王族の中でも放蕩三昧のはみ出し者だそうだ。アリシア女王も頭を悩ましているって噂だぜ」
まあ、あの態度を見れば一目瞭然だな。
「信憑性のありそうな話ですね。でも、本人が言うには次期国王だそうですけど……」
「え～、それってホントなの？あたし、あんなオジサンを王様なんて呼びたくないわよ」
エステルが露骨に嫌そうな顔をする。確かに、アレが国王になったら大変なことになりそうだ。
「まあ、陛下もご高齢だし有力候補なのは確かみたいだぜ。たしか、陛下の御子息は結構前に亡くなっているからな。まあ、周囲の反対も多そうだが……」
「ナイアルさんもそれほど詳しくなさそうですね。ということは……。追っているのは別の件ですか？」
ヨシュアが指摘した。
「……」
ナイアルが驚いた顔をした。
「あ、図星って顔してる」

「ったく……。相変わらず鋭い小僧だぜ。イエスとだけ言っておこう。だが、それ以上は喋れねえ。かなーり大きなネタなんでね」
「そう言われると余計に気になっちゃうんだけど……。まあいっか。あたしたちマスコミじゃないし」
「記事、楽しみにしておきますよ」
「おお、任せとけってんだ。ところで、お前さんたち晩メシはまだなんじゃねえか？奢ってやるから付き合えよ」
今回のナイアルは太っ腹だ。ボースの時とは大違いだ。
「え、ホント！？」
「ありがたくご馳走になります」

その夜、エステルとヨシュアはカジノバー《ラヴァンタル》でナイアルに夕食を奢ってもらった。アゼリア湾の魚介類を使った料理の数々に舌鼓を打った後、エステルたちは、酔いつぶれたナイアルをホテルまで運んでから眠りにつくのだった。

―深夜　マーシア孤児院
「フフ、繕いものが多いのは元気な子が多い証拠かしら……。さてと、そろそろ休みますか」
テレサ院長が服を置いた。
「女神よ、あの子たちに健やかなる明日を与えたまえ」
その時、外から何か音がした。火がついた音のような。
「何かしら、この音は？薪をくべる時のような……。……それにこの匂い……。……まさか！？」
火事か！？

「みんな、起きて！」

テレサ院長が2階の子供たちの寝室に駆けつけた。
「わわわっ……。ゴメン、もうしませんっ！」
クラムが跳ね起きた。なんやねん、それは？
「……あれ？」
寝ぼけていたことに気がついたようだ。
「クラムったら……。なに寝ぼけてんのよう」
マリィが隣のベッドから眠そうに言った。
「ポーリィ、ダニエル！早く起きなさい！
「うみゅ～……」
「どうしたのぉ……。先生、ちょっとコワイよぅ」
ポーリィとダニエルも眠そうに言った。
「……火事です！」
テレサ院長が言った。
「え」
「ほ、ほんと！？」
「1階に降りますよ！慌てず、大急ぎで先生に付いて来なさい！」

1階に降りたときは既に火の手があちこちに飛んでいた。火が容赦なく5人の行く手を狭めている。
「わわっ、なんだコレ！」
「けほけほ、煙くさ～い」
「こ、こわいよ～！」
「うみゅ～……。まだねむい～……」
クラム、マリィ、ダニエルはまともな判断だが、ポーリィだけは……。
「さあ、みんな出口に急いで！」
テレサ院長が出口に向かって走った時、屋根の梁が落下して出口を塞いでしまった。
「わああっ！」

「きゃあああっ」
「そ、そんな……。ああ、女神（エイドス）よ！どうかこの子たちだけでも……」
テレサ院長はなす術もなく、ただ祈るだけだった。

第3章　白き花のマドリガル（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

マーシア孤児院で火事が起こってしまった。さらに、テレサ院長たちは出口を塞がれ、脱出ができなくなってしまった。テレサ院長たち5人の安否は!?次回、エステルたちがこの事件を調べることになる!

第3章　白き花のマドリガル（12）（前書き）

ルーアン初仕事がマーシア孤児院の火事の原因を調べることになったエステルたち。

第3章　白き花のマドリガル（12）

―翌朝　ルーアン市街

「うぁ～～～～……。頭がガンガンしやがる……」

ナイアルが辛そうに頭を押さえる。同情の余地はないな。

「完璧な二日酔いね。そんなに強くないクセに飲み過ぎたりするからよ」

「薬でも買ってきましょうか？」

「いや、いい。それじゃ、俺はこのまま取材に向かうとするぜ……」

そんな辛そうな姿で取材しに行くとは……。

「そっか……。昨日は泊めてくれてありがとね」

「それと、ご馳走さまでした」

「ま、せいぜい面白いネタを掴んだら教えてくれや……。俺もしばらくはルーアンに滞在するからよ……。んじゃ、またな～……」

ナイアルはとぼとぼと歩きながら行ってしまった。

「さてと、僕たちもそろそろギルドに行こうか？」

「うん、そうね。ジャンさんに仕事を紹介してもらいましょ」

エステルとヨシュアはギルドに向かった。

―遊撃士協会ルーアン支部

「ジャンさん、おっはよー！」

「おはようございます」

「やあ、おはよう。早速来てくれたみたいだな」

「うん、約束したしね」

「早速ですけど、仕事を紹介してもらえますか？」

「ああ、いいともさ！色々と頼みたい事があるけど、うーん、どれにしようかな～」

ジャンが嬉しそうに仕事を探す。
「お、お手柔らかに……」
エステルがジャンの顔を伺う。
その時、ギルドの通信器がなった。
「おっと……。ちょっと待っていてくれ」
ジャンが通信器を取った。
「はいはい、こちら遊撃士協会。やあ、《白の木蓮亭》の……。連絡してくるなんて珍しいな。あんたの所のボロ通信器でよくぞ連絡できたもんだ……」
ひどい言い様だな。
「……」
ジャンが黙って話を聞きはじめた。
「……なんだって？そうか……。そりゃ大変な事になったな。ああ、判ってる。すぐにウチのを向かわせるさ」
そこでジャンが通信器を置いた。
「どうしたの？何か事件でもあった？」
「事件か事故かはちょっと判らないんだが……。昨夜、海道沿いにある孤児院が火事にあったそうだ」
「う、うそ……！？」
「それ、確かなんですか？」
エステルとヨシュアは驚いた。
「マノリアの宿屋の主人がわざわざ連絡してくれたんだ。マーシア孤児院っていうんだが君たち、場所は知ってるかい？」
「し、知ってるもなにも……。昨日の昼に訪ねたばっかりだわ」
「それで、院長先生と子供たちは大丈夫なんですか？」
それが今一番重要だ。
「その確認は取れていない。とりあえず、それも含めて一通り調べてきて欲しいんだ。……君たちに頼めるかい？」
「あったりまえよ！」
「それじゃあ僕たち、急いで孤児院に向かいます」

「ああ、よろしく頼んだよ！」
思わぬ事態に、エステルたちは急いでマーシア孤児院に向かった。

―マーシア孤児院
「ひ、ひどい……」
「完全に焼け落ちてるね……」
マーシア孤児院は元の姿も想像できないくらい焼け落ちていた。
「あれ、あんたたち……？」
焼け跡の処理をしていたザックとソレノが声をかけてきた。
「ひょっとして君たち遊撃士協会から来たのかい？」
「う、うん……」
「皆さんはマノリアの方ですね？」
ヨシュアが尋ねた。
「ああ……。瓦礫（がれき）の片付けをしているんだ。昨日の夜中に火事が起きて慌てて消火に来たんだけど……。まあ、ご覧の通り、ほぼ建物は焼け落ちちまった」
ザックはうなだれた。
「そ、それで……。院長先生と子供たちは！？」
エステルが慌てて尋ねた。
「大丈夫、みんな無事だよ。今、マノリアの宿屋で休んでもらってる最中なんだ。これだけの火事だったのに全員、大したケガは無いそうだぜ」
ソレノが言った。
「よ、よかったぁ～」
エステルが安心して息をつく。
「うん、不幸中の幸いだね」
ヨシュアも安心した。
「俺たちはもう少し後片付けをするつもりだけど。あんたらはどう

するつもりだい？」
「あ、さっそく宿屋に行ってあの子たちのお見舞いに……」
「悪いけど、それは後回し」
ヨシュアが制した。
「ふえっ！？」
驚いたエステル。
「この現場、ざっと見ただけでも妙なことが多すぎる。そして、そういう手がかりは時間が経つと失われてしまうんだ。……君の気持ちもわかるけど今は現場検証の方を優先しよう」
「……」
黙るエステル。悩んでいるんだろう。
「わかった……。あたしたち、遊撃士だもんね。何があったのか突き止めないと」
「うん……。さっそく敷地内を調べてみよう」
ヨシュアが言った。
「話はまとまったみたいだね」
「それじゃ、よろしく頼んだぜ！」
ソレノとザックは後片付けに戻っていった。

―扉の残骸
「うわ……。真っ黒コゲになってる。あれっ……？」
エステルが何かに気付いたようだ。
「どうしたの？」
「気のせいかもしれないけど……。蝶つがいの部分が変な風に引きちぎられてない？」
そこでヨシュアが確かめた。
「……確かに。まるで火がつく前に破壊されたような感じだね」

―扉付近の石壁

「ここ……。特にひどく崩れちゃってるね。それと……。なんか変なニオイがしない？」

「そうだね。これはひょっとしたら……」

ヨシュアがなにか思いついたようだ。

その他、食料品入れの樽や、ミルク入れのタンクが倒されていて、ハーブ畑のハーブが根元から抜かれていたり、敷地内には土が散乱していた。

一通り調べ終えたエステルたち。

「さてと……。色々なことが見えてきたね。このあたりでいったん整理してみようか？」

「うん、わかったわ」

「まず、出火場所なんだけど……。どうやら建物の中じゃなさそうだ。屋外の可能性が高いと思う」

「屋外？」

「うん、こっちだ」

ヨシュアが扉付近の石壁に向かった。

「……ちょうどこの辺りから建物全体に火が回ったんだろう」

「あ……。石壁が崩れ落ちちゃった場所ね。でも、どうしてここが出火場所だってわかるの？」

「地面の焦げ方が他の場所よりも激しいからだよ。周りと見比べれば判るはずさ」

エステルが周りを見渡す。確かにその付近の地面が真っ黒になっている。

「あ、ほんとだ……」

「建物外部の、この場所から火が広がったという事実……。これが何を意味するかわかるかい？」
ヨシュアがエステルに尋ねた。
「そ、それって……。何者かによって放火されたっていうこと！？」
「うん、僕もそう思う。このあたりに漂う匂い……。これは可燃性の高い油の匂いだ。多分、このあたりにぶちまけてから火を付けたんだろう」
「そ、そんな……」
「それから、建物の敷地が散らかり過ぎているのも変だ。消火するのに関係のないハーブ畑までが荒らされている。これも何者かの仕業だと思う」
その時、不意に後ろから女性の声がした。
「それ……本当ですか……？」
クローゼだった。
「あ、クローゼさん！？」
「来ていたのか……」
「どうして……。誰が……こんなことを……。かけがえのない思い出が一杯につまったこの場所を……。どうして……こんな……酷いことができるんですか……！？」
「クローゼさん……」
「……」
エステルたちは何も言えなかった。
「……。私……わたし……」
エステルがクローゼを抱きとめた。
「取り乱すのも無理ないよ。知り合ったばかりのあたしだってちょっとキツいから……。……信じられないよね。こんな事をする人がいるなんて」
「エステルさん……」
「でも、院長先生とあの子たちはみんな無事だったそうだから……。

だから、大丈夫。もう安心していいからね？」
「……。……ありがとう。少しだけ落ち着きました。朝の授業を受けていたらいきなり学園長がやって来て……。孤児院で火事が起きたらしいって教えてくれて……。ここに来るまで……生きた心地がしませんでした」
「そっか……」
「院長先生と子供たちはマノリアの宿屋にいるそうだよ。調査も終わったし、僕たちも一緒にお見舞いに付き合わせてくれるかな？」
ヨシュアが尋ねた。
「あ、はい……。そうして頂けると嬉しいです」
クローゼが微笑んだ。
「それじゃあ、さっそくマノリアに行くとしましょ」
エステルたちはマノリア村の宿屋へ向かった。

第3章　白き花のマドリガル（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

テレサ院長たちは無事だと聞いたエステルたち。この火事は放火だとほぼ確証を得た。とにかく、まずはお見舞いに向かうことにした。

第3章　白き花のマドリガル（13）（前書き）

今回はちょっと感動的な話です。この話の感想・評価などお待ちしてます。

第3章　白き花のマドリガル（13）

―マノリア村　白の木蓮亭

「先生、みんな……！」

エステルたちが2階に上がり部屋に入ると、クローゼがすぐに声をかけた。

「あ、クローゼ姉ちゃん！」

「来てくれたんだ……！」

子供たちもすぐに振り向いた。

「みんな……。どこにもケガはない？」

子供たちがクローゼに寄ってきた。

「うん、だいじょうぶだよ！」

「えへへぇ。ポーリィもへいきー」

子供たちには目に見える大きなケガはなかった。

「良かった……。本当に良かったね……」

その様子を見て、クローゼは安心した。

「ふふ……。よく来てくれましたね。エステルさんとヨシュアさんも一緒に来てくださったのね？」

テレサ院長が喜んだ。

「はい……。ギルドに連絡があったから」

「調査に来たついでにお見舞いに寄らせて頂きました」

エステルとヨシュアがテレサ院長に言った。

「そうですか……。訪ねてきてくれてありがとう」

テレサ院長が頭を下げた。

「調査に来たって……。あの火事を調べに来たんだろ？なにか分かったこと、あんの？」

クラムが尋ねた。

「えっと……」

「何と言ったらいいのか……」

エステルとヨシュアは困ったように目を交わした。子供たちにあのような残酷な真実を伝えるのはとてもできないだろう。

「ねえ、みんな。お腹は空いてないかしら？私、朝ゴハンを食べてなくて食堂で何か頼もうと思うの。ついでだから、みんなにも甘いものをご馳走してあげる」

クローゼが空気を読んで子供たちに言った。

「え、ほんとぉ！？」

「ポーリィ、プリン食べたーい！」

ダニエルとポーリィは食に釣られた。

「で、でも姉ちゃん……」

クラムは納得いかないようだ。

「……。行きましょ、クラム」

マリィも空気を察したようだ。

「え……」

「つべこべ言わずにさっさと来なさいってば。クローゼお姉ちゃん、はやく下に行きましょ」

マリィがクラムを引っ張った。

「ふふ、そうね」

クローゼと子供たちは部屋を出て行った。

「ふう、助かっちゃった。あの子たちにはあんまり聞かせたくなかったから……」

エステルが安心して息をついた。

「そうだね。あのマリィって子は察してくれたみたいだけど……」

マリィは大人だな。身体は子供、頭脳は大人って感じか？

「ふふ、良い子に恵まれて私は本当に幸せ者です……。それで、調査に来たとおっしゃっていましたね。どうぞ、何なりと聞いてください」

「ご協力、感謝します」

「えっと、それじゃあ……」

エステルたちがテレサ院長に先ほどの調査の結果を伝え始めた。

「まず、火災現場を調査した結果なんですが……。何者かによる放火の可能性が極めて高いことが判明しました」
「そうですか……やはり。火には気を付けていたのでおかしいとは思っていたのですが」
「そこでお聞きしますけど……。犯人には心当たりはありませんか？こういう事をしそうな動機があるという意味ですけど」
ヨシュアが尋ねた。
「……見当もつきません……。ミラにも余裕はありませんし恨まれる覚えもまったく……」
テレサ院長が首を振った。
「つまり、強盗目的じゃないし怨恨が理由でもないってわけね」
「そうなると、嫌な話ですけど愉快犯という可能性もあります。事件の前後に、何か変わったことはありませんでしたか？見知らぬ男たちが孤児院の近くをうろついていたとか……」
「そうですね……。昼間に、エステルさんたちがお見えになってからは特に……。……あの方は関係ないでしょうし」
「あの方？」
エステルが尋ねた。
「火に包まれた建物から私たちが脱出しようとした時……。天井の梁が落ちてきて、玄関から出られなくなってしまったんです。ですがその時、扉を破って助けにきてくれた方がいて……。梁をどけて、私と子供たちが逃げるのを助けて下さったんです」
「そ、そんな事があったんだ。それってマノリアの人なの？」
「それが、私たちを助けてから村の者を呼んでくると言ってすぐに居なくなってしまって……。マノリアの方々に聞いても誰も心当たりはないそうです」
「……怪しいですね。そんな真夜中に、孤児院の近くにいたというのも気になりますし。どういう雰囲気の人でした？」
ヨシュアがさらに尋ねた。
「象牙色のコートをまとった２０代後半くらいの男性です。見事な

銀髪をなさっていました」
「銀髪……」
ヨシュアが反応した。
「お若いのに、苦労なさったような深い眼差しをしていましたね。悪い方には見えませんでした」
「普通の人とは思えないけど人助けをしたのも事実だし……。確かに、犯人じゃなさそうね」
エステルが言った。
「……」
ヨシュアは口をあけたまま黙っている。
「ヨシュア？なによ、ボーッとしちゃって」
「いや……。そうだね、案外どこかの遊撃士かもしれないし……。その人のことは、とりあえず分けて考えた方が良さそうだ」
ヨシュアが視線をそらしたまま言った。なにやら雰囲気がおかしい。
「う、うん……？」
その時、クローゼが部屋に入ってきた。
「……失礼します」
「あれ、クローゼさん？」
「あの子たちはどうしたの？」
「ふふ……。下でケーキを食べています。あの、先生。お客様がいらっしゃいました」
「お客様？」
テレサ院長は誰といった顔だ。
「お邪魔するよ」
男性が2人入ってきた。
「あ……！」
「ダルモア市長……」
ダルモア市長と秘書ギルバードだった。
「おや、昨日会った遊撃士諸君も一緒だったか。さすがはジャン君、手回しが早くて結構なことだ。さて……」

ダルモア市長はテレサ院長の前に立った。
「お久しぶりだ、テレサ院長。先ほど、報(しら)せを聞いて慌てて飛んできた所なのだよ。だが、ご無事で本当に良かった」
「ありがとうございます、市長。お忙しい中を、わざわざ訪ねてくださって恐縮です」
「いや、これも地方を統括する市長の勤めというものだからね。それよりも、誰だか知らんが許しがたい所業もあったものだ。ジョセフのやつが愛していた建物が、あんなにも無残に……。心中、お察し申し上げる」
ダルモア市長が軽く頭を下げた。
「いえ……。子供たちが助かったのであればあの人も許してくれると思います。遺品が燃えてしまったのが唯一の心残りですけれど……」
テレサ院長が残念そうに視線を落とした。
「テレサ先生……」
クローゼがその様子を見た。
「遊撃士諸君。犯人の目処はつきそうかね？」
ダルモア市長がエステルたちに向き直って言った。
「調査を始めたばかりですから確かな事は言えませんが……。ひょっとしたら愉快犯の可能性もあります」
ヨシュアが答えた。
「そうか……。何とも嘆かわしいことだな。この美しいルーアンの地にそんな心の醜い者がいるとは」
「市長、失礼ですが……」
突然、秘書ギルバードが口を開いた。
「ん、なんだね？」
「今回の件、もしかして彼らの仕業ではありませんか？」
彼らとは？
「……」
ダルモア市長は黙っている。

「ま、待って！『彼ら』って誰のこと？」
エステルが慌てて尋ねた。
「君たちも昨日絡まれただろう。ルーアンの倉庫区画にたむろしているチンピラどもさ」
それは『レイヴン』のことか？
「あいつらが……」
「……」
クローゼは黙っている。
「失礼ですが……。どうして彼らが怪しいと？」
ヨシュアが冷静に尋ねる。
「昨日もそうだったが……。奴ら、いつも市長に楯突いて面倒ばかり起こしているんだ。市長に迷惑をかけることを楽しんでいるフシもある。だから市長が懇意にしているこちらの院長先生に……」
「ギルバード君！」
突然、ダルモア市長が声を荒げた。
「は、はい！」
「憶測で、滅多なことを口にするのは止めたまえ。これは重大な犯罪だ。冤罪（えんざい）が許されるものではない」
「も、申し訳ありません。考えが足りませんでした……」
ギルバードが頭を下げた。
「余計なことを言わずともこちらの遊撃士諸君が犯人を見つけてくれるだろう。期待してもいいだろうね？」
「うん、まかせて！」
「全力を尽くさせてもらいます」
エステルとヨシュアが頷いた。
「うむ、頼もしい返事だ」
ダルモア市長が満足げに言った。
「ところでテレサ院長……。１つ伺いたいことがあるのだが」
ダルモア市長がテレサに長に向き直る。
「なんでしょうか？」

「孤児院がああなってしまってこれからどうするおつもりかな？再建するにしても時間がかかるし、何よりもミラがかかるだろう」
「……。正直、困り果てています。当座の蓄えはありますが、建て直す費用などとても……」
「院長先生……」
「……」
エステルたちはその様子をただ見ているだけしかできなかった。
「やはりそうか……。どうだろう。私に１つ提案があるのだが」
「……なんでしょう？」
「実は、王都グランセルにわがダルモア家の別邸があってね。たまに利用するだけで普段は空き家も同然なのだが……。しばらくの間、子供たちとそこで暮らしてはどうだろう？」
「え……」
「もちろん、ミラを取るなど無粋なことを言うつもりはない。再建の目処がつくまで幾らでも滞在してくれて構わない」
「で、ですがそこまで迷惑をおかけするわけには……」
「どうせ使っていない家だ。気がとがめるのであれば……。うん、屋敷の管理をして頂こう。もちろん謝礼もお出しする」
「市長……。……。少し考えさせて頂けませんか？ありがたい申し出ですけれど、いろいろな事が起こりすぎて少し混乱してしまって……」
「無理もない……。ゆっくりお休みになるといい。今日のところはこれで失礼する。その気になったらいつでも連絡して欲しい」
「はい……。どうもありがとうございます」
テレサ院長が頭を下げた。
「ギルバード君、行くぞ」
「はい！」
ダルモア市長と秘書ギルバードが部屋を出て行った。
「は～、驚いちゃった。メイベル市長もそうだったけどめちゃめちゃ太っ腹なヒトよね」

「そうだね……。元貴族っていうのも頷けるな」
エステルとヨシュアは感心している。その一方でクローゼは困った顔をしていた。
「先生、市長さんの申し出、どうなさるおつもりですか？」
クローゼはテレサ院長に尋ねた。
「そうですね……。あなたはどう思いますか？」
「……」
クローゼがしばし考え込む。
「常識で考えるのなら受けたほうがいいと思います。だけど……。一度王都に行ってしまったら……。いえ……。なんでもありません」
「ふふ、あなたは昔から聞き分けがいい子でしたからね。いいのよ、クローゼ。正直に言ってちょうだい」
「……。あのハーブ畑だって世話する人がいなくなるし……。それに……それに……。先生とジョセフおじさんに可愛がってもらった思い出が無くなってしまう気がして……。ごめんなさい……。愚にも付かないわがままです」
「ふふ、私も同じ気持ちです。あそこは、子供たちとあの人の思い出が詰まった場所。でも、思い出よりも今を生きることの方が大切なのは言うまでもありません」
「はい……」
クローゼが頷く。
「近いうちに結論を出そうと思います。あなたは、どうか学園祭の準備に集中してくださいね。あの子たちも楽しみにしていますから」
「……はい」
先ほどとは違い、力強く頷いたクローゼ。
「エステルさん、ヨシュアさん」
テレサ院長がエステルとヨシュアの方を向いた。
「申しわけありませんが……。調査の方、よろしくお願いします」
「お任せください」
「絶対に犯人を捕まえて償いをさせてやりますから！」

第3章　白き花のマドリガル（13）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ダルモア市長の提案に心が揺れるテレサ院長。エステルたちは改めて犯人逮捕を誓う！

第3章　白き花のマドリガル（１４）（前書き）

今回は割と短めです。次回は笑いあり、涙ありの話になります。

第3章　白き花のマドリガル（14）

―マノリア村

「それにしても大変なことになったわね……。犯人捜し、どこから始めよう？」

決定的な証拠がない今、手のつけようがない状況のエステルたち。

「そうだね……。とりあえず、ギルドに戻ってジャンさんに報告した方がいい。捜査方針はそれから決めよう」

「うん、わかったわ」

エステルが頷く一方で、

「……」

クローゼは心ここにあらずといった様子だった。

「あれ、どうしたの？ボーッとしちゃって……」

「あ、ごめんなさい……。私もちょっと混乱しているみたいで……」

「そっか……。そういえば、ジョセフさんって院長先生の旦那さんのこと？」

エステルがクローゼに尋ねた。

「はい。数年前にお亡くなりになりましたけど……。私もずいぶん可愛がっていただきました」

「そうなんだ……。あれ、という事は……。クローゼさんも孤児院の出身？」

「いえ、残念ですけど……。ずいぶん昔に、ある事情でお世話になったことがあるんです。それで、王立学園に入ってルーアンに来たのをきっかけにまた親しくさせていただいて……」

「なるほど……」

「だから、いつも遊びに来て色々と手伝いをしてたんだね」

「はい……。……。私の受けたショックなんて先生やあの子たちに較べたらぜんぜん大したことはありません。何とかして元気づけて……」

その時、後ろからマリィの声が聞こえた。
「クローゼお姉ちゃん！」
慌てて走ってきたマリィ。
「マリィちゃん。どうしたの、そんなに慌てて？」
「あのね、あのね。クラムのやつがどこかに行っちゃったのよ！」
息を切らしながら話すマリィ。
「え……」
「ど、どこかに行ったってもしかしてマノリアの外に？」
「詳しく話してくれるかな？」
「あ、はい……。あのオジサンたちが来てから、クラム、2階に上がったみたいで……。すぐに降りてきて、真っ赤なカオして『ぜったい許さない！』とか言って……。そのまま飛び出してっちゃったんです！」
「ぜったいに許さない……。そ、それってまさか！倉庫にたむろする連中のこと！？」
「うん……。《レイヴン》の連中だと思う。秘書の人が喋っていたのを聞いてしまったんだろう……」
「た、大変じゃない！まさかあの子、連中の所に乗り込むつもりなんじゃ……」
「そ、そんな……！こうしてはいられません！私、急いで追いかけないと……」
「僕たちも付き合うよ。急げば、ルーアンに行くまでに何とか追いつけるかもしれない」
エステルたちは早速ルーアンに向かうことにした。
「クローゼお姉ちゃん……」
マリィが心配そうな顔をした。
「心配しないで。クラム君は必ず連れ戻すから。マリィちゃんは他の子たちの面倒をみてあげてね」
「うん……。お姉ちゃんたち、お願いね！」
マリィは白の木蓮亭に入っていった。

「それじゃあ急いでルーアンに引き返しましょ！」
「はい……！」

第3章　白き花のマドリガル（１４）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

クラムが単身でレイヴンの所に向かったと聞いたエステルたち。クラムを無事引き止めることができるか！？

第3章　白き花のマドリガル（15）（前書き）

クローゼが初戦闘参加！笑いと涙が混じった話です。どっちかというと感動話ですかね？感想・批評等を是非お願いします。

第3章　白き花のマドリガル（15）

―ルーアン市　北街区

メーヴェ海道を抜け、ルーアン市に到着したエステルたち。しかし、メーヴェ海道にはクラムはいなかった。

「……海道にはいなかったね。まさか、もう連中の所に乗り込んでいったんじゃ……」

エステルが肩を落とす。

「……」

クローゼは心配そうな顔をしている。

「とにかく南の倉庫区画に急ごう」

このままではいけないと思ったヨシュアが2人に言った。

ラングランド大橋に差し掛かったとき、

「しまった、もう昼前か……！」

クラムが橋を渡っていた。

エステルたちが走って追いかけたが、目の前で橋が跳ね上がってしまった。

「ああっ……！クラム君、待って！」

クローゼが叫んだが、距離が遠すぎて聞こえていない。

「駄目だ……。聞こえていないみたいだ」

「も～っ！どうしてこんな時に橋がっ！30分も待ってられないわよ！」

エステルが忌々しそうに言った。

「そんな……。このままじゃあの子が……。どうしよう……どうすれば……」

クローゼが困惑している。

「クローゼさん、落ち着いて。忘れたのかい？君が教えてくれたこ

とを」
ヨシュアがクローゼに言った。
「え……」
「橋が無かった頃は、何を使って向こう側と行き来していたって？」
以前、クローゼが橋が無かった時は船を使っていたと教えてくれた。
「あ、小船ね！」
「……そうでした！確かホテルの裏手に貸しボートがあるはずです！」
エステルとクローゼが思い出した。
「よっしゃあ！それで向こうに渡りましょ！」
エステルたちは早速ホテルへと向かった。

―ホテル・ブランシェ　裏手
小船に乗っていたムラート老人に声をかけた。
「ん……。なんじゃお前さんたち？」
「そのボート、貸してくれる！？急いで向こう岸まで渡りたいの！」
エステルがあせって言った。
「残念じゃが、このボートは公爵とやらの予約が入っていてな。これから水遊びをするそうじゃが……」
こんな時まで邪魔をしてくれるデュナン公爵。しかも水遊びとは……。
「そ、そんな～……」
がっくりとうなだれるエステル。
「どうか……。どうかお願いします！小さな男の子が、危険な目に遭うかもしれないんです！」
クローゼが必死に頼み込む。
「泣きそうな顔をするな。孫娘のことを思い出すじゃろが。まあ、いいじゃろ。人助けとあらば仕方あるまい。とっとと乗っていくがい

ええ」
ムラート老人がボートを譲った。
「あ、ありがとうございます！」
「おじさん、サンキュ！」
「ふふ、公爵とやらには整備しとると最中と言っておく。坊主、ボートの操縦は判るか？」
ムラート老人がヨシュアに尋ねた。
「はい、何とか。それじゃあ、２人とも乗って！」
エステルたちがボートに乗り込み、ヨシュアが運転した。

―ルーアン市　南街区
「ここは……。倉庫区画の一番南側ね」
その時、鳥の鳴き声がした。
「あ、ジーク！？」
ジークだった。クローゼの肩にとまった。
「ピュイ。ピイピュウ、ピューイ！」
クローゼの肩の上で鳴くジーク。
「そう……。わかったわ。……やっぱりあの子、一番奥の倉庫に行ったみたいです」
ジークと話したクローゼが言った。いつ見てもこの光景は理解できない……。
「急ごう。連中のたまり場は奥の方だ」
「了解ッ！」
「はい……！」

―倉庫区画　最奥

「……とぼけるなよ！お前たちがやったんだろ！？ぜったいに許さないからなっ！」
クラムがレイヴンのメンバー達に叫ぶ。
「なに言ってんだ、このガキは？」
「コラ、ここはお前みたいなお子ちゃまが来るとこじゃねえぞ。とっとと家に帰って母ちゃんのオッパイでも飲んでな」
「ひゃはは、そいつはいいや！」
幹部のロッコ、ディン、レイスが笑う。
「ううううう……。わあああああああああっ！」
クラムが叫びながらロッコたちに飛び掛った。
「な、なんだ……？」
「このガキ……なにブチギレてんだぁ？」
あまりの行動に困るロッコたち。
「母ちゃんが居ないからってバカにすんなよっ！オイラには先生っていう母ちゃんがいるんだからなっ！その先生の大切な家をよくも、よくも、よくもおっ！」
「ちっ……」
ロッコが面倒くさそうにクラムを突き飛ばした。
「あうっ……」
そこにディンが近づき、クラムの首を掴み持ち上げた。
「黙って聞いてりゃあいい気になりやがって……」
「どうやら、ちっとばかりオシオキが必要みてえだなぁ」
「お尻百たたきといきますか？ひゃーっはっはっは！」
その時、エステルたちが倉庫に飛び入った。
「やめてください！」
クローゼが真っ先に飛び出す。
「お、お前たちは……」
ディンがあわててクラムを後ろに投げ飛ばした。
「けほけほ……。クローゼ……姉ちゃん？」
クラムがかろうじて声を出した。

「子供相手に、遊び半分で暴力を振るうなんて……。最低です……。恥ずかしくないんですか」
クローゼが哀れなものを見るように言った。
「な、なんだとー！」
「ようよう、お嬢ちゃん。ちょっとばかり可愛いからって舐めた口、利きすぎじゃないの？」
「いくら遊撃士がいた所で、この人数相手に勝てると思うか？」
ロッコが余裕の笑みを浮かべる。
「クローゼさん、下がってて！」
「僕たちが時間を稼ぐよ。その隙にあの子を助けて……」
エステルとヨシュアがクローゼに言った。
「……いいえ。私も戦わせてください」
しかし、クローゼは拒むどころか自分も戦うと言った。
「へ……」
「本当は使いたくありませんでしたけど……。剣は、人を守るために振るうように教わりました」
クローゼが細剣を抜いた。
「今が、その時だと思います」
「ええっ！？」
「護身用の細剣（レイピア）？」
エステルとヨシュアが驚いた。
「その子を放してください。さもなくば……実力行使させていただきます！」
クローゼが向き直り、レイヴンのメンバーに言った。
「か、かっこいい……」
「……可憐だ……」
下っ端たちはそのクローゼの姿に惚れている。
「可憐だ、じゃねえだろ！」
ディンが切れた。
「こんなアマっ子にまで舐められてたまるかってんだ！」

「俺たち《レイヴン》の恐ろしさを思い知らせてやるぞ！」
ロッコたちが下っ端たちに叫んだ。
「ウイーッス！」
下っ端たちが呼応する。そして飛び掛ってきた！

漆黒の牙
「これで終わりだ……」
一撃必殺！

「こ、こいつら化け物か……？」
「遊撃士どもはともかく、こっちの娘もタダ者じゃねえ……」
ロッコたちが膝をつきながら言った。
「す、すごいや姉ちゃん！」
クラムが驚いて言った。
「ひゅーっ！クローゼさん、やる～っ！」
エステルがはやしたてる。
「その剣、名のある人に習ったものみたいだね」
「いえ、まだまだ未熟です」
そして、クローゼがレイヴンのメンバーに近づいた。
「あの、これ以上の戦いは無意味だと思います。お願いします……。どうかその子を放してください」
「こ、このアマ……」
「こ、ここまでコケにされてはいそうですかって渡せるかっ！」
その時、
「……そこまでにしとけや」
背後から青年の声がした。聞き覚えのある声だ。
「だ、誰だ！？」
「新手か！？」

ロッコたちが身構える。
「やれやれ、久々に来てみりゃ俺の声も忘れているとはな……」
「ア、アガットの兄貴！」
「き、来てたんスか……」
兄貴？
「……」
アガットがロッコたちに近づく。
「ど、どうしてあんたが……。ていうか、こいつらの知り合いなの！？」
エステルが不思議そうに尋ねる。
「……レイス……？」
アガットがドスの利いた声でレイスを呼んだ。
「は、はい、なんでしょう？」
そこで、アガットが強烈な一撃をレイスに叩き込んだ！
「ふぎゃっ！」
腹を抱えてうずくまるレイス。これは痛そうだ……。
「お前ら……。何やってんだ？女に絡むは、ガキを殴るは……。ちょっとタルみすぎじゃねえか？」
アガットが周りを一瞥（いちべつ）し言った。
「う、うるせえな！チームを抜けたアンタにいまさら指図されたくない……」
ロッコが反抗しようとしたとき、アガットがまたもや強烈な一撃を加えた。今度は吹っ飛んで壁にぶつかりロッコは気絶した。
「……何か言ったか？」
アガットが何もなかったかのように言った。鬼だな、これは……。
「あ、兄貴、勘弁してくれ！ガキならほら、解放するからよ！」
ディンは自分まで殴られたくないと必死だ。
「クローゼ姉ちゃん！」
クラムが駆け寄ってきた。
「よかった……。もう大丈夫だからね……」

クローゼが抱きとめる。
「フン、最初からそうしときゃいいんだよ」
アガットが言った。
「まったく乱暴なんだから……。第一、どうしてあんたがタイミングよく現れるわけ？」
エステルが不満そうにアガットに尋ねた。
「ジャンのやつに聞いただけだ。どこぞのヒヨッコどもが放火事件を捜査してるってな。さてと……」
アガットがクラムの方を向いた。
「おい、坊主」
「な、なんだよ……？」
「１人で乗り込んで来るとはなかなか気合の入ったガキだ。だが少々、無茶しすぎたようだな。あんまり、おっ母さんに迷惑をかけるんじゃねえぞ」
アガットが入り口の方を見た。
「え……」
「クラム……」
テレサ院長がそこに立っていた。
「せ、先生！？」
「どうしてここが……」
クローゼも不思議な顔をしている。
「ギルドで事情を伺ってそちらの方に案内していただきました。クラム、あなたという子は……」
「こ、今度だけはオイラ、あやまんないからな！火をつけた犯人をゼッタイにオイラの手で……」
「クラム！」
珍しくテレサ院長が怒鳴った。クラムが飛び上がる。
「テレサ先生……。どうか叱らないであげて下さい」
クローゼがかばう。
「いいえ。叱っているのではありませんよ。ねえ、クラム……。あ

なたの気持ちはよく判ります。みんなで一緒に暮らしたかけがえのない家でしたものね。でもね……。あなたが犯人に仕返ししたとしても燃えてしまった家は戻らないわ」

テレサ院長がクラムに諭した。

「あ……」

「あなたたちさえ無事なら先生は、もうそれだけでいいの。他には何も望まないから……。お願いだから……危ない事はしないでちょうだい」

「せ、先生……。……ううううう……。うわああーーーーん！」

クラムがテレサ院長に泣きついてきた。

「グス……。こういうのには弱いかも……」

エステルが目を拭った。

「はい……。本当に、無事でよかった……」

クローゼが今の状況をかみしめた。

「ったく……。これだから女子供ってやつは。おい、小僧。院長先生たちを連れてさっさとここを引き上げろや。どうもこういうのは苦手でな」

アガットがエステルとヨシュアに言った。

「構いませんけど……。アガットさんはどうするんですか？」

「決まってんだろ……」

アガットがディンに近づき、

「このバカどもが犯人かどうか締め上げて確かめてやるんだよ！たっぷりと急を据えてからな！」

「ひえええええっ。か、勘弁してくださいよ～！」

真っ青な顔をして縮こまるディン。

「なるほど……。そういう事ならお邪魔したら悪そうですね」

ヨシュアが微笑みながら院長先生を連れて倉庫を後にした。

第3章　白き花のマドリガル（15）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

何とか無事にクラムを助け出したエステル。しかし、事件の解決には繋がらない……。

第3章　白き花のマドリガル（16）（前書き）

エステルたちはアガットに仕事を奪われてしまいます……。しかし……。

２００００文字突破です！

第3章　白き花のマドリガル（16）

―ルーアン市　北街区

「本当にありがとうございました。何とお礼を言っていいやら……」

倉庫から出たエステルたち。ルーアン市の入り口でテレサ院長はエステルたちに頭を下げた。

「お礼なんかいいですってば。これも仕事のうちですから。それより、いいんですか？マノリアまで送らないで……」

「ええ、大丈夫です。メーヴェ海道は私の庭ですから。これ以上、何かして頂いたらバチが当たってしまいそうです」

テレサ院長が微笑んだ。

「気にしなくてもいいのに……」

「先生……。せめて私だけでも」

クローゼが心配そうに言った。

「ふふ、あなたは学園祭の準備に専念してちょうだい。この子たちだって楽しみにしてるのですから」

「……はい」

そこで、後ろからヨシュアが駆けつけて来た。

「よかった、間に合ったか。ボートは返してきたよ」

「あ、サンキュ☆」

「すみません……。お一人で行かせてしまって」

「気にしないで。大した手間じゃなかったし」

「ヨシュアさんも……。本当にありがとうございます」

テレサ院長が再び頭を下げた。

「クローゼ姉ちゃん……。それとエステル姉ちゃんとヨシュア兄ちゃん……。今日はありがとな。オイラなんか助けてくれてさ。オイラ、本当にバカだったよ」

いつになく殊勝なクラム。この件で懲りたようだ。

「クラム君……」

「弱っちいクセに仕返ししようとしてさ……。かえって姉ちゃんたちに助けられちゃって……。ホント、みっともないよな」
泣き出しそうなクラム。
「そ、そんなこと……」
「みっともなくなんかないさ」
ヨシュアが横から言った。
「え……」
「大切なものを守るために身体を張って立ち向かおうとする……。そんなの、大人だって簡単に出来ることじゃないよ。だから僕は、君のことがすごくカッコイイと思った」
「ヨシュア兄ちゃん……」
「だけど、犯人を捜し出してとっちめるのは僕たちでもできる。君は、君にしかできないやり方で先生や他の子たちを守るべきだ。一緒にいたり、お手伝いをしたり励まし合ったり、支えてあげたりね。クラム……それは君にしかできないことだよ」
「……。オイラにしか出来ないこと……。うん、兄ちゃんの言いたいこと、なんか判った気がするよ」
「どう、やれそうかい？」
「モチのロンだよ！オイラに任せておけって！」
クラムが胸を張った。
「ふふ、何から何までありがとう。それでは皆さん。私たちはこれで失礼します」
「あ、クローゼ姉ちゃん！お芝居、楽しみにしてるぜ！」
「うん、頑張っちゃうからみんなで一緒に見に来てね」
「あったりまえだよ！またな、姉ちゃんたち！」
テレサ院長とクラムが帰っていった。
「は～、よかったぁ。元気を取り戻してくれて……。ヨシュアってばなかなか憎いこと言うじゃん？」
「ふふ、びっくりしました。あんなに元気になるなんて。ヨシュアさん……本当にありがとうございます」

「いや、大したことは言ってないよ。……大切な人を守る、か」
ヨシュアの顔がかげる。
「とりあえず、あの子が無事で本当によかった。クローゼさん、協力ありがとう」
「そんな……。お礼を言うのは私の方です。あ、そういえば……。あの方たちの取り調べはどうなったんでしょうか？」
「ああ、あの赤毛男が締め上げてるってアレか。もう終わってるのかなぁ？」
「一旦、ギルドへ戻ろうか。クローゼさんも来るかい？」
「はい、できれば本当のことが知りたいです。いったい誰が放火なんてしたのか……」
「それじゃ、レッツ・ゴー！」
エステルたちはギルドへ戻った。

―遊撃士協会ルーアン支部
「おお、ご苦労さん。どうやら男の子は無事助けられたらしいな」
ジャンが笑顔でエステルたちを迎えた。
「うん、何とかね。それよりも、驚いたわよ。あの赤毛男が来るんだもん」
「はは、アガットのことか。別件でルーアンに来た所をむりやり頼んだってわけさ。何せヤツは《レイヴン》のリーダーを務めていたからな」
「やっぱりそうでしたか」
「どうりでガラが悪いと思ったのよね～」
ヨシュアとエステルは納得した。
「といっても昔の事だけどね。君たちくらいの年齢でこのルーアンに流れて来てね……。荒っぽい連中を引き連れてずいぶん暴れてくれたもんさ。あの頃に較べたら今のメンバーは可愛いもんだな」

昔が気になる言い様だな。
「そ、そんなヤツがよく遊撃士になったわね」
「まあ、ある人と知り合ったのがきっかけでね。それから遊撃士を志して今じゃすっかり若手のホープだ。人間、変われば変わるもんだよな」
「……余計なお喋りはそのくらいにしておけっての」
アガット登場！
「あ、帰ってきた……」
「人がいないのを良いことに好き放題言いやがって……。相変わらず人を喰ったヤツだ」
アガットがジャンを睨む。
「はは、誉め言葉として受け取っておくよ。それよりも取り調べはすんだのかい？」
「ああ、一通りな。絶対とは言い切れんが……。多分、あいつらはシロだろう」
「ホントに～？まさか、昔の仲間だからって庇（かば）ってるんじゃないでしょうね？」
エステルが不信な目つきでアガットを見た。
「アホ、見くびるんじゃねえ。昨日の夜、船員酒場で飲んだくれてたって証言もある。そして、酔った勢いだけじゃあんな周到な放火はできん……」
「むう……」
「そういう事なら、とりあえず保留にしても良さそうですね。それに、放火までするほどの度胸がある人たちとも思えない」
もっともな意見を述べるヨシュア。
「うーん、確かに……。イキがってるだけって感じよね」
「まあ、あいつらには俺が睨みを利かせておくさ。犯人捜しをするついでにな」
「へ……」
犯人捜し？

「事件の調査は俺が引き継ぐ。お前らには手を引いてもらう」
「あ、あんですって～っ!?後からやって来たクセになにタワケたこと言ってんの！」
「納得できる説明を聞かせてもらえますか？」
エステル、ヨシュアともにこのアガットの態度には不満を言った。
「お前らは私情を挟みすぎなんだよ。遊撃士に限らず、情が絡むと判断力は鈍るもんだ。ったく、ただの民間人を戦闘に巻き込みやがって……」
「あ……。すみません、私……」
クローゼが申し訳なさそうに謝った。
「あんたが謝る必要はねぇ。こいつらの心構えの問題だ。要はプロ意識が足りねぇのさ」
「な、なんでそこまで言われなくちゃいけないわけ!?何と言われたって、あたしたちは院長先生と約束してるんだから……」
エステルが切り札を出した。
「おい、ジャン。正遊撃士と準遊撃士が同じ任務を希望した場合、規約で優先されるのはどっちだ？」
アガットが余裕の笑みを見せながらジャンに尋ねた。
「やれやれ……。わかっててそれを聞くかい？言うまでもなく正遊撃士さ」
ジャンが呆れながら言った。
「うぐっ……」
エステルが言い返せず黙る。
「僕たちもそれなりの戦力にはなると思います。せめて手伝いくらいは……」
ヨシュアが提案する。
「ただの調査に人数は必要ない。話は終わりだ。悪く思うんじゃねーぞ」
アガットがヨシュアの提案を切り捨て、ギルドを出て行った。
「な、な、な……。何様のつもりよ、アイツ！？」

「悔しいけど、彼の言い分は間違ってはいないからね……。反論できないのが辛いな」
相手の言い分が正しくて反論できない時が一番悔しいだろう。
「本当にすみません……。私が剣を抜かなかったら……」
「それは関係ないってば。まったく、事あるごとにあたしたちを目の敵（かたき）にして……」
「まあ、悪気はないからどうか大目に見てやってくれ。不器用なヤツでね。あんな言い方しかできないのさ。それにどうやら今回の件……ヤツが追っている事件と関係があるかもしれなくてね」
「え……」
「アガットさんが追っている事件？」
「詳しいことは話せないが……。犯人捜しはヤツに任せてほしい。僕の方からもお願いするよ」
そう言われると手を引くしかできない。
「そ、そんな……」
「そうですか……。では、これまでの捜査状況を報告しておきます」
「ああ、よろしくお願いするよ」
エステルたちは残念に思いながらこれまでの経緯を報告した。

「うん、良く調べてくれたみたいだね。でも、さっき言った通り、今度の件には色々と事情があるんだ。申しわけないが、この報告で捜査は終了とさせてもらうよ」
「で、でも……。院長先生とあの子たちのために何かしたいと思ってたのに……。……こんなのって……」
「エステル……」
「エステルさん……」
確かに、こんな中途半端なかたちで終わらせたくはないだろう。しかし、どうすることもできないこの状況がさらにエステルたちの苦

悩を膨らませる。
「……。あの、ジャンさん。遊撃士の方々というのは民間の行事にも協力して頂けるんですよね？」
クローゼがしばし考えた後、ジャンに尋ねた。
「ああ、内容にもよるけど。王立学園の学園祭なんか大勢のお客さんが来るらしいからうちが警備を担当してるしね」
「でしたら……。エステルさん、ヨシュアさん。その延長で、私たちのお芝居を手伝って頂けないでしょうか？」
「え……？」
「それって、どういうこと？」
「毎年、学園祭の最後には講堂でお芝居があるんです。あの子たちも、とても楽しみにしてくれているんですけど……。とても重要な2つの役が今になっても決まらなくて……」
来週に学園祭があるっていうのに、いまだ重要な役が決まっていないなんて……。そんなんで、いいんかい！？
「も、もしかして……」
もしかしなくても……。
「その役を、僕たちが？」
「はい、このままだと今年の劇は中止になるかもしれません。楽しみにしてくれているあの子たちに申しわけなくて……。そこで昨夜、学園の生徒会長にお2人のことを話したんです。そしたら、すごく乗り気になって連れてくるように言われて……。あまり多くはありませんが、運営予算から謝礼も出るそうです」
「ど、どうしてあたしたちなの？自慢じゃないけど、お芝居なんてやった事ないよ？」
「片方の、女の子が演じる役が武術に通じている必要があって……。エステルさんだったら上手くこなせると思うんです」
野生児エステルここに活躍の場が与えられたり。
「な、なるほど……。うーん、武術だったらけっこう自信はあるかも……」

「確かにピッタリだね。それでもうひとつの役は？」
ヨシュアが尋ねる。
「そ、それは……。私の口から言うのは……」
クローゼが目を伏せた。
「言うのは？」
「……恥ずかしい、です」
クローゼが照れた。
「そ、それってどういう意味？」
「もー、ヨシュアってば。しつこく聞くと嫌われるわよ。お祭りにも参加できるし、あの子たちも喜んでくれる……。しかもお仕事としてなら一石三鳥ってやつじゃない！こりゃ、やるっきゃないよね？」
すっかり乗り気のエステル。
「ちょ、ちょっと待ってよ。ジャンさん、こういうのもアリなんですか？」
ヨシュアがあわててジャンに尋ねた。
「もちろん、アリさ。民間への協力、地域への貢献、もろもろ含めて立派な仕事だよ。アガットが来たおかげでそれなりに余裕も出来たし……。よかったら行ってくるといい」
「やったね？」
「ふう……。何だかイヤな予感がするけど。あの子たちのためなら頑張らせてもらうしかないか。ただ、他に用事があるんだったら王立学園に向かう前に済ましておいた方がよさそうだね。劇の手伝いをするとなったら他のことをしている暇はなさそうだし」
「なるほど、確かにそうかも」
エステルが頷く。
「ね、クローゼさん。ちょっと寄り道することになるかもしれないけど、いいかな？」
「あ、はい。私のことは気にしないでください。ちなみに王立学園の場所ですけど……。メーヴェ街道に出て、最初の三叉路（さんさろ）を東に向

かった林道の先にあります」
「うん、わかったわ。それじゃ、レッツ・ゴー！」
エステルたちはジェニス王立学園に向かうことにした。

第3章　白き花のマドリガル（16）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルたちはクローゼの演劇の手伝いをすることになった。初めて学園というものを経験するエステルとヨシュア。次回から王立学園ストーリー開幕です！空の軌跡ＦＣの見所の１つです。是非ご期待ください！

第3章　白き花のマドリガル（17）（前書き）

王立学園編第1話です。感想お待ちしてます。

第3章　白き花のマドリガル（17）

―ジェニス王立学園

ヴィスタ林道を抜けて辿り着いたジェニス王立学園は見事なものだった。白を基調とした洋風の校舎だった。

「は～、ここが王立学園か。なんて言うか……落ち着いた感じのいい場所ね」

「静かだし、勉強をするにはもってこいの環境みたいだね」

エステルとヨシュアは校舎を見上げて言った。

「ふふ、今は授業中ですから。もう少ししたらとたんに騒がしくなりますよ。学園祭も間もないですし」

「なるほど。みんな準備に大忙しなんだね」

「はい。生徒会長に紹介したいんですけどまだ授業中ですから……。まずは学園長室に案内しますね」

「学園長室？」

「王立学園の責任者であるコリンズ学園長のお部屋です。本館1階の右奥にあります」

「ん、りょーかい」

「それじゃあまずは学園長に挨拶に行くとしようか」

―本館1階　学園長室

「学園長。ただいま戻りました」

「クローゼ君、戻ったか。おや、そちらの君たちは……」

コリンズ学園長がエステルとヨシュアに目をやった。

「初めまして、学園長さん」

「遊撃士協会から来ました」

エステルとヨシュアが挨拶した。

「ほう、まだ若いのに遊撃士とは大したものだ。孤児院で火事があったそうだがもしや、その関係で来たのかね？」
「はい、実は……」
クローゼはコリンズ学園長に放火事件を含めた一通りの事情を説明した。
「そうか……。大変なことになったものだ。わしらも、何らかの形で力になれるといいのだが……。……。まずは、学園祭を成功させて子供たちを元気づけること……。そこから始めるしかないだろうな」
コリンズ学園長が話した。
「はい……。そこで、お芝居についてはエステルさんとヨシュアさんに協力していただこうと思いまして」
「いい考えだと思うよ。エステル君、ヨシュア君。どうかよろしくお願いする」
「あ、はい！」
「微力を尽くさせて頂きます」
「劇に関しては、生徒会長のジル君に全てを任せている。監督も担当しているから詳しい話を聞くといいだろう。わしの方からは……寮の手配をしておこうか」
「え……」
「寮、ですか？」
エステルとヨシュアが驚いた。
「何と言っても学園祭までほとんど時間がない。おそらく毎日、夜遅くまで練習する必要があるだろう。そうなると、泊まる場所が必要になるのではないかな？」
「あ、なーるほど……」
「それは助かります」
その時、学園のチャイムが鳴った。
「ちょうど授業も終わりだな。さっそく、生徒会長に紹介してあげるといいだろう」

「はい。エステルさん、ヨシュアさん。次は生徒会室に案内しますね。この本館の右手にあるクラブハウスの2階にあります」
「うん、それじゃ行きましょ」
エステルたちは生徒会室に向かった。

―生徒会室
「は～、忙しい、忙しい。各出店のチェックと予算の割り当てはOK……。招待状の発送も問題なしと」
生徒会長のジルが予定に目を通す。
「残る問題は、芝居だけか……。このまま見つからなかったら俺たちがやる羽目になるのかね」
溜息をついているのはハンスである。
「私はともかく、あんたは問題外でしょうが。衣装合わせをした時のおぞましい恰好(かっこう)といったら……」
ジルが身をよじる。
「言うなっての……。俺も思い出したくないんだから」
「ただいま。ジル、ハンス君」
クローゼたちが生徒会室に入った。
「あ、クローゼ!? 火事の話、聞いたわよ。大変だったそうじゃない」
「院長先生とチビたちは大丈夫だったのか?」
「ええ……。一応、みんな無事でした。ただ、孤児院の建物が完全に焼け落ちてしまって……」
クローゼが肩を落とす。
「そうか……」
「元気出しなさいよ。悩んでいたって仕方ないわ。チビちゃんたちが楽しめるように学園祭を成功させないとね」
ジルは前向きだ。

「うん、テレサ先生にもそんな風に注意されちゃった。だから、全力で頑張るつもり」
「あんたが本気を出せば百人力だから期待してるわよ。ところで、さっきから気になってるんだけど……。その人たち、どちらさま？」
ジルがエステルとヨシュアに目を向けた。
「初めまして。あたし、エステルっていうの」
「ヨシュアです、よろしく」
「それじゃ、あんたたちがクローゼの言ってた……！」
ジルが驚いた。
「ふふ、約束通り連れてきたわ。2人とも協力してくださるって」
「いや～、助かったわ！初めまして、エステルさん、ヨシュアさん。私、生徒会長を務めているジル・リードナーといいます。今回の劇の監督を担当してるわ」
「俺は副会長のハンスだ。脚本と演出を担当している。よろしくな、お2人さん」
「うん、こちらこそ」
「よろしくお願いします」
「う～ん、それにしても……」
ジルがエステルとヨシュアをじっくり見ている。
「な、なに？」
「さすが遊撃士だけあってスポーツも得意そうな感じね。エステルさん、剣は使える？」
ジルがエステルに尋ねた。
「まあ、それなりには……。棒術がメインだけど父さんに習ったこともあるし」
「よっしゃ、これで決まりね。あなたには、クローゼと剣を使って決闘してもらうわ」
「け、決闘！？」
「もちろんお芝居で、ですよ」
当然ではないか。

「クライマックスに2人の騎士の決闘があるのよ。まあ、劇の終盤を彩る迫力のあるシーンなんだけど……。クローゼと勝負できるくらい腕の立つ女の子がいなくてねぇ。この子、フェンシング大会で男子を押しのけて優勝してるし」
ジルが溜息をついた。
「へ～、すっごい！」
エステルが感心した。
「ちなみに、結晶で負けたのはそこにいるハンスだけどね～」
「悪かったな、負けちまって。ちなみに俺が弱いんじゃない。クローゼが強すぎるんだよ」
「あ、あくまで学生レベルの話ですから……。本職のエステルさんには足元にも及ばないと思います」
クローゼがきまり悪そうに言った。
「またまた、謙遜しちゃって。でも、そういう事ならちょっとは協力できるかも。クローゼさん、頑張ろうね♪」
「はい、よろしくお願いします」
「はは、それにしても……。女騎士の決闘なんて、なかなかユニークな内容だね」
ヨシュアが言った。
「女騎士？2人に演じてもらうのはれっきとした男の騎士役だぜ？」
ハンスがこともなげに言う。
「え」
まさか、このパターンは……。
「しかし、ヨシュアさんの方は文句のつけようがないわね……。期待してもいいんじゃない？」
ジルの目が妖しく光る。
「ああ、悔しいが同感だぜ」
「？？？」
エステルは状況がわからないらしい。
「えっと、その劇……どういう筋書きなのかな？」

ヨシュアが尋ねる。
「題名は『白き花のマドリガル』。貴族制度が廃止された頃の王都を舞台にした有名な話なの。貴族出身の騎士と平民出身の騎士による王家の姫君をめぐる恋の鞘当て……。しかもこの3人、身分は違うけどお互い幼なじみの関係にあってね。それに、貴族勢力と平民勢力の思惑と陰謀が絡んできちゃうわけよ。まあ、最後は大団円、文句なしのハッピーエンドだけどね」
ジルがあらすじを説明した。
「へ～、面白そうじゃない♪」
「そ、それで……。どうして女の子が男性役を？」
「それが、今回の学園祭ならではの独創的かつ刺激的なアレンジでね。男子と女子が、本来やるべき役をお互い交換するっていう趣向なのさ」
ということはヨシュアは……。
「男女が役を入れ替える？へ～、そんなのよく先生たちが許してくれたわね」
「性差別からの脱却！ジェンダーからの解放！」
ジルが机を叩いた。すごい言葉を使うな。
「とかなんとか理屈をこねて無理矢理押し通したちゃったわ。本当は面白そうっていう、それだけの理由なんだけど？」
ああ、そうだろうね。
「ジルったらもう……」
「ほんと、こんなヤツが生徒会長とは世も末だよな」
ハンスが溜息をついた。
「あはは☆うん、確かに面白そうかも」
「ちょ、ちょっと待った！その話の流れで言ったら……。僕が演じなくちゃいけない『重要な役』っていうのは……」
ヨシュアが青ざめながら慌てて言った。
「いやぁ、ホント助かったぜ」
「クローゼ、ありがとね。いい人たちを紹介してくれて？」

「あ、あはは……。ごめんなさい、ヨシュアさん……」

姫君の役か……！

第3章　白き花のマドリガル（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エステルは騎士役、ヨシュアは姫君の役を担うことになった。次回から、演劇の特訓が始まります。

第3章　白き花のマドリガル（18）（前書き）

王立学園編第2話。初の学園生活を経験するエステルとヨシュア。

第3章　白き花のマドリガル（18）

―王立学園　講堂

エステルとクローゼは舞台衣装に着替えてステージの上に立っていた。

「うーん、これが舞台衣装か。騎士っていうから鎧でも着るのかと思ってたけど」

「さすがに甲冑（かっちゅう）だと演技に支障をきたすからね。現在の、王室親衛隊の制服をアレンジする方向で行ったのよ」

「ふーん、そうなんだ。クローゼさんはショートだし、ハマリ役って感じがするけど」

「ふふ、ありがとうございます。エステルさんもとても良く似合ってますよ」

「えへへ、そうかな？ところで……。なんで色違いになってるの？」

「私が演じるのは平民の《蒼騎士オスカー》。エステルさんが演じるのは貴族の《紅騎士ユリウス》。それぞれの勢力のイメージカラーなんです」

「は～、なるほど。それじゃ、ヨシュアは……」

「２人の騎士の身を案ずる王家の《白の姫セシリア》だ。ささ姫、どうぞこちらへ」

ハンスの声が舞台脇から聞こえた。

「ちょ、ちょっと待った。……まだ心の準備が……」

ハンスがヨシュアを舞台に引き出した。

「……」

舞台に引き出されたヨシュアは視線をそらしたままだ。しかし、これは……。とても男とは思えないほどの美しさだった。

「……」

「……」

「……」

エステル、クローゼ、ジルは言葉を失っている。
「頼むから何か言って……。このまま放置されるのはちょっとツライものがある……」
ヨシュアがたまりかねて言った。
「いやぁ、何て言うか……。ぜんっぜん違和感ないわね♪」
エステルが褒め称えた。
「びっくりしました。はぁ、すっごく綺麗です……」
クローゼは見惚れている。
「うんうん、自身持っていいぞ。事情を知らずにあんたを見たら、俺、ナンパしちゃいそうだもん？」
ハンス、それは……。
「正直な感想、ありがとう。ぜんぜん嬉しくないけど……」
「ムフフ……。まさに私の狙い通り……。この配役なら、各方面からウケを取れること間違いなしね……。みんな、一致団結して最高の舞台にするわよ～っ！！！」
ジルがかけ声を上げた。
「おーっ！」
「はいっ！」
「うーっす！」
エステル、クローゼ、ハンスは乗ったが、
「しくしく……」
ヨシュアだけは悲しそうにしていた。

その夜から、エステルとヨシュアはそれぞれ女子寮と男子寮に泊まることになった。

「では……、エステルさん。手前のベッドを使ってください」
「サンキュ♪でも、クローゼさんとジルさんって同じ部屋なんだ。

道理で仲がいいわけね」
「ふふ……。学園に入って以来の仲です」
クローゼが微笑んだ。
「ルームメイトにして腐れ縁ってところかしらね。ところで、エステルさん。1つ提案があるんだけど……」
ジルがエステルに言った。
「なに？」
「私のことは、ジルって呼び捨てにしてくれるかな？さん付けされるとなんだかムズ痒いのよね～。代わりに私も、エステルって呼び捨てにさせてもらうから」
「あはは……。うん、そうさせてもらうわ」
エステルが苦笑した。
「でしたら、私のこともどうか呼び捨てにしてください。その方が自然な気がしますし……」
クローゼも呼び捨てにするよう言った。
「そう？だったら遠慮なく……。ジル、クローゼ。しばらくの間、よろしくね♪」
「はい、こちらこそ」
「まあ、女所帯だし気軽に過ごしてもいいわよ。建物の中にいる限りは男子の目も気にしなくていいし」
ジルが言った。
「だからと言って、だらしないのは感心しないけど」
クローゼがジルに言った。
「はあ～、これだからいい子ちゃんは困るのよね。カマトトぶっちゃってもう」
「あ、ひどい。そんな事を言う子にはお菓子焼いてもあげないから」
「あ、うそうそ。クローゼ様。私が悪うございましたです」
「だーめ、反省しなさい」
クローゼとジルが楽しそうに話している。
「……」

その前でエステルはその様子をじっと見ていた。
「あら……？」
「どうしたの、エステル？まじまじと見詰めたりして……」
「あはは、いやあ～……。なんだかうらやましいなって」
「うらやましい？」
ジルがなぜといわんばかりに問い返した。
「あたしもロレントに仲のいい友達はいるけど……。せいぜい、お互いの家にお泊りするだけだったのよね。こんな風に、気の合う友達と一緒に暮らせていいなって思って」
「……クローゼ、どう思う？」
「どうって言われても……。エステルさんに羨ましがられるのはちょっと納得いかないような……」
「へ？」
エステルはその言葉の意味がわからないようだ。
「あ、やっぱり？何言ってやがるんだこのアマは、って感じよね」
「な、なんで！？」
「あんたねぇ……。自分が、誰と一緒に旅をしてるのかわかってる？自宅では、一つ屋根の下で暮らしていたんでしょーが」
ジルがやれやれといった感じで言った。
「え……それって。もしかしてヨシュアの話？」
「もしかしなくてもそうですよ」
「あんな上玉の男の子といつも一緒にいるくせに女所帯を羨ましがるとは……。もったいないオバケが出るわよ？」
「も～、何言ってるかなぁ。ヨシュアはあたしの兄弟みたいなものだってば。何年もの間、家族同然に暮らしてきたんだから」
「ほほう、家族同然ね……。あんたがそのつもりでもヨシュア君の方はどうかしら？」
ジルの目が妖しく輝く。
「え」
「あの年頃の男の子って抑えが利かないって言うし。まして、あん

たみたいな健康美あふれた子が側にいたら色々とつらかったりして……」

ジルはかまわず喋り続ける。

「……」

「もう、ジル！ごめんなさい、エステルさん。ジルってば、興が乗ると人をからかう悪癖があるんです」

「ぶーぶー。悪癖ってなんだよー」

「何か文句でも？」

クローゼがジルを睨む。

「や、滅相もないっす」

「あ、あはは……。も～、ビックリさせないでよ。そんな、まさかねぇ。ヨシュアが……だなんて」

「意識してる、意識してる」

懲りないジル。

「ジル！」

「おっと、忘れてたわ。寝る前に日報を先生に提出しなきゃ。それじゃ、おやすみ。先に寝ちゃっててていいわよ」

ジルはそそくさと出て行った。

「まったくもう……。そうだ、エステルさん。私のでよかったらパジャマを貸しますけど……」

「……」

エステルは呆然としたまま立っている。

「エステルさん？」

「ふえっ！？」

エステルがあわてて振り向く。

「あ、ああ、パジャマね。うん、何でもいいから貸して」

こうして、思わぬ形でエステルとヨシュアの学園生活はスタートした。

家族以外の同世代の仲間とともに起き、学び舎（や）に行く朝……。（と

言っても、寮は学園の敷地内にあるのですぐに着くのだが……）

午前中は、他の生徒と一緒に授業に参加させてもらい……

昼はランチを共にしながら他愛のないおしゃべりを楽しみ……

そして、放課後は厳しい稽古が夜まで続く……

忙しくも楽しい学園生活は瞬く間に過ぎていった。

第3章　白き花のマドリガル（18）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

迫る学園祭当日。次回は学園祭前日の話です。

第3章　白き花のマドリガル（19）（前書き）

王立学園編第3話。学園祭前日です。感想・評価お待ちしてます。

第3章　白き花のマドリガル（19）

―学園祭前日
講堂での練習……
「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄を決する運命にあったのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」
紅騎士ユリウスが剣を構えた。
「運命とは自らの手で切り拓くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今はは遠い……」
蒼騎士オスカーは立ち尽くしている。
「臆したか、オスカー！」
「だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい……」
そして、オスカーが剣を抜く。
「革命という名の猛き嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもって運命を決するべし！」
そして、ユリウスが剣を構えた。
「おお、我ら二人の魂、空の女神もご照覧あれ！いざ、尋常に勝負！」
「応！」
そして、2人は見詰め合う。
「は～っ……」
「ふう……」
エステル、クローゼが一息ついた。
「やった～っ？ついに一回も間違わずにここのシーンを乗り切ったわ！」
「ふふ、迫真の演技でしたよ」
「えへへ、クローゼにはぜんぜん敵わないけどね。セリフを間違え

たこと、ほとんど無かったじゃない？」
「私はずいぶん前から台本に目を通していましたから。私もようやく、エステルさんの動きに付いていけそうです。色々と、稽古をつけてくれて本当にありがとうございました」
「ううん、クローゼの場合は基本がしっかりしてたからね。その気になれば、いつでも遊撃士資格を取れると思うよ？」
「ふふ、おだてないで下さい」
そして、２人は椅子が並べられた講堂を見た。
「いよいよ、明日は本番ですね。テレサ先生とあの子たち、楽しんでくれるでしょうか……」
クローゼが講堂を見たまま言った。
「ふふ、本当に院長先生たちを大切に思ってるんだ……。まるで本当の家族みたい」
「……」
クローゼは突然黙った。
「あ、ゴメン。変なこと言っちゃった？」
「いえ……。エステルさんの言う通りです。家族というものの大切さは先生たちから教わりました……。私、生まれて間もない時に両親を亡くしていますから」
「え……」
「裕福な親戚に引き取られて何不自由ない生活でしたが……家族がどういうものなのか私はまったく知りませんでした。１０年前のあの日……先生たちに会うまでは」
１０年前というと……。
「１０年前……。まさか《百日戦役》の時？」
ということは、クローゼもまさか……。
「はい、あの時ちょうどルーアンに来ていたんです。帝国軍から逃れる最中に知っている人ともはぐれて……。テレサ先生と、旦那さんのジョセフさんに保護されました」
クローゼも戦争の被害者だった。

「そうだったんだ……」
「戦争が終わって、迎えが来るまでのたった数ヶ月のことでしたけど……。テレサ先生とおじさんは本当にとても良くしてくれて……。その時、初めて知ったんです。お父さんとお母さんがどういう感じの人たちなのかを。家族が暮らす家というのがどんなに暖かいものなのかを……」
「クローゼ……」
「す、済みません……。つまらない話を長々と聞かせてしまって」
「ううん、そんな事ない。明日の劇……頑張って良い物にしようね！」
「……はい！」
「あたしが言うのも何だけど、絶対面白くなると思うわよ。ジルとハンスも色々と頑張ってくれたしね」
「ふふ、そうですね。でも、最大の功労者はヨシュアさんじゃないかしら。あんなに演技が上手いなんて……」
「う、うん……。乗り気じゃなかったクセに見事なまでのお姫様っぷりよね」
「発声といい、間の取り方といい、プロの役者さん顔負けですよ。ヨシュアさんって演劇の経験がおありなんですか？」
「あ、うーん……。あたしも、出会うまでの事は良く知らなかったりするのよね。何があったのか知らないけどあんまり喋りたがらないし……」
エステルが顔を伏せる。
「あ……。すみません……失礼なことを聞いてしまって」
「あはは、いいわよ別に。うーん、確かにヨシュアは何でも完璧にこなすタイプかな。ホント、いつも余裕しゃくしゃくで可愛くないっていうか……。たまに慌てたりする時なんかは可愛かったりするんだけどね～」
人がいないことを良い理由に言い続けるエステル。
「クスクス……。……」

また、黙るクローゼ。
「どうしたの？」
「私たちの役、逆だった方が良かったかもしれませんね……」
「えっ？」
「ユリウスとオスカーですよ。エステルさんがオスカーの方が良かったような気がして……」
「え、どうして？確かにあたしが貴族出身のユリウスっていうのもちょっと似合わない気がするけど……」
「いえ、そういう事ではなくて。……あの、劇のラストで……」
「あ、ああ……。姫様がオスカーに、ってやつね」
「は、はい……」
「ヨ、ヨシュアも役得よね～。クローゼ、ひょっとしてヨシュアにされるのイヤとか？」
「と、とんでもないです！」
あわてて否定するクローゼ。
「でも、何だかお2人に申し訳ないような気がして……」
「や、やだな～。ジルみたいなこと言わないでよ。どうせヨシュアだって手のかかる妹くらいにしかあたしを見ていないんだから……」
「そう……なんですか？」
「いつも父さんと一緒になってあたしのことを子供扱いするし。まったく、腹が立つったら……。とにかく、そういう事で気にする必要はまったくナシ！」
エステルはきっぱりと言った。
「は、はい……」
その勢いに押されてクローゼはうなづいた。
「……ああ、ここに居たのか」
ヨシュアとハンスがやってきた。
「ヨ、ヨシュア！？」
「ハンス君も……」
「予行演習は終わったのにまだ稽古をやってるとはな。2人とも精

が出るじゃないか」
「決闘シーン、うまく行きそうかい？」
ハンスとヨシュアが言った。
「ま、任せなさいっての！完璧に演じてみせるんだから！」
エステルが答えた。どこか慌てているように見える。
「そっか……。うん、楽しみにしてるよ」
ヨシュアは微笑んだ。
「そういえば、お２人はどうしてここに？私たちを捜していたみたいですけど……」
「ああ、エステルもヨシュアも寮に泊まるのは今日が最後だろ？明日の景気づけもかねて一緒に夕食でもと思ってさ」
ハンスが言った。
「あ、そうなんだ。うん、あたしも賛成！」
「ご一緒させて頂きます」
「ところで……。ジルさんは一緒じゃないの？」
ヨシュアが気になっていた事を尋ねた。そう言えば、見ないな。
「つい先ほど学園長に呼ばれましたけど……。私、ちょっと呼んできますね」
「あ、あたしも行く！ヨシュアたちは先に食堂で席を取っててよ」
エステルが言った。
「うん、判った。それじゃ、食堂に行こうか」
「がってんだ、大将」
空賊団か、お前は……。
「誰が大将だよ……」
そう言って、ヨシュアとハンスは一足先に向かった。
「ふふ、あの２人も仲良くなったみたいね。ヨシュアって、なかなか人を寄せつけない所があるからちょっと心配だったけど……」
「くす……」
クローゼが笑った。
「え、どうしたの？」

「いえいえ、何でもありませんよ」
何もないことはないだろう。
「んー、まあいいや。とりあえず着替えましょ。この恰好で歩き回ったらさすがに恥ずかしいもんね」
「ふふ、そうですね」
エステルは舞台脇で着替えた。

「……これでよしっと。それじゃあ、ジルを迎えに行くとしますか」
「はい。学園長室に行きましょう」
エステルたちは学園長室へ向かった。

―学園長室
「なるほど……。それはいいアイデアですよ！さすが学園長、冴えてますねぇ」
ジルが何やら喜んでいる。
「ははは……。おだてても何も出んよ。それでは、リストの方は君に任せても構わないかね？」
「はい、任せてください！」
そこで、エステルたちが学園長室に入ってきた。
「失礼しま～す」
「あ、すみません……。まだお話中でしたか？」
「いやいや。ちょうど終わったところだよ。実はなぁ……」
「ああ、学園長！喋っちゃダメですってば！明日の楽しみが減っちゃうじゃないですか！」
ジルが慌てて学園長を口止めする。
「な、なんなの？あからさまに怪しいわね」
「ジルったら……。また何か企んでいるの？」
「ふっふっふ……。それは明日のお楽しみよん。それより、どうし

たの？ひょっとして私に用？」
「ええ、実は……」
明日の景気づけを兼ねて食堂で夕食会をすることを説明した。
「あら、いいじゃない。それじゃ、明日の学園祭の成功を祈って騒ぐとしますか。パーッとやりましょ、パーッと！」
「ふふ、あまり羽目を外して明日に差し障りがないようにな」
「はい」
「それじゃ、ジル。食堂に行こっか」
「うん、行きましょ」
エステルたちは食堂へと向かった。

「やっほ～♪連れてきたわよ～」
「ふ～、みんなお疲れ～」
「お疲れ、ジルさん」
「よう、待ってたぜ。さっそく料理を注文するか？」
「あ～、もうお腹ペコペコよ。劇の仕上げに加えて、今日も一日、学園中を走り回ってたし……」
ジルが疲れた声で言った。
「ふふ……。でも、それも今日で終わりね」
「そうよね、ホント。気合を入れ直さなくちゃ。新しい仕事も入ったことだし……」
「新しい仕事？なんだそりゃ？」
ハンスが尋ねる。
「うん、あとで相談するわ。じゃ、学園祭の成功を祈って今日はパーッと騒ぐわよ！エステル、ヨシュア君。明日はよろしく頼んだからね！」
「うん、任せておいて！」
「精一杯頑張らせてもらうよ」

その夜、エステルたちは食堂でにぎやかな一時を過ごし……
最後に、劇の成功を祈ってソフトドリンクで乾杯した。
寮に戻ってから、明日のために早めに眠りにつくエステルたちだった。

第3章　白き花のマドリガル（19）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ明日は学園祭当日。乞うご期待！

第3章　白き花のマドリガル（２０）（前書き）

王立学園編第４話。学園祭当日です。今回は演劇が始まる直前までです。

第3章　白き花のマドリガル（20）

―学園祭当日

「大道具、小道具の用意は万全……。照明も調整済みっと……。よっしゃ！これで準備完了だわ！」

エステルたちは講堂で最後のチェックをしていた。ジルは一通りチェックして問題なかったようだ。

「そろそろ開場だ。劇の上演までは時間はあるからそれまで遊んでくるといい」

「そう来なくっちゃ♪屋台とか片っ端から回るわよ～っ！」

食べ物中心のエステル。

「回るのはいいんだけど……。食べ過ぎて、劇の最中に動けなくならないようにね」

ヨシュアが念を押した。

「そ、そんなの判ってるわよ。そういえば……みんなも一緒に回るんでしょ？」

「私とハンスは、生徒会の仕事が残ってるから無理ね。あんたたちだけで楽しんできてちょうだい」

ジルが言った。

「ええっ！？」

「生徒会の仕事って……。ひょっとして昨日言ってた？私も手伝おうか？」

「いいって、いいって。あんたはエステルたちを一通り案内してあげなさい。チビちゃんたちもそろそろ来るんでしょう？」

「あ……うん、ごめんね」

「ま、俺たちもヒマを見て適当に楽しませてもらうさ。あ、そうだヨシュア……。来場者の中に俺好みの女性を見かけたらこっそり教えに来てくれよ？抜け出して口説きに行くからさ？」

「はいはい、分かったよ。美人で背が高くて大人の魅力を備えたお

姉さんね」
「おお、それでこそ我が友だ♪」
だめだな、これは……。いろいろな意味で……。
「まったく、男ってやつは……」
「うーん、理解に苦しむわね」
「クスクス……」
女性陣は苦笑している。

その時、開場のアナウンスが流れた。
「……大変長らくお待たせしました。ただ今よりジェニス王立学園第52回・学園祭を開催します」

「うわ～……。すごい数のお客さんだわ」
「さすがは名高いジェニス王立学園だね。学園レベルの祭りとは思えないな」
「ふふ、今年は例年よりもお客さんが多いみたいです」
確かに、それを裏付けるかのように来場者で溢れている。
「よーし、ついに始まったか。ハンス、とっとと行くわよ！」
「おおよ。俺たちは生徒会室にいるから何かあったら来てくれ」
「了解。2人とも頑張ってね」
ジルとハンスは先に行ってしまった。
「では、私たちも見物を始めましょうか？」
「うん、レッツ・ゴー！」
エステルたちも学園祭を楽しみ始めた。

―校庭
そこにはナイアルがいた。
「お、エステルにヨシュアじゃないか。どうしたんだ、こんなとこ

ろで」
「あ、ナイアル……。あんたまで遊びに来たの？」
「学園祭には色々な業界人も呼ばれていますからね。ひょっとして取材の一環ですか？」
「ま、そんなとこかな。その前にちょうどハラ減ってたとこなんだ。腹ごしらえしていくとするか」
ナイアルは屋台へと向かっていった。

―人文科教室
喫茶店となっていた人文科教室。
「あ、メイベル市長！？」
テーブルに座っていたのはメイベル市長でその脇にはメイドのリラだった。メイドに扮した生徒の中に本物のメイドがいるのは少し滑稽な光景だった。
「まあ、エステルさんとヨシュアさんじゃないですか！」
「市長がどうしてここにいるの？」
「ふふ、実は私この学園の卒業生ですのよ。毎年、学園祭には顔を出させてもらっていますわ」
「へぇ、そうなんだ」
「それよりお2人こそ一体どういたしましたの。ひょっとしてギルドのお仕事かしら？」
「えへへ、実は……」
エステルたちはメイベル市長に事の経緯を話した。
「まぁ、演劇の助っ人に？私、これでも演劇にはうるさいほうですの。ふふ、エステルさんとヨシュアさんが出演するとなると見ない手はありませんわね」
「（う～ん、知り合いの人にはなおさら見てほしくないなぁ……）」
後ろでつぶやくヨシュア。

―社会科教室
そこにはデュナン公爵と執事フィリップの姿が……！
「か、閣下、いつも申しておりますが……。公衆の面前ではご発言にくれぐれもご注意下さいませ」
執事フィリップの心配をよそに、
「ここは王家が金を出してやってる学園だからな。女王の甥であるこの私がしっかり視察しなくては。ふはは、生徒たちもさぞかし光栄に思っていることだろう」
わけのわからない発言をするデュナン公爵。
「（このオジサンも招待されてたのね……）」
「（うん、呼ばないわけにはいかなかったんだろうな……）」
エステルはいまだオジサン扱いのままだ。

―食堂・クラブハウス
クラブハウスのテーブルの一角にはどこかで見かけた顔の女性が座っていた。
「（あれ、この人……どこかで見たような？）」
「（確か空賊の砦でリシャール大佐と一緒にいた女性士官だね）」
実はそれ以前にリシャール大佐と初めて会ったボースの南街区でもいたんだけど……。
「フフ、大佐は以前から王立学園を訪れてみたいとおっしゃっていましたけれど……。何分、今はご多忙の身……。もう少しすれば、ゆっくり訪れて頂くことも出来るはずだわ」
カノーネ大尉は1人つぶやいていた。

クラブハウスの食堂のカウンターの前にはこれまた見かけた顔が。
しかし、この人は忘れられないな。
「……あれ？もしかしてアルバ教授じゃない？」
もしかしなくてもそうだけど。
「おや、エステル君とヨシュア君じゃないですか。これは奇遇ですね。２人とも元気そうで何よりです」
こっちとしては、あんたが元気そうで何よりだけど……。
「ひょっとして教授も学園祭に招待されたんですか？」
「いえ、残念ながらそういうわけではありません。この地方にある《紺碧（こんぺき）の塔》の発掘調査に来たんですよ。こちらの学園にひょっとしたら資料でもないかと思いましてね」
「はー、熱心ねぇ」
エステルは相変わらずのアルバ教授に感心した。
「ははは、ミラのない私の研究を支えているのは情熱と体力だけですから。そういえば、この学園のカリキュラムは幾つかのコースに分かれているそうですね。やっぱり、展示とかやっているんですか？」
「はい、３つのコースのうち社会科コースだけですが……。学生たちによる自主研究の発表が行われています」
クローゼが詳しく説明した。
「ほう、いいですねぇ。学生時代を思い出しますよ。その研究発表というのはどこでやっているんですか？」
「そっか、教授ってばこの学園は初めてなんだっけ……。うーん、何て説明すればいいのか」
「そうですね。この学園は建物が多いですし……。あの、よかったら案内しましょうか？」
「それは助かりますけど……。せっかく学園祭を楽しんでいる時に手間を取らせるのは申しわけないですね」
「いいっていいって。大した手間じゃないんだから」

「そうですか……。では、君たちの都合がいい時に展示場までの案内をお願いします。それまで、この学食でノンビリと待っていますから」

しばし学園を回った後、アルバ教授のもとに向かった。
「いやいや、それにしても学生たちはいいですねぇ……。この値段で毎日食事ができるなんてうらやましい限りですよ」
本当、貧乏なんだな……。
とにかく、エステルたちはアルバ教授を社会科教室に案内した。

―社会科教室
「ほ～、なかなかどうして本格的な展示じゃないですか。歴史から経済まで色々なジャンルがあるみたいですね。いやぁ、助かりました。これはなかなか楽しめそうだ」
「いえ、どういたしまして。私も社会科専攻ですから興味を持って頂けると嬉しいです」
「うーん、あたしはちょっとこういう難しい所は苦手だけど……」
エステルは勉強全般苦手だろう。これに限ったことではないと思う。
「はあ、たまには君もこういう物に興味を持とうよ。遊撃士だって色々な知識を必要とすることは多いんだから」
もっともなことを言うヨシュア。
「むぐっ……」
「はは、それじゃあさっそく拝見させてもらいます。案内してくれて本当にありがとう」
アルバ教授はさっそく資料を見に行った。

階段を下りたところで、
「あっ、姉ちゃんたち！」
孤児院の子供たちだった。
「みんな……。来てくれたのね！」
「よく来たわね、チビっ子ども♪」
「どう、楽しんでるかい？」
エステルたちは子供たちに駆け寄って言った。
「うんー！すっごく楽しいよ～♪」
ポーリィは満面の笑顔。
「ぼく、いっぱいお菓子たべちゃった！」
ダニエルは相変わらず食中心……。
「あんたはちょっと食い意地はりすぎだってば」
マリィがそんなダニエルをたしなめた。
「ふふ……。テレサ先生と一緒に来たの？」
「うん、そこで他の人と話をしてたけど……。あ、来た来た♪」
クラムが後ろを向いた。
「ふふ、こんにちは」
テレサ院長が来た。
「あ、テレサ先生！」
「先生……こんにちは」
「今日は招待してくれて本当にありがとうね。子供たちと一緒に楽しませてもらってますよ」
テレサ院長が笑った。
「なあ、クローゼ姉ちゃん。姉ちゃんが出る劇っていつぐらいに始まるのさ？」
「あたしたち、すっごく楽しみにしてるんだから☆」
クラムたちが尋ねた。
「そうね……。まだ、ちょっとかかるかな。ちなみに、私だけじゃなくてエステルさんたちも出演するのよ？」

「ほんと？わあ、すっごく楽しみ～！」
「ヨシュアちゃん、どんな役で出るのー？」
ポーリィがヨシュアが一番嫌なことを聞いた。
「えっと……何て言ったらいいのか……」
ヨシュアは答えることができない。
「あはは……。見てのお楽しみってね？それより院長先生。まだ、マノリアにいるの？」
「はい、宿の方のご好意で格安で泊めて頂いています。ですが……」
そこで閉口するテレサ院長。
「？？？」
エステルはわからない様子だが、
「……」
ヨシュアはわかっている様子で、目をつむっていた。
「ねえ、みんな。劇の衣装、見たくない？綺麗なドレスとか騎士装束がいっぱいあるよ」
「綺麗なドレス！？」
「騎士しょーぞく！？」
マリィとクラムが誰よりも早く反応した。
「ふふ……。興味があるみたいだね。それじゃあ特別に劇の前に見せてあげるよ」
「やったぁ！」
「ポーリィもいくー」
「（舞台の控え室にいるからあとからゆっくり来てよ）」
ヨシュアがエステルたちにそっと耳打ちした。
「それじゃあ付いて来て」
ヨシュアは子供たちを連れて本館を出て行った。
「ふふ、ヨシュアさんは本当に気が利く子ですね。ちょっと、子供たちの前では言いづらいことだったので……」
「それじゃ、ひょっとして……」
エステルもようやくわかったようだ。

「ええ、市長のお誘いを受ける決心がつきました。これ以上、マノリアの方々に迷惑をかけられませんから。今日の学園祭が終わったらあの子たちにも打ち明けます」
「そう……ですか……。寂しくなるけど……仕方ありませんよね……」
クローゼがうつむく。
「ふふ、そんな顔をしないで。王都とはいっても飛行船を使えばすぐの距離です。それに私、王都に行ったら仕事を捜そうと思っています。ミラを貯めて、いつかきっと孤児院を再建できるように……」
「院長先生……」
「……」
「さてと……。あの子たちの後を追いますか。ヨシュアさん1人に任せておくわけにはいきませんからね」

―講堂
「うわ～。これ、めちゃ格好いい！オイラにも着れないかなぁ」
「あんたの背丈じゃムリよ。あたしも、この白いドレス着てみたいんだけどね～」
子供たちはそれぞれ関心を持っているようだ。
「おーおー。楽しんでるみたいね。あれ……」
エステルはあたりを見渡す。
「ヨシュアはどこ行ったの？」
確かに、ヨシュアの姿が見当たらない。
「ヨシュア兄ちゃん？オイラたちをここに連れてきてからどこかに行っちゃったぜ」
「お姉ちゃんたちが来るまで待っててって言われました」
「ふーん……？」
「どうしたんでしょうか？」

エステルたちは首をひねった。
「えへへー。ポーリィしってるよー。ヨシュアちゃんってば銀色のお兄ちゃんをさがしにいったんだよー」
「銀色のお兄ちゃん？」
いきなり言われてもわからないエステルたち。
「火事があったときにポーリィたちを助けてくれたお兄ちゃんだよー。アタマが銀色でキレイなのー」
「ええっ！？」
「そ、その人を学園の中で見かけたの？」
「うんー。ちらっとだけどねー。ヨシュアちゃんも目をまん丸にしてたよー」
意外と周りに鋭いポーリィ。
「ポーリィ、お前なぁ。なんでその時にオイラたちに言わないんだよ」
「だって、クレープ食べるのにいそがしかったんだもーん」
子供らしいセリフをありがとう。
「エステルさん……」
「うん……。院長先生。あたし、ちょっと失礼するね」
「ええ……。そうした方が良さそうね。クローゼ。あなたも行ってあげなさい。私たちのことは気にしなくてもいいですから」
「すみません、先生……」
「えー、お姉ちゃんたち、もう行っちゃうの～？」
ダニエルが不満の声をあげる。
「うん……ごめんね。劇、楽しみにしてて」
「そーそー、目いっぱい頑張っちゃうんだから♪」
講堂の外へ出たエステルとクローゼ。
「とにかく……。ヨシュアを捜しましょ。その銀髪男が何者かは知

らないけど……。なんだかイヤな予感がする」
「ちょっと待ってください。……ジーク！」
どこからともなく現れたシロハヤブサのジーク。
「ピュイ？」
「聞きたいことがあるの。ヨシュアさんがどこに行ったかわかる？」
「ピューイ☆」
ジークは校舎裏へと飛び去っていった。
「相変わらず凄いわね～。あれ、あっちの方角って……」
「ええ……。本館の裏手にある旧校舎の方です」
エステルたちは旧校舎へと向かった。

―旧校舎
さっきまでは鍵が閉ざされていた旧校舎だが、鍵が開いていた。やはり、間違いないようだ。エステルたちはすぐさま旧校舎の中に入った。

「おかしいな……。確かに気配があったはずなのに……。……でも、まさか……」
ヨシュアは立ち尽くしたまま考える。そこに、
「ヨシュア～っ！」
エステルとクローゼが走ってきた。
「エステル、クローゼ……」
「もう、あんまり心配かけないでよね！銀髪男を追いかけたっていうからビックリしちゃったじゃない」
「あれ……。何で知ってるんだい？」
「ポーリィちゃんが教えてくれたんです。あの子も見ていたらしく……」

「そうか、鋭い子だな……。それらしい後姿を見かけてここまで追ってきたんだけど……。どうやら撒かれたみたいだ」
「まあ……」
「ヨシュアを撒くなんて、そいつ、タダ者じゃないわね。いったい何者なんだろ？」
「……わからない。ただ、孤児院放火の犯人じゃなさそうな気がする。あくまで、僕のカンだけどね」
「そっか……。それにしても……どうして1人で行動するかな？」
「本当にそうですよ。私たちに伝言するなりしてくれればいいのに……」
「ごめん。心配かけたみたいだね」
2人に詰め寄られるヨシュア。
「べ、別に心配してないってば。あくまでチームワークの大切さを指摘しているだけであって……」
なぜか照れるエステル。
「うふふ、ウソばっかり。さっきは、あんなに慌てていたじゃないですか？」
「そ、そんな事ないってば。そういうクローゼだって真剣な顔してたクセにさ～」
「そ、それは……」
「はは……。2人ともありがとう」
その時、校内アナウンスが流れた。

「……連絡します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください。繰り返します。劇の出演者とスタッフは講堂で準備を始めてください」

「そっか……。もうそんな時間なんだ」
「はい、衣装の準備をしたらすぐに開演になると思います」
「よーし、それじゃあいよいよ出陣ってわけね！あ、銀髪男の方は

どうしよう？」
「そうだね……。カルナさんに伝えて注意してもらうしかなさそうだ」

エステルたちは、銀髪の男の情報を遊撃士のカルナに伝えてから講堂に向かった。
そして、３０分後……。いよいよ開場になった。

―講堂
衣装に着替えたエステルたち。
「うっわ～……。めちゃめちゃ人がいる～。あう～、何だか緊張してきた」
エステルが舞台脇から人の様子をみて言った。
「大丈夫ですよ、エステルさん。あれだけ練習したんですから」
「それに、劇が始まったら他のことは気にならなくなるさ。君って、１つの事にしか集中できないタイプだからね」
「むっ、言ってくれるじゃない。でもまあ、そのカッコじゃ何言われても腹は立たないけど？」
「う……」
それは同感。
「はいはい。痴話ゲンカはそのくらいで。……今年の学園祭は大盛況よ。公爵だの市長だのお偉いさんがいるみたいだけど私たちが臆することはないわ。練習通りにやればいいとのこと」
「俺たち自身の手でここまで盛り上げてきた学園祭だ……。最後まで、根性入れて花を咲かせてやるとしようぜ！」

第3章　白き花のマドリガル（２０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ次回は演劇開幕です！そして学園祭もクライマックスに！

第3章　白き花のマドリガル（21）（前書き）

いよいよ演劇が開幕！どうぞごゆっくりお楽しみください。
感想お待ちしてます。

第3章　白き花のマドリガル（21）

講堂の中が薄暗くなる。
「……大変お待たせしました。ただ今より、生徒会が主催する史劇、《白き花のマドリガル》を上演します。皆様、最後までごゆっくりお楽しみください……」

「時は七耀暦１１００年代……。１００年前のリベールではいまだ貴族制が残っていました。一方、商人たちを中心とした平民勢力の台頭も著しく……貴族勢力と平民勢力の対立は日増しに激化していったのです。王家と協会による仲裁も功を奏しませんでした……。そんな時代……。時の国王が病で崩御されて一年が過ぎたくらいの頃……。早春の晩、グランセル城の屋上にある空中庭園からこの物語が始まります……」
語り手のジルが舞台脇へと引き上げる。

「街の光は、人々の輝き……。あの１つ１つにそれぞれの幸せがあるのですね。ああ、それなのにわたくしは……」
白の姫セシリアが憂いの言葉を漏らす。
「姫様……。こんな所にいらっしゃいましたか」
「そろそろお休みくださいませ。あまり夜更かしをされてはお身体に障りますわ」
侍女のレイニとリンファがセシリアを気遣う。
「いいのです。わたくしなど病にかかれば……。そうすれば、このリベールの火種とならずに済むのですから」
「まあ、どうかそんな事を仰らないでくださいまし！」
「姫様はリベールの至宝……。よき旦那様と結ばれて王国を統べる

方なのですから」
「わたくし、結婚などしません。亡きお父様の遺言とはいえこればかりはどうしても……」
「どうしてでございますか？あのように立派な求婚者が2人もいらっしゃるのに……」
「1人は公爵家の嫡男（ちゃくなん）にして近衛騎士団長のユリウス様……」
「もう1人は、平民出身ながら帝国との紛争で功績を挙げられた猛将オスカー様……」
「はあ～、どちらも素敵ですわ？」
2人して声をあげるレイニとリンファ。
「……。彼らが素晴らしい人物であるのはわたくしが一番良く知っています」
そこで数歩前へと歩くセシリア。
「ああ、オスカー、ユリウス……。わたくしは……どちらを選べばいいのでしょう？」

「（まあ、あのお姫様は……ヨシュアさんではありませんか。ふふ、男女の配役が逆とは……。ジルもなかなか考えましたわね）」
「（はい、お嬢様。ただヨシュア様はともかく他のメイドの方はちょっと……）」
リラ……そこは突っ込んではだめだろう……。

「覚えているか、オスカー？幼き日、棒切れを手にしてこの路地裏を駆け回った日々のことを」
「ユリウス……。忘れることができようか。君と、セシリア様と無邪気に過ごしたあの日々……。かけがえのない自分の宝だ」

「ふふ、あの時は驚いたものだ。お忍びで遊びに来ていたのが私だけではなかったとはな……」
「舞い散る桜のごとき可憐さと清水のごとき潔さを備えた少女……。セシリア様はまさに自分たちにとっての太陽だった」
「だが、その輝きは日増しに翳(かげ)りを帯びてきている。貴族勢力と平民勢力……。両者の対立は避けられぬ所まで来ている。姫の嘆きも無理はない……」
「そして……。ああ、何という事だろう。その嘆きを深くしているのが他ならぬ我々の存在だとは……」

「（きゃあきゃあ！お姉ちゃんたちステキ！）」
「（く、悔しいけど……男よりも格好いいかも……）」
「（ふふ……。静かに見ましょうね）」

「ユリウスよ、判っておろうな。これ以上、平民どもの増長を許すわけにはいかんのだ。ましてや、我らが主と仰ぐ者が平民出身となった日には……。伝統あるリベールの権威は地に落ちるであろう」
貴族勢力筆頭のラドー公爵が厳かに言った。
「お言葉ですが、父上……。東に共和国が建国されてから１０年ほどの年月が流れました。最早、平民勢力の台頭も時代の流れなのではないかと」
ユリウスが歩み寄って言った。
「おぞましいことを言うな！」
ラドー公爵が席を立って怒鳴った。
「何が自由か！何が平等か！」
ユリウスに詰め寄り怒鳴り続けるラドー公爵。

「高貴も下賤もひとまとめにして伝統を捨てるそのあさましさ。帝国の軍門に下った方がはるかにマシと言うものよ！」
「父上！」
ユリウスが叫んだ。

「ヒック……。公爵の言う事ももっともだ。平民どもに付け上がらせたら伝統は失われるばかりだからな」
このおっさんは……。しかも酔っているじゃないか！
「（閣下……。もう少し声を抑えめに……）」

「オスカー君。君には期待しているよ王家さえ味方に付けられれば貴族派を抑えることができる。そうすれば、我々平民派が名実ともに主導権を握れるのだ」
平民派代表のクロード議長が言った。
「しかし議長……。自分は納得できません。このような政治の駆け引きにセシリア様を利用するなど……」
「フフ、なんとも無欲な事だな。いくら名目上の地位とはいえ王となるチャンスだというのに。君が拒否するというのであれば流血の革命が起きるというだけ……。貴族はもちろん、王族の方々にも歴史の闇に消えて頂くだけのことだ」
「議長！」
オスカーが叫んだ。

「（フム、大したものだ。時代考証もしっかりしている。最初、男

女の役が逆と聞いていかがなものかと思いましたがな）」
ダルモア市長が頷く。
「（ふふ、生徒たち全員の努力のたまものでしょうな。それと協力をしてくれた若き遊撃士たちの……）」

「流血の革命だけは起こさせるわけにはいかない……。ユリウスもセシリア様も死なせるわけにはいかない……。自分は……いったいどうしたらいいんだ」
悩むオスカーのところに酔っ払いが現れた。
「ういっく……。ううう……だめだ……気持ち悪い……」
「おっと、大丈夫か？」
オスカーは酔っ払いのもとに寄る。
「あまり飲み過ぎるものではないな。いくら春とはいえこんな所で寝たら風邪を引くぞ」
「ううう……親切な騎士様……どうもありがとうございますだ」
「騎士様はやめてくれ……。自分は大した人物ではない。何をすべきかも判らずに道に迷うだけの未熟者だ……」
「まったくその通りだな」
「なに？」
その時、酔っ払いがオスカーの腕をナイフで切った。
「くっ、利き腕が……」
「けけけ……。こいつには痺れ薬が塗ってある。大人しく観念してもらおうか」
「貴様……。何者かに雇われた刺客か！？」
「あんたが目障りというさる高貴な方のご命令でなぁ。前払いも気前が良かったし、てめぇには死んでもらうぜっ！」

「（なーるほど……。なかなか見せてくれるじゃねえの。となるとこの次の展開は……。……いかんいかん。危うく仕事を忘れるとこだったぜ）」
ちゃっかりいるナイアル。それにしても仕事とは？

「久しぶりですね、姫」
「ユリウス……。本当に久しぶりです……。今日は……オスカーと一緒ではないのですね。お父様がご存命だったころ……宮廷であなた達が談笑するさまは侍女たちの憧れの的でしたのに」
「……姫もご存じのように王国は存亡の危機を迎えています。私と彼が親しくすることは最早、かなわぬものかと……」
「……」
「今日は姫に、あることをお願いしたく参上しました」
「お願い……ですか？」
「私とオスカー……。近衛騎士団長と若き猛将との決闘を許していただきたいのです。そして勝者には……姫の夫たる幸運をお与えくださ い」
「！！！」

「（フフ……。なかなかドラマチックですこと）」
カノーネ大尉も……。

「貴族勢力と平民勢力の争いに巻き込まれるようにして……親友同

士だった2人の騎士はついに決闘することになりました。彼らの決意を悟った姫はもはや何も言えませんでした。そして決闘の日……。王都の王立競技場（グランアリーナ）に2人の騎士の姿がありました。貴族、平民、中立勢力など大勢の人々が見届ける中……。セシリア姫の姿だけがそこには見られませんでした」

「わが友よ。こうなれば是非もない……。我々は、いつか雌雄（しゆう）を決する運命にあったのだ。抜け！互いの背負うもののために！何よりも愛しき姫のために！」

紅騎士ユリウスが剣を構えた。

「運命とは自らの手で切り拓（ひら）くもの……。背負うべき立場も姫の微笑みも、今はは遠い……」

蒼騎士オスカーは立ち尽くしている。

「臆したか、オスカー！」

「だが、この身に駆け抜ける狂おしいまでの情熱は何だ？自分もまた、本気になった君と戦いたくて仕方ないらしい……」

そして、オスカーが剣を抜く。

「革命という名の猛（たけ）き嵐が全てを呑み込むその前に……。剣をもって運命を決するべし！」

そして、ユリウスが剣を構えた。

「おお、我ら二人の魂、空の女神（エイドス）もご照覧あれ！いざ、尋常に勝負！」

「応！」

2人は剣を交える。

「やるな、ユリウス……」

「それはこちらの台詞だ。だが、どうやら……いまだ迷いがあるようだな！」

剣でお互い押し付けながら語る。そしてユリウスが先に攻撃を仕掛けた。オスカーは防ぐだけで精一杯だった。
「どうしたオスカー！お前の剣はそんなものか！？帝国を退けた武勲はその程度のものだったのか！」
「くっ……。おおおおおおおおっ！」
オスカーが雄叫びとともに仕掛ける。
「さすがだユリウス……。なんと華麗な剣捌きな事か。く……」
オスカーが右腕を押さえる。
「オスカー、お前……。腕にケガをしているのか！？」
「問題ない……カスリ傷だ」
「いまだ我々の剣は互いを傷つけていない筈……。ま、まさか決闘の前に……」
その時、控えていたクロード議長が、
「卑怯だぞ、ラドー公爵！貴公のはかりごとか！？」
反対側のラドー公爵に抗議した。
「ふふふ……言いがかりは止めてもらおうか。私の差し金という証拠はあるのか？」
余裕の笑みを漏らすラドー公爵。
「父上……何ということを」
「いいのだ、ユリウス。これも自分の未熟さが招いた事。それにこの程度のケガ、戦場では当たり前のことだろう？」
「……」
「次の一撃で全てを決しよう。自分は……君を殺すつもりで行く」
「オスカー、お前……。わかった……。私も次の一撃に全てを賭ける」
2人が後ろに飛び退いた。
「更なる生と、姫君の笑顔。そして王国の未来さえも……。生き残った者が全ての責任を背負うのだ」
「そして敗れた者は魂となって見守っていく……。それもまた騎士の誇りだろう」

「ふふ、違いない。……」
「……」
互いに目を閉じ、次の瞬間、
「はあああああー！」
「おおおおおー！」
両者同時に仕掛けたが、
「だめ――――――――――――っ！！」
「あ……」
セシリア姫が間に入っていた。
「……姫……？」
「セ……シリア……？」
体をくずすセシリア姫。
「ひ、姫――――――ッ！」
「セシリア、どうして……。君は欠席していたはずでは……」
セシリアの体を支えながら語りかけるオスカー。
「よ、よかった……。オスカー、ユリウス……。あなたたちの決闘なんて見たくありませんでしたが……。どうしても心配で……戦うのを止めて欲しくて……。ああ、間に合ってよかった……」
「セシリア……」
「ひ、姫……」
「皆も……聞いてください……。わたくしに免じて……どうか争いは止めてください……。皆……リベールの地を愛する大切な……仲間ではありませんか……。ただ……少しばかり……愛し方が違っただけのこと……。手を取り合えば……必ず分かり合えるはずです……」
「お、王女殿下……」
「もう……それ以上は仰いますな……」
ラドー公爵とクロード議長が膝を折った。
「ああ……目がかすんで……。ねえ……2人とも……そこに……いますか……？」

「はい……」
「君の側にいる……」
「不思議……あの風景が浮かんできます……。幼い頃……お城を抜け出して遊びに行った……路地裏の……。オスカーも……ユリウスも……あんなに楽しそうに笑って……。わたくしは……2人の笑顔が……だいすき……。だ……から……どうか……。……いつも……笑って……いて……。……」
そこで力尽きたようにセシリアの腕から力が抜けた。
「姫……？嘘でしょう、姫！頼むから嘘だと言ってくれええ！」
セシリアの身体をゆするユリウス。
「セシリア……自分は……。……」
オスカーはセシリアの身体を抱きしめた。
「姫様、おかわいそうに……」
「ああ、どうしてこんな事に……」
侍女の2人が顔を伏せる。
「殿下は命を捨ててまで我々の争いをお止めになった……。その気高さと較べたら……貴族の誇りなど如何(いか)ほどの物か……。そもそも我々が争わなければこんな事にならなかったのに……」
ラドー公爵が膝を折ったまま言った。
「人は、いつも手遅れになってから己の過ちに気がつくもの……。これも魂と肉体に縛られた人の子としての宿命か……。エイドスよ、大いなる空の女神よ。お恨み申し上げますぞ……」
クロード議長も同様だ。
「まだ……判っていないようですね」
空が明るく照らし出される。
「……確かに私はあなたたちに器としての肉体を与えました。しかし、人の子の魂はもっと気高く自由であれるはず。それをおとしめているのは他ならぬ、あなたたち自身です」
「ま、眩(まぶ)しい……」
「何て綺麗な声……」

「おお……なんたること！方々、畏れ多くもエイドスが降臨なさいましたぞ！」
王都の司教が叫んだ。
「これが女神……」
「なんという神々しさだ……」
ユリウスとオスカーが見上げる。
「若き騎士たちよ。あなたたちの勝負、私も見させてもらいました。なかなかの勇壮さでしたが……肝心なものが欠けていましたね」
「仰るとおりです……」
「全ては自分たちの未熟さが招いたこと……」
「議長よ……。あなたは、身分を憎むあまり貴族や王族が、同じ人である事を忘れてはいませんでしたか？」
女神エイドスがクロード議長に言った。
「……面目次第もありません」
「そして公爵よ……。あなたの罪は、あなた自身が一番良く判っているはずですね？」
続けて公爵に言った。
「……」
公爵は自戒しているようだ。
「そして、今回の事態を傍観するだけだった者たち……。あなたたちもまた大切なものがかけていたはず。胸に手を当てて考えてごらんなさい」
侍女や貴族、平民の人々は黙って考えている。
「ふふ、それぞれの心に思い当たる所があるようですね。ならば、リベールにはまだ未来が残されているでしょう。今日という日のことを決して忘れる事がないように……」
そこで女神エイドスは消えていった。
「ああ……」
「消えてしまわれた……」
だが、

「……ん……」
セシリアが起き上がった。
「あら……ここは……」
「ひ、姫!?」
「セシリア!?」
「まあ……ユリウス、オスカー……。まさか、あなたたちまで天国に来てしまったのですか?」
「……」
ユリウスとオスカーは驚いて声が出ない。
「こ、これは……。これは紛(まご)う方なき奇跡ですぞ!」
王都の司教が驚愕した。
「姫様〜!」
侍女たちがセシリアに駆け寄った。
「本当に、本当に良かった!!」
「きゃっ……。どうしたのです2人とも……。あら……公爵……議長までも……。わたくし……死んだはずでは……」
「おお、女神(エイドス)よ!よくぞリベールの至宝を我らにお返しくださった!」
「大いなる慈悲に感謝しますぞ!」
ラドー公爵とクロード議長が天を仰いだ。
「オスカー、ユリウス……。あの……どうなっているんでしょう?」
「セシリア様……。もう心配することはありません。永きに渡る対立は終わり……全てが良い方向に流れるでしょう」
「甘いな、オスカー。我々の勝負の決着はまだ付いていないはずだろう?」
「ユリウス……」
「そんな……。まだ戦うというのですか?」
「いえ……。今回の勝負はここまでです。何せ、そこにいる大馬鹿者が利き腕をケガしておりますゆえ。しかし、決闘騒ぎまで起こして勝者がいないのも恰好が付かない。ならば、ハンデを乗り越えて

互角の勝負をした者に勝利を！」
「待て、ユリウス！」
「勘違いするな、オスカー。姫をあきらめたわけではないぞ。お前の傷が癒えたら、今度は木剣で決着をつけようではないか。幼き日のように、心ゆくまでな」
「そうか……。ふふ……わかった、受けて立とう」
「もう、2人とも……。わたくしの意見は無視ですか？」
「そ、そういうわけではありませんが……」
「ですが、姫……。今日の所は勝者へのキスを。皆がそれを期待しております」
「……わかりました」
セシリアがオスカーに近づき、キスをした。
「きゃあきゃあ？」
「お2人ともお似合いです？」
侍女たちがはやしたてる。
「空の女神も照覧あれ！今日という良き日がいつまでも続きますように！」
ユリウスが叫んだ。
「リベールに永遠の平和を！」
「リベールに永遠の栄光を！」

「フフ……やはり最後は大団円か。だが……それでいい」
講堂の扉の前にいた銀髪の青年がそう呟いて講堂を出て行った。

こうして《白き花のマドリガル》は大好評のうちに幕を閉じた。
同時に、学園祭の終了を告げるアナウンスが鳴り響き……

来場客は、みな満足した表情で学園を後にするのだった。

第3章　白き花のマドリガル（21）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

無事演劇を終えたエステルたち。そして、王立学園を出る前に……。

第3章　白き花のマドリガル（22）（前書き）

学園祭が成功して喜ぶエステルたち。そしてテレサ院長に思いもよらないことが……。

第3章　白き花のマドリガル（22）

―講堂　控え室

「いや～、ほんとお疲れ！監督の私が言うのも何だけど、最高の舞台だったわよっ！」

ジルがエステルたちをねぎらった。

「最初、男女が逆ということで笑われてしまったけれど……。みんな、劇が進むに連れて真剣に見てくれて本当によかった」

クローゼが言った。

「うん、そうだね。あんな恰好した甲斐があったよ。もう2度としたくないけど……」

ヨシュアが溜息をついた。

「はは、そんなこと言うなよ。写真部の連中が劇のシーンを何枚か撮っていたけど……。お前さんの写真がどれだけ売れるか楽しみだぜ」

「ハア、勘弁してよ……」

「エステルたちの写真もすっごく売れると思うわよ。男子はもちろん下級生の女の子あたりにもね。『お姉さま』なーんて呼ばれちゃったりして？」

「もう、ジルったら……」

「……」

エステルは下を向いたままだ。

「あれ……。どうしたの、エステル？」

「ふえっ……。え、あの、何の話！？」

「いや……大した話じゃないけど……。劇が終わってからボーッとしてるみたいだけど大丈夫かい？」

「ま、ハードな決闘だったから疲れちまったのも無理ないさ」

「調子悪いんだったら医務室に案内するわよ？」

「だ、大丈夫だってば！これでも遊撃士なんだからこのくらいの疲

れ、日常茶飯事よ。ただ、気が抜けたっていうか、頭が混乱してるっていうか……」
「あ……。エステルさん、もしかして……」
クローゼが何か気づいたようだ。
「ち、違うんだからね？全然、そういうんじゃなくて……。あーもう、とにかく全然問題ナシ！」
エステルのアタマがパンクした。
「？？？」
その時、テレサ院長たちが入ってきた。
「ふふ……。失礼してもいいかしら」
子供たちが一斉にエステルたちに駆け寄ってきた。
「クローゼ姉ちゃん！オスカー、カッコ良かったぜ！やっぱオトコはああでなくちゃ！」
クラムがクローゼに言った。
「ふふ、ありがとう」
「エステルさんもすっごく良かったですよ！ああん、ユリウス様～？」
マリィがとろけた声で言った。
「ちょ、ちょっとマリィ……」
そんなマリィに困るエステル。
「ヨシュアちゃん☆とっても可愛かったよー」
「うん？ボクもうっとりしちゃったぁ」
ポーリィとダニエルがヨシュアに言った。
「あ、あはは……ありがと……」
ヨシュアは複雑な気分だ。
「ふふ、みんなで楽しませてもらいましたよ。恋と友情の間で悩みながら時代の奔流に立ち向かっていくそれぞれの主人公たち……。手に汗を握る決闘の果てに待ち受けている哀しい決着……。そして心温まる大団円……。本当に素晴らしい劇でした」
「いや～、そう言って頂けると頑張った甲斐がありますよ。あ、そ

うだ……ハンス」
「ああ、そうだったな」
ジルとハンスが目配せした。
「なに、どうしたの？」
「ちょっと用を思い出したの。すぐに戻ってくるからそのままおもてなししてて」
「う、うん……？」
首をかしげるエステルをよそにジルとハンスは行ってしまった。
「今の人たちは、ジルさんにハンスさんと言ったかしら。クローゼのお友達でたしか生徒会の人だったわね」
「はい、今回の劇では監督と演出を担当しました」
「そう……感謝しなくてはね。本当に、ルーアン地方でのいい思い出になりました」
「先生……」
「この子たちにはまだ……？」
クローゼとヨシュアが目を伏せる。
「ええ……。マノリアに帰ってから話します。そして早ければ明日にでも発とうかと……」
「そ、そんな急に！？」
エステルが声を上げた。
「なになに、何の話だよー？」
クラムが興味ありげに尋ねる。
「失礼でしょ、クラム！大人の話にわりこんだりして」
マリィが怒る。
「いいのよ、マリィ。でもとりあえずは宿屋に帰るとしましょうか。夕食を食べて……話はそれからでいいですね？」
「う、うん……？」
「それではクローゼ……エステルさんもヨシュアさんも。私たち、そろそろ失礼しますね。今日は本当にありがとう。素晴らしいものを見せて頂いて」

「あ、ちょっと待って。ジルたちが戻ってくるから……」
その時、ジルたちが戻ってきたようだ。
「……失礼するよ」
コリンズ学園長までが来た。
「まあ、コリンズ学園長……」
「久しぶりだのう、テレサ院長。せっかく来て頂いたのに挨拶が遅れて申しわけなかった」
「とんでもありません……。本当に素晴らしいお祭りに招いていただいて感謝しますわ」
「ふふ、生徒たちも頑張った甲斐があるというものだ。……事情はクローゼ君から聞いた。本当に大変なことになったものだ。そこで、わしらも微力ながら力になれればと思ってな……」
「え……」
「ジル君」
「はい」
ジルはなにやら封筒を持っている。
「どうぞ、お受け取りください」
ジルは、テレサ院長に王立学園の紋章が入った分厚い封筒を渡した。
「これは……？」
「来場者から集まった寄付金でちょうど１００万ミラあります。孤児院再建に役立ててください」
「ひ、ひゃく万ミラ！！」
「すごい大金ですね……」
エステルたちが驚く。
「ど、どうしてこんな……？」
「今回は、公爵やボース市長など多くの名士が来場したからのう。例年よりも多く集まったのだよ」
「学園長……」
「そんな、いけません！こんなものは受け取れません！」
「遠慮する必要ありませんよ。毎年、学園祭で集まった寄付金は福

祉活動に使われているんですから」
「孤児院再建に使われるのなら寄付した方々も納得しますって」
ジルとハンスが言う。
「でも……そんな……。ここまでして頂くわけには……」
「先生……どうか受け取ってください」
「クローゼ……ですが……」
「先生が戸惑う気持ちも判ります。でも……どうか考えてみて欲しいのです。それだけのミラがあったら孤児院を再建するのはもちろん、王都に行く必要もありません。あのハーブ畑だって放っておかなくてもいいんです」
「……」
「クローゼ君の言う通りだ。亡きジョセフ君と何よりも子供たちのために……。あなたは拘(こだわ)りを捨ててそのミラを受け取るべきだろう」
「……ああ……。もう……何とお礼を言っていいのか……。ありがとう……。本当にありがとうございます……」
「グス……よかったぁ……」
「うん、これで一件落着だね」
「な、なあ……。王都に行くってなんだよ？何がどうなっちゃってるわけ？」
クラムが尋ねる。
「いいのです……。もう心配しなくても……。あなたたちには……本当に苦労をかけましたね……」
「べ、別に苦労なんてしたつもりはないけど……。それよりも先生……どうして泣いてるのさぁ？」
「バカねぇ、クラムったら。そんなの嬉しいからに決まってるじゃない♪」

テレサ院長と子供たちがマノリアに帰った後……
エステルとヨシュアは他の生徒と一緒に祭りの後片付けをした。

そして、片づけが終わった頃にはすっかり夕方になっていた。

「……せっかくだからもう一泊して行けばいいのに。これから学園祭の打ち上げだってあるのよ？」

「あはは……。残念だけど遠慮しとくわ。新米のクセに、あまりギルドを留守にするのもなんだしね～」

「今日中に報告したいから悪いけど、これで失礼するよ」

「そうか……。ああ、今夜からまた俺だけになっちまうのか。独り寝っていうのは寂しいぜ」

そんな……まさか……？

「ええっ！？」

エステルが驚いて声を上げた。

「ハンス……悪ふざけが過ぎるよ。エステルも信じないように」

「あ、あはは、冗談ね……」

「ほんと、あんたたちってば一緒にいて退屈しなかったわ。また何かあったら遠慮なく遊びに来なさいよね？」

「もちろん泊りがけでな」

「うん……ありがと」

「ぜひ寄らせてもらうよ」

「ふふ……。それでは行きましょうか。早くしないと日が暮れてしまいますから」

「あんたはこれからマノリア村に行くのよね？」

ジルがクローゼに尋ねた。

「うん、先生たちと話したい事が一杯あるし……。外出許可を貰ってきちゃった」

「せっかくの打ち上げに揃って主役がいなくなるのはちょっと残念だけど……。ま、仕方ないよね。ゆっくり過ごしてきなさいな」

「そういや、院長先生たち……。あんな大金を持ち歩いてちょっと危なくなかったか？」

「あ、それは心配しないで。警備に来てた遊撃士のカルナさんが護衛を引き受けてくれたから」
「わざわざ学園長さんが頼んでくれたみたいだね」
「さすが学園長。やることにソツがないぜ。……よし……それじゃあ……」
「元気でね。エステル、ヨシュア。頑張って修行して正遊撃士を目指しなさいよ？」
「うん、まっかせて！」
「君たちも勉強、頑張ってね」
そうしてエステルたちはジル、ハンスと別れた。

「うーん……。数日間だけだったけどすっごく楽しかったわね～！もちろん授業を除いてだけど」
おい……。
「なにムシのいいこと言ってるんだか……。本来は、授業が主で学園祭の方が特別なんだから」
「そうなのよね～。はあ、学生っていうのも意外とラクじゃないわ」
「ふふ……。……あら……？」
クローゼが辺りを見渡した。
「どうしたの？」
「いえ……。ジークがいる気配が近くに感じられなくて……。どこに行っちゃったのかしら？」
「ゴハンでも取りに行ってるんじゃないの？」
「はい……そうかもしれません。すみません。変なことを言って……。では海道に出るまでご一緒させてください」
「うん♪のんびり行きましょ」

第3章　白き花のマドリガル（22）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ギルドに戻ろうとしたエステルたちだが海道で事件が……！！

第3章　白き花のマドリガル（23）（前書き）

テレサ院長たちの身に事件が！

第3章　白き花のマドリガル（23）

―メーヴェ海道

エステルたちがメーヴェ海道に出た。

「さてと、ここでお別れだね」

「はい……。この数日間、本当にありがとうございました」

「あはは、いいって。あたしたちも楽しかったし。それじゃあ……先生とあの子たちによろしくね」

「はい、必ず伝えます」

そうして別れようとした時、

「おお、あんたたちは！」

後ろから孤児院の片付けの手伝いに来ていたザックが走ってきた。

「あれ……」

「あなたは……確かマノリアに住んでいる……」

「そういうあんたたちは確か遊撃士だったな！た、大変な事になったんだ！」

かなり慌てている。

「大変なこと……？」

「はあはあはあ……。ちょ、ちょっと待ってくれ。い、息が切れて……。ふーっ、ふーっ……。……ふう……」

深呼吸して落ち着いたザックがようやく話し始めた。

「……テレサ先生と子供たちがマノリアの近くで何者かに襲われた」

その言葉に一同は驚いた。

「あ、あんですってー！？」

「……あ……」

クローゼはそれを聞いて糸が切れたように膝を折った。

「だ、大丈夫！？」

慌ててエステルがクローゼを支える。

「……しっかり。倒れている場合じゃないよ」

ヨシュアがクローゼに言った。
「す、すみません……」
クローゼが立って、ザックに尋ねる。
「お願いします……。詳しいことを教えてください」
「あ、ああ……。学園祭から帰って来る途中で変な連中に襲われたみたいでな。子供たちにケガは無かったがテレサ先生と遊撃士の姉ちゃんが気絶させられたみたいで……」
「ええっ、カルナさんも!?」
「相当の手練みたいだね……」
「……」
「ギルドに連絡するはずが宿の通信器が壊れたみたいでな。仕方なく俺が大急ぎで走ってきたんだ」
確か、マノリアの通信器は古いってジャンが言っていたな。
「そうですが……。協力、感謝します。ただ、できればこのままルーアンに行ってくれませんか？僕たちはこのままマノリアに急ぎますから」
「ああ、わかった！」
ザックはルーアンに向かっていった。
「さあ、僕たちも急ごう！」
「う、うん！」
「……はい！」
エステルたちは急いでマノリア村に向かった。

―マノリア村
エステルたちは宿屋に入って前と同じ2階の部屋に行った。
「あ……」
「お姉ちゃんたち……」
子供たちが振り返る。

「みんな……」
クローゼが子供たちを見回す。
「わあああん……」
「恐かったのー！」
子供たちが泣きついてきた。
「良かった……。あんたたちは無事みたいね」
「すみません。先生たちの容体は？」
ヨシュアは看護をしていたカーラに尋ねた。
「安心しなさい。２人とも大した怪我じゃないわ。ただ、目を醒まさないからちょっと心配なんだけど……」
「……ちょっと失礼します」
ヨシュアはテレサ院長とカルナの様子を調べた。
「間違いない……。睡眠薬を嗅がされたみたいだ」
「す、睡眠薬ぅ？」
「うん、かすかに刺激臭がする。副作用がないタイプだから安心してもいいと思うけど……」
「うーん……。ね、クラム。何があったのか教えてくれる？」
「……」
クラムは話そうとしない。
「あたしが説明します……」
マリィが話し始めた。
「あたしたち……遊撃士のお姉さんと一緒に海道を歩いていたんですけど……。いきなり、覆面をかぶった変な人たちが現れて……。遊撃士のお姉さんが追い払おうとしたけど……。覆面の人たちにすぐに囲まれちゃって……。先生もあたしたちを守ってあいつらに向かっていって……。……それで……ヒック……」
マリィは泣きそうになった。
「よしよし、恐かったね……」
エステルはマリィの頭をなでた。
「……あいつら……先生からあの封筒を奪ったんだ……。オイラ…

…取り戻そうとしたけど思いっきり突き飛ばされて……。ヨシュア兄ちゃん……オイラ……守れなかったよ……」

クラムが泣き始めた。

「……そんなことないさ。君たちが無事でいるだけで先生はきっと嬉しいはずだから。だから……自分を責めちゃだめだ」

「でも……オイラ……オイラ……」

「ヒック……ヒック……」

「許せない……！どこのどいつの仕業よ……」

エステルがたまりかねて叫んだ。

「……。はっきりしているのは……犯人たちは相当の手練ということです。遊撃士の方がなす術もなく気絶させられたわけですから……」

「クローゼ……」

「そしてもう1つ……。計画的な犯行だと思います。狙いはもちろん先生の持っていた寄付金……。孤児院を放火したのもおそらくその人たちでしょう」

「うん、その可能性が高そうだ」

「クローゼ……。やっと落ち着いたみたいね」

「はい……。落ち込んでいても仕方ありませんから。今はとにかく、一刻も早く犯人の行方を突き止めないと……」

「……そいつは同感だな」

アガットがいきなり入ってきた。

「あーっ！」

「アガットさん……」

「話はギルドで聞いたぜ。ずいぶんと厄介な事になってるみたいじゃねえか」

「ひ、他人事みたいに言わないでよ！カルナさんだってやられちゃってるんだから！」

「判ってる……。きゃんきゃん騒ぐな。確かにカルナは一流だ。相当、やばい連中らしいな。大ざっぱでいいから一通りの事情を話し

てもらおうか」
「はい……」
エステルたちは寄付金が奪われたことも含めてアガットに一通りの事情を説明した。
「ふん、なるほどな……。妙な事になってきやがったぜ」
「妙って、何がよ？」
「ああ、実はな……。《レイヴン》の連中が港の倉庫から行方をくらました」
「そ、それって……。やっぱりあいつらが院長先生を襲ったんじゃ！？」
「いや、それはどうかな。彼ら程度に、カルナさんが遅れを取るとも思えない」
ヨシュアが冷静に言った。
「そっか、確かに……。あの連中、口先だけでろくに鍛えてなかったもんね」
「しばらく睨みを利かせて大人しくなったと思ったが……。今日になっていきなり姿をくらましやがって……。そこに今度の事件と来たもんだ」
アガットが拳を手のひらに叩きつけた。
「犯人かどうかはともかく何か関係がありそうですね」
「ああ、だが今はそれを詮索してる場合じゃない。新米ども、とっとと行くぞ」
アガットが部屋を出ようとした。
「なによ、いきなり……。いったい、どこに行くの？」
「わかんねえヤツだな。犯行現場の海道に決まってるだろ。あのバカどもがやったかどうかはともかく……。できるだけ手がかりを掴んで犯人どもの行方を突き止めるんだ！」
「あ……なるほど」
「分かりました、お供します」

エステルたちが部屋を出たとき、既に日が暮れていた。
「わっ、もうこんな時間！？」
「ち……マズイな。これだけ暗いとどこまで調べられるか……」
アガットが舌打ちした。
その時、ジークの鳴き声がした。
「なんだ、今の鳴き声は……」
アガットだけが分からない様子だ。
「まあ、ジーク……。どこに行ってたの？」
「な、なんだコイツは」
「クローゼのお友達でシロハヤブサのジークよ」
「はあ……お友達ねぇ……」
なんともメルヘンなことだなといわんばかりのアガットの表情。
「ピューイ！ピュイ、ピュイ！」
「そう……わかったわ。ありがとうね、ジーク」
「ピュイ☆」
「まったく呑気なもんだぜ。で、お嬢ちゃん。そのお友達はなんだって？」
「先生たちを襲った犯人の行方を教えてくれるそうです。襲われた時にちょうど見ていたらしくて……」
「ははは！面白いジョークだぜ……」
アガットは苦笑した。
「やった！さすがジーク！」
「うん、お手柄だね」
「ピューイ♪」
「ちょ、ちょっと待て！お前ら、そんなヨタ話をしんじてるんじゃねえだろうな？」
アガットがその様子をみて言った。
「僕たちは何度かこの目で確かめていますし」
「信じないんだったら付いて来なけりゃいいのよ。クローゼ、ジー

ク、行きましょ！」
「はい！」
「ピューイ！」
エステル、ヨシュア、クローゼはジークの後を追った。残されたのはアガットのみ。
「……えーと……。こ、こらガキども、待ちやがれ！」
慌ててエステルたちの後を追うアガット。

第3章　白き花のマドリガル（23）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回は犯人の一端を捕まえることになります。果たしてその犯人は！？犯人の予想をお待ちしています。ヒントは孤児院を不必要なものと思い、テレサ院長をルーアン市から遠ざけようとしている人物です。すでにその黒幕の名前は出ています。さらに、その人物はもちろん学園祭に来ていました。今までにテレサ院長と会話した人たちの言動を調べてみましょう。

第3章　白き花のマドリガル（２４）（前書き）

どうもお久しぶりです。大学のレポートや試験対策で忙しくて、只今、ストレスと疲れがＭＡＸの状態です……。このような状態の作者に一言励ましの言葉を下さい。

第3章　白き花のマドリガル（24）

―マノリア間道

「確かに誘導しているみたいだが……。おい、嬢ちゃん。冗談だったら勘弁してくれよ？」

いまだ不信のアガット。

「冗談なんて言いません。先生とあの子たちは私の家族も同然ですから……」

「ち……仕方ねえな。ダマされたと思ってここは乗せられてやるとするか」

アガットはクローゼに押されて信じることにした。

「まったくもう。素直じゃないんだから」

「とにかく急いでジークの後を追いかけよう」

三叉路に差し掛かったところで、ジークはクローネ峠方面とは別の海道を示した。

「あっちは確か……」

「うん……。とにかく行ってみよう」

―バレンヌ灯台

「あの建物って……」

「バレンヌ灯台……。ルーアン市が管理する建物だな。確か、灯台守のオッサンが1人で暮らしていたはずだが……」

「でも、間違いありません。先生たちを襲った人たちはあの建物の中にいると思います」

「となると、犯人に灯台内を占領されている可能性が高そうだね」
「見たところ……入口はあそこだけみたい。とにかく入ってみるしかないか」
「はい……」
「ちょっと待ちな。嬢ちゃん、あんたは……」
アガットがクローゼを引き止めようとした。
「この目で確かめてみたいんです」
「なにぃ？」
「誰がどうして、先生たちをあんな酷い目に遭わせたのか……。だから……どうかお願いします」
「そ、そうは言ってもな……」
アガットが渋る。
「あーもう。ケチなこと言うんじゃないわよ。この場所が判ったのはクローゼたちの手柄なんだから」
「彼女の腕は保証しますよ。少なくとも、足手まといになる心配はないと思います」
エステルとヨシュアが援護する。
「エステルさん、ヨシュアさん……」
「ち……勝手にしろ。だがな、相手はカルナを戦闘不能に追いやった連中だ。くれぐれも注意しとけよ」
アガットが折れた。
「はい、肝に銘じます」
「それじゃ、決まりね」
「うん……。さっそく中に入ろう」
エステルたちはバレンヌ灯台に入った。

―バレンヌ灯台　１階
そこにいたのは、まさかの《レイヴン》のメンバーだった。

「こ、こいつら!?」
「あ、あの時の人たち……」
エステルとクローゼは驚いた。
「まさかとは思ったが……」
アガットがレイヴンのメンバーに近づく。
「おい、てめえら……。こんな所で何やってやがる!」
アガットが叫んだが、レイヴンのメンバーの目は虚ろで何も映っていないようだった。
「お、おい……」
アガットがディンに近づいたその時、いきなりディンは刃物を抜いた。
「アガットさん、危ない!」
ヨシュアが叫んだ。アガットは間一髪、重剣で受け止めた。
「こ、この力……!?」
どうやら尋常ではない力で押してきたようだ。
「ディン、てめえ……」
「……」
ディンは何もしゃべらない。そして、下っ端の2人も刃物を抜いた。
「はっ、上等だ……。なにをラリッてるのかは知らねえが……。キツイのをくれて目を醒まさせてやるぜ!」
ラリッてるわけではないと思うが……。
エステル　VS　ディン及び下っ端2人　戦闘開始!

漆黒の牙
「これで終わりだ……」
一撃必殺!

「し、信じられない……。倉庫で戦った時とはケタ違いの強さじゃ

ない！」
「様子も変でしたし……。どういう事なんでしょうか？」
エステルたちはどうにか倒したが、以前とは比べ物にならないほど強かった。
「ふん……。どうやら何者かに操られていたみたいだな」
「あ、操られていたって……」
「うん、間違いない……。薬品と暗示を併用した特殊な催眠誘導みたいだ。肉体的なポテンシャルも限界まで引き出されている」
ヨシュアはレイヴンのメンバーを調べて言った。
「そ、そんな事できるの！？」
「もちろん、相当な技術が必要になるのは間違いねえ。こいつはひょっとしたら……」
「心当たりがおありなんですか？」
クローゼが尋ねた。
「ああ……ちょいとな。とにかく、上の階を目指すぞ。こいつらを操っている真犯人どもがいるはずだ」
「うん、わかった！」
エステルは2階に向かった。

―バレンヌ灯台　2階
「……」
レイスがディンと同様虚ろな瞳で立ち尽くしていた。
「ま、また出たわね～！」
「手加減している余裕はなさそうだね……」
エステルたちはレイスと激突した。

漆黒の牙

「これで終わりだ……」
一撃必殺！

―バレンヌ灯台　3階
「……」
ロッコも同じく……。
「ごめんなさい……。操られているだけの方々に剣を向けたくありませんが……」
クローゼが申し訳なさそうに言った。
「あー、遠慮することはねえ。死なない程度に蹴散らすぞ！」
非情なり、アガット……。

漆黒の牙
「これで終わりだ……」
一撃必殺！

これでレイヴンのメンバーをすべて片付けたエステルたち。エステルたちはすぐさま最上階に向かった。

第3章　白き花のマドリガル（２４）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ次回、事件の黒幕が判明します！

第3章　白き花のマドリガル（25）（前書き）

いよいよ事件の黒幕が判明！予想と当たっていましたか？

第3章　白き花のマドリガル（25）

―バレンヌ灯台　4階

「あれ……この声……」

エステルが突然、足を止めた。

上の階から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

エステルたちは階段から耳を澄ました。

―バレンヌ灯台　最上階

「ふふふ……。君たち、良くやってくれた。これで連中に罪をかぶせれば全ては万事解決というわけだね」

声の正体は秘書ギルバードだった。いつもとは異なり、下卑た笑みを浮かべている。

「我らの仕事ぶり、満足していただけたかな？」

黒装束の男が言った。

「ああ、素晴らしい手際だ。念のため確認しておくが……証拠が残る事はないだろうね？」

「ふふ、安心するがいい。たとえ正気を取り戻しても我々の事は一切覚えていない」

「そこに寝ている灯台守も朝まで目を醒まさないはずだ」

2人の黒装束の男が言った。

「それを聞いて安心したよ。これで、あの院長も孤児院再建を諦めるはず……。放火を含めた一連の事件もあのクズどもの仕業にできる。まさに一石二鳥というものさ」

「喜んでもらって何よりだ」

「しかし、あんな孤児院を潰して何の得があるのやら……。理解に苦しむところではあるな」

「ふふ、まあいい。君たちには特別に教えてやろう。市長は、あの土地一帯を高級別荘地にするつもりなのさ」
「ほう……？」
「風光明媚（ふうこうめいび）な海道沿いでルーアン市からも遠くない。別荘地としてはこれ以上はない立地条件だ。そこに豪勢な屋敷を建てて国内外の富豪に売りつける……。それが市長の計画というわけさ」
「ほう、なかなか豪勢な話だ。しかしどうして孤児院を潰す必要があるのだ？」
「はは、考えてもみたまえ。豪勢さが売りの別荘地の中にあんな薄汚れた建物があってみろ？おまけに、ガキどもの騒ぐ声が近くから聞こえてきた日には……」
「なるほどな……。別荘地としての価値半減か。しかし、危ない橋を渡るくらいなら買い上げた方がいいのではないか？」
「は、あのガンコな女が夫の残した土地を売るものか。だが、連中が不在のスキに焼け落ちた建物を撤去して別荘を建ててしまえばこちらのものさ。フフ、再建費用もないとすれば泣き寝入りするしかないだろうよ……」
秘書ギルバードが笑った。
「それが理由ですか……」
エステルたちが話の一部始終を聞き終えた後、階段を上がった。
「き、君たちは……！？」
秘書ギルバードが慌てた。
「そんな……つまらない事のために……先生たちを傷つけて……思い出の場所を灰にして……。あの子たちの笑顔を奪って……」
クローゼが顔を伏せながら言った。
「ど、どうしてここが判った！？それより……あのクズどもは何をしてたんだ！」
「残念でした～。みんなオネンネしてる最中よ。しっかし、まさか市長が一連の事件の黒幕だったとはね。しかも、どこかで見たような連中も絡んでいるみたいだし……」

エステルがしたり顔で言った。
「ほう……。娘、我々を知っているのか？」
「そこの赤毛の遊撃士とは少しばかり面識はあるが……」
「ハッ、何が面識だ。ちょろちょろ逃げ回った挙句、魔獣までけしかけて来やがって。
だが、これでようやくてめえらの尻尾を掴めるぜ」
アガットが重剣を構えた。
「き、君たち！そいつらは全員皆殺しにしろ！か、顔を見られたからには生かしておくわけにはいかない！」
秘書ギルバードは見苦しい態度で黒装束の男に言った。
「先輩……本当に残念です……」
クローゼが呟いた。
「まあ、クライアントの要望とあらば仕方あるまい」
「相手をしてもらおうか」
「ふん、望むところだっての！」
「たとえ雇われてやったのでもあなた方の罪は消えません……」
「《重剣》の威力……たっぷりと味わいやがれ！」

「そ、そんな馬鹿な……」
秘書ギルバードは愕然とした。
「市長秘書ギルバード。及び、そこの黒坊主ども。遊撃士協会規約に基づき、てめえらを逮捕、拘束する。あきらめて投降しやがれ」
「ううう……」
秘書ギルバードは後ずさりする。
「なかなかやるな……。真っ向からの勝負ではやはり遊撃士は手強い」
「ああ、隊長の忠告通り油断すべきではなかったか」
「隊長……。ひょっとして空賊と交渉していた赤い仮面をかぶった

人ですか？」
ヨシュアが尋ねた。
「その事も知っているとは……」
「さすがギルドの犬ども。なかなか鼻が利くようだな……」
「負けたくせにな～に余裕かましてんのよ！いいから武器を置いてとっとと降伏しなさいよね！」
エステルがたまりかねて叫んだ。
「フ、それはできんな」
黒装束の男は秘書ギルバードに近づき、銃を構えた。
「なっ！？」
秘書ギルバードはなぜと言った顔だ。
「な、なんのつもりよ！？」
エステルが近づこうとしたが、
「動くな。それ以上近寄ればこいつの頭が吹き飛ぶぞ」
「き、君たち！？や、雇い主に向かってどういうつもりだ！？」
秘書ギルバードが黒装束の男たちに言った。
「勘違いするな、若造。我々の雇い主は市長であって貴様ではない」
「市長にしたところで同じこと。利害が一致していたから協力していたに過ぎん……」
「お前がここで死のうが我々は痛くも痒くもない」
「ひ、ひいいいい……。撃つな、撃たないでくれ！」
「コラ、いいかげんにしろや。そんな下手な芝居打って逃げられると思って……」
アガットが近づいたその時、
「ぎゃあああっ……。あ、足が……僕の足がああ！！」
黒装束の男の銃が火を噴いて、秘書ギルバードの足を撃ち抜いた。
「せ、先輩！？」
「チッ……」
「どうやら本気みたいですね」
「これでも納得しないなら……。こちらの灯台守の頭を撃ち抜いて

もいいのだが？」
黒装束の男は灯台守の頭に銃を突きつけた。
「や、やめなさいよ！その人は関係ないでしょ！」
「ならば、しばらくの間離れていてもらおうか……。そうだな……階段の近くまで下がれ」
「フン、仕方ねえな……」
エステルたちは階段の近くまで下がった。
「ふふ、いいだろう」
「それでは、さらばだ」
黒装束の男たちは灯台の修理用の出口から逃げていった。
「待ちなさいってーの！」
「逃がすか、オラあッ！」
エステルたちはすぐさま追いかけた。

「脱出用のワイヤーロープ！？」
「な、なんて用意周到なやつらなの！？」
「……。……秘書野郎とバカどもの面倒は任せたぞ」
「えっ……？」
「俺はこのまま連中を追う！お前らは、今回の事件をジャンに報告して指示を仰げ！」
そう言い残してアガットはワイヤーロープで降りていった。
「きゃっ……」
「な、なんて無茶なヤツ……。ねえ、あたしたちも追おうか？」
「いや……。アガットさんが言ってただろう？秘書や、レイヴンのメンバーを放っておくわけにはいかないよ」
「そうですね……。自業自得とはいえ、足にケガをしていますし……」

「そっか……。悔しいけど、あの連中はアガットに任せるしかなさそうね」

……こうして、エステルたちは奪われた寄付金を無事取り戻すことができた。そして、市長秘書や不良青年たちをマノリアの風車小屋に拘禁した頃には、もうすでに空は明るくなっていた……

―マノリア村

「さてと……。連中はあたしが見張っている。あんたたちはルーアンに行ってジャンに報告してきておくれ」

風車小屋の前でカルナが言った。

カルナがエステルたちに言った。

「それは構わないけど……。カルナさん、もう大丈夫なの？」

「なあに、スキを突かれて眠り薬を嗅がされただけだからね。とっさの事だったからどんな連中だか覚えてないんだが……。まったく面目ないったらないよ」

カルナが自嘲気味に言った。

「無理もないですよ。僕たち４人がかりで何とか撃退できた相手でしたし」

「あの子たちが無事だったのもカルナさんのおかげです。本当にありがとうございました」

「はは……。ま、それだけが幸いだったね。しかし、アガットは１人で連中を追っていったのか……。あいつの腕前は知っているけど、さすがにちょっと心配だねぇ」

「う、うん……。返り討ちにあったりしたら……」

「今はアガットさんを信じよう。どうやらずっと、あの連中を追い

かけていたみたいだからね。手口も知ってるみたいだからそう簡単に遅れは取らないと思う」
「うん……そうだよね。あたしたちはあたしたちの出来ることをするしかないか」
「そうだね、その通りだ。取り戻した寄付金は事件のケリがつくまであたしが預かっておく。今度こそ守りきってみせるから安心して出発しておくれ」
「はい、よろしくお願いします」
「それじゃあ、レッツ・ゴー！」
エステルたちはルーアン市に向かった。

第3章　白き花のマドリガル（25）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ黒幕も判明し、事件の大詰めを迎えたエステルたち。事件解決へとさらに進めることになる。

第3章　白き花のマドリガル（２６）（前書き）

いよいよ第３章もクライマックスに！

第3章　白き花のマドリガル（26）

―メーヴェ海道

「しかし、ダルモア市長が事件の黒幕だったなんて……。親切そうに振る舞っていたのも全部お芝居だったわけね！」

エステルは怒り心頭と言った感じだ。

「あの……。少し気になったんですけど……。今回の件で、ダルモア市長を逮捕できるんでしょうか？」

クローゼが心配そうに尋ねた。

「……え？」

「そうだね……。難しいかもしれない。遊撃士協会は、国家の内政に不干渉という原則があるからね。ルーアン地方の責任者である現職市長を逮捕するのは難しそうだ」

ヨシュアが俯きながら言った。

「ちょっと待ってよ！それっておかしくない！？」

エステルは納得いかずとっさに返した。

「おかしいけどそれが決まりだからね。この決まりがあるからこそギルドはエレボニア帝国にすら支部を持つことができたんだ」

「そ、そうは言っても……」

「とにかくギルドに行ってジャンさんに相談してみよう。良い知恵を貸してくれると思う」

「う、うん……」

「……」

クローゼは俯いたままだ。

「大丈夫、心配することないって！院長先生たちを苦しめたツケはきっちり払ってもらわないとね！」

「はい……そうですね」

一行はルーアン市に再び向かった。

「……あの……」
クローゼが王立学園への三叉路に差し掛かったところで突然後ろから声をかけた。
「クローゼ、どうしたの？」
「あの、エステルさんたちはギルドに行かれるんですよね？私、やる事を思い出したので先に行っててもらえませんか？すぐに追いつきますから……」
「構わないけど……いったん学園に戻るのかい？」
「は、はい……。一応、学園長にも報告しておこうと思いまして」
「そっか……。うん、わかったわ。ギルドで待ってるからね！」
エステルたちは先にギルドへと向かった。
「ごめんなさい……。エステルさん、ヨシュアさん」
クローゼはそう呟いた後、手帳とペンを取り出して文字を書き連ねた。
「うん、これでいいわ。……ジーク！」

―ルーアン市　遊撃士協会
エステルとヨシュアはジャンにこれまでの報告をした。
「……話はわかった。まさか、ダルモア市長が一連の事件の黒幕だったとは。うーん、こいつは大事件だぞ……」
話を聞いたジャンは首をひねった。
「それで、ジャンさん。市長を捕まえる事はできるの？」
「うーん……。残念だが逮捕は難しそうだな。現行犯だったら、市長といえど問答無用で逮捕できるんだけどね」
「やはりそうですか……」
「そ、そんな……。だったらこのまま悪徳市長をのさばらせてもい

いてわけ！？」
「まあ、そう慌てなさんな。遊撃士協会が駄目でも……王国軍なら市長を逮捕できる」
「あ……」
「エステル君、ヨシュア君。これから市長邸に向かって市長に事情聴取を行ってくれ。多少、怒らせてもいいからできるだけ時間を稼いで欲しい」
「なるほど、その間に王国軍に連絡するんですね？」
「ふふふ、その通りさ。導力通信で、レイストン要塞の司令部に応援を要請してみるよ」
「うーん、軍に頼るのはシャクだけど仕方ないか……。よし、クローゼが追いついたらさっそく市長邸に向かって……」
その時、ギルドの扉が開いて、クローゼが戻ってきた。
「はあはあ……。お、お待たせしました……」
クローゼは息を切らしながら言った。
「いいタイミングで来たわね♪」
「学園に寄った割にはずいぶんと早かったね？」
「え、えっと……足には自信がありますから。それで……どういう事になりました？」
「ちょうど市長のところに乗り込むって話をしてたのよ。王国軍の連中が来るまで事情聴取して時間稼ぎをするの」
「あ……そうですか……。……余計なことをしたかしら……」
クローゼは下を向いてポツリと呟いた。
「？？？えっと、クローゼも来るよね？」
「あ、はい。どうかご一緒させてください」
「ジャンさん、連絡の方はどうかよろしくお願いします」
「ああ、任せておいてくれ！」
エステルたちは早速ルーアン市長邸へと向かった。

第3章　白き花のマドリガル（26）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよダルモア市長邸へ殴りこみ開始です。

第3章　白き花のマドリガル（27）（前書き）

どうもお久しぶりです。大学の期末試験で忙しくて手が回りませんでした。実は今も期末試験中ですが……。
次回の第28回で第3章が完結します。どうぞごゆっくりお楽しみください。
今日は第27回、第28回と2つ公開します。第28回は20時公開予定です。

第3章　白き花のマドリガル（27）

―ルーアン市長邸

エステルたちは門の前でルーアン市長邸を見渡した。ルーアン市長邸は今まで見た市長邸の中で最も豪華絢爛で大きかった。

「しっかし、大きな屋敷よね～。やっぱり悪どい事してるからこんな屋敷に住めるのかしら？」

エステルはルーアン市長邸を見上げて言った。

「それは関係ないと思うけど……」

「ダルモア市長は元は大貴族の家柄ですから。この屋敷も、代々の当主に受け継がれたものだと思います」

クローゼが横から説明してくれた。

「そっか……。確かに屋敷に罪はないわよね。まあいいや、何とかあの市長を問い詰めてやらなくちゃ」

エステルたちは市長邸の扉を開いた。

「ルーアン市長邸へようこそ。申しわけありませんが只今、市長は接客中でして……。また来て頂けますでしょうか？」

メイドのフローラがエステルたちに申し訳なさそうに言った。

「ええ～っ！ちょっと待ってよ……」

エステルがそう言ったとき、

「その来客のことなら僕たちも承知しています。デュナン公爵閣下ですよね？」

ヨシュアがすかさず言った。

「え……」

エステルとクローゼが驚いてヨシュアの方を向いた。

「まあ、その通りですわ。……ひょっとして皆様も招待されていら

っしゃるのですか？」
「はい、市長から直々に。お邪魔しても構いませんか？」
「よく見たら遊撃士の方ですわね。そういう事情でしたらどうぞ、お上がりになってください。市長と公爵閣下は、2階の広間にいらっしゃいます」
「わかりました。親切にありがとうございます」
ヨシュアが笑顔で礼を言った。
「……（ポッ）」
フローラが顔を赤らめた。
「そ、そうだわ。お客様が増えるのだったらその分、お茶を用意しないと……。わたくし、これで失礼しますね」
フローラはその場を逃げるように行ってしまった。
「……」
「……」
エステルとクローゼは先程からずっと驚いたままの顔だった。
「あれ、どうしたの？」
「べっつに～」
エステルは不機嫌そうだ。
「え、えっと……。そうだ、よく公爵閣下が来ていると判りましたね？」
「ああ、カマをかけただけだよ。別荘地を、国内外の富豪に売りつける計画だっただろう？デュナン公爵なんか恰好のお得意さんだと思ってね」
ヨシュアが事も無げに言った。やはり、ヨシュアは頭がキレる。
「まあ……」
「もう、悪知恵が働くんだから。市長に招待されてるなんて口から出まかせ言っちゃってさ」
「出まかせじゃないよ。初めてダルモア市長に会った時に言われたじゃないか。レイヴンの連中が迷惑をかけたら遠慮なく市長邸に来てくれってさ」

そういうのを屁理屈と言ったり言わなかったり……。
「あ……そっか」
「ふふ……確かに招待されていますね」
「そういうこと。それじゃあ、遠慮なく大広間に向かうとしようか」
エステルたちは遠慮なく2階の広間に向かった。

―2階　大広間
その中では、ダルモア市長とデュナン公爵が会談をしていた。
「ヒック……。ふむ、なかなかいい話だ。確かにこのルーアンは別荘を持つには絶好の場所だ。しばらく滞在してよく判った」
酒に酔っているデュナン公爵……。どうやら、ダルモア市長は酒を煽らせながら話を進めているようだ。はっきり言って、こういうのは今も昔も変わらない光景だ。
「ふふ、そうでしょうとも。その高級別荘地の中でもとりわけ素晴らしい場所に閣下の別荘を用意いたします。必ずや気に入って頂けるかと……」
その場所は間違いなく孤児院の跡地である。
「ふっふっふ……。おぬし、なかなか話が判るな。いいだろう、ミラに糸目はつけん。次期国王にふさわしい豪華絢爛な別荘を用意するがいい。そうだな、最低でもこの屋敷くらいは欲しいところだ」
デュナン公爵はお得意の放蕩癖を全開にして言った。
「閣下、しばしお待ちを。女王陛下に相談もせずにそのような巨額の出費は……」
執事フィリップが止めようとしたが、
「黙れ、フィリップ！私は次期国王だぞ！このくらいの買い物は当然だ！」
全く耳を貸さないデュナン公爵であった。
「いやはや、公爵閣下ならば判っていただけると思いました。後で

契約書を持ってこさせます。その前に、もう一献……」
ダルモア市長はデュナン公爵のグラスになみなみとワインを注いだ。
そこで、
「こんにちは～。遊撃士協会の者で～す」
エステルたちが大広間に入った。
「君たちは……」
「ヒック……。なんだお前たちは？どこかで見たような顔だが……」
「おお、いつぞやの……」
「こんにちは、執事さん。ちなみに、今日はそこの市長さんにお話があって来ただけだから」
「困るな君たち……。ギルドの遊撃士ならば礼儀くらい弁えているだろう。大切な話をしているのだから出直してきてくれないかな？」
ダルモア市長が不機嫌な顔でエステルたちを見た。
「なにぶん緊急の話なので失礼の段は、ご容赦ください。実は、放火事件の犯人がようやく明らかになったので……」
ヨシュアがそう言うと、ダルモア市長が驚いた。
「その件か……仕方あるまい。公爵閣下、しばし席を外してもよろしいでしょうか？」
「ヒック……。いや、ここで話すといい。どんな話なのか興味がある」
「し、しかし……」
「いいじゃない♪公爵さんもああ言ってるし。聞かれて困る話でもないでしょ？」
「まあ、それはそうだが……。そういえば夕べは、またもやテレサ院長が襲われたそうだな。放火事件と同じ犯人だったのかね？」
「その可能性が高そうです。残念ながら、実行犯の一部は逃亡している最中ですが……」
「そうか……。だが、犯人が判っただけでも良しとしなくてはならんな。ちなみに誰が犯人だったのかね？」
「うーん、それなんだけど。市長さんが考えている通りの人たちだ

と思うわよ」
エステルが半ば笑いながら言った。
「そうか……残念だよ。いつか彼らを更正させる事ができると思っていたのだが……。単なる思い上がりに過ぎなかったようだな……」
ダルモア市長が手で顔を覆った。
「あれ、市長さん。誰のことを言ってるの？」
エステルが不思議そうに尋ねた。
「誰って、君……。《レイヴン》の連中に決まっているだろうが。昨夜から、行方をくらませているとも聞いているしな……」
「残念ですが……彼らは犯人ではありません。むしろ今回に限っては被害者とも言えるでしょうね」
「な、なに！？」
ダルモア市長が驚いて声を上げた。
「今回の事件の犯人、それは……ダルモア市長、あんたよっ！」
エステルが声を張り上げて言った。
「！！！」
「秘書のギルバードさんはすでに現行犯で逮捕しました。あなたが実行犯を雇って孤児院放火と、寄付金強奪を指示したという証言も取れています。この証言に間違いはありませんか？」
「で、でたらめだ！そんな黒装束の連中など知るものか！」
「あれ～、おっかしいな。あたしたち、黒装束だなんて一言も言ってないんだけど～」
「うぐっ……。知らん、私は知らんぞ！全ては秘書が勝手にやったことだ！」
「往生際の悪いオジサンねぇ」
エステルはダルモア市長の姿を見て溜息をついた。
「高級別荘地を作る計画のために孤児院が邪魔だったと聞いています。これでもまだ、容疑を否認しますか？」
ヨシュアが徐々に退路を断っていく。
「しつこいぞ、君たちっ！確かに、ずいぶんと前から別荘地の開発

は計画されている！だが、それはルーアン地方の今後を考えた事業の一環にすぎん！どうして犯罪に手を染めてまで性急に事を運ぶ必要があるのだ！？」

ダルモア市長は切り札を出してきた。

「そ、それは……」

エステルが反論できずに困ったとき、

「……莫大な借金をかかえているからでしょう？」

ナイアルが広間に突然入ってきた。

「ナ、ナイアル！？」

「どうしてここに……」

エステルたちは驚きながら尋ねた。

「いやな、そこの市長さんを取材しようと屋敷まで来たらお前たちが入っていくじゃねえか。こりゃ何かあるなと思ってお邪魔してみたらこの有様だ。いや～。一部始終聞かせてもらったぜ？」

相変わらずのグッドタイミングで登場というわけか。

「な、なんだね君は！？」

「あ、《リベール通信》の記者、ナイアル・バーンズといいます。実はですねぇ。最近のルーアン市の財政について調べさせてもらったんですが……。ダルモア市長、あなた……市の予算を使い込んでますなぁ？」

「……そ、それは……。別荘地造成の資金として……」

ダルモア市長の顔が青ざめた。

「そいつは通りませんぜ。まだ、工事は一切始まってない。ちょいと妙だと思ったんで飛行船公社まで足を伸ばしてあなたの動向を調べたんですよ。すると、あ～ら驚き。１年ほど前に、共和国方面に度々いらっしゃってますねぇ？」

「……た、ただの観光だ……」

「というのは表向きの理由。本当の理由は……あちらの相場に手を出して大火傷を負ったからでしょう？」

「！！！」

「えっと……相場ってなに？」
エステルが周りに尋ねた。
「市場の価格差を利用してミラを稼ぐ売買取引です。ある品が安い時に買いこんで高くなったら売るような……」
クローゼが説明してくれた。
「あ、なーるほど。それで、この市長さんはどれだけ損しちゃったわけ？」
「共和国にいる記者仲間に調べてもらった限りでは……。およそ１億ミラってとこらしい」
「い、い、１億ミラぁ～！！」
「寄付金の１００倍ですか……。確かに、犯罪に手を染めても不思議ではない金額ですね」
エステルたちはその価格に驚愕した。
「ヒック、１億とはな……。私もミラ使いは荒い方だがさすがにおぬしには完敗だぞ」
デュナン公爵のばかげた発言……。
「くっ……」
ダルモア市長は逃げ場を失い、顔を歪めた。
「な～に競ってるんだか」
「まあ、そんなわけで……。莫大な借金を返すために市の予算に手を出したはいいが問題を先送りにしただけだ。どうするものかと思っていたらまさか放火や強盗までして別荘地を作ろうとするとはねえ。何と言いますか……行き当たりばったりですなあ」
ナイアルは哀れみの目でダルモア市長を見た。
「……。ふん、そんな証拠がどこにある。憶測だけで記事にしてみろ。名誉毀損で訴えてやるからな！」
「あらま、開き直った」
「貴様らもそうだ！市長の私を逮捕する権利は遊撃士協会にはないはずだ！今すぐここから出て行くがいい！！」
「む、やっぱりそう来たか」

「さすがに自分の権利はちゃんと判っているみたいだね」
エステルたちの予測通り、現役市長の不逮捕特権が突きつけられた。
王国軍が到着するまでうまく切り抜けないといけない。
「……。市長、1つだけ……お伺いしてもよろしいですか？」
クローゼが口を開いた。
「なんだ君は！？王立学園の生徒のくせにこのような輩と付き合って……。とっとと学園に戻りたまえ！」
「……」
クローゼは凛とした眼差しでダルモア市長をまっすぐ見つめた。
「うっ……」
ダルモア市長が怯んだ
「どうして、ご自分の財産で借金を返さなかったんですか？確かに1億ミラは大金ですが……。ダルモア家の資産があれば何とか返せる額だと思います。例えば、この屋敷などは1億ミラで売れそうですよね？」
「ば、馬鹿なことを……！この屋敷は、先祖代々から受け継いだダルモア家の誇りだ！どうして売り払う事ができよう！」
「あの孤児院だって同じことです。多くの想いが育まれてきた思い出深く愛おしい場所……。その想いを壊す権利なんて誰だって持っていないのに……。どうして貴方は……あんなことが出来たのですか？」
「あ、あのみすぼらしい建物とこの屋敷を一緒にするなああ！！」
ダルモア市長が吼えた。
「あなたは結局自分自身が可愛いだけ……。ルーアン市長としての自分とダルモア家の当主としての自分を愛しているだけに過ぎません。可哀想な人……」
クローゼは哀れみと軽蔑の目でダルモア市長を見た。
「……。……ふふ……ふふふふ……。よくぞ言った、小娘が……。……こうなったら後のことなど知ったこ

とか！」
怒りに身を震わせたダルモア市長が席を立ち、壁にあったスイッチを押した。そして扉が開いた。どうやら隠し扉だったようだ。
「ファンゴ、ブロンコ！エサの時間だ、出てこい！」
ダルモア市長が叫ぶと、扉の向こうから足音が聞こえてきた。
「な、なんなの……」
「獣の匂い……！」
そして、巨大な魔獣が2匹現れた。
「な、なんだああッ！？」
「ま、魔獣うううう！？うーん……ブクブクブク……」
「こ、公爵閣下！？」
デュアン公爵は気を失ってしまった。執事フィリップは慌ててデュナン公爵のもとへと駆け寄った。
「信じられません……。魔獣を飼ってるなんて……」
「くくく……。お前たちを皆殺しにすれば事実を知るものはいなくなる……。こいつらが喰い残した分は川に流してやるから安心したまえ。ひゃーーーーーーはっはっはっ！」
ダルモア市長が狂ったように笑い叫んだ。
「く、狂ってやがる……」
ナイアルが後ずさりした。
「ぐるるるるぅ……」
「……うるる……」
ブロンコとファンゴが食台のうえに飛び乗った。
「こ、こんな屋敷の中で魔獣と戦うことになるなんて……」
「でも、これで現行犯として市長を逮捕することができる」
「あなたたちに恨みはないけれど……。人を傷付けるつもりならば容赦はしません！」
ファンゴとブロンコが飛び掛ってきた！

何とかファンゴとブロンコを倒したエステルたち。エステルたちはダルモア市長に詰め寄った。
「ば、馬鹿な……。私の可愛い番犬たちが……。貴様ら、よくもやってくれたな！」
あんな化け物を可愛い番犬と言えるセンスが理解できないな。
「はあはあ……。それはこっちの台詞だっての！」
「遊撃士協会規約に基づきあなたを現行犯で逮捕します。投降した方が身のためですよ」
「ふふふふ……。こうなっては仕方ない……奥の手を使わせてもらうぞ！」
ダルモア市長が懐からなにやら杖のようなものを取り出した。
「え！？」
「杖……？」
エステルたちが取り押さえようとした時、
「時よ、凍えよ！」
ダルモア市長がそう叫ぶと、エステルたちが何かに縛られたように動きが止まってしまった。
「か、身体が動かない……！」
「こ、これは……導力魔法（オーバルアーツ）なのか？」
「ち、違います……。これは恐らく《古代遺物（アーティファクト）》の力！」
「なんだあ、そりゃあ！？」
ナイアルももちろん動けない・
「ほう、クローゼ君は博識だな。これぞ、わがダルモア家に伝わる家宝、アーティファクト《封じの宝杖》……。一定範囲内にいる者の動きを完全に停止する力があるのだよ」
「な、なんてデタラメな力……」
「こんな強力なアーティファクトが教会に回収されずに残っていたのか……」
「フフ、さすがは古代文明の叡智の結晶……。戦術オーブメントご

ときとは比較にならぬ力を備えている。もっとも、1つの機能しか持っていないのが難点だがね」
ダルモア市長が銃を取り出し、エステルたちに向けた。
「仕方ないから、君たちの始末は私自らの手で行ってあげよう。ククク……光栄に思うのだな」
ダルモア市長がエステルたちに近寄った。
「まずはそうだな……生意気な小娘から始めて……」
「むっ、何が生意気よ！」
この期に及んでそう言えるエステルはすごい。
「最後に賢しらな小娘の息の根を止めるとしようか？」
「……」
クローゼは動じない。
「ククク……さっきの威勢はどうした？命ごいでもすれば助けてやらんでもないぞ？」
「だ、誰があんたなんかに……」
「汚い手で……るな……」
「なに？」
「汚い手でエステルに触るな……。もしも……毛ほどでも傷付けてみろ……。ありとあらゆる方法を使ってあんたを八つ裂きにしてやる……」
ヨシュアは冷酷な目つきでダルモア市長を睨み、言い放った。
「な……」
ダルモア市長が気圧されて、後ずさった。
「ヨ、ヨシュア……」
「ヨシュアさん……」
「ゆ、指一本も動かせぬくせに意気がりおってからに……。いいだろう！貴様の始末を先にしてやる！」
ダルモア市長がヨシュアに銃を向けた。
「や、止めなさいよっ！ヨシュアを傷付けたら絶対に許さないんだからねっ！」

エステルは動きたくても動けない。
「……」
ヨシュアはダルモア市長を先程の目つきのまま変わらず睨んでいる。
「ヨシュアさん！」
「死ね」
クローゼが叫んだ。
ダルモア市長が引き金に指をかけた。

第3章　白き花のマドリガル（27）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ヨシュアに向けられた銃。動きたくても身体を動かせない中で、エステルたちはどうなる！？

第3章　白き花のマドリガル（２８）（前書き）

今回で、第3章「白き花のマドリガル」が終了します。お楽しみいただけましたでしょうか？感想・評価等お待ちしてます。

第3章　白き花のマドリガル（２８）

「だめえええええええっ！！！！」
エステルが叫んだその時、エステルの胸元から黒い光が放たれた。
「な……！」
ダルモア市長がその場から後退した。
「この光は……」
「くそ……。この手が動けばカメラを……」
記者人生一本道をひた走るナイアルは客観的にしか状況を見ていない。
エステルの胸元の黒い光が波動のように広がり、同時に身体が動くようになった。
「な、なぬうううううっ！？」
「身体の自由が……戻った？」
「エステル……今の黒い光は？」
「う、うん……。父さん宛に届いたあの黒いオーブメント……」
エステルが半球状の黒いオーブメントを取り出した。
「これが光ったみたいだけど……」
「そ、そんな馬鹿な……。家宝のアーティファクトがこんなことで壊れるものかああ！」
「どちらにせよ……あなたの切り札はもうない」
ヨシュアが武器を構える。
「現実を見た方がいいんじゃありませんか？」
「そ、そうよ！」
エステルも武器を構える。
「よくも悪趣味なやり方でいたぶってくれたわね～っ！」
「最低です……」
「うううううううう……。誰が捕まるものかっ！」
ダルモア市長が隠し扉から逃げて行った。

「ああっ！」
「追いかけるよ！」
「はい！」
エステルたちはダルモア市長の後を追いかけた。
「ああっ、待ちやがれ！こ、こんなスクープ、逃してたまるかってんだ！」
ナイアルも追いかけていった。
「やれやれ……寿命が縮みましたぞ……。閣下、大丈夫ですか、閣下……」
執事フィリップがデュナン公爵の肩をたたいた。寿命が縮むって言ったが、もういい年じゃないか……。
「うーん……魔獣が、魔獣がああ……」

梯子（はしご）を降りて、抜けたところで見たものはダルモア市長がヨットで逃走しているところだった。
「あ、あれは……」
「ダルモア市長のヨットです！」
「ま、待ちなさいっての！」
「このボートで追いかけよう！さあ、2人とも乗って！」
ヨシュアは素早くもう1隻あったボートに乗り込んだ。
「オッケー！」
「はい！」
エステルたちも素早く乗り込み、ヨシュアはエンジン全開で追いかけた。
「こらー！俺も乗せやがれってんだ！」
1人残されたナイアル……。

エステルたちのボートとダルモア市長のヨットとの距離は少しずつ縮まっていった。
「よーし、近づいてきた！」
「こちらの方が小型な分、船体は軽いみたいですね」
「くっ……しつこいヤツらだ……。これでも喰らえっ！」
ダルモア市長はエステルたちに向けて銃を撃った。
「とりゃあっ！」
エステルは棒を回転させ、すべての弾を弾いた。そして、ピースサイン。
「な、なにいい！？」
「ふふん、遊撃士を舐めんじゃないわよっ！ヨシュア、そのまま右側につけちゃって！」
「了解。……あれっ？」
ヨシュアが船体をつけようとしたその時、ダルモア市長のヨットが加速した。
「い、いきなり速くなった！？」
「これは……沖合いを流れる風です！」
「まずいな、こうなったらヨットの方が断然有利だ……」
「あ、あんですってー！？」
「わはは、女神（エイドス）は私の方に微笑みかけてくれたようだな！それではさらばだ、小娘ども！」
ダルモア市長はそのまま逃げて行った。
「冗談じゃないわよ！あと一歩のところで～っ！」
「このままだと高飛びされかねない……。なにか手段は……」
ヨシュアが考えていたその時、上空からエンジン音が聞こえた。
「な、なに……？」
「……来た」
そのままエステルたちのボートの上を大きな飛行船が飛んでいった。

「フン、逃げたはいいがこれからどうしたものか……。やはり、軍の手が回る前に帝国に高飛びするしかないか。なあに、しばらく我慢すれば『彼』が何とかしてくれる……」

ダルモア市長が後ろを見たとき、大きな飛行船が向かってきた。

「な、な、なあああああっ!?」

そのままその飛行船はダルモア市長のヨットの前に着水した。

「な、な、な……。うわあああっ!な、なんだこの飛行船は!王国軍の……いや、この紋章は……」

「……王室親衛隊所属、高速巡洋艦（アルセイユ）。それがこの艦の名前だ」

飛行船の甲板の上には女性仕官とその部下らしき隊士がいた。

「やれやれ……何とか間に合ったみたいだな」

女性仕官が息をついた。

「蒼と白の軍服……女王陛下の親衛隊だと!?」

「その通り。自分は中隊長を務めるユリア・シュバルツという。ルーアン市長、モーリス・ダルモア殿。放火、強盗、横領など諸々の容疑で貴殿を逮捕する」

「これは夢だ……夢に決まっている……。うーん、ブクブクブク……」

ダルモア市長はヨットの上に崩れ落ちた。

そのすぐあとに、エステルたちのヨットも到着した。

「こ、これって……どうなっちゃってるの?」

「ジャンさんが連絡してくれた王国軍の応援だと思うけど……。それにしては来るのが早すぎるような……」

「……ふふ……」

クローゼはその後ろで笑っていた。

「やあ、遊撃士の諸君。諸君の協力を感謝する。後のことは我々に任せてほしい」

―ルーアン発着場

ダルモア市長の身柄が拘束された後に、エステルたちはルーアン発着場に向かった。

「先程、目を覚ました市長を問い詰めたのだが……。どうやら記憶が曖昧になっているようだな。放火や強盗の犯行についてもぼんやりとしか覚えてないらしい」

ユリア中尉がエステルたちに言った。

「そ、そうなんだ……。なんか空賊の首領みたい……」

「あの黒装束たちといい何か関係があるかもしれないね」

「まあ、記憶が曖昧と言っても起こした罪は明白だからな……。秘書共々、厳重な取り調べが待っているのは言うまでもない。何か判明したら遊撃士協会にもお知らせしよう」

「助かります」

「ところで中尉さん。1つお願いがあるんですがね」

ちゃっかりいるナイアル。

「なにかな、記者殿?」

「できれば俺も、そちらの船に乗せてくれませんかねぇ?何と言っても、ツァイス中央工房が世に送り出す最新鋭の飛行船だ。ぜひとも取材させて欲しいんですよ」

「申しわけないがお断りさせていただこう。この《アルセイユ》は先日、艤装(ぎそう)が終わったばかりで試験飛行を行っている段階なのだ。正式なお披露目が行われるまでどうか報道は控えていただきたい」

「そ、そこを何とか!逮捕された市長や秘書からもコメントを貰いたいところだし……」

「心配せずとも、判明した事実は王都の通信社にもお伝えしよう。そのあたりで勘弁して欲しい」

「はあ~、仕方ないか。よし、こうしちゃいられん!記事を書いたら大急ぎで王都に戻るしかっ!そんじゃあ、失礼するぜ!」

ナイアルは走って戻っていった。
「相変わらず逞(たくま)しいっていうかめげないっていうか……」
「はは……でもナイアルさんらしいね」
「《リベール通信》の発行部数は最近うなぎ上りだと聞いている。彼には、プロパガンダに囚われない記事を書いて欲しいものだが……」
「政治的宣伝(プロパガンダ)……？」
「いや……」
ユリア中尉が顔を伏せた。
「お手柄だったようだね。シュバルツ中尉」
そこに現れたのは、リシャール大佐とカノーネ大尉だった。
「こ、これは大佐殿……！」
「ああっ！」
「リシャール大佐……」
「ほう、いつぞやの……。なるほど、ギルドの連絡にあった新人遊撃士とは君たちのことだったか」
「え……。ジャンさんが連絡したのってリシャール大佐のことだったの？」
「ああ、王国軍の司令部があるレイストン要塞に連絡が入ってね。慌てて駆けつけてみればすでに事が終わっていたとはな。見事な手際だ、シュバルツ中尉」
「は、恐縮です……」
「フフ、でも不思議ですこと。王都にいる親衛隊の方々がこんな所に来ているなんて……。どうやら、我々情報部も知らない独自のルートをお持ちのようね？」
カノーネ大尉がユリア中尉に詰め寄った。
「お、お戯れを……」
「……」
「はは、カノーネ大尉。あまり絡むものではないな。ただ、陛下をお守りする親衛隊が他の仕事をするのも感心はしない。後の調査は

我々が引き継ぐからレイストン要塞に向かいたまえ。そこで、市長たちの身柄を預からせてもらうとしよう」
「は……了解しました」
「我々はこれで失礼するよ。親衛隊と遊撃士の諸君。それから制服のお嬢さん……」
「……」
「……機会があったらまた会うこともあるだろう。それでは、さらばだ」
「フフ、ごきげんよう」
リシャール大佐とカノーネ大尉はルーアン発着場を後にした。
「気のせいかもしれないけど……。今、リシャール大佐、クローゼの方を見ていなかった？」
エステルがクローゼに尋ねた。
「そ、そうでしょうか？」
「……。確かに、こういう場所に君みたいな学生がいるのはあまりないことだろうからね。不思議に思われたのも無理ないよ」
「あ、あはは……本当にそうですよね。ちょっと反省です……」
「うーん、そんな雰囲気じゃなかったような……」
「……自分に言わせれば君たちだって充分驚きの対象だ。いくら遊撃士とはいえその若さでここまで活躍するとは……。できれば親衛隊にスカウトしたいくらいさ」
「や、やだな～。そんなにおだてないで下さいよ。今度の事件だって色んな人に助けてもらったし」
「そう謙遜するものではない。まだ準遊撃士のようだが正遊撃士は目指さないのかな？」
「あ、今ちょうどそれを目指して修行中なんです」
「女王生誕祭が始まるまで一通り国内を回ってみるつもりです」
「そうか……自分も応援しているよ」
その時、アルセイユから親衛隊員の声がした。

「ユリア隊長！出航の準備が整いました」
「ああ、わかった。エステル君、ヨシュア君。……それとクローゼ君も。そろそろ我々は失礼する。機会があったらまた会おう」
「あ、はい！」
「その時は宜しくお願いします」
「……ありがとうございました」

「隊士一同、敬礼！」
ユリア中尉がそう言うと、ファンファーレを鳴らしながら、親衛隊士が敬礼した。
「わわっ……」
「王室親衛隊所属艦、《アルセイユ》――――離陸（テイクオフ）！」

「は～っ、敬礼しながらファンファーレを鳴らすなんて……。なんか圧倒されっぱなしだわ」
「そうだね……。船も最新式のものみたいだし。さすが、女王陛下の安全を守るエリーと部隊だね」
「ふふ、そうですね」
「しっかし、ユリア中尉ってカッコイイ女の人だったよね。何だか、クローゼが演じた蒼騎士オスカーみたいな感じ？」
「私もそう思いました。うふふ、面白い偶然ですよね」

―遊撃士協会　ルーアン支部
「は～、まさか王都の親衛隊がやって来るとはね。しかも噂の最新

鋭艦、《アルセイユ》のお出ましとは。僕も受付の仕事が無かったら見に行きたかったんだけどなあ」
ジャンが残念そうに言った。
「ジャンさんって意外にミーハーだったのね。でも、ジャンさんが連絡したのはリシャール大佐だったんでしょ？」
「ああ、レイストン要塞に彼がいたもんだからね。どうして親衛隊が駆けつけたのかは判らないが……。まあ、軍の連絡系統にも色々あるってことなんだろうね」
「通常の正規軍に加えて、国境師団、情報部、王室親衛隊……。確かに複雑そうですよね」
「でも、今回の事件は事後処理が大変そうですね……。今後、ルーアン地方の行政はどうなってしまうんでしょうか？」
「あ。そうか……。市長が逮捕されちゃったし」
「とりあえずは王都から市長代理が派遣されると思う。市長の有罪が確定すればいずれ選挙が行われるだろうね。そうそう、孤児院については正式な補償が行われると思うよ」
「そうですか……良かった。これもみんなエステルさんたちのおかげです。本当に……ありがとうございます」
クローゼが胸をなでおろした。
「や、やだな。水くさいこと言わないでよ」
「そうだね。当然のことをしただけさ。それに僕たちだけじゃなくてアガットさんの協力も大きかったしね」
そこで、エステルは忘れていたことに気づいた。
「そ、そういえば！ね、ねえ、ジャンさん！アガットから何か連絡はあった！？」
「ああ、それなんだが……。残念ながら、黒装束の連中は取り逃がしてしまったらしい。他にも仲間がいたみたいでね。待ち伏せの襲撃にあったそうだよ」
「ええっ！？」
「大丈夫だったんですか？」

「ああ、何とか切り抜けたらしい。そのまま連中を追ってツァイス地方に向かうそうだ。今頃は、ルーアン地方から離れている頃じゃないかな」
「な、なんか……ハードなことやってるわね」
「まあ、慣れっこだろうよ。しばらく前から、アガットはあの連中を追いかけているんだ。どうやら、君たちのお父さんに頼まれた仕事らしいけどね」
「と、父さんが!?」
「どうしてそういう事に?」
「ふふ、《レイヴン》にいたアガットを更正させたのは他ならぬカシウスさんだからね。何だかんだ言ってあの人には頭が上がらないのさ」
「ええっ、そうだったの!?」
「アガットはああいう性格だから感謝しないで突っ張っているけどね」
「なるほど……。僕たちに対する厳しい態度もそれが原因かもしれないですね」
「すごくそれっぽいわね～。って、やっぱり父さんのとばっちりじゃなのよっ!」
「くすくす……。あ、エステルさんたちのお父様といえば確か……」
「え、どうしたの?」
「あの、市長邸で黒い光が溢れた時に……」
「あ、それがあったか!」
エステルが胸元から黒いオーブメントを取り出した。
「色々ありすぎて、つい忘れちゃってたけど……。コレ、いったい何なのかしら……」
「それのおかげで助かったけど、少し不気味な感じはするね……」
「珍しい色のオーブメントだね。どういった由来の物なんだい?」
「それが……」
エステルはカシウスの元に届けられた小包の中にメモと一緒に入っ

ていたことを説明した。
「まあ……」
「ふーむ、R博士にKか……。ひょっとしたら……」
ジャンがあごに手をつき、唸った。
「え、知ってるの!?」
「いや、心当たりというほどじゃないんだが……。それを調べたければツァイス地方に向かった方がいいかもしれない」
「ツァイス地方?」
エステルは幾度となく耳にした言葉だが知らないらしい。
「知っての通り、ツァイス市はオーブメント生産で有名な場所だ。《工房都市》とも言われており、博士の肩書を持っている人も多い」
「なるほど……。たとえ博士が見つからなくても、その黒いオーブメントの正体が判るかも知れませんね」
「うーん、でもあたしたちここで修行する必要もあるし」
エステルが肩を落とした。
「ふふ、こんな事もあろうかとちゃあんと用意しておいたのさ」
ジャンは正遊撃士資格の推薦状をエステルたちに渡した。
「ええっ……!」
「いいんですか?」
エステルとヨシュアは驚きながら受け取った。
「はは、空賊事件の時と同じさ。これだけの大事件を解決されちゃ渡さないわけにはいかないからね。査定も報酬も用意してあるよ」
「うわ~……学園祭の出演料までである……」
「何から何まで済みません」
「なあに、正当な報酬さ。僕も、君たちには一刻も早く正遊撃士になってもらいたい。その方が、君たちの力をもっと活かせると思うからね」
「えへへ……。ありがとう、ジャンさん」
「期待に応えられるよう頑張ります」
「良かったですね。エステルさん、ヨシュアさん。……ちょっと寂

しくなってしまいますけど……」
「クローゼ……」
「……そうだね。僕たちも名残惜しいよ」
「あは……。わがまま言ってごめんなさい。出発の日が決まったら私にも教えて頂けませんか？エア＝レッテンの関所まで見送らせていただきますから……」

第3章　白き花のマドリガル（２８）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回、第４章「黒のオーブメント」が始まります。乞うご期待！開幕は明日８日の午後１２時です。

第1回　空の軌跡人気キャラクター投票のご案内

第3章までに色々なキャラクターが登場しましたが、第3章終了と同時に人気キャラクターを選定したいと思います。

・エステル・ブライト
・ヨシュア・ブライト
・カシウス・ブライト
・シェラザード・ハーヴェイ
・ジョゼット・カプア
・ナイアル・バーンズ
・メイベル市長
・リラ
・オリビエ・レンハイム
・アガット・クロスナー
・モルガン将軍
・リシャール大佐
・クローゼ・リンツ
・ユリア・シュバルツ

などなど数々のキャラクターが登場しました。
その他にも、多くのキャラクターが小説内に登場しています。
感想ページに、小説に登場したキャラクターの中で皆様のお好きなキャラクターを選んで投稿してください。
その際に、どの当たりが良いかなど一言お願いします。
集計できるほどの数が集まり次第、集計、発表したいと思います。
ご協力お願いします。

第４章　黒のオーブメント（１）（前書き）

いよいよ第４章が開幕！五大都市一周も半分を過ぎました。物語はさらに加速します。

第4章　黒のオーブメント（1）

―深夜　街道

「はあはあ……。な、何てしつこいヤツだ！」

バレンヌ灯台から逃げていた黒装束の男2人が未だ逃走していた。

「あんなバカでかい大剣を担ぎながらどうして付いて来られる！？」

しかし、アガットの猛追に黒装束の男たちは疲れていた。

「ハッ、鍛え方が違うんだよ！らあああああああっ！！！」

アガットは黒装束の男たちにめがけて重剣を振り下ろした。

「クッ……これ以上は振り切れんか……」

「仕方ない、迎撃するぞ！」

「ようやくその気になってくれたみたいだな。てめえらとの鬼ゴッコには飽き飽きしてたから嬉しいぜ」

「しつこく追ってこなければ死なずに済んだものを……」

「馬鹿なヤツだ……。2対1で勝てると思うのか？」

「ははッ。勝てるに決まってんだろ」

アガットは余裕の笑みをもらした。

「なに……！？」

「ケンカは気合だ。気迫で負けたら終わりなんだよ。尻尾巻いて逃げ出した時点でてめえらは負け犬決定ってわけさ」

「ほ、ほざけ！ギルドの犬がッ！」

「2人がかりでなぶり殺しにしてやる！」

黒装束の男たちがアガットに飛び掛ったが、アガットは一太刀で切り捨てた。

「ぐあああっ……！」

「クッ……ここで捕まるわけには……」

「フン、とっとと降伏して洗いざらい白状して貰おうか。てめえらが何者で何を企んでるのかをな……」

アガットが問い詰めようとした時、背後から青年の声がした。

「――それは困るな」
「なッ!?」
その青年は、エステルたちがヴァレリア湖のほとりで見た仮面をかぶった男だった。
「い、いつのまに……」
アガットはその気配に全く気がつかなかったようだ。
「た、隊長!」
「来てくださったんですか!」
「仕方のない連中だな。定時連絡に遅れた上にこんな所で遊んでいるとは」
仮面の隊長がうんざりした声で言った。
「も、申しわけありません」
「色々と邪魔が入りまして……」
「なるほどな……。てめえが親玉ってわけか?」
「フフ、自分はただの現場責任者にすぎない……。部下たちの非礼は詫びよう。ここは見逃してもらえないか?」
「はあ?今……なんて言った?」
聞き逃したのではなく、なぜそのようなことが言えるという意味だろう。
「見逃してもらえないかと言った。こちらとしても、遊撃士協会と事を構えるつもりはないのでね」
「ア、アホか!そんな都合のいい話があるか!」
「やれやれ……。悪くない話だと思うのだが。……お前たち。ここは自分が食い止める。早く合流地点に向かうがいい」
「は、はい!」
「感謝します、隊長!」
黒装束の男たちはすばやく立ち上がり逃げていった。
「逃がすか、おらああッ!」
アガットが追いかけようとしたが、
「……」

仮面の隊長が立ちふさがった。こちらの獲物も剣だった。
「てめえ……。フン、まあいい。だったら獲物を変えるまでだ。てめえが持ってる情報の方がはるかに重要そうだからな……」
「フフ……。そう簡単に狩れるかな？」
「上等ッ！」
アガットが間合いを一気に詰め、仮面の隊長に剣を振り下ろした。
しかし、仮面の隊長も鮮やかな身のこなしでその攻撃をすべて避けた。
「フン、やるじゃねえか」
「抑えきれぬ激情をもって重き鉄塊を振るうか……。お前は……自分と似た所があるようだ」
「……。……なんだと……？」
「己（おのれ）の無力さに打ちのめされたことがある……。そんな瞳（め）をしているぞ」
「……。クックックッ、いいねえ。どこの誰かは知らねえが、なかなか気に入ったぜ……」
「自分もお前のような不器用な男は嫌いではない。お互い、このあたりで手打ちというのはどうかな？」
「ふざけんなあああッ！黙って聞いてりゃあ、知った風な事ほざきやがって！徹底的にブチのめしてやらあッ！」
「フッ……」
互いに剣を構え、この一撃にこめた。
「おおおおおっ！」
「はあああああっ！」
そして両者交錯した。
「ぐっ……」
膝をついたのは仮面の隊長だった。
「へっ……。口ほどにもないヤツだぜ。ギルドに運んで徹底的に締め上げてやるとするか……」
アガットが仮面の隊長に近づいたとき、仮面の隊長の姿が薄くなっ

た。
「な、なんだ……」
そして仮面の隊長の姿が完全に消えてしまった。
「こ、これは……分け身の戦技(クラフト)ッ！？」
暗い木々の狭間から微(かす)かな気配が漂(ただよ)ってきた。
「フフフ……。悪くない一撃だったがいまだ迷いがあるようだな。その迷いが太刀筋を狂わせる」
仮面の隊長の声だった。
「な、なにッ！？」
「修羅と化すならば全てを捨てる覚悟が必要だ。人として生きたいのなら……怒りと悲しみは忘れるがいい。それでは、さらばだ……」
木々の間に漂っていた気配はかき消すように消えてしまった。
「……。……忘れろだと……。そんな事……出来るわけねえだろうが……。うおおおおおッ！！！」
1人アガットの声だけが街道にこだました。

第４章　黒のオーブメント（１）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

次回はクローゼとの別れと、ツァイス地方に入る話です。更新は今日８日の２０時です。

第4章　黒のオーブメント（2）

―朝　ルーアン市

ラングランド大橋の上でクローゼを待つエステルとヨシュア。

「……やっぱりまだ来てないみたいね。早く来すぎちゃったかな？」

「そうだね、酒場で時間を潰そうか？」

「ううん、風も気持ちいいし、ここで待ってることにしましょ。川の流れを見ているだけでも、なんか飽きない気がするし」

意外にも風流なエステルであった。

「うん、そうしようか」

エステルとヨシュアは橋の手すりに手をかけ、話し合う。

「しっかし、ルーアンもようやく落ち着きを取り戻した感じよね。ダルモア市長が逮捕されて一時は大騒ぎになったけど……」

「現職の市長の逮捕なんて前代未聞の出来事だからね。ロレントでいえばクラウス市長が捕まったのと同じことなわけだし」

「うわ、それは確かにショックすぎるかも……。でも、そう考えてみるとルーアン市の人は冷静よね。驚いてはいたみたいだけどショックは受けてないみたい」

「まあ、ルーアン市は伝統的にダルモア家の当主が選ばれていたみたいだから。市長本人を慕っていたわけじゃなかったのかもしれないね」

「みんなから好かれているクラウス市長とは違うわけか。うーん、自業自得とはいえ、ちょっと哀れな気がするかも」

その時、橋の上から鳥の声がした。

「来たみたいだよ」

ヨシュアが空を見た。

「え……」

エステルが上を見るとジークが橋の手すりに留まった。

「あ、ジーク！」

「ピュイ」
「エステルさん、ヨシュアさん！」
そして、クローゼは走りながらエステルのところまで来た。
「はあはあ……。ごめんなさい、遅れてしまって」
「いや、僕たちもちょうど来たところだよ」
「も、もしかしてわざわざ走って来たの？そんなに慌てることないのに」
「いえ、お見送りをするのに遅れるわけにはいきませんから。連絡を下さってどうもありがとうございました」
「も～、クローゼってば。お礼を言うのはこっちだよ。ジークも……見送りに来てくれてありがと？」
「ピューイ☆」
「はは、それじゃあ……さっそく出発するとしようか？」
「うん、そうね。ツァイス地方に行くには南口を出ればいいんだっけ？」
「はい、南の街道の先にツァイス方面の関所があります。《エア＝レッテン》といって滝が見えることで有名なんですよ」
「へ～っ、ちょっと楽しみかも。それじゃあ、レッツ・ゴー！」
「ピューイ！」
エステルたちはツァイス地方に向けて出発した。

―エア＝レッテン
そこは滝が轟々（ごうごう）と流れていて、圧巻としか言えないほど素晴らしい光景であった。
「へ～っ……。すごく雰囲気の良い場所ね。関所というより観光地って感じかも」
「実際、滝目当てに訪れる観光客も多いそうですよ」
「あ、やっぱり？うーん、ルーアン地方ってほんと綺麗な場所が多

いよね。あの公爵じゃないけど住んでみたい気はするかな」
「ええ、そうですね。でも、ロレントの街も落ち着いていて素敵だと思いますよ」
「あ、クローゼってロレントに来たことあるんだ？」
エステルが敏感に反応した。
「はい、五大都市には一通り行った事があります。そうだ、この先にあるツァイス市なんですけど……。とても個性的な街でビックリすると思いますよ」
「ふーん、そうなんだ？うーん……楽しみになってきたわね～」
「よし、それじゃあ関所で通行手続をしようか？」
「うん、オッケー」
エステルたちは関所へと入った。

「こんにちは。どのようなご用件ですか？」
兵士クロンが尋ねた。
「ツァイス地方に入るための通行手続をお願いできますか？」
「ああ、それでしたらこちらのカウンターでどうぞ。ただし、通行手続をしてしまうと関所から出られなくなってしまいますが……。それでも構いませんか？」
「うん。お願いしちゃうわ」
「では、こちらの書類にサインをお願いします」
兵士クロンはエステルたちに通行手続の書類を渡した。
エステルとヨシュアは書類にサインした。
「はい、これでＯＫです。そちらのお嬢さんは通行手続をされないんですか？」
「あ、私はこちらの方々のお見送りに来ただけなんです」
「ああ、そういう事ですか。《カルデア隧道（すいどう）》の手前までなら見送りをなさって結構ですよ」

「ありがとうございます」
クローゼは礼を言った。
「《カルデア隧道(すいどう)》って、ナニ？」
エステルは兵士クロンに尋ねた。
「この関所からツァイス市までを結んでいる街道ですよ。カルデア丘陵を貫いている長い地下のトンネル道なんです」
「へ～っ、そうなんだ」
「トンネルの街道か……。さすがに通るのは初めてだね」
エステルとヨシュアは感嘆した。

関所の2階に上がると、滝が目の前に広がった。
「うわ～、壮観！ふーん、滝って言っても自然の川じゃなくて水路から流れ落ちてるんだ……」
「たしか《ローツェ水道》っていう名前だったかな？中世に造られた水道橋だね」
「はい、ヴァレリア湖から直接水を運んでいるんですよ」
「うーん、オーブメントも無いのによく造れたわよね。それで、あっちの方が……」
エステルが目を向けた先には薄暗いトンネルがあった。
「……あれがトンネル道の入口だね」
「うん……。……そろそろお別れね」
「はい……。あのエステルさんたちはこのまま王国を一周するんですよね？ひょっとしたら王都でまたお会いできるかもしれません」
「え、そうなの！？」
「私、女王生誕祭の頃には王都に戻るつもりなんです。親戚の集まりのようなものに出席しなくてはならないので……」
「女王生誕祭というとたしか一ヶ月くらい先だね。確かに、その頃には王都に行ってるかもしれない」

「あ、じゃあさ……。親戚の用事が終わったら王都のギルドに連絡してよ？そうすれば会えると思うから」
「はい、必ず連絡しますね。エステルさん、ヨシュアさん。本当に、ありがとうございました。お2人がしてくださったこと、私、絶対に忘れませんから……」
「や、やだな～。水くさいってば～！」
照れるエステル。
「僕たちも君には色々と世話になったしね。おあいこって事にしようよ」
「とんでもありません……。……。あの時……市長と対決した時……。私は偉そうなことを言いました。『立場に囚われている』、『自分の身が可愛いだけ』って。でも……それは私も同じだったんです」
「えっ……？」
「私は逆に、自分の立場から逃げようとばかりしていました。孤児院にしても学園にしてもどこか逃げ場にしていたんです。でも……そんな私にエステルさんたちは教えてくれました。どんな時でも前向きに進んでいく決意を……。大切なものを守る強さを……。ありがとう、おかげで私も少しだけ勇気が出せそうです」
「よ、よく判んないけど……。お役に立てたんだったらあたしとしても嬉しいかな」
エステルはクローゼの手を握った。
「あ……」
「えへへ……元気でね、クローゼ。今度は王都で会いましょ！」
「はい……必ず」
「ピュイピュイ」
「あは、ジークも一緒に王都で会えるといいわね？」
「ピュイ☆」
「……って、あんた。本当に王都に来るつもり？このあたりに住んでるんじゃないの？」

「ピューイ？」
ジークは首をかしげた。
「ふふ、ジークは特別ですから。きっと会えると思いますよ」
「うーん……。冗談で言ったんだけど」
「はは、ジークには最後まで驚かされっぱなしだね。それじゃあ……そろそろ行くとしようか？」
「ん……そうね」
「エステルさん、ヨシュアさん。修行の旅、頑張ってください。それから、お父様の行方が判ることをお祈りしています」
「ピューイ☆」
「うん……ありがと！」
「君たちも元気で！」
エステルたちはクローゼたちに別れを言い、《カルデア隧道（すいどう）》へと入った。
「……」
クローゼはエステルたちの背中を名残惜しそうに見続けた。
「ピュイ」
「うん、そうね……。また会えるよね」
その時、クローゼの背後から女性の声がした。
「――クローゼ。お待たせしました」
その声の主はユリア中尉だった。
「……ユリアさん。レイストン要塞から戻ったのですね？」
「ええ、予想以上に時間を取られてしまいました。失礼ながら、その件に関してご報告をしようと参上した次第です」
「ありがとう、ご苦労様でした」
「ピューイ♪」
ジークはユリア中尉の周りを飛んだ。
「こ、こら、ジーク。じゃれつくんじゃない。お前、護衛の使命はちゃんと果たしているのだろうな？」
程なくして、ジークはユリア中尉の肩に留まった。

「ピュイピュイ」
「うふふ、ジークにはいつも世話になっています。ね、ジーク？」
「ピューイ？」
「まったく調子のいいヤツだ」
ユリア中尉はクローゼに向き直った。
「……街道外れに《アルセイユ》を停めています。報告の方はそちらで……」
「わかりました。……学園生活もしばらくお休みですね。王都に戻る前に先生たちに挨拶しなくては……」
クローゼは下を向いて元気なく言った。
「（エステルさん、ヨシュアさん。おふたりに負けないよう……私、精一杯頑張りますね）」

第４章　黒のオーブメント（２）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ついにツァイス地方に入ったエステルたち。その先に待ち受けているのは！？

第4章　黒のオーブメント（3）

―カルデア隧道（すいどう）

エステルの後ろでヨシュアが突然立ち止まった。

「……？」

「どうしたの、ヨシュア？」

「いや……。誰かが来たような気配がして」

「へえ、あたしたちの他にこんな所を通る人がいるんだ」

エステルとヨシュアは入口の方をしばらく見たが誰も来なかった。

「……誰も来ないわよ？」

「そうだね……。ゴメン、勘違いだったみたいだ」

「あ、わかった……」

エステルがポンと相槌を打った。

「も～、ヨシュアってばクローゼに未練があるんでしょ」

「はあ？どうしてそうなるのさ？」

「照れない照れない。お姉さんにはお見通しよ？ま、まあ無理ないわよね……。お芝居とはいえ……キスまでした仲なんだし……」

「……え……」

「な、何だったら今すぐ戻って声をかければ？良い返事、聞けると思うわよ？」

「……。……もしかして今まで気付いていなかったとか？」

「へ……。気付いてないって、何が？」

「だから、ラストのシーン。あれはフリだよ、フリ。うまく角度をずらして、したように見せただけなんだけど」

「え……。……。あ、あんですって～！？」

エステルが絶叫した。トンネル内にエステルの声がこだました。

「まったく君って本当にそそっかしいなあ。台本の注釈のところにもちゃんと書いてあっただろう？」

「あ、あはは……。そっか、そうだったんだ……」
エステルは急にヨシュアに背中を向けた。
「（って、あたしってば……。どうしてこんなにホッとしてんのよ～っ！？）」
「あの……エステル？ひょっとして具合でも悪い？」
「なはは、大丈夫だってば！それじゃあ、とっとととツァイスに出発しましょっ！」
エステルはさっさと歩き出した。

カルデア隧道の途中、ツァイス側から声が聞こえてきた。
「はぁはぁ……。い、急がなくっちゃ……」
どうやら子供の声のようだ。
「あれ……？」
「……誰か来るみたいだね」
その時、その声の主であろう女の子が走って現れた。
「あ……」
その女の子はエステルたちを見るなり立ち止まった。
「やあ、こんにちは」
「どうしたの、そんなに急いで？」
エステルたちはその女の子に話しかけた。
「あ、はい、こんにちは。あの、お姉さんたち、この道を通ってきたんですか？」
「うん、そうだけど？」
「あのあの、だったら途中に消えた照明を見ませんでした？トンネルの壁についている照明のことなんですけど……」
「む～……ごめん。ちょっと気付かなかったかも」
エステルは見ていなかったようだが、
「消えた照明はなかったけど、川を2つ越えたところで調子が悪そ

うなのは見かけたよ」
ヨシュアはしっかり見ていた。
「それですっ！や、やっぱり思ったとおりだよ～……。すみませんっ。わたし急がなくっちゃ！」
女の子はまた慌しく走っていった。
「ツァイスの女の子かな。変わった格好をしてたね。ずいぶん慌ててたけど……」
「うーん。なんか気になるわね～。ね、ヨシュア。ちょっと追いかけてみない？」
「そう言うと思ったよ。たしかに女の子を1人で行かせるのは危険そうだからね。付いていった方が良さそうだ」
ヨシュアも同感だったらしい。
「うん！急いで追いかけましょっ！」
エステルたちは来た道を引き返し、女の子を追いかけた。

しばらく戻ったところで女の子を発見した。
「はうぅ～っ……」
目的の照明には魔獣が群がっていた。
「も、もうこんなに集まって来ちゃうなんて～……。このままじゃ壊されちゃう……。こ、こうなったら……」
女の子はどこからか導力砲を取り出し、魔獣に向けた。
「方向ヨシ、仰角２０度……。導力充填率３０％……。……いっけえええっ！」
そして魔獣目掛けて打ち込んだ。
「そ、それ以上近づいたら今度は当てちゃうんだから！ほ、本当に、本気なんだからっ！」
しかし魔獣は女の子に詰め寄ってきた。
「あう……。ぎゃ、逆効果だったかも……」

じりじりと近づく魔獣。
「やああっ……！」
そこでエステルが突撃した。
「てりゃあああっ！」
エステルとヨシュアは女の子の前に立った。
「え……。あ、さっきの……！」
「話はあとあと！いいから下がってて！」
「とりあえずこいつらを追っ払うからね！」

エステルたちは難なく魔獣を倒した。
「こ、こわかった～っ……。あのあの……ありがとうございますっ。おかげで助かりました」
「あはは。無事で何よりだったわね。でも……ちょっと感心しないわよ？魔獣を挑発するなんて危ないことしちゃダメじゃない」
「あ、でもでも……。放っておいたら照明が壊されちゃうと思って……」
「そういえば……。どうして、あの魔獣たち、消えた照明に群がっていたのかな？」
「前に街道灯を交換した時にも同じことがあっただろう？オーブメントの中にある七耀石の回路は魔獣の好物だからね。だから街道灯には、魔獣よけの機能が付いているんだけど……。その機能が切れたら逆に狙われやすいってわけさ」
ヨシュアが丁寧に教えてくれた。
「あ、なーるほど。でも、それにしたって無茶するにも程があるわよ。大ケガしたら危ないでしょ？」
「あぅ……ご、ごめんなさぁい」
しゅんとする女の子。
「まあまあ、そのくらいで。第一、無茶するなとか君が言っても説

得力ないしね」
「そこっ、水をささないのっ！まあいいや……。あたし、エステルっていうの」
「僕はヨシュア。2人とも、ギルドに所属している遊撃士なんだ」
「わあ、それであんなに強かったんだ……。わたし、ティータっていいます。ツァイスの中央工房で見習いをさせてもらってます」
「へー、それでそんな格好をしてるんだ。それじゃあ、ティータちゃん。ツァイスに戻るんだったらあたしたちと一緒に行かない？」
「そうだね。また魔獣が出たら大変だし」
「ほ、ほんとですか？ありがとーございますっ。えっと、ちょっとだけ待ってもらってもいいですか？あの照明を修理しちゃいますから」
「あ、たしかにこのまま放っておくのは危なそうだもんね。でも、どうしてここの照明が切れそうなんて分かったの？」
「あ、端末のデータベースを調べていたら偶然見つけて……。手違いで、整備不良だったものがそのまま設置されたみたいなんです」
「なるほど……。早く見つかって良かったね」
「（端末？でーたべーす？）」
エステルは言葉の意味が理解できず、首をかしげていた。

「……んしょっと」
ティータが最後に照明のカバーをつけると、点灯した。
「はい、これでいーです。お待たせしちゃいました」
「へえ～、すごい。ずいぶん手際良いのねぇ」
「さすが、あの中央工房で見習いをしてるだけはあるね」
「えへへ……。大したことはしてないです。クオーツの接続不良を直して導力圧を調整しただけですから」
「？？？なんか充分、大した事のように聞こえちゃうんですけど…

…」
「そんなことないですよー。えとですね。わかりやすく説明すると……」
ティータが1人解説を始めた。
「オーブメントの内部にはクオーツって言う結晶回路がはまっているんですけど、それがきちんとユニット部に接続されていないと、生成された導力が行き場を失ってしまって、結果的に想定された当初の機能が発揮できなくなってしまうんです。それが街道灯の場合は光と魔獣除けの……」
「ス、ストップ！」
エステルが耐え切れなくなってティータを制した。
「せ、説明はまたにしてそろそろ出発したいかな～。うんうん。こんな所で立ち話もなんだし」
「あ、それもそーですね。ちょっと残念ですけど……」
「（ホッ……）」
安堵（あんど）の息を吐くエステル。
「はは、それじゃあ改めてツァイスに向かうとしようか」
「オッケー！」
「はいっ！」
気を取り直して、エステルたちは再びツァイスの中央工房へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（３）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

いよいよツァイス地方の中心、ツァイス中央工房に到着！

第4章　黒のオーブメント（4）

「あっ……！」
エステルが小走りに駆け出した。
「トンネルの終点……。ってことは……ここがツァイス市の入口かな？」
「はい、そーです。正確には、中央工房の地下区画に出るんですけど」
「そっか、あの有名な……」
「《中央工房》――工房都市ツァイスが誇るオーブメント技術の殿堂だね。ずいぶん大きな建物だって聞いたことがあるけど……」
「それはもー。とにかくおっきいです。初めて来るお客さんなんか迷子になっちゃうくらいです」
ティータは笑いながら言った」
「ひええ……。そりゃまた大したもんね。ちゃんとギルドまで行けるか心配になってきたわ……」
「とりあえず、1階に上がれば町の方に出る玄関があるんです。わたし、お姉さんたちを案内します」
「ありがと、よろしくね」
「それじゃあ中に入ろうか」

―ツァイス中央工房　地下1階
「あれ、この部屋は……」
エステルは部屋に入ったかと思うと何もない小部屋に当惑した。
「ここはエレベーターです。地下から屋上までひとっとびってカンジです」
「んー？エレベーターって鉱山にもある昇降装置よね。どこにも見

当たらないけど……」
エステルは周りを見渡すが、どこにもそんな装置はなかった。
「違うよエステル。たぶん、この部屋そのものが上下する造りになってるんだ」
「あ……」
エステルがようやく気付いたそうだ。
「えへへ、最新式なんですよー。最大積載量、５０トリム……。大型機材の搬入なんかもラクラクこなしちゃうんです♪」
「よ、よく分からないけど……。なんか凄そうなカンジかも。それで、どうやったら動くの？」
「あ、そこのパネルで行きたい階を選べばＯＫです。えと……町に行きたいんですよね？」
ティータはそばにあった機械を示した。
「うん。１階に案内してくれるかな？」
「はいっ」
ティータは機械を操作するとエレベーターが動き始めた。
「わわっ……」

―ツァイス中央工房　１階
「へ～。なんか広いトコに出たわね」
「ここが中央工房の１階です。受付のカウンターと一般のお客さん向けのメンテナンス窓口があります」
「なるほど。ここから町に出られるんだね」
その時、受付のヘイゼルがティータに声をかけた。
「あっ、ティータちゃん」
「あ、ヘイゼルさん？」
「ちょうどよかったわ。トランス主任があなたのことを捜していたの。演算室に来て欲しいですって」

「あ……はい、わかりましたっ」
「あらら。急用が入っちゃったみたいね」
「ありがとう。わざわざ案内してくれて」
「と、とんでもないですよー。わたしの方こそお世話になっちゃって……」
ティータが申し訳なさそうに言った。
「あたしたち、しばらくツァイスに滞在するからさ。よかったらまた会いましょ？」
「あ……。はい、よろこんでっ！それじゃあ、さようなら！」
ティータは再びエレベーターに乗って行ってしまった。
「はは、可愛い子だったね。一生懸命な感じがして」
「うんうん、同感！あ～あ、あたしも、ああいう健気で可愛い妹が欲しかったなぁ。誰かさんみたいな可愛くない弟じゃなくてさ～」
エステルがヨシュアに向かって皮肉たっぷりに言った。
「何度も言うようだけど、いつもフォローしているのは僕。お姉さんぶりたいんだったらもっとしっかりしてくれないとね」
ヨシュアはその言葉をものともせず言い返す。
「ふんだ、よけーなお世話。それはともかく……さっそく町の方に行ってみる？」
「そうだね、まずはギルドで転属手続をしておこうか。それから、父さんのことと例のオーブメントのことについても相談してみよう」
「ん……オッケー」
エステルたちはさっそくツァイスの市内に向かった。

エステルが中央工房の外に出るとなにやら動く階段があった。もといエスカレーターだが。
「な、なにこれ？」
「動く階段……みたいだね。たしかに長い階段だから昇り降りは大変そうだけど……」

「だ、だからといって機械で動かしちゃうなんて……。あたし、この町に着いてから驚いてばっかりのような気がする」
「それは同感」

―遊撃士協会　ツァイス支部
「こんにちは～！」
「失礼します」
エステルはギルドの受付であろう東方風の女性の方に向かった。
「……」
しかし、東方風の女性は目を閉じたまま何も話さない。
「あの～、あたしたち、」
「……ようやくのご到着ね。エステル、ヨシュア。ツァイス支部へようこそ」
東方風の女性がいきなり話し出した。しかも、すでにエステルとヨシュアのことを知っていた。
「へっ……」
「僕たちをご存知なんですか？」
「ルーアン支部のジャンからすでに連絡は受けていたから。栗色のツインテールに黒髪と琥珀の瞳……。まさにあなたたちのことね」
ジャンがすでに連絡を入れていたので知っていたというわけだ。
「な、なるほど……」
「私の名前は、キリカ。ツァイス支部を任されている。以後、お見知りおきを」
東方風の女性はキリカと名乗った。
「あ、はい、こちらこそ」
「よろしくお願いします」
「さっそくだけど、所属変更の手続をしてもらうわ。こちらの書類にサインして」
キリカはエステルたちに転属手続の書類を渡した。

「うん、わかったわ」
エステルとヨシュアは転属手続の書類にサインした。
「……いいわ。これであなたたちもツァイス支部所属になったけど……。今のところ、すぐにやって欲しい急ぎの仕事は入ってないの。掲示板をチェックしながら自分たちのペースで働くことね」
「ちょっと物足りないけど、ま、平和なのはいいことよね。そうだキリカさん、聞きたいことがあるんだけど……」
「カシウスさんのことね」
キリカがこれまたエステルの先を読んだ。
「ひえっ!?」
「それもジャンさんからお聞きになったんですか?」
「一通りのことはね。残念だけど、カシウスさんはツァイス地方には居ないわね。少なくとも、ここ数ヶ月はこの支部を訪れていない」
「は～っ、そっかあ……」
「残りは王都か、それとも……」
エステルとヨシュアは顔を伏せた。
「だけど、別の問題については手がかりをあげられると思う。これを持っていきなさい」
キリカはエステルに工房長への紹介状を渡した。
「え、これって……」
「中央工房の責任者であるマードック工房長への紹介状。このツァイス地方では市長と同じ立場にいる人ね」
「ひょっとして……黒いオーブメントの件ですか?」
「市長邸での話を聞く限り、かなり謎めいた代物のようね。まずは工房長に会って相談してみるといいでしょう」
「な、なんかメチャメチャ用意いいわね～。キリカさん、超能力者とか?」
「あなたたち遊撃士のサポートが私の仕事だから。届けられた情報を判断してしかるべき用意をしただけよ」
キリカがキッパリと言った。

「お、恐れ入りました」
「助かります、本当に」
「気にすることはないわ。何か事件が起こった時に働いて返してもらうから」
「あはは……。うん、その時は任せて！」
「早速、工房長さんに会いに行ってみようか？」
「うん、そうしましょ」
エステルたちは中央工房へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（４）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

黒のオーブメントの手掛かりを探すため、中央工房に向かったエステルたち。なにか得られるか！？

第4章　黒のオーブメント（5）

―ツァイス中央工房

エステルたちは受付嬢のヘイゼルに話しかけた。

「あら、先ほどティータちゃんと一緒にいた……。ようこそ中央工房へ。どういったご用件でしょうか？」

「あの、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど」

「こちらの工房長さんに面会をお願いに来ました」

エステルは工房長への紹介状をヘイゼルに見せた。

「まあ、そうでしたの。ちょっとお待ちください……」

ヘイゼルは壁にあるインターフォンを操作した。

「――あ、工房長。ご休憩のところ失礼します。はい……そうですの。遊撃士協会の方々が……。……。かしこまりました。それでは……」

ヘイゼルが戻ってくると、

「お待たせしました。マードック工房長がお会いになられるそうです。お手数ですが、2階にある工房長室をお訪ねください」

「よかった。すぐに会ってくれるんだ」

「それじゃあ、2階に上がろうか」

エステルたちは2階の工房長室に向かった。

―中央工房2階　工房長室

「やあ、待っていたよ。エステル君にヨシュア君だね」

「あ、はい。初めまして、工房長さん」

「お忙しいところを失礼します」

「いやいや。気にしないでくれたまえ。遊撃士協会には……特にカシウスさんにはお世話になっているからね。そのお子さんたちとな

れば歓迎しないわけにはいかないさ」
「えっ!?工房長さんって父さんの知り合いなの!?」
「知り合いというかカシウスさんは大の恩人だよ。この中央工房は、大陸で最もオーブメント技術が進んでいる場所と言っても過言じゃない。当然、その技術をめぐって色々とトラブルが絶えなくってね。どうしても対応に困った時にはロレント支部に連絡して彼に来ていただいていたんだ」
「そ、そうだったんだ……」
「はは、道理でいつも出張が多かったわけだね」
「その恩人のお子さんたちが、わざわざ訪ねてきてくれたんだ。喜んで相談に乗らせてもらうよ」
「えへへ……。ありがと、工房長さん」
「少し話は長くなりますが……」
エステルたちは、マードック工房長に、黒いオーブメントをめぐるこれまでの経緯を説明した。
「なるほど……。そんなことがあったのか……。そのオーブメントを拝見しても構わないかね?」
「うん、もちろんよ」
エステルは黒いオーブメントを荷物から取り出して、マードック工房長に渡した。
工房長はそのオーブメントをしばらく調べた。
「ううむ……確かに得体の知れない代物だ……。明らかに最近造られた物だが、どこにもキャリバーが刻まれていない……」
「キャリバー??」
「オーブメントのフレームに刻まれている形式番号ですか?」
「うん、その通りだ。オーブメントには、ほぼ例外なくいつどこで造られたのかを表す形式番号が刻まれている。これは、リベールだけでなく他の大陸諸国でも事情は同じでね。５０年前に、オーブメントが発明された時からの伝統なのだよ」
「へ～、そうだったんだ」

エステルは懐から戦術オーブメントを取り出して、フレームを調べた。
「……あ、ほんとだ。確かに番号が刻まれてるわ」
「はあ……。今まで気付かなかったのかい？」
ヨシュアは横であきれている。
「う、うっさいわね～。でも、形式番号（キャリバー）が無いのってそんなに不思議な事なんだ？」
「導力技術者にとってナンバリングをすることは常識とも言えることだからねぇ。試作品だとしてもそれは同じ……。となると、なにか後ろ暗い目的で造られた可能性が高いかもしれない」
「後ろ暗い目的……」
エステルの顔が真剣になった。
「まあ、はっきりとしたことは内部を調べないと判らないが……」
マードック工房長が黒いオーブメントを開けようとしたが、その手が止まった。
「……」
「どうしたんですか？」
「まいったな……。調整用のフタが見当たらない。よく見たら継ぎ目もないし……どうやって組み立てたんだろう？うーん、このままだと中を調べるのすら難しそうだな」
「え～、そんなぁ……。あ、だったら外側のフレームを切断すればいいんじゃない？」
「まあ、確かにそうするのが手っ取り早いかもしれないが……。でも、カシウスさんあてに届いたものを勝手に傷つけるのはちょっと気が引けるなあ」
「そ、そっか……」
「……。例の博士だったら任せられると思うんだけど……」
「あ……同封されていたメモの……。確かに、その博士だったら任せちゃっていいかもね」

「？？？」
「実は、そのオーブメントと一緒にこんなメモが入ってたんだけど……」
エステルはカシウス宛の小包に同封されていたメモをマードック工房長に見せた。
「『Ｒ博士に調査を依頼……』」
「そのＲ博士という方に心当たりはありませんか？」
「心当たりがあるもなにも……。頭文字がＲで、カシウスさんの知り合いといったら『ラッセル博士』に間違いないだろう」
「やっぱりそうですか……」
「ラッセル博士？ていうか……ヨシュアの知り合いなの？」
「いや、面識はないけどね。オーブメント技術をリベールにもたらした人物として有名なんだ」
「ほう、よく知ってるね。オーブメントを発明したのはエプスタイン博士という人だが……。ラッセル博士はそのエプスタイン博士の直弟子の１人にあたるんだ。４０年前、彼が持ち帰ったオーブメント技術のおかげでリベールは技術先進国となった。いわば、リベールにおける導力革命の父といえるだろう」
「ほええ……。そんなすごい人がいるんだ。父さんってば、つくづく意外な人脈を持ってるわねぇ」
「しかし、そのオーブメントを博士に任せるのは心配だな。どんな事になってしまうのやら……」
「へ？」
「なんと言うか……良くも悪くも天才肌の人でね。一度、研究心に火がつくと色々なことを起こしてくれるんだ。そうだ……初めて導力飛行船を開発したときも……。……ふう……」
マードック工房長は溜息をついた。
「（な、なんか遠い目をしてる……）」
「（色々とあったみたいだね……）」
「……コホン、これは失礼。まあ、確かに博士ならそのオーブメン

トの正体を必ずや突き止めてくれるだろう。紹介するから相談してみるといい」
「ありがと、工房長さん！」
「どちらに行けば博士にお会いできますか？」
「そうだな……。ちょっと待ってくれたまえ」
マードック工房長はインターフォンを操作した。
「もしもし……。おお、ちょうど良かった。実は君のことを捜していてね。すまないが、こちらに来てもらえないかな？うん、うん、待っているよ」
「ひょっとして、そのラッセル博士を呼んだの？」
「いやいや、とんでもない。実はラッセル博士は町に個人工房を持っていてね。最新式の設備が揃っているから普段はそちらで研究してるんだ」
「へ～。さすが天才博士って感じね。……あれ、それじゃあ今、呼んだのは？」
「うん、そのラッセル博士のお孫さんがここで働いているんだ。その子に君たちのことを案内してもらおうとお思ってね」
「その”子”？」
その時、扉から人が入ってきた。
「えっと、失礼します」
「あっ？」
「君は……」
入ってきたのはティータだった。
「あれれ……エステルさん、ヨシュアさん？」
「なんだなんだ。ひょっとして顔見知りかね？」
「うん。知り合ったばかりだけどね」
「それじゃあ彼女が博士のお孫さんなんですね」
「うん、その通りだ。ティータ君。こちらのエステル君たちが博士に相談があるそうなんだ。家まで案内してもらえるかね」
「おじいちゃんに……。あ、はい、わかりましたっ」

「よろしく頼んだよ。そうそう、何か判ったら私にも教えてくれると嬉しいな。技術者のはしくれとして、非常に興味をそそられるからね」
「あはは、うん、わかったわ」
「それでは失礼します」

「やー、ティータちゃんが来るとは思わなかったわ。しかも、有名な博士のお孫さんだったなんてね」
「どうりでオーブメントの扱いにも慣れているわけだ」
「え、えへへ……。そんなことないですよー。おじいちゃんはともかく、わたしはただの見習いですから」
ティータが照れた。
「あ、そういえば……。おじいちゃんに相談って遊撃士のお仕事と関係が？」
「うーん……ま、半々ってところかな。これがまたフクザツ怪奇な事情でね～」
「詳しい話は、おじいさんに会った時にさせてもらうよ」
「あ、はい、わかりました。えと、わたしの家は街の南西の方にあるんです。エスカレーターを降りてまっすぐ歩けば南口があって……。そこで西に曲がれば到着です」
「わかったわ。それじゃ、早速行きましょ」
エステルたちはラッセル博士の家に向かった。

第４章　黒のオーブメント（５）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

黒いオーブメント解明に向けて一歩前進したエステルたち。ラッセル博士はどのような人物なのか！？

第4章　黒のオーブメント（6）

―ラッセル工房
「えへへ……。これがわたしの家です」
「へ～、いいお家じゃない」
エステルが周りを見渡しながら言った。
「ラッセル博士はどこにいらっしゃるのかな？」
「おじいちゃんなら工房の方にいると思います。その扉の向こう側です」
ティータは扉を指し示した。
「それじゃあ早速、挨拶させてもらいますか」

―ラッセル工房　2階
「おじいちゃん、ただいまぁ」
「……むむむ……。ここをこうして、こうすれば……。くぬぬぬぬっ……！……ぬおおおっ……」
しかし、ラッセル博士は一向に振り向かず、ただただ目の前の作業に集中していた。
「……あ」
「あ、その人ね」
エステルはラッセル博士に挨拶しに向かった。
「あの～、初めまして。あたし、遊撃士協会のエステル・ブライトっていいます。実は、博士に相談したいことが……」
「……」
「……あり？」
しかし、ラッセル博士は全く振り向かず、手元を忙しく動かしていた。そして、

「で、できたあああっ！」
急に大声を出した。
「ひえっ！？」
「わはは、やったわい！ついに完成したぞおおおっ！さすがワシ！すごいぞワシ！うむ、こいつは早速、テストせねばなるまいてっ！」
ラッセル博士は急に立ち上がり、エステルを押しのけて1階へ降りていった。
「わぁっ！な、なんなのよ～！？」
「ご、ごめんなさい、エステルさん。おじいちゃん、発明に夢中になるとまわりが目に入らなくなって……。数日前から造っていた装置がようやく完成したみたいなんです」
「なるほど……。さすが天才って感じだね」
「そ、そういう問題じゃないと思うんですけど……」
「ま、面目ないですぅ……」
とにかく、エステルたちはラッセル博士を追った。

―ラッセル工房　1階
「おじいちゃん、あのね。このお姉ちゃんたちが相談したいことがあって……」
「ん……？おお、ティータ！いいところに戻ってきたのう！今からテストをするからデータ収集を手伝ってくれ」
やっと反応を示したラッセル博士。
「え、でも、あのね……」
「今度の発明は、生体感知器を無効にするオーブメントじゃ。特殊な導力場を発生して走査（スキャン）をごまかすわけじゃな」
「ほ、ほんとー？」
「ホントもホント。掛け値なしの新発明じゃ！ほれほれ、いいから、起動テストの手伝いをせい！」

「うんっ！」
おいっ……。
ラッセル博士とティータは複雑そうな装置を動かし始めた。残されたエステルとヨシュア。
「……あの～」
「うーん。しばらくかかりそうだね」
そして突然、ラッセル博士が振り向いた。
「ほれ、そこの黒髪の！」
「え、僕のことですか？」
「他に誰がおる？2階の本棚から『導力場における斥力値』というノートを持ってくるんじゃ！ほれほれ、とっとと急がんか！」
「は、はい、わかりました」
ヨシュアは急かされて2階に走っていった。
「ちょ、ちょっとヨシュア……」
「ほれ、そこの触角みたいな髪したの！」
次にエステルにお呼びがかかった。しかもエステルのツインテールを触角と言った。
「しょ、触角……。あ、あんですって～！？」
エステルが怒ったが、
「ぼけーっとしとらんでコーヒーでも淹れてこんか！」
ものともせず指図した。
「な、なんであたしがっ！？」
「ちなみにワシはブラックじゃ。泥のように濃いヤツを頼むぞ」
「聞いてないし……。はあ、もう、わかったわよ」
エステルも走って行った。
「……うん、ばっちり♪おじいちゃん。こっちの設定は終わったよ」
「おお、さすが早いな」
「あれ……。そういえば……エステルさんたちは？」
「誰じゃ、それ？……」
ラッセル博士が首をひねった。

「そういえば、見覚えのない若い助手どもがいたが……。はて、マードックのやつがよこした新人かのう？」
「お、おじいちゃあん……」
こうして、エステルたちは成り行きで実験を手伝うことになり……
実験が終わった頃にはすっかり夕方になっていた……。

「わはは、すまんすまん。すっかりお前さんたちを中央工房の新人かと思ってな。いつものノリでコキ使ってしまったんじゃ」
ラッセル博士は調子良く笑った。
「ったく、笑い事じゃないわよ。コーヒーだけじゃなくてさんざん手伝いをさせてさ～」
「まあまあ、貴重な体験をさせてもらったと思えばいいじゃない。新型オーブメントの起動実験なんて滅多にあるもんじゃないんだし」
「ほう、お前さん。なかなか判っておるようじゃの。どうじゃ、遊撃士なんぞやめて導力学者への道を進んでみんか？」
「もう、おじいちゃんたら！ごめんなさい。エステルさん、ヨシュアさん。なんだか、わたしも実験に夢中になっちゃって……」
「あ、ティータちゃんは謝る必要はないんだからね？はあ、《導力革命の父》というからどんなスゴイ人かと思ったけど……。ここまでお調子者の爺さんとは思わなかったわ……」
エステルががっくりとした。
「わはは、そう誉めるでない。しかし、まさかカシウスの子供たちが訪ねてくるとはのう。わしの方もビックリじゃよ」
「あ、やっぱり博士って父さんの知り合いだったんだ？」
「うむ、けっこう前からのな。あやつが軍にいた頃からじゃから２０年以上の付き合いになるか」
「わたしも、カシウスさんと会ったことがありますよ。おヒゲの立派なおじさんですよね？」

「うーん、立派というか胡散臭いというか……。でも、そういうことならアレを預けてもよさそうね」
エステルはヨシュアを見た。
「そうだね、問題ないと思うよ」
「???」
「なんじゃ、何かあるのか？そういえば、お前さんたち、わしに相談があるそうじゃな？」
「うん、実はね……」
エステルたちはこれまでの経緯を説明して黒いオーブメントを取り出した。
「……ほう」
「わあ……真っ黒いオーブメント……」
「ふむ、これは興味深いのう。形式番号（キャリバー）がないのもそうだが、継ぎ目のたぐいが見当たらん。しかもこのフレームは……」
ラッセル博士は腰のベルトから工作用のカッターを取り出した。そのままオーブメントの表面にカッターの刃を強く押し当てる。
「な、なにをしてんの？」
「特殊合金製のカッター……」
「……。……やはりか……。ほれ、見てみるがいい」
ラッセル博士は黒いオーブメントを見せた。
「う、うん……？」
エステルたちは黒いオーブメントの表面を覗き込んだ。
「あれっ？」
「キズ１つ付いてない」
「……」
「どうやら、このフレームはわしが知っているどんな金属よりも硬い素材でできているようじゃ。切断して中を調べるのはかなり難しいかもしれんな」
「そ、そんなにとんでもない代物なんだ……」

「切断するのが難しいとなると困ったことになりましたね……」
「ま、フレームの切断は時間をかければ出来るじゃろ。しかしその前に、測定装置にかけてみるべきかもしれんな」
「ソクテイ装置？」
「さっきの実験でも使ったあの大きな装置のことですよ。導力場の動きをリアルタイムに測定するための装置なんです」
「よ、よくわかんないけど……。その装置を使うとどうなるわけ？」
「簡単に言うと、このオーブメントがどんな働きをするのかが判るんじゃ。もっとも、導力波の動きだけではあくまで推定の範囲内に留まるがな」
「それでも、重要な手がかりは得られる可能性が高そうですね」
「うむ。それじゃあ早速……」
ラッセル博士が立ち上がろうとした矢先、
「でも、おじいちゃん。そろそろゴハンの時間だよ？」
「えー」
ラッセル博士が不満そうに言った。
「あ、エステルさんたちもよかったら食べてってください。あんまり自信はないですけど……」
「あ、それじゃあ遠慮なく♪」
「よかったら僕たちも手伝うよ」
「よし、それじゃあこうしよう。食事の支度が済むまでわしの方はちょっとだけ……」
「だ、だめー。わたしだって見たいんだもん。ぬけがけは無しなんだから」
ティータがラッセル博士を引き止める。
「ケチ」
「（なんていうか、この2人……）」
「（血は争えないってやつだね）」

第４章　黒のオーブメント（６）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

いよいよ次回、黒のオーブメントの実験が始まります。果たして、どうなるのか！？乞うご期待！

第4章　黒のオーブメント（7）

―ラッセル工房　1階

「コホン……。腹もふくれたことじゃし、さっそく始めるとしようかの。それでは、エステル。例のオーブメントを台の上へ」

「う、うん……」

エステルは測定装置の上へ黒いオーブメントを置いた。

「これでいいの？」

「うむ、ごくろう。ティータや。そちらの用意はどうじゃ？」

「うん、バッチリだよー」

「よろしい。それでは《黒の導力器》の導力波測定実験を開始する」

「《黒の導力器（オーブメント）》？」

「なんか、まんまなネーミングねぇ」

「シンプル・イズ・ベストじゃ。とりあえず名前がないのは不便じゃからの」

「ドキドキ、ワクワク……」

ティータは早く実験を始めたいらしく、そわそわしている。

「あー、この子はこの子ですっかりやる気満々だし」

「あ……てへへ」

「よし、それでは始めるぞ。ティータ。装置の起動を頼む」

「うんっ」

ティータが装置の起動を始め、ラッセル博士も操作に入った。

「出力を４５％に固定……。各種測定器のスタンバイ開始」

「了解……。うんっ。各種測定器、準備完了だよ」

「さーて、ここからが本番じゃ。入出力が見当たらない以上、中の結晶回路に導力波をぶつけて反応を探るしかないわけじゃが……。そこで、この測定装置の真価が発揮されるというわけじゃ！」

ラッセル博士が楽しそうに言った。

「ノ、ノリノリねぇ……」
「ポチッとな」
ラッセル博士がボタンを押すと、測定装置が動き出した。どうやらスキャンしているようだ。
「へえ……いかにもそれっぽい光ねぇ」
「なるほど、ああやって結晶回路に負荷をかけるのか……」
「よしよし……。ティータや。測定器の反応はどうじゃ？」
「う、うん……。なんだか、ヘンかも……」
「なぬ？」
「タコメーターの針がぶるぶる震えちゃって……。あっ……。ぐ、ぐるぐる回り始めたよ！？」
「なんじゃと！？」
その時、ルーアン市長邸と同じ黒い光が放たれた！
「きゃあっ！？」
「な、なんじゃこれは！？」
「ヨシュア、これ……！？」
「あの時の黒い光……！」
さらにその光は拡散するように広がった。
「なんじゃと！？」
外では町中のありとあらゆる光が消え、さらにエスカレーターまでもが止まってしまった。人々は外に出てただただ困惑していた。
「お、おじいちゃん、これ以上はダメだよぉ！測定装置を止めなくっちゃ！」
「ええい、止めてくれるな！あと少しで何かが掴めそう……」
その時、外にでていたエステルが帰ってきた。
「ちょっとちょっと！町中の照明が消えてるわよ？」
「ふえっ！？」
「なんと……。ええい、仕方ない！これにて実験終了じゃああっ！」
ラッセル博士が測定装置を止めた。瞬間、明かりがついた。
「あ……。も、元に戻った……」

「はううう〜……」
「計器の方は……。ダメじゃ、何も記録しておらん。ということは、生きていたのは《黒の導力器》が乗った本体のみ。あとは根こそぎということか……」
そして、ヨシュアも戻ってきた。
「よかった……。実験を中止したみたいだね」
「あ、ヨシュア！外の様子はどうなの？」
「うん……。照明は元通りになったみたいだ。まだ騒ぎは収まっていないけどね」
「そっか……。でも、一体全体、何が起こっちゃったってわけ？」
「そうじゃな……。あえて表現するなら『導力停止現象』と言うべきか」
「『導力停止現象』……」
「オーブメント内を走る導力が働かなくなったということですね」
「やっぱり、その《黒の導力器》が原因なのかな……？」
「うむ、間違いあるまい。しかし、これほど広範囲のオーブメントを停止させるとは。むむむむむむ……こいつは予想以上の代物じゃぞ。面白い、すこぶる面白いわい！」
「お、面白がってる場合じゃないと思うんですけど〜……」
その時、誰かが入ってきた。
「ハ〜カ〜セ〜ッ！！」
その人物はマードック工房長だった。
「おお、マードック。いいところに来たじゃないか」
「いいところ、じゃありません！毎回毎回、新発明のたびにとんでもない騒ぎを起こして！町中の照明を消すなんて今度は何をやったんですかッ！？」
マードック工房長は怒り心頭といった感じだ。
「失敬な。今回はわしは無関係じゃぞ。そこに置いてある《黒の導力器》の仕業じゃ」
ラッセル博士は測定装置の上にある黒いオーブメントを指し示した。

「そ、それは例の……。なるほど、それが原因ならこの異常事態もうなずける……」
マードック工房長はしばらく考えた。
「だ、だからといってアンタが無関係ということがあるかあっ！」
そして絶叫した。
「ちっ、バレたか……」
「な、なんかやたらと息が合ってるわね～」
「いつもこんな感じなんだ？」
「あう、恥ずかしながら……」
こうして、ツァイス市での最初の日は慌ただしく過ぎていった。エステルとヨシュアは、夜も遅いためラッセル工房に泊めてもらうことにした。

第４章　黒のオーブメント（７）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

予想以上の代物だった黒いオーブメント。ラッセル博士はさらなる実験を行おうとしているが、解明できるのか！？

第4章　黒のオーブメント（8）

―朝　ラッセル工房

「いや～。昨日は大変な一日だったわね。この町自体もビックリしたけどあんな事件が起こっちゃうなんて」

「はは、そうだね。それにしても《黒の導力器》か……。想像していた以上に大変な品物だったみたいだね」

「うん……。実験には失敗しちゃったけど、博士、どうするつもりなのかな？」

その時、ティータが上がってきた。

「おはよーございます。エステルさん、ヨシュアさん」

「あ、おはよ～。ティータちゃん」

「おはよう。昨日は大変だったね」

「えへへ、そーですね。エステルさんたちはよく眠れましたか？」

「うん、バッチリよ？そういえば、博士はもう起きてるの？」

「あ、おじいちゃん、朝早くに中央工房に行っちゃったんです。『絶対に《黒の導力器》の秘密を突き止めてやるわ～！』って」

「は～、あれだけ工房長さんに釘を刺されたのにまだ懲りてなかったんだ」

「僕たちが持ち込んだ品物を調べてくれるのはありがたいけどちょっと申しわけないな」

「あは、気にしないでください。おじいちゃん、自分が調べたくて調べているだけなんですから。そうだ、朝ゴハン食べたらわたしも中央工房に行きますけど……。エステルさんたちはどうします？」

「モチ、付き合うに決まってるわ。あのオーブメントの正体も知りたいし」

「そうだね。なにか手伝えるといいんだけど」

「わぁ、だったら一緒におでかけですね……。あ、いっけない！スープをかけたままだった……。すぐに朝ゴハンできますからもうち

ょっと待っててください！」
ティータは慌てて下に降りていった。
「いいなぁ、あれ……。お持ち帰りにできないかしら」
呆けながらエステルが言った。
「エステル、オジサンっぽいよ」

「さてと、美味しい朝食もごちそうになっちゃったし……。中央工房に行くとしますか」
「その前に、できれば一度、ギルドに寄った方がいいかもね。念のため、昨日の一件について報告をした方がいいかもしれない」
ヨシュアが早速中央工房に向かうエステルに言った。
「あ、それもそっか……。ねえ、ティータちゃん。ちょっと寄り道してもいいかな？」
「はい、もちろんです」
エステルたちはギルドに向かった。

―遊撃士協会　ツァイス支部
「おはよう。昨日は大変だったわね。さっそく報告を聞かせてもらおうかしら」
「あ、相変わらず単刀直入ねぇ」
「大体の状況は工房長から聞いているけど……。実際に現場にいた人間の説明も聞いておきたいから」
「はい、それでは……」
エステルたちは昨夜の『導力停止現象』についてキリカに詳しく報告した。
「なるほど……。さすが、カシウスさんの所に匿名で届いただけあ

ってまっとうな品ではなかったわね。協会（ギルド）としても気になるからこのまま博士に協力するといいわ」
「うん、そのつもりよ」
「なにか判ったら報告します」
エステルたちは次に中央工房に向かった。

―ツァイス中央工房　3階　工作室
「ええい！また失敗かっ！」
ラッセル博士はいらだしそうに実験していた。
「おじいちゃん。お手伝いに来たよ」
「おお、ティータ。おや……お前さんたちも来たのか」
「えへへ……。やっぱり気になっちゃって。で、いったい何してるの？」
「見ての通り、工作機械を使って《黒の導力器》のフレームを切断しようとしてるのじゃが……。これがなかなか上手くいかなくてな」
ラッセル博士が溜息をついた。
「どういうことですか？」
「百聞は一見に如かずじゃ。……ポチッとな」
ラッセル博士が工作機械を動かし始めた。
「わっ……なにこれ！？」
「工作用の丸ノコです。特殊合金製で、大抵のものは切断できちゃうんですけど……」
「へえ、これなら……」
しかし、工作機械は黒いオーブメントに触れると、黒い光を放ち、工作機械を止めてしまった。
「と、止まっちゃった……」
「やっぱり……」
「小規模だけど、昨日と同じ現象ですね」

「どうやら、この黒いヤツは干渉しようとするオーブメントの機能を停止させてしまうらしい。単に照明を消すだけには留まらなかったみたいじゃな」
「そ、そうなんだ……」
「でも、おじいちゃん。夕べみたいにまわりに広がったりしないの？」
「うむ、いいことに気付いたな。どうやら、この停止現象は周囲で稼働中のオーブメントに連鎖して広がっていくものらしい。有効範囲は、およそ5アージュ。逆に言ってしまえば、範囲内に稼働中のものがなければ、それ以上は広がらんというわけじゃ」
「なるほど……。そんな法則があったんですか」
ヨシュアが感心しながら聞いている。
「じゃが、それが判ったところで肝心かなめの機械をを止められては中を調べることができん……。これは困ったことになったのう」
ラッセル博士は腕を組んでうなり始めた。
「なんとか人間の力で切断することはできないの？気合と根性で、とかさ」
真剣そのもので話すエステル。そんなことで解決するならこうまで苦労しない。
「無茶だよ、エステル。特殊合金製のカッターでも傷つけられなかっただろう？」
「あ、そっか……。うーん、だったら火を使えば？溶鉱炉にいれて溶かしちゃうとか」
「そ、そんなことしたら中もタダじゃすみませんよぅ」
「やっぱダメかぁ……」
がっくりとうなだれるエステル。
「……。いや、イケるかもしれんぞ」
「ええっ！？」
自分で言ったことに驚くエステル。
「高温で溶かす方法ですか？」

「いや、そうではない。ようは導力――オーブメント機械で作動する機械を使うから問題なんじゃ。工作機械を、導力以外で動くようにしてしまえばいい」
「機械を導力以外で動かせるようにする……？」
「そんな方法があるんですか？」
「『内燃機関』といってな……。火を燃やしてエネルギーを生成する仕組みがあるんじゃ。アイデア自体は昔からあるが、導力機関よりも効率が悪くてな。ただ、工作機械くらいなら簡単に動かすことができるぞ」
「そんなものがあるんだ……」
「なるほど……。それで『火』なんですね」
「でも、おじいちゃん。内燃機関のユニットなんてわたし、見たことないけど……」
「たしか、中央工房のどこかに研究用のものがあったはずじゃ。おっと、それから燃料を調達する必要があるな」
「燃料って……油のこと？」
「いや、『ガソリン』という燃焼力の高いものが必要じゃ。溶剤としても使うから、わりと備蓄があったはずじゃ。うむ……。なんとかイケそうじゃの。よし、さっそく工作機械を改造してみるか！」
「あ、わたしも手伝うよ」
「あたしたちも何か手伝えることないかな？ティータちゃんみたいに専門的なことは無理だけど……」
「だったら、その内燃機関とガソリンを取ってきてくれんか？」
「少々重いが、遊撃士の体力ならばなんとか運べるじゃろう」
「オッケー、任せて！」
「内燃機関とガソリンですね。どこに置いてあるんですか？」
「んー？……。……はて……」
「まさか、どこにあるのか忘れてしまったんじゃ……？」
「うん、忘れた」
それはもうあっさりと。

「あっさり言わないでよ～」
「あ、あの、エステルさん。たぶん、演算室だったらどこにあるか分かると思います」
「演算室？」
「５階にある部屋で導力演算器があるんです。中央工房に関する情報が全部記録されているから保管場所もわかると思います」
「すごいな。そんな場所があるんだ……」
「てなわけで、よろしく頼むぞ」
「まったくもう……。まあいいや、とりあえずその演算室って所に行きますか」
「うん、５階だったね」
エステルとヨシュアは５階に向かった。

第４章　黒のオーブメント（８）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

黒いオーブメントの正体を突き止めるため、着々と進みだすエステルたち。まずは材料集めから始まります。

第4章　黒のオーブメント（9）

―ツァイス中央工房　5階　演算室

演算室は大型の機械だらけで物々しい雰囲気を醸し出していた。

「うわ～、何か凄そうな部屋ねぇ」

「どうやらここが演算室で間違いなさそうだね」

その時、部屋の奥で機械を操作していた男性が手を止めた。

「おや、君たちは……。見かけない顔だけど演算室に何か用かい？

私は、ここの技術主任のトランスと言う者だ」

男性はトランスと名乗った。

「初めまして、遊撃士協会の者です」

「実は、ラッセル博士の頼みで調べものに来たんだけど……」

エステルがそう言うと、トランス主任は顔色を変えた。

「ラ、ラッセル博士の!?ま、ま、またっ、面倒なことじゃないだろうねっ!?」

そして後ずさりした。

「ま、またって……。ほんと博士、信用ないのねぇ」

「いや、その……博士が天才なのは認めるよ。この演算器の《カペル》だって博士が開発したものだしね。でもね、あの人が絡むといつもトラブルが絶えなくてさ。ティータ君は、一生懸命で本当にいい子なんだけどねぇ」

天才とはこういうものだと言わんばかりの言葉だった。

「あはは……。気持ちはわかるけどね。でも、今回はそんなに手間を取らせないと思うわよ」

「中央工房で保管している備品の場所を探したいんです」

「ホッ、そういう話か……。その程度だったらすぐに調べられると思うよ。それじゃあ、せっかくだから検索の仕方を教えておこうか」

エステルたちは《カペル》へと近づいた。

「この円筒の装置が導力演算器の《カペル》だ。今では導力演算器

は飛行船の航行制御なんかにも使われるようになったけど……。この《カペル》は現時点で世界最高の情報処理速度と高度な汎用性を備えている。構造物の強度計算から情報検索まで何でもござれさ。で、情報検索のやり方だけど……。まず、この正面のパネルで情報検索モードに切り替える。すると、導力信号が配線を通って、記憶オーブメントにアクセスする。記憶オーブメントには光情報を管理するクオーツが大量に仕込まれているからね。知りたい情報があったら簡単に引き出せるって寸法さ。――と、ここまではいいかい？」

「うん、バッチリよ」

エステルが得意げに頷いた。

「すごいな、エステル。ここまで最新の技術だと僕にはわからないよ」

ヨシュアが驚いたが、

「ウソです、ごめんなさい。ていうか、何言ってるのか最初から最後までサッパリ意味不明なんですけど……」

どうやら、ただの見栄っ張りだったらしい。実際は、エステルは別世界の言葉を聞いているような感じだった。

「まあ、詳しい仕組みはいいか。モードは切り換えておくから実際にパネルに触ってごらん。すぐにやり方がわかるはずさ」

エステルは実際に《カペル》に触れてみた。そして、内燃機関とガソリンの保管場所を調べ、手帳にメモした。

「どうやら探し物は見つかったようだね」

「うわ～っ。魔法の箱みたいねぇ」

「導力演算器……予想以上に凄い技術ですね」

「基本概念を提示したのはラッセル博士の先生であるエプスタイン博士らしいけどね。ただ、それをここまで形にしたラッセル博士もまた天才だよ。はぁ、あれでもう少し落ち着きがあったらいいんだけど……」

「ははは……。女神（エイドス）は二物を与えずですね」

「ところで、内燃機関を管理してるグスタフ整備長って人だけど……。その人ってどこにいるの？」
「整備長は、飛行場の責任者だからそっちに行けば会えると思うよ。それと、ガソリンの方だけどオーブメント生産工場は中央工房の地下区画にあるんだ。そこにいるスタッフに頼んだら手に入るんじゃないかな」
「内燃機関のユニットは飛行場にいるグスタフ整備長……。ガソリンは、地下にあるオーブメント生産工場ですね」
「サンキュー、助かったわ」
「いやいや。何かあったらまたどうぞ」
エステルはまず、内燃機関を手に入れるため、飛行場に向かった。

―ツァイス発着場
「よう、飛行船をご利用かい？西回りの定期船なら、ちょうど出たところだが……」
受付のジラールが言った。
「ううん。飛行船に乗るわけじゃないわ。グスタフ整備長っていう人に頼みたいことがあるんだけど」
「なんだ、オヤジさんに用か。オヤジさんなら今、ここにはいないけど……」
「えっ、出かけてるの？」
「ああ、ここ2、3日、レイストン要塞に行っているんだ。なんか急に、軍用警備艇のメンテナンスの依頼が入ってね」
「レイストン要塞っていうと……」
「ヴァレリア湖畔にある王国軍最大の軍事基地だよ。ツァイス地方の北側だね」
「う～ん、それじゃあ簡単には戻ってこれなさそうだね。博士の用事、どうしよう？」

「何の用事か知らないけど、そろそろ戻ってくると思うぜ。さっき通信で連絡があったし……」
その時、飛行船の到着を告げる連絡が入った。
「あれ……。次の定期船がもう来たの？」
「いや、噂をすればってやつさ」
そこには、一風変わった定期船らしき船が到着しようとしていた。
「オレンジ色の定期船……。あれれ。そんな定期船あったっけ？」
「いや……定期船じゃなさそうだね。ところどころ形状が違うし、作業用のアームも付いている」
「あ、たしかに……」
「中央工房が所有している工房船の《ライプニッツ号》だ。定期船と同型なんだけど色々な設備が追加してあってな。大型設備のメンテナンスや製品の運搬などに使われるのさ」
ジラールが説明してくれた。
「へ～！空飛ぶ工房ってやつね。あ、それじゃあ、あの船に整備長さんが乗っているんだ」
「そういうこと。さっそく話を聞いてきたらどうだ？」
「うん、そうするわ」
「それでは失礼します」

「ん……。なんだァ、嬢ちゃんたちは？」
年配の整備員がエステルたちに声をかけた。
「あ……」
「この《ライプニッツ号》には色んな機材が山のように積まれている。危ないから近寄らないこったな」
「えっと、実は人を捜してて……」
「グスタフ整備長という方がこちらの船にいらっしゃいませんか？」
「なんだよ、俺に用なのか？」

「あ、おじさんが整備長さんだったんだ」
エステルたちはグスタフ整備長にラッセル博士から内燃機関を借りてくるように頼まれたことを説明した。
「なんだ。ラッセル爺さんの用事かよ。しかし、内燃機関のユニットか。いいタイミングだったなァ」
「へ？」
「ちょっと待ってろよ……」
グスタフ整備長が船の中に入っていった。
「ひょっとしてこの船に積んであったのかな？」
「うん、そうみたいだね」
しばらくして、グスタフ整備長が重そうな機械を持って戻ってきた。
「ほれ。重いから気ィつけな」
エステルは内燃機関ユニットを受け取った。
「わわっ……。確かにズッシリ来るわね。でも持てない重さじゃないかな」
「へえ、娘っ子のくせになかなか気合入ってんじゃねーか。がはは、気に入ったぜ！」
「あはは、そりゃどーも」
「しっかし、それにしても面白い偶然もあったもんだぜ。軍から返してもらった直後に爺さんが持っていくとはなァ」
「えっ……」
「軍から、というと？」
「いやな、そのサンプル、しばらく王国軍に貸してたんだ。何かの研究に使うとかでな。で、今日になってやっと返してきやがったってわけさ」
「へ～。たしかに面白い偶然ねぇ」
「……」
「ん、どうしたの？」
「いや……何でもないよ。残りはガソリンだね。地下にある工場に行こうか？」

「ん、わかった。整備長さん、サンキュー！」
「おお、爺さんによろしくな」
次にエステルたちは中央工房地下に向かった。

―ツァイス中央工房　地下1階
「あの～、ちょっといい？」
「なに、どしたの？」
工房員のフェイが手を止めていった。
エステルたちはラッセル博士からガソリンを貰ってくるよう頼まれたことを説明した。
「へ～、ガソリンか。たしか保管庫の奥にいくつかタンクがあったな……。ちょっと問い合わせてみるよ」
フェイはインターフォンを操作した。
「こちらフェイ。ちょっと頼みがあるんだけど。カルバード産のガソリン、たしか備蓄があったはずだよね？うん、うん……。タンクに入れて送ってくれる？持ち運びができるくらいのヤツ。サンクス、頼んだよ」
フェイがこちらを向いた。
「ちょっと待ってて。すぐに送ってくれるってさ」
「送ってくれる……？」
その時、ベルトコンベアーが動き出した。
「わわっ……」
「来た来た」
「ひょっとしてこれがガソリンなの？」
「送ってくれるというのはこういうことだったんですか」
「フフ、大したもんだろ？このコンベアシステムはただ製品を運ぶだけじゃない。広大な地下工場を相互に結ぶ機能もあるんだよ」
「へえ、便利なもんねぇ」

「これもラッセル博士の発案でね。元々は、製品を運ぶだけの機能しかなかったんだけど……。あのじーさまが改造してからかなり使えるシステムになった。まー、インフラ整えるまで死ぬほど苦労させられたけどね」
「あはは。やっぱりそうオチるんだ」
「それじゃあ、このタンク、持って行かせてもらいます」
「ほいほい。あ、何に使うか知らないけど取り扱いには注意しなよね。ガソリンってのはとにかく良く燃えるからさ」
2つの材料を揃えたエステルは3階の工作室に戻った。

第４章　黒のオーブメント（９）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

２つの材料を揃えたエステルたち。実験第２弾開始です。

第4章　黒のオーブメント（10）

―中央工房　3階　工作室
「ふう、ただいま～」
「頼まれたものを持って来ました」
「おう、戻ってきたか」
「お疲れ様ですー」
エステルは内燃機関ユニットとガソリンタンクを渡した。
「は～、さすがにちょっと重かったかも」
「うむ、ご苦労じゃったの。こちらもちょうど改造が終わったところでな。あとは内燃機関を取り付けてガソリンを入れるだけじゃ。ティータ。さっそく仕上げに入るぞ」
「はーい」
ラッセル博士とティータは仕上げに入った。

しばらく後にその装置は完成した。
「よし、完成じゃあ！」
「うわ～、ずいぶんとゴツイ物がくっついたわね。これが内燃機関のエンジンなの？」
「はい、そーです。この中でガソリンを燃焼させて、その力で工作機械を動かすんです」
「これで導力に頼らずに工作機械を動かせますね」
「うむ、それでは早速スイッチを入れてみるか。……ポチッとな」
ラッセル博士がスイッチを入れると工作機械が動き始めた。
「うわっ、すごい音……」
「導力機関（オーバルエンジン）と比べるとかなりの音と振動ですね」
「うむ、それが難点のひとつでな。だが予想通り《黒の導力器》が発動する恐れはなさそうじゃ。では、このまま解体を始めるぞ」

「ごくっ……」
「ドキドキ……」
エステルたちは固唾をのんで見守る。
そして、工作機械が《黒の導力器》に触れた。その瞬間、大量の火花が散った。
「わわっ……！」
「すごい火花だね……」
「よし、ひとまず止めるぞ。どのくらいフレームが削れたのか確認してみよう」
ラッセル博士が工作機械を止めた。エステルたちはフレームの表面を覗き込んだ。小さな傷がうっすらと付いている。
「た、たったこれだけ？」
「信じられない……。特殊合金製の丸ノコなのに」
「とんでもない材質ですね……」
「しかし、根気よく続ければ何とか切断できそうじゃな。まあ、丸ノコを何枚も交換する必要はありそうじゃが」
「こうなったらガマンくらべってわけね」
その時、マードック工房長が入ってきた。
「博士、ちょっといいですか？おお……無事、改造は終わりましたか」
「あたりまえじゃ。わしを誰だと思っておる。で、なんじゃ。なにか面倒でも起こったか？」
「先ほど、エルモの旅館から博士あてに伝言がありましてね。温泉を汲み上げる導力ポンプが故障してしまったらしいんですよ。このままだと営業できないから博士に直しに来てほしいと……」
「か～っ、なんじゃと！？ええい！この忙しいときに面倒な……」
ラッセル博士は露骨に悔しそうな顔をした。
「なんだったら、代わりの技師でも送りましょうか？」
「いや……４０年以上前のポンコツじゃ。最近の機械しか知らん、若い連中の手には余るじゃろう。ううむ、困ったことになったな」

そこで、ティータが名乗りを上げた。
「あの、おじいちゃん……。わたしがかわりに修理しに行っちゃダメかなぁ？」
「なぬ？」
「ティータ君？」
ラッセル博士とマードック工房長がティータを見た。
「前に連れて行ってもらった時、整備のお手伝いをしたよね？だから、大丈夫だと思うの」
「ふーむ、確かにお前になら任せてもよさそうじゃが……。別の意味で心配じゃのう」
「そうですね。街道には魔獣も出ますし……」
「でもでも、マオおばあちゃんが困っているの放っておけないよぅ……」
エステルとヨシュアが２人して顔を見る。
「……そういう事ならあたしたちに任せてくれない？」
「えっ……」
「街道での安全の確保は遊撃士の義務ですから。責任を持って、ティータさんの送り迎えをさせてもらいます」
「おお、君たちが一緒だったらなんの心配もいらないな」
「ふむ……せっかくだからお願いするか」
「あのあの……ホントーにいいんですか？」
「こ～ら、子供が遠慮しないの」
「よかったら一緒に行こうよ」
「あ、ありがとう。エステルさん、ヨシュアさん。おじいちゃん、工房長さん。それじゃあ、行ってきます」
「おお、よろしく頼むぞ」
「気をつけて行ってくるんだよ」
エステルたちはエルモ温泉へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（１０）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

Ｅｓｔｅｌｌｅ'ｓ　ｇｒｏｕｐ　ａｒｅ　ｇｏｉｎｇ　ｔｏ　Ｅｌｍｏ　Ｈｏｔ　Ｓｐｒｉｎｇ　ｎｅｘｔ　ｔｉｍｅ.

第4章　黒のオーブメント（11）

「エルモかぁ～。ちょっと楽しみだなぁ。たしか温泉地なのよね？」
「はい。とってもいいところですよ。わたしも、おじいちゃんに何度か連れて行ってもらいました」
「ここからだとどうやって行けばいいのかな？」
「えとですね。町の南口から出ると広い草原道があるんですけど……。その道をまっすぐ南に行って道沿いに進んでいけば到着です」
「オッケー。平原道に出てまっすぐ南ね。それじゃあ、レッツ・ゴー！」

―エルモ村

「へぇ～、ここがエルモか。ずいぶん雰囲気のいいとこねぇ。って……なにこの匂い……」
エステルがあたりに漂う匂いを嗅いだ。
「あ、お湯に入っている硫黄成分の匂いなんですよ」
「温泉が湧いているところでは大抵こういう匂いがするらしいね」
「へえ～、なんかタマゴをいぶした時みたいな匂いね。うん、イヤな匂いじゃないかな」
「えへへ……よかった。あ、でも、いつもよりちょっと匂いが薄いような……。湯気も出ていないみたいだし……」
「ポンプが故障したことと関係があるかもしれないね。さっそく修理しに行くかい？」
「あ、ポンプ小屋のカギは旅館にいるマオおばあちゃんが持っているんです。まずはカギを借りないと……」
「オッケー。それじゃあ旅館に行きましょ」

―エルモ村旅館　《紅葉亭》
「こんにちは、マオおばあちゃん」
「おお、ティータ。よく来てくれたね。ついさっき、工房長さんから連絡があったよ。ラッセルのやつ、アンタに修理を押し付けて自分は研究三昧してるんだって？」
「そ、そんなことないよ～。おじいちゃん、ちゃんと来るつもりだったけど、わたしが無理を言っちゃって……」
「は～、アンタって子は本当に健気でいい子だねぇ。でも、あんまりあのジジイを甘やかしちゃあいけないよ？昔から研究のことしか頭になくて、放っておいたらどこまでも自堕落に過ごすからねぇ」
「あ、あはは……」
「（元気なお婆ちゃんねぇ）」
「（博士の知り合いみたいだね）」
「ん、あんたたちは……？」
マオ婆さんがエステルとヨシュアに目を向けた。
「あ、おばあちゃん。紹介するね。エステルさんと、ヨシュアさん。遊撃士協会のブレイサーさんでわたしを、わざわざ送ってくれたの」
「あ、こんにちは」
「よろしくお願いします」
「へぇ、そうだったのかい。わざわざ済まなかったねぇ。アタシャ、この『紅葉亭』の女将をしているマオってババアさ。ラッセルはアタシの幼なじみでこの子も、実の孫みたいなもんさね」
「へ～、そうだったんだ」
「えへへ……。あ、そうそうおばあちゃん。導力ポンプが壊れちゃったってホントなの？」
「ああ、そうなんだよ。４０年前の機械だし、そろそろ寿命なのかねぇ……。ま、いずれ買い換えるつもりだけどとりあえず応急手当をしてほしいんだ。ティータ、できるかい？」

「うん、まかせて」
「よし、これを持っておゆき」
ティータはポンプ小屋の鍵を借りた。
「ポンプ小屋は村の広場から北に登った高台にあるからね。それじゃあよろしく頼んだよ」

高台を上がった所に機械がいろいろ出ている小屋があった。
「あ、ここがポンプ小屋なんだ？」
「はい、そうです。裏山から運ばれたお湯を旅館や広場の井戸に送るんですよ」
「それじゃあ、さっき借りた鍵を使おうか」
ポンプ小屋の鍵を使うと、鍵が外れた。

―エルモ村　ポンプ小屋
「へ～、これがポンプ装置か」
「昔のものとは思えないほどきれいに手入れされているね」
「えへへ……。おじいちゃん、このポンプは毎年手入れしているみたいです。４０年前、オーブメントはまったく知られていなくて……。その便利さを知ってもらうために最初に作ったものだって聞きました」
「なるほど……そりゃ、思い入れがあるわけだわ」
「そういう事ならしっかりと修理しなくちゃね」
「はいっ！」
ティータはさっそく修理に取り掛かった。
「えっと……まずは機関部の点検から……。そこに問題がないならスクリューと配管をチェック……」

ティータはあちこちを見て回っている。
「えっと、何かあったらあたしたちも手伝うけど……」
「あ、大丈夫ですよー。1人でなんとかなりますから。エステルさんたちは旅館でゆっくりしててください」
そして再び作業に取り掛かるティータ。
「キャビテーションと水撃作用の可能性の考慮……。うーん、それからそれから……。あ、サージングの問題もあった！」
「やっぱり、あたしたちがいても何の手伝いにもならないかも……」
「うん、そうみたいだね。ここはお言葉に甘えて旅館で待たせてもらおうか」
エステルとヨシュアは旅館に戻ることにした。

「おや、アンタたち。ティータはどうしたんだい？」
「うん、修理を始めたわよ。側にいたらかえって邪魔になりそうだったからここで待たせてもらうことにしちゃった」
「あはは。それが賢明かもしれないね。あの子はある意味、ラッセル以上の天才だからね」
「天才……。言われてみればそうかも」
「たしかにあの歳で中央工房の手伝いをしているなんて普通じゃ考えられませんからね」
「おまけによく気がつくし、健気でいつも笑みを絶やさない。まあ、機械いじりを始めるとすぐに熱中しちまう所はあるが……。本当によく出来た子だよ。……でもね……。……」
マオ婆さんはそこで口を閉ざした。
「どうしたの、おばあちゃん？」
「いや、なんでもない」
「おーい、マオ婆さん！」
そこに男性が入ってきた。

「エド、戻ったのかい。すっとんきょうな顔していったい何があったんだい？」
「いや、その……。ちょっと聞きたいんだけど……。あの王都から来た姉ちゃん、ちゃんと帰ってきているかい？」
「王都から来た……。ああ、昨日来たお客さんかい。散歩に行くとか言って出かけたきり帰ってないよ」
「やっぱそうか……。うーん、まずったなぁ」
「なんだい？村の中にいるんだろう？」
「いや、その……実はさ。さっき、村の出口であの姉ちゃんを見かけたんだ。なんか、景色のいい所を探しに平原を散策するとか言って……」
「平原を散策だってぇ？魔獣もいるのにバカなことを……。このスットコドッコイ！なんで止めなかったんだい！？」
「止めた、止めたってば！ただ、なんていうかすごくマイペースな人だろ？こちらの言うことをどこまで真剣に考えているか後から心配になっちゃってさ」
「あのー、ちょっといい？」
「ん、なんだい？あれ、新しいお客さん？」
「そのお客さんを、出口で見かけたのはいつごろですか？」
「いつごろって……。ちょうど昼時だったと思うよ。昼メシに帰るとこだったからね」
「昼時か……。うん、何とか追いつけそうね」
「急いで追いかけようか」
「えっと……？」
「あたしたち、こう見えても遊撃士協会の人間なのよ」
「これから、平原に出てそのお客さんを保護してきます」
「なに、あんたら遊撃士！？こりゃ頼もしい。よろしく頼んだぜ」
「頼んだぜ、じゃないだろっ。まあいい……。お客さんの安全の方が大事だ。アンタたち。すまないけどよろしく頼んだよ」
「うん、まかせて！」

「それでは行ってきます」

第４章　黒のオーブメント（１１）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

女性客を追いかけることになったエステルたち。果たして追いつけるか！？

第4章　黒のオーブメント（12）

―トラット平原

「さてと……。平原道って広いけどどこから探せばいいのかな？」

「そうだね、景色のいい場所を探してたって言うから……。舗装された道から外れた場所にいる可能性が高そうだ」

「あっちゃあ～……ますます危ないじゃないのよ。まあいいや！とっとと捜して連れ戻しましょ！」

「ふえ～ん……！やだやだ、助けて～～～っ！」

少し探し回ったところで娘の声が聞こえてきた。

「今のは……」

「うん、近いね」

「女神（エイドス）さまぁ！お父さん、お母さ～ん！ナイアルせんぱ～い！たすけてくださいよ～！」

なぜここでナイアルの名前が出てくるっ！？これで誰かは決定的だけど……。

「こ、これって……」

「想像通りと思うけど……とりあえず急ごう！」

エステルとヨシュアは急いで向かった。

魔獣に囲まれているドロシー。ドロシーは魔獣に説得している。無駄だと思うけど……。

「ワ、ワンちゃんたち……。とりあえず話し合いましょ～？わたしなんか食べたって美味しくないと思うのですよ～。毎日12時間以

上寝てお野菜もしっかり食べてるからお肌もツルツルだしぃ……。
……って、なにげにヘルシーで美味しそう！？」
1日の半分以上を寝て過ごしていることを激白ッ！
魔獣はさらにドロシーを追い詰める。
「ひぃ～ん。こんなことなら給料前借りして食べ放題しとくんだったぁ！」
その時、半泣きのドロシーの元にエステルとヨシュアが突っ込んだ。
「ハッ……あ、あなたたちは～！」
「ふう……やっぱり思った通りね」
「ドロシーさん。もう心配ありませんよ」
「……。……どちらさま、でしたっけ？」
さっきの言葉は何だったんだ？
「ガクッ……」
「……遊撃士協会のエステルとヨシュアです」
「うふふ、冗談だってばぁ。エステルちゃん、ヨシュア君。こんな所で会うなんて奇遇ねぇ」
喰われかけたとは思えないほどのほほんとしているドロシー。
「は、激しくやる気が……」
「エステル、来るよ！」
ヨシュアの声と同時に魔獣が飛び掛ってきた。
魔獣を全て追い払ったエステルたち。
「はあ……。なんとか追っ払えたわね」
「エステル……気付いたかい？」
ヨシュアがエステルに尋ねる。
「うん……。峠の関所を襲った魔獣ね。どうしてこんな所まで……」
「わ～、スゴイスゴイ。さっすが遊撃士だねぇ。しばらくぶりねぇ。
エステルちゃん、ヨシュア君。まさか、こんなところで会えるとは

思わなかったよ～。はっ、これってもしかして運命の出会いっていうやつ！？」
「なんの運命よ、なんの……」
「ところで、ドロシーさん。エルモの旅館に泊まっているお客さんって、あなたですか？」
「そうだけど……。あれ～、なんで知ってるの？」
エステルとヨシュアはエルモの旅館の女将に宿泊客の保護を依頼されたことを説明した。
「あ、そうなんだ～。それは大変だったねぇ」
「な～に他人事みたいに言ってんのよ。で、こんな街道の外れでいったい何をしていたわけ？」
「ちっちっち……。そんなことも分からないの～？くすくす、エステルちゃんもまだまだ洞察力が足りないなぁ」
得意気に指を振るドロシー。ものすごく頭にくる台詞だ。それが、ドロシーに言われたものだからなおさらだ。
「あ、あんですって～！？」
「正解は、今度の特集に使えそうな写真のネタを捜してた、でした～。あ、ちなみにナイアル先輩にやれって言われた宿題なんだけどね」
「なるほど、仕事だったんですか」
「だからって、こんな場所でネタ探しをしなくても……。ああもう、なんか戦い以外で激しく疲れたような気がする……」
「大丈夫～、エステルちゃん？痛いの痛いの、とんでけー」
「疲れさせた張本人がなにを抜かしとるかああっ！」
エステルのムカツキが頂点に達した。
「（エステルにここまで突っ込まれる人も珍しいな……）」
ヨシュアはただ見守っているだけである。
「ねえ、エステル。とりあえずエルモに戻らない？そろそろポンプ修理も終わっているかもしれないし」
「はあはあ……そ、そうね……。そういうわけで……ドロシーも一

緒に戻るわよ」
「え～、まだ写真撮りたいのに～」
渋るドロシー。とことん懲りない性格だ。
「戻・る・わ・よ」
「エステルちゃん、コワイ……」

―エルモ村
エルモ村に戻ったときには、既に夕方になっていた。
「あ……。見て、湯気が湧き出してる！」
「うわ～、ほんとだぁ！」
井戸からは確かに湯気が出ていた。
「どうやらポンプの修理が無事、終わったみたいだね」
「ふえ～っ。これでやっと温泉に入れるよぉ。もう思い残すことはないかも～」
「そんな大げさな……」
「ドロシーさんってそんなに温泉が好きなんですか？」
「てへへ、それはもう。なんと言っても湯上がりに飲むフルーツ牛乳が最高なんだよねぇ。それじゃあ、わたしはさっそく温泉に入ってくるから～」
さっそく旅館へと向かうドロシー。
「あ、そうだ」
そこで、ドロシーは突然足を止めた。
「エステルちゃん、ヨシュア君。さっきはありがとね～！あぶないところを助けてくれて～」
「あ、あのタイミングでお礼を言ってくるなんて……。ほんとにもう。ピントがズレてるんだから」
「はは、ドロシーさんらしいね。それじゃあ、僕たちはポンプ小屋の方に行こうか」

「あ、そうね。ティータちゃんがまだ残ってるかもしれないし」
エステルとヨシュアはポンプ小屋へと向かった。

―ポンプ小屋
「……」
ティータはうかない顔で立ち尽くしている。
「ティータちゃん。修理、終わったみたいね？」
「あ……。エステルさん、ヨシュアさん。えへへ……。今、ちょうど終わったとこです。ちゃんとお湯が送られているかまだ確認はしてないですけど……」
エステルとヨシュアが入ってくると笑ってみせるティータ。
「大丈夫、広場の井戸にお湯がちゃんと沸いてたわ」
「結局、なにが原因だったの？」
「えとですね……ポンプ装置そのものは問題なかったんですけど……。スクリューを回すクランク軸が腐食して折れちゃってたんです。防錆効果のあるパーツと交換したからもう大丈夫ですよ」
「そっか、ご苦労さま」
「それじゃあ旅館に戻って女将さんに報告しようか？」
「はいっ」
エステルとヨシュアにはティータの憂いの顔には気付かなかったようだ。

―紅葉亭
「ティータ、ありがとうよ。ちゃんとポンプを修理してくれたみたいだね」
「えへへ……。いつもお世話になってるからこのくらい当然だよぉ」

「ほ、いっちょまえな口を叩くようになったじゃないか。それと、アンタたちもさっきはご苦労さんだったね。なんでも知り合いだったんだって？」
「あはは、ま～ね」
「なにかあったんですか？」
ティータはもちろん知らない。
「ちょっとした遊撃士の仕事があってね」
「アンタたちには本当に世話になっちまった。お礼といってはなんだけど今日は泊まって休んでおいき」
「え、いいの！？」
「あ、あの、おばあちゃん。わたしたち、今夜泊まるっておじいちゃんに言ってなくて……」
「ああ、心配いらないよ。さっき、ラッセルから連絡があってね。『こちらの作業は明日までかかるから今夜はそっちに泊めてもらえ』ってさ」
「おじいちゃんが？」
「へえ～。博士ってば気が利くじゃない」
「そういうことならお言葉に甘えてもいいかもね」
「ああ、遠慮は無用だよ。２階の『柚子の間』っていう部屋を用意したから、荷物を置いておいで。夕食まで、しばらくかかるからそれまで温泉に入ってるといい」
「食事前にオフロ？え、オフロって普通、寝る前に入るもんじゃないの？」
「な～に言ってんだい。せっかくの温泉なんだよ？朝から晩まで一日中、何べんも入るのが普通さね」
「ふふ、１日３回くらいは平気で入るかもしれないです」
「そ、そういうものなんだ……。うーん、オフロは好きだけど、さすがにのぼせそうな気が……」
「部屋に荷物を置いたらさっそく行ってみようか」
成り行きで《紅葉亭》に泊まることになったエステルたちであった。

第４章　黒のオーブメント（１２）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

温泉でまったり……？

第4章　黒のオーブメント（13）

―紅葉亭　2階　柚子の間

「へ～、いい部屋ねぇ」

「本当だ。東方風の内装がいい感じだね」

「マオおばあちゃん、東方の生まれって言ってました。小さなころ、家族と一緒にリベールに移住したんですって。この村は、おばあちゃんと同じ東方系の人がけっこういるんです」

「あ、だから村の雰囲気もちょっと変わった感じなんだ。これは食事も期待できそうかも」

「そうだね。でも、せっかく勧められたからその前に温泉に行ってみない？」

「あ、そうね！ティータちゃん。あたしと一緒に入ろう？」

「は、はい」

「荷物を置いたらさっそく出かけようか」

「さてと。邪魔な荷物も置いたし……。あれ、温泉ってどこにあるの？」

「あ、裏手にある離れがお風呂専用になってるんです。奥にはおっきな露天風呂もあるんですよ」

「露天風呂というと……屋外に作られた風呂のことだね」

「へ～、なんか面白そう！それじゃあ、レッツ・ゴー！」

「わ～、もうすっかり暗いわね」

「東方風の庭か……風流だね」

「あ～！エステルちゃんたちだぁ～！」
この声は……。
「あれ、ドロシー？」
「エステルちゃんたちもお風呂に入りにきたの～？ここのお風呂はいいよ～。広くてのーんびりできるし。ちょっぴり湯につかりすぎて頭がクラクラしちゃったけど～」
「あたしたちと別れてから今までず～っと入っていたの？」
「そうだよぉ。ふあ～、気持ちよかった～っ。あれ、そこの女の子はなんか初めて見るカオねぇ？」
「あ、初めまして……ティータっていいます」
「へー、ティータちゃんか。わたし、ドロシーっていうの。王都にある雑誌社のカメラマンをしてるんだぁ」
「カメラマン……わぁ、素敵なお仕事ですねぇ」
「てへへ……それほどでも。あ、そうだ。エステルちゃんたちもこの旅館に泊まるんだよねぇ？よかったらお食事一緒にしない？」
「あ、いいかもね」
「僕たちが上がるまで待っていてもらえますか？」
「うん、フルーツ牛乳飲みながら待ってるよ～。それじゃあ、また後でね～」

「えっと……ここがお風呂の入口よね？」
「エ、エステルさぁん。こっちは男湯ですよぉ……」
エステルが開けようとしたのは男湯だった。
「あ、なるほど。男女分かれてるんだ。そりゃ当然よね。着替えたりするんだし」
「コホン……。それじゃあ、ここでお別れだね」
ヨシュアは男湯に、エステルとティータは女湯に向かった。

「は～、極楽、極楽。温泉って、初めて入ったけど想像以上に気持ちいいわねぇ。ドロシーじゃないけど、こりゃあ病みつきにもなるわ」

「ふふ……。わたしもかなり病みつきです。小さなころから、おじいちゃんに連れてきてもらってましたから」

「そうなんだ……。あれ、あそこの扉ってなに？」

エステルが目をやった先には扉があった。

「あ、さっき言っていた露天風呂に繋がってるんです。とっても大きくて１０人でも入れそうな感じです」

「へえ、そうなんだ～……。ほふ～、旅の疲れが溶け出る感じがする～」

「エステルさんたちって歩いて旅をしてるんですよね。なんで飛行船を使わないんですか？」

幾度となく聞かれてきた質問。

「うーん、修行のためかな？あと……父さんの言葉っていうのが大きかったかもしんない」

「カシウスおじさんの……？」

「うん、父さんの教え子でシェラ姉ってのがいるんだけど。父さん、やっぱりその人に徒歩での旅を勧めたのよね。守るべき場所を、自分の足で実際に歩いて確かめてみろってね」

「わ、カッコイイ……」

「普段はおちゃらけてるけど、決める時は決めてたみたい。はあ、今ごろどこをほっつき歩いてんだか」

「……エステルさん……」

「あはは、ごめんごめん。しめっぽくなっちゃったかな。ま、あたしたちの修行があるし、心配ばかりもしてられないからね。今できるのは……うん、信じることくらいかな」

「信じること……。……」

「ん、どうかした？」
「ううん、なんでもないです。あっ……そうだ！わたし、エステルさんに聞きたいことがあるんですけど」
「聞きたいこと？なになに？何でも聞いていいわよ？」
「えと、あの、その……。エステルさんとヨシュアさんってもう結婚しているのかなぁって」
「……」
「ドキドキ……」
「えっと、ゴメン。聞き間違っちゃったみたい。あたしとヨシュアが何だって？」
「あう、ですからぁ。もう結婚してるのかな～って」
「な、な、な……。なんでそうなるワケ！？」
エステル絶叫。
「だ、だって名字が同じだし……。兄妹にしては似ていないからってっきりそうなのかな～って……」
「に、似てないのは血がつながっていないからっ！みょ、名字が同じなのはヨシュアが父さんの養子だから！」
「あ、そーなんですか……。えへへ、ごめんなさい。ちょっと勘違いしちゃいました」
「と、とんだ勘違いだわ……。そもそも、あたしもヨシュアもまだ16歳なんだから。結婚なんて全然先の話だってば」
「そ、そーですよね。いくらお互いが好きでもそんなに早く結婚しませんよね」
「ガクッ……。だ、だからぁ！あたしとヨシュアは恋人でも何でもないの！ただの家族よ、家族！」
エステル、再び絶叫。
「そ、そーなんですか！？」
「そーなんですかって……。……。あの、ティータちゃん。あたしとヨシュアってそーいう雰囲気に見える？」
「そーいう雰囲気って？」

「だ、だから……。こ、恋人同士みたいな雰囲気よ。らぶらぶとかあつあつとかいちゃいちゃとか、そういうの」
エステルは照れ隠しのため顔を背けながら言った。
「あう……そーいう感じはしませんけど。でもでも、いつも一緒で自然な感じだし、お互いのことを分かり合ってるような感じだし……」
「いや、それはまあ、少しはそうかもしれないけど……。それって、家族とか親友でもありそうな雰囲気じゃない？だいたい、あたしとヨシュアってそんな雰囲気になったことすら……」
エステルの脳裏にはロレントの時計台の上での出来事やマノリアの風車前での昼食やカルデア隧道での事など色々浮かんできた。
「（な、何思い出してんのよ～！っていうか、あたし今まであんな恥ずかしいことを平気で……）」
「？？？エステルさん？お顔、まっかですけど……」
「あわわ……何でもない、何でもないから！いや～、それにしても温泉ってホントーに効くよね！？血の巡りが良くなりすぎて頭がクラクラするっていうかっ！」
それは妄想による照れが原因だな。
「は、はあ……」
「そ、そういえば露天風呂があったんだっけ？のぼせてきちゃったし、あたしちょっと行ってくるね！」
「あ、はい……」
エステルは飛び出るようにして行ってしまった。
「あ、そーいえば。エステルさん、露天風呂って……。……混浴なんですけど」
ティータの声はエステルには届かなかった。
「（は～、あせった……。心臓がバクバクいってる……。あたし…

…この前からどうしちゃったんだろ……。今まで、ヨシュアをそういう風に意識したことなんてなかったのに……。……。……。ええい、悩むのやめっ！あたしのキャラじゃないしっ！」

エステルは露天風呂につかった。

「は～っ、いい気持ち～！中のお風呂もよかったけど外のはまたカクベツよねぇ。うーん、広くてのびのびできるし……」

「……言っておくけど、泳いだりしたらダメだからね」

どこからともなく声がした。

「ギクッ……そんなことしないわよ！」

図星だったらしい。

「……。……え」

その声の主はヨシュアだった。

「やあ、エステル。お先に入らせてもらってるよ。はは……この格好だとさすがにちょっと照れるね」

「……」

「で、でも温泉って思った以上に効果があるね。傷にも良さそうだし体の芯から疲れが取れそうだ。遊撃士稼業にはぴったりかもしれないな」

「……」

エステルは口を開けっ放しだ。

「えっと、その……。こういう状況で黙られると落ち着かないんですけど……」

「え、う、あ……。きゃあああああああああああ！」

本日、３度目の絶叫。

「ものすごい悲鳴がしたから何かと思って飛んできてみれば……。まったく人騒がせな娘だねぇ」

「ううう……スミマセン」
「いいかい。この露天風呂は混浴なんだ。脱衣場の張り紙に書いてあっただろう？」
「あう……」
「……要するにまったく見てなかったんだね」
「だいいち、裸の一つや二つ、見られたからって騒ぐんじゃないよ。女の肌ってのは見られてキレイになるもんだからね」
「そ、そうなのー！？」
「そこ、信じちゃダメっ！っていうか、そもそも裸は見られてないもんっ！」
すかさずエステルが言った。
「まあ、それはともかく風呂くらい仲良くお入り。ここは本来、家族で入れるように混浴にしてあるんだからね。それじゃあ、アタシは行くよ」
マオ婆さんは露天風呂から出て行った。
「は～……なんか思いっきり疲れた……。う～っ、それもこれも全部、ヨシュアのせいなんだからっ！」
エステルはヨシュアのせいにした。
「なんで僕が……。結局、エステルが1人で大騒ぎしてただけじゃないか。脱衣場の張り紙も見てないし、日頃の注意力が足りない証拠だね」
「よ、よけーなお世話！ほんとにもう、可愛くないんだからっ！」
「あー、そうですか。いいよ、別に。君に可愛いと思われたって嬉しくともなんともないからね」
「あ、あんですって～！？」
「大体、なんだよ。人を見るなり悲鳴を上げて……。そんな反応されるなんて……夢にも思わなかったよ」
「あ、あれはその……あまりにもタイミングが……。別にヨシュアと一緒がイヤってわけじゃないからね？」
「いいよ、無理しないで。僕はもう上がるから2人でゆっくり入っ

ていきなよ」
「無理してるなんて一言も言ってないでしょっ！ヨシュアのバカっ！」
「む……バカはどっちさ」
「クスクス……」
ティータがそのやりとりを見て笑っている。
「ほ、ほら！ティータちゃんにも笑われちゃったじゃない！」
どこまでも人のせいにするエステル。
「だからなんで僕が……。ご、ごめんね。みっともないところ見せて」
「あ、ううん。笑ったりしてごめんなさい。ただ……うらやましいなって思って」
「う、うらやましい？」
「えっと……どうして？」
「わたし、兄弟がいないからケンカとかしたことがないんです。おじいちゃんは優しいからあんまり叱られたことないし……。お父さんとお母さんはあんまり一緒にいられないから……」
「え……」
「あの、ティータちゃんのお父さんとお母さんって……？」
「２人とも、導力技術者でずっと外国に行ってるんです。オーブメントの普及していない所で技術指導をしているみたいで……。もう何年もツァイスに戻って来てないんです」
「そうだったんだ……」
「それは……寂しいね」
「そんなこと、ないです。おじいちゃんがいてくれるから。中央工房の人たちもみんな親切でいい人ばかりだし。でも……エステルさんたちを見ているとちょっとうらやましいなぁって……。えへへ、こういうのって無いものねだりって言うんですよね」
ティータは笑っているが、その奥の哀しみは隠しきれていない。
「ティータちゃん……」

「……。いいこと思い付いちゃった」
「え……」
「エステル？」
「あたしが、ティータちゃんのお姉さんになってあげるわ！ちなみにヨシュアはお兄さん」
「ふえっ！？」
「はあ……また突拍子もないことを……」
「なによう、文句でもあるの？」
「いや……エステルらしいと思ってね。僕も異存はないよ。ティータちゃんさえよければね」
「……あ……。あ、ありがとう……エステルさん、ヨシュアさん。わたし、わたし……なんだかすっごく嬉しいですっ」
「それじゃあ、決定っ！あ、そうそう。もう『さん』付けはナシね？代わりにあたしたちも呼び捨てにさせてもらうから」
「そうだね。あと、博士と話す時みたいに気軽に喋ってくれると嬉しいな」
「あ、あう……。さん付けはやめて気軽に……。……」
……」
ティータはいきなりの状況に悩んでいるようだ。
「エステルお姉ちゃん。それと、ヨシュアお兄ちゃん。……こ、これでいいのかなぁ？」
「うん、バッチリ！」
「あらためて、よろしくね」

―その頃
「うー、遅いよ～。エステルちゃんたちってばぁ。はう～、フルーツ牛乳飲み過ぎてお腹タプタプになっちゃった……」
ドロシーの机の上にはフルーツ牛乳の空ビンがいっぱい置いてあっ

た。

風呂から上がったエステルたちはむくれたドロシーをなだめつつ、宿自慢の東方料理に舌鼓を打った。食後は４人でカードゲームに興じ、しばらくしてから再び温泉に……。そうして、温泉地の夜はゆったりと更けていくのだった。

第４章　黒のオーブメント（１３）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ツァイスに帰ると、事件が！次回、話が急展開！

第4章　黒のオーブメント（14）

―エルモ村　朝

「それじゃあ、マオ婆さん」

「色々とお世話になりました」

「はは、くつろいでもらえたようで何よりだよ。ティータもずいぶんと楽しそうだったじゃないか？」

「えへへ……そうかなぁ？」

「どうやら、昨日のうちにずいぶんと仲良くなったみたいだね。そういえば……眼鏡の娘の姿が見えないけど、あの子はどうしちまったんだい？」

「うーん、なんかまだ寝てるみたいなのよね。いくら声をかけても起きないから失礼しちゃうことにしたわ」

「ドロシーさんが起きたらよろしく伝えておいてください」

「ああ、わかったよ。ティータ、ラッセルのやつによろしく伝えておいておくれ。研究ばっかりやってないで規則正しい生活を心がけろってね」

「ふふ、伝えておくね。おばあちゃんもお元気で。今度また、遊びに来るから」

「ああ、待ってるよ。あんたたちも機会があったらまたおいで。風呂だったらいつでも入ってくれていいからね」

「うん！絶対に寄らせてもらうね」

「料理も美味しかったですし、ぜひまた寄らせてもらいます」

マオ婆さんは微笑むと、旅館の中に戻っていった。

「いや～、ばっちりリフレッシュしちゃったわね」

「これも、ポンプの修理に付き合わせてもらったおかげだね。ティータには感謝しなくちゃな」

「そ、そんなぁ。わたし、何もしてないよ。お姉ちゃんたちこそ昨日はありがとう。わたし……とっても楽しかった」

「えへへ。そう言ってくれると嬉しいな。ま、ここはおあいこってことで」
「うんっ」
「さてと、それじゃあそろそろツァイスに戻ろうか？《黒の導力器》の解体も終わってる頃かもしれないし」
「あ、そっか……。そんな話も残っていたわね。いや～、すっかり忘れてたわ」
「はあ……そんな事だろうと思った」
「ふふ。エステルお姉ちゃんたら」
とにかくエステルたちはツァイスに向かった。

エルモ村を出ようとしたとき、
「待って～！」
ドロシーが慌てて走ってきた。
「あ、ドロシー。やっと起きたんだ」
「はあはあはあ……。み、みんなヒドイよ～！わたしだけ置いていくなんてぇ」
「へっ……？」
「ドロシーさん、記事用の写真を撮るためにまだ滞在するって言ってませんでした？」
「あれ、そうだったっけ？まあいいや～。私だけ仲間はずれはヤだし。ティーちゃんもいいよねぇ？」
そういって、ティータの方を見た。
「ティーちゃん……。わ、わたしのことですか？」
「なに、適当に略してんのよ」
「『ティータちゃん』てなんか呼びにくいんだもん。だめかなぁ？」
「ううん、別にいーですよ」
「ありがと、ティーちゃん♪」

「はあ……ほんとにマイペースなんだから。ま、そういうことなら一緒にツァイスに戻りますか」
「えへへ、そうこなくっちゃ」
「それじゃあ、あらためて出発しようか」
一行は気を取り直し、ツァイスへと向かった。

―トラット平原
「おお、ちょうど良かったぜ」
前方から東方風の男性が現れた。
「よう、お嬢さんがた。ちょいと聞きたいんだが……」
「へっ……」
「わあ、おっきな人……」
「はわわ、く、熊さん!?」
「熊って……まあいいか。別にあやしいモンじゃない。ちょいと道を聞きたいだけだ。エルモって温泉地がどこにあるか知らないか？」
「あ、それならちょうどあたしたちが来た方向だわ」
「ここから南に向かって道沿いに歩けばありますよ」
「おお、そうか。不案内だったから助かったぜ。あれ、お前さんたち……。……」
東方風の男性はエステルたちをじっと見た。
「えっ？」
「ふーむ、なるほどな。コイツはひょっとしたら……」
「僕たちがどうかしましたか？」
「いや、すまんな。大したことじゃあないんだ。それじゃあ、またな」
東方風の男性は行ってしまった。
「な、なんか飄々（ひょうひょう）とした人ねぇ。東方風の服装だったけどやっぱり外国から来たのかな」

「ツァイス地方の東側にはカルバード共和国への玄関口にあたる《ヴォルフ砦》があるからね。そこからやって来たのかもしれない」
「うん、きっとそーだと思うよ。マオおばあちゃんもそうだけどツァイス地方には東方の人がけっこう住んでいるの」
「あ、確かにキリカさんとかもそうね」
「それにしてもでっかい人だったよね～。わたし、ビックリしちゃった」
「ふふ、ほんとーに熊さんみたいな人でしたね」
「でも、あれは熊なんて生易しいもんじゃないわよ。かなりの武術の腕と見たわね」
「わかるの、お姉ちゃん？」
「ま、あたしも武術家のはしくれだからね。大きいだけじゃなくて鍛え抜かれた身体をしてたわ」
「そうだね……。足の運び方も無駄がなかった。エステルの読み通り、達人クラスかもしれない」

―ツァイス市
「あれ……！？」
エステルがツァイス市に入ったところで突然、足を止めた。
「どうしたの？エステルお姉ちゃん」
「気のせいかもしれないけどなんか騒がしいような気が……」
「……気のせいじゃない。遠くからざわめきが聞こえる。中央工房の方からだ」
「えっ……！？」
「ほええ、どういうこと～？」
「わからないけど……。行ってみた方が良さそうね」
エステルたちは中央工房へと急行した。

―ツァイス中央工房前
「ああっ！？」
エステルが見上げた先には、中央工房から煙が出ており、研究員達が続々と逃げ出ていた。
「はあはあ……。し、死ぬかと思った……」
トランス主任が動揺している。
「無事で何よりだ。よし、これで全部かね！？」
マードック工房長がヘイゼルに確認した。
「は、はい、常勤の方は……」
「工房長さん！」
「おお、君たちは……。エルモから戻ってきたのか！」
「いったい何の騒ぎなの！？」
「どうやら建物内部で何かのガスが発生したらしい！地下から5階まで煙まみれだ！」
「まさか、火事ですか？」
「消火装置が作動してないからその心配はなさそうだ。だが、なぜ煙が出ているのかまったく見当がつかなくてね……」
「あ、あの、工房長さん。おじいちゃんはどこですか？」
ティータが尋ねた。
「おや、そのあたりに……」
周りを見渡すが、ラッセル博士の姿は見えない。
「ヘイゼル君。確認したんじゃないのかね？」
「そ、それが……。職員は全員確認しましたが、ラッセル博士の退去はまだ……」
「！！！」
「なんだって！まだ中に残っているのか！？」
「工房長さん！ここはあたしたちに任せて」
「僕たちが様子を見てきます」

「す、すまない。よろしくお願いする」
「わ、わたしも行く……！」
ティータが中央工房に入ろうとするエステルとヨシュアに言った。
「えっ……」
「ティータ君？」
「中央工房のことなら色々と知っているから……。お姉ちゃんたちをちゃんと案内するから……」
「ティータ……。わかった、一緒に来て」
「ただし、危なくなったらすぐに戻ってもらうからね？」
「う、うん……」
「あ、あの～。わたしも付いていっちゃ……」
「だめ」
エステルは即答した。
「済みません。遠慮してください」
「あう、即答……。でも仕方ないかぁ。くれぐれも気をつけてね？」
「博士がいるとしたらたぶん3階の工作室だろう。まずはそちらを確認してくれ」
「うん、了解！」
「それじゃあ行ってきます」

第４章　黒のオーブメント（１４）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

中央工房で謎の煙が大量発生。そして、ラッセル博士の安否は！？

第4章　黒のオーブメント（15）

―中央工房　1階

中央工房の中は話どおりに煙で充満していた。

「うわっ……。これは確かに煙っぽいわね。あれ、でも、あんまり息苦しくないような」

煙は確かに充満していたが、火災の時の煙とは違い、息をつめるようなものではなかった。

「このモヤは……。多分、攪乱（かくらん）用の煙幕だと思う。フロアのどこかに発煙筒が落ちているはずだ」

「へっ……？」

「ど、どうしてそんなものが……」

「それは分からないけど……。発煙筒を止めさえすればモヤはすぐに消えると思う」

「わかった。見つけ次第止めるとして……。ラッセル博士はやっぱり3階の工作室にいるのかな？」

「う、うん……。たぶんそうだと思うけど……。おじいちゃん、研究に熱中すると周りが見えなくなっちゃうから……」

「とにかく3階に行ってみよう」

「あ……。ヨシュア、これって！？」

エステルが何か見つけたようだ。

「さっき言った発煙筒だ。ちょっと貸してみて」

ヨシュアは発煙筒を素早く解体した。

「わ……モヤが無くなったわ！」

「すごい……。ヨシュアお兄ちゃん」

「これと同じ発煙筒が他にもあると思う。見つけ次第解体しよう」

「オッケー！」

エステルたちはエレベーターに乗ろうとしたが、
「あれ……？自動ドアが開かないわ」
「導力が通じていない……？」
「ううん……。ちゃんと生きてるみたい。誰かがエレベーターを使っている最中なのかも……」
「誰かがって……もしかしてラッセル博士？」
「いや、それにしてはすぐに降りてこないのは変だ。いずれにせよ、上に行くには非常階段を使うしかなさそうだ」
「うん……そうだね」

―中央工房　３階　工作室
「おじいちゃん、大変だよ！……あ……」
しかし、そこには誰もいなかった。そして、工作機械だけが動いていた。
「誰もいない……。ていうか、どうして機械だけが動いてるわけ？」
「と、とりあえず機械を止めなくっちゃ……」
ティータは工作機械のスイッチを切った。
「ふう……。おじいちゃん……どこにいっちゃったのかな？」
「博士もそうだけど……《黒の導力器》も見当たらない。これはひょっとしたら……」
その時、背後から声がした。
「フン、ここにいやがったか」
そこに立っていたのは、まさかのアガットだった。
「ア、アガット！？」
「どうしてこんな所に……」
「そいつはこっちの台詞だぜ。騒ぎを聞いて来てみりゃあまたお前

らに先を越されるとはな。ったく、半人前のクセにあちこち首突っ込みすぎなんだよ」
「こ、こんの～……。あいかわらずハラ立つわねぇ！」
「あの……。お姉ちゃんたちの知り合い？」
「アガットさんと言ってね。ギルドの先輩ブレイサーなんだ」
「おい、ちょっと待て……。どうしてガキがこんなところにいやがる？」
アガットはティータを睨みつけた。
「……ひっ……」
「ちょ、ちょっと！なに女の子を脅かしてんの！？」
「……。チッ……。言いたいことは山ほどあるが後回しにしといてやる。それで、一体どうなってるんだ？」
「はい、実は……」
エステルたちはラッセル博士の姿が見当たらないことを説明した。
「フン、発煙筒といい、ヤバい匂いがプンプンするぜ。時間が惜しい……。とっととその博士を捜し出すぞ！」
「うん！」
「了解です」
「……おじいちゃん……」

―中央工房　5階
「あれ、どうして扉が……」
なぜか演算室の扉が開いていた。
「……待たせたな。最後の目標を確保した」
「よし……。それでは脱出するぞ。用意は出来てるだろな？」
なにやら不審な声が聞こえてきた。しかも、聞き覚えのある声だ。
「今の声は……！」
「急ぐぞ！エレベーターの方だ！」

エステルたちはエレベーターの方へ急行した。

「いた……！」

「てめえらは……！」

「お、おじいちゃん!?」

エレベーターの前には黒装束の男たちがいた！

「む……。アガット・クロスナー!?」

「面倒な……。ここはやり過ごすぞ！」

黒装束の男たちはエレベーターに乗り込んだ。

「ま、待ちなさいよっ！」

「逃がすか、コラアッ！」

しかし、扉が閉まり、間に合わなかった。

「クソ……間に合わなかったか！」

「も、もう一歩だったのに……」

「そ、そんな……。どうしておじいちゃんを……」

「とにかく非常階段で下に降りましょう。このまま中央工房から脱出するつもりみたいです」

「ああ、逃げるとしたら、町かトンネル道のどちらかだ。急ぐぞ、ガキども！」

「言われなくても！」

エステルたちは1階から外へと急行した。

―ツァイス市

「あ、エステルちゃんたち！」

「おお、無事だったかね。軍の人間が出てきたから何があったのかと思ったよ」

「軍の人間だと……!?」

「ちょ、ちょっと待って！黒ずくめの連中じゃないの？」
「なんだね、それは？蒼と白の軍服を着た礼儀正しい軍人たちだったが……。エア＝レッテンの関所から駆けつけてくれたそうじゃないか」
「あの軍服はたしか女王様の親衛隊だね～。カッコ良かったから思わず写真に撮っちゃったぁ」
「親衛隊って……あの！？」
「ルーアンで市長を連行していった人たちだね。でも、どうしてこんな所に……」
「あ、あのっ！その人たち、おじいちゃんを運んでいませんでしたかっ！？」
「ラ、ラッセル博士を！？い、いや……？大きな荷物は運んでいたが……」
「！！！」
「間違いない、あいつらだわ！」
「エレベーターの中で軍服に着替えやがったのか……。くそ、舐めたマネしやがって！」
「ちょ、ちょっと待った！それはいったいどういう……」
「詳細は後ほどお話します。その軍人たちはどちらに去っていきましたか？」
「よ、用があるとかで町の方に降りていったが……」
「追いかけるぞ！」
「絶対、逃がすもんですか！」
エステルたちは手分けしてツァイスの市街区を探し回ったが……。
とうとう博士を掠った男たちを発見することはできなかった。

第４章　黒のオーブメント（１５）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ここにきてまさかの黒装束の男たちが現れた。彼らの目的は何なのか！？話はさらに加速する！

第4章　黒のオーブメント（16）

―ツァイス中央工房　2階　工房長室

通報を受けて湖畔の要塞から王国軍の部隊が駆けつけてきた。来たのは、カノーネ大尉だった。

「詳細は分かりました。それにしても……大変なことが起こりましたわね。これはれっきとしたテロ事件と言えるでしょう」

「テロ事件……。な、なんという事だ……」

「発煙筒による攪乱（かくらん）と王国随一の頭脳の誘拐……。さらに最新技術の塊である演算オーブメントの強奪。許されざるべき所業ですわ」

「……」

「それで、王国軍の方はどういう方針で動くんだ？」

「すでにエア＝レッテン、ヴォルフ砦、ソルダート軍用路、セントハイム門に検問を敷いています。賊がツァイス地方から逃げることは不可能でしょう」

「へえ～。ずいぶん手際がいいわねぇ」

「フフ……。有事に迅速に対応するのが我々、情報部の役目ですから」

「ひとつ伺いたいのですが……」

ヨシュアが突然切り出した。

「例の男たちが親衛隊に変装していたことをどう思われますか？」

「そうですわね……。由々しき事態と言えるでしょう。というわけで……ドロシー・ハイアットさん」

カノーネ大尉はドロシーの方を向いた。

「へ……？わ、わたしのことですか～？」

「逃走する賊どもの姿をカメラに収めたそうですね？その時の感光クオーツを我々に預けていただきたいのです」

「え～っ！？でもでも、せっかくのスクープなんですけど～……」

ドロシーは思いっきり渋った。

「身内をかばうわけではありませんが王室親衛隊は王国軍の誇りです。彼らの、ひいては女王陛下の名誉を守るためにも、詳しいことが判るまで報道はどうか控えていただきたい。非公式ではありますが、これは王国軍全体の意向ですわ」
「う～、仕方ありませんねぇ。詳しいことが判ったらちゃんと返してくださいよぉ～？」
ドロシーは泣く泣く、カノーネ大尉に写真用の感光クオーツを渡した。
「ご協力、感謝します。それと、申し訳ないのですがブレイサーの方々にはこれ以上の調査は控えて……」
「そいつはできねえな」
アガットが即答した。
「あの黒装束の連中はずいぶん前から俺が追っている。軍のメンツもあるんだろうがここで引くわけにはいかねえよ」
「……。ふう、仕方ありませんわね。引き続き調査を行ってください。ただし、何か判ったら必ずレイストン要塞の情報部に報告してくれるようお願いします」
「わかった。あんたらも何かわかったらツァイス支部に連絡してくれ」
「了解しました。それでは私たちはこれで……」
カノーネ大尉と王国軍たちは出て行った。
「ふう……。なんだか緊張しちゃった。あの人、リシャール大佐の副官をやってる女の人よね？」
「うん、大佐の代理として調査に来たみたいだね」
「フン……。どうも軍人は肌に合わねえな。まあいい、とりあえず犯人どもはツァイス地方のどこかに潜伏しているみたいだ。ギルドで報告したらすぐに町の外の捜索を始めるぞ」
「うん……って。なによ、今度はあたしたちに付いてくんなとかいわないわけ？」
「ああ。お前らもそこそこ使えそうだ。俺の助手でよければ使って

やる」
相変わらずの上から目線でアガットが言った。
「相変わらず偉そうねぇ～。まあいいか、もう慣れちゃった」
「よろしくお願いします」
「ああ、気を抜くんじゃねえぞ」
「工房長。それじゃあ俺たちは行くぜ」
「ああ……よろしく頼む。どうかこの通りだ……。博士を救い出して欲しい」
工房長は頭を下げた。
「……」
ティータは何も言わず立ち尽くしていた。

―ツァイス市
「あ、そうだ～。感光クオーツを買っとかなきゃ。わたし、ここで失礼するねぇ」
「あ、うん。ドロシーもご苦労だったわね」
「ううん。わたしは何にもやってないよ～。わたしも、編集部に問い合わせてなにか情報はないか調べてみるねぇ。だから……ティーちゃん、元気出してね？」
ドロシーの心強い言葉。
「あ……。はい……ありがとう……ドロシーさん」
その言葉にティータの表情が和らいだ。
「心配いらないよ～。エステルちゃんたちが必ず、おじいちゃんを助けてくれるから。それじゃあ、またね～」
ドロシーは再び中央工房に入っていった。
「……」
しかし、ティータは再び浮かない顔になった。
「ティータ……。そんな顔しないで。博士は絶対に無事だから」

「ああ、王国一の天才学者が傷付けられたりするはずがないさ」
「お姉ちゃん、お兄ちゃん……。うん……そうだね。ぜったいに大丈夫だよね……」
「……」
アガットは何か考え込んでいる表情だった。
「なにしかめっ面してんのよ？」
「……なんでもねえ。時間が惜しい。とっととギルドに行くぞ」
エステルたちは今後の行動を考えるためにギルドへと向かった。

第４章　黒のオーブメント（１６）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ラッセル博士と黒装束の男たちを探し出すため、ギルドへと戻るエステルたち。一体、どのような行動を取るのか！？

第4章　黒のオーブメント（17）

―遊撃士協会　ツァイス支部

「いい所に戻ってきたわね」

ギルドに戻ったところで、いきなりキリカにそう言われた。さらに見覚えのある男性がいた。

「あれっ……？」

「あなたは……」

そこにいた男性はアルバ教授だった。

「おや……エステルさん、ヨシュアさん。お久しぶりです、お元気でしたか？」

「アルバ教授じゃない。ツァイスに来てたんだ。なに、護衛を頼みに来たの？」

「それどころじゃない。犯人たちの行方が判ったわ。この人はその目撃者」

キリカから衝撃的な言葉が飛び出した。

「へ……！？」

「なんだと！？」

エステルたちは当然驚いた。

「うーん、やっぱりただ事じゃなかったんですね。いやはや、通報に来てよかった。実は私、ついさっきまで塔の調査をしてたんですよ」

「塔っていうと……。例の《四輪の塔》の1つね」

「平原道の北にある《紅蓮（ぐれん）の塔》だな……」

「ええ、そしたら軍人が数名、中に入ってくるじゃないですか。最初は王国軍の調査でもあるのかと思ったんですが……。陰から様子をうかがっていると誘拐だの、逃走ルートだの、不穏な言葉が出てきましてねぇ。気になってしまったので、こちらに通報に来たわけなんです」

「その軍人たち……どんな軍服を着ていましたか？」
「ええと、蒼と白を基調にした華麗な軍服を着ていましたが……。さすがは女王陛下の国。軍人までも洒落ていますねぇ」
「決まりだな……。《紅蓮の塔》に急ぐぞ！」
「うん！」
「わかりました！」
エステルたちは《紅蓮の塔》に行こうとしたが、
「あ、あの……」
ティータが急に声をかけてきた。
「お姉ちゃんたち、お願い……。わ、わたしも連れていって……！」
「ティータ……」
「それは……」
エステルとヨシュアは答えられなかった。できれば連れて行ってあげたいのだが……。
「こら、チビスケ」
「ふえっ……？」
「あのな……。連れて行けるわけねえだろうが。常識で考えろや、常識で」
「で、でもでも……！おじいちゃんが掠われたのにわたし……わたし……！」
「時間がねえからハッキリ言っておくぞ……。足手まといだ、付いてくんな」
「……っ！」
「ちょ、ちょっと！少しは言い方ってもんが……」
「黙ってろ。てめえだって判ってるはずだ。シロウトの、しかもガキの面倒見てる余裕なんざねえんだよ」
「そ、それは……」
エステルは返す言葉が見つからなかった。
「ねえ、ヨシュア、何か言ってよ！」
「残念だけど……僕も反対だ。あの抜け目のない連中が追撃を予想

してないわけがない。そんな危険な場所にティータを連れて行くわけにはいかないよ」
「ヨ、ヨシュアお兄ちゃん……」
「う～っ……」
ティータが心配なのはわかるが、今回の事件はあまりに危険すぎる。
「……ごめん、ティータ。やっぱ連れていけないみたい……」
「エ、エステルお姉ちゃん……。……ひどい……ひどいよぉっ……」
ティータは泣きながらギルドを出て行った。
「ティータ！」
エステルはティータを追いかけようとしたが、ヨシュアに掴まれた。
「……待った、エステル。今はそっとしておこう。一刻も早く博士を助けて彼女を安心させてあげるんだ」
「……わかった……。確かにそれしかないかも」
「ったく……。余計な時間を取らせやがって。キリカ！軍への連絡は任せたぞ」
「ええ、そちらも武運を」
「どうやら大変なことが起こっているようですね……。くれぐれもお気を付けて」
エステルたちは気を取り直し、《紅蓮の塔》へと急いだ。

―紅蓮の塔
「ここが《紅蓮の塔》……。博士とあの連中、本当にここにいるのかな？」
「間違いない……。複数の足跡が入り乱れている。たしかに隠れ家としてはうってつけかもしれねえが……」
その時、ヨシュアが突然身構えた。
「２人とも、気をつけて！」
塔の中からドロシーを襲ったトラット平原の魔獣が現れた。

「こいつら!?」
「へッ……。やっぱりビンゴだったか！」

3度目ともなる狼の魔獣との戦闘を制したがエステルの頭に疑問が浮かび上がった。
「なんであの魔獣たちがここに……。あ、もしかして……黒装束の連中と関係が!?」
「ああ、間違いねぇ。おそらく、連中に訓練された戦闘犬ってトコだろうな」
「せ、戦闘犬……？」
「俺は、奴等を調べ始めてから何度もあの魔獣の襲撃を受けた。無関係であるはずがねぇ」
「そ、そうだったんだ……。……てことは、峠の関所が魔獣に襲われたのはあんたがいたからってわけ!?」
当然そう考えられる。関所の兵士はとばっちりを受けたということになる。
「ま、結果的にはな。そもそも、奴等の調査を俺に押し付けたのはお前らの親父だ。こっちだってイイ迷惑なんだよ」
「う、それを言われると……」
「そういえば、ジャンさんがそんな事を言ってましたね。どういう経緯で頼まれたんですか？」
「例の空賊事件が起こる少し前にフラリと現れて押し付けやがったんだ。なんでも、外せない用事ができたとか抜かしやがってな。まったくトボけたオッサンだぜ」
「そ、そうだったんだ……」
「もっとも、今となっちゃあ誰にも譲るつもりはねえがな。特に、あの野郎だけは絶対この手で捕まえてやる……」
「???」

「あの野郎……？」
「……なんでもねえよ。とっとと連中を捕まえてあの爺さんを救出するぞ」
エステルたちは紅蓮の塔の中に入った。

第４章　黒のオーブメント（１７）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

紅蓮の塔に入ったエステルたち。そこに待ち受けていたものとは！？

第4章　黒のオーブメント（18）

―紅蓮の塔　屋上

「いたっ！」

屋上にたどり着いたエステルたち。そこには黒装束の男たち3人がいた。ラッセル博士も気絶しているのかぐったりとしていた。

「フン……。とうとう追い詰めたぜ」

エステルたちは黒装束の男たちに武器を構えながら近づいていった。

「な……！遊撃士ども！？」

「なんという連中だ。ここまで鼻が利くとは……」

黒装束の男たちはあせる。

「変装して町から脱出するなんて芸の細かいことするじゃない。でも、ツメが甘かったみたいね」

「誰も来ない遺跡だと思って油断したのが運の尽きですね。素直にラッセル博士を解放してもらいましょうか」

「く……」

「遊撃士協会規約に基づきてめえらを逮捕・拘束する。あのスカした仮面野郎が見当たらないのは残念だが……。まあ、てめえらで我慢してやるよ」

「ふ、ふざけるな！」

「邪魔者は排除するのみ！」

黒装束の男たちと激突！

「クッ……。さすがは遊撃士ども……」

「だが……人質がいるのを忘れたか？」

黒装束の男たちはラッセル博士を楯に取った。

「あんたたち！往生際が悪すぎるわよ！？」

「あなた達の目的はラッセル博士の頭脳でしょう。危害を加えてもいいのですか？」
「う、うるさい！」
「本当に傷付けられないか試してやってもいいのだぞ！？」
「うぜえな……。いい加減、あきらめろや。王国軍だって動いている。てめえらには逃げ場はねえんだよ」
「……クク……」
「ははは……」
黒装束の男たちはいきなり笑い始めた。
「……なにがおかしい？」
「いや、なに。おめでたい連中だと思ってな」
「それに……そろそろ時間だ」
「なに……？……ハッ！」
アガットが何かの気配に気づいた。。
「エステル、危ない！」
「わかってる」
エステルは銃弾をかわした。そこに現れたのは飛行艇だった。
「やっぱり、飛行艇！」
「クソ、ここまで大がかりな組織だったのか！？」
「フフ……形勢逆転だな」
「ここで皆殺しにしてやってもいいが……。遊撃士協会を敵に回すつもりはない」
「そこで黙って見ていれば命だけは助けてやってもいいぞ？」
「こ、この～っ！言わせておけば……」
「（エステル……。ここは彼らの言うとおりにしよう）」
ヨシュアが後ろからささやいた。
「（え……！？）」
「（従うフリをしてスキを伺え……。爺さんを運び込もうとする瞬間……。そのタイミングで一気に突入する）」
「（りょ、了解……！）」

「……どうやら諦めたようだな」
「フフ……。賢明な判断というものだ。では、失礼させてもらうぞ」
黒装束の男たちが1人、2人と飛行艇に乗り込んだ。3人目がラッセル博士を運び込もうとした瞬間、アガットがささやいた。
「（今だ……！）」
エステルたちが突入しようとした時、
「だ、だめえ～っ！」
導力砲が飛行艇に打ち込まれた。
「なにッ！？」
導力砲を打ち込んだのは、ティータだった。
「こ、子供！？」
黒装束の男たちも驚いている。
「ティータ！？」
「しまった！付いてきてしまったのか！？」
「お、おじいちゃんを返してっ！返してくれなかったら……こ、こうなんだからああっ！」
ティータが2発目の導力砲を撃った。飛行艇がぐらついた。
「うおっ……」
「ガ、ガキが！調子に乗るんじゃない！」
黒装束の男の1人が銃口をティータに向けた。
「あ……」
「まずい……！」
「ティータ！」
「……チイイイッ！」
黒装束の男の銃が撃った瞬間、アガットがティータを押しのけた。
しかし、銃弾がアガットの肩に当たった。
「くっ……！」
「アガット！？」
「アガットさん！？」
エステルたちはアガットに駆け寄った。

「お、おい！子供を撃とうとするヤツがいるか！」
「しかもそいつはテスト用の……！」
「す、すまん……。船が落とされると思って……」
「まあいい、このまま撤収するぞ！」
黒装束の男たちがラッセル博士を抱え込んで、飛行艇に乗った。
「あっ……！ま、待ちなさいよ！」
「お、おじいちゃあああん！」
飛行艇はラッセル博士を連れ去っていった。

「……」
ティータは飛行艇が去って行った方を悲しそうに見つめていた。
「ティータ……」
「とりあえず……いったんツァイスに戻ろう。あの飛行艇のことをギルドに報告しなくちゃ……」
「う、うん……。ティータ……つらいとは思うけど……」
「……。……なんで……どうしておじいちゃんが……。ひどいよ……どうしてぇ……」
「おい、チビ」
「……？」
アガットがティータに近づき、そして平手打ちをした。
「……あ……」
ティータがその場に崩れ落ちた。
「ちょ、ちょっと！？」
「言ったはずだぜ……。足手まといは付いてくんなって。お前が邪魔したおかげで爺さんを助けるタイミングを逃した。この責任……どう取るつもりだ？」
「あ……わたし……。わたし……そ、そんなつもりじゃ……」
「おまけに下手な脅しかまして命を危険にさらしやがって……。俺はな、お前みたいに力も無いくせに出しゃばるガキがこの世で一番

ムカつくんだよ」
「ご……ごめ……。……ごめ……ん……なさ……。ふえ……
……うえええっ……」
「ちょ、ちょっと！どうしてそんな酷いこと言うの！？ただでさえ、おじいちゃんが掠われたばかりだっていうのに！」
「だから言ってるんだ。おい……チビ。泣いたままでいいから聞け」
「……うぐ……ひっく……？」
「お前、このままでいいのか？爺さんのこと助けないでこのまま諦めちまっていいのか？」
「ううううっ……」
ティータは首を横に振った。
「だったら……腑抜けてないでシャキッとしろ。泣いてもいい、喚いてもいいからまずは自分の足で立ち上がれ。てめえの面倒も見られねえヤツが人助けなんかできるわけねえだろ？」
「……あ……」
「それが出来ないんだったら二度と俺たちの邪魔をするな。子供らしく、ベッドで毛布かぶってメソメソ泣いてやがれ。……フン、俺としてはその方がよっぽど助かるけどな」
「……」
「ティータ……」
「……。大丈夫だよ……お姉ちゃん……。わたし……ひとりで立てるから……」
そして、ティータはひとりで立った。
「ヘッ……。やれば出来るじゃねえか」
「本当に……ごめんなさい……。わ、わたしのせいであの人たちに逃げられちゃって……」
「バカ……謝ることなんてないわよ」
「うん。ティータが無事でよかった」
「ありがとう……お姉ちゃん、お兄ちゃん。あ、あの……アガットさん……」

「なんだ？文句なら受けつけねえぞ」
「えと……。あ、ありがとーございます。危ないところを助けてくれて……。それから……励ましてくれてありがとう……」
ティータがアガットに頭を下げた。
「は、励ましたわけじゃねえ！メソメソしてるガキに活を入れてやっただけだ！」
「ふふ……そーですね」
「だ～から、泣いたくせになんでそこで笑うんだよ！？ちょ、調子の狂うガキだな……」
「あんたねえ、お礼くらい素直に受け取りなさいよ。ホント、ひねくれてるんだから」
「いや、アガットさん、単に照れてるだけじゃないかな」
「あ、な～るほど。可愛いとこ、あるじゃない？」
エステルが相槌を打った。
「そこ、うるせえぞ！まあいい……。とりあえず速攻でギルドに戻るぞ。どうやら、連中の背後にかなりの大物がいるのは間違いない。気は進めねえが……軍と協力する必要があるだろう」
「うん……そうね」
「急いだ方がよさそうですね」
エステルたちは急いでギルドに戻ることにした。

第４章　黒のオーブメント（１８）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ラッセル博士の救出に失敗したエステルたち。ギルドへ帰る途中にアガットに異変が！

第4章　黒のオーブメント（19）

―紅蓮の塔　入口

「……ッ……」

アガットが入口を出た途端、顔を歪めた。

「ど、どうしたの？」

「いや……何でもない。ちょっと眩暈がしただけだ」

「あ……！ま、まさか、わたしをかばった時に……」

「そ、そういえば……！」

「ひょっとして……撃たれていたんですか？」

「カスリ傷だ。大したことはねえ」

「で、でも……わたしのせいで……」

ティータが心配そうにアガットを見た。

「あのなあ、このくらいの傷なんざ日常茶飯事なんだよ。うだうだ言ってないでとっととツァイスに戻るぞ」

「う、うん……」

「……」

エステルたちはアガットの言われるままにツァイスへと向かった。

―トラット平原

「おや？お前さんたちは……」

そこで現れたのは以前エルモ村への道を尋ねてきた東方風の男性だった。

「あれっ……！？」

「エルモの帰りに会った……」

「はは、あの時は道案内してくれてありがとよ。しかし、また街道で会うとはなかなか縁があるじゃないか」

「あは、そうかもね。そういえば、おじさんもエルモで温泉に入ってたわけ？」
「その通りだが……。おじさんはやめてくれよ。おっと、そっちのアンちゃんはどうやら初対面のようだな。顔色悪そうだが、大丈夫かい？」
「え……」
エステルたちがアガットの方を向くと、
「……」
アガットの顔は真っ青で今にも倒れそうな様子だった。
「うわ……なにその顔色！？」
「ア、アガットさん……！？」
「るせえ……。大丈夫だって言ってる……」
そう言った時、アガットが崩れ落ちた。
「……かはっ……」
「きゃあ……！？」
「ど、どうしちゃったの！？」
「……ちょっと待って！」
ヨシュアはアガットのまぶたを開いた。
「まずいな……。瞳孔が開き始めている。あの時の弾に何かを仕込まれてたんだ……」
「な、何かって……。まさか毒！？」
「ふむ、間違いなさそうだな。瞳孔が拡大しているということは植物性の神経毒かもしれんぞ」
「その可能性が高いと思います。断言はできないけど……このままだと危険かもしれない」
「そ、そんな……！」
「と、とにかく急いで治療できる場所に運ばなきゃ！ティータ、このあたりで治療できる場所ってある！？」
「ちゅ、中央工房……！４階に医務室があるのっ！」
「ふむ……だったらそこに案内してくれ。俺がその若いのを運ぼう」

「え……いいの！？」
「見ての通り、このガタイだ。重い荷物運びなら任せておきな。それに……どうやら同業者のようだしな」
「同業者って……」
「もしかして、あなたも？」
遊撃士？
「自己紹介がまだだったな。ジン・ヴァセック――共和国のギルドに所属している。よろしくな。リベールの遊撃士さんたち」

―中央工房　４階　医務室
「とりあえず、応急処置は施しておいたわ。ただ……かなり特殊な神経毒みたい。普通の解毒剤が効かないのよ」
ミリアム先生がアガットの様子を見て言った。
「あ、あの、アガットさん、どうなっちゃうんですか……？」
「相当タフみたいだから何とか持ちこたえているけど……。このまま昏睡状態が続けば命の危険もありえるかもしれない」
「……ッ！」
「そ、そんな……」
その時、ヨシュアが医務室に来た。
「あ、ヨシュア……」
「遅くなってごめん。キリカさんに報告してきたよ。軍にも通報してもらったから何かあれば情報が入ると思う」
「そっか……ご苦労さま。あれ、ジンさんはどうしたの？」
「うん、キリカさんと知り合いだったみたいでね積もる話があるみたいだった」
「なるほど……。２人とも東方出身だもんね」
「それで……アガットさんの容態は？」
「そ、それが……」

「……」

エステルもティータも口を開けなかった。

「そうか……。危険な状態みたいだね」

「残念だけど、私の知識では毒物の具体的な成分が判らないと解毒のしようがないわ。でも……ビクセン教区長ならあるいは……」

「あ……！」

ティータが何か思い立ったようだ。

「ビクセン教区長？」

「あ、あのね。ツァイス教区の神父さんなの」

「七耀教会には、千年に及ぶ伝統医療の蓄積があるからね。特に薬学に関しては色々と学ぶところが多いのよ。ひょっとしたら未知の毒物の対症療法もご存じかもしれない」

「なるほど、ロレントの教区長さんもお薬の処方とかしてたもんね」

「頼んでみる価値はありそうだね。もう遅いけど……教会に行って相談してみようか」

「う、うん……！」

―ツァイス礼拝堂

「おや、ティータじゃないか。こんな夜更けにどうしたのかね？」

「あ、あの教区長さん！アガットさんを助けてあげてくださいっ！」

「どういうことかね？」

ビクセン教区長は状況がわからないようだ。

「ティ、ティータ。落ち着きなさいってば」

「実は……」

うろたえるティータの代わりにヨシュアが説明を始めた。アガットが毒に倒れた事情と詳しい症状について説明した。

「まあ、そんなことが……」

「ううむ……これは困ったことになったな」

「や、やっぱり……治すのは難しそうですか？」
「いや、幸いなことに神経毒全般に効果のある薬が七耀教会には伝わっておる。毒の成分を消すのではなく、患者の抵抗力を高めることで自然治癒をうながす薬なのだが……。シスター・キエラ。確かあの薬は……」
ビクセン教区長は隣にいたシスター・キエラに尋ねた。
「はい……。ちょうど材料を切らしていて……」
「そ、そんなぁ……」
ティータが泣きそうな顔をした。
「原料……。どういった物なんでしょう？」
「『ゼムリア苔』という古代文明の名がついた発光植物だ。このあたりでは、カルデア隧道の途中にある鍾乳洞に生えておったはずだ。以前、遊撃士協会に依頼して採取してもらったことがある」
「カルデア隧道って……。ツァイスに来た時に通ったあのトンネル道のことよね。な～んだ！だったら話は簡単じゃない」
「さっそく鍾乳洞に向かって『ゼムリア苔』を採取してきます」
「なに……君たちがかね？」
「あの、お姉ちゃんたちもギルドの遊撃士さんなんです」
「なるほど……。ならば任せられるかもしれんな。とりあえず、鍾乳洞に行く前にギルドの受付に聞いてみるといい。以前、採取してもらった時の記録が残っているかもしれない」
「うん、わかりました！」
「それでは失礼します」
エステルたちは次にギルドへと向かった。

―遊撃士協会　ツァイス支部
「おお、お前さんたちか」
「あ、ジンさん！まだ居てくれたんだ。さっきはアガットを運んで

くれてありがとね」
「お世話になりました」
「はは、気にするな。これも同業者のよしみだぜ」
「それで……アガットの容態はどう？」
「それが……」
エステルたちはアガットの容態と『ゼムリア苔』について説明した。
「ふむ……。思った以上に危険な状態だな」
「確かに『ゼムリア苔』なら以前、教会の依頼で採取が行われたわ。ちょっと待って」
キリカは書棚からギルドの任務記録を探し出した。
「……あった。カルデア鍾乳洞の北西区画、洞窟湖のほとりで採取したそうよ」
「鍾乳洞の北西……洞窟湖ね」
「手帳にメモしておこう」
「ただ、鍾乳洞の魔獣はかなり手強いと聞いているわ。前に採取した時はベテランの遊撃士４人でチームを組んで採取したから」
「べ、ベテラン４人！？」
「確かに大変そうですね」
一気に依頼の難易度が上がったような感じになったエステルたち。
「ふむ、だったら……」
「というわけでこの男を連れて行きなさい」
「ガクッ……。って、おい！勝手に話を進めるんじゃない」
「あら？付き合うつもりではないの？」
「いや、それはそうだが……。ああもう、お前ときたら相変わらずな性格をしやがって！」
「そんなに誉めないで」
「誉めとらん、誉めとらん！」
コントをしているようにも見えるジンとキリカのやり取り。
「え、えっと……。要するにジンさんも鍾乳洞に付き合ってくれるの？」

「あ、ああ……。これも何かの縁だろうさ。明日には王都に向かうからそれまでしか付き合えんがな」
「それで充分！すっごく助かっちゃうわ！」
「よろしくお願いします」
「あ、あの……お姉ちゃん、お兄ちゃん……。わたしも……行っちゃダメ？」
「えっ？」
「わかってるの……。足手まといだってことは……。でも……でもね。アガットさん、っわたしをかばってあんな事になっちゃったのに……何にもしてあげられないなんてわたし……いやだよう……」
「ティータ……。ね、ヨシュア。あたしからもお願い！一緒に連れて行ってあげよう？」
「仕方ないな……。ねえ、ティータ。もう無茶しないってちゃんと約束できるかい？」
「う、うん、約束する……！」
「そういう訳なんですけど、ジンさんも構いませんか？」
「ああ。俺はいっこうに構わんぞ。よろしくな、お嬢ちゃん」
「あ……はいっ！」
「よし、そうと決まればさっそく鍾乳洞に行きましょ！」
「まずは中央工房の地下からカルデア隧道に降りなくちゃね」
エステルたちはカルデア鍾乳洞に向かった。

第４章　黒のオーブメント（１９）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

カルデア鍾乳洞に向かったエステルたち。『ゼムリア苔』を見つけることができるか！？

第4章　黒のオーブメント（20）

―カルデア鍾乳洞

神秘的な光景が広がるカルデア鍾乳洞。そこには至る所に鍾乳石があり、中は涼しかった。

「カルデア鍾乳洞……。なんだか神秘的な場所ね」

「だが、奥の方から魔獣の気配がプンプンするぞ。なかなか歯ごたえがありそうだ」

ジンはすでに魔獣の気配を悟っている。

「ふ、ふぇぇ……」

その言葉にティータが身を震わせた。

「ティータ、恐かったら戻ってもいいんだからね？あんまり無理しちゃダメよ」

「だ、大丈夫だよ……。恐いけど無理はしてないから。とにかく急いで『ゼムリア苔』を取りに行こう？」

「そうね……行くとしますか。えっと、たしか洞窟湖のほとりに生えているって言ってたっけ？」

「うん、そうみたいだね。ちなみに、洞窟湖は鍾乳洞の北西方向にあるらしい」

「ふむ、位置と方向を把握しながら慎重に進んだ方がよさそうだな」

エステルたちは鍾乳洞の北西方向にある洞窟湖へと進んでいった。

―カルデア鍾乳洞　洞窟湖

「うわぁ～……！」

「キレイ……」

「ほう……。なかなかの景観じゃないか」

洞窟湖は光と湖が織りなす素晴らしい光景だった。

「うんうん！洞窟の中とは思えないわ」
「ここが洞窟湖みたいだね。このあたりのどこかに『ゼムリア苔』が生えているはずだよ」
「オッケー！探してみましょ」
エステルたちは『ゼムリア苔』を探し始めた。

そして、湖のほとりの岩で『ゼムリア苔』を見つけた。
「あ、それって……！」
「その光っているのが『ゼムリア苔』ってやつか」
「うーん、こんなにキレイな苔だとは思わなかったな。どうして光ってるのかしら？」
「七耀石の成分が大量に含まれているのかもしれないね。さっそく採取して急いでツァイスに戻ろう」
エステルたちは『ゼムリア苔』を採取した。
「よし、任務完了！」
「それじゃあ、町に戻って教区長さんに届けようか」
「うん、そうしましょ……」
「……待て」
その時、ジンが何かを察したようで、戻ろうとするエステルたちを制した。
「へっ……？」
「あ……！」
ヨシュアも何かを感じたようで武器を構えた。
「気をつけろ！」
突然、湖の中から魔獣、もとい巨大なペンギンみたいなものが飛び出してきた。
「な、なにアレ……！？」
エステルは不細工な魔獣だなと思ったようだ。
「はわわっ……！」

「フフン、どうやらこの洞窟湖のヌシらしいな」
「これは……戦うしかなさそうですね！」
ペンギン型魔獣が飛び掛かってきた！

魔獣を退けたエステルたち。
「び、びっくりしたぁ～！」
「か、可愛かった恐かったぁ～……」
「ふう……。なんとか撃退できたみたいだね。でも、モタモタしていたらまた襲ってくるかもしれない」
「ふむ、とっとと町に戻った方が良さそうだ。たしか、さっき採取した苔を町の教会に持っていけばいいんだな？」
「うん、急ぎましょ！」
エステルたちは急いでツァイス市に戻った。

―ツァイス礼拝堂
「教区長さん！『ゼムリア苔』、採ってきたよ！」
「おお……本当かね！？よくぞ、こんなに早く採ってくることができたものだ」
「あ、あの……。これでお薬、作れますか？」
「ああ、もちろんだとも。奥で調合するから少し待っていてくれたまえ」

そして、調合が始まった。
「万物の根源たる七耀より聖別されし蒼と金、ここに在り。万物の流転司る女神の秘蹟、浄化と活性の融合を成したまえ。……うむ……これで完成だ。さあ、持っていくといい」

エステルはアルヴの霊薬をもらった。
「わあ……キレイな色！」
「これって、飲み薬なの？」
「ああ、内服薬だ。毒の成分を消すのではなく、患者の免疫力を飛躍的に高めて自然治癒を促すわけだな」
「ふむ、東方の医術と通じるところがありますな」
「たしか漢方だったか……。同じ発想と言ってもいいだろう。さあ、急いでその薬を届けてやるといい」
「うん、わかったわ！」
「教区長さん！ありがとーございます！」
エステルたちは医務室へと向かった。

―ツァイス中央工房　４階　医務室
「先生、お待たせ！」
「どうだった！？」
「教区長さんからお薬をもらってきました」
「本当！？さすがはビクセン教区長ね」
エステルはアルヴの霊薬をミリアム先生に渡した。
「なるほど……。免疫力を活性化させる薬か。試してみる価値はありそうね」
エステルたちはアガットのもとに行った。
「さてと……。それじゃあ飲ませるわよ」
ミリアム先生はスポイトを使ってアガットの口から薬を飲ませた。
「……」
「ゴクッ……」
「女神様（エイドス）……」
エステルたちは固唾を飲みながら見守った。
「……。……う……」

しばらくして、アガットの様子が変化しはじめた。
「う……ううう……。がああっ……あああああっ！」
「ひっ……！？」
「わわっ……！なんか苦しみ始めたわよ！？」
「大丈夫……。たぶん、これでいいんだ」
「え……！？」
「薬が効き始めたようだな。苦しかったり、痛かったりするのは体の機能が復活した証拠だろう」
「ふふ、その通りよ。これで、神経毒による危険な昏睡状態からは脱したわ」
「そ、そうなんだ……」
「で、でも……アガットさん、苦しそう……」
「まあ、丸一日くらいは苦しむことになるでしょうね。でも大丈夫。それを過ぎれば完治するはずよ」
こうして、アガットは危険な状態から脱した。夜も遅かったため、エステルたちは交替で休みながらアガットの看病をすることにした。

「うーん、おかしいな……。確かここにタオルの替えが……」
「ハアハア……。……うあああああっ……」
「！！！」
ティータはその声に駆け付けた。
「ア、アガットさん……。す、すごい汗……。ふいてあげなくちゃ……」
「……ううう……」
アガットがうっすらと目を開けた。
「あ、アガットさん！気が付いたんですか？今、水でも持ってきて……」
「ミ、ミーシャか……？」

「え……」
「よ、よかった……。……そこにいたのか……。兄ちゃんが付いている……。もう……恐くないからな……。……だから……だから……」
そういってアガットは再び目を閉じた。
「……」
「ア、アガットさん!?」
ティータは慌ててアガットの様子を確かめた。先ほどよりも呼吸が安定して穏やかな寝息を立てている。
「ほ……。よ、よかったぁ……。……。ミーシャって……たしかそう呼んだよね……。……誰……なのかな……？」

第４章　黒のオーブメント（２０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

アガット回復を待ちつつ、次の手立てを見つけます。

第4章　黒のオーブメント（21）

―次の日の朝　ツァイス発着場
エステルたちはジンを見送るため、ツァイス発着場に来ていた。
「……わざわざ済まんな。見送りなんぞさせちまって」
「このくらい当然よ。いろいろお世話になっちゃったし」
「ジンさんは、このまま定期船で王都に直行ですか？」
「ああ、どうしても外せない用事があってな。そうでなけりゃあ俺も誘拐事件の調査に付き合わせてもらうんだが……。すまんな、お嬢ちゃん」
「と、とんでもないですよー。いろいろと助けてもらったし……。ホントーにありがとうございました」
「はは……。そう言ってくれると助かるぜ」
その時、定期船のアナウンスが流れた。
「王都方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください」
「おっと……。そろそろ出発のようだな」
ジンは定期船に乗った。
「それじゃあな。機会があったらまた会おうや」
「あ、うん！そういえばジンさんっていつまでリベールにいるの？」
「はっきりとは判らんが……。女王生誕祭まではいると思うぞ」
「あ、だったらまた会えるかもしれないわね」
「その時はよろしくお願いします」
「おお、こちらこそな」
そして、定期船は離陸した。
―ツァイス市

「さてと。さっそくギルドに行こうか？例の飛行艇のことについて何かわかったかもしれないし」
「うん、王国軍から情報が入っているといいんだけど……。あ、ティータはどうする？」
「あ、あのね……。わたし、アガットさんの看病をしようと思うの。まだ目を覚ましていないからなんだか放っておけなくて……」
「ティータ……。わかった、博士のことはあたしたちに任せておいて！」
「ごめんね、お姉ちゃんたちに迷惑ばかりかけちゃって……」
「も～、この子ってば。変な遠慮するんじゃないわよ」
「人って、意識がなくても誰かが側に付いているだけで安心できるものだからね。アガットさんの事、頼んだよ」
「う、うん……！」
ティータは走ってアガットのところへと向かった。
「あー、ホントにあの子ってば健気っていうか、いじらしいよね。あんな無愛想な不良男なんかにそこまで優しくすることないのに」
「まあまあ。思うんだけど、君とアガットさん、割と性格が似てるんじゃないかな？」
「はあ！？あ、あんな無愛想な男とどこが似てるってゆーのよ！？」
エステルはむきになって否定した。
「すぐに突っ走るところとかお人好しすぎるところとか。アガットさん、言葉はキツイけど相手を思いやっての事が多いからね。たぶん、ティータもそれがわかっているんだと思う」
「むむむ……。なんか納得いかないけど……。まあいいや、とりあえずギルドに行って話を聞きましょ。アイツが動けるようになるまで色々調べて自慢してやるんだから」
「うん、そうだね」
エステルとヨシュアはギルドへと向かった。

―遊撃士協会　ツァイス支部
「キリカさん、おはよ～！」
「おはようございます」
「おはよう、２人とも。ジンはもう出発した？」
「はい。先ほど定期船で王都の方に」
「キリカさんも見送りに行けばよかったのに。そういえば、キリカさんとジンさんってどういう知り合い？」
「昔、ちょっとね。それはともかく……。妙な雲行きになってきたわ」
「あ～、ごまかした！……って、妙な雲行き？」
「例の飛行艇についてなにか分かったんですか？」
「いえ、まったく。妙な雲行きというのは王国軍の動きについてよ。まず、軍の司令部があるレイストン要塞に連絡しても何の返事も返ってこない。次に、各地に敷かれていた検問が昨夜のうちに解除されてしまった」
「ええっ！？それってどーいうこと？また、空賊事件の時みたいに縄張り争いでもするつもりなの？」
「いや、それだったら検問を解除するのはおかしい。自分たちで捕まえたいのなら素直にそう連絡するはずだし……。確かに妙な雲行きになりましたね」
「ちなみに、レイストン要塞の情報部とも連絡がとれないわ。もしかしたら、王国軍内部で何か事件が起こったのかも……」
「何かって……。あ、ひょっとして……！ドロシーが撮った、あの！？」
「親衛隊に変装していた黒装束の男たちの写真だね」
「呼びました～？」
絶妙のタイミングでドロシーが現れた。
「あ、ドロシー！」
「噂をすれば影ですね」

「いや～、まいっちゃったよう。編集部に連絡したらちょうどナイアル先輩がいてね。感光クオーツを王国軍に渡したことを話したらものすごく怒られちゃったの。ひどいよね～、そう思わない？」
ドロシーが泣きそうな顔で言った。
「って、感光クオーツってまだ返してもらってないんだ？」
「うん、ひどいと思わない～？せっかくレイストン要塞まで返してもらいに行ったのになぁ」
「うわ～。あんたも根性があるわねぇ」
「えへへ～。それだけがわたしの取り柄だし。仕方ないから、雑誌掲載用に要塞の写真を撮ってきちゃった。月明りでライトアップされてすっごく可愛く撮れたんだよ～」
「要塞を可愛く撮ってもねぇ」
「それに許可なしに軍事施設を撮影したらマズイんじゃ……」
「まーまー。堅いこと言いっこナシ？ほらぁ、見て見て。さっき現像したばかりなの」
ドロシーはカウンターの上に写真を置いた。
「へえ……。たしかに綺麗に撮れていますね。これがレイストン要塞か……」
「ほんと、ドロシーってカメラの腕は大したもんよね……。……」
……あれれ……」
エステルが何か見つけたようだ。
「どうしたの、エステル？」
「気のせいかもしれないけど……。右上の方になにか映ってない？」
「え……」
ヨシュアが写真をじっくり見た。
「……本当だ」
「たしかに微かだけど小さな影が映っているわね」
「ふえ～、エステルちゃん、よく気が付いたねぇ。わたし、撮ってたのにぜんぜん気付かなかったよ」
「えっへん、それほどでも♪シルエットしか映ってないけどやっぱ

り軍の警備艇なのかな？」
「……。いや、これは警備艇じゃない……。これは、あの時の飛行艇だ」
「あの時……？」
「博士を掠った飛行艇と同じシルエットなわけね」
「はい」
「博士を掠ったって……。えええっ！？ちょ、ちょっと待ってよ！どうしてあの時の船がこんな所に映ってるわけ？ここってたしか王国軍の本拠地なんでしょ？」
「落ち着いて、エステル。色々な可能性が考えられるけど、まだ結論するのは早すぎると思う。ここは僕たちも直接レイストン要塞に行って事情を聞くべきかもしれない」
「ええっ！？」
「なるほど。ゆさぶるつもりね」
「マズイでしょうか？」
「いいえ、許可するわ。こちらは危うく死者を出すところだった。どんな事情があるにせよ、舐められるわけにはいかない」
キリカの目が危なく輝いた
「ひええ、キリカさん、目がマジなんですけど……。でも……確かにそうよね。ドロシー、この写真、あたしたちに一枚くれない？」
「うん、いいよ～。エステルちゃんたちには色々と世話になっちゃったし」
「ありがと、恩に着るわ！」
エステルはドロシーの写真をもらった。
「レイストン要塞に行くなら東口からリッター街道に出なさい。リッター街道の途中の三叉路を北に向かえば要塞のゲート前に出るわ。くれぐれも慎重に行動なさい」
「ラジャー！」
「了解しました」
エステルたちはレイストン要塞に向かった。

第４章　黒のオーブメント（２１）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

王国軍から何の連絡もなく、妙な動きを見せた。エステルは事情を聞くため、直接レイストン要塞へと向かった。

第4章　黒のオーブメント（22）

―レイストン要塞

「うっわ～……こりゃまた大きな基地ねぇ。あのハーケン門の数倍はあるんじゃないの？」

「そうだね……そのくらいはあるかもしれない。１０年前の戦争でも陥落せずに反攻作戦の拠点となったそうだよ」

「なるほど納得……って感心してる場合じゃないか。とっとと玄関に行って責任者を呼んできてもらおっか」

「……」

ヨシュアがその言葉を聞いて驚いた。

「あれ、どうしたの？」

「いや、つくづく君って物怖じしない子だなと思って。さすがは父さんの娘だね」

「失礼ねぇ。あたしだって緊張してるわよ。でも、あのモルガン将軍以上におっかない人がいるとは思えないし」

「はは、それはそうかもね。モルガン将軍か……。今もハーケン門にいるのかな？」

「あれ、誰もいないわね……」

「変だな……。普通こういうところには門番が立ってるものなんだけど」

「……何だね、君たちは」

突然、どこからともなく声が聞こえてきた。

「あ、あれ……どこから聞こえてきたの？」

「たぶん、どこかにスピーカーがあるんじゃないかな」

「ここはレイストン要塞。リベール王国軍の総司令部だ。君たちのような民間人が立ち入っていい場所じゃない。悪いが引き返しても

らえるかね」
「（うーん、応対は丁寧だけど……）」
「（うん……。かなり警戒は厳しいみたいだ）」
さすがはレイストン要塞といった感じだ。
「あーあー。君たち、聞こえているかね？」
「悪いけど、あたしたちただの民間人じゃないのよね。遊撃士協会の人間なんだけど」
「中央工房が襲撃された件についてお話ししたいことがあります。責任者の方に合わせて頂けますか？」
「遊撃士協会だと？君たちが遊撃士だというのか？」
「疑うんだったら、この紋章を見なさいよ。ほらほら、見えているんでしょ？」
エステルは胸元にある準遊撃士の紋章を誇示した。
「……。……確認した。どうやら本物のようだな。しかし生憎、この基地の責任者は現在、留守にしている最中でね。できれば日を改めてもらえないか？」
「責任者がいない……。なんだか、しまらない話ねぇ」
「では、情報部の方を誰でもいいから呼んでいただけますか。リシャール大佐か、カノーネ大尉に伝えてもらいたいことがあるんです」
「……。よろしい、そこで待っていたまえ」
そういって、スピーカーが切れたようだ。
「ふう……。ようやく引っ張り出したわね」
「うん、でもこれは予想以上にガードが固そうだ」
その時、目の前の大扉が開いた。
「わわっ……！？」
「誰か来たみたいだ……」
「待たせてしまって申し訳ない。自分は、レイストン要塞の守備隊長を務めるシード少佐だ」
「あたし、遊撃士協会のエステル・ブライトです」
「同じく、ヨシュア・ブライトです」

「……ブライト……？」
その時、シード少佐の顔が変わった。
「あれ、どうしたの？」
「い、いや……。すまない、こちらのことだ。それよりも……中央工房の襲撃事件について話があるとのことだったな。本当に申し訳ないが……情報部の人間も全員不在でね。伝言があるなら聞いておこう」
「うーん、困ったわねぇ。（よし。ここで揺さぶってみよっと……）」
エステルは揺さぶりを決め込んだ。
「あーあ、せっかく博士を連れ去った飛行艇の手掛かりをつかんだのに」
「な、なんだと！？」
「あれ、少佐さん。なんでそんなに驚いてるの？」
「い、いや、連絡を受けて我々も探し回っていたからな。それで……手がかりというのは……？」
「これを見ていただけますか」
ヨシュアはドロシーの写真をシード少佐に渡した。
「これは……レイストン要塞じゃないか。どうしてこんな写真を君たちが……」
「まーまー。堅いことは言いっこなし。写真の右上の方を見てみてよ」
「右上の方……。こ、これは……！？」
「軍で使っている警備艇とは明らかに違うシルエットですね？」
「で、博士を連れ去った飛行艇とソックリなのよね～、これが」
「……。なるほど……。これは由々しき事態だな。協力感謝する。至急、情報部に伝えておこう」
「へ……。ちょ、ちょっと待ってよ。それだけなの？」
「それだけとは？」
「だ、だって……おかしいじゃない。なんで犯人たちの乗った船が

こんな所をウロウロしてるわけ？」
「恥ずかしながら完全にこちらの不手際だな。国境付近を捜索するあまり本拠地周辺の警戒が疎(おろそ)かになってしまったようだ。湖を北上したということは帝国の仕業の可能性もあるだろう」
「そ、そうなの……？」
「……。１つだけ聞かせてもらえますか。今、情報部の方たちはどちらに出かけているんですか？」
「……。軍事機密だ。それでは失礼する」
そう言って、シード少佐は要塞の中へと戻っていった。
「ちょ、ちょっとヨシュア……。なんかあからさまに怪しいっぽいんですけど？」
「わかってる……。でも、決定的な証拠がない限り、これ以上追求するのは無理だよ」
「うう～……」
エステルが悔しそうに唇をかんだ。
そして、自動ゲートが閉まろうとした時、
「あれ？」
ゲートが突然止まり、半開きの状態になってしまった。
「……どうしたんだろう？」
「な、なんだ……。どうして途中で止まったのだ？」
シード少佐の声が聞こえてきた。
「……。……なに……。また例の現象が起こっただと？」
例の現象……。これはもしかすると……！
「（ヨシュア、これって……！）」
「（ああ……。ビンゴだったみたいだね）」
そこで、シード少佐が現れた。
「み、見苦しいところを見せてしまったようだな。どうも最近、開閉装置の調子が良くないみたいでね」
「なるほど、それは大変ですね」

「そんなに調子が悪いんだったら中央工房の人に修理してもらえば？ラッセル博士みたいな人だったらすぐにでも直してくれるわよ？」
「う、うむ、検討しておこう。装置が復旧するまでここで警備をしていろ。不用意に民間人を近づけるな」
シード少佐は兵士に命令した。
「はっ！」
「了解であります！」
「そういう事だから君たちも気にせず行ってくれ。例の写真については必ず情報部に伝えておこう。それでは失礼する」
シード少佐は再び中に戻っていった。

第４章　黒のオーブメント（２２）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

手がかりが掴めないと思っていたら、思いもよらぬ手がかりをつかめたエステルたち。これをもとにラッセル博士を奪還する作戦を考える！

第4章　黒のオーブメント（23）

―レイストン要塞

「何だか信じられないけど……。今のって、やっぱりアレ？」

「うん……。たぶん例の現象だろうね」

「ということは……。もしかして、ラッセル博士もあの要塞の中に捕まって……！」

エステルが声を荒げた。

「（シッ、エステル……。あんまりここでそれを口に出さない方がいい）」

「（わ、わかった……）」

「（とりあえず、ツァイスに戻ってキリカさんに相談してみよう。場合によったら……工房長も呼んだ方がよさそうだ）」

エステルたちは急いでギルドへと戻った。

―遊撃士協会　ツァイス支部

「ま、まさかラッセル博士がレイストン要塞にいるとは……。ほ、本当に確かなのかね？」

話を聞いたマードック工房長はにわかに信じがたいといった表情をしている。なにせ一番ありえない所にラッセル博士がいると聞いたからだ。

「ドロシー嬢の写真とゲート前で起きた導力停止現象。この2つをあわせたらそう考えるのが妥当でしょうね」

「し、しかし、中央工房は長年、王国軍と協力関係を築いてきた。にわかには信じられん話だ……」

「一口に王国軍といっても内部は一枚岩ではありませんから。工房襲撃の犯人たちが逃走時に親衛隊の恰好をしたのもそのあたりが原

因なのかもしれません」
「え、ということは……。もしかして……親衛隊は濡れ衣を着せられたの？」
「うん。そう考えるのが一番しっくり来る。ひょっとしたら、何らかの陰謀が軍内部で進行しているのかもしれない」
「ううむ……なんたることだ。しかし、どうして博士がそんな陰謀に巻き込まれたのか……」
「……どうやら犯人どもの手がかりを掴んだみてえだな」
いきなりアガットがギルドにやってきた。
「え……アガット！？」
「よかった……。意識を取り戻したんですね」
「ああ、ついさっきな。起きたら見慣れない場所で寝かされていたからビビったぜ」
「まったくもう……。みんな心配したんだからね？」
「起きたばっかりなのにもう動いてもいいんですか？」
「ああ、寝すぎたせいか身体がなまってしかたねえ。とにかく思いっきり身体を動かしたい気分だぜ」
「で、でも、アガットさん。あまり無茶しちゃダメですよ。毒が抜けたばかりだからしばらく安静にって先生が……」
「だ～から、大丈夫だって何べんも言ってるだろうが。鍛え方が違うんだよ、鍛え方が」
「う～っ……」
ティータが絶対に譲らないとばかりに嫌な顔をした。
「う……。わかった、わかったっての！本調子に戻るまでは無茶しなきゃいいんだろ？」
「えへへ……はいっ」
「ったく……。これだからガキってのは……」
「あはは、さすがのアンタもティータには形なしみたいね」
「ずっと付きっきりで看病してもらった身としてはしばらく頭が上がりませんね」

「あ～もう、うるせえなっ。それより、俺がくたばってた間に色々と動きがあったみたいだな。聞かせてもらおうじゃねえか」
「うん、わかった」
エステルたちはラッセル博士がレイストン要塞に捕われている可能性が高いことを話した。
「お、おじいちゃんがそんな所にいるなんて……」
「しかも、あの黒装束どもが軍関係者だったとはな……。フン……正体が判ってスッキリしたぜ。キッチリ落とし前を付けさせてもらうことにするか」
アガットは拳を手のひらに叩き付けた。
「落とし前っていうと？」
「決まってるだろう。レイストン要塞に忍び込む。博士を開放して奴らに一泡吹かせてやるのさ」
「あ、なるほど。それが一番手っ取り早そうね」
「そう簡単にはいかないわ」
キリカが割り込んできた。
「へっ？」
「遊撃士協会の決まりとして各国の軍隊には不干渉の原則があるわ。協会規約第三項。『国家権力に対する不干渉』……。『遊撃士は、国家主権及びそれが認めた公的機関に対して捜査権・逮捕権を行使できない』。つまり、軍がシラを切る限り、こちらに手を出す権利がないの」
「チッ、そいつがあったか……」
「そ、そんな……。そんなのっておかしいわよ！目の前で起きている悪事をそのまま見過ごせっていうわけ！？」
エステルがむきになって反論する。
「ただし……。この原則には抜け道がある。協会規約第二項。『民間人に対する保護義務』……。『遊撃士は、民間人の生命・権利が不当に脅かされようとしていた場合、これを保護する義務と責任を持つ』。これが何を意味するかわかる？」

「なるほど……。博士は役人でも軍人でもない。保護されるべき民間人ですね」
「そ、それじゃあ……」
「あとは……。工房長さん、あなた次第ね。この件に関して王国軍と対立することになってもラッセル博士を救出するつもりは？」
「……考えるまでもない。博士は中央工房の……いや、リベールにとっても欠かすことのできない人材だ。救出を依頼する」
マードック工房長は即断した。
「工房長さん……！あ、ありがとーございます！」
「礼を言うことはないさ。博士は私の恩師でもあるからね」
「これで大義名分は出来たわ。遊撃士アガット。それからエステルとヨシュア。レイストン要塞に捕まっていると推測されるラッセル博士の救出を要請するわ。非公式ではあるけど遊撃士協会からの正式な要請よ」
「そう来なくっちゃ！」
「了解しました」
「フン、上等だ。そうと決まれば潜入方法を練る必要があるな。何しろ、レイストン要塞といえば難攻不落で有名な場所だ」
「そうですね。実際、かなりの警戒体制でした。侵入できそうなルートがどこかにあるといいんですけど」
「残念だけど……。あそこの警備は完璧に近いわ。導力センサーが周囲に張り巡らされているから湖からの侵入も難しそうね」
「フン……。そんな事だろうと思ったぜ」
「正攻法では難しそうですね」
「そういえば、工房長さん」
エステルが何か思いついたようだ。
「あのオレンジ色の飛行船ってレイストン要塞によく行くのよね？」
「ああ……。工房船の《ライプニッツ号》だね。資材の搬入や設備の点検で定期的に要塞に行っているが……」
「だったら、それに隠れて要塞に潜入するってのはダメ？」

「いや、基地に降りたクルーは全員チェックを受けるんだ。勝手に抜け出して行動するのは不可能に近いだろう……」
「ということは、積荷にまぎれて忍び込むのも無理か？」
「ああ、生体感知器によって1個1個のコンテナが調べられる。この感知器というのがラッセル博士の開発したものでね。ネズミ1匹たりとも見逃さない優れ物なんだ」
「う～ん、やっぱりダメかあ……」
「……あ……！」
ティータが何か気づいたようだ。
「ん、どうしたの？」
「お姉ちゃん、覚えてない！？お姉ちゃんたちを案内した時、おじいちゃんが作ってた発明品！」
「あたしたちを案内した時……。……ああっ！」
「そうか……。僕たちも実験を手伝ったあの新型オーブメントだね」
「うん、それだよっ！あの装置、生体感知器の走査を妨害する導力場（フィールド）を発生するの！起動テストもしてあるから大丈夫……ちゃんと動かせるよ！」
「なに……本当か！？」
「まったく博士ときたらいつのまにそんなものを……。その装置はどこにあるのかね？」
「えと、たぶん研究室のどこかに置きっぱなしになってると思います」
「なら、あなたたちは急いでその装置を取ってきて。その間に、レイストン要塞の詳細なデータを用意しておくわ」
「わかった、頼むぜ」
「工房長さんは、工房船の手配をよろしくお願いするわ」
「りょ、了解した。グスタフ整備長に相談しよう。準備が済んだら飛行場まで来てくれたまえ！」
マードック工房長は急いで工房船の手配に取り掛かった。
エステルたちはその間に装置を探しに向かった。

―ラッセル工房
「さてと……。あの装置を探さなくちゃ。どこらへんにありそうかな？」
「えとね、研究室の隅っこか研究室の2階の書斎にあると思うの。おじいちゃん、発明した物はわりと放りっぱなしにしちゃうから」
「なんか、えらく変わり者の爺さんみたいだな。まあいい。とっととそいつを探し出すぞ」

エステルは研究室の2階で装置を発見した。
「あった、あった♪」
「確かに僕たちが実験を手伝ったオーブメントだね。どう、ちゃんと使えそうかい？」
「うん……大丈夫。うまくやれば、生体感知器を完全にごまかすことができるよ」
ティータは装置を調べて言った。
「よし、とっととギルドに戻るぞ。キリカが、レイストン要塞のデータを揃えてくれているはずだ」
エステルたちはギルドへと向かった。

―遊撃士協会　ツァイス支部
「キリカさん。装置、取ってきたよ！」
「こちらも準備はできている。ちなみに、これから見せる物は他言無用にお願いするわ」
キリカはエステルたちに何やら図面のようなものを渡した。

「へッ、なかなか良いものを持っているじゃねーか」
「これは……レイストン要塞の概略図ですか」
「うわぁ……。すごく広いんですね。このどこかにおじいちゃんが……」
「でも、こういうのって軍事機密なんじゃないの。どうしてギルドにあるわけ？」
「蛇の道は蛇ってね。とあるルートから入手したの。遊撃士協会には、こういう面もあることを覚えておきなさい」
「う、うん……」
「言うまでもないけど今回のケースはかなり特殊よ。本来、王国軍とギルドの関係は他国のそれと比べても友好的なの。遺恨を残さないためにも兵士との交戦は極力避けること。特にアガット……いいわね？」
キリカはアガットを睨んだ。
「フン、仕方ねえな。だが、あの黒装束の連中は立ち塞がったら容赦しねえぞ。軍人だろうがなんだろうが犯罪者には違いないんだからな」
「好きにしなさい。ただし死なない程度でね」
キリカさん、そこはオーケーですか？
「エステル、ヨシュア。本来ならば準遊撃士のあなたたちにこんな仕事は任せたくないけど……」
「ちょ、ちょっと！そんなのってないわよ！」
「乗りかかった船です。どうかやらせてください」
「……というと思ったから反対するのは止めにするわ。ちなみに、あなたたちはツァイス支部の監督下にある。万が一のことがあってもわたしが責任を取るから安心なさい」
「キ、キリカさん……」
「すみません……。ご迷惑をおかけします」
「それから……ティータ。遊撃士でないあなたにこう聞くのもなんだけど……。決心は変わらないのね？」

「あ……。……はい！」
「え、え？それってどういうこと？」
「もしかして……」
「あ、あのね……。この装置を動かせるのはたぶんわたしだけだと思うの。だから……わたしもお姉ちゃんたちと一緒に行くよ」
「ええっ！？」
「たしかに、複雑そうなオーブメントだったけど……」
「ごめんなさい……。わたし、迷惑にならないようちゃんと付いていくから……」
「……ふざけんな。こら、チビスケ……。そんな話は聞いてねえぞ……。こんなヤバイ仕事にガキを連れて行けるわけねえだろうが！」
「で、でもでも……。わたしがやらなかったら装置が動かせないですし……」
「だったらそんな方法はハナッから却下だ、却下！別の潜入方法を見つけるぞ！」
「……。あんたねぇ。いいかげんにしなさいよ。なに、意地を張ってるわけ？」
「なにぃ……？」
「ティータも覚悟して協力するって言ってるでしょ。それに協力してくれたらあたしたちも潜入しやすくなる。それって、博士を助け出す可能性も上がるってことよね？この期に及んで反対する余地がどこにあるってゆーのよ？」
「てめえ……。民間人を、しかもガキを危険にさらせると思ってんのか？」
「そうならないようにあたしたちが守ればいいじゃない。それが遊撃士の仕事でしょ？」
「クッ……。たかが新米ごときが偉そうなことを抜かしやがって……」
「……新米、ベテランはこの際、関係ないと思います。大切なものを守りたいという気持ちも遊撃士だけのものじゃありません。むし

ろ、そういう気持ちを支えるのが僕たちの仕事じゃないんですか？」
「……」
「お姉ちゃん、お兄ちゃん……。あ、あの、アガットさん。ごめんなさい、困らせちゃって……。でも、わたし、おじいちゃんが大切だから……。ぜったいに助かってほしいから……。だから、自分ができることがあればできる限りのことがしたいんです」
「……」
「それに、アガットさんがわたしを助けてくれたように……。わたしも、お姉ちゃんや、お兄ちゃんや、アガットさんの力になりたいんです……。ぜったいに無理はしません……。ちゃんという事も聞きますから……。だから……どうかお願いしますっ！」
「ティータ……」
「そうか……。そこまで考えてくれたんだね」
「……。フン、判っちゃいねえな。力になる以上に足手まといになりそうだから付いてくるなと言ってるんだ」
「あうっ……」
「だがまあ、他に潜入方法がなさそうなのも確かだからな……。気は進まねえが……。本当に気は進まねえが、今回だけは特別に認めてやるよ」
「あ……。ありがとう、アガットさん！」
「礼を言われる筋合いはねえ。足手まといになったりしたら容赦なく見捨ててやるからな。覚悟しとけよ」
「は、はいっ！」
「まったくもう……いちいち偉そうな男ねぇ。素直に認めてあげなさいよね」
「まあまあ、エステル。アガットさん、照れ隠しに憎まれ口を言ってるだけだから」
「う、うるせえぞ、てめえら！」
「クスクス……」
「フフ……。話がまとまって何より。そろそろ工房船の準備が済ん

でいる頃でしょう。準備が済み次第、飛行場に向かうといいわ」
「うん、わかった！」
「じゃあな、キリカ。軍への対応は任せたぜ」
「ええ、問い合わせが来ても適当にあしらっておく。女神（エイドス）の加護を。くれぐれも気を付けて」
エステルたちは飛行場へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（２３）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

レイストン要塞に乗り込むことを決めたエステルたち。次回より緊迫した潜入計画が始まる！

第４章　黒のオーブメント（２４）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第１話です。

第4章　黒のオーブメント（24）

―ツァイス発着場

発着場ではマードック工房が待っていた。

「おお、待っていたよ。そちらの準備は済んだのかね」

「ああ、いつでも行けるぜ」

「《ライプニッツ号》の準備はできているんですか？」

「ああ、運がいいことに軍から急な発注があってね。ちょうどレイストン要塞に出発する予定だったんだ。いつでも離陸できるそうだよ」

「いつでもって……。あのオレンジ色の船、どこにも見当たらないんだけど……」

エステルが周りを見渡すが、ライプニッツ号は見当たらなかった。

「エステル、下だよ」

ヨシュアが後ろ側を指した。

「あっ、あんなところに……。じゃあ、あそこまで降りていく必要があるんだ？」

「ふふっ、お姉ちゃん。降りる必要なんてないよ」

「へ……」

その時、飛行場から何やら音が聞こえてきた。

「な、なに……！？」

「飛行船のレーンが……！」

「なんだ、知らなかったのか？ここの飛行場は、とんでもなく常識はずれの造りをしてるんだぜ」

「じょ、常識外れ？」

エステルがそう言うと、飛行船のレーンが移動して自分たちの目の前で停止した。

ここの飛行場のレーンは可動式だったのだ。

「なんていうか、大抵のことには慣れっこになったけど……」

「うん、極めつけの大仕掛けが残っていたね」
「ちなみに、この飛行場の仕掛けも……」
「わかってるわよ。ラッセル博士なんでしょ。ティータ。あんたのお祖父ちゃんってホント、とんでもないヒトねぇ」
「えへへ……。それはわたしも同感」
「よう、待たせちまったな」
「あ、整備長さん！」
ライプニッツ号からグスタフ整備長が現れた。
「ティータ坊。話はぜんぶ工房長に聞いたぜ。まさか、ラッセル爺さんがそんなことになっちまうとはなァ。及ばずながら、俺たち整備屋もとことん手伝わせてもらうからな」
「あ、ありがとーございます！」
「すまねえ、世話になる」
「いいってことよ。爺さんは俺にとっても恩人だ。さァて。こちらの準備はオッケーだ。レイストン要塞に出発するかよ？」
「うん、お願いしちゃうわ」
「よし！だったら乗った乗った！工房船、《ライプニッツ号》、レイストン要塞に出発するぜ！」
「遊撃士諸君……。博士のこと、よろしくお願いする。それから……ティータ君を守ってあげてくれ」
「工房長さん……」
「うん、どーんと任せて！」
「それでは行ってきます」
エステルたちが乗り込むと、すぐに《ライプニッツ号》は出発した。
「頼んだぞ、遊撃士諸君……」
工房長は行く末を見守った。
「ま、待ってぇ～！」
その時、ドロシーが飛行場に駆け込んできた。
「はあはあ……。ああ……行っちゃった～……」
「おや……。ドロシー君じゃないか」

「あ、工房長さん！今の船に、エステルちゃんたち乗っていたんですよねぇ？」
「そうだが……。どうして知っているのかね？」
「ギルドの受付で教えてもらったんですよう。編集部と連絡をとったら大変なことがわかったんで知らせなくちゃって思って～」
「た、大変なことだって？うーん、今のこの状況よりも大変なことなんて想像もつかないが……」
「えっと……これはオフレコなんですけど～。王都にいた親衛隊の人たちが反逆罪で捕まったらしいです～」
「な、なんだって！？」
あまりの衝撃的な情報にマードック工房長は驚いた。

第４章　黒のオーブメント（２４）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ王国内で波乱の波が起こり始めた。しかし、エステルたちはそれを知る由はない。

第４章　黒のオーブメント（２５）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第２話です。

第4章　黒のオーブメント（25）

―ライプニッツ号

「こいつが、お前さんたちに隠れてもらうコンテナだ。４人で隠れるには狭いと思うが、ま、カンベンしてくれや」

「そう？結構大きそうな気がするけど」

「それがよ～、偽装するから空いたスペースは半分もねえんだ。わはは、ちょっとした押しくらまんじゅうになるだろうな」

「なるほど、そりゃ狭そうだわ」

「大丈夫、姿勢を工夫すれば隠れるだけの広さはあるよ」

「充分だ。贅沢言ってる場合でもねえしな。そうだ、オッサン。戦術オーブメント用の設備はあるか？少し調子が悪いんで調整しておきたいんだが……」

「ああ、工房設備があるから勝手に使ってくれて構わねえぞ」

「あ、わたしも感知妨害器を調整するから一緒に行きます。アガットさん、こっちです」

「あ、ああ……」

アガットとティータは先に調整に行ってしまった。

「レイストン要塞まで３０分くらいのフライトだ。コンテナの偽装をしとくからそれまで適当に休んでてくれや」

「うん、わかったわ」

「よろしくお願いします」

エステルたちは、レイストン要塞に着くまで準備をすることにした。

―整備室

「それじゃあ、アガットさんの戦術オーブメントを見せてください。簡易測定器を使って、どこが悪いかちょっと調べてみますからー」

「ああ、コイツだが……。しっかしお前、機械を見るとすぐに目の

色変えるのな」

―工房船　外

「うわ～、高いわね。飛行船に乗るの、けっこう久しぶりかも」

「そうだね。空賊艇に忍び込んだときは景色を見る余裕は無かったし。あの時と状況は似ているけどはるかに危険度は高いと思う……。気を引き締めてかからないと」

「うん……わかってる。でも、平和なリベールでこんな事件が起きるなんて……。あたし、何か大きなことが動き始めているような気がする」

「僕もそう思う。空賊たちや、ルーアン市長の背後にはあの黒装束たちがいた。だから、彼らの正体が判れば何か重要な事が掴めるかもしれない。ひょっとしたら……父さんが居なくなった理由もね」

「そっか……。よし、博士を助けるついでにそのあたりも探ってみなくちゃね！」

―整備室

「うんしょっと。はい、これでいーです。スロットの接続部分の金具が緩んでいたみたいですね」

「ったく……おせっかいなガキだな。その程度の調整だったら俺でも出来るってのによ。でもまあ、礼は言っとくぜ」

「ふふ……。どーいたしまして。あ、そういえば……。身体の方はもう大丈夫ですか？気持ち悪くとかなってませんか？」

「ああ、大丈夫だ。本気で心配はいらねえよ。人の心配するくらいだったら自分のことをまず心配しとけ。今だったらまだ引き返せるんだぞ？」

「わ、わたし……」

「っと、勘違いすんな。今さら来るなとは言わねえよ。ただ……お

前、怖くねえのか？」
「ふぇっ？」
「爺さんのためとはいえ、軍事施設への不法侵入だ。いくらガキでも、その重大さがピンとこない歳じゃねえだろ？どうして、そんなにノホホンとしてられるんだ？」
「えっと、その……。ホントのこと言うと怖くてたまらないんですけど……。でも、エステルお姉ちゃんとヨシュアお兄ちゃんがいるし……。それにアガットさんがいるから……。怖いっていう以上に安心できるような感じなんです。えへへ……。わたし、ちょっとニブイのかも」
「……。フフン。ちょっとじゃなくて、かなりだろ。どうやら心配するだけ時間のムダだったみてえだな」
「えへへ……ごめんなさい。……。あ、あの……ひとつ聞いてもいいですか？」
「なんだよ、やぶからぼうに？」
「えと、その……。ミーシャさんって、誰なのかなって」
それを聞くと、アガットの表情が一変した。
「……なんでその名前を知ってる？」
「あ、あのあの……。アガットさんが毒でうなされている時にわたしのことをそう呼んで……。……ごめんなさい。聞いちゃいけませんでした？」
「いや……。隠すほどのことでもねえしな。ミーシャってのは、俺の妹だ」
「わあ、アガットさんってお兄ちゃんだったんですか？妹さんっていくつなんですか？やっぱり、わたしよりも年上？」
「いや……そうだな。ちょうどお前と同じくらいの歳だったはずだ」
「？？？」
アガットのはっきりしない言い方にティータは疑問を覚えた。
「えっと、ふだん妹さんとあんまり会っていないんですか？」
「まあ、こういう職業だからな。年に一度、里帰りした時に顔を見

せる程度かもしれねえな」
「そうなんだ……。……ミーシャさん、ちょっと可哀想……」
「な、なんでだよ？」
「だって……わたしにお兄ちゃんがいたらいつも一緒がいいなって思うし……。とにかく、わたし、ミーシャさんに同情しちゃいます」
「そ、そうか……。でもまあ、確かにそうだな。もっと俺がしっかりしてれば一緒にいてやれるんだが……」
「え……？」
その時、船内にアナウンスが流れた。
「当飛行船はまもなくレイストン要塞に到着します。遊撃士の方々は至急、船倉エリアに集まってください」
「っと、そろそろ時間か……」
「あ、いたいた」
エステルとヨシュアが整備室にやってきた。
「あ、お姉ちゃんたち……」
「アナウンス、聞いたでしょ。そろそろ到着するみたいよ」
「準備が済んでいるんでしたら一緒に船倉に行きませんか？」
「ああ、俺の方の準備はいいぞ」
「ティータの方は装置の調子はどうだった？」
「うん、バッチリだよ。タイミングのテストもしたし。よっぽどの事がない限り、生体感知器をごまかせると思う」
「おっと。頼もしいセリフじゃない」
「期待してるよ、ティータ」
「うん！」
「よし、それじゃあとっとと船倉に向かうとするか」
エステルたちは船倉へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（２５）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回、レイストン要塞に潜入開始！無事、見つからずに潜入に成功できるか！？

第４章　黒のオーブメント（２６）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第３話です。

第4章　黒のオーブメント（26）

―ライプニッツ号　船倉

「おお、来たか」

「準備、終わったみたいね？」

「コンテナの偽装は完了だ」

グスタフ整備長はコンテナを叩いた。

「普通のフタを開いても船殻修理用の特殊プレートが入っているようにしか見えないが……」

グスタフ整備長が別の側面を指し示した。

「こちら側にもうひとつ隠しトビラがあるってわけだ」

もう一方は見事に外から見ただけではわからない隠しトビラになっていた。

「へえ～、よく出来てるわね」

「たしかにこれで生体感知器を無効化できたら何とか潜入できそうですね」

エステルたちは感心した。

「さァて、あとはお前たちがこの中に隠れるだけだが……。心の準備はできてるか？」

グスタフ整備長が真剣な顔つきでエステルたちに尋ねた。

「もちろん！」

「いつでもオーケーだ」

「よし、それじゃあ1人ずつ順番に入るんだ。全員入ったら隠しトビラを閉めるからな」

「了解しました。じゃあ、まずは僕から……」

ヨシュアが初めにコンテナに入った。

「ほんと狭そうね。ピッタリくっつかないと……。……」

……」

エステルの顔が赤くなった。

「……？エステル、どうしたのさ？」
「な、なんでもないっ！」
続いてエステルが入った。
「んしょっと……」
「エステル。頭はそっちに向けて」
「オッケー。……あっ……。ちょ、ちょっとヨシュア……。この体勢、どうにかならない？」
「が、我慢してよ。こうしないと４人全員が入るなんて無理なんだから」
「そ、そっか……。そうね、仕方ないよね」
中は相当狭そうだ。
「コホン……。次はティータで、最後にアガットさんかな。そうすれば何とか、４人全員入りきれると思う」
「うん、それじゃあ入るね」
ティータがコンテナに入った。
「んしょっと……。お姉ちゃん、ごめんね」
「わあ、ティータ。あったかくて柔らか～い。んー、なんだかミルクみたいな匂いもするし」
「お、お姉ちゃん……。そんなに強く抱き締めないで。ちょっと苦しいよう」
なにをやってるのだか、エステルは。
「ふっふっふ……。まあ、よいではないか。うーん。ぷにぷにのホッペじゃのう」
「やぁん」
「エステル……遊ばないの」
「やれやれ……。無性に不安になってきたぜ。こら、ガキども。もうちょいスペース空けろ」
アガットが強引にコンテナの中に入った。
「あぅ……」
「っと……きついか？」

「う、ううん。だいじょーぶです。ガマンできますから……」
「無理すんなよ。キツくなったらそう言え」
「あ、はいっ」
「よし、オッサン。こっちはいつでもいいぜ」
「わーった。隠しトビラを閉めるぜ」
グスタフ整備長は隠しトビラを閉めた。
「着陸したらすぐにコンテナを搬出する。揺れるとは思うが、しばらく我慢してくれよ」
続いてコンテナの正面のトビラを閉めた。

―レイストン要塞
「よお、シード少佐。注文通りに届けに来たぜ」
「やあ、グスタフ整備長。わざわざ来てくれてすまない。しかし、こんなに早く来てくれるとは思わなかったよ」
「王国軍はお得意様だからな。このくらいのサービスは当然だ。それにしてもずいぶん急な注文だったなァ。この前の警備艇の整備といい、なにか事件でもあったのかよ？」
「い、いや……。まあ、軍にも色々あってね。そうだ、中央工房の襲撃事件についてだが……。重要な手がかりを掴んだので数日中には解決するだろう」
「ほう……そりゃよかった。掠われたラッセル爺さんは俺にとっては大の恩人でね。まさか傷つけられているようなコトにはなってねえだろうなァ？」
グスタフ整備長はシード少佐を睨んだ。
「い、いや……。それはないから安心してくれ」
「ほう、何でわかるんだい？」
「犯人たちは、博士を人質に身代金を要求しているらしい。無事は確認されているからどうか安心して待っていてくれ」

「なるほどねぇ……。ま、王国軍に任せておけば何の心配もいらなさそうだな。で、今日もコンテナのチェックをするつもりかい？」
「信頼はしているがこれも規則なのでね。お前たち、さっそく始めろ！」
シード少佐は兵士にコンテナのチェックを命じた。
「ラジャー！」
「了解しました！」
兵士はすぐに生体感知器でチェックを始めた。
「異常なし、次……」
「……ＯＫです」
次々とチェックをする兵士たち。そして、急に生体感知器が反応した。
「センサーに異常あり！生体反応です！」
「なんだと……！？整備長……これは？」
「お、おいおい。別に心当たりはねぇぞ。装置の故障じゃねえのか？」
「そんなはずはない……。中央工房に発注した特別製の生体感知器だ」
「だったらあれだ。ネズミかなんかだろ。そんなに大騒ぎすることないんじゃねえのか？」
「……これも規則なのでね。お前たち！そのコンテナを取り囲め」
コンテナは銃を構えた兵士４人で取り囲まれた。辺りに緊迫した状況が張りつめた。
「よし……開けろ」
兵士の１人がコンテナを開けた。
コンテナの中にいたのは……猫だった。
「は……？」
シード少佐や兵士は拍子抜けした。
「なんだよ。アントワーヌじゃねえか。お前、いつの間に紛れ込んでやがったんだ？」

「にゃーお」
「そ、その猫は……？」
「アントワーヌってえ名前で中央工房に住んでいるヤツだ。どうやら《ライプニッツ号》に忍び込んでいたみてえだな」
「まったく驚かせてくれる……。こら、お前。人騒がせにも程があるぞ」
「にゃおん？」
「まあ、猫の気まぐれを責めても致し方ないか……。お前、気に入ったのならしばらくここに住んでみるか？」
「おいおい。アントワーヌを誘惑するなよ」
「ふみゃあ……。……にゃおん」
アントワーヌは《ライプニッツ号》に戻っていった。
「むむ、フラれてしまったか」
「はは、残念だったなァ。しかし、その生体感知器、ずいぶん大した代物じゃねえか。あやうくアントワーヌを閉じ込めたままにするとこだったぜ」
「ああ、さすがは中央工房製の機械だ。……それではお前たち。残りのコンテナをチェックしろ」
「了解しました！」

―レイストン要塞　夜
「お前たち、ご苦労だった。コンテナの搬入は明日にして今日はもう兵舎に戻るがいい」
「あ、あの、少佐殿……。ここ数日の非常体制ですがいつまで続くのでしょうか？」
兵士の１人がシード少佐に尋ねた。
「……」
「そ、そうです！どうして我々正規軍があんな連中の言いなりに…

…」

もう1人の兵士もここぞとばかりに尋ねた。

「お前たちの言いたいことは分からないでもない……。だが、上官の決定に疑問を差し挟むのは軍人の役目ではない。それに、どこに目があり耳があるのかわからんのだ。不用意な発言は慎むがいい」

「は……」

「りょ、了解しました」

兵士は兵舎へと戻っていった。

「ふう……。後ろめたいものだな……」

シード少佐はため息をついた。

「少佐殿、申し上げます！」

そこに王国軍士官がやってきた。

「カノーネ大尉が話したいことがあるから来てくれとのことです」

「そうか、わかった。仕方ない……。雌狐の話を聞きに行くか」

シード少佐はうんざりとした表情で発着場を後にした。

誰もいなくなった発着場でコンテナが開いた。

「は～。さすがにつらかった～。ティータ、大丈夫だった？」

「うん、ちょっとだけ頭がボーッとなったけど……。でも、ちゃんと装置を動かすことができてよかった」

「ああ、大したもんだ。散々反対したが……来てもらって正解だったな」

「えへへ……。ありがとう、アガットさん。でも、アントワーヌにはビックリさせられちゃいました」

「うんうん、ちょうど隣のコンテナだったもんね。完全にバレたと思っちゃった」

「あの猫、整備長さんがわざと入れたんだと思うよ。あれがあったせいで兵士の警戒も緩まったからね。本人、落ち着き払ってたし」

「ふふ、整備長さんならそれくらいやっちゃうかも」

「なかなか喰えないオッサンだぜ。さてと……。それじゃあ行動開始といくか」
アガットがレイストン要塞概略図を取り出した。
「俺たちがいるのは飛行船発着場――――このあたりだ」
アガットが飛行船発着場に印をつけた。
「やみくもに捜したところで博士を発見できるとは思えねぇ。そこでエステル……。地図から見当をつけてみろや」
「えっ？ど、どうしてあたしに聞くのよ？」
いきなり名指しされて慌てるエステル
「なに、ギルドの先輩として洞察力をテストしてやろうと思ってな。ほら、時間がねえんだからとっとと答えろや」
「仕方ないわね……。うーんと、中央の研究棟かな？」
「ほう……驚いたな」
「ふふん、任せないっての♪」
「調子に乗るなっつーの。ヨシュア。お前の意見はどうだ？」
「僕もそこが怪しいと思います。独立した敷地内にあるし、博士の才能を利用しているならうってつけの場所ですから」
「ま、そういうことだ」
アガットが研究棟に印をつけた。
「時間もないことだし、まずはここを調べてみるぞ」
「アガットさん。脱出のルートはどうしますか？」
「おっと、そうだったな。この発着場の反対側に湖に出る波止場があるみてえだ」
アガットは波止場に印をつけた。
「爺さんを救出しだい、ここから船を奪って逃げるぞ」
「うん……わかったわ。それじゃあ、この研究棟に向かいましょ。ティータ。あたしたちから離れないでね」
「う、うん……！」
エステルたちは研究棟へと急いだ。

第４章　黒のオーブメント（２６）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

無事、レイストン要塞に潜入できたエステルたち。ここからが正念場の救出劇が始まる！

第４章　黒のオーブメント（２７）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第４話です。

第4章　黒のオーブメント（27）

―レイストン要塞　研究棟前

「あ……！」

「あいつらは……」

研究棟前には、紅蓮の塔で見た飛行艇があり、黒装束の男たちがいた。

「へっ……。やっぱりいやがったか」

「塔に現れた飛行艇……」

「やっぱりあいつら軍の関係者だったのね……。普通の兵士とはずいぶん違うみたいだけど……」

「たぶん、破壊工作の訓練を受けた特殊部隊だろう。どうりで手強いわけだよ」

「お、おじいちゃん、あそこに捕まっているの？」

「ああ、いよいよその可能性が高くなってきた。だが……ここでやり合うのはマズイな」

「そうですね……。下手に騒ぎを起こしたら要塞中の兵士が駆けつけてくると思います」

「何とか見つからずに建物の中に入れないかな？」

エステルたちは研究棟の周りを探ることにした。

研究棟の窓に注目したエステル。

「ねえねえ。ここから中に入れないかな？」

「いや……窓に鉄格子がはまっている。音を立てずに侵入するのはちょっと難しそうだな……」

「……あっ！」

「こいつは大当たりだぜ……」

ティータとアガットは何かに気付いたようだ。

「え……」

「ラッセル博士。本当にありがとうございました。よくぞ、この《ゴスペル》の制御方法を突き止めてくださった。情報部を代表して感謝しますよ」

そこにいたのは、まさかのリシャール大佐だった。同時にカノーネ大尉とシード少佐がいた。

「ふん……。やはり貴様が黒幕じゃったか。情報部指令、リシャール大佐……。たしか貴様もカシウスの元部下だったか？」

「おお、そういえば博士は彼と交友があったのでしたね。カシウス・ブライトの行方は我々も捜しているのですがいまだ突き止められなくてね。心当たりがあるのなら教えて頂きたいものですが……」

「知らん。知ったところで教えるものか」

「フフ……まあいいでしょう。もし、この《ゴスペル》が彼の元に届けられていれば困ったことになっただろうが……。今さら彼が現れたとしてもこの流れを止めることはできない」

「《黒の導力器》……いや、《ゴスペル》とか言ったか……。貴様ら、それを使って何をしでかすつもりじゃ？いや、そもそも……そんな得体のしれない代物をいったいどこから手に入れた？」

「ある筋からと申し上げておこう。我々の目的は……まあ、すぐに明らかになりますよ。それが分かった頃には博士を解放して差し上げますからそれまでゆっくりなさってください」

「貴様らの悪事を知る者を平気で解放しようとするとは……。よっぽど大それたマネをしでかすつもりらしいな？」

「ハハ、想像にお任せしよう。しかし事が成ったあかつきには個人的に、博士の研究を援助させていただくつもりです。新たな発明で、このリベールをより豊かにして頂くためにね……」

「けっ、お断りじゃい」

「博士。あまり聞き分けのないことをおっしゃらないでくださいな。博士のお孫さんに万が一のことがあった時に助けてあげられません

わよ？」
そこでようやくカノーネ大尉が口を開いた。
「こ、小娘が……。またそれでわしを脅すか……！」
「やれやれ、カノーネ君。君の交渉のやり方は、いささか優雅さに欠けるのではないかね？」
「うふふ……失礼しました」
「彼女は、どうも特殊なユーモアセンスの持ち主でね。誤解して欲しくないのですが我々はみな、国を憂える一介の軍人に過ぎないのです。民間人を巻き込むつもりは一切ないと誓っておきましょう」
「憂国の士気取りか……。そして、あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオーブメント……。なるほど、貴様らの目的、何となくじゃが見えてきたわい」
「ほう……」
「……失礼する」
そこに、仮面の隊長が現れた。
「あら少尉。大佐は博士とご歓談中なの。邪魔するものではなくってよ」
「いや、構わんよ。ロランス君、報告したまえ」
「王都（グランセル）で動きがありました。大佐の読み通り、白き翼が網にかかった模様です」
「それはそれは……」
「フフ……。これでチェックメイトだな。それでは博士。我々はこれで失礼します。シード少佐。博士が不自由のないように気を配ってくれたまえ」
「は……了解しました」
リシャール大佐、カノーネ大尉、仮面の隊長こと、ロランス少尉が出て行った。
「ラッセル博士……何か入用のものはありますか。大抵のものなら揃えさせますが」
「ふん、結構じゃ。お前さんは、連中と違って骨のある男と思って

おったが……。どうやらわしの買いかぶりだったようじゃの」
「……恐縮です。博士は、ある反逆者によって誘拐されたことになっています。それを踏まえて頂ければお孫さんへの手紙など届けさせていただきますが……」
「早くわしの前から消えろ！」
ラッセル博士が頭にきたようだ。
「……失礼します」
シード少佐も研究棟を後にした。

「リシャール大佐……あの人が黒幕だったんだ。しかも父さんのことを捜しているみたいだけど……」
「ああ……どういうことなんだろう。それに、あの仮面の男……」
「あの野郎……やっぱり出やがったか。むっ、行くみたいだな……」
研究棟の前にあった飛行艇にリシャール大佐たちが乗り込んでいた。

「フッ……うまく切り抜けられるかな」
ロランス少尉が誰にともなく言った。
そして飛行艇がレイストン要塞を飛び立った。

「よし……一気に人気（ひとけ）がなくなったな。ヤツとは決着を付けたかったが、まあいい、仕事の方が優先だ」
「窓から入れない以上、見張りを倒すしかないわね。速攻でケリをつけましょ！」
「う、うんっ！」
「……」
ヨシュアは飛行艇が飛び立っていった方向をずっと見つめていた。
「ヨシュア？ちょっと、聞いてるの？」

「あ……エステル？」
「だ、大丈夫？ヨシュアお兄ちゃん……」
「おいおい、勘弁しろよ。クールなお前らしくもねえ」
「す、すみません。少しボーッとしてて……」
「ヨシュア……どこか調子でも悪いの？」
「大丈夫、問題ないよ。入口を守っている見張りを倒すんですよね？」
「ああ……とっとと始めるぞ」

第４章　黒のオーブメント（２７）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

黒幕は以外にもリシャール大佐だった！そして、博士を救出するため、研究棟に殴り込む！

第４章　黒のオーブメント（２８）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第５話です。

第4章　黒のオーブメント（28）

―研究棟前
黒装束の男たち2人が研究棟の前で見張りをしていた。しかしどうやら、見張りなんてやってられないといった感じだった。
「はあ、せっかく王都で大きな作戦があるのに……。こんなところで爺さんの見張りなんてな」
「ぼやくな、ぼやくな。王国のため、そして理想のため大佐の手足となって働くこと……。それが情報部の隠密隊員、《特務兵》の使命なんだからな」
「フン、てめえらそんな大層な肩書だったのかよ」
「なに……？」
黒装束の男たちが振り返った目の前にはエステルたちがいた。
「ば、馬鹿な……！」
「アガット・クロスナー！？」
「遅ええっ！」
エステルたちは黒装束の男たちに突撃した。

「ケッ……ざまあ見やがれ。散々コケにしてくれた借りは返してやったからな」
アガットは気を失った黒装束の男たちに向かって吐き捨てた。
「個人的な恨みが入りまくってるわね～」
「ここからは時間との勝負だ。一刻も早く博士を連れて脱出しよう」
「はいっ！」
エステルたちは研究棟の中に入った。

―研究棟
「また来おったか……。いい加減にせい！何もいらんと言うたじゃろ……」
振り返りながら怒鳴った先にはエステルたちが。
「お、おじいちゃん……」
「ティ、ティータ！？はて……わしは夢でも見ておるのか？」
「おじいちゃああん！よ、よかったぁ……。無事でいてくれてぇ……。……ううう……。うわぁあああああん！」
ティータはラッセル博士に抱きついた。
「こりゃ、どうやら夢じゃないようじゃな。それにお前さんたちは……」
「やっほー、博士。わりと元気そうじゃない？」
「マードック工房長の依頼で博士の救出に来ました」
「なんと……。ここに潜入したのか。さすがカシウスの子供たち……。常識外れなことをするのう」
「よお、爺さん。悪いがとっとと脱出の準備をしてくれや。あんまり時間がないんでね」
「なんじゃ、お前さんは？ガラの悪そうな若造じゃの。ニワトリみたいな顔をしおって」
「ニ、ニワ……。あんだと、このジジイ！？」
「あはは、博士ってばうまいことを言うわね～！」
「お、おじいちゃん。失礼なこと言っちゃダメだよ。この人はアガットさん。ギルドの遊撃士さんでお姉ちゃんたちの先輩なの」
「ほう、お前さんも遊撃士じゃったか。そういや前に、カシウスから聞いたことがあるのう。いつも拗ねてばかりいる不良あがりの若手がおると」
「あ、あんのヒゲオヤジ……！」
「まあまあ、アガットさん。博士も、詳しい話は後にして急いで脱出の準備をしてください。何か持っていくものはありますか？」

「そうか……。ならば、《カペル》の中枢ユニットを運んで行ってくれんか？下手に置いていったらまた連中に悪用されそうじゃ」
「わかりました」
ヨシュアは演算オーブメントの《カペル》を機械から外した。
「わしはそいつを使って《黒の導力器》の制御方法を研究させられていたんじゃ。構造そのものは解析できなかったが、データと制御方法は弾き出してしまった。これで連中は、いつでも好きな時に例の現象を起こすことができるじゃろう」
「そっか……」
「すまん、エステル、ヨシュア。せっかくお前さんたちが届けてくれた品物じゃったのに……」
「どうか気にしないでください。ティータの身の安全を盾にされたら従うしかないのは当然でしょう」
「むしろ、あたしたちの方が博士たちを巻き込んじゃったみたい」
「だーっ！ウダウダ言ってるヒマはねぇ！準備もできたし脱出するぞ！爺さんは、ギックリ腰にならない程度に急ぎやがれ！」
アガットは場の雰囲気に耐えかねたようだ。
「フン、言いおったな……。まだまだ若いモンに負けん所を見せてくれるわ！」
張り合うアガットとラッセル博士。
「も、もう、２人とも……」
エステルたちは脱出するため、予定通り波止場へと向かうことにした。

第４章　黒のオーブメント（２８）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ラッセル博士を救出したエステルたち。このままレイストン要塞を脱出しようとするが……。

第４章　黒のオーブメント（２９）（前書き）

レイストン要塞潜入編　第６話です。

第4章　黒のオーブメント（29）

―研究棟前
エステルたちが中庭に出ると、先ほどエステルたちに気絶させられた黒装束の男の1人が目を覚ました。
「う……く……。このまま逃がすものか……」
そして、身に着けていた警報作動装置のスイッチを押して、そのまま再び気絶した。

―中庭
「あ……これって!?」
「バレたようじゃの!」

中庭ではシード少佐が兵士たちを招集していた。
「どうやら侵入者が現れたようだ!犬どもを下げて捜索を開始する!第1、第2、第3、第4小隊は飛行船発着場および波止場を封鎖!第5、第6、第7小隊はそれぞれ兵舎・監視塔・研究棟を捜索!第8小隊は、私と共に司令部へ!以上!行け!」
「イエス・サー!」
兵士たちは各自持ち場へと移動を開始した。

陰からエステルたちが様子をうかがっていた。
「まずっ……。兵士たちが来るわ!」

「発着場と波止場を押さえられたみたいだね……。あの少佐、なかなか鋭いな」
「ふん……。さすがは本拠地を守る守備隊長か」
「ど、どうしよう……。どこから逃げればいいのかな？」
ティータがあたふたする。
「こうなった以上、波止場から逃げるのは難しそうだな……。兵士どもをかわしながらなんとか脱出ルートを探すぞ！」
エステルたちは身を隠せるところから調べた。
そして、エステルたちは司令部に逃げ込んだ。

―レイストン要塞　司令部　地下1階
地下1階は牢獄になっていた。そこにはなんとカプア一家がいた。
どうやら、砦で捕まった後ここに閉じ込められたようだ。
「ね、ねえ……。なんだか外、騒がしくない？」
「あー、なんでも侵入者があったらしいな」
「なにィ、侵入者だと……。こうしちゃいられねえ！このスキに何とか脱出して……」
「兄貴、カンベンしてくれよ。そんな簡単に脱獄できるわけ……」

「ここは……。どうやら地下牢みたいだね」
「へえ、ハーケン門の地下牢と比べると規模が大きいわね……」
エステルたちがさらに歩みを進めると、
「あれ……」
「あ」
エステルとジョゼットがご対面。
「あああああっ！？」
2人は顔を見ると同時に叫んだ。
「お、お前たちは！？」

「あの時のガキどもか！？」
キールとドルンもエステルたちに近寄ってきた。
「なんというか……。お久しぶりですね」
「そっか、あんたたちここに捕まっていたんだ。……。えっと、その、元気してる？」
エステルはかける言葉がなく適当に問いかけた。
「こ、こらあ！哀れみの目でボクを見るな！棒振り回すことしか能がないノーテンキ女のくせにっ！」
牢の中から喚くジョゼット。
「ゴメン……。何言われても平気かも。それで気が済むんなら好きなだけ罵(ののし)っていーわよ」
「む、むっか～！なに余裕かましてんだよっ！」
「おいおい、この連中、お前たちの知り合いかよ？」
アガットがヨシュアに尋ねた。
「カプア空賊団……。定期船を奪った犯人です」
「ほう、噂の連中か。かなり高性能な飛行艇を使っていたそうじゃの？帝国製と聞いていたがどのくらいのスペックかね？」
「あ、ああ、最高時速は２３００セルジュで……。って、どうしてそんな事を答えなくちゃならないんだ！」
キールが途中で話すのをやめた。答える方も答える方だ。
「なんじゃ、ケチじゃのー」
「お、おじいちゃん。そんなこと聞いてる場合じゃないと思うんだけど……」
「ちょ、ちょっと待ちやがれ！そもそも遊撃士がなんでこんな所にいやがる？もしかして、さっきから鳴っているこのサイレンは……」
「……」
「……」
「……ふむ……」
「……あう……」
「……さてと、邪魔したな」

ドルンの質問に答えずにエステルたちは地下牢を後にした。
「ああっ、ごまかしたぁ！」
「侵入者ってのはお前らかよ！」
「こら～！俺たちもついでに解放しやがれ～！」

―レイストン要塞　司令部　1階
「はあ……。ビックリしちゃった。そういえば、あいつらって黒装束の連中と関係があったよね。なのに、リシャール大佐に逮捕されたってことは……」
「大佐の手柄になるように利用されたかもしれないね。ひょっとしたらルーアンのダルモア市長も……」
「ケッ、だからといって同情する必要はねえだろうが。余計な時間を食っちまった。他の脱出ルートを見つけるぞ」
エステルたちが司令部を出ようとした時、
「おい、見つけたか！？」
「いや、兵舎の方は一通り調べ終えたぞ！」
「監視塔も異常なしだ！」
「……となると、残るはこの司令部だけのようだ。少佐に報告するついでにしらみ潰しに捜すとするか」
外では兵士たちが話をしていた。どうやら司令部に入ってくるらしい。
「まずっ！こっちに来るみたい！」
「クソッ……このままじゃ袋小路だぜ」
「……」
その時、司令部の奥から声がした。
「来い！こっちだ！」
男性の声だ。
「今、なんか聞こえた？」

「う、うん……こっち来てって言ってたような」
「……時間がない！捕まりたくないんだろう！？」
「空耳ではなさそうじゃの」
「こうなりゃ仕方ねえ！ダメもとで行ってみるぞ！」
エステルたちは声を信じて奥へと向かった。

第４章　黒のオーブメント（２９）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

絶体絶命のエステルたち。声を信じて奥へと向かうが、その声の主は意外な人物だった。

第４章　黒のオーブメント（３０）（前書き）

この話で、『第４章　黒のオーブメント』完結です。
いかがだったでしょうか？
次回、空の軌跡ＦＣの最終章、『第５章　王都撩乱（おうとりょうらん）』開幕です！

第4章　黒のオーブメント（30）

エステルたちは声の元へと急いだ。
「さあ、そのまま廊下の奥まで来るんだ！」
「ヨシュア、この声って……」
「ああ……。聞き覚えのある声だね」
エステルたちはそのまま奥へと進んだ。

奥には扉があった。
「さあ、入りたまえ！」
中から声がした。
「おいおい、その部屋は……」
「フン、何のつもりか知らんが行くしかなさそうじゃな」
エステルたちは中へと入った。

「間一髪だったな」
声の主はあろうことかとシード少佐だった。
「やっぱり……！」
「さあ、念のため鍵を」
「わかりました」
ヨシュアは鍵をかけた。
「フン、何のつもりじゃ？レイストン要塞の守備隊長。リシャール大佐に、わしの監禁を命じられていたのではないのか？」
「……その節は失礼しました。すでに王国軍は、大佐の率いる情報部によって掌握されています。主だった将官は、懐柔されるか、さもなくば自由を奪われる始末……。モルガン将軍も、ハーケン門に監禁されている状態なのです」

「えええっ!?あのガンコ爺さんが!?」
「大変なことになっていますね……」
「おいおい、一体どうしてそんな事になっちまったんだ?王国軍ってのはそこまでモロい組織なのかよ」
「残念ながら……。帝国との戦いが終わってから軍の規律は少しずつ乱れていった。特に将官クラスの者たちの間で横領・着服・収賄が絶えなかった。そこをリシャール大佐に付け込まれてしまったのだ」
「なるほどのう……。持ち前の情報力を駆使して弱みを握ったというわけか」
「その通りです。モルガン将軍が監禁された今、リシャール大佐は王国軍の実質的なトップとなりました」
「と、とんでもないわね……」
「アリシア女王はどうだ?王国軍の指揮権は、最終的に女王に帰属するんじゃねえのか?」
「不可解なことだが……女王陛下は沈黙を保ったままだ。陛下の直属である王室親衛隊も反逆罪の疑いで追われている……」
「は、反逆罪!?あのユリア中尉たちが!?」
「中央工房の襲撃事件を親衛隊の仕業に偽装したらしい。ご丁寧にも証拠写真まで用意したようだ」
「ドロシーさんの写真か……」
「そ、そんなのおかしーですっ!中央工房をめちゃくちゃにしておじいちゃんを掠って……。アガットさんを撃って死にそうな目に遭わせたのに……。それを人のせいにするなんて!」
「ああ……返す言葉もない。上官の命令は絶対だが……黙認した私にも責任がある。だから……せめてもの罪滅ぼしをさせて欲しかった」
「難儀な人だな、あんた」
「フン、そういう事であれば無礼の数々は水に流してやろう。その石頭を、スパナで叩くくらいで勘弁してやるわい」

「きょ、恐縮です」
「お、おじいちゃんってばぁ」
「冗談じゃ」
「話はわかったけど……。これからどうするつもりなの？ほとぼりが冷めるまであたしたちを匿（かくま）ってくれるの？」
「いや、それよりもはるかに安全な方法がある。君たちには、この部屋から要塞を脱出してもらいたい」
「この部屋って……」
周りに扉は先ほどの入口しかない。
「なるほど……。脱出口があるんですね？」
「ふふ、なかなか鋭いな」
シード少佐は部屋の壁の１つを押した。そうすると、隠し扉が現れた。
「わわっ……」
「さすが軍の司令室。なかなか凝ってるじゃねえか」
「この緊急退避口を使えば要塞の裏にある水路に出られる。ボートが用意されているからそれを使って脱出できるはずだ。本来なら、部外者に明かしたら禁固１０年は確実なのだが……。まあ、軍規は許してくれなくとも女神（エイドス）は許してくれるだろうよ」
「少佐さん……」
「遠慮なく使わせてもらうぜ。最初に俺が降りる。次に、爺さんとティータが来い。エステル、ヨシュア。しんがりはお前らに任せたぞ」
「わかったわ！」
「了解です」
アガットが先に行った。
「少佐、さらばじゃ」
「えっと、あの……。ありがとーございました！」
ラッセル博士とティータが続いて行った。
「さてと……。残りはあたしたちだけね。少佐、色々とありがとう」

「お世話になりました」
「いや、礼はよしてくれ。実のところ……君たちと最初に会った時にこうなることは予想していた」
「最初に会った時……？」
「ゲートでお会いした時ですね？」
「ああ……。名字を聞いたときにね。君たちは、カシウス大佐のお子さんたちなのだろう？」
「カシウス大佐って……。ええっ、父さんってそんなに偉い階級だったの！？」
身内のエステルすら初耳だったらしい。
「私も、あのリシャール大佐も彼直属の部下だったのだよ。１０年前の侵略戦争で帝国軍を撃退した陰の英雄……。その子供たちならば必ずや、真実を突き止めて博士を助けに来ると思ってね」
「そ、そうだったんだ……。でも、父さんが帝国軍を撃退した英雄って……」
その時、入口の扉が叩かれた。
「少佐、よろしいですか！どうやら侵入者が地下牢に来ていた模様です！まだ司令部に潜伏している可能性が高そうですが、いかがしますか！？」
「や、やば……」
エステルたちが焦った。
「わかった！すぐ行くからその場で待機！」
シード少佐が扉越しに命令した。
「さあ、早く行きたまえ」
「う、うん……！」
「それでは失礼します」
エステルとヨシュアはシード少佐に礼を言って失礼した。
「は～、びっくりした！まさか滑り台になっていたなんて」

「どうやら、秘密の水路に出たみたいだね。さあ、早く追いつこう！」

「おっと、来たようじゃの」
「お姉ちゃんたち、こっちだよ！」
「遅えぞ！なにグズグズしてた？」
「ゴメン、ゴメン。ちょっと父さんの話が出てさ」
エステルとヨシュアは船に乗り込んだ。
「お待たせしました。発進してください」
「ようし……。しっかり掴まってるんじゃぞ！」
ラッセル博士は船を発進させた。

―レイストン要塞　ゲート前
「ふう……。何とか脱出できたわね。まだ、こっちの方まではパトロールに来てないみたい」
「シード少佐が引き留めているのかもね。でも、グズグズしていたら追跡部隊が編成されると思う。どこか安全な場所に博士たちを逃がさないと……」
「……ふむ……」
「お姉ちゃん、お兄ちゃん……」
ティータが心配そうな顔をした。
「あ、心配することないからね。ティータと博士のことは絶対に守ってあげるんだから」
「……いや。お前らはここで手を引け」
「え……！？」
「どういうことですか？」
エステルとヨシュアがその言葉に反論した。

「今回の一件で、俺は完全に情報部の連中にマークされた。そして、爺さんとティータも同じように追われ続けるはずだ。逃げるついでに、2人まとめて安全な場所まで逃がしてやるよ」
「アガットさん……」
「なるほど、そう来たか。そうじゃな。わしらに巻き込まれる人間は少なければ少ない方がいい。本当なら、ティータも巻き込みたくはなかったが……。人質に取られることを考えると一緒に逃げた方がいいじゃろう」
「おじいちゃん……」
「ちょ、ちょっと待ってよ！あたしたちだけ安全だなんてそんなの絶対に納得いかない！ヨシュアもそう思うでしょ？」
エステルは納得いかずにヨシュアに同意を求めた。
「いや……。ここはアガットさんが正しい」
「へっ……」
「逃亡・潜伏のセオリーだと一緒に行動する人間が多くなると、それだけ
逃げ隠れがしにくくなる。その意味では、アガットさんだけで博士を逃がした方がいいんだ。君の気持ちは分かるけど……ここはアガットさんに従おう」
「そ、そんな……」
「さすがだな、ヨシュア。よく分かってるじゃないか。エステル、ここは素直に引いてもらうぜ」
「で、でも……。理屈では分かるんだけど……」
「エステルお姉ちゃん……」
「ふむ、あくまで納得できない顔をしとるのう。ならば、わしの代わりにある仕事を引き受けてくれんか？」
「え……」
「まず、王都に向かってほしい。そして、グランセル城にいるアリシア女王陛下と面会してくれんか」
「じょ、女王様に面会～！？」

「どういう事でしょうか？」
「例の《黒の導力器》じゃが……。あれは元々、リシャール大佐がどこからか入手した物らしい。彼は《黒の導力器》のことを《ゴスペル》と呼んでおったよ」
「福音（ゴスペル）……ですか」
「ケッ……。ご大層な名前じゃねえか」
「どうやら、《ゴスペル》は何者かによって情報部から持ち出されたらしい。恐らく、その持ち出した人間が小包でカシウス宛に送ったのじゃろう。じゃが、あの導力停止現象で所在が情報部に知られてしまった。あの黒装束――特務兵どもが中央工房を襲撃した真の理由はわしでも演算オーブメントでもない。あれを回収するためだったのじゃ」
「そ、そうだったんだ……」
「なるほど……。それで色々納得できました」
「リシャール大佐は、あれを使って王都で何かをしようとしておる。わしのカンが正しければ……非常にマズイことが起きるはずじゃ。その事を陛下に伝えて欲しくてな」
「非常にマズイこと……。あの導力停止現象ってやつ？」
「いや……。おそらくそれを利用した……。……すまん、これ以上はわしの口から言うわけにはいかん。とにかく、あの《ゴスペル》について陛下に直接伝えて欲しいのじゃ。逃亡するわしの代理としてな」
「はあ……まったくもう。そんな風に言われたら断るに断れないじゃない」
「僕たちでよければ引き受けさせてもらいます」
「すまんな、よろしく頼んだぞ」
「あ、あの……。エステルお姉ちゃん。……ヨシュアお兄ちゃん……」
ティータが寂しそうにエステルとヨシュアを見た。
「ティータ……。しばらくのお別れだね」

「ごめんね……。付いててあげられなくて」
「そ、そんなぁ。あやまる事なんてないよう。わたし、お姉ちゃんたちに助けられてばっかりいて……。すごく仲良くしてくれて、妹みたいに扱ってくれて……。……ううう……えうっ……」
「ティータ……」
「お、おじいちゃんのこと助けてくれてありがとう……。うくっ、それから……仲良くしてくれてありがとう……。……2人とも……大好きだよ……」
「うん……あたしも大好きよ……」
「君と一緒にいられて僕たちも嬉しかった……。こちらこそありがとう」
「……。名残惜しいだろうが、そのくらいにしておきな。涙なんざ、また会えた時に取っておきゃいいだろう？」
「グス……もう……デリカシーがないんだから……。でも……あんたともしばらくお別れね。色々あったけど、一緒に仕事してすっごく良い経験になったわ。ありがとね、アガット先輩」
「ぞわわ……。気色悪い呼び方すんじゃねえ！」
「あはは、照れてやんの？」
どうやら、エステルはアガットをからかったようだ。
「ったく……。さすがはオッサンの娘だぜ。ヨシュア、その跳ねっ返りが暴走しないように気をつけとけよ。武術だけは一人前だが、それ以外はどうも不安だからな」
「フンだ、よけーなお世話」
「ええ、任せてください。アガットさんも気をつけて。博士とティータのこと、どうかよろしくお願いします」
「おお、任せておきな。それじゃあ……俺たちは先に行くぜ！」
「さらばじゃ！カシウスの子供たちよ」
「げ、元気でねっ！お姉ちゃん、お兄ちゃん！」
「うん！ティータたちも！」
「女神の加護を！くれぐれも気を付けて！」

アガットたちは先に行ってしまった。

第４章　黒のオーブメント（３０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回、第５章より、王国軍情報部の陰謀が浮上し、リベール王国全てを巻き込むことになる。エステルたちは最後の五大都市、《王都グランセル》に向かい、その陰謀を食い止めることができるのか！？

第5章　王都撩乱（1）（前書き）

今回、次回は、エステル・ヨシュアは登場しませんが、重要な話です。

第5章　王都撩乱（1）

―エルベ周遊道―キルシェ通り間

「こちらです、クローゼ！」

ユリア中尉がクローゼを誘導している。

「はあはあ……。何とか周遊道を抜けましたね。どうしましょうか、これから？」

どうやら、2人は何かから逃げているようだった。

「このままキルシェ通りに出て王都（グランセル）にお向かいください。部下たちの陽動によって警備は手薄になっているはずです。そのお姿なら、気付かれずに遊撃士協会まで行けるでしょう」

「分かりました……あ。それではユリアさんは……！？」

「ここで敵を食い止めます。少しの間ですが時間稼ぎにはなるでしょう」

「そんな……そんなのダメです！私一人が逃げるなんて……。私もユリアさんと共に戦います！」

「……人はそれぞれ守るべきものがあります。私がここに留まるのはおのれの信念と責務のため。ですが、貴女の場合は、失礼ながらただの感傷に過ぎぬかと存じます。御身が御身なだけのものでないこと、どうかお忘れなきよう……」

「……。わかりました、ユリアさん。でも、約束してください。絶対に無茶なことはしないと……。それと、無事再会できたらお祖母さまが淹れた紅茶を一緒にご馳走になりましょう。私、新作のお菓子を焼きますから」

「それは楽しみです。さあ、お急ぎください。……ジーク！しっかりお守りするのだぞ！」

クローゼはジークと共に王都を目指した。

「さてと……。そろそろ追いついてきたか……」

向かってきたのは、黒装束の男たち改め、特務兵と訓練犬だった。

「3人……それに犬どもが5匹か。フ、甘く見られたものだ。あの方より教わりし剣……。存分にふるう時が来たようだ」
ユリア中尉が剣を構えた。
「王室親衛隊、中隊長……。ユリア・シュバルツ――参るッ！」

―キルシェ通り
クローゼは王都の目の前まで逃れてきた。
「はあはあ……。……ジーク、来て！」
「ピュイ？」
「私はもう大丈夫だからユリアさんのところに行ってあげて。このままだとユリアさんが……」
「ピューイ！」
「ありがとう、お願いね」
ジークはユリアの元へと向かった。
「ユリアさんの言った通り、こちらの警備は手薄みたい……。急いで遊撃士協会に行かないと……」
その時、雨が降り出した。
「雨……。……。そういえば、エステルさんたちもそろそろ王都に来る頃かしら……」
上空から何やら飛行船の音がした。
「……まさか！？」

そこに現れたのは、紅蓮の塔やレイストン要塞でみたあの警備艇だった。
「情報部の特務艇……！まさか、昼間のうちから王都の前に現れるなんて……」
それだけ、情報部がリベールを支配していることが伺えるような大胆な行動だった。

クローゼは引き返し逃げようとした時、
「あっ……」
「……」
クローゼの目の前にロランス少尉が立ち塞がった。
「やあ、珍しい所で会うものだな」
特務艇から現れたのは、リシャール大佐だった。
「ジェニス王立学園、社会科在籍。クローゼ・リンツ君……。少々、話を聞かせてもらえるかね？」

第5章　王都撩乱（1）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

なぜかクローゼの身を確保したリシャール大佐。その目的とは！？

第5章　王都撩乱（2）

―王都グランセル　東街区　帝国大使館

「麗しの王都に暗雲立ちこめ、昏き情熱の序曲が鳴り響く……。フフ……面白くなってきたじゃないか」

部屋の一角で何やら呟いていたのはオリビエだった。

「……相変わらずのお調子者だな」

部屋に入ってきたのは軍人姿の男性だった。

「おお……。ボクは夢でも見ているのか？ミュラー、親愛なる友よ！多忙な君が、わざわざ帝都から訪ねて来てくれるとは。一体どういう風の吹き回しだい？」

「何をぬけぬけと……。貴様が連絡の一つもよこさずにほっつき歩いているからだろうが。余計な手間を取らせるんじゃない」

「フッ、照れることはない。口ではそう言いながらもボクの事が心配でしようがなくて飛んできてしまったのだろう？恋は盲目とはよく言ったものだ」

「……」

「さあ、遠慮することはない。ボクの胸に飛び込んできたまえ！」

オリビエが両腕を勢いよく広げた。

「頼まれた情報をわざわざ持ってきたんだが……。どうやら知りたくないようだな」

「ああん、つれないことを言わないでくれたまえ。わかった。つまり誠意を見せろと？」

「それが常識だと思うが」

「そういう事ならお任せあれ。コホン……」

オリビエがわざとらしく咳払いすると、

「お願いします、ご主人様っ☆どうか教えてくださいませっ？」

ミュラーは何も言わず立ち尽くしている。

「あれ、外したかな？それじゃあ、お次はこれだ」

次にオリビエは片手片膝を床につくと、
「アニキー！一生のお願いじゃあああっ！どうか教えてくれぇぇい！」
「もういい……。頭が悪くなりそうだ……。話してやるから黙ってろ」
ミュラーはオリビエの態度に呆れ果てたようだ。
「ワァイ」
オリビエはすぐさま立ち上がった。
「例の《彼》だが……。ようやく足取りが見つかった。どうやら一月前まで帝国の遊撃士協会にいたらしい」
「へえ……？」
「ここ数ヶ月の間、帝国各地の協会支部が立て続けに襲撃された。その事件を調査していたらしい」
「襲撃ねぇ……。まさかとは思うけどどこかの部隊の仕業だったりする？」
「さすがに……。１０年前とは事情が違うさ。俺の知る限り、どの部隊にも出動命令は下されていない。何者かに雇われた猟兵団（イェーガー）の仕業だった可能性が高そうだ。いずれにせよ、事件解決と同時に彼の足取りは途切れてしまった」
「ふーむ……参ったな。せっかくリベールに来たのに完全に入れ違いだったわけか」
「まあ、そういうことだ。目当ての人物がいない以上、この地に留まる必要はあるまい？どうやら予想以上に激しい嵐が近づいているようだ。巻き込まれる前に帝都に戻るぞ」
「はっはっは、ご冗談を。せっかく始まる極上のオペラに参加しないという手はあるまい？」
「……なに？おい、まさかお前……」
オリビエがガラス越しに外を見た。
「役者もそろいつつあるようだ。あいにく、主役は不在だが代役には心当たりがあってね。あの２人なら、必ずや自力で舞台に上がっ

てきてくれるだろう」

第5章　王都撩乱（2）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回、エステル・ヨシュアはキリカたちに事件の総括を話します。

第5章　王都撩乱（3）

―遊撃士協会　ツァイス支部

「そうか……。博士を無事救出してくれたか。演算器も取り戻してくれたし、何とお礼を言ったらいいのか……。ありがとう。エステル君、ヨシュア君」

「うーん、あたしたちは大したことしてないんだけど。どちらかというと、アガットの手伝いをしただけだし」

「お礼なら、博士たちを守っているアガットさんに言ってあげて下さい」

「もちろん、彼にも感謝してるさ。無事、軍の捜索から逃げ切れるといいんだが……」

「今はアガットを信じるしかないでしょう。しかし、どうやらリシャール大佐は王都で何かをするつもりのようね。《ゴスペル》と呼ばれる漆黒のオーブメントを使って」

「うん、どういう用途で使うのかは分からないけど……。その事を女王様に伝えるように博士から頼まれちゃったのよね」

「ううむ、まさかそこで陛下の名前が出てくるとは……。確かに博士は、女王陛下と個人的な親交があったはずだ。王国の機密に関することを知っていてもおかしくはない」

「そういう事情で、博士から正式に依頼を受けたんですが……。キリカさん、現状で僕たちが王都に行っても大丈夫ですか？」

「要塞に潜入したのがあなたたちである証拠はないから、今のところ問題はないでしょう。むしろ、追及される前に王都に向かった方がいいわね。少なくとも、中央工房に査察が入る可能性はありそうだわ」

「確かに……。今のうちに対策を立てなくては。エステル君、ヨシュア君。どうか気を付けて出発してくれ。博士の依頼、よろしくお願いする」

「うん、任せておいて！必ず女王様に伝えるから」
「工房長も、どうかお気をつけて」
「ああ、みすみす軍の連中に尻尾をつかませるヘマはせんさ。それでは失礼するよ」
マードック工房長は今後の対策を立てるため、中央工房に戻って行った。
「さてと……。こうなったら善は急げね。一刻も早く女王様に会わなくちゃ」
「だったら、今回ばかりは定期船を使った方がいいかもね。王都まで歩いたら半日くらいかかるけど、飛行船なら1時間足らずだからね」
「そっか、確かに……。せっかく徒歩で王国一周しようと思ったけど仕方ないか」
「だったら、少し待ちなさい」
キリカが通信器で何やら話し始めた。
「こちら遊撃士協会……。こんにちは。いつもお世話になってるわね。……ええ……お願いするわ。王都行きを2枚……。ええ……請求はいつものように。それではよろしく頼むわね」
「？？？どうしたの、キリカさん？」
「ひょっとして発着場の受付ですか？」
「ええ、王都行きの定期船のチケットを確保したわ。代金はツァイス支部が持つから受付で搭乗手続きだけすればいいわ。それと、これを持っていきなさい」
キリカは正遊撃士資格の推薦状をエステルとヨシュアに渡した。
「えええ～っ！？」
「ず、ずいぶんと用意がいいんですね……」
「定期船のチケットは博士の依頼に関する必要経費。推薦状は、博士救出という大仕事を達成したことへの評価。報酬といっしょに、胸を張って受け取りなさい」
「あ……うん！ありがとう、キリカさん！」

「本当に……何から何まですみません」
「フフ、前にも言ったけどそれが私たち受付の仕事だから。さて……。王都行きの船は１１時出発よ。早めに発着場に行って搭乗手続きをした方がいいわね。女神（エイドス）の加護を。２人とも気を付けて行きなさい」
「はい！」
「お世話になりました」
エステルとヨシュアは早速ツァイス発着場に向かった。

第5章　王都撩乱（3）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

急いで王都へ向かおうとしたエステルたち。しかし、思いもよらぬことが！

第5章　王都撩乱（4）（前書き）

読者の皆様、お久しぶりです。今回から本格的なＦＣ最終章の開幕です。
何か一言お待ちしてます。

第5章　王都撩乱（4）

―ツァイス発着場

「やあ、あんたたち。キリカさんから話は聞いてるぜ。さっそく搭乗手続をするかい？」

「うん、お願いしちゃうわ」

「それじゃあ、この用紙に名前と連絡先を書いてくれ」

「わかりました」

ジラールは搭乗手続の用紙をエステルとヨシュアに渡した。

エステルたちは定期船の搭乗手続を行った。

「よし、それじゃあ、これがあんたたちの乗船券だ。定期船が到着したらこいつを見せて乗ってくれ」

エステルとヨシュアは乗船券をもらった。

それを手に持って、エステルたちは乗り場まで行った。

「にゃーご」

そこで、後ろから猫の声が聞こえてきた。

「あ、このネコって……」

「あの時の、コンテナに紛れ込んでいたネコだね。たしか、アントワーヌって言ったかな」

「にゃおーん」

まるで、言葉を理解しているかのように鳴いたアントワーヌ。

「あはは、可愛い～。まったく、お前のせいですごくビックリしたんだからね。ちょっとは反省しとるかね、ん？」

「みゃおん？」

「聞いちゃいない」

がっくりとするエステル。

「はは、ひょっとしたらトボけられているのかもね」

「よう、お前さんたち！」

次に来たのはグスタフ整備長だった。
「あ、整備長さん！」
「工房長から話は聞いてたが見事、救出に成功したそうだな。博士は俺たち技術屋にとっても師匠と言えるお人だからな。俺からも礼を言わせてもらうぜ」
「えへへ、整備長さんたちが色々と協力してくれたおかげよ。さすがに、あの子にはビックリしちゃったけどね」
「やっぱりあれ、わざとだったんですか？」
「がはは、敵を欺くにはまずは味方からってな。で、どうした。発着場に何の用だ？」
「うん、博士の依頼で王都に行くことになってね」
「１１時の船なんですけど、少し早く来すぎたみたいです」
「ああ……ちょいと到着が遅れてるみてェだな。荷降ろしとかの時間もあるからもう少し街でゆっくりしていても大丈夫だと思うぜ」
「うーん、そうしよっか……」
エステルたちがどうしようか考えていた時、
「おーい、あんたたち！」
受付のジラールが走って乗り場にやってきた。
「なんだ、ジラールじゃねえか。どうした、何かあったのか？」
「ちょうどよかった。オヤジさんも一緒でしたか。実は困ったことになりましてね」
「困ったことだと？」
「いえね、飛行船公社から連絡があったんですけど……。定期船の到着、数時間ほど遅れそうなんですよ」
「えっ……！」
「……」
驚くエステルと、何か心当たりがあるのか考え込むヨシュア。
「おいおい。そりゃ一体どういうことだよ？また空賊騒ぎでも起こったのか？」
「ま、似たようなもんですかね。何でも、女王様の生誕祭を妨害し

ようとするテロリストがどこかに潜伏しているらしくて。調査のため、全ての発着場に軍による検問が敷かれるそうです」
「（そ、それって……）」
「（たぶん、逃亡している博士たちが目当てだろうね……）」
「そういうわけで、王都行きの船はしばらくルーアンで足止め。かわりに、レイストン要塞から軍の警備艇が来るらしいですよ」
「なるほど、そういうことか。しかしそうなると、お前も忙しくなりそうだなァ？」
「そうなんスよ。客に説明しないといけないし。そういうわけだから、あんたらもしばらく時間を潰しててくれや。そうだな……。遊撃士協会で待っててくれれば通信で連絡させてもらうぜ？」
「う、うん……」
「よろしくお願いします」
そうして、ジラールは戻って行った。
「……きな臭くなってきたな。軍の連中がやってくるとすれば、ライプニッツ号も調べられるはずだ。ちょいと工房長と相談してくるぜ」
「そっか、昨日のことを調べられたら大変だもんね」
「どうか気を付けてください」
「はは、お前らみたいなヒヨっ子に心配されるほどモウロクしてねえさ。それじゃあ、あばよ！」
グスタフ整備長も発着場を出ていった。
「ヨシュア……。なんか、やばそうじゃない？」
「うん……。こうなると定期船は危険だな。少し時間はかかるけど、街道を使った方が良さそうだ」
「うー、せっかく久しぶりに飛行船に乗れると思ったのに……。許すまじ、リシャール大佐！」
「まあまあ。修行の続きと思えばいいじゃない。それじゃあ、受付で搭乗手続のキャンセルをしよう」

第5章　王都撩乱（4）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ王国軍情報部の手がエステルたちに伸びてきた！この圧倒的不利な状況の中、エステルたちはどうするのか！？

英雄伝説　零の軌跡　発売前予想？（前書き）

ちょうど発売１週間前です！

英雄伝説　零の軌跡　発売前予想？

「どうも、空の軌跡メインヒロインのエステル・ブライトよ」
「ヨシュア・ブライトです」
「And, my name is Ryuya Ijuin. I am this novel's author.（作者の伊集院龍也です。）」
「なんで英語なのよ……。しかもご丁寧に訳付きだし……」
「まあ、この作者は変わり者だし……」
「I agree with you.（同感ですね）」
「そのようね……」
「まあ、このまま行こうか……」
「今日は9月30日発売の『英雄伝説　零の軌跡』の予想をしたいと思うわ」
「空の軌跡シリーズ最新作は2年ぶりだね」
「By the way, "The legend of heroes "Sora no kiseki" the 3rd" was released in 24th July, 2008.（ちなみに、英雄伝説　空の軌跡　the 3rd は2008年7月24日に発売されました）」
「こんな豆知識は放っておいて……。ヨシュアはどんなストーリーだと思う？」
「うん、クロスベル自治州を舞台にしたストーリーというのは知っているね。この自治州はエレボニア帝国とカルバード共和国の間にあって、度々問題が起きている自治州なんだ。この問題は『クロスベル問題』と言われているよ」
「ふーん、そうなんだ。主人公は新しくなったのよね？」
「そうだよ。男性主人公は『ロイド・バニングス』で女性主人公は『エリィ・マクダエル』だね。どちらもクロスベル警察の一員だね。

他に、天才のティオや女たらしと言われるランディという人も出るね。こちらでいうクローゼやオリビエさんみたいな存在かな?」

「クロスベルには遊撃士協会もあったね。ところで、あたしたちは登場するのかしら?」

「それはわからないな」

「Ｗｅｌｌ，Ｉ ｔｈｉｎｋ ｙｏｕ ｃａｎ，ｔ ａｐｐｅａｒ．Ｉｆ ｓｏ，ｉｔ，ｓ ｖｅｒｙ ｒｅｇｒｅｔｔａｂｌｅ．（うーん、登場しないんじゃないかな。もし、そうなら残念だな。）」

「ちょ、ちょっとまってよ!あたしが出られないってどーいうワケ!?」

「まだ出ないとはいってないよ。もしかしたら、どこかで出るかもしれないし。それはプレイしてからのお楽しみってわけ。ちなみに、オルタナティブ・サーガでのエステルとロイドとの会話も参考に」

「もし出なかったら、リメイクしてもらうわ!」

「そんな無茶な……」

「Ｙｏｕ ｃａｎ，ｔ ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ ｄｏ ｓｏ．（それは絶対にできませんよ）」

「おっ、エステルとヨシュア。何をしているんだ?」

「と、父さん!?どこから出てきたの!?」

「Ｔｈｉｓ ｐｅｒｓｏｎ ｉｓ Ｃａｓｓｉｕｓ Ｂｒｉｇｈｔ．Ｈｅ ｉｓ Ｅｓｔｅｌｌｅ ａｎｄ Ｊｏｓｈｕａ，ｓ ｆａｔｈｅｒ．（この人物はカシウス・ブライト。エステルとヨシュアの父親です。）」

「なんだ?『零の軌跡予想』だって?ほう、新作ゲームか。ところで、俺は登場するのか?」

「あんたは絶対出ないわよっ!どきなさい!」

「エステル、そこまでしなくても……」
「Ｙｏｕ　ａｒｅ　ａ　ｌｉｔｔｌｅ　ａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ，Ｅｓｔｅｌｌｅ．（エステル、強引だね）」
「そうだぞ、エステル。俺はただでさえ出番が少ないんだ。俺はお前たちの父親だぞ。もっと出てもいいはずじゃないか？」
「なによぉ、えっらそうに。父さんは今までいい場面で登場したじゃない。特に、ＦＣのクライマックスのシーンの……」
「エステル、それはまだ言ってはだめだよ」
「あっと、そうね。とにかく父さんは出ることはないっ！以上っ！」
「しくしく……」
「Ｈｅ　ｈａｓ　ｎｏ　ｄｉｇｎｉｔｙ．（威厳全くなしですね）」

「やあ、君たち。このボクを差し置いて何してるんだい？」
「げっ、オリビエ……」
「Ｏｌｉｖｅｒ　Ｌｅｎｈｅｉｍ，ｈｅ　ｉｓ　ａ　ｅｃｃｅｎｔｒｉｃ．（彼はオリビエ・レンハイム。変人です）」
「おっと、ひどいなあ。神秘的な存在と言ってくれたまえ」
「Ｉ　ｃａｎ，ｔ　ａｂｓｏｌｕｔｅｌｙ　ｓａｙ　ｓｏ．（口が裂けても言えません）」
「オリビエさんはなぜここに？」
「フフフ、君たちがなにか面白そうなことをしていると感じたので帝国から馳せ参じたのさ（嘘）」
「Ｄｏ　ｙｏｕ　ｒｅａｌｉｚｅ　ｈｅ　ｉｓ　ｖｅｒｙ　ｆｏｏｌｉｓｈ？（皆様、理解いただけましたでしょうか？彼の変人っぷりを）」
「はいはい。わかりました。じゃあ、さようなら」
「ちょ、ちょっと待ちたまえ！冗談だから、少しだけこの場で出させて、お願いっ！」

「まったくもう。仕方ないわね。じゃあ、少しだけよ」
「フッ、では話させていただこう。『英雄伝説　零の軌跡』における第3の主人公はこのオリビエ・レンハイム。その華々しき活躍をとくとご覧あれ！」
「そんなわけあるかぁ！邪魔よっ！」
「ゴフッ……！」
「ひどい紹介でしたね。まるで自分が主人公よりも活躍しそうな語りぐさだったね」
「少しでも出させたあたしのミスだったわ……」
「Ｗｅｌｌ，Ｉ’ｍ ｇｏｉｎｇ ｔｏ ｗｒｉｔｅ ｔｈｉｓ ｖｉｄｅｏ ｇａｍｅ’ｓ ｎｏｖｅｌ．Ｉ’ｌｌ ｓｔａｒｔ ｉｎ ３０ｔｈ Ｓｅｐｔｅｍｂｅｒ，ｔｈｅ ｄａｙ ｔｏ ｒｅｌｅａｓｅ ｔｈｅ ｇａｍｅ．Ｉ’ｍ ｇｌａｄ ｔｏ ｒｅａｄ ｍｙ ｎｏｖｅｌ．（今度は『零の軌跡』の小説を書こうと思ってます。発売予定日の９月３０日に始める予定です。乞うご期待！）」
「え、なに？もう終わらせるの？」
「うーん、色々邪魔が入ってこのコーナーの意味をなさなくなったからかな？」
「そんな！まだ何も予想してないのに！？」
「クロスベル自治州は繁栄を続ける一方で、自治州内では幾つもの勢力が争いを続けているため光と闇が混在する『魔都クロスベル』と言われています。新米警察官のロイドと市長の娘であるエリィを中心とし、多くの事件を解決しながら自治州内の陰謀を阻止するのは間違いないと思います。公開ムービーでは手に汗を握るような場面があり、今回も期待度ＭＡＸです！それでは、またお会いしましょー！（作者発）」
「あ、ちゃんと喋った……じゃなくて、もっと話させて～！」

英雄伝説　零の軌跡　発売前予想？（後書き）

皆様の予想などお待ちしてます。

第5章　王都撩乱（5）（前書き）

エステルたちに危機が！１００話突破です！

第5章　王都撩乱（5）

「ああ、あんたたちか。さっきも言ったように、いつ船が来るか判らないんだ。悪いけど、遊撃士協会で待っていてくれよ」
「えっと、実は……。ちょっと予定が変わったのよ」
「申しわけありませんがキャンセルしても構いませんか？」
「そうか……。まあ、無理もないよな。定期船の到着前ならキャンセル料はかからないんだ。さっきの乗船券を返してくれるだけで構わないぜ」
「ん、わかったわ」
エステルとヨシュアは乗船券を返した。
その時、上空から船が来たらしい。到着の音が聞こえた。
「おっと……。軍の警備艇が来たみたいだな。ずいぶんお早いご到着で」
「そ、それじゃあ、あたしたちはこれで……！」
「お手数をかけて申しわけありませんでした」
「いやいや。またのご利用をお待ちしてるぜ」
エステルとヨシュアは足早に発着場を後にした。

軍の警備艇ではカノーネ大尉が王国軍を仕切っていた。
「フフ……。忙しくなってきましたわね。まずは、工房長のお顔を拝見しに行くとしましょうか。しかし、さすがは大佐殿……。こんな手をお考えになるなんて」

―ツァイス市

「は～、ビックリしちゃった」
「グズグズしていたら情報部の連中がこちらに来る……。このまま急いで街を出よう」
「ん、わかった。えっと、王都に行くには東の街道に出ればいいんだっけ？」
「ああ、リッター街道を北上して《セントハイム門》に行けばいい。門を通れば、王都にあるグランセル地方に入れるよ」
エステルたちはリッター街道に出た。

―セントハイム門
リッター街道を抜け、ツァイス地方とグランセル地方を隔てるセントハイム門に到着した。
「ここがセントハイム門か……。なんか、ロレント地方にあるグリューネ門と似てるわねぇ」
「同じ王都地方を囲む城壁、《アーネンベルク》の門だからね。千年近く前に築かれたものだけど、さすが帝国軍の侵攻を食い止めただけあって、堅牢そうな造りだな」
「うんうん、大砲を撃ち込んでも壊れなさそうなカンジよね。でも、観光名所みたいだし、時間があったら屋上に登って……。……」
……」
そこで、エステルの言葉は止まった。なにやら照れている様子。
「はは、君のことだからまっすぐ続いている城壁の上を全力疾走してみたいとか？」
「ち、違うってば！あたしがしたいのは、２人きりでのんびりランチしたいっていうか……。か、風に吹かれながら色々とお喋りしたいっていうか……」
「？？？別にそんなのいつもしている事だと思うけど？」
「はあ……もういい。さっさと通行手続してとっとと王都に行きま

しょ」
「えっと……。気のせいかもしれないけど。なんだか機嫌、悪くない？」
「気のせいでしょ。変なこと言ってないでとっとと中に入るわよ」
「（女の子は難しいな……）」
ヨシュアは深いため息をついた。

「やあ。セントハイム門にようこそ。王都に行きたいんだったら通行手続をしてもらえるかな？」
受付の兵士ウェインが尋ねた。
「うん。通行手続をしてもらえる？」
「よし来た。この用紙にサインしてくれ」
エステルとヨシュアは手続用紙に必要事項を書き記した。
「しかしなんだ。最近の子は進んでいるっていうか度胸があるっていうか……。わざわざ街道を通ってハイキングがてらデートかい？」
「ふえっ！？デ、デートって……」
「はは、そんなのじゃないですよ。僕たち、これでも兄妹なんです」
「……」
「へえ、全然似てないけどたしかに同じ名字だね。よし、これで手続完了だよ」
「……～～～っ……」
「エステル……？さっきから様子が変だけどどこか具合が悪かったりする？しばらく休んでいこうか？」
「はーっ……。ううん。本当になんでもないから。さっさと王都に向かいましょ」
「それならいいけど……」
「しかし、デートじゃないとすると武術大会の見物でも行くのかな」
「え、武術大会……？」

「なんだ、それも違ったか。武術大会ってのは王都の《王立競技場（グランアリーナ）》で毎年開かれているイベントでね。王国軍の精鋭を始め、腕に覚えのある人間が集まって武術の腕を競い合う大会なんだ。たしか、今日の午後に予選が行われるはずだよ」
「へえ～、なんだか面白そう！」
「はは、エステルが好きそうなイベントだね」
「女王陛下のはからいで入場料は割引されるし……。ああ、僕も勤めがなかったら見物に行ったんだけどねぇ」
兵士ウェインは残念そうに言った。
「あはは、ご愁傷様。でも、どうせだったら見物より参加がしたかったな。今までの修行の成果も確かめられそうだし」
「確かに……。でも、予選をしているなら参加するのは無理そうだな。依頼も受けているし見物だけでガマンしようよ」
「ちぇ、残念」
「……」
兵士ウェインはエステルたちのやり取りを見ていた。
「ん、兵士さん？どうしたの。マジマジと見つめちゃって」
「その胸のエンブレム……。若いから気付かなかったけど君たち、ひょっとして遊撃士？」
「うん、そうだけど？」
「何か問題でもありますか？」
「いや、その……。問題というか何というか……。参ったな。さすがにありえないと思うけど……」
「……こら。勤務中の無駄口は感心せんな」
控え室から男性が出てきた。どうやら出で立ちからして隊長のようだ。
「あ、隊長……」
「なんだ、問題でもあったか？」
「そ、それがですね……。彼らが、その……遊撃士らしいので……」
「なに……」

「？？？」
エステルは状況が判らない様子だ。
「あー、君たち。申しわけないが、少々時間をもらえるかな？」
「え、でもあたしたち、早く王都に行きたいんだけど」
「ほう、王都に、ねえ。参考までに聞くが、何をしに行くつもりなのかね？」
「え、え？その、頼まれた仕事で……」
「仕事の内容は？」
「えっと、博士の……。……じゃなくて！う～、何て言えばいいのか」
「申しわけありませんが、ギルドの規約があるのです。依頼人のプライベートにも関わるので内容を明かすのは勘弁してもらえませんか？」
ヨシュアが手助けした。
「ふん……怪しいな。どうやら、色々と話を聞かせてもらう必要がありそうだ」
「な、なにがなんだかよく分からないのですけど……」
「その、実は……。軍本部からの通達があってね。あの王室親衛隊が、陛下に反逆して各地でテロ事件を起こしたらしいんだ。しかもどうやら遊撃士を装って活動している連中もいるらしくてね……。念のため、遊撃士を名乗った人間は取り調べの対象にしているのさ」
「あ、あんですってー！？」
「こら、余計なことを言うな。申しわけないがこれも上からの命令でね。身元が証明されるまでここに留まってもらおうか」
「じょ、冗談じゃないわよ。なんであたしたちが……」
「ああ！やっと来てくれたんですか」
通路の奥からやってきたのはアルバ教授だった。
「へ……」
「あなたは……」
「いや～。待ちくたびれちゃいましたよ。通行手続が済んだのであ

れば早速王都に向かいましょうか？」
「え、え、え……？」
「申しわけありません、教授。準備に手間取ってしまって出発が遅れてしまったんです」
「ちょ、ちょっと待ちたまえ。……その、あんたは……？」
「これは申し遅れました。私、考古学者のアルバといいます。ノーザンブリア自治州の出身でリベールには研究調査に来ています」
「おい、そちらの男性の通行手続は済んでいるのか？」
「あ、はい、先ほど……。パスポートも正規の物ですし、王都にある歴史資料館が身分を保障しているみたいです」
「そうか……。ならば問題なさそうだな。失礼した……アルバさん。ところで、こちらの2人とはどういう知り合いなのかね？」
「ああ、彼らは遊撃士でしてね。今まで何度か、危険なところを助けてくれた恩人なのですよ。その縁で、今回は王都まで同行してもらえることになりまして。そうですよね？エステル君、ヨシュア君」
「え……ああ、うん！じ、実はそうだったりするのよね～」
「ふむ……。まあ、そういう事ならば身分の保障にはなりそうだな。君たち、済まなかった。どうやら誤解だったようだ」
「うんうん、分かればいーのよ」
「そちらも職務でしょうからどうか気になさらないでください」
こうして、アルバ教授のおかげで、エステルたちは何とか危機を乗り越えることができた。

第5章　王都撩乱（5）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

アルバ教授のおかげで検問を逃れることができたエステルたち。しかし、これはあくまでこれからの苦難の序章に過ぎなかった。

第5章　王都撩乱（6）

―セントハイム門　食堂

「まったくもー。ビックリさせないでよね。教授もそうだけど、ヨシュアもすぐに話を合わせるんだもん。一瞬、あたしの方が約束を忘れてるのかと思っちゃったわ」

「そんなわけないって……。話を合わせたことくらい。すぐに察してくれなくちゃ」

「ふんだ。察しが悪くてすみませんね。……自分だって肝心なことは察しが悪いクセにさ」

「え……何か言った？」

「何でもありませよーだ」

「？？？」

「はは、すみません。驚かせてしまったようですね。何やらお困りの様子だったので口出しさせてもらいましたが……。ご迷惑だったですかねぇ？」

「あ、ううん。困っていたのは確かだったから。ありがとう、アルバ教授」

「本当に助かりました」

「いえいえ。以前助けてもらったお礼ですよ。しかし、どうしてまた軍の方々と揉めていたんですか？テロ事件かどうとか聞こえてきちゃったんですけど」

「最近、他人を装って騒動を起こす犯罪者たちがいるみたいなんです。どうも、その人たちに間違えられてしまったみたいで……」

「そうそう、そうなのよ。腹立つったらありゃしない。やっぱり軍人って横柄な人が多い気がするわ」

「はー、それは災難でしたね。《紅蓮の塔》で見かけた一件も誘拐事件だったと聞きますし……。そういえば、あの事件は解決したんですか？」

「う、うん……。根本的な問題は残っているけど一応、解決したとは言えるかも」
「いやあ、さすがですね。最初に会った時から君たちが凄腕の遊撃士になると睨んでいたんですよ。うんうん。私の目に狂いはなかったようだ」
「や、やだな～。誉めてもなんにも出ないわよ？」
「まだまだ修行中の身ですから。それよりも……教授はどうしてこんな所に？」
「それはもちろん、王都に向かう途中なんですよ。定期船を使おうと思ったんですが、ちょっとミラが心もとなくて……。まあ、考古学者は体力が命ですから足腰を鍛えることにもなりますし……。……ははは……ふう……」
アルバ教授は深いため息をついた。
「そ、そんなに自分を追い詰めなくても……。しっかし、相変わらず極貧生活を送っているのねぇ」
「文系学者のフトコロなんてみんな同じようなもんですよ。特に考古学なんて、ミラが入ればすぐに発掘に使っちゃいますから」
「だめだコリャ。ま、それはともかく……。ここで会ったのも何かの縁よね。せっかくだから、あたしたちと一緒に王都まで行かない？」
「ちょ、ちょっとエステル。アルバ教授だって色々と都合があると思うし……」
「私の方は大歓迎ですよ。街道には魔獣も出ますから、君たちと一緒だと心強いです。まあ、ここから王都までは大した距離じゃありませんが」
「そういうことなら……よろしくお願いします」
「それじゃあ決まりね。王都に向けてレッツ・ゴー！」

―

「おい、あんたたち！」

向こうから兵士の部隊がやってきた。

「（あれっ……）」

「（軍の部隊みたいだね……）」

「あんたたち。エルベ離宮の見物は禁止だぞ。先日、グランセル市街に布告があったばかりだろう？」

「？？？」

「あの……。僕たちは王都民ではありません。先ほど、セントハイム門を抜けてグランセルに向かう途中なんです」

「なんだ、旅行者か……。テロリスト騒ぎの最中に徒歩で街道を旅行とはな……。ずいぶんノンキなもんだぜ」

「えっと……テロリスト騒ぎの話はともかく。《エルベ離宮》って何なの？」

「たしか、東の方にあるリベール王家の小宮殿でしたね。普段は、市民の憩いの場所として解放されていると聞きましたが？」

アルバ教授が教えてくれた。

「生憎だが、今は立入禁止だ。テロ事件の捜査本部にするため軍が使わせてもらっているのさ」

「捜査本部、ですか……」

「離宮周辺の街道は立入禁止になっていないが……。テロリストに間違えられたくなかったら近寄らない方が身のためだぞ」

それを言い残して、部隊は通って行った。

「物々しい雰囲気ですねぇ。私、近寄るなと言われるとかえって近寄りたくなるんですけど。どうです、ここは寄り道して離宮の近くまで行ってみませんか？」

人間の性ともいえるアルバ教授の言葉。

「う、うーん……好奇心は刺激されるんだけど」

「警告されたばかりだし、今は止めておきましょう。兵士が言っていた通りテロリストがいるかもしれません」

「え、でもあれって……。情報部がしでかしたことを親衛隊や遊撃士のせいに……」
「エステル！」
ヨシュアがエステルの言葉をさえぎった。
「（できればそのことはあまり口外しない方がいい。下手に知らせてしまったら巻き込むことになってしまうよ）」
「（そ、それもそうね……）」
エステルはうなづいた。
「？？？情報……何ですって？」
「え、ああ、うん。ゴメン、何でもないわ」
「そういうわけで、早く王都に向かいましょう」
「はあ……。残念ですけど仕方ありませんね」
エステルたちは気を取り直し、王都へと向かった。

第5章　王都撩乱（6）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ王都へと入ったエステルたち。最後の五大都市での遊撃士稼業が始まる。

第5章　王都撩乱（7）

―王都グランセル　南街区

「うっわ～……。やっぱり大きな街よねぇ。昔、父さんと一緒に来たけどこんなに大きかったかしら……」

「まあ、王国最大の街だからね。大通りの先には、女王陛下の住んでいるグランセル城があるし……。七耀教会の大聖堂や、王立競技場（レナ）、各国の大使館なんかもあるんだ」

「へ～、そうなんだ。でもヨシュア、結構詳しいね。やっぱり前に来たことあるんだ？」

「うん……僕も、小さな頃だけどね」

「しかし……いつ見ても美しい街ですねぇ。単純な規模だったら帝都や、共和国の首都の方が大きいとは思いますが……。このグランセルには、他にない居心地の良い上品さがありますね」

「えへへ、なんだか嬉しいな。外国の人にそう言ってもらえると。そういえば……教授はこれからどうするの？滞在費用とかは大丈夫？」

「はは、実はアテがありまして。《歴史資料館》という所にやっかいになるつもりなんです」

「へぇ、そんな場所があるんだ」

「発掘物や美術品などを展示している博物館ですね」

「ええ、そこの客員としてしばらくやっかいになります。エステル君とヨシュア君もよかったら遊びに来てください」

「うー、博物館というと堅苦しい雰囲気があるけど……。来たら勉強しろ、とか言わない？」

「フフフ、お望みでしたらみっちりとご教授しましょう。……というのは冗談として。展示品を眺めるだけでも結構楽しいと思いますよ。では、私はここで失礼します」

アルバ教授は先に行ってしまった。

「は～、何て言うか相変わらずノンキな人よね。でも、客員ということは……けっこう有名な学者なのかな？」
「うん、そうかもしれないね。さてと、まずは最初にギルドの支部に挨拶に行こうか？所属変更もあるし……博士の依頼を達成するにしてもまずは相談した方がよさそうだ」
「うーん、確かに……。考えてみれば、どうすれば女王様と面会できるのかしら。まさか、城に行けば会えるほど単純でもなさそうだし……」
エステルたちはまず、ギルドへと向かった。

―遊撃士協会グランセル支部
「それでは武運を。まあ、皆さんだったら余裕で通過できると思いますが」
「へへっ、分かってんじゃねえか」
「出場するからには全力でいかせてもらうよ」
「そうですよね！軍の連中には負けられません」
「さてと……。そろそろ出かけるとしようか。……ん？」
クルツがエステルたちに気が付いたようだ。。
「えっと……」
「どうも、お邪魔します」
「あんたたちは……エステルとヨシュアじゃないか」
「あ……ルーアンのカルナさん！」
「そういや、空賊騒ぎの時に一度会ったことがあったっけな。たしか、シェラザードと一緒にいた新人たちだよな？」
「どうもご無沙汰してます。でも、どうして皆さんが王都に集まっているんですか？」
「それについては私から説明させていただきます。皆さんは、早く行かないと間に合わなくなると思いますよ」

エルナンがメンバーに促した。
「おっと、それもそうだね……。悪いね、2人とも。積もる話はまた後にしよう」
「それじゃあ、俺たちはこれで失礼するぜ」
「またね、新人君たち！」
「……失礼する」
カルナ、グラッツ、アネラス、クルツの正遊撃士メンバーはギルドを出ていった。
「は～、あれだけ遊撃士が揃うとなんだか壮観って感じよね」
「そうだね……。みんな凄腕みたいだし。出場するとか言ってたからひょっとして……」
「ええ、お察しの通りですよ。彼らはこれから武術大会の予選に出るんです」
「へ～っ……って。す、すみません！あたし、ツァイス支部から来たエステル・ブライトっていいます」
「同じく、ヨシュア・ブライトです」
「私はエルナン。グランセル支部を任されています。キリカさんから連絡を頂いたのであなたたちの来訪は知っていました。早速ですが、転属手続をしていただけますか？」
「はい、わかりました」
エステルとヨシュアは転属手続の書類にサインした。
「はい、結構です。遊撃士協会、グランセル支部にようこそ。個人的に、あなたたちが来るのをとても楽しみにしていたんですよ。たしか、カシウスさんのお子さんたちなんですよね？」
「あ、うん、そうだけど……。やっぱりエルナンさんも父さんの知り合いなのよね？」
「ええ、カシウスさんにはいつもお世話になっています。聞いた話ですと、旅に出たきりお戻りになっていないそうですが？」
「うん……。しばらく留守にするって手紙はあったんだけど……」
「具体的に、どこに行くかは書かれていなかったんです。ロレント

からツァイスまで一通り回ってみたんですけど父の消息は分かりませんでした」
「ふむ、そうなると国内にはいない可能性が高そうですね。しかし、参ったな……。現在、軍のテロ対策で王都で遊撃士のメンバーが活動しにくくなっているんです。元軍人のカシウスさんならば軍で何が起こっているのかご存知かと思ったのですが……」
「……」
「……」
エステルたちが黙っている。
「おや……どうしました？」
「えっと、実は……。あたしたち、そのあたりの裏事情を知ってたりするのよね」
「え……」
「ツァイス地方での事件を含めて報告させていただきます」
エステルとヨシュアはレイストン要塞で知った事実とラッセル博士の依頼について説明した。
「……」
「あれ……。エルナンさん、どうしたの？」
「い、いや……あまりのことに頭が真っ白になってしまいました。リシャール大佐による王国軍の実質的な支配……。情報部の特殊部隊によるテロ事件の自作自演……。にわかには信じがたい話ですね」
「で、でも本当なんだってば！」
「ツァイス支部のキリカさんに問い合わせてみれば判ります」
「大丈夫、あなたたちの言葉を疑うつもりはありません。むしろ、話を聞かせてもらってパズルのピースがはまった心地です。ですが、王都でのリシャール大佐の人気はかなりのものでしてね……。恥ずかしながら、話を聞くまでわたしも共感を覚えていたくらいです。ましてや、普通の市民は大佐が陰謀をめぐらせているなど夢にも思っていないでしょうね」
「やっぱりそうなんだ……」

「さすが、情報部だけあって情報操作は完璧みたいですね」
「遊撃士協会の性格上、軍への介入はできませんが……傍観できる状況でもなさそうです。とりあえず、あなたたちはラッセル博士の依頼を遂行していただけますか？」
「もちろん、そのつもりよ。ただ問題なのは、どうやったら、女王様に会えるかなんだけど……」
「そうですね……。普段なら、協会の紹介状があれば取り次いでもらえるはずなんですが……」
「え、そうなの！？なーんだ♪心配して損しちゃった」
お気楽思考のエステル。
「エステル……。そう簡単にはいかないと思う。何といっても、城を守る親衛隊がテロリスト扱いされているんだ。それが何を意味するか分かるかい？」
「え、それってつまり……紹介状を握りつぶされちゃう？」
「うん、その可能性が高そうだ。レイストン要塞と同じくグランセル城もリシャール大佐に掌握されている可能性が高いと思う」
「ううん、やっぱりそっか～……。そうなると、簡単には女王様に会えそうもないわね」
「レイストン要塞みたいに城にも忍び込めればいいんだけど……。さすがに同じ手が2度通用するほど甘くはないだろうね」
「うーん……。ここで考えてても仕方ないから、とりあえずお城に行ってみない？うまくすれば、門番あたりから情報が聞き出せるかもしれないし」
「それは構わないけど……、一つ注意しておくことがある。僕たちが女王陛下に面会しようとしていることは隠しておいた方がいいと思うんだ。リシャール大佐の耳に入ったら妨害される可能性が高いからね」
「あ、なるほど……」
「確かに、当面は他の遊撃士にも伏せておいた方がよさそうですね。ちなみに、王城は大通りを北にまっすぐ行ったところにあります。

くれぐれも慎重に情報収集を行ってください」
「わかったわ、エルナンさん」
「何か分かったら報告します」
エステルたちはグランセル城へと向かった。

第5章　王都撩乱（7）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

グランセル城へと向かったエステルたち。何か情報を得られることができるか！？

第5章　王都撩乱（8）

―グランセル城　城門前

「うわ～……。あれがグランセル城ね。女王様が住んでるだけあって、さすがに立派でキレイよねぇ……」

「うん……。ただ綺麗なだけじゃなくてかなり堅牢な造りみたいだね。あの巨大な城門が良い例だよ」

「確かに、あれじゃあ簡単に中に入るのは無理っぽいわね」

「となると、あそこの兵士さんから話を聞くしかなさそうだけど……」

「まずは地道に行ってみようか。……田舎から来たばかりでお城の中を見学してみたい。ついでに、女王陛下のお姿を一目でいいから拝見したい。――そんな設定でいいかな？」

「相変わらず、涼しい顔してすぐに出まかせを思いつくわねぇ。いつも感心しちゃうわ」

「誉め言葉として受け取っておくよ」

エステルたちは城門の門番に話しかけた。

「あの～、こんにちは～」

「よう、こんにちは」

「グランセル城へようこそ。どういった御用かな？」

「僕たち、ロレントから王都見物に来たばかりなんです。せっかくだから、お城の中を見物させてもらおうと思って……」

「ああ、なるほどね。申しわけないが、グランセル城は関係者以外、立入を禁止してるんだ」

「テロ騒ぎがあったせいでチェックが厳しくなってしまってね。まあ、テロリストたちが捕まれば見学も許されるようになると思うよ」

「そうなんだ……ガックシ。それじゃあ、女王様の姿を見るなんて夢また夢かしら……」

「そうだなぁ……。生誕祭当日は、城のテラスからいつも市民に挨

拶してくださるから拝見する機会はあると思うけど……」
「でも最近、陛下もお身体の調子が悪いみたいだからねぇ。いつもの挨拶もあるかどうか……」
「え……！？」
「あの……。女王陛下はご病気なんですか？」
「ああ……。心労によるものらしいけど……。信頼していた親衛隊にテロ事件の容疑がかけられた事がよほどショックだったみたいでね。最近は、謁見の場にも現れずに女王宮で静養されているそうだよ」
「そうなんだ……」
「まったく、親衛隊の野郎どもめ。陛下の信頼を仇で返すとはな……。普段からエリートぶってていけ好かないと思ってたんだ」
「で、でもさ、ユリア中尉は色々親切にしてくれたじゃないか。俺たちみたいな一兵卒にも剣術と作法を教えてくれたし……。あの人がテロリストなんてちょっと信じられないんだけど……」
「そ、そんなのあたりまえだ！たぶん彼女は、部下の不祥事に責任を感じて姿を消しただけさ！ああ……何て気の毒なユリアさん……」
「（要するにこの人って……。ユリアさん絡みで他の隊員に嫉妬してるだけなんじゃ……）」
「（うん、そうみたいだね……）」
「ゴホン……。まあ、そういうわけでグランセル城は立入禁止だ」
「悪いけどお引き取り願おうか」
「はあ、そういう事情じゃあきらめるしかないかぁ……」
「ただ、ちょっと心配ですね。女王陛下の健康ももちろんですけど、政務の方は大丈夫なんでしょうか？」
「ああ……その心配はごもっともだ。一応、名目上の代理はいらっしゃるんだけどね……」
「名目上の代理？」
「はは。文字通り、名目上のだぜ。あの方ほど政務という言葉が似合わない人も珍しいからなぁ」

「おいおい、口を慎めよ。まあ確かに、姫様の方がよほど向いているとは思うけど……」
「ほーらみろ、お前だって……」
その時、グランセル城から鐘が鳴った。
「な、なに……？」
「おっと、お出ましのようだな」
城門が開き、中から出てきたのは……
「ええい、まったく何たることだ！とっくに予選試合が始まっている時間ではないか！フィリップ！お前が起こさなかったせいだぞ！」
まさかのデュナン公爵！
「申しわけございません、閣下。ですが閣下も、規則正しい生活を心がけて頂きませんと……。ここ数日、宴会の席ばかり設けて呑めや歌えやの大騒ぎ……。ビールとドーナツを一緒にお召し上がりになりながら朝まで劇画雑誌を読みふける……。そのような調子では寝過ごされるのも無理はないかと……」
最悪の生活習慣……。
「黙れフィリップ！お前の小言はもう聞き飽きた！次期国王たる私には、好きな時に好きなことをする資格があるのだ！ええい、時間が惜しい！急いで王立競技場（グランアリーナ）に向かうぞ！」
デュナン公爵は執事フィリップを連れて行ってしまった。
「……えーと……」
「……あの、もしかして……」
「分かってる、みなまで言うな。今のが、陛下の代理として政務を担当している公爵閣下だ」
「は、激しく頭が痛くなってきたんですけど……」
「ま、まあ心配しなくても頼もしい補佐がいるから大丈夫さ。その人のおかげで、今のところ大した問題は起こっていないしね」
「頼もしい補佐……ですか」
ヨシュアの目が光った。
「へへ、王国軍情報部のリシャール大佐という人でね。道楽者の公

爵閣下に代わって政務を一手に引き受けているらしい」
「（や、やっぱり……）」
「（予想以上に、王国の中枢に食い込んでいるみたいだね……）」
「まあ、城内見物は無理だけど、そんなに気を落とさないでくれや。グランセルの街には他にも名所がたくさんあるからな」
「せっかくの王都見物だ。のんびり観光を楽しむといいよ」
「う、うん、そうするわね」
「親切にありがとうございました」
エステルたちはグランセル城を後にした。

第5章　王都撩乱（8）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

リシャール大佐は公爵を名目に立て、王国の実権を握っているらしい。エステルたちは公爵の動向を調べるため、グランアリーナに向かう。

第5章　王都撩乱（9）（前書き）

武術大会を観戦！

第5章　王都撩乱（9）

城門前の通りでエステルたちが得た情報を整理する。
「うーん……。予想以上に収穫があったわね。それにしても、あの公爵が女王様の代理をしているなんて……」
「実権を握っているのはたぶんリシャール大佐だろうね。しかも、自分が黒幕であるのを周りに気付かせていないみたいだ。正直、情報操作の手腕はかなりの物だと思うよ」
「もう、ヨシュアってば。敵を誉めてる場合じゃないわよ。それよりも、あの公爵、武術大会に行くつもりみたい。ね、あたしたちも行ってみない？」
「そうだね……。確かに、公爵の動向は調べておいて損はなさそうだ」
「それじゃあ決まり！えっと、王立競技場（グランアリーナ）ってどっちの方角にあるんだっけ？」
「たしか東街区だったはずだよ。大通りを戻って東の方に向かおう」
エステルたちは東街区の王立競技場（グランアリーナ）に向かった。

―王都グランセル　東街区
「王立競技場（グランアリーナ）へようこそ。チケットをお買い求めですか？」
受付のリーファが尋ねた。
「あ、はい。２人分お願いします」
「本戦は明日から３日間ございますが……。どの日になさいますか？」
「本戦……？」
「あの、明日からではなくて今行われている予選の試合が見たいんですけど……」

「あら、失礼しました。もう半分以上、試合は終わってしまったと思いますけど……。それでも構いませんか？」
「あ、いいですいいです」
「それでは……。お２人分を合わせて１０００ミラになります」
「わ、結構するものなのね」
「たしか生誕祭の武術大会は割引されると聞きましたけど……」
「大変申しわけありません……。今年はその、色々と例外措置が取られているみたいでして……」
「ふーん……。そういう事なら仕方ないか。えっと、１０００ミラと……」
エステルは１０００ミラを支払った。
「毎度ありがとうございます。それではチケットをお受け取りください」
エステルは観戦チケットを２枚受け取った。
「グランアリーナの入口は左手正面にございます。そのチケットを入口の係員にお見せください」
―グランアリーナ　入口
「現在、当アリーナでは武術大会・予選試合が開催中です。ご入場の方はチケットをお出しください」
エステルは観戦チケットを２枚渡した。
「はい、結構です。それではお入りください」

―グランアリーナ
内装は王家が建てたにふさわしい装飾が施されていた。
「うわぁ……。これまた豪華な広間ねぇ」
「ここが玄関ホールだね。どうやら観客席は２階にあるみたいだ」
「うん、行ってみましょ」

観客席はほぼ満席に近かった。
「うわぁ……。いっぱい入っているわね～！」
「うん……。すごい熱気だね。予選からこの数っていうことはかなり大きなイベントみたいだ」
「予選試合、どこまで進んでいるのかな」
「お待たせしました。これより第7試合を始めます」
司会の声が流れてきた。
「あ……始まったみたい」
「それじゃあ、どこか空いている所に座ろうか」

「南、蒼の組。国境警備隊、第2連隊所属。バウル少尉以下4名のチーム！」
左の門から兵士たちが現れた。
「あれっ……。試合って1対1じゃないんだ？」
「うん、団体戦だったみたいだね。僕の記憶だと確か個人戦だったはずだけど……」
これが例外措置だったようだ。
「北、紅の組。遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！」
「あっ、カルナさんたちだわ！」
「危うく見逃すところだったね」
右の門から遊撃士チームが現れた。
「これより武術大会、予選第7試合を行います。両チーム、開始位置についてください」
両チームが開始位置についた。
「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、クルツチームの勝ち！」
結果は遊撃士チームの圧勝だった。
「やったあああーーっ！すごいわ、カルナさんたち！」
「うん、いい勝負だったね。軍人たちもいい動きだったけど連携攻撃と役割分担の上手さで遊撃士チームには及ばなかったな」
「うんうん！戦い方の参考になりそうね！いやあ、なんというかこの武術家としての血が騒ぐわねぇ。お城に行くのは後回しにして最初の試合が見たかったあ～」
「はは、気持ちは分かるけど。そこを我慢するのが一人前の遊撃士じゃないかな」
「フン、だ。どうせ半人前ですよーだ」
「……続きまして、これより第８試合を始めます。なお、この試合をもちまして予選試合は終了となります」
「南、蒼の組。チーム《レイヴン》所属。ベルフ選手以下４名のチーム！」
「あ、あの連中！？」
「ルーアンの倉庫街にいた不良グループのメンバーだね。なるほど、普通の民間人にも開かれている大会なのか……」
「はあ、場違いもいいとこだわ……。戦闘や武術のプロが集まっているのにあんな連中が敵うわけないじゃない」
「北、紅の組。隣国、カルバード共和国出身。武術家ジン選手以下１名のチーム！」
「ジ、ジンさん！？」
「また知り合いか……。世間は狭いって感じだね。でも、１人で出場なんてさすがに不利だと思うけど……」
「確かに……。いくら相手がチンピラでも囲まれちゃったらマズイかも」
「ジン選手は今回の予選でメンバーが揃わなかったため１名のみで

の出場となります。著しく不利な条件ではありますが本人の強い希望もあったため今回の試合が成立した次第です。みなさま、どうかご了承ください」

「これより武術大会、予選第7試合を行います。両チーム、開始位置についてください」

「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ジン選手の勝ち！」

開始早々囲まれてしまったジンだが、得意のパワーと体力で圧勝した。

「ひゃっほーーっ！さすがジンさん、圧倒的！」

「余計な心配だったみたいだね。あの巨体で、動きも速いし、技のキレも凄まじいものがある。ただ、さすがに本戦になったら1対4は厳しいとは思うけど……」

「うーん、確かに……」

「ただ今の試合をもちまして予選試合は全て終了となりました。本戦出場チームは8組。明日から3日間にわたって開かれる、トーナメント戦で優勝チームを決します。それでは最後に、大会主催者であるデュナン公爵閣下から挨拶があります」

観客席の反対側にある特別席にいたデュナン公爵がしゃべり始めた。

「ウオッホン！あー、親愛なる市民諸君よ、本日はわざわざの観戦ご苦労だった。私は残念ながら、政務で忙しかったため前半の試合を見逃してしまったが……。後半から見た試合はどれもレベルが高く非常に楽しませてもらい、また興奮した！最近、テロ事件に陛下の健康不調と深刻なニュースばかり続いているが……。だが、どうか安心して欲しい！陛下から政務を託された者としてこのデュナン・フォン・アウスレーゼ、身を粉にして諸君らの期待に応えよう！そして、この武術大会の活気が諸君らの気持ちを明るくするのに役立

ってくれればと思う次第である！明日からの本戦を、どうか楽しみにしていて欲しい！」

観客席から拍手が起こった。

「あ、あの公爵さんにしては言ってることがマトモすぎる……」

「多分、情報部のスタッフが文面を考えているんだろうね」

それ以外にも寝坊を政務のせいにして……。

「はっはっは……。おお、そうだな。大会の優勝者には、賞金とは別に私からのプレゼントを用意しよう！」

「（か、閣下……。勝手によろしいのですか？）」

執事フィリップが後ろからささやいた。

「（うるさい、黙っておれ。私の気前の良さを見せる良い機会だ）」

デュナン公爵は向き直り、

「そのプレゼントとは……。３日後にグランセル城で行われる宮中晩餐会への招待状である！陛下は残念ながら出席されないが各界の名士が集う、最高の晩餐会だ。王侯貴族のみに許された、最高の料理ともてなしを約束しよう。今日勝ち残った出場者は、どうか励みにして頑張ってほしい！」

そうして、予選試合は締めくくられた。

第5章　王都撩乱（9）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

優勝者はグランセル城に招かれることになる。グランセル城に入るのはこの方法しかないと思ったエステルたちが思いついたこととは！？

第5章　王都撩乱（10）

観客席が空いた場所でエステルとヨシュアが相談していた。
「ねえ、ヨシュア……。カルナさんたちに会っておいた方が良くない？」
「うん、僕もそう思う。彼らが優勝できたら正々堂々とグランセル城に入ることができる。例の事を、女王陛下に伝えるチャンスだってあるかもしれない。そういうことだね？」
「うん……。博士の依頼を他人任せにするのはイヤだけど……。こだわっている場合じゃなさそう」
「僕は異存はないよ。まだ帰っていないかもしれないし選手室の控室に行ってみようか？」
「うん、そうね。えっと、確かカルナさんたち、北側のゲートから出てきたっけ？」
「うん、いるとしたら北の方にある控室だと思う」
エステルたちは北側の控室に向かった。

―グランアリーナ　北側控室
「カルナさんたち！予選突破、おめでと～！」
「あっ、新人君たちだ！」
「おや、あんたたちか」
「よお、ひょっとして試合を見に来てくれたのか？」
「はい、ちょうど先輩方の試合を見ることができました。すごく良い試合でしたね」
「ありがとう。そう言ってくれると嬉しいよ。今回はいきなり団体戦に変更されたから戸惑ったがね」
「うんうん。本当にアセりましたよね」

「あたしたちはまだいいさ。何とかメンバーも揃ったんだ。ジンの旦那なんか正直、困ってるんじゃないかねぇ」
「あ、カルナさんたちもジンさんの知り合いなんだ？」
「ま、知り合って間もないけど名前だけは知っていたからねぇ。『不動のジン』って言って共和国じゃ有名な遊撃士なのさ」
「どうやら、武術大会に出るためにリベールにやって来たらしいが……。さっきも言ったように大会が個人戦から団体戦にいきなり変更されてしまったんだ」
「これが、例の公爵閣下の思い付きだったらしくてな。で、ジンの旦那は仕方なく1人で登録する羽目になったわけさ」
「そうだったんだ……。まったく、あの公爵ってのはロクでもないことばかりするわね」
「はは、違いない。しかし、このまま彼の実力が発揮されないのは惜しすぎる」
「だな。無名でもいいからある程度戦えるヤツがいれば……。……おっ！？」
「……おや……」
「……ふむ」
「……いいかも……」
グラッツ、カルナ、クルツ、アネラスの全員がエステルとヨシュアを見た。
「？？？な、なんなの？マジマジと見ちゃって……」
「いや、ものは相談だが……。君たち、ジンさんに協力して本戦から出場してみないか？」
「え……。えええええ～っ！？」
「本戦からの参加って……。そんなの大丈夫なんですか？」
「まあ、いきなり個人戦から団体戦に変更されたわけだからね。ルールの固まっていなくてある程度の融通は利くらしいのさ」
「ジンの旦那も遊撃士の助っ人が他にいないかエルナンに頼んだみたいでな。ただ、シェラザードは忙しいらしいし、アガットのヤツ

とは連絡がとれない。他の連中も似たようなもんらしいぜ」
「カシウスさんに至っては国内にいないみたいですからねぇ。ま、あの人とジンさんが組んだら反則っていう気もしますけど……」
「はは、我々程度では万が一にも勝ち目はないだろうな。……そういうわけだから前向きに考えてみたらどうかな。今日中にジンさんと決めれば明日の選手登録に間に合うはずだ」
「う、うん……」
「おっと……長話しすぎちまったようだね。それぞれの依頼も抱えているし、あたしたちはこれで失礼するよ」
「ばいばーい、新人君たち！」
「へへ、試合場で手合せできるのを楽しみにしてるぜ」
遊撃士メンバーは引き上げていった。
「……どうしよう、エステル？仕事の相談をするつもりが変な話になっちゃったけど……」
「……えへへ……。……むふふ……」
エステルが変に身震いしている。
「エステル、だ、大丈夫？」
「来た、来た……。キタ――――（？∀？）――――！！！」
エステルが絶叫した。
「そうよ、そうなのよ！やっぱりそーこなくっちゃ！ああん、女神（エイドス）様！大いなる加護を感謝いたします～！」
「……。エ、エステルが壊れた……」
エステルの様子を哀れな目で見るヨシュア。
「考えてもみなさいよ。武術大会に出られるのよ！？困ってるジンさんに協力できる……。あたしたちは城に堂々と入れる……。ついでに白熱したバトルもできる……」
ついでとは言っているが今のエステルにとってはバトルが気持ちの８割を占めているだろう。
「これぞまさに一石三鳥！」
「そ、そんなに出たかったのか……。まあ、優勝できると決まった

わけじゃないけど……。僕たちの手で、依頼を達成できる可能性が出てきたのは嬉しいな」

「うんうん♪何と言ってもそれが大きいよね！」

ホンマかいな……。

「……こうしちゃいられない！早速ジンさんに頼んでみるしか！」

エステルが慌てて控室を出て行こうとした時、

「ところで、ジンさんがどこにいるのか知っているのかい？」

「……そーいえば」

気持ちだけ、先走って、空回り～♪

「まったくもう……。ちょっとは落ち着きなよ。とりあえず、ギルドに戻ってエルナンさんに報告しておこう。彼だったら、ジンさんがどこにいるかも知っているはずだよ」

エステルたちはギルドへと戻った。

第5章　王都撩乱（１０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

なんだかんだでエステルたちは武術大会に参加することに。とりあえず、ジンさんを探すことにした。

第5章　王都撩乱（11）

―遊撃士協会グランセル支部

「なるほど、確かにジンさんから遊撃士の助っ人は頼まれていました。あなたたちは博士の依頼があるのであえて紹介はしなかったのですが……。公爵閣下の気まぐれのおかげで依頼と大会が重なったわけですね」

「えへへ、結果的にだけど公爵のワガママに助けられちゃった」

「武術大会への参加……。エルナンさんはどう思います？」

「そうですね……。打てる手は全て打っておくという意味では試してみる価値はあると思いますよ。クルツさんたちに相談するのは彼らが優勝した時でいいでしょう。あなたたちは全力で挑戦してみてください」

「やった、そうこなくっちゃ！早速だけど、ジンさんがどこにいるのか教えてくれる？」

「普段は、この建物のすぐ側の酒場にいるみたいです。あと、王都での滞在先はカルバード大使館だそうですよ」

「なるほど。ジンさんの祖国の大使館ね」

「共和国大使館は、競技場（アリーナ）と同じ東街区にあるはずだよ。あと、その酒場も覗いてみた方がよさそうだね」

「うん、オッケー！」

「ああ、そういえば……。あなたたちは王都に滞在中、どこに泊まるおつもりですか？」

「うーん。多分ホテルになると思うけど……」

「確か、王国最大のホテルが北街区にありましたよね？」

「ええ。ホテル・ローエンバウムです。差し支えなかったら、私の方で部屋を取っておきましょうか？ミラも王都支部が持ちますよ」

「ええっ、いいの！？」

「さすがにそこまでして頂くわけには……」

「博士の依頼の必要経費として認めましょう。このくらいしか出来なくて申しわけないのですが……」
「ううん、とても助かっちゃう！」
「そういう事なら……。お言葉に甘えさせてもらいます」
「では、私の方からホテルに予約を入れておきましょう。夕方以降、フロントで名前を言えば部屋に案内してくれるはずですよ」
こうして、滞在先を確保したエステルたちはジンを探し始めた。

―居酒屋　《サニーベル・イン》
まずは近場にある居酒屋のに入ろうとすると、エステルが足を止めた。
「あ……。これって……ピアノ？」
「うん、レコードじゃないね。中で誰かが引いているみたいだ弾いているみたいだ。このメロディー、どこかで聞いた覚えがあるんだけど……」
「な～んかイヤな予感が……」
そんな予感を持ちつつ、中に入ると……。
「（……やっぱりお調子者のオリビエか。でも、演奏家なんてただの自称かと思ってたけど……）」
「（かなりの腕前みたいだね。プロの演奏家を名乗るだけはあるんじゃないかな）」
「（うん……。ちょっとじーんと来ちゃうかも）」
ピアノの演奏が終わると拍手が起こった。
「……今のは『琥珀の愛』といってね。本来は、オペラに使われる間奏曲でしかないのだけど……。そこはそれ、愛と真心でカバー。尽きせぬ愛とともに君たちに贈らせてもらうよ」
相も変わらずお調子発言。
「相変わらずのマイペースっぷりねえ……。はあ……感動して損し

た気分だわ」
「お久しぶりです、オリビエさん。王都に来ていたんですね」
「それはもちろん、大河に零れた人魚の涙が海に辿りつくように……。こうしてボクは、黒髪の王子様と感動の再会を果たしたわけさ」
そして片手で髪をかき上げるオリビエ。
「……本当に相変わらずですね」
「あー、はいはい。タワゴトはそのくらいにしてあたしたちを席に案内しなさいよ。気障なカッコしてるクセに気が利かないったらありゃしない」
「エステル君……なんだか手強くなってない？」

席に着いたエステルたち。
「たしかオリビエ、シェラ姉と一緒にロレントの方に行ってたわよね？いつから王都に来てるの？」
「うーん、一月前くらいかな？君たちと別れてからロレントの街で、シェラ君と共にしばらく甘い一時を過ごしたのさ。だが、所詮ボクは漂泊の詩人にして演奏家……。シェラ君が涙ながら引き留めるのを振り切って麗しの王都に流れてきたわけだよ」
「何と言うか……。信憑性ゼロの話ですね」
「おおかた、シェラ姉の酒に毎晩付き合わされた挙句、たまらず逃げ出したんでしょ？」
エステルが得意げに言い当てる。
「ギクッ……」
「あと、アイナさんにまで酒を付き合わされちゃったとか？」
そういうと、オリビエの表情が静止した。そのまま何も喋らなくなった。
「あれ、オリビエってばアイナさんのこと知らないの？シェラ姉の親友で、ロレント支部に受付やってる人なんだけど。ウワバミ度で言えばシェラ姉を上回るという……」

「……ハハハ。やだナア　えすてるクン？ソンナ名前ノ　人ナンカミタコトモ　キイタコトモ　ナイヨ？」
「……声が完全に裏返ってるんですけど……」
「エステル……そのくらいにしといてあげなよ。つらい……とてもつらい事があったんだと思う」
「ブツブツ、まさかシェラ君以上に底ナシだったなんて……。……ああああ……。穏やかに微笑みながら注ぎ込むのはやーめーてー！」
その場にいたものが全てオリビエに注目した。
「フ、フラッシュバック！？」
「アイナさん最強伝説が着実に出来上がりつつあるね……」
「はあはあはあ……。まあ、それはともかく……。キミたちは他の地方を回りながら王都まで来たんだろう？何か面白いことはあったかい？」
「うーん、いっぱいありすぎて簡単には説明できないかも……。それに今、人捜しをしてるから今度会った時でもいい？」
「へえ……。いったい誰を捜してるんだい？」
「ジンさんといって、カルバード共和国から来た武術家の遊撃士です。よく酒場に来ているらしいのですけど、オリビエさん、ご存じありませんか？」
「ああ！あの熊のように大きな御仁か。何度かお目にかかった事はあるけど今日はまだ見かけてないねえ」
「そっか……。今日は酒場に来ないのかな？」
「カルバード共和国の大使館にいる可能性が高そうだね」
「フッ……。早速、行ってみるとしようか」

「だ～か～ら、なに自然な流れで付いてこようとしてんのよっ！？」
「ハッハッハッ。つれない事を言うもんじゃないよ。旅は道連れと

もいうし、ボクも人捜しを手伝おうと思ってね。それとも……。邪魔されたくないのかな？」

「な……！」

「いやはや。初々しいったらありゃしない。蕾であることを自覚したばかりで咲くのを恐れためらう乙女……。……フフ、いい感じで色気が出てきたみたいだねぇ」

オリビエの目が妖しく輝いた。

「……～～っ……」

「？？？何を言ってるんですか？」

「フフフ、それはねえ……」

「せいやっ！」

エステルが素早く棒を抜き、オリビエを吹っ飛ばした。

「あ～れ～っ！」

オリビエが店の中に消えていった。

「うわああ、なんだ～っ！？」

「お、お客さん、しっかり！」

「だめじゃ……。白目をむいているわい……」

店の中では慌ただしくなっている。

「エステル……。何を怒っているのかしらないけど、ちょっとやりすぎなんじゃ……」

「……インパクトをずらして派手に吹き飛ばしただけだもん。大したダメージじゃないわよ」

「フフフ……。エステル君の……照れ屋さん……」

オリビエの声が店の中から聞こえてきた。

「……確かに大丈夫そうだね」

「ほらほら、人捜し再開。グズグズしてないでとっとと大使館に行くわよ」

「（……なんで僕まで怒られるんだろう？）」

毎度のごとく、ヨシュアにはわけが分からなかった。

第5章　王都撩乱（11）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

酒場にはお調子者のオリビエがいただけだった。次に向かうはカルバード共和国大使館。

第5章　王都撩乱（12）

―共和国大使館前

「おっと、こちらはカルバード共和国大使館っス。何の御用っスか？」

門番の兵士タクトが尋ねた。

「あの、ここに泊まっているジンって人に用があるんだけど……」

「お手数ですが取り次いで頂けますか？」

「へえ～。ジンさんに会いに来たんスか？オレ、最初あの人を見たとき、少しチビりそうになったんスよね。王都の真ん中で熊が！？とか思っちゃったッスから」

「あはは、ジンさん大きいもんね」

「でも、話してみると気さくで優しい人なんスよね～。交替前で腹空かしてる時に肉まんを差し入れてくれたし」

「うんうん。頼りになるアニキって感じよね」

「コホン……。それでジンさんに取り次いで頂けますか」

「あ、それなんスけど……。ジンさん、さっき帰ってきてからま～た出かけちゃったんスよね。武術大会の本戦に備えて修行の場所を探してるみたいで」

「しゅ、修行の場所？さっすが本格的なのね～」

「具体的には、どこに行くとか言ってませんでしたか？」

「郊外にある《エルベ周遊道》に行ったみたいッスね。森の中にある公園って感じだから静かで修行にもってこいらしいッス」

「《エルベ周遊道》か……。僕たちも行ってみようか？」

「もちろん！早いところ相談しなくちゃ！」

「ああ、周遊道に行くんだったらひとつ気を付けて欲しいッス。奥の方に《エルベ離宮》っていう王家の建物があるんスけど……」

「あ、それ、前に聞かされたわ」

「テロ事件の対策本部にするため、軍が立入禁止にしてるんですよね？」
「なんだ、知ってたッスか。……あそこに詰めてる連中は色々うるさいから注意するッス。近寄らない方が一番いいッスね」
兵士タクトがそっと耳打ちした。
「ふーん、色々うるさい連中か。目をつけられたらヤだし、なるべく近寄らないことにするわね」
「ご忠告、ありがとうございます」
エステルたちはエルベ周遊道に向かった。

第5章　王都撩乱（12）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

エルベ周遊道に向かったエステルたち。その先で出会うものとは！？

第5章　王都撩乱（13）（前書き）

読者の皆様、お久しぶりです。活動報告にも書きましたが、最近、交通事故を起こし、死にかけました（汗）。しかし、今日ここに復活を宣言します。つきましては、この日を建国記念日改め、復活記念日と致します！↑冗談です。とにかく、今日からまた毎日更新したいと思います。長いことお待たせしました。今回はオリジナルの小説を少しはさんでみました。

第5章　王都撹乱（13）

―キルシェ通り

エルベ周遊道に向かう途中、エステルがふいに立ち止まる。

「ねえ、ヨシュア。リシャール大佐って何がしたいんだろう？」

「そうだね。少なくとも、王国の支配だけが目的じゃないはずだ」

「え、どうして？」

「王国の支配が目的ならば、ゴスペルを手に入れて解析することに説明がつかない。つまり、王国の実権を握るのは、次の目的のために必要なことだと思う。ゴスペルは導力停止現象を起こすものだ。大佐はその導力停止現象を起こすゴスペルを用いてもっと大きな目的を達成しようとしていると僕は思うんだ」

「なるほど。……」

エステルは黙り込んだ。

「そんなものを使ってなにがしたいんだろう」

「深く考えたって何もわからないよ。今言えるのは、それを止めるのが僕たちの使命じゃないのかい？」

「うん、そうね。それじゃあ、今はジンさんを探すのに集中しましょ」

エステルたちはキルシェ通りを進み、エルベ周遊道を目指した。

第5章　王都撩乱（13）（後書き）

次回も今日更新予定です。

第5章　王都撩乱（１４）（前書き）

ジンを探しにエルベ周遊道を歩いていると……。

第5章　王都撩乱（14）

―エルベ周遊道

キルシェ通りから分岐したエルベ周遊道は木々に囲まれた静かな場所だった。

「エルベ周遊道か……。森の中なのに石畳があるなんて、ちょっと面白いわね」

「王都市民の憩いの場所としてずいぶん昔に造られたみたいだよ。ざっと数百年は経ってるんじゃないかな？」

「ふーん……。さすがは女王様のお膝元ね。でも何だか、魔獣の気配がプンプンするんですけど……」

エステルが周りの気配を確認すると、そこら中から魔獣の気配が漂っている。

「さすがに鋭いね。多分、さきの通りよりも危険な魔獣がいると思う。気を抜かないでジンさんを捜そう」

「……いやあああっ！」

すこし遠くから女の人の悲鳴が聞こえてきた。どうやらただ事ではないようだ。

「女の人の悲鳴！？」

「奥の方だ、急ごう！」

エステルとヨシュアは奥に急いだ。

「きゃあああ～っ！助けて～っ！誰か助けてください～っ！」

魔獣が女の人、シスターを襲おうとした時、エステルとヨシュアが割り込んだ。

「え……」
「シスター！もう大丈夫だからね！」
「危ないですから下がっていてください！」

「ふう……。なかなか手強かったわね。シスター、大丈夫だった？」
「は、はい……おかげさまで。あの、あなた方はいったい？」
「僕たちは遊撃士協会の者です。人を捜している途中であなたの悲鳴を聞いたので……」
「そう……でしたか……。……。だ、大丈夫？なんだか元気ないけど……。ひょっとしてケガでもしてるの？」
「いいえ……。おかげさまで無事でしたわ。私、王都の大聖堂に勤めるシスター・エレンと申します。本当にありがとうございました」
「あはは。お礼にはおよびませんってば」
「それにしても、聖職者の女性がこんな場所で1人きりでいるなんて……。お連れの方とかはいらっしゃらないんですか？」
「ええ、私1人きりなんですの……。実は、大聖堂で調合に使っているハーブを切らしてしまって……。お店でも品切れだったのでつい摘みに来てしまったんです……」
「あ、危ないわねぇ。こんな魔獣だらけなのに……」
「いえ、普段はここまで魔獣は多くなかったのですが……。どうやら最近になって増えてしまったみたいで……。あっ……」
シスターが後ろを振り返ると、さっきの魔獣が大勢やって来た。
「な、なによコイツら……！」
「どうやら騒ぎを聞きつけて集まってきたみたいだね……。さすがにこの数はやっかいだな」
「うん、いざとなったらシスターだけでも逃がさなきゃ……」
エステルとヨシュアが画策していると、
「よう、お困りのようだな？」

魔獣の後ろから、ジンがやって来た。
「あ、ジンさん!?」
「よかった……。気付いてくれたんですか」
「へへへ。誰かと思えばお前さんたちか。ま、積もる話は後回しにしてとっととコイツらを片付けてちまうぞ!」
「うん!」
「了解です!」

「やれやれ……。おかげで良い汗かいちまった。しかし、お前さんたちとここで会えるとは思わなかったぜ。ツァイスの方で仕事をしてたんじゃねえのかい?」
「あはは、確かにあれからそんなに経ってはいないかもね」
「実は僕たち、ツァイス支部からグランセル支部に移ったんです」
「ほう、そうか。ってことは、例の誘拐事件、なんとか解決できたみたいだな。あの毒をくらった赤毛のアンちゃんは元気かい?」
「うん、もうピンピンしてるわ」
「……あの……」
様子を見ていたシスター・エレンが話に入ってきた。
「おっと、こいつは失礼……。……ハッ……」
ジンが顔を変えて、ヨシュアに耳打ちした。
「(おいおい……。えらくベッピンさんじゃねえか。お前さんたちのツレかよ?)」
「(いえ、僕たちもさっき知り合ったばかりですけど……)」
「まったく、鼻の下を伸ばしてみっともないわね~。キリカさんに言いつけちゃうわよ?」
「ギクッ……。俺はただ客観的な事実をだな……。って、なんでそこにあいつの名前が出てくるんだよ?」
「あの……危ないところを本当にありがとうございました。みなさ

んは命の恩人ですわ」
「いやいや、お気になさらずに！男として、武侠の道に生きる者として当然のことをしたまでですよ！」
ジンが我先にと話した。
「まあ……」
「（何をカッコつけてるんだか……。ジンさんって実は女の人に弱かったのねぇ）」
「（はは……。何となくらしい気もするけど）」
エステルとヨシュアが話していると、
「お前たち、何をしている！？」
後ろから何度も見ている黒装束の男たちが来た。
「え……！？」
「……」
「こんな人気のない場所で密談するとは怪しい奴らめ……」
「もしや……。テロリストではないだろうな？」
「だ、誰がテロリストよ！？あんたたちの方が――」
エステルが逆上した時、ヨシュアが割り込んだ。
「……僕たちは遊撃士協会、グランセル支部に所属する者です。先ほど、こちらのシスターが魔獣に襲われていたので保護しました」
「なに……！」
「遊撃士だと！？」
「あの……。その方たちの仰ることは本当です。わたくし、薬草を摘みに来て魔獣に襲われそうになって……」
「ついでに言えば、俺も遊撃士でね。たしか、あんたたちの仲間とは予選で顔を合わせているはずだが？」
「カルバードの武術家……。あの1人で戦っていたヤツか……。ふん……。身分だけは確かのようだな。
「今回だけは見逃してやろう。だが、ここはエルベ離宮の近くだ。用もなくうろつかないでもらおうか」
「それと、シスターどの。貴女のことは、自分たちが王都まで送っ

ていきましょう。遊撃士風情の手を借りるまでもありません」
「え、で、でもわたくし……」
「むっか～、ちょっとあんたたち！さっきから聞いていれば失礼なことばっかり言って……」
「エステル……いいから。以後、気を付けますから大目に見て頂けると助かります」
「ふん、まあいいだろう。お前たちは所詮、民間人だ。おのれの分をわきまえるのだな」
「さあシスターどの、行きますよ」
「は、はい……。あの、みなさん……。本当にありがとうございました」
そうして、シスター・エレンと黒装束の男たちは行ってしまった。
「な、な、な……何様のつもりよ、あいつら～っ！」
「王国軍の情報部に所属する《特務部隊》とかいう連中だな。腕は立ちそうだが、どうにも陰険そうな連中だねぇ」
「ああいうのは陰険っていうよりも性悪っていうのよっ！って、あれ……。どうしてジンさんが、あの連中のことを知ってるの？」
「ああ、武術大会の予選で連中のチームが出場してたんだ。その時に、そう紹介されててな」
「（あの連中が出場……！？隠密活動をしていた連中が堂々と姿を見せるなんて……）」
「（たぶん、存在を隠す必要も無くなったということだろうね……）」
「まあ、因縁をつけられる前にとっとと街に退散するとしようか。……そういや、お前さんたちどうしてこんな所にいるんだ？」
「あ……肝心なこと忘れてたわ。それが実は、ジンさんのことを捜してたのよ」
「あん、俺を？」
「実は、ジンさんにお願いしたいことがあるんです。武術大会のことなんですけど……」

第５章　王都撩乱（１４）（後書き）

本日２月１１日の２０時にも王都撩乱（１５）を投稿します。是非、読んでください。

第5章　王都撩乱（15）（前書き）

武術大会に向けて、ジンと話していると…。

第5章　王都撩乱（15）

―居酒屋　《サニーベル・イン》

エルベ周遊道から戻ったエステルたちは武術大会のことに関してジンに話した。

「……なるほど、そういう事かい。ひとつ聞いておくが、なんで武術大会に出たいんだ？」

「えっと……。予選を見てたら身体がウズウズしてきちゃって。手強い相手と、思いっきり戦いたくなっちゃったのよね～」

「僕たちは、正遊撃士を目指して王国各地を旅してきました。今までの修行の成果を試してみたくなったんです」

「ふーむ……。いいぜ。一緒に組むとしようや。明日、大会が始まる前に選手登録をすりゃあ大丈夫だ」

「やったあ？……て、即答しちゃってもいいわけ？」

「お前さんたちの腕前は前に見させてもらってるからな。助っ人としては十分すぎるぜ」

「えへへ……。ありがと、ジンさん！あたし、精一杯がんばるから！」

「よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくな。しかし、1人でどこまで通用するか挑戦してみるつもりだったが……。助っ人が加わったからには優勝を目指さないと話にならんな」

「モチのロンよ！出場するなら優勝あるのみ！」

「でも、そうなって来ると1人足りないのは苦しいですね。団体戦の定員は4人ですから」

「あ、そっか……。1人足りないことになるわね。でもまあ、そこは何とか気合で乗り切るしか！」

「いや、上を目指すんだったら準備は万全にしておくべきだぜ。戦いってのは拳（コブシ）を交える前からすでに始まっているもんだ」

「う……確かにそうかも。こういう時に、シェラ姉がいてくれたら心強いんだけど……。ね、エルナンさんに頼んでロレントに連絡してもらわない？」

「うーん、でもシェラさんもかなり忙しいと思うよ。父さんも、僕たちもいないからロレント支部は手薄だと思うし……」

「そ、そうでした……。あーもう、誰でもいいから協力してくれる人いないかしら！」

エステルがやけになって絶叫した。

「フッ……。その言葉を待っていたよ」

階段にリュートを鳴らす青年―もとい一人しかいないが―オリビエがいた。

「出たわね～。このスチャラカ演奏家。まさか2階に潜んでいたとは」

「ひょっとして……。今の話、聞いていたんですか？」

「フフフ……。余すことなく聞かせてもらったよ。これはボクの出番だと思ってね」

髪をかき分け階段から降りてきて、堂々と席に着いた。

「あ、ちょっと……。なに勝手に座ってんのよ？」

「たしか、ピアノを弾いてる演奏家の兄ちゃんだったな。お前さんたちの知り合いか？」

「知り合いっていうか、早くも腐れ縁というか……」

「……まだ知り合ってそんなに経っていないのにね」

「ボクはオリビエ・レンハイム。エレボニア出身の旅の演奏家さ。エステル君とヨシュア君とは前にある事件で知り合ってね。それ以来、タダならぬ関係なのさ」

「誤解を招く言い方はやめい！」

「ふーん、よく判らんが俺の方も名乗っておこうか。ジン・ヴァセック。カルバード出身の遊撃士で武術の道を志している。あんたのピアノにはいつも楽しませてもらってるよ」

「フフ……。お誉めにあずかり光栄至極。ボクの方も、大会予選で

のあなたの武勇は耳にしている。４人を相手にしてたった1人で圧勝したそうだね？」

「素人相手で運が良かっただけさ。で、その演奏家さんが俺たちに何の用だい？」

「ちょっと待ったあああ！」

エステルが声を上げて話をさえぎった。

「オリビエさん……。ひとつ確認しておきますが……。ひょっとして最近、かなりヒマだったりしますか？」

「さすがヨシュア君。鋭い質問じゃあないか。王都に来てから1月あまり……。一通り観光をしてしまって残るはグランセル城くらいだが無粋な兵士が入れてくれない……。他の地方にも行ってみたいが生誕祭が迫っているから今、王都から離れるのも忍びない……」

「よーするに、かなりヒマだと」

エステルがオリビエの言葉を省略した。

「そこに降って湧いたような定員が1人足りないという話……。さらにトドメに、優勝者には豪華な晩餐会へのご招待……。まさに女神の天啓といえようっ！」

「はあ……」

「そんな事だろうと思いました」

「というわけで、ボクも武術大会の仲間に入れてくれないかな～って」

「いいんじゃねえのか？」

ジンが即答した。

「ちょ、ちょっとジンさん。そんな簡単に……。オリビエがどんな戦い方をするのかも知らないんでしょう？」

「得物（えもの）は導力銃だろ？戦術の幅も広がるし、いいチームになると思うがね」

「ええ～っ！」

「これは……驚いたな。やはり脇の下のふくらみと歩き方で判ってしまうものかな？」

「それと視線の動かし方だな。武術家だろうが剣士だろうが動く対象のとらえ方は線だが……。あんたは、相手の動きをポイントごとにとらえている。銃使いに特有の視線の動きさ」
「ひょえええええ、プロだわ……」
「なるほど……。確かに理屈ではそうなりますね」
「フム……。今後、気を付けておくとしよう。で、その達人の目から見てボクは合格という事でいいのかな？」
「ああ、よろしく頼むぜ」
「うーん。一抹（いちまつ）の不安は残るけど……」
「オリビエさん。よろしくお願いします」
その後、エステルたちは明日からの大会に向けて、夕食を堪能した。

第５章　王都撩乱（１５）（後書き）

オリビエファンの方には待ち望んだ展開ですかね？

第5章　王都撩乱（16）（前書き）

武術大会本選開催までの話です。

第5章　王都撩乱（16）

―グランセル南街区

「ふ～……。お腹いっぱいになっちゃった。あの2人、あれだけ食べといてまだ呑み食いしてるなんて……。付き合いきれないわ、もう」

「ジンさんはあの体格だし、オリビエさんも健啖家（けんたんか）だからね。明日の試合に差し障りがなければ大丈夫なんじゃないかな」

「うーん、確かに2人とも心配するだけムダな気がしてきた」

「さてと、僕たちはそろそろ北街区にあるホテルに行こうか？エルナンさんが部屋を予約してくれているはずだよ」

―ホテル・ローエンバウム

「こんばんは。ようこそホテル・ローエンバウムへ。お泊りのお客様でいらっしゃいますか？」

受付のフリッツがエステルたちに尋ねた。

「はい、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど……」

「部屋を取ってもらっていると聞いているので確認して頂けますか？」

「おお……。あなた方のことでしたか。ええ、確かに承っております」

「は～、助かっちゃった」

「エルナンさんに感謝だね」

「エステル様とヨシュア様ですね。失礼ですが、遊撃士協会の手帳を見せていただけますか？」

「あ、ちょっと待ってて下さい……」

エステルたちはブレイサー手帳をフリッツに見せた。

「……はい、確かに。それではこれをお渡ししておきます」
エステルたちは２０２号室の鍵を受け取った。
「階段を2階に登りまして左手奥の部屋でございます。何か御用がありましたらフロントにお申しつけください」
エステルたちは２０２号室に向かった。

―２０２号室前
「２０２号室……。ここがあたしたちの部屋ね」
エステルは鍵を開けて部屋に入った。
「わあ……。雰囲気のいい部屋ねえ。見て見て、こっちからだと夜のグランアリーナが見えるわ！」
「へえ……本当だ。タダで泊めてもらうのが申しわけないような部屋だね。武術大会が終わるまでがここが僕らの拠点になるわけか……」
「（……この部屋でしばらくヨシュアと一緒に暮らすんだ……。って、あたしってば何を考えてるのよ～っ！？）」
「あのさ、エステル……」
ヨシュアがエステルに声をかけると、
「ひゃいっ！？」
エステルはすっとんきょうな声を上げた。
「いきなりこんな事を言うと変に思われるかもしれないけど……。その、僕たちは家族……だよね？」
「……え……」
「父さんみたいに頼りにならないかもしれないけど……。シェラさんみたいに聞き上手でもないけど……。それでも僕は、家族として君の支えになりたいと思っている。もし、何か悩みごとがあればいつでも相談に乗るつもりだから」
「……あ……」

「なんだか最近、君の様子がちょっと変な気がしたからさ……。えっと、勘違いだったらゴメン」
「はあ……。まったくヨシュアらしいっていうか。メチャクチャ鋭いわりにはどこかピントがずれてるんだから……」
「え……？」
「ありがと、ヨシュア。でも、そんなに心配しないで。確かにあたし、最近ちょっと変かもしれないけど……。つらいとか、苦しいとか、深刻なことじゃないから……。ちょっとだけ、気持ちの整理がつかないだけだから……だから大丈夫。見守ってくれるだけで大丈夫よ」
「そっか……。うん、だったら僕も余計な心配はしないようにする。そのかわり、悩みが解決したら僕にも話してくれると嬉しいな。あ、無理にとは言わないけどね」
「え、えっと……。うん、心の整理がついたら話すことにはなっちゃうかも……」
「えっ？」
「ううん、何でもないっ！まだ早いけど……今日は休まない？色々あって疲れちゃった」
「そうだね。明日の試合もあるし……。荷物の整理をしたら休もうか」

―ホテル・ローエンバウム　朝
「よう、お早うさん」
フロントに降りると、ジンが待っていた。
「あ、おはよ～、ジンさん！」
「すみません。わざわざ迎えに来てもらって」
「なあに、いいってことよ。どのみち試合前に色々準備しておきたかったからな。工房に武器屋、そして百貨店と一通り回った方がい

いだろう」
「備えあれば憂いなしってヤツね。ところで……オリビエのやつはまだなの？」
「モーニン、親愛なる諸君？」
噂をすれば影というものだ。
「ハッハッハッ。初陣を飾るのにふさわしい、実にすがすがしい朝だねぇ」
「ま～た狙ったようなタイミングで現れるし……」
「お早うございます、オリビエさん」
「お早うさん。これで全員そろったな。それじゃあ出かけるとするかね」
「たしか武術大会って正午から始まるのよね。まだ朝早いけどどうやって時間を潰そっか？」
「さっきも言ったが、足りない装備は店で揃えておいた方がいいだろう。それと、身体をならすためにも街道あたりで魔獣退治をするのも悪くない」
「なるほど。ウォーミングアップというわけだね」
「確かに、試合前に団体戦の感覚は掴んでおくべきかもしれませんね。このメンバーで戦うのは初めてですし」
「そうと決まればレッツ・ゴー！準備が整いしだい、グランアリーナに行きましょ！」

第5章　王都撩乱（16）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ開催する武術大会！エステルたちのチームの行方は！？

第5章　王都撩乱（17）（前書き）

武術大会1日目（前編）です！

第5章　王都撩乱（17）

―グランアリーナ前

準備を終えたエステルたちはグランアリーナ前に来ていた。

「よう、お早うさん」

ジンは武術大会受付嬢のリーファに挨拶した。

「まあ、ジン選手。どうもお早うございます。今日の試合は正午からですけどどうなさったんですか？」

「メンツが揃ったんで選手登録しておきたいんだ。お願いできるかい？」

「まあ、おめでとうございます！お一人で戦っていると聞いて大変そうだと思っていたんです。あら、あなた方は昨日の……」

「えへへ、こんにちは」

「今日は、ジンさんのお手伝いで試合に参加することになりまして」

「そうだったんですか……。それではこちらの書類に必要事項をご記入ください」

エステル、ヨシュア、オリビエは選手登録の書類に必要事項を記入した。

「まあ、そちらのお2人は遊撃士の方だったんですね。それと……そちらの方のプロフィールは……『漂泊の詩人にして不世出の天才演奏家。愛と平和の使者にしてただいま恋人熱烈募集中』……。……」

……」

あまりの内容に言葉も出ないリーファ。こんな所でもアホさ炸裂させるオリビエに乾杯……。

「ハッハッハッ。いやあ、照れちゃうなあ。ついでにどうだろう？試合が終わったら飲みにでも……」

「あー、はいはい。このアホのことは放っておいて」

「登録の方、よろしくお願いします」

「は、はい……。それでは本戦での選手登録を完了しました。チー

ム代表者のジン選手以下、エステル選手、ヨシュア選手、オリビエ選手の４人になります。以後、欠員が出たとしても交替できないのでご了承ください」

「おお、結構だ」

「いよいよって感じね～。そういえば、今日の試合の相手ってもう決まっているの？」

「すでに組み合わせは決まっていますが賭博行為の防止のため、試合直前まで知らされないことになっているんです。どちらの控室に案内されるかで相手チームは絞れると思いますが……」

「なるほど……。反対側の控室にいるチームのいずれかと対戦するわけですね」

「うふふ、そういう事ですわ。それでは選手の皆さんにこちらの品をお渡ししておきます」

エステルたちは選手登録カードを受け取った。

「それを受付係に提示すればそのまま競技場内に入れます。それでは皆さん。ご健闘をお祈りしていますわ」

エステルたちは早速競技場に入ることにした。受付係に選手登録カードを見せた。

「その登録カードは……本戦に出場される方々ですね。一度、中に入ったら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか」

「うん、大丈夫よ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

そうして、エステルたちはグランアリーナに入った。

―グランアリーナ　《蒼の組》控室前

「右手の《蒼の組》ですからこちらの控室でいいんですよね？」
「ああ、間違いないはずだぜ」
「フッ、それじゃあ試合までくつろがせてもらうとしようか」
「あんたはどんな時でもくつろぎまくってるでしょうが」
「へッ……。ずいぶん余裕そうじゃねえか」
不意に後ろから声が聞こえてきた。
「あ、あんたたちは……！」
レイヴンの幹部たちである、ディン、レイス、ロッコだった。
「フン……。妙なところで会うもんだぜ」
「ひゃはは。ここで会ったが百年目ってか？」
「……誰だったっけ？」
エステルが首をかしげた。
「ルーアンをシメていた《レイヴン》だっつーの！」
「忘れたとは言わせねえぞ！？」
「冗談よ、じょーだん。昨日、あんたたちの仲間が予選で戦っているのを見たから王都に来ていたのは知ってたわ。それで今日は、性懲りもなくあたしたちに因縁つけに来たの？」
「へっへっへ……」
「ひゃひゃひゃ……」
「フッフッフ……」
不気味に笑うディンたち。
「な、なによ、気持ち悪いわね」
「もしかして、あなたたちも本戦に出場するんですか？」
「へっ……！？」
「こら、なに驚いた顔してやがる！」
「俺たち、ちゃんと予選に勝ってここまで上がってきたんだよねぇ」
「途中参加のてめえらにデカイ面される覚えはねえんだよ」
「へえ～、すごいじゃない！あんたたちみたいな素人がよく勝ち抜くことが出来たわねぇ。よっぽど特訓したんじゃないの？」
素直に驚くエステル。

「え……」
「なんだこのアマ……」
「ただのチンピラと思ったけどけっこう根性あるじゃないの。うんうん、ちょっと見直したわ」
「いやあ、でへへ……」
照れるレイス。
「ま、丸め込まれてんじゃねえ！」
「と、とにかく……。お前らには散々コケにされた。この機会に、きっちりと落とし前をつけさせてもらうぜ」
「フフン、望むところよ。ところであんたたちもこっちの控室なわけ？」
「いや、反対側の方だけどよ……」
「だったら早速、今日の試合でぶつかる可能性があるわけね。そうなったらお互い正々堂々と戦いましょ」
「……」
「……」
「……」
黙り込むレイヴンの3人。
「あれ？」
エステルは無反応の3人を不思議そうに見た。
「おい、行くか……」
「ああ、何か調子が狂っちまったぜ」
「試合の前にメシでも食うべ」
そう言って3人は去って行った。
「な、なによ……失礼しちゃうわね。ねえ、あたし何か変なこと言った？」
「いや……ちっとも。やっぱり凄いな、君は……」
「へ？」
「はは、まあ気にするなって」
「自分の良さに無頓着なエステル君らしさなのだろうね」

「なんかバカにされてる気がするんですけど……」
「そんな事ないってば。じゃあ、控室に入って試合が始まるのを待とうか」
エステルたちは控室に入った。

しばらく後。
「そ、そろそろ始まるわね……。どうしよう……すごくドキドキしてきちゃった」
「落ち着きなよ、エステル。順番が来たら呼ばれるから、それまでおとなしく待っていよう」
「うー、そうは言ってもなんだか落ち着かないよ～」
そわそわと歩き回るエステル。

アリーナからアナウンスが聞こえてきた。
「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦を始めます！」

「それでは早速、栄えある第一試合のカードを発表することにしましょう。南、蒼の組――遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下４名のチーム！北、紅の組――王国軍、突撃騎兵隊所属。ジェイド中尉以下４名のチーム！」

「よし……出番だな」

腰を上げるクルツ。
「突撃騎兵隊といやあかなりの猛者揃いのはずだぜ。相手にとって不足はねぇ」
気合いを入れるグラッツ。
「カルナさんたち、頑張ってね！」
「ああ、任せておきな」
「それじゃあ、行ってくるね！」

「これより武術大会、本戦第一試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！蒼の組、クルツチームの勝ち！」
結果はクルツチームの圧勝だった。
「やった！カルナさんたちの勝ちだわ！」
「さすがはリベールの遊撃士ってとこか。揃いも揃って大した腕前だぜ」
「たしかに人数こそ少ないがそれぞれが一騎当千のようだね」
「もし試合で当たったらかなり苦戦させられそうですね」
しばらくしてクルツたちが戻ってきた。
「先輩たち、ナイスファイト！」
「よう、いい勝負だったぜ」
「はは、《不動のジン》にそう言ってもらえるとは光栄だ」
「さすがに予選と違ってほとんど余裕はなかったけどな」
「続きまして、第二試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組――カルバード共和国出身。武術家ジン以下４名のチーム！北、紅の組――チーム《レイヴン》所属。ディン選手以下４名

のチーム！」
「あたしたちの番だわ！」
「しかも相手はあの人たちか……」
「フフ、優雅さに欠ける相手だがなかなか面白い試合になりそうだ」
「よーし、アリーナに出るぞ！」

「へへ……。早速リベンジの機会とはな」
「たまには女神も粋なことをするもんだよな～」
「この前の事件で力不足を思い知った俺たちは死にものぐるいで特訓した……。その成果を見せてやるよ！」
「フフン、その意気やよし！あたしたちも手加減ぬきで思いっきり行かせてもらうわ！」
「（うーん、エステル君てばいつになく活き活きしてるねぇ。男らしいというか何と言うか）」
「（エステルに聞かれたらまたはたかれますよ……）」
「さて、そろそろ時間だな」
「これより武術大会、本戦第二試合を行います。両チーム、開始位置についてください」
両チームが開始位置につく。
「双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」
結果はエステルたちの圧勝だった。
「はあはあ……。やっぱり負けちまったか……」
「き、キツイっす～……」
「クソッ、クソクソクソ……」

地面を悔しそうに叩くロッコ。
「まあまあ……。そう気を落とさないでよ。正直、驚いたわ。まともに強くなってるから」
「僕も同感です。バレンヌ灯台で戦った時よりもはるかに手強く感じました」
「そ、そうか……？」
「あの時のことはあんま覚えてないんだけどね～」
「何だか知らんがお互い、全力を出したんだ。胸を張って控室に戻るとしようや」
ジンがうまくまとめた。

「はは、あのチンピラどもがあそこまで健闘するとはねぇ。人間、変われば変わるもんだ」
「勝負は見えていたがなかなかいい試合だったぜ」
「ハッハッハッ。ありがとう。まあ、彼らが心を入れ替えたのも全てはボクの人徳のタマモノでね」
オリビエのウソ発言。
「へー、そうなんだ？」
その言葉をアネラスが素直に信じている。
「事情を知らない人相手になにデタラメ言ってるのよ……。ていうかアンタ、あの連中と面識はないでしょ！」
「恋に落ちるのは一瞬、加速するのは無限大だからね」
「意味不明すぎますね……」
「続きまして、第三試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組――空挺師団第３連隊。ライエル中尉以下４名のチーム！」
「よし……俺たちの出番だな。気張って行くぞ、野郎ども！」
「アイアイサー！」
「北、紅の組――空賊団《カプア一家》所属。ドルン選手以下

4名のチーム！」
「へっ！？」
「《カプア一家》って……」
「おやおや。どこかで聞いた名前だねぇ」

「え、えーと……。事情を説明させていただきます。ご存知の方も多いとは思いますが、彼らはボース地方を騒がせた空賊団《カプア一家》の者たちです。正々堂々と戦うことでこの武術大会を盛り上げたい……。そうすることで迷惑をかけた王国市民に償いたい……。その一心で、今回の武術大会への参加を強く希望したそうです。服役中の態度が真面目であったため、主催者である公爵閣下のはからいで今回の出場が実現した次第であります。皆様、どうかご了承ください」

「団体戦へのルール変更に掟破りの犯罪者の参加か……。もはや何でもアリって感じだな」
「ハッハッハッ。ずいぶん太っ腹な公爵殿だね」
「わ、笑いごとじゃないってば！」
「さすがにこれは無理があると思いますけど……」

「皆様、静粛に！これより武術大会、本戦第三試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ドルンチームの勝ち！」
結果は、ドルンチームの勝利だった。

「は～……あいつら勝っちゃったわ」
「彼らの実力からしたら当然の結果なのかもしれないね。でも、万が一優勝したりしたらどうするつもりなんだろう……」
「ハッハッハッ。空賊を城の晩餐会にご招待か。さぞかし面白い見物だろうねぇ」
「そんな事が実現する前にあたしたちが食い止めるわよ！」
「いずれにせよ、手強い相手がもう一組現れたってことだな」
そして、ライアル中尉のチームが戻ってきた。
「クソッ……。犯罪者に遅れを取るとは……」
「まあ、そう気を落とすなよ。奴等は集団戦に慣れている。その差が出ただけさ」
もう一組のリーダー、ベルン中尉が慰めた。
「いや……俺たちの力不足の問題だ。部隊に戻ったら演習量を増やさねえとな」
「続きまして、第四試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組――国境警備隊、第7連隊所属。ベルン中尉以下４名のチーム！」
「あんたたちの出番だな。残る相手は連中だろうから絶対に負けるんじゃないぜ」
「分かってる……。正規軍魂を見せてやるさ。行くぞ、みんな！」
「イエス・サー！」
「北、紅の組――王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下４名のチーム！」
「あいつらだわ……！」

「ロランス少尉……！ひょっとしてあの時の……！」

「これより武術大会、本戦第四試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ロランスチームの勝ち！」
結果は、情報部の圧勝だった。

「な、なにあれ……。圧倒的じゃないの……！」
「ヒュー、やるねえ。あのチーム、予選は3人で戦っていたから1人加わるとは思っていたが……。あんな切札（エース）を用意してたのか」
「僕やエステル君たちと同じく本戦からの出場者ということだね。フフ……とんだ隠し玉もあったもんだ」
「……今の太刀筋……は……」
ヨシュアが何かに驚いている。
「え……？ヨシュア、どうしたの？」
「まさか……でも……」
「ヨシュア？……ヨシュアってば！」
エステルがヨシュアをゆすった。
「あ……。大丈夫……何でもないよ。見事な太刀筋だったから、ちょっと見とれちゃって……」
「そ、そうなの？」
「フッ、さすがヨシュア君。感受性が豊かで結構なことだ」
「ただいまの試合をもちまして武術大会本戦、1日目を終了します。

2日目に勝ち進んだのは、クルツチーム、ドルンチーム、ジンチーム、ロランスチームの4組！彼らの健闘に期待しましょう！」

「さてと……。無事、2回戦に勝ち進めたな。どこと当たるかは分からんが明日もこの調子で行くとしよう」

「モチのロンよ！でも実際、残ったのは強敵ばっかりなのよね～。ギルドの先輩たちに、空賊ども。それに情報部のあの連中か……」

「そうだね……。気を引き締めてかからないと」

「なあに、心配することはない。恋のパワーはノンストップ。どんな障害もブレイクスルーだよ」

「だから訳わからないってば……」

「今日はお互い、鋭気を養って明日に備えることにしようぜ。俺は酒場に行くが、お前さんたちはどうする？」

「フッ、ボクは喜んでお付き合いさせてもらうよ」

「（僕たちは、いったんギルドに報告に行った方がいいかもね。依頼についての情報が入っているかもしれないし）」

「（あ、そうね……）」

エステルが頷いた。

「ごめん、ジンさん。あたしたちはパスしておくわ」

「だったら、今日はここでお別れだな。また明日の朝、ホテルで待ち合わせといこう」

「オ・ルヴォワール。愛しい子猫（ブシキャット）ちゃんたち」

ジンとオリビエは酒場へと行ってしまった。

「さてと……。あたしたちもギルドに行こっか」

「……うん……。それと……どこかで情報を集めたいな……」

「へ……？」

「へッ、何ボーッと突っ立ってやがるんだ」

やって来たのはレイヴンの3人だった。

「あ、あんたたち……。今日はお疲れさまだったわね」
「フン……。いい気になってんじゃねえぞ」
「今回は時間がなかったから満足に鍛えてなかっただけだ。次に戦った時は、絶対に勝つ……」
「え～、まだやるのかよ～？」
「あはは、いいわよ。また機会があったら、いつでも手合せしたげるわ」
「ちょっとエステル……。安請け合いしてもいいのかい？」
「まーまー、いいじゃない。修行に精を出してたら、悪さをするヒマもないだろうし」
「フ、フン……。まったく呑気なガキどもだぜ。そんなてめえらにコイツをくれてやらあ」
ディンはエステルに地下水路の鍵Ａを渡した。
「な、なによコレ……」
「ずいぶん年代物の鍵ですね」
「西街区の方にある格子扉を開くための鍵だ。でかい地下水路に通じている」
「俺たち、たまたま鍵を手に入れて毎日そこを探検してたんだよな～。手強い魔獣が徘徊してるから結構、いい修行になってさあ～」
「え、それって……」
「か、勘違いするなよ？俺たちに勝ったお前たちに簡単に負けられると困るんだよ！」
「いいか……絶対に優勝だ。それ以外は許さねえからな……」
「そんじゃあ、まったな～」
３人は去って行った。
「え～っと。今のってもしかして……」
「うん。励ましてくれたみたいだね。試合に備えて、その地下水路で鍛えておけってことじゃないかな」
「や、やっぱそうよね。うーん……本当に心を入れ替えたのかしら？」

「はは、君の太っ腹な所が気に入ったんじゃないかな。エステルって意外と親分肌が合ってるのかもね」
「太っ腹……親分肌……。あんまり嬉しくない表現ねぇ。まあいいわ、ありがたく受け取っておきましょ」
「でも、今日はもう遅いから地下に降りるのは止めておこう。明日の朝、試合の前に腕試しするのがいいだろうね」
「ん、りょーかい。それじゃあ、ギルドに行ってエルナンさんに報告しましょ」
エステルたちはグランセル支部に向かった。

第5章　王都撩乱（17）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

次回は武術大会1日目（後編）です！　本日2月12日20時更新予定です。

第5章　王都撩乱（18）（前書き）

武術大会1日目（後編）です。

第5章　王都撩乱（18）

―遊撃士協会グランセル支部

「やあ。エステルさん、ヨシュアさん。初戦突破、おめでとうございます」

エルナンが笑顔で迎えてくれた。

「えへへ、どーもどーも。ってエルナンさん。もう結果知ってたんだ？」

「先ほど、クルツさんたちが教えてくれましたからね。それで……どうです、手ごたえのほどは？」

「そうですね……。先輩たちもそうですけど強敵ばかりが勝ち残った感じです」

エステルとヨシュアは空賊と特務兵のチームについて説明した。

「なるほど……。空賊たちが出場を許可されたのは聞いていましたが……特務部隊の隊長がそこまで凄腕とは思いませんでした」

「ただの隊員も手強いけど、あの隊長は完全に別格だったわ。大剣を片手で操る膂力（りょりょく）と豹みたいにしなやかな身のこなし……。得体の知れないヤツだとは思ったけどあそこまで強いとは思わなかった」

「そうだね……。あの、エルナンさん。ロランス少尉の経歴について何か分かることはありませんか？」

「うーん、残念ながら現状では分かりませんね。情報部は、新設部隊だけあってリシャール大佐が立ち上げの際に各方面から引き抜いたそうです。彼もその1人だとは思いますが……」

「そう、ですか……」

「ねえ、ヨシュア……。ずいぶん、あの赤いヤツにこだわってるみたいね。何か……気になることでもあるの？」

エステルがヨシュアの様子に耐え切れず尋ねた。

「いや、明らかにタダ者じゃないからね。試合で当たる可能性もあるから詳しい戦力を知っておきたいんだ」

「そっか、なるほどね」
「そういえば、その少尉ではありませんが……今日の昼頃、軍用警備艇が王都の発着場に到着したそうです。降りてきたのは、大佐の副官のカノーネ大尉だったそうですよ」
「それは気になる情報ですね」
「カノーネ大尉ていうと……あの陰険そうな女ギツネか。ティータをネタにして博士を脅迫してた嫌なヤツ」
「何でも、五大都市を一通り回ってきたそうですよ。強引に発着場に着陸させるので定期船の運航スケジュールがずいぶん遅れてしまったそうです」
「まったくロクな事しないわね……」
「五大都市を一回りですか。博士たちを捜索するにしては少し大げさすぎる気がしますね……」
「今、各地の支部で探ってもらっている最中です。何か分かったら連絡しましょう。あなたたちは、このまま武術大会に専念してください」
「うん、そうするわ」
「それでは失礼します」
エステルたちは、ホテルへと向かった。

―ホテル・ローエンバウム
「や～っと帰ってきやがったか。あんまり待たすんじゃねえっての」
フロントから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「この声……」
向かってみると案の定、ナイアルがいた。
「お久しぶりです、ナイアルさん」
「うわ～、ナイアルだ！何よ、あたしたちをわざわざ訪ねてきてくれたの？」
「おお、わざわざ訪ねて来てやったのよ。武術大会の取材をしてた

ヤツが少年少女の出場者の話をしててな。詳しく聞いてみりゃあ、どう考えてもお前たちじゃねえか。こりゃ王都に来てるってんでホテルで待ち伏せしてたわけさ」

「はあ……相変わらず鼻が利くわねぇ」

「訪ねてきてくれたのは嬉しいんですけど……。ナイアルさんの事だから用があって来たんですよね？」

「ああ、またネタ探しね」

「か～っ、何と嘆かわしい。利害拾得抜きに友情を温めようというお兄さんの真心が伝わらんかね？」

「ウソくさ～……」

「それに、お兄さんというには歳が離れすぎているような気も……」

「ええい、黙りやがれ！そういうわけでさっそく食事に出かけるぞ」

「また唐突ですね……」

「別にいいけど当然、奢(おご)ってくれるのよね？」

「ぐっ……まあいいだろ」

「編集部の近くに行きつけの店があってな。そこでメシを食うとしよう」

―コーヒーハウス《パラル》

「へ～、雰囲気のいい店ね。酒場というよりは喫茶店てカンジだけど」

「この匂いはコーヒーですね」

「ここのマスターが道楽でやってる店でな。サイフォンで淹(い)れる一杯は絶品としか言いようがねえ。あとは、本場のスパイスを使ったライスカレーがお勧めだな。まあ、食事とコーヒーは後で適当に頼んでおくとして……」

「ちょっと待ったあ！あたしたち、試合で身体を動かしてメチャメチャお腹空いてるのよね」

「まずは夕食をご馳走になってもいいですか？」
「ぐぐっ……。可愛くないガキどもだぜ。ええい、こうなったら好きなだけお代わりしやがれ！それでスクープ取れるならじゅうぶん元は取れるからなっ！」
ヤケクソのナイアル。
「やっぱりそれが狙いか」
「そういえば、ドロシーさんは今日は一緒じゃないんですか？」
「ああ、ヤツにはちょいと別の仕事を頼んでいてな……。まあいい、とっとと中に入るぞ」

「は～、辛かったけどすっごく美味しかったぁ？トロッとしたヒレ肉とホクホクとしたジャガイモが何ともいえずマッチしてて……」
「食後のコーヒーがまた絶品ですね。サイフォンで美味しく淹れるのは難しいって聞きましたけど……」
「ったく、人のミラだと思ってバカスカ食いやがって……。記者の薄給をなんだと思ってやがる」
「まーまー。とりあえずご馳走さまでした。それで……やっぱりネタに困ってるわけ？」
「フン……。ネタなら腐るほどあるさ。だが、親衛隊のテロ事件だの、アリシア女王の健康不調だの信憑性の乏しい情報ばかりでな。はっきり言っちまえば軍のフィルターを通していない生で新鮮な情報が欲しいのさ」
「……」
「……」
「ドロシーから、ツァイスでの誘拐事件について少し聞いたが……。単刀直入に聞くぞ。リシャール大佐の尻尾をお前たち、どこまで掴んでいる？」
「何て言うか、ホント直球ねぇ」

「そう質問してくるという事はある程度、予測できているみたいですね」
「やっぱり大佐はクロか……。ウチの雑誌でインタビューして人気が出ちまった手前、認めたくはなかったが……。反逆者、一歩手前ってとこか？」
「現時点で、女王陛下に対する反逆を企んでいるかどうかは分かりません。ただ、デュナン公爵を傀儡（かいらい）にして何かを企んでいるのは確かでしょうね」
「デュナン公爵か……。陛下が不調なのをいいことにグランセル城の主人気取りで好き放題やってるみたいだが……。不思議なのは、軍のお偉方がどうして動かないってとこか……」
「うーん、それはねぇ。……ねえヨシュア。話しちゃってもいいのかなあ？」
エステルがヨシュアと顔を見合わせた。
「そうだね……。僕たちとしてもできるだけ情報は欲しいところだ。ナイアルさんだったら協力してもらってもいいと思う」
「おいおい、なんだよ。そんなに良いネタを持ってんのか？」
ナイアルがそれを聞いて食いついてきた。
「あらかじめ言っておきますけど……。今から話すことは、記事にしたくても出来ないような内容だと思います」
「心の準備、しといてよね」
エステルが念を押す。
「クソッ……。何だかヤバそうな話じゃねえか。まあいい、とっとと話しやがれ」
エステルたちは今までのリシャール大佐や情報部などについてこれまでのことの真相を話した。
「……」

ナイアルは話を聞いた後、無言のまま目を閉じていた。
「あーあ、だから心の準備をしといてって言ったのに……」
「ありえねえ……。おい……ホントにマジか？」
「残念ながらマジです。空賊事件から、孤児院放火事件、中央工房の襲撃事件に至るまで……。全ての事件に、情報部の特務兵たちが関与していたんです」
「で、軍の上層部は弱みを握られてモルガン将軍は監禁状態……。親衛隊は無実の罪を被せられてテロリストとして追われてると……」
「あーもう！繰り返すんじゃねえ！チクショウ……記事にできるわけねえだろ。最近ウチの雑誌にゃあ軍の検閲が入ってるんだ……。ゲラにした時点でお縄だぜ……」
「そ、そうだったんだ……」
「仕方がないから、当たり障りのない武術大会の記事で埋めているんだが……。……って、そうか。お前らが大会に参加してるのも何か理由があっての事なんだな？」
「ま、そういうこと。依頼内容にも関わるから詳しくは話せないんだけど……」
「事態を打開するために動いていると思ってもらって結構です」
「そうかよ……。……」
……」
ナイアルは目をつむって何か考え始めた。そして、しばらく後、吹っ切れた。
「……よし、決めた。記者としては動けねえが……俺も一肌脱いでやろうじゃねえか。ギルドでも調べられない事を独自のルートで調べてやらぁ」
「サンキュ、助かるわ」
「軍を相手にするわけですから、かなり危険な仕事になると思います。それでも協力してくらますか？」
「くどい、こいつは俺の戦いだ。このままペンが剣に負けるのを見過ごすわけにはいかねえんだよ！」

「ナイアル……」
見直したかのように感動するエステル。
「分かりました……。どうかよろしくお願いします」
「おお、任せとけってんだ。それで、具体的にはどういう事が知りたいんだ？」
「そうねえ……。やっぱり軍の動きかしら。親衛隊の人たちは全員捕まっちゃったのとか……。モルガン将軍はどこに監禁されているのとか……」
エステルが思いつくことを並べていく。
「なるほどな。俺もその辺は気になった。それは調べておくとして……他にはあるかよ？」
「……あの……。情報部の人間の経歴なんて調べられないものでしょうか？」
「へっ……？」
「情報部員の経歴だと……？」
「具体的には、中心人物と思われるリシャール大佐とカノーネ大尉、そしてロランス少尉の3人です。この先、彼らと対決するなら詳しい経歴を知っておきたくて……」
「敵を知り、己を知れば百戦危うからずってヤツか」
「確かに、大佐もそうだけどあの少尉のことは知っておきたいわね。ヨシュアも言ってたけど、明日の試合か明後日の試合で当たることになるかもしれないし……」
「ナイアルさん、お願いできますか？」
「……軍には何人か知り合いがいる。機密情報ならともかく、単なるプロフィールだったら調べてもられるかもしれねえ。よし、何とか当たってみてやるよ」
「サンキュ、助かるわ！」
「よろしくお願いします」
「なあに、いいってことよ。その代わり、お前たちが優勝してグランセル城に招待されたら色々と話を聞かせてもらうからな」

「やっぱりそう来たか……」
「分かりました。差し支えのない範囲なら」
その後、ナイアルと別れたエステルたちはホテルに戻って早めに休むことにした。

第5章　王都撩乱（18）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

武術大会2日目（前編）です。更新は本日2月12日以降毎日、9時、15時、20時としたいと思いますのでよろしくお願いします。

第5章　王都撩乱（19）（前書き）

武術大会2日目（前編）です。今回は実際に戦った時の戦闘風景を入れてみました。

第5章　王都撩乱（19）

―ホテル・ローエンバウム　朝

「フッ、これで全員集合だね。さっそく出かけるとしようか」

「昨日と同じく、試合は午後からだから午前中は自由に動けるはずだ。店で装備を整えるもいいし、街道の魔獣相手に肩慣らしするのもいいだろう」

「あ、そういう事なら絶好の場所があるみたいよ」

エステルは不良たちから貰った地下水路の鍵について説明した。

「ほう、そいつは興味深いな。手強い魔獣がいるんだったら、恰好（かっこう）の練習相手になるかもしれん」

「麗（うるわ）しの王都の地下に広がる古（いにしえ）の地下水路か……。フッ、浪漫と冒険心をくすぐってくれるじゃないか」

「余裕があったら午前中に入ってみましょう。水路の入口は、西街区にある住宅街の外れの方だそうです」

そうして、エステルたちは準備を整えて、地下水路に入って、肩慣らしをした。

―グランアリーナ前

「これはジン様。グランアリーナへようこそ。一度、中に入ったら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか？」

「ええ、大丈夫よ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

エステルたちはグランアリーナに入った。

―グランアリーナ　ホール
エステルたちが控室に向かおうとした時、後ろから声をかけられた。
「あ～、エステルちゃんたちだ！」
「あ、ドロシーじゃない！」
そこにはドロシーがいた。
「お久しぶり……って言うほどでもないですね。ツァイスで会って以来ですから」
「ホントにそうだね～。また生きて会えるなんて夢にも思ってなかったよ～。エステルちゃんたち、工房船に乗って危ない所に行こうとしてたみたいだし～」
「危ない所……？」
「ほほう、興味深い話だねぇ」
ジンとオリビエが食いついてきた。
「あわわ、ドロシー！その話はまた後でってことで」
エステルがすかさずドロシーを止める。
「ほえ……？そういえば、そこの人たちどこかで見たことがあるような～」
「フッ、一度ボースの街でお目にかかったことがあるね。また会えて嬉しいよ。ユニークでチャーミングなお嬢さん」
「俺の方とは、温泉の近くで一度すれ違ったことがあったな」
「ああ～、思い出しましたぁ！ワイン飲み逃げ事件の犯人さんと東方風のカッコした熊さんです！エステルちゃんたち、この人たちと武術大会で一緒に戦ってるの～？」
「うん、そうよ」
「こちらのジンさんにお願いして本戦から参加しているんです。そういえば、ドロシーさん。今日は取材に来たんですか」
「うん～、昨日までは別の取材をしてたんだけどね～。今朝、ナイアル先輩に会ってエステルちゃんたちが武術大会に出てることを教

えてもらって～。でも、先輩が言ってた通りかなり強そうなチームみたいね～。これは良い写真が撮れそうかも～」
「あはは、期待してるわ。あれ……そういえばナイアルは一緒じゃないの？」
「うん、なんだか大事な調べものがあるみたいでね～。昨日は徹夜で資料と格闘してたみたいだし～。今日は、昔の知り合いと会って話をするんだって～」
「そっか……」
ナイアルはかなり必死に調べているそうだ。
「あ、そうそう、先輩から、エステルちゃんたちに伝言があるの～。今日の夕方くらいに編集部に来て欲しいんだって～。なんか、大切な話があるみたいよ～？」
「ん、わかった」
「試合が終わったら伺います」
「大切な話……。なんだかお安くないねえ。気になるなあ。ゴロゴロ、うにゃああん」
オリビエ、かなり気持ち悪い。
「ちょ、ちょっとダメだってば。オリビエには関係ない話なんだから」
「ひどいわっ、エステル君！昨日はあんなに激しく（試合で）燃えたのに！必要がなくなったらゴミのように捨てるのね～っ！」
「だ～から、誤解を招く言い方はやめい！」
「はわわ～、エステルちゃん。いつのまにそんなオトナに～？」
「あんたも信じるなっちゅーの！」
「あ、それじゃあわたし、撮影ポジションを確保するから観客席の方に行くね～。エステルちゃんたちのこと、応援しまくるから頑張ってね～」
そう言って、ドロシーは観客席の方に行った。
「なんというか……ユニークな嬢ちゃんだなぁ」
ジンが感嘆の声を漏らした。

「はふ～っ……。オリビエとドロシーが揃うと2乗で疲れるような気がするわ……」
「ハッハッハッ。試合前の緊張がほぐれたということで」
緊張はとれても疲れると思うが……
「ドロシーさんは、カメラマンとしてかなりの腕前の持ち主みたいですよ。最近の《リベール通信》の写真は彼女が撮った物ばかりだそうですから」
「ほう、そりゃ凄いな。だったら、そのカメラの前でブザマな戦いは見せられねぇな」
「うん……確かに。誰と当たるかは判らないけど気合を入れるしかないわねっ！」

―蒼の組　控室
「うーん……遅いわね。もうすぐ試合が始まるのにもう1組のチーム、来ないわよ？」
「確かに妙だね。事情があって遅れているのか、それとも……」
その時、廊下から声が聞こえてきた。
「ほら、キリキリ歩かないか！」
「ったく、うるせえな。そんなに急かすんじゃねえよ」
「ああ……どうしてこんな事になったんだろーな」
「兄ぃ、気合いを入れなよ！あいつらと当たった時にそんなことでどうすんのさ！」
そうして入ってきたのは……カプア一家だった。
「あ……」
エステルは口を開けている。
「てめえらは……」
「あなたたちのチームでしたか」
「フッ、どうりで時間通りに来ないわけだね」

「ふーん、今日のお相手はお前さんたちじゃ無かったか」
「フン……運がよかったね。あんたたちと当たったら今度こそ、そこのノーテンキ女に思い知らせてやろうと思ったのに」
「あ、あんですって～？」
「コラ！無駄口を叩くんじゃない！公爵閣下の温情があって参加していることを忘れたか？」
「まあまあ兵士さん。そう目くじらを立てないでくれよ。ここに連れて来られてから俺たちゃ、大人しかっただろう？」
「願わくば、また牢に戻るまでその態度を通して欲しいものだな」
「あんたたちも、こいつらとはなるべく口を利かないでほしい。面倒を起こしてもらっては困るのだ」
「別に面倒を起こすつもりはないけど……」
「判ってるとは思うが、競技場には一個中隊の兵が警備についている」
「逃げられると思うんじゃないぞ」
「わかってますって。そんな馬鹿なマネはしませんよ」
「フンだ。目障りだからとっとと行けばぁ？」
ジョゼットが兵士を挑発した。
「このっ……」
「ガキの挑発に乗るなよ。いいな、くれぐれもおかしな事を考えるんじゃないぞ」
そう言って、兵士は控室を出ていった。
「ねえ……一体どうなってるのよ。どうして、あんたたちが武術大会なんかに出てるわけ？」
「デュナン公爵あたりに出場しろと言われたんですか？」
「確かに、俺たちを出場させようとか言いだしたのはその何とかっていう公爵らしいぜ。試合に勝つたびに刑を軽くしてくれるんだってさ」
キールが説明してくれた。
「し、信じられないことするわね」

「ふーむ、法治国家とも思えないような独断っぷりだな」
「ハッハッハッ。何ともお茶目さんな公爵さんだ」
「まあ、せっかくの申し出だ。刑が決まってムショに移される前にできるだけ稼いでおこうと思ってな。もっとも……それだけが理由じゃねえけどよ」
ドルンが目を背けた。
「へ……どういうこと？」
「うっさいなあ。あんたたちには関係ないだろ。ボクたちだってそれなりの意地はあるんだよ」
「僕たちと戦うために参加したんじゃないとすると……特務兵たちと戦うためですか？」
「な、なんで……」
「くっ……その通りだぜ。あいつら、味方のフリして俺たちのことをハメやがったんだ！情報部とやらの勢力を拡大するためのダシとして使い捨てやがったのさ！」
「まあ、だまされた俺たちもマヌケといえばマヌケだけど……。それでも、エゲつなさすぎだぜ」
「うーん、確かに……。そう考えてみるとあんたたちも不憫よねえ」
「だ～から、哀れみの目でボクたちを見るなってばぁ！ボクたちに借りがあるクセにっ！」
「へ？あんたたちに借りって……？」
すっかり忘れているエステル。
「フフン、この前の出来事さ。お前さんたちが要塞にいたことを連中に知られるとマズイんじゃないのか？」
「あ……」
「連中への恨みがあったからてめえらのことは喋らなかったんだ。がはは、せいぜい感謝しやがれよ」
「う～……」
「確かに……黙っていてくれたことは感謝します」
「何だか面白そうな話をしてるねぇ。どういう事情なのかお兄さん

にも教えて欲しいなぁ」
「え～い、何でもないってば！」
「おっと……。お取込み中のようだがそろそろ始まるみたいだぜ」
ジンが振り返って言った。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦2日目を始めます！早速ですが、本日最初の第五試合のカードを発表します。南、蒼の組――カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム！北、紅の組――遊撃士協会、グランセル支部。クルツ選手以下4名のチーム！」
「来たっ！しかもカルナさんたちが相手だわ！」
「……強敵だね。僕たちが、ジンさんの足を引っ張らないようにしないと……」
「そう慎重になることはないさ。お前さんたちの実力はじゅうぶん正遊撃士に迫ってる。後は勝とうという気合いだけだ」
「うんっ！」
「頑張ります！」
「フッ……。いざ行かん、戦いの園へ！」

「来たね。エステル、ヨシュア」
「新人君たち、やっほー！」
「えへへ。どーも、先輩たち」
「胸を貸していただきます」
「『不動のジン』……あんたとは一度やり合ってみたかったんだ。どれほどの腕かこの剣で確かめさせてもらうぜ！」
「フフン、いいだろう。こちらも全力でいかせてもらう」

「はは、出来れば決勝戦で戦いたかったものだが……。ここで当たったのも運命だろう」
「片や、ベテランの遊撃士集団。片や、注目の新人コンビと武術家ブレイサーと天才演奏家との混合チーム。どちらが勝つかは女神（エイドス）のみぞ知る、だね」
「これより武術大会、本戦第五試合を行います。両チーム、開始位置についてください」
両チームが開始位置に着く。
「双方、構え！勝負始め！」
戦いの火蓋が切って落とされた！

《１ターン目》
ヨシュア　魔眼　　クルツ　６２４ダメージ　　カルナ　６８１ダメージ
クルツ・カルナ　ＡＴ　ＤＥＬＡＹ　（行動順遅れ）
《２ターン目》
エステル　旋風輪　　クルツ　５３４ダメージ　　カルナ　５７２ダメージ
アネラス　５８１ダメージ　　グラッツ　５９１ダメージ
《３ターン目》
ジン　龍神功　ＳＴＲ・ＤＥＦ　３０％　ＵＰ
《４ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《５ターン目》
グラッツ　通常攻撃　　ジン　０ダメージ
《６ターン目》
アネラス　通常攻撃　　ヨシュア　０ダメージ
《７ターン目》

オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　ジン　ＳＰＤ
５０％　ＵＰ
《８ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《９ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　ヨシュア　ＳＰ
Ｄ　５０％　ＵＰ
《１０ターン目》
エステル　旋風輪　　クルツ　５７８ダメージ　　カルナ　６
１５ダメージ
《１１ターン目》
ジン　月華掌　　クルツ　１０９５ダメージ
《１２ターン目》
ヨシュア　双連撃　　アネラス　６９５＋６９１ダメージ
《１３ターン目》
カルナ　通常攻撃　　オリビエ　０ダメージ　状態異常　暗闇
《１４ターン目》
グラッツ　通常攻撃　　ヨシュア　０ダメージ
《１５ターン目》
クルツ　方術・儚きこと夢幻のごとし　　エステル　２９４ダメ
ージ
《１６ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《１７ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　エステル　ＳＰ
Ｄ　５０％　ＵＰ
《１８ターン目》
アネラス　通常攻撃　　ジン　０ダメージ
《１９ターン目》
ジン　月華掌　　クルツ　ＭＩＳＳ

《２０ターン目》
エステル　旋風輪　　クルツ　５９４ダメージ　　アネラス　ＭＩＳＳ
《２１ターン目》
ヨシュア　絶影　　クルツ　６５４ダメージ　　クルツ　戦闘不能
《２２ターン目》
カルナ　通常攻撃　　オリビエ　０ダメージ
《２３ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《２４ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　オリビエ　ＳＰＤ　５０％　ＵＰ
《２５ターン目》
ジン　月華掌　　アネラス　１２２１ダメージ　　アネラス　戦闘不能
《２６ターン目》
グラッツ　旋風剣　　ジン　０ダメージ　　エステル　０ダメージ
《２７ターン目》
ヨシュア　双連撃　　カルナ　６４２＋６７５ダメージ　　カルナ　戦闘不能
《２８ターン目》
エステル　通常攻撃　　グラッツ　６５４ダメージ
《２９ターン目》
オリビエ　アーツ　アースランス　待機
《３０ターン目》
オリビエ　アーツ　アースランス　発動　　グラッツ　１１１６ダメージ
《３１ターン目》

ジン　通常攻撃　　グラッツ　１０７４ダメージ　　グラッツ
戦闘不能

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」
「クッ……見事だ」
「『不動のジン』……まさかここまでの凄腕とは……」
「お前さんたちもさすがに手強かったぜ。エステルたちがいなかったら俺も勝ち目は無かっただろうな」
「はあはあ……。あたしたち、勝ったの……？」
「うん、何とか……。足を引っ張らずにすんだね」
「ふふ……。謙遜するんじゃないよ……。ジンの旦那もそうだがあんたたちも充分手強かった」
「ふう、さすがはシェラ先輩の教え子だなぁ……。それに、そこのお兄さんがそこまでやるとは思わなかったよ……」
「フッ、お嬢さんの方もなかなか痺れさせてもらったよ。よければ試合の後にお互いの強さを讃えて乾杯でも……」
「えーかげんにしときなさい！」

―蒼の組　控室
「ほ～っ、やるじゃねえか」
「うんうん。見ていて興奮しちまったぜ」
「フ、フン……。悪くない試合だったじゃないか」
「あはは、ありがと♪って、どうしたの？あんたが誉めてくれるなんて。ひょっとして熱でもあるの？」
「あ、あんたみたいな甘ちゃんをボクが誉めるわけないだろっ！ボクたちを追い詰めた連中に簡単に負けられると困るだけだよ！」

「ムカ……。口の減らないボクっ子ねぇ」
「まあまあ、エステル。……どうもありがとう。色々あったのに、僕たちを応援してくれたみたいだね」
紳士スマイルのヨシュア。
「……あ……。だ、だからっ！応援なんかしてないってば！」
「（むっ……？）」
「続きまして、第六試合のカードを発表させていただきます。南、蒼の組――空賊団《カプア一家》所属。ドルン選手以下４名のチーム！北、紅の組――王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下４名のチーム！」
「おーし、とうとう来たか！」
「あの黒坊主どもに目にもの見せてやるぜ！」
「こうなったのも何かの縁ね。応援してあげるからめいっぱい頑張りなさいよ！」
「敵の隊長には気を付けて。彼さえ自由にさせなかったら勝機は必ずあると思う」
「う、うん……。……じゃなくてよ、余計なお世話だよっ！」

「よお、仮面の兄ちゃん。待ってたぜ。借りを返せる機会をな」
「へへ、あの公爵には感謝しなくちゃいけないな」
「ふふ……」
ロランス少尉が笑った。
「な、なにがおかしいのさ！？」
「エレボニアの没落貴族、カプア男爵家の遺児たち……。悪徳商人に領地を横取りされ、お家再興のために空賊稼業……。何とも涙ぐましい話だと思ってな」
「て、てめえっ！？」
「どうして知ってるんだよ！？」

「我々が所属しているのが情報部だということを忘れたか？我々への復讐などあきらめて真面目に服役した方が身のためだ。どうやらお前たちは、悪党に向いていないようだからな」
「な、なんだと～！？」
「ずいぶんとまあ、囀（さえず）ってくれるじゃないの……」
「てめえなんざ導力砲の餌食にしてやらあ！」
「これより武術大会、本戦第六試合を行います。両チーム、開始位置についてください。双方、構え！勝負始め！」

「勝負あり！紅の組、ロランスチームの勝ち！」
結果はロランスチームの圧勝だった。

「ああ……負けちゃったわ……」
「途中まではいい展開だったんだけどねぇ。あの赤い隊長どのが動き始めたら崩れてしまったね」
「ふーむ……底の知れん相手だな。あれで本気とも思えんし、いまいち実力が読み切れねえ」
「え……今ので全力じゃないの！？」
「……たぶん、違うよ。最後の技を放ったあとも気の集中が衰えていなかった。まだ余力を残していると思う」
「と、とんでもないわね……」
そして、カプア一家が控室に戻ってきた。
「……」
「……」
「……」
全員、無言だった。

「あ、あの……惜しかったわね」
「なぐさめはいらねえ……。俺たちの完敗だったぜ……」
「くそっ……俺のサポートが甘かったからだ……」
「キール兄は悪くない……！ボクがあいつの斬り込みを崩せなかったからだよ……！」
「……。まあ、仕方ないでしょ。勝負は時の運とも言うんだし。あなたたちの仇は、明日の試合であたしたちが絶対に討ってあげるわ！」
エステルが自信ありげに言った。
「なにィ……！？」
「おいおい……ずいぶん簡単に言うじゃないか」
「そんな安請け合いできる相手じゃないと思うけど……」
「まあ、意気込みがないと勝てるモンも勝てなくなるからな」
「フッ、根拠のない所がまたエステル君らしいねぇ」
「フン……やっと終わってくれたようだな」
その時、警備兵が控室に入ってきた。
「ほら、グズグズするな！とっとと波止場に戻るぞ！」
「おいおい、冗談じゃねえぞ」
「闘ったばかりなんだから少しくらい休ませてくれよ～」
「フン……犯罪者の分際で甘えるな」
「ほら、さっさと来ないか！」
「チッ……」
「ああ、疲れたぁ……」
「……」
そうして、カプア一家が控室から出ようとした時、
「おい、あんたたち……」
ジョゼットがエステルたちの方を向いた。
「えっ……？」
「ボクたちはもう、明日はここに来れないけど……。あんたたち、絶対に勝てよな！あんなふざけた連中に負けたりしたら許さないか

らねっ！」
「あ……。あったりまえでしょ！任せておきなさいってば！」
「絶対に……勝ってみせるよ」
エステルとヨシュアは勝つことを宣言した。
「……気は済んだか」
「ほら、手間を取らすんじゃない」

―グランアリーナ前
「ふう……。今日も何とか勝てたわね。明日はいよいよ決勝戦かぁ」
「激しい戦いに備えて鋭気を養う必要がありそうだな。そういうわけで……今日も酒場に繰り出すとするか！」
「フッ、そうこなくては。お付き合いさせてもらうよ」
相変わらず連夜呑む２人。
「なんか違う気がする……」
「僕たちは用事があるので今夜も遠慮させてください」
「おお、それじゃあな。明日の朝、フロントで待ってるぜ」
「グンナイ、マイ・スイートハーツ？」
ジンとオリビエは酒場に行ってしまった。
「さてと……。ナイアルが待ってるはずだし、あたしたちは雑誌社に行こっか？」
「そうだね……。情報部のメンバーについて何か判っているといいんだけど……」
エステルたちはリベール通信社に向かった。

第5章　王都撩乱（19）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。
今回の戦闘プレイはどうですかね？エステルしかダメージを受けていませんが……。

＞次回予告＜
武術大会2日目（中編）です。

第5章　王都撩乱（２０）（前書き）

武術大会2日目（中編）です。

第5章　王都撩乱（２０）

―リベール通信社　２階
「おーい、ナイアル」
「お邪魔します」
「……おお、やっと来たか。ドロシーのヤツ、珍しくちゃんと伝言できたみたいだな」
エステルとヨシュアがナイアルのところに向かった。
「そういえばお前ら、今日も勝ったそうじゃねえか。ドロシーのヤツがはしゃぎながら帰って来たぞ」
「えへへ、まあね」
「それでナイアルさん。例のことなんですけど……」
「おっと、さっそく本題かよ。ほれ……主だった連中の経歴は集まったぜ」
ナイアルは一冊の黒いファイルを差し出した。
「これって……王国軍の？」
「ああ、機密度は高くないが一応持ち出し禁止の書類らしい。無理を言って軍の知り合いに借りたんだから、他言無用だぜ」
「了解しました」
「それじゃあ、ここで読ませてもらうわね」
エステルとヨシュアは黒いファイルをめくっていった。

～リシャール大佐について
アラン・リシャール大佐。七耀暦１１６８年、リベール王国、ルーアン地方で生まれる。士官学校を首席で卒業した後カシウス・ブライト大佐率いる独立機動部隊に配属される。１１９２年の《百日戦役》においてカシウス大佐の部下として反攻作戦で多大な戦功をあげる。カシウス大佐が退役した後、軍作戦本部のスタッフに抜擢さ

れ組織改革に多大な功績を残した。１２０１年、情報部の設立を提案。アリシア女王陛下の承認を得て情報部の初代司令に就任する。

「何というか……エリートっていう感じねぇ。首席だって、首席」
「確かにキレ者って感じだからね。シード少佐から聞いたとおり、１０年前の戦争で、父さんの部下だったのは間違いなさそうだ」
「うーん、父さんってホントに大佐だったんだ……。そんなに偉かったのに何で辞めちゃったのかしら……」

～カノーネ大尉について

カノーネ・アマルティア大尉。七耀暦１１７５年、リベール王国、王都グランセルに生まれる。士官学校を優秀な成績で卒業後、軍作戦本部のスタッフに抜擢される。１２０１年、情報部の設立と同時にリシャール大佐の推薦で情報部に異動。以後、リシャール大佐の副官として作戦指揮の補佐をする立場にある。

「『優秀な成績で卒業』ってこれまたエリートって感じねえ」
「任官されてから、リシャール大佐の下でずっと働いてきたみたいだね。忠誠心は堅いみたいだな……」

～ロランス少尉について

ロランス・ベルガー少尉。年齢、国籍不明。傭兵部隊『ジェスター猟兵団』に所属していたところを、リシャール大佐の招きに応じて情報部の一員となった。それ以前の経歴は不明。

「あの仮面のヤツって……リベールの人間じゃないんだ。しかも元傭兵で経歴不明ってどーいうことよ？」
「……判らない。『猟兵団（イェーガー）』といえば最高ランクの傭兵部隊にのみ

与えられる称号のはずだけど……」
「へー、そうなんだ。戦闘のエキスパートとして大佐が引き抜いたのかしら？」
「うん……そうかもしれないね。『ジェスター猟兵団』……どこかで聞いたことがあるような」

一通り読み終えたエステルとヨシュアはファイルを閉じた。
「ありがと、ナイアル。何となく敵の姿が見えてきたわ」
「お役に立てて何よりだぜ。こちらも、資料を調べているうちに面白いことが色々と判ってな」
「面白いこと……ですか？」
「たとえば指名手配されている親衛隊のユリア中尉だが……。士官学校で、カノーネ大尉と同学年だったらしいぞ」
「へえ～、そうだったんだ」
「そのわりには、あの2人、あまり仲が良さそうには見えませんでしたけど……」
「何でも、お互い主席を争うライバル同士だったらしくてな。文のカノーネ、武のユリアと好対照な2人だったらしい」
「なるほど……何となく想像できますね」
「ユリアさん、凛としてて昔の騎士みたいだったもんね」
「それから……これは軍とは関係ないんだが。お前ら、『クローディア姫』という名前は聞いたことはあるか？」
「クローディア姫……。どこかで聞いたことあるわね？」
「確か、海難事故で亡くなった王太子夫妻の忘れ形見ですね。女王陛下のお孫さんにあたる……」
「ああ、あまり有名じゃないが、直系中の直系ともいえる女性だ。いつもは、グランセル城の女王宮で暮らしてるらしいが……。その姫殿下の見合い相手をある人物が捜しているらしい」
「見合い相手かぁ……。お金持ちの家は、そういうのも珍しくない

っていうけど……。何だかちょっと気の毒よね」
「エステル、論点はそこじゃないよ。この場合、『ある人物』というのが問題なのですよね？」
「フフ、さすが鋭いじゃねーか」
「え、その人物って……リシャール大佐のこと？」
エステルが指摘した。
「ほう、なかなか鋭いな。実際に、他国に人を派遣して有力候補を捜そうとしているのはリシャール大佐らしいんだな」
「やっぱり……。でも、おかしくない？なんでリシャール大佐がお姫様の結婚相手を探すわけ？」
「だから面白そうな匂いがプンプンするんじゃねえか。というわけで……そのあたりの事は頼んだからな」
「へ……？」
訳が分からないと首をかしげるエステル。
「……明日の試合に勝ってお城の晩餐会に招待されたらそのあたりの情報を探ってこい。つまり、そういうことですね？」
ヨシュアが逆に尋ねた。
「あ、なるほどね……。まったく、道理で気前よく色々と教えてくれるわけだわ」
「これだけ調べてやったんだ。ギブ・アンド・テイクは当然だろ」
「確かに、色々と助かりました」
「仕方ないわね～。何か判ったら教えてあげるわよ」
「へっ、そう来なくっちゃな。まあ、お前らに頼らなくてもうまく行けば今日中にも……」
その時、通信社の通信器が鳴った。
「おっと……」
ナイアルが受話器を取った。
「もしもし。こちら《リベール通信社》……。おお、お前か！ずっと連絡を待ってたんだぜ。なに……今から？ああ、わかった。これからそっちで落ち合おう」

そして、ナイアルは受話器を置いた。
「なになに、どうしたの？」
「ちょっとしたヤボ用でな。今から人に会うことになった」
「大変ですね。もう日が落ちるのに……」
「もともと俺は夜型でね。それを、あのマイペース娘の新人研修をしてるうちに、朝型に変えられちまったんだ……。って、そんな事はどうでもいいか。俺はこれから出かけるが、お前らはゆっくりしていけよ」
「ん、わかったわ。お仕事、がんばってね」
「お前らも、明日の試合、絶対に負けるんじゃねーぞ！」
そう言って、ナイアルは出かけて行ってしまった。
「さてと……あたしたちはどうしよっか？」
「そうだね……。とりあえずギルドに寄ってからホテルに帰るとしようか。ナイアルさんが調べてくれたことを報告しておいた方が良さそうだ」
「ん、りょーかい」
エステルとヨシュアはギルドに向かった。

―グランセル支部
「エステルさん、ヨシュアさん。見事、決勝に進んだそうですね。クルツさんたちは残念でしたが、良い試合だったと聞いていますよ」
エルナンが楽しそうに話した。
「うん、白熱の勝負だったわ。でも、先輩たちと較べるとあたしたちってまだまだかも……」
「確かにそうだね。ジンさんはもちろん、オリビエさんの銃と魔法にも助けられてばっかりだし……。これからも精進が必要みたいだ」
「その心構えがあればもっともっと上に行けますよ。ところで、今日は何か判ったことはありますか？」

「はい、実は……」
エステルとヨシュアは、ナイアルが調べてくれた情報をエルナンに報告した。
「なるほど……。ロランス少尉というのは猟兵団（イェーガー）の出身でしたか。『ジェスター猟兵団』……。聞いたことのない名前ですが調べた方が良さそうですね」
「ギルドと猟兵団には交流があるんですか？」
「いや、どちらかというと商売敵のようなものですね。我々は規約で、国家間の戦争に関与することはできませんが、彼らの場合はそれが商売です。戦争の絶えない辺境などでは民間人の安全をめぐって対立することが多いんですよ」
「……あんま好きになれないかも。でも、それなら情報なんて手に入りっこないんじゃない？」
「そこはそれ。蛇の道は蛇と言いまして。情報を集めるのに2、3日はかかるでしょうから決勝には間に合いませんが……。それでも構いませんか？」
エルナンが得意げに言った。
「あ、うん。大会だけの話じゃないしね」
「よろしくお願いします」
「あとは……クローディア姫の結婚相手を大佐が捜しているという話ですが。実は少々、それに関する情報がないわけではありません」
「……っていうと？」
「どうやら、女王生誕祭の当日にエレボニアの皇族が来るそうです。名前はまだ分かりませんが……かの国の皇族がリベールを訪れるのは１０年前の侵略戦争以来のことです」
「なるほど、先程の縁談話と関係がありそうな感じはしますね」
「エレボニアの皇族かぁ。どういう人たちか全然知らないわね。ていうか、帝国人の知り合いってオリビエくらいしかしらないし……」
「ちなみに、クローディア姫は１６歳になったばかりのはずです。確かに、結婚を急かせるのは不自然と言えるかもしれませんね」

「え、そうなの!?あたしたちと同い年じゃない!」
「上流階級でいえば社交界にデビューする歳だね。でも、昔ならいざ知らず、その歳で結婚は早すぎるな……」
「そこまでして急かせる理由が何かあるのかもしれません。調べてみる価値はあると思いますよ」
「うん、わかったわ。無事にお城に招待されたらそのあたりも探って来るから」
「そのためには、明日の試合を何とかして勝たなくちゃね」
「ふむ……少々、危険かもしれませんが。これをお渡ししておきましょう」
エルナンはエステルに地下水路の鍵Bを渡した。
「え、これって……」
「王都支部で管理している地下水路の鍵のひとつです。グランアリーナの横にある入口を開くことができますよ。ただ、そこから入れる区画にはかなり手強い魔獣がいますが……」
「それこそ望むところよ!あいつらと戦う前にもう少し鍛えておきたかったから助かっちゃうわ!」
「エルナンさん。ありがとうございます」
「なに、これも受付の役目です。ただし、あなたたち2人だけで入ろうとは思わないでくださいね」
「りょーかい。朝、ジンさんたちと合流したら入ってみることにするわ」
エステルたちは、ホテルへ向かうことにした。

第5章　王都撩乱（２０）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

武術大会2日目（後編）です。

第5章　王都撩乱（21）（前書き）

武術大会2日目（後編）です。

第5章　王都撩乱（21）

―グランセル南街区

「わっ……。もうこんな時間だわ」

「早くホテルに帰ったほうがよさそうだね」

外に出るとすっかり日が暮れていた。

「おい、そこの君たち！」

いきなり兵士から声をかけられた。

「あれ……兵士さんたちどうしたの？」

「我々は巡回中の者だ。テロリスト対策の一環として本日から、夜間のパトロールを強化することになってな」

「それに伴って、夜間は外出はなるべく控えてもらう事になった。君たちも、早く家に戻りたまえ」

「夜間の外出を控えろって……ちょっと不便すぎるんじゃない？」

エステルは嫌な目で見た。

「これも上の決定なのでね」

「申しわけないが従ってもらおう。ところで……君たちはどこに住んでいるのかね？」

「僕たちは、北街区にあるホテルに滞在しています。武術大会の期間中、そこに泊まっているので……」

「武術大会の期間中……。待てよ、君たちの顔、どこかで見たような気が……」

「ああっ！この子たち、武術大会の決勝に勝ち進んだ出場者じゃないか！」

「言われてみれば……」

兵士たちは驚いたようだ。

「あ、兵士さんたち、見物してくれてるんだ？」

「はは、警備のついでにね。特に今日の試合は白熱の展開で興奮させられたよ」

「明日は決勝戦なんだろう？ホテルまで送っていくからゆっくり休まなきゃだめだぜ」
「え、えっと……」
「わかりました。お言葉に甘えます」
そうして、エステルたちは兵士にホテルまで送ってもらった。

―ホテル・ローエンバウム
「えっと……送ってくれてありがとう」
「どうもお世話様でした」
「なあに、自分たちは君たちのファンだからな」
「同じ王国軍なのにこういう事を言うのも何だが……。あの特務部隊の連中はいまいち好きになれなくてね」
「そうそう、何を考えているのかさっぱり分からないというか……。とと、こんなことを言ったらリシャール大佐に失礼だな」
「まあ、そんなわけで君たちの活躍には期待してるよ」
「明日の試合、頑張ってくれよな！」
「あはは……どーも」
「精一杯頑張ります」
そして、兵士は出ていった。
「ふう……何だかフクザツねえ。あの人たち本当に大佐の陰謀を知らないみたい」
「情報部の人間ならともかく、彼らはただの一兵卒だからね。上官から伝えられた情報をそのまま信じてるんだろう」
「うーん……。あたしたちの応援をしてくれるし、あんまり敵対したくないなぁ」
「どちらにせよ、一般兵とは事を構えない方が賢明だろうね。今夜はもう外出しないで部屋で休もうか」
「ん、オッケー」

エステルたちは2階に上がった。

―202号室前

エステルが部屋を開けようとすると、中から何か音が聞こえてきた。

「あれ……。今、何か物音がしなかった？」

「……」

ヨシュアが厳しい目つきで部屋の扉を見ている。

「（……部屋に入ると同時に臨戦態勢のまま状況確認を）」

「（えっ……！？）」

ヨシュアがエステルにささやいた。

「（たぶん、侵入者だ。爆発物が仕掛けられている可能性もあるから気を付けて）」

「（ちょ、ちょっと……冗談でしょ？）」

「（頼むから僕の言うとおりにして……。何だったらここで待っていてくれても構わない）」

「（じょ、冗談！覚悟はできているからとっとと中に踏み込みましょ！）」

「（……了解）」

エステルたちは武器を構えたまますぐさま部屋に入った。

「あ……」

「逃げられたみたいだね。でも、おかしいな……。人のいた気配がない……。トラップも……仕掛けられてないみたいだ」

部屋の中は特に散らかされた様子もなく、綺麗なままだった。

「そ、そんな事までわかるの？」

ヨシュアが部屋を見渡し、窓の下に落ちていた手紙を拾った。

「……どうやら置き土産はこれだけみたいだ」

「それって……手紙？」

ヨシュアは手紙の封を切った。

「『――今夜10時。大聖堂まで来られたし。くれぐれも他言無用のこと』
ヨシュアが手紙の文面を読んだ。
「……って、それだけ？大聖堂って、西街区にある大きな教会のことよね。今夜10時っていうことはもうすぐか……」
「……」
ヨシュアは黙ったままだ。
「うーん、あやしさ大爆発だけど虎穴に入らずんばとも言うし……。ねえ、ヨシュア。ここはお誘いに乗ってみない？」
「……駄目だ！」
ヨシュアが大声を出した。
「ど、どうしたの？」
「ごめん、大声を出して……。ほら、さっき兵士たちが夜のパトロールを強化してるって言ってただろう？西街区までは離れているし、見咎められる可能性が高いよ」
「あ、忘れてた。うーん、だからといって放っておくのも気持ち悪いし……」
「だから、僕ひとりで行ってくるよ」
「へっ……？」
「こういう時は、2人よりも1人の方が行動しやすいからね。兵士たちをやり過ごしながら大聖堂までたどり着けると思う」
「……」
「様子を確かめるだけなら僕ひとりで充分だと思うんだ。だから君はここで待ってて……」
「コラ」
エステルが話をさえぎった。
「え……」
「あたしだって遊撃士のはしくれよ。自分のことは自分で面倒見れるし、足を引っ張らない自身だってあるわ。もっともらしいこと言ってもごまかされないんだからね」

「エステル……僕はそういうつもりじゃ」
「あたしを信用してないワケじゃないのは分かってる。心配してくれているんだろうけど多分、それだけでもない……。何か心当たりがあるってトコ？」
「……。そんな素振りを見せてないのにどうしてそこまで分かるんだい？」
ヨシュアは図星だったようだ。
「そりゃあ、あたしはヨシュア観察の第一人者だもん。何となく分かっちゃうんだってば」
「……。（……ここまで、か……）」
ヨシュアがエステルに聞こえないようにつぶやいた。
「えっ？」
「わかった、もう止めないよ。指定の時間までもうすぐだし、急いで大聖堂に向かうとしよう」
「あ……うん！」
「でも、約束して欲しいことがある。何かあったら必ず僕の指示に従ってほしいんだ。一瞬のミスが命取りになるかもしれない」
「うん……わかった。それじゃあ急ぎましょ」
エステルたちはさっそくホテルを出た。

「あ……！」
外はパトロールの兵士でいっぱいだった。
「（さっそく巡回してるみたいだね。もし兵士に見つかったらホテルに連れ戻されると思う……。兵士たちの巡回をかわしながら何とか大聖堂までたどり着こう）」
「（ん、オッケー！）」

―グランセル大聖堂前
「（やった、何とか到着したわ！）」
「（気を抜かないで、エステル……。先に僕が入るから後からついてきてくれ）」
「（う、うん……）」

―グランセル大聖堂
「……ごめん、エステル。僕の勘違いだったみたいだ」
「え……？」
「……フフ。来てくださいましたか」
そこにいたのは、以前、エルベ周遊道で魔獣に襲われていたシスター・エレンだった。
「あなたは……」
「ひょっとして……周遊道で会ったシスター！？」
「その節はどうもありがとうございました。よく、あんな伝言でここまで来て下さいましたね」
「あの手紙、シスターのものだったんだ……。でも、一体どうしてこんな思わせぶりなこと……」
「なるほど……ようやく気付きました。貴女だったんですか」
「へっ……？」
「フフ……。ヨシュア君はなかなか鋭いな。では、失礼して……暑苦しい服は脱がせてもらおう」
シスター・エレンが服を脱ぐと、その人物は……ユリア中尉だった！
「ああっ！？」
「王室親衛隊、中隊長。ユリア・シュバルツ中尉だ。久しぶりだな。エステル君、ヨシュア君。来てくれると信じていたよ」
「お久しぶりです、ユリア中尉。ルーアンの発着場でお別れして以来ですね」

「ああ……そうだな。さほど経っていないのにずいぶんと昔のような気がするよ」
「ちょ、ちょっと待って……。なんでユリアさんがそんな恰好しているわけ？それと、どうしてあたしたちをこんな場所に呼んだりしたの？」
エステルが訳が分からずに一気に質問攻めした。
「一つ一つ答えさせてもらおう。まず、この恰好だが……七耀教会はリベール王家と昔から深い繋がりがあってね。リシャール大佐の陰謀によって追われることになった我々を色々と助けてくれているのだよ」
「そうだたんだ……」
「もう一つの疑問だが……君たちを呼んだのは他でもない。明日の決勝で勝利したら城の晩餐会に招待されるだろう。その時に、グランセル城にいる女王陛下と接触して欲しいのだ」
「……」
「……」
「虫のいい頼みなのは判っている。だが、手配された我々にとって城内に入り込む術は存在しない。もはや君たちだけが頼りなのだ」
「……えっと。なんというか偶然ねえ」
「僕たちは、陛下と会うために武術大会に出場しているのです」
「え……？」
エステルとヨシュアは、レイストン要塞での事件とラッセル博士から女王あてに伝言を預かっていることを話した。
「そんな事があったのか……。おお女神（エイドス）よ。大いなる慈悲に感謝します……。ならば、私の方から君たちに頼むことはただひとつ。苦境にある陛下の相談に乗ってさしあげてほしいのだ」
「うん、もちろんそのつもりよ」
「内政不干渉が原則とはいえ、この事態はさすがに見過ごせません。できる限りのことをさせていただくつもりです」
「かたじけない……。それでは、これを持っていくといいだろう」

ユリア中尉はエステルに紹介状を渡した。
「これって……？」
「城の女官長をされているヒルダ夫人という方への紹介状だ。たぶん陛下は、あの特務兵たちに厳重に監視されているとは思うが……。身の回りを任されている夫人なら君たちを陛下に引き合わせることが出来るかもしれない」
「へ～、そんな人がいるんだ」
「わかりました。その人を捜して相談してみます」
「よろしくお願いする。フフ……情けないことだな」
ユリア中尉が自嘲した。
「へ……？」
「奸計（かんけい）におとしいれられて守るべき方を守れなかった屈辱……。たとえこの命が果てようとも奸賊（かんぞく）を討ち、陛下をお救いすることで晴らさんと誓ったばかりなのに……。君たちに力を借りるしかない無力な自分が情けなくてね……」
ユリア中尉は自分の拳に力を入れた。
「そ、そんなに自分を追い詰めなくても……。それに申しわけないけど明日の試合で、あたしたちが負ける可能性だってあるんだし……」
「フフ……君たちならきっと大丈夫だろう。あのカルバードの武術家どのも大した腕前の持ち主だが……。何といっても君たちはあのカシウス大佐の子供なのだから」
「ええっ、ユリアさんも父さんのこと知ってるの！？」
ここでカシウスの名前が出てくるとは思いもよらなかったのだろう。エステルはかなり驚いたようだ。
「王国軍きっての智将にして《剣聖》と呼ばれた最高の剣士……。退役前に、士官学校の武術教官をなさっていた時に指南して頂いた。私の剣の師匠とも言えるお方さ」
「し、信じられない……。父さん、棒術しか使わないのに」
「退役して遊撃士となった時に剣は捨ててしまったらしいな。ただ

敵を断つだけでなく敵を挫き、弱きを扶ける……。そういう精神の象徴として棒術を選ばれたと聞いている」

「そうだったんだ……。あたしの棒術にそんな意味があったなんて……」

「その精神は、間違いなく君にも受け継がれていると思うよ。誇りに思ってもいいんじゃないかな」

ヨシュアが励ましてくれた。

「ヨシュア……」

「カシウス大佐が鍛えた君たちだ。必ずや優勝できると信じている」

「えへへ……。ユリアさんにそう言ってもらえると何だか自信がわいてきちゃった」

「全力を尽くします」

その時、大聖堂の扉がノックされた。

「……失礼、王都警備隊です！現在、テロ対策の一環として主要施設の見回りをしております。夜分遅くに申しわけありませんが中を改めても構わないでしょうか？」

「（やばっ……）」

「まあ……ご苦労さまです。少々お待ちください。すぐに鍵を開けますから」

そう言って、ユリア中尉はシスター姿になった。

「（祭壇部屋の方に外に通じている裏口がある。君たちはそこから行くといい）」

「（うん、わかったわ！）」

「（ユリア中尉もどうか気を付けてください）」

エステルたちはすぐさま裏口から大聖堂を後にした。

―グランセル東街区

「はあ……なんか巡回を避けているうちにこんな所まで来ちゃった

わね。もう、こっちの方には兵士はいないみたいだけど……」
「うん……人の気配はないね。そろそろ夜間のパトロールも終わりみたいだ。少し休んでからホテルに戻ろうか」
「オッケー」
そして、エステルは近くのベンチに座った。
「う～、色々ありすぎてなんか頭がパニック状態かも……」
「はは……確かに。まさか大聖堂で待っていたのがユリア中尉だとは思わなかったな」
「あ、そーいえば……。結局、ヨシュアの心当たりはユリアさんじゃ無かったのよね？ひょっとして……前に会ったことのある人？」
「……それは……。……」
ヨシュアが話しにくそうに顔を伏せた。
「あ……。ごめん、今のナシ。ルール違反、ルール違反」
「エステル……」
「ヨシュアが話す気になるまで出会う前のことは聞かない……。気を付けてはいるんだけどついつい忘れちゃうのよね～」
「……。エステル、僕は……僕は、君と旅してきて少しは強くなれたと思うんだ」
「え……？」
ヨシュアが唐突に切り出してきた
「同じ空の下で生きている様々な人々の、さまざまな人生……響き合う人々の想いと想い……。そんなものに触れることで亡くしたものを取り戻せる……。そんな気がしていたんだ……」
「……ヨシュア……？」
「……たぶんそれは錯覚なんだ。だけど、それでも僕は……。君と一緒にいられることを感謝したいと思っている……。この空と、父さんと……何よりもエステル……君に」
「ヨシュア……」
「だから……約束する。今回の事件が片づいて父さんも無事に帰ってきたら……。僕の過去……君と出会う前のことを話すよ」

「ホ、ホント……？」
「うん。この星空にかけて約束する」
「……。よし、決めた！」
エステルが突然立ち上がった。
「エステル……？」
「何ていうか……モヤモヤが吹っ飛んじゃった。あたしも、全部片づいたらヨシュアに話すことがあるから」
「え……ああ。もしかして、例の悩みのこと？」
「そうそう、それそれ。えへへ……覚悟してもらうからねっ！」
「覚悟って……いつでも出来てるつもりだけど。だったら今すぐにでも……」
「ダ、ダメだってば！やっぱりそういうのってタイミングがあると思うし……。うーん、シチュエーションはすごくいい感じなんだけど……」
「？？？よく分からないけど……。落ち着いて話をするためにも明日の試合は負けられなくなったね」
「モチのロンよ。あんな連中に邪魔されるもんですか。乙女のパワーで特務兵どもをぶっとばす！」
エステルが真夜中に絶叫した。
「ぶっとばすって……。……ぷっ……。クッ、アハハハハ……っ！君ってやっぱり……父さんの娘だなあ……」
ヨシュアがたまりかねて大笑いした。
「な、なによ、失礼しちゃうわね。あんな不良中年とどこが似ているってゆーのよ？」
「うん……そうだな。なんだか僕も、明日の試合勝てそうな気がしてきたかな」
そして、２人は少ししてからホテルへと戻ってゆっくりと身体を休めた。

第5章　王都撩乱（２１）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

武術大会最終日です。ロランス少尉との対戦がメインです。

第5章　王都撩乱（22）（前書き）

武術大会最終日・決勝戦です。決勝戦の戦闘の様子をお楽しみください。

第5章　王都撩乱（22）

―ホテル・ローエンバウム　朝

「まったく、昨日は災難だったよ。ホロ酔い気分で大使館に戻ろうとしたら兵士たちに難癖つけられてねぇ」

オリビエが早朝から昨日のパトロールについてボヤいている。

「テロリスト対策とやらで夜間のパトロールが強化されていたらしいな。お前さんたちは大丈夫だったか？」

「ええ、昨日は早く休んだので特に問題はありませんでした」

「そ、それよりもエルナンさんからいいものを借りてきちゃったわ」

エステルは昨日のことに触れられないよう、話題を変えた。

エステルは懐から、昨日、エルナンから借りたもうひとつの地下水路の鍵を取り出し、説明した。

「おお、そりゃあ助かるな。あの兄ちゃん、まだ若いのにずいぶん気配りがきくようだな」

「そういうわけで、午前中は地下水路に降りてみましょ」

「もうひとつの入口はアリーナの隣にあるそうです」

「フッ、晩餐会のために最後のひと頑張りと行こうか」

エステルたちは、準備を整えた後、地下水路で鍛えた。

―グランアリーナ前

「これは皆様。グランアリーナへようこそ。一度、中に入ったら試合終了まで競技場から出ないようお願いしているのですが……。準備の方はよろしいでしょうか？」

「うん、バッチリよ」

「かしこまりました。皆さんの控室は、ホールに入って右手にある《蒼の組》の控室です。それでは健闘を祈ります」

―蒼の組　控室

「は～、あたしたちだけだとメチャメチャ広く感じるわねぇ」

エステルは自分たち以外誰もいない控室を見渡して言った。

「団体競技や、サーカスなんかも出来るよう造られた場所だからね。昔は、大型魔獣との戦いなんていうイベントも行われていたみたいだよ」

「へ～、だからこんなに大きな控室になってるわけね」

「帝都のオペラ劇場に較べると設備の面では物足りないが……。屋外コンサートなんていうのも悪くないかもしれないねぇ」

オリビエはここでコンサートを披露したいようだ。

「何の話よ、何の……」

「しかし、今日はどうやら早く来すぎちまったようだな。考えてみりゃ一試合だけだから始まる時間は遅いはずだ」

「え、そうなの。うー、試合があるまでただ待ってるのは退屈かも……」

「だったら、試合が始まるまで場内を散策して来ようか？」

「ん、そうね。ジンさん、オリビエ。あたしたち散歩に行ってくるわ」

「おー。時間までには戻ってこいよ」

そして、エステルとヨシュアは控室を出ていった。

「……」

オリビエはただそれを見送っていた。

「へえ。どういう風の吹き回しだ？お前さんのことだからてっきりついていくと思ったが」

ジンが珍しいなと言った。

「いやね、２人の雰囲気が少し変わったような気がしてね。あれは

何か進展があったとみたね」
「ほう、よく見ているじゃないか。確かにあの2人、この大会に妙なプレッシャーを感じていたみたいだが……。今日はどこか吹っ切れたようないい表情をしてやがったな。いやあ、若いモンはうらやましいね」
「でも、まだまだ仕込みは不十分といったところかな。もう少し進展した方が美味しく頂けるにちがいない。フフ……からかい甲斐がありそうだ」
オリビエの目がいやらしく輝いた。
「やれやれ、悪趣味だねぇ」

「ゾクッ……」
エステルが突然身を震わせた。
「どうしたの？ひょっとして体調が悪い？」
「ううん……。何だか邪悪な意志を感じて……。人をダシに楽しんでやろうという調子にのったヨコシマな意志を……」
「……なんとなく誰だか見当は付きそうだね」
とは言っても、1人しかいないけど……。

―グランアリーナ　ホール
「おお……。そこにいるのはエステル君とヨシュア君か！」
「ああっ、クラウス市長！？」
「どうしてこんな所に……」
ホールにいたのはロレント市長のクラウス市長だった。
「いやあ、久しぶりじゃのう。シェラザード君から話を聞いて王国各地を旅しているのは知っておったが……。2人とも、しばらく見ないうちにいい顔つきになったじゃないか」
「はは……ありがとうございます」

「うーん、自分じゃあんまり分からないけど……。市長さんの方は相変わらず元気そうね。ちょっと安心しちゃったわ」
「はは、まだまだ若い者には負けてはおれんよ。それよりも、武術大会に出場して決勝まで行ったそうじゃないか。年甲斐もなくつい見物に来てしまったよ」
「え、見物のためにロレントから来てくれたの？」
「いや、そうじゃないんだ。実は、グランセル城の晩餐会に突然、招待されてしまってな。それで、今朝の定期船で王都に到着したばかりなんじゃ」
「お城の晩餐会！？」
「なるほど……そうだったんですか。その晩餐会、デュナン公爵に招待されたものじゃありませんか？」
「よく知っておるのう？元々、生誕祭の式典には夫婦で出席するつもりじゃったから近いうちに来ていたはずじゃが……。いきなり軍の女性士官がやって来て晩餐会に出るよう要請してきてなぁ」
「（その女性士官って……）」
「（カノーネ大尉だね、きっと）」
エステルとヨシュアは目くばせした。
「ただ、ミレーヌのやつは旅行の準備が整わなくてなあ。仕方がないのでわしだけ先に来たというわけじゃ」
「そっか……ミレーヌおばさんは来てないんだ」
「あの、市長。実は僕たちも、もしかしたらその晩餐会に出るかもしれません」
「ほ……？」
エステルとヨシュアは公爵の提案で、武術大会の優勝者が晩餐会に招待されることを説明した。
「なるほど……。そういう事になっていたのか。陛下がご不調の折の晩餐会などあまり出たくはなかったが……。君たちが一緒なら気が紛れるといったものじゃ。こりゃあ、ますます君たちに勝ってもらわなくてはならんのう」

「あはは……うん、わかったわ！」
「ご期待に添えるよう頑張ります」
「それじゃあ私は観客席の方に行っておるよ。頑張ってな。エステル君、ヨシュア君」
そう言ってクラウス市長は観客席の方に行ってしまった。
「まさか、クラウス市長も晩餐会に出席するなんて……。って事は、メイベル市長なんかも呼ばれてるのかしら？」
「可能性は高そうだね。たぶん、有力者たちを集めて話があるんじゃないかな」
「うーん……まあいっか。何とか試合に勝って晩餐会に出れば分かるもんね！」
「うん、そうだね。そろそろ控室に戻ろうか。もうすぐ開場の時間だと思うよ」
「ん、りょーかい！」
エステルたちは控室に戻った。

―蒼の組　控室
「あ……。今日はリシャール大佐も公爵と一緒に来てるみたい！」
「そうだね……。公爵のお供のついでに部下の試合を見に来たのかな」
「ほう、あれが巷（ちまた）で人気の王国軍情報部のリーダーか。男前だが、風格を感じさせる、なかなかの人物みたいだな」
「まあ……確かにそうなんだけどね」
エステルがため息をついた。真相を知った者としてはがっかりするだろう。
「ふむ、ボースで見かけた時からさらなる風格を漂わせるようになったみたいだね。フッ、こうなっては仕方ない。このオリビエ・レンハイムのライバルと認定しようじゃないか」

「あんたにライバル視されてもねぇ」
「……始まるみたいだよ」
ヨシュアがつぶやいた。

「皆様……大変長らくお待たせしました。これより武術大会、本戦最終日を始めます！予選開始から1週間にわたって開催されてきた武術大会ですが……本日をもちましていよいよ最終日となりました。勝利と栄光を掴むのは一体、どちらのチームなのか……。それでは、決勝戦のカードを発表させていただきます。南、蒼の組――カルバード共和国出身。武術家ジン以下4名のチーム！北、紅の組――王国軍情報部、特務部隊所属。ロランス少尉以下4名のチーム！」

「よっしゃあ、出番ね！」
「いよいよだ……」
「フッ、今回ばかりは本気で行かせてもらうよ」
「泣いても笑ってもこれが最後だ……。気合を入れていくぞ！」
エステルたちはアリーナへと出た。

「（さすがに今までの連中よりは歯ごたえがありそうだな……）」
「（しかし、チームの半分が青さの取れない少年少女とは。所詮、我々の敵ではなさそうだ）」
特務兵がこそこそと話している。
「（フフ、侮るな。その少年たちは遊撃士協会の人間なのだぞ）」
ロランス少尉がたしなめた。
「（え……）」
「（すると報告にあった……）」
「（その可能性もある。くれぐれも気を抜くな）」

「（……はっ！）」
「（了解であります！）」
「こ～ら。何ごちゃごちゃ言ってるのよ」
「フッ、エステル君。大目に見てあげてくれたまえ。そんな仮面をつけるくらいだから、よほど自分の顔に自信がないのだろう。ボクの芸術的な美貌をやっかんでコソコソ陰口を叩くのも無理はないさ」
この言葉に特務兵たちは猛反抗した。
「ど、どうしてそうなる！？」
「都合のいい解釈をするな！」
当然、怒るよね…。
「あの……。ロランス少尉と言いましたね」
「なにかな、少年？」
「ヨシュア……？」
「あなたの太刀筋は……。……いえ……何でもありません。どうかよろしくお願いします」
「フ……。こちらこそお手柔らかにな」
「？？？」
エステルはわけが分からないようだ。
「ほら、お喋りはそこまでにしておきな。そろそろ始まるぞ」
「これより武術大会、決勝戦を行います。両チーム、開始位置についてください」
両チームが開始位置についた。
「女神（エイドス）もご照覧あれ……。双方構え！」
両チームが武器を構えた。
「勝負始め！」
鋭い言葉と同時に決勝戦の火蓋が切って落とされた！

《1ターン目》

エステル　掛け声　　エステル・ヨシュア・ジン・オリビエ　ＳＴＲ　２０％　ＵＰ
《２ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《３ターン目》
ヨシュア　双連撃　　特務兵１　　８８５＋８４９ダメージ
《４ターン目》
ロランス少尉　　アーツ　待機
《５ターン目》
ジン　龍神功　ＳＴＲ・ＤＥＦ　３０％　ＵＰ
《６ターン目》
特務兵１　影縫い　　ヨシュア　０ダメージ
《７ターン目》
特務兵２　影縫い　　ヨシュア　０ダメージ
《８ターン目》
特務兵３　通常攻撃　　ジン　０ダメージ
《９ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　ジン　ＳＰＤ　５０％　ＵＰ
《１０ターン目》
ロランス少尉　アーツ　ティアラル　発動　　特務兵１　ＨＰ１０００回復
《１１ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《１２ターン目》
ロランス少尉　移動
《１３ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　ヨシュア　ＳＰＤ　５０％　ＵＰ
《１４ターン目》

特務兵１　通常攻撃　　ジン　０ダメージ
《１５ターン目》
特務兵２　通常攻撃　　エステル　０ダメージ
《１６ターン目》
エステル　旋風輪　　特務兵１　７４１ダメージ　　特務兵２
８０７ダメージ
特務兵３　７８７ダメージ
《１７ターン目》
ジン　月華掌　　特務兵１　１１８５ダメージ　混乱
《１８ターン目》
ヨシュア　魔眼　　特務兵１　９７９ダメージ　　特務兵２
８５２ダメージ
特務兵３　８７７ダメージ　　特務兵１
戦闘不能
《１９ターン目》
ロランス少尉　アーツ　待機
《２０ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《２１ターン目》
ロランス少尉　アーツ　ティアラル　特務兵３　ＨＰ１０００回復
《２２ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　ジン　ＳＰＤ
５０％　ＵＰ
《２３ターン目》
ジン　月華掌　　特務兵３　１２３０ダメージ
《２４ターン目》
エステル　旋風輪　　ロランス少尉　６１２ダメージ　　特務
兵２　７２３ダメージ
《２５ターン目》
ヨシュア　双連撃　　特務兵２　８６１＋８４６ダメージ

特務兵２　戦闘不能
《２６ターン目》
ロランス少尉　アーツ　待機
《２７ターン目》
オリビエ　スナイプショット　　ロランス少尉　５１７ダメージ
　アーツ解除
《２８ターン目》
ロランス少尉　破砕剣　　エステル　３５７ダメージ
《２９ターン目》
特務兵３　通常攻撃　　エステル　０ダメージ
《３０ターン目》
ジン　月華掌　　特務兵３　１２００ダメージ　混乱
《３１ターン目》
エステル　旋風輪　　ロランス少尉　５６４ダメージ　　特務兵３　７７７ダメージ
《３２ターン目》
ヨシュア　双連撃　　ロランス少尉　６０９＋６６９ダメージ
《３３ターン目》
ロランス少尉　分け身　　ロランス少尉分身出現　（ＨＰ２００）
《３４ターン目》
ジン　月華掌　　ロランス少尉　９９０ダメージ　混乱
《３５ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　待機
《３６ターン目》
オリビエ　アーツ　クロックアップ改　発動　　オリビエ　ＳＰＤ　５０％　ＵＰ
《３７ターン目》
エステル　旋風輪　　ロランス少尉　６４５ダメージ
　ロランス少尉分身　１２６０ダメージ

《３８ターン目》
ヨシュア　双連撃　　ロランス少尉　６８１＋６８２ダメージ
《３９ターン目》
ロランス少尉　移動　（混乱状態）
《４０ターン目》
特務兵３　移動　（混乱状態）
《４１ターン目》
ジン　通常攻撃　　ロランス少尉　９２７ダメージ　　ロランス少尉　戦闘不能
ロランス少尉分身消滅
《４２ターン目》
オリビエ　通常攻撃　　特務兵３　６６９ダメージ　　特務兵３　戦闘不能

「勝負あり！蒼の組、ジンチームの勝ち！」
「ば、馬鹿な……」
「選り抜きの特務部隊を代表する我々が負けるとは……」
特務兵たちが膝を付きながら話す。
「フ……やられたな……」
ロランス少尉が笑みをこぼす。
「やったあああああっ！」
エステルが絶叫した。
「勝った……勝てたのか……」
「はあはあ……。さ、さすがに疲れたねぇ……」
ヨシュアとオリビエは疲れている。
「……」
しかし、ジンは難しい顔でロランス少尉を見ていた。

「それではこれより、優勝チームに公爵閣下の祝福の言葉が贈られます。代表者、ジン・ヴァセック選手！どうぞ、前にお進みください」

「は」

ジンがデュナン公爵の前に出た。

「おお、近くで見ると本当に大きいのだなあ……。東方人というのは皆、そなたのように大きいのか？」

デュナン公爵がジンに驚いている。

「いや、自分は規格外ですな。幼き頃より、良く食べ、良く眠り、鍛えていたら自然とこうなり申した。生来、物事を深く考えない質ゆえ図体ばかり大きくなったのでしょう」

「ハッハッハッ、なるほどな。うむ！気に入ったぞ、ジンとやら！賞金１０万ミラと晩餐会への招待状を贈るものとする！」

「ありがたき幸せ」

ジンは晩餐会への招待状と賞金１０万ミラを手に入れた。

「そなたと、そなたの仲間に女神（エイドス）の祝福と栄光を！さあ、親愛なる市民諸君！勝者に惜しみない拍手と喝采を！」

こうして、武術大会が終了した。

―紅の組　控室

「フフ、面白い者たちが優勝することになったものだな」

リシャール大佐が式の様子を見ながら言った。

「まったく……。恥を知りなさい、ロランス少尉。あのような者たちに遅れを取って閣下の顔に泥を塗るなんて……。日頃のふてぶてしい態度はどうやらコケ威（おど）しだったようね？」

カノーネ大尉がロランス少尉を責めた。

「……恐縮です」
「はは、カノーネ君。そう責めないでやってくれ。実は私の方から、ロランス君に全力を出さないように頼んだのだ」
「えっ……！」
「情報部はその性質上、黒子の役に徹せねばならない。今回のように、華のあるチームが優勝する方が望ましいだろう」
「なるほど……。公爵閣下も、あの東方人を予想以上に気に入られた様子……。目くらましにはもってこいですわね」
「しかし……今年の大会は残念だったな。親衛隊のシュバルツ中尉やモルガン将軍が参加していればもっと華やかだっただろうに」
「うふふ、お戯れを……。そういう事なら、閣下ご自身が出場なされればよろしかったのに。あの小癪なユリアなど足元にも及ばぬ腕前なのですから」
「はは、私はそれほど自信家ではないつもりだよ。本気を出したロランス君にはあまり勝てる気がしないからね」
「……お戯れを。閣下は少々、私のことを買いかぶりすぎているようだ。軍人とは名ばかりの猟兵あがりの無骨者にすぎません」
「これでも人を見る目は確かなつもりだ。君に対抗できるとすれば、それこそあの男くらいだろうな」
「……」
「その彼のことですが……。このままでは、彼の子供たちがグランセル城に入ってしまいますわ。何らかの処置を講じましょうか？」
「放っておきたまえ。公爵閣下が約束してしまったことだ。今更、遊撃士協会が介入しても計画が止まることはありえない」
「で、ですが……」
「……ロランス君。計画の進行度はどのくらいだ？」
「現在９０％を越えました。一両日中には、最終地点へ閣下をご案内できるかと思います」
「よし、いいぞ」
リシャール大佐が数歩前に出た。

「……王国の夜明けは近い。たとえ逆賊の汚名を受けても……必ずやこの手で明日を切り拓くのみ」

第5章　王都撩乱（２２）（後書き）

今回の戦闘はどうでしたかね？前と同じく、エステル１回しかダメージを受けていません。エステルって、敵に狙われやすいのかな？

＞次回予告＜

決勝戦でグランセル城に入る権利を得たエステルたち。これからいよいよ、リシャール大佐の陰謀が明らかになる！そして、エステルたちはラッセル博士とユリア中尉の約束を果たすため、アリシア女王陛下との面会を試みる！

第5章　王都撩乱（23）（前書き）

グランセル城に向かうエステルたち。

第5章　王都撩乱（23）

―グランアリーナ前

「はあ～、何ていうかすっごい戦いだったわよね。あのロランス少尉ってのも想像以上に手強かったし……」

エステルが冷めやらぬ気持ちを吐露した。

「うん……よく勝てたと思う。今でも信じられないな……」

「……気に入らんな」

ジンが唐突に話した。

「えっ？」

「いや……何でもない。それよりも、晩餐会ってのはさっそく今夜あるみたいだな。結構遅くまであるらしいから部屋も用意してくれるみたいだぜ」

「やれやれ、太っ腹なことだ。お偉方と同席というのは堅苦しいような気もするが……。やはり、リベール宮廷料理にありつけるのは楽しみで仕方ない。フッ、今から想像しただけでも涎（よだれ）が出てしまいそうだよ、ジュルリ」

汚いな。

「出てる、出てるってば」

「オリビエさんに関しては何のプレッシャーも無さそうですね」

「ハッハッハッ。それでは行こうじゃないか！ボクたちをもてなしてくれる愛と希望のパラダイスにっ！」

オリビエが高らかに騒いでいると、

「……そう事が運ぶと思うか？」

後ろから男性の声がした。

「ハッ、君は……」

男性がオリビエのところにやって来た。

「貴様というやつは……。毎日毎日、ふらりと出かけて何をしているのかと思えば……。まさか立場をわきまえずに武術大会に参加し

ていたとは……」
「や、やだなあ、ミュラー君。そんなに怖い顔をするんじゃあないよ。笑う門には福来る。スマイル、スマイルっ？」
「誰が怖い顔をさせているかッ！」
ミュラーと呼ばれた男性がキレた。
「（あの制服って、もしかして……）」
「（うん……。エレボニア帝国の軍服だ……）」
「（ふむ……なかなかやりそうな兄さんだ）」
「……お初お目にかかる。自分の名前はミュラー。先日、エレボニア大使館の駐在武官として赴任した者だ。そこのお調子者とはまあ、昔からの知り合いでな」
「いわゆる幼なじみというヤツでね。フフ、いつも厳(いか)めしい顔だがこれで可愛いところがあるのだよ」
「い・い・か・ら・黙・れ」
「ハイ……」
オリビエがしゅんとした。
「コホン、失礼した。どうやら、このお調子者が迷惑をかけてしまったようだな。帝国大使館を代表してお詫びする」
「あ、ううん……迷惑ってほどじゃないけど。試合じゃ、オリビエの銃と魔法にずいぶん助けられちゃったし……」
「あの、オリビエさん。武術大会に出ていたことを大使館に隠していたんですか？」
「ハッハッハッ。別に隠してたわけじゃないさ。ただ、言わなかっただけだよ」
「そういうのを隠していたと言うのだッ！」
またミュラーがキレた。
「ま、まあいい……。過ぎたことを言っても仕方ない。とっとと大使館に戻るぞ」
「へ……。ちょ、ちょっと待ちたまえ。ボクたちはこれからステキでゴージャスな晩餐会に招待されているんですけど……」

「ステキにゴージャスだからなおさら出られると困るのだ。お前にはしばらく大使館で過ごしてもらうぞ」
「……マジで？」
「俺は冗談など言わん」
「そ、そんな殺生な～……。晩餐会だけを心の支えにここまで頑張ってきたのに～……」
「さ、さすがに……ちょっと可哀想じゃない？」
「晩餐会に出席するくらい、別に構わんのじゃないのか？」
「何か理由でもあるんですか？」
「キミたち、ナイスフォロー！ああ、仲間というのはなんと美しいものなのだろうか……。どこぞの薄情な幼なじみとは比べ物にならない温かさだねぇ」
急に生き返ったオリビエ。
「……君たちは、事態の深刻さがいまいち理解できていないようだ。いいか、想像してみろ。王族が主催する、各地の有力者が集まる晩餐会……。そこで立場もわきまえずに傍若無人にふるまうお調子者……。それが帝国人だと分かった日には……」
ミュラーが想像を促した。容易に想像できるだろう。
「……」
「……」
「……」
エステルたちは何も答えなかった。
「ちょ、ちょっと皆さん。どうしてそこで黙るんデスカ？」
「……ごめん、オリビエ。その人の心配ももっともだわ」
「うーむ。国際問題に発展しかねんな」
「さすがに、王城の晩餐会でいつものノリはまずいですよね」
オリビエに対して何のフォローもなし。
「うわっ、掌を返すようにっ！？」
「終戦から１０年目……。ただでさえ微妙な時期なのだ。我慢してもらうぞ、オリビエ」

ミュラーがオリビエの首を掴んだ。
「ちょ、ちょっと待ってくださいよ、ミュラーさん。黙っていたことは謝るからさ……」
「問答無用」
時既に遅し。
「ボクの晩餐会～！ボクの宮廷料理～！……」
オリビエはミュラーに引きずられながら大使館に戻されていった。
「えっと……いいのかなぁ？」
「気の毒だけど……こういう事もあるよ、うん」
「まあ、人間万事、塞翁（さいおう）が馬ってやつだ。せいぜい奴（やっこ）さんの分まで楽しんできてやるとしようぜ」
「うーん……仕方ないか。それじゃあ、気を取り直してグランセル城に行きましょ！」
エステルたちはグランセル城に向かった。

―グランセル城　城門前
「おっと、この先は女王陛下のいらっしゃるグランセル城だ」
「用がないのであればどうかお引き取り下さい……ってあれ？」
門番の兵士ダン、アルツがエステルとヨシュアに気付いたようだ。
「どーも、こんにちは」
「先日は失礼しました」
「なんだ、お前さんたちか」
「まだ王都に滞在していたのかい？」
「うん。ちょっと用事があってね」
「今日は正式に招待されてこちらに伺わせていただきました」
「正式に……？」
「招待されて……？」
「公爵さん直々に招待状をもらったのさ」

「うおっ！？」
「きょ、巨人か！？」
ジンを見た兵士ダンとアルツは後ずさった。
「ほらよ、こいつが招待状だ」
ジンは晩餐会への招待状を渡した。
「えっと……『ジン選手以下、武術大会で見事優勝した４名の者を晩餐会に招待する……』。そうか……あなたたちが武術大会の……」
「そういや、優勝したのは東方人の武術家が率いるチームとか言ってたな……。もしかして、お前さんたちも同じチームだったってことか？」
兵士ダンがエステルとヨシュアを見た。
「えっへん、実はそうなのよね」
「微力ながらお手伝いをさせてもらいました」
「なるほど、そうだったのか……。……あなたたちの事は女官長から聞かされています。１人足りないみたいですが、その方はどうなさったんですか？」
兵士アルツが尋ねた。
「ちとヤボ用でね。来れなくなっちまったんだ。俺たちだけで出席させてもらうぜ」
「そうか、そりゃあ残念だな。まあいいや……中へと案内させてもらうぜ」
兵士アルツが門の前に立った。
「武術大会の優勝者、ジン選手以下３名がご来場！開門！」
そして、巨大な城門が開いた。
「うわあ……。ハーケン門もそうだったけど、この城門も迫力があるわねえ」
「それに、さすがに王城だけあって堅牢そうな造りをしてますね」
「そりゃ、難攻不落の城だからな。建国以来、アーネンベルクを外敵が突破したことはないが……。貴族の反乱で、王都が戦火に包まれたことは何度かあったんだ」

「だけどその度に、この城は反乱軍の突入を撃退して王家の方々と避難民を守った……。そんな話が残っているくらいさ」
兵士ダンとアルツが王城の逸話を語ってくれた。
「へ～、そんな事があったんだ」
「ふむ、歴史ある国ならではの古き良き逸話ってやつだな」
「さてと、ようこそ！女王陛下のグランセル城へ！そのまま中に入ったら案内係が待っているはずだぜ」
「それでは皆さん、よき夕べを」
エステルたちはグランセル城へ入った。

第5章　王都撩乱（２３）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよグランセル城に入るエステルたち。

第5章　王都撩乱（２４）

―グランセル城

「うっわ～……」

「当然と言えば当然だけど……。今まで見てきたどの屋敷よりも圧倒的に豪華だね」

「ただ豪華なだけじゃなくて歴史と伝統を感じさせる壮麗さ……。つくづく、旧き王国の格式と伝統を感じさせるねえ」

城の中は白を基調とした内装で高級そうな調度品で彩られていた。

さらに、左右対称で階段も一段と格式ある風貌を漂わせていた。

「ようこそ、グランセル城へ。ジン選手御一行でいらっしゃいますわね？」

やって来たのは、カノーネ大尉と案内係の者だった。

「（げげっ……カノーネ大尉……）」

エステルがあからさまに嫌な目をした。

「（予想してなかったわけじゃないけど……）」

「ああ、そうだ。公爵さんの招待を受けて参上した。えっと……あんたは？」

「うふふ、申し遅れました。グランセル城の警備を担当する情報部のカノーネ大尉と申します。ジン選手御一行におかれましては御優勝、おめでとうございます。試合を拝見させていただきましたが凛々しくて、本当に素敵でしたわ」

「いやあ～、それほどでも。そちらこそ、その若さと美貌で軍の大尉とは本当に驚きですな。よほど優秀でいらっしゃるのだろう」

さっそくナンパしはじめるジン。

「まあ……お上手でいらっしゃいますこと。でも、そちらの若き遊撃士殿ほどではありませんわ」

カノーネ大尉がエステルとヨシュアの方を見た。

「……！」

「……」
エステルとヨシュアはカノーネ大尉を見返した。
「エステル・ブライトさん。ヨシュア・ブライトさん。ツァイスの事件以来ですわね？」
「……うん、そうね」
「ご無沙汰していました」
「あいにくですが、ラッセル博士の一件はまだ解決していないのです。どうやら、博士と孫娘さんを誘拐した不届き者がいるらしくて。エステルさんたちにお心当たりはないかしら？」
カノーネ大尉が知っているんじゃないかと言わんばかりの目で見てきた。
「さ、さあ～。ぜんっぜん心当たりがないわねぇ」
「あの事件は正遊撃士に任せて僕たちは王都に向かいましたから。その後の続報も聞いていません」
「そう……ふふ。それは本当に残念ですわ。まあ、情報部の力をもってすれば誘拐犯の逮捕も時間の問題でしょう。楽しみに待っていてくださいね」
「（こ、この雌ギツネ～……）」
エステルは怒り心頭の様子だ。
「わかりました。博士は僕たちにとっても恩人なのでよろしくお願いします」
「それはもちろん……。さて、それでは皆さんをお部屋までご案内申し上げましょう。シアさん……あとはお任せしてもいいかしら？」
「はい……お任せくださいませ」
カノーネ大尉の後ろにいたシアと呼ばれた女性が答えた。
「念を押しておきますが……お客様に、つまらない話をして失礼をかけることがないように。いいですわね？」
「は、はい……わかっております」
明らかに委縮しているシア。
「うふふ、それでよろしい。それでは皆さん。よき夕べをお過ごし

ください。わたくしは、これで失礼しますわ」
カノーネ大尉はどこかに去って行った。
「うーん、なかなかイイ女だねぇ」
「ジンさん、悪趣味ねえ……。あんな雌ギツネっぽいののどこがいいっていうのよ」
「ああいう人がジンさんのタイプなんですか？」
「はは、ああいうのに限って根が純情だったりするんだよな。そのギャップが、またそそるっつーか」
「ダメだこりゃ……。どうでもいいけど何だかオジサンっぽいわよ」
「ガーン！」
ジンはオジサンという言葉にかなりショックを受けたようだ。
「あ、あの……」
シアがたまりかねて声をかけてきた。
「あ、ゴメンゴメン。あたしたちを部屋まで案内してくれるんだっけ？」
「はい……。ご案内させていただきます。申し遅れました。私、侍女のシアと申します。今夜の晩餐会から明日までお世話をさせて頂きます。何か不便がございましたらいつでもお申し付けくださいませ」
「ああ、よろしく頼むぜ」
「それでは部屋まで案内していただけますか？」
「あ、はい。お部屋はお2階にございます」
エステルたちはシアについて行った。

―グランセル城　2階
「ふわ～っ！あの巨大なシャンデリアもつくづく豪華絢爛（ごうかけんらん）ね～」
「エステル、騒がないの。ところで、そちらの入口は……？」
「《謁見（えっけん）の間》ですわ。女王陛下が来客に会われる時にお使いにな

られます。最近は使われておりませんが……」
「……なるほど」
ヨシュアが頷いた。
「しかし、女王陛下のご病気はそんなに悪いのかい。もうすぐ生誕祭なんだろう？」
「い、いえ……。最近では、陛下のお世話は女官長がなさっているのです。私はその、あまりそういった事は知らされていなくて……。そ、それでは参りましょう」
シアはその話を無理に断ち切った。

―グランセル城　2階　左翼
シアは部屋の一つの前で立ち止まり扉を開けた。
「こちらが皆様にお泊りになって頂くお部屋です。どうぞ、中にお入りください」
「う、うん……」
「それでは失礼します」
エステルたちは部屋の中に入った。

「うっわ……」
「こんな所に泊まれるなんてちょっと想像できなかったな……」
「いやあ～、何ていうかいい土産話になりそうだぜ」
部屋はそこらのホテルとは比べ物にならないくらい豪華だった。
「晩餐会が始まるまでしばらくあるかと存じます。城内は自由に見学して頂いて構いませんが、警備上の理由で立入禁止にしている区画があります。くれぐれも立入はご遠慮ください」
「えっと、具体的にはどういう所がダメなわけ？」
エステルがシアに尋ねた。

「まずは、女王陛下がいらっしゃる女王宮ですね。屋上にある空中庭園の一角に築かれた小宮殿ですわ」
「空中庭園……。すごく綺麗そうな雰囲気ねえ」
「うふふ、生誕祭の時にはそこのテラスから王都の市民に陛下が挨拶してくださるんです。空中庭園に出るくらいなら大丈夫だと思いますよ。それと、他の立入禁止場所ですが……。1階にある親衛隊の詰所と地下の宝物庫がそうなっております」
「親衛隊の詰所っていうと……」
「たしかテロリストとして指名手配されてる連中らしいな？」
「は、はい……。現在、その場所は情報部の方々が使用されています。立入は禁じられているのでどうかご了承くださいませ」
「だいたい判りました。ところで、晩餐会に招待されている他の方々はどうしているのですか？」
「すでに全員お見えになっていますわ。たぶん、それぞれのお部屋で寛(くつろ)いでいらっしゃるかと思います」
「そうですか……」
「それじゃあ、もうクラウス市長も来てるんだ」
「はい、先ほどいらっしゃったばかりですわ。それでは私は失礼しますが……。何か御用がございましたら1階の控室までご連絡ください」
そう言って、シアは出ていった。
「さてと……」
エステルとヨシュアはジンに気付かれないよう目配せした。
「……ねえ、ジンさん。あたしたち、ちょっとお城の中を見物しに行きたいんだけど……」
「晩餐会が始まるまでには戻ります」
「やれやれ、試合の後だっていうのに若いモンはタフだねえ。いいぜ、行ってきな。俺はメシまで、この豪勢な部屋でのんびりと休ませてもらうぜ」
そして、エステルたちは部屋を出た。

「晩餐会が始まるまでにできる限りのことをしなくちゃ。まずはユリアさんが言ってたヒルダ夫人に会わなくちゃね」
「それと、他の招待客に会って挨拶をしておいた方がいいと思う。多分、顔見知りが多いだろうからね」
エステルたちは当初の目的を果たすため、行動を開始した。

第5章　王都撩乱（２４）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよ行動を開始したエステルたち。ヒルダ夫人と会えるのか！？

第5章　王都撩乱（25）（前書き）

グランセル城の招待客には懐かしい人たちが。

第5章　王都撩乱（25）

―グランセル城　2階　左翼
～クラウス市長・コリンズ学園長
「おお、来たか。エステル君、ヨシュア君」
「フフ、久しぶりだのう」
「あれ……学園長先生!?」
「ひょっとして、学園長も晩餐会に招待されたんですか?」
「うむ、今日の定期船でルーアンから飛んで来たのだよ。それよりも、市長から聞いたよ。武術大会で優勝したそうだね?ジル君たちが聞いたら喜ぶだろう」
コリンズ学園長も招待されていたそうだ。
「えへへ……どうもありがとうございます」
「それにしても、学園長まで招待されているとは思いませんでした」
「コリンズ学園長といえば王国会議にも出席されているリベール随一の賢人じゃからな。晩餐会に招待されても何ら不思議ではないといえよう」
「はは、賢人というのはさすがに持ち上げすぎでしょう」
「えっと……王国会議って?」
「年に一度開かれている王国全体の問題を決める会議だよ。女王陛下や、各地の市長、各界の代表が集まって様々な問題を協議するんだ」
「へ～、そんなものがあるんだ。じゃあ、その時と同じメンバーが今日の晩餐会には招待されているのね」
「いや……。実質、半数にしか過ぎない。女王陛下は御不調であるし、モルガン将軍は軍務で忙しい……。ルーアンのダルモア市長は例の事件で逮捕されてしまった。そして、ラッセル博士は……」
コリンズ学園長は、限られた人しか招待されていないことを話してくれた。

「あの人の事件に関してはいまだに不可解な点が多いですのう。親衛隊も加わっていたという大規模なテロ組織の仕業というのはどこまで本当なのやら……。まったく、このような状況で晩餐会とは正気とも思えんですわい」

「……」

「……」

エステルたちは黙っている。

「まあ、公爵閣下の真意がどこにあるかを確かめるためにも晩餐会に出る必要はありそうですな。女王陛下へのお見舞いを許していただく必要もありますし」

「うんうん。まさにそれが一番の問題ですのう。このグランセル城に来て陛下のご尊顔を拝見できぬことほど馬鹿げた話はありませんからなぁ。それにクローディア姫にも久しぶりにお会いしたいものじゃ」

クラウス市長が頷いている。

「クローディア姫って……。たしか女王様のお孫さんよね」

「その方もグランセル城に住んでいらっしゃるんですか？」

「いや、普段は別の場所で暮らしていらっしゃるそうじゃが。ただ、数日ほど前から王都に来ているとは聞いておるぞ」

「へえ、そうなんだ……。うーん、機会があったら一度でいいから見てみたいわねぇ」

「フフ、君たちならばきっとお目にかかる機会もあるだろう」

～メイベル市長・リラ

「あ……メイベル市長！？」

「それにリラさんも……」

「エステル様に、ヨシュア様……」

「ふふ、やっと会えましたわね。お2人が訪ねてきてくださるのを

今か今かと待っていましたのよ」
「やっぱりメイベル市長も晩餐会に招待されてたのね。あれ、でもどうしてあたしたちが来るって……？」
「クラウス市長から聞いたんですの。お2人が、武術大会に出場して見事優勝して晩餐会に招かれたって。はあ、そうと知っていれば他の仕事を全部なげうってでもお2人の応援に来ましたのに……」
「お言葉ですが、お嬢様……。その時は、お嬢様ご自身が後々苦労することになるだけでは？」
「う～、そんなの分かってますわ」
「あはは……相変わらず忙しそうなのね」
「まったく、女王陛下ならともかく、あの公爵主催の晩餐会などに出るヒマなどありませんのに……。軍の女性士官が執拗に出席するように促してきて仕方なく王都に来たんですの」
「情報部のカノーネ大尉ですね？」
「ええ、その方。応対は丁寧ですが、慇懃無礼でどうも好きになれませんでしたわ。最近、モルガン将軍ともほとんど連絡が取れませんし……」
「それって……」
「ハーケン門に連絡は取れないんですか？」
「『将軍は留守』の一点張りで門前払いといった感じですわ。何でも、テロ事件の対策のため忙しくしていらっしゃるそうです。ひょっとしたら、今夜の晩餐会で会えるかと思いましたけど……。どうやら出席はされないようですね」
「そうなんだ……」
「市長はどう思われます？この時期に、市長たちを集めて晩餐会が開かれるということを……」
「そうですわね……。女王陛下が主催されたのであれば何か重要な発表があるかと思いますが……。今回は公爵閣下のヒマ潰しに付き合わされただけだと思いますわ。陛下の代理という立場を利用して威張り散らしたいだけなのでしょう」

「うーん、あり得るかも……」
大いにね。
「でも案外、その程度の理由なのかもしれませんね」
「まあ、ここのグランシェフは王国一の腕前とも言われていますし……。せいぜい美味しいものを食べて女王陛下のお見舞いをしたらとっととボースに帰ることにしますわ」
それじゃあ、食い逃げ同然じゃないのか？

―グランセル城　2階　右翼
～マードック工房長
「おお……エステル君、ヨシュア君！」
「工房長さん！やっぱり招待されていたんだ」
「市長クラスの人が来ているから工房長もそうだと思っていました」
「君たちの方こそ、まさか武術大会で優勝してグランセル城に入り込むとはな。いやはや……さすがカシウスさんの子供たちだ」
「えへへ……色々な人たちに助けてもらったけどね」
「ところで、ここ数日間に何か動きはありましたか？」
「うむ……。君たちが王都に向かった直後、情報部のカノーネ大尉が来たんだ。晩餐会への出席は断れなかったが要塞への侵入工作については何とかごまかすことができたよ。逃亡中のラッセル博士たちもまだ軍に見つかってはいないようだ。ただ、この状況が長く続けば捕まるのは時間の問題だろうな……」
「そっか……」
「先ほど、陛下のお見舞いをしたいとカノーネ大尉に頼んではみたが、あっさりと断られてしまったよ。やはり直接会うのは難しそうだぞ？」
「そうみたいね……。でも、アテはあるから大丈夫！」
「何としても博士の伝言を女王陛下に届けます」

―空中庭園
「うわ～……キレイ……。ここがお城の空中庭園かぁ……」
「たしかに……湖が一望できるし、グランセルの城下町も見下ろせる。見学希望者が多いのも肯けるね」
「う～、こういう時じゃなかったらゆっくり景色を楽しめるんだけど……。今はお仕事を優先するしかないわね」

―女王宮　入口前
「あ……」
「ここが女王宮みたいだね……」
空中庭園を少し進んだ先に女王宮らしき場所があった。しかし、入口は2人の特務兵によって守られていた。
「む……なんだ貴様らは」
「おい……こいつら……」
「えっと……あたしたち、公爵さんに招待された者なんだけど……」
「こちらは、陛下のいらっしゃる女王宮でいいんでしょうか？」
「……その通りだ」
「だがここ数日、陛下は御不調でいらっしゃる。お目通りを願っても無駄だぞ」
「や、やだな～。そんな大それたこと考えてないわよ。そりゃあ、ちょっとはお目にかかれたらな～って思うけど」
「ところで、クローディア姫もこちらにいらっしゃるんですか？」
「いや、こちらには……」
「……おい」
「とと、それは熱心に陛下の看病をなさっていらっしゃるぞ。もち

ろん、お前たちの相手をなさる余裕などないからな」
その時、不意に女王宮の中から声が聞こえてきた。
「……こんな所で何をなさっているのですか？」
女王宮の中から現れたのは、中年の女性だった。
「夫人……」
「もうお帰りかな？」
「もうすぐ晩餐会ですからいったん控室に引き上げます。ところで、こちらのお客様は？」
「武術大会で優勝したチームの者です。たかが遊撃士の身分ですが一応、招待客とはいえるでしょうな」
特務兵が笑いながら言った。
「ムッ、たかが遊撃士って……！」
エステルが起ころうとした時、
「無礼者っ！」
中年女性が鋭く一喝した。
「あなた方は、王城の招待客を侮辱するつもりですか！」
「や……自分たちはその……」
あまりの迫力に特務兵たちがたじろいだ。
「たとえ招かれたのが公爵閣下でも城を来訪された方は、陛下のお客様！その事を忘れてもらっては困ります！」
「りょ、了解しました」
素直に頷くしかない特務兵たち。
「（す、すごい迫力……）」
「（ひょっとしてこの人が……）」
「ですが夫人……彼らを通すわけにはいきません。その事は、大佐の説明で分かっていただけたはずですな？」
「……その事は聞き飽きました」
そして、中年女性はエステルたちの前に向かってきた。
「申しわけありません、お客様。警備上の理由で、女王宮の付近に近づくことは禁じられています。できれば、晩餐会が始まるまでお

部屋でお待ちくださいませんか？」
「あ……は、はい」
「わかりました。そうした方が良さそうですね。……すみません。色々とお騒がせしました」
ヨシュアは特務兵に謝った。
「フン……」
「分かればいいのだ、分かれば」
「……（ギロッ）」
中年女性が特務兵たちを睨んだ。
「……どうぞ、気を付けてお戻りください」
慌てて訂正する特務兵たち。

女王宮を離れ、空中庭園の広場に来た。
「……お客様の前で見苦しいところをお見せしましたね。申し遅れました。私の名はヒルダといいます。グランセル城の女官長として侍女の監督にあたっております」
「やっぱり……」
「あなたがヒルダ夫人だったんですね」
「おや……。失礼ですが、面識がありましたでしょうか？」
「えっと……ある人から教えてもらったんです」
そう言って、エステルはヒルダ夫人にユリアの紹介状を渡した。
「この筆跡は……」
ヒルダ夫人は一目見ただけで誰のものか分かったようだ。
「あ、それだけで判るんだ」
「その紹介状と、遊撃士の紋章が僕たちの身分証明となります」
「わかりました……。ここでは何ですから侍女たちの控室に参りましょう。そこで話を伺わせていただきます」

第5章　王都撩乱（25）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

ついにヒルダ夫人と接触できたエステルたち。次に、アリシア女王と会うために策を講じることになる。さらに、大佐の陰謀が晩餐会で明らかになる！

第5章　王都撩乱（26）（前書き）

晩餐会が始まり、リシャール大佐の口から重大発表が！

第5章　王都撩乱（26）

―グランセル城　侍女控室

「……お話はわかりました。ラッセル博士の伝言を女王陛下に直接伝えたいと……。つまり、そういう事ですわね？」

「はい……そうなんです。女王様が本当に調子が悪かったらちょっと考え直しますけど……」

「それは問題ないでしょうが……。女王宮は、先ほどの特務兵によって２４時間監視されている状況です。中に入れるのは、公爵閣下と大佐殿、そして身の回りの世話を仰せつかった私や侍女だけなのです」

「ということは、やっぱり面会するのは難しそうね……」

「どうする、エステル？博士の伝言を、ヒルダ夫人に伝えてもらう手もあるけど……」

「うーん、でもやっぱり直接会って話がしたいかも……。デュナン公爵の狙いにリシャール大佐の目的……。いろいろ判らないことも多いしね」

「……エステル殿、ヨシュア殿。私に少々考えがあります。晩餐会が終わったらまたここに来て頂けますか？」

「え、それって……」

「僕たちが女王陛下にお会いできる手段があるということでしょうか？」

「そう考えて頂いても結構です。難しいかもしれませんが……試す価値があるかもしれません。ただ、いささか用意が必要なので晩餐会が終わってからでもいいですか？」

「やった、ラッキー！」

「わかりました。晩餐会が終わったら伺います」

「お待ちしております。料理の下ごしらえが終わったのでそろそろ晩餐会も始まると思います。一度、お部屋に戻った方がいいかもし

れませんね」
エステルたちは部屋に戻ることにした。

―グランセル城　2階　右翼　自分たちの部屋
「よう、エステル、ヨシュア。ずいぶんと遅かったじゃないか。そろそろ晩餐会が始まる時間だぜ？」
ジンは待ちくたびれているようだ。
「ごめん、ジンさん。あちこち見物していたらつい時間を忘れちゃってさ～。それに、各地の市長さんたちと色々と話してきちゃったの」
「へえ、お前さんたち、お偉いさんと知り合いだったのか？」
「ロレントの市長さんとは普段から親しくさせてもらっているんです。他の方たちとも、旅をしている時に知り合った方々ばかりです」
「なるほどな。確かに、遊撃士の仕事をしてたらお偉いさんと知り合う機会は多いか。しかし、その様子じゃ、ずいぶん活躍してるみたいじゃないか？」
「えへへ……それほどでも。ジンさんは、王都に来てから何か遊撃士の仕事はやったの？たしか、他の国でも同じように仕事ができるのよね？」
「ああ、正遊撃士だったら国籍に関係なく仕事ができるが……。予選だの、大使館の手続だので仕事を受けてるヒマはなかったな。まあ、他にも遊撃士が４人いたから出る幕がなかったとも言えるがね」
「確かにこれだけ遊撃士が集まったら大抵の事件はすぐ解決しそうですね。ただ、王都に集中している分、他の地方支部は大変そうですけど……」
「わはは、そうかもしれんなぁ」
「ううん、なんだか今さら申しわけない気がしてきたわ。シェラ姉、ロレントで今ごろどうしてるのかしら……」

「たしか前にもその名前を口にしていたが……。そのシェラ姉ってのはひょっとしてシェラザードのことか」
「え……知ってるの!?」
まさかジンが知っているとは……。
「はい、僕たちの先輩で昔から親しくさせてもらっています」
「なるほど、そうだったのか。前に彼女がカルバードに来た時に知り合ったことがあってな。いい師に恵まれていたらしく、若いながらも見所がある娘だった」
「（その師って……）」
「（うん、父さんのことだね）」
その時、部屋がノックされてシアが入ってきた。
「失礼します。晩餐会の支度が整いました。ご案内してもよろしいでしょうか？」
「おお、待ちくたびれちまったぜ。さ～てと、それじゃあタダメシにありつくとするかね」
「うん、さすがに試合の後だからすっごくお腹が空いてきちゃった。さ～、食べまくるわよ～♪」
「あの、２人とも……。一応、テーブルマナーなんかも忘れない方がいいと思うけど……」
２人を心配するヨシュア。

―グランセル城　１階　広間
「えっと……。これって夕食会なのよね？どうして食器だけが並んで肝心の料理がないの？ナイフとフォークがいっぱい並べられてるし……」
目の前の光景が分からず隣のヨシュアに尋ねた。
「正式なディナーだからね。前菜から順番に色々な料理が出てくるんだ。あと、ナイフとフォークは外側から使っていくんだよ」

「うぐっ……テーブルマナーってやつね。ちょっと緊張してきちゃった」
「うふふ……。あまり気にする事ありませんわ。料理というものは美味しく頂くのが一番ですから。マナーや礼儀作法は二の次ですわ」
「そうじゃそうじゃ。聞けば、君たち2人は出席しておる者たち全員と知り合いだそうじゃないか。固くなる必要はなかろう」
メイベル市長とクラウス市長が和ませてくれた。
「あ、それもそっか♪」
「それで納得しないでよ……」
「そういえば、そちらの方はナイフとフォークでよろしいんですの？東方の方々は、お箸の方が得意だと聞きましたけど」
「ほう、よくご存じですな。ですが、郷に入っては郷に従えとも言いますからな。不調法ながらナイフとフォークを使わせてもらいますよ」
「まあ……ご立派ですわ。さすが武術大会で優勝された達人の言葉は違いますわねぇ」
「はっはっは。いやあ、それほどでも」
「（つくづく美人に弱いのねぇ……）」
「（まあ、女好きって感じじゃないと思うけど……）」
「それにしても……公爵閣下はずいぶん遅いですな。いったい何をしてるんでしょう？」
マードック工房長が多少イライラしている。
「ふむ……確かに。それと上座は公爵閣下としてそこの席は誰が座るのじゃろうか？」
「そうですな……。クローディア姫という可能性もあるかもしれないが……」
クラウス市長とコリンズ学園長が話していると、問題の人物が来た。
「皆様……大変長らくお待たせしました。公爵閣下、ご入室でございます」
執事フィリップの声と同時にデュナン公爵が、そしてその後ろにリ

シャール大佐とカノーネ大尉が入ってきた。
「いやはや、諸君。待たせてしまって申しわけない。少々、打ち合わせが長引いてしまったものでな。彼はリシャール大佐。王国軍情報部の責任者でな。テロ事件を解決するために日夜、尽力してくれているので礼の意味も込めて招待した」
「お初お目にかかります。王国軍情報部のリシャールです。公爵閣下の格別のご厚意で晩餐会に招待していただきました。無粋な軍服で失礼ですがどうか同席をお許しいただきたい」
そう言ってデュナン公爵とリシャール大佐が席に着いた。
「（ま、まさか大佐と一緒のテーブルで食事するなんて……）」
エステルが嫌そうな顔をした。
「（予想はしていたけど、やっぱり少し緊張するね……）」
そうして晩餐会が始まった。

「はっはっは、いや、愉快愉快。どうかね、メイベル市長。王城のグランシェフの腕前は？ボースの《アンテローゼ》にも負けずとも劣らずの味ではないか？」
「ええ、素晴らしい腕前ですわ。ワインとの相性も完璧ですし、思わず引き抜きたくなりますわね」
「はっはっは、そなたが言うとあながち冗談には聞こえないな。どうだ、ジンとやら。東方人のそなたの口には合うかな？」
「いや、大変結構ですな。不調法な自分の舌にも判る洗練された深みと味わい……。リベール料理の真髄を味わっているような心境です」
「うんうん、そうだろう。どうだ、若き遊撃士たちよ。こんな豪勢な料理は今まで食べたことがなかろう？」
「うーん、確かにメチャメチャ美味しいです。招待してくれた人はともかく、料理だけはホンモノかも……」
招待してくれた人はともかく……。

「はっはっは。そうだろう、そうだろう……。……ん？」
デュナン公爵が言葉を振り返ろうとした。
「ほ、本当に素晴らしい料理ですね。それに今まで、こういう正式な席に呼ばれる機会が無かったのでとても勉強になります。招待してくださって本当にありがとうございました」
ヨシュアが慌てて取り繕った。
「はっはっは。なかなか殊勝でよろしい。しかし、執事から言われてようやく思い出したのだが……。そなた達とは、ルーアンの事件で一度顔を合わせていたのだな。何とも奇妙な縁があったものだ」
「は、はあ……そーですね。（執事さんから言われるまで思い出せなかったわけね……）」
「さあ、今夜は無礼講だ！料理も酒もたっぷりあるから、遠慮なく追加を申し出るがいい！」
「公爵閣下……。その前に、例の話を済ませてしまっては如何ですか？」
リシャール大佐がデュナン公爵に申し出た。
「……おお！そうだ、その話があったか。実は、王国を代表する諸君らに集まってもらったのは他でもない……。この晩餐会の席を借りてある重大な発表をしたかったのだ」
ついに本題に入った。
「ほう、重大な発表……」
「それは一体……どのようなお話でしょうか？」
「うむ。ここから先は、私の代わりにリシャール大佐に説明してもらおう」
あんたじゃ話せそうにないからな……。
「……恐縮です。女王陛下が御不調なのはすでにご存じのことかと思います。ですが、徐々に回復なさっているため、すぐに元気な姿を見せてくださるでしょう」
「おお……それは良かった」
「では、陛下へのお見舞いは許していただけるのかしら？」

「あいにくですが、陛下のご意向でそれは遠慮して欲しいとのことです。ただ数日中に、王都周辺を騒がすテロリストどもは一掃できる公算です。その事と合わせて、女王生誕祭は予定通りに執り行われるでしょう」
「ふむ……市民も楽しみにしているだろうからめでたいことではありますな。だが、話というのはそれだけではないのでしょう？」
「……確かに、それだけならば連絡してくれれば済みますからな」
「フフ、察しが良くて助かります。女王陛下が回復されつつあるのは先ほど述べた通りなのですが……。陛下は、今回のご不調を理由にある決断をなされたのです。その決断とはすなわち――」
リシャール大佐が言葉に力を込めた。
「ご自身の退位と、こちらに居られるデュナン公爵閣下への王位継承です」
この言葉にはその場にいた全員を震撼させた。
「な、なんですと！？」
「ほ、本当ですの！？」
「（ヨシュア、これって……！）」
「（うん……。とうとう陰謀が姿を現したね）」
「……私も戸惑ったのだが陛下が存外、弱気になられてな。無理もない、４０年近くもの間、激動の時代に翻弄されたリベールを女性の身で導いてくださったのだ。そう思うと、この生誕祭を最後に俗事から解放させてさしあげたい……。王位継承権を持つ身としてはそう決意した次第なのだよ」
「なんと……陛下がそこまでお悩みになっておられたとは……。毎年、お会いしているというのに気付けなかったとは情けない……」
「し、しかし……。このような酒の入った席で聞くにはあまりにも重大な内容ですわ。失礼ですが、どこまで現実性のあるお話なのでしょう？」
メイベル市長が反論した。
「む……」

デュナン公爵が不満そうな顔をした。
「ふむ、メイベル市長。閣下のお言葉が信用できないと……そう仰られるか？」
「そ、そうは言ってません！ただ、市長には選挙があるように王位継承にもしかるべき手続があるのではないかという事です」
「そうですな……」
「できれば、陛下から直接、今の話をお伺いしたいものです」
「う、うーむ……」
市長たちからあまり支持されないことにたじろぐデュナン公爵。
「皆さんの動揺も理解できます。ですが、どうか冷静になって今の話を受け止めていただきたい。先ほど申し上げたように生誕祭には陛下ご自身の口から発表されることになるでしょう。真偽はその時に確かめれば済むことではありませんか？」
「そ、それは……」
マードック工房長はそれ以上何も言えなかった。
「問題なのは、この件が発表された時に一般市民にどう影響を与えるかです。いたずらな混乱を避けるためにも各地の責任者である皆さんに前もって事を伝えておきたい……。公爵閣下はそう判断なさったのです」
「ゴホン……。うむ、まあそういう事だな」
あからさまに考えてなかったな……。
「そして、陛下の退位ともなれば事態はリベール国内には留まりません。大陸諸国の目、とりわけ北の脅威たるエレボニアの反応も気がかりでしょう。まさに、ここにいる我々が新たなる国王陛下を盛り立てながら一致団結をしなくてはならない……。そんな時期が迫っているのです」
「（な、何かもっともらしい事を言ってるんですけど……）」
「（うん……。大したアジテーターだね）」
「正式決定は、生誕祭の時に陛下から直接伺うとして……。心の準備をしておくようにと。つまり、そういう事ですか？」

「フフ……。理解していただいて幸いです」
「うーむ……。確かにそういう事になったらわしらも忙しくなりそうじゃな」
「そうですわね……。市民へのアナウンスもありますし」
大方、納得しかけた時、
「……1つお伺いしたい」
コリンズ学園長が尋ねた。
「公爵閣下に王位継承権があるのは私も存じておるが……。たしか、同委の継承権を持つ方が他にもいらっしゃったはずですな？」
「そ、それは……」
「陛下のお孫さんにあたるクローディア殿下のことですね。確かに、王室典範上の規定では公爵閣下と同位ではありますが……。まだ年端もいかないという理由で陛下は閣下の方を推されたようです。先ほどの話にもありましたが……。女性の身に余るほどの重責を姫に負わせたくなかったのでしょう」
「そうそう、そうなのだ！まあ、クローディアには良い縁談を探してやるつもりだ。非公式だが、すでに他国の王家から何件もの申し入れがあってな……。ひょっとしたら今年中にも縁談が実現するかもしれんのだ」
「まあ……！」
「……ふむ、お話は判りました。そうなるとお目出たい話が2つも続くというわけですな」
「ううむ……姫様が……。ご結婚されるには少々若すぎるとは思うが……」
「……ちょいと失礼。1つ質問してもいいですかね？」
黙って聞いていたジンが突然話に入ってきた。
「ジ、ジンさん？」
「ほう……？構わん、言ってみるがいい」
「失礼だが、今耳にした話は自分たちのような部外者が聞いていい話とは思えません。まして、自分は王国人でもない。なのに、何故

このような席でわざわざ発表されたのでしょう？」
「それは、優勝した君たちが偶然にも遊撃士だったからだ。陛下の退位という重大な情報はギルドにも事前に伝えたかった。そう私が閣下に提案したので聞いてもらう事になったのだよ」
「なるほど……。リベールでは、軍とギルドが良い関係を結んでいるという話はどうやら本当だったようですな」
「はは、帝国や共和国ほど軍事力が充実していないからね。手を結ばざるを得ないというシビアな現実があるのだが……。いずれにせよ、真意はご理解いただけたかね？」
「ふむ……了解しました。今日、この席で知った情報は王都支部にも伝えておきましょう」
そうして、晩餐会の時は流れていった。

第5章　王都撩乱（２６）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよリシャール大佐の陰謀が明らかになった！尚更、アリシア女王と面会したくなったエステルたちだが……。

第5章　王都撩乱（27）（前書き）

侍女の控室に向かおうとした時……。

第5章　王都撩乱（27）

―グランセル城　2階　左翼　自分たちの部屋

「いやはや、ひょんな事からとんでもない話を聞いたもんだ。俺はしょせん他国のはなしだがお前さんたちはずいぶん驚いたんじゃないか？」

「あ、あたり前だってば！ま、まさかここまで周到に話を進めてるなんて……」

「は？」

「あ、ううん、何でもない。でも……もったいなかったなあ。せっかく、舌がとろけるほど美味しい料理だったのに最後の方は味が判らなかったわ」

「はは、無理もないかもね。それよりもエステル。腹ごなしに散歩に行かない？」

「え……？ああ！そうそう、そうだった！そうね～、外の空気でも吸ってきたい気分かも」

エステルは一瞬、分からなかったがすぐにヨシュアの言いたいことを理解した。

「は～、さっきも見物してたのに、今度は食後の散歩と来たか……。認めたくはないがこれがトシの差ってやつかねぇ」

ジンがしみじみと言った。

「あはは、ジンさん大げさよ」

「ジンさんは見物とかしないんですか？歴史ある建物だけあって見所はたくさんありますよ」

「まあ、気が向いたらフラフラさせてもらうとするさ。厨房に行きゃあ、残り物があるかもしれんしな」

見た目に違わず大食漢のジン。

「あきれた……。まだ食べるつもりなの？」

「どちらかというと酒のツマミが欲しいところだな。飲める談話室

もあるみたいだし後で行ってみるとするかね」
そんなジンを放っておいて、エステルたちは廊下へと出た。

「は～……とんでもない事になったわね。ますます、女王様に会って事情を聞きたくなってきたわ」
「まずは約束通り、ヒルダ夫人に会いに行こう。陛下に面会する段取りをつけてくれているはずだよ」
「ん、りょーかい」
エステルたちはヒルダ夫人の約束通り、侍女の控室に向かった。

侍女の控室に行こうとした時、階段から男性の声がした。
「おや、君たちは……」
「あ……！」
「リシャール大佐……」
階段から上がってきたのは、リシャール大佐だった。ついでにカノーネ大尉も後ろにいた。
「フフ……。エステル君とヨシュア君か。こうして面と向かって話すのは初めてではないかな？」
「え……」
「最後に言葉を交わしたのはダルモア市長逮捕の後でしたね。でも、大佐が僕たちのことを覚えているとは思いませんでした」
「交わした言葉は少なかったが君たちは非常に印象的だったからね。気になって調べてみたら驚いたよ。まさか、カシウス大佐のお子さんたちだったとはね……」
「そ、その事も知ってたんだ」
「はは、伊達に情報部を名乗っているつもりはないよ。……カシウスさんには彼が軍にいた時にお世話になった。それこそ……言葉では言い表せないほどね」

「……」
「どうだろう、これから少し話に付き合ってくれないだろうか？君たちとは、前から一度、個人的に話をしてみたかったのだ」
「ええっ！？」
エステルは予想もしない言葉に驚いた。
「……」
「あ、あの、大佐殿……。これから公爵閣下との打ち合わせがあるのでは？」
「少しくらい遅れても構わんよ。そうだな、話すのだったら奥の談話室を借りるとしようか。アルコール抜きのカクテルでも振舞わせてもらうよ」
「そ、それでしたらわたくしがお作りしますわ！」
カノーネ大尉が慌てて言った。
「いや、それには及ばない。君は公爵閣下の所に行って私が遅れる旨を伝えてくれたまえ」
「りょ、了解しました……」
カノーネ大尉がしぶしぶ納得した
「……（ギロリ）」
「（ゾクッ……）」
振り向き際にカノーネ大尉はエステルを睨んだ。
「……それでは失礼しますわ」
「さてと、私たちも談話室に向かうとしようか。それでは付いてきたまえ」
リシャール大佐は足早に談話室に向かってしまった。
「あ……。（ね、ねえヨシュア、どうしよう？）」
「（付き合うしかなさそうだね……。少し遅れそうだけど夫人の所には後で行こう）」
エステルたちは逃げる事も出来そうもないので仕方なく付き合うことにした。

―グランセル城　2階　右翼　談話室

「……カシウスさんと出会ったのは私が士官学校をでたばかりのことだ。当時、彼が率いていた独立機動部隊に配属されてね……。それ以来、彼が軍を辞める時まで公私にわたってお世話になったんだ」

「ふ、ふーん……そうだったんですか……」

エステルはナイアルから借りたファイルで既に知っていたので適当に相槌を打つしかなかった。

「えっと、その頃のお父さんって大佐から見てどんな感じでした？」

何とか別の事を聞こうとしたエステル。

「一言でいうと『英雄』だったかな。『剣聖』とまで言われた技の冴え。あらゆる戦況に柔軟に対応できる立体的かつ多面的な指揮能力……。単なる戦術に留まらない、高度な戦略レベルでの部隊運用……。どれをとっても並ぶ者はいなかった」

「な、なんだか別の人の話を聞いてるみたいなんですけど……」

「父が軍を辞めるまでというとあの《百日戦役》の時も一緒に？」

「ああ……。カシウスさんの下で戦ったよ。今でも覚えている……。彼が立てた奇跡のような作戦を実行した時の熱気と興奮を……。あの時のことを話し始めるといくらあっても時間が足りないからまたの機会にさせてもらうが……。ただ、これだけは断言できる。あの時、カシウス・ブライトという男が王国軍にいなかったら、このリベールはエレボニアに吸収合併されていただろう」

リシャール大佐がきっぱりと言い切った。

「う、うそ！？さすがにちょっと信じられませんけど……」

「フフ、信じられないような事を成し遂げたから『英雄』なのさ。もっとも、戦後すぐに退役して女王陛下の勲章すら固辞されたから名前が知られることはなかったが……。今でも、一部の軍人の間ではカシウス大佐の名は英雄の代名詞だ」

「うー……。あのヒゲ親父、そんな事、一言も教えてくれてないしっ！」

「まあ、娘にわざわざ語って聞かせるような話じゃないさ。父さんを責めたら可哀想だよ」

「か、可哀想なのはあたしの方！……って、ヨシュアってばあんまり驚いてないみたいだけど。もしかして……今の話、知ってたりするわけ？」

「リシャール大佐が父さんの部下だったことはさすがに知らなかったけど……。まあ……おおむねのところは」

「あ、あんですって～！？それじゃあヨシュアも共犯！？」

「お、落ち着いてよ、エステル。僕だって別に、父さんから教えてもらったわけじゃないよ。それに父さんから、君にわざわざ知らせる事はないって言われたんだ」

「う～、納得いかないわね～……。本当にもう、帰ってきたらとっちめてやるんだからっ！」

「フフ……」

リシャール大佐がその様子を見て笑った。

「えっと、その……」

「す、すみません。話の腰を折ってしまって」

「いや……。君たちを見て少し安心した。カシウスさんが軍を辞める時、私は必死に引き留めたものだが……。どうやらその選択は彼にとって正解だったらしい。君たちが側にいたのなら奥さんを亡くされた哀しみからきっと立ち直れただろうからね」

「リシャール大佐……」

「……」

「さてと……付き合ってくれてありがとう。あまり公爵閣下を待たせるわけにはいかないから私はこれで失礼させてもらうよ」

リシャール大佐はそう言って席を立ちあがった。

「あ……はい」

「すみません、僕たちの方が話を聞かせてもらうばかりで……」

「いや、君たちは一番知りたかったことを教えてくれた。……これで未練はなくなったよ」
リシャール大佐が目を伏せた。
「え……？」
「それはどういう……」
「はは、近いうちにまた会う機会もあるだろう。その時には、カシウスさんとも一緒に話せるといいのだが……」
よく分からない言葉を残してリシャール大佐は出ていった。
「えーと……。今ここに居たのって本当にリシャール大佐だっけ？」
「あのね……なにを寝ぼけてるのさ」
「だ、だってあんな風に父さんの事を話すなんて……。なんていうか……イメージと違ったっていうか」
「……確かに。ただの悪人ではなさそうだね。でも、それとは別に彼が何かを企んでいるのも確かだ。父さんの事は、この際分けて考えなくちゃいけないと思うよ」
「うん……それはそうなんだけど……」
「イヤな言い方をするけど……。僕たちに見せた親しさだって何かの目的があるのかもしれない。彼みたいな情報将校にとって僕たちみたいな子供を誑かすのは朝飯前だろうからね」
「さ、さすがにそれは言いすぎなんじゃないの？」
「うん……そうだね。疑うのは僕の役割だ。君は、自分の直感を信じていた方がいいと思う」
「え……」
「ただ、あらゆる可能性に備えて油断だけはしないで欲しいんだ。遊撃士の仕事というのは……たぶんそういうものだと思うから」
「……。うん、わかった。ちゃんと心に留めておくわ」
「……ありがとう、エステル」
「や～ねえ。何でヨシュアが礼を言うのよ。それよりも、さっさとヒルダさんの所に行きましょ。たぶん、待ちくたびれてるわ」

「そうだね……。メイドさんたちの詰所に行こうか」
予定外の事があったが、エステルたちはすぐに侍女の控室に向かった。

第5章　王都撩乱（27）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよアリシア女王と面会することになる！

第5章　王都撩乱（28）（前書き）

大佐から解放され、ヒルダ夫人のもとに向かう。

第5章　王都撩乱（28）

―グランセル城　1階　侍女の控室

「エステル殿、ヨシュア殿。お待ちしていましたよ。ずいぶんと遅うございましたね？」

「えへへ……ごめんなさい。なんかリシャール大佐に捕まっちゃって……」

「大佐に……ですか？」

「僕たちの父のことについて昔話を聞かせてもらいました。こちらの動きについては気付かれていないと思います」

「そうですか……。紹介状によるとあなた方は、カシウス殿のお子さんということでしたね。リシャール大佐が感慨を抱くのも分かる気がします」

「あの、ヒルダさんも父さんを知ってるんですか？」

「昔は、モルガン将軍の副官として王城によく来てらっしゃいました。亡き皇子……陛下のご子息のご学友だったとも聞いております」

「亡き皇子って……」

「クローディア姫のお父上にあたるかたですね」

「ええ、15年前の海難事故でお亡くなりになられました。皇子さえ生きてらっしゃればこのような事態は起こらなかったでしょうに……」

ヒルダ夫人が目を伏せて言った。

「え……」

「……起きてしまったことを悔やんでも仕方ありませんね。夜も更けてまいりました。早速、支度をしていただきます。シア、いらっしゃい」

出てきたのは、案内係のシアだった。

「あれ、あなたは……？」

「確か、シアさんとおっしゃいましたね？」

「ど、どうも……エステル様、ヨシュア様。事情は伺わせていただきました」
「この子のことは信用してくださって結構です。姫様が城にいらっしゃる時にお世話をしている侍女ですから」
「姫様って……クローディア姫のことね」
「それなら問題ありませんね」
「きょ、恐縮です……。では、用意した制服に袖を通していただけますか？リボンやカチューシャなど細かい所は、わたくしが整えさせていただきます」
「へ……」
「あの……ひょっとして？」
ひょっとしなくても間違いなく。
「ええ、エステル殿には侍女と同じ恰好をしてもらって女王宮に入っていただきます。多少、髪をいじらせて頂ければ、見張りにも気づかれないでしょう」
「な～るほど……」
「たしかに、制服というのは個性を隠しやすいですからね。潜入するにはもってこいかもしれません」
「へえ～、メイドさんの制服かあ。リラさんとかを見ていていいなあって思っていたのよね。ヒラヒラしてて可愛いのにすごく動きやすそうなんだもん」
「ふふ、動きやすくないとお掃除の時に困りますから……」
「あ、やっぱりそうなんだ？さっそく着させてもらおっと！」
「嬉しそうだなあ……。はしゃぐのはいいけど陛下に失礼のないようにね。今度ばかりは僕も付いてはいけないからね」
「え、どうして？ヨシュアも着替えるんでしょ？」
「……え」
ヨシュアが心外そうに答えた。
「エステル殿？」
「だってヨシュア、学園祭の劇でお姫様の恰好をしてたじゃない。

ドレスもメイド服と同じでしょ？」
「あ、あれはお芝居じゃないか。女王陛下にお会いするのに女装するなんて、ちょっと……」
「大丈夫、大丈夫。全然みっともなくないから！だってヨシュアのお姫様姿、すっごく綺麗だったもん！」
「ま、また……冗談はやめてよ。あの、ヒルダさんたちからも何とか言ってやってください」
ヨシュアはヒルダ夫人とシアに頼った。
「……」
「……」
ヨシュアをまじまじと見るヒルダ夫人とシア。
「あ、あの……？」
「なるほど……。たしかに問題なさそうですね。シア、たしか姫様のためのヘアピースがありましたね？」
「は、はい……一度も使われていないものが。長い黒髪ですからヨシュア様にもお似合いかと……」
「ちょ、ちょっと……」
ヨシュアに選択の余地はなさそうだ。
「それじゃあ、3対1のファイナルアンサーってことで♪」
「では、こちらにどうぞ。更衣室になっていますので……」
エステルがヨシュアを引っ張った。
「ちょっと待ってよ！僕は着替えるなんて一言も……」
問答無用でエステルはヨシュアを更衣室に連れ込んだ。

「わかった、わかったから……。服くらい自分で脱げるってば……。え……シアさん……化粧までするんですか……！？」
中では大変なことが起こってるそうだ。
「はあ……最近の若い子たちときたら……」

～数十分後
エステルとシアが更衣室から出てきた。
「まあ……」
「じゃ～ん。えへへ、どーでしょうか？」
「うふふ……とってもよくお似合いですわ」
「城働きに来たばかりの活発で朗らかな侍女見習い……。そんな説得力は十分ありますわね。髪も下ろしていますから気付かれることはないでしょう。何でしたらこのままグランセル城で働きますか？」
「ゆ、遊撃士の仕事もあるからそれはちょっと……。あ、それよりも。ちょっと、ヨシュア。早く出てきなさいってば～」
エステルが更衣室に隠れっぱなしのヨシュアを呼んだ。
「はあ……。どうしても出ないと駄目かな？」
「だーめ。ウダウダ言ってると引きずり出しちゃうわよ？」
「わかったよ……。もう、しょうがないな……」
そう言って、ヨシュアはしぶしぶ出てきた。
「……」
ヨシュアは何も言わない。
「これはまた……。怖いくらいにお似合いですね」
「ですよねぇ！？まったく、女のあたしよりもサマになってるというのは一体どーゆうことなのかしら」
「うふふ……。お化粧のしがいがありましたわ」
「もういいです……何とでも言ってください……」
哀しそうに言うヨシュア。
「さて……。準備は整ったようですね。それではこれから女王宮へと案内させて頂きます。あくまで侍女見習いとして扱いますので、そのおつもりで」
「あ、はい、わかりました。ゴクッ……いよいよ女王様と会えるのね」
「うん……ここが正念場だね。気を引き締めて何とか女王宮に入らないと」

「プッ、その恰好でシリアスに言っても似合わないかも……」
エステルが吹き出した。
「わ、悪かったね！シリアスが似合わなくて！こんな恰好をさせといてよくもまあ、ぬけぬけと……」
「ゴメンゴメン。そんなに拗ねないでよ。今度、アイスクリームでもオゴってあげるからさ～」
「ふん、君じゃないんだから食べ物でごまかされたりしないよ」
「あ、あたしがいつ食べ物でごまかされたのよっ？」
「うふふ……本当に仲がいいんですのね」
「時間がありません……。さっさと女王宮に行きますよ」
エステルたちはヒルダ夫人に連れられて女王宮に向かった。

―女王宮　入口
「これはヒルダ夫人……」
「こんな遅い時間に女王陛下に御用ですか？」
特務兵たちがヒルダ夫人に尋ねた。
「陛下に頼まれていた紅茶と食器類をお持ちしたのです。このような事態になって陛下も何かと不自由なさっていらっしゃるようですからね」
「これは手厳しい……」
「おや……。見たことのない顔ですが、そちらの侍女さんたちは？」
「公爵閣下の命令で補充した新米の侍女見習いです。今日、城に入ったばかりです」
「ほう……」
「ふーむ。さすがに可憐ですなぁ」
「ど、どうも……」
「……（ペコリ）」
「おや……？なんとなくどこかで見たような……」

特務兵の1人がエステルの顔を伺った。
「（やばっ……！）」
「……年頃の娘を、そんな風にジロジロ見るとは何事ですか。もしや、良からぬことを考えているのではないでしょうね？何かあったら、公爵閣下や大佐殿に抗議させてもらいますよ」
「と、とんでもない！」
「王国軍の精鋭たる我々がそのような事は……」
慌てて訂正する特務兵たち。
「ならばよいのです。ところで、いいかげん、通していただけないでしょうか？」
「これは失礼しました！」
「どうぞ、お通りください」
特務兵たちが女王宮の道を開けた。

―女王宮
「ふ～、緊張しちゃった。ありがとう、ヒルダさん。おかげで助かっちゃいました」
「鮮やかなお手並みでしたね」
「お役に立てて幸いです。さて……何でしたら陛下に会う前に着替えますか？特に気にしないのであればそのままご案内しますが……」
「別にあたしはこのままでも……」
「是非、着替えさせてください！」
ヨシュアがきっぱりと言った。

―女王宮　部屋の一つ
「まったくもう。恥ずかしがり屋なんだから。あのままでも良かっ

たじゃない？」
「信用にもかかわるからそういうわけにもいかないよ。ところで、ヒルダさん。この部屋はひょっとして……」
ヨシュアはこの部屋が誰のものなのか気付いているようだ。
「はい……。クローディア様のお部屋です。もっとも、普段は王城に住んでいらっしゃらないのでほとんど使われていませんが……」
「へ～、そうなんですか。でもお姫様って、たしか女王様の看病をしてるって聞いたような……」
「……」
「やはりそれも偽情報ですか」
「詳しい事は陛下にお聞きになるといいでしょう。女王宮の2階にあるのがアリシア女王陛下のお部屋です。それでは参りましょう」

―女王宮　2階　アリシア女王の部屋
「陛下、失礼します。先ほどお話ししたエステル殿とヨシュア殿をお連れしました」
ヒルダ夫人がノックした。
「……ご苦労さまでした。どうぞ、入って頂いて」
中から老婦人の声が聞こえてきた。
「かしこまりました。私はここで待たせていただきます。さあ、お2人はどうぞ中へ」
「は、はい……！」
「失礼します……」
そして、エステルとヨシュアはアリシア女王の部屋に入った。

第5章　王都撩乱（２８）（後書き）

この小説の感想等お待ちしています。できれば一言や評価を付けてください。励みになります。

＞次回予告＜

いよいよアリシア女王のもとにたどり着いたエステルとヨシュア。

そこで、今までの経緯を話し合うことになる。

第5章　王都撩乱（29）

―女王宮　アリシア女王の部屋

「あ……」

窓際に一人の老婦人―アリシア女王がいた。

「ふふ……。ようこそいらっしゃいましたね。わたくしの名はアリシア・フォン・アウスレーゼ。リベール王国、第26代国王です」

「あ、あの……。エステル・ブライトです。遊撃士協会の準遊撃士です」

「同じく、準遊撃士のヨシュア・ブライトといいます。お初にお目にかかります」

「エステルさんとヨシュア殿ね。あなたたちに会えるのを本当に楽しみにしていました。大したもてなしはできませんが、お茶の用意くらいはできます。どうぞ、ゆっくりして行ってくださいな」

そして、エステルとヨシュアはアリシア女王にラッセル博士のことを含め、今までのことを話した。

「そう……。ラッセル博士はそんな事を。あらゆる導力現象を停止させる漆黒のオーブメント……。そんなものを大佐は手に入れているのですか……」

「博士は、女王陛下ならばリシャール大佐がそれを何に使うか分かるかもしれないと言いました。何か……心当たりはありますか？」

「……。ひとつだけ心当たりがあります。ですが、大佐がそれを知っているとは思えません。わたくしの思い過ごしであるといいのですが……」

「あの……その心当たりっていうのは？」

「……あなたたちにならお話ししても構わないでしょうね」

アリシア女王が目を開いて話し始めた。

「十数年前、この王都の地下に巨大な導力反応が検出されたのです。その調査にあたってくれたのが中央工房のラッセル博士でした」
「巨大な導力反応……」
「王都の地下ということは地下水路の近辺でしょうか？」
「いいえ、水路よりもさらに深い地下から検出されたようです。博士は、いまだ機能を失っていない古代文明の遺物が埋まっているのではないかと仰っていました」
「古代文明の遺物って……」
「《アーティファクト》と呼ばれる古代導力器のことだね。大半は、塔の頂上の装置みたいに機能が死んでしまっているけど……。まれに、ダルモア市長の家宝のように機能が生きている物もあるみたいだ」
つまり、《四輪の塔》の頂上みたいな機能停止しているアーティファクトもあれば、まれに機能停止せずに動く《封じの宝杖》みたいなアーティファクトもあるということである。しかし、機能が生きている物は非常に稀らしい。
「そんなものが王都の地下に……。あ、それじゃああの《ゴスペル》ってのは……」
「埋まった遺物の機能を停止させるために使われる……。その可能性があるということですね？」
「ええ……。ですが、その遺物がどんなもので何のために埋められたものかははっきりしていないのです。ラッセル博士の調査自体も非公式で行われたものですし……。大佐がどこで存在を知ったのかわたくしには不思議でなりません」
「そうですか……。いずれにせよ、良くない事が起こる可能性がありそうですね」
「まったく、ちょっと見直したのにロクな事を考えていないわね……。みんなに迷惑がかかるんだったらまさしく遊撃士の出番だわ！何とかして大佐を阻止しないと！」
エステルが意気込んだ。

「ふふ……。さすがは……カシウス殿のお子さんたちね」
「！！！」
「陛下も父と面識がおありだったのんですか？」
「亡くなった息子の友人でしたし、王国を救った英雄ですからね。軍を辞めて遊撃士になってからも依頼を通じてお世話になりました」
「そ、そうだったんだ……」
「それは知りませんでした……」
「ふふ、彼の性格を考えれば知らないのも無理はありませんね。ひょっとして、１０年前の戦争で彼がどのように活躍したのか……そのこともご存じないのかしら？」
「えっと……詳しいことはあんまり……」
「ならば、これはわたくしの役目なのかもしれませんね……。エステルさん、ヨシュア殿。少々、年寄りの昔話に付き合っていただけませんか？」
「あ……はい、もちろん！」
「拝聴させていただきます」
そして、１０年前の《百日戦役》の話が始まった。

「１０年前の春のことです……。エレボニアの帝国の南部である痛ましい事件が起こりました。いまだ原因が分かっていないため事件についての説明は省かせてもらいますが……。その事件をきっかけに帝国はリベールに宣戦布告をしたのです。後に《百日戦役》と呼ばれる不幸な日々の始まりでした。帝国軍は、宣戦布告と同時に大兵力を持ってハーケン門を突破……。リベールは、王都を除いて瞬く間に全土を占領されました。侵攻してきた兵力は、王国軍のおよそ3倍だったと言われています。カルバードからの援軍も間に合わず……もはや王都が占領されるのも時間の問題かと思われました。しかし、開戦から2ヶ月後……誰もが予想しなかった形で戦局が大

きく変化したのです。当時開発されたばかりの警備飛行艇が各地を結ぶ関所を奪回し、帝国軍の連絡網を断ち切りました。そして、レイストン要塞から王国軍の総兵力が水上艇で出撃し、各地方を奪還していったのです。ツァイス、ルーアン、ボース、ロレント……。各地を占領していた帝国軍の師団は補給を断たれ、各個撃破されました。この反攻作戦を立案した人物こそカシウス・ブライト大佐――モルガン将軍の右腕であり、リシャール大佐の上官だったあなたたちのお父様だったのです。その後、遊撃士協会と七耀教会の仲裁もあってようやく戦争は終結を迎えました。しかしこの時、カシウス殿は大切なものを失っていたのです。それはレナ・ブライトさん……エステルさんのお母様でした。あの時計塔は、反攻作戦によって追い詰められた帝国軍師団の悪あがきによって破壊されたのです。そして……あとはあなたも知っている通り……カシウス殿は、奥様の死すらも見届けることができませんでした……」

「……そんな……。そんな事情だったなんて……」

「……自分が立てた作戦が結果的に奥様を死なせてしまった。その自責の念から、カシウス殿は軍を辞めて遊撃士の道に入りました。残されたあなたの側にいるために……。そして今度こそ、自分の手で愛する人々を守れるように……」

「バカよ……父さん……。父さんのせいでお母さんが死んじゃっただなんて……。そんな事あるわけないのに……」

「エステル……」

「ええ、そうですとも……。全ては、大切な民を守れなかったこの力なき女王の責任なのです。ごめんなさい、エステルさん。お母様を守ることができなくて……。そのことを……ずっと謝りたいと思っていました」

「あ、謝る必要なんてありません！女王様は、戻ってきた平和をず

っと守ってくださった……。父さんたちは必死になってこの国を守ってくれた……。お母さんは命がけであたしのことを守ってくれた……。それで……充分だと思うんです……」

「エステルさん……ありがとう、優しい子ね……。あなたに会うことが出来て……本当に良かった……。今、心からそう思えます」

「女王様……」

「でも、だからこそ……だからこそ、あなたには危険な事をして欲しくはありません。これ以上、今回の事件に関わりを持って欲しくはないのです」

「え……！で、でもあたしたち、ユリアさんに女王様の助けになるように頼まれて……」

「ありがとう。その心だけ頂いておきますね。カシウス殿の留守中にあなたに万が一のことがあったら今度は何とお詫びしていいのか……。どうか、ロレントのお家に帰ってお父様の帰りを待っていてください」

「で、でもっ……！」

「ですが、女王陛下……。父カシウスが取り戻し、陛下が守り続けた平和が今まさに揺らごうとしています」

「ヨシュア殿……」

「《ゴスペル》の件もそうですが……。このまま大佐の狙い通り公爵閣下が国王となった場合、その平和はどうなるんでしょうか。その事を考えて頂きたいんです」

「……」

「あ、あの、女王様……。あたしたち、遊撃士になって父さんの代理で仕事をしました。それから、空賊事件に関わって手紙が届いて、変な小包を開けて、そのまま各地を旅してきて……。まるで、父さんに背中を押されてここまで来たような気がするんです。だから……あたしも守りたい。平和に暮らせる幸せな毎日を……。今まで知り合ったあたしの大好きな人たちを……。女王様や、お母さんたちみたいにあたしなりの方法で守りたいんです！」

エステルが力強くアリシア女王に言った。
「エステルさん……。……。本当に……あの子の言う通りだったわね」
「えっ……」
「わたくしも覚悟を決めました。エステルさんたちを通じて遊撃士協会に、あることを依頼させてもらおうと思います」
「女王様……！」
「陛下……何なりと仰ってください」
「依頼内容は、情報部によって囚われている方々の救出です。これは、わたくしの孫娘であるクローディアのことも含みます」
「そっか、やっぱりお姫様もどこかに捕まってるんですね……」
「ええ……。思えば、今回のクーデターはわたくしがあの子を次期国王として推そうとした事から始まりました」
「デュナン公爵ではなく、ですね」
「ええ、こういっては何ですが、我が甥ながらデュナン公爵は色々と問題の多い人物でした。対して未熟ではありますが孫娘には光るものがありました。王国の未来を考えた結果……わたくしはクローディアを推そうと心に決めたのです」
「えっと、姫様のことはほとんど知りませんけど……。それって、どう考えても正しい判断だと思いますよ」
「ですが、いつの世にも女性が権力を持つことに反対する向きはあるものです。ましてや、大国から侵略を受けた記憶もまだ新しい現在……。2代続けての女王による統治が結果的に国を弱くしてしまう……。そう考える人物が現れたとしても何ら不思議ではなかったのです」
「なるほど……。それがリシャール大佐ですか」
「その通りです。彼は、わたくしがクローディアを次期国王に推そうとしていることをいつのまにか掴んでいました。そして、その事実を公爵に伝えて今回のクーデターを決行したのです。全ては、公爵を陰から操り、リベールを周辺の大国に劣らぬ強大な軍事国家に

するために……」
「なるほど……。ようやく事件の全貌が見えてきました」
「強大な軍事国家にする……。それって具体的にはどうするの？」
「色々考えられるよ。税率を上げて軍事費を拡大したり……大量破壊を目的とした導力兵器を開発したり……大規模な徴兵制を採用したり……リベールでは認められていない猟兵団（イェーガー）との契約を合法化したり……」
「そ、そんな……」
「まさに同じようなことを大佐はわたくしに要求しました。それは、純粋な愛国心から来る発言だとは思えたのですが……。わたくしは、どうしてもそれが正しいとは思えなかったのです。国を守っているのは軍事力だけではありません。他国と協調していく外交努力もそうですし……。技術交流や、経済交流を通じて諸国全体を豊かにする事だって国を守ることに繋がるはずです」
「……まさに陛下のおっしゃる通りだと思います」
「うんうん！お互いが信じ合わなくちゃ！」
「ですが、大佐はその考えを女々しい理想論と断じました。そして、クローディアの安全とひきかえに退位を要求したのです」
「！！！」
エステルはそれに愕然とした。
「多くの者が、家族を人質に取られ大佐に逆らえなくされています。ですが、わたくしは女王です。肉親への情けのために国の未来を売り渡すことはできません。ただ、そうは言ってもあの子はわたくしのたった一人の孫娘……。見殺しにはしたくないのです」
「女王様……どうか安心してください！」
「依頼の旨、しかと承りました。必ずや、姫殿下を含めた囚われの方々を救出いたします」
「ありがとう……エステルさん、ヨシュア殿。これで、大佐の脅しにも最後まで屈せずにすみそうです」
「あ、あの！他にも依頼はないんですか？《ゴスペル》の件もある

し……。ここから女王様を逃がすことだって不可能じゃないと思うんです！」

「ありがとう、エステルさん。ですが、わたくしが逃げたところで事態が変わるわけではありません。それと、《ゴスペル》に関しては幾つか気になることがあるのです。わたくしから、大佐に真意を問いただしてみようと思います」

そして、アリシア女王との面会は終わった。

第5章　王都撩乱（29）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

うまく面会が済んだエステルたちだが、そう簡単に夜は終わらない……。

第5章　王都撩乱（30）

―クローディア姫の部屋

エステルとヨシュアはメイド服に着替えた。

「はあ、何というか素敵な方だったわね～。優しげなのに、芯が強くてとても毅然としていて……。あたしも、歳を取るならあんなカッコイイお婆ちゃんになりたいな」

「カッコイイって……。でも確かに、一国を治める風格を感じさせる方だったな」

「うん……。本当はクーデターを阻止して女王様を助けたいんだけど……」

「さすがにそれは、遊撃士の領分から外れているからね……。まずは、僕たちの力で出来ることからやっていこう」

「うん……そうね。それにしても、女王様から父さんのことを聞かされるなんて夢にも思わなかったわ……。まだ、あたしの知らないことがあったりするのかしら？」

その時、部屋がノックされた。

「エステル殿、ヨシュア殿。もう支度は終わりましたか？」

ヒルダ夫人だ。

「あ、はい」

「それでは急いで控室に戻ることにしましょう。もう１１時過ぎ……あと少しで日付が変わります」

ヒルダ夫人が慌てている。こんなに長居していると特務兵に疑われる可能性がある。

「わわっ、もうそんな時間？」

「ずいぶんと長いあいだ、陛下とお話していたからね。これ以上、長居したら見張りたちに怪しまれそうだ」

エステルたちは急いで女王宮を出た。

―女王宮　入口
「ヒルダ夫人。今日はもうお帰りですか？」
見張りの特務兵が尋ねてきた。
「ええ、そうさせて頂きます。くれぐれも陛下に失礼のないようお願いします」
「これは手厳しい……。ですが、どうかご安心を。我々は愛国の士でありますから」
「頼もしいことで何よりです。それでは、私たちはこれで失礼させて頂きます」
「ど、どーも……」
「……失礼いたします」
ヒルダ夫人に連れられて、女王宮を後にしようとした時、エステルたちは特務兵たちに声をかけられた。
「ああ、お嬢さんたち」
「え……」
「そういえば名前を聞いてなかったと思ってな。一応聞かせてもらえるか？」
「えっと、その……。レナっていいます」
エステルはとっさに思い浮かんだ名前を言った。
「ほう……なかなか良い名前だな。あんたの雰囲気にも合っている」
「え、その……ありがとうございます」
「で、そちらの黒髪のお嬢さんは？」
「……カリンと申します」
「カリンというのか……。何というか、可憐な名前だ」
「ありがとうございます。……私もこの名前はとても気に入っています」
「そうか……。そ、そうだ。自分は特務部隊の……」
特務兵の1人が慌てて名乗ろうとしたが、

「そのくらいにして下さい。これ以上は下心ありと見なしますよ」
ヒルダ夫人にさえぎられた。
「いや、自分たちは……」
「……（ギロッ）」
有無を言わさない鋭い目つき。
「……どうぞ気を付けてお戻りください」
結局、以前と同じ結果に終わった。

―グランセル城　2階　右翼
「はあ……。ヨシュアってばモテモテね。あの連中、ヨシュアが名乗ったら目の色変えてたもんね～」
「そ、そんなこと無いってば。君だって結構、話が弾んでいたじゃないか」
「あたしの時は、あの連中、別に緊張してなかったもん。ふう、何だかちょっと自信がなくなっちゃったなあ」
「え……？」
「ヒック……。何を騒いでおるのだ……」
突然、談話室の扉が開き、デュナン公爵と執事フィリップが出てきた。デュナン公爵は酒で酔っ払っている。
「これは公爵閣下……」
「何だ、女官長ではないか……。おや……なんだ、その侍女たちは……。ヒック……見たことのない顔だが……」
「新しく入った侍女見習いのレナとカリンと申します。まだ城内に不慣れなもので色々案内しているところです」
「おや……？……」
執事フィリップがエステルとヨシュアの顔を伺った。
「（あっ……気付かれた？）」
「（……まずいな。この人とは何度か会っているから気付かれても

おかしくない……）」
エステルとヨシュアはばれるのを覚悟した。
「なんだ、フィリップ。まじまじと顔を見つめて……。わはは、堅物のお前にしてはずいぶんと珍しいではないか」
「これは失礼しました……。わたくしの姪に似ていたので一瞬、目を疑ってしまいまして。お嬢さん方。申し訳ございませんでしたな」
「あ、いえいえ」
「どうかお気になさらずに……」
「ふむ、見ればどちらも中々の上玉ではないか……。特に栗色の髪の方は健康的ですこぶるいいのう」
「（ぞわわっ……）」
エステルは身を震わせた。
「黒髪の方は、もう少々、胸に張りが欲しい所だな……」
「……きょ、恐縮です」
「ふむ、そうだな……。レナとやら！今夜の伽を申し付けるぞ！」
「！！！」
ヨシュアがこのことに驚いた。顔つきもこわばった。
「へ……？」
事の重大さにわけが分かっていないエステル。
「こ、公爵閣下！？」
執事フィリップも驚いている。
「（ねえ、伽ってなに？）」
「（えっと、何て言えばいいのか……）」
「閣下、いくらなんでもお戯れが過ぎますわよ……。城勤めの侍女は全て女王陛下に仕える身です。そのことをお忘れですか？」
「わかった、わかった……。まったく冗談の通じないヤツだ。ヒック、どうせ1週間後にはこの城は私のものになるのだ。その時までのお楽しみにとっておくとしようかのう……」
「……」
ヒルダ夫人がデュナン公爵を冷ややかに見ている。

「か、閣下！いい加減になさいませ！暴飲暴食ならともかく、色に走るなど言語道断！このフィリップ、一命を賭してお諫めさせていただきま……」

「だから冗談だと言っているであろうが！もういい！今夜はとっとと休むぞ！」

「さ、さすがは閣下でいらっしゃいます。そちらが閣下の部屋です。足元にお気を付け下さい」

デュナン公爵がふらふらと歩いていると、振り返ってエステルに声をかけた。

「うい～……そうだ、レナとやら。困ったことがあったら遠慮なく私に相談するといい。次期国王みずから親身に相談に乗ってやろう」

「あは……はは……どうもありがとうございマス」

棒読みで答えるエステル。

「わはは、愛いやつじゃ。うむ、愉快愉快！」

そういいながら部屋に入っていたデュナン公爵。

「どうもお騒がせしました。多分、閣下は明日の朝になれば何も覚えてらっしゃらないでしょう。どうかご安心くださいませ」

「……そう願いたいものですわね」

ヒルダ夫人が答えた。

「本当に申しわけありません。夫人、お嬢様がた。それでは失礼いたします」

執事フィリップもデュナン公爵の部屋に入っていった。

「ふう、あの男ときたら……。相変わらず余計な苦労を背負いこんでいるようですね……」

「あれ、ヒルダさんってフィリップさんと知り合い？」

「幼い頃からの知り合いです。もっとも今では、仕える方も立場も隔たっていますが……」

「そうだったんですか……」

「確かにフィリップさんって見るからに苦労性って感じよね。公爵が大佐に唆される状況にハラハラしてるんじゃないかしら」

「その可能性は高そうだね……。そういえば、エステル。君だってモテてるじゃないか。公爵は君の方が好みだってさ」
「ぞわわっ、何だかちっとも嬉しくないんですけど……。あ、ところで結局、『トギ』って何だったの？」
「そ、それは……」
ヨシュアは答えづらそうにしている。
「エステル殿。そのようなことを殿方に聞いて困らせるものではありませんよ」
「へっ？」
「……お耳を拝借」
ヒルダ夫人はエステルにそっと耳打ちした。
「……」
エステルは顔を真っ赤にしてうつむいている。
「……理解できましたか？」
「あ、あう……。……ハイ……」
ちなみに、伽（とぎ）とはこの場合、夜伽（よとぎ）のことで、女性が男性の寝室で夜の相手をすることです。
「（まったく無防備なんだから……）」
そして、すぐに侍女の控室に戻った。

第5章　王都撩乱（３０）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

デュナン公爵の絡みを抜け、部屋に戻るエステルたちだが……。

第5章　王都撩乱（31）

―グランセル城　1階　侍女の控室

エステルとヨシュアは服を着替えた後、ヒルダ夫人とシアに礼を言った。

「ヒルダさん、シアさん。本当にありがとうございました！」

「おかげで助かりました」

「いえ、これも女王陛下に仕える者として当然の義務です。陛下の依頼についてはどうかよろしくお願いします」

「あ、あの……わたくしからもお願いします……。どうか姫様を……助けて差し上げて下さいませ」

「あ、シアさんって確かお姫様のお付きだったのよね？」

「は、はい……。日頃お仕えできる機会が少ないのが残念ですが……。わたくしのような者まで友として扱ってくださるような、そんな気さくで優しいお方です。囚われの身になられたとお聞きしてからわたくし、夜も眠れなくて……」

「そっか……。絶対に助けるから安心して！」

「それでは、これで失礼します」

エステルとヨシュアは自分の部屋に戻ることにした。

―グランセル城　2階

階段を上がりきったところで、不意に女性の声が聞こえてきた

「……こんな時間に何をしてらっしゃるのかしら？」

《謁見の間》から出てきたカノーネ大尉に見られてしまった。

「あ……！」

「カノーネ大尉……」

「うふふ、こんばんは。いくら招待客とはいえ、あまり感心しませ

んわね。子供が夜歩きするには遅すぎる時間ではないかしら？」
「申しわけありません。城内が珍しく見物していたらつい遅くなってしまって……」
「あら、それは結構だこと。では、３０分ほど前までどこを見物していたのかしら？参考までに聞かせてくれませんこと？」
「えっと……厨房に行っていました」
「あら、おかしいですわね。先ほど見回りをした時には見かけませんでしたけど……」
「そ、それは……」
「まあ、戯れはこのくらいにしておくとしましょうか……。実は、あなたたちが何度かメイド部屋に出入りしているのを見かけたという報告が入っているの。あんな場所を見物するなんておかしいと思いませんこと？」
カノーネ大尉が回りくどく聞いてきた。
「な……！」
「知ってて質問するなんてずいぶん人がお悪いんですね」
「うふふ、誉め言葉として受け取っておきましょう。それで、メイド部屋に何の用事があったのかしら？正直に答えた方がよくってよ」
徐々に退路を断っていくカノーネ大尉。
「それは……」
ヨシュアも逃げる手段がないようだ。
「おお～！エステル、ヨシュア！こんな所にいやがったかぁ～！」
野太い声が聞こえてきたと思ったら、ジンの声だった。
「ジンさん……」
ふらふらとした足取りでジンがエステルたちの所に来た。そして、目の前で手酌をした。
「ぷはぁ～、染みわたるねぇ！」
「うわ、へべれけ……」
エステルが若干ひいた。
「おっと、こりゃあ失礼。誰かと思えば、ベッピンの女士官どのも

ご一緒でしたか。いやあ～、なんと言いますか妙な偶然もあるもんですなぁ」
「そ、そうですわね……」
「それで、どうしました？俺の未熟な弟子どもが迷惑をおかけしましたかね？」
「で、弟子って……」
「いえ、彼らがメイド部屋にしばらくいたそうなので……。保安上の理由で、何をしていたのか聞かせてもらっていたのですわ」
「ああ、そりゃあ、アレですな。ちょうど酒のつまみがなくなって取りに行かせてたんですよ！おい、ヨシュア。なんか食えるもんはあったか？」
「いえ、もう料理人の方々は帰ってしまったみたいで……。侍女の方に聞いたんですけど、すぐに用意できるようなツマミのたぐいはないそうです」
「はあ、仕方ねえな。ツマミ無しで我慢するか……。おっと……いいことを思い付いた」
ジンがカノーネ大尉に近寄った。
「よかったら、俺と酒に付き合ってもらえませんかねぇ。わはは、美人の笑顔は最高の酒の肴（さかな）といいますしなぁ！」
「に、任務があるので遠慮させていただきますわ。先ほどの一件は不問にいたしますけど……。今夜は、もう部屋に戻ってこれ以上出歩かないことね。不審な行動をした場合、取り調べさせてもらいますよ」
カノーネ大尉が一歩引き下がって言った。
「わ、わかりましたってば」
「もう遅いので休ませてもらおうと思います」
「ふふ、素直でよろしい、では……我々はこれで失礼しますわ」
カノーネ大尉と特務兵たちは行ってしまった。
「あらら、フラれちまったか……。仕方ねえ……とっとと部屋に戻るとするかね」

「う、うん……」
「僕たちも一緒に戻ります」

―グランセル城　2階　左翼　自分たちの部屋
「やれやれ……。どうやら上手いことごまかせたみたいだな」
部屋に戻ったとたん、ジンの言葉が元に戻った。
「え……！ジンさん、酔ってたんじゃないの？」
「ありゃ、演技だ演技。酒なんざ一滴も呑んでないぜ」
「うそ！？顔だって赤かったし……」
「気を巡らせて血行を良くし酔ったように見せかける……。東方武術における『気功』というものじゃないですか？」
「ほう、そんな事まで知っているとは驚きだぜ。まあ、困ってたみたいだからちょいと口出しさせてもらった。どうだ、助かっただろう？」
「もー、ジンさんてばほんと人が悪いんだから～。たしかに助かったけど本当に驚いちゃったんだからね」
「はは、悪い悪い。それで、どうだったんだ？」
ふと、ジンが尋ねてきた。
「？？？どうだったって、何が？」
エステルがわけが分からずに尋ね返した。
「決まってるだろう。女王陛下との会見のことさ」
「あ、あんですって～！？ど、ど、どうしてジンさんが！？」
「もしかして、エルナンさんから何か聞いていたんですか？」
エステルとヨシュアは飛び上るほど驚いた。
「受付の兄ちゃんからは何も教えてもらってないぜ。まあ、カマをかけさせてもらったというところかねぇ」
「カマって……」
「……何の情報もなしにそんな憶測はできませんよ。ジンさん……

あなたは何を知っているんですか？」
ヨシュアが冷静にジンを見た。
「ふふ……。ようやくコイツをお前さんたちに見せられるな」
ジンは一通の手紙をエステルに渡した。
「て、手紙……？」
「この筆跡は……」
「まあ、とりあえずそいつを読んでみてくれ。だいたいの事情は判るはずだ」
「う、うん……」
エステルは手紙を開いて読み始めた。

「拝啓、ジン・ヴァセック殿。
ご無沙汰しているがお元気だろうか。急いでいるので、ざっくばらんな書き方になることを許して欲しい。実は、猟兵団（イェーガー）がらみの事件で帝国方面に向かうことになった。しかし、リベール国内でも妙な勢力が動き始めているらしく、若手だけに任せるのは少々心許ない。そこで君に頼みがある。私の留守中、リベールの来て何かあったら若い連中を助けてもらえないだろうか？君はリベールが初めてらしいから物見遊山しながらでも構わない。女王生誕祭の前には、外国人も参加できる武術大会も開かれるからいいカモフラージュになるだろう。突然の話で戸惑われると思うが、もし手が空いていたらお願いする。女王生誕祭までには戻るからその時にはまた、一緒に呑もう。
カシウス・ブライト
追伸：
もしかしたら私の娘と息子に会う機会があるかもしれない。ギルドの見習いをやっているので、その時は遠慮なく鍛えてやってくれ。
少々の事なら、手を貸さずに自分の力で切り抜けさせてほしい」

「……こ、これって……」
「ジンさんは、父に頼まれてリベールに来たんですか……。そして父は今……エレボニアの方にいるんですね」
「まあ、そういう事になるな」
「そういう事になるなって……。よ、要するにジンさん、父さんとグルだったんじゃない！」
エステルがジンを睨んだ。
「グルとは人聞き悪いねえ。カシウスの旦那には、あの人がカルバードに来た時に色々とお世話になったんだ。いつか借りを返したかったからこの手紙は渡りに舟だったのさ」
「そうだったんだ……」
「いつ僕たちが父の子供だと判ったんですか？」
「最初に会った時にエステルが棒術具を持っていたからなんとなくピンと来てな……。キリカに聞いて確信したわけだ」
「まったく、一言くらい教えてくれてもよかったのに……。あたしたち、父さんの行方が判らないでずっとヤキモキしてたんだからね」
エステルがむっとした。
「それについては悪いと思っている。ただ、文面からカシウスの旦那が帝国に行くことを隠したがっているような気がしてな……。しかし、どうやらお前さんたちだけでかい仕事をやり遂げたみたいじゃないか？」
「あ、うん……。ねえ、ヨシュア。もう話しちゃってもいいよね？」
「うん、こうなったら事情を話した方がよさそうだ。僕たちだけで済ませるにはあまりにも大きい話だからね」
エステルたちは、博士の依頼でアリシア女王に面会したこと……。そして、囚われたクローディア姫を救出する依頼を請けたことを話した。
「なるほどな……。晩餐会での話を聞いてキナ臭いとは思っていたが……。よし、その依頼、俺も手伝わせてもらうぜ」

「え、いいの！？」
「ああ、カシウスの旦那に恩返しする絶好の機会だからな。どうか俺にも協力させてくれ」
「あ、あたしたちの方からお願いしたいくらいだってば～」
「改めて、よろしくお願いします」

一方、リシャール大佐たち……
「こ、ここは……」
「こ、こんな場所が存在していたなんて……」
特務兵たちが周りの空間に驚いていた。そこは底が知れないほど巨大な空間で時代の古さを物語っていた。
「フフ、予想以上の規模だな。ロランス少尉。最深部まで案内できるかね？」
「了解しました……」
その時、魔獣、いや、古代の機械兵器とも言えるものが2体立ち塞がった。
「おおっ！」
「き、機械の化物！？」
「ほう……。古代の人形兵器（オーバーマペット）か」
言うが早いが、リシャール大佐とロランス少尉がそれぞれ一体ずつ一閃で切り伏せた。
「す、凄い……」
「あんな化物を一刀で……」
「フフ、君の方が反応が早かったようだな。やはり、本気の君にはあまり勝てそうな気がしない」
「ご謙遜を。さすがは《剣聖》より受け継ぎし神速の居合い……。しかと見せていただきました」
「ふふ、まだまだ未熟だ。だが、時代の流れはあまりに早く未熟者

の成長を待ってはくれない。何とか、このつたなき手で王国の明日を切り拓かなくては……」

そして、特務兵たちの前で号令をかけた。

「勇者たちよ！大いなる力への道は開いた！我らが愛するリベールの輝ける夜明けはもうすぐだ！諸君の働きに期待する！」

「了解であります！」

「われら特務兵、一丸となって大佐のために尽くす所存です！」

「リベールの栄光のために！リベールの栄光のために！」

特務兵たちの声が広い空間内にこだました。

第5章　王都撩乱（31）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

グランセル城の晩餐会、もといアリシア女王との面会を終え、クローディア姫の救出計画が始まる！しかし、リシャール大佐の計画も水面下で最終段階を迎えていることは、エステルたちが知る由もなかった……。

第5章　王都撩乱（32）（前書き）

いよいよ遊撃士たちの反攻計画が幕を開ける！

第5章　王都撩乱（32）

―遊撃士協会グランセル支部

「状況は理解できました……。エステルさん、ヨシュアさん。本当によくやってくれました。まさか、女王陛下直々の依頼を請けてきてくださるとは……」

エルナンがエステルたちをねぎらった。

「あはは、運が良かっただけよ。でも、ここから先は運じゃ乗り切れないかも……」

「うん……。気を引き締めてかからないとね」

「それが判っているのであれば私から言うことは何もありません。ともかく、これでラッセル博士の依頼は達成ということになりますね。今後も何かとご入用でしょうし、ここで報酬をお渡ししておきます」

エステルはエルナンから依頼達成の報酬を受け取った。

「さて、それから……ジンさん。あなたがカシウスさんに招かれて来てくれたというのは僥倖でした。A級遊撃士としての力をどうか私たちに貸してください」

「ああ、そのつもりだ。旦那への借りを返す以前にこんな事件は放っておけんよ。最後まで手伝わせてもらうぜ」

「さすがジンさん、太っ腹！ところで……A級ってナニ？」

「正遊撃士の実力を表すランクのことだよ。一番下のGからAまでの7段階に分かれているんだ」

「そ、それじゃあA級って最高のランクってことじゃない！ジンさんって……そんな凄い遊撃士だったんだ」

「はは、俺なんざA級の中でも下っ端の方さ。それにA級は、大陸全土で20人くらいはいるんだが……。その上に、実は非公式でS級というランクがあってな。これは国家的な事件を解決した遊撃士にしか贈られない称号なんだ。大陸全土でも4人しかいない」

「ど、どれだけ凄いのか想像もできないんですけど……」
「ハァ、どうやらお前さん、何も知らないみたいだな……。その1人ってのがカシウスの旦那のことだぞ」
「ええーーっ!?ま、まさかヨシュアもしってたんじゃないわよね?」
「ゴメン、実は知ってた。5年前に、共和国での事件を解決してそうなったみたいだね」
「はあ、もう……。いいかげん怒る気もしないわ。王国軍大佐だの、陰の英雄だの剣聖だの、S級遊撃士だの……。そんなに凄かったんだったらとっとと帰って、今回の事件も解決してくれりゃあいいのに……」
「はは、その通りかもしれんな。そもそも、あの旦那がいたらここまで事件が大きくなる前にクーデターを潰していたのかもしれん」
「……」
ヨシュアがその言葉を聞いて目を伏せた。
「ヨシュア、どうしたの?」
「……少し妙だと思ってね。一連の事件は、全部父さんが旅立ってから起こったことだ。まるで、父さんの留守中を狙ってクーデターを起こしたような……そんな印象すら感じるんだ」
「あ……」
「ふむ、旦那が帝国に向かったのもクーデター計画の一環だった……。つまり、そう言いたいわけか?」
「……いえ。さすがに考えすぎでしょうね。あの父さんを、気付かせないように誘導するなんて可能とは思えない……。よほど、父さんの動きを把握してその裏をかける人物じゃない限り……」
「うーん、確かにそうかもね。あたしなんて、近くにいたのに何をしていたのか知らなかったし」
「まあ。旦那の裏をかけるなんて例の大佐にも無理だろうよ。多分、2つの事件が偶然に重なっただけだろうな」
「いずれにせよ、頼みの柱たるカシウスさんの力は借りられません。

ですから、私も覚悟を決めました。これより遊撃士協会・王都支部は緊急体制に入りたいと思います」

「き、緊急体制って……」

「何と言っても、女王陛下直々のご依頼です。規約第三項、『国家権力に対する不干渉』の枷はこの時点で無くなったわけですが……。それでも軍とギルドでは根本的な戦力が違いすぎます。ジンさんはもちろん、王都にいる他の遊撃士全員にも協力していただきましょう」

「なるほど……。確かに、情報部とケンカするくらいならそのくらいの戦力は欲しいわね」

「できれば、他の国内支部にも協力してもらいたいのですが……。今日になって、関所や発着場が軍によって完全に封鎖されました。テロリスト対策という名目です」

完全に各地方は孤立したも同然となったということだ。リシャール大佐の計画が完全に露呈したことも表している。

「ええっ！？」

「実質上の戒厳令ですね……」

「いよいよ、敵さんの動きも本格化してきたってことだな」

「おそらく、潜伏中の親衛隊や我々の動きを封じるつもりでしょう。人質救出は、手持ちの戦力だけで行うしかありません」

「正直、きつそうだけどやるっきゃないわよね！ところで、人質が捕まってるのは具体的にどこか見当がつきそう？」

「そうですね、先程から色々と考えてみたのですが……。やはり一番怪しいのは《エルベ離宮》だと思います」

「《エルベ離宮》……。森の中にある王家の建物ね」

「可能性は高そうですね。テロ対策という名目で特務兵たちが使っていたし……。それに、王族の女性をレイストン要塞のような場所に監禁はできないと思います」

「ただ、相手が軍なだけに確実な情報が欲しいところだな。間違いでしたで済む相手じゃない」

「ええ……その通りです。どちらにせよ、王都にいる他の遊撃士たちをここに集めなくてはなりません。そこで、彼らに声をかけながら情報を集めていただけませんか？たしか、エステルさんたちは雑誌社の記者さんとお知り合いだったはずですね？」

「あ、ナイアルのことね」

「確かに、何か情報がないか聞いてみた方がよさそうだね。それと、潜伏中の親衛隊にもできれば協力を要請したい所です。こちらの線も当たっていただけると助かります」

「ということは……シスターになりすましているユリアさんに連絡を取るのね」

「紹介状の件で助けてもらったし、一度報告した方がよさそうだね。じゃあ、大聖堂も訪ねてみようか」

「王都にいる他の遊撃士はクルツさん、グラッツさん、カルナさん、アネラスさんの４名です。酒場や、普段使うお店、あとホテルなどにいると思います。見かけたら、ここに集まるよう伝えてください」

「うん、オッケー！」

「それでは早速、出かけてきます」

エステルたちは行動を開始した。

第5章　王都撩乱（３２）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

エステルたちは計画遂行のために協力者たちを探し始める！

第5章　王都撩乱（33）

―リベール通信社　2階

「編集長～、やっぱり変ですよ～。2日も連絡がないなんて～」

ドロシーが泣きそうになりながら編集長と話している。

「ううむ、彼のことだからスクープを探して夢中になっとるだけだと思うんだが……。たしかに、戒厳令に近い状況で何の連絡もないのは変だねぇ……。おや……」

編集長がエステルたちに気が付いたようだ。

「ああ、エステルちゃんたちだ！」

「こんにちは、ドロシー」

「失礼します」

「ほー、武術大会に優勝した……。私は《リベール通信》の編集長をやっている者だ。ナイアル君とドロシー君から君らの噂はかねがね聞いとるよ。遊撃士協会のエステル君とヨシュア君だね？」

「あ、こんにちは」

「どうも初めまして。《リベール通信》は毎号、楽しみにさせてもらっています」

「ははは。嬉しいことを言ってくれるねぇ。ところで、ナイアル君に用事があって来たのかい？」

編集長が尋ねた。

「あ、はい、そうですけど……」

「それが、ちょうどその事を話していたところだったんだ。実はナイアル君、昨日と今日と編集部に来ていなくてねぇ。連絡も一切ない状態なんだよ」

「え……」

「昨日と今日ですか……。僕たち、おとといの夕方にここでナイアルさんと話をしていましたけど……」

「ほ、ホント～！？」

「ホントも何も、ナイアルの伝言を伝えたのはドロシーでしょうが。準決勝の後、ここに話を聞きに来たのよ」
「あー、そういえば、そんな事もあったよーな。ねえねえ、ナイアル先輩、その時に何か言ってなかった～？どこかに出かけるとか～」
「うーん、心当たりがあると言えば、誰かから呼び出されていたわね」
「うん、確かにそうだったね。通信で誰かに呼び出されてどこかに出かけていったんだ」
「君たち、そいつは本当かね？」
「はい。どうやら、その時から今まで消息不明という事になりますね」
「そ、そんなぁ！先輩が死んじゃうなんてぇ～！」
ドロシーが泣きそうな顔になった。消息不明＝死亡確定は早とちりが過ぎるよ。
「え、縁起でもないこと言うんじゃありませんっ！今日から定期船は運航停止してるらしいけど……。昨日までは運航してたんだから別の地方に出かけたんじゃないの？」
「発着場に問い合わせたけど名簿には載ってないって言うんだ。となると、やっぱり王都にいると思うんだけどねぇ」
編集長はすでに定期船の線はあたっていたようだ。
「ふーむ……。お前たちが、その記者に最後に会った時のことだが……。そのナイアルって記者は何か記事になりそうなネタを話していなかったか？」
ジンが話に入ってきた。
「え……」
「こういうご時世だ。マスコミへの軍の規制もかなりのモンだろう。どうだい、編集長さん？」
「まあ、確かにその通りですよ。特に、情報部絡みの話になると検閲されまくりという状態です。腹立たしいったらありゃしない」
「……そういう状況じゃ記事に出来そうなネタも少ない。だが、記

者だったら少しでも新鮮で話題性のある記事を読者に提供したがるもんだろう」

ジンが推測で真意を連ねていく。

「なるほど……。情報部が検閲しても問題ない、新鮮で話題性のあるネタ……。それについて、ナイアルさんが何か話していたかどうかですね？」

「ああ、それだったら……。クローディア姫の縁談について話していたわ」

「ほう、晩餐会の時に公爵が言っていたあの話か……」

「なんだ、ナイアル君、君たちにも話していたのか。確かに本当だったらすごいスクープになるからねぇ。どうにかしてウラを取ってみると言っていたが……」

「ナイアルって記者はどうしてその話を知っていたんだい？王室関係者以外は知るはずのない情報だろう？」

「たしか、エルベ離宮に勤めている友達に聞いたって言ってましたねぇ。オフレコだけど、姫様のことをテロリストが狙ってるらしくて～。それで姫様、エルベ離宮に内緒で保護されてるんですって～」

このドロシーの発言に、エステルたちの判らなかったピースがはまったようだ。

「……やっぱり！」

「ふふん。これで裏付けが取れたな」

「もし、あの日通信してきたのが離宮に勤める友人だとしたら……。ナイアルさんも、離宮にいる可能性が高くなってきましたね」

「そ、そうか……。たしかにナイアル君だったら姫殿下にインタビューするために強引に潜入する可能性もありえる……。それで、兵士に見つかって捕まってしまったのだとしたら……」

ナイアル死亡フラグが立ったか！？

「ふえ～ん！ナイアル先輩が死んじゃう～！」

いよいよ泣き始めたドロシー。

「だから死なないってば……。でも、それが本当だとしたら簡単に

は釈放はされないでしょうね」
「うん……。クローディア姫と同じ立場になっている可能性が高そうだね」
「君たちは……いったい何を知っているんだ？この王都で……いや、リベールで何が起こっているのか知っているんじゃないのかね？」
「うーん、ごめんなさい。それを話すわけにはいかないの」
「ナイアルさんのことは遊撃士協会に任せてください。もし拘束されているとしたら必ず釈放されるように計らいます」
「そうかい……。わかった、よろしく頼むよ」
「お、お願いね～！エステルちゃんたち～！ナイアル先輩を助けてあげて～！」
「うん、任せておいて！」
クローディア姫を含めて人質はエルベ離宮にいることが確信できたエステルたち。次に、協力者を探しに向かった。

第5章　王都撩乱（33）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

情報収集のための協力者だったナイアルが捕まっていると知ったエステルたち。しかし、エルベ離宮に人質がいるという裏付けが取れた！後は、ユリア中尉と王都の遊撃士を集めるだけだが……。

第５章　王都撩乱（３４）（前書き）

グランセル大聖堂に向かったが……。

第5章　王都撩乱（34）

―グランセル大聖堂　祭具室

「おや、お前さんたちは……」

エステルたちはカラント大司教に声をかけた。

「えっと、その……遊撃士協会の者です」

「こちらの大聖堂にシスター・エレンという方はいらっしゃるでしょうか？」

「ほう……。それではお前さんたちが彼女の協力者というわけか」

「え……！」

「……事情は完全に判ってらっしゃるようですね。彼女に頼まれたことがあってその報告に参上しました」

「残念ながら彼女はもうこの大聖堂にはおらん。今朝がた、私に挨拶してここを去っていってしまったよ」

完全にすれ違いになってしまったようだ。

「ど、どこに行ったんですか？」

「いや、残念ながら判らない。王家との長年の付き合いから彼女をかくまわせてもらったが……。今回の件について、私は彼女から詳しいことは聞かされていないのだ。たぶん、教会に迷惑をかけたくなかったのだろう」

「そうですか……」

「だが、安心するといい。ここを去る時、彼女の目は希望の光に満ち溢れていた。絶望の末、自暴自棄になって出て行ってしまったわけではなさそうだ」

「そ、それを聞いてちょっと安心しちゃった……。でも、その様子だと親衛隊には連絡つかないかも」

「ま、無いものねだりをしても仕方あるまい。ひとまず、親衛隊の存在は脇に置いといたほうがよさそうだ」

「残念ですけどそうするしかありませんね」

「どうやら大変な困難にぶつかっているようだな……。女神は、自らを扶く者を扶ける。精一杯がんばりさえすれば必ずや良き導きがあるであろう」

カラント大司教が励ましてくれた。

第5章　王都撩乱（３４）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

ユリア中尉が消息を絶ったのは意外だったが、ゆっくりしている間もないので、王都にいる４人の遊撃士を探し始める。

第5章　王都撩乱（35）（前書き）

王都にいる4名の遊撃士を招集するエステルたち。

第5章　王都撩乱（35）

―ホテル・ローエンバウム　2階の宿泊部屋

「……。あの時の記憶……あと少しで思い出せそうなんだが……。まるでモヤがかかったみたいに……」

クルツが一人たたずんでいた。

「あ、クルツさん……！」

「よかった、ここにいたんですか」

「おや……。エステル君とヨシュア君か。ジンさんも一緒にどうしたんだい？」

「俺たちが昨日、晩餐会で城に行ったことは知ってるだろう？その時に、この新米2人がとんでもない依頼を請けてきたんだ」

「とんでもない依頼……？」

「クルツさんには、多少詳しく説明した方がよさそうですね」

エステルたちは、クルツにこれまでの事情と女王の依頼について説明した。

「……。……それは……本当か？」

「モチのロンだってば。だから、クルツさんにも手伝ってもらいたいのよ」

「いや……そうじゃない。陛下の依頼というのもたしかに驚きなんだが……。大佐が手に入れたという漆黒のオーブメントというのは本当に……存在するのか……？」

クルツの顔が一気に青ざめていった。

「……クルツさん？ど、どうしたの？なんだか顔が青くない？」

「ううう……がああああああっ！」

クルツが急に震えだした。

「わわっ！」

「こ、これは……」

「ふむ……ちょっと離れてろ」

「え……」
ジンがクルツの前に立った。
「フヒュゥゥウウウウウッ……」
ジンが呼吸を整え始めた。
「阿(あ)～～～……吽(うん)ッ！」
「ガッ！」
そして、ジンの声で急に大気が震えたと思うと、クルツが後ろに吹き飛んだ。
「な、なに今の……！触れてもないのにビリビリッと来たわっ！」
「今のが気功だ……。触れてもいないのに肉体に直接作用する……」
「ま、時間がなかったから荒っぽく行かせてもらったぜ」
ジンがクルツに近寄った。
「どうだい、気分は？」
「ああ……。すまない、もう大丈夫だ」
そう言ってクルツが立ち上がった。
「全部ではないが……ようやく思い出すことができた。そのショックで身体が言うことを聞かなくなったみたいだ……」
「お、思い出したって……？」
「前に話しただろう？3ヶ月前の事故さ……」
「クルツさんが仕事中に記憶をなくした事件ですね」
「ああ……。私はあの時、ある人物に頼まれて黒装束の連中のことを調べていた……。そして、連中が運んでいた怪しげな代物を奪取したんだ。それは、漆黒のオーブメントだった」
「！！！」
「その人物というのはもしかして……」
「ああ……。君たちの父親のカシウスさんだ。私は急いで、そのオーブメントを小包でカシウスさん宛に送った……。何とかそこまでは思い出したよ……」
「そ、それじゃあ！小包を送った『K』って……」
「ああ……私のことだ。ラッセル博士に解析してもらうようメモに

進言した記憶がある……。そうか、あの小包は君たちが受け取ったのか……」

「クルツさん……。その後の記憶はどうですか？父さんに小包を送った後、あなたに何が起こったんですか？」

「ああ……。発着場を出た後、誰かに声をかけられて……。その後は……。……。駄目だ、モヤがかかったように思い出すことができない」

どうやら、その時に記憶を操作されたみたいだ。

「あまり無理をして思い出そうとしない方がいい。身体に負担を与えるだけだぜ」

「……ああ、わかった……。とりあえず、あの時のことを思い出せただけでも上出来だ……」

「それにしても……いったい誰がこんなことを……。やっぱり特務兵たちが何かをしたってことかしら？」

「可能性はあるね……。アガットさんを蝕んだ毒物もそうだったけど……。特殊な薬品を開発してテストしているみたいだからね。記憶に負担をかける作用をもつ薬品がつかわれたのかもしれない」

「な、なんだか気味が悪いわね。とすると、空賊のボスとかダルモア市長も同じってことね。あたしたちも気を付けないと……」

「すまない……。肝心の話がまだだったな。陛下の依頼の件は了解した。どうか私にも協力させてほしい」

「で、でも……クルツさん、調子は大丈夫？」

「ああ、記憶を取り戻して逆に身体が軽くなったくらいさ。落とし前をつける意味でもぜひとも協力させて欲しいんだ」

「その調子なら大丈夫そうだな。いったん作戦会議がある。まずはギルドに向かってくれ」

「わかった……恩に着る！」

クルツは先にギルドに向かった。

―居酒屋　《サニーベル・イン》
「グラッツさん、見つけた！」
エステルはカウンターに腰かけていたグラッツを発見した。
「おっと。優勝チームのお出ましか。晩餐会で城に泊まったそうだが、もう帰ってきちまったのか。さぞかし美味いもんを食ってきたんじゃないのか？」
グラッツは興味津々に聞いてきた。
「確かに美味しかったけど……。それどころじゃなかったのよ」
「それどころじゃない？」
エステルたちはこれまでの事情と女王の依頼についてかいつまんで説明した。
「……おいおい、マジかよ」
「残念ながら、掛け値なしの本当だ。俺の二つ名に賭けてもいい」
「《不動のジン》……。あんたが動いているってことは疑う余地はなさそうだな……。よし、わかった。俺も協力させてもらうぜ」
「ありがと、グラッツさん！」
「まずは、作戦会議をするのでギルドに向かってください。みんな集まってくるはずです」
「わかった、後でな！」
グラッツがギルドに向かっていった。

―ヴァイス武器商会
「あ、カルナさん！」
武器のショーケースを見ていたカルナを見つけた。
「いや、あんたたちか。ジンの旦那まで一緒にいったいどうしたんだい？」
「実は、かなり面倒な話になっちまってな……」

「……なんだい？タダ事じゃなさそうだね」
エステルたちはこれまでの事情と女王の依頼についてかいつまんで説明した。
「……。どうやら冗談じゃなさそうだね。関所と発着場が封鎖されてキナ臭いとは思っていたが……。事情はわかった。あたしはどうすればいい？」
「まずは、全員で作戦を練ろうという話になりました。ギルドに向かってください」
「了解だ。一足先に行ってるよ」
カルナはギルドに向かっていった。

―エーデル百貨店
「あら、新人君たちにジンさんも一緒じゃない。もう、お城から戻ってきたんだ？」
アネラスは今日も可愛いもの探しに余念はないようだ。
「うん、そうなんだけど……」
「アネラスさん。少し時間を頂けますか？」
「なになに？面白い話でもあるの？」
アネラスは身を乗り出してきた。
「うーん。面白いかどうかはともかくビックリするのは確実かも……」
「へえ……なんだか楽しそうじゃない。こんな所で立ち話も何だから外の休憩所でも行こっか？」
そうして、人の気持ちも分からずに外の休憩所に向かった。

「……え。……」
その話を聞いて、アネラスはただ一言しか言えなかった。

「念のために言いますけど冗談じゃありません。大きな仕事になりそうなので力を貸して欲しいのです」
「……えーと。ごめん、ちょっと混乱して事態が把握できてないみたい。よく判らないけど、みんなギルドに集まるのね？」
「うん、エルナンさんが詳しい話をしてくれるはずよ」
「わかった……！とりあえず行ってみるね」
アネラスはよく判らないままギルドへと向かっていった。
４人を招集したエステルたちもギルドへと戻った。

第5章　王都撩乱（35）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

王都にいる4名の遊撃士を招集したエステルたちは、本格的な作戦を練り始める！

第5章　王都撩乱（３６）（前書き）

ギルドに集結した遊撃士たち。そして、作戦会議が始まった。

第5章　王都撩乱（36）

―遊撃士協会グランセル支部

「他の遊撃士は全員集合したようですね。記者さんと、親衛隊の方には何とか連絡はつきましたか？」

「残念だけど……両方とも連絡がつかなかったの」

「ですが、必要な情報はだいたい集まったと思います」

エステルたちは雑誌社と大聖堂で手に入れた情報を説明した。

「なるほど……。クローディア姫がエルベ離宮にいるのは間違いなさそうですね。親衛隊の方は残念ですが、捕まっていない事が判っただけでも良しとしましょう」

「それじゃあ、早速始めるかい？」

「ええ……。全員で、人質救出計画を練ってみることにしましょう」

エステルたちは2階に上がった。

―3階

「……以上が、現在進行している情報部のクーデター計画の詳細です。それを踏まえた上で王都支部は、女王陛下の依頼をお受けしたいと思っています」

エルナンが今まで手に入れた情報を詳細に全員に説明した。

「まさか、そこまで大それた陰謀が進行していたとは……。見抜けなかった自分の不甲斐なさが腹立たしい限りだ」

クルツが自分を責めたてた。

「確かに、あの特務兵って連中うさん臭そうだったけど……。リシャール大佐が格好良かったからつい信じちゃってたみたい……」

格好良さにつられ、目がくらんでいたらしいアネラス……。

「しかも、空賊事件やダルモア市長までも裏から操っていたとはね

え……。ずいぶんと遊撃士（あたしら）を舐めてくれるじゃないか……」
「こりゃあ、落とし前を付けないとどうにも収まりがつかねえな……」
カルナとグラッツは舐められたことに怒りを感じている。
「それでは皆さんも、協力して下さるということで構いませんか？」
エルナンが４人に確認した。
「もちろんだぜ！」
「遠慮なくコキ使っておくれ」
「借りは……返させてもらう」
「あたしも喜んで！」
４人は当然のごとくうなづいた。
「うわ～……。凄いことになってきたわね！」
「うん……さすがに頼もしい限りだね」
「それでは具体的な救出作戦を練ることにしましょう。人質の命がかかっている以上、あまり悠長な作戦にはできません。多少、力押しになりますが拠点攻略の形を取りたいと思います」
「侵入ルートを探す時間はないし、確かにそれしか方法はなさそうだな」
「しかし、離宮を攻略するとしたら役割分担はどうするつもりだい？」
カルナが持ち手の戦力の少なさを指摘して言った。
「……陽動班と突入班の二手に分けるのが確実だろう。何らかの騒ぎを起こして離宮にいる戦力を引き付けてからそのスキに別動隊が突入する……」
クルツが提案した。
「しかし、相手は王国軍の中でも精鋭にあたる情報部の特務部隊だ。欲を言えば、陽動時の要撃班と突入時の攪乱（かくらん）班も欲しいところだな」
「えっと……それってどういうこと？」
エステルは意味が分からないので尋ねた。
「陽動して追いかけてきた敵を待ち伏せして叩くのが要撃班……。

敵を混乱させて、突入をやりやすくするのが攪乱班だね」
ヨシュアが分かりやすく言ってくれた。
「なるほど……。でも、この人数じゃあそんな役割分担は無理じゃない？」
この場には、エステル、ヨシュア、ジン、クルツ、グラッツ、カルナ、アネラスの7人しかいない。人数が少なすぎて、到底、そんな役割分担にはできない。
「ええ……残念ながら。他の支部にも連絡したのですが、発着場と関所が封鎖されているため遊撃士がこちらに来れない状況です」
「そっか……。こういう時に、シェラ姉やアガットがいてくれたらな……」
「……ジンさんの言う通り、陽動と突入の2班だけではあまりにも危険が大きすぎます。何か別の案を検討した方がいいかもしれません」
エルナンが別の案を考えようとした時、
「いや、足りない戦力は我々が補わせていただこう」
1階から声がした。そして、上がってきたのはシスター服姿のユリア中尉だった。
「あ……！」
「ユリアさん……！」
「おお、周遊道で会ったあの時のシスターじゃないか」
「お初お目にかかる。王室親衛隊、中隊長。ユリア・シュバルツ中尉だ。あなた方の作戦に親衛隊も協力させてほしい」
そして、ユリア中尉がエルナンに具体的なことを説明した。
「なるほど……。お話はわかりました。あなたを含めた9人の隊士が協力してくださるわけですね」
「皆、それぞれの方法で王都に潜伏している最中だ。だが、1時間以内に全員を集結させることができるだろう」

これで合計１６人が作戦に加わることになった。
「そ、それはいいんだけど……。ユリアさん、どうしてあたしたちが人質を救出しようとしてるって分かったの？」
「僕たち、それを伝えようとして大聖堂に行ったんですけどユリアさんには会えなかったんです」
確かに、ユリア中尉には何の情報も伝えられていないはずだ。
「そうか……済まなかったね。ただ、君たちが陛下から依頼を請けたことは知っていた。それも昨日の夜のうちにね」
「昨日の夜!?それって、あたしたちが女王様と会ったすぐ後ってこと？」
「フフ……その通りだ。我々は、情報部も知らない特殊な連絡手段を持っていてね。君たちの手助けをするよう陛下からご指示があったのさ」
「特殊な連絡手段？」
エステルはそれが分からないようだ。
「うーん。何と言ったらいいのか……」
ユリア中尉も説明しにくそうだ。
「まあ、そいつはいいだろう。大事なのは、要撃班と攪乱班が何とか確保できるってことだ」
「ええ、これで作戦の成功率が跳ね上がりました。早速、役割分担を決めてしまいましょう」
「了解した。まずは陽動だが……。これは我々親衛隊のうちの５人のメンバーが担当しよう」
「確かに、指名手配中のあんたたちが現れたとなれば敵も引っかかる可能性が高いな」
「ああ、そういうことだ。具体的には周遊道の外れに停泊している情報部の特務飛行艇を狙うつもりだ」
「特務飛行艇って……。特務兵たちが乗ってたアレ!?」
エステルが驚いた。
「周遊道の外れに停めてあったんですか……」

「そういや、封鎖されて入れなかった場所があったな……」
「私の調査だと、数名の特務兵が常に見張りをしているようだ。これを叩いて、離宮に連絡させて応援部隊をそちらに向かわせる」
「あ、なるほど……。その応援部隊を、要撃班が返り討ちにするってことね？」
「ならば、要撃班は私たちが引き受けた方がよさそうだな」
「たしかに、森での戦闘は魔獣退治で慣れっこだからな！」
「銃使いもここにいるし……。うってつけじゃないかねぇ？」
「まさに適材適所だと思います」
「では、攪乱班と突入班ですが……」
エルナンが離宮に入るメンバーを決め始めた。
「攪乱班は、陽動班と同じく親衛隊のメンバーが務めよう。その方が、特務兵たちの注意を引きつけられるはずだ」
「……ということは……」
「僕たちが突入班として人質を解放するわけですね」
「みんなのお膳立てがあって初めて成立する大切な役割だ。気合いを入れる必要があるぜ」
「そ、そう言われるとちょっとプレッシャーかも……」
エステルが今までにない緊張にさらされている。
「フフ……。そう心配することはないさ」
「何といっても武術大会の優勝メンバーだからねぇ」
「敵の大部分は私たちが何とかしよう。君たちは人質救出だけを考えてくれればそれでいい」
みんながエステルを励ましてくれた。
「ユリアさん……先輩たち……」
「僕たちだけで人質を救うわけじゃない。力を合わせればきっと大丈夫さ」
「うん……！よし！やるっきゃないわよね！」
エステルも気合いが入ったようだ。
「おっと、いい気合いだな」

「これで作戦会議は終了ですね。作戦決行は夜……。闇に紛れてが望ましいでしょう。一度作戦が始まってしまえば市街地に戻る余裕はありません。今のうちに、足りないものを揃えてきてはいかがですか？」

「あ、それもそうね」

「私は、王都に潜伏している部下たちに連絡を取ってこよう」

「それじゃあ、一旦ここで解散ですね」

こうして作戦会議は終了した。後は、決行するのを待つだけになった。

第5章　王都撩乱（３６）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

いよいよ人質解放のための作戦が決行される！

第5章　王都撩乱（37）（前書き）

いよいよエルベ離宮解放・人質救出作戦が開始！

第5章　王都撩乱（37）

―遊撃士協会グランセル支部

「おや、皆さん。もう準備はお済みでしょうか？一度作戦が始まってしまえば、市街地に戻る余裕はありませんが……」

「ええ、バッチリよ」

「わかりました。それでは時間まで作戦を細かく詰めていきましょう」

エステルたちは作戦の詳細を話し合い、集合場所を決めた。

―エルベ周遊道　夜

エステルたち7名の遊撃士が集合場所で待機していた。

「さてと……。集合場所はここでいいのよね？」

「琥耀（アンバール）石の石碑のある休憩所だからここで合っているはずだよ。問題は、ユリアさんたちが見つからずに来れるかだけど……」

「……その心配は無用さ」

後ろから声がしたかと思うと、ユリア中尉含め、親衛隊9人が揃っていた。

「わっ、いつのまに……」

「はは、よくそれだけの数が王都に潜伏できていたもんだな」

「我々の理解者は市民にも大勢いるものでね。こちらの準備はできている。いつでも作戦を始めてほしい」

「よし……。エステル君。号令をお願いしたい」

クルツが不意にエステルに言った。

「え……？あ、あたしが！？」

エステルが唐突に言われたためたじろいでいる。

「元々、君たちが請けた女王陛下直々の依頼だ」

「ああ、お前さんの号令で始めるのが筋ってもんだぜ」
「で、でも……。あたし、まだ新米だし……」
「はは、関係ないさ。あんたなら文句はないよ」
「ただし、あんまり大声を出さないようにね？」
「我々は手伝いだ。異存はまったくないよ」
「あ、あう……」
みんなに押されて断れないエステル。
「エステル、自信を持って」
「細かいことは考えるなって。こういうのはノリさ、ノリ」
「うん……。……」
覚悟を決め、石碑の上に乗るエステル。
「全作戦要員に告げる……。これより、エルベ離宮攻略、および人質救出作戦を開始する！」
そして、エルベ離宮攻略・人質救出作戦が始まった！

―エルベ周遊道　外れの池
「はあ……さすがに腹が減ったな。そろそろ交替時間じゃないか？」
夜も更け、眠くなっている見張りの特務兵がもう１人の見張りに声をかけた。
「おいおい、たるんでるぞ。いつ、潜伏中の親衛隊が現れるかもしれんのだからな」
もう１人は真面目だ。
「逃亡してるのは１０名にも満たない数だろ？そんな連中、大佐が本気になればあっというまに狩りつくせるさ」
「……やれるものならやってみるがいい」
その時、ユリア中尉率いる陽動班が特務兵たちの目の前に現れた。
「な……！」
「親衛隊中隊長、ユリア・シュバルツ！？」

―エルベ離宮　前庭

この戦闘を受け、エルベ離宮の中隊長がすぐにエルベ離宮の広場に兵を集めた。

「聞け！特務艇から連絡があった！どうやら、親衛隊の残党がのこのこと現れたらしい！至急、現場に急行しこれを機会に奴等を殲滅（せんめつ）する！」

「ラジャー！」

―エルベ周遊道　外れの池

「何とか片づいたか……。むっ……」

特務艇の見張りを倒した後すぐに先ほどの中隊長率いる増援がかけつけた。

「バカな連中だ……。飛行艇はロックされている。簡単に使うことはできんぞ」

「……」

「おとなしく大佐に従っておけば命だけは助かったものを……。おのれの頑迷さを呪って死んでいくがいい！かかれっ！」

中隊長が号令をかけた時、後ろから控えていたクルツたち要撃班が攻撃をかけた。

「ゆ、遊撃士だと！？貴様ら、軍に歯向かうつもりか！？」

「あいにくだが……君たちはすでに違法的な存在だ」

「陛下のお墨付きがある以上、遠慮なく行かせてもらうよ！」

―エルベ離宮前
「よし、要撃班が動いたぞ」
「まず自分たちが先行して前庭で残存兵力を引き付けます！その隙に、あなた方は離宮内部に突入してください！」
親衛隊が離宮内の兵を一手に引き受ける作戦だ。
「うん、わかったわ！」
「女神（エイドス）の加護を！」
そうして、親衛隊４名が先に離宮に突入した。

―エルベ離宮　前庭
離宮の前庭ではすでに戦闘が繰り広げられていた。
「よしよし……。やってくれてるようだな。この隙に建物に突入するぞ」
「オッケー！」
「了解です！」

―エルベ離宮
「ここが《エルベ離宮》……。うーん、お城にも負けないくらい豪華だわ」
「まあ、王家の建物だからね」
その時、ジンが構えた。
「おっと、おいでなすったぜ」
前に特務兵たちが現れた。
「な、なんだ貴様らは！？」
「悪党に名乗る名など無し！」
「問答無用で行かせてもらいます！」

～戦闘？　特務兵×３
５ターンで難なく終了～。

「さてと、お姫様たちはどこに捕まってるのかしら？」
「そんなに広い建物じゃない。しらみ潰しに調べていった方が良さそうだ」
「ぐずぐずしてたら前庭にいる連中も戻ってくる。とにかく急ぐぞ」

―エルベ離宮　中庭
「な……なんだお前たち！？」
「不審者め、そこを動くな！」
動くなと言われても動きます。

～戦闘？　特務兵×２、軍用犬×２
７ターンでこれまた楽勝～。

「は～、あせった。いきなり襲ってくるんだもん」
不審者がいたら、そりゃあたり前でしょうよ。
「まだ、かなりの数が離宮内に残っているみたいだ。定期的に中庭の廊下を巡回しているみたいだね」
「仕方ない、見つかったら黙らせるしかなさそうだな」
これこそ力による口封じ。最悪だけど……。

―エルベ離宮　談話室
「あ、あなたたちは……？」
マイスターをしていた執事レイモンドが、武器を構えていきなり入ってきたエステルたちに驚いた。しかも、そこには特務兵たちが酒を飲んでいた。騒ぎが起こっているにもかかわらず……。いわゆる、ぐうたら組ですね。
「わわっ……。結構集まっているわね」
特務兵たちが４人も。
「ん～……。なんだ、お前たちは……」
「うい～……。見かけない顔だなあ？」
完全に酩酊状態だった。
「こんばんは。遊撃士協会の者です」
「へ……？」
「まあ、そのまま気持ち良く眠っててくれや」
酔った特務兵たちと戦闘開始……。

～戦闘？　酔っ払った特務兵×４　↑コレ、ワロタ
今回最速の３ターンでＴｈｅ　Ｅｎｄ。

「ふう、一丁あがりっと」
「酔ってたからあまり手ごたえがなかったな」
「ここは、城にもあった酒を出す談話室みたいですね」
「い、命ばかりはお助けを……！ぼ、ぼ、僕はっ、彼らの仲間じゃありませんっ！」
執事レイモンドがカウンターから顔を伺いながら言った。
「わかってるってば。離宮に勤めている人でしょ？」

「女王陛下の依頼で捕まった方々を助けに来ました」
「え……ほ、本当かい？本当に僕たちを助けに来てくれたのかい！？」
「うん、だからもう安心して」
安心したのか、執事レイモンドがカウンターから出てきた。
「はあ……よかった……。友達の記者が捕まってから生きた心地がしなかったんだ。あいつ、無事だろうか……」
「友達の記者……。あ、ナイアルの友達ってひょっとしてあなたのこと？」
「へ……」
エステルはナイアルが行方不明になった経緯を話した。
「そうか、確かにあの時ナイアルに連絡をしたのは僕さ。彼、ここに保護された姫様にインタビューしたがってね……。あまりに熱心だから断れなくて中に入れる手引きをしたんだよ」
「それでバレて捕まったわけか」
「ああ、恥ずかしながらその時になって真相に気づいたよ。姫様、テロリストに狙われたからここに保護されたって聞いたんだけど……。実際には、情報部の連中に監禁されていたんだって……。姫様が来たことに浮かれて、そんな事にも気づかなかったんだ……。まったく、執事失格だよ……」
「まあまあ。そんなに気を落とさないでよ」
「それで、捕まった方々がどこにいるのか分かりますか？」
「ああ、建物の一番奥にある《紋章の間》に集められている。条約の調印にも使われる由緒正しい大広間なんだ」
「奥にある《紋章の間》ね」
「よし、さっそく行ってみるか」
奥につづく扉には鍵がかかっていた。

「えー、そりゃないわよ！」
「かなり頑丈な鍵だね。どこからか見つけてこないと」
「ふむ、あの若い執事に聞いてみた方がよさそうだな」

―エルベ離宮　談話室
エステルは執事レイモンドに奥にある扉に鍵がかかっている事を話した。
「そうか、あそこには鍵がかけられていたっけ……。あの鍵は、情報部の中隊長が管理していたはずだけど……。テロリストが現れたとかで出かけちゃったみたいなんだ」
「え……！」
「それじゃあ、ユリアさんたちが待ち伏せている方に行ったのか……」
「むう、まずいな。戻っているヒマはないぞ……」
ここに来て行き詰ったエステルたち。
「ちょっと待った……。あそこの鍵は、スペアがどこかに保管されているんだ。確か、展示室のどこかに隠してあったと思ったけど……」
「展示室ね！」
「急いで探してみよう！」

―エルベ離宮　展示室
エステルは大きな緋色の壺を調べた。そして底に何かが貼り付けてあった。それはスペアキーだった。
「あ、これね！」
「これで奥にある扉を開くことができそうだね」

早速、エステルたちは奥にある扉に向かってスペアキーを使った。

―エルベ離宮　紋章の間への渡り廊下

紋章の間の扉の目の前に見張りの特務兵たちがいた。

「なんだ貴様ら……」

「どこかで見かけたような……。こいつら！武術大会で優勝した……」

「遊撃士協会の連中か！？」

「ま、そういうことだ」

「素直に通してくれれば見逃してあげてもいいんだけど？」

「な、舐めるなァ！」

「我らが鉄壁の守り、破れるものなら破ってみろ！」

では、ご遠慮なく行かせてもらいます。

～戦闘？　重装特務兵×２

鉄壁の守りむなしく、８ターンで破られましたとさ。

―エルベ離宮　紋章の間

「お、お前ら……！？」

真っ先に気付いたのはナイアルだった。

「やっほー、助けに来たわよ」

「ナイアルさん。無事だったみたいですね」

「助けに来たって、マジか！？」

「エステルさん、ヨシュアさん。こんな所で会えるなんて……」

奥から少女の声が聞こえてきた。

「……え？」
エステルたちが向かってみると、そこにはドレス姿の少女がいた。
「あ、あなたがお姫様なんだ。初めまして、あたしたち遊撃士協会の……」
「初めまして、じゃないですよ。エステルさん、ヨシュアさん。やっと約束通り再会できましたね」
「え……。……」
エステル、しばしの沈黙。
「ああっ、クローゼじゃない！」
「もう、エステルさんったら。すぐに気付いてくれないなんてヒドイです」
「そ、そんなこと言われてもドレス着て、髪伸ばしてるし……。一体全体、どうしちゃったの？」
「……ごめん、クローゼ。エステルって、あまり人を疑うことを知らないから」
ヨシュアがクローゼに申しわけなく言った。
「ちょっと！それってどーいう意味よ！」
「ふふ、それがエステルさんのいいところだと思いますから。それよりも、ヨシュアさん。まだ私を……その名で呼んでくれるんですね」
「うん、君がそう望んでいるような気がしたから。本名の方が良かったかな？」
「とんでもありません……。ありがとう、すごく嬉しいです」
ヨシュアとクローゼは話が通じているようだ。
「？？？ところで、どうしてクローゼがここにいるわけ？それに、例のお姫様がどこにもいないんですけど……」
「あのな、目の前にいるだろ。その方が、陛下の孫娘のクローディア姫殿下だっての」
ナイアルがたまりかねて言った。
「……え。えええええっ！？」

おそらくこれがエステル人生最大の驚きであっただろう。それも当然、クローゼがクローディア姫だったからだ。

「ごめんなさい、黙っていて……。本当は、エステルさんたちと王都で再会した時に打ち明けるつもりだったんですけど……。リシャール大佐に捕まってしまって……」

「え、でも、なんで？なんでお姫様が正体隠して普通の学校なんかに……！？そ、それにあたし、クローゼのことをどう呼んだらいいのか……」

エステルの頭の中は完全に混乱状態だった。

「どうかこのままクローゼと呼んでください。クローディア・フォン・アウスレーゼ……。本名の最初と最後を合わせた愛称なんです」

「そうだったんだ……。えっと、それじゃあその髪は？」

「あ、これはヘアピースです。さすがに同じ髪型だと、学園生活に支障をきたしそうだったので……」

「まったく迂闊でしたよ……。そのお姿は、写真で拝見していたのに市長邸の事件で会った時にはサッパリ気付きませんでしたからねぇ」

ダルモア市長事件の時にナイアルは学生服姿のクローゼを見ているが気付かなかった。

「うふふ、ごめんなさい。デュナン小父様や、ダルモア市長も気付かなかったみたいですし意外と効果はあったみたいですね」

「そっか、考えてみればあの公爵も親戚なのよね。とと、そうだ。肝心なことを忘れていたわ」

エステルたちは今までの経緯を一通り説明して、女王陛下の依頼で救出に来たことを説明した。

「そうだったんですか……。エステルさん、ヨシュアさん。それにジンさんと仰いましたね。助けに来てくださって本当にありがとうございました」

「あはは、気にしないでよ。捕まってたのがクローゼだと知っていたら頼まれなくても助けに来たし」

「エステルさん……」
「確かにその通りだね。それに、僕たちよりも陛下に感謝した方がいいと思う。自分の身をかえりみずに君の救出を依頼したんだから」
「確かに、姫殿下さえ無事ならば大佐の要求を拒否することができる……。死すら覚悟されているかもしれませんな」
「はい……。お祖母さまはそういう方です。何とか手を打たないと今度はお祖母さまの身が……」
そう話していた時、
「茶番はそのくらいにしてもらおうか……」
振り返ると、情報部中隊長が戻ってきていた。さらに銃をこちらに向け、女の子が特務兵に銃を突きつけられていた。
「お、お姫さまぁ～……」
「リアンヌちゃん！？」
「な、なんで女の子が！？」
「モルガン将軍のお孫さんです……。ハーケン門に監禁された将軍を動かすために連れてこられたらしくて……」
「女王陛下に対する君と同じということか……」
「言っておくが、ただの脅しと思うなよ……。我らが情報部員、理想のためなら鬼にも修羅にもなれる！」
どうやら本気のようだ。
「そ、そんなことで威張ってるんじゃないわよ！」
「中隊長、取引をしましょう。その子の代わりに私を人質にしてください」
クローディア姫が自分の身を売ろうとした。
「おっと……。その手には乗りませんぞ。さすがに我々といえど王族を手にかける勇気はない。それと較べると、モルガン将軍の孫娘というのはちょうどよろしい。人質の価値もあるし傷つけても問題なさそうだ」
中隊長は完全に腐っているようだ。
「……あなた方は……」

「……さいてー」
「やれやれ、腐った連中だぜ」
「フン、何とでもほざくがいい。そろそろキルシェ通りから巡回部隊が帰還する頃合いだ。親衛隊、遊撃士もろともここで一網打尽にしてくれるわ！」
「あー、それは無理ってもんね。ここに来るときにあたしたちが倒しちゃったから」
その時、ロレントにいるはずのシェラザードが突入してきてリアンヌを拘束していた特務兵を倒した。
「な……！？」
あまりに突然で中隊長が驚いている。
「ひぐっ……うう……。うわわあああああん！」
あまりの恐怖から解放されたためか、リアンヌが泣き始めた。
「よしよし、もう大丈夫よ。エステル、ヨシュア。ずいぶん久しぶりじゃない」
「シェ、シェラ姉！？」
「来てくれたんですか……」
「な、なにを悠長に挨拶しておるかああっ！」
中隊長がキレた。
「やれやれ、無粋の極みだね」
「うおっ……」
その言葉と同時に部屋の外からの銃弾が中隊長に命中し、
「ぐぎゃっ！」
シェラザードが鞭で殴った。中隊長は壁に激突し、気絶した。
「今のはオマケよ」
「エ、エゲツな～。って今撃ったのって……」
「……オリビエさんですか？」
「ピンポーン♪いやいや。真打ち登場といった所かな」
オリビエがのこのこと現れた。
「はは、つくづく突拍子もない兄ちゃんだな。それに、シェラザー

ド。ずいぶん久しぶりじゃないか」
「どうも、ご無沙汰してます。まさかジンさんがリベールに来てるなんてね。あなたがエステルに付いているって聞いたからあんまり心配してなかったわ」
「はは、そりゃさすがに買いかぶりすぎってもんだぜ。しかしお前さん……ずいぶん色っぽくなったなぁ。正直、見違えたぞ」
「あ、あら、そうかしら？」
「むむむ。そこはかとなくジェラシー。ボクのことを散々もてあそんでおいてゴミのように捨てるのねっ」
オリビエはこんな状況でも変わらない。
「ああ、オリビエ。アイナが会いたがってたわよ。また一緒に呑もうだってさ」
「ごめんなさい。ボクが悪うございました」
「まったくもう……。みんな相変わらずなんだから」
「でもシェラさん。よく王都に来れましたね。王国軍に関所が封鎖されてませんでしたか？」
「ええ、だからヴァレリア湖をボートを使って移動したわ。で、王都の波止場に上陸したわけ」
「なるほど、考えましたね……」
「でも、どうしてまたスチャラカ演奏家と一緒なの？」
「王都のギルドでばったり出くわしちゃってね。スッポンみたいに離れないから仕方なく連れてきたのよ……」
どこまでも浪漫を求める男、オリビエ。
「ハッハッハッ。こんな面白そうなことをボクが放っておくわけないだろう。ところで、そちらのお嬢さんが……」
「あ、紹介するわね。女王様のお孫さんにあたるクローディア姫殿下よ。あたしとヨシュアの友達なの」
「初めまして、お2人とも。助けに来てくださって本当にありがとうございます」
「お気になさらずに。これも遊撃士としての務めです」

「フッ、美しき姫君を救うのは紳士としての誉れと言うからねぇ。お会いできて光栄だ、プリンセス」
「クローゼ、ご無事でしたか！」
その時、ユリア中尉とジークが入ってきた。
「ユリアさん、ジーク！」
「ピュイピュイ！ピュウーイ！」
「ふふ、よかった。また会うことができて」
「殿下、よくご無事で……。本当に……本当に良かった……」
「ユリアさんも……元気そうでよかったです」
やがて、陽動を行っていた遊撃士たちや親衛隊員も合流した。他の人質を休ませてからエステルたちは状況確認を行うことにした。こうして、エルベ離宮解放・人質救出作戦は成功のうちに終わった。

第5章　王都撩乱（37）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

エルベ離宮を解放したエステルたち。しかしその頃、グランセル城内では……。

第5章　王都撩乱（38）

―エルベ離宮　応接室

「本当に……申しわけありませんでした。私が不甲斐なかったばかりにこのような苦労をおかけして……。出来ることなら、至らぬ我が身をこの手で引き裂いてやりたかった……」

「そんなこと言わないでください。お互い、こうして無事に再会できただけでも嬉しいです。助けにきてくれて……本当にありがとうございました」

「殿下……」

「えっと、感動してるところをちょっと悪いんですけど……。なんでジークがここにいるの？」

「ピュイ？」

「はは、ジークは殿下の護衛であると同時に、親衛隊の伝令係でもあるんだ。君たちのホテルにも手紙を届かせただろう？」

「あ……あの夜の！」

「やっぱりそうだったんですか。それでは、女王陛下の依頼をユリアさんが知っていたのも……」

「ああ、女王宮の陛下から直接、ジークを介して教えていただいた。だが、殿下がいたあの広間にはジークの侵入できる窓が無くてね。連絡できなくて本当に心配したよ」

「まったくもう……。驚かせてくれるじゃない。こら、ジーク。黙って手紙を置いていくなんてちょっと薄情じゃないの？」

「ピュイ～……」

「ふふ……『ごめんよ』ですって」

「あはは、まあいいか。ところで、特務兵たちはもうほとんどやっつけたの？」

「離宮に詰めていた部隊はほとんど拘束することができた。しかし、グランセル城内にはまだ相当数が残っているはずだ」

「各地の王国軍も、いまだに情報部のコントロール下にある。下手をしたら、反乱軍としてこの場所を鎮圧されかねないわ」
「うわ……。そこまでは考えてなかったわね」
「そうですね……。クローゼだけでも、別の場所に避難させた方がいいかもしれません」
「……」
クローディア姫は黙っている。
「ならば、帝国か共和国の大使館に保護を求めてはどうかな？大使館内は治外法権……。簡単に手出しはできないからね」
「さっきの作戦で鹵獲（ろかく）した飛行艇で亡命する手もあるな。根本的な解決にはならんが、時間を稼ぐにはちょうどいい」
「そうだな……。どうお逃がしするべきか……」
「……。あの……みなさん。この状況で、私が遊撃士の皆さんに依頼をすることは可能でしょうか？」
クローゼが意外なことを言いだした。
「え……」
「人質救出のミッションは完了したから大丈夫だと思うよ。もちろん、依頼内容にもよるけどね」
「でしたら……無理を承知でお願いします。王城の解放と、陛下の救出を手伝っていただけないでしょうか？」
「で、殿下……」
「そっか……そうよね。今度は女王様を助けないと！」
「正直言って、その話にはなるんじゃないかと思ったぜ。だが、姫殿下……その依頼はかなりの難物だ」
「そうね……。ここにいる戦力を全員集めても正面から落とすのは不可能だわ」
「あの特務艇を使えば可能性はあると思いますが……。ただ、よほど上手い仕掛けが必要になりそうですね」
「……私に考えがあります。皆さん、これを見て頂けますか？」
クローディア姫が一枚の古い地図を取り出した。

「これって……どこの地図？」
「王都の地下水路の内部構造を記した古文書です。これに、王城地下に通じる隠し水路の存在が記されています」

―グランセル城
一方、グランセル城内では……
「ど、どういう事ですの！？《エルベ離宮》との連絡が途絶えてしまっただなんて！」
カノーネ大尉がロランス少尉に問いただしている。
「親衛隊か遊撃士……。どちらかに落とされた可能性があると言うことかな」
ロランス少尉が冷静に答えた。
「ぬ、ぬけぬけと……。連中を指揮していたのは少尉、あなたでしょうに！」
「これは面目ない。だが、済んでしまったことはとやかく言っても詮無きことだ。この上、陛下まで奪われぬよう城の守りを固めるべきだろうな」
「い、言われなくてもわかっていますわ」
そう言って、カノーネ大尉は広間に集まっていた特務兵たちに号令をかけた。
「城門を完全封鎖！誰が来ても入れないように！以後は、空からの襲撃にのみ備えることにしなさい！」
「了解しました！」
「それと、各地の部隊に連絡してエルベ離宮に向かわせること！名目は、王族を騙ったテロリスト集団の鎮圧です！」
「イエス・マム！」
そう言って、特務兵たちは早速行動に移った。
「ふふ、見事なお手並みだ」

「フン、当然でしょう。新参者のあなたとは違います。……閣下の留守はわたくしが絶対に守りますわ！」

第5章　王都撹乱（38）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

クローディア姫からアリシア女王救出の依頼を受けたエステルたち。
少数人数でどのように難攻不落といわれるグランセル城を解放するのか！？

第5章　王都撩乱（39）

―エルベ離宮　紋章の間　朝

エルベ離宮解放から一晩明けた翌朝、ユリア中尉がグランセル城の解放の手立てを説明し始めた。

「これより、グランセル城の解放と女王陛下の救出作戦を説明する。まずは、ヨシュア殿以下、3名のチームが地下水路よりグランセル城地下へと侵入。親衛隊の詰所へと急行し、城門の開閉装置を起動する」

「了解しました」

「ま、でかい花火の点火役ってところだな」

「フフ……いずれにせよ最終幕の幕開けには違いない」

この作戦にはヨシュア、ジン、オリビエが任命された。

「城門が開くのと同時に親衛隊全員と、遊撃士4名が市街から城内へと突入。なるべく派手に戦闘を行い敵の動きを城内へと集中させる」

「ああ、任せてもらおう」

「よっしゃ、腕が鳴るぜえ！」

「そして最後に……。……殿下、やはり考え直して頂けませんか？」

ユリア中尉が心配そうに学生服に着替えたクローディア姫―クローゼを見た。

「ごめんなさい……。お祖母さまは私が助けたいんです。それに私は一応、飛行艇の操作ができますから……。どうか作戦に役立ててください」

「くっ……。こんな事なら、操縦方法などお教えするのではなかったか……」

ユリア中尉は今になってクローディア姫に余計な事を教えてしまったと悔やんだ。

「まあまあ、ユリアさん。クローゼのことならあたしたちに任せて

おいて」
「《銀閃》の名に賭けて必ずやお守りすることを誓うわ」
「わかった……どうかお願いする。城内に敵戦力が集中した直後、エステル殿以下3名のチームが特務飛行艇で空中庭園に強行着陸。しかる後、女王宮に突入してアリシア女王陛下をお助けする」
「了解ッ！」
これで、総勢19名でグランセル城を攻略することになった。
「作戦決行は正午の鐘と同時――それまでに待機位置についてくれ。それでは各員、行動開始せよ！」
「イエス、マム！」

―エルベ離宮　前庭
「……ヨシュア、気を付けてよね。くれぐれも無理しちゃダメなんだから」
初めてヨシュアと別行動をとることになったエステルはヨシュアが心配そうだ。
「うん、気をつけるよ。だから、君の方もくれぐれも先走らないように。自分の力を過信しないでシェラさんたちと協力すること」
「うん……分かってる。なんと言っても、例の約束だってあるもんね！お互い、元気な姿でグランセル城で会いましょ！」
「うん……必ず！」
「ヨシュアさん。隠された水路にはどんな魔獣がいるか判りません。どうか、気を付けてくださいね」
「わかった。くれぐれも気を付けるよ」
「エステルのことは心配しなさんな。あんたと今まで旅して色々と成長したみたいだからね。遊撃士としてだけじゃなくて女としても、みたいだけど？」
シェラザードがちらっとエステルを見た。

「シェ、シェラ姉……」
「???どういう事ですか?」
「ま、まだ判らなくていいの！」
エステルがヨシュアを止めた。
「やれやれ、この非常事態に何とも頼もしいガキどもだぜ」
「はは、まったくだな。さて……そろそろ俺たちは行くぞ」
「また会おう、仔猫ちゃんたち?」
「女神（エイドス）の加護を！」
そうして、ヨシュアたち3人は先に行ってしまった。
「……ヨシュア……」
「（ねえねえ、お姫さま……。やっぱりあの子たち旅先で何かあったのかしら?）」
シェラザードがそっとクローゼに耳打ちした。
「（……そうかもしれませんね。2人とも、とても良い顔をしてらっしゃいましたから……。……ちょっぴり羨（うらや）ましいかな……）」

―王都グランセル　南街区

ヨシュアたちが王都グランセルに到着した。王都はすでに王国軍の一般兵にかわり、特務兵たちが巡回していた。
「……一般兵に替わって特務兵たちが巡回していますね」
「離宮を落とされて敵さんも必死なんだろうさ。しかし、何とも物々しい雰囲気だぜ」
「よし、こういう時こそボクのリュートで張りつめた空気を和ませて……」
オリビエがリュートを取り出そうとした。
「目立つことをしていると、またあの人が飛んできますよ。確か、ミュラーさんでしたっけ?」
「そ、そうだった……。2人とも、帝国大使館には絶対に近寄らな

いでくれたまえ！」
オリビエが必死に言った。
「はは、お互い大使館に寄ってるヒマは無さそうだな。準備を整えしだい、地下水路に降りるとしよう」

―グランセル東街区　地下水路
「さてと……。例の隠し水路の場所を確認した方が良さそうだね」
「そうですね……ちょっと待っててください」
ヨシュアが地下水路の地図を広げた。
「今、俺達がいるのが右下の階段マークの所で……。中央の『＝』が付いている所が隠し水路の入口ってわけだな」
「はい……。まずは、この場所に行ってあたりの壁を調べてみましょう」

「このあたりが地図にある『＝』の場所ですね」
ヨシュアたちはそれらしき場所に来た。
「ふむ、見たところ何の仕掛けもなさそうだが……。さすがは王家の仕掛けだな」
「ねっちり、みっちりと調べてみるしかなさそうだねぇ」
「……まずは僕が調べてみます」
そういってヨシュアが調べ始めた。そして、数分後……。
「あった……これだ」
ヨシュアがレンガの一つを操作すると、壁が開いた。
「お見事」
「ふーん、大したものだ。こういう仕掛けを見つけるコツでもあるのかい？」

「コツというか……単なる慣れだと思います。自然と指先が探り当てるんです」
「自然とねえ……。ヨシュア君って、その昔、伝説の少年怪盗をしていたとか？活劇物に出てくるようなやつ」
「あのですね……」
「時間がない。とっとと行くとしようぜ。ここからが本番だからな」
そうして、ヨシュアたちは隠し通路の攻略を始めた。

―地下水路　北区画
ヨシュアが扉の前で立ち止まった。扉の先が石の壁で塞がれていたのだ。
「おっと……。ひょっとしてここが終点かな？」
「ええ、さっきと同じ隠し扉のスイッチがあります」
「ふむ、だったら正午までここで待機した方が良さそうだな」
「ええ、そうしましょう」
「よし……。正午までここで待機するぞ。時間が来たら一気に突入する」
「やれやれ、今のうちに身体を休めておくとしようか」
ヨシュアたちは正午まで待機することにした。

―王都グランセル　市街地の門前
「よし……。各員、そのまま待機。正午の鐘と同時に突入する」
ユリア中尉や遊撃士たちのチームが物陰に身をひそめていた。

―エルベ周遊道　外れの池
「情報部の特務艇……。こんな形で乗るなんて」
エステルたちが特務艇を目の前にしていた。
「なんていうか……やたらと趣味の悪い飛行艇ね。あの空賊艇といい勝負だわ」
「でも、かなりの機体性能（スペック）であることは間違いありません。こんな船を、情報部はどうやって調達したのか……」
「うーん、そういえば。あの《ゴスペル》といい色々と謎が多いわね……」
「やあ、殿下。お待ちしていましたよ」
飛行艇から男性が降りてきた。
「ペイトンさん。どうもお久しぶりです」
「えっと……この人は？」
エステルがクローゼに尋ねた。
「ペイトンさんといって《アルセイユ》の整備をしている方です」
「といっても、中央工房から出向している技術要員ですけどね。《アルセイユ》は試験飛行段階なので色々とデータを取る必要があるんです」
「へえ、そうなんだ。ルーアンで見た時はちゃんと飛んでいたけど……」
「もちろん、通常飛行は可能ですけどね。新型の導力機関（オーバルエンジン）が開発が遅れて旧型を載せているだけで本来の性能が引き出せていないんです。ともかく、《アルセイユ》は情報部に奪われ、試験飛行も無期延期……。王都で途方に暮れていたところをユリアさんが呼んでくれたんです」
「なるほど……」
「ふふ……。よろしくお願いするわね」
「ま、任せてください！一応、ロックは外して操縦できるようにしました。かなりの高機動なので操縦するときはお気をつけて」
「わかりました」

「それじゃあ、早速乗り込みましょ！」
エステルたちが飛行艇に乗り込もうとした時、
「……そうだ、皆さん。一応、皆さんのオーブメントを調整する道具を持ってきました。あと、種類は少ないですけど装備や道具なども用意しています」
「え、ほんと！？」
「あら、気が利くじゃない」
「とても助かります。ありがとうございます」
「こ、このくらいお安いご用です。用があれば声をかけてください」
エステルたちは最後の調整を行った。

「もう正午まであまり時間はありません。乗り込んでエンジンを起動しますか？」
「ええ、急ぎましょ」
「わかりました。……ペイトンさん。サポートをお願いします」
「了解しました。エンジンの調整は僕に任せて殿下は操縦に専念してください！」
「シェラ姉、いよいよね……」
「ええ……。難しいミッションだけど、基本は何も変わらないわ。迅速に……そして着実にね」
エステルたちは飛行艇に乗り込み、正午を待った。

第5章　王都撩乱（39）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

グランセル城解放のため、各員が配置についた。次回、グランセル城解放作戦が幕を開ける！

第5章　王都撩乱（４０）（前書き）

いよいよグランセル城を攻略開始！

第5章　王都撩乱（40）

―王都グランセル　正午　リベール通信社

「ちっ……。始まっちまったか！行くぞ、ドロシー！見晴らしのいい場所を探すんだ！」

ナイアルが世紀の大事件を記事にしようと必死だ。

「ま、待ってくださいよ～！すぐに感光クオーツをセットしちゃいますから～！」

ドロシーは慌ててカメラの調整をしている。

「おいおい、どうしたのかね！？3日ぶりに顔を見せたと思ったら……」

編集長がなにやら忙しそうにしているナイアル達に尋ねた。

「スクープです！《リベール通信》始まって以来のどでかいスクープなんですよ！

―グランセル城

ヨシュアたちが正午の鐘と同時にグランセル城に侵入した。

「城門の開閉装置は親衛隊の詰所にあります！南側の階段を登りましょう！」

「応！」

「フッ、行くとしようか！」

―グランセル城　親衛隊詰所

「え……！」

「バカな、侵入者だと！？」

特務兵たちはいきなり現れたヨシュアたちに驚いた。大半の人員は市街地と空中庭園に配置されていたため、城内は比較的手薄のようだ。
「侵入された方は必ずそう言うんだよね」
「ま、気持ちは判らんでもないが」
「……行きます！」
ヨシュアたちが見張りたちと戦闘開始！

～戦闘？　特務兵×４、軍用犬×２
７ターンで楽々終了。

「よし、一丁上がりだ」
「やれやれ、あっけない」
「今から城門の開閉装置を操作します！敵が来たら撃退してください！」
ヨシュアが城門の開閉装置を操作し始めた。
「おお、任せとけ！《不動のジン》の名に賭けて誰一人として中には入れん」
「フッ、今こそ天上の門が開く時……。最終楽章の始まりだ！」

―グランセル城　城門前
「な、なんだ……？」
「おかしいな……。完全封鎖と聞いていたのに」
見張りの特務兵たちがいきなり開いた城門を不審に思っていた。
「なっ！？」
「馬鹿な！！」

その時、ユリア中尉率いる突撃隊がグランセル城になだれ込んできた。

―グランセル城　空中庭園

「う、嘘ですわ……！どうして城門が勝手に……」

その様子をカノーネ大尉は信じられないとばかりに見ていた。

「た、大尉どの！いかがいたしましょう！？」

「このままでは敵に城内に入られてしまいます」

空中庭園に集められていた特務兵たちが取り乱していた。

「第１小隊を残して全員、玄関広間に急ぎなさい！敵を城内に入れてはなりません！」

「ラ、ラジャー！！」

空中庭園にいた特務兵たちは玄関広間に急行した。

「くっ、何たる失態……。閣下が戻られる前に何としても撃退せねば……」

「た、大尉どの！」

「と、特務飛行艇が！」

控えていた特務兵２人が上空に気付いたようだ。

「しまった！そちらが本命か！？」

上空からエステルたちの乗った特務飛行艇が空中庭園に着陸した。

「エ、エステル・ブライト！？。それに……クローディア殿下！？」

「カノーネ大尉！またお邪魔するわよ！」

「お祖母さまを……解放していただきます！」

「な、舐めるなァ、小娘ども！」

カノーネ大尉たちと戦闘開始！

～戦闘？　カノーネ大尉、特務兵×２
１１ターンであえなく終了。最後はクローゼの一突きでした。

カノーネたちをボコボコにして気絶させたエステルたち。
「鬼気迫るというか……。妙におっかない女だったわね。いったい何者なの？」
シェラザードがエステルに尋ねた。
「リシャール大佐の副官よ。典型的な雌ギツネって感じ」
エステルがムカッとしながら言った。
「なるほど、そんな感じだわ。さてと……目指すは女王宮ね！」
「はい、急ぎましょう！」

―女王宮　入口前
「いたぞ！」
「こっちだ！」
特務兵たちがやってきた。
「わっ、また来た！」
「フン、しゃらくさい！」

～戦闘？　特務兵×３、軍用犬×２
１４ターンで返り討ち。

「き、来たぞ！」

「ここは通さん！」
入口の見張りが武器を構えた。
「でも……通らさせてもらいます！」
「邪魔したらブッ飛ばすわよ！」

～戦闘？　特務兵×２、軍用犬×２、重装軍用犬×２
２１ターンでブッ飛ばしちゃいました。

―女王宮　玄関
「は、反逆者ども！のこのこと来おったな！？私を新たなる国王と知っての狼藉か！？」
デュナン公爵が護衛に守られながら言った。
「冗談は髪型だけにしなさいよ。あんた、まだ国王になったわけじゃないでしょ」
「な、なぬう！？」
「デュナン公爵閣下ですね。私たちは遊撃士協会の者です。クローディア殿下の依頼で女王陛下の救出に来ました。大人しくそこを通してくれるとこちらも助かるんですけど」
「ク、クローディアだと！？あの小娘……余計なことをしおって！！」
「デュナン小父様……。もう、終わりにしてください。小父様はリシャール大佐に利用されていただけなんです」
「な、何だそなたは……。……」
デュナン公爵がクローゼを見た。
「ク、ク、ク、クローディアではないか！」
気付くの遅ッ！
「なんだその髪は！？その恰好は！？」
「やっと気付いたのか……。こりゃ、ルーアンで会った時も気付い

てなかったわけだわ」
「よく判らないけど、ずいぶんと抜けた人みたいね」
「あの、黙っていた私が悪かったんだと思います……」
「こ、この私をよくもたばかってくれたな！これだから女という生き物は信用がおけんのだ！小狡く、狭量で、ささいな事ですぐ目くじらを立てて……。そんな下らぬ連中に王冠を渡してなるものか！」
「……」
「……」
「……」
エステルたちはデュナン公爵を無言のまま睨んだ。
「……え……その……」
「か、閣下……。今のはマズイのでは……」
「あ、謝った方がいいかと……」
特務兵たちがサポートしたが、
「ふーん……下らない連中か」
「いやはや、見直したわ。このご時世に大した度胸がある発言ね」
「ご、ごめんなさい小父様。今のはちょっと……弁護できそうにありません」
時すでに遅しだった。

～戦闘？　デュナン公爵、特務兵×2、重装特務兵×1
エステルたちの怒りが炸裂し、9ターンで終了。デュナン公爵は見せしめのために生かしておきました。

「はい、一丁上がりと！さーて、お次は公爵さんの番かしら？」
エステルたちが次々と倒していく様を見て、公爵が一歩下がった。
「女ごときが振るう鞭の味、味わってもらおうかしらねぇ？」
「ひ、ひえええええ……。寄るな、寄らないでくれええ！」

「あ、あの……。そのあたりで許してあげては……」
「くっ、こうなったら陛下を盾にするしか……。……ええい、ままよ！」
デュナン公爵が振り返って、走り出した時、階段に顔面を思いっきりぶつけてしまった。
「ぎゃうっ……」
そして、頭の上に小鳥が出現……。
「あちゃあ……。ちょっと脅しすぎたかも」
「まあ、邪魔したのは事実だし、いい薬になったんじゃない？」
「はい……。不幸な事故だと思います。でも、気絶した小父様をこのままにしておくわけにも……」
「……こ、公爵閣下！？」
外から執事フィリップが慌てて入ってきた。
「あ、フィリップさん！」
「エステル様……。それにクローディア殿下……。この度は、我が主が迷惑をおかけして申しわけありません！全ては、閣下をお育てしたわたくしの不徳の致すところ……。どうか、これ以上の罰はわたくしめにお与えくだされ！」
執事フィリップは深々と頭を下げた。
「ちょ、ちょっと待ってよ！」
「フィリップさん……どうか頭をお上げください。私たちは、お祖母さまを……陛下をお助けしに来ただけです。もとより、小父様に何もするつもりはありません。どうか、私の部屋で小父様の手当てをしてあげてください」
「で、殿下……」
「実際、大した傷はないわ。ぶつかったショックで気絶しているだけだから大丈夫」
「み、皆様……本当にありがとうございます。このご恩、決して忘れませんぞ！」
そう言って執事フィリップはデュナン公爵を運んで行った。

―女王宮　アリシア女王の部屋
アリシア女王の部屋には誰もいなかった。
「あれ、誰もいない……？」
「奥のテラスかもしれません。急ぎましょう！」

―テラス
「お祖母さま、大丈夫ですか？」
「助けに来ました、女王様」
「クローディア……。それにエステルさんも……」
「ようやく来たか……。待ちくたびれてしまったぞ」
奥から現れたのは、ロランス少尉だった。
「ロ、ロランス少尉！どうしてこんな所に……」
「フフ……。私の任務は女王陛下の護衛だ。ここにいても不思議ではあるまい？」
「ふ、ふざけないでよね！いくらあんたが腕が立ってもこっちは３人もいるんだから！」
「なに、こいつ……。ずいぶん腕が立ちそうね。いったい何者なの？」
シェラザードが尋ねた。
「情報部、特務部隊隊長。ロランス・ベルガー少尉！もと猟兵あがりで大佐にスカウトされた男よ！」
「ほう、そこまで調べていたか。さすがはＳ級遊撃士、カシウス・ブライトの娘だ」
「！！！」
「外部には公表されていない先生のランクを知っているなんて……。

こいつ、タダ者じゃないわね」
「フフ……。お前のことも知っているぞ。ランクC、《銀閃》シェラザード・ハーヴェイ。近々、ランクBに昇格予定らしいな」
ロランス少尉は全てを知っているらしい。
「……」
「あ、あの……。お祖母さまを返してください。もしあなたが大佐に雇われただけなのならもう戦う理由などないはずです」
「この世を動かすのは目に見えている物だけではない。クオーツ盤だけを見ていては歯車の動きが判らぬように……」
「え……」
「心せよ、クローディア姫。国家というのは、巨大で複雑なオーブメントと同じだ。人々というクオーツから力を引き出すあまたの組織・制度という歯車……。それを包む国土というフレーム……。その有様を把握できなければあなたに女王としての資格はない」
「!?」
クローゼは何を言いたいのか分からない。
「面白い喩えをするものですね。ですが……確かにその通りなのかも知れません。まさか、この場で国家論を聞くとは思いませんでしたけれど……」
「フ……これは失礼した。陛下には無用の説法でしたな」
「な、なんかよく判らないけど……。要するに、女王様を解放する気はないってわけね」
「だとしたら……どうする?」
「決まってる……。力ずくでも返してもらうわ!」
「そうね……。ここまで来て後には引けない」
「あなたからは敵意は感じられませんけど……。お祖母さまを取り戻すためなら剣を向けさせていただきます!」
「フフ、いいだろう……。ならば、こちらも少し本気を出させてもらうぞ」
「え……!?」

ロランス少尉が仮面を取った。
「……」
「……銀髪……」
「いや……アッシュブロンドね……。どうやらこいつ……北方の生まれみたいだわ」
「フフ……。北であるのは間違いない。まあ、ここからそれほど遠くはないがな」
「え……」
「お前たちが女であろうが手加減するつもりはない……。……行くぞ」
ロランス少尉がかかってきた。

～戦闘？　ロランス少尉
《１ターン目》
エステル　掛け声　エステル・シェラザード・クローゼ　ＳＴＲ＋２０％
《２ターン目》
ロランス少尉　通常攻撃　エステル０ダメージ
《３ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　待機
《４ターン目》
シェラザード　通常攻撃　ロランス少尉　６０３ダメージ
《５ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　発動　クローゼ　ＳＰＤ　＋５０％
《６ターン目》
ロランス少尉　アーツ　待機
《７ターン目》
エステル　金剛撃　ロランス少尉　７６２ダメージ　アーツ解除

《８ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　待機
《９ターン目》
シェラザード　通常攻撃　　ロランス少尉　６００ダメージ
《１０ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　発動　　エステル　ＳＰＤ　＋５０％
《１１ターン目》
ロランス少尉　アーツ　待機
《１２ターン目》
ロランス少尉　アーツ　アンチセプト零　（封魔効果）
エステル・シェラザード・クローゼ　無効
《１３ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　待機
《１４ターン目》
クローゼ　アーツ　クロックアップ改　発動　　シェラザード　ＳＰＤ　＋５０％
《１５ターン目》
エステル　通常攻撃　ロランス少尉　６８４ダメージ
《１６ターン目》
シェラザード　通常攻撃　ロランス少尉　６６６ダメージ
《１７ターン目》
ロランス少尉　アーツ　待機
《１８ターン目》
クローゼ　ケンプファー　　ロランス少尉　５９７ダメージ　ＳＴＲ・ＤＥＦ　－５０％
《１９ターン目》
エステル　Ｓクラフト　桜花無双撃　　ロランス少尉　３６５１ダメージ
ロランス少尉　戦闘不能

「驚いたな……。まさかここまでやるとは」
ロランス少尉が膝をつきながら言った。
「はあはあ……。あ、あんた！決勝で手を抜いてたわね！？あの時とはケタ違いじゃない！」
「こ、こんな化物によく勝てたわね……」
「し、信じられません……」
シェラザードとクローゼもかなり疲弊（ひへい）している。
「エステル・ブライト……。侮っていたことは詫びよう。お前ならあるいは……父親の域まで達するかもしれん」
「え……」
「だが……今はまだまだだ」
ロランス少尉がいきなり立ち上がると、エステルたちに剣を振り下ろした。どうやら、まだまだ余力が残っているようだ。
「きゃああ……！」
「ぐっ……」
「きゃあっ！」
エステルたちは一撃で切り伏せられた。
「クローディア！エステルさん！」
アリシア女王がエステルたちの元に近寄ってきた。
「陛下、それ以上は動かないでいただこう。死ぬようなケガではない」
「……。その瞳……なんて深い色をしているのかしら。まだ若いのに……たいそう苦労してきたようですね」
「……。女王よ、あなたに俺を哀れむ資格などない。《ハーメル》の名を知っているあなたには……」
「！？」
アリシア女王はその言葉に驚愕した。
「さてと、そろそろ時間だ。お望み通り、女王陛下は返してやろう」

「へ……！？」
「大佐を止めたければ地下に急いだ方がよかろう。もはや手遅れだろうが……。無用な被害が広がるのを食い止められるかもしれん」
「地下に……まさか、あの場所から地下に降りたという事ですか？」
「フ……今のあなたならばその意味が嫌というほど判るはず。彼らを導いてやるといいだろう。……それでは、さらばだ」
ロランス少尉はそう言い残し、数百メートルもあるテラスから飛び降りた。
「な！？」
「しょ、正気！？」
エステルが飛び降りて下を見たが、ロランス少尉はどこにもいなかった。
「い、いない……。池に落ちたのかな……？」
「それにしては……湖面が波立っていないわ……。あの男、いったい……」
「お祖母さま……お怪我はありませんか！？」
クローゼがアリシア女王に走った。
「大丈夫よ、クローディア。乱暴なことはされていません。それよりも……」
「エステル！」
部屋の方からヨシュアの声が聞こえてきた。それと同時に、ユリア中尉やジンたちも来た。
「ヨシュア！？よかった、無事だったみたいね！」
「エステルの方こそ……。リシャール大佐やロランス少尉が城内にいなかったから心配だったんだ」
「あの赤ヘルムならさっきまでここにいたけど……」
「え……！？」
「その手すりを越えて飛び降りて逃げていったわ。とんでもない化物ね、あれは……」
シェラザードはため息しか出ないようだ。

「そ、そうだったんですか……。本当によかった……君が無事でいてくれて……」
「ヨシュア……」
「陛下……よくぞご無事で……」
「ユリア中尉……また会えてうれしいわ。それに皆さんも……本当に感謝の言葉が尽きません」
「フッ、女王陛下。過分なお言葉、ありがたき幸せ」
「お役に立てたならば幸いです。ですが、まだこれで終わりではなさそうですな」
「城内の特務兵は鎮圧しましたがよくない報せが届いています。各地の正規軍部隊が王都を目指しているとのこと……。どうやら、情報部によってコントロールされているようです」
「そうですか……」
「失礼ですが、あまり時間がありません。どうか今すぐ飛行艇でここから脱出なさってください」
「いえ……それはできません。それよりも……どうやら大変なことになりました。何としても、リシャール大佐を止めなくてはなりません」
「ど、どういう事ですか？」
「昨夜、大佐と話をしてみてようやく真の目的が判りました」
大佐は国を乗っ取るのが目的ではなかったようだ。
「どうやら彼は、《輝く環（オーリオール）》を手に入れるつもりのようなのです」
「《輝く環（オーリオール）》……。そ、それってどこかで聞いたことがあるような……」
「古代人が女神から授かった《七の至宝（セプト＝テリロン）》のひとつ……。全てを支配する力を持つといわれる伝説のアーティファクトのことですね」
「ああ、アルバ教授が言ってた……。でもそれって、教会に伝わっているただのおとぎ話なんでしょう？」
「……」

アリシア女王は何も言わず黙っている。
「え……」
「ふむ、存在するのですね？このリベール王国のどこかに」
「古き王家の伝承にはこうあります。『輝く環、いつしか災いとなり人の子らの魂を煉獄へと繋がん。我ら、人として生きるがために昏き闇の狭間にこれを封じん……』」
「『人の子らの魂を煉獄へと繋がん』……。なんとも……不気味な言葉ですな」
「この言葉は、代々の国王への戒めとして伝えられてきました。おそらく《輝く環》と呼ばれる何かはその危険性ゆえ、王家の始祖によって封印されたのだと推測できます。そして、王都の地下から検出された巨大な導力反応……。この２つを結びつけて考えたら……」
「王都の地下に《輝く環》が封印されている……。そう考えるのが自然でしょうね」
「ええ……。大佐もそう考えたのでしょう。《輝く環》がどういう物なのかは伝承にも残っていませんが……。もし、蘇らせてしまったら大変なことが起きるかもしれません。それこそ過去に起きたという伝説の《大崩壊》に匹敵する……」
「そ、そんな……」
「参ったわね、こりゃあ……」
「あ、あの女王様！ロランス少尉は『地下に行け』と言ってましたけど……。あれってどういう意味なんでしょう？」
エステルが先ほどのロランス少尉の言葉の意味を尋ねた。
「このグランセル城には不思議な部屋があるのです……。特に何も保管されていないのに昔から立入禁止とされた場所……」
「あ……」
「宝物庫のことですか！？」
クローゼとユリア中尉は知っていたようだ。そして、それを聞いて、一同は宝物庫へと向かった。

第5章　王都撩乱（４０）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

リシャール大佐の真の目的が判明した！エステルたちはそれを確かめるため宝物庫へ向かう！

第5章　王都撩乱（41）

―宝物庫前

「間違いありません……。つい最近、ここを頻繁に出入りしたような跡があります」

ヨシュアが宝物庫の扉を調べて言った。

「……それだけじゃないわ。かなり重量のある物が運び込まれたような跡もある」

「おそらく、予備の鍵を使って中で何かをしていたのでしょう。調べてみる必要がありそうですね」

アリシア女王は鍵を取り出し、宝物庫を開けた」

―宝物庫

「こ、こんな場所にエレベーターが……。こんな物、無かったはずなのに！」

ユリア中尉が目を疑った。そこにはエレベーターが設置され、工事された跡があった。

「わざわざ大佐が建造させたということか……。とすると、このエレベーターで《輝く環》が封じられた場所に降りることができるわけですな」

「ええ……。ひょっとしたら、これこそが今回のクーデターを起こした真の目的だったのかもしれません。王城を占領でもしない限り、こんなものを造るのは不可能ですから」

「ま、まさかそんな……」

「ふむ、ありうるかもしれない。どこの国でもそうだが、王権が守る聖域とは不可侵のものだ。それを破るとなれば、よほど思い切った強行手段に出る必要があるだろう」

「いずれにせよ、これを使って地下に降りる必要がありますね。まずは動かしてみましょう」
ヨシュアはエレベーターのパネルを調べ始めた。
「！！！」
ヨシュアが何かに驚いたようだ。
「どうしたの、ヨシュア？」
「これは……導力的な方法でロックされている。特殊な結晶回路（クオーツ）を組み込んだ鍵を使わないと動かせないみたいだ」
「あ、あんですって～！？」
「そんな、ここまで来て……」
「拘束してある特務兵を締め上げて聞いてやります！どこかに鍵があるかもしれません！」
結構過激なユリア中尉。
「ええ……そうした方がよさそうですね」
「いや、それには及びませんぞ」
全員が後ろを振り返ると、そこにラッセル博士がいた。
「え……！」
「まさか……！」
「まあ……ラッセル博士！？」
「アリシア様。ご無沙汰しておりましたな。エステルとヨシュアも元気そうで何よりじゃ」
「ちょ、ちょっと……。なんで博士がここにいるのよ！」
「ツァイスで、情報部に追われていたんじゃ……」
「それに、博士がここに来ているということは……」
「お、おじいちゃあ～ん。どこに行っちゃったのぉ！？」
「こら、チョロチョロと動き回ってるんじゃねえよ。爺さんもそうだが、落ち着きのない一家だな」
「だ、だってアガットさん……。あ……！」
外が騒がしいと思ったら、ティータとアガットが入ってきた。
「ティータ！？」

「やっぱり……」
「エステルお姉ちゃん！それにヨシュアお兄ちゃん！」
ティータがエステルにしがみついてきた。
「わわ、ティータ……」
「よ、よかったぁ。また会うことができて～。ギルドで聞いたらお姉ちゃんたちがお城で戦っているって聞いて。うう、無事で良かったよう～！」
半泣きのティータ。
「ティータ……」
「ありがとう……。心配してくれたみたいだね。アガットさんも……よくご無事でしたね。どうして王都にいるんですか？」
「いや、ひょんなところで王都行きの貨物船を見つけてな。灯台下暗しを狙って来てみたら騒ぎが起こってるじゃねえか。で、エルナンに事情を聞いてわざわざ来てみたってまけだ。おっと、ヤツからの預り物もあるぜ」
アガットは依頼の成功報酬をエステルに渡した。
「い、いいのかな……。ちゃんと報告してないのに」
「親衛隊の伝令から大体の事は聞いたみたいだぜ。しかし、こんな所でガン首揃えてどうしたんだよ？てっきり残りの特務兵どもをブチのめせるかと思ってきたんだが。ん、あんたは……」
アガットがクローゼの方を見た。
「お久しぶりです、アガットさん。灯台ではありがとうございました」
「たしか、クローゼと言ったな？どうして、あんたみたいな学生がこんな場所にいやがるんだ？」
「どうやら、孫娘がお世話になったようですね。わたくしからもお礼を言わせてください」
「ああ、気にすんなって。単なる仕事のついでだからな。ところで婆さんはこの城の関係者か何かかい？」
アガットはアリシア女王のことを知らないようだ。

「ぶ、無礼者！この方をどなたと心得る！リベール国主たるアリシア女王陛下であるぞ！」
ユリア中尉がキレた。
「へっ……。そ、そういえばどっかで見たような気が……」
「やれやれ。相変わらず未熟者じゃのう」
「んだとう！」
アガットがラッセル博士に未熟と言われ、つっかかった。
「じょ、女王さま！？そ、それじゃあ……こっちのお姉ちゃんは……」
「女王陛下の孫娘のクローディア姫殿下だよ。僕たちはクローゼって呼んでるけどね」
「クローゼ。この子が博士の孫のティータよ。あたしたちの妹同然の子なの」
「そうですか……。初めまして、ティータちゃん。私のことはクローゼって呼んでくれると嬉しいです」
「は、はいぃ……。ク、クローゼさん……」
「あらやだ。この子、なんか可愛いわねぇ。あたしはシェラザード。エステルとヨシュアの先輩よ。シェラって呼んでちょうだい」
「は、はい、シェラさん……」
「それじゃあボクは『オリビエおにいちゃん』って……」
「あんたはやめい、あんたは」
やたらとにぎやかになった宝物庫……。
「それはともかく……。そのエレベーターが動かなくて困っておるようじゃな。いったいどういう事情なのかね？」
「実は……」
エステルたちはリシャール大佐の目的と《輝く環（オーリオール）》について説明した。
「おいおい、マジかよ……。シャレになってねえぞ」
「そんなものがこの下に埋まってるなんて……」
「ふむ……やはりわしが恐れていた通りじゃったか。このエレベー

ターを使えばその場所に降りられるようじゃな？」
「ええ、ですが特殊な鍵でロックされてしまっています。クオーツを使ったものらしくて……」
「ほうほう、あれか。ちょっと見せてみるがええ」
ラッセル博士がエレベーターを調べ始めた。
「これはわしが開発したカードキーを応用したものじゃな。同一の結晶回路を持つカードを差し込まないとロックは解除されん」
ラッセル博士が小型の装置を取り出してケーブルをカードスロットに差し込んだ。
「じゃが、この手の初期型にはプロテクトが実装されておらん。こうして、導力圧を調整して回路に負荷を流し込めば……」
ラッセル博士が回路に負荷をかけるとエレベーターの電源が入った。
「やった、さすが博士！」
「……お見それしました」
「ふふ……さすがですね。それではさっそく地下に降りてみるとしましょうか」
「た、大変です！」
アリシア女王たちが地下に降りようとした時、親衛隊の１人が駆け込んできた。
「なんだ、どうした！？」
「王都の大門に正規軍の一個師団が到着！情報部の士官によって率いられている模様です！」
「なに、もう来たのか！？」
「さらに湖上から３隻の軍用警備艇が接近中！い、いかがいたしましょうか！？」
「ええい、この大変な時に！」
「た、大変です！」
「……どうやら、わたくしが説得に出た方がよさそうですね」
「お、お祖母さま……！？」
「屋上のテラスに出て到着した部隊に声をかけます。ユリア中尉、

用意してください」
「で、ですが……万が一攻撃されてしまったら！」
「わたくしは彼らを信じます。誤解があったとはいえ、彼らもリベールの民……。わたくしの姿を見て、声を聞いてなぜ攻撃することがありましょう」
「……陛下……」
「エステルさん、皆さん……。こんな事を頼むのは非常に心苦しいのですが……」
「女王様……。それ以上は仰らないでください。リシャール大佐の野望はあたしたちが食い止めます！」
「どうかお任せください」
エステルたちは地下に降りて行った。

第5章　王都撩乱（41）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

リシャール大佐の野望を砕くため、地下へと降り立つエステルたち。

ついに、最終決戦の幕が開ける！

第5章　王都撩乱（42）（前書き）

王城の地下――封印区画に降りたエステルたち。

第5章　王都撩乱（42）

―封印区画　第1層

「な、なによここ……」

「古代ゼムリア文明の遺跡……」

エステルたちは自分たちの目を疑った。王都の地下にこのような巨大な場所が存在するとは思ってもみなかったからだ。

「相当古い遺跡のようじゃが死んではおらんようじゃの……。《四輪の塔》などと違って、装置が稼働しておるようじゃ」

「装置が動いてるだけじゃねえ。やばそうな化物がうようよいる気配がするぜ」

「ふ、ふえぇ……」

「このあたりの建材は最近持ってこられたものね。リシャール大佐の指示で建造されたということか……」

「まあ、間違いないだろうね。こんな地下深くで工事とはご苦労様なことだ」

「でも、思っていた以上に巨大な遺跡のようですね……。効率的に探索しないとすぐに迷ってしまいそうです」

「ふむ……。ここは、探索班と待機班に分かれた方がいいかもしれんな」

ジンが提案した。

「え、どういうこと？」

「つまり、安全な場所を拠点としてそこを足がかりにするんですね？」

「まあ、そういうことだ。探索班がルートを発見する間、待機班は拠点を守りながらいざという時の交替に備える。ルートが見つかったら全員で移動して新たな拠点を作る」

「なるほど……合理的だな」

「ならば、当面はこの場所を拠点にした方がよさそうじゃの。エス

テル、ヨシュア。さっそく探索班を決めるがええ」
「ええ、あたしたち！？」
「ですが……」
「今回の事件に一番深く関わっとるのはお前さんたちじゃ。みなも異存はないじゃろう」
「ええ、あたしは賛成よ」
「もちろん私もです」
「わ、わたしもお姉ちゃんが決めるなら……」
「チッ、仕方ねえな。お前らの指示に従ってやるよ」
「フッ……信じているよ。ボクを選んでくれることをね」
「ま、そういうことだ。ちゃっちゃと選んじまいな」
全員が賛成のようだ。
「ヨシュア……どうしよう？」
「深く考えることはないよ。いざとなったら、拠点に戻ってメンバーを交替すればいいからね」
「そっか、それじゃあ……」
エステルはジンとアガットを指名した。
「ジークを、エステルさんたちに付いて行かせるようにします。拠点になりそうな場所を見つけたら彼をこちらに向かわせてください。エステルさんたちがいる場所まで案内してもらいますから」
「ピュイ」
「なるほど、わざわざ戻らなくても済みそうだね」
「頼むわよ、ジーク！」
「ピューイ！」
「それでは探索、よろしく頼んだぞ」
エステルたちは探索を開始した。

―封印区画　第３層空中回廊

「やはりノコノコとやって来ましたわね……」
目の前に立ち塞がったのは空中庭園で気絶させたはずのカノーネ大尉だった。
「カノーネ大尉……」
「な、なんであんたがこんなところにいるのよ!?空中庭園で気絶してたんじゃ……」
「フン、このわたくしがあの程度のことで倒れるものですか。どうやら、グランセル城は奪われてしまったようですけど……。閣下が《輝く環》を手に入れればいつでも取り戻せるというものです」
「雌ギツネが……。ずいぶんいい気なもんだな。せいぜい夢でも見ていろや」
アガットが挑発した。
「ええい、お黙りなさい!とにかく、リシャール大佐の邪魔だけはさせませんわよ!いでよ、人形(マペット)ども!」
カノーネ大尉の上から巨大な機械人形(オーバーマペット)が降ってきた。
「わわっ……!」
「古代の機械を操ったのか……」
「フフ。我々の力を見くびってもらっては困ります。ここの調査を開始してからすでに膨大なデータを集めたわ。このように、強力な人形兵器(オーバーマペット)を操ることも不可能ではありません」
「おいおい、命知らずだな……」
「フン、何とでもお言いなさい。それでは……行きますわよ!」
カノーネ大尉と2度目の戦闘開始!

「こ、今度は完全に気絶してると思うんだけど……」
またもカノーネ大尉をボコボコにしたエステルたち。
「うん……。しばらくは動けないと思う。それよりも……彼女がここを守っていたということはこっちのルートで正しいみたいだね」
「あ、確かに……。それじゃあジークにお使いしてもらおうかな。

おーい、ジーク！」
エステルがジークを呼び、仲間を呼び寄せた。

「先ほど検出した導力反応から遺跡の規模を割り出してみたが……。どうやらこのあたりが遺跡の中間地点のようじゃの」
ラッセル博士が導力判定装置を見て言った。
エステルたちは数時間探索したが、それでもまだ半分だった。
「ふう、やっと半分かぁ。急がなくちゃいけないのになんだか焦るわね……」
「でも、ここで焦ったらかえって迷うかもしれない。無理せず確実に進んでいこう」
「うむ……。ここが踏ん張りどころじゃ。いつ大佐と戦ってもいいように万全の準備をしていくがいい」
エステルたちはしばらく休んでから探索を再開した。

―封印区画　最下層
ついに、最下層に降り立ったエステルたち。
「ここって……。何だか今までの場所と雰囲気が違う気がする……」
エステルが今までとは違った雰囲気に身震いした。
「確かに……。息苦しい感じがするぜ」
「たぶんここが終点だ。万全の準備をしてから中に入ったほうがよさそうだね」
エステルたちは覚悟を決めて中に入った。

第5章　王都撩乱（４２）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

封印区画・最下層に辿り着いたエステルたち。リシャール大佐との野望を止めるため、王国の運命を賭けてエステルたちが最終決戦に臨む！

第5章　王都撩乱（43）

―封印区画　最終層　最深部

そこには思った通り、リシャール大佐の姿があった。そして、リシャール大佐の後ろには何か分からないが古代の装置があった。そして、その装置に《ゴスペル》が組み込まれていた。

「……やはり来たか。何となく来るのではないかと思ったよ」

「リシャール大佐……。あたしたち、女王様に頼まれてあなたの計画を止めに来たわ」

「まだ《ゴスペル》は稼働させていないみたいですね。今なら……まだ間に合います」

ヨシュアはリシャール大佐に止めるよう言った。

「ふふ、それはできんよ」

「な、なんでよ!?そもそも《輝く環》（オーリオール）って何!?そんなもの手に入れてどうしようっていうのよ!?」

「かつて古代人は天より授かった《七の至宝》（セプト＝テリオン）の力を借りて海と大地と天空を支配したという。その至宝のひとつが《輝く環》だ。もし、それが本当に実在していたのだとしたら……。国家にとって、それがどういう意味を持つか君たちに分かるかね?」

「こ、国家にとって……」

「周辺諸国に対抗する強力な武器を手に入れる……。つまり、そういう事だな」

ジンが答えた。

「その通り……。知っての通り、このリベールは周辺諸国に国力で劣っている。人口はカルバードの5分の1程度。兵力に至っては、エレボニアのわずか8分の1にしかすぎない。唯一誇れる技術力の優位はいつまでも保てるわけではない。二度と侵略を受けないためにも我々には決定的な力が必要なのだよ」

「だ、だからといってそんな古代の代物をアテにしなくてもいいじゃないの！１０年前の戦争だって何とかなったんでしょう！？」
「あの侵略を撃退できたのはカシウス・ブライトがいたからだ。だが、彼は軍を辞めた。国を守る英雄は去ったのだ。そして、奇跡というものは女神と彼女に愛された英雄にしか起こすことはできない……」
「……」
「だから私は、情報部を作った。諜報戦で他国に一歩先んじることもそうだが……あらゆる情報網を駆使してリベールに決定的な力を与えられるものを探したのだよ。リベールが苦境に陥った時にふたたび奇跡を起こせるようにね」
「それって……奇跡なのかな？」
エステルが不意にリシャール大佐に言った。
「なに……？」
「えっと、あたしたちは遊撃士でみんなの大切なものを守るのがお仕事だけど……。でも、守るといってもただ一方的に守るだけじゃない。どちらかというと、みんなの守りたいという気持ちを一緒に支えてあげるという感じなの」
「それが……どうしたのかね？」
「父さんだって、別に１人で帝国軍をやっつけたわけじゃない。色々な人と助け合いながら必死に国を守ろうとしたんでしょ？みんながお互いを支え合ったから結果的に、戦争は終わってくれた。大佐だってその１人だったのよね？」
「……」
「今、あたしたちがここにいる事だって同じだと思う。大佐の陰謀を知った時はかなり途方に暮れちゃったけど……。それでも、色々な人に助けられながらここまでたどり着くことができたわ。それだって、奇跡だと思わない？」
「……」
「でも……それは奇跡でも何でもなくて……。あたしたちが普通に

持っている可能性なんじゃないかって思うの。もし、これから先、戦争みたいなことが起こっても……。みんながお互いに支え合えれば何でも切り抜けられる気がする。わけの分からない古代の力よりそっちの方が確実よ、絶対に！」

「エステル……」

「へっ、ナマ言いやがって」

「はは、さすがは旦那の娘だぜ」

「フフ……強いな、君は。だが皆が皆、君のように強くなれるわけではないのだよ。目の前にある強大な力……。その誘惑に抗うことは難しい。そして私は、この時にために今まで周到に準備を進めてきた。今更、どうして引き返せようか」

「……。……ひとつ、教えてください。どうして大佐は……この場所を知っていたのですか？」

「なに……？」

「女王陛下すら存在を知らなかった禁断の力が眠っている古代遺跡……。ましてや、宝物庫から真下にエレベーターを建造すればその最上層にたどり着けるなんて……。あなたの情報網を駆使したって知りえるとは思えないんです」

「それは……」

「そして、その《ゴスペル》……。ツァイスの中央工房をもしのぐ技術力で作られた謎の導力器……。あなたは、それをいったいどこで手に入れたんですか？」

「……答える義務はないな」

「違う……！あなたは、僕の質問に答えることができないんだ！」

「！！！」

「ど、どういうこと……？」

「ただあなたは、この場所に《輝く環》という強大な遺物が眠っていると確信していた。そして、その黒いオーブメントを使えば手に入ると思い込んでいたんだ。だけど、そう考えるようになったきっかけがどうしても思い出せない。そうなんでしょう！？」

「……」
「そ、それって……」
「ダルモア市長みたいに記憶をいじられた可能性があるってことか……」
「それがどうしたというのだ！強大な力の実在はこの地下遺跡が証明している！人形兵器（オーバーマペット）にしても現代の技術では製作不可能だ！ならば私は……私が選んだ道を征くだけだ！」
リシャール大佐の上から人形兵器（オーバーマペット）が２体降りてきて、古代の装置に組み込まれた《ゴスペル》から黒い光が溢れ出した！
「あ……！」
「君たちの言葉が真実ならば私を退けてみるがいい……。それが叶わないのであれば所詮は、青臭い理想にすぎん」
そして、リシャール大佐が腰に据えた剣に手を置いた。
「とくと見せてやろう！《剣聖》より受け継ぎし技を！」
「言ってくれるじゃない！」
「だったらこちらも遠慮なく行かせてもらいます！」
そして、最終決戦が始まった。

～最終戦闘？　リシャール大佐、フォトンジャッジ×２
《１ターン目》
エステル　掛け声　　エステル・ヨシュア・ジン・アガット　ＳＴＲ　＋２０％
《２ターン目》
ジン　龍神功　　ジン　ＳＴＲ・ＤＥＦ　＋３０％
《３ターン目》
アガット　スパイラルエッジ　　フォトンジャッジ１　９０３ダメージ

フォトンジャッジ　ＡＴ　ＤＥＬＡＹ
《４ターン目》
ヨシュア　アーツ　クロックアップ改　待機
《５ターン目》
リシャール大佐　移動
《６ターン目》
フォトンジャッジ２　ＡＡキャンセラー　　ヨシュア　０ダメージ　アーツ解除
《７ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　待機
《８ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　発動　　ヨシュア　ＳＰＤ　＋５０％
《９ターン目》
リシャール大佐　通常攻撃　　アガット　７２ダメージ
《１０ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　待機
《１１ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　発動　　ジン　ＳＰＤ　＋５０％
《１２ターン目》
エステル　通常攻撃　　フォトンジャッジ１　５２５ダメージ
《１３ターン目》
ジン　通常攻撃　　フォトンジャッジ１　ＭＩＳＳ
《１４ターン目》
フォトンジャッジ２　ドンキーミサイル　　エステル・ヨシュア　０ダメージ
《１５ターン目》
ヨシュア　双連撃　　フォトンジャッジ１　６１２＋６１８ダメージ
《１６ターン目》

フォトンジャッジ１　ドンキーミサイル　　エステル　０ダメージ
《１７ターン目》
アガット　スパイラルエッジ　　フォトンジャッジ１　８１０ダメージ

　フォトンジャッジ１　ＡＴ　ＤＥＬＡＹ
《１８ターン目》
リシャール大佐　光鬼斬　　ヨシュア　０ダメージ
《１９ターン目》
ジン　月華掌　　フォトンジャッジ１　９２４ダメージ
《２０ターン目》
フォトンジャッジ２　アトミックミサイル
《２１ターン目》
エステル　通常攻撃　　フォトンジャッジ１　ＭＩＳＳ
《２２ターン目》
ヨシュア　双連撃　　フォトンジャッジ１　５９７＋６０６ダメージ
《２３ターン目》
リシャール大佐　光鬼斬　　ジン　０ダメージ
《２４ターン目》
ジン　月華掌　　フォトンジャッジ１　１４８９ダメージ
フォトンジャッジ１　戦闘不能
《２５ターン目》
フォトンジャッジ２　ドンキーミサイル　　アガット　３０ダメージ
《２６ターン目》
ヨシュア　絶影　　フォトンジャッジ２　６３０ダメージ
　フォトンジャッジ２　ＡＴ　ＤＥＬＡＹ
《２７ターン目》
エステル　通常攻撃　　フォトンジャッジ２　７８７ダメージ

《２８ターン目》
リシャール大佐　光鬼斬　　ジン　０ダメージ
《２９ターン目》
ジン　移動
《３０ターン目》
アガット　スパイラルエッジ　　フォトンジャッジ２　９０３ダメージ

フォトンジャッジ２　ＡＴ　ＤＥＬＡＹ
《３１ターン目》
ヨシュア　移動
《３２ターン目》
ジン　通常攻撃　　フォトンジャッジ２　８７６ダメージ
《３３ターン目》
リシャール大佐　移動
《３４ターン目》
ヨシュア　双連撃　　フォトンジャッジ２　　５４０＋５７３ダメージ
《３５ターン目》
エステル　通常攻撃　　フォトンジャッジ２　５４３ダメージ
《３６ターン目》
リシャール大佐　光鬼斬　　ヨシュア　６０ダメージ
《３７ターン目》
ジン　通常攻撃　　フォトンジャッジ２　１１７０ダメージ
《３８ターン目》
ヨシュア　絶影　　リシャール大佐　４４７ダメージ
《３９ターン目》
エステル　掛け声　　エステル・ヨシュア・ジン　ＳＴＲ　＋２０％
《４０ターン目》

リシャール大佐　光輪斬　　エステル・ヨシュア　０ダメージ
《４１ターン目》
アガット　ドラグナーエッジ　　フォトンジャッジ２　ＭＩＳＳ
《４２ターン目》
ジン　通常攻撃　　リシャール大佐　１０１１ダメージ
《４３ターン目》
ヨシュア　通常攻撃　　フォトンジャッジ２　６１８ダメージ
フォトンジャッジ２　戦闘不能
《４４ターン目》
リシャール大佐　必殺技　《残光破砕剣》　　ジン　９６９ダメージ
《４５ターン目》
ジン　通常攻撃　　リシャール大佐　７３８ダメージ
《４６ターン目》
エステル　通常攻撃　　リシャール大佐　４６２ダメージ
《４７ターン目》
ヨシュア　双連撃　　リシャール大佐　７７４＋８７３ダメージ
《４８ターン目》
リシャール大佐　光輪斬　　ヨシュア　４２ダメージ　　エステル　１８ダメージ
ジン　０ダメージ
《４９ターン目》
アガット　移動
《５０ターン目》
ジン　通常攻撃　　リシャール大佐　ＭＩＳＳ
《５１ターン目》
エステル　通常攻撃　　リシャール大佐　５１９ダメージ
《５２ターン目》
リシャール大佐　光鬼斬　　アガット　１４７ダメージ
《５３ターン目》

アガット　通常攻撃　　リシャール大佐　５９４ダメージ
《５４ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　待機
《５５ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　発動　　ヨシュア　ＳＰＤ　＋５０％
《５６ターン目》
ジン　通常攻撃　　リシャール大佐　７２６ダメージ
《５７ターン目》
リシャール大佐　通常攻撃　　ヨシュア　３３ダメージ
《５８ターン目》
エステル　通常攻撃　　リシャール大佐　５１０ダメージ
《５９ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　待機
《６０ターン目》
ヨシュア　クロックアップ改　発動　　ジン　ＳＰＤ　＋５０％
《６１ターン目》
アガット　通常攻撃　　リシャール大佐　６６０ダメージ
《６２ターン目》
ヨシュア　双連撃　　リシャール大佐　５０４＋５２３ダメージ
《６３ターン目》
ジン　龍神功　　ジン　ＳＴＲ・ＤＥＦ　＋３０％
《６４ターン目》
リシャール大佐　必殺技　《残光破砕剣》　　アガット　１１２８ダメージ
《６５ターン目》
エステル　通常攻撃　　リシャール大佐　７２９ダメージ
《６６ターン目》
アガット　通常攻撃　　リシャール大佐　ＭＩＳＳ
《６７ターン目》

ヨシュア　双連撃　　リシャール大佐　４４２＋３８１ダメージ
《６８ターン目》
ジン　通常攻撃　　リシャール大佐　８８２ダメージ
《６９ターン目》
リシャール大佐　通常攻撃　　アガット　９３ダメージ
《７０ターン目》
エステル　通常攻撃　　リシャール大佐　４４７ダメージ
《７１ターン目》
ヨシュア　通常攻撃　　リシャール大佐　３８４ダメージ
リシャール大佐　戦闘不能

「さすがだ……。カシウス大佐の子供たち……。だが……一足遅かったようだ」
そのとき、《ゴスペル》の黒い光がさらに溢れ出した。
「しまった……！」
「くっ……！」
装置から出ていた幾何学的な金色の光が消え、その後すぐに地震が起こり始めた。
「チィッ、こいつは……！」
「これは……《陰》の気か！」
そして、《ゴスペル》の黒い光が周囲に広がった。たちまち、遺跡の光が消えていった。

―封印区画　第３層空中回廊
「しまった！《導力停止現象》か！」
ラッセル博士を含めた待機班の場所の光も瞬く間に消えていった。

―封印区画　最終層

「な、何だったの、今の……」

「導力停止現象なんだろうけど、今までのものとは違っていた……。まるで、何かが解放されたような……」

そうヨシュアが言った時、装置から再び幾何学的な金色の光が出てきた。

「……警告します……。全要員に警告します……」

いきなり装置がしゃべり始めた。

「え……」

「あの装置が喋っているんだ……」

エステルたちが装置の方を見た。

「《オーリオール》封印機構における第一結界の消滅を確認しました。封印区画・最深部において《ゴスペル》が使用されたものと推測……。《デバイスタワー》の起動を確認……」

装置が言った瞬間、エステルたちの周囲にあった４本の柱が地面に収納された。

「な、なによこれ！？」

「第一結界……《オーリオール》封印機構……。大佐、これはいったい！？」

ヨシュアがリシャール大佐に尋ねた。

「わ……わからない……。このような事態になるとは想定していなかった……」

そして、装置がまた喋り出した。

「第一結界の消滅により、《環》からの干渉波、微量ながら発生……。《環の守護者》の封印解除を確認……。全要員は、可及的速やかに封印区画から撤退してください……」

そして、最深部の横にあった扉が開き、巨大な人形兵器たち――

おそらく装置の言っていた《環の守護者》だろう――が出てきた。
「な、なに、このブサイクなの……」
確かに、その人形兵器のセンスはなかった。
「気を抜かないで！こいつが《環の守護者》だ！」
「おいおい……。こんなのと戦えってのか！？」
「見た目にごまかされるな！こいつら……尋常じゃない！」
そして人形兵器が起動し始めた。
「ゲート固定……導力供給完了……再起動確認……ＭＯＤＥ：索敵行動……座標確認……《環の守護者》トロイメライ……索敵行動開始……」
《環の守護者》トロイメライたちがエステルたちに飛び掛かってきた！

～最終戦闘？　《環の守護者》トロイメライ（索敵モード）、ポソープR、ポソープL
ポソープたちは無視して、本体だけ集中攻撃して２７ターンで楽勝。

「な、なんで倒れないの！？」
確かに倒した（本体のトロイメライだけだが）はずだが、《環の守護者》トロイメライは倒れなかった。
「まだ、何かするつもりだ！」
突然、《環の守護者》トロイメライはポソープRとポソープLを両腕につけ、機体の形を変形させた。（いわゆる、変形合体といったもの）
「ＭＯＤＥ：殲滅行動……《環の守護者》トロイメライ……これより殲滅行動を開始する……」

性懲りもなくまたもや襲ってきた《環の守護者》トロイメライ……。
返り討ちにして今度こそ壊れたプラモデル同然にしてくれる！

～最終戦闘？　《環の守護者》トロイメライ（殲滅モード）
殲滅モードでも何てことはなく、３２ターンで終了。

「はあはあ……。な、何とか倒せた……？」
リシャール大佐との戦闘から3連戦でさすがにエステルたちの身体はボロボロだった。
「う、うん……。動けなくはしたみたいだ……」
右腕、レーザー発射口、頭部と順次破壊して機能を麻痺させることができた。
「《環の守護者》か……。どうやら、そいつの目的は《輝く環（オーリオール）》を封印していたこの施設の破壊だったようだな……。そして、《輝く環》の封印と同時に扉の中で機能を停止したのか……。《輝く環》をめぐって古代人同士が対立していたのかあるいは……。しかし……肝心の《輝く環》はどこに……」
リシャール大佐が1人話していたとき、《環の守護者》トロイメライが立ち上がり、またも動き出した。どこまでしぶといヤツなんだ……。
「クッ……間に合うか！？」
「ヨ、ヨシュア……！」
「エステルッ……！」
エステルをめがけて腕を振り下ろそうとした《環の守護者》トロイメライ。ヨシュアがかばおうとしたが、急にトロイメライの腕がそれた。

「え……」
「……させんっ！」
リシャール大佐が剣で止めてくれた。
「た、大佐……！？」
「こいつは私が何とかする！早くここから逃げたまえ！」
「で、でも……！」
「君たちは今しがたこいつと死闘したばかりだ！私の方はもう動けるようになった！時間を稼ぐことくらいはできる！」
言うが早いが、リシャール大佐がトロイメライと１人戦い始めた。
その動きは神速のごとく、トロイメライに一方的だった。
「す、凄い……！」
「さすが、父さんの剣技を継いだだけはあるね……」
「何をしている！早く行け！！」
その時、トロイメライがリシャール大佐の剣を弾き飛ばしリシャール大佐を鷲掴みにした。
「う、うおおおおおっ！？」
「た、大佐！？」
「く……どうしたら！？」
「い、いいから行きたまえ！君たちとの勝負に敗れた時……私の命運は……尽きていたのだ！」
「そ、そんな……」
「だから……気にすることはない……。私の計画は失敗に終わったが……。最期に君たちを助けられれば後悔だけは……せずにすむ……」
「やれやれ……。諦めなければ必ずや勝機は見える。そう教えたことを忘れたか？」
突然、最深部の入口から男性の声が聞こえてきた。
「せいっ！」
男性がトロイメライの腕を一閃でへし折った。その男性は、カシウス・ブライトだった。

「え……！」
「まさか……！」
「今だ！止めを刺せ！！」
カシウスの声を受けて、エステルたちは《環の守護者》トロイメライに止めを刺しに行った。

～最終戦闘？　《環の守護者》トロイメライ（機能停止寸状態）
必殺技連発で2ターン終了。

今度こそ完全にバラバラになった《環の守護者》トロイメライ。
「か、勝ったぁ～～っ……」
「……みんな、ご苦労だったな」
カシウスがエステルたちのところにやってきた。
「ただいま。エステル、ヨシュア。ずいぶん久しぶりだな」
「と、と、と……父さん！？」
「まだまだ詰めは甘いが一応、修行の成果は出たようだな。今回は合格点をやろう」
「ご、合格点じゃないわよ！なによ、父さん！なんでこんな所にいるの！？」
「なんでって言われても……まあ、成り行きってやつ？」
口癖のように『成り行き』を使うカシウス。
「ど、どんな成り行きよっ！」
「はは、父さんも相変わらず元気そうだね」
「ほう、お前も少し背が伸びたみたいだな。どうだ、エステルのお守りは色々と大変だっただろう？」
「どーいう意味よ！？」

「まあ、それなりにね。でも、それと同じくらい僕もエステルに助けられたから。だからおあいこってところかな」
「そうか……。いい旅をしてきたみたいだな」
「こら、オッサン！今の今まで何を遊んでいやがった！？」
アガットがカシウスに怒鳴った。
「おお、不良青年。博士から話は聞いたぞ。お前にしてはずいぶん頑張ったみたいだな。いやぁ、えらいえらい」
「ガ、ガキ扱いするんじゃねえ！」
「冗談だ。特務兵の調査についても頑張ってくれたらしいな。娘たちも世話になったようだし感謝するぞ」
「お、おう……」
「やあ、旦那。ずいぶん遅いお帰りですね。待ちくたびれちまいましたよ」
「すまないな、ジン。君を共和国から呼ぶのはさすがに申しわけなかったが……。どうも胸騒ぎがして手紙を送らせてもらったんだ」
「いやいや、気にせんでください。こういう機会でもないと借りが溜まる一方ですからな。旦那自慢のお子さんたちの腕も見ることができましたし……。色々と楽しませてもらいましたよ」
「そうか……そう言ってくれると助かる」
「な、和やかに会話している場合じゃないってば！まったく、帰ってくるなり見せ場をかっさらって……」
「やれやれ……。どうやら片づいたようじゃの」
ラッセル博士たち全員が来た。
「おや、博士。ずいぶん遅い到着ですな」
「お前さんが先行した後、人形（マペット）の群れに囲まれてな。何とか撃退してからようやくたどり着いたが……。どうやら……全て片づいたみたいじゃな」
「ええ……。色々と課題は残ったがとりあえず一件落着でしょう」
「で、でも……。情報部に操られた大部隊がお城に迫ってるんでしょ」

「確かに……。警備艇も来ていたみたいだし。父さんが来た時、地上の様子はどうだった？」
「ああ。その事ならもう心配ないぞ。モルガン将軍に頼んで事態を収拾してもらっている。シードにも動いてもらったからじきに騒ぎは沈静化するだろう」
何とも手際がいいカシウス。
「あ、あんですって～っ！？」
「ふふ……なるほどな……。ここに来るまでに仕込みをしていたわけか……」
リシャール大佐がよろよろと立ちあがった。
「……目を覚ましたか」
「モルガン将軍には厳重な監視をつけていた……。シードも家族を人質にとって逆らえないようにしていた……。どちらもあなたによって自由の身になったわけですか……」
「まあ、そんなところだ。だがな、リシャール。俺がしたのはその程度のことさ。別におれがいなくたって彼らは自分で何とかしたはずだ」
「いや……違う。やはりあなたは英雄ですよ……。あなたが軍を去ってから私は……不安で仕方なかった……。今度、侵略を受けてしまったら勝てるとは思えなかったから……。だから……頼れる存在を他に探した。あなたさえ軍に残ってくれたら私もこんな事をしなかったものを……」
「……」
カシウスがリシャール大佐に近づいたかと思うと、カシウスは思いっきりリシャール大佐を殴り、吹っ飛ばした。
「ぐっ……！」
「甘ったれるな、リシャール！貴様の間違いは、いつまでも俺という幻想から解き放たれなかったことだ！それほどの才能を持ちながら、なぜ自分の足で立たなかった！？俺はお前がいたから安心して軍を辞めることができたのだぞ！？」

「た、大佐……」
「俺は……そんなに大層な男じゃない。10年前も、将軍やお前たちが助けてくれたから勝つことができた。そして、大切なものを守れずに現実から逃げてしまった男にすぎん」
「……」
「……父さん……」
「だがな……もう二度と逃げるつもりはない。だから、リシャール。お前もこれ以上逃げるのはよせ。罪を償いながら、自分に何が足りなかったのかを考えるがいい」

こうして、情報部によるクーデター計画は幕を閉じた。モルガン将軍とシード少佐によって王国軍部隊の混乱は収拾され……計画に荷担していた情報部の人間は各地で次々と逮捕されていった。

第5章　王都撩乱（４３）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

色々と問題点を残しながらもリシャール大佐の野望を阻止したエステルたち。そして、無事に女王生誕祭を迎えることになる。

第5章　王都撩乱（４４）

―王都グランセル　１週間後

予定通り、女王生誕祭が開催された。王都は生誕祭一色に染まり、グランセル城の前に大勢の人々がアリシア女王の姿を見ようと駆けつけた。

―遊撃士協会グランセル支部　３階

「――エステル・ブライト。並びにヨシュア・ブライト。今回の働きにより、グランセル支部は正遊撃士資格の推薦状を送ります。どうぞ、受け取ってください」

「はい！」

エステルとヨシュアは正遊撃士資格の推薦状を受け取った。

「これで、５つの地方支部での推薦状が揃ったわけですね。それではカシウスさん。よろしくお願いします」

「うむ」

エルナンに替わり、カシウスが前に出た。

「エステル・ブライト。並びにヨシュア・ブライト。これより、協会規約に基づき両名に正遊撃士の資格を与える。各地方支部での推薦状を提出せよ」

「は、はい……」

「どうぞ、ご確認ください」

エステルとヨシュアは5枚の正遊撃士資格の推薦状を渡した。

「ロレント支部、ボース支部、ルーアン支部、ツァイス支部、そしてグランセル支部……。５支部全てのサインを確認した。最終ランク、準遊撃士１級。ここまで行くとは思わなかった。正直、驚かされたぞ。女神（エイドス）と遊撃士紋章において、ここに両名を正遊撃士に任命

する。両者、エンブレムを受け取るがいい」
「はい！」
エステルとヨシュアは正遊撃士の紋章を手に入れた。
「おめでと、エステル、ヨシュア！」
「はは、新しいエンブレム、なかなか似合ってるじゃないか」
「まあ、今回ばかりはよくやったと誉めてやるよ」
「えへへ……みんな、ありがと！」
「ここまで来れたのも……皆さんが支えてくれたおかげです」
「遊撃士としてのキャリアはここからが本番だ。そのことを忘れないようにな」
「うん……わかってる」
「一層、精進するつもりです」
「さて、めでたい話の後で非常に申しわけないのですが……。ここで皆さんに、ひとつ残念な事をお知らせしなくてはなりません」
「残念な知らせ……？」
「本日を持ちまして、カシウス・ブライトさんが遊撃士協会から脱会します。しばらくの間、王国軍に現役復帰するとのことです」
「なっ……！」
「ほ、本当ですか！？」
この報告に王都の遊撃士４人が驚いた。
「長らく留守にした上に突然、こんな事を言い出して本当にすまないと思っている。だが、クーデター事件の混乱はいまだ収拾しきれていない。情報部によって目茶苦茶にされた軍の指揮系統も立て直す必要がある。その手伝いをするつもりなんだ」
「あ、そうか……。軍人は遊撃士になれないから……。そういえば、先輩たちはこのことを知っていたみたいですね」
アネラスがすでに知っていたシェラザードたちに尋ねた。
「ええ、相談を受けたからね。正直心細いけど……いつまでも先生に頼ってばっかりじゃあたしたちも一人前になれないし」
「まあ、これからは若手だけでも何とかなるって証明してやろうじ

ゃねえか」
シェラザードやアガットは前向きだ。
「そうか……そうだな」
「しかし、いつまでたっても忙しさから解放されないねぇ」
「まあ、こうして新たな正遊撃士が2人誕生したんだ。せいぜい俺の代わりにコキ使ってやるといいだろう」
「あのね……」
「はは、これからはもっと忙しくなりそうだね」
こうして、エステルとヨシュアは正遊撃士に昇格した。

―王都グランセル　グランセル城前
「まったく父さんってば……。生誕祭くらい、王都見物に付き合ってくれたらいいのに……」
エステルはカシウスが生誕祭に付き合ってくれないことに不満を漏らしていた。
「すまんが、さっそく軍議があってな。リシャールこそ逮捕されたが、いまだ逃亡中の特務兵も多い。カノーネ大尉も、あの地下遺跡でいつの間にか姿をくらませていた。さらに、大会に参加した空賊団も混乱にまぎれて逃亡したらしい。生誕祭の途中で騒ぎが起こらないよう警備を強化しなくてはならんのさ」
「まったく……。揃いも揃ってしぶとい連中ねぇ」
「たしかに、どちらも諦めが悪そうな感じはするね」
「まあ、警備の方は気休めさ。問題は、あの地下遺跡の出来事が何を意味していたかということだ。リシャールが封印を解いたことでどのような影響が出てくるのか……。《輝く環（オーリオール）》とは何なのか……。それを見極める必要があるだろう」
「うん……確かにそうよね。それに、リシャール大佐も記憶があやしいみたいだったし」

「うむ……クルツと同様、思い出せないことがあるそうだ。それでも取り調べの途中、一つだけ判明したことがある。あの黒いオーブメントの出所だ」
「え……！」
「製造元が判ったの！？」
エステルとヨシュアが身を乗り出した。
「いや……あれを情報部に持ち込んだ人間が判明した。情報部、特務部隊隊長。ロランス・ベルガー少尉だ」
「！！！」
「あ、あの人が……」
このことに2人は驚いた。
「情報部にスカウトされた時にリシャールに渡したらしい。そして、リシャールがクーデターを計画したのはちょうどその頃からだそうだ。どうやら、ロランス少尉の正体は徹底的に調べる必要がありそうだな」
「そっか……。得体が知れないとは思ったけど……。そうなると、あたしたちが素顔を見ただけでもラッキーね。言ってくれればいつでも似顔絵を描くわよ？」
「ああ、そのうち頼むぞ。もっとも、お前の絵心にあまり期待は持てないが……。シェラザードや陛下たちにでも頼んでおくか」
「む、どーいう意味よっ！」
「エステル……。ロランス少尉の顔、見たの？」
「あれ、話してなかったっけ？女王宮のテラスで戦う時にあのヘルメットを外したのよね。歳は２０歳くらいでアッシュブロンドの髪だったわ」
「え……」
「でも、女王様も言ってたけどやたらと荒(すさ)んだ目をしていたのよね。なんていうか……冷たいような、それでいて燃え盛っているような……。『あなたに哀れむ資格などない』とか女王様に向かって言ってたし……」

「哀れむ資格などない……。……」
ヨシュアは何か心当たりがあるのか下を見ていた。
「ヨシュア……？」
「ふむ、お前は昔から考えすぎる所があるようだな。事件の後始末は俺たちに任せて生誕祭を楽しんできたらどうだ？」
「あ……うん、それもそうだね」
「そーそー。めいっぱい楽しんじゃいましょ。そうだ、確か今夜はお城に泊めてもらえるのよね？」
「ああ、女王陛下のご配慮で右翼の2つの客室を貸して頂いた。俺とヨシュアが右側でエステルとシェラザードが左側だ」
「え……。あたしとシェラ姉が一緒なの？」
「別の組み合わせがいいのか？だったら、俺とエステル、ヨシュアとシェラザードにするか。たっぷりと父に甘えるがいい」
「……やっぱりシェラ姉と一緒でいい」
「わはは、照れ屋さんめ。それじゃあ、夜にまた会おう」
カシウスはグランセル城に入って行った。
「久しぶりなんだし、父さんと一緒の部屋にすればいいのに。君のお母さんのこととか……。色々話すことがあるんじゃないの？」
「それはそうだけど……。ヨシュアとシェラ姉が一緒は何だかイヤっていうか……」
エステルが顔を赤らめながら言った。
「え……」
「な、なんでもない！それよりも……とっとと見物に行きましょ。街の中、すごく賑わってたし」
「そうだね。色々と回ってみようか。疲れたら、東街区にある休憩所で一休みするのがいいんじゃないかな」
「あ、百貨店の裏にある休憩所ね。それじゃあ、街を見物しながら最後にあの休憩所に行くとしますか」
エステルとヨシュアは生誕祭を満喫することにした。

第5章　王都撩乱（４４）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

生誕祭を満喫していると……。

第5章　王都撩乱（45）

―王都グランセル　東街区

「さてと、休憩所に着いたね。色々回ったから、そろそろ休憩にしようか？」

「うん、そうしよっか」

エステルとヨシュアはベンチに腰かけた。

「はあ……あちこち回ったからさすがにちょっと疲れちゃったわね」

「しばらくここで休もうか。とりあえず、王都で騒ぎが起きそうな気配はなかったね」

ヨシュアは王都を見回りながら、騒ぎが起きないか心配していたようだ。

「あっきれた。そんな心配してたんだ。今日くらい、事件の後始末は父さんたちに任せとけばいーのよ。遅れて来たんだからそれくらい当然の義務だってば」

「はは、そうなんだけどね。何となく性分っていうか……」

「はあ、仕方ないわねぇ。それにしても……あたしたちも正遊撃士かぁ」

「これからは支部の監督を受けずに自由に行動できるようになる。人手が足りない支部からの応援要請なんかも来るから定期船を使う機会も多くなるね。その分、責任も増えるんだけど」

「うん、でもまあ何とかやっていけるわよね。今回だって、クーデターは阻止することができたんだし。もう、父さんに『ヨシュアがいないと心配だ』なんて言わせないんだから！」

「はは……さすがにもう言わないと思うよ。でも僕は、これからも君と一緒にいたいと思ってるけどね」

「……え……。……。ええええええええっ！？」

急に驚きだしたエステル。

「あれ、迷惑だったかな？」
「いや、迷惑っていうか……。一緒にいたいって……それって……どういう……？」
「そりゃあ、気心は知れてるし、お互いのクセは判っているからね。このままコンビを組んだ方がいいと思ったんだけど……」
「あ……遊撃士の仕事のことか……。なーんだ、てっきりあたし、逆に告白されちゃったのかと……」
ほっと、胸をなでおろすエステル。
「えっ……」
「わあああああっ！今のナシ！忘れてっ！」
「エステル、それって……」
エステルがベンチを飛びあがった。
「し、しっかし今日はホントに暑いわよねっ！？暑いときにはアイスが一番！おごってあげるからちょっとここで待っててっ！」
そう言って、エステルはアイス売り場に走って行った。
「あ……。アイス売り場はそっちじゃないと思うんだけど……。……。もしかして……エステル……。いや……そんなわけないよな……」
「いやぁ。若い人はうらやましいですね」
エステルに入れ替わり、アルバ教授がやってきた。
「アルバ教授……」
「やあ、しばらくぶりですね。最近、色々と騒がしかったですが平和が戻って本当によかった。やはり人間、平穏無事に暮らすのが一番ですね」
「……」
「おや、どうしました？顔色が優れないようですが……。正遊撃士になれたのだから、もっと晴れやかな顔をしなくては。そうだ、私からもお祝いをさせて頂きましょうか。あまり高いものは贈れませんけど」
「最初に会った時から……強烈な違和感がありました……。今では

少し慣れましたけど……。あなたを見ていると何故か震えが止まらなかった……」
ヨシュアが下を向きながら話し始めた。
「ほう……？」
「そして……各地で起きた事件……記憶を消されてしまった人たち……。あなたは調査と称して……事件が起こった地方に必ずいた……。そう……タイミングが良すぎるほどに……」
「……」
アルバ教授はヨシュアの話を黙って聞いている。
「決定的だったなのは……クルツさんの反応です……。記憶を奪われたクルツさん……。あの人も、アリーナの観客席で気分が悪そうにしていた……。そして……あなたも同じ場所にいた……」
「……」
ヨシュアがそこでベンチから下りた。
「アルバ教授……。あなた……だったんですね？」
「クク……。認識と記憶を操作されながらそこまで気付くとは大したものだ。さすが、私が造っただけはある」
「……え……」
『造った』……？
「では、暗示を解くとしようか」
アルバ教授がヨシュアの前に立ち、指を鳴らした。その瞬間、ヨシュアの頭の中に今までの記憶が急に鮮明によみがえった。
「……あ……。あなたは……。……あなたは……ッ！？」
「フフ、ようやく私のことを思い出したようだね。バラバラになった君の心を組み立て、直してあげたこの私を。虚ろな人形に魂を与えたこの私を」
「対象者の認識と記憶を歪めて操作する異能の力……！７人の《蛇の使徒（アンギス）》の１人！《白面》のワイスマン……！」
ヨシュアが一歩下がり、武器を構えた。

「はは……。久しぶりと言っておこうか。《執行者（レギオン）》Ｎｏ．Ｘ？。《漆黒の牙》――ヨシュア・アストレイ。」

アルバ教授改め、ワイスマンが言った。

「あ、あなたが……。あなたが今回の事件を背後から操っていたんだな！それじゃあ、あのロランス少尉はやっぱり……」

「お察しの通りだ。彼の記憶は消さないであげたからすぐに正体に気付いたようだね。はは、彼も喜んでいるだろう」

「あ……あなたは……。……。僕を……始末しに来たんですか」

「ふふ……。そう身構えることはない。計画の第一段階も無事終了した。少々時間ができたので君に会いに来ただけなのだよ」

「第一段階……。あの地下遺跡の封印のことか……」

「《環》に至る道を塞ぐ《門》……。それをこじ開けることがすなわち、計画の第一段階でね。ふふ……もはや閉じることはありえない」

「やはり……これで終わりじゃないのか……。《輝く環》とは一体何です！？《結社》は……あなたは何を企んでいるんだ！？」

「それを知りたければ《結社》に戻ってくればどうだい？君ならすぐに現役復帰できるだろう。少々カンは鈍っただろうがリハビリすればすぐに取り戻せるさ」

「……」

「フフ、そんなに恐い顔をするものじゃないよ。わかっているさ。今の君には大切な家族がいる。尊敬できる父親と何よりも愛おしく大切な少女……。たとえ『彼』が、こちら側にいてもそれらを捨てるなど馬鹿げた話だ」

「……ッ……」

「だから私は、君に会いに来た。『計画に協力してくれた』礼として真に《結社》から解放するために。……おめでとう、ヨシュア。君はもう《結社》から自由の身だ。この５年間、本当にご苦労だったね」

「……。……え……」
「なんだ、つまらないな。もっと嬉しそうな顔をしてくれると思ったのだが……。ふむ、まだ感情の形成に不完全な所があるのかな？」
「僕が……計画に協力……。……はは……何を……馬鹿なことを言ってるんだ……？」
「ああ、すまない。うっかり言い忘れていたよ。君の本当の役目は暗殺ではなく諜報だったのさ」
「え……」
「《結社》に見捨てられた子供として同情を引き、見事保護されてくれた。そして定期的に、結社の連絡員に色々なことを報告してくれたんだ。遊撃士協会の動向と……カシウス・ブライトの情報をね」
「！！！」
「無論、そんな事をしていたのは君自身も覚えていないだろう。私がそう暗示をかけたからね」
「……」
「S級遊撃士、カシウス・ブライト。まさしく彼こそが今回の計画の最大の障害だった。彼に国内にいられては大佐のクーデターなどすぐに潰されてしまっただろうからね。彼の性格・行動パターンを分析して、悟られずに国外に誘導するために……。君の情報は本当に役に立ってくれた」
「……嘘……だ……」
ヨシュアは頭を抱えてうずくまった。
「だから……改めて礼を言おう。この5年間、本当にご苦労だった」
「嘘だ、嘘だ！嘘だあああああああっ！……僕は……エステルと過ごした……僕のあの時間は……」
「ふふ……何がそんなに哀しいのかな？素知らぬ顔で、大切な家族と幸せに暮らしていけばいいだろう？君が黙っていれば判らないことだ」
「……」
「しかしまあ……考えてみればそれも酷な話か。ブライト家の父娘

はどうも健全すぎるようだからね。君のような化物にとって少し眩しすぎたんじゃないかな？」

「……ぁ……」

「君は、人らしく振る舞えるが、その在り方は普通の人とは違う。どんな時も目的合理的に考え、任務を遂行できる思考フレーム。単独で大部隊と渡り合えるよう限界まで強化された肉体と反射神経。私が造り上げた最高の人間兵器。それが君――《漆黒の牙》だ」

「……」

「そんな君が、人と交わるなどしょせんは無理があったのだよ。この先、彼らと一緒にいても君が幸せになることはありえない」

「……」

「だから、辛くなったらいつでも戻ってくるといい。大いなる主が統べる魂の結社。我らが《身喰らう蛇（ウロボロス）》に……」

そう言い残して、ワイスマンはヨシュアから去って行った。

「……。これが……罰か……。……姉さん……レーヴェ……。……僕は……。……僕は……」

―数時間後

「はあ……。ずいぶん待たされちゃった……。何だかんだでもう夕方だし……。ヨシュア……さっきのどう思ったんだろ……。う～っ……思い出したらまた顔が熱く……」

「おや、エステルさん」

「あれ、アルバ教授。こんな所で会うなんて珍しいわね」

「はは、そうかもしれませんね。そうだ、先ほどヨシュア君とも会いましたよ。おめでとうございます。正遊撃士になったそうですね」

「えへへ……まあね。あれ……？」

「？どうしました？」

「教授ってば……いつもと雰囲気が違わない？なんだかすごく楽しそうな顔をしてるわよ？」
「……。はは、見抜かれましたか。実は、考古学の研究で色々と進展がありましてね。それで少々、浮かれていたんです」
「へ～、よかったじゃない。あ……ゴメン！アイスが溶けちゃうからあたし、これで行くわね！それじゃあ、またね～！」
エステルはヨシュアのもとに急いだ。
「ふふ、なるほど。カシウス・ブライトの娘か……。なかなか楽しませてもらえそうだ」

「ごめん、遅くなっちゃって！ものすごく混んでてさ～。ようやくゲットできたのよ」
「そっか、ご苦労さま。ありがたくご馳走になるよ」
「……うん……。えっと、さっきの事だけど……」
「ああ、さっきはゴメン。紛らわしい言い方しちゃって。確かにあれじゃあ出来の悪い告白みたいだよね」
「え……うん……。出来が悪いってことはないけど……」
「まあ、考えてみればそう結論を急ぐこともないよね。正遊撃士になったからといって別の仕事についてもいいわけだし。ここはお互い、将来についてじっくり考えるべきかもしれないな」
「た、確かに……。（結婚なんかしちゃったら子育てなんかもしなくちゃいけないし……。……だから！先走りすぎだっての、あたし！）」
「さてと、もう夕方だしアイスを食べながら城に戻ろうか。父さんとみんなが待ってるよ」
「……。……ヨシュア？」
エステルがヨシュアの顔を見た。

「どうしたの、エステル。将来についての相談があるとか？」
「ち、違うってば！さっさとお城に戻りましょ！」
エステルとヨシュアはグランセル城に向かった。

第5章　王都撩乱（４５）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

グランセル城での宿泊時に……。

第5章　王都撩乱（４６）

―グランセル城　エステルとシェラザードの宿泊部屋
「うーん……」
エステルはせわしなく部屋をうろうろとしている。
「何よ、エステル。さっきからそわそわして。なにか気になることでもあるの？」
シェラザードがそんなエステルを見て言った。
「う、うん……」
エステルがシェラザードのところに寄った。
「ねえ、シェラ姉……。食事の時……ヨシュア、変じゃなかった？」
「？？？変なのはあんたの方でしょ。あの子はいつも通り落ち着いてたじゃないの」
「それはそうなんだけど……」
「ハッハーン。そっか、そういうことか」
シェラザードが何か感づいたようだ。
「な、なによいきなり……」
「隠さない、隠さない♪そんな雰囲気はしたけど……。やっぱり自覚しちゃったわけね。ヨシュアのこと……好きになっちゃったんでしょ？」
「……うっ……。や、やっぱり分かっちゃう？」
エステルが顔を赤くした。
「悪いけど、丸わかりよ。でも、その様子じゃ、ヨシュアにはちゃんと伝わっていないみたいね」
「うん……そうだと思う……。ヨシュアって、こういうこと昔からニブいところあったし……。ってあたしも人のこと言えないか」
「ああもう、初々しいわねぇ。あの花よりダンゴだったエステルがよくぞここまで……。おねーさん。感激しちゃうわ！」
人のことだと思い、茶化すシェラザード。

「……もうシェラ姉にはこんりんざい相談しない……」
「ウソウソ。からかって悪かったわ。でも、そうね……。考えてみれば、あんたたちは思春期に入る前に出会ったのよね。なかなか、お互いの気持ちに気付かないのは仕方ないか……」
「そ、そういうものなのかな……。あたしは、旅をしてる最中にちょっとしたきっかけで意識して……。い、いちど、気になりだしたらどんどん意識するようになって……。ああもう、こんなのあたしのキャラじゃないのに～！」
「ふふ……。咲かない蕾はないってね。女の子はみんなそういうものよ」
「シェラ姉……」
「あまり軽率なことは言うつもりはないんだけど……。覚悟が決まってるなら打ち明けた方がいいんじゃない？ふんきりがつかないのならちょっと占ってあげよっか？」
「ううん……。実はもう、覚悟が決まってるの。話を聞いてもらう約束もしたし」
「そっか……。よし、それでこそあたしの妹分！ああもう！おねーさん、泣けてくるわっ！」
「それはもうええっちゅーねん。でも、ありがと、シェラ姉。なんだか少し勇気が出てきたわ。あたし、ちょっとヨシュアのところに行ってくるね」
「え……！ま、まさか今すぐ告白するの！？」
「ううん、それは別口。何かさっき、ヨシュアの様子がおかしいような気がしたのよね。まずはそれを聞きだしてくるわ」
「そ、そう……。しかし、さすがにあの子のことをよく分かってるみたいじゃないの。あんたとヨシュアならきっと上手く行くと思うわよ。話して、良い雰囲気になったらそのまま打ち明けてみたらどう？」
「う……善処します……。それじゃあ、行ってくるわね！」
エステルが部屋を飛び出していった。

「……初恋かぁ……。うまく行くといいんだけどね……」

―ヨシュア、カシウスの部屋

エステルがヨシュアたちの部屋に入ったが2人ともいなかった。

「あれ……2人ともいないわね。そういえば、父さんはまだ会議とか言ってたか……。でも、ヨシュアは……」

その時、ハーモニカの音が聞こえてきた。

「ヨシュア……。どこで吹いてるのかな?」

エステルはハーモニカの音を頼りに探し始めた。

第5章　王都撩乱（４６）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

エステルがヨシュアに告白するが……。次回、ＦＣ最終回です！続けて、ＳＣもご期待ください！

第5章　王都撩乱（47）（前書き）

今回でｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ　Ｃｈａｐｔｅｒは終了です。

第5章　王都撩乱（47）

―グランセル城　空中庭園
「……やあ、エステル。いい夜だね」
「うん……。また、その曲なんだ。『星の在り処』」
「色々なものを失くしたけど……。この曲と、このハーモニカはいつも僕のそばにいてくれた……。だから、『吹き収め』にと思ってね」
「え……」
「約束、果たさせてくれるかな。君に会うまでに僕が何をしてきたのか……。それを、今から話したいんだ」
「ヨシュア……。うん、わかった」
「少し長い話になるけど、それでも……構わないかな？」
「もちろん……。キッチリ最後まで聞かせてもらうわ」
「ありがとう……。……」
そして、ヨシュアが背を向けて少しずつ語り始めた。

「昔々、あるところに……。あるところに1人の男の子がいました。甘えん坊で気が弱くて何の取り柄もない男の子……。でも、大切な人たちと一緒にいて男の子の毎日はとても幸せでした。しかし、ある事がきっかけで男の子の心は壊れてしまいました。言葉と感情を失い、食事もとらずにハーモニカを吹き続ける毎日……。面倒を見てくれた人の努力も空しく、男の子は日に日に痩せ衰えていきました。そんな男の子の前に1人の魔法使いが現れました。『私がその子の心を治してあげよう。ただし、代償は払ってもらうよ』。そうして、男の子は魔法使いに預けられることになりました。壊れた心を繋ぎ合わせながら……魔法使いは、男の子の存在を好きなように作り変えていきました。そして、新たな心を手に入れた時――男

の子は人殺しになっていました。2年ものあいだ、男の子は毎日のように人を殺し続けました。何十人もの部隊を、闇に紛れて全滅させたこともあります。屈強な護衛に守られていたとある国の大臣の屋敷に潜入して、その喉をかき切ったこともあります。時には爆発物を使い、罪もない人々を巻き添えにしました。いつしか男の子は、ただの人殺しから優秀な化物に成長し……《漆黒の牙》と呼ばれ恐れられるようになっていました。そして男の子は、魔法使いにある標的の暗殺を命じられました。かつて女王様が治める国を北の大きな国から守った英雄。大陸で4人しかいないという特別な称号を持っている遊撃士を。――でも、その標的は強すぎました。子猫が虎にいなされるように男の子は撃退されてしまいました。失敗した男の子の前に魔法使いの手下たちが現れました。標的に顔を知られてしまった男の子を始末しようとしたのです。しかし、その手下を追い払って男の子を救ってくれた人がいました。それは、男の子が暗殺に失敗した当の標的である遊撃士だったのです。そして、男の子は……その人の家に連れてこられてひとりの女の子に出会いました……。その家で、男の子は5年もの間、素敵な夢を見せてもらいました。本当なら、その男の子には許されるはずもなかった夢を……。だけど、夢はいつか醒めるものです。現実に戻る時が迫っていました」

「これで……この話はおしまいだ。ありがとう……最後まで耳を塞がずに聞いてくれて」

ヨシュアがエステルの方に向きなおした。

「……。……えっと……あは……。それって……どこまで本当なの？」

エステルはおとぎ話でも聞いていたような感じだった。

「全部――本当のことだよ。僕の心が壊れているのも。僕の手が血塗られているのも。君の父さんを暗殺しようとして失敗したのも。

そして……今までずっと君たちを裏切り続けていたことも」
「!?」
「男の子は本当の意味で救いようがない存在だった。そこにいるだけで不幸と災厄をもたらすような……。そんな、穢れた存在だったんだ」
「……」
「だから……男の子は旅立つことにした。幸せな夢を見せてくれた人たちをこれ以上、巻き込まないために。自分という存在を造った悪い魔法使いを止めるために」
そして、ヨシュアはエステルに自分の持っていたハーモニカを渡した。
「え……？」
「それは、僕が人間らしい心を最後に持っていた時のものだ。もう必要ないものだから……。だから……君に受け取ってほしい。この5年間のお礼にはとてもならないだろうけど……。何も無いよりはマシだと思うんだ」
「……。……かげんにしなさいよ」
「え……？」
「いい加減にしなさいっての！」
エステルがヨシュアに近づき、怒鳴った。
「夢なんて言わないでよ……っ！まるで……今までのことが本当じゃなかったみたいじゃない！過去がなんだっていうの！？心が壊れてる！？それがどーしたっていうのよ！？」
「エステル……」
ヨシュアが目を伏せた。
「あたしを見て！あたしの目を見てよ！ずっと……その男の子を見てきたわ！良い所も悪い所も知ってる！男の子が、何かに苦しみながら必死に頑張ってたってことも知ってる！そんなヨシュアのことをあたしは好きになったんだから！」
「！！！」

「1人で行くなんてダメだからね！あたしを、あたしの気持ちを置き去りにして消えちゃうなんて！そんなの、絶対に許さないんだからあっ！」

「……エステル……。……」

ヨシュアがエステルの肩に手を乗せた。

「え……？」

そして、口づけをした。

「……あ……。（……ヨシュア……）」

不意にエステルがヨシュアから離れた。

「なに今の……！口の中に流れて……」

「……即効性のある睡眠誘導剤だよ。副作用はないから安心して」

「あ……」

眠気がエステルを襲い、エステルは地面に崩れ落ちた。

「ど……どうして……？……何でそんなものを……！」

「僕のエステル……お日様みたいに眩しかった君。君と一緒にいて幸せだったけど、同時に、とても苦しかった……。明るい光が濃い影を作るように……。君と一緒にいればいるほど僕は、自分の忌まわしい本性を思い知らされるようになったから……。だから、出会わなければよかったと思ったこともあった」

「……そんな……」

「でも、今は違う。君に出会えたことに感謝している。こんな風に、大切な女の子から逃げ出す事しかできないけど僕だけど……。誰よりも君のことを想っている」

「……ヨシュア……ヨシュア……」

「今まで、本当にありがとう。出会った時から……君のことが大好きだったよ」

そして、エステルは眠りに落ちた。

「――さよなら、エステル」

To be continued the destination story, the Second Chapter.

第5章　王都撩乱（47）（後書き）

この小説の評価・感想等お待ちしています。

＞次回予告＜

エステルの想いを残し、1人旅立って行ったヨシュア。エステルはハーモニカに残された小さな想いを胸に秘め、ヨシュアを追う旅を決心する。

第６章　乙女の決意（１）（前書き）

ＳＣ編始まります！

第6章　乙女の決意（1）

―王都グランセル

「……う～……まぶし……」

窓から差し込んでくる光で目を覚ましたエステル。

「ふわあああああああ～っ……。ん～～っ、よく寝たぁ～～っ！」

そして、辺りを見渡すエステル。

「あれ……。……」

家とは違う風景に少し戸惑った。

「そっか、あたしたち昨日はお城に泊まったんだっけ。ヨシュアとお祭りを回って……帰りにアイスクリームを食べて……夜は父さんと一緒に晩餐会に出て……。……それで……」

そして、ヨシュアと空中庭園でのことを思い出した。

「……。……うそ……」

慌ててベッドから飛び起き、部屋を確認した。

「ここ……ヨシュアと父さんの部屋だ……。確かあたし……シェラ姉と同じ部屋だったはず……。えっと……どこからが夢なんだろ……」

そして、ポケットに入っていたハーモニカを見つけた。

「あ……。……。

ヨシュアっ！！！」

エステルは部屋から飛び出した。

「あら、エステル。ずいぶん遅いお目覚めね」

後ろから別の部屋から出てきたシェラザードに声をかけられた。

「シェラ姉……」

「まったく、昨日はいつまで経っても帰って来ないから心配しちゃ

ったわ。でも、その様子だとヨシュアと色々話せたみたい――」
「シェラ姉、ヨシュアは!?」
「へ……」
いきなりエステルに迫られたシェラザード。
「ヨシュアを捜してるの!シェラ姉、見かけなかった!?」
「今朝は見かけてないけど……。ていうか、あんた昨日は疲れてそっちの部屋で眠ったんでしょう?起きた時にはいなかったの?」
「え……!?あたしが疲れて寝たって……。そ、それって誰から聞いたの?」
「先生からだけど……」
「と、父さんが!?それじゃあ!父さんは見かけなかった!?」
大分、あせっているエステル。
「先生なら、さっき階段を登って空中庭園に上がって行ったけど……」
「!!!」
それを聞いてエステルは空中庭園に急いだ。
「あ、ちょっとエステル!?……どういうこと……?」
そして、シェラザードはタロットカードを取り出した。
「……。逆位置の『恋人たち』……」

―グランセル城　空中庭園
「あ……」
カシウスは、昨夜ヨシュアがいた場所と同じところにいた。
「エステルか」
「と、父さん……」
エステルがカシウスに走って行った。
「あのね、大変なの……!」
「判っている。ヨシュアは……行ってしまったようだな」

エステルの言葉を聞くことなく、カシウスは答えた。
「ど、どうして……。なんで父さんが知ってるの」
「昨日、軍議から帰ってきたらベッドにお前が寝かされていた。そしてテーブルにはあいつの書き置きが残されていた。それで大体の事情は分かるさ」
「だ、だったら！だったらどうしてこんな所でノンビリしてるの！？早くヨシュアを捜さないと――」
「止めておけ」
急にカシウスがエステルの言葉をさえぎった。
「え……」
「あいつが本気で姿を消したらたとえ俺でも見つけるのは無理だ。5年前、あいつに狙われた時、俺もかなり苦戦させられたからな」
「……」
5年前のことはヨシュアに聞いたのでエステルはこのことは分かっていた。
「あたし……今までずっとこの質問はしなかったけど……ヨシュアって……何者なの？」
この質問は、ヨシュアとの約束でカシウスにも聞かないでいた。
「……。《身喰らう蛇》――そう名乗っている連中がいる。《盟主》と呼ばれる首領に導かれ、世界を闇から動かそうとする結社。ヨシュアはそこに属していたらしい」
「《身喰らう蛇》……」
「正直、遊撃士協会でも実態が掴めていない組織でな。世間への影響を考えてその存在は半ば伏せられている。だが、それは確実に存在し、何かの目的を遂行しようとしている。……今回のクーデターのようにな」
「そ、それって……あのロランス少尉のこと！？」
「ああ、間違いあるまい。もっとも、関与していたのはその少尉だけではなかったはずだ。……ある意味、ヨシュアも協力者の1人だったようだからな」

「ちょ、ちょっと待って……。それってどういう意味!?」
ヨシュアが事件の協力者と聞いてエステルは驚いた。
「書き置きに書かれていた。ヨシュアはこの5年間、遊撃士協会に関する様々な情報をその結社に流し続けていたらしい。どうやら、自分でそれと知らずに報告する暗示をかけられていたそうだ」
「そ、そんな……。そんなことって……」
「正直、得体の知れない連中だ。深入りするのは止めておけ」
「……。あは……意味が分からないんですけど……。それって……ヨシュアを放っておけってこと?」
「……」
カシウスは何も答えなかった。
「ねえ父さん!答えてよ!」
「いずれ……こうなる日が来ることは判っていた。5年前、ヨシュアが俺の養子になることを承諾した時。あいつは、ある事を俺に誓った」
「ある事……?」
「自分という存在がお前や俺たちに迷惑をかけた時……結社という過去が何らかの形で自分に接触してきた時……俺たちの前から姿を消すとな」
「……。……なにそれ……」
「お前の気持ちも分かる。今まで家族として暮らしてきたんだ。簡単に割り切れるものでもないだろう。だがな……男には譲れない一線というものがある。だからお前もヨシュアの気持ちも分かって――」
「……知ってたんだ」
「なに?」
「ヨシュアが……いつかいつかあたしたちの前から居なくなっちゃうかもしれないって……。……父さん……知ってたんだ……」
「……。……すまん……」
「父さんのバカ!」

そう言って、エステルはカシウスから走り去って行った。
「先生……」
入れ替わり、シェラザードがカシウスの所に来た。
「シェラザード……。みっともない所を見られたな」
「いえ……。……」
「責めないのか、俺を？」
「あたしも、それなりの事情があって先生のお世話になった身ですから……。先生とヨシュアの気持ちはどちらも分からなくはないんです」
「そうか……そうだったな」
「でも、１つだけ。女の立場から言わせてもらえれば」
「うん？」
「先生もヨシュアも、かなり最低です」
ピシャリと一言。

第6章　乙女の決意（2）（前書き）

オリキャラ『レイン・アクアライト』を作り出してみました。

第6章　乙女の決意（2）

―王都グランセル　北街区

「はあっ、はあっ……」

エステルは降り注ぐ雨の中、当てもなく走っていた。

「……。そんなわけない……。ヨシュアが居なくなるなんて……そんなこと……あるわけない……」

「そこのお嬢さん、こんな雨の中何をしているのですか？雨で濡れてしまいますよ？」

1人の青年がエステルに声をかけてきた。

「えっと……何でもないです」

「そうですか……？……。それで、誰を探しているのですか？」

青年が言った。

「！！！どうして……それを……」

「おや、当たってしまいましたか。まあ、こんな所で立ち話も何ですし、冷静になるためにもどこか店に入りましょう」

―居酒屋　《サニーベル・イン》

「そういえばまだ名乗っていませんでしたね。私の名前は、レイン・アクアライトといいます」

「レインさん……。……どうして、あたしが誰かを捜しているって判ったの？」

「いえ、あの角であなたが『居なくなるはずない』みたいな言葉が聞こえたもので。それで、誰を捜しているんです？少し、話してくれませんか？」

「えっと、あたしの兄弟みたいな男の子がどこにいったか判らなく

て……」
「そうですか……」
「朝になったらすでにいなくって……。今、捜している最中なの……」
「……。なるほど……。それで、自分の家に帰っているというのはないのですか？」
「あ……。……。……そっか、そうよね。ヨシュアが居なくなるはずない……。きっと……先に家に帰ってるだけ……」
「え？」
「レインさん！ありがと！急いで家に帰ることにするわ！」
エステルは急に席を立ちあがり、店を出ていった。
「……。思った通り、彼女がエステル・ブライト……。そして、居なくなった彼の名前がヨシュア……。彼がいきなり居なくなったということは、やはり《結社》が接触をかけたようですね。それに今回のリベールの事件……。これはようやく、『彼』と会える時が来たかもしれませんね……」

―定期船　《セシリア号》

「……。あたし……ヨシュアのこと気付つけてたの？出会わなければよかったって……。……あたし……」
「アカン、アカンな～」
エステルが後ろから振り向くと軽そうな青年が立っていた。
「……？」
「澄みきった青空！そして頬に心地よい風！そんな中で、キミみたいな可愛い子が元気なさそうな顔をしとったらアカンよ。女神さまもガッカリするで、ホンマ」
「えっと……」

「あ、ちゃうで？けっして怪しいモンとちゃうよ？ただ、乗船した時からキミのことが妙に気になってなぁ。なんか元気ないみたいやからオレの素敵トークで笑顔にしたろと、まあ、そんな風に思ったわけや」

「……。えっと……よく判らないけど、ありがと」

「まあ、ぶっちゃけナンパしとるんやけどね。どや、暇やったら下の展望台にでも付き合わん？ドリンク注文できるみたいやからお近づきの印に奢らせてもらうわ」

「あ、あの……気持ちはありがたいんだけど……あんまり気分じゃなくて……。……ごめんなさい……」

「んー、そっか。それじゃあ、ナンパは止めて本業に切り換えた方がいいかな？迷える子羊導くのもお仕事やし」

「本業……？」

「フフン、これや」

軽そうな青年は、腰に付けた杯が描かれたペンダントを突き出した。

「え、それって……たしか七耀教会の……」

「ビンゴ。『星杯の紋章』や。オレはケビン・グラハム。これでも七耀教会の神父やねん」

「へー、そうなんだ……って、冗談でしょ？」

「なんでぇ？オレ、めっちゃ真面目な神父さんやで？３度の祈りは欠かしたことないし、聖典もほら、肌身離さず持ち歩いて……」

ケビン神父が服の中を探したが……。

「……。ゴメン、座席に忘れてきたわ」

「……説得力ゼロなんですけど。ふふ……。ホント、おかしなお兄さんね」

「あ！今ちょっと笑ったな？うんうん。やっぱ可愛い子は笑顔でないとな。ま、そういうわけやからよかったら神父として相談に乗るで。ナンパは抜き、空の女神に誓うわ」

「あ……うん……。で、でも……どんな風に相談したら……。あた

し……。……んくっ……」
エステルが涙をこぼした。
「え、ちょっと待ってや……。何か知らんけど！ゴメン、オレが悪かった！」
「ひっ、えっ……。ううう……あああああっ……。うわあああああああああん……！」
「あー……」
ケビン神父がエステルに手を添えた。
「よしよし、良い子や。今までガマンしとったんやな。気の済むまで泣いたらええよ」
「うあああっ……！うわあああああああああん……！」

「えっと……ケビンさんだったっけ。ごめんなさい……みっともない所を見せちゃって」
「ええて、ええて。女の子に胸貸せるなんて役得や。どや、ちょっとは落ち着いたか？」
「……うん。あたしエステル。エステル・ブライトっていうの。遊撃士協会に所属してるわ」
「エステルちゃんか～。名前もめっちゃ可愛いやん。……って、遊撃士協会？」
「うん、これでも遊撃士よ。えへへ、あんなみっともない姿見たら信じられないかもしれないけど……」
「いや、そんなことないで。よく見たらそれっぽい恰好やし。やっぱ何かの武術をやってるん？」
「棒術を、少しね。そういうケビンさんは本当に教会の神父さんなの？どう見てもそうは見えないんだけど」
「あいた、キツイなぁ。まあ、オレは巡回神父やからちょい毛並みが違うのは認めるわ」

「巡回神父？」
「礼拝堂のない村ってあるやろ？そういう村を定期的に訪れて礼拝や日曜学校を執り行うわけや。ま、教会の出張サービスやね」
「なるほど……そんな神父さんがいるんだ」
「まあ。礼拝堂勤めの神父と違って法衣とかも適当なヤツが多くてな。そんなワケで大目に見たってや」
「うーん、まあいいか。それじゃあ、ケビンさんはこれからどこかの村に行くんだ？」
「や～、実はオレ、リベールに来たばかりなんや。巡回神父の手が足りんらしくて本山から派遣されて来たんやけど」
「あ、そうなんだ。教会の本山って……どこにあるのか知らないけど」
「大陸中部にあるアルテリア法国ってとこや。まあ、グランセル大聖堂の大司教さんに着任報告する前にちょいと観光でもしたろ思ってな。で、こうしてブラブラしてるわけや」
「ガクッ……ダメじゃない。ホント、いい加減な神父さんねぇ」
「ええねん。いずれ巡回する場所の下見や。こうして、悩みごとがありそうな可愛い子と巡り会えたしなー。うんうん、これぞ女神のお導きやで」
1人納得するケビン神父。
「まったく調子いいわねぇ」
「でも、ありがと。泣いたらスッキリしちゃった。ダメよね、うん。ちゃんとヨシュアを信じないと」
「へ……？」
「あ、ヨシュアって、あたしの兄弟みたいな男の子なんだけど。いきなり居なくなっちゃったからあたし、ちょっと驚いちゃって……」
「いきなり居なくなったって……。それって、家出かなんかか？」
「ううん、違う。一足先に家に帰っただけなの。さっきのレインさんも自分の家は確かめたのかって言われてね。だって家族なんだもん。勝手に居なくなるわけないんだから」

「……」
「でも、ホント失敗したなぁ。告白はタイミング悪かったかも。ヨシュアに会ったらうまい具合にごまかさないと……」
「……。……なあ、エステルちゃん」
「ふえっ？」
「いや……。……。あんな、オレさっきも言ったように観光中やから特に用事もないねん。せやから、ロレントって街で降りてエステルちゃんを家まで送ったるわ」
「ええっ！？」
エステルはケビン神父と共に家に向かうことになった。

第6章　乙女の決意（3）

―地方都市ロレント

「は～、ここがロレントか。こう言うたらなんやけど発着場がある以外は田舎やね」

ケビン神父があたりを見回して言った。

「悪かったわね、田舎で。一応言っておくけど、礼拝堂だってあるんだからね」

「お、なら後で教区長さんに挨拶しに行かなアカンな。で、エステルちゃんの家ってどっちの方にあるん？」

「それなんだけど……。見送りなんて必要ないってば。街から出てすぐの所だし、これでも一応、遊撃士なんだから」

「なはは、遠慮せんでええよ。レディの送り迎えは男の義務や。それに、自慢のカレシにも一度お目にかかってみたいしな」

「カレシって……。そんなんじゃないんだけど。まあいいわ、家に着いたらお茶くらいはご馳走してあげる」

「サンキュー。ほな、案内したってや」

―ブライト家

「へ～。ここがエステルちゃんの家か。なんちゅうか、あったかそうな雰囲気の家やね」

「えへへ、そうでしょ？あたしと、父さんと、お母さん……それにヨシュアとの思い出がいっぱいに詰まった場所なんだから」

「なるほどなー。で、そのヨシュア君ってのが一足先に帰ってきているわけか？」

「うん、間違いないわ。ついて来て、紹介するから」

エステルが家に入っていった。

「どんな野郎か知らんが、罪作りなやっちゃ。ふう……しゃあないな」
ケビン神父も家に入っていった。

「ただいま～、ヨシュア！ねえ、帰って来てるんでしょ！？」
家からは反応はない。
「おかしいな……。ヨシュア……帰ってきているはずなのに……。あ、父さんの書斎にいたりして」
エステルは書斎に入った。
「……」
ここにもいなかった。エステルは書斎を出て2階に上がった。

2階でヨシュアの部屋に行こうとした時、
「……そうだ。あたしの部屋にいる可能性もゼロじゃないよね……？やばっ、下着とか出しっぱなしにしてたかも……」
自分の部屋に入ったエステル。
「……。よかった……。出しっぱなしにしてなくて。まあ、ヨシュアだったら、あたしの下着なんか見たって平然としてるだろうけど……。……」
よろよろと自分の部屋を出て、ヨシュアの部屋の前に立つ。
「ヨシュア……入るね？」
ノックした後、エステルは部屋に入った。
「……あ」
そこにも誰もいなかった。
「あは……そっか……」
エステルはその場に崩れ落ちた。
「……あたし……バカだ……」
そこで、ケビン神父が入ってきた。

「カレシ……おらんみたいやな」
「……」
エステルは黙っている。
「それともアレか。いったん帰って来てからまた街にでも出かけたとかか？」
「……ううん……」
エステルが力なく首を振った。
「ふう……。やっと目ぇ、醒めたみたいやね」
「……。そうよ、ホントはね、ちゃんと分かってたんだ……。ヨシュアは行っちゃったって……。家に戻ってるはずないってちゃんと分かっていたんだよ……」
「そっか……」
「でもね……この部屋が最後だったから……。他に、ヨシュアの居場所なんてあたしには思いつかなかったから……。だから……ここでおしまい。あたしはもう……二度とヨシュアに会えないんだ……」
「……。諦めるの、早ないか？」
「……？」
「所詮、運命なんちゅうもんは女神にしか見えへんシロモンや。そんなもんに縛られた気になって諦めるのは早すぎるで。大事なんは、エステルちゃんが何をどうしたいって事とちゃうか？」
「で、でも……。ヨシュアを捜そうにも何の手がかりもないし……」
「いや、そうでもないやろ。そのカレシがどんなヤツかオレは知らへんけど……。何のきっかけもなしに姿を消すヤツなんておらんで」
「……え……」
「最近、カレシの言動や態度で何かおかしなことはなかったか？もしくは、カレシに関係ありそうな奇妙な出来事が起こったりとかな。ずっと一緒にいたキミにしかわからんことやで」
「……あ……！」
エステルの頭の中に色々と思い当たる節があったようだ。
「ああっ……！ヨシュアがおかしくなったのはあの休憩所に戻って

から……。……うそ……どうして？なんであたし……あの時あった人が思い出せないの？」

エステルの顔が青ざめていった。

「だ、大丈夫か？めっちゃ顔色悪いで」

「う、うん……大丈夫……」

エステルが立ち上がった。

「そっか……。ヨシュアの目的は悪い魔法使いを止めること……。あの時、あたしがあった人がその魔法使いだとするなら……。それがクーデターを影から操っていたのと同じ人物なら……。悪い魔法使いは、まだリベールで何かをしようと企んでいるはず……。じゃあ、あたしが遊撃士として魔法使いの企みを阻止できたら……。……ひょっとしたら……」

「……よく気付いたな」

その時、カシウスとシェラザードが部屋に入ってきた。

「父さん、シェラ姉！？ど、どうしてここに……？」

「……悪い、エステルちゃん。定期船を降りる時、ギルドの王都支部に連絡させてもらったわ」

「え……」

「まったく驚いちゃったわよ。あんたを捜してギルドに行ったらちょうど連絡が入ってくるんだもの。で、あわてて先生と一緒に出発直前の貨物飛行船に乗ったわけ」

「あ……」

「まあ、そういうわけだ。ケビン神父といったか？連絡してくれて本当に助かった。礼を言わせてくれ」

「いや～、とんでもない。部外者が出しゃばったりしてホンマ、すんませんでしたわ」

「あ、あの……。父さん、あたしね……」

「判っている。……深入りするなと言ったのはただの俺のエゴだ。男としての、父親としての論理をお前に押し付けただけにすぎん。そう、シェラザードに叱られてな」

「シェラ姉……」
「ふふ、あたしも今回は全面的にあんたの味方よ」
「覚悟はしていたが……あいつが居なくなったことが思っていたよりも堪えたらしい。だから、せめてお前だけは危険な道を歩かせたくなかった。命と引き替えにお前を救ったレナのようになって欲しくなかった。……だが、そういう風に考えるのはお前にも、母さんにも失礼だったな。今更ながらに思い知らされたよ」
「父さん……」
「……軍を立て直すため俺はしばらく身動きが取れん。おそらく奴等の狙いはそこにもあったのだろうが……。今度こそ、俺はお前のことをロクに手助けもできんだろう。それでも、決意は変わらないか？」
「……うん。あたし、まだまだ未熟だけど、それしか方法はなさそうだから……。だからあたし、やってみる。《身喰らう蛇》の陰謀を阻止してきっとヨシュアを連れ戻してみせる！」
「そうか……。ならば何も言うことはない。遊撃士として……それから1人の女として。お前は、お前の道を行くといい」
「……父さん……」
エステルがカシウスに抱きついた。
「あたし……あたし……」
「そうだ……。大事なことを言い忘れていた」
「え……？」
「エステル、どうか頼んだぞ。ヨシュアを――――あの馬鹿息子を連れ戻してくれ」
「……あ……。うん……わかった……。またこの家で……みんなで一緒に暮らすためにも……。絶対にヨシュアを連れ戻すから……！」

第6章　乙女の決意（4）

―2ヶ月後　ゼムリア大陸中西部　レマン自治州・峡谷地帯　遊撃士協会　ル＝ロックル訓練場

そこで、エステルとアネラスは特訓をしていた。

「いくわよ、アネラスさん！烈破―――無双撃ッ！」

「わわっ、さすが強烈だね。でも……今度はこっちの番だよっ！剣技―――八葉滅殺ッ！」

「くっ……！」

「まだまだ～っ！」

アネラスは続いて技を繰り出してきた。

「（くっ……このままじゃ持たない……。それなら……！）」

エステルは技の隙をついて避け、

「え、うそっ……」

「もらったああっ！」

「きゃうっ……」

一閃を食らわせた。

「あいったあ～っ……」

「だ、大丈夫、アネラスさん？」

「あはは、大丈夫だよ。何とかガードも間に合ったしね」

アネラスが立ち上がった。

「はー、でも参っちゃったな。とうとうエステルちゃんにあの技を返されちゃったか～」

「えへへ、まぐれよ、まぐれ。今までコテンパンにされた分、ちょっとくらいは返せないとね」

「ふふっ。やる気だね、エステルちゃん。それなら、ついでだからもう1セット付き合ってくれる？」

「うん、望むところよ！」

「あらあら、2人とも元気ねぇ」

「あ、管理人さん。お早うございま～す！」
「管理人さん、おはよう！」
ル＝ロックル訓練所の管理人であるフィリス管理人がやって来た。
「はい、おはよう。エステルちゃん、アネラスちゃん。朝ゴハンができたから呼びにきたんだけど……。うーん、お邪魔だったかしら？」
「あ、そうなんだ。アネラスさん、どうしよう？」
「うーん、そうだね。ゴハン冷めたらもったいないし、今朝はこれで上がりにしよっか。管理人さん、クルツ先輩はどうしてます？」
「クルツさんなら演習の準備があるって先に済ませちゃったわよ。何でも今日の演習はかなりハードなんですってね？」
「え……」
「そ、そんな風に先輩が言ってたんですかっ？」
2人は身震いした。
「うん、朝食はしっかり取っておくようにとの伝言よ。2人とも、いっぱい食べてしっかりスタミナをつけてね？」

―ル＝ロックル宿舎
「はあ……。けっこうお腹いっぱい。訓練前にこんなに食べたらまずいような気がするけど……」
「ふふ、管理人さんの料理ってホントおいしいもんね。でも、訓練と違って途中でバテるわけにもいかないし、ちょうどいいんじゃないかな？」
「うん、確かに。やっぱりスタミナは基本よね。それにしても……。ここに来てからもう3週間か。正直、あっという間だったな」
「ふふ、エステルちゃん、ものすごく頑張ってたもんね。私も一緒に訓練してホント、いい刺激になったよ」
「えへへ……。そう言ってもらえると嬉しいな。でも、クルツさん

が訓練教官として来てくれたのも驚いたけど……。まさかアネラスさんがあたしと同じ訓練を受けるとは思ってもみなかったわ」

「んー、私も正遊撃士になってから半年くらいの新米だからねぇ。シェラ先輩からエステルちゃんの話を聞いて渡りに船だと思ったんだ。前々からこの訓練場のことは先輩たちに聞いて興味があったし」

「そっか……。でも、こんな場所があるなんてギルドも結構大きな組織なのね。最初、父さんたちから話を聞いたときはあまりピンとこなかったんだけど……」

～エステルの回想

「――――言ったように、もう俺はお前を止めるつもりはない。だが正直、今のお前の実力では結社の相手はあまりにも危険すぎる。そこでエステル……『ル＝ロックル』に行ってみないか？」

「『ル＝ロックル』？」

「レマン自治州にある遊撃士協会が所有している訓練場だ。宿舎の周りには、様々な種類の本格的な訓練施設が用意されている。遺跡探索技術、レンジャー技術、サバイバル技術、対テロ技術……。実戦レベルの訓練を行うのにもっとも適した場所と言えるな」

「そんな場所があるんだ……。でも、自治州ってことはその訓練場、外国にあるのよね？あたし……今、リベールを離れるわけには……」

エステルは少しでもヨシュアの情報を集めたいと思っていた。そのためには、少しばかりもリベールから離れたくなかった。

「外国とはいっても国際定期船を使えば1日よ。訓練期間は、そうね……。1ヶ月もあれば一通り終わるわ。その間、何か情報が入ったらすぐに連絡できるように手配する。それならどう？」

「……」

「まあ、勧めはするが決めるのはあくまでお前だ。よく考えてみるといい」

「……ううん、もう決めた。あたし、訓練を受けてみる」
「あらま……」
シェラザードはこれほど早く決めることは意外だったようだ。
「ふむ、思い切りがいい。どうやら自分でも思うところがあるらしいな？」
「うん……まあね。考えてみれば、あたしってヨシュアに頼りきりだった。何か事件が起こったときはいつもヨシュアが導いてくれた。でも、これからは自分の判断が頼りなんだよね。だからあたし……その訓練場で自分を鍛えてみる」
「エステル……」
「そうか……。なら、明日にでも訓練場の利用を申請するといい。ロレント支部から出来るはずだ」
「うん、わかった」
「ね、エステル……。出発が決まったら王都の百貨店に寄ろうか？」
シェラザードがエステルを誘った。
「え、どうして？」
「正遊撃士になったお祝いよ。せっかくだから新しい仕事用の服を買ってあげるわ」

「なるほど……。その服って、シェラ先輩のお祝いプレゼントだったんだね。いいな～。可愛い服を買ってもらえて」
「う、うーん……。丈夫な生地を使っているし、動きやすくっていいんだけど……。こういう女の子っぽい服ってあたしには似合わないかも……」
「そんなことない！とってもよく似合ってるってば。それに遊撃士でも女の子にオシャレは必要だよ。否、遊撃士だからこそオシャレには気を使わなくちゃ！」
アネラスが熱弁し始めた。

「ア、　アネラスさん？」
「そうだ、エステルちゃん。リボンとか付けてみる気ない？すごく似合うと思うんだけどなぁ」
「え、遠慮しときます。ていうか……前々から思っていたんだけど。アネラスさんって可愛いものに目がないでしょ？」
「もちろん！可愛いことは正義だもん！シェラ先輩みたいな格好いいお姉さまにも憧れるけど……。やっぱり可愛く着飾った年下の女の子に勝るものなし！ぬいぐるみなんか抱いてたらぎゅっと抱きしめたくなるよ～」
「あ、あはは……。（こりゃ、ティータに会ったら卒倒するかもしれないわね……）」
「くす、それにしても……。初めて会った時と較べるとエステルちゃん、変わったよね」
「えっ？」
「最初はいかにも新人君で初々しい印象しかなかったけど……。今は、初々しさを残しながらぐっと頼もしくなった気がする。それって結構スゴイことだよ？」
「や、やだなぁ……。アネラスさん、おだてないでよ」
「あはは、照れない照れない。うむ、これは先輩として私も負けてられないな～」
「もう……」
そこで、エステルはハッと気づいた。
「そういえば、アネラスさん。そろそろ演習の時間じゃない？」
「あ、そうだね。いったん部屋に戻ろうか。それじゃあ、また後でね～！」
アネラスは席を立って、２階の部屋に向かっていった。
「ふー、ほんと元気な人ねぇ。アネラスさんが一緒でこっちも助かっちゃったな……。さてと、あたしも部屋に戻って必要な装備を取って来なくちゃ」
エステルは２階の自分の部屋に向かった。

第6章　乙女の決意（4）（後書き）

オリキャラは第6章が終了したら本格的に出そうと思います。そこで、オリキャラの『レイン』の技（クラフト）を作ろうと思っています。もし良ければ、何か良いクラフトを教えてください。

第6章　乙女の決意（5）

―2階　自分の部屋

「さてと、演習と言うからには一通りの装備が必要になりそうね。実戦と同じで何が起こるか分からないし……」

エステルはベッドの上に置いてあったカバンから、ハーモニカを取り出した。

「……。うん、今日も頑張らなくちゃ」

エステルは装備を確認した。

「これでよし。……それじゃあ、玄関に行くとしますか！」

―1階　テーブル

「来たか、エステル君。向かいの席についてくれ」

エステルはクルツの向かいの席に座った。

「本日の演習は遺跡探索だ。この宿舎の西にある『バルスタール水道』に入ってもらう」

「『バルスタール水道』……。古めかしい名前だけどやっぱり訓練用の施設なの？」

「ああ。中世の遺跡を改築した施設でね。昔の仕掛けも残っているし、危険な魔獣も多く徘徊している」

「なーるほど。かなり実践に近そうですね。それじゃあ早速、その水道に出発するんですか？」

「いや、その前に……。2人とも、これを見てくれ」

クルツは、見慣れぬ形のオーブメントを取り出した。

「あれ、これって……」

「もしかして……戦術オーブメントですか？」

「ああ、その通りだ。導力魔法の使用を可能にする戦術オーブメン

トを造っているのは『エプスタイン財団』というが……。これは先月、財団から納入されたばかりの新型でね。スロットの数は1つ増えて7つ。今までのアーツに加えて新型のアーツも組むことができる」

「へ～、凄いじゃない！」

「うんうん！かなり期待できそうだね。で、クルツ先輩。私たちも貰えるんですか？」

「ああ、希望するならギルドから無償で提供される。ただし……」

クルツがそこで言葉を切った。

「難点がひとつあってね。新型は、基本的アーキテクチャが大幅に変更されてしまったんだ。だから、互換性の問題で以前のクオーツが装着できない。新規格のクオーツが必要になる」

「ええ～っ！？そ、それってつまり……」

「今まで合成したクオーツが無駄になるってことですかっ！？」

「残念ながらそうだ。面倒だろうが、また最初から1つずつ揃えてもらうしかないな」

「そ、そりゃないわよ～」

「うーん……。確かに迷っちゃうよね。このまま今のオーブメントを使い続けたらダメなんですか？」

「ダメじゃないが、推奨はしない。新型オーブメントは、全ての面で以前のものより性能が高いんだ。最大ＥＰも大幅にアップするし、最新型のクオーツにも対応できる。将来的には、さらなる身体能力の向上が期待できるということだ。それに何と言っても以前のオーブメントになかった新しいアーツが組めるのが大きい。……エステル君。ロランス少尉を覚えているか？」

「え！？」

エステルの頭にロランス少尉の顔が浮かんだ。

「う、うん。忘れるなんて出来っこない相手だけど……」

「シェラ君から聞いたが、彼は未知のアーツを使ったそうだな。複数の相手を一度に攻撃しながら混乱効果を与える上位アーツ……。

実は、新型オーブメントではそのアーツを組むことも可能なんだ。名前を『シルバーソーン』という」

「『シルバーソーン』……」

「そ、それじゃあ……。あの赤い隊長さんは新型を使っていたんですね！？」

「その可能性は高そうだ。さて、君たちはどうする？」

「う、うーん……。やっぱり迷っちゃいますね。将来性は新型の方が上だけど、当面の戦力ダウンは痛いし……」

「……。あたしは……新型を使いこなしてみたいな」

「え？」

「あの時、あたしはあの銀髪男に全く歯が立たなかった。オーブメントを変えたからって自分が強くなるわけじゃないけど……。それでもあたし、より大きな力を使いこなせるようになってみたい。だから……」

「エステルちゃん……。……うん、確かにそうだね。クルツ先輩。私も新型、使わせてください！」

「いいだろう。それでは受け取ってくれ」

エステルとアネラスは新型の戦術オーブメントを受け取った。

「あと、これを渡しておこう」

各属性のセピスを貰った。

「それだけあれば基本的なクオーツは揃うだろう。演習に行く前に、そこの工房でロベルト君に合成してもらうといい。新しい結晶回路（クオーツ）と導力魔法（オーバルアーツ）のリストはブレイサー手帳に追加しておいた。工房に行くときは自分たちで確認しておくように」

「うん、了解です」

「さらに……。今日の演習は長丁場になるはずだ。いざという時に備えて、食料も用意した方がいいだろう」

「うーん、食料ですか……。それはフィリスさんにお願いすればＯＫですよね？」

「ああ、そうだな。ロベルト君とフィリス管理人……2人に相談して準備を整えるように。さて、エステル君にはついでにこれも渡しておこう」
クルツはエステルにクオーツなどを渡した。
「え、これって……」
「あ、いいな～。しかも結構良さそうな物じゃない」
「ああ、全て特注品さ。もちろんクオーツは新型オーブメント用のものだ。準遊撃士での功績に対するギルドからの報酬だと思ってくれ」
「えへへ、ありがとう！」
「それでは自分は宿舎の出口で待っている。準備が終わったら来てくれ」
クルツは先に外に出ていった。
「それじゃあ、エステルちゃん。早速、演習の準備を始めようか」
「うん、フィリスさんとロベルトさんの所に行って話を聞いてみなくちゃね」

～フィリス管理人
「今日の演習はまた一段と厳しいみたいね。手軽に回復できる便利な料理をささっと教えてあげちゃうわ？」
フィリス管理人はレシピ手帳を渡した。
「そうそう、食材も忘れずにね」
同時に食材の詰め合わせも貰った。
「今、もらった食材で料理を作れちゃうんですか？」
「ええ、基本的な料理はもちろん作れるんだけど……。食材の中には魔獣が落とすものもあるの。そんな材料をたくさん使う料理は食材を集めるだけでも一苦労よ」
「た、確かに……。色々とヘンな食材があったわよね」

「うーむ、なるほど。働かざる者、食うべからずですね」
「料理についての詳しい説明はブレイサー手帳にもあるから時間があるときにみておいて。それじゃあ、お2人さん。演習がんばってね」
「うん、ありがとう」
「お料理、試してみますね！」

～整備士ロベルト
「お、どうやら2人とも新型オーブメントにしたみたいだね。手帳に載っている新型クオーツとアーツのリストにはもう目を通してみたかい？基本的なところは一緒だけど、能力の変わっているのもあるからきちんと確認しておく方がいいよ。さてと、実際にクオーツを作る前にまずはおさらいから始めようか。オーブメントのことで忘れたことがあったら聞いてくれよ」
エステルたちはオーブメントのことを一通り聞いた。
「さてと、説明はこれくらいにしてさっさと演習の準備をしなくちゃな。少なくとも回復のアーツくらいは使えるようにしておいた方がいいよ。回復のアーツを使うためには、どんなクオーツが必要になるかわかるかな？分からなかったら手帳で調べて早速、合成してみてくれよ」
エステルは回復系のクオーツを合成した。
「うん、ちゃんと回復のアーツが使えるようになったみたいだね。それじゃ、2人とも気を付けて行ってくるんだよ」
準備を終えたエステルたちは出口へと向かった。

第6章　乙女の決意（6）

―出口
「新しいクオーツを作って回復系のアーツも用意したか。これでようやく出発できるな」
「ほっ……」
「えっと、確か西の方にある中世の地下水道でしたよね？」
「ああ、『バルスタール水道』だ。先ほども言ったが、水道内には危険な魔獣が徘徊している。２人とも、準備はいいのか」
「ええ、大丈夫です」
「わかった。それでは出発しよう。２人とも、付いて来てくれ」
「了解！」
「分かりました！」

―バルスタール水道
「ここが『バルスタール水道』……」
「へ～、結構大きな地下水道みたいですね」
「王都の地下水道ほどではないが、それなりの広さはあるだろう。本日の演習は、水道の最奥にあると思われる機密文書の回収だ」
「き、機密文書ぉ？」
「はは、あくまでもそういう想定での演習だよ。とにかく、水路の最奥まで行けばダミーの書類が見つかるはずだ。それを回収できたら演習終了さ」
「うーん、話を聞いてる限りだと簡単そうに聞こえますけど……」
「当然、演習というからには色々と用意してるのよね？」
「まあ、ご想像にお任せするよ。ちなみに徘徊している魔獣がかなり手強いのは確かだ。ひょっとしたら『チェインクラフト』を使い

こなす必要があるかもしれない」
「『チェインクラフト』って言うと……」
「ここに来てから特訓した、仲間同士による協力攻撃ですよね？」
「ああ、複数の仲間が敵を同時に攻撃できるクラフトだ。せっかくだから、この演習中に試してみるといい」
「うん、わかった！」
「……それと、戦闘に際して君たちにこれを渡しておこう」
エステルたちは魔獣手帳を受け取った。
「あ、これって……」
「これは……『魔獣手帳』ってヤツですね？」
「ああ、戦った相手の情報を記録しておくための手帳さ。敵の特性が判り次第、その手帳に書き記すといい」
「敵の情報か……。戦いには重要な事よね」
「うん、まず敵を知ることは兵法の基本でもあるからね。恩に着ます、クルツ先輩」
「はは、礼には及ばないよ。加えて言わせてもらうと、傷を負った場合には無理せず撤退するように。オーブメントの回復装置も念のために用意したからね」
「あはは、さすがはクルツさん。何もかも準備万端ってわけね」
「うん、それだけに私たちもちゃんと期待に応えないと。それでは行ってきま～す！」

―バルスタール水道　最奥
「やあ、ようやく来たか」
最奥にいたのはクルツだった。
「ク、クルツ先輩！？」
「え、ちょっと待って……。入口の所にいたはずなのにどうして先回りしているわけ？」

「実は他に抜け道があってね。君たちが仕掛けを解除している間にまっすぐここに来させてもらったよ」
「ガクッ……。せっかく苦労して仕掛けを解いてきたのに……」
「そ、それはともかく……。やっぱりここが地下水路の最奥なんですよね？」
「ああ、その通りだが？」
「それじゃあ……回収する機密文書っていうのは？」
「ふふ……」
クルツが武器を構えた。
「へっ！？」
「や、やっぱり……」
「自分の役は、機密文書を強奪しに来た某国の武装工作員だと思ってくれ。当然、同じ目的を持った者たちは実力を持って排除させてもらうよ」
「あ、あんですって～！？」
「機密文書は単なる口実……。本当の演習課題は、探索中の予想外の交戦ってわけですね！？」
「ふふ、そういうことだ。それでは……こちらから行かせてもらうぞ！」

「やれやれ……。手加減したつもりはなかったが。どうやら、自分の負けのようだな」
「はあはあ……。あたしたち……勝ったの……？」
肩で息をしながらエステルがつぶやいた。
「う、うん……。さすがは『方術使い』……。２人がかりでやっと勝てたね……」
「さて……工作員が無力化したことで君たちは機密文書を回収した。今回の演習はこれで終了だ」

「そ、それじゃあ今日の訓練は……」
「これで終わりとか……？」
「はは、まさか。宿舎に戻って昼食を取ったら南にある『サントクロワの森』に向かう。演習の反省点を見直す意味でもみっちり訓練を受けてもらおうか」
「ひえ～……」
「クルツ先輩って……ホント、容赦ないですよねぇ」

―宿舎前　夜
「さてと、本日の訓練は終了だ。２人ともご苦労だったね」
「つ、疲れた～……」
「た、確かに……。今までで一番ハードだったね」
「やれやれ。まだまだ体力が足りないな。今夜は早めに休んで明日に備えておくといい」
「は～い……」
「お疲れさまでした～……」
力のない声で宿舎に入ったエステルとアネラス。

―宿舎　１階
「はあ……。今日は本当にハードだったね。まあ、ここでの訓練もそろそろ仕上げみたいだけど」
「うーん。嬉しいような、残念なような。それにしても……クルツさんって、かなり強くない？あたしたち２人を相手にしてもまだまだ余裕がありそうだったし」
「あはは、それはそうだよ。『方術使い』のクルツと言えばリベールの遊撃士じゃＮｏ．２だし。一番はもちろん、エステルちゃんの

お父さんだけどね」
「あ、うん」
「ちなみに、正遊撃士のランクはGからAまでの7段階あるの。私なんて、半年かけてやっとFに昇格できたけど……。クルツ先輩なんてBでもうすぐAに昇格するらしいよ」
「へえ、A級っていったらジンさんと同じってことよね。（でも、その凄腕のクルツさんの記憶を奪った犯人って……。あたし……止められるのかな……）」
「……エステルちゃん？どうしたの、真剣な顔して」
「あ……。ご、ごめんなさい。ちょっと、ボーッとしちゃって」
「……。ひょっとして……ヨシュア君のこと考えてた？」
「あー……。うん、そんなところかな」
「そっか……。私、シェラ先輩から少し事情を聞いただけだけど……。心配だよね……。今、どこで何をしてるかとか」
「……うん。でも、大丈夫！あんまり心配しないで。しょせん、ヨシュアなんて1人で勝手に思い詰めて出ていった家出息子に過ぎないんだから……。絶対に見つけ出して首に縄をかけてでも連れ戻すっ！」
「そうだね、その意気だよ！エステルちゃんがその気だったらヨシュア君は絶対に見つかる！お姉さんが保証してあげるよっ！」
「あはは、ありがと……。あ、でも……アネラスさんってあんまりお姉さんって感じがしないよーな」
「あ～、ひどい、エステルちゃん。私のこと、子供っぽいとか思ったりしてるんでしょう？」
「（ギクッ……）い、いや～、そこまでは」
「うーん、これでも君より2歳は年上なんだけどな。まあいいや、年上扱いされるより友達として付き合える方が嬉しいし。ふふっ、今後ともよろしくね？」
「あ……うん、こちらこそよろしく！」

「さ～てと、そろそろ休んで明日に備えるとしますか。ずいぶん疲れちゃったけど明日の訓練、出られそうかな？」
「あ、それは大丈夫。あたし、いくら疲れてても次の朝にはあんまり残らないから。アネラスさんさえ良ければいくらでも付き合わせてもらうわ」
「やった、そうこなくっちゃ。それじゃあ、おやすみなさい」
「うん、おやすみなさい」
アネラスは自分の部屋に行った。
「さてと……あたしも部屋に戻って休もうかな。あ、そういえば。演習でセピスを手に入れたっけ。新しいクオーツも揃えたいし、寝る前に工房に寄ってみようかな？」

―2階　自分の部屋
「はあ、もうクタクタ……。明日のためにもさっさと寝なくちゃね……」
エステルはベッドで横になった。

―深夜
「（ん……？なに……この音……）」
エステルは物音で目を覚ました。
「何この音……。ひょっとして銃声！？」
突然部屋がノックされた。
「……エステルちゃん！エステルちゃん、起きてる！？」
アネラスが部屋に入ってきた。
「アネラスさん！？」
「よかった！起きてたんだね！さあ、早く支度をして！」

「う、うん！この銃声ってまさか……」
「正体は判らないけど何者かが襲撃してきたみたい！クルツ先輩が応戦しているからエステルちゃんも急いで！」
エステルは急いで装備を整えた。

―宿舎　1階
「クッ……これでしばらくは……」
クルツが正面の扉に鍵をするとその場に崩れ落ちた。
「だ、大丈夫ですか！？」
「た、大変っ！腕にケガをしていますよっ！」
「大丈夫……。ただのかすり傷ですから……。それよりも……敵の侵入を防がないと……」
「ク、クルツさん！？」
「せ、先輩！？ケガをしたんですか！？」
エステルとアネラスがクルツのもとに寄った。
「エステルちゃん！アネラスちゃん！」
「すまない、油断してしまった……。見ての通り、武装した集団がこの建物を襲撃しているようだ……。２人とも迎撃に協力してくれ……」
「りょ、了解！」
「そんな……。先輩に手傷を負わせるなんて……。誰が襲ってきたんですか！？」
「先ほど少しやり合ったが……。あの格好は……おそらく『猟兵団』の一派だろう……」
「猟兵団って……あの百戦錬磨の傭兵たち！？」
「で、でも……どうしてそんな人たちが！？」
「リベール国外では遊撃士協会と猟兵団は事あるごとに対立している……。ここが彼らの標的になってもそれほど不自然ではない……。

ひょっとしたら……例の結社が手を回したのか……」
「え!?」
その時、窓が叩き割られて、鎧に身を包んだ猟兵が1人侵入してきた。
「あ……!」
「しまった!」
エステルとアネラスがすぐに迎撃態勢に入った。

「はあはあ……。な、何とか勝てたけど……」
「そ、そこの人!武器を捨てて降伏してっ!」
「クク……。思ったよりもやるようだ。だが、詰めは甘いようだな」
「え……」
突然、同じ格好をした猟兵が窓から侵入してきて、煙幕を投げた。
たちまちエステルたちの視界が真っ白になった。
「あ……!」
「は、発煙筒!?」
「フフ……。お眠り、仔猫ちゃんたち」
エステルたちはその場に崩れ落ちた。

第6章　乙女の決意（7）

―サントクロワの森

「ん……。……もう朝かぁ……。……。！！！」

エステルはハッと身を起こした。

「え……。ここ、どこ……？たしか敵が襲ってきて……」

エステルが周りを見渡した。そこで、アネラスが横に倒れていた。

「アネラスさん！起きて、アネラスさん！」

アネラスを揺する。

「うーん……えへへ……。うさぎさんとー……くまさんのぬいぐるみ……。……どっちにしようかなー……」

幸せそうに寝ているアネラス。

「な、なんの夢を見ているんだか……。アネラスさん！大変なの、起きてってば！」

「ん～……？」

目を開けたアネラス。

「あれ、エステルちゃん……。あ、そっかぁ……もう朝練の時間なんだ……」

「ガクッ……。朝練どころじゃないってば。お願いだから目を醒ましてよ～！」

「ふぇ……？」

ようやく体を起こし周りを見るアネラス。

「……。……えーと。何がどうなっちゃってるの？もしかして昨日の襲撃って、ただの夢？」

「あたしもそう思いたいけど。2人とも覚えているってことはやっぱり、夢じゃないと思うわ」

「あー、なるほどねー。いやー、これはお姉さん、一本取られちゃったなぁ」

軽く笑い飛ばすアネラス。
「アネラスさん……。まだ寝ぼけてるでしょ」

「えっと、まずは状況を整理してみようか。昨夜、猟兵団らしき集団が宿舎を襲撃してきて……。クルツ先輩が手傷を負って、私たちが駆けつけた直後に窓から敵が侵入してきて……。その直後、私たちはすぐに眠らされてしまった」
「うん。あたしの記憶と同じみたい。問題は、どうしてこんな所で目を醒ましたかなんだけど……」
「うん、確かにおかしいよね。持ち物の類は無くなってみたいだけど……。訓練の時に使っていた武具を取られちゃったみたい」
「あ、あたしもだ。っていうことは、あたしたちをこの場所に運んできたのって……襲撃してきた猟兵団？」
「うん……。そう考えるのが自然だけど……。ただ、私たちを拘束しないで放置した理由が分からないんだよね」
「気絶したあたしたちをここに運んで武装解除した後……。何らかのアクシデントが起きて慌てて別の場所に移動したとか？」
「なるほど。それはイイ線行ってるかも。そうなると、この場所に長居をしていたら危険みたいね。エステルちゃん、地図は持ってる？」
「あ、うん。荷物は取られてないから……。……あったあった」
エステルはル＝ロックルの地図を広げた。
「うん、やっぱりそうだ。ここは昨日訓練で使った『サントクロワの森』だと思う」
「ということは……。当面の目的は、森を脱出して宿舎の様子を確かめるくらい？」
「うん、先輩の安否とか他にも色々と気になるけど……。まずは現状を打破しなくちゃ」

エステルは地図をたたみ、準備をした。
「それじゃあ、出発しようか。敵が近くにいるかもしれないし、慎重に行動した方がいいね」
「うん、わかった」

―サントクロワの森　出口付近
エステルとアネラスが看板を見つけた。
『サントクロワの森。レンジャー訓練のほか、サバイバル訓練など推奨』
「あ、この看板って……」
「うん、案内板みたいだね♪昨日確かに通ったし、きっとこの先が出口だよ」
「やった！これで森から抜けられるわね」

―サントクロワの森　出口
「アネラスさん！あそこが出口みたい！」
「ふ～……。ようやく一息付けるねぇ」
「あらあら……。ちょっと目を離したスキに逃げ出すなんて悪い子たちね」
声がしたと同時に銃弾が飛んで来た。
「きゃ……！」
「くうっ……！」
「ふふ……。あたしの狩り場にようこそ」
「お、女の人！？」
「エステルちゃん、気を付けて！この人……かなり強いよ！」
「あら……。それを見抜く力はあるのね。それに、あのガスを食ら

ってもう目が醒めたのは驚きだわ。さすがは遊撃士。体力だけは無駄にあるみたいね」
「あ、あんたたち！いったい何が目的なの！？どうして訓練場を襲ったのよ！？」
「ふふ……。答える義理はないわね。あなたたちに選べるのは2つ。大人しく降伏するか、このままあたしに狩られるかよ」
「くっ……。（回収した装備で何とか戦える……！？）」
エステルはこのまま闘う決意をした。
「アネラスさん！」
「うんっ！」
エステルとアネラスは武器を構えた。
「ふふ……。いいわ、仔猫ちゃんたち。存分に狩らせてもらうわよ！」

「クッ……。少し甘く見ていたか……」
「はあはあ……。遊撃士を甘く見ないでよね！」
「小娘2人と侮ったのが運の尽きだったみたいだね！」
「フフ、威勢のいい仔猫ちゃんたちだこと……」
猟兵は立ち上がると、再び発煙筒を投げた。
「またっ……」
「エステルちゃん、息を止めて！」
「すでに方術使いは捕まえた。仔猫ちゃんたちの味方はいない。あきらめて投降することね……」
煙が消えた時には猟兵の姿はなかった。
「逃げられたか……。アネラスさん。深追いしない方がいいよね？」
「そうだね……。待ち伏せされる危険もあるし。ねえ、エステルちゃん。今の人が言ってた『方術使いは捕まえた』って……」
「あ……。うん……クルツさんのことだと思う」

「そっか……。……」
「だ、大丈夫だってば！仮に捕まったとしてもクルツさんなら無事だって！それに……こういう時こそ今までの訓練が活かせると思う」
「あ……。非常時の行動、安全の確保、そしてカウンターテロ行動……。うん……確かにそうかも！教えてもらったことを活かしてクルツ先輩を助けなくっちゃ！」
「うんうん、その意気！ね、アネラスさん。とりあえず宿舎に戻らない？敵に占領されたままかどうか確かめた方がいいと思うし」
「うん、そうだね。それじゃあ、出発しようか」
エステルたちは宿舎へと向かった。

第6章　乙女の決意（8）

―宿舎前
「ここから見た限りだと人の気配はないみたいだけど……」
近くの壁から宿舎を伺う2人。
「うん……。入っても大丈夫そうだね。でも、トラップが仕掛けられている可能性もあるから慎重に行こう」
「了解」

―宿舎　1階
「あ……。あの槍、クルツさんの……」
「……。とりあえず……宿舎の中を調べてみようか。何か手がかりが見つかるかもしれないし……」
「うん……わかった」

～血のりで汚れた床
「これって……まさかクルツさんの？」
「うん……。先輩の可能性は高そうだね。この出血量なら致命傷じゃないと思うけど……」

～壊れた通信器
「さすがプロの傭兵。これを見逃すわけなかったか」
アネラスがため息をついた。
「なるほど。応援を呼ばせないつもりね。これはかなり痛いかも……」

～空の食材入れのタル
「これって……。敵が取って行ったのかな？」
「う、う～ん。その可能性が高いと思うけど。管理人さんもいないし一体、どうしちゃったのかな」

～割られた窓
「これって、昨日の夜、猟兵が侵入した時のだよね？」
「うん……。あの身のこなし……相当、訓練を積んでいると思う」

～何かが破り取られた跡
「確かここに、地図が貼っていなかった？」
「うん、私たちが持っている物と同じだね。それを持っていったってことは……」

「とりあえず、宿舎の中を一通り調べてみたけど……。２階はまったく異常なし。荒らされたのは１階だけみたい」
「うーん……。何か理由があると思うけど。でも、敵が何をしているか大体掴めそうな気がしてきたね」
「え……！」
「敵の行動は謎も多いけど一貫している所もあると思うんだ。この宿舎、そして森のテント。２つの場所で発見した手がかりを合わせてみると……」
「あ……ひょっとして！新たな拠点に移動したってことね！」
「うん、私もそう思う。多分、あの森のテントはこの宿舎を襲撃するための仮の拠点だったんじゃないかな。だとしたら……あそこの

人気が無かったのは他に拠点を移したからだと思うの」
「あ、なるほど……。でも、この宿舎を拠点にしたわけじゃないのよね？」
「昨日の襲撃からも判るようにここの守りはあまり固くないしね。万が一、ギルドの応援が来た時に人質と一緒に立て籠もれる場所……。そんな場所に拠点を移したんじゃないかと思うの」
「うんうん。そう考えると辻褄（つじつま）が合うかも。だとすれば、連中が移動した場所って……」
「あ、あんたたち！？」
いきなり入ってきたのは、整備士ロベルトだった。
「あ……」
「ロベルトさん！？ぶ、無事だったんだ！？」
「昨夜、クルツさんが隙を見て逃がしてくれてね……。今まで何とか隠れていたんだ」
「そ、そうなんだ……」
「よかった……。無事でいてくれて……」
「すまない……。僕一人が逃げることになって……。まったく……男のくせに情けなさすぎるぜ」
「お、落ち込まないでよ～。相手はプロの傭兵なんだし」
「うんうん、その通りですよ。人質にならなかっただけでもラッキーだったと思わなくちゃ」
「そうか……。そう言ってもらえると助かるよ。それで結局、クルツさんと管理人さんはどこに行ったんだ？」
「そ、それが……」
エステルとアネラスは、敵の集団が2人を連れて別の拠点に移った可能性を話した。
「なるほど……。守りやすそうな拠点か。そうなると……『グリムゼル小要塞』じゃないかな」
「よ、要塞！？」
「そ、そんな物がこの近くに！？」

「要塞といっても本物ってわけじゃない。最近、建てられたばかりの軍事施設を模した訓練施設でね。対テロ訓練などに使われるんだ」
「そ、そんな場所があるんだ。……アネラスさん」
エステルがアネラスを見た。
「うん……わかってる！」
「お、おい……。まさか君たち2人であの集団に挑むつもりかい？ギルドに連絡して応援を呼んだ方がいいんじゃ……」
「あ、通信器、壊されたわよ」
「……（パクパク）」
ロベルトは言葉が出なかった。
「えっと、ロベルトさんは通信器の修理をお願いします。直り次第、ギルドに事情を伝えて応援を呼んでくれますか？」
「……わかった。オーブメントの整備が必要なら工房の方に来てくれ。それじゃあ武運を祈るよ！」
ロベルトは通信器の修理を始めた。
「さてと……。行こうか、エステルちゃん。その『グリムゼル小要塞』に！」
「おう、合点だ！」
エステルとアネラスはグリムゼル小要塞に向かった。

―グリムゼル小要塞
「これが『グリムゼル小要塞』……」
本物の要塞を模した物とはいえ、本物としか見えない。
「すごいね……。かなり本格的な訓練施設だよ。とりあえず、外からだと人の気配は感じられないけど……」
「うん、間違いない……。つい最近、複数の人間が通ったような跡があるわね」
「ふふ、さっそく追跡訓練の成果が出てきたみたいだね。この様子

だと、敵の数もそれほど多くはないと思うよ。3、4人ってとこじゃないかな」
「敵は凄腕みたいだけど……あたしたちだって正遊撃士だし。対抗できない相手じゃないよね」
「うん、全力を尽くそう！」

―グリムゼル小要塞　最奥
「カカッ、よく来やがったな」
「あ……！」
「やっと出た……！」
「よく来たなぁ。俺たちの新たな拠点によ。仕掛けは楽しんでもらえたかい？」
「えー、おかげさまでね。それよりも、クルツさんたちはその扉の向こうにいるみたいね」
「痛い目に遭う前に解放した方がいいと思うよ～」
「クク、小娘2人がずいぶんと囀(さえず)るじゃねえか。死地とも知らずにのこのこ飛び込んでくるとはな」
「フン、それを言うならあんたたちだって同じでしょ。何が目的か知らないけど袋のネズミと同じじゃないの」
「なにィ……？」
「ギルドの応援もすぐに来るよ。そうなったら、あなたたちの勝ち目は無いと思うんだけどなぁ」
「フン……。宿舎の通信器は完全に破壊した。それでそうやって連絡を取る？」
「え、えっと……（何か上手いハッタリは……）」
エステルはしばし考えた後、いい考えが浮かんだ。
「フン、連絡なんてそもそもする必要がないのよ。定時連絡がない時点でこちらに異常が起きたのはギルドにも分かってるはずだし」

「なに……？」
「確かに、今朝の時点で異常に気が付いているはずだから……。うん、そろそろ応援が到着するかも？」
「……チッ。詰めが甘かったみたいだな。まあいい。どのみち貴様らは目障りだ。とっとと片付けさせてもらうぜ！」
「望むところよ！」
「いざ、尋常に勝負だよっ！」

「……」
倒された猟兵は何も話さない。
「はあはあ……か、勝った……。で、でもこの手応えって……」
「う、うん……。エステルちゃんも気付いた？」
「フフ……。見事、騙されてくれたようだね」
「ハハハッ。面白いように引っかかったな」
扉の向こうから猟兵が出てきた。
「あっ！」
「あ、新手！？」
「はは、だから違うって」
「もう口調は変えてないからあんたたちにも分かるだろう？」
「その姐さん口調……。……も、もしかして！？」
「カ、カルナ先輩！？」
「ビンゴだ」
仮面を取るとカルナだった。
「アネラス、エステル。ずいぶん久しぶりじゃないか」
「久しぶりって……。一体どうなっちゃってるの？そ、それじゃあこっちは……」
「グラッツ先輩ですねっ！？」
「おうよ！」
続いて、グラッツが仮面を取った。

「よう、お2人さん。お疲れさまだったなぁ」
「お、お疲れさまって……。……もしかしてこれって……」
「フフ、そういうことだ。エステル君、アネラス君。最終訓練、ご苦労だったな」
今闘った猟兵はクルツだった。
「さ、最終訓練……」
「つ、つまり……。昨日の襲撃から全部、お芝居だったんですかっ!?」
手の込んだドッキリだった。
「ふふ、この訓練場における慣例のようなものでね。最終訓練は、訓練生を騙して危機的状況を体験させる趣向なんだ」
「あ、あんですって～!?」
「んで俺たちは、その手伝いのためわざわざリベールから来たってわけだ」
「ふふ……。なかなか楽しませてもらったよ」
「う～っ……。先輩ってば意地悪すぎですよ～っ！」
「そ、そうよ！あたしたち本気でピンチだと思ったんだからね！」
「まあ、それが狙いだからね。ちなみに言っておくが……本物の猟兵はこんなに甘くないぞ」
「うっ……」
「あう……」
「リベールでは猟兵団の運用は禁止されているからあまり想像できないだろうけど……。他の国じゃ、遊撃士協会と猟兵団の対立は日常茶飯事なのさ。自然と、遊撃士たちも危機的状況に備える者が多い」
「だから、リベールの遊撃士にも一度は危機的状況を体験して欲しい。そんな親心の現れだと思ってくれや」
「はあ……ずるいなぁ。そんな風に言われたら文句言いたくても言えないわよ」
「うんうん、ずるいよね」

「あらあら。もう終わっちゃったのかしら？」
扉の奥からフィリス管理人が出てきた。
「あ、管理人さん！」
「む～、管理人さんもグルだったんですね？」
「あん、グルなんて言わないで。お芝居っていうから私も一生懸命、台詞を覚えたのよ？うふふ、迫真の演技だったでしょ？」
どこか呑気なフィリス管理人。
「えーえー。完全に騙されましたとも」
「はっはっはっ。２人ともお疲れさん！」
続いて後ろの扉から入ってきたのは整備士ロベルトだった。
「あ～、嘘つきな人だ」
「結局のところ、全員がグルだったわけね。あ、それじゃあ、宿舎の通信器って……」
「うん、あれはジャンクパーツさ。本物の通信器は、別の場所に保管してあるから心配いらないよ。本当は、僕も最後まで人質として出てこない予定だったけど……君たちが、新型オーブメントをどう使いこなすか知りたかったからあのタイミングで現れたってわけさ」
愉快に話す整備士ロベルト。
「まったくもう……。みんな用意周到すぎですよ。でも、結局のところ騙された私たちの負けかなぁ？」
「うーん、悔しいけどそうかも。落ち着いて考えれば不自然な所はかなりあったし……。まだまだ修行が足りないなぁ」
「ふふ、そう落ち込むことはない。グラッツも言っていたが、今回は君たちの実力を試すよりも危機的状況を体験して欲しかった。そういう意味で演習は大成功だ。では改めて……アネラス・エルフィード」
「あ、はいっ」
「エステル・ブライト」
「……はい！」
「これをもって、本訓練場における総合強化訓練の全過程を終了す

る。この3週間、本当にご苦労だったね」
「そ、それじゃあ……」
「もう明日には……？」
「すでにリベール行きの定期船のチケットは取ってある。もう今夜は何も起こらないから2人とも、ゆっくり休んでくれ」
「うふふ。打ち上げと、送別会を兼ねて今夜はご馳走にしなくちゃね？」

第6章　乙女の決意（9）

―同時刻　リベール王国某所

一機の赤い飛空艇がとある研究所のような場所に着陸した。そして緑色の髪にピンク色のスーツをまとった奇妙な少年が降りた。

「ふぅん。なかなか良い所じゃない。教授もいい趣味してるよね」

「遅かったな、カンパネルラ」

「やあ、《剣帝》。ずいぶん久しぶりだねぇ。君がいない半年間、寂しくてたまらなかったよ」

「フッ、心にもないことを。帝国遊撃士協会の襲撃はお前が担当したと聞いている。カシウス・ブライトの相手はさぞかし楽しかっただろう？」

《剣帝》と呼ばれた銀髪の青年が無視して答えた。

「なあんだ、知ってたのか。いや～、あのオジサン、ホントとんでもない人だよね。僕の存在は知らないはずなのに次々と的確な対策を取られてさぁ。おかげで手持ちの猟兵団をひとつ潰されちゃったよ」

潰されたという割には、楽しそうに答える《道化師》カンパネルラ。

「《ジェスター猟兵団》か。一度、稽古は付けてやったがどうにも凡庸な連中だったな。《剣聖》の相手は少々、荷が重かっただろう」

「でもま、君の工作完了まで足止めできたから上出来かな。あれ、もしかして君ってば彼との対決が愉(たの)しみだったとか？」

「フフ……少しな。だが、野に放たれた虎も軍務という名の鎖に繋がれた。もはや、正攻法で我らを止めることは叶うまい」

「ふふ、教授の計画が見事、図に当たったみたいだね。それじゃあ、他のメンバーはもうリベールに来てるのかい？」

「ああ、昨日集結したばかりだ。もっとも、ブルブランのやつは前から下見していたようだが。《怪盗紳士》、《痩せ狼》、《幻惑の鈴》、《殲滅天使》……。揃いも揃って、クセのある連中ばかりが

集まったものだ」
「ふふっ、そういう君だって相当クセが強いと思うけどね。そういえば『彼』……行方をくらましたんだって？」
「……」
それを聞いて銀髪の青年が黙った。
「うふふ、愉しみだな。僕たち《執行者（レギオン）》の中でも隠密行動はピカイチだったしね。《剣帝》と《白面》相手にどこまで頑張ってくれることやら」
「……。所詮、何年も前に《結社》から足を洗った人間だ。大した脅威になるはずがない」
「いやいや。そんな事はないと思うよ」
後ろから《白面》ことワイスマン教授が現れた。
「やあ、カンパネルラ。わざわざご苦労だったね。見事、カシウス・ブライトを足止めしてくれて助かったよ」
「うふふ、愉しい仕事だったよ。しかし、教授の計画書を拝見させてもらったけど……いやはや、ずいぶんと愉しいことを考えてるじゃない」
「ははは、道化師たる君にそう言ってもらえるとは光栄だ。しかし、実際の計画ではもっと楽しんでもらえると思うよ。何しろ、今回協力してくれる諸君は皆、個人的な目的を持っている。私も、そしてこちらの彼もね」
「……否定はしないさ。あなたの思わせぶりに仄（ほの）めかされる筋合いはないがな」
「やれやれ、つれない事を」
「ふふ、なーるほど。色々と事情がありそうだ。まあいいや、教授の悪趣味はまはや芸術的とすら言えるからね。存分に楽しませてもらうよ」
「フフ……。悪趣味とは聞こえが悪い。まあいい、心ゆくまで今回の計画を見届けるがいい。我らが《盟主》の代理としてね」
「うふふ、任せておいてよ。執行者Ｎｏ．０――《道化師》カン

パネルラ。これより、使徒ワイスマンによる『福音計画』の見届けを始める」

第6章　乙女の決意（１０）

―同時刻　エレボニア帝国南部　リベール王国の国境線より約１２０セルジュ北部

「……」

黒髪の少年が墓石の前で花束を抱えていた。

「カリン姉さん……帰ってきたよ」

そう言って、花束を墓前に置いた。

「お、おーい……。どこ行っちゃったのさぁ！？」

娘の声が後ろから聞こえてきた。

「よかった……ここにいたんだ」

カプア一家が黒髪の少年の前に寄った。

「もう、ビックリさせないでよ！１人でさっさと奥に行くんだもん」

「ふう……どうして来たんだ。個人的な用事だから付き合う必要はないと言ったはずだよ」

黒髪の少年――ヨシュアが冷たく言った。

「か、可愛くないヤツ！人がせっかく心配して探しに来てやったのにさ！」

「それに、この有様は興味を持つなって方が無理さ。見たところ、廃墟になったのはここ１０年くらいの間みたいだな」

「俺たちは3年前まで北部の領地に住んでいたが……。南部が廃村になったなんて今まで聞いたことがなかったぞ。何ていう名前の村だったんだ？」

「……。……『ハーメル』。かつてそう呼ばれていた村さ」

「ハーメル……。聞いたことのない名前かも。キール兄、知ってる？」

「いや……。俺も聞いたことがないな。兄貴はどうだい？」

「んー、待てよ……。かなり前に、帝国政府から何かの通達があっ

たような……。……駄目だ、思い出せねえ」
「なんだよ～、それ」
「……僕の用事は終わりだ。貴方たちには関係ないのに付き合わせて済まなかったね」
「別にそれはいいんだけどさ……。アンタ、最初に会った時と態度が違いすぎるんじゃない？ボクたちを舐めてるわけ？」
「……君にそんなことを言われる筋合いはないな。最初に会った時、ずいぶん堂に入った演技をしてくれたじゃないか。僕の態度もそれと同じさ」
「うっ……。そ、それじゃあそれがアンタの本性ってわけかよ！？」
「……そう思ってくれて構わない。少なくとも今の僕は遊撃士とはかけ離れた存在だ」
「ふう……何だか知らんが色々と事情があるみたいだな。まあ、本性を出してくれた方がこちらとしては信頼はできる。上辺を取り繕われるよりはな」
「……」
「それに、おめぇには王国軍に追われていたところを助けてもらった借りもあるしな。そのクソナマイキな態度も少しは大目に見といてやらぁ」
「……大目に見る必要はない。貴方たちを助けたのはあくまで利用できる駒が欲しかっただけだからね。貸しに見合う働きを期待させてもらうだけさ」
「ぐっ、口の減らねぇガキだな。だがまあ、おめぇの提案は俺たちにとっても渡りに舟だ。せいぜい俺たちの方もおめぇを利用させてもらうぜ」
「……それでいい。僕と行動するのはかなりの危険が付きまとう。その危険に見合うだけの協力はさせてもらうつもりだ」
「ほ、ほんと可愛くないヤツ！なんでこんなヤツのことをあの時一瞬でも……」
「……？」

「なんでもないっ！不思議そうな目でボクを見るな！」
「どうどう、ジョゼット。ま、いずれにしてもお互いの目的を達成するまでは俺たちが仲間ってのは確かだ。よろしく頼むぜ、ヨシュア」
「……。わかった、よろしく頼む」
「ヘッ……。そろそろ出発するかよ？」
「ああ……戻ろう。リベールへ――見えざる影に覆われた大地へ」

第7章　忍び寄る影（1）

―王都グランセル　封印区画　最下層

「ふ～、それにしてもほんまゴツイとこですねぇ。いい加減、足が疲れましたわ」

ユリア大尉に封印区画を案内されていたケビン神父が長時間歩いていたので疲れていた。

「ふふ、安心するといい。ここが《封印区画》の最下層だ」

「わお、ホンマですか！？は～、あと半分とか言われたらどないしようかと思いましたよ」

「フッ、ご謙遜を。神父殿が、聖職者にしてはかなり鍛えてあるのはお見通しだ。そうでないと君の役目はなかなか務まらないだろうからね」

「あいた、かなわんなぁ。まーええですわ。リベール王家とウチのところは昔から縁が深いみたいですし。そや、大尉さん。例の市長さんのアレですけど……」

「ああ、《封じの宝杖》だね」

《封じの宝杖》とはダルモア市長が所持していた《アーティファクト》のことで、時間を止める効果があるものだ。

「盟約に従い、指定された方法で厳重に保管させてもらっている。いつでも手渡せると思うよ」

「おおきに、助かりますわ。それじゃあ……例のブツ、見せてもらえますか？」

「ああ――こちらだ」

ケビン神父とユリア大尉は最深部へと向かった。

―封印区画　最深部

「こいつはまた……」
ケビン神父は最深部の有様に驚いた。
「七耀教会もさぞかしこれらの扱いには困るだろう。超弩級（ちょうどきゅう）と言ってもいい古代遺物（アーティファクト）だろうからね」
「……。……ちょいと調べさせてもろてもええですか？」
「もちろんだ。陛下の許可も下りている。どうか我々に知恵を貸していただきたい」
ケビン神父はまず、《環の守護者》トロイメライを調べ始めた。
「こいつが報告書にあった《環の守護者》っちゅうヤツか。カルバードで出土した巨像に雰囲気は似とるが……。うー、動いているところをこの目で確認したかったわ～。それと……」
次に、リシャール大佐が《ゴスペル》を設置した古代の装置を調べ始めた。
「古代ゼムリア文明末期……１２００年前の代物やな……。装置としての機能は不明ながら遺跡全体の中枢であるらしい……」
「アーティファクトの解析は現代の技術では不可能らしいな。同じ導力として稼働しながらもオーブメントとは異なる機械体系……。そうラッセル博士が仰っていたよ」
「『早すぎた女神の贈り物』――――そう教会では定義しとりますわ。それであっちが……」
最期に目を向けたものが、床に収納された４つの支柱だった。
「《ゴスペル》っちゅう漆黒のオーブメントが使われた直後……ここにあった巨大な柱が床の中に格納されたそうですな？」
「ああ、ここを含めた四隅にある柱が格納されたそうだ。しかし、２ヶ月近く経つのに、その意味はいまだ掴めていない」
「封じられた《輝く環》……。そして使われた漆黒の《福音》……。装置が喋った《第二結界》と《デバイスタワー》の起動……。なるほどなー……。微妙にカラクリが見えてきたわ」
「カラクリが見えた……。そ、それは一体どういう……！？」

ユリア大尉が身を乗り出した。
「いや～、何ちゅうか直感みたいなモンですけど。恐らくこの場所は《門》やないかと思います」
「《門》……？」
「ええ、そうです。女神の至宝に至るための《道》を塞いでいた《門》……。そして、それをこじ開けたのが《福音》と呼ばれた漆黒の鍵……。そう考えれば、ここに肝心の《輝く環》が無いのも肯けますわ」
「だ、だが、《道》と言ってもここはすでに遺跡の最下層だ。博士の調査でも、他のエリアが存在しない事は判明しているが……」
「多分、目に見える形での《道》とはちゃいますやろ。地下に流れる七耀脈……。あるいはもっと別の経路……。恐らく、それを越えたどこかに《環》の手がかりがあるはずですわ」

第7章　忍び寄る影（2）

―王都グランセル　発着場

「ふ～。半日以上、飛行船に乗ってたらさすがに疲れちゃったねぇ。早速、訓練終了と帰還の報告をギルドにしに行こっか？」

「……」

「エステルちゃん？」

「う、うん……。そうよね。エルナンさんに挨拶しなきゃ」

「えっと……もしかして。エステルちゃん、緊張してる？」

「う、うん、何でかな……。訓練に行く前はそんなこと感じなかったのに……。これから本格的に正遊撃士として動くと思うと何だか落ち着かなくって……」

「そっか。多分それは……武者震いなんじゃないかな」

「む、武者震い？」

「エステルちゃんはこの一月の訓練で強くなった。それは、力だけじゃなくて知識とか慎重さとか判断力とかそういうものも含めてだと思う。謎の組織の陰謀を暴いてヨシュア君を連れ戻す……。たぶん、そのことの大変さが前より見えてるんじゃないかな？」

「あ……。うん。言われてみればそうかも。はあ……マヌケだわ。登ろうとする山の高さが見えてなかった登山者みたい」

「登る気、無くしちゃった？」

「ううん！やる気だけは前以上かも。どんな山だって、結局は一歩一歩登るしかないんだし。たとえ這ってでも頂上を目指してやるんだから！」

「ふふっ、その意気だよ。それじゃあ、ギルドに報告に行こうか？」

「うん、了解！」

―遊撃士協会グランセル支部
「そうですか……。２人ともご苦労さまでした。では、訓練の評価と合わせて報酬をお渡ししましょう」
エステルとアネラスがエルナンに訓練場での報告をした。
「え？訓練なのに報酬なんてもらっていいの？」
「ええ、これも仕事の一環ですからね。もちろん、その分の活躍は期待させてもらいますよ」
「あはは……頑張ります」
エステルとアネラスは査定を受けた。
「どうやら、充実した訓練期間だったようですね」
「うん！本当に勉強になっちゃった」
「また機会があったらぜひとも利用したいですね」
「ふふ、それは何よりです。そういえば、クルツさんたちは訓練場に残ったそうですね？」
「うん、カルナさんたちと上級者向けの訓練をするらしいわ。しばらく帰って来れないみたい」
「でも、正遊撃士が３人も国外に行ったきりだもんねぇ。これから猛烈に忙しくなりそう。カシウスさんも、もう本格的に王国軍で働いているんだったよね？」
「あ、うん。確か、レイストン要塞勤務になるって聞いたけど……」
「カシウスさんは、准将待遇で軍作戦本部長に就任されました。実質上、現在の王国軍のトップとも言えるでしょうね」
「ぐ、軍のトップ！？それって今だとモルガン将軍じゃないの！？」
「当初はその予定だったそうですが将軍ご自身の意向で、カシウスさんに権限が集中する体制になったそうです。将軍としては、若いカシウスさんに王国軍の未来を託したいんでしょうね」
「うーん……。あんまり実感湧かないわねぇ」
「あはは、カシウスさんならそれもアリって感じがしますけど。ただ、これでますますギルドの戦力が低下しますねぇ」
「まあ、以前よりもさらに軍の協力は得られそうですが……。ただ、

今の我々には新たに警戒すべき事があります」
「え……」
「それって……。やっぱり《結社》のことよね。もしかして、何か動きがあったの？」
「いいえ、今のところは。ただ、ここ1ヶ月の間、奇妙なことが起こっていましてね。たとえば……各地に棲息する魔獣の変化です」
「魔獣の変化……」
「具体的にはどういう事ですか？」
「まず、今まで見たことのないタイプの魔獣が各地で現れました。さらに、既存の魔獣も今までよりはるかに手強くなっているそうです。今のところ、原因は判明していません」
「そ、そんな事があったなんて……。《結社》っていうのが何かしたって事なんですかっ！？」
「いや、結論するのは現時点では早計でしょうね。ただ、女王生誕祭を境にして何かが起こり始めている……。それは確実に言えると思います」
「そんな……」
「……」
「実は、その件について対応策を立てることになりまして。エステルさんとアネラスさんにも是非、協力をお願いしたいんです」
「へっ……？」
「なんだ、もう到着してたのね」
その時、シェラザードとアガットが入ってきた。
「あ、シェラ先輩！？」
「シェラ姉！？それにアガットも……」
「お帰り、エステル、アネラス」
「ヘッ、思ったよりも早く帰ってきやがったな」
「シェラ姉、ただいま！アガットも、お久しぶりだね？」
「ああ、生誕祭の時以来だな。……ヨシュアのことはオッサンから聞かせてもらった。ヘコんでたみてぇだが……どうやら気合い、取

り戻せたみてえじゃねえか」
「えへへ、まあね。それよりも……どうして2人が一緒にいるの？」
「うーん、確かに。珍しいツーショットですよね」
「あら、そうかしらね？」
「ま、確かに一緒に仕事をすることは少ないかもしれんな」
「実は、シェラザードさんとレインさんには、特別な任務に就いてもらうことになりましてね。そのために来てもらったんですよ」
「特別な任務？」
「ええ……。《身喰らう蛇》の調査です」
「《結社》の調査！？」
「そ、それってどういう……！？」
「調査と言っても、具体的に何かをするってわけじゃないわ。なにせ、実在そのものがはっきりしない組織だしね」
「各地を回って仕事をしながら、《結社》の動向に目を光らせる……。ま、地味で面倒な任務ってわけだ」
「な、なるほど……。でも、現時点ではそれくらいしか手はないのかも。それじゃあ、あたしたちに協力して欲しい事って……」
「ええ、2人のお手伝いです。王国各地で情報収集するためにアガットさんとシェラザードさんには別々に行動してもらうのですが……。得体の知れない《結社》相手に単独行動は危険かもしれませんから」
「じゃあ、私たちのどちらかがシェラ先輩のお手伝いをして……。もう一方がアガット先輩のお手伝いをするってわけですね？」
「そういう事になりますね。どうでしょう。協力していただけませんか？」
「あたしはもちろん！元々、《結社》の動きについては調べるつもりだったから渡りに舟だわ」
「私も協力、させてください。そんな怪しげな連中の暗躍を許しておくわけにはいきませんよ！」
「ありがとう、助かります」

「さて、そうなるとチームの組み合わせが問題ね。あたしとしてはどちらがパートナーでもいいわ」
「互いに面識はあるわけだしな。自分たちの適性を考えて2人で相談して決めてみろや」
「うっ……。なかなか難しいこと言うわねぇ。アネラスさん、どうしよう？」
「うーん、そうだね。無責任かもしれないけど……ここはエステルちゃんが決めちゃうのが一番いいと思う」
「ええっ！？」
「やっぱりエステルちゃんは正遊撃士になったばかりだもの。遊撃士としての自分のスタイルがまだまだ見えてないと思うんだ。だから、これを機会に自分がどういう風になりたいのか考えてみるといいんじゃないかな？」
「アネラスさん……」
「ふふ、アネラス。いつの間にか、いっちょまえな口を利くようになったじゃない？」
「ふふん、任せてくださいよ♪」
「ま、言うことはもっともだ。例えば、俺とシェラザードは遊撃士のランクは同じくらいだが、戦闘スタイルのクセはかなり違う。俺はアーツは補助程度で重剣を使った攻撃がメインだが……」
「あたしは機動力と鞭の射程、そしてアーツも活用するタイプね。確かに、そのあたりはどちらを選ぶかの基準にはなるわ。ただ、遊撃士の仕事っていうのは何も戦闘だけじゃないからね。自分なりに考えて選ぶのが一番よ」
「う、うーん。えっと、それじゃあ……。アガット。協力してくれる？」
エステルはレインを指名した。
「そうか、わかった。正遊撃士になったからにはこれまで以上に厳しく行くからな。覚悟しとけよ」
「はいはい、判ってますって。ホント、予想通りの憎まれ口を叩く

んだから」
「む……」
「はいはい、ケンカしないの。それじゃあ、あたしはアネラスとコンビか。訓練の成果、見せてもらうわよ」
「はいっ。ふふ、久しぶりに先輩とコンビを組めて嬉しいなぁ」
「さてと、これでようやくこの問題はケリがついたが……。具体的にどういう風に各地を回るかってのが問題でだな」
「エルナンさん。そのあたりはどうかしら？」
「そうですね……。当面は、忙しい地方支部の手伝いに行くのが良いでしょう。実は、ロレント支部とルーアン支部から応援要請が来ているんですが……」
「あちゃあ、さすがにロレントを留守にしすぎたか。ここは、アイナを助けるためにもあたしが行った方がいいのかな」
ロレント支部は比較的忙しくなりやすい支部だ
「そうですね、私も賛成です。うーん、アイナさんに会うのは久しぶりだな～」
「だったら俺たちはルーアン支部に行くとしよう。エステル、それでいいな？」
「うん、もちろん。ルーアン地方か……。みんな、どうしてるのかな」
ルーアン支部受付のジャンなどが頭に浮かんだエステル。
「各支部への連絡は私の方からやっておきます。それでは皆さん。気を付けて行ってきてください」

第7章　忍び寄る影（3）

―王都グランセル　発着場

「それじゃあ、あたしたちは一足先に出発するわね。エステル……せっかくあんたが帰ってきたのにゆっくりできなくて残念だわ」

「うん……あたしも。でも、アイナさんも困っているみたいだし仕方ないわよ。ロレントのみんなによろしくね」

「ん、わかった。エステル。もう大丈夫だとは思うけど……くれぐれも焦るんじゃないわよ」

「シェラ姉……」

「あたしのタロットはあんたとヨシュアの関係が断たれていないことを示していた。だから、大丈夫。あんたとヨシュアの絆を信じなさい。そうすれば、必ず道は開けるから」

「うん……わかった。ありがとう、シェラ姉。すごく勇気づけられちゃった。あたし……」

「ほらほら、そんな顔しないの。正遊撃士になったんでしょ？堂々と胸を張っておきなさい」

「……うん、わかった」

「ふふっ……。エステルちゃん。しばらくのお別れだね」

「アネラスさん……。訓練に付き合ってくれて本当にありがとう。本当は、シェラ姉に頼まれて一緒に来てくれたんでしょ？」

「へっ……」

シェラザードが驚いた。

「えへへ、バレてたみたいだね。うん、ヨシュア君のことをよく知らない人が側にいた方が気持ちの整理ができるからって。そうシェラ先輩に頼まれてたの」

「あはは、そんな事だろうと思った」

「ちょ、ちょっと……。なに全部バラしてるのよっ？」

「まあまあ、いいじゃないですか。……でも、それだけじゃなくて

自分を鍛えたかったのも確かなんだ。エステルちゃんと一緒に訓練できてすごく得る物も多かったのも本当。だから私からもありがとう、だよ」

「アネラスさん……」

「そ、それから、あのね……。こんなことを言い出すと変に思われるかもしれないけど……」

アネラスが急に言いにくそうにした。

「???」

「もう私たちは友達だと思うけど……。私としては、エステルちゃんとそれ以上の関係になりたいと思ってる」

「……。えええっ!?」

「ちょ、ちょっと……。いきなり何を言い出すのよ!?」

「先輩、止めないで下さい!私、これでも本気なんですからっ」

「ほ、本気って……」

シェラザードが頭を抱えた。

「（ったく、何やってんだか……）」

「そりゃあ、私はエステルちゃんより2歳も年上だけど……。でも、遊撃士の中では同じような年頃だと思うんだ。それに、こういうことって年の差は関係ないと思うし……。だから……どうかな?」

「え、えっと……!う、嬉しいんだけどその、ちょっとビックリしたっていうかっ!それに、ヨシュアもいるし各方面で色々マズイっていうか……」

「ヨシュア君?私とエステルちゃんがライバル同士になったら何かまずいことでもあるの?」

その場にいた3人は沈黙した。

「……ライバル同士?」

「うんうん。歳も近いし、武術の腕も互角。お互い切磋琢磨できるといいなって思ったんだけど……。迷惑、だったかなぁ?」

「あ、あはは……。そういう意味だったのね」

「はあ……。相変わらずズレてるというか。そんなオチだとは思わ

なかったわ」
「???」
「うん……でも、そういうことなら。不肖、エステル・ブライト。若輩の身ではありますが……。喜んで、アネラスさんをライバル認定させてもらうわ！」
「やったぁ！とりあえず、どっちが先輩たちのレベルに追い付けるか競争だね♪」
「望むところよ！絶対に負けないんだから！」
「ふふ……やれやれ。こりゃ、あたしたちもウカウカしてられないわね」
「へッ、まったくだ。向こう見ずなガキほど恐ろしいものはねえからな」

「ロレント方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください」

「あら、もう時間か」
シェラザードとアネラスは定期船に乗った。
「それじゃあね、2人とも。お互い、何か動きがあったらギルドの支部を通じて連絡し合うようにしましょう」
「ああ、了解だ」
「またね、シェラ姉、アネラスさん！」
「うん！エステルちゃんたちも元気で！」

「さてと……。あたしたちも乗船手続をしてルーアン行きの船を待とっか？」
「そうだな、反対周りの定期船もすぐに到着するだろう。ただ、お前は一ヶ月ぶりだし買い物でもしたいんじゃねえか？」
「んー、確かに百貨店とか覗きたいけど。アガットはどうしたいの

？」
「俺はどちらでも構わねぇ。身支度だの何だのは女の方が必要だろうからな。お前が好きなように決めろや」
「そっか……えへへ。うーん、そうね。買い物はルーアンでもできるし……。とっとと乗船手続しちゃいましょ」
「そうか、わかった。乗船券は飛行船公社の待合所の中で売ってるぞ」
「ん、了解」

―飛行船公社　待合所
「あれっ……？」
エステルたちが飛行船公社に入ると、言い争いが起こっていた。そこにはミュラーの姿もあった。
「まったく、これだから尊大な帝国貴族というのは……。鼻持ちならないにも程がありましてよ」
「フン、鼻持ちならないのはそちらの方ではないのかね。第一、エンジン供給についてどうして共和国が口を出す？それこそ、内政干渉ではないか」
「安全保障上の問題ですから。貴国がリベールを侵略してからまだ１０年しか経っていないでしょう。そんな侵略国家がぬけぬけと最新技術に手にするなど言語道断。友好国のメンツにかけても見過ごすことなどできませんわ」
「な、なにが友好国だ！１０年前も実際に兵を出したわけでもなかろうに！ただの傍観者風情が偉そうな口を利くのはやめたまえ！」
「な、なんですって……」
「ダウィル大使……。そのあたりになさっては。他の客の迷惑になりますよ」
「し、しかしミュラー君」

「エルザ大使もここはお引き取り下さい。この話は、いずれ別の機会に双方の大使館ですればよいかと」
「……そうですわね。帝国軍人に指図されるのはあまり愉快ではありませんけど。尊大で性根の腐った帝国貴族よりは遥かにマシですわ」
「な、なんだと!?」
「それでは御機嫌よう。皆さん、失礼いたしますわ」
エルザ大使と呼ばれた眼鏡の女性は飛行船公社を出ていった。
「な、なんという失礼な女だ。これだから歴史も伝統もない成り上がりの庶民どもは……」
「大使……」
「……フン、判っている。私は先に大使館に戻る。例の件については君に任せたぞ」
「了解しました」
ダウィル大使が出て行くのと同時にエステルたちはミュラーに話しかけた。
「どうも、こんにちは」
「君は……。確かエステル君だったか。久しぶりだ。武術大会の時以来になるか」
「よかった。覚えていてくれてたんだ。それにしても……すごい言い争いだったわねぇ。今の人たち、どちらさまなの?」
「男性の方はエレボニア帝国のダウィル大使。女性の方はカルバード共和国のエルザ大使。どちらも王都にある大使館の責任者にあたる立場だ」
「そ、そうだったんだ」
「しかし、大使というのは大人気ない口論だったな。あんなもんで務まるのか?」
「ちょ、ちょっとアガット」
アガットの口を止めた。
「いや、面目ない。元々、帝国と共和国は友好的な関係とは言えな

くてね。さらにあの2人は、性格的にも徹底的にウマが合わないらしい。まあ、顔を合わせるたびに口論ばかりしているというのは逆に気が合う証拠かもしれないが」
「あはは、そうかもしれないわね。それにしても……気になること言ってなかった？エンジン供給とか内政干渉とか」
「……」
ミュラーが少し黙った。
「あ、聞いたらマズかった？」
「……いや、構わないだろう。エンジンとは、中央工房が現在開発している最新鋭のものでね。完成の暁には、飛行船公社を通じて帝国と共和国にサンプルが提供される話があるんだが……。その打ち合わせに来たところでエルザ大使と鉢合わせたわけだ」
「ふーん、そうなんだ。でも、新型エンジンくらいでどうして口論になるのかしら」
「そりゃあ、飛行船の性能を左右する最重要の部品だからな。軍艦に搭載されることを考えたらノンキに流せる話でもねぇだろう」
「なるほど……。確かに、それで帝国軍がパワーアップしちゃったらちょっとシャレにならないかも。……あ、ゴメンなさい」
エステルはミュラーが帝国軍人と気付いて謝った。
「いや、確かにその通りだ。普通なら、他国に最新技術を提供するなど考えられないが、これも女王陛下のご意向でね。技術的優位を独占するのではなく、多くの国に提供することで諸国間の平和を確立したい……。そう思ってらっしゃるそうだ」
「なるほど……。確かにそんな風に言ってたかも。うーん、それを考えるとやっぱり女王様って立派よね。ただの理想というよりずっと先のことまで考えた外交政策っていう気がするわ」
「ああ、リベール国民はあの方を大いに誇るべきだろう。……すまない。つい話し込んでしまったな。乗船券を買うのだろう？俺はこれで失礼させてもらおう」
「あ、うん。そういえばミュラーさん。オリビエのことなんだけど

……。彼、もうエレボニアに帰っちゃたのかしら？」
「なんだ、知らないのか？」
「生誕祭以来、機会がなくて挨拶してないまま会ってなくて。申しわけないって思ってたの」
「心配せずとも、あのお調子者ならまだリベール国内に滞在しているぞ。しばらく、エルモ温泉という場所で優雅に逗留（とうりゅう）するとか抜かしていたな」
「あ、そうなんだ。ふふ……。なんだかオリビエらしいな」
「ヤツが大使館に戻ってきたら君たちのことを伝えておこう。少なくとも、帰国前にはギルドに連絡するように言っておく」
「ありがとう、ミュラーさん」
「こちらこそ、あの変人に付き合ってくれて感謝する。それでは、またな」
ミュラーも飛行船公社を出ていった。
「あの金髪男の知り合いにしちゃずいぶん堅そうな軍人じゃねえか。いったいどういうヤツなんだ？」
「ミュラーさんっていって帝国大使館の駐在武官さん。と言っても、あたしたちは1、2回会ったくらいなんだけどね」
「ふーん……。ガタイもいいし隙もねぇ。獰猛な牙を隠し持った優秀な軍用犬ってところか」
「もう、失礼な言い方ねぇ。確かに……かなり強そうな雰囲気だけど」
「フン、あの金髪男もそうだが、どうも帝国人は信用ならねぇな。カシウスのおっさんと何か話していたみたいだが……。どんな目的で長期滞在してるか判ったもんじゃねえ」
「うーん、言われてみれば。でも、オリビエって変人だけど悪人じゃないし……。あのミュラーさんにしたって悪い人には見えないんだけど」
「フン、どうだかな。まあいい、カウンターでとっとと乗船券を買うぞ

「いらっしゃいませ。国内線をご利用ですか？それとも国際線でしょうか？」
「えっと、ルーアン行きの乗船券を2枚お願いします」
「かしこまりました……。あら、お客様。遊撃士協会の方々ですね。エステル様とアガット様でいらっしゃいますか？」
「う、うん、そうだけど？」
「王都支部のエルナン様から乗船券の代金は頂いております。どうぞ、お受け取りください」
エステルたちは乗船券を2枚受け取った。
「そっか、エルナンさんが……」
「さすがエルナン。やる事にソツがねぇぜ」
「それでは、その乗船券を建物を出てすぐの場所にある受付にお渡しください。そこで乗船手続を行います」

―乗船受付
「いらっしゃいませ。定期船をご利用ですか？ご利用になる場合は、乗船手続をいたしますのでチケットをお渡しください」
「手続きをしたら、定期船が来るまでここで待った方が良さそうだ。買い物などはもういいのか？」
「うん、大丈夫よ」
「かしこまりました。それではこちらの用紙にサインをお願いします」
「あ、はいはい」
エステルたちは乗船手続を済ませた。
「はい、結構ですわ。それでは、定期船の到着まで発着場内にてお待ちください」
「うん、わかりました」

「なら、定期船の到着までベンチに座って待つとするか」

第7章　忍び寄る影（4）

―定期船　《リンデ号》

「ふう、いい天気ねぇ。この分だと、ルーアン地方は絶好の観光日和じゃないかしら」

「かもな。もっとも、今は観光以外で熱くなってるみてぇだが」

「観光以外？」

「市長選挙だ。逮捕されたダルモアの代わりに2人の候補が出馬したらしい」

「へ～、そうなんだ。でも、確かにそうよね。いつまでも市長が不在でやっていけるはずないんだし」

「そういや、あの事件はお前らが解決したらしいな。後からジャンに聞かされたぜ」

「あ、あはは……。うん、アガットが抜けてからヨシュアとクローゼでね。まあ、記者の人にも助けられたし、親衛隊が市長を逮捕したんだけど」

「フン、自分の力だけじゃないと分かってるんならそれでいい。それにしても、あの制服娘がクローディア姫だったとはな……。城で聞かされた時には、さすがの俺もビビったぜ」

「あはは、気持ちは判るけどね。そういえば、オリビエもそうだけどクローゼとも生誕祭以来なのよね……。ううん、ティータと博士、それにジンさんとも……」

「ティータと爺さんなら俺の方から事情を伝えといた。お前たちのことをあまりにも心配しやがるからな」

「そうなんだ……。ありがと、アガット」

「ま、いずれ手紙を出すなり、直接挨拶に行くといいだろう。ジンのやつは、生誕祭のあとカルバードに帰っちまった。お前によろしくと言ってたぞ」

「そっか……。挨拶くらいしたかったな」

「まあ、姫さんの方は学園に戻ってるらしいからな。せっかくルーアン地方に行くんだ。ヒマを見て挨拶すりゃあいいだろ」
「うん、そうだよね。ふふっ……」
エステルが不意に微笑んだ。
「あ、なんだよ。なにか変なことを言ったか？」
「ううん、別に。ただ、アガットって意外と気を使う方なんだなって思って。王都を出発する時にも、買い物とか気を使ってくれたし」
「ば、馬鹿言ってんじゃねぇ。ったく……俺は到着まで席で寝てるからな。ウロチョロ船内を歩き回ってルーアンで降りるのを忘れるなよ」
アガットは照れ隠しのように船内に入って行った。
「まったくもう。憎まれ口ばっかなんだから。さてと、到着まで時間はあるし、船内を回ってみようかしら」

「……お待たせしました。まもなく本船はルーアン市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」
エステルが船内を歩いているとアナウンスが流れた。
「あ、いけない。早く席に戻らなくちゃ」
エステルは席に着いた。

第7章　忍び寄る影（5）

―遊撃士協会ルーアン支部

「いや～！来てくれて本当に助かったよ。何しろカルナさんが留守で掲示板の仕事が溜まっていてね。早速、ジャンジャンバリバリ働いてもらうとしようかなぁ」

「あ、あはは……。相変わらず飛ばしてるわねぇ」

「掲示板の仕事はボチボチ片付けるつもりだが……。何か他に緊急の仕事はねぇのか？」

「それが、仕事は溜まっているけど緊急要請にあたる物はないんだ。市長選の管理は軍の管轄だし……。街も、市長選で盛り上がってるから観光客は少ないみたいなんだよね」

「ふーん、市長選ってそんなに白熱しているんだ。誰が出ているんだったっけ？」

「観光事業を推進しているノーマン氏と港湾事業の維持を訴えるボルトス氏さ。ルーアン市長といっても、その権限は地方全体に及んでいてね。マノリアの住民も投票するし、マスコミもかなり注目をしている。ルーアン地方の未来を左右する重要な選挙になるのは間違いないね」

「へ～、そうなんだ。未成年だし、住民じゃないから選挙権はないんだけど……。あの事件に関係した人間としてやっぱり動向は気になるわねぇ」

「そのあたりは《リベール通信》が特集しているから読んでみることをお勧めしておくよ。あ……そういえば。実は1つだけ調べて欲しいことがあったんだ」

「調べて欲しいこと？」

「うーん、なんて言うか……。どう説明したらいいか非常に困る話なんだけど……」

ジャンが言葉に詰まっている。なんだかジャンらしくない。

「なんだぁ？ハッキリとしねぇヤツだな。いつもの図々しさでズバッと切りだしてみろや」
「あはは、言ってくれるねぇ。それじゃあ言うけど……。『亡霊』について調べて欲しいんだ」
エステルとアガットは口を開けたまま、『何を言っているんだ』と言わんばかりの顔でジャンを見た。
「はあ、絶対にそんな顔をされると思ったんだよなぁ。だから頼むのは嫌だったんだ」
「……あ、いや、うん。ちょっと面食らっただけで。いったいどういうことなの？」
「うん……。ここ1～2週間なんだけどさ。『夜、白い影を見た』って報告がギルドに何件も寄せられているんだ。それも、ルーアン地方の各地からね」
「夜、白い影を見た……。そそそ、それって！？」
エステルが飛び上った。
「なるほど、それで『亡霊』か。目の錯覚にしちゃあ各地からってのが気にはなるな」
「うん、そうなんだよね。掲示板の仕事のついでいいから聞き込みをしてもらえないかな？」
「あ、でも、その、ねえ……。あまり安請け合いもできないし、考えさせて欲しいなぁ、なんて」
エステルが下を見たまま答えた。
「エステル君、ひょっとして……」
「え、やだ、違うわよ！？全然そんなことないんだからね！？この泣く子も黙るエステルさんが幽霊が苦手だなんてそんなこと……」
自分から白状してしまったエステル。
「……ゴメンなさい。ちょっとだけ苦手かも」
「あはは。ちょっとどころじゃなさそうだね。まあ、実害があるわけでもないし、この話は無かったことに……」
「いや……引き受けた」

アガットが答えた。
「……忘れんな。俺たちの任務は《結社》の調査だ。少しでも妙な兆候があれば調べて《結社》の関与を検証する。そういう話だったろうが」
「あ……」
「人間、誰しも苦手なモンはある。たまには弱音を吐くのもいいだろう。だが、何もしてないうちから尻尾巻いて逃げ出すんじゃねぇ」
「……」
「やれやれ。ちょっとキツすぎないかい？」
「……ううん。アガットの言う通りだわ。確かに、幽霊とかは苦手だけど……。ヨシュアが消えたことに比べれば、そんなの全然恐くなんかない……」
「エステル君……」
「フン、分かってんじゃねえか」
「ジャンさん、その調査、あたしたちに任せてもらえる？」
「そう言ってもらえると助かるよ。すでに幾つか証言は集まったんだけど新たに3件の目撃情報が届いたんだ。まずは、エア＝レッテンの関所に勤めている兵士の1人でね。夜の巡回中に見かけて腰を抜かしかけたそうだよ」
「ひえ～……」
「2人目は、《レイヴン》のチームメンバーの1人らしい。これはアガットがいたら聞き込みはしやすいだろうね」
「ま、拒否したところで力づくで口を割らせてやるさ」
「やめなさいって……。武術大会の時に対戦したけど、結構心を入れ替えてたみたいよ？」
「フン……どうだかな」
「まあまあ、穏便に頼むよ。そして最後の目撃者は……マーシア孤児院の子供たちさ」
「えっ……孤児院の子たち！？」
「ああ、テレサ院長が代わりに連絡してくれたんだ。ちなみに、マ

ーシア孤児院は先日、建て直されたばかりでね。テレサ院長の希望もあってほぼ前と同じ形になったそうだ」

「そうなんだ……良かった。院長先生と子供たちには挨拶に行くつもりだったし。お祝いがてら話を聞きに行ってみようかな」

「よろしく頼むよ。ただ、言った通り、緊急じゃないから後回しにしてくれても全然構わない。掲示板には他の仕事もあるからそちらをチェックしておくといい。3件の目撃情報を確かめたらここに戻ってまとめて報告してくれ。集まった情報を検討してみよう」

「うん、わかったわ。ただ、レイヴンは倉庫にいるから先に当たってみたほうがいいかも」

「だったら、街から出る前に港の倉庫に行ってみるとすっか」

エステルたちは港の倉庫に向かった。

第7章　忍び寄る影（6）

―港湾区　倉庫

「はぁ、なんか最近タルいよな。色々と鍛えてみたけど強くなった実感はないし……」

「フン……。まさか今更、街道をうろついてる魔獣に苦戦するとは思わなかったぜ」

「あー、なんでも最近、魔獣が狂暴化してるらしいよん。以前の2～3倍は強くなってるんじゃないかってさ」

ディン、ロッコ、レイスがテーブルで話していた。

「なるほど、そういうことか。……仕方ねえ。久々に街に繰り出すとするか。どうだ、北区の《ラヴァンタル》に行かねえか？」

「あー、2階のカジノが新装オープンしたところか。いいねぇ、色っぽいディーラーの姉ちゃんもいるらしいし。へへっ、あわよくばお触りなんかしちゃったりして」

「それだ！カルナの姐御も留守みたいだし少しくらい羽目を外してもいいだろ」

3人が騒いでいると、アガットたちが入ってきた。

「……何が構わないってんだ？」

「ア、アガットさん！？」

「……げっ……」

「まったく、てめえらは……。ちったあマシになったと思えばすぐにタルみやがって……」

「や、やだな～。ただの冗談ですってば。って、そこにいるのは……」

「新人遊撃士のエステルちゃんじゃん！？」

「ども、久しぶりね。武術大会で戦って以来かな」

「あー、そうだな」

「いや～、俺たちあれから決勝戦まで観戦したんだけど。マジ凄か

ったよ。あんたのこと惚れ直したもん？」
相変わらず軽いノリのレイス。
「あはは……ありがと。でね、今日訪ねたのはギルドの用事でなんだけど……。えっと、あなたたちの中で『白い影』を見た人っている？」
「それって……」
「……だよなぁ」
3人はすぐに気付いたようだ。
「あ、やっぱり知ってるんだ」
「だったら、とっとと知ってることを話しやがれ。手間を取らせるんじゃねえぞ」
「……ちょっと待てや。アンタ、少し調子に乗りすぎなんじゃねえのか？」
ロッコはアガットの態度が気に食わないようだ。
「……あ？」
「うざいんスよ、アンタ。勝手にチームを抜けて遊撃士なんかになったクセに。都合のいい時だけ話を聞かせろっていうわけか？ふざけんなって感じなんだよな」
「お、おいロッコ！」
慌ててロッコを止めるディンとレイス。
「へっ、あいかわらず鼻っ柱だけは強いヤツだぜ。だったら、何をすりゃあお前は満足するってんだ？土下座でもしろってか？」
「……。ここで……俺たちと勝負してもらおうか」
「な、何でそうなるんだよっ！？」
「おいおい、なに熱くなってんのよ」
「るせえ、これはケジメの問題だ。アンタらが勝ったら知っている情報を教えてやる。俺らが勝ったら……二度とデカイ面するんじゃねえぞ」
「へッ、いいだろう。どの程度強くなったのか、この重剣で確かめ

てやろう……。3人とも、気合い入れて来いや！」
「とほほ……。どうしてこんな事に……」
「でも、エステルちゃんとまた戦えるのはラッキーかも？」
「そ、そんなもの？まあいいわ。こっちも手加減はしないわよ！」

「くあ～、さすがに強いぜ」
「白旗白旗、お手上げッス！」
「……クソッ……」
「フン、武術大会に出たっていうのもまんざら嘘じゃないらしいな。だが、まだまだ腰が入ってねぇぞ」
「でも、一般人にしてはかなり強い方だと思うけど。こんな場所でたむろしてないで、遊撃士でも目指してみたら？」
「なに……」
「お、俺たちが遊撃士？」
「あ、ありえねぇって！」
「でも、あたしみたいな小娘だって遊撃士やってるくらいなんだもん。あなた達だって、その気になれば十分なれると思うわよ」
「コラ、安請け合いすんな。遊撃士ってのは傭兵じゃねえ。切った張った以外の仕事も多い。それはお前も経験してるだろうが」
「うーん……。それはそうなんだけど」
「そ、そうだよなぁ。オレら、ケンカくらいしか能がないし……」
「そんな上手い話、あるわけないよな～」
「……。とりあえず、約束は約束だ。アンタらの知りたいことを教えてやるよ」
「おう、話してもらおうか」
「さっきも言ったけど、あたしたち、『白い影』を目撃した人たちを探しているの。あなたたちの仲間でもいるって聞いたんだけど……」
「ああ、いるぜ。今日は来ていないがベルフって名前のヤツだ」

「1年前に入ったヤツでね。アガットさんも、顔くらいは知ってると思いますけど……」
「ああ、あいつか。前の事件で取り調べた時にちょいと話したくらいだな」
「ベルフのやつ、ここ数日ほどこの倉庫に来てないんだよね～。幽霊を見たショックで家で寝込んじゃってるのかも」
「ええっ!?そ、それってひょっとして呪いとかタタリなんじゃ……」
エステルが身を震わせた。
「それは知らねぇが……。すげぇビビってたのは確かだ。元々、良いとこのボンボンで気が小せえヤツなんだ」
「フン、まともな家があるのに不良なんかやってんのか。まあいい、詳しい話は本人から聞くから家を教えろや」
「えーと。市長邸の右隣にある家ッス。ノーマンってオッサンの家でベルフはそこの長男なんですよ」
「市長邸の右隣にある家、と。情報提供、どうもありがと。それじゃあ場所も分かったし、ベルフって人を訪ねてみようか」
「ああ、そうするか。それじゃあな。ヒマだからって悪さするなよ」
「フン、余計なお世話だ」
「お疲れさまっす。また来てくださいよ」
「頑張れよ～、エステルちゃん?」

―ノーマン氏の家
「えっと……。ここがベルフって人の家?」
「市長邸の右隣ってことはここでいいんじゃねえのか」
「あら、いらっしゃい」
ノーマン氏の妻であると思われるプリジットがキッチンから出てきた。

「あいにくだけど、主人は今、ホテルの方に詰めているのよ。そちらに行って頂けるかしら」
「へっ？」
「いや、俺たちに用があるのは旦那の方じゃない。ベルフって息子の方だが」
「あらあら、ベルフの？ごめんなさいね。てっきり選挙のことで用があったのかと思ったわ」
「選挙って……。あ、ひょっとしてここのご主人さんが……」
「ええ、主人のノーマンが市長選挙に出馬するんですの。それで、ホテルの最上階を選挙対策本部として使ってね。そちらで支持者の方と選挙活動をしているみたいです」
「そうなんですか……。あの、あたしたち遊撃士協会のものなんですけど。幾つか、息子さんにお聞きしたいことがあって……」
「遊撃士協会？あ、あの、うちのベルフが何かしてしまったんでしょうか？」
焦るプリジット。
「いや、そういうわけじゃねえ。あんたの息子さんが奇妙なものを見たって聞いてな。その目撃情報を聞きに来たんだ」
「奇妙なもの……？」
「お母さんの方は何も聞いてないんですか？」
「ええ、恥ずかしながら……。久しぶりに息子が帰ってきたのはいいんですけど、ロクに話もしてくれなくて……。主人は選挙で頭が一杯で息子と話をしようとしないし……」
「そ、そうなんだ……」
「とりあえず、ベルフと話をさせてもらってもいいか？悩みがあるんだったら相談に乗れるかもしれねぇ」
「そうですか……。よろしくお願いします。ベルフは2階におります。どうぞ上がってくださいな」

「ふう……。……はあ……」
若者が1人ため息をついていた。
「あの～、ちょっといい？」
エステルが声をかけた。
「何やってんだろ、オレ……。オヤジがいないからって安心して家に戻ってきて……。……情けないぜ……」
どうやら聞こえていないようだ。
「おいコラ。人が話しかけてんだからこっち向きやがれ」
「えっ……。うわわわっ！な、なんだアンタたち！？」
「ベルフだな。俺の顔を忘れちまったか？」
「……へ……。アア、アガットさん！？ど、どうしてオレの家に！？」
「ちと聞きたいことがあってな。おっかさんに通してもらったぜ。今、時間はいいか」
「は、はあ……。別にいいッスけど……。……あのう、話って？」
「実は、あなたが『白い影』を見たっていう話を聞いてね。詳しい話を教えてもらえないかって思って」
「そ、その話か……。正直、あんまり話したくないんだよな。話すと思いだしてまた恐くなっちまうから……」
「ああん？」
アガットが剣呑（けんのん）な顔でベルフを見た。
「は、話します！話しますってば！」
「ちょっとアガット。脅かしたりしないでよ～」
「話が早くていいだろ。オラ、とっとと話しやがれ」
「ふう……参ったな。オレ、一週間前までチームの溜まり場になってる倉庫で暮らしていたんですよ。この家には、メシを食いにたまに帰ってくるくらいで……。仲間と馬鹿やりながらあそこで寝泊まりしてました」
「り、理解に苦しむわね～。せっかく居心地のいい家がこんな近く

にあるのに……。アガットも同じような生活してたの？」
「……うるせえ。話の腰を折るんじゃねえ。それで、どうしたんだ？」
「一週間前の夜……いつものように仲間たちと酔っ払って倉庫で寝てる時にふと起きちまって……。夜風に当たろうと外に出たら……見たんですよ」
「見たって……。れ、例の『白い影』を？」
「ああ……。空に浮かぶ『白い影』をな。マントみたいなのをまとって古めかしい衣装を着て……。踊るように宙を舞ってたんだ」
「あ、あはは……。ずいぶん具体的ねぇ……」
「酔っ払って寝ぼけてたって可能性は？」
「いや、それはないッス。オレ、一気に酔いが醒めちゃって叫ぼうとしたけど声が出なくて……。幽霊が北東の方に飛び去った後、倉庫に戻って大声で他の連中をたたき起こしたんです。それでロッコさんに殴られちまったんですけど」
「フン、なるほどな。夜中って話だがだいたい何時くらいか判るか？」
「そうッスね……。真夜中の2時くらいかな。……ああもう。完璧に思い出しちまった……。わざわざ家に戻って思い出さないようにしてたのに！」
頭を抱えるベルフ。
「そ、それが家に戻ってきた理由なんだ。確かに、幽霊を見ちゃった場所で寝泊まりしたくないのは分かるけど」
「ケッ、不良失格だな。《レイヴン》なんざ辞めて、このまま家にいた方が身のためだぞ」
「ううう……。分かってますよ、向いてないって。でもオレ、どうしても親父と顔を合わせたくなくて……。いま親父、選挙活動とかでホテルで寝泊まりしてるからオレも家に戻ってきたんですけど……。選挙が終わったらまた顔を合わせることになるし……。これで市長なんかになったらよけいに締めつけてくるんだ……」

「うーん、それって結局、嫌な事から逃げてるだけのような」
「ううううっ……」
「フン、どうやら自覚はしているみてぇだな。だったら、誰にも頼らずてめえで答えを出してみろ。おっかさんには俺の方からそう言っておく」
「ア、アガットさん……」
「こちらの用件は終わりだ。エステル、次に行くぞ」
「うん、わかったわ。ベルフさん。情報提供、ありがとね」
「……ああ」
これで1つ目の聞き込みは終わった。

第7章　忍び寄る影（7）

―エア＝レッテンの関所
「エア＝レッテンの関所……。ずいぶん久しぶりな気がする。ここに、アレを見た兵士さんがいるのよね？」
「ああ、ジャンが言うにはな。まずは関所の隊長に会ってどいつが見たのか聞いてみるぞ」
「ん、わかった。はあ～、それにしても。こんな綺麗な場所でアレが出るなんてねぇ……」
「白い影だの、アレだのいいかげん往生際が悪いな。素直に幽霊だって認めろや」
「あーもう、ほっといてよ！気にならないように何とかごまかしてるんだから！」
エステルは幽霊の類が相当苦手らしい。

「あの、すみません。遊撃士協会の者なんですけど」
エステルはエア＝レッテンの関所の隊長、ハーン隊長に話しかけた。
「ああ、ご苦労さん。見かけない顔だが今日はどうしたんだい？」
「実は、この関所で『白い影』を見かけた兵士さんがいるって聞いたんだけど……」
「なんだ、ギルドにまでその話が伝わっていたのか。まったく面目ない。お恥ずかしい限りだよ」
「お恥ずかしいって？」
「幽霊を見たなど寝ぼけていたに決まっている。そのような気の緩みは有事では命取りになりかねん。そして、部下の気の緩みは隊長である私の責任だからな」
「あいにくだが、そいつはあんたの方が早とちりだぜ。その幽霊、

ルーアン各地で目撃されているって話だからな」
「なんだって……？」
エステルたちは、ジャンから調査を頼まれたことをハーン隊長に説明した。
「そうだったのか。てっきり寝ぼけていただけだと思ったんだが……。いや、それは確かに私の早とちりだったようだ。ニクスには悪いことをしたな」
「そのニクスさんっていうのが白い影を目撃した兵士さん？」
「ああ、そうだ。カルデア隧道の入口で立哨しているから直接、話を聞くといい。私からの許可は出ていると伝えて欲しい」
「うん、わかったわ」

―カルデア隧道　入口
「お、隧道に出たいのかい？ちょっと待っててくれ。今、門を開けちまうから」
兵士ニクスが門の鍵を取り出そうとした。
「あ、ううん。通りたいわけじゃないの。あたしたち、遊撃士協会の者なんだけど。『白い影』について聞き込み調査をしてるんだ」
「それってひょっとして……。で、でもあれって俺が寝ぼけてただけなんじゃ……」
「ううん、そうじゃないわ。実は、あなた以外にもルーアン各地で白い影を目撃した人がいるのよね」
「あんたも、ここの隊長もその事を知らなかったらしいな。悪いことをしたって言ってたぜ」
「そ、そうだったのか。いや～、安心したよ。夢にしちゃリアルだったからな。……って。夢じゃないってわかったらいきなり恐くなってきたな……」
「……気持ちはわかるかも。ま、まあ、それはともかくその時のこ

とを話してくれない？できるだけ詳しく、具体的に」
「ああ、わかった。……3日前の真夜中、俺は立哨で同じようにここに立ってたんだ。ここって滝の音がすごいだろ？でも、そのリズムに慣れちゃうとかえって眠くなるんだよね。ちょうどメシを食って交替したばかりだったから余計に眠くてさ……。だから、眠気を払うためにこの上を行ったり来たりして歩哨していたんだ。その時さ……。俺がアレを見たのは」
「そ、そっか……。それってどういうアレだった？」
ここでも『アレ』としか言えないエステル。
「白くてボンヤリして古めかしい服を着てたよ。ソレが滝の真上でくるくると踊っていたんだ。俺、もうゾッとして思わずライフルを構えてさ……」
「ええっ！？ゆうれ……じゃなくてソレを撃ったの！？」
思わず『幽霊』と言いかけたエステル。
「あ、ああ……。威嚇射撃のつもりが当てちゃってさ。だけど、当たった様子もなくてその場にボンヤリ浮かんでいて……。いきなり北の方に飛び去ったんだ……」
「あうあう……」
「フン……。こりゃ本物くさいな」
「その後、あわてて中に戻って隊長たちを起こしたんだけど……。『立哨中に寝ぼけるとは何事だ！』『しかも無用の発砲までしたのか！』って大目玉をくらっちゃってさ。はあ……散々だったよ」
「ご、ご愁傷様です。まあ、夢でも見たと思って忘れるのが一番よ、うんうん」
「そんな風に言われてももう忘れられないってば。……何が理由でさ迷っているのか知らないけど何とかしてやってくれ。遊撃士なら、霊の悩みとか解決できるんじゃないのか？」
「や、やめてよね。神父さんじゃないんだから。でも確かに……。何か出てくる理由はあるのかも。何とか頑張って調べてみるわ」
「ああ、よろしく頼むぜ」

こうして2つ目の証言を確認した。

第7章　忍び寄る影（8）

―エア＝レッテンの関所　1階
「わぁ、なんてスゴイの！パパ、ママ、こっちよ！」
「ほらほら、そんなにはしゃいだら転んでしまうぞ」
「うふふ。でも本当にステキね。ありがとう、あなた。一緒に連れてきてくれて」
「いや、君たちにはいつも寂しい思いをさせているからね。このくらい当然の家族サービスさ」
親子3人で旅行中の家族らしい。
「（うーん。仲の良さそうな家族ね。旅行に来たのかしら？）」
「（ああ、そうみたいだな。ひょっとしたら外国から来たのかもしれん）」
「はあ……。なんてスゴイのかしら。見ているだけで吸い込まれそうになってしまうわ。ねえ、そこのお姉さん。この滝って何て名前なのかしら？こんなに沢山の水、どこから流れてきているの？」
女の子がエステルに話しかけてきた。
「おっと、いきなりね」
エステルたちが女の子に近寄った。
「この滝は『エア＝レッテン』よ。ヴァレリア湖から、大昔の水道を通ってここまで水が流れてきてるってわけ」
「ヴァレリア湖って知ってるわ！飛行船で到着する前に見えたとっても大きな湖のことでしょう？」
「うん、そうだけど……。ひょっとして外国から来たの？」
「レンのこと？ええ、そうよ。レンは遠くから来たんだから」
「そっか。レンちゃんって言うんだ。可愛い名前ねぇ」
「うふふ、そうでしょう？だって、パパとママが付けてくれた名前なんだもの」
「レン、お姉さんをあまり困らせちゃだめよ」

「はは、スミマセン。見ず知らずの方にご迷惑を……」
「むーっ。レン、迷惑かけてないもの」
「あはは。気にしないでください」
「外国から来たみたいだが、リベールには旅行に来たのかい？」
「ええ、私は貿易商でリベールにはよく来るんですが。訪ねるたびに、この国の美しさにすっかり参ってしまってね……」
「それで今回は、商談がてら私と娘を連れてきてくれたんです。ふふ、珍しいこともあるものですわ」
「あはは……。いいですね、仲のいい家族で」
「うふふ、うらやましいでしょう？パパは出張ばっかりだけどいつもたくさんのお土産を買って来てくれるし……。ママはいつもニコニコしてておいしいお料理を作ってくれるのよ」
「そうなんだ。うーん、お姉ちゃん羨ましいぞ」
「はは、参ったな……」
「すみません……。まだまだ子供なもので」
「ねぇ、お名前教えてくれる？レン、お姉さんのことなんて呼んだらいいのかしら？」おっと、名前を教えてもらって答えないのは失礼だったわね。あたしはエステル。エステル・ブライトっていうの。遊撃士をしてるんだけど……。うーん、遊撃士って知ってるかな？」
「もう、子ども扱いしないで。でもお姉さんって遊撃士さんだったのねぇ。コワイ魔獣をやっつけたりするんでしょう？」
「うん、そういう時もあるかな」
「ほう……。遊撃士でいらっしゃるか」
「そのお歳で遊撃士なんてとても凄くていらっしゃるのね」
「あはは……。まだまだ新米ですけど」
「リベールの各都市にはギルドの支部がある。旅行中、困ったことがあったらいつでも頼るといいぜ」
「これはどうもご丁寧に。……では私たちは宿泊の手続きをしてまいります」
「ほらレン、行きますよ」

「むー、お姉さんたちともうちょっと話していたいのに。ねえ、お姉さん。こんど会ったら一緒に遊ぼうね？」
「うん、いいわよ」
「うふふ、うれしいな。またね、エステルお姉さん」
レンの家族たちは宿泊部屋に入って行った。
「ずいぶんマセたガキだったな。ティータより1つか2つ年下ってところか」
「うん、そのくらいかも。……」
「どうした。オッサンでも思い出したか？」
「えへへ……ちょっとだけ。あと、ヨシュアと会ったのもあの子くらいの歳だったなって」
「そうか……。……さてと。とっとと次の目撃情報を当たってみるか？」
「うん！」
エステルたちは最後の目撃情報であるマーシア孤児院に向かった。

―一方、同時刻、エア＝レッテンの関所
「あの少女はまさか……。いえ、間違いありませんね。彼女がここにいるということは……。ついに動き始めましたか……」
レインは何かを勘付いたようだった。そしてその場を後にした。

第7章　忍び寄る影（9）

―マーシア孤児院

「ああっ……」

そこには、放火で完全に焼け落ちたはずの孤児院が、焼け落ちる前と全く変わらないほどに再建されていた。

「ほう、こりゃ驚きだぜ。あれだけ黒コゲだったのをよくここまで戻せたもんだ」

「建物が新しくなったくらいであとは元のまんまかも……。……よかった……本当に」

「エステルさん？」

「テレサ先生！」

庭からエステルに声をかけたのはテレサ院長だった。

「ふふっ。やっぱりそうだったのね。いらっしゃい。よく来てくれました。それと……あなたはアガットさん？」

「ああ。ご無沙汰してるぜ」

「以前、クラムの件でお世話になって以来ですね。お久しぶりです。あの時はお世話になりました」

「いや、いいんだ。それよりも、今まで挨拶もナシで申しわけねぇ」

「あ、あの、孤児院再建、本当におめでとうございます。前のまんまだから驚いちゃった」

「マノリアや業者の方々のご好意でそうして頂きました。やっぱり、この雰囲気がマーシア孤児院だと思いますから」

「あはは……。うん、ホントにそうですね。えっと……あの子たちは中にいるんですか？」

「ちょうど今、マノリア村にお勉強に行ってるところなんです。週に一度、巡回神父の方が来て日曜学校が開かれるので……」

「そうなんだ……どうしよう。挨拶のついで、あの子たちから話を聞こうと思ったんだけど……」

「話……。ひょっとして、ポーリィが見た『白いオジチャン』のことかしら？」
「あ、多分それです！そっか、目撃者はポーリィちゃんだったんだ。確かにあの子、妙にカンが鋭かったし……」
「あの子たちが帰ってくるまでどうぞ、中でお待ちになって。お茶とお菓子をご馳走しますから」
「あ、ありがとう……。……」
エステルがそこで黙ってしまった。
「なんだ、どうした？」
「テレサ先生……。ヨシュアのこと……聞かないんですね」
「……。……クローゼから聞かせてもらいました。あの子があまりにも悩むから相談に乗ってあげる形で……。エステルさん……色々と大変でしたね」
「……あ……。あはは……やだな。……先生みたいな人に慰められたら……あたし……。ガマンできなくなっちゃう……」
「……」
「……。我慢する必要なんてありません。大切な人が自分の側から居なくなってしまったのだから……」
テレサ院長がエステルを抱きしめた。
「……あ……」
「何も言わないで……。あなたのお母様の代わりにはならないでしょうけれど……。しばらくこのまま……抱きしめさせてくださいね」

「はあ……恥ずかしいな。せっかく正遊撃士になった姿を見てもらうつもりだったのに……」
「ふふ、そういえば正遊撃士になったんですね。おめでとう、エステルさん」
「いや、あはは……。ホントまだまだ新米だけど。あ、そういえば

……。先生、さっきクローゼが悩んでたって言ってませんでした？」
「ええ、エステルさんとヨシュアさんのことでね。大切な人たちが苦しんでいるのに力になることができない……。それは、多分あの子にとって一番つらいことなのでしょう」
「大切な人……。えへへ、申しわけないけど何だかちょっと嬉しいかも……。早くクローゼにも会わなくちゃ」
「確か今、学園は試験期間ですから中に入れないかもしれませんが……。もうすぐ終わりのはずですし、すぐに会えると思いますよ」
「うん、わかりました。それにしても……あの子たち、遅いですねぇ。日曜学校の授業ってそんなに長くないはずですよね」
「ひょっとしたら、授業が終わった後、村で遊んでいるのかもしれませんね。新しく来られた巡回神父の方が子供好きでいらっしゃるそうですから」
「新しく来た巡回神父……（あれ……何だか引っかかるような？）」
「だったらマノリア村まで様子を確かめに行ってみるか。ついでにガキどもをここに送ってくりゃあいい」
「あ、それもそっか」
「あら……いいんですか？」
「えへへ。気にしないでください。美味しいお茶とお菓子のお礼です」
「それと、慰めてもらった礼もしなくちゃならねえしな」
「も、もう……！」
エステルが赤面した。
「クスクス……。わかりました。それではお願いしますね」
エステルたちはマノリア村に向かった。

―メーヴェ海道
「しかし、あの院長先生は相変わらずのおっかさんだったな。女王

もそうだったが……ああいう人には頭が上がらないぜ」
「あはは、アガットでもそんな風に思うことがあるんだ。うん、あたしのお母さんともちょっと雰囲気が似ているかな」
「そうか、オッサンの……。確か、１０年前の戦争で亡くなったって言ってたな……。……」
アガットが急に黙った。
「どうしたの、アガット？」
「いや……何ていうか。女は強ぇと思ってな」
「なにそれ？」
「……あまり突っ込むな。ほら、とっととマノリアにガキどもを迎えに行っちまうぞ」

―マノリア村
「マノリアか……。寄付金強奪の事件以来だな。相変わらずノンビリした村だぜ」
「そこがいいんじゃない。アガットの故郷のラヴェンヌ村もノンビリしてて良かったわよ」
「フン、そういうもんかねぇ。とりあえず、日曜学校は村のどこかでやってるらしい。様子を確かめに行くとするか」
「ん、オッケー」

「あ……」
風車小屋の前の海が見えるベンチを見てエステルが足を止めた。
「……」
「なんだ、どうした？」
「あはは……。ここでヨシュアと一緒にランチを食べたことがあっ

て……。ちょっと思い出してたの」
「そうか……」
「あ、でもホント、大した思い出じゃないの。あたし、自分の気持ちにも気づいていないような子供で……。人目をはばからずにヨシュアに『あ～ん』とか平気でやっちゃったりして……。はあ、さぞかしヨシュアを呆れさせちゃったんだろうなぁ」
「ふん、今でも十分子供と言やあ子供だがな。どうする？ここで少し休んでいくか？」
「ううん、今はまだ立ち止まっていられないし。それより、日曜学校がまだやってるか確かめなきゃ」
「ああ、そうだな」

―マノリア村　風車小屋

風車小屋の扉に『日曜学校・授業中』という張り紙がされていた。
「あ、ここで日曜学校をしているみたいね。まだ終わってないみたいだけど何の授業をしてるのかしら？」
「中を覗いてみたらどうだ。もう終わってて、張り紙を取り忘れた可能性もあるだろ」
「うん、覗いてみるね」
エステルが扉を少し開けて中を覗いた。
「（んー、どれどれ……。あれっ、あの人……）」

「『同情することありませんよ。まったく、ティーア様は人がいいんだから』
正直なところ、ガストン公爵がこのまま黙って引き下がるとはとても思えないペトロでした。それに、不気味な仮面の人形師ハーレクインの動向も気になります。互いに面識があるようでしたが師匠の

カプリは、言葉を濁してなにも教えてくれませんでした。いずれにせよ、近いうちにもう一波乱あるに違いありません。ペトロは蒼騎士の改造を決意しました。

『もう、ペトロ様ったら』

ちょっと拗ねたような口調にペトロは我に返りました。

『お茶が冷めてしまいますよ?』

青空を映した、涼やかな瞳が“大丈夫”と安心させるようにいたずらっぽく輝いています。照れくさくなったペトロはぬるまった紅茶で喉を潤しました。

……人形の騎士・おわり」

巡回神父のケビン神父は本を閉じた。どうやら、授業内容は本の読み聞かせだったようだ。

「ええ～っ！もう終わりなのかよ～！？ハーレクインとの決着はどうなるんだよ！？」

「バカねぇ、クラムったら。ここで終わるのがいいんじゃない。そしてペトロとティーア姫はいずれ結婚して幸せに暮らすのよ。はあ～、ロマンチックねぇ？」

「うんうん。やっぱり2人には結婚して幸せになってもらわないと？」

「ボク、なんだか先生のお茶が飲みたいな～」

「カプリ師匠がカッコイイの」

子供は口々に自分の意見を言っていた。

「はあはあ……。さすがに『人形の騎士』全22巻の一気読みはキツイわ。ほれ、これでええやろ。今日の授業はオシマイやで」

「ぶーぶー」

「ケビン先生、お疲れさまぁ」

「ふう、敵わんなぁ……。あー、そこの人。授業は終わりやからもう入ってきてもええで」

「あはは……。気付かれちゃったか。えっと、失礼します」

エステルとアガットが風車小屋に入った。

「へっ……？」
「あああああっ！？」
「エステルさん！？」
「みんな、久しぶりね！元気にしてた？」
子供たちが一斉にエステルの元に駆け寄った。
「なんだよ！遊びに来たのかよ～！？」
「うわあ！本当に久しぶりです～！」
「エステルおねえちゃん。遊んで遊んで～」
「よく来たのー。歓迎するのー」
「あはは……。みんな相変わらず元気ねぇ。えっと、ケビンさんもお久しぶりね」
「おお、エステルちゃん。オレのこと覚えとってくれたか！」
「そりゃあもちろん。しかし、本当にその格好で神父なんかやってたのねぇ」
「どーいう意味やねん。しかし、こんなところでまた会えるなんてなぁ。これはひょっとして運命の再会ってやつかもな？」
エステルたちはケビン神父も連れてマーシア孤児院に戻った。

―マーシア孤児院
「そうでしたか……。神父様とエステルさんはお知り合いだったんですね。ふふっ、世間は狭いですね」
「いや～、ホンマそうですわ。それにしても、オレまでお昼をご馳走になってしもうてえらいスイマセンでしたわ」
「いえいえ、ついでですし子供たちに勉強を教えてもらっていただいているお礼ですわ」
「なー、エステル姉ちゃん。ヨシュア兄ちゃんがいないけど今日は一緒じゃないのかよ？」
クラムがエステルに尋ねた。

「あ、うん……まあね。ちょっと用事があって一緒に来られなかったのよ」
「……」
事情を知っているケビン神父は顔を背けた。
「そうなんだ……しょぼん」
「うー、ヨシュア兄ちゃんにも孤児院が元通りになったトコ、見てもらいたかったんだけどなー」
「ほんと、残念です」
「お姫さまのカッコウ、また見たかったのー」
「あ、あはは……。それはともかく、ずいぶん長い日曜学校だったわね。最後に何か読んでたみたいだけどあれって小説か何かなの？」
「へへん。『人形の騎士』っていうんだ。人形使いの戦いをテーマにしたバリバリのアクション活劇だぜ！」
「あん、違うわよう。身分違いの恋をテーマにしたラブロマンスじゃないの」
「リベールに来る時に持ってきた青少年向け（ジュヴナイル）小説なんやけどな……。ちょっとずつ読んで聞かせようと思っとったのにいきなり全巻読んでしもたわ……」
「あはは。ノリがいいのが仇になったわね」
「うふふ。本当にお疲れさまでした。神父様はこれからルーアンにお戻りになるの？」
「ええ、まあそうですね。他にも回るところがあるからすぐに飛行船に飛び乗ることになるとは思いますけど。そういや、エステルちゃんはどうしてルーアン地方におるん？やっぱ、遊撃士のお仕事でか？」
「うん、まあ色々あってね。そうだ、あたしたちは聞きたいことがあって孤児院にきたんだけど……」
「ポーリィが見たという『白いオジチャン』の話ですね？」
「あー、その話かぁ」
「んー？ポーリィがどうしたの？」

「えっと、ポーリィちゃんに聞きたいことがあるんだけど……。『白いオジチャン』のこと詳しく聞かせてもらえないかなぁ？」
「白いオジチャンは白いオジチャンなの。くるくる回っていてとっても楽しそうだったのー」
あまり頼りにならないポーリィ。
「うーん……困ったわねぇ」
「えっと、あたしから説明させてもらいますね」
しっかり者のマリィが代わりに説明してくれた。
「あれは4日前くらいかな……。この子、夕食のあと外に出てぼーっとしてたんです。そしたら空に、白い男の人が浮かんでいるのを見たらしくて」
「そうなのー。楽しそうに飛び跳ねながらお空でくるくる踊ってたのー。で、ポーリィが話しかけたらペコリとお辞儀をして飛び去って行っちゃったのー」
「ぜってー、寝ぼけてただけだって。だってユーレイにしちゃ全然怖くないじゃん、そんなの」
「私も最初そう思ったんですがダニエルも見ていたらしくて。ね、ダニエル？」
テレサ院長がダニエルに尋ねた。
「うん。ボクはちょっとだけど。白いヘンな影が、東のほうにびゅーんって飛んでいったんだ」
「う、うーん」
「目撃者が2人ってことは信憑性が高そうだな。しかし、声をかけたらお辞儀したと来やがったか……。その白いオッサンってヤツ、どんな顔をしてたか分かるか？」
「お顔は知らないのー。だってオジチャン、変なマスクをつけてたんだもん」
「マ、マスク！？」
「そりゃまた……。ケッタイな幽霊もいたもんだ」
「あのなぁ、ポーリィ。そういう事はちゃんと言えよ。初めて聞い

たぞ、オレ」
「だって誰にも聞かれなかっただもーん」
「まあ、マスクの事はともかく夢ではないようでしたので……。念のため、遊撃士協会にお知らせした次第なんです。それ以来、注意はしましたけど再び現れる様子はないようです」
「う、うーん……」
「大体わかった。色々と参考になったぜ」

「エステルさん、アガットさん。ルーアン地方にいる間、よかったらまたいらしてね。神父様も、授業があった時はぜひまたお寄りくださいい」
「うん、そうさせてもらうわ」
「いや～、機会があったらまた寄らせてもらいますわ」
「ケビン兄ちゃん、またな！それからエステル姉ちゃん！今度はヨシュア兄ちゃんと一緒に来てくれよな！」
「あ、うん……。いつになるか分からないけど絶対に一緒に遊びに来るからね！」

―メーヴェ海道
「いや～、ホンマ元気なガキどもやったわ。しかし、院長先生の人徳かな？どいつも気持ちのいいほどまっすぐな性格しとったわ」
「そりゃあテレサ先生だもん。本当はもう1人、子供たちの面倒を見ている子がいるんだけど。学校が試験期間とかで今日は来ていないみたい」
「ふーん、そうなんか。そういやオレはこれからルーアンに戻るけど。アンタらはどうする？一緒に街まで行くとするか？」

「そうだな、こっち方面での聞き込みも終わったし……。旅は道連れと行くとしようや」
「それじゃあ決まりね。ルーアンに向けてレッツ・ゴー！」
エステルたちはルーアン市に向かった。

第7章　忍び寄る影（10）

―ルーアン市

「やれやれ、よーやく戻れたか。おおきに。ここまで送ってくれて助かったわ」

「あはは、お礼なんてやめてよ」

「俺たちがいなくてもあんただったら平気だったろうさ。ボウガンとは古風だが……なかなか大した腕前だったぜ」

「いや～。巡回神父なんて町外れに行くお仕事ですから。最低限の武装はしとるけど、やっぱ本職には敵わんですわ」

「うーん、そうかなぁ。十分、遊撃士としてもやっていける腕前だと思うけど」

「もう、エステルちゃんってば人をおだてるのが上手いんやから。お兄さん、本気になってまうで～？」

「な、なんの話をしてんのよ」

「はは、それは置いておいて。さっきの幽霊の話やけど、ルーアン礼拝堂にも何人か相談に来とるらしい。ただ、テオドロ教区長によると普通の霊とは思えないそうや」

「普通の霊じゃない……？」

エステルが首をかしげた。

「教会の教えでは、人が死んだ時、善なる魂は空に登るんだったな？」

「ええ、反対に罪を負った魂は昏き煉獄に落とされるんですけど……。たまに、その枠からはみ出てどちらにも行けん魂があるらしい。それがいわゆる『幽霊』やと教会では一般的に言われとりますわ」

「ううっ……。さ迷える魂ってことね。でも、普通じゃないって一体どういうことなのかしら？」

「普通の霊は、多くの場合、何かに縛られていることが多い。場所だったり、人だったりな。やけど、今回の幽霊騒ぎにはどちらにも

あてはまらん。せやから、教区長さんもしきりに首をひねっとった
で」
「なるほど……そういうことか」
「まあ、調査の参考にでもしたってや。ほな、オレは礼拝堂に戻る
わ。またな～、エステルちゃんたち」
ケビン神父は行ってしまった。
「うーん、助言はなかなか聖職者っぽかったけど……。やっぱりど
う見ても神父には見えない人ねぇ」
「ま、巡回神父なんて変わったヤツが多いからな。昔、ラヴェンヌ
村に来てたやつもけっこう変わった親父だったぜ」
「ふーん、そうなんだ。さてと……ジャンさんに言われてた目撃情
報は全部集めたね。いったんギルドに戻ろっか？」
「ああ、そうだな」
エステルはギルドに向かった。

―遊撃士協会ルーアン支部
「あ……」
ギルドに入ると、ナイアルとドロシーがいた。
「お、戻ってきたか」
「エステルちゃん！お帰りなさ～い！」
「ナイアル、ドロシー！どうしてルーアンにいるの？」
「そりゃあ、話題の市長選を取材しに来たに決まってるだろ。で、
妙な事件が起こってるって聞いて、ギルドに事情を聞きに来たわけ
さ」
「妙な事件って……。例の『白い影』のことね」
「実は、君たちが調べている間に市街で別の目撃事件があってね。
市民の間にも徐々に動揺が広がっている状況なんだ」
「そうか……。だんだん、大事（おおごと）になってきたな」

「そして極めつけが……。このお嬢さんが撮った写真さ。これはかなり有力な資料になると思うんだけど……」
「写真って……。ま、まま、まさかっ！？」
エステルの顔が青ざめた。
「心霊写真ってやつか？」
「うーん、そうなのかなぁ。ホテルから夜景を撮ってたら偶然写っていたからよくわからないんだけど～。とりあえず見てみてくれる～？」
ドロシーが写真を見せてくれた。ホテルから見える灯台の横にマントを羽織った白い影がくっきり写っていた。
「……」
エステルは開いた口がふさがらなかった。
「……なんつーか。決定的じゃねえか？」
「あ、あはは……。そう決めつけるのは早いわよ。オーバルカメラの調子が悪かっただけかもしれないし……」
「う～ん、故障ってことはありえないと思うよ～？中央工房で買った最新機種だしメンテナンスもバッチリだもの～」
「そういう事にしといてってばっ！」
エステルがドロシーを睨んだ。
「エステルちゃん、コワイ……」
「まあ、そういう訳でかなり具体性を帯びた話になってきちゃったんだけど……。この件は、マスコミと協力しても損はないと思う。早速、各地で調べてきた事をここで報告してくれないか？」
「う、うん……。一応、3箇所で調べたけど」
「た、大変だ～！」
エステルが報告しようとした時、外から叫び声が聞こえてきた。そして、青年が1人入ってきた。
「ど、どうしたの！そんなに慌てて……」
「強盗でも起こったか！？」
「いや、違うんだ！ノーマンさんの支持者とボルトスさんの支持者

が言い争いを始めちまって……。ラングランド大橋で睨みあってる状態なんだ！」
「あ、あんですって～！？」
「ノーマンとボルトスといやあ、どっちも市長選の候補じゃねえか」
「ほほう。そりゃあ良いネタだな。ドロシー、とっとと行くぞ！」
「アイアイサー！エステルちゃん、また後でね」
ナイアルとドロシーはさっさと出ていった。
「な、なんて素早い……」
「念のため、俺たちも行くか。喧嘩になりそうだったら間に入って仲裁するぞ」
「う、うん！」
「すまない。よろしく頼んだよ」
エステルたちはラングランド大橋に直行した。

―ラングランド大橋
橋の上では大勢の双方の支持者たちが言い争いを繰り広げていた。
「とぼけるんじゃない！ホテルに現れた幽霊ってのがあんたたちの仕業だっていうのはもう分かってるんだよ！」
「ノーマンさんの息子さんもショックで寝込んでるんだぞ！やりすぎだとは思わないのか！？」
ノーマン氏側の支持者がボルトス氏側を責めたてた。
「フン、その息子ってのは《レイヴン》の不良じゃねえか！そんなロクデナシの言うことが信用できるかよ！」
対するボルトス氏側も黙っていない。
「……ちょっと待ちたまえ。私個人を批判するならともかく家族を攻撃するのは卑怯だろう。そのロクデナシってのは撤回してもらおうじゃないか」
ノーマン氏が口を出した。

「うーん、確かにそれは言い過ぎかもしれないねぇ」
ボルトス氏も頷いている。
「ちょっと主任！そこで納得しないでくれよ！あんたがそんな弱腰だから観光推進派が調子に乗るんだ！」
「な、なんだと～！？」
「調子に乗ってるのはあんたら港湾推進派じゃないか！幽霊騒ぎなんてセコイ手使って嫌がらせなんかしやがって！」
売り言葉に買い言葉と言った感じだ。これでは話の進展がない。
「あちゃあ……。ヒートアップしてるわねぇ。これは止めた方がいいのかしら？」
「喧嘩沙汰にはなってねぇからまだ早いかもしれんが……。いざ喧嘩が始まったらすぐに止められるような場所に移動しておきてえな」
「といっても、見物人が多くてとても前に進めないんだけど……。まったく、ナイアルたちってばちゃっかり前を確保しちゃってさ」
エステルたちがそう言っている間にも、言い争いは勢いを増していた。
「もう我慢できねえ！てめえらみてぇな軟弱野郎が腕っぷしで勝てると思うなよ！」
ボルトス氏側が先にキレた。
「じょ、上等だ！やってやろうじゃないか！」
「ノーマンさんの名誉は僕たちノーマン商会員が守る！」
「止めたまえ君たち！暴力はいかん、暴力は！」
ノーマン氏が慌てて止めた。
「みんな抑えてくれ！ここは冷静に話し合いを……」
ボルトス氏も止めたが収まりそうになかった。
「（やばっ……！）」
「（チッ……止められねえか）」
エステルたちが仲裁に入ろうとしたが前に進めなかった。
そのとき、楽器の鳴る音が聞こえてきた。
「フッ……。哀しいことだね」

ボートの上でリュートを携えた金髪の青年――オリビエが橋の近くでボートを止めた。
「争いは何も生み出さない……。空しい亀裂を生み出すだけさ。そんな君たちに、歌を贈ろう。心の断絶を乗り越えて、お互いに手を取り合えるようなそんな優しくも切ない歌を……」
そう言って、オリビエは歌を歌い始めた。
「陽の光　映す　虹の橋
掛け渡り　君の元へ……
求めれば　空に　溶け消えて
寂しいと　君が舞う……
届くことのない　はかない願いなら
せめてひとつ　傷を残そう
はじめての約束　守らない約束
君の吐息　琥珀にして
永遠の夢　閉じ込めよう……」
「フッ……。みんな感じてくれたようだね。ただ一つの真実……それは愛は永遠だということを。今風に言えばラヴ・イズ・エターナル」
その場にいた全員はその言葉にあきれ返った。
「コ、コホン……。とりあえず、ボルトスさん。ここはいったんお互い頭を冷やした方が良さそうだな」
「ええ、そうですね。通行の邪魔になりますし。みんな、いったん港の方に戻ろう」
「そ、そうっすね……」
「そうだ……。チラシを配らなくちゃ」
どちらの陣営もそそくさと退散した。
「（み、みんな逃げた……）」
「（……気持ちは分かるぜ）」
「フッ、どこの国でも民衆が熱しやすく冷めやすいのは同じだな。いや、真に恐るべきはみんなの平常心を取り戻したこの奇跡のごと

き旋律か……。さあ記者諸君！思う存分、写真を撮って取材してくれたまえっ！」
「うわ～、いいんですかぁ。それじゃあ遠慮なくいきますね。ハイ、チーズ？」
ドロシーは本当に遠慮なくカメラを撮り始めた。
「うーん、マーベラス」
オリビエもしっかりポーズをとっている。
「えーと、その……。俺はさっきの話を聞かせてもらおうかね」
「う、うん、そうね。早いうちに報告しないと忘れちゃいそうな気が……」
「とっととギルドに戻ってジャンに報告するか」
エステル、アガット、ナイアルはギルドに戻った。
「おや……。ちょっと、エステル君。どこに行こうというのかね？ま、待ちたまえ！いや、どうか待ってください！」
「おお、いい表情ですね～！とってもキュートです～？」

第7章　忍び寄る影（11）

―遊撃士協会ルーアン支部

「まったく、何という薄情な……。久しぶりに再会した運命の相手に向かってこの仕打ちはあんまりだよ」

オリビエがさっきからブツブツ言っている

「何が運命の相手なんだか……。大体、オリビエってばどうしてルーアンにいるのよ。エルモの温泉に逗留してるんじゃなかったの？」

「フッ、実はミュラー君から《紅葉亭》に連絡があってね。エステル君が戻ってきたことをわざわざ知らせてくれたのだよ。これは挨拶せねばと思って飛んで来たわけなのさっ」

「あ、ありがたいんだけど素直に喜べないような……。でも、生誕祭以来挨拶もできなかったよね。ありがとう、オリビエ。また会えて本当に嬉しいわ」

「そ、そうか……。うーむ、エステル君が素直だと調子が狂うような。もっと激しく突っ込んでくれないと、その……欲求不満になってしまうよ」

オリビエが赤面しながらエステルに言った。

「顔を赤らめながら不穏な発言をするのはやめい！」

エステルが怒鳴った。

「はあ……まあいいわ。えっと、ジャンさん。コレがクーデター事件の時に協力してくれたオリビエ。エレボニアから来た演奏家なの」

「はあ……。何というか強烈な人だねぇ。しかし、それだったら一緒に話を聞いてもらっても構わないかな」

「本来なら部外者ってことで追い出すところだが……。人の話を聞くヤツじゃねえし放っておくしかなさそうだな」

「ハッハッハッ。さすがはアガット君だ。ボクのことなら何でもご存じのようだね」

「さもマブタチのように語りかけてくんじゃねえ！あの時一緒に戦

ったけでロクに話したこともねえだろ！」
「……まあ、流す方向で」
「オーケー。その方が良さそうだね」
「どうでもいいが、さっさと話を聞かせてくれ。こちとら、市長選のネタを集めなきゃならねえんだからな」
「はいはい、判ってるわよ。それじゃあ、聞いてきた順に目撃情報を報告するけど……」
エステルたちは各地の目撃情報に加えてケビン神父の見解を説明した。
「なるほど……。ずいぶん具体的に集まったね。少なくとも、何かを掴むには十分すぎるほどの情報だよ」
「うーん、そうかしら」
「まあ、さっき騒いでいた市長選の相手陣営を妨害するためのイタズラって線はなさそうだな。ノーマン氏の息子はともかく孤児院と関所の兵士を脅かして効果があるとも思えんし」
「実際、亡霊は空を飛んでいる。一般人が簡単にできるトリックじゃないはずだぜ」
「それじゃあやっぱり、本物の幽霊さんなんですよ～。たぶん仮面をかぶらされて幽閉された挙句におかしくなった大昔の貴族かなんかで～。数百年の時を経た今、怨霊として甦ったんですよ～♪」
さも楽しそうに言うドロシー。
「そ、そんな怖い話をさも嬉しそうに言わないでよっ。第一、幽霊ってのは人か場所に縛られているらしいし。やっぱり違うんじゃないかしら」
「いえ、それはどうでしょうか？」
いきなり、後ろから声が聞こえてきた。
「誰だっ！」
アガットが慌てて振り向いた。
「あっ、あなたは……レインさん！？」
そこにいたのはエステルが王都で会ったレインだった。

「どうもお久しぶりです、エステルさん。王都で会って以来ですね」
「おい、エステル。誰だ、こいつは？」
アガットがエステルに尋ねた。
「えっと、あたしもよく判らないんだけど。王都で会ったレインさんよ」
「どうも初めまして。それで、私もこの事件解決に加わってもよろしいでしょうか？もちろん、その手助けはさせてもらいますよ」
「ええっ！？」
「なんだと……？」
「レイン君と言ったかな？君は何者なんだい？」
ジャンがレインに尋ねた。
「怪しい者ではありません……と言っても駄目でしょうから、行動で示させてもらいますよ。エステルさん、３つの情報にはある一貫性があります」
「ほう……。ボクと同じことに気付いたようだね」
「ええ、僕も同じことを考えていましたよ」
オリビエとジャンが相槌を打った。
「えっ、どういうこと？」
「エステルさんが調査した３ヶ所の目撃地点ですが……」
レインが王国地図を取り出した。
「ここと、ここ、ここになりますね」
レインがルーアン市、エア＝レッテンの関所、マーシア孤児院に印を入れた。
「うん……。ルーアン南街区に、エア＝レッテンの関所、そしてマーシア孤児院。それがどうかしたの？」
「ここで得られた３つの証言において、明確に異なる部分に注目してください。そうすると、ある事実が浮き上がります。エステルさん、その異なる部分は何か分かりますか？」
「３つの証言で明確に異なる部分……」
３つの証言では、白い影の行動、現れた時間、去って行った方角だ

が……。
「そ、それって……。わかった！ずばり、白い影が去った方角ね！」
「ええ、その通りだ。南街区での証言では白い影が去ったのは『北東』……。エア＝レッテンの関所の兵士の証言では白い影が去ったのは『北』……。そして、孤児院での子供の証言では白い影が去ったのは『東』……」
レインが順次、矢印で去った方向を書き込むと、ある一点に集中していた。
「あああっ！？」
「フン、そういうことか……」
「なるほどねぇ。幽霊が来た場所が絞られたっていう寸法かよ」
「そういうことです。ここは『ジェニス王立学園』ですね。この近辺に幽霊の居場所があるというわけです」
「レインさん……。あなた、なかなか冴えるわね。こうなったら、幽霊だろうがなんだろうがどっちでもいいわ。行って確かめるしかないわね！レインさん、協力してくれる？」
「ええ、もちろんです」
「アガットも問題ないよね？」
「フン……。てめえが何者か知らねぇが……。今回は特別に協力を認めてやらぁ。ジャン、問題はねぇな？」
「うーん、まあ、問題ないでしょ。本格的に調査して、できれば問題を解決してくれ。《リベール通信》さんはこの先、どうするんですか？」
「そうだな、肝心の市長選の取材もしなくちゃならねぇし……。よし、ドロシー。この件はお前に任せたぞ」
「はーい、わかりました～。これでもかってくらい心霊写真を撮ってきまーす！」
何かのツアーと勘違いしているらしいドロシー。
「違うっての！あくまで真相の解明だ。エステルたちに付いて行って幽霊事件の取材をするんだよ」

「はあ、なるほど。よく判りませんけど～。せいいっぱい頑張りま～す！」
「ちょ、ちょっと。勝手に話を進めないでよ」
「まあまあ。写真も提供してもらったし、持ちつ持たれつってことで」
「フン……仕方ねえな」
「うーん、なんかどんどん緊張感がなくなって行くような。でもまあ、今回は助かるかな」
「そういうわけで事件の調査、よろしく頼んだぞ。俺はこれから2人の候補にインタビューをかますからな」
ナイアルはギルドを出て行こうとしたが……。
「とと……。そうだ、エステル。……ヨシュアのことは親父さんから少し聞かされた。謎の組織ってのも気になるし……。それっぽいニュースが入ったらすぐにギルドに連絡するからな」
「え……」
エステルは驚いた。
「……」
そしてレインは黙っていた。
「だからその……まあ、頑張れってことだ！そ、そんじゃあな！」
ナイアルはそれを言い残して出ていった。
「ナイアル……」
「うふふ。先輩ってば照れちゃって～。カシウスさんから話を聞いて結構ショックだったみたいなの。何か助けになれないか色々と考えてたみたいよ～？」
「そ、そうなんだ。まったくもう。素直じゃないっていうか……」
「かく言うわたしも取材で気になるネタを拾ったらギルドに連絡を入れるから～。だからエステルちゃん。ファイト・オー、だからね～！」
「うん、ありがとう……。それじゃあ……王立学園に行くとしますか！」

「王立学園には僕の方から連絡しておこう。それではよろしく頼んだよ」

「……何ていうか、今さら突っ込むのも何だけど。やっぱりオリビエも来るわけね？」

オリビエはさりげなくエステルたちに付いてきた。

「ハッハッハッ。やだなあ、エステル君。鳥が空を駆け、魚が水に遊ぶのと同じくらいあたり前のことだよ。何のためにボクが、温泉を捨ててエルモから来たと思ってるんだい？」

「うーん……。ねえアガット。仲間に入れてもいいかな？」

「もう好きにしやがれ……。ただし、俺はアンタを完全に信用してるわけじゃねえ。妙なマネをしたら容赦なくブチのめすからな」

「ふう、それは残念だ。たまには君みたいなワイルドなタイプも悪くないと思ったんだが」

「はあ？」

「フッ、安心してくれたまえ。君の信用を勝ち得るまで口説くのは控えることにするよ」

「……。ア、アホかああッ！何の話をしてやがる！！？？」

「はわわ～、何だかとっても大人の香りでドキドキですぅ」

「（しばらくツッコミ役はアガットに任せてとこっと……）」

「（フフフ……。愉快な人たちが多くて結構なことです）」

第7章　忍び寄る影（12）

―メーヴェ海道

「そういや、てめえ。どうしていきなり、この事件に絡んできた？」

アガットがレインに尋ねた。

「あ、そういえば……。ねえ、どうしてなの、レインさん？」

「そうですね……。この事件、私の思うところ、幽霊などではなくて何か人為的なものを感じるのです。それで気になって……。すいません、余計な口出しでしたかね？」

「いえ、そんなことはないけど。むしろ、役に立ったし。それで、人為的って？」

「本物の幽霊ではないということです。今回の幽霊事件、何らかの目的があるとみています」

「そいつはまさか……《結社》が絡んでるとでも言うのか？」

アガットが突っ込んできた。

「いえ、現時点では断定するのは早計だと思います。いま言えることは、幽霊などではないことです」

「それはまた何で？」

「エステルさんも言ってましたが、幽霊は何かに縛られることが多いのです。しかし、今回はルーアン地方全体に出没しています。さらに、出没回数も非常に多いのです。普通ならば、出没回数が多いのは頷けますが、その場合、局所的な場合が大抵です。しかし、今回は明らかに違います」

「な、なるほど……」

「それじゃあ、何者かが何らかの手段を使って幽霊騒ぎを起こしてるってことか？」

「ええ、そう思います。しかし、こんなことができることなんて考えられませんが……」

「フン、いずれにせよその場所に行ってみれば分かることさ。今、

ウジウジ考えてたってしょうがねぇ」
「そうですね、急ぎましょうか」
「あともうひとつ、聞かせろ。さっきは聞かなかったが……てめえは何者だ？」
「……」
レインは黙ってしまった。
「どうしたの、レインさん？」
「どうした？とっとと言いやがれ」
「……今、全てを話すことはできませんが。これだけは話します。ただ、あまり口外して欲しくはありません。それを守ってくださいますか？」
「え……？」
「ああ、いいだろう。だから、話せ」
「わかりました。……私は、《結社》のある人物を追いかけています。それも何年も前からです。そして今回、リベール王国で《結社》の動きがあるとわかりました。それで、《結社》の動きを掴み、その人物と会うために今まで1人活動していたのです」
「《結社》の！？」
「それで《結社》で何か判ったことはあるのかよ？」
「いいえ、肝心なことはまだ判っていません。まだ《結社》は表立って活動はしていませんから。しかし、近いうちに必ず《結社》はこの国を揺るがすことになるのは間違いありません」
「そ、そんな……」
「フン、だろうな。今回の事件はどうか知らんが、間違いなくヤツらが何かしでかすのは間違いねえ」
「ええ。ですから、今回の幽霊騒ぎ、《結社》が絡んでいる可能性は全くないとは言い切れません」
「《結社》を追いかけている点で、俺らとは共通しているようだな。まあ、今回はてめえを信用しといてやる。とにかくさっさと王立学園に行くぞ」

エステルたちは王立学園に向かった。

第7章　忍び寄る影（13）

―ジェニス王立学園

「ほう、ここが王立学園か。ほころぶ直前の蕾たちが青春の汗と涙を流す学び舎……。フフ……実に素晴らしいじゃないか」

「さぞかし撮りがいのある被写体が揃ってそうですね～。これを機会に撮りまくらないと～」

オリビエとドロシーは目的を忘れかけている。

「あのな、俺たちはあくまで幽霊騒ぎを調べに来たんだっての。わかってんのか、そこんとこ？」

「でも、何だか懐かしいな……。この学園で過ごしたのはたった一週間くらいだったけど……」

「ま、それだけ濃い時間を過ごしたってことだろ」

「ほう……この学園で何かしたのですか？」

「うん。学園祭の手伝いをね。演劇に出演したんだ」

「あ、ナイアル先輩に聞いたよ～。エステルちゃんたちが騎士で、ヨシュア君がお姫様だったんでしょ？あーあ、写真撮りたかったなぁ」

「なに……それは本当かい！？」

いち早く飛びついたのはオリビエだ。

「おお、なんたることだ！ヨシュア君の艶姿を見逃すとは！何としても彼を見つけてもう一度着てもらわなくてはっ！」

「はあ、感傷に浸ってるのが馬鹿馬鹿しくなってくるわね。そういえば、試験期間だってテレサ先生が言ってたけど……。まだ終わってないのかしら？」

その時、鳥の鳴き声が聞こえてきた。

「ジーク！？」

シロハヤブサのジークがエステルの腕にとまった。

「ピュイピュイピュイ！」

「あはは……。何言ってるのか分からないけど歓迎してくれているみたいね。久しぶり、元気にしてた？」
「ピューイ？」
「ほう……リベールの国鳥のシロハヤブサですか。これはまた珍しいですね」
「……エステルさん……」
「あ……」
続いてやって来たのはクローゼとその友達のジルとハンスだった。
「クローゼ……。えへへ……生誕祭以来ね」
「はい……そうですね。……あの……私……。……私……」
クローゼはいきなりエステルに近づいてきて抱きついた。
「わわっ……。どうしたのクローゼ？」
「ごめんなさい……本当にごめんなさい……。エステルさんたちが大変な時に私……なんにも出来なくって……。自分の力不足がイヤになります……」
「やだな……。そんなこと言わないでよ……。そんな風に思ってくれただけであたしは嬉しいから……。ヨシュアだってきっと同じだと思うから……。とにかく……また会えただけでも嬉しいよ……」
「はい……私も……。こうして再会できただけでも空の女神に感謝したい気分です」
「まったくも～。2人とも大げさなんだから。久しぶりね、エステル。生誕祭の時に会って以来かな？」
「うん、そうだね。ハンス君も……お久しぶり」
「ああ……そうだな。色々と話したいんだが……今は後回しにしておくとするか。遊撃士の仕事で来たんだろう？学園長のところに案内するよ」

―学園長室

エステルたちはコリンズ学園長にこれまでのことを説明した。

「なるほど、話はわかった。ルーアン地方の各地に現れる『白い影』がこの学園から来ているのだね？」

「はい、そうみたいなんです」

「そこで、ギルドとしては学園内の調査をしたいんだが。生徒への聞き込みを含めて許可してもらえんだろうか？」

「いや、そういう事であればこちらからもお願いしよう。その『白い影』の正体はどういうものかは判らないが……。選挙にも影響を与えていると聞いては放ってもおけんだろう」

「ホッ……。ありがとうございます。それで、学園で『白い影』みたいな怪しい噂が流れてたりしませんか？」

「いや……。私の所に報告は来てないな。生徒会の方はどうかね？」

生徒会所属のクローゼ、ジル、ハンスに尋ねた。

「うーん、こちらにもその手の話は来てませんねぇ。ただ、なにぶん、試験期間中でもありましたし。みんな、相談に来るような余裕がなかっただけかもしれません」

「なるほど……ありえるな」

「？どういうこと？」

「王立学園の定期試験は進級のかかる重要なものですから……。たとえ何かを見た生徒がいたとしてもとりあえず考えないようにして勉強に集中してしまうかもしれません」

「確かに俺でもそうするね。目の錯覚にこだわるよりも一つでも多くの数式を頭に叩き込みたいところだ」

ハンスがため息をついた。

「ひえ～……。そういうものなんだ」

「ふえ～、最近の学生さんはとても頑張り屋さんですねぇ」

「だけど、今日で試験期間も終わってみんな解放感に満ち溢れている……。そういった噂が出るとしたらまさに今日からなんじゃないか？」

「怪談めいた噂が広まったらどれが真実か分からなくなる……。目撃者本人から話を聞くには今がちょうどいいかもしれないね」
オリビエがもっともなことを言った。
「だとすれば、早いにこしたことはありません。今から聞き込みに行きましょう」
レインがエステルたちに急ぐべきだと言った。
「うむ、さっそく学園内で調査を始めるといいだろう。ジル君、ハンス君、クローゼ君も協力するといい」
「はい！」
「わかりました」
「とりあえず、調査をするならどこか拠点があった方がよさそうね。何か情報が入るかもしれないし、生徒会室がいいんじゃないかしら」
「サンキュー、助かるわ」
そして、エステルたちは生徒会室に移動した。

―生徒会室
「さてと……。これで役割分担は決まりね。まず、私とアガットさんは職員室で先生方に聞き込み。続いて、その他職員方への聞き込み調査も行います」
「おう、よろしく頼むぜ」
「ハンスは資料室で過去に似たような事件がなかったかどうかのチェック」
「了解だ」
「エステルとクローゼとレインさんは生徒たちへの聞き込み調査」
「オッケー」
「わかりました」
「ええ、了解です」
「ドロシーさんとオリビエさんは感性の赴くままに学園内を散策。

芸術家ならではの直感で何かを発見してみてください」
事件解決とは無関係のことを任されたドロシーとオリビエ。まあ、こっちの方が邪魔されるよりマシだとは思うが。
「フッ、任せたまえ」
「頑張っちゃいますね～♪」
「各自、夕方までには調査を終わらせて戻ってくること。それでは解散！」
それぞれが各持ち場に向かった。
「はあ……。学園祭の時もそうだったけど相変わらず見事な手並みねぇ。普段はおちゃらけてるけど、さすが生徒会長なだけはあるわ」
「それぞれの適性を活かした采配が得意なようですね」
「ふふ……。将来はメイベル市長みたいな政治家になりたいそうです。１０年早く生まれていたら今度の市長選にも立候補するのにって本気で悔しがっていましたから」
「そ、それは凄いわね」
「大きな夢で結構なことです」
「そういえば……。ジルたちってクローゼのことどこまで知っているの？」
「ふふ……。ほとんど全部知っていますよ。入学してから半年くらいで２人に見抜かれてしまいました」
「何の話をしているのですか？」
「あっと……ごめんね。ねえ……クローゼ。話しちゃってもいい？」
「エステルさんがそう言うなら、構いませんよ」
「ありがと。レインさん、クローゼは女王様のお孫さんなのよ」
「何と……アリシア女王陛下の。それは驚きですね。なんでまた王立学園に……とは今聞かない方がいいですね」
「すみません、気をつかわせてしまって……」
「いえいえ、謝ることはありませんよ。それで、エステルさん。このようなことを私に話しても良かったのですか？」
「うーん、これからもレインさんと《結社》で関わることがありそ

うだし……。それに、レインさんならその内、見抜いてしまいそうな気がするし……」
「はは、それは買いかぶりすぎですよ」
「それで、クローゼ。さっきの続きだけど……」
「ええ、そうですね。他に、私が王族であることをご存じなのは学園長だけです」
「そうなんだ……。それにしちゃ、2人ともクローゼに対して自然に付き合ってるわよね」
「はい……エステルさんみたいに。みんな大切なお友達です」
「あはは……。ちょっと照れるわね。さてと、学園内を回ってみんなから話を聞いてみよっか。『試験期間中、何か変なことはなかったか？』って聞けばいいよね？」
「はい、そう聞いた方がみんな判りやすいと思います。あと、寮に帰ってしまった生徒からも聞いてみた方がいいかもしれません」
「ん、オッケー。それじゃあ、聞き込み開始！」
エステルたちは聞き込みを開始した。

―クラブハウス　資料室
「よう、聞き込みの調子はどうだい？」
「うーん。始めたばかりだから全然ね」
「資料の方はどうですか？」
「そんなに多くないから大して時間はかからないだろ。それより……聞き込み中に悪いけど少しだけ時間を貰えないか？」
「あ、うん……。ヨシュアのこと……だよね？」
「ああ……。詳しいことは知らないけどあいつ、行方不明なんだってな」
「うん……でも心配しないで。自分から居なくなっただけだから家出みたいなもんだと思うし……」

「エステルさん……」
レインがエステルを気づかった。
「……。あいつと一緒にいたのは1週間くらいだったけど……俺たち、妙に気が合ってな。色々なことを話したもんだぜ。エステルの家に来てからの事もけっこう聞かせてもらったよ」
「そ、そうなんだ。ちょっと恥ずかしいな。あたしオテンバだったし……って、それは今でもそうだけど」
「はは、心温まるエピソードを色々と聞かせてもらったよ。ただな……それ以前の話は全く聞いていない」
「……あ……」
「一度、ロレント以前の話を何の気なしに尋ねたんだが……。その時のヨシュアの目……今でもはっきり覚えているよ。一瞬だけ、瞳が暗く濁って感情がプツリと切れた音がした。ま、あいつのことだからすぐに笑ってごまかしたけどな」
「……」
「事情は知らないけど……ヨシュアが居なくなったのはそのあたりが原因なんだろ？」
「うん……。多分、そうだと思う」
「やっぱりそうか……。寝る前にさ、その日あった事をお互い話したりするじゃないか？劇の練習キツかったとか今日のランチは美味かったとか。あいつ、そういう時にはいつも眩しそうな表情をしてさ……。まるで手の届かない宝物を眺めているような……。それでいて、届かないことが当然だと納得しているような……。そんな顔をしていたんだ」
「……ヨシュア……。届かないなんて……ほんと、バカなんだから……」
「エステルさん……」
「なあ、エステル。付き合いの浅い俺なんかが立ち入るのもなんだけどさ……。ただ、これだけは頼んでもいいか？」

「え……」
「あいつと会えたら、もう2度とあんな表情をさせないでやってくれ。届かないだなんてそんなバカな話があるもんか。あいつには、俺たちと同じように心から笑ったり、恋をしたり、バカやったりする権利がある。なあ、そうだろ？」
「ハンス君……うん、そんなのあたりまえよ。ひっぱたいてでも目を覚まさせてやるんだから！」
「ふふ、エステルさんったら……。でも、そのくらいしないとヨシュアさんには判らないかもしれませんね」
クローゼが笑った。
「ああ、まったくだ。はあ……ちょっとスッキリしたぜ。すまん、時間を取らせたな。聞き込み、続けてくれよ」
「うん……わかった」
「ハンス君もよろしくお願いします」

―王立学園・本館2階　渡り廊下
「おや、クローゼさん。試験の出来はいかがでした？」
掲示板を見ていたパトムに話しかけた。
「まあ、そこそこ……です。それよりもパトムさん、少しお聞きしてもよろしいですか？」
「はい、なんでしょう？」
「えっと、実はねえ……」
エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。
「ふむ、変な出来事ですか……。思い当たる節があると言えばあるのですが……」
「あ、確かなことが分からなくてもいいのよ。とにかく、あったことをそのまま教えてほしいの」

「そういうことならお話ししてみましょう。実はですね……」
パトムが声を潜めた。
「……空を飛ぶ人影を見たんですよ」
「……！？」
「それは……」
「……その時の様子を詳しく話してくれない？」
「ええ、試験期間中の夜のことです。僕は教室に残って勉強をしていたんですが……。ふと、窓の外で何かが動いた気がしたんです。風が入ってきたのだと思い、窓を閉めなおしに行ったところ……外に白っぽい人影が浮かんでいたというわけです」
「白っぽい人影……かぁ。それで、そのあと問題の人影はどうなったの？」
「残念ながら、すぐに見えなくなってしまいました。ほとんど真東の方角に消えていったと記憶しています」
「東ということは……校舎裏のほうに消えたわけですね」
「うん、そういうことだけど……。でも、それにしてもいやにハッキリ覚えてるわねぇ」
「ええ、興味深い現象でしたからね。あとで研究しようと思って簡単なメモをとっていたんですよ」
「け、研究～！？」
そのような研究をしようとするのは変わり者だ。
「パトムさんは理系クラスの生徒ですから」
「あははっ、そういうことか」
「お役に立てたでしょうか？」
「うん、とっても貴重な証言だったわ。さっそく手帳にメモさせてもらうわね」
「パトムさん。ありがとうございました」
「いえ、お安いご用ですよ」

―王立学園・本館1階　人文科教室
「ふああ～～っ、やれやれ腹が減ったな。……あれ？何か用？」
窓際で大きなあくびをしていたミックに声をかけた。
「あ、うん……。実はちょっと聞きたいことがあるのよ」
エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。
「ヘンな出来事……？」
「おかしな物を見たとか、怪しい物音を聞いたとか。気になったことなら何でもいいわ」
「おかしな物を……か。まったく、いやなことを思い出させるな」
「何かご覧になったんですか？」
「ああ、これはまだ誰にも話してないことなんだが……。実はオレ……怪しい人影を見ちまったんだ」
「……っ！？……詳しい話を聞いていい？」
「あ、ああ、構わないぜ。オレ、家に帰る前に校舎裏をぶらぶらしてたのさ。試験中は人気がなくてすごく気分がいいからな。で、そろそろ帰ろうと思って裏門のあたりまで歩いてきたら……。白っぽい色をした人間がふわふわ宙に浮いていたんだよ。間違いなく人の形をしてたぜ。何かの見間違えってことはない」
「（白っぽい人影か……。ほかの証言と一致するわね）」
「（ええ、これはほとんど裏付けが取れたといっても間違いないでしょう）」
「……で、その後はどうなったの？」
「そいつ、裏門の方に飛んで行っちまってよ。そのまますぐに見えなくなっちまったぜ」
「なるほど……裏門の方に消えたわけか。うん、この話は手帳にメモしておいた方がいいわね」
「ええ、貴重な証言ですね」
「……なら、もういいか？さっきから腹が減ってしょうがないんだ

が……」
「あっと、ごめん。わざわざありがとね。話してくれて助かったわ」
「ま、何だが知らないが適当に頑張ってくれよ」
ミックは教室を出ていった。

―王立学園・講堂
「あ……」
エステルが講堂の舞台に登った。
「……」
「……おかしいですよね。数ヶ月前のことなのにとても懐かしく感じます……」
「うん……」
「すいません、私は1人で男子寮のほうの聞き込みに行ってきます。それでは……」
「あ、レインさん……」
レインはすぐさまその場を離れていった。
「お優しい方ですね……」
「うん……。申しわけないけど、ここはレインさんの厚意に甘えましょ」
エステルは舞台の縁側に座った。
「あれから本当に色々なことがあって……。澄ました顔でお姫様をやってたヨシュアは居なくなって……。今、あたしたち2人だけでこの舞台にいる……。何だか不思議な気分かも」
「そうですね……。ねえ、エステルさん。一つ白状してもいいですか？」
「え……？」
クローゼも同じように座った。
「私……ヨシュアさんが好きでした。初めて会ったときからとても

惹きつけられるものを感じていたんです」
「……。……そっか。あはは、やっぱりね。そんな気はしていたけど……」
「最後のキスシーンなんてすごくドキドキしたんです。エステルさんに申しわけないと思いながらも演技に熱が入ってしまって……。フリじゃなくて、本当に唇を奪いそうになってしまいました」
「そ、そうなんだ……。クローゼって意外と大胆っていうか……」
エステルは赤面して顔を背けた。
「ふふっ、ユリアさんによれば私の行動にはいつもヒヤヒヤさせられるそうです。でもあの時……ダルモア市長がエステルさんに銃を突きつけた時……。ヨシュアさん……本当に恐い目をしていた……。どれだけエステルさんのことを大切に思っているか判りました。それで、これは見込みがなさそうだなって諦めたんです」
「う、うーん……。あたしが言うのもなんだけど諦めるのは早いんじゃないかなぁ。クローゼとあたしじゃ正直、勝負になんないと思うし……」
「もう、エステルさんって本当にそういう事に疎いんですね。自分がどれだけ魅力的かいまいち自覚してないんですもの」
「う……。何だかバカにしてるでしょ？」
「ふふ、とんでもないです。私、エステルさんのそういう所が大好きですし……。たぶん、ヨシュアさんも同じだったんだと思います。その意味では、私とヨシュアさんは似た者同士なのかもしれませんね」
「あ……言われてみればちょっとそんな感じがするかも。頭が良くて礼儀正しいところとか涼しげなところとか……。だから最初、お似合いだとかヨシュアを唆（そそのか）したんだけど……」
「私は先生たちと出会うまで孤独な日々を過ごしていました。多分、ヨシュアさんもエステルさんと出会うまでは同じだったのかもしれません。私とヨシュアさんが違うとすれば……それは強さだと思います」

「強さ？」
「お祖母さまは、次期国王に私を指命しようとなさっています。状況を考えるとそれが最善だとは思いますが……。だけど、女王になれば私は2度と『クローゼ』には戻れない。大きな権力と責任を持つ『クローディア・フォン・アウスレーゼ』として生きていくしかありません。こうして友達と気軽に話したり、先生に甘えたり、あの子たちを抱き締めてあげることもできない……。それが恐くて……。そして、孤独に戻る恐さを感じてしまう自分が情けなくて……。いまだにお祖母さまにはっきり返事ができていません……」
「クローゼ……」
「その点、ヨシュアさんは私なんかよりも強いと思います。誰よりもエステルさんから離れたくなかったはずなのに……。それでも、エステルさんを自分の事情に巻き込まないために姿を消したんですから……」
「……確かにヨシュアは強いよ。でも……それは間違った強さだと思う」
「え……？」
「一国を治める女王様だもん。クローゼが悩むのも当然だよ。不安に思うのは当たり前だし、思わなかったらおかしいと思う。そんな風に悩んで、それでも答えを出そうとしているクローゼだからこそ、あたしは女王様にふさわしいと思う」
「エステルさん……」
「だけどヨシュアは……。ヨシュアは悩まなかった。悩みもせずに、さも当然のようにあたしたちの前から姿を消して……。あたしね……それが一番、許せないんだ」
「エステルさん……。……そうですね。ちょっと許せませんよね。女の子の気持ちを何だと思ってるのかしら」
「ぷっ……」
「ふふっ……」
そして2人して笑った。

「あたし、クローゼと友達になれて本当によかった。ここまで本音で話せる人ってなかなかいないと思うし……」
「ふふ、私もです。恥ずかしいことばかり語ってしまいましたけど……。えっと、誤解しないで下さいね？私、ヨシュアさんのこと今ではそんな風には思って……」
「ああ、いいっていいって。好きって気持ちが抑えられるものじゃないってあたしにもようやく判ったし。それに、こういうのも何だか青春っていう気がしない？」
「もう、エステルさんったら……。うーん、気持ちが残っていないと言えばウソになりますけど……。それ以上に、お2人のことを応援したい気持ちが強いというか……」
「うんうん、分かってるって。……さてと、すっかり話し込んじゃったね。レインさんだけに聞き込みをさせるのは悪いし、聞き込み再開しよっか？」
「あ、そうですね。夕方になる前に回りきってしまいましょう」
そして、レインと合流し、聞き込みを再開した。

―王立学園・女子寮
「あのー、ちょっと……」
エステルが2人の女生徒に話しかけようとした時、
「聞いてませんわよ、そんな話！」
いきなり目の前の女生徒に怒鳴りかかった。
「（う、うわっ……！）」
エステルはあまりの剣幕に思わずのけぞった。
「休暇にはリベール旅行に行くと前々から言っておいたでしょう！それがなんで今さら国許（くにもと）への帰省になるのかしら！？」
「フラッセ、どうか落ち着いてください」
「いいえ、聞きませんわ！今日こそ言わせてもらいます」

「え、えーと……」
改めて声をかけようとしたが、全く耳に入らない。
「ようやく試験も終わり、さあ旅行だと思った矢先に……。どうして帝国行きの往復チケットが届くの？あなた、爺やと共謀して私を騙すつもりだったのね！」
「（うーん、割り込めない）」
「（す、少し様子を見ましょうか……）」
「（早く収まればよいのですが……）」
「あのう、ですからフラッセ……。何もおっしゃらない方が身のためだと思いますよ」
レイナがフラッセに言った。
「み、身のため……！？み、身のためですって！？」
怒りが再燃した様子のフラッセ。
「つ、付き人の分際でよく主人にそんな口がきけ……！」
そして、ようやくエステルたちの存在に気が付いたようだ。
「……あ……」
「あ、あはは～……どうも～」
「（だから言ったのに……）」
「コ、コホン……。……何かご用ですかしら？」
何もなかったかのように振舞おうとするフラッセだったが、気まずさがありありと見える。
「う、うん……。お取り込み中ごめんね。今、とある事件を調査してるんだけど……」
エステルたちは試験期間中の変な出来事について調査していることを説明した。
「……」
フラッセは心当たりがあるようだ。
「なるほど、あの件の調査に来られたのですね」
「レイナ！やめてちょうだい。私、思い出したくないの」
「……何かあったの？」

「ええ、実は……。……試験期間中に、怪しい物を目撃したんです。具体的に申し上げれば、『宙を舞う人影』……ですか」
「まあ……！？」
「レイナ……！！」
あわてて口を塞ごうとするフラッセ。
「……詳しい話をお願いしたいわね」
「私からお話しいたします。……よろしいですね、フラッセ」
「う～……か、勝手になさい！」
フラッセはレイナから離れた。
「あれは試験前日の真夜中のことでした。突然、『窓の外に誰かがいる』とフラッセが言い出したのです」
「い、いかにも怪談って感じね」
エステルは少し身を震わせた。
「窓を覗いてみると、確かに校舎の上空に人影が見えました。風に吹かれていたのかくるくると回っていましたよ」
「うう……」
フラッセは青ざめていた。
「やがて、人影は校舎の裏手へ隠れてしまいましたが……。……けれども、本当に大変だったのはその後です。おびえてしまったお嬢様が私のベットに潜りこんできて……」
「そ、そこまで話す必要はないでしょ！」
突然、フラッセが向き直った。
「プ、プライベートは結構よ」
「あら、そうですか。残念です……ここからが面白いのに」
「え、えーと、証言を整理させてもらうと……。人影は校舎の上空に現れて校舎の裏手に消えたってことね」
「ええ、その通りです。お役に立てましたか？」
「うん、それだけ判れば十分よ。２人とも、ご協力感謝するわ」
「有力な目撃証言ですね」
「そうね……。早速、手帳にメモしておくわ」

「それではお二方、失礼します」

「あ……もうこんな時間なんだ」

生徒の聞き込みを続けているうちに、空はすっかりオレンジ色に染まっていた。

「一通り生徒から話を聞きましたし、いったん生徒会室に戻りましょうか？」

「うん、そうね。みんなの情報を照らし合わせて何か見えてくるといいんだけど」

エステルたちは生徒会室に向かった。

第7章　忍び寄る影（14）

―生徒会室

「あ、戻ってきたわね。それじゃあ一旦、各自報告をするとしましょ」

エステルたちは各自得た情報を報告し始めた。

「各職員から話を聞いてみたが……。用務員が学園の敷地内で怪しい人影を目撃したらしい。旧校舎に通じる裏門のところでいきなり消えちまったそうだ」

「他の先生方はテストの準備で忙しくて特に気づいた人はいなかったみたい。学食のおばさんと受付のファウナさんからも大した情報は得られなかったわね～」

アガットとジルは用務員だけからしか情報は得られなかったようだ。

「なるほど……。あたしたちは、3人の生徒から気になる証言を聞いたんだけど……」

パトム、ミック、フラッセたちの証言を他のみんなに話した。

「どの証言も、校舎の裏手――――すなわち、旧校舎が鍵になっています。偶然にしては気になる符号ですね」

「それじゃあ、わたしの成果を発表しますね～。生徒・職員の方々を30枚、学園内の風景を50枚も撮りました～。えへへ。どれも可愛く撮れたと思うよ～」

「ボクもの方も残念ながら大した収穫はなかったよ。フッ、リュートを演奏したら可愛い仔猫ちゃんたちがいっぱい集まってきたけどね」

ドロシーとオリビエは案の定、役に立たなかった。

「もう、2人とも全然調査になってないじゃないの。あんまり期待もしてなかったけど……」

「最後は俺か。過去の資料をあたって同じような事件がないかどうか調べてはみたんだけど……。この学園、建物自体は新しいから怪談めいた話は意外と少なくてね。それも大体が旧校舎に集中してたよ」

「全ての証言を考えると、明らかにその旧校舎が怪しいですね。いったいどういった建物なのですか？」

レインが尋ねた。

「裏門の奥にある築数百年の古い建物ですよ。２０年前まで使われていて、こちらの新校舎が建造されてからは閉鎖されているんですけど……」

「あれ、学園祭の時には旧校舎の中に入れなかったっけ？」

「あの後、魔獣が入り込んだりして危険だから裏門が施錠されたんです。２、３ヶ月は放置されたままだと思います」

「フッ……。数百年の石造りの建物か。亡霊が住みつくにはピッタリのロケーションだね」

「うーん……。正直、気は進まないけど他に手がかりも無さそうだし。……今日はもう遅いから明日の朝にでも調べてみない？」

「おや、エステル君。どうして遅いことがあるんだい？」

「だ、だって、もうすぐ夜だし、魔獣もいて危険かもしれないし。昼間ですら薄気味悪いのに夜なんかに入った日には……」

「フッ、それがいいんじゃないか。肝試しといえば真夜中。幽霊の正体を掴むのにこの上ない時間帯と言えよう」

「うんうん。やっぱり心霊スポットの取材に夜は欠かせませんよね～」

「う、うーん……。あれっ……」

急にエステルが窓に目を向けた。

「エステルさん？どうしたんですか？」

「うん……。窓の外に何か見えたような」

エステルが窓側に寄った。

「白っぽい影だったからジークだと思うんだけど……。……

……白い影？」
窓の外には白いマントを羽織って仮面をつけた人が宙を舞っていた。
そして、エステルに気付くと礼をして旧校舎の方に去って行った。
「エステルさん？どうなさったんですか？」
クローゼが心配そうにしている。
「あは……あははは……。う、う～ん……」
エステルはその場に崩れ落ちた。
「お、おい！？」
「エステルさん！大丈夫ですか！？」

「……テルさん……。エステル……きて……」
「ん……。あれ……」
エステルが目を覚ましたようだ。
「あ、エステルちゃん！」
「よかった……。目を覚ましたんですね。あの、気分はどうですか？」
「うん……悪くないけど」
エステルは身を起こした。
「あれ……ここ女子寮よね？どうしてこんな所で……」
エステルは急にベッドから離れた。
「あ、あたし！窓の外に『白い影』を見て！それでっ……！」
「はあ……。やっぱり幽霊を見たわけね」
「エステルさん……。その『白い影』というのはどのような姿をしていましたか？」
「う、うん……。古めかしい衣装を着た、仮面をかぶった男の人で……。白くてボーッと光りながら空中をくるくる踊っていて……。旧校舎の方に飛んで行っちゃった」
「ふえ～、ずいぶん楽しそうな幽霊さんだねぇ」

「各地で目撃されたという『白い影』の証言と同じですね」
「それに、やっぱり旧校舎か」
「……談じゃないわよ」
「へっ……？」
「幽霊だか何だか知らないけど上等じゃない……。ふざけた格好で人を脅かして気絶までさせてくれちゃって……。この落とし前、絶対に付けてやるんだからっ！」
「お、落とし前って……」
「エステルちゃん。幽霊苦手じゃなかったの～？」
「あたしが幽霊が苦手なのは居るかどうかわからないから！こうして目撃しちゃった以上、今さら恐がるものですかっ！2度と化けて出てこないようとっちめてやるわ！」
「うーん、逞しいというか、ズレてるっていうか……」
「ふふ……。さすがエステルさんですね」

―クラブハウス　1階
「ほらよ、先生から裏門の鍵を借りてきたぜ」
ハンスはエステルに裏門の鍵を渡した。
「ありがと、ハンス君！」
「張り切るのはいいが……。調子は大丈夫なんだろうな？」
「モチのロンよ！とっとと旧校舎を調べて幽霊をとっちめなくちゃ！」
「そ、そうか……」
「フフ、エステル君も本領発揮といったところだね。さてと……。早速、肝試しと行こうか。魔獣がいるかもしれないから、ある程度、武術が使える人間に絞った方が良さそうだね」
「ああ、もちろんだ。カメラマンの姉ちゃんはともかく、学生たちには遠慮してもらうぜ」

「わかってますって。足、引っ張りかねないし」
「何かあった時のためにここで待機してますよ」
「あの、アガットさん。私も……同行しても構いませんか？」
「おいおい、姫さん。あんた、あまり軽率なことはしない方がいいんじゃねえのか？」
「孤児院の子が見ていますし、個人的にも放っておきません。それに以前、旧校舎には何回か入ったことがありますからお役に立てると思います」
「ちっ……仕方ねえな。まあ、あんたの腕なら同行するには十分すぎるか。くれぐれも無茶はすんなよ」
「はい、肝に銘じます」
「私も同行させてもらいますよ。武術の腕ならありますし、例の件もありますしね」
「まあ、あんたは構わねえな。それに、あんたの腕を見れるいい機会だしな」
「まあ、任せてください」
「よし、これで決まりね！それじゃあ幽霊を捕まえに旧校舎に行くとしますか！」
「おーっ！」
エステルたちは旧校舎へと向かった。

第7章　忍び寄る影（15）

―王立学園旧校舎
「なるほど……。これが旧校舎か」
「ふふ……なかなか本格的じゃないか。さぞやゾクゾクさせてくれるに違いない」
「うふふ……鳥肌がたっちゃいますねぇ」
オリビエとドロシーは面白がっている。
「全然怖がっているように見えないんですけど……」
「あっ……」
クローゼがいきなり声を上げた。
「どうしたの？」
「エステルさん、扉の前に……」
旧校舎の扉に何かが挟まっていた。
「これって……カード？何か書いてあるけど……」
エステルが手にとって読んでみた。

『招かざる訪問者よ。わが仮初めの宿へようこそ。千年の呪い、恐れぬならばわが元へ馳せ参じるがよい。第一の呪いは大広間に。『虚ろなる炎』を目指せ』

「わわっ……！」
「きゃっ……！」
読み終えた途端にカードは炎に包まれて消滅してしまった。
「な、何だってんだ！？」
「ひょっとしたら発火現象かも～……。騒霊現象（ポルターガイスト）などで時々起こるらしいけど～……」
「ふむ……。ずいぶん挑戦的な幽霊だねぇ。ボクたちに謎かけをしてきたか」

「じょ、上等じゃない！生きてる人間様を舐めるんじゃないわよ！」
「強がりもそこまで行きゃあ上等だ。それにしても……『虚ろなる炎を目指せ』か」
「たぶん『大広間』はその扉を入ったところにある大きな玄関広間だと思います。調べてみる必要がありそうですね」
「う、うん……！」
「では、入ってみましょう」
エステルたちは旧校舎へと入った。

―旧校舎　玄関広間
「『虚ろなる炎』……。この燭台のことでしょうか？」
「確かに1つだけ炎が点ってないわね。よし、調べてみようか」
エステルが燭台を調べてみると、中にカードが入っていた。

『第二の呪いは教室に。『南を向く生徒』を探せ』

カードは炎に包まれて消滅した。
「わわっ……。で、でも正解だったみたいね」
「ふむ、今度は教室だね。無人にもかかわらず『南を向く生徒』か……」
「たしか教室は左翼の1階と2階の2つずつ、合わせて4つあったはずです」
「よし……コンパスを使いながら調べてみるか」

―旧校舎　1階左翼教室
「他の席は散らかってるのにここだけちゃんと置かれてるね～」

「向いている方角も真南……。多分、ここで合ってるだろ」
「それじゃ、調べてみるわね」
机の中を調べるとカードが入っていた。

『第三の呪いは庭園に。『落ちたる首』を探せ』

カードは炎に包まれて消滅した。
「とと……。正解みたいだったけど、次はどこになるのかしら」
「『庭園』と『落ちたる首』か。ずいぶんと大仰だがこれも何かの比喩なんだろうね」

―旧校舎　屋上
屋上には4本のプランターがあり、1本だけが倒れていた。
「『庭園』の『落ちたる首』……。条件に合いそうな気はしますね」
「うん……。たぶん間違いないと思うわ」
石造りのプランターにはカードと古びた鍵が入っていた。

『今こそ呪いは成就せり。最後の試練を乗り越え、いざ我が元へ来たれ』

カードは燃え尽き、古びた鍵を手に入れた。
「謎かけはこれで終わりみたいね。『呪いは成就せり』って、やたらと嫌な感じはするけど……」
「フッ、いずれにせよ、その鍵を使えということだろうね。合う場所を探してみようじゃないか」

―旧校舎　1階右翼

右翼の部屋のうち、1つだけ鍵がかかっていた。エステルは鍵を使い、中へと入った。

「竜の像……みたいね」

部屋の中には大きな竜の像が鎮座していた。

「この像は、確か昔からここにあったと思います。かつてリベールに棲息していた古代竜を象ったものらしいですけど……」

「部屋の中にただ一つ像だけがある……。何か仕掛けがありそうですね。少し調べさせてください」

レインは竜の像を調べ始めた。しばらくして竜の像の台座にスイッチらしきものがあった。

「……これですね」

レインはそのスイッチを押した。そして、竜の像が横に移動し、階段が現れた。

「こ、こんなものが像の下にあったなんて……」

「フッ……悪くない趣向だ。なかなかどうしてケレン味タップリじゃないか」

「そうですね～。サービス精神満点です～。観光名所にしたらお客さんが集まるかも～」

「でも……さっきから思ってたんだけど。あのカードといい幽霊の仕業にしては変じゃない？」

「確かに、実体のない霊ができることとも思えませんね」

「いずれにしても一筋縄でいく相手じゃねえ。気を引き締めて降りるとするぞ」

第7章　忍び寄る影（16）

―王立学園旧校舎　地下

「えっ……」

「チッ……いきなりかよ！」

階段を降りて1つ部屋を抜けて前に進もうとした時、いきなり魔獣が立ち塞がった。

「か、かなり手強かったわね。それにしても……ここって地下の遺跡？」

「そうですね……中世のものだと思います。こんな場所があったなんて……」

「ふむ、魔獣の気配がプンプン漂ってるねぇ。さしずめ、この地下遺跡がカードにあった『試練』かな？」

「ええ、間違いないでしょうね」

「さすがに非戦闘員を連れて行くのはキツいな。おい、カメラマンの姉ちゃん」

アガットがドロシーに言った。

「はい、なんでしょう～？」

「聞いての通り、この先はかなり危険だ。あんたはしばらく手前の部屋で待機しててくれ」

「え～、そんなぁ。せっかく幽霊さんを撮れると思ったのに～……」

「ま、何か見つけたら呼びに戻ってあげるわよ。それなら構わないでしょ？」

「うー、仕方ないなぁ。それじゃあみんな、くれぐれも気を付けてね～？」

ドロシーは手前の部屋に戻った。

「さてと……。先に進むとするか。魔獣もかなり手強い。慎重に進むぞ」
「了解ッ！」
「わかりました」
「フッ、任せたまえ」
「行きましょう」
エステルたちは地下遺跡を先に進んだ。

第7章　忍び寄る影（17）

―王立学園旧校舎　最奥広間

「あっ……！」

エステルが声を上げたその先には、白いマントを羽織った人物がいた。

「影もあるようだし、幽霊じゃあなさそうだが……。てめえ……何者だ！？」

「フフフ……」

白いマントの男が振り返った。

「ようこそ、我が仮初めの宿へ。歓迎させてもらおうか」

「か、仮面……？」

「エステルさんやポーリィちゃんの目撃情報と同じですね……。あなたがルーアン各地を騒がしていた『影』の正体ですか？」

「フフ……。その通りだ、クローディア姫。お目にかかれて光栄だよ」

白いマントの男はあろうことかクローゼの正体を知っていた。

「こ、こいつ……なんでクローゼの正体を！？」

「フフ……。私に盗めぬ秘密などない。改めて自己紹介をしよう。《執行者》ＮＯ．？。《怪盗紳士》ブルブラン――《身喰らう蛇》に連なる者なり」

「《身喰らう蛇》……！」

「《執行者》……！この者がまさか……！」

「レインさん、何か知ってるの？」

「《執行者》というのは、《結社》のなかで選りすぐりの戦闘集団です。その実力は今我々全員の力をもってしても敵うかどうか……」

「そ、そんな……」

「……チッ……」

エステルたちは後ずさりした。

「ほう、そこの彼は何か知っているようだね。まあ、そう殺気立つことはない。私はここで、ささやかな実験を行っていただけなのだ。諸君と争うつもりは毛頭ない」
「じ、実験……？」
ブルブランの後ろの装置で何かが輝いた。
「そ、それは……」
「リシャール大佐が使っていた漆黒の導力器（ゴスペル）……」
「しかもどうやら……あれより一回り大きいみたいだね」
「ふむ、『彼』の報告通りこれの存在は知っているか。この《ゴスペル》は実験用に開発された新型でね。今回の実験では非常に役に立ってくれたのだよ」
「実験……。いったい何の実験だ？」
「フフフ……。百聞は一見に如（し）かずだ。実際に見ていただこうか」
ブルブランが装置のスイッチを入れた。そして、装置の前にエステルたちが見た『幽霊』が現れた。
「ゆ、幽霊……！」
「いや、その装置を使って空間に投影された映像のようだね。そんな技術が確立されているとは寡聞にして聞いたことはなかったが」
「これは、我々の技術が造りだした空間投影装置だ。もっとも、装置単体の能力では目の前にしか投影できないが……。《ゴスペル》の力を加えるとこのようなことも可能になる」
《ゴスペル》から黒い光があふれだすと、ブルブランの映像が急にエステルたちの後ろに移動した。
「きゃっ……！？」
「わわっ……」
そして、その映像は自由自在に動き回った。
「――――とまあ、こんな感じだ。フフ、ルーアン市民諸君にはさぞかし楽しんでもらえただろう」
「チッ……。つまり、単なる悪ふざけだったわけか」
「悪ふざけとは人聞きが悪い。選挙で浮かれる市民たちに贈るちょ

っとした息抜きと娯楽……。そんな風に思ってくれたまえ」
「カ、カラクリはわかったけど……いったいどうしてこんな事をしでかしたのよ!?《身喰らう蛇》って……いったい何を企んでいるわけ!?」
「フフ……それは私が話すことではない。私が、今回の計画を手伝う理由はただ一つ……。クローディア姫――貴女と相見(あいまみ)えたかったからだ」
「えっ……？」
「市長逮捕の時に見せた貴女の気高き美しさ……。それを我が物にするために私は今回の計画に協力したのだ。あれから数ヶ月――この機会を待ち焦がれていたよ」
「え、あの、その……」
「……市長逮捕って、ダルモア市長の事件よね。な、何であんたがあの時のことを知ってるのよ!?」
「フフ、私はあの事件の時、陰ながら君たちを観察していた。たとえば……このような方法でね」
ブルブランが瞬時に姿を変えた。その姿はダルモア市長の執事であるダリオの姿だった。
「まさかあの時いたダルモア家の……!?」
「怪盗とは、すなわち美の崇拝者。気高きものに惹かれずにはいられない。姫、貴女はその気高さで私の心を盗んでしまったのだよ。他ならぬ怪盗である私の心をね……。おお、何という甘やかなる屈辱！如何にして貴女はその罪を贖(あがな)うおつもりなのか？」
「あ、あの……。そんな事を言われても困ります」
「この自分に酔った口調……てめえにソックリじゃねぇか？」
アガットが隣のオリビエに言った。
「失敬な……。一緒にしないでくれたまえ」
「《身喰らう蛇》。何か思っていたのと違うけど……」
エステルが武器を構えた。
「クローゼが狙いと聞いたらなおさら放っておけないわね！」

「エステルさん……」
「協会規約に基づき、不法侵入の容疑で拘束する。《ゴスペル》のことも含めて色々と喋ってもらうぜ」
「やれやれ……。何という無粋な連中であろう。相手をしてやってもいいがせっかく選んだこの場所だ……『彼』に相手してもらおうか」
「なに……？」
いきなり周囲が揺れ動きだした。
「な、なんなの……？」
「ふむ……。イヤ～な予感がするねぇ」
部屋の横の扉が開いたかと思うと、巨大な機械が出てきた。
「な、なにコイツ！？」
「甲冑の人馬兵！？」
「フフ、どうやら『彼』はこの遺跡の守護者のようでね。半ば壊れていたところを私が親切にも直してあげたのだ。せっかくだから君たちが相手をしてあげるといい」
「じょ、冗談じゃないわよ！」
「……来るぞ！」

「か、勝った……」
「ケッ……。手こずらせやがって。次はてめぇの番だ……覚悟はできてるだろうな！」
「いけません！今は戦うべきではありません！」
レインがアガットを止めた。
「てめぇ、なぜ止めやがる！？」
「相手は《執行者》です！実力の内を分からないまま、戦うのは大変危険です！」
「やれやれ……。優雅さに欠ける戦い方だな。仕方ない……私が手

本を見せてあげよう」
ブルブランがステッキを構えた。
「Ｆｌａｍｍｅ！（炎よ！）」
ブルブランがそう唱えると、周囲の篝火（かがりび）の火が大きくなった。
「な……！？」
「篝火の炎が……！？」
「Ａｉｇｕｉｌｌｅ！（針よ！）」
ブルブランが一瞬にしてステッキからナイフのような小刀を出し、エステルたちの影をめがけて放った。
「えっ……！？」
「きゃっ……！？」
「おお……！？」
「これは……『影縫い』か！？」
「そうです……！東方に伝わる、対象者の動きを封じる技、『影縫い』です！」
エステルたちはブルブランの手によって動けなくされてしまった。
「フフ、動けまい。君たちはダルモア市長の《宝杖》に驚いていたようだが……。この程度の術、執行者（われわれ）ならばアーティファクトに頼るまでもない」
「そ、そんな……」
「クソ……見くびりすぎたか……！」
その時、部屋の外からジークがブルブランに飛び掛かってきた。しかし、ブルブランはそれをかわし、エステルたちと同様、動きを止められた。
「ピュイィッ！？」
「ジーク！？」
「現れたな、小さきナイト君。君の騎士道精神には敬意を表するが、しばし動かないでいただこうか」
ブルブランはステッキを収め、クローゼに近寄った。
「クローディア姫。これで貴女は私の虜（とりこ）だ。フフ、どのような気分

かね？」
「……見くびらないでください。たとえこの身が囚われようと心までは縛られない……。私が私である限り、決して」
クローゼはブルブランから目を離さず言い放った。
「そう、その目だよ！気高く清らかで何者にも屈しない目！その輝きが何よりも欲しい！」
「ふ、ふざけたこと抜かしてんじゃないわよ！」
エステルは縛られたままブルブランに武器を向けた。
「このキテレツ仮面！クローゼから離れなさいっての！」
「やれやれ、この仮面の美しさが分からないとは……。君には美の何たるかが理解できていないようだな」
「フフッ……」
オリビエが不意に笑みを漏らした。
「む……？」
ブルブランがオリビエを見た。
「ハハ、これは失敬。いや、キミがあまりにも初歩的な勘違いをしているのでね。つい、罪のない微笑みがこぼれ落ちてしまったのだよ」
「ほう……面白い。私のどこが勘違いをしているというのかね？」
「確かにボクも、姫殿下の美しさを認めるに吝かではない。だがそれは、キミのちっぽけな美学では計れるものではないのさ。顔を洗って出直してきたまえ」
「おお、何という暴言！たかが旅の演奏家ごときがどんな理由で我が美学を貶める！？返答次第では只ではすまさんぞ！」
「フッ、ならば問おう――美とは何ぞや？」
「何かと思えば馬鹿馬鹿しい……。美とは気高さ！遥か高みで輝くこと！それ以外にどんな答えがあるというのだ？」
「フッ、笑止……。真の美――それは愛ッ！」
「……なにッ！？」
「愛するが故に人は美を感じる！愛無き美など空しい幻に過ぎない

！気高き者も、卑しき者も愛があればみな、美しいのさっ！」
「くっ、小賢しいことを……。だが、私に言わせれば愛こそ虚ろにして幻想！人の感情など経ずとも美は美として成立しうるのだ！そう、高き峰の頂きに咲く花が人の目に触れずとも美しいように！」
「むむっ……」
両者にらみ合いが続いた。
「……えーと」
「なんてアホな会話だ……」
「こ、困りましたね……」
「このままではいつまで経っても終わりが見えませんね……」
「……まさかこんな所で美をめぐる好敵手に出会うとは。演奏家――名前を何という？」
「オリビエ・レンハイム。愛を求めて彷徨する漂泊の詩人にして狩人さ」
「フフ……その名前、覚えておこう」
「あ～！エステルちゃんたち見つけた～！」
ここに来て、状況を引っ掻き回すドロシーが現れた。いったいどうやってここに来たのだか……。
「えへへ、あんまり遅いからガマンできずに来ちゃった♪」
「ド、ドロシー！？」
「いけません！早く逃げてください！」
「ふぇ……？あーっ！仮面をかぶった白いヒト！あなたが幽霊さんですね～！？」
ドロシーはエステルたちのことなど気にしていない。
「い、いや……」
「はい、チーズ？」
ドロシーがカメラのシャッターをきった。
「うおっ？」
シャッターのフラッシュがあたり一面、まばゆく輝いた。
「ピューイ♪」

「あっ……！」
「痺れが取れた……」
「そうか……。フラッシュで影が消えたのか！」
「フッ、とんでもないお嬢さんだ」
「えっへん、任せてくださいよ～。何がスゴイのか自分でもわかりませんけど～」
「ククク……ハーッハッハッハッ！」
ブルブランが装置に戻って、《ゴスペル》を取り外した。
「あっ！」
「《ゴスペル》を！」
「こんなに愉快な時間を過ごしたのは久しぶりだ。礼を言わせてもらうぞ、諸君」
「てめえ……まだ何かやるつもりか！」
「フフ……今宵はこれで終わりにしよう。しかし、諸君に関しては認識を改める必要がありそうだ。さすが《漆黒の牙》と共に行動してただけの事はある」
「《漆黒の牙》……！」
「ヨシュアさんのことですね！？」
「フフ、彼とは旧知の仲でね。最初に君たちを観察し始めたのは彼の姿を見かけたからなのだよ。全ての記憶を取り戻したようだが……今はどこでどうしている事やら」
ブルブランがステッキをかざした。
「あっ……！？」
「な、なんだ……！？」
「どうやらここから去るつもりですね……」
「――さらばだ、諸君。計画は始まったばかり……。せいぜい気を抜かぬがよかろう。それとは別に、私は私なりの方法で君たちに挑戦させてもらうつもりだ。フフ、楽しみにしていたまえ」
「き、消えた……」
「し、信じられません……」

「うわ～！何だか手品みたいですねぇ」
「ハッハッハッ。なかなかやるじゃないか。これはボクの方も好敵手と認めざるを得ないね」
「そういう問題じゃないってば！キテレツな格好はともかく……あいつ、並の強さじゃないわ！」
「そうだな……。《身喰らう蛇》――――予想以上に手強そうだぜ」
こうして……ルーアン各地を騒がした幽霊事件は幕を閉じた。翌朝、街に戻ったエステルたちはドロシーと一旦別れて事件の報告をすべく、ギルドに向かった。

第7章　忍び寄る影（17）（後書き）

《執行者》ブルブラン、いかがだったでしょうか？

第7章　忍び寄る影（18）

―遊撃士協会ルーアン支部

「そうか……ご苦労だったね。《身喰らう蛇》……。カシウスさんに話を聞いた時には正直、半信半疑だったが……。とりあえず、今回の調査の報酬を渡すよ。まさかこんな形になるとは思わなかったけどね」

エステルは報酬を受け取った。

「調査結果はすぐに王国軍に報告しておこう。あちらさんも相当、情報を欲しがっていたからね」

「ああ、頼んだぜ。あの投影装置を考えるとハンパな組織じゃねぇはずだ。しかも《ゴスペル》をまた持ち出してくるとはな……」

「どうやら結社の目的は新しい《ゴスペル》を使った実験をすることにあったようだね。幽霊騒ぎは、趣味の入った実験結果でしかなかったようだ」

「怪盗ブルブラン……。あいつ、自分のことを《執行者》と呼んでたよね」

「先日言いましたが、《執行者》は《結社》の選りすぐりの戦闘集団です」

「……」

「エステルさん、あの……」

クローゼがエステルの考えていることを察したようだ。

「うん、わかってる……。《漆黒の牙》……。あの日、ヨシュアは自分のことをそんな風に呼んでいたから……。多分、ヨシュアもその《執行者》だったんだと思う」

「なるほどな……。あの怪盗野郎と同格なら、あいつの専門技術も納得だ。ひょっとしたら実力を隠して猫をかぶっていたのかもしれねぇ」

「うん……そうかも。……ねえ、ジャンさん」

「なんだい？」
「あの怪盗男、結社の計画が始まったばかりだって言ってた。多分、リベールの各地で色々しでかすつもりだと思うの。ほかの地方支部から何か情報は入ってきてないかな？」
「うーん……。目立った情報は入ってないね。ただ、エステル君の言う通り、結社が各地で暗躍を始めている可能性は高いと思う。幽霊騒ぎも一段落ついたし、他の地方に移った方がいいかもね」
「ああ。俺もそう思っていたところだ。どこか手薄な支部はあるかよ？」
「強いて言うならツァイス支部だと思う。常駐のグンドルフさんが王都方面へ出かけたらしくてね。かなり大変な状況らしい」
「だったら、あたしたちが手伝いに行った方がよさそうね。でも、ルーアン支部は大丈夫？」
「実は、ボース支部のスティングさんが数日後こっちに来てくれるんだ。それまではメルツ君1人に何とかしのいでもらうとするさ。そうだ、ツァイスに着いたらラッセル博士を訪ねた方がいいね。新たな《ゴスペル》の一件は博士の知恵を借りた方が良さそうだ」
「うん、確かにそうかも。ティータとも会いたいし、すぐに工房を訪ねてみるわ」
「それでは準備ができたらさっそく飛行場に行くとしよう」
「ジャン君。乗船券を5枚手配してくれたまえ」
「へっ……？」
「いきなり仕切ってなに図々しいこと言ってんのよ……。……って5枚？」
「フッ、エステル君とアガット君とレイン君。そして、このボクと姫殿下の分に決まっているだろう」
「あ、あんですって～！？」
「そんな気はしてたが……。この先も付いてくるつもりかよ？」
「ヨシュア君を捜すのは愛の狩人たるボクの使命でもある。新たな好敵手とも巡り会えたし、同行する理由は十分だと思うけどね？」

「あ、あんたのタワケた理由はともかく……。クローゼたちまで一緒に巻き込むんじゃないわよ！」
「いえ……。実は私も、同じことをお願いしようと思っていました」
「私も同じです」
「え」
「私は前にも言いましたが、前々から《結社》の存在を追い続けてきました。そして今回、《執行者》が現れてリベールで何かを実行しようという裏付けが取れました。別々で行動するよりも一緒に行動した方が何かと便利だと思いましてね。もちろん、今まで得てきた情報もお教えさせていただきますよ」
「レインさん……」
「ま、あんたは仕方ねえな」
「私もです。リベールで暗躍を始めた得体の知れぬ《結社》の存在。王位継承権を持つ者として放っておくわけにはいきません。それに何よりも……エステルさんとヨシュアさんの力になりたいんです」
「クローゼ……。で、でも学園の授業はどうするの？」
「実は今朝、コリンズ学園長に休学届を出してしまいました。試験の成績も問題ありませんし、進級に必要な単位もとっています。ジルとハンス君にも相談したら『行ってくるといい』って……」
「い、いつのまに……」
「やれやれ。思い切りのいい姫さんだぜ」
「す、すみません……。押しかけるような真似をして。あの……駄目でしょうか？」
「ふふっ……。駄目なわけないじゃない！そういう事なら遠慮なく協力してもらうわ！アガットもいいよね？」
「ま、いいだろ。アーツにしてもハヤブサにしても姫さんがいると色々助かるしな」
「よかった……。ありがとうございます。エステルさん、アガットさん」
「えへへ、何といっても紅騎士と蒼騎士の仲だもんね。一緒に協力

して、行方不明のお姫様を捜すことにしましょ！」
「あ……はい、そうですね！」
「フッ、それじゃあボクは黒髪の姫に強引に迫ろうとする隣国の皇子という設定で……」
「勝手に役を増やすなあっ！」
「あはは……。話がまとまって何よりだね。しかし、そういう事なら3人を『協力員』という立場で扱わせてもらった方が良さそうだ。そうすればギルドとしても経費面などで便宜が計れるからね」
「はい、それでお願いします」
「誠心誠意、愛を込めて協力させてもらうよ」
「ありがとうございます」

第7章　忍び寄る影（18）（後書き）

今回で第7章が終了です。どうでしたでしょうか？

第8章　荒ぶる大地（1）

―ルーアン市　南街区

「――かくして宴は終われども、残されし熱気に我らはただ惑い……蒼ざめた月影と、海原を渡る涼風が熱き血潮を冷ますのを待つのみ……」

ブルブランが港湾区の倉庫の上に佇んでいた。

「……待たせたな」

銀髪の青年がブルブランに声をかけた。

「フフ、ちょうど時間通りさ。しかし相変わらず律儀な男だな。たまには遅刻ぐらいしても罰は当たらないのではないかね」

「これも性分でね。早速だが、報告を聞かせてもらおうか」

「はは、そう焦るものではない。今宵は気分がいい。少しくらい浸らせてくれたまえ」

「やれやれ……よほど気に入ったと見えるな？」

「うむ、麗しの姫君にはますます心を奪われてしまった。それに、思わぬところで美をめぐる好敵手と出会ってね。フフフ……これから忙しくなりそうだ」

「仕方のないやつだ。個人的な趣味も結構だが計画の支障になっては困るぞ」

「フフ、それは心配無用だ。それでは受け取りたまえ」

ブルブランは銀髪の青年にゴスペルを渡した。

「……確かに。それで……実験の成果はどうだった？」

「ふむ、そうだな。9割成功と言っていいだろう。投影装置が生み出した映像をかなり遠くの座標まで転送できた。ただ、最初の1、2回は転送に失敗したらしくてな……。3回目を越えたあたりから完璧に作動するようになったが」

「ふむ……。不安要素はあるが、悪くない。早速、教授に伝えておこう」

「しかし《ゴスペル》か……。導力停止現象もそうだが今の技術を遥かに越えているな。《十三工房》製らしいが一体どういうカラクリなのかね？」
「さてな……。俺も詳しくは聞かされていない。ただ、教授によればそれらの現象は『奇跡』の一端に過ぎないらしい」
「ほう、奇跡ときたか。ふむ……奇跡は女神にしか許されぬ御業。いったいどういう意味なのやら」
「いずれにせよ、真の潜在能力は今後の実験で明らかになるだろう。そうすれば……」
銀髪の青年が急に話を止めた。
「……」
「ほう？フフ、今宵は意外な登場人物に恵まれているようだ。さて、筋書きはどうしたものか」
「フッ……」
銀髪の青年が剣を構えた。
「それは、身を潜めているネズミの態度次第だろうさ」
「クク、違いない」
ブルブランもステッキを構えた。
「さてさて……どんな声で鳴いてくれるのやら」
「……うぃ～……」
遠くから酔った声が近づいてきた。
「ふむ……。どこのネズミか知らぬが命拾いしたようだな」
「フッ……。女神に感謝するがいい」
2人は倉庫を飛び下り、姿を消した。

「ぎゃはは、酒持ってこ～い！」
「うぇっぷ、もう飲めない……」
「ちくしょう……俺だって……俺だってなぁ……」
酔った声の正体は《レイヴン》の3人だった。

「はぁ～……。寿命が縮むかと思ったわ……。ヘッ、言われずとも女神に感謝しまくりやっちゅうねん」

コンテナの後ろに潜んでいたのはケビン神父だった。

「……しかしまあ、何ちゅう化物どもやねん。あれが結社の《執行者》か……」

第8章　荒ぶる大地（2）

―ルーアン市　北街区

「さてと……ツァイス地方に出発ね。準備が済んだらもう発着場に行こっか？」

「そうだな……他に用事がなければ出発した方がよさそうだ」

「そういえば、ドロシー嬢はあの後、どこに行ったんだい？いつの間にか居なくなってしまったようだが」

「あ、ホテルにいるナイアルの所に行ったみたい。ルーアンを出発するなら一応挨拶した方がいいかも」

「ふふ、そうですね。できれば先生たちにも挨拶したかったんですが……。先ほど連絡したら、どうやら用事で子供たちと一緒に出かけたらしくて」

「そうなんだ……。うーん、あたしも挨拶しておきたかったなぁ」

「ま、ツァイスに着いたら手紙でも書きゃあいいだろ。いざとなったらすぐにでも戻って来れるしな」

「はい、そうします」

「あたしも一緒に書こうっと」

「フッ……それでは出発するとしようか。導力技術の殿堂のして王国の頭脳集まる工房都市へ」

―ホテル

「こんにちは～……って……」

「おう、お前らか。ドロシーから聞いたぜ。幽霊騒ぎは解決したそうだな。うん、一応そうだけど……。ドロシー、どうしちゃったの？」

ドロシーはベッドの上に横たわっていた。

「事件の報告をしている時からうつらうつらし始めてな……。終わった途端、爆睡しやがったんで仕方ねぇからベッドに運んだんだ」
「ま、昨日は真夜中まで色々なことがあったからな。少々キツかったのかもしれん」
「ふん、徹夜を続けられてこそ一人前の記者だっつーの。そうだ、コイツの説明だけじゃいまいち要領が得なくてな……。今回の事件について幾つか質問をしてもいいか？」
「うん、いいわよ」
エステルたちはナイアルの質問に答えながら、事件のあらましを説明した。
「なるほど、大体わかったぜ。それにしても『怪盗Ｂ』がリベールに来ていたとはな……」
「え……！ナイアルってば怪盗男のことを知ってるの！？」
「大陸各地を騒がす有名な盗賊らしいぞ。狙った獲物は逃がさない。あくまで華麗に盗み去る……そんな芝居がかった盗賊らしい」
「フン……。同一人物くせぇな」
「だが、その『怪盗Ｂ』がまさか結社の手先だったとはな。《身喰らう蛇》……とことん得体の知れない連中だぜ」
「あの、ナイアルさん。今回の事件についてはどこまで記事にするんでしょう？」
クローゼがナイアルに尋ねた。
「いや、実はギルドと王国軍から結社についての報道は控えるように頼まれちまいましてね。『悪質な愉快犯』の仕業として書くことになっちまうと思います」
「まあ、クーデターも集結してやっと国内も落ち着いた頃合だ。市民の動揺を考えたら妥当な判断だと言えるだろうね」
「記者としては不満だが、そのあたりは俺も納得してるさ。その代わり、また事件が起こったら俺たちにもちゃんと知らせてくれよ？」
「うん、わかったわ。それじゃあ、あたしたちはツァイス地方に出発するけど……」

「おお、そうか。俺は原稿書きがあるからちょいと見送りに行けねぇが……。ドロシーのヤツ、起こすかよ？」
「あ、いいっていいって。せっかくぐっすり寝てるんだし。ナイアルからよろしく言っといて」
「わーった。くれぐれも気を付けろよ」

―ルーアン市　発着場
「おう、いらっしゃい。ツァイスに向かう遊撃士さん御一行だな？」
受付のエドワンから尋ねられた。
「あ、うん、そうだけど」
「ジャンから連絡はもらった。運賃はギルド持ちだそうだ。さっそく乗船手続をするかよ？」
「手続きをしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうルーアン地方でやり残したことはねぇだろうな？」
「うん、大丈夫よ。乗船手続をしましょ」
「よしきた！それじゃあ全員、用紙にサインしてくんな」
「うん、わかったわ」
「エステルたちは乗船手続を済ませた」
「おう、全員問題ねえな。そんじゃあ、定期船が着くまで発着場で適当に待っててくれよ」
「は～い」

しばらくして、定期船が到着した。
「さてと。あたしたちも乗りますか」
「はい、そうですね……」
エステルたちが定期船に乗ろうとした時、

「あ～、いたいた！」
孤児院の子供たちがやってきた。
「あ、あんたたち！？」
「みんな、どうして……」
「見送りに来たのー」
「まったく2人とも、ちょっと薄情すぎるぜ。オレたちに黙って出発しようとしてさ～！」
「ほんと、プンプンですよ！」
「クローゼおねえちゃん。ホントに行っちゃうの～？」
孤児院の子供たちは思い思いの言葉を言った。
「うん……ごめんね。挨拶をしようと思ったんだけど留守にしてるって聞いて……」
「ルーアンの方に来てたわけね。あ、それじゃあひょっとしてテレサ先生も……」
「うふふ。間に合ったみたいですね」
後からテレサ院長とジル、ハンス、さらにコリンズ学園長までがやって来た。
「院長先生！それに、ジルたちも……」
「あはは！ぎりぎりセーフって感じね」
「はあ、いきなり見送りして驚かせようなんて言い出すからこんな事になるんだよ」
「ま、結果オーライってことで」
「実は、ジルさんたちからあなた達が出発することを教えてもらったんです。それで、どうせならみんなでお見送りをしようという事になって」
「フフ、ついでだから私も付き合わせてもらったよ」
「そうだったんですか……」
「……なあ、エステル姉ちゃん。ヨシュア兄ちゃん……家出しちゃったんだってな」
クラムが突然エステルに尋ねた。

「あ……」
「あたしたち、先生からその事を教えてもらって……」
「そっか……。ごめんね、みんなに黙ってて」
「ううん、いいんです。あの、わたしたち女神さまに毎日お祈りします！ヨシュアさんが早く帰ってきますようにって！」
「ボクもお祈りする～！」
「きっとかなえてくれるの～」
「みんな……」
「ふふ、ありがとう」
「ついでにあたしたちも女神様に祈らせてもらうわ。エステル、クローゼ。くれぐれも気を付けてね」
「頑張るのはいいが無理して危険な目には遭うなよ。そんな事になったら、あいつ、自分が許せなくなるだろうからな」
「ジル、ハンス君……」
「うん……。肝に銘じておくわね」
「エステルさん、クローゼの事、どうかよろしくお願いします。しっかりしているように見えてもろいところがある娘ですから……」
「せ、先生……」
「えへへ、任せてください。といっても、あたしの方が色々助けられちゃいそうだけど」
「ふふ……。クローゼはこれを機会に自分を見つめ直せるといいわね。自分のすべきことが何なのか焦らず答えを出すといいでしょう」
「はい……わかりました」
「遊撃士と学生……どちらも目指すべき道がある。2人とも、これまでの日々でじゅうぶん力を養ってきたはずだ。己の力を過信せずに使いこなせるようになるといい。そうすれば必ずや困難な道も乗り越えられるだろう」
「はい！」

「ツァイス方面行き定期飛行船、《セシリア号》まもなく離陸しま

す。ご利用の方はお急ぎください」

「あ、いけない……！」

エステルたちは定期船に乗りこんだ。

「それじゃあ、またね！」

「みんな……お元気で」

「姉ちゃんたちも元気でな！」

「土産話とヨシュア君、期待して待ってるからね！」

こうして、ルーアン地方での旅は終了した。

第8章　荒ぶる大地（3）

―定期船　《セシリア号》

エステルはアガットに声をかけた。

「なんだ、エステル。また船内をうろついてんのか？」

「うん、まあね。あたし今まで、飛行船ってあんまり乗ったことがないからけっこう新鮮なのよね」

「正遊撃士は出張が多いから飛行船はかなり利用するぞ。交易商と同じくらい利用頻度が高いんじゃねぇか？」

「確かにうちの父さんも出張ばっかりしてたわね。今ごろ何してるのかな……」

「軍のトップに祭り上げられて目の回るような忙しさだろうさ。ヘッ、いつも余裕そうにしてたからいい気味ってもんだぜ」

「うーん、忙しい父さんってあんまり想像できないけど……。でもアガットって、基本的に父さんのことを評価してるよね。なのに、どうしていつも憎まれ口を叩いたりするわけ？」

「……別に憎まれ口を叩いてるわけじゃねぇっての。大体な、失礼なのはどう考えてもお前の親父だぞ。いっつも人の顔を見るなり、『ご苦労』だの『偉い偉い』だの若造扱いしやがって……」

「うーん、確かに父さんってすぐに人をからかってくるよね。ま、いつもの減らず口だからあんまり気にならないけど……」

「お前、娘で良かったのかもな。あんな親父の息子だったら今ごろ反抗期の真っ最中だぞ」

「そ、そういうもんかしら？」

「親父ってのは、息子にとっちゃ越えなくちゃならねえ壁だからな。あんなバカ高い壁があった日にゃコンプレックスの塊になりそうだぜ」

「うーん……。いまいちピンとこないけど。要するにアガット、父さんにコンプレックス感じてるわけね？」

「……」
「あれ、図星だった？」
「……るせぇ、この似た者親子め」

エステルはオリビエに声をかけた。
「やあ、エステル君。空の旅を満喫してるかい？見たまえ……この雄大なる空の色を！まさに最高の酒の肴と言えるだろう！」
「まあ、いい天気だし景色が綺麗なのも認めるけど……。ツァイスまで、すぐに着くのにお酒を飲むってどうかと思うわよ」
「フッ……。そう言わないでくれたまえ。この空の下のどこかに愛しのヨシュア君がいる……。ああ彼は今、何を想って旅を続けているのだろうか……。そんな事を考えていると飲まずにはいられないのだよ」
「……それ、完全にあたしの台詞なんですけど。まったく、オリビエがいると話が深刻にならなくて助かるわ」
「フフ……お誉めにあずかり光栄至極。……しかし、少々安心したよ」
「え？」
「《漆黒の牙》……。あの怪盗の残した言葉を聞いて動揺しているかと思ったからね。だが、思っていたよりもキミの意志は固かったらしい」
「あ……。えへへ、オリビエってばあたしの心配してくれたんだ？」
「ふふ、愛を求めて彷徨う詩人にして演奏家だからね。恋する乙女の味方なのさ」
「あ、う……！」
エステルの顔が火を噴いた。
「おっと。棒術は勘弁してくれたまえ。茶化しているわけではじゃない。微笑ましく思っているだけさ。たとえばその服だってヨシュ

ア君に見てもらいたいと思って新しくしたんだろう？うん、とても良く似合っているよ」

「あ、ありがと……。もう……いきなり真面目に恥ずかしくなること言わないでよ。それにこの服は、シェラ姉がお祝いに見立ててくれたんだから。ヨシュアに見てほしいなんて……。……ちょ、ちょっとは思っているけど」

「……」

「な、なによ、悪い？」

「フフ……いや、予想以上だと思ってね。まあ、この話はこのくらいにしておこうかな。エステル君もどうだい？カクテルでも奢らせてもらうよ」

「うーん、遠慮しとくわ。すぐにツァイスに着くだろうし。オリビエも程々にしないと酔い潰れて降り損ねちゃうわよ？」

「フッ、心配しないでくれたまえ。このオリビエ、美女の酌以外では酔い潰れたことは一度もないのさっ」

「何の自慢にもならないわね……」

エステルはクローゼに声をかけた。

「エステルさん。ひょっとして船内をお散歩ですか？」

「えへへ、まあね。そういえばクローゼっていつも王都に帰る時どうしてるの。親衛隊の人に送ってもらうとか？」

「うふふ、まさか。定期船を使って帰っていますよ。新年の式典と、女王生誕祭。年に2回は王都に帰っていますね」

「それじゃあ結構定期船は使ってる方なんだ。あ、そういえば……ジークってどうしてるの？クローゼの後からのんびりと王都に来るわけ？」

「あ、ジークなら……。ジーク、来て！」

「へ……」

クローゼはジークを呼んだ。その直後、ジークが飛んで来た。
「ええっ！？」
「ピュイ？」
「ふふ、ごめんね。ちょっと呼んだだけなの」
「ビ、ビックリした……。ジークってばこの船について来てたんだ」
「ピュイ♪」
「ジークは時速１８００セルジュで水平飛行することができるんです。この定期船の運航時速は９００セルジュくらいですから……ジークにとったらお散歩と同じような感覚で付いて来ているのかもしれませんね」
「そうなんだ……。あんた、つくづく普通のハヤブサじゃないわねぇ」
「ピューイ？」
「ジークが親衛隊の伝令を手伝うことがあるのはこの速さがあるからなんです。導力通信が使えないとき、ジーク以上の速さで情報を届けられる存在はありませんから」
「そっか……。市長逮捕の時もそうだったわね」

エステルはレインに声をかけた。
「おや、エステルさん。どうしたのですか？」
「えへへ、ちょっと船内を散歩してるの。レインさんは何をしてるの？」
「ええ、風に当たりながら少し考え事をね。……エステルさん、突然ですが《結社》についてどう思います？」
「えっ……？」
「クーデター事件の時もそうでしたが、今回も《ゴスペル》が関わっていました。そして、怪盗紳士ブルブランも言っていたように実験は始まったばかりのようです」

「うん、そのようね」
「このままだといずれ、《結社》の《執行者》と戦うことになるでしょう。《執行者》の戦闘力は強力です。エスエルさんはそれでも止めようとしますか？」
「……。あたしはヨシュアを連れ戻すと決めた。そして、いずれかは《結社》と戦うことになるとことも分かっている……。それでも、あたしはやると決めた以上、覚悟は揺らがないわ」
「そうですか……。そうですよね、愛しい彼氏のためならばね」
「か、彼氏って……！」
「ふふ、照れなくてもいいですよ。当然のことですからね」
「も、もう……！そういえば、レインさんってどうしてそんなに《結社》にこだわるの？前に誰かを追いかけてるって言ってたけど……」
「そうですね……。それでは少しお話ししましょう。私はリベール出身ではなく、レミフェリアの出身です」
「え、レインさん、リベールの人じゃないんだ？」
「ええ、そうです。それはあまり関係ありませんが、私は数年前に外国で起きた『事件』で今私の捜している人物と出会いました。その事件は一応解決されましたが、根本的な解決と遂げることはできませんでした。私はその事件を根本的に解決するため、事件に関わっていると考えたその人物を捜しているのです」
「その事件にも《結社》が関わっていたの？」
「いえ、事件自体に《結社》は関わっていませんでした。ただ、《結社》のその人物が事件解決途中に見受けられたものですから……」
「そうなんだ……。でも、そんな大規模な事件があったっけ？」
「事が事なのであまり世に知らされていない事件ですから知らなくても無理はないですよ。いずれにせよ、今回のこととは無関係ですから、気にしないでください」

「……お待たせしました。まもなく本船はツァイス市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」

第8章　荒ぶる大地（4）

―ツァイス市　発着場

「さてと、何はともあれツァイス支部に行くとしますか。キリカさんに挨拶しなくちゃ」

「ほう、名前からすると東方系の女性のようだね。どのようなご婦人なんだい？」

「また始まったか……」

「ま、並のタマじゃねえ女さ。シェラザード以上の女傑だから火傷したくなけりゃ手を出すなよ。つーか、とばっちりを食らいたくねえから止めてくれ」

「フッ、それを聞いたらますます興味が湧いてきたよ。それじゃあさっそくギルドに……」

オリビエがギルドに向かおうとした時、

「おおっ……！？」

いきなり地面が揺れ出した。

「こ、これはひょっとしてそのキリカさんの怒りなのか！？」

「そ、そんなわけあるか～！」

「地震……みたいですね」

「……」

「た、助けてー！」

「お、落ちてしまうわ！」

飛行船の乗客が慌てふためいている。

「み、皆さん！どうか落ち着いてください！この発着場は、直下型の大地震にも耐えられるように設計されています！大した地震ではありません！どうかご安心を！」

飛行船受付のジラールが乗客たちに説明した。そうしている間に地震は止まった。

「と、止まった……」

「も、もう大丈夫だな……。さあ皆さん。慌てず騒がず受付までどうぞ」
「やれやれ……。地震とは久しぶりじゃの」
「えへへ、すごかったねぇ！」
受付のジラールが乗客を案内した。
「はあ……ビックリしちゃった。それほど大きくなかったけどこんな不安定な場所で揺れるのは勘弁して欲しかったわね」
「ふふ、そうですね。それにしても、リベールで地震なんて珍しいですね……」
「私が知る限り、リベール王国が位置するところは地震が多発する場所ではないはずです。かなり珍しいですね」
「ほう、そうなのかい？」
「ああ……。滅多にあるもんじゃねえ。被害状況を確かめるためにもとっととギルドに向かうか」

―遊撃士協会ツァイス支部
「ふむ、中央工房では大した被害はなかったと……。市街も大した騒ぎにはなってないのでご安心を。ええ、その件についてはよろしくお願いします。それでは」
キリカが通信器を置いた。
「ふふ……。妙なタイミングで到着したわね」
キリカが振り向いた。
「よく来たわね。エステル、アガット。発着場ではさぞ驚いたでしょう？」
「あ、あはは……。お久しぶり、キリカさん」
「ったく、相変わらず見透かしてやがるな……。まあいい、よろしく頼むぜ」
「こちらこそ助かるわ。そちらの3人が姫殿下とオリビエさんとレ

インさんね。私はキリカ。ツァイス支部の受付を勤めている。以後、お見知りおきを」
「はい、こちらこそよろしくお願いします」
「よろしくお願いします」
「フッ、それにしても予想以上の佳人ぶりだ。このオリビエ、貴女のために即興の曲を奏でさせてもら……」
「ジャンによれば、貴方たちは正式な協力員になったそうね？協力員は、遊撃士と同じように上の休憩所を自由に利用できるわ。待ち合わせに使うといいでしょう」
「はい、わかりました」
「ありがとうございます」
「えーと、即興の曲を……」
「リュートを奏でたいなら上の休憩所で、どうぞご自由に。ただし、常識の範囲内でお願いするわ」
「シクシク……分かりました」
「（シェラ姉より確かに容赦がないかも……）」
「はあ、とりあえず……。溜まっている仕事の状況を早速、教えてもらえるか」
「掲示板の仕事は溜まっているけど、今のところ緊急の仕事はないわ。貴方たちのやりやすいように片付けてくれて結構だけど……。……」
キリカが突然口を閉じた。
「？？？どうしたの、キリカさん？」
「これは通常の依頼ではなくギルドからの要請なのだけど……。貴方たちを、《結社》の調査班と見込んで調べて欲しいことがあるの」
「なに……？」
「い、いきなり直球で来たわね」
「あの……どういう事なんでしょうか？」
「調べて欲しいのは他でもない。先ほど起こった『地震』についてよ」

「地震について調べる？それって被害がどの程度かみんなに聞いて回るってこと？」
「それもあるのだけれど……。実は3日ほど前、ヴォルフ砦で同じように地震が発生したらしいの。時間でいうと10秒くらい。特に被害はなかったらしいわ」
「なるほど……。さっきの地震と似ているな」
「ただ、奇妙なことが1つ。ヴォルフ砦で地震が起きた時、ツァイス市は全く揺れなかった」
「え……」
「それは妙ですね。地図で見るとヴォルフ砦とツァイス市はそれほど離れていないはずです。ヴォルフ砦で地震が起こればこちらにも揺れは来るはずなのに……」
「ごく小さなものだったから気付かなかったのかもしれない。ただ、そうね……虫の知らせというのかしら。何となく嫌な感じがするのよ」
「言いたいことは分かるかも……。幽霊騒ぎもそうだったけど変な現象はあたしも気になるわ」
「いいだろう、引き受けた。ツァイス市とヴォルフ砦の双方で聞き込みをした方が良さそうだな」
「よろしくお願いするわ。ただし、市内についてはマードック工房長にお願いして情報を集めてもらっているの。そちらが期待できるから省いてしまっても構わないわ」
「なるほど……。最低限、ヴォルフ砦で聞き込みをすればいいのね？」
「まあ、気になる程度だから緊急性はないと思ってちょうだい。掲示板の依頼をこなしながらゆっくり進めてくれても構わない。それに……挨拶したい人たちもいるでしょう？」
「あ……うん。新しい《ゴスペル》の件もあるし博士とティータに会わなくちゃ」
「そうですね……。その方がいいと思います」

「フッ、ギルドの仕事をするのは挨拶をしてからということだね、では、ティータ君と再会するためいざ出発するとしようかっ」
「なんでてめぇがいきなり仕切ってやがる……。まあいい、ラッセル工房に行くぞ」
エステルたちはラッセル工房に向かった。

第8章　荒ぶる大地（5）

―ラッセル工房　リビング
「さてと……。博士とティータはいるかしら・」
「もしかしたら中央工房に行ってるかもしれねぇな」
エステルたちが玄関で話をしていると、
「おじいちゃ～ん。2階のお片付けは終わったよ」
「おう、すまんな。それじゃあ、そっちの部品の整理をしてくれんか？」
「は～い」
隣の部屋から声が聞こえてきた。
「ふふっ、2人とも研究所の方にいるみたいね」
「ああ、行ってみるか」

―ラッセル工房　研究所
「んしょ、んしょ……」
ティータが棚の整理をしてた。
「よう、邪魔するぜ」
「あ、アガットさん！えへへ、いらっしゃい。今日はどうしたんですか」
「なんじゃ。来たのか、不良青年」
「来ちゃ悪いかよ。しかし、相変わらずゴチャゴチャした工房だな。どうせさっきの地震で部品の山が崩れたんだろう？」
「えへへ……よく分かりましたね……」
「2人とも、お久しぶり」
「あ……」
遅れてエステルたちが入ってきた。

「えへへ……。ご無沙汰してゴメンナサイ」
「おお、エステル……」
「お、お姉ちゃん……。エステルお姉ちゃんっ！」
「わわっ、ティータ？」
ティータがエステルにしがみついた。
「エステルお姉ちゃん……。よかった……本物のお姉ちゃんだよぅ……」
「な、なによ本物って……」
「だってだって……。ヨシュアお兄ちゃんがいなくなっちゃったって聞いて……。エステルお姉ちゃんまで外国のどこかに行ったって聞いて……。このまま会えなかったらどうしようって、わたし……ずっと不安だったの……」
「そっか……。ごめんね……挨拶もしないで遠くに行って」
「確か、レマン自治州にある訓練場に行っておったそうだな。いつ帰国したんじゃ？」
「帰ってきたのは少し前かな。今までルーアンで仕事をしててツァイスに到着したばかりなのよ」
「そうじゃったか。おや、お前さんがたは……」
ラッセル博士がクローゼたちに目を向けた。
「お久しぶりです。博士、ティータちゃん」
「フッ、お邪魔させてもらうよ」
「私の場合は初めましてかな。レインと申します」
「クローゼさん……。それにオリビエさん……。えとえと、初めまして……レインさん」
「3人とも、あたしたちの調査に協力してくれてるの。ルーアン地方で色々あってね」
「ふむ、そうか……。こんな所で立ち話もなんじゃ。居間の方に移るとするか」

―ラッセル工房　リビング
「クーデターの黒幕どもがすでに活動を始めていたか……。しかも再び《ゴスペル》を持ち出してきたとはのう……」
「空間投影装置が生み出した映像を遠く離れた座標に転送する……。そ、そんなことどうやったら可能なんだろ……」
ティータが驚いている。
「空間投影装置そのものは決して不可能じゃないはずじゃ。ワシもいずれは造ってみようと思ったからな。じゃが、生み出された映像を遠くの座標に転送するのは……。ううむ……さっぱりカラクリが判らんわい」
「敵の男は《新型ゴスペル》の実験をしてたって言ってたのよね。確かに、一回り大きかったし導力停止現象は起きなかったけど……」
「そういえば、クーデターの時に使われていた《ゴスペル》はどうなんだ？ちったあ何か判ったのかよ？」
アガットが以前、工房で《ゴスペル》の実験したときのことを尋ねた。
「むう……それがな。解析を進めれば進めるほど奇妙なことが分かってきてな……」
「奇妙なこと？」
「うむ、結論から言うとな……あの《ゴスペル》そのものに『導力停止現象』を起こす機能があるとは思えなくなってきたんじゃ」
「へ……？」
「で、でも……。実際に、あの黒いオーブメントが導力停止現象を起こしたのですよね？」
「うむ、あくまで表面的には。じゃが、先ほど言ったように内部の結晶回路を解析してもそんな事ができるとは思えんのです。『導力場の歪み』らしきものを発生させるのは確かなんじゃが……」
「『導力場の歪み』……」
「えと、『導力場』というのは導力エネルギーの周囲に形成される

干渉フィールドのことを言います。大抵は、一定の法則で力線が描かれるんですけど……。おじいちゃんが解析した結果、《ゴスペル》が生み出す導力場はこの法則から外れているらしくて……」

「むむ、ちょっと話が専門的になってきたかな」

オリビエもよく判らないらしい。

「あたしもチンプンカンプン……」

「ふむ、つまり《ゴスペル》は一般のオーブメントと違い、特殊な力を持っているということですね？」

「ありていに言うとそうじゃな。じゃが、導力場というのはあくまでも一定の時空間における導力エネルギーの在り方にすぎん。方向性が与えられない限り、『導力停止現象』のような具体的な作用が起こるはずがない……。正直、困り果てていたんじゃがルーアンでの事件を聞いて新たな可能性が開けたかもしれん。知らせてくれて礼を言うぞ」

「あはは……。どこがどう役に立ったのかいまいちピンとこないけど」

「敵が使っていた投影装置は王国軍が調査しているはずだ。興味があるなら連絡してみろや」

「うむ……そうさせてもらおうかの。そういえば、お前さんたちはこれからどうするつもりじゃ？しばらくツァイスで仕事をするつもりなのか？」

「あ、それなんだけど……」

エステルたちはギルドの要請で、地震について調査することになった経緯を説明した。

「ほう……。先ほどの地震についてか。確かにリベールで地震が起きることは滅多にない。しかも3日前に、ヴォルフ砦で同様の地震が起こっていたのか……」

「3日前……。うーん、ツァイスの市内は揺れたりしなかったと思うよ。確かにちょっとヘンかも……」

「自然現象だし《結社》が関係してるか判らないけど……。調べる

だけは調べてみるわ」
「ふむ、地震か……。ひょっとしたらアレが使えるかもしれんな」
「え……」
「ま～たケッタイな発明を持ち出すつもりかよ？」
アガットが渋い顔をした。
「うむ、数年前に造ったある装置があるんじゃが……。あれにトランスミッターを付けて《カペル》に解析させられれば……。ふむふむ……イケるかもしれんの！」
ラッセル博士が1人頷いてる。
「もう、博士ったら1人で納得しないでよ～」
「いや、お前さんたちの調査に協力してやろうと思ってな。お前さんたちはヴォルフ砦に調査に向かうがいい。その間に『良い物』を用意しよう」
「そ、それは助かるけど……。『良い物』って一体何なの？」
「むふふ。それは後のお楽しみじゃ。それではさっそく中央工房に行こうかの。ティータも手伝ってくれんか？」
「あ、うん……。ごめんなさい。お姉ちゃん、アガットさん。せっかく久しぶりに会えたのに……」
「あはは、いいって。とりあえずティータの顔を見れただけでも嬉しかったしね」
「エステルお姉ちゃん……」
「ま、しばらくツァイスを拠点に仕事をするだろうからな。ゆっくりできる機会はあるだろ」
「エヘヘ、そうですよね。あのあの、みなさんもお構いできなくてごめんなさい」
「ふふ、とんでもないです」
「お仕事、頑張ってください」
「フッ、機会があったらまた寄らせてもらうよ。その時はぜひともボクのことをお兄ちゃんと……」
「だ～から、アンタはやめい！」

「あ、あはは……それじゃあ、またあとで！」
「準備ができしだい、ギルドに連絡するからの！」
ラッセル博士とティータは中央工房に向かっていった。
「うーん……相変わらずな2人ねぇ」
「しかし、あの年頃から機械いじりとはな……。微妙に先行きが不安になるぜ」
「うーん、確かにもうちょっと子供らしくていい年頃かもね。でも、ティータに限って心配する必要はないんじゃない？」
「ふん……。本当ならあいつの両親が心配すべきなんだろうが。外国にいるってことなら仕方ねぇ。今度、機会があったら爺さんにでも注意しとくか」
「おや、アガット君。ずいぶんお兄ちゃん的な発言をしてくれるじゃないか？」
「は……？」
「もしくはパパ的発言か……。フフ、世の男どもが聞いたらさぞや羨ましがれるだろうね」
「よくわからんが……。ひょっとしてケンカ売ってるか？」
「いやぁ、とんでもない。ただ、あんな子に慕われて2人ともうらやましいなぁって」
「ふふ、オリビエさんの気持ちもちょっと判ります。私もティータちゃんともっと仲良しになりたいな」
「もう、クローゼまで……。心配しなくてもオリビエ以外ならすぐに仲良しになれるわよ」
「エステル君、ヒドイッ！」
「ったく……付き合いきれねえぜ。まあいい、さっさとギルドの仕事を始めるぞ」
「うん、そうね。他の仕事をこなしながらヴォルフ砦に調査に行きましょ！」

第8章　荒ぶる大地（6）

―ヴォルフ砦

「ヴォルフ砦か……。カルバードとの国境なのに相変わらずのどかな場所ねぇ」

「リベール王国とカルバード共和国は切迫した状況を起こしたことはありませんからね」

「同じ国境ゲートでもハーケン門とは大違いだねぇ。フッ、さすがボクの祖国（エレボニア）と違ってリベールの友好国だけはある」

「ったく……。なに他人事みたいに言ってやがる」

「共和国と友好関係にあるからというのもあると思いますけど……。この先は、峠道になっていて軍隊が通りにくくなっているんです。門としての規模が小さいのはそのあたりが理由かもしれません」

「なるほど、広い街道に面したハーケン門とは違うわけだね」

「ふむ、納得です」

「ま、だからといってニワトリがうろついているのはどうかと思うけどな。まあいい、さっそく『地震』の聞き込みをしてみるぞ。まずは守備隊長に挨拶だ」

「うん、了解！」

「おや、君たちは遊撃士だな。ギルドから連絡があったよ。『地震』の調査に来たんだろう？」

どうやらベイス隊長はキリカからの連絡を受けていたようだ。

「うん、そうだけど……。ほんと、キリカさんって根回しがいいわねぇ」

「はは、彼女にはいつも色々と世話になっているよ。君たちの調査にも、できるだけ協力させてもらうつもりだ」

「助かるぜ。まずは地震の発生状況を詳しく聞かせてもらおうか」
「そうだな……。地震が発生したのは3日前の午後5時くらいだ。大した揺れではなかったし、10秒ほどの短い時間だったが……。地震など滅多に起こらないから部下たちも動揺していたようだ。そしてその夜――レイストン要塞に定時連絡をした時、ようやく奇妙な事実が判明したんだ」
「他の場所では、地震など起こっていなかったのですね？」
「ああ、その通りだよ。レイストン要塞はもちろん、セントハイム門も揺れなかった。ツァイス市とエルモ村にも問い合わせたが結果は同じだった」
「なるほど……。ちなみに今日、ツァイス市でも地震があったことは知ってる？」
「ああ、そうらしいな。だが今回は、こちらの方はまったく揺れなかったと思うよ」
「極めて局地的にして場所を移動する地震現象か……。何とも不自然極まりないねぇ」
「地震の発生状況はわかった。それ以外に、何か気になる事件とか起こらなかったか？怪しいヤツを目撃したとかな」
「ふむ……大した報告は入っていないが。だが、ひょっとしたら部下たちに何か心当たりがあるのかもしれない。よかったら聞いてみるといい」
「お言葉に甘えさせてもらうわ。早速、兵士さんたちに話を聞かせてもらいましょ」

～ケルヴィン副長の話
「なんだ、遊撃士のものか」
「うん、そうよ。ちょっと調査に協力して欲しいのよね」
「構わないが……できれば手短に頼むぞ」

エステルたちは地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。
「地震というと……。3日前の地震のことか。ふむ、地震があった他は普通の1日だったと思うぞ。もし不審なことがあったらとっくに報告しているはずだ」
「そっか……」
「ふむ、どうやら空振りのようだね」
「ご用はそれだけかな？」
「ああ、もう十分だ。職務中に悪かったな」
「それはお互い様だろう。では、失礼させてもらう」

～兵士プラムの話
「ふわわ～っ……。ん、どうかしたのかい？」
「えっと……。遊撃士協会の者なんだけど」
「少しの間、調査に協力していただけませんか？」
「あ、いん、いいけど……」
エステルたちは3日前の地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。
「ああ、あの地震ね。寝てたらいきなり揺れたから副長にどやされたかと思ったんだ。でも、辺りを見回しても誰もいない……。あとで地震だってわかったけど最初は誰かのイタズラかと思ったね」
「それ、奇妙な出来事っていうよりあなたの勤務態度の問題なんじゃ……」
さっきのあくびといい、職務怠慢にも程がある。
「フッ、立ったまま寝られるとは大した特技だ。かくいうボクも、ソファに寝ころんだままフルコースを平らげることができるけどね」
「何の自慢にもならねぇな」
「そ、それ以外に何か気づいたことはありませんか？」

「……そうだなぁ。そういや、ヘニングのやつが変なことを聞いてきたけど……」
「変なこと？」
「地震があった前の日のことなんだけど……。同僚のヘニングが、誰かが門を通らなかったかって聞くんだ。通ってないって答えたらしきりに首をかしげてたんだけど……」
「どういう事なんでしょう？」
「気になる話ですね」
「何か心当たりがあるのかも。その兵士さんに話を聞いた方が良さそうね」

～兵士ヘニングの話
「なんだ、どうしたんだい？」
「遊撃士協会の者だ。３日前の地震についてちょいと聞きたいことがあってな」
「ああ、あれか……。かなりビビらされたよな。地震なんて初めてだったから何が起こったのか判らなかったし。で、何について聞きたいんだい？」
「うん、実はプラムさんから話を聞いたんだけど……」
門番のプラムから聞いた情報をヘニングに説明した。
「なんだ、その話か……。ああ、確かにあいつにそういう質問をしたけど」
「確か、『門を通過した人がいなかったか』という話でしたね」
「ああ。４日前……つまり地震があった日の前日か。見張りを終えて、休憩序に入る時、街道から奇妙な男が来るのを見たんだ」
「奇妙な男？」
「それ、ひょっとして仮面をつけた白づくめの男だったりしないかい？」

「か、仮面？いくらなんでもそこまで怪しいヤツじゃなかったけど。黒いスーツを着たかなり背の高い男でさ。黒い眼鏡をしてたんだ」
「黒い眼鏡……。それって、フレームが黒かったっていう意味？」
「いや、そうじゃなくてさ。ガラスの部分が真っ黒な色をしてたんだよ」
「そ、それじゃあ前が見えないんじゃない？」
「そいつは多分、サングラスってヤツだな。強い日光を避けるためのものらしい。ちなみに前はちゃんと見えるらしいぞ」
「ボクも知っているがあまり見かけたことはないねぇ。帝都の暗黒街のボスが付けていたのを見かけたくらいかな」
マフィアのたしなみ品といったものかもしれない。
「ちょ、ちょっと物騒な雰囲気ねぇ。ていうかアンタ、どうしてそんな危険人物を知ってるのよ？」
「フッ……蛇の道は蛇と言うやつだよ」
「まあ、今は関係ないでしょう。話を続けましょう」
「ふーん、あの黒い眼鏡、サングラスっていうのか。とにかく、この休憩所に入る時、そいつが街道から来るのを見てさ。ここを通る旅行者は大抵、この酒場を利用するから後から入ってくると思ったんだ」
「ですが……現れなかったんですね？」
「ああ、その通りさ。プラムのヤツに聞いてみたけど誰も通ってないって言うし……。あいつ、居眠りばかりしてるけどさすがにゲートを素通りさせるほどマヌケなヤツじゃないからなぁ」
「フム、ならば兵舎の方に用があっただけかもしれないよ？隊長さんに話があったとかね」
「俺も気になったから隊長と副隊長に聞いてみたよ。そしたら、その時間帯には誰も訪れなかったみたいだし。それじゃあ、俺が見たあの男はいったい何しにここに来たんだ？そんな事を考えてると何だか頭が混乱しちゃってね」
「うーん、確かに怪しいヤツね。これはキリカさんに報告しといた

ほうがいいかも」
「ああ……その方が良さそうだな。情報提供、感謝するぜ」
「いやいや。話を聞いてもらえてこちらもスッキリしたよ」

～ルンファの話
「やあ、ようこそ。何の変哲もない酒場へ」
「あの～、ちょっといい？」
「はい、なんでしょう？」
「えっと、あたしたち遊撃士協会の者なんだけど。ちょっとだけ調査に協力してほしいのよね」
「ええ、構いませんよ。どうせお客はゼロですから」
さらりと悲しいことを言うルンファ。エステルは構わず地震の前後に、何か奇妙な出来事がなかったか尋ねてみた。
「いや～、地震のことしか思い出せないですね～～。グラッと来た瞬間にみんなビックリしちゃってねぇ」
「地震の前後に何か気になる出来事がありませんでしたか？」
「うーん、特に変わったことは無かったと思いますよ。いえ、なにしろわたしはずっと店の中にいるもんでね」
「あ、それはそっか」
「……どうやら何もご覧になってないようですね」
「お役に立てず申しわけない」
「ううん、気にしないで。じゃ、ご協力ありがと」
これで、ヴォルフ砦の人たち全てに対して聞き込みは完了した。

―ヴォルフ砦　兵舎
「やあ、君たち。部下たちから何か聞けたかい？」

「うん、実は……」
エステルたちはサングラスをかけた男が目撃されていたという情報を伝えた。
「ふーむ、ヘニングのやつ、そんな男を見かけていたのか。地震と関係あるかどうかは分からないが、確かに怪しい男だ。一応、私の方からもレイストン要塞に報告しておこう」
「ああ、よろしく頼むぜ。さてと……ここでの調査はこんな所か。一旦ツァイスに帰ってキリカに報告しちまうぞ」
「うん、了解」
エステルたちはツァイス市に向かった。

第8章　荒ぶる大地（7）

―トラット平原

エステルたちがヴォルフ砦を出た途端、

「おーい、君たち！」

ペイス隊長がエステルたちに声をかけた。

「よかった、間に合ったようだね」

「あれ、隊長さん？」

「どうなさったんですか？」

「実は、先ほどの話をレイストン要塞に連絡したんだが意外な情報を聞かされてね。君たちにも知らせねばと思ったんだ」

「意外な情報……？」

「俺たちに知らせるってことは、まさか……」

「地震関連の情報ですか？」

「ああ……」

「つい今しがた、セントハイム門で局地的な地震が発生したらしい」

「あ、あんですって～！？」

報せを聞いたエステルたちは至急、セントハイム門に直行した。

―セントハイム門

「まったく……遊撃士というのは訳が判らんな。見ての通り、地震の後片付けでみな忙しくしているのだ。調査なら後にしてもらえないか」

エステルたちはセントハイム門に着いた後、隊長に調査の許可をもらおうとしたが、嫌な顔をされた。

「悪いが、こちらも仕事でな。片付けの邪魔はしねぇから聞き込みを許可してもらえねぇか？」

「ふう、司令部からの指示がなければ断っているところだが……。私は急ぎの仕事があるので地震の発生状況についてはタルバウト副長から聞きたまえ。すぐそこの部屋の奥にある倉庫で片付けをしているはずだ」
「了解、タルバウト副長ね」
「他の者の後片付けの邪魔はできるだけしないでくれたまえ。それでは私は失礼する」
デイル隊長は去っていった。
「ふう、何だか大変そうね。あたしたちも片付けの手伝いをした方がいいのかしら？」
「余計なおせっかいは止めておけ。曲がりなりにも軍事施設だ。機密書類なんかもあるかもしれん」
「うーん、それもそっか」
「それにしても被害状況がツァイス市の地震と違いますね。あの時は、こんなに物が散乱してませんでしたけど……」
「ふむ、そのあたりの違いは確認した方がいいかもしれないね。あとは怪しい人物の目撃情報かな」
「例のサングラス男ですね」
「まずは副長っていう人に詳しい事情を聞いてみましょ」

～タルバウト副長
「やれやれ……。全部片付けるのは一苦労ですね。夕方までには終わらせないと……」
「えっと……。お忙しいところ失礼します」
「おや、あなた方は……」
エステルたちは遊撃士であることを名乗ってから、地震の調査に来たことを説明した。
「そうですか、ご苦労さまです。地震の発生状況をお知りになりた

いんですか？」
「ああ、詳しく頼むぜ」
「承知しました。地震は昼の1時ごろ……たいだい2時間前に起きました。積み上げた木箱が崩れるくらいの大きい揺れで３０秒ほど続いていましたね」
「あれ、それじゃあヴォルフ砦の地震と比べると……揺れの強さが強いし、揺れの時間も長いんじゃない？」
「そうですね……。揺れの強さも大きいし、時間も長くなっています」
「そして俺たちも出くわしたツァイス市の地震だが……。強さにしても時間にしてもその中間くらいだったはずだ」
「つまり、この局地的な地震は回を増すごとに危険になっている。そう言えるのかもしれないね」
「となると、次が起きた場合、かなり危険なことになりますね」
「た、大変じゃない！」
「確かに由々しき事態ですね……。しかし、自然現象である以上防ぐ手だてもなさそうですし……。遊撃士協会には何か対策がおありなんですか？」
「うーん、確信はないけどちょっと心当たりがあってね。ところで地震の前後に奇妙な出来事が起こらなかった？不審人物が目撃されたとか」
「不審人物……。確か昨日、チェスリー君が奇妙な男を見たと言っていましたね。屋上で片付けをしていますから詳しく聞いてみるといいでしょう」
「わかった。屋上にいるチェスリーだな」
「協力、どうもありがとう」
「いえいえ。お役目ご苦労さまです」
エステルたちは屋上に向かった。

―セントハイム門　屋上
「あれ……君たちは？」
屋上で片付けをしていた兵士チェスリーに声をかけた。
「あなたがチェスリーさんね」
「遊撃士協会のモンだ。さっきの地震について聞きたいことがあるんだが」
エステルたちは、チェスリーが見かけたという怪しい人物について尋ねた。
「ああ、昨日の話か。うーん、さすがに地震とは関係ないと思うんだけど……。ここで、黒い眼鏡をかけたやたらと背の高い男を見かけたんだ」
「やっぱりか……」
「ヴォルフ砦でも目撃されたサングラスの男性ですね……。その方、何をなさっていたんですか？」
「いや、ここに登ってきてしばらく景色を眺めていってから下に降りていっちゃったよ。黒い眼鏡なんて見たことないからすごく気になっちゃったけど……。向こうも話しかけてこなかったし声をかける機会を無くしちゃってさ」
「そっか……。他に、その黒眼鏡の男を見かけた人っていないのかな？」
「それが変なんだよな。あまりに変わったヤツだったんで夕食の時に話題に出したんだけど……。他のみんなは、そんなヤツ、見かけなったとか言うんだよ。唯一、食堂で働いているタミィって娘が見たらしいけど」
「ふむ、ヴォルフ砦と違って、この関所は人通りも多そうだ。それにも関わらず目撃者はたったの2人だけ……。少し不自然なものを感じるね」
「念のため、その娘にも話を聞いてみることにするか。食堂にいるタミィだったな」

「ありがと、助かったわ」
「お役に立てて何よりだ。調査、頑張ってくれよ」

―セントハイム門　食堂
「は～、ようやく片づいたわ。あら……？」
「あんたがタミィだな？遊撃士協会のモンだ」
「実はちょっと聞きたいことがあるんだけど……」
タミィが目撃したというサングラスの男について尋ねた。
「ああ、あの人ね！昨日の休憩時間に2階の廊下ですれ違ったの。多分、屋上から戻ってきた帰りなんだと思うんだけど……」
「兵士君の証言と一致するね。それでキミ、すれ違っただけで言葉は交わさなかったのかい？」
「一応、挨拶はしたわよ。そしたらその人、ニヤリと笑って『よお』って一言返事をしたの。それがまたワイルドな感じでしびれちゃったのよね～」
「ワイルドっていうと……このアガットみたいな感じ？」
「なんだそりゃ……」
「うーん、そこのお兄さんより背は高かったと思うわ。着ていた服は黒いスーツだけど胸元を開けて着こなしていたのよね。あと、両方の手に黒いグローブを填めていたかも」
「サングラスに、黒いスーツ。そして黒いグローブときたか。メチャクチャ怪しいわねぇ」
「怪しいっていうか、獰猛で危険な薫りのする人だったわ。うふ、危ない魅力っていうやつ？」
「そ、それはともかく……。すれ違っただけで後は見かけてないわけね？」
「ええ、その通りよ。追いかけてお近づきになろうとしたんだけど……変な場所で見失っちゃってね」

「変な場所……？」
「うーん。見てもらった方が早いわね。ねえ、サンジットさん。ちょっと外に出てもいい・」
「ま～、仕方ねぇやな。仕込みまでには戻ってこいよ～」
エステルたちはタミィに案内してもらった。

―セントハイム門　2階廊下
「ちょうどここでその人とすれ違ったのよね。で、その人はそのまま向こうに歩いて行って……。あたしは彼に話しかけるべく廊下を引き返したわけなのよ」
「ふむふむ……」
タミィは廊下を引き返していった。
「そして角を曲がったところでそこの扉が閉まるのを見かけたの。だからあたし、てっきり彼がここから外に出たと思ったのよね。『話しかけるチャンス！』とその後を追いかけたんだけど……」
タミィは扉を出た。
「いざ外に出てみると彼の姿がどこにもなくてね。つまり、この場所で見失っちゃったってわけなのよ」
「み、見失ったって……」
そこはセントハイム門の門壁の行き止まりだった。
「ここ、行き止まりですよね？」
「うん、まさかこの高さから飛び降りたとも思えないし。多分、こっちに来たっていうのはあたしの勘違いだったと思うわ。結局、他の場所を探したけど彼の姿は見つからなくってね。ちょっぴりブルーだったわ」
「フッ、可哀想な仔猫ちゃんだ。よかったらボクがそんな男のことは忘れさせて……」
「えーい、混ぜっ返すなっ！」

「なるほど……。だいたい状況は掴めたぜ。すまねぇな、助かった」
「ふふ、どういたしまして。それであの人……やっぱりお尋ね者なのかしら？遊撃士協会に追われる凄腕で冷血の暗殺者とか？」
「そ、それは判らないけど……注意すべき人物なのは確かね。もし、見かけたとしても近寄らない方がいいと思うわよ」
「うーん。カッコイイけど仕方ないか。あたしは仕込があるからこれで失礼しちゃうわ。頑張ってね、遊撃士さんたち！」
タミィは食堂に戻っていった。
「『この高さから飛び降りたとも思えない』……。……エステルさん。誰かを思い出しませんか？」
クローゼがエステルに言った。
「うん……」
エステルの頭にグランセル城女王宮でのことが思い浮かんだ。
「女王宮から飛び降りた銀髪男――ロランス少尉ね。確かに、あいつと同じレベルならここから飛び降りても平気かも……」
「ああ……。これでサングラス野郎の正体は決まったと考えてもいいだろう」
「怪盗に続く第2の《執行者》――つまり、そういうことだね」
「ええ、おそらく間違いありませんね」
「ああ。ここでの調査は終了だ。ギルドに戻って報告をするぞ」
エステルたちは遊撃士協会に向かった。

第8章　荒ぶる大地（8）

―遊撃士協会ツァイス支部

「あれ……。どうしたの、2人とも？」

ギルドには珍しいことにラッセル博士とティータが来ていた。

「あっ……お姉ちゃん、アガットさん！」

「おお、ちょうどいい所に戻ってきたな」

「地震の調査を終わらせて戻ってきたところなんだが……。なんだよ、そのガラクタは」

受付には妙な機械が3台置かれていた。

「ガラクタとは失礼な。これが約束していた『良い物』じゃよ」

「まあ、その説明は追々してもらうとして……。セントハイム門の地震も一応調べてくれたみたいね。ヴォルフ砦の調査と合わせて報告してもらいましょうか」

キリカは先に地震の調査の報告を優先した。

「うん、それなんだけど……」

エステルたちはセントハイム門での調査結果について報告した。

「なるほど……。地震の規模が大きくなっとるか。思ったよりも事態は深刻じゃな」

「う、うん……。今度また、ツァイス市内であれ以上の地震が起こっちゃったら大変なことになっちゃう……」

「そして、両方の場所で目撃されたサングラスの男……。ツァイス市内で目撃されたのと同一人物みたいね」

「そっか……。やっぱり市内にも現れたんだ」

「ええ、マードック工房長が市内の情報を集めてくれたの。確かにその男が《結社》の人間である可能性は高そうね。こうなった以上、博士の実験に全面的に協力した方がいいでしょう」

「実験……。この装置を使うのか？」

「うむ、その通り。これはわしが数年前に開発した『七耀脈測定器』

でな。地面に設置することで『七耀脈』の流れをリアルタイムに感知・測定することができるのじゃ」
「えーと……。毎度ながら聞くんだけど……『七耀脈』ってナニ？」
エステルは『七耀脈』が何なのかが分からないようだ。
「『七耀脈』とは地下深くに存在する七耀石が採れる鉱脈のことです。この地脈は莫大なエネルギーを持っていて、大地を少しずつ動かしています」
「『地脈』、『霊脈』なんて表現されることもあるらしいね。東方では『龍脈』だったかな？」
「あら、よく知っているわね。東方では昔から、龍脈の集う場所に都が造られたという歴史があるわ。大地のエネルギーを国の力に取り込むという発想ね」
見かけによらず博識のオリビエであった。
「へ～、そうなんだ。ちょっと勉強になっちゃった」
「それで、その装置を使えば地震を止めることが出来るんでしょうか？」
「いや、流れを見るだけですから実際に地震を止めることは無理ですわい。じゃが、ゼムリア大陸の地震は七耀脈の流れが地層を歪めることで起きるものと言われてましてな。ですから、その流れを調べれば何かが解けるかもしれんのですわい」
「なるほど……。では、次に地震が起きるまでに準備をする必要があるわけですね」
「装置が3つあるってことは設置する場所も3箇所か？」
「うむ、地図を見てくれ」
ラッセル博士が地図を広げた。
「設置して欲しい場所はツァイス地方の3箇所になる。まずは、トラット平原のストーンサークルがある場所じゃ。次は、カルデア隧道中間地点。ツァイスから歩いて最初の橋付近。最後に、レイストン要塞前じゃ」
ラッセル博士が地図の3箇所に印をつけた。

「――以上の3箇所に装置を設置してもらいたい」
「うん……。だいたい手順は判ったわ。ところで、測定器の設置ってただ置くだけでもいいわけ？」
「いや、そう単純ではない。測定用の検査針を正しい角度で地面に差し込む必要があるし、アンテナの設定も必要じゃ」
「アンテナというのは導力通信用の装置のことだね。すると、測定した情報をどこかに送るというわけなのかい？」
「ほう、なかなか鋭いのう。外付けのアンテナで、測定数値を演算オーブメントの《カペル》に届けて七耀脈の動きを分析させるのじゃ。3箇所のポイントの情報をリアルタイムに分析できるのでかなり正確なことが判るはずじゃよ」
「うーん、なんだか凄そうな実験ね。それじゃあ、ラッセル博士も装置の設置についてくるわけ？」
「いや、わしは《カペル》の調整があるから手が空かなくてな。代わりにティータを連れて行ってくれ」
「えへへ……。よろしくお願いします」
「そっか。ティータなら百人力よね。……アガット。文句言ったりしないわよね？」
あらかじめ釘を刺そうとするエステル。
「仕方ねぇな……。ただあんまり機械いじりに夢中になりすぎるんじゃねえぞ。ほっといたら、魔獣が現れても気付かずに熱中してそうだからな」
「ううっ……。アガットさんのいじわる……。でもでも、そうなってもきっと助けてくれますよね？」
「……ったく、甘ったれが」
「あはは。やっぱりアガットの負けね」
「それでは、わしはこれから《カペル》の入力調整を始める。全ての測定器を設置したら中央工房の演算室に来てくれ」
「うん、わかったわ！」
「おじいちゃんも頑張ってね」

ラッセル博士は中央工房に向かっていった。
「次の地震が起きるまでに全部設置しなくちゃね……。さっそく出発しますか！えっと、測定器を設置するのは隧道の途中、平原の北外れ、レイストン要塞前の3箇所よね。うーん、どういう順番で設置していけばいいのかしら？」
「それは貴方たちに任せるわ。レイストン要塞には私の方から連絡しておく。ゲートの門番に事情を話せば設置を許可してくれるでしょう」
「うん、わかった」
「よし、そろそろ出発するか。ティータ。ちゃんと付いて来いよ」
「はいっ」
エステルたちは測定器の設置に向かった。

第8章　荒ぶる大地（9）

―トラット平原　ストーンサークル

「あ……」

エステルが声をあげたその先には、意味ありげな石柱が立っていた。

「『ストーンサークル』っていうから何かと思ったけど……。うーん、意味ありげな石柱ねぇ」

「この石柱のことは私も本で読んだことがあります。ゼムリア文明よりも前に造られたものらしいですけど……」

「ゼムリア文明……。古代に栄えた導力技術文明か」

「あの『四輪の塔』や城の地下にあった『封印区画』もそのゼムリア文明の産物なのよね？」

「ああ、そうらしい。確かに、そのあたりとは全く関係なさそうな代物だな」

「おじいちゃんが言うにはこの場所は七耀脈の流れが強く測定される場所らしいです。この石柱が建てられたのも何か宗教的な意味があるかもしれないって言ってました」

「なるほど、七耀脈の流れを調べるにはうってつけなわけね。でも、測定器を設置するとしたらどのあたりがいいのかしら？」

「うーん、そうだね……」

ティータは辺りを調べ始めた。

「地面もしっかりしてるし、遺跡の基盤もなさそう……。方位の確認も……ヨシ」

ティータはある一点を確認した。

「お姉ちゃん。ここで大丈夫だと思うよ。さっそく設置しちゃおうか？」

「うん、頼んだわ」

「それじゃあ設置作業を始めちゃうね。ちょっとだけ待ってて」

ティータは測定器を設置し始めた。

「うん、これでよしっと」
「へえ、組み立てるとこんな感じになるんだ。ところで……このお皿みたいなの、ナニ？」
エステルが測定器についている円盤状の物を指した。
「パラボラアンテナっていって導力波を集中するアンテナなの。強い導力波が送れるからかなりの距離まで届くし……。カルデア隧道みたいな場所でも届いちゃうって言ってたかな」
「あの、ティータちゃん。導力波は遮蔽物（しゃへいぶつ）があると弱まるって聞いたことがあるんですけど……。洞窟みたいな場所でもちゃんと届くのですか？」
クローゼが疑問を口にした。
「えっと、このアンテナは導力波に指向性を持たせて届けることができるんです。洞窟みたいな場所でも壁を反射させていくことで出口まで到達できるそーです」
「なるほど……。やっぱりラッセル博士は天才の名にふさわしいですね」
「うーん、いまいち凄さが理解できないんだけど……。一応これで、地震の情報を送れるようになったわけね？」
「あ、ううん。まだ起動してないから。今、スイッチを入れちゃうね……」
ティータがスイッチを入れようとした時、
「らあっ！」
アガットが魔獣――ヒツジンの気配に気付いて向かってきた魔獣を斬り伏せた。
「ふえっ！？」
「なっ！？」
「皆さん、気をつけてください。一匹だけではなさそうです！」

エステルたちが驚いているうちに、ヒツジンたちに囲まれてしまった。
「囲まれてしまいましたね……」
「どうやら装置の中の結晶回路が目当てらしいな。蹴散らすぞ！」

「はあ……何とか追い払ったか。うーん、見たこともない色のヒツジンだったけど……」
通常、ヒツジンは白色だが、今回のヒツジンは紫色と変わっていた。
「多分、エルナンが言ってた新種の魔獣だろうな」
「こ、恐かった～……」
「ティータちゃん、怪我はないですか？スリ傷とかあったら手当するから遠慮なく言ってくださいね」
「えへへ、大丈夫ですよー。みんなが守ってくれましたから。それよりも……早くスイッチを入れなくちゃ」
ティータは測定器のスイッチを入れた。
「ふう、起動完了です」
「お疲れ、ティータ。でも、さっきみたいな魔獣に装置が襲われたらどうしよう？」
「あ、それは心配しないで。一応、街道灯みたいに魔獣除けの機能はあるから」
「そっか、だったら安心ね」
「よし、この調子で残りの測定器も設置しちまうぞ」
「了解！」

第8章　荒ぶる大地（10）

―レイストン要塞

「レイストン要塞……。何だかすごく懐かしいわね」

エステルはレイストン要塞を前にして言った。

「えへへ……。わたしもそんな気がする。お姉ちゃんたちと別れた時は夜だったから印象が違うけど……」

「ま、前回が潜入なんていうロクでもない用事だったからな。その分、懐かしさが増すんだろ」

「そんな事があったんですか……。この難攻不落の要塞によく潜入することが出来ましたね」

「見たところ、侵入できそうな場所が見当たりませんね。よく潜入できたものですね」

「えへへ……。ちょっと裏技を使ってね。それよりも、さっそく測定器を設置しちゃおうか？」

「いや、まずは門番に設置許可を取った方がいいな。キリカが連絡したはずだから多分、すぐに話は通るだろ」

「うん、オッケー！」

エステルたちは許可をもらうために門番に話しかけた。

「ここは王国軍の本拠地、レイストン水上要塞だ。民間人の立ち入りは遠慮してもらっている。お引き取り願おうか」

「えっと、あたしたち遊撃士協会の人間なんだけど」

「おお、あんたたちがそうか。司令部から話は聞いている。何かの装置を設置するらしいな？」

「話が早くて助かるぜ。早速、設置したいんだが勝手にやっちまってもいいのか？」

「ああ、許可が出ているから好きなように設置するといい。ただ、舗装路の上には設置しないようにしてくれ。車両が通る時に困るからな」
「うん、わかったわ。それじゃあ、適当な場所を探しましょ」
「うん、そうだね」

「さてと、ティータ。どのあたりに設置しちゃう？」
「うん、ちょっと待ってて。うーん、舗装路以外で置ける場所っていったら……」
ティータが適当な設置場所を探し始めた。
「……近くに照明があるけどこれだけ離れていれば大丈夫かなぁ。ツァイスはあっちだから……。うん、方角も問題ナシ。看板の目の前になっちゃうけどこのあたりがいいと思うよ。さっそく測定器を設置しちゃう？」
「うん、お願い」
「それじゃあ、設置作業を始めるね。ちょっとだけ待ってて」
ティータが測定器を設置し始めた。

「うん、設置完了だよ」
「それじゃあ、後はスイッチを入れるだけね」
「うん、すぐに入れちゃうね」
ティータは測定器のスイッチを入れた。
「うん♪これで起動も終わりだよ」
「おう、ご苦労」
「おお、やっているようだな」
「へ……」
不意に男性の声が聞こえてきた。しかも聞き覚えのある声だった。
「父さん！？」

「オッサン……！」
エステルの父、カシウスだった。
「久しぶりだな、エステル。遅くなってしまったが強化訓練、ご苦労だったな」
「も～！ご苦労だったじゃないってば！なによ父さん。どうしてこんな所にいるの？」
「はは、これでも軍の一員だ。作戦本部の拠点もあるし、ここに詰めていることは多いぞ」
「そうだったんだ……」
「確か、作戦本部長に就任したそうじゃねえか」
「ああ、モルガン将軍に何度も何度も説得されてな……。最後は根負けという感じさ。おかげで休むヒマもない毎日だ」
「ヘッ、そりゃあ日頃の行いのせいだろ」
「あはは、ご愁傷さま。でも、父さんの軍服姿って最初は違和感あったけど……。あらためて見るとけっこう板についてるじゃない」
「フフン、あたり前だ。これでも昔は、王国軍きっての伊達男で鳴らしたくらいだったからな。リシャールなど目じゃなかったぞ」
「もう、すぐに調子に乗る。エヘヘ……でも良かった。忙しいって聞いたからちょっと心配だったんだけど思ったより元気そうじゃない？」
「ま、今のところはな。それよりも……ギルドからの報告書を読んだぞ。早速、ルーアンで現れたそうだな」
カシウスが何を言っているのかはすぐに判った。
「あ……うん。《身喰らう蛇》の手先ね」
「報告書の通り、予想以上にヤバイ連中だぜ。軍では対策を立てないのか？」
「うむ、早く情報部に代わる機関を立ち上げられればいいのだが……。ようやく正規軍と国境師団の再編成が終わったばかりでな。今のところ、調査に関してはギルドに頼らざるを得ない状況だ。今回の奇妙な地震についてもお前たちの調査をアテにしているぞ」

「ったく……。そんな事だろうと思ったぜ」
「ま、父さんに頼られるなんて滅多にあることじゃないしね。ここは親孝行をしてあげますか」
「フッ、言うようになったな。新しい服も似合っているし、少しは女っぷりも上がったようだ。ヨシュアが見たら驚くだろう」
「あ……。えへへ、そうだといいんだけど」
「カシウス准将！」
「あ……シード少佐！？」
やってきたのはシード少佐だった。
「こらまた久しぶりだな」
「はは、久しぶりだね。ラッセル博士の誘拐事件では君たちに色々と迷惑をかけた。いずれきちんとした形でお詫びしたいと思っていたんだ」
「あはは、いいってば。代わりに逃がしてくれたんだし」
「あのあの、助けてくれて本当にありがとうございました」
「そうか……。そう言ってもらえると助かるよ」
「ちなみにシードはクーデター鎮圧時での活躍でこの度、中佐に昇格したんだ。これからはシード中佐と呼ぶといい」
「じゅ、准将……」
「へ～、そうなんだ。おめでと、シード中佐！」
「おめでとーございます」
「はは、よかったじゃねえか。あんたみたいな人間は評価されてしかるべきだぜ」
「その……ありがとう。当り前の事をしただけだから少しばかり目映いんだがね」
「またまた～。ホント、謙虚なんだから」
「うむ、シードにはもう少し前に出ることを期待したいな。でないと、俺がいつまで経っても引退できなくて困る」
「お言葉ですが、あなたに簡単に引退されては困ります。少なくとも、モルガン将軍が退役なさった後にしてください」

「ふう、いつの日になることやら。そういえば、シード。俺に用事があるんじゃないのか？」
「はい、実はモルガン将軍が予定よりも早く到着なさるそうです。あと半刻ほどで発着場に到着するのではないかと」
「やれやれ……。あの方もせっかちだな。……そういうわけでこれからさっそく軍議がある。本当に済まんな、エステル」
「ううん、気にしないで。少しでも話せて嬉しかったわ」
「ああ、俺もさ。アガット。すまんがエステルを頼んだぞ。正遊撃士になったとはいえ、経験不足なのは確かだからな」
「ああ、任せとけ」
「ティータもずいぶんと頑張っているようじゃないか。不肖の姉貴分ですまないがよろしく手伝ってやってくれ」
「えへへ、わかりました。それと《ゴスペル》の解析のことなんですけど……思わぬヒントが見つかったっておじいちゃんがはしゃいでいました」
「そうか……。それは期待できそうだな。博士によろしく伝えてくれ」
「はいっ」
「姫殿下も、不肖の娘を手伝っていただいて感謝します。ただいずれ、ご自身の考えを周囲に説明した方がいいでしょう。陛下はともかく、ユリア大尉やモルガン将軍など気が気ではない様子でしたぞ」
「……はい。いずれきちんと説明して判っていただこうと思っています。私が私を見出すために必要な旅であるということを……」
「フフ、殿下ならば必ずや見出せるでしょう」
「ありがとう……。そう言って下さると心強いです」
「それと……」
「初めまして、カシウス・ブライトさんですね。あなたのご武勇はかねてより存じていますのでお会いできて光栄です。私はレインと申しまして、この度はエステルさんたちの協力員として共にさせて頂いています。本当はあなたと話したいことが多くあるのですが…

…」

「……。そうか……。こちらとしても話したいことはあるのだが……。また次の機会ですな。エステルのこと頼みましたよ」

「はい、任せてください」

「……さてと、それではな。なかなか直接、手助けはできんがギルドの手に負えないことがあればいつでも連絡してくるといい。できる限りの力になれるはずだ」

「うん、アテにさせてもらうわね。父さんもお仕事、頑張ってね！」

「ははは、モルガン将軍にどやされん程度にはやるさ。行くぞ、シード」

「はっ！」

カシウスとシード中佐がレイストン要塞に戻っていった。

「は～、思った以上に父さんたちも忙しそうね。こりゃあ、ギルドとしても負けてはいられないわね」

「ああ、そうだな。きっちり結果を出してオッサンの鼻を明かしてやるか。よし、これで2個目だな。ラスト1つ、設置しに行くぞ」

「オッケー！」

最後の1つの測定器を設置するため、カルデア隧道に向かった。

第8章　荒ぶる大地（11）

―カルデア隧道

「えっと……カルデア隧道途中にある最初の橋ってここでいいのよね？」

「うん、どちらかの岸に設置しちゃえばいいと思う。えと……」

ティータは辺りを見回した。

「こっちは回復装置があるからやめておいた方がいいかな。とすると……」

ティータが反対側の岸に移動した。

「えっと、アンテナをツァイス方面に向けるとしたら……。うん…大丈夫かな。お姉ちゃん。このあたりがいいと思うよ。さっそく測定器を設置しちゃう？」

「うん、お願いするわ」

「それじゃあ設置作業を始めちゃうね。ちょっとだけ待ってて」

ティータが測定器を設置し始めた。

「うん、これでよしっと」

「それじゃあ後はスイッチを入れるだけね」

「うん、ちょっと待ってて……」

ティータが起動スイッチを入れた。

「ふう、起動完了だよ」

「おう、ご苦労」

「あーっ！エステルちゃん！？」

「え……！？」

聞き覚えのある声が聞こえてきたと思うと、アネラスとシェラザードがやってきた。

「アネラスさん！それにシェラ姉も！」
「えへへ、久しぶりだね。こんな場所で再会できるなんて思ってもみなかったよ」
「ふふ、何の偶然かしらね。あら……そこにいるのはお姫様？」
「お久しぶりです。シェラザードさん。エステルさんのお手伝いをさせてもらうことになりました」
「そっか、ありがとう。エステルの力になってくれて」
「ふふ、とんでもないです」
「それと、そこの男の方は……」
「あ、レインさんっていって、ギルドの協力員として手伝ってもらっているの」
「初めまして。レインと申します」
「（あら、けっこうイイ男じゃない。どこで知り合ったの？）」
「（またそこでつっかかってくる……。うーん、最初に会ったのは王都だけど……）」
「？」
「ああ、ごめん。これからもエステルのこと頼んだわ」
「ええ、もちろんです」
「あのあの……。お久しぶりです、シェラさん」
「ハッ……」
アネラスが息を上げた。
「あらら。ティータちゃんも一緒だったのね。そういえば、キリカさんが地震の調査でラッセル博士の協力を仰いだって言ってたわね。それで手伝ってくれてるの？」
「えへへ、そうなんです」
「……」
「アネラスさん？どうしたの？ボーッとしちゃって」
「……だめ……もうガマンできない！」
「へ？」
アネラスはいきなりティータに抱きついた。

「ああん、カワイイ～！あまりにも可愛すぎて抱き締めずにはいられないよ～！」
「はわわっ！？」
「（そ、そういえば……。たしかアネラスさんって無類の可愛いもの好きだったっけ）」
「ティータちゃって言ったっけ？わたし、アネラス・エルフィード！アネラスお姉ちゃんって呼んでね！」
「ふ、ふぇえええ～……」
ティータはいきなり抱かれて困惑している
「あああああっ！ふにゃっとした顔も可愛すぎる～！シェラ先輩！お持ち帰りにしていいですか！？」
「気持ちは分かるけど我慢なさい。そこにいるお兄さんが恐いわよ」
そう言ってシェラザードがアガットを見た。
「……なんで俺に振りやがる」
「ところでシェラ姉。どうしてこんな場所にいるの？ひょっとしてあたしたちを捜してたとか？」
「いや、ただの偶然なのよ。ちょうど空賊団と特務兵の手がかりを追っている最中でね」
「え！？空賊と特務兵って……。逃亡している残党のこと？」
「確か、まだ王国軍も捕まえていなかったはずだな。何か手がかりを見つけたのかよ？」
「それがギルドに何件か目撃情報が入ってきてるんですよ。どれも信憑性（しんぴょうせい）は低そうなんですけど」
「一応、その中から気になる情報だけでも確かめようと各地を回っている最中ってわけ。それよりも……聞いたわよ。《身喰らう蛇》の手先がルーアン地方に現れたそうね」
「う、うん……。《怪盗紳士》とか名乗っている仮面をかぶった変なヤツだったわ」
「キテレツな格好はともかく、相当腕の立ちそうなヤツだった。まともにやり合ったらかなりヤバかったかもしれねぇ」

「むむ、アガット先輩にそこまで言わせるなんて……。《身喰らう蛇》――――かなり危険な組織みたいですね」
「危険というよりも得体が知れないと言った方が正しいかもしれないわね……。もし、あたしたちの力が必要なら遠慮なく言ってちょうだい。ギルドを通せばすぐに連絡がつくと思うから」
「うん、そうさせてもらうわね。シェラ姉たちこそ、何かあったらあたしたちにも連絡してよね。すぐに飛んでいくから」
「ふふ、アテにさせてもらうわよ。せっかく再会できたけどこんな場所で話すのも何だし……。あたしたちはここで失礼させてもらうわ」
「あ、うん……。残念だけどしょうがないよね」
「軽く見るわけじゃねえが、それでも女だけの2人旅だ。あまり無茶はするんじゃねえぞ」
「わわ、アガット先輩が気遣ってくれるなんて……。どういう風の吹き回しですか？」
「……ケンカ売ってんのか、コラ」
「えへへ……。冗談ですってば」
「ふふ、そうね。忠告は受け取っておくわ」
「アガット先輩、お元気で！エステルちゃん、ティータちゃん。今度会ったら一緒に遊びに行こうね！」
「うん、喜んで！」
「えとえと、さよーなら！」
シェラザードとアネラスは行ってしまった。
「は～、こんな所でシェラ姉たちに会えるとは思ってもみなかったな。ティータ、大丈夫だった？アネラスさんに思いっきり抱き締められてたけど……」
「えへへ、大丈夫だよ。……ちょっとだけビックリしちゃったけど……」
「あ～、悪い人じゃないからカンベンしてあげてね。それにしても空賊と特務兵の残党か……」

「どちらも《結社》らしき影が背後に見え隠れしていた連中だ。あいつらの頑張り次第では重要な手がかりに繋がるかもな」
「これは、あたしたちも負けてはいられないよね。とりあえず……この場所はもうＯＫよね？」
「ああ、これで全ての測定器を設置し終わったな。爺さんの待っている中央工房の演算室に向かうぞ」
「オッケー。中央工房の５階だったわね」
エステルたちは中央工房５階の演算室に向かった。

第8章　荒ぶる大地（12）

―中央工房5階　演算室

「ラッセル博士。1番の接続、成功しました」

トランス主任が接続の成功をラッセル博士に伝えた。

「そのようじゃな。さっそく情報が入ってきた。うむうむ……今のところ安定しておるようじゃ。そのまま2番、3番の接続を開始」

「了解しました」

ラッセル博士は測定器とカペルの接続を試行していた。

「やってるやってる」

「まったく……。相変わらずケッタイな部屋だぜ」

「おお……。エステル君、来たか」

「あ、マードック工房長」

「お久しぶり。生誕祭の時以来だったっけ」

「ああ、そうなるかな。色々あったそうだが……元気そうで何よりだよ」

「あはは……。ありがと、工房長さん。あたしたち、博士に頼まれて測定器を置いてきたんだけど……」

「ああ、そうらしいね。ちょうど、各地の測定器から情報が届き始めているらしいよ」

「それじゃあ《カペル》の調整の方も終わったんですね？」

「ああ、博士が専用のプログラムを走らせたばかりさ」

「2番、3番の接続にも成功です」

「おお、こちらも確認した。よしよし……どちらも安定しておる。これで1番から3番まで全ての情報が入ったな」

そこでようやくラッセル博士がエステルたちに目を向けた。

「おお、やっと戻ってきたか。見ての通り、お前さんたちのおかげで無事に情報が届いたわい。本当にご苦労じゃったのう」

「あはは、あたしたちは測定器の部品を運んだくらいよ」

「それに、この一件はこちらが頼んでいる事だからな。装置の起動まで全部やったあんたの孫をねぎらってやんな」
「い、いいんですよ～。大したことはしてないし……」
「いやいや。お前もよく頑張ったのう。トランスミッターの設定も完璧じゃ。ちゃんと情報が入ってきておるぞ」
「えへへ、よかった。それじゃあ、準備はぜんぶ終わっちゃったの？わたし、手伝うことないかな？」
「いや、これで準備は完了じゃ。七耀脈の流れに乱れが起きたら≪カペル≫が自動的に解析を始めるようにプログラムしておる。あとは、どこかの場所で地震が起きるのを待つだけじゃよ」
「そっか……。一応、一段落ついたわけね。でも、どこかで地震が起きるのをただ待つのも落ち着かないかも」
「確かにそうですね。もしかしたら、ツァイスで再び地震が起きるかもしれませんし」
「そうなった場合の対策は何か立てているのですか？中央工房は機械設備が多くありますし」
「一応、転倒しそうな装置は固定するようにしておいたよ。ただ、それでも前回以上に大きな地震が起こったら厳しいな。設備のダメージは避けられないだろう」
「その意味では、ここにある≪カペル≫なんかも同じじゃ。揺れで誤作動を起こしたら実験が失敗に終わる可能性が高い。みんな、女神に祈っておいてくれ」
「はあ……。ちょっと不安になってきたわ」
「ふふ、最新技術でも神頼みは大切なんですね」
「えへへ、技術者のヒトって意外と信心深いんですよ。わたしも難しい作業の時にはよく女神さまにお祈りするし……」
「確かにそれはあるかもしれんね。私なんて、初の導力飛行船を博士が開発していた時なんか1日に3回は教会に行ってたよ」
「なんじゃ、失礼な奴じゃのー」
「39回も実験が失敗したらそうしたくなるのも当然です」

「あはは……。昔からそんな感じなんだ」
「うん……そーみたい」
「しかし、そういう事ならどこかで時間を潰すとするか。一旦、ギルドに戻って報告しとくのもいいだろう」
「おお、そうするがいい。何か動きがあったらすぐにでもギルドに連絡……」
その時、ラッセル博士のプログラムが情報を急速に処理し始めた。
「え……」
「ひょ、ひょっとして……」
「どこかで地震が起こったのですか！？」
「……ギルドに戻る必要はなくなったようじゃのう」
「1番から3番までの全ての測定器に変化あり！地下の七耀脈の動きが活発になっているようです！」
「うむ、そのままモニターを続けるがいい。通信が遮断した時には報告」
「了解しました！」
「3地点からの情報をリアルタイムに解析開始……。現時点での最大の地震波収束地点を検索……。座標【12、73、378．02】。ほほう……そうきたか」
ラッセル博士がカペルを操作した。
「ど、どうしたの？」
「今現在、地震が発生している場所が分かった。レイストン要塞じゃ」
「！！！」
「なんだと！？」

―同時刻　レイストン要塞　中庭
「な、なんだ！？」

「敵の爆撃!?」
演習中の兵士たちが地震で慌てふためいている。
「お、落ち着け!ただの地震だ!列を乱さずに待機!」

―レイストン要塞　司令部室
「准将、これは……!」
「ふむ、読みが当たったか。念のため、発着場の作業を止めておいたのは正解だったな」
「むむ、まさかお前の言った通りに揺れるとは……。カシウス……どんな魔法を使ったのだ?」
「なに……。相手の立場で考えただけです。3回の『予行演習』の後……次の標的はどこが効果的かとね」

―中央工房　演算室
「工房長!レイストン要塞から連絡です!つい今しがた、中規模の地震が発生したそうです!」
受付嬢のヘイゼルが演算室に駆け込んできた。
「やはりか……」
「ひ、被害はどうなったの!?」
「幸い、ケガ人は殆ど出なかったそうです。どうやら、前もって地震に備えていたようですね」
「よ、よかったぁ～……」
「さすがはカシウス。危機管理は万全じゃったか。さてと……。こちらの解析も終了したか」
ラッセル博士はディスプレイに映った解析結果を確認していった。
「ふむ……なになに……。ほうほう……これは興味深いのう……」
「な、なにか判った?」

「まあ、そう焦るでない。これによると、地震の直前に七耀脈の流れに異常が生じておる。そして、歪められた流れが要塞の地下に集束することで局地的な地震が発生したらしい。かなり浅い地下で発生したから他には影響しなかったようじゃな」
「それが地震の正体か……」
「そ、それってつまり……何者かが七耀脈を操って地震を起こしているってこと！？」
「『地震兵器』……そう呼べるかもしれませんね」
「うむ、まさしくそんな所じゃろう」
「で、でも、おじいちゃん。七耀脈の流れを操ることなんてそんなことホントにできるの？」
「ううむ、最新の土木技術でもそんなことは不可能のはず……」
「それに関してはわしも同感じゃ。じゃが、認めたくはないが……それを可能にした者がいるらしい」
「上等じゃないの……！」
「ラッセル博士、１つ気になったことがあるのですが……。《カペル》で地震をどこで発生させているか判りませんか？」
「あ……！」
「それだ！」
「なるほど……。そいつは盲点じゃったな」
ラッセル博士がカペルを操作し始めた。
「３箇所における七耀脈の流れの歪みを解析……。逆算することで歪みの発生源を割り出すと……。出た……座標【１６５、８８、－２８８．３５】……」
「え……」
ティータが声を上げた。
「ティータ、わかるの？」
「う、うん……」
ティータが地図を取り出した。
「座標はツァイス中心のセルジュ単位だから……。ツァイス市から

東に１２セルジュ、北に３７８セルジュの地点がレイストン要塞とすれば……東に１６５セルジュ、南に２２８セルジュの地点は……」
「まさか、エルモ温泉！？」
「う、うん。たぶんこのあたりになるハズなんだけど……」
エルモ村の温泉地の奥が座標の示す場所だった。
「あ……」
「完全に盲点だったな……」
「エルモ村……。どうやら、あの温泉地の奥が本当の『震源地』みたいですね」
「なるほど。人目が付かない場所で地震を発生させていたのですね」
「断言はできないがその可能性は高そうじゃ。どうする、お前さんたち？」
「決まってるわ！すぐに調べに行かなくちゃ」
「ああ……。急ぐ必要がありそうだ」
「そうか……。ならばこのままティータを連れて行くといい。この子の知識と技術はきっと調査に役立つはずじゃ」
「あ……。うん、きっと役に立つから！」
「うーん……。危険かもしれないけど……。でも、あたしたちが守ってあげれば大丈夫かな」
「ったく……仕方ねえな。おいチビスケ。絶対に無理すんじゃねえぞ」
「はいっ！」
「それでは私の方からエルモ村に連絡をしておこう。マオさんに協力を頼めば君たちの調査もはかどるだろう」
「うん、そうしてくれると助かるわ」
「ヘイゼル君。通信の用意をしてくれたまえ」
「かしこまりました」
「わしはここで《カペル》による解析を続ける。何か判ったら宿に連絡を入れよう」
「うん、お願い。あたしたちも、何か判ったら中央工房に連絡させ

てもらうわ」
「うむ、頼んだぞ」
「よし……。それじゃあエルモ村に行くぞ！」
エステルたちはエルモ村に向かった。

第8章　荒ぶる大地（13）

―エルモ村

「おお、よく来てくれたね」

「マオおばあちゃん！」

マオ婆さんがエステルたちを迎え出てくれた。

「やあ、ティータ、エステル。さっき、工房長さんから宿に通信で連絡があったよ。何でもツァイスのあちこちで妙な地震が起こってるらしいね？」

「そっか……。うん、それなら話は早いわ」

「実はついさっき、こっちでも奇妙なことが起こっちまってね。それこそ遊撃士協会あたりに連絡させてもらおうと思ったのさ」

「ふえっ……！？」

「もしかして、地震！？」

「あいにく地震じゃないんだが……。百聞は一見に如かずだ。さ、その目で確かめておくれ」

マオ婆さんが温泉の貯水池に案内した。

「こ、これって……！」

「煮えたぎっちゃってる……」

そこでは温泉をくみ上げる貯水池が沸騰していた。

「一体全体、どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたも……。工房長さんの連絡があった矢先にいきなり表が騒がしくなってさ。何だと思って見に来たらすでにこの有様だったんだよ」

「ひょ、ひょっとしてポンプ装置が壊れちゃったの？どこかが発熱しているとか……」

「いや、さっき見てきたがいつも通りちゃんと動いていたよ。おそらく、源泉の温度が突然、高くなっちまったに違いない」

「それって珍しいことなの？」

「ここに移り住んで５０年、こんな奇妙なことは初めてさ。何かこう、イヤな予感がするよ」
「突然、源泉の温度が上がったとなると今回の地震が関係しているのは間違いないかもしれません。七耀脈の活性化――これにより源泉の温度を上昇させた可能性があります」
レインが推測しながら言った。
「そ、その可能性はすっごく高いと思います。このまま温度が上昇したら大変なことになっちゃうかも……」
「た、大変じゃない……。すぐに原因を突き止めなくちゃ！」
ティータの言葉を聞いてエステルが焦った。
「おい、婆さん。源泉ってのはどこにあるんだ。この目で確認できるモンなのか？」
「そう来ると思ってこれを用意して待ってたのさ。さ、受け取ってくれ」
マオ婆さんがエステルに木戸の鍵を渡した。
「これって……」
「ポンプ小屋の左手にある裏手の木戸を開くための鍵さ。その奥に、エルモ温泉の源泉が湧き出た洞窟があるんだ」
「ホント！？」
「そんな洞窟があったんだ……」
「へへ、用意が良くて助かるぜ」
「なんの。お願いするのはこっちの方さ。こんなに沸騰してたらすぐには客を入れられないし、かけ流しだってできないからね。地震の調査と合わせてそっちも頼んだよ」
「うん、任せて！」
マオ婆さんが宿に戻っていった。
「地震の震源地と思しき源泉が湧いた洞窟ですか……。万全の準備をしてから入った方が良さそうですね」
クローゼが神妙に言った。
「ああ……。十中八九、敵がいるはずだ。気合いを入れていくぞ」

―温泉の源流
「うわ……。かなり沸騰しちゃってるわねぇ」
「はわわ、落ちたりしたらゼッタイに火傷しちゃいそう……」
「沸騰した湯もそうですが……高熱の蒸気も危険そうですね。下手をすれば火傷程度では済まないかもしれません」
「高熱の間欠泉ですか……。しかし、常時吹き出しているわけではなく、一定間隔で吹き出しているようですね」
「ああ……その通りだ。タイミングを見て通り抜けるしかねぇだろう」
「ん、オッケー！」

―温泉の源流　最奥
「な、なにこれ……。地面いっぱいに広がって……」
「エネルギーの脈……。これって、ひょっとして……」
そこには青白い筋状の線が地面いっぱいに広がっていた。
「……クク……。ずいぶん遅かったじゃねえか」
「あ……！」
エステルたちが声の先を見ると、全身黒ずくめの男が立っていた。
「サ、サングラスの男……！」
「あれは……《ゴスペル》月の杭か……？」
「よう、小娘ども。わざわざご苦労だったな。せいぜい歓迎させてもらうぜ」
「あんた……。《身喰らう蛇》の人間ね！」
「クク……。執行者Ｎｏ，？。《痩せ狼》ヴァルター。そんな風に呼ばれているぜ」

「やはりか……。ツァイスでの一連の地震も全部てめぇの仕業ってわけだな」
「クク、あたり前のことをわざわざ確認してんじゃねぇよ。こいつは《結社》で開発された七耀脈に干渉するための『杭』でな。本来、真下にある七耀脈を活性化させるだけの装置なんだが……。《ゴスペル》を付けることで広範囲の七耀脈の流れを歪ませて局地的な地震を起こすことができた。ま、そんな実験をしていたってわけだ」
「過去形ということはもう実験は終わったんですか？」
「まーな。本当は建物が崩れるくらいド派手なのをぶちかましたかったんだが……。そこまでの力は出せなかったな」
「そ、そんな……。建物が崩れちゃったりしたら住んでる人が危ないですっ！」
「クク、だからいいんだよ。瓦礫に手足を潰されてブタのように泣き叫ぶヤツもいるだろうし……。脳味噌とハラワタぶちまけてくたばるヤツもいるだろう。よかったら嬢ちゃんもそんな目に遭ってみるかい？」
「ひっ……」
「こ、こいつ……」
「クク、そう恐い顔するなって。俺はな、潤いのある人生には適度な刺激（スパイス）が必要だと思うのさ。いわゆる、手に汗握るスリルとサスペンスってやつだ。いつ自分が死ぬとも分からない……そんなギリギリの所に自分を置く。どうだ……ゾクゾクしてこねぇか」
「自分個人がスリルを感じるのは構いませんが、他人を巻き込むようなものは御免ですね」
「ケッ……マゾ野郎が。だが、これでようやく判ったぜ。てめえ――俺たちを誘き寄せやがったな？」
「え……！？」
「思わせぶりな各地の目撃情報……。要塞で地震があった直後にエルモの源泉が沸騰し始めたこと……。全て露骨な誘導情報だったんですね」

クローゼが説明した。
「そんな……」
「ま、半分正解ってとこだな。それじゃあ早速、味見をさせてもらうぜ……。てめぇらという刺激（スパイス）をな？」
ヴァルターが指を鳴らすと、地面から巨大なミミズが何匹も出てきた。
「やああん！？」
「な、なにコイツら！？」
「このあたりに棲息しているミミズさ。七耀脈が活性化したことでここまで馬鹿でかくなりやがった。ま、せいぜい遊んでやってくれや」
「ふ、ふざけんじゃないわよ！この卑怯者！正々堂々と勝負しなさいよね！」
「ほっとけ！今はこいつらの相手が先だ！」
「……来ます！」

「何とか追い払った……」
「こ、恐かったぁ～……」
「ふう……。手強い相手でしたね」
「んー、こいつはちょいと見込み違いだったか……？もうちょいマシかと思ったが」
「ケッ、見くびるんじゃねえぜ。あの程度の魔獣なら今まで何度も倒してるっての」
「……。……ダメだ、萎（な）えたわ。まさかここまで甘ちゃんだったとはな」
「なに……！？」
「ボケが……見込み違いはてめぇらだ！」
「えっ……！？」

その瞬間、ヴァルターがエステルたちの目の前に一瞬で移動し、攻撃した。
「くうっ！」
「きゃあっ！」
「あうっ！」
「くっ！」
エステルたちは一撃で倒された。
「……クソが。ったく、レーヴェのやつ適当なことを抜かしやがって……。な～にが《剣聖》以外にも手応えのありそうな獲物がいるだ。ただの青臭ぇガキどもじゃねえか」
「クソ……馬鹿な……」
「（……レーヴェ……まさか……？）」
「フン、こうなったら仕方ねぇ。教授と直談判して漆黒のコゾーを狩るとするか。そうすりゃ、少しはゾクゾクさせてくれるだろ」
「！！！ま……待ちなさいよっ！」
「あん？」
「このグラサン男……いい加減にしなさいよ……。漆黒のコゾーっていうのがもしヨシュアのことだったら……。狩らせるなんて……絶対にさせないんだから……」
「エステルお姉ちゃん……」
「俺の一撃を食らって立てたのは誉めてもいいが……。やめとけや。完全にヒザが震えてるぞ」
「だからどうしたってのよ……。あたしは絶対に……ヨシュアを見つけるんだから……。あんたたちなんかに邪魔なんてさせないんだからっ！」
「エステルさん……」
「よく言えました……」
「……言っておくが、俺は女子供の区別はしねぇ」
「武術家なら、敵に得物を向ける時の覚悟はできてるな？」
「当然……！やれるもんならやってみなさいよ！」

「ククク、上等だ……。その度胸に免じて一撃で終わらせてやるよ」
「……」
エステルは怯まなかった。
「やだやだ！エステルお姉ちゃん！」
「エステル、逃げろッ！！」
「――死ね」
ヴァルターがエステルに攻撃しようとした時、
「ぬッ！？」
エステルたちの後ろからヴァルターに向かって何かが飛んで来た。
「え……？」
「はあああああっ！」
東方風の巨漢――ジンだった。
「……」
「フッ……。間に合ったようだね」
ついでに、オリビエも。
「オリビエ！それに……ジンさん！？」
「よう、エステル。ずいぶん久しぶりだな。もっと早く来るつもりだったが向こうの仕事が長引いてな……。だが、何とか間に合ったようだ」
「ったく……狙ったようなタイミングで現れやがって」
「ククク……。レーヴェの報告にあったカルバードのA級遊撃士……。ジン、てめぇのことだったか」
「まあ、そういうことだ。まさか、こんな場所であんたと再会するとはな……。いつから《結社》なんぞに足を突っ込んでいやがるんだ？」
「ククク、あの後すぐにスカウトされちまってな。なかなか刺激的な毎日を送らせてもらってるぜ」
「馬鹿なことを……。あんた、自分がいったい何をしているのか判っているのか！？そんなんじゃ師父（せんせい）はいつまで経っても浮かばれ……」

「おいおい、綺麗事を抜かすなよ。てめぇは知ってるはずだ。俺がどんな道を選んだのかをな。ふざけた事を抜かすと……殺すぞ？」
「……。だったら……あんたは知っているのか？ツァイスの街にキリカがいるのを」
「なに……？」
その言葉を聞いた途端、ヴァルターの目つきが変わった。
「2年くらい前からギルドの受付をしているそうだ。どうやらそれまでは大陸各地をまわっていたらしいな」
「……チッ……。まさかリベールくんだりに流れていたとはな……。あの馬鹿、何を考えてやがる」
「さあな、俺にも分からんよ。だが、あいつは間違いなくあんたと会いたがっているはずだ。《結社》のことはともかく一度くらい顔を見せてやったら……」
言いかけた途端、ヴァルターがジンに鋭い蹴りを入れた。
「グッ……」
「ふざけた事を抜かすと殺すと言っただろうが……。まあいい……。キリカのことはともかくてめぇと会えたのは幸運だった。今回の計画……とことん楽しめそうだぜ」
ヴァルターは杭から《ゴスペル》を抜き取った。
「おい、ヴァルター！」
「クク、次会う時までせいぜい功夫（クンフー）を練っておけ。じゃあな」
「ヴァルター！！」
ジンは追いかけようとしたが足を止めた。
「……」
「えっと……。助けてくれてありがと。でも、どうしてジンさんたちがここに？」
「ツァイス支部に顔を出したらいきなりキリカに急かされたんだ。お前さんたちを助太刀しにエルモに向かえってな」
「フッ、それでボクも付き合うことにしたのだよ」
「そうだったんだ……。ありがと。本当に助かったわ」

「本当にあの時は私も焦りましたよ」
「それはともかく……。あんた、あの野郎とどういう知り合いなんだ？」
「……ま、昔馴染みさ。詳しい話はここを出て宿の風呂に入ってからにしよう。龍脈の乱れは収まったからじきに温泉も元に戻るだろうぜ」

エルモに戻ったエステルたちは紅葉亭の風呂で身体を温めてからツァイス支部に戻ることにした。

第8章　荒ぶる大地（14）

―遊撃士協会ツァイス支部

「そう……。やはりサングラスの男はヴァルターだったのね」

キリカはヴァルターのことを聞いても取り立てて驚かなかった。

「ああ――――っておい？やはりってことは予想していたってことか？」

「服装と風体を聞いてひょっとしたらとは思っていたわ。それよりも迂闊だったわね。どうして彼にそのまま《ゴスペル》を持ち帰らせたの？」

「仕方ねえだろ……。そこまで大層なモンとは思わなかったんだ。第一、そのあたりの事情をロクに説明もしないでエルモに急がせたのはお前だろうが」

「ええ、私の判断ミスね。そのくらい説明しなくても察してくれると思ったのだけど」

「グッ……可愛くねぇやつだな」

「ともかく、これで地震の調査は終了ね。調査に対する報酬を渡しておくわ」

エステルは査定と報酬を受け取った。

「ありがと、キリカさん。でも結局、あのグラサン男、２人のどういう知り合いなの？」

「そうだな。何て説明すりゃあいいか……」

「端的に言うと、かつての同門の弟子同士ね。私とジンとヴァルター……。彼が一番年上でいわゆる兄弟子だったわ」

「同門の兄弟子……武術の先輩ってことか」

「まあ、正確に言えばキリカは弟子じゃないんだがな。リュウガ師父（せいふ）の……」

ジンが言いかけた時、キリカが割り込んだ。

「私のことはどうでもいいわ。とにかく、その男は《泰斗流》の門

下だった。そして6年前、道場を出奔して《身喰らう蛇》にスカウトされた。簡潔にまとめるとこうなるわね」

「キリカ……」

「それだけ聞けば十分だ。しかし、アンタらと同じ《泰斗流》の使い手か……。化物じみた強さも肯けるぜ」

「道場にいた時よりもさらに凄みを増していやがった。達人クラスと言ってもいいだろう」

「危険な男であるのは確かね。ただこれ以上、例の局地地震が起きる可能性は少ないでしょう。警戒は緩めてもいいかもしれない」

「ああ、そのようだね。市民と職員に伝えておこう」

マードック工房長は胸をなでおろした。

「しかし、またしても《ゴスペル》が使われておったか。しかも七耀脈を活性化させる装置と合わせて使っていたとは……」

「学園地下の投影装置にも使われていたことを考えると……。導力器の機能を飛躍的に高めるブラックボックスと言えそうですね」

「うむ……。まさにその通りですわい。空間投影装置にしても七耀脈の活性化装置にしても決して実現不可能な技術ではない。じゃが、《ゴスペル》による現象は現在の導力技術の常識を超えておる。わしはもちろん、他の名だたる技術工房でも造れるとは思えんのです」

「そうですな……。共和国のヴェルヌ社や帝国のラインフォルト社……。さらに戦術オーブメントを開発したエプスタイン財団でも無理でしょう」

「それだけ結社の技術力がハンパじゃないってことね……」

「うむ、とんでもない天才がいる可能性が高そうじゃのう。むふふ……これは負けてはおれんわい！」

対抗心を燃やすラッセル博士。

「お、おじいちゃあん……」

「はあ、仕方ありませんね……。新型エンジンもようやく完成しましたし……中央工房も《ゴスペル》の解析に最優先で協力させてもらいますよ」

「わはは、当然じゃ」
「確かに、《ゴスペル》の正体が判明したら助かっちゃうかも……。今後、どういった形で使われるか判ったもんじゃないし」
「それにあの連中、『実験』とか抜かしていやがったな。2度あることは3度ありそうだぜ」
「《ゴスペル》の分析は引き続き博士たちにお願いするとして……。貴方たちは、そろそろ次の場所に移った方がいいかもしれないわね」
「うん、そうね。犯人は捕まえられなかったけど、地震の一件は片づいたみたいだし。次に行くとしたらどこが良さそう?」
「ちょうど王都支部から応援要請が入ったばかりよ。何でも王国軍から正式な依頼が来たらしいわ」
「王国軍からって……父さんからの依頼ってこと?」
「詳しいことは判らないわ。ただ、貴方たちをわざわざ指名してくるくらいだから結社関係である可能性は高そうね」
「確かに……」
「ヘッ……。行ってみるしかなさそうだな」
「それじゃあ決まりだな。ツァイスでの用事を済ませたら王都行きの定期船に乗るとしよう」
「オッケー……って。ひょっとしてジンさんも付き合ってくれるの?」
「おいおい、どうして俺がわざわざ戻ってきたと思ってる。ヴァルターの件もあるしヨシュアだって見つけるんだろ? とことん付き合わせてもらうぜ」
「ジンさん……ありがとう」
「正直、あんたが協力してくれると助かるぜ。あのグラサン野郎には痛い目に遭わされたからな……。よかったら稽古をつけてくれ」
「はは、お前さんにしちゃあずいぶんと謙虚な発言だな。あの威勢の良さはどうしたんだ?」
「ふん、テメェの実力が判らないほどガキじゃねえさ」
「お姉ちゃん、アガットさん。わたしも……付いて行っちゃダメで

すか？」
「えっ……！？」
「な、なにぃ！？」
「えっと、これからも《ゴスペル》とか変な装置が使われることがあると思うんです。わたし、そんな時だったら少しは役に立てると思うから……。お願い、連れて行ってください！」
「で、でも……」
「……。爺さんの意見はどうだ？」
「ふむ、祖父としては渋い顔をせざるを得ないが……。こう見えてティータは頑固じゃし、なるべく孫の希望は叶えてやりたい。じゃから、わしはあえて反対せんよ」
「おじいちゃん……」
「結社とやらが、想像以上の技術力を持っているのは確実じゃ。その意味では、今後の調査にティータは絶対に役立つはずじゃ。お買い得であるのは間違いないぞ」
「そんな、新製品の売り込みじゃないんですから」
「うー、確かにティータが手伝ってくれると助かるけど……。でも、またあの男みたいな危ないヤツが現れたとしたら……」
「……。いや、いいだろう。あんたの孫娘、預からせてもらうぜ」
アガットが意外にも反対しなかった。
「ふえっ！？」
「ほう……」
「ど、どうしちゃったの？てっきりアンタが一番反対するかと思ったけど」
「地震の一件を見ても《結社》が民間人の安全を考えているとはとても思えねえ。その意味じゃ、ここにいた所で確実に安全とは限らないだろう。だったら、本人の希望通りせいぜい役に立ってもらうさ」
「アガットさん……」

「なるほど……。そういう考え方もあるな」
「フフ、それ以上に目の届くところで守りたい。そんな思惑も感じるねぇ」
いやらしい目つきでオリビエはアガットを見た。
「なっ……」
焦るアガット。
「あ、図星って顔してる」
「あのあの……。それ、ホントですか？」
「真に受けるなっつーの。言っておくが、自分の身は自分で守るのが基本だからな。機械いじりばっかりしてボケッとしてんじゃねえぞ」
「エヘヘ……気を付けます」
「はは……。話がまとまって何よりだ」
「ふふっ、ますます賑やかになりそうですね」
「ティータや。気を付けて行ってくるんじゃぞ。お前ががんばっている間、わしも必ずや《ゴスペル》の謎を解き明かして見せるからな！」
「うん……楽しみにしてるね！」
「博士のことは心配しないでくれ。事故を起こしたりしないよう私が責任をもって監視するからね」
「えへへ……。よろしくお願いしますっ」
「まったく……どこまでも失礼なヤツじゃの」
「ふふ……。王都のエルナンさんには私の方から連絡しておくわ。女神の加護を。気を付けて行ってきなさい」
エステルたちは王都支部に向かうことになった。

第8章　荒ぶる大地（14）（後書き）

今回で第8章は終了です。コメント・一言等お待ちしてます。

第9章　狂ったお茶会（1）

―レイストン要塞

中央工房から派遣されたアルセイユの整備隊がレイストン要塞に到着した。

「おお、アルセイユは先に到着してたようだな。か～、いつ見てもゾクゾクする機体だねぇ」

グスタフ整備長はアルセイユを見ながら言った。

「本当に……。ホレボレしちゃいますよね。あんな船を毎日整備できたら整備士冥利に尽きるんですけど」

「へッ、そりゃあ俺の台詞だよ」

「やあ、グスタフ整備長。忙しい所をよく来てくれたね」

シード中佐がグスタフ整備長の所に来た。

「よお、シード中佐。またあんたの出迎えかい。偉くなって、ここの守備隊長はお役御免になったんじゃねぇのか？」

「はは、そうなんだけどね。実はこの後、部下と共に警備艇で出発する予定でね。準備が済むまでヒマなので出迎えさせてもらったのさ」

「はは、ご苦労さんなこった。そういや、こっちの方でも地震があったそうじゃねぇか？まさか、アルセイユが壊れたりしてねぇだろうな？」

「いや、アルセイユが到着したのは地震の起こった後のことでね。地震自体も、万全の備えだったからほとんど被害は出なかったんだ。ここの施設もそのまま使えるはずだ」

「そりゃあ助かるぜ。さっそく今からでも入っちまいたいところだが……。親衛隊の連中はどこにいるんだ？」

「ああ……案内しよう。今行けば、面白いものをお見せできると思うよ」

「はあ？」

グスタフ整備長はシード中佐に連れられて中庭に案内された。

―レイストン要塞　中庭

そこではカシウスとユリア大尉が向き合っていた。どうやら、模擬訓練をしようとしているようだった。

「両者、構え！」

カシウスとユリア大尉が武器を構えた。

「始めいっ！」

モルガン将軍の掛け声で訓練が始まった。

「――――やあああああっ！」

先に仕掛けたのはユリア大尉だった。しかし、カシウスはその攻撃を全て簡単にかわし、カウンターを叩きこんだ。

「くっ……」

「どうした！？動きが直線的すぎるぞ！細剣だからこそ可能な攻めの流れが作れるはずだ！教えたことを思い出せ！」

「ハッ……。……はいッ！」

ユリア大尉は先ほどの動きと違い、カシウスを囲むように動き、背後から攻めたてた。

「それでいい……。ではこちらからも行くぞ！」

カシウスは縦横無尽の動きでユリア大尉の攻撃をかわし、連続で蹴りを入れた。

「くうっ……」

「守りも基本は同じだ！相手の動きを取り込みつつ、攻守の流れをイメージしろ！」

「はいっ！」

ユリア大尉は攻守のバランスを考えカシウスと対峙した。ユリア大尉の剣とカシウスの棒が相対し、互角の動きとなった。しかし、均衡を破ったのはやはりカシウスの方だった。ユリア大尉はカシウス

の一撃を食らい膝をついた。
「うむ、そこまでだ」
「はあっ、はあっ、はあっ……」
「ふふ、さすがだな。昔、お前に教えたのはほんの基礎だけだったが……。よくぞ独力でここまで鍛えた」
「い……いえ……。まだまだ未熟です」
「なかなか良い仕合だったぞ」
「将軍、ですが……」
「正直、おぬしがここまでやるとは思いもしなかった。相当な使い手でもカシウス相手では数合ほどで剣を弾かれてしまっただろう。若手最強と言われるのも肯ける」
「きょ、恐縮です……。ですが、滅多にない機会……。できれば叩きのめされるまでお付き合い願えないでしょうか？」
「フハハハハ！なかなか頼もしいな。さて、どうするカシウス？」
「ふふ、付き合ってやりたいのは山々ですが……。どうやら客人のようですな」
「は～、こりゃあ凄いモンを見ちまったなァ」
「2人ともお疲れさまでした。シュバルツ大尉。本当に見事だったよ」
「シード中佐……。それにそちらの方は……」
「中央工房から派遣されたグスタフっていう者だ。よろしく頼むぜ、隊長さん」
「こ、これは失礼した。王室親衛隊、中隊長。ユリア・シュバルツ大尉です。こちらこそよろしくお願いします」
「ふむ、どうやらこれでお開きのようだな」
「みんな、余興はおしまいだ。それぞれの持ち場に戻ってくれ」
「イエス・サー！」
模擬戦闘を見ていた兵士たちは持ち場に戻っていった。
「さてと、早速で悪いが機関部を見せてくれるか？できれば今日中に目処をつけちまいたいからな」

「ええ、了解しました。それでは失礼します！准将、指南していただきありがとうございました！」
「なんのなんの。こちらも良い運動になった」
「整備長、大尉。アルセイユを頼んだぞ」
「は！」
「どんとお任せあれ」
ユリア大尉とグスタフ整備長はアルセイユに向かっていった。
「ふふ……。さすがですね、彼女は。これから更に伸びそうです」
「ああ、そうだな。お前やリシャールまであと1、2歩といったところだろう」
「ふむ、ああいう若者を見るとこの老体にも沸き立つものがあるな。カシウス、後で付き合わんか？」
「将軍……。さすがにお歳を考えた方がよろしいんじゃありませんか？」
「むむっ……」
「聞けば、去年の武術大会ではかなり大暴れしたそうですな？少しは若い者に花を持たせてやらなくてはいかんでしょう」
「ふん、だからこそお前に司令の座を委ねたのだ。そこまで言ったからには文句を言わずに勤めてもらうぞ？」
「おっと、ヤブ蛇でしたか」
「ふふ……」
「そうだ、シード中佐。今日には出発するそうだな？」
「はい、正午には。警備艇2隻を率いて3個中隊を率いる予定です」
「調印式にはワシも参加するが、それまでは身動きが取れん。王都の守りは頼んだぞ」
「よろしくお任せください。遊撃士協会と協力して事に当たらせてもらいます」
「う、うむ……。あまり愉快ではないが今回ばかりは仕方ないだろう」
「ふふ、将軍のギルド嫌いも徐々に治りつつあるようですな」

―レイストン要塞　外

「監視塔に導力センサー……。水中には機雷群を設置……。やはり、守りは完璧ですわね……。フン、仕方ない……。やはり連中の言う通りあれを使うしかないわね……」

木の陰からカノーネがレイストン要塞を伺っていた。

「閣下……もうすぐです。どうか待っていてください」

第9章　狂ったお茶会（2）

―ツァイス市　市街区

ツァイスでの一連の事件が解決した翌日、エステルたちは王都グランセルへ向かう準備をした。

「さてと……。次は王都グランセルね。一通り準備を済ませたらさっそく発着場に行こっか？」

「軍から依頼があるみてぇだし、急いだ方がいいかもしれんな。ただ、請負中の仕事があるなら片付けちまってもいいだろう」

「うん、了解」

―ツァイス発着場

「よ、いらっしゃい。グランセルに向かう遊撃士さん御一行だよな？」

「あ、うん、そうだけど」

「キリカさんからすでに運賃はもらってるぜ。さっそく乗船手続をするかい？」

「手続きをしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうツァイス地方でやり残したことはねぇだろうな？」

「うん、大丈夫よ。手続きをしてちょうだい」

「よしきた。それじゃ、ギルドに連絡して他のお仲間さんも呼んでやるよ」

エステルたちは乗船手続をしてから定期船の到着を待つことにした。

―定期船セシリア号

～アガット・ティータ
「あ、お姉ちゃん！」
「なんだ、エステル。ま～た船内をウロウロしてんのかよ」
「もう、人をノラネコみたいに言わないでよ。じっと待ってるのって何だか落ち着かないんだもん」
「お前、ル＝ロックルの訓練場に行ったんだろ？飛行船でも半日はかかるし、さぞ退屈だったんじゃねえか？」
「それが、行きも帰りもすぐに寝ちゃったんだよね～。行きは緊張で寝不足だったし、帰りは訓練で疲れてたし……」
「ったく、仕方ねぇな」
「くすくす……。お姉ちゃんらしいかも。でも、わたしも一度は外国に行ってみたいなぁ。そしたらお父さんとお母さんに会いに行けるかもしれないし……」
「あ、そっか。ティータのお父さんとお母さん、仕事で外国に行ってるんだっけ？」
「うん……。オーブメントの普及してない国に技術指導をしに行ってて……。もう2年近く帰ってきてないの」
「うーん、結構長いわね。手紙のやり取りはしてるの？」
「うん、月に1度ね♪この前、お姉ちゃんたちのことを書いたら返事が返ってきてね……。よろしく伝えてくれだって」
「えへへ、そっか。ところでティータのご両親ってどんな感じの人なの？お母さんはやっぱりティータ似？」
「うーん、どうなのかな？性格は、とっても元気でパワフルな感じかなぁ。すぐにおじいちゃんと取っ組み合いのケンカをしちゃうの」
「と、取っ組み合いって……」
「あ、べつに仲が悪いわけじゃないんだよ？お父さんは、あれも親子のあいじょー表現だって言ってたから」
「そ、そっか。それじゃあお父さんはどんな人？」
「えとね、物静かでがっしりとした人なの。１０年くらい前まで遊撃士をしてたんだって」

「えっ、そうなんだ!?」
「爺さんから聞いたがかなりの凄腕だったそうだぜ。ケガで引退してから設計技師に転職したらしい」
「へ～、そうだったんだ。うーん、帰ってきたら2人とも会ってみたいわね」
「うん、紹介したいから帰ってきたら遊びに来てね♪あ、もちろんアガットさんもですよ?」
「ハア?待て、なんで俺が!?」
「だってアガットさん、おじいちゃんとも仲がいいし……。それにアガットさんのこともいろいろ書いたら、ぜひ会いたいって返事に書かれていたんです」
「……マジかよ……」
「あはは、こういうのも年貢の納め時ってやつ?」
「あのあの、ダメですか?」
「いや……ダメってこたぁないが……。ま、仕事でツァイスに寄ったらついでに挨拶させてもらうぜ」
「えへへ、はいっ♪」

～ジン
「……」
ジンは窓を見たまま遠い目をしていた。
「……ジンさん?」
「おお、エステル。どうした、俺に用か?」
「あ、ううん。特に用事はないんだけど……。考え事、してたみたいね?」
「ああ……。昔のことを、ちょいとな」
「それってやっぱり……あのグラサン男のこと?」
「ああ……。最後に別れてから6年……。長いようで短かったと思

ってな」

「そうなんだ……。あの男って、ジンさんの兄弟子にあたるんだったよね？どんなタイプの武術家だったの？」

「そうだな……。一言で言うと『天才』だった。圧倒的な格闘センスと反射神経。パワーとスピードを併せ持つ肉体。そして爆発的な”気”の使い方。どれをとってもズバ抜けていた」

「確かに、あの動きは凄かったわ……。単純な力と速さで言うならあのロランス少尉以上だったかも」

「……そうかもしれんな。道場にいた頃、俺はあいつの強さに憧れていたものだった。６年前――あいつが師匠であるリュウガ師父（せんせい）を手にかけるまではな」

「！！！自分の先生を……！？」

「と言っても、お互いが納得しての仕合だ。師父はずいぶん前からあいつの心の闇を見抜かれていた。己の圧倒的な力に酔いしれながら更なる力を貪欲に追い求める……。そんな危うさをたしなめ、事あるごとに武術の心を説かれた。戦いを通じて精神を高め合う、泰斗流の『活人拳』の精神をな」

「『活人拳』……。なんだかカッコイイ響きね」

「だが結局、その精神はヴァルターには届かなかった。そして奴は、魅入られるように武術の暗黒面に入り込んでいった」

「ぶ、武術の暗黒面……？」

「武術が戦いの技術である以上、決して否定できない面の極み……。己を鬼と化し、相手の命を刈り取ることだけを目的とした拳。すなわち、『殺人拳』だ」

「あ……」

「そして、それを追求するため道場を出奔しようとしたあいつに師父（せんせい）は仕合を挑み……死闘の末、命を落とした。……俺は仕合の見届け人として眺めていることしかできなかった」

「……ジンさん……」

「まあ、そんな事情があって俺はずっとヴァルターの行方を捜し続

けた。それがまさか、このリベールで再会することになろうとは……。これも女神の導きかもしれんな」

「……」

「おっと、悪い。つまらねぇ昔話を聞かせちまったみてぇだな」

「ううん……。聞かせてくれてありがとう。でも、ジンさん……。あの男を捜しているのはお師匠様の仇を討つためなの？」

「はは、さっきも言ったようにお互い納得しての仕合の結果だ。仇討ってのはスジが通らねぇさ」

「そ、そっか……そうだよね。でもそれじゃあ、どうしてあの男を捜しているの？」

「……ああ……。確かめたいことがあってな」

「確かめたいこと？」

「はは、言葉に出しちまうと照れくさいから止めておくぜ。いずれにせよ、それを確かめるためには俺もまだまだ未熟すぎる……。お前さんに協力することでせいぜい修行させてもらうさ」

「そっか……わかった。あたしもジンさんの足を引っ張らないように頑張るわ！」

「おう、お互い精進しようぜ」

～クローゼ・オリビエ

「やあ、エステル君。このオリビエ・レンハイムの独奏会にようこそ」

オリビエがリュートの演奏を止めて言った。

「なにカッコ付けてんだか。クローゼもわざわざ付き合ってやることないのに」

「ふふ、甲板に出たら演奏してらっしゃったので勝手に聞かせていただきました。とっても素晴らしかったです」

「フッ……お誉めにあずかり光栄至極。どうだろう、殿下。王都に

到着したら是非とも2人きりで音楽談義などを……」
オリビエの目が邪に輝いた。
「ピュ～イ？（ジロリ）」
ジークがオリビエのことを睨んだ。
「はっ……」
オリビエがその視線に気づきとっさに口を塞いだ。
「えっと、ジーク君。これは社交辞令と言ってね……」
「あら、社交辞令なんですか？」
「フッ、それは勿論スキあらばあの手この手で落とさせて頂きますよ……」
「ピュイ！！」
ジークがその言葉に反応し、オリビエの周りを激しく飛び回った。
「わわっ……。止めたまえ、ジーク君！ごめんなさい！ボクが悪うございました！」
「あはは、ジークってばちゃんと護衛してるじゃない」
「はあはあ……。ひ、酷い目に遭った……」
「うふふ……。ごめんなさい、オリビエさん。でも、今みたいなのもジークの愛情表現なんです。オリビエさんにじゃれついているんですよ」
「ピューイ？」
「やれやれ、それは光栄の至り。しかし、リベールと同じように殿下のガードはなかなか堅そうだね」
「ふふ……。相手にもよると思いますけど」
「ホント、見境なしなんだから……。あんた、王都に着いたらちょっとは控えた方がいいわよ。ユリアさんとかあんまり冗談通じなさそうだし」
「おお、あの凛々しい女か。ああいうマニッシュで凛とした女性にも憧れてしまうね。フッ、機会があればお近づきになりたいものだよ……」
「……」

クローゼはオリビエの言葉に反応しなかった。
「お、おや？」
「どうしたの、クローゼ？」
「あの、確かにユリアさんにその手の冗談はご法度かもしれません。以前、王城のパーティで酔っ払って私たちに絡んできた男性がいたんですけど……。ユリアさん、その方の服を、剣で……」
「へっ……」
「えっと……。……全裸（マッパ）？」
エステルの顔が赤くなった。
「（コクン）」
それはクローゼも同じようだ。
「ガクガクブルブル……。くっ、さすがは王室親衛隊にその人ありと謳われた女騎士だ……。だが、ボクの情熱の炎はそのくらいで消えたりはしない！いざとなったら全裸（マッパ）でリュートを奏でて彼女への愛を歌わせてもらおうっ！」
「うぇ、想像しちゃったわ……」

～レイン
「ふう、風が心地いいですね」
「うん、そうね。そういえば、どうしてレインさんは執行者のことを知っているの？」
「以前、ある事件があって、それを解決した話はしましたね。そして、その事件の中、結社のある人物が自らを執行者と名乗ったものでしたから」
「そうなんだ……」
「私もあれから結社について調べようとしましたが、彼らは秘密裏に行動するため、なかなか情報を得られません。判っているのは、《盟主》を頂点とし、《使徒》と呼ばれる幹部が《執行者》という

戦闘のエキスパート集団を率いているということだけです。行動の目的などは一切わかっていません」
「それじゃあ、今回の目的も全く分からないわね……。正直、あんな化物みたいな執行者をあたしに止められるのかしら？」
「大丈夫ですよ。エステルさんはヨシュアさんを絶対に捜すと決めたのでしょう？その気持ちがあればまだまだ強くなります。お互い頑張りましょうね」
「あ……。うん、そうね。もっとしっかりしなくちゃ。ありがとう、レインさん」
「いえいえ、どういたしまして」

「……お待たせしました。まもなく本船は王都グランセルに到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」
エステルは船内放送を聞いて席に戻った。

第9章　狂ったお茶会（3）

―王都グランセル

「さてと……。また王都に戻ってきたわね。何はともあれ、まずはギルドに行こっか？」

「ああ、軍の相談ってのをエルナンから聞いちまおう」

「そういえば、今日は発着場にあの白い船が泊まっていないね。確か、《アルセイユ》といったかな」

「え？」

エステルが反対側の着陸場に目を向けた。

「あ、ホントだ」

「確か、王家の巡洋艦だったか。どこかに任務で出かけてるんじゃないのか？」

「アルセイユはちょうどレイストン要塞に行っています。そこで完成したばかりの新型エンジンを搭載するそうです」

「あ、整備長さんたちも工房船でレイストン要塞に出かけたって言ってました」

「へ～、そうだったんだ。ってことは、あのカッコイイ船がさらにパワーアップするのよね？どんな風に変わるのか楽しみかも」

「エンジンを交換するだけだから外装は変わらないと思うけど……。でも、間違いなく世界最速の船になるはずだよ♪」

「なるほど、是非とも一度は乗ってみたいものですね」

―遊撃士協会グランセル支部

「皆さん、よく来てくれました。ルーアンとツァイスでの報告書は読ませていただきましたよ。本当にご苦労さまでしたね」

「うーん、《結社》にしてみれば小手調べだとは思うんだけど……。

仮面男も、サングラス男も本気を出してなかったみたいだし」
「それでも《結社》が現実に動いていることが判っただけでも大きな収穫と言えるでしょう。今後は、王国軍との協力もスムーズに出来ると思いますよ」
「で、その軍の相談ってのはいったいどういうものなんだ？やっぱり、《結社》関係なのかよ？」
アガットが本題を切りだした。
「それなんですが……。どうも通信では相談しにくい内容らしいんです。ですから直接、軍の担当者が来て事情を説明してくれるそうです」
「ふむ……通信では相談しにくい内容か。ひょっとしたら盗聴を警戒してるのかもしれないね」
オリビエが推測しながら言った。
「と、盗聴！？」
「その可能性は高いでしょう。導力通信は便利ですが傍受される危険もあります。ギルド間の通信であれば盗聴防止用の周波変更（スクランブル）機能が使えるんですけどね……」
「その盗聴防止の機能は軍との通信には使えないんだ？」
「軍は軍で、独自の通信規格を採用しているので無理なんです。通常交信しかできません」
「そうなんだ……。うーん、どうせだったら同じ規格にしちゃえばいいのに」
「まあ、協力しているといっても一国の軍隊と国際的な民間組織だ。情報保全の独自性は避けられんさ」
「同感ですね。軍と民間組織の一線と言えるでしょう」
「しかし、エルナン。どうやらあんたは、軍の相談が何なのか見当がついてるみてぇだな。でなけりゃ、わざわざ俺たちをツァイスから呼んだりしねえだろ」
アガットはエルナンの心中を読み取ったようだ。
「おや、見抜かれましたか。これは私の読みですが……どうやら『

不戦条約』に関する話である可能性が高そうですね」
「『不戦条約』……それって最近、色々な所で耳にしてるけど……。具体的にはどんな内容の条約なの？」
「女王陛下が提唱されたリベール、エレボニア、カルバードの３ヶ国間で締結される条約なんです。国家間の対立を武力で解決せず、話し合いで解決すると謳っています」
クローゼが条約のあらましを説明してくれた。
「え……！それじゃあ戦争がなくなるってことなの！？」
「いえ、そうではないはずです。この条約には拘束力――つまり守らなくてはならないという決まりがないのですよね？」
「ええ、確かにそうですけが……。それでも抑止力にはなりますし、国民同士の友好的なムードにつながるとお祖母様は考えていらっしゃるそうです」
「そっか……」
「さすがはアリシア陛下だ。いい目の付け所をしてらっしゃる」
「３つの国が仲良くできるきっかけになるといーですね」
「その不戦条約が、来週末に《エルベ離宮》で締結されます。外国の要人も集まりますしメディアにも注目されるでしょう。そんな状況で、もしも《結社》が何かを企んでいるとしたら……」
「確かに……。シャレにならないわね」
「フン……結構シビアな話になりそうだ。で、その担当者が来るまで俺たちはここで待てばいいのか？」
「そうですね。約束の時刻まで時間はありますし自由になさって結構ですが……」
その時、ギルドの通信器が鳴った。
「おや、失礼」
エルナンは通信器を取った。
「こちら、遊撃士協会。グランセル支部です。はい……はい……。……。なるほど……そうですか。ふむ、確かにそれは困ったことになりましたね。少々お待ちください……」

「もしかして王国軍から？」
「いえ、エルベ離宮からです。何でも、観光客の子供らしき迷子を保護したそうですが……保護者が見つからずに困っているとのことです」
「あらら」
「まあ……」
「その子の保護者を見つけてほしいとの要請なんですが……。軍の担当者が来るまで時間もありますし協力していただけませんか？」
「そりゃあモチロン、引き受けさせてもらうわ。アガットもいいよね？」
「助かります」
「しゃあねえな。とっとと離宮に行くとするか」
エルナンは再び話し始めた。
「ええ、ちょうど手の空いた遊撃士がいたのでそちらに向かわせます。貴方のお名前は……はい……了解しました。それではお待ちくださ い」
エルナンは受話器を置いた。
「エルベ離宮に勤めているレイモンドさんという執事がその迷子を預かっているそうです。離宮に着いたら訪ねてみてください」
「うん、わかったわ。……って、レイモンドさんってどこかで聞いたことのある名前ね」
「んー、あの若い執事じゃないか？離宮解放の時にカウンターの下に隠れていた」
「そっか、ナイアルの友達だっていうあの人か！」
ジンに言われて思い出したエステル。
「お知り合いならなおさら話が早そうですね。それではよろしくお願いします」
エステルたちはエルベ離宮に向かった。

第9章　狂ったお茶会（4）

―エルベ離宮

「エルベ離宮……何だか妙に懐かしいな」

ジンが感慨深げに言った。

「うん……。でも、何だか普通の人もいるみたいなんですけど……」

離宮は家族連れなど一般人が多くいた。

「普段は市民の方々にも開放している場所なんです。ちょっとした憩いの場所といったところでしょうか」

「へ～、そうなんだ。言われてみると確かに家族連れとか多いみたいね」

「迷子というのもああいう家族連れの客の可能性が高そうだな。とにかく、あのレイモンドっていう執事の兄さんを捜してみようぜ」

「オッケー」

「はあ、参ったなぁ。そろそろ遊撃士が来るのにどこに行っちゃったんだろう」

「あの～」

「あ、はいはい。どうかなさいましたか……」

「あれっ!?確かあんたたちは……」

執事レイモンドはエステルたちを一目見て気付いたようだ。

「よう、久しぶりだな」

「えへへ、こんにちは。覚えててくれたみたいね」

「はは、忘れるわけないさ!何といってもエルベ離宮を解放してくれた恩人だからな……。あれ、そちらの君は……」

執事レイモンドはクローゼを見て何か疑問に思ったようだ。

「どうかなさいましたか?」

「いや、はは……。そんな訳ないよな。他人の空似に決まってるか」
「ふふ、ひょっとして恋人さんと間違えました？」
「と、とんでもない！えっと、それじゃあ君たちが依頼を請けてくれた遊撃士かい？」
「うん、そうなんだけど……。いったいどうしたの？何か困ってるみたいだけど」
「それが……その迷子の子なんだけど」
「いきなり『かくれんぼしましょ』って居なくなっちゃってさ……。必死に捜している最中なんだよ」
「あらら……」
「す、すぐに見つけるから君たちは談話室で待っててくれ。場所は知ってるだろう？」
「それは覚えているけど……。苦戦しているみたいだしあたしたちも捜すの手伝おうか」
「え……いいのかい？」
「ま、これも乗りかかった船ってやつだ。ガキの名前と特徴を教えろや」
「た、助かるよ。白いフリフリのドレスを着て頭に黒いリボンをつけた１０歳くらいの女の子だけど……。ちょっと名前は分からないんだ」
「名前が分からない？」
「いくら聞いても『ヒ・ミ・ツ』とか言って教えてくれなくってね……。家族と一緒に来たと思うんだけどそれらしい人も見つからないし……。ほとほと困り果ててギルドに助けを求めたんだ」
「そ、そうなんだ。でも、かくれんぼといいわりと元気な女の子みたいね？」
「うーん、元気というか……。おませで、おしゃまな気まぐれ屋って感じかな。大人をからかって楽しんでいるような気もする」
「うーん、いわゆる悪戯好きの仔猫って感じ？」
「そう、まさにそれだ！はあ～、ホントにどこに行っちゃったんだ

ろ。多分、この建物からは出てないと思うんだけど……」
「ということは、中庭を含めた部屋の全てが捜索対象だな。確かに、かくれんぼにはもってこいの場所かもしれん」
「僕はいったん、談話室に戻ってあの子のことを待っているよ。見つけたら連れてきてほしい」
「うん、わかったわ」
執事レイモンドは談話室に戻っていった。
「さーて、逃げた仔猫ちゃんを捜してみるとしましょうか。白いフリフリのドレスに黒いリボンって言ってたわね」
「ふふ、すぐに見つかりそうな外見ですね。どんな子なのか楽しみです」
「……それはどうでしょうか？」
「え？」
「外見は派手ですぐに分かると思いますが……今回の捜索はかなり難しいと思いますよ」
「レインさん、どうしてわかるの？」
「……いえ、何となくですよ」
「今、ゴチャゴチャ言ってたってしょうがねえ。とりあえず一通り建物の中を捜してみるぞ」
「（まさか、彼女が……。だとしたら何の目的で……？）」
エステルたちは捜索を始めた。

第9章　狂ったお茶会（5）

―エルベ離宮　中庭のベンチ
「ベンチと植え込みの隙間にもいないか……。はっ、ひょっとして植え込みの中にいたりして！」
エステルのアホ発言。
「おいおい……。本物のネコじゃあるまいし」
「やっぱダメ？」
ダメです。

―エルベ離宮　展示室
エステルは大きな緋色の壺を見た。
「離宮解放の時は、この底にスペアキーが貼ってあったのよね。かなり大きな壺だし、ひょっとしてこの中に隠れて……」
「さすがにそれはねぇだろ。第一、その小さい口からどうやって入るつもりだ？」
「えへへ、それもそっか」
あたり前です。

―エルベ離宮　応接室
「まさか、この下に隠れているってことは……」
エステルは会食用の大きなテーブルの下を探した。
「……。はは……さすがにいないわよね」
「おいこら、エステル。スパッツじゃねえんだから気軽にしゃがんでんじゃねえ」

「あ……」
エステルはすぐさま起き上がった。
「えへへ、申しわけない」
「ったく……」

―デュナン公爵専用謹慎室
デュナン公爵が部屋をせわしなくウロウロとしていた。
「遅い！遅すぎる！フィリップめ……。雑誌とドーナツを買うのにどれだけ時間をかけているのだ！」
その時、扉が開く音が聞こえたのでフィリップと思い、振り向いたのだが……。
「これ、フィリップ！私をどれだけ待たせれば……」
入ってきたのはエステルたちだった。
「へ……」
「あ……」
エステルとクローゼは唖然とした。
「そ、そ、そ……そなたたちはああ～っ！？」
「なんだぁ？この変なオッサンは」
「デュナン公爵……。こんな場所にいたんだ」
「小父様……。その、お元気ですか？」
クローゼはかける言葉に戸惑っている。
「ええい、白々しい！そなたたちのせいで、そなたたちのせいでな……。私はこんな場所で謹慎生活を強いられているのだぞっ！」
「うーん、あたしたちのせいって言われてもねぇ……。リシャール大佐の口車に乗った公爵さんの自業自得だと思うんだけど」
「ま、謹慎程度で済んで幸運だったと思うことですな。他の国なら、いくら王族と言えど実刑は免れんでしょう」
「くっ……。フ、フン……。確かに陛下を幽閉したことがやり過ぎ

であったことは認めよう。リシャールに唆されたとはいえ、それだけは思い止まるべきだった」

「あれ、なんだか殊勝な台詞ね？」

「フン、勘違いするな。私は陛下のことは敬愛しておる。君主としても伯母上としても非の打ちどころのない人物だ」

デュナン公爵はアリシア女王を恨んでいたのではないと言う。

「だが、クローディア！そなたのような小娘を次期国王に指名しようとしていたのはどうしても納得がいかなかったのだ！」

「……」

クローゼはデュナン公爵に罵られても反論しなかった。

「ちょ、ちょっと！聞き捨てならないわね！クローゼは頭が良くて勉強家だし、人を引き付ける器量だってあるわ！公爵さんに、小娘とか言われる筋合いなんて……」

「……エステルさん、いいんです」

クローゼはエステルを制した。

「前にも言ったように私は……王位を継ぐ覚悟ができていません。小父様が不快に思われるのも当然と言えば当然だと思います」

「クローゼ……」

「ふん、殊勝なことを。昔からそなたは、公式行事にもなかなか顔を出そうとしなかった。知名度でいうなら、私の方が遥かに国民に知れ渡っているだろう。すなわちそれは、そなたに上に立つ覚悟がないということの現れだ」

「……」

「聞けばそなた、身分を隠して学生生活を送っているそうだな。おまけに孤児院などに入り浸っているそうではないか。そんなことよりも、公式行事に出て広く国民に存在を知らしめること……。それこそが王族の役目であろう！」

「……それは……」

クローゼはデュナン公爵のもっともな言葉に全く返すことができなかった。

「……。あたしは王族の役目とかぜんぜん詳しくないから……。ひょっとしたら公爵さんの言うことも一理あるかもしれない」
「わはは、当然だ」
「でも、これだけは言えるわ。クローゼは今、悩みながらも答えを出そうと頑張っている。少なくとも、謹慎を理由に何もしてない公爵さんよりもね！」
「な、なにィ！？」
「エステルさん……。……あの、デュナン小父様。私は今、エステルさんのお手伝いをさせて頂くことで自らの道を見出そうとしています。私に女王としての資格が真実、あるのかどうなのか……。近いうちに、その答えを小父様にもお見せできると思います。ですからそれまで……待っていただけないでしょうか？」
「クローゼさん……。よく言えました」
「ぐっ……。ふ、ふん、馬鹿馬鹿しい。ええい、不愉快だ！とっとと部屋から出ていけ！」
「言われなくても！
エステルはさっさと部屋を出て行こうと思ったが、
「……あ、その前に。ここに白いドレスを着た女の子がたずねてこなかった？」
少女の捜索を思い出した。
「なんだそれは……。わたしはここにずっとおる！そんな小娘など知らんわ！」
「あっそ、お邪魔しました」
「……失礼しました」

「まったく……。なんなのよ、あの公爵は！自分のことは棚に上げてクローゼをけなしてさ！」

「いえ、小父様の非難も当然と言えば当然だと思います。王族としての義務……それは確かに存在しますから」
「で、でも……」
「ふむ、共和国では選挙で大統領が選ばれますからな。王族の義務というのは自分にはピンと来ませんが……。だが、あの公爵閣下の場合、悪い知名度が高まってしまった。もはや、彼が貴女よりも次期国王にふさわしいと考える者はリベールには存在せんでしょう」
「それは……確かにそうなのかもしれません。ですが、私の覚悟については小父様のおっしゃる通りです」
「クローゼ……」
「私、ここで小父様とお会いできて良かったです。改めて、私に足りない部分について気付かせていただきました」
「そっか……。よし！迷子探し、再開しようか？」
「はい」
エステルたちは気を取り直し、少女の捜索を再開した。

第9章　狂ったお茶会（6）

―エルベ離宮　紋章の間

エステルは演壇の中を覗いてみたが誰も隠れていなかった。

「むう……。ビンゴだと思ったんだけど」

「ふふ、なかなか手強い仔猫ちゃんですね」

―エルベ離宮　談話室

「どうだい、見つかったかい？」

「ううん、残念ながら。怪しそうな場所は一通り調べてみたんだけど」

「も、もしかして……エルベ離宮の外に出ちゃった可能性は……」

執事レイモンドは身を震わせた。

「チッ……。そりゃあ、やっかいだな」

「うーん、かくれんぼだし、それはないと思うけどな……。普通に行ける範囲内に隠れるのがルールだもん。多分、思いもよらない場所に隠れている可能性が高いわね」

「なるほど、たまには鋭いことを言うじゃねえか。もう少し探してみるかよ？」

「うーん、煮詰まってきたし素直に降参した方がいいかも」

「降参っていうと？」

「まあ、かくれんぼで鬼が素直に降参するっていったら……。『鬼泣いて負～けた！かくれんぼ終～わり！』って言いながら歩き回ればいいわ。そうしたら、その女の子もきっと出てきてくれると思う」

「な、なるほど……」

「ふふ、ちょっと恥ずかしいですけど……。出てきてもらうためには仕方ありませんよね」

「いえ、それには及びませんよ」
「えっ……」
「かくれんぼにおいて、隠れる側は『できるだけ開始場所から遠い場所』に隠れる人が多いのです。近くだとすぐに見つかるかもしれないと不安に感じますからね。今回みたいにかくれんぼが本当に強い人は、鬼は近くを探さずに遠い場所から探すことを理解して逆に近い場所に隠れるのです。この談話室で隠れられる所といえばすなわち……」
レインが談話室のカウンターを覗きこんだ。
「ふみゃ～ん……。あーあ、レンの負けね」
レインの推測通り、少女がカウンターから出てきた。
「ええっ！？」
「もしかして……エア＝レッテンで会った？」
「ふふっ、やっぱりレンちゃんだったか」
「うふふ……。お姉さん、お久しぶりね。ちゃんとレンのこと覚えてくれてうれしいわ。それと、お兄さん。レンのことを見つけるなんてなかなかやるじゃない？」
「いえ、そうでもありませんよ。私もかくれんぼは得意ですからね」
「いや～、まさか君たちが知り合いだとは思わなかったよ。えっと君……名前はレンちゃんでいいのかな？」
「ええ、そうよ。レンはレンっていうの。ごめんなさい、秘密にしてて」
「はは、気にしていないよ。でもどうして突然、かくれんぼなんか始めたんだい？」
「だって、お姉さんが来てくれるって聞いたから……。一緒に遊ぼうと思ってがんばって隠れていたのよ」
「あはは、そうなんだ。でも、よくあたしたちが来るなんて分かっ

たわね？」
「だってお姉さん、遊撃士さんなんでしょう？レン、遊撃士さんが来てくれるって聞いたから」
「いや、そうなんだけど……。遊撃士はあたしだけじゃないし他の人が来たかもしれないわよ？」
「でも、レンは信じてたわ。お姉さんが来てくれるって。その証拠に、ほーら、ちゃんと来てくれたでしょう？」
「う、うーん……確かに」
「ま、そいつはともかく……。父ちゃんと母ちゃんはいったいどこに行ったんだ？どうしてこんな場所で１人で遊んでやがる？」
「ジー……」
レンはアガットを鋭い目つきで睨んだ。
「な、なんだよ？」
「お兄さん、ダメダメねぇ。レディに対する口のきき方がぜんぜんわかってないみたい」
「ムカッ……」
「まあ、レンはレディだしカンダイな心で許してあげるわ。それで、パパとママがどこに行ったかなんだけど……。レンにもよく分からないの」
「分からない？」
「レン、パパとママといっしょにここに遊びに来てたんだけど。お昼を食べたあと、パパたちがまじめな顔でレンにこう言ったの。『パパたちは大事な用があってレンとお別れしなくちゃならない。でも大丈夫、用が済んだら必ずレンのことを迎えに行くからね。パパたちが帰ってくるまで良い子にして待っていられるかい？』」
「そ、それって……」
「ふふっ、レンはもう１１歳だから『もちろんできるわ』って答えたわ。そうしたら、パパとママはそのままどこかに行っちゃったの」
「おいおい、冗談だろ……」
「えーと……。そんな事情とは思わなかった。どうしよう？保護者

を捜すっていう話じゃなくなってきた気がするんだが」
「うーん……。アガット、いいかな？」
エステルはアガットと目配せした。
「仕方ねえ……。これもギルドの仕事だ」
「執事さん、心配しないで。この子はあたしたちが責任をもって預かるから」
「えっ……？」
「ね、レンちゃん。お姉さんたちと一緒に王都のギルドに行かない？すぐに、パパとママを見つけてあげられると思うわ」
「そうなの？でもパパたち、大事な用があるって言ってたのよ？」
「大丈夫、大丈夫。絶対に見つけてあげるから。お姉さんを信じなさいって！」
「うーん……。それじゃあレン、お姉さんといっしょに行くわ。よろしくお願いするわね」
「うん！こちらこそよろしくね」
「ふう……本当にすまない。その子のこと、よろしく頼んだよ」
「ああ、任せておきな。よし……とっとギルドに戻るぞ」

―デュナン公爵専用謹慎室
「……なんだ、まだいたのか？」
「ジー……」
レンがデュナン公爵のことを不思議そうに見ている。
「な、なんだそなたは？」
「ねえ、お姉さん。このオジサン、どうしてこんな面白い髪型をしてるのかしら？」
「な、なんだと～っ！？」
面白い髪型と言われて怒るデュナン公爵。
「ま、まあまあ。子どもの言うことだから……。ちなみに、このオ

ジサンが面白いのは髪型だけじゃないの。服装と性格も面白いのよね～」

「うふふ、そうなんだ」

「何のフォローにもなっとらんわ～っ！！ええい、その小娘を連れてとっとと部屋から出ていけっ！」

とにかくバカにされがちのデュナン公爵だった。

第9章　狂ったお茶会（7）

―キルシェ通り

「おや、貴方がたは……」

エステルたちがエルベ周遊道を抜けてキルシェ通りを歩いていると執事フィリップに出会った。

「あれ……？」

「まあ……。フィリップさん。お久しぶりですね」

「お久しぶりです。クローディア殿下、エステル様。エルベ離宮に行ってらしたのですか？」

「うん、そうだけど……」

「フィリップさんは王都に御用があったのですか？」

「ええ、公爵閣下のお申し付けで買い物などをしておりました。……ひょっとして離宮で閣下とお会いになられましたか？」

「う、うーん、まあね」

「久しぶりに挨拶をさせて頂きました」

「……その様子では、やはり心ないことを言われたようですな。誠に申しわけありません。臣下としてお詫び申し上げます」

執事フィリップは頭を下げた。

「ふふ、とんでもないです。謹慎されていると聞いたので少し心配だったのですが……お元気そうで安心しました」

「そう言って頂けると助かります。それでは私はこれで……。皆様、失礼いたします」

執事フィリップは行ってしまった。

「は～、相変わらず苦労をしょい込んでるわね。あの公爵が小さい時から世話をしているらしいけど……」

「世話役としての経歴は２０年以上だそうです。何でも、その前には親衛隊に勤めていたとか」

「え、そうなの！？うーん、まさに人は見かけによらないわね」

「……。今のオジサン……タダ者じゃないと見たわ」
レンが唐突に口を開いた。
「へっ……。どうしたのよ、いきなり？」
「だって、あんな風に目をつぶって歩けるんですもの。レンにはゼッタイにできないわ」
「うーん、あれは目をつぶっているんじゃなくて細目なだけだと思うけど……。ちなみに驚いていた時はちゃんと目を見開いてたわよ？」
「あら、そうなの？うふふ、驚いたお顔も見てみたくなっちゃったわ」

第9章　狂ったお茶会（8）

―王都グランセル

「さてと……。急いでギルドに戻りましょ。レンちゃんのことについてエルナンさんと相談しなくちゃ」

「それもあるが、そろそろ軍の担当者ってのが来る時間だ。忘れてんじゃねえだろうな？」

「あ……」

どうやら、すっかり忘れていたらしいエステル。色々あったのだから仕方のない面もある。

「ったく、仕方ねぇな」

「あら、どうしたの？たしか、ギルドっていう所にレンを案内してくれるのよね？」

「あ、うん、もちろんよ。それじゃあレンちゃん。遊撃士協会に行きましょ」

「ええ、お願いね」

―遊撃士協会グランセル支部

「ただいま、エルナンさん……。……あ！」

「あ、エステルお姉ちゃん！」

エステルが目にしたのはレイストン要塞で会って以来のシード中佐だった。

「やあ、エステル君。先日顔を合わせて以来だな」

「あれれ……。シード中佐じゃない！？」

「そうか、軍の担当者ってのはあんたの事だったのか。レイストン要塞から来たのか？」

「ああ、その通りだ。つい先ほど、警備艇で王都に到着したばかり

でね」
「そうなんだ……。ちょうどあたしたちも仕事から戻ってきたんだけど」
「おや……？そちらのお嬢さんはひょっとして例の……」
エルナンがレンに目を向けた。
「あ、うん、そうなのよ。ちょっと事情があって連れてきちゃったんだけど……。えっと、レンちゃん。お姉さんたち、少し話があるから2階で待っててくれないかな？」
「あら……。ひょっとしてお仕事の話？」
「う、うん……ごめんね」
「別にいいけど……。お仕事、お仕事ってまるでパパみたいな感じ。レン、そういうのあんまりスキじゃないわ」
レンが不快感をあらわにした。
「うっ……」
言葉に詰まるエステル。
「あ、あの……。レンちゃんって言ったかな？わたしと一緒におしゃべりでもしない？わたし、レンちゃんのこと色々と知りたいな」
「あなたと？うーん、そうね。おしゃべりしてもいいわよ」
「えへへ、ありがとう。それじゃあお姉ちゃん。わたしたち2階で待ってるね」
レンとティータは2階に行った。
「はあ……助かっちゃったわ」
「ふむ、どういう事情かは後ほど聞くとしましょうか。まずは、シード中佐の話を先に聞いていただけますか？」
「あ、うん、いいわよ」
「さっそく聞かせてもらおうじゃねえか」
「すまない。こちらも急ぎなものでね。まず、この話は王国軍からの正式な依頼と考えてもらいたい。君たちに、ある件の調査と情報収集をお願いしたいんだ」
「ある件の調査……？」

「『不戦条約』は知っているね？実は、その条約締結を妨害しようとする脅迫状が各方面に届けられたんだ」
その言葉に一同が驚いた。
「きょ、脅迫状！？」
「それは……穏やかではありませんね。一体どんな内容なんですか？」
「……これをご覧ください」
シード中佐が一通の手紙を差し出した。

「『不戦条約』締結に与する者よ。直ちに、この欺瞞と妥協に満ちた取決めから手を引くがよい。万が一、手を引かぬ者には大いなる災いが降りかかるだろう」

「うわ……」
「なるほど、脅迫状だな。内容はこれだけか？」
「ああ、これだけだ。そしてお気づきのように差出人の名前も書かれていない。正直、悪戯の可能性が一番高いと思われるんだが……」
「単なる悪戯とは思えない気がかりな要素がある――そういうわけだね？」
「ああ……。脅迫文が届けられた場所だ。まずはレイストン要塞の司令部。続いて飛行船公社、グランセル大聖堂、ホテル・ローエンバウム、リベール通信社。そして帝国大使館、共和国大使館、グランセル城、エルベ離宮。全部で９箇所だ」
「そ、そんなに！？」
「なるほど……。ただの悪戯にしちゃ大規模だな。軍が気にするのも無理はない」
「しかし、飛行船公社に七耀教会、ホテルにリベール通信か……。一見、条約締結には関係なさそうな所に見えるがな」
「その場所に条約締結に関わる人物がいるということですか？」
「ああ、その通りだ。まず飛行船公社は帝国・共和国関係者を送迎

するチャーター便を出す予定でね。同じくホテルもすでに関係者の宿泊予約が入っている状況だ。さらに大聖堂のカラント大司教は女王陛下から条約締結の見届け役を依頼されているそうだし……。リベール通信は不戦条約に関する特集記事を数号前から連載している」

「うーん、どこも何らかの形で条約に関わっていることね。いったい何者の仕業なのかしら」

「フム……。これは一筋縄ではいかないね。国際条約である以上、妨害しようとする容疑者は色々と考えられるだろう」

「そうだな。共和国か帝国の主戦派……。もしくは3国の協力を歓迎しないまったく別の国家の仕業か……」

オリビエとジンが色々と考え始めた。

「……もちろん王国内にも容疑者は存在すると思います」

「そして……最悪の可能性が《結社》ね」

「で、軍としては俺たちに何を調べさせたいんだ？」

「君たちにお願いしたいのは他でもない……。脅迫状が届けられた各所で聞き込み調査をして欲しいんだ。具体的には――エルベ離宮とレイストン要塞を除いた7箇所だ」

「飛行船公社、グランセル大聖堂、ホテル・ローエンバウム、リベール通信社、帝国大使館、共和国大使館、そしてグランセル城ですね」

「フッ、どこも制服軍人が立ち寄ると目立ちそうな場所だね。情報部を失った今、聞き込みをギルドに頼るのも無理はないかな」

「恥ずかしながらご指摘の通りだ。そして新しい司令官殿の方針でギルドに回せそうな仕事は片っ端から回せとのことでね。それを実践させてもらったよ」

カシウスの方針か……！

「まったくもう……。父さんも調子いいわねぇ」

「ケッ、いかにもオッサンの言い出しそうな台詞だぜ……」

「ふふ、君たちに依頼したのはあくまで私の一存さ。この度、条約調印式までの王都周辺の警備を一任されてね。警備体制を整えるた

めにはなるべく多くの情報が欲しいんだ。どうか引き受けてもらえないかな？」

「う、うーん……。引き受けたいのは山々なんだけど。もう一つ、片付けなくちゃいけない事件が起きちゃって……」

「先ほどのお嬢さんの件ですね。かいつまんで説明していただけませんか？」

エステルたちはエルベ離宮で、レンが両親に置き去りにされたらしいことを説明した。

「なるほど……。それは放っておけないな。しかし、あんな年端もいかない子供を置き去りにするとは……」

「前に、その親御さんと少し話したことがあるんだけど……。とっても真面目そうで娘想いのご両親って感じだったわ。何かのっぴきならない事情があるんだと思うんだけど……」

「ふむ、そうですね。何かの事件と関わって娘さんを巻き込まないようにしたのかもしれません。しかし、それでしたら一石二鳥かもしれませんよ？」

「へっ？」

「どうやらレンさんのご両親は外国人でいらっしゃるそうです。なら、大使館やホテルなどに問い合わせた方がいいでしょうね」

「あ、なるほど！」

「どちらも脅迫状が届けられた場所ってわけか。あと、飛行船公社にも乗船記録があるはずだぜ」

「王国軍も、各地に通達を回して親御さんの捜索に協力しよう。関所を通ったのなら分かるはずだ」

「ありがとう、シード中佐！」

「ふふ、どうやらこのまま話を進めても良さそうですね。具体的な調査方法と分担はこちらに任せて頂くとして……。やはり、調査結果の報告は文書と口頭がよろしいですか？」

「ああ、盗聴を避けるためにも導力通信は使わないでほしい。実は本日から、エルベ離宮に警備本部が置かれる予定でね。ご足労かと

は思うがそちらにお願いできるかな？」
「うん、わかった。それじゃあ、調査結果の報告はエルベ離宮に直接届けるわね」
「よろしく頼むよ」

エステルたちはシード中佐を見送ってから、調査方法と分担について話し合った。
その結果、エステル、ジン、オリビエ、クローゼ、レインが両国の大使館とグランセル城、リベール通信社を回り……アガットがそれ以外の場所を1人で調査するという分担になった。

「それじゃあ、あたしたちちょっと出かけてくるわ。ティータ、レンちゃん。悪いけどお留守番頼むわね？」
「それなんだけど……。レンはティータと一緒にお買い物に行くことにしたわ」
「へっ！？」
「ご、ごめんね、お姉ちゃん。レンちゃんがどうしても百貨店に行きたいらしくて……」
「あら、心外ね。ティータも、ぬいぐるみとか見てみたいって言ってたじゃない」
「あう……。レンちゃんったらあ」
「う、うーん……。いつレンちゃんのパパたちの情報が入るか分からないから待ってて欲しいんだけど……」
「ジー……」
「じー……」
レンとティータがうらめしげにエステルを見た。
「うっ……。ダブルでその目はズルイわよ」
「いいんじゃねえのか？ティータが付いてりゃ買い物くらい大丈夫だろ」
「それにじっとさせておくのも酷でしょうからね」

アガットとレインは構わないと言った。
「うーん……それもそっか。ティータ、レンちゃん。あたしたちも夕方には戻るからそれまでには戻ってきなさいよ？それに王都は広いから、迷子にならないよう気を付けるように」
「うん、まかせて♪それじゃあレンちゃん。さっそく出かけようか？」
「ええ、もちろんよ。お姉さんたち、またね♪」
ティータとレンはギルドを出ていった。
「ふふ、すぐに仲良くなっちゃったみたいですね」
「うん、さすがに年齢が近いだけはあるわね。でも、レンちゃんとティータの組み合わせかぁ」
「あら、どうしてですか？」
「いや、だって……。ティータって押しに弱そうだし。レンちゃんに色々と振り回されそうな気がしない？」
「確かに……」
「そういやエルナン。あの子の両親の名前はちゃんと聞き出せたのか？」
「ええ、何とか。クロスベル自治州に住む貿易商のご夫妻のようですね。名前は、ハロルド・ヘイワーズとソフィア・ヘイワーズだそうです」
「クロスベルの貿易商、ハロルド&ソフィア夫妻っと……。うん、手帳にメモしたわ」
「こちらもオーケーだ。脅迫状の調査と合わせて聞き込みを始めるとするか」
「打ち合わせ通り、エステルさんは帝国・共和国大使館とグランセル城、リベール通信社を当たってください。各大使館については、ジンさん、オリビエさんに協力をお願いします」
「フッ、任せたまえ」
「要するに、大使さんに紹介すりゃあいいわけだな」
「グランセル城については殿下、お願いします。エステルさんに、

しかるべき方を紹介してあげてください」
「はい、分かりました」
「リベール通信社については、言うまでもなくエステルさん自身が一番の適任ですね」
「うん、ナイアルに聞いてみるわ」
「残りの大聖堂、飛行船公社、ホテル・ローエンバウムですが……。アガットさんにまとめて調査をお願いします」
「ああ。その方が効率がいいだろう」
「それじゃあ、レッツ・ゴー！」
エステルは調査を開始した。

第9章　狂ったお茶会（9）

―グランセル南街区

「さてと……。聞き込みを始めますか。えっと、どこから行こうか？」

「ま、どこからでもいいだろう。カルバード大使館だったら俺はフリーパスになっている。すぐにお前さんたちを紹介してやれるはずだ」

「ボクはエレボニア大使館だね。門番の兵士に取り次げば丁重に案内してくれるハズさ」

「グランセル城でしたら私がいればそのまま入れます。お祖母さまに相談してみるのが一番いいかもしれませんね」

「リベール通信社も特に問題なさそうだし……。まあいいわ、片っ端から訪ねてみることにしましょ」

―共和国大使館

「よう兄さん、久しぶりだな」

「あれれ、ジンさんじゃないッスか！またリベールに遊びに来てくれたんスか？」

「はは、まあそんなところだ。挨拶がてら、エルザ大使に相談があって来たんだが……。今、いるかい？」

「外出はされてないからいらっしゃると思うッスよ。ところで、そちらの方々は？」

「ギルドの仕事仲間でね。ウチの大使さんに紹介しようと思ってるんだ」

「へ～、そうッスか。ま、ジンさんの連れなら通しちゃっても大丈夫ッスね」

兵士タクトは門を開けた。
「どうぞお通りくださいッス。あ、大使館の敷地内は治外法権になっていますから。くれぐれも不審な行動は慎んだ方がいいッスよ」
「だってさ、オリビエ」
エステルは真っ先にオリビエを見た。
「やれやれ、信用がないねぇ」
エステルたちは大使館の中に入っていった。

「ほう、これはこれは……」
「へ～、これがカルバード大使館なんだ。さすが立派で豪華な雰囲気ね」
「それに、どことなく異国情緒のある内装ですね」
「その国の特徴を表していますね」
「ま、東方からの移民を受け入れてきた国だからな。ちなみにエルザ大使の部屋は2階の奥にあるぞ」
「うん、わかった」

～エルザ大使の部屋
「ここが大使の部屋だ。早速、話を聞いてみるか？」
「うん、お願い」
「よし、それじゃあお前さんたちを紹介しよう」
ジンは扉をノックした。
「……？どうぞ、入っていいわ」
「……失礼しますぜ」
ジンたちは部屋に入った。
「あら、ジンさんじゃない！先日帰国したばかりなのに、またリベ

ールに来たのかしら？」
「いやぁ、ギルドの仕事でやり残したことがありましてね。またしばらくの間はリベールに滞在しようと思ってます」
「フフ、さすがはA級遊撃士。何かと忙しいというわけね。ところで、そちらの方々は？」
「えっと、初めまして。遊撃士協会に所属するエステル・ブライトといいます。こちらの3人は協力者のクローゼとオリビエとレインです」
「フッ、よろしく大使殿」
「お初お目にかかります」
「よろしくお願いします」
「よろしく。カルバード共和国大使のエルザ・コクランよ。どうやら面倒な話があって訪ねてきたみたいね？」
「ええ、実は……」
エステルたちは、大使館に届けられたという脅迫状について尋ねてみた。
「あの脅迫状の件か……。それじゃあ、貴方たちは王国軍の依頼で動いているの？」
「一応そういう事になります。ただ、遊撃士協会としても見過ごせる話じゃありません。それを踏まえて協力していただけませんか」
「……ま、いいでしょう。我々にも関係あることだしね。それで、何を聞きたいの？」
「えっと、まずは脅迫者に心当たりがないでしょうか？共和国に、条約締結に関する反対勢力が存在するかとか……」
「それは勿論いるわよ。例えば私なんてそうだしね」
「ええっ？」
その言葉にエステルたちは驚いた。
「ちょいと大使さん……。あんまり若いモンをからかわないでくれませんかね？」
「あら、事実は事実だもの。私のエレボニア嫌いは貴方も知ってい

るでしょう？」
「そりゃまあ……」
「ふふ、勘違いしないで。すでに大統領が決定して議会も承認した案件だからね。個人的な感情は抜きにして話は進めさせてもらっているわ」
「そ、そうですか……。それじゃあ他の反対している人たちは？」
「いるにはいるけど少数派ね。それらの勢力も本気で反対しているわけじゃないし」
「本気で反対していない？」
「あのね、そもそも不戦条約って実効性のある条約ではないの。『国家間の対立を戦争によらず話し合いで平和的に解決しましょう』って謳っているだけなのよ。そういう意味では条約というより共同宣言ね」
「その気になれば、いつでも破れる口約束に過ぎないということだね」
「ふふ、そういうこと。まあ、確かにここ十数年、カルバードとエレボニアの関係は冷えきっていたから……。今回のような機会を通じて話し合いの場が設けられるのは意義のあることだとは思うけどね」
「う、うーん……。確かに脅迫状を出してまで阻止するほどの話じゃないか」
「あの、エルザ大使」
クローゼがいきなり口を開いた。
「カルバードの関係者が脅迫犯ではないとするなら……誰が怪しいと思われますか？」
「ふふ、そうね。個人的な先入観でいえばエレボニアの主戦派あたりが限りなく怪しいと思うけど……。新型エンジンの件もあるしその可能性も低そうなのよねぇ」
「新型エンジンって……もしかして《アルセイユ》用の？」
「そう、それのサンプルがカルバードとエレボニアの双方に贈呈さ

れることになっているの。不戦条約の調印式の場でね」
「あ……！」
「フッ、さすがはアリシア女王。まんまと帝国と共和国を手玉に取ったということだね」
「ええ……。悔しいけど大したお方だわ。新型エンジンは、次世代の飛行船の要とも言える存在よ。それがサンプルとはいえ手に入るチャンスなんですもの。いくら帝国の主戦派にしたって水は差したくないでしょうね」
「な、なるほど……」
「ふむ、ということは……。帝国・共和国共に不戦条約を妨害する可能性はかなり低いということですかね」
「そうなるわね。お役に立てなくて申しわけなかったかしら」
「ううん、そんなことないです。容疑者が減っただけでも状況が分かりやすくなったし。あ、それとは別にお尋ねしたいことがあるんですけど……」
エステルはレンの両親たちについて、エルザ大使に尋ねてみた。
「クロスベルの貿易商、ハロルド・ヘイワーズ……。ふむ、心当たりはないわね。少なくとも大使館を訪れてはないと思うわ」
「そうですか……」
エステルは肩を落とした。
「クロスベルといえば帝国と共和国の中間にある場所よ。帝国大使館にも問い合わせてみた方がいいかもしれないわね」
「はい、わかりました。えっと、色々と教えてもらってどうもありがとうございました」
「あら、どういたしまして。ところであなた……エステル・ブライトと言ったわね。もしかしてカシウス准将の娘さん？」
「あ、知ってるんですか？」
「ふふ、あたり前よ。かつて帝国軍を破った英雄にして王国軍の新たな指導者ですもの。娘さんがいるとは聞いていたけど、こんな形でお目にかかれるとはね」

「えっと、あたしはただの新米遊撃士なんですけど……」
「ええ、分かってるわ。ウチの大使館もギルドには色々とお世話になっているの。今後、ウチの依頼があったら請け負ってくれると嬉しいわ」
「あはは……。機会があったら是非。それじゃあ、失礼しました」
エステルたちは共和国大使館を出て、次に帝国大使館へと向かった。

第9章　狂ったお茶会（１０）

―帝国大使館
「やあ、兵士君。元気でやってるかい？」
「オ、オリビエさん！？今まで何をしてたんですか」
門番の兵士ベルガンが慌てている。
「おや、どうしたんだい？」
「どうしたもこうしたも……。エルモに湯治に行ったきり行方をくらましたそうですね？ミュラーさんが怒っていましたよ」
「フッ……相変わらず可愛い男だな」
「って、オリビエ……。まさかあんた、あたしたちと一緒に行動していることを大使館に知らせてなかったの？」
「ハッハッハッ。愛を求めて彷徨う旅路は忍ぶものと決まっているからねぇ。それはともかく……中に通してもらえるかな？」
「構いませんが……。ええと、そちらの方々は？」
「遊撃士協会の人間よ。こちらの大使さんにちょっと話が聞きたくてね。それで、このお調子者に紹介してもらおうと思ったの」
「なるほど、そうでしたか。身分も確かのようですしお通しできると思いますが……。大使館の敷地内は治外法権となっていますのでくれぐれもお気をつけて」
「うん、わかったわ」
エステルたちは帝国大使館の中に入った。

「ほう……こりゃまた立派な建物だな」
「うわ～……。カルバード大使館に負けず劣らず豪華な雰囲気の内装ねぇ」
「壮麗にして力強い雰囲気……。帝国風の調度で内装が統一されて

いるようですね」
「帝国のお国柄をこの大使館に圧縮している感じですね」
「フッ、帝国の威光をアピールする舞台だからね。残念ながら役者の方がやや見劣りしているようだが」
「何を不穏なことを抜かしているか」
近くの部屋からミュラーが出てきた。
「おお、親愛なる友よ！久しぶりだね。元気にしてたかい？」
「貴様というヤツは……。あれほど常に所在を連絡しろと言いつけておいたにもかかわらず……」
「フッ、これも恋の駆け引きさ。離れているからこそ募る思いもあるものだからねぇ」
「……エステル君、感謝する。どうやら、このお調子者が迷惑をかけてしまったようだな」
「あはは……。ま、それほどでもなかったわ。比較的おとなしくしてたしね」
「まあ、そこの変人は放置しておくとして……。どうやら帝国大使館に用があって来たみたいだな？」
「あ、うん。実は、ここの大使さんに話を聞きにきたんだけど……」
エステルたちは、脅迫状の一件を聞くため帝国大使に面会に来たことを説明した。
「あの脅迫状か……。自分も気にはなっていたがギルドが動くとは思わなかった。王国軍の依頼ということかな」
「一応、そうだけど……。できるだけ中立の立場で調べさせてもらうつもりよ」
「ふふ、いい心がけだ。それでは、自分の方からダヴィル大使に紹介しよう。そのお調子者よりは信用してもらえるはずだ」
「え、いいの！？」
「いやぁ、助かるぜ」
「ありがとうございます」
「よろしく頼みます」

エステルたちは喜んだ。
「えっと……。そんなにボクって信用ない？」
「え……。あるとでも思ってたの！？」
「まあ、お前さんの紹介だと余計な誤解を招きそうだしな」
「えっと……。ごめんなさい、オリビエさん」
「信用は築きにくく、崩れやすいものだと考えてください」
「シクシク……」
「賢明な判断だ。ダヴィル大使は2階の執務室にいる。確認を取ってくるからしばらく待っていてくれ」
「うん、オッケー」
ミュラーは先に2階に向かった。

「えっと……ここが執務室なのかな」
「フッ、その通りさ。それでは華麗に乱入して大使殿を驚かそうじゃないか」
こんなことばかり言うので信用されないオリビエ。
「ミュラーさんにぶん殴られるわよ」
その時、ちょうどミュラーが執務室から出てきた。
「待たせたな。大使がお会いになるそうだ」
「あ、うん。それじゃあ失礼します」
エステルたちは執務室に入った。

「ようこそ。エレボニア大使館へ。私は駐リベール大使のダヴィル・クライナッハだ」
「えっと、遊撃士協会のエステル・ブライトです」
「ジン・ヴァセック。同じく遊撃士協会の者だ」
「ジェニス王立学園2回生、クローゼ・リンツと申します」

「遊撃士協会協力員のレイン・アクアライトと申します」
「そして愛と平和の使者、オリビエ・レンハイムさっ！」
「フン……君か。何でもエルモ村に行ったきり行方をくらましていたそうだな。あまりミュラー君に心配をかけるのはやめたまえ。もちろん、私にもな」
オリビエのノリは無視し、ばっさり切り落とすダヴィル大使。
「フッ、これは手厳しい」
「それはともかく……。例の脅迫状の一件で話を聞きに来たそうだな。どんなことが知りたいのかね？」
「えっと、それじゃあ単刀直入に聞きますけど。大使は脅迫者に心当たりはありませんか。たとえば、帝国内で条約締結に反対する勢力とか」
「はは、率直な物言いだ。しかしあいにくだが全くもって心当たりはないな。皇帝陛下も条約締結には随分と乗り気でいらっしゃる。それに異を唱える不届き者など我が帝国にいるはずがなかろう？」
「そ、そう断言されると身も蓋もないんですけど……。それじゃあ大使さんは帝国以外の人間の仕業だと？」
「当然、そうなるな。おおかた、カルバードあたりの野党勢力の仕業だろう。衆愚政治の弊害というやつだ」
「そりゃ、どうかと思いますぜ。確かに共和国の与党と野党は毎度のように対立してますが……。たとえ条約が阻止されたとしても大統領の責任になるとは思えない」
「フン、詳しいことは知らんよ。確実に言えるのは、脅迫者が帝国の人間ではありえないことだ。それだけ判れば十分ではないかね？」
「う、うーん……」
エステルは言葉に詰まった。
「……あの、ダヴィル大使。オズボーン宰相閣下は不戦条約について、どのように受け止めてらっしゃるのですか？」
「なに……！？」
クローゼの言葉にダヴィル大使は驚いた。

「ほう……」
「フフ……。なかなか鋭い質問だね」
ミュラーとオリビエも同じのようだ。
「えっと……。そのオズボーンさんって？」
「帝国政府の代表者、《鉄血宰相》オズボーン。『国の安定は鉄と血によるべし』と公言してはばからないお方でね。帝国全土に導力鉄道を敷いたり幾つもの自治州を武力併合したりとまあ、とにかく精力的な政治家さ」
「そ、そんな人がいるんだ……」
「こ、こらオリビエ君！自国の宰相を、批判めいた言葉で語るのは止めたまえ！」
「フッ、別に批判をしているつもりはないけどね。ただ、もう少し協力的になってもバチは当たらないんじゃないかな？先ほど、共和国のエルザ大使から色々と話を聞かせてもらったが……。あちらの方が遥かに協力的だったよ」
「な、なに！？」
「このままだとエレボニアという国の度量が疑われてしまうことになる……。それがボクには耐えられないのさ」
「むむむ……」
共和国と比べられて悩むダヴィル大使。
「ダヴィル大使。その件に関しては秘匿すべき情報はありません。率直な事情を説明しても問題ないのではありませんか？」
「……ふん、まあよかろう。先ほどの質問だが……陛下と同じくオズボーン宰相も条約締結には極めて好意的だ。むしろ宰相の方から陛下に進言したと聞いている」
「まあ……」
「ほう……」
「ふむ……。それは条約締結の場で、新型エンジンが手に入るからですかね？」
「いや、彼が陛下に進言したのは新型エンジンの話が出る前らしい。

まあ、事情はどうであれ私としては妙な圧力がかからずにホッとしているというのが本音だ」
「ふむ、なるほどな……。こりゃあ、帝国関係者もシロの可能性が高そうだぜ」
「うん、そうみたいね。大使さん、教えてくれてどうもありがとうございました」
「ふ、ふん……どうだ。私が最初から言った通りだろう。犯人探しがしたければさっさと他を当たるんだな」
「あ、ちょっと待った！えっと、実はもう1つ聞きたいことがあるんですけど……」
レンの両親たちについて、ダヴィル大使に尋ねてみた。
「そうか……。それは不憫なことだな。うーむ、帝国商人なら時々この大使館を訪れるが……。さすがにクロスベルの貿易商には心当たりがないな。ミュラー君の方はどうだ？」
「いや……。自分も記憶にはありません」
「そっか……。うーん、こっちも前途多難な雰囲気ねぇ」
「しかし、脅迫犯と迷子の親を同時に捜しているとはな……。月並みな言い方にはなるがあきらめずに頑張るといい」
「あ……はい！」
「では、自分が門まで送ろう」
エステルたちは執務室を後にした。

「ミュラーさん、ありがとう。おかげで大使さんから色々と聞くことができたわ」
「いや……大したことはしてないさ。それに本来、3ヶ国の問題だ。協力するのは当たり前だろう」
「はは、違いない」
「何とか解決できるといいんですけど……」

「……」
「あれ……。どうしたの、オリビエ？」
「いや……少し考え事をね。脅迫事件の話じゃないから気にしないでくれたまえ」
「う、うん……？」
「……。オリビエ、王都にいる間は大使館に泊まるんだろうな？」
「フッ、もちろんさ。いつものように君のベッドで甘い夢を見させてもらうよ」
「ええっ！？」
「まあ……」
「……お嬢さん方が信じるからくだらない冗談をさえずるな。あまり冗談が過ぎると簀巻きにして床に転がすぞ」
「いやん、それっていわゆる緊縛プレイ？」
「お望みとあらばな。ミノムシのように窓から吊るしてやってもいい」
「ごめんなさい。調子に乗りました」
「うーん、さすが幼なじみ」
「はは、何だかんだ言ってバッチリ息があっているな」
「長年の付き合いがなせるものですね」
「おぞましいことを言わないでもらいたい。まあいい……俺はこれで失礼しよう。調査の方、頑張ってくれ」
「うん、ありがと」
ミュラーは大使館に戻っていった。
「大使館を2つ片付けたからあとはお城とリベール通信ね。手がかりがあるといいんだけど」
「そうですね……。とにかく行ってみましょう」
次にエステルたちはグランセル城を目指した。

第9章　狂ったお茶会（11）

―グランセル城
「おや？」
「貴方たちは……武術大会で優勝した？」
グランセル城門番の兵士ダンと兵士アルツがいつものように立哨していた。
「えへへ、お久しぶりね」
「その節は世話になったな」
「ははは……。今日はどうしたんだ？誰かに面会したいんだったらすぐに取り次がせてもらうぜ」
「それとも城内の見学を希望ですか？」
「うーん、今日は遊撃士のお仕事で来たんだけど……」
「お久しぶりですね。ダンさん、アルツさん」
クローゼが一歩前に出て言った。
「ひ、姫様！？」
「クローディア殿下！お帰りとは知りませんでした！」
あわてて背筋を正すダンとアルツ。
「ふふ、今回は別の用で立ち寄ったんです。エステルさんたちを城内にご案内したいんですけど……通していただけますか？」
「もちろんですとも！」
「殿下の命とあらば！」
「（さ、さすがだわ……）」
「（うーん、大した人望だねぇ）」
「（こりゃ、公爵がひがむわけだ）」
「（比べるまでもないことですけどね）」
「クローゼ殿、並びにエステル殿ご一行がご来場！開門！」
兵士アルツがグランセル城の門を開けた。
「さあ、お通りください！」

「ふふ……お役目ご苦労様です。エステルさん。それでは入りましょう」
「う、うん」
エステルは少しばかり緊張しながらグランセル城に入った。

「さてと……お城での聞き込みだけど。とりあえず女王様には挨拶がてら相談するとして……。えっと、確かユリアさんって留守にしてるんだったっけ？」
「ええ、アルセイユの試験飛行でレイストン要塞に出張中です」
「そりゃ残念だな。あの姉さんがいたら、さぞかし力になってくれそうだったが」
「それじゃあ他に相談できそうな人はいるかな？」
「やはりヒルダ夫人にも相談してみるべきだと思います。レンちゃんのご両親がグランセル城を訪ねていたらきっとご存じのはずでしょうし」
「確かにヒルダさんだったらお城のことは何でも知ってそうね。それじゃあ早速、女王様とヒルダさんを捜すことにしますか」
「お祖母様は、この時間でしたら女王宮にいらっしゃると思います。ヒルダ夫人は……そうですね。そこのメイド室で聞けば、どこにいらっしゃるか分かると思います」
「うん、了解。それじゃあメイド室と女王宮に行ってみましょ」

―メイド室
「エステル様！？クローディア様とジン様も！？し、失礼しました……。永らくご無沙汰しております」
メイドのシアがあまりのことに取り乱した。

「ははっ、久しぶりだな」
「うんうん、シアさんにメイド服を着せてもらったことを思い出すなあ」
これにいち早く飛びついたのがオリビエだった。
「ほう……エステル君がメイド？」
「うん、女王様に会うためにね。そうそう、ヨシュアにも無理やりメイド服を着せてシアさんに化粧してもらったのよ。あの時のシアさんったらもうノリノリだったんだから」
「まあ……」
「きょ、恐縮です……」
「セシリア姫を見事に演じたヨシュア君の侍女姿……。おお、さぞかし可憐なものだった牢に。つくづく公爵の晩餐会に参加できなかったことが悔やまれるよ」
「ふふ……。そうそう、シアさん。ヒルダさんがどちらにいらっしゃるかご存じないでしょうか？」
「あ、女官長でしたら今は資料室にいらっしゃると思います。確か調べたいことがあるとおっしゃってましたから……」
「資料室ね、オッケー」

―資料室
「クローディア様！？それにエステルさんも……」
シアの言った通り、ヒルダ夫人は資料室にいた。
「ヒルダさん。ただいま戻りました」
「えっと、お久しぶりです」
「ええ、本当に……。姫様がエステル殿に協力なさっていることは私も存じ上げております。２人とも……ご無事で何よりでした」
「ヒルダさん……」
「ふふ、ありがとう。実はここに戻ってきたのはギルドの調査を兼

ねてなんです。ヒルダさんに少々お聞きしたいことがありまして」
「私でよければ何なりと。ですが、ここで話すのはいささか人の目がありますね。客室を使わせていただきましょう」

―客室

「なるほど……。例の脅迫状の調査をなさっているのですか。では、お知りになりたいのは犯人の心当たりでしょうか？」
「はい、正にそれです。とりあえず脅迫状の届いた所を一通り回ってみることになって……」
「それはご苦労様です。ですが、心当たりといってもさすがに見当も付きませんわね。城の人間がやったのではないことだけは自信をもって断言できますが……」
「うーん、やっぱりそうよね」
「城に届いた脅迫状は誰に宛てたものだったのですか？」
「恐れながら女王陛下に宛てたものでした。陛下宛ての不審な手紙は検(あらた)めさせていただいていますから私も内容は存じております。まったく、恐れも知らぬ不届き者がいたものですね」
「ちょいと失礼……。他に、城に届けられた手紙で不審なものはありませんでしたかね。王室に対する批判めいた内容の文書とか」
ジンがヒルダ夫人に尋ねた。
「それは……」
答えてよいのか分かりかねるヒルダ夫人。
「ヒルダさん。私の方からもお願いします。できるだけ多くの判断材料が欲しいんです」
クローゼもヒルダ夫人にお願いした。
「そこまで仰られるなら……。幾つか無記名の文書が届いているのは事実です。ただ、王室に対する批判というものではありません。リシャール大佐の減刑を嘆願するものが多いですわね。おそらく一

部の王都市民によるものではないかと……」
「そ、そうなんだ……」
「ふむ、さすがボクがかつてライバルと目した人物だ。逮捕されてもなお人気とはね」
「大佐が有能な人物であったのは誰もが認める所でしょうから……。それを惜しむ人がいても何ら不思議ではないでしょうね」
「しかし、そうした手紙と脅迫状は関係なさそうですな。どうやら王室を動かすことが目的というわけではなさそうだ」
「うーん、それが分かっただけでも良しとしますか。そうそう、ヒルダさん。もう1つ聞きたいことがあるんですけど……」
エステルはレンの両親たちについて、ヒルダ夫人に尋ねてみた。
「クロスベルの貿易商、ハロルド・ヘイワーズ……。ええ、存じていますわ」
「ええっ!?」
「ヒルダさんのお知り合いですか?」
「いえ、数日ほど前に城内の見学を希望された方です。たまたま手が空いておりましたので私が案内させていただきました。確かに、奥様とお嬢様をお連れになっていましたね」
「そ、そういうことね……」
「両親がどこに行ったかの手がかりにはならなさそうだね」
「ただ……少々気になることが」
「気になること?」
「お嬢様の方は、とても楽しげに見学してらっしゃったのですが……それと対照的に、ご両親の方は心ここに在らずといった雰囲気でした。私と話すときは普通にしていましたが多分、無理をしていたのかもしれません」
「ここを初めて見学したにも関わらず心ここに在らずという雰囲気か……。悩みごとがあった可能性は高そうだな」
「そうですね……。その時点で、何かのトラブルに巻き込まれていたのかもしれません」

「ふむ、そのあたりに行方を捜す手がかりがあるのかもしれないね」
「あとは、飛行船公社の記録でどこに行ったのか分かりそうですね」
「ヒルダさん、ありがとう。結構いいヒントを聞かせてもらっちゃいました」
「それはようございました。ところで姫様、それに皆様……。今夜は当然、グランセル城にお泊りになられるのですよね？」
「へっ……？」
「私は王都に滞在している間はやっかいになるつもりですが……。皆さんはどうなさいますか？」
「先ほど言ったようにボクはエレボニア大使館でやっかいになるつもりでね。ご好意だけ受け取っておくよ」
「俺もカルバード大使館に泊まらせてもらうつもりだ。謹んで辞退させてもらおう」
「うーん、レインさんはどうする？」
「私はレンさんのご両親の情報がいつ入ってくるのか分からないのでギルドにいるつもりですが……。エステルさんの好きにしたらいいと思いますよ」
「うーん、そうね。アガットとティータにも相談してみないと決められないわね」
「それでは、いつお泊りになって頂いても構わないようお部屋の準備をさせて頂きます」
「ありがとう、ヒルダさん」
「よろしくお願いします」
「お任せください。私はメイド室に戻りますが皆さんはどうぞごゆっくりなさってください。それでは失礼します」
ヒルダ夫人は客室を出ていった。
「さてと……。次は女王様に会わなくちゃ。女王宮にいらっしゃるんだっけ？」
「はい、多分そちらだと思います」
「フッ、それでは挨拶させていただこうか」

エステルたちは女王宮へと向かった。

第9章　狂ったお茶会（１２）

―女王宮　テラス
「ふふ……。やっと来てくれましたね」
アリシア女王がまるで来るのが分かっていたようだ。
「へ……」
「お祖母様……？」
「ピューイ！」
「あれ、ジーク？」
「なるほど……。ふふ、ジークが気を利かせてくれたんですね」
「ええ、貴方たちが来ることを教えてくれました。お帰りなさい、クローディア。そしてエステルさん……よく来てくださいましたね。事情はカシウス殿から一通り聞かせてもらいました。本当に……色々と大変でしたね」
「あ……。えへへ、気遣っていただいてどうもありがとうございます。でも、やるべき事は見えているしクローゼたちも助けてくれています。だから、あたしは大丈夫です」
「そう……。ふふ、しばらく見ないうちに本当に頼もしくなりましたね」
「オリビエさんもジンさんもようこそいらっしゃいました。どうぞ、部屋にお戻りください。紅茶の用意をさせてもらいます」

「そう……。脅迫状の件で来たのですか。まさか、各国の大使館や教会にまで届いていたとは……。単なる悪戯とは思えなくなってきましたね」
「はい、そうなんです。そこで、関係者から話を聞いて脅迫犯についての目星をつけようということになって……」

「お祖母様は、今回の件に関して何か心当たりはありませんか？特に国内に関してですけど……」
「そうですね……。クローディア。あなた自身はどう思いますか？」
アリシア女王は逆にクローゼに尋ねた。
「私……ですか？」
「あなたも王位継承者ならば日頃から国内情勢について考えを巡らせているはず……。それを聞かせてもらえますか？」
「は、はい……。……」
クローゼはしばし考えを巡らせた。
「不戦条約そのものに関して国内で反対する勢力はほとんどないと思います。ですが、クーデター事件後、極右勢力が追い詰められているという話を聞いたことがあります。それが脅迫状という形で現れた可能性はあるかもしれません」
「ふふ……さすがね。私の意見も大体同じです」
「えっと、どういう事ですか？」
「リシャール大佐以外にも軍拡を主張していた人々は少なくありませんでした。ですがクーデター事件後、そうした主張は完全に封じられた形になっています。さぞかし不安と不満を募らせていることでしょうね」
「えっと、要するに……リシャール大佐以外の軍拡主義者の嫌がらせですか？」
「そう言っても差し支えないかもしれません。もしそうだとしたら……それは彼らの罪というより他ならぬ私の責任でしょうね。リベールでは言論の自由が認められているのですから……」
「お祖母様……」
「あんまり同情する必要ないと思うんですけど……」
「軍縮、軍拡両方の政策を取ることはできません。必ずどちらかの意見は封殺されることになるのですから」
「いえ、言論の自由というものは何よりも増して貴いものです。軍拡論にしても、愛国の精神から来ているのは間違いありません。そ

うしたものをすべて検討しつつ国の舵取りをしていくこと……。それが国家元首の責任なのです」

「……」

「ふむ、しかしそうなると……実際に条約が阻止される危険は低いということですかね？」

「脅迫犯が軍拡主義者ならばそう言えるかもしれませんね。リシャール大佐が逮捕された今、彼らに事を起こす力はありません。問題は、それ以外の人間が脅迫犯だった場合なのですが……。その可能性については私にも見当がついていない状況です」

「そうですか……」

「アリシア女王。１つお聞きしてもよろしいか？」

「ええ、何なりと」

「陛下はなぜ、今この時期に不戦条約を提唱されたのですか？何しろクーデター事件の混乱も完全に収まりきってはいない状況だ。今は国外よりも国内のみに目を向けるべきだと思うのですが」

「ちょっとオリビエ……」

「ふふ、オリビエさんの仰る通りかもしれませんね。ですが不戦条約に関してはクーデター事件よりも以前に両国の政府に打診していました。それを遅らせたとあっては国家の威信にも関わるでしょう。それに『クロスベル問題』も再び加熱しているようですしね」

「ほう……」

「クロスベルって……レンちゃんの住んでる自治州？」

「ええ、帝国と共和国の中間に存在している自治州です。近年、この自治州の帰属を巡って両国は激しく対立してきました」

「ま、帝国と共和国のノドに刺さった魚の骨みたいなもんだ。それに関するイザコザをひっくるめて『クロスベル問題』って言われている」

「そっか……そういう場所だったんだ」

「つまり、不戦条約を通じてリベールが魚の骨を抜く……。それを狙ってらっしゃるのですね」

「一朝一夕に片づく問題ではないでしょう。ただ、そのきっかけを提供できればと思っていました。そしてそれは、大陸西部の安定とリベールの発言権を高めることにも繋がるはずです」
「フッ、お見それしました。どうやらリベール侵攻は想像以上の愚行だったらしい。それを改めて痛感しましたよ」
「今さら何を言ってるんだか……。あ、そうだ。ちょっと話は変わりますけど」
エステルはレンたちの両親について、アリシア女王に尋ねてみた。
「まあ……そんなことが」
「さすがに女王様には心当たりはないですよねぇ？」
「ええ……申しわけありませんが……。グランセル城を訪ねていたらヒルダ夫人が知っていると思いますが……もう訪ねてみましたか？」
「はい……」
「ヒルダさんにも心当たりはないそうです」
「そうですか……。お望みでしたら、クロスベルの自治政府に連絡を取りましょう。いつでも相談してください」
「あ……はい！」
「お祖母様。ありがとうございます。そろそろ私たち次の調査に向かいますが……あの……」
「ふふ、分かっています。今夜はグランセル城に泊まっていってくれますね？その時に、あなたの考えをじっくり聞かせてください」
「はい……よろしくお願いします」

「いやはや、大したお方だ。あの絶妙のバランス感覚は大陸きってというしかないね」
「ああ……まさに理想の君主だな。リベール国民が羨ましいぜ」
「あのようなお方ばかりでしたら、世の中平和でいられるのですが

ね」
「ふふん、あたり前よ。何て言ったってあたしたちの国の女王様だもん」
「……」
ただ一人、クローゼのみがうかない顔をしていた。
「どうしたの、クローゼ？」
「あ、いえ……。お祖母様の凄さを改めて実感してしまって。やはり私など足元にも及びませんね……」
「あ……」
「ふむ、姫殿下。女王陛下は幾つの時に即位されたんだったかな？」
「あ、はい。２０の時だったと思います」
「で、姫殿下は幾つだい？」
「１６になりますが……。……あ……」
「フッ、そういうことだ。陛下も即位された当初から今の政治手腕を振るってきたわけではないだろう。まして今の貴女は、陛下が即位した時よりも若いんだ。比べても仕方ないだろう？」
「武術における『理』の境地は『器』のあるものにしか至れない。その『器』を持っていても一歩一歩の積み重ねがなければ絶対に到達することはできない。そして、陛下はあなたに『理』に至る『器』を見出した。焦ることはないと思いますぜ」
「今は自分にできることをひたすらすればいいだけです。いきなり完璧なことを目指す必要はありませんよ」
「皆さん……。……ありがとうございます」
「ふふ、３人ともいいこと言うじゃない。伊達に年は食ってないわね」
「失敬な……。ボクはまだ２５歳だよ？ジンさんよりも５歳も若いのだからね」
「失敬なのはお前さんの方だろうが……」
「私の年齢は２４ですよ。まだまだ老けてはいませんよ」
「クスクス……。とりあえず、これでお祖母様とヒルダさんから話

が聞けましたね」
「うん……。そろそろ市街に戻ろっか？」
「ええ、そうですね」
エステルたちはグランセル城を出た。

第9章　狂ったお茶会（13）

―グランセル城　外
「ほう、もう夕方か……。時が経つのは早いものだね」
「あと回っていないのはリベール通信社だけでしたね」
「うん、そうなるかな」
「時間も時間だ。とっとと訪ねてみるか」
「日が暮れるまでに話を済ませましょう」

―リベール通信社3階　資料室
「あ、いたいた。お～い、ナイアル。こんにちは～」
「あん……？なんだなんだ！お前さんたちかよ！」
「こんにちは、ナイアルさん」
「フッ、お邪魔させてもらうよ」
「は～、姫殿下に演奏家に『不動のジン』までいるのか。ずいぶん賑やかじゃねえか」
「この人がエステルさんの知り合いの記者さんですか？」
「うん、ナイアルっていうの」
「エステル、そちらさんは誰だ？」
「初めまして。遊撃士協会の協力員のレインと申します。リベール通信は毎号読ませて頂いてますよ。情勢がよく分かるように書かれていて楽しんで読んでいますよ」
「おお、そう言ってくれると嬉しいぜ。これからもよろしく頼むぜ」
「ナイアルは市長選の取材、無事終わったみたいじゃない？」
「フフン、あたぼうよ。それで今日はどうした？何か美味しいネタでもあるかよ」
「いや、どちらかというとあたしたちの方が知りたくてねここに届

けられた脅迫状について聞きたいことがあるんだけど……」
「なんだ、お前らもそいつを追ってやがるのか？てっきり王国軍が調べてると思ったんだが……」
「うん、その軍からの依頼で調査を手伝っているんだけど……。何か情報は入ってないかな？」
「うーん、俺の方も王都に戻ってきたばかりで大した情報は入ってねぇんだ。どちらかというとお前らに聞きたいくらいだぜ」
「なんだ、仕えないわね～」
「君もマスコミの人間だろう。犯人の見当くらい付いてるんじゃないのかね？」
「ぐっ……失礼な連中だな」
「お2人とも、失礼ですよ。あの、ナイアルさん。無理を承知でお願いします。ささいな情報でも構わないので教えて頂けないでしょうか」
「ちょ、ちょっと姫殿下！頭を下げないでくださいよ！ああもう……仕方ねえなあ」
ナイアルは頭をかいて話し始めた。
「これはオフレコだが……脅迫状がどうやらここだけじゃないらしい。まずはレイストン要塞……そして大聖堂に飛行船公社にホテル・ローエンバウム……さらには帝国と共和国の大使館にグランセル城、エルベ離宮……。全部で9箇所も届けられたらしい」
エステルたちはそれを黙って聞いていた。
「ん、どした？」
「あの、ナイアル……。その情報ならとっくに軍の人から教えてもらったんだけど……」
「なぬ～っ！？し、仕入れたばかりの最新のネタだっつーのに……」
「こりゃ、聞くだけ無駄か」
「うん、他を当たった方がいいかもしれないわね……」
エステルたちが帰ろうとした時、ナイアルが引き留めた。
「ちょ～っと待ったあっ！そこまでコケにされちゃあリベールきっ

ての敏腕記者、ナイアル・バーンズの名がすたるぜ。いいだろう…
…現時点での俺様の推理をお前さんたちに聞かせてやるよ！」
「ふーん……」
「フッ、手短に頼むよ」
あまり乗り気でないエステルたち。
「ぐっ……いいかよく聞け。俺はな、今回の事件は愉快犯の仕業だ
と睨んでいる」
「うーん、それはあたしたちも考えたけど」
「そう確信する理由を聞かせてもらいたいもんだな？」
「記者としての経験から言うと……あの脅迫状にはリアリティがな
いのさ。そもそも脅迫状ってのは具体的かつ現実的な要求を掲げて
初めて意味があるもんだ。だが、あの脅迫状にはそれがない」
「フム、確かにそれはそうだね。単に『災いが起こる』だけじゃ関
係者としても対応しようがない」
「そういうことだ。とても本気で、条約そのものを妨害するつもり
だとは思えねぇ。誰だか知らんが、世間を騒がして喜んでいるだけ
だと思うのさ」
「な、なるほど……」
「一理ありそうですね。ただ、脅迫状が9箇所にも届いたのが気に
なりますけど……。どれも条約に関係している所ばかりのようです
し」
「確かに、ただの愉快犯にしちゃ事情を知りすぎているようだ」
「うーん、それを言われると……。ただ、そうした事情ってのはそ
の気になれば調べられるもんだ。とりあえず、俺は愉快犯の前提で
情報を集めてみようと思っている。お前さんたちは、別の視点から
動いてみるのもいいだろうさ」
「うん、そうね。ありがと、ナイアル。結構、貴重な意見だったか
も」
「フフン、そうだろ？まあ、何か分かったらお互い情報交換すると
しようぜ。俺も不戦条約の締結までは王都に腰を据えるつもりだし

な」
「あ、そうなんだ。そういえば……ドロシーはどうしてるの？」
「ああ、あいつならボースに出張中さ。ちょいと写真を撮ってきてもらいたくてな」
「特集？」
「王国軍関連の特集さ。空賊どもが使っていた中世の砦があっただろう？今、あそこは王国軍の訓練基地になっているんだ。飛行船の操縦訓練なんかが行われているらしいぜ」
「へえ、そうなんだ。それじゃ、その基地の取材に行ってるわけね」
「まーな。いまだに1人に任せるのはちょいと心配なんだが……」
「うーん……確かに否定できないわね。あ、そうだ。ナイアルに聞きたいことがもう1つあるんだけど」
「あん？」
エステルはレンの両親たちについて、ナイアルに尋ねてみた。
「クロスベルの貿易商、ハロルド・ヘイワーズ……。うーん、聞いたことねぇな。ウチの『尋ね人』欄にも載せてなかったと思うぜ」
「そっか……」
「ま、サービスのついでだ。どうしても見つからなかったら俺の方でも力になってやるよ。『尋ね人』欄に載せるなりクロスベル方面の知り合いに聞いてみるなりできるだろ」
「ありがと、ナイアル。えへへ、なんだか今日はいつもよりも頼もしいわねぇ。ちょっぴり見直しちゃったわ」
「そーだろ、そーだろ。って、いつもは頼もしくないってことかよっ！？」
「や～ねえ。言葉のアヤだってば」
「よし、それじゃあそろそろギルドに戻るか。アガットのやつも戻ってきてるだろう」
「フッ、そうだね」
「ナイアルさん。どうもありがとうございました」
「これからも頼みますよ」

「おう、こちらこそ頼んだぜ」
エステルたちは一通り回り終えたのでギルドに戻った。

第9章　狂ったお茶会（１４）

―遊撃士協会グランセル支部
「ただいま～」
「おっと、戻ってきやがったか」
アガットはすでに戻っていた。
「ゴメン、ゴメン。ちょっと遅くなっちゃった。えっと……ティータとレンちゃんは？」
「つい先ほど戻ってらっしゃいましたよ。今は2階で、お買い物の戦果を見せ合っているみたいですね」
「そっか。楽しんできたみたいね。えっと、それじゃああたしたちも報告しようかな」
「ええ、よろしくお願いします」
エステルたちは集めてきた情報をエルナンとアガットに説明した。

「なるほどな……。ずいぶん色々な情報を掴んできたじゃねえか」
「まあ、決定的なことは何も分かってないけどね。アガットの方はどうだった？」
「正直、どこもハズレでな。大聖堂、ホテル、飛行船公社……どこも脅迫状を送ってきた犯人の心当たりはないそうだ。飛行船公社は、空賊事件みたいに後からミラの要求があることを警戒しているみてぇだが……。今の所、その要求もないらしい」
「そっか……。結局、犯人の可能性は色々と考えられるんだけど……。《結社》の仕業って可能性はどこまであるのかしら？」
「……何とも言えませんね。これまでの事件を見る限り、彼らは今のところ《ゴスペル》の実験以外の活動はしていません。そして、《ゴスペル》は普通では考えられない現象を引き起こすことが分かっています」

「フム、その意味で今回の脅迫事件は確かに毛色が違っていそうだね」
「現時点で、結社の関与を示す兆候は見られないってことだな」
「うーん……。警戒のしすぎなのかしら」
「いえ、警戒しておくに越したことはないと思います。とりあえず、今できる調査は全てやったと考えていいでしょう。皆さんの報告は、私の方でレポートとしてまとめておきます。明日、それをエルベ離宮にいるシード中佐に届けてもらえますか？」
「うん……。結局、犯人は分からなかったから申しわけないけど、仕方ないよね。そういえばアガット。レンちゃんの方はどうだった？」
「そっちは幾つか判ったことがある。まずはホテルだが……あの子と両親は2週間ばかり王都に滞在していたようだな。その間、ずっとホテルの同じ部屋に泊まっていたらしい。で、ようやく今朝、チェックアウトしたそうだぞ」
「なるほど……」
「次に大聖堂だが……。滞在中、何度か大聖堂に礼拝に来ていたみたいだな。で、応対した司祭が言うには両親の様子が変だったそうだ。礼拝中、上の空だったらしい」
「ヒルダ夫人の話と同じですね」
「うん……」
「最後に飛行船公社だったが……。……実はな。見つからなかったんだ」
「へ……何が？」
「もしかして乗船記録がですか？」
「ああ。ここ半年くらいの乗客名簿には該当者が見当たらなかったんだ」
「ええっ！？」
「フム……ミステリーだね。となると、陸路を通ってリベールに来たということかな？」

「そ、そんなはずないわよ。だって初めて会った時、飛行船で到着したとか言ってた覚えがあるもん」
「ああ、エア＝レッテンでか。たしか大きな湖が見えたとか言ってやがったな」
「ふむ、そうでしたか。だとすれば、ご両親が偽名を使っていたのかもしれませんね」
「ぎ、偽名……」
「後ろ暗いことがあったのか、トラブルを恐れていたのか……。いずれにせよ、旅に出る前から危険は予測していたみたいだな」
「……」
「レンさんのご両親については各地のギルドにも連絡しました。今はあせらず、情報が入るのを待った方がいいかもしれませんね。とりあえず、レンさんですが……しばらくギルドで預かった方がいいかもしれません」
「うん……トラブルに巻き込まれる危険もあるしね。えっと、よかったらあたしに預けてくれない？他人事とは思えないし……」
「そう言って頂けると助かります。王都滞在中、皆さんの宿泊はギルドが手配させていただきます。レンさんの宿泊費も持たせて頂くのでご安心を」
「正直、助かっちゃうわ。あ、そういえばヒルダさんの話があったっけ？」
エステルはアガットに王城に泊まってはどうかという申し出があったことを説明した。
「ほう、そんな話が……」
「……俺は遠慮するぜ。何度も泊まるにはさすがに堅苦しそうだ。ホテルの方が、何か起こった時ギルドと連絡がつきやすいしな」
「それは確かにそうかも……。レンちゃんの両親の連絡が入ってくるかもしれないし。クローゼ、悪いんだけど……」
「ふふ、お気になさらずに。ヒルダさんの方には私の方から説明しておきます」

「ボクとジンさんはそれぞれの大使館泊まり。姫殿下はグランセル城泊まり。君たち3人と年少組はホテル泊まりというわけだね。その前にどうだろう。せっかくだから、酒場で一緒に夕食を共にしないかい？」

「あ、いいかもね。オリビエのピアノも久しぶりに聞いてみたいし」

「フッ、嬉しいことを言ってくれるじゃないか。エステル君もようやく大人の味が判ってきたようだね？」

「いかがわしい言い方するんじゃないわよ」

「しかし、そういう事ならすぐに出かけた方がいいな。これだけの大所帯だ。席がなくなる可能性もある」

「よし、チビたちを呼んでとっとと酒場に向かうとするか」

その晩、エステルたちはレンと共に《サニーベル・イン》で夕食を取ることになった。その内、当然のように酒盛りとオリビエのピアノ演奏が始まり……しまいにはナイアルとミュラーまで酒場に呼び出されて参加する始末……。王都の夕べは、そうして楽しく過ぎていった。

―王都グランセル　北街区

「さてと……あたしたちはここまでね。クローゼ。気を付けて帰ってね」

エステルたちは、ホテルの前でクローゼと別れることになった。

「ふふ、近くですから大丈夫ですよ」

「あら、お姉さん？このあたりに住んでいるの？」

「え、ええ。親戚の家に泊まるんです。それでは皆さん、失礼します」

「ああ、また明日な」

「クローゼさん、さよーなら！」

「また明日、お会いしましょう」

クローゼはグランセル城に帰っていった。
「それにしても……。やたらと盛り上がったわねぇ。オリビエに呼び出されてミュラーさんまで来ちゃうし」
「そういうお前だってあの記者を呼んだじゃねえか」
「あはは……どうせだったらと思ってね。レンちゃんの方はどうだった？」
「うふふ、楽しかったわ。お料理も美味しかったし、面白い話もいっぱい聞けたし。ピアノも凄くステキだったわ」
「うんうん、オリビエさんってピアノがとっても上手なんだね。ちょっとビックリしちゃった」
「ま、一応演奏家を名乗っているくらいだからね。アガットの方は切り上げてもよかったの？まだジンさんたちは盛り上がってたみたいだけど」
「あいつらに付き合ってたらいつまでもキリがねぇからな。散々歩き回って疲れたし、とっとと休むことにするぜ」
「そっか……。レインさんはよかったの？」
「私も明日が早いので休もうと思います」
「それじゃ、あたしたちもホテルの部屋を取りますか」
エステルたちはホテルに入っていった。

第9章　狂ったお茶会（15）

―ホテル・ローエンバウム

「遊撃士協会の方ですね？お話は伺っております。生憎ですが、5人全ての方が泊まれる部屋はありませんので……。2人部屋を2つ、1人部屋を1つという形でお願いできませんでしょうか？」

「あ、そうなんだ。アガット。どういう風に分かれる？」

「俺はどこでもいい。お前らで好きなように決めろや」

「私は1人で構いませんよ」

「だったらレンはお姉さんと一緒がいいわ。ずっとお仕事ばっかりであんまり話せなかったんだもの」

「あ、レンちゃんズルい。私もお姉ちゃんと一緒に部屋がいいのに……」

「ふふん、言った者勝ちよ。何だったら一緒のベッドに寝てもいいけど？」

「えへへ、うそうそ。今夜はレンちゃんにお姉ちゃんを譲ってあげる」

「うふふ。ありがと、ティータ」

「うーん……。譲られちゃったわ」

「だったら俺はチビスケと同室か。はは、爺さんと3人で潜伏してた時を思い出すな」

「あ……。えへへ、そーですね」

～エステルとレンの宿泊部屋

「わぁ、パパたちと一緒に泊まった部屋とは違うわね。むこうの窓からはおっきな建物が見えるし……」

「あ……」

エステルの頭にヨシュアとホテルに泊まったことが浮かんだ。
「どうしたの、お姉さん？」
「あ、うん、ちょっとね。それよりも……レンちゃん、ごめんね。パパとママのことなかなか見つけられなくて」
「ううん、いいの。だってパパたち、ちゃんと迎えに来てくれるってレンに約束してくれたもの。別にお姉さんたちが無理をして捜すことないわ」
「でも……」
「レンのパパとママはかくれんぼが上手だったの。もちろん、レンほどじゃないけどね。だから簡単には見つからないと思うわ」
「あはは、そっか。それじゃあ無理はしないでノンビリ捜すことにするわね」
「ええ、それがいいわ。それよりも……レンお姉さんに2つお願いがあるんだけど」
「お願い？なに？」
「あら、だめよ。お願いを聞いてくれるって約束してくれなければ言えないわ」
「そうきたか……。あたしに出来ることなら何でも叶えてあげるわよ」
「ほんと？うれしい！最初のお願いはね……レンのことは、レンって呼んで」
「？？？ああ……！呼び捨てでいいってこと？」
「ええ、そうよ。ティータは呼び捨てなのにレンだけ“ちゃん”付けなのはちょっと納得いかないわ」
「あはは……そういうもん？うん、別にいいけど……。何だったらあたしのこともエステルって呼び捨てにする？」
「お姉さんを？エステル……エステル……うん、いいかもしれないわ♪」
「あはは……だったらそう呼んでよ。よろしくね、レン」
「よろしく、エステル。うふふ……うれしいな」

「ふふ、そっかそっか。それでレン。もう1つのお願いって？」
「ええ、あのね……。さっき、部屋に入った時驚いた理由を教えてくれる？」
「あ……」
「エステル、ちょっとだけ哀しそうな顔をしてたわ。だから気になっちゃったの」
「……そっか。前にね、この部屋にある人と泊まったことがあるの。その人のこと、ちょっと思い出しちゃってね」
「わあ！それってやっぱり恋人！？」
「ふふ……残念ながらそうじゃないわ。家族として一緒に暮らしていたあたしの兄弟みたいな人かな。今はちょっと一緒にいないんだけど……」
「ふーん……。その人ってどういうお兄さんなの？名前は？見た目は？」
レンは興味津々に聞いてくる。
「あ、うん……。ヨシュアっていうんだけど。黒髪に琥珀色の瞳をしててかなりのハンサムだったかな。んー、ハンサムっていうより美人って言うべきなのかしら」
「美人さん？」
「ふふ、だってお芝居とかでお姫様の格好とかしちゃってね。これがまた、恐いくらいに似合っちゃうようなヤツなのよ」
「うわぁ、いいわねぇ～。レンもその人に一度会ってみたいわ。ねえねえ、いつ会えるの？」
「あ、うん……。それはちょっと分からないな」
「……。ひょっとして、いつ会えるか分からないから哀しいの？」
「……ううん、それは平気。何年かかっても絶対に連れ戻すって決めているから」
「それじゃあ、どうして？」
「きっと今ごろヨシュアは無理をしていると思うから……。なのに

……支えてあげられないのが……ちょっと哀しいかな」
「……」
「あはは、ゴメンゴメン。こんな話、事情を知らないレンには面白くないよね」
「ううん、そんなことないわ。そのヨシュアってお兄さん、本当にステキなヒトみたいね」
「素敵ねぇ……。けっこう酷いヤツだと思うけど。あんな勝手な別れ方をして……あ、あたしの初めてを……」
「？初めて？」
「わわっ、何でもない！今日は疲れちゃったしそろそろ寝るとしましょ！」
「あ～、ごまかした！もう、全部聞き出すまでゼッタイに眠らないんだから！」
「うう、しまったなぁ……」
その後、エステルとレンはベッドに入ってからも他愛のないお喋りをしていた。やがて、レンがうつらうつらとして穏やかな寝息を立て始めた頃……疲れの溜まっていたエステルも瞬く間に意識を失っていった。

第９章　狂ったお茶会（１６）（前書き）

２００話到達です！

第9章　狂ったお茶会（16）

―ラヴェンヌ廃坑

真夜中のラヴェンヌ廃坑に複数の特務兵が入っていった。その様子を陰からシェラザードとアネラスが見張っていた。

「ふふっ……ビンゴみたいですね」

「ええ……ようやく尻尾を掴んだわ。それにしてもラヴェンヌ廃坑とはね。上手い場所に目を付けたもんだわ」

「確か、空賊団が定期船の荷物を奪うために利用した場所でしたよね？」

「ええ、そうよ。途中にある露天掘りの場所で空賊団の一味と交戦したわ」

「とすると……。そこをアジトにしている可能性が高そうですねぇ。どうします？このまま踏み込みますか？」

「ええ、ギルドと軍に連絡しているヒマはないわ。とりあえず潜入して残党の規模を確かめるわよ」

「ラジャーです」

シェラザードとアネラスはラヴェンヌ廃坑に入っていった。

ラヴェンヌ廃坑の露天掘りの場所にたどり着いたシェラザードとアネラス。しかし、2人はその場所に違和感を感じていた。

「おかしいわね……。予想通りのアジトみたいだけど……。人の気配が感じられないわ」

「そ、そうですねぇ……。さっきの兵士たち、どこに行っちゃったのかな？」

「さて……気付かれたか、あるいは……。まあ、いいわ。とにかく慎重に調べましょう」

シェラザードとアネラスはテントの中を調べ始めた。

「ダメですねぇ。もぬけの殻って感じです。先輩の方はどうですか？」

「こっちも同じよ。留守中なのか、あるいは拠点を移った直後なのか……。せめて行き先が分かるような手がかりがあるといいんだけど」

「えっと、行き先の手がかりにはならなさそうなんですけど……。あっちのテントでこのファイルを見つけました」

「あら、見せてみて」

アネラスはシェラザードにファイルを渡した。

「ふーん……。妙な図面が書かれているわね。《オルグイユ》開発計画……。何かの乗物の設計図みたいね」

「《オルグイユ》……ちょっとオシャレな名前ですね。やっぱり飛行船なんでしょうか？」

「うーん、専門家じゃないからちょっと判りかねるけど……。……あら？」

シェラザードがページをめくっているうちに声を上げた。

「どうしたんですか？」

「ページの間にメモがあったわ。『招待状は配り終わった。テーブルとイスも用意した。お茶会の準備はこれでお仕舞い。あとはお茶菓子を焼いてお客様が集まるのを待つだけ』」

「へ～。ほのぼのとした内容ですねぇ。何だか絵本の一節みたい」

「ふむ……どうやら何かの符牒（ふちょう）みたいね。問題は何を意味しているメッセージかなんだけど……」

その時、シェラザードが何かに気付いて叫んだ。

「散って！」

「え……！」

シェラザードたちに向かって銃弾が撃たれた。その場を囲んでいたのはラヴェンヌ廃坑に入っていった3人の特務兵だった。
「うそ……いつのまに」
「ふふ、ずいぶんとアジな気配の消し方をしてくれるわね。あのアッシュブロンドの少尉さんにでも習ったの？」
「……」
しかし、特務兵たちは何も答えずに、シェラザードたちに近寄ってきた。
「（シェラ先輩……）」
「（ええ……どうやら普通じゃないわね。連携で一角を崩してそれぞれ残りを片付ける。できるわね？）」
「（お任せあれ！）」
「それじゃあ――行くわよ！」
「はいっ！」
シェラザードたちは特務兵たちと交戦した。

第9章　狂ったお茶会（17）

「ふう、何なのこいつら……。倒したはいいけど……どうにも奇妙な手応えだわ」
「うーん、何か危ない薬でもやってるんじゃないんですか？前にルーアンの不良グループが薬で操られていたって聞きましたけど」
「エステルたちが解決したっていう事件ね。でも、そういうのともまた違った手応えだったわ。まるで石か木を打ったような……」
その時、背後から拍手の音が聞こえてきた。
「あはは、スゴイスゴイ。お姉さんたち、なかなか優秀な遊撃士だねぇ」
現れたのはピンク色の服に黄緑色の髪をした奇抜な青年だった。
「あなた……」
「うふふ……。執行者Ｎｏ．０。《道化師》カンパネルラ。《身喰らう蛇》に連なる者さ」
青年は隠そうともせず名乗った。
「あ……」
「とうとう現れたわね……」
シェラザードとアネラスは武器を構えた。
「あなた……何でこんな場所にいるの？特務兵の残党と一緒に何をしようとしているわけ？」
「うふふ、今回の僕の役割はあくまで『見届け役』なんだ。具体的な計画のことを僕に尋ねるのは筋違いだよ。というか僕も知らないしね」
「『見届け役』ですって？」
「ま、『お茶会』に参加するなら急いだ方がいいかもしれないよ。どこで開かれるかは知らないけど少なくともここじゃないのは確かさ。それとも、ここで僕と一緒に夜明けのコーヒーでも飲もうか？」
「……」

「え、えっと君……。まだ若いみたいだけど本当に《結社》の人間なの？悪いことは言わないからそんなの止めちゃったほうがいいよ」
「うふふ、優しいお姉さんだなぁ。でも、道化師のことを笑い者にするのならともかく……心配するのはマナー違反だね」
「え……」
道化師カンパネルラが指を鳴らすと、背後で倒れていた特務兵たちが起き上がった。
「う、うそ！？」
「そんな……完全に戦闘不能にしたはずよ！」
「うふふ、だから君たち遊撃士ってのは甘いんだよね。やるんだったら徹底的に壊すつもりじゃないと？」
再び道化師カンパネルラが指を鳴らすと、特務兵たちが炎に包まれ砕け散った。
「くっ……」
「あうっ……」
バラバラになった特務兵たち。
「な、なんてことを……！」
「ひどい……こんなのって……」
「あはは、驚いた？なかなかよく出来たビックリ箱だろう？うふふ、これにて今宵のショウはおしまいさ。それでは皆様、ご機嫌よう」
「待ちなさいッ！」
シェラザードは鞭を振りかざしたが、道化師カンパネルラは一瞬にして姿を消した。
「……」
「……。シェラ先輩……あの……」
「……ええ……。苦痛を感じずに逝けたのならいいんだけど……。いずれにせよ……このままにはしておけないわね。アネラス、悪いんだけどシーツを調達してきてくれる？」
「は、はい……！あれ……？」
アネラスは転がっていた特務兵の腕を拾った。

「ちょ、ちょっと!?」
「あの、シェラ先輩……この腕……作り物みたいなんですけど」
「えっ……!?」
シェラザードも特務兵の残骸を調べた。
「歯車にゼンマイ……それに結晶回路の破片……。ひょっとしてこれ……」
「自律的に行動する導力人形……いわゆる人形兵器ってヤツやろうね」
テントの後ろから現れたのはケビン神父だった。
「えっ……」
「あなた、確か……!」
「おっと、オレのこと覚えとってくれたみたいやね。改めて――七耀教会の巡回神父、ケビン・グラハム言いますわ。シェラザード・ハーヴェイさんとアネラス・エルフィードさんやね?者は相談なんやけど……お互い、情報交換せぇへんか?」

第9章　狂ったお茶会（18）

―アンセル新道
深夜の道路を特務兵たち（人形兵器）が集団で行動していた。
その特務兵たちを空賊団たちが待ち伏せていた。
「どりゃあああああっ！」
木の上で待機していたドルンが飛び降り、導力砲を撃った。
「キール、お次だ！」
「任せろ、兄貴！」
木の陰からキールが爆弾を投げた。
「ジョゼット！」
「オッケー！」
ジョゼットも同様に爆弾を投げて銃を放った。
「ヨシュア！」
特務兵の背後から音もなくヨシュアが姿を現し、
「……」
流れるような動きで一閃にして切り伏せた。
「へへ、相変わらず見事なてなみじゃないか」
「……貴方たちこそなかなか見事な連携だった。おかげで一気にケリがついたよ」
「フ、フン……おだてても何も出ないからね。これで10体目だよ？あと、どれだけ狩ればいいのさ？」
「そうだな……そろそろ狩りつくしたと思う。王国軍も動くだろうし、このあたりが引き際だろう」
「そっか……」
「しかし、結社っていうのは何を考えてるのか判らねぇな。どうして、あの黒坊主どもの人形なんざ徘徊させているんだよ？」
「そう、正にそれだぜ。本物の特務兵の残党たちは一体どこに行っちまったんだ？」

「多分、あのメモにあった『お茶会』の可能性が高い……。人形兵器は、そこから軍の目を逸らすために使われたんだろう」
「なるほどな……。どこで何をするかは知らんが、どうにもキナ臭い雰囲気だぜ」
「まあ、俺たちが手を貸す義理なんざ無いんだが……。その『お茶会』ってのは放っておいてもいいのかよ？」
「……。今ごろ、遊撃士たちがあの廃坑を捜索しているはずだ。このまま軍とギルドに任せよう」
「そうそう、メモと設計図を残しただけでも十分だってば。こうしてギルドに代わって人形退治だってしてるんだし。あとは、あの脳天気女たちに任せとけばいいんじゃないの？」
「……」
「ふ、ふん、何だよ。今さら昔の仲間が心配なの？」
「いや……もう僕には関係のない人達さ。『お茶会』が始まれば軍の警戒もそちらに向かう。その機を逃さずに動こう」
「おうよ！」
「さーて、忙しくなりそうだぜ」

第9章　狂ったお茶会（19）

―エルベ離宮　紋章の間

翌朝、エステルたちはエルベ離宮にいるシード中佐に脅迫状に関する調査報告書を届けた。

「なるほど……。これは充実した報告書だな。本当に助かった。よくここまで調べてくれたね」

「う、うーん……。犯人を特定できなかったのが正直、心残りなんだけど……」

「調査報告としては十分すぎるさ。この段階で脅迫犯が見つかるとはこちらも考えていなかったからね。どちらかというと、今後の警備の参考にするために必要だったんだ」

「そう言ってくれると助かるぜ。で、王国軍の方ではあれから進展はあったのかい？」

「まあ、昨夜のうちに警備体制の第一段階を完了したくらいかな。以後、条約調印式が終わるまでこのエルベ離宮が警備本部となる」

「それで兵士さんたちがけっこう詰めてるんだ。そういえば、周遊道にも魔獣がほとんどいなかったわね」

「今朝、大規模な掃討作戦が実施されたばかりだからね。条約調印式までの間、定期的に行おうと思っている」

「普段からそうしてくれるとウチとしても助かるんだがな」

「はは……そう言われると耳が痛いな。そうだ、昨日言ってた女の子のご両親についてだが……。各地の関所に通達は出したがいまだ情報が入っていなくてね」

「そっか……気長に待つしかないのかな」

「こちらも情報が入り次第、ギルドに知らせることにしよう。とりあえず、脅迫状の調査はここまでやってくれれば充分だ。後でギルドに報酬を振り込ませてもらうよ」

「うん、よろしく。でも……これから先はどうするの？あたしたち

も、このまま王都で警戒に当たった方がいいのかな？」
「もし、王都に残るのであれば協力してもらえると助かるな。ただ、君たちが忙しいのは我々も理解しているつもりだ。無理を言うつもりはないよ」
「うーん……。レンの件もあるし、エルナンさんに相談してみる？」
「ああ、そうしてみるか」
「……失礼します！」
突然、ベルク副長が部屋に入ってきた。
「なんだ、どうした？」
「えっと……」
ベルク副長がエステルたちを見た。
「問題ない、彼らは協力者だ」
「は、それでは……。先ほど、レイストン要塞から導力通信で連絡がありました。どうやらボース地方に情報部の残党が現れたようです」
「えええっ！？」
「なんだと！？」
「ふむ、詳しく話してくれ」
「それが、最初に発見したのはギルドの遊撃士だったらしく……。正確な現地の状況はいまだ掴めていないようですね。とりあえず、司令部からは全王国軍部隊に第２種警戒体制に入るようにと指示がありました」
「そうか、分かった。……どうやらお互いに忙しくなるかもしれないな」
「ああ、そうだな。エステル。急いでギルドに戻るぞ」
「うん……！シード中佐。警備のお仕事、頑張ってね！」
「ああ、そちらも頑張ってくれ」

「あ、エステル！」
紋章の間を出たところで、中庭で遊んでいたレンとティータが戻ってきた。
「お姉ちゃん、アガットさん。どうもお疲れさまでした」
「ふぅん、ずいぶん早くお話が終わったみたいね」
「だから言ったでしょ？調査の報告書を渡すだけだって。素直にギルドで待っててくれればいいのに」
「まあ、ひどいわ！レンはエステルと一緒にいたいだけなのに……。ほら、ティータも何とか言ってあげなさいな」
「わ、わたし？うーん、お姉ちゃんたちと一緒にいたいのは確かだけど……お仕事だし、あんまりワガママは言えないかなぁ」
「ふーん、そう。だったらエステルのことはレンが取っちゃうことにするわ。ティータは仲間外れなんだから」
「あう……レンちゃんひどいよ～」
「ほらほら、ケンカしないの。ティータはお姉さんなんだから少しは大目に見てあげないと」
「で、でもでも……。いつの間にかお互い呼び捨てになってるし……。お姉ちゃん……わたし、いらない子なの？」
「も～、そんなことあるわけないじゃないの」
エステルはティータを抱き締めた。
「ほれほれ、どうだ～？そんな顔してると抱き締めちゃうわよ～？」
「あん、もう。お姉ちゃんったらぁ」
「ああっ！ティータ、ずるいわ！」
「やれやれ。付き合ってらんねぇな。それはともかく……とっととギルドに戻るぞ」
「あ、そうだったわね」
エステルはティータから離れた。
「えっと……何かあったんですか？」
「ああ……。どうやらボース地方で特務兵の残党が現れたらしい」
「ホ、ホントですかっ！？」

「うん、詳しいことはまだ分からないんだけど……。とりあえずギルドなら情報が入っていると思うし」
「そ、それじゃあ確かに急いで戻らないとダメだよね」
「む～、すぐにレンに分からない話をする」
「あはは、ごめんごめん」
「とりあえず、用事があるからとっとギルドに戻るってことだ」
「あら、そうなの。残念ねぇ、こんなにたくさんの兵士さんがいたらかくれんぼも楽しいと思うのに。隠れていいのは、このあたりの森全部っていうのはどうかしら？」
「ふえ～……すごくダイナミックだね」
「そ、それはさすがにカンベンして欲しいかな……。それじゃあ、さっそく王都に戻ることにしましょ」
エステルたちは急ぎギルドに戻ることになった。

第9章　狂ったお茶会（２０）

王都に戻ろうとしたのだが……。
「あれ……？」
エステルがエルベ離宮の入口でデュナン公爵を発見した。どうやら何か揉めているようだ。
「どういうことだ、これは！？この最高位の王位継承権を持つデュナン・フォン・アウスレーゼを馬鹿にしておるのかっ！？」
「め、めっそうもありません。実は今朝、エルベ周遊道で魔獣の掃討作戦がありまして……。ですから護衛の数はこれだけでも充分かと存じます」
王国軍士官がたじろいだ。
「そういう意味ではない！私ほどの重要人物に対して護衛が３人のみとは無礼千万！せめて１０名は用意するのだ！」
「し、しかし……」
「閣下……あまり無理を申されては。せっかく陛下のお許しが出たのです。それだけでも僥倖（ぎょうこう）だと思いませんと……」
「黙れ、フィリップ！そもそも処分そのものが不当極まりなかったのだ。ならば親衛隊の全隊士をもって出迎えるのがスジであろう」
「えっと、親衛隊全員とはさすがにいかないんだけど……。よかったらあたしたちが一緒に付いてってあげようか？」
そこでエステルが話に入った。
「そ、そなたたちはッ！？」
「おお、皆さん……」
「まったくもう……公爵さんも相変わらずねぇ。あんまりワガママ言ってみんなを困らせたらダメじゃない」
「き、気安く公爵さんなどと呼ぶでない！どうしてそなたらがこんな場所にいるのだ！？すでに民間人の立ち入りは禁止されたのではないのか！？」

「ここの警備責任者さんに届けものがあって来ただけよ。で、公爵さんたちはこれから散歩にでも行くの？」
「ふ、ふん。聞いて驚くでないぞ……。私を縛りつけた不当な戒めがついに解かれることとなったのだ！」
デュナン公爵が胸を張って言った。
「不当な戒めが解けた……？」
「ひょっとして謹慎処分が解かれたのか？」
「はい、今朝がた、陛下からの連絡がございました。離宮を辞し、グランセル城に戻ってくるようにとのお言葉です」
執事フィリップが説明してくれた。
「やれやれ……お人好しな婆さんだな」
「へ～、でもまあ良かったじゃないの。もう2度と利用されないようにに自分をしっかり持たなくちゃね」
「なぬ……？」
「うーん、やっぱり生活態度を見直した方がいいんじゃない？公爵さんってだらけきった生活してそうだし。運動なんかお勧めするわよ？」
エステルの言葉に周りが沈黙した。
「あれ？あたし変なこと言った？」
「いえ……エステル様のおっしゃる通りかと思います。そもそも閣下が自分をしっかりお持ちでいればリシャール大佐に利用されることなどなかったはず……。このフィリップ、今一度その事を進言させて頂きたく……」
「ええい、説教はたくさんだ！もうよい、このような場所に一秒たりとも長居できるものか！とっとと王都に向かうぞ！」
「おお……」
王国軍士官がほっとした。
「あれ？付き合わなくてもいいの？」
「いらぬ！行くぞ者ども！」
デュナン公爵は王国軍士官と兵士3人を引き連れて行ってしまった。

「エステル様、毎度ながら本当にありがとうございます。何とお礼を言っていいか……」
「あはは、いいってば。でも、フィリップさんもたまにはちゃんと叱らなくちゃ。叱ってくれる人がいないからああなっちゃったんじゃないの？」
「え……」
「根は悪人じゃないと思うし、その気になれば立ち直れるわよ。要はきっかけじゃないかしら？」
「エステル様……。その言葉、このフィリップ、胸に染み入りましたぞ……」
執事フィリップが感動した。
「フィリップ！何をしておるのだ！グズグズしていると置いて行ってしまうぞ！」
「は、はい、ただいま。それでは皆様……わたくしめはこれで」
執事フィリップは急いでデュナン公爵のところに向かった。
「んー、やっぱり一緒の方がよかったと思うんだけどなぁ」
「……なんと言うか。正直、お前のそういうところは真似できねぇぜ」
アガットがエステルに言った。
「えっ？」
「えへへ……。やっぱりお姉ちゃんは凄いな」
「初めて会った時からそんな気はしてたんだけど……。エステルって、限りなくお人好しさんなのねぇ」
ティータとレンも同感のようだ。
「お人好しって……なんで？」
ただ一人、エステル本人が自覚していなかった。
「あー、分からないならそのままでいいっての。とにかく王都に戻るぞ」
気を取り直して王都に戻るエステルたち。

第9章　狂ったお茶会（２１）

―遊撃士協会グランセル支部
「ただいま～！」
「おお、戻ってきたか」
「皆さん、お帰りなさい」
「どうもお疲れさまでした」
ギルドで待機していたジン、クローゼ、レインが出迎えてくれた。
「ご苦労さまでした。報告書は渡せたようですね」
「うん、そっちは問題なく」
「つい先ほど、王国軍から報酬の振り込みがありました。取り急ぎ、それをお渡しておきましょう」
エステルは報告書の政策に関する報酬を受け取った。
「さすがシード中佐。仕事が早いわね。それよりも……ボース地方に特務兵どもが現れたって聞いたんだけど」
「やはり離宮の方にも連絡が行ったみたいですね。ちょうどその話をしていたところなんです」
「発見したのはギルドの人間らしいな？」
「ええ……。シェラザードさんたちです」
「シェラ姉たちが！？」
「ラヴェンヌ廃坑の内部でアジトを発見したそうです。生憎（あいにく）、すでに引き払った後だったみたいですが……」
「ラヴェンヌ廃坑の内部……空賊たちと戦った場所か」
「チッ、盲点だったな……。引き払ったってことはすでに別の地方に行ったのか？」
「それが、ボース地方の各地で特務兵の姿が目撃されたらしく……。現在、国境師団が総力を挙げて調査をしているみたいですね」
「そ、そうなんだ……。あたしたちもボース地方に助っ人に行った方がいいのかな？」

「いえ、陽動の可能性もあります。現地の状況が分かるまで迂闊に動かない方がいいでしょう。それにどうやら……《結社》も動いているようです」
「え……！」
「なんだと……！」
これにはエステルとアガットが驚いた。
「シェラザードさんたちが廃坑のアジトで遭遇したそうです。《道化師カンパネルラ》――――《執行者》の1人みたいですね」
「フン、また新顔か……」
「更にアジトで奇妙なものが発見されたそうです。まずは《オルグイユ》という導力駆動の乗物の設計図……そして《お茶会》という符牒で語られた謎の計画メモです」
「《オルグイユ》《お茶会》……。うーん、訳が判らないわね」
「2つに共通するものは見当たりませんね」
「導力駆動の乗物って何なのかな……？」
「お茶会というのも何だか気になりますね」
一同が首をひねった。
「チッ、さすがに落ち着いていられねえな」
「まあ、焦るなって。現地で軍とギルドが頑張っているみたいだからな。じきに状況も分かるだろうさ」
「ええ、気は逸(はや)るでしょうが王都に留まっていてください。今のところは各自、自由になさって結構ですよ」
「うーん、そう言われても……」
そこでエステルがあたりを見回した。
「あれ、そういえばオリビエはどうしたの？」
「それが、帝国大使館から先ほど連絡がありまして……。野暮用ができたと仰ってお出かけになりました。すぐにギルドにお戻りになるそうですが」
「ふーん、どうしたのかしら？……あれ？レンはどうしたの？」
「ふえっ……？」

ティータが後ろを振り返ったが、レンの姿は見当たらなかった。
「あ、あれれ……。さっきまではちゃんといたんだけど」
「もしかして……話が退屈だったから遊びに行っちゃったとか？」
「そいつはありそうだな」
「も～、しょうがないわねぇ。でも、もし王都を離れるとしたらレンのことも何とかしないと……。……あたし、ちょっとあの子を捜してくるわ」
「あ、わたしも！レンちゃんが行きそうなところ分かるかもしれないし……」
「そっか、助かるわ。エルナンさん。そういうことなんだけど……」
「ええ、お願いします。私の方は、各地の支部と残党の行方について情報交換をしていましょう」

「さてと……あの子の行き先なんだけど。ティータ、心当たりある？」
「うーん……。昨日は東街区を色々と回ったから……そのうちのどれかかも」
「色々と回ったって？」
「えとね、まずは百貨店でお買い物をしてね……それから歴史博物館に行って……最後に時計台の近くにあるアイスクリーム屋さんに行ったの」
「なるほど、色々ね。ティータも結構、ノリノリだったんじゃない？」
「えへへ……」
「まずは、その辺りを探した方がよさそうですね」
「あの服装ですから誰かに聞いたらすぐに分かるでしょう」
「ああ。とっとと連れ戻すぞ」
エステルたちはレンの捜索を開始した。

第9章　狂ったお茶会（22）

―エーデル百貨店

「あ……」

エステルは百貨店からレンが出ていくのを発見した。

「あ、いたいた！」

「お、追いかけなくちゃ」

エステルはレンを追いかけて百貨店を出た。しかし、外で周りを見渡してもレンの姿は見当たらなかった。

「うーん……見失っちゃったわね」

「まったく、チョロチョロしやがって……」

「たしかこの百貨店は彼女がティータちゃんと一緒に寄った場所でしたね？」

「あ、はい。ひょっとしたら他の場所に行っちゃったのかもしれません」

「まあ、まだそんなに遠くには行ってないはずだし。この東街区を中心に捜してみますか」

「ティータさん、確か百貨店の次には歴史資料館に行ったと言いましたね。そこを探してみるのはどうでしょうか？」

「あ、それかもしれません！」

「じゃあ、そこを行ってみますか」

エステルたちは歴史資料館に向かった。

―歴史資料館

「こんにちは。来場者の方ですか？」

「えっと、人捜しをしているんですけど……」

エステルは受付のリシアに、レンの姿格好を説明した。

「あら、昨日、そちらのお嬢様と一緒にいらした白いドレスのお嬢様でしょうか？」
「あ、そーだと思います。覚えていてくれたんですか？」
「ふふ、お嬢様がた2人はとっても目立っていましたから。そのお嬢さんでしたら先ほどお見えになりました。館内のどこかにいらっしゃると思います」
「あ、そうなんだ！」
「よし、とっとと捕まえるぞ」
エステルは1階を捜して、2階に上がった。
そこで、男性にレンのことを尋ねた。
「……白い服の女の子？それならそこに……」
男性は辺りを見回したが、レンはいなかった。
「うお～、いないんだな！でも、さっきまではここにいたから遠くには行ってないと思うよ」
エステルは再び1階に下りた。
「あれっ？」
エステルが受付でレンがリシアと話しているのを見つけた。
「ねえ、お姉さん。色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる？」
「え……」
「うふふ、さようなら」
レンはそれだけ言うと外に出ていった。
「はっ……。あの、お嬢様！お知り合いの方が……」
しかし、その声は届かなかった。
そして、すぐさまエステルたちが駆けつけた。
「ち、ちょっとレン！」
「レンちゃん、待って！」
エステルたちは慌てて外に出た。
「ま、また居ないし……」
「も、申しわけありません。お引き留めしようと思ったんですけど……」

受付のリシアが謝りに出てきた。
「ううん、気にしないで。それよりもあの子と何か話していなかった？」
「は、はい……。不思議な事を尋ねられました。『色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる？』と」
「へっ？」
「意味深ですね……。ひょっとしたら謎かけじゃないかしら」
クローゼがつぶやいた。
「な、謎かけ！？」
「つまり、謎々を解いて追いかけてくるように誘っているのかも……」
「あ、あんですって～！？それじゃあ今もワザとあたしたちから逃げたわけ！？」
「うーん……そういうことになりますね」
「じょ、上等じゃない……。その手の遊びだったらこっちだって負けないわよ」
闘争心全開のエステル。
「あのな……そういう問題じゃねえだろ」
「と、とりあえず……。『色の無いお魚さんがどこにいるか知ってる？』だよね」
「うん、そのヒントを元にあの子の行き先を突き止めましょ」
「が、頑張ってくださいね」
リシアはただそれだけしか言えなかった。

「さて……エステルさん。レンさんの行き先には目星がつきましたか？」
レインがエステルに尋ねた。
「うーん、さっぱり。『色の無いお魚さん』なんていないはずだし」

「ああ。何かの喩えなのかもしれないな」
「そうですね。私の考えが正しければ、『釣公師団本部』だと思います」
「へっ、なんで？」
「まあ、行ってみれば分かりますよ。とにかく行きましょう」
エステルたちはレインの言う通りに釣公師団本部に向かった。

―釣公師団本部
「エステルさん、そこのショーケースを見てください」
レインがショーケースを指差した。
「あっ……！」
「なるほど、魚拓かよ」
「おや、そこの魚拓に興味を持ったのであるか？それは吾輩が勝ち取った輝ける栄光の証なのである。よかったら、その武勇伝を聞かせてやってもいいのだが」
釣公師団の本部長のフィッシャーが楽しそうに言った。
「えっと、それはまたの機会にしてもらうとして……。ここに白いドレスを着た女の子が来なかった？」
「おお、訪ねてきたが……。吾輩におかしな質問をしてそのまま去っていきおったぞ」
「やっぱりか……」
エステルは肩を落とした。
「あのあの。どーいう質問でしたか？」
「うむ、確かこんな質問だった。『辛くて苦くて美味しいお店ってどこにあるか知っている？』だったぞ」
「まさに謎々ですね」
「『辛くて苦くておいしいお店』っと。それじゃあ、そのお店を捜してみましょ」

エステルは次の目的地を探し始めた。

「今回もよく分からないわね……」

エステルはしきりに頭をひねっている。

「エステルさん、落ち着いて考えてみてください。このグランセルにお店というのは屋台を除けばそれほど多くありませんよ。しかも今回は『辛くて苦い』というのですから、飲食店のはずです。この王都に飲食店は、居酒屋の《サニーベル・イン》とコーヒーハウスの《パラル》です。そこで『辛い』ものと『苦い』ものを中心に置いている店は……」

「あ、分かった！コーヒーハウスの《パラル》ね！」

「ええ、おそらくそうです。さっそく向かいましょう」

エステルたちは《パラル》に向かった。

―コーヒーハウス《パラル》

「ねえ、マスター。ここのお勧めって何だっけ？」

「そりゃあもちろん、コーヒーに決まってるさ。ドラゴンビーンズをブレンドしたサイフォンで淹れる自慢の一品でね。あと、スパイスをふんだんに使ったライスカレーはかなりの人気だよ」

マスターのパラルは自慢げに言った。

「辛いカレーと、苦いコーヒー……」

「『辛くて苦くて美味しいお店』だね♪」

「なあ、白いドレスを着たガキンチョが来なかったか？」

「ああ、さっき来たよ。カフェオレを頼んで美味しそうに飲んでくれたね。そういえば私に奇妙な質問をしてきたけど……」

「どんな質問でしたか？」

「『ほっとくと無くなるお菓子はどこで売っているの？』だったかな」
「『ほっとくと無くなるお菓子』……。……よし、メモしたわ。うーん、そろそろ追いつきそうな気がするけど」
めげずに探し続けるエステルたちであった。

「えっと……。レインさん、もう分かっちゃった？」
「ええ、分かりましたよ」
「ひょっとしてこういうの得意だったりする？」
「得意というか、こういった謎かけは以前よくしたものですから慣れているといった感じですかね。とにかく、今回は『ほっとくと無くなるお菓子』でしたね。普通のお菓子がほっといて勝手になくなるはずがありません」
「まあ、そうよね」
「とすれば、時間が経てば形が失われるものと考えられます。この王都でそういったお菓子を売っているのは……東街区のアイスクリーム屋だと思います」
「なるほど！それじゃあ行きましょ」

―東街区　アイスクリーム屋
「あら、昨日のお嬢さん。ついさっき、お友達がアイスを買っていきましたよ。今日は一緒じゃないんですね？」
「やっぱり……。えっと、あの子、謎々を言ってませんでした？」
「謎々？そんなこと言ってたかしら。『お姉さんと空港で待ち合わせをしているの』と楽しそうに言ってましたけど」
「お姉さんたちってやっぱりあたしたちのことよね。は～、やっと

謎々は終わりか」
「しっかし、随分と振り回されたもんだぜ」
「まったくもう……心配かけてくれちゃって。これは見つけたらお説教をしてやらなくちゃね」
「あ、お姉ちゃん。あんまり怒らないであげて。きっとレンちゃん、寂しかったんじゃないかな？わたしたち、お仕事の話ばっかりしちゃってたし」
「ええ……そうかもしれませんね」
「う……それを言われると。まあ、とりあえず空港に迎えに行きましょ」
エステルたちは空港に向かった。

第9章　狂ったお茶会（２３）

空港に向かおうとしたエステルの前に現れたのはグスタフ整備長とフェイだった。フェイはなにやら大きな機械を乗せて運んでいた。
「整備長さん、フェイさん！」
「あれれ、ティータちゃん！？」
「おう、ティータ坊！それに……久しぶりだな、エステル！」
「あ、うん！整備長さんたちも元気そうね！でも、どうしたの？珍しい所で会うじゃない」
「へへ、こいつを運んできたってわけさ」
グスタフ整備長は後ろの機械を指差した。
「うわ～、なにこれ！？」
「あのあの、ひょっとして……」
「アルセイユ用の新型エンジン、『ＸＧ－０２』のサンプルだ。サンプルといってもほぼ実機と同じ性能だがな」
「へ～、これがそうなんだ」
「うわぁ～、信じられない……。こんなコンパクトなのにあの出力が実現できるなんて……。デザインも機能的で可愛いし……。はう～、すごいよ～……」
ティータはエンジンを見てうっとりとしている。
「ちょっとちょっと、ティータ」
「はあ……ま～た我を忘れやがったか」
「これが王都に運ばれてきたということは……例の、帝国と共和国に贈られるサンプルでしょうか？」
「おお、よく知っているな。やっとアルセイユへの組み込み作業が終わったからこっちに届けに来たというわけだ」
「そうですか……本当にお疲れさまでした」
「あれ……？」
「お！」

「あ、ああ……？えっと、お嬢さんは？」
「申し遅れました。クローディア・フォン・アウスレーゼと申します」
「アウスレーゼって……まさか王家の！？」
「うん、女王様のお孫さん」
「アルセイユは一応、王家の所有する船ですから。陛下に代わってお礼を言わせてください」
「こ、こりゃどうもご丁寧に」
「あはは、いきなり言われたらさすがにビックリするかもね。ところで、このエンジン、どこに運んでいくつもりなの？」
「ああ、港の倉庫街にな。条約の調印式までそっちで保管するらしい」
「へえ、そうなんだ」
「あの、整備長さんたちはいつツァイスに戻るんですか？」
「ああ、これを届けたらすぐに出発しちまうさ。ティータ坊。くれぐれも元気でな」
「あ、はいっ！整備長さんたちもお元気で！」
「エステル……それにアガットって言ったか。ティータ坊を頼んだぞ」
「うん、任せといて」
「ま、心配すんな」
「じゃあね、遊撃士さんたち」
グスタフ整備長とフェイは行ってしまった
「は～、あれがアルセイユ用のエンジンか。よく分からないけどやたらと凄そうな機械よね」
「うん……ビックリしっちゃった。わたしも将来、あんなスゴイ機械が造れるようになりたいな」
「やれやれ……メカフェチ一直線かよ。ま、目標があるのは良い事か」
「えへへ……」

第9章　狂ったお茶会（２４）

―グランセル空港
「ツァイス方面行き定期飛行船、《リンデ号》まもなく離陸します。ご利用の方はお急ぎください」
飛行場でアナウンスが流れた。その場にはオリビエとミュラーがいた。
「それではな、オリビエ。俺が留守のあいだ、問題を起こしてくれるなよ」
「フッ、安心してくれ。このボクが、愛しいキミに心配をかけたことがあったかい？」
「今更すぎて心配する気にもなれん。せめて問題は起こしてくれるな」
「うーん、善処しましょ」
そうして、ミュラーを乗せた《リンデ号》は離陸した。

「おーい、オリビエ！」
「おや、君たち。ひょっとしてボクが恋しくてここまで捜しに来てくれたのかい？」
「なわきゃないでしょ。それよりも……今のミュラーさんよね？」
「なんで帝国軍人が定期船なんか使ってるんだ？」
「ああ、何でも軍務でボース地方に行くそうだよ。空賊団が使っていた飛行艇があっただろう？あれを回収するつもりらしい」
「空賊団の飛行艇ってあの緑色の小型艇よね。でも、なんでミュラーさんが？」
「知っているかもしれないが、あの飛行艇はエレボニア製でね。それを使った空賊団はいまだ捕まっていないらしい。帝国政府としては証拠を回収して犯人調査に協力したい……そう王国に打診したそうだよ」

「ふ～ん？よく分からない理屈ね」
「ま、空賊団がエレボニアの元貴族だったというのはあまり外聞が宜しくないからね。できれば不戦条約締結の前にうやむやにしておきたいんだろう。共和国あたりが突っ込む前にね」
「空賊団が元帝国貴族って……。ええっ、あのボクっ子たちが！？」
エステルはあまりの事実に驚いた。
「あれ、知らなかったのかい？カプア男爵家と言って帝国北部の小領主だったそうだよ。数年前、莫大な借金を抱えて領地を手放したそうだがね」
「そ、そんな事情があったんだ……。なんて言うか……微妙に可哀想な連中ね」
「ケッ、だからといってまったく同情の余地はねぇな」
「まあ、そういうわけでボクは見送りに来たんだが。君たちはどうして空港に？」
「あ、実はレンを捜しに来たんだけど……。オリビエ、見かけなかった？」
「レン君？って、そこにいるのはレン君じゃないのかい？」
「へ……」
エステルたちが振り返ると、レンが立っていた。
「うふふ♪」
「レ、レンちゃん！？」
「い、いつのまに……」
エステルはレンに近寄った。
「こら、レン！まったく、いきなり居なくなったらダメじゃない！しかも色んな人を巻き込んであたしたちから逃げたりして～！」
「ごめんなさい……。だって退屈だったんだもの。あのね、百貨店で紅茶とクッキーを買ったのよ？みんなの分もあるからおねがい、機嫌をなおして？」
「う……」
「ふふ、私たちも結構楽しませてもらいましたし……おあいこでい

いんじゃないでしょうか？」
クローゼが後押しした。
「はあ、しょうがないなぁ。お小言はこれくらいで勘弁してあげる」
「ホント！？」
「ふふ、よかったね」
「さてと、それじゃいったんギルドに戻るか。何か情報が入ってるかもしれねぇ」
「うん、そうね」
「おや、何かあったのかい？」
「ちょっとボース地方で事件が起こったらしくてね。って……そういえばミュラーさんってボース地方に行ったんだっけ？」
「ああ、その通りさ。ふむ……詳しく聞きたいところだね」
「ま、ギルドに戻ったら一通り説明してやるよ」

―遊撃士協会グランセル支部前
「ねえ、エステル……」
エステルがドアに手をかけた瞬間、レンが唐突に話しかけてきた。
「ん、どうしたの？もう怒ってないから安心していいわよ」
「うふふ、そうじゃないわ。だいいちエステルが怒ってもゼンゼン恐くないんだもの」
「むぐっ……言うじゃない。それじゃ、どうしたの？」
「あのね……実はエステルに預りものがあるの」
「預りもの？」
「うん。ビックリしないでね？」
レンはエステルに一通の手紙を渡した。
「へ……？何これ、あたしに？」
「ええ、そうよ」
「誰から？」

「うふふ、読んでみたらきっと分かると思うけど」
「そ、そう？」
エステルは手紙の封を切った。

―エステルへ
散々迷ったけれどどうしても君に伝えなくてはならない用事ができてしまった。あんな別れ方をして虫のいい話だとは思うけど2人きりで会えないだろうか？今日の夕方、グリューネ門側のアーネンベルクの上で待っている

「……え……」
「うふふ、分かったみたいね？レンも話を聞いたからピンと来ちゃったもの♪」
「こ、これって……。これを渡した人って！？」
「真っ黒い髪と、琥珀色の瞳のハンサムなお兄さんだったわ。空港の待合所でエステルたちを待っている時に渡して欲しいって頼まれたのよ」
「……あ……」
「あの人が、エステルの言ってたヨシュアってお兄さんでしょう？」
「う、うん……。筆跡も似ているし、ま、間違いないと思う……。夕方、グリューネ門側のアーネンベルクの上……。夕方って……もうそろそろじゃない……」
「おい、何をしてる？エルナンが各地の情報を説明するみたいだぞ？」
アガットがエステルが入って来ないので、ギルドから出てきた。
「アガット……。どうしよう……あたし……」
「へっ……。お、おい、どうした？」
エステルは無言でアガットに手紙を見せた。

「……。これは……ヨシュアか？」
「うん……そうみたい。レンが、それらしい人から受け取ったんだって……」
「なるほどな……。いいぜ、行ってこい」
「え……？」
「いいからとっとと行け。他の連中には俺の方から適当に言っておく」
「あ……。ありがと、アガット！それにレンも……教えてくれてありがとね！」
「あ……」
エステルは一目散にグリューネ門に向かった。
「行っちゃった……。そんなにその人と会いたかったのかしら？」
「ああ……だろうな。へへ、どうやって他の連中をごまかすかね」

「はあはあはあ……。グリューネ門のアーネンベルクの上……。早く行かなくちゃ……！」

第9章　狂ったお茶会（25）

―グリューネ門

エステルがグリューネ門に着いたときにはすでに夕方になっていた。

「もう夕方……！アーネンベルクの上って……つまり長城の上ってことよね。早く行かなくちゃ……！」

―アーネンベルク

「……あ……」

アーネンベルクに一人の人影をエステルは見つけた。

～一方　王都グランセル

「ヒック……。フィリップのやつ、小言ばかり抜かしおって……。私をいったい誰だと思っておるのだ……。最高位の王位継承権を持つ……デュナン・フォン・アウスレーゼだぞ……」

デュナン公爵は酔っ払っているのか足元がふらふらとしていた。

「う～い……少しビールを飲み過ぎたか……。しかし、あのライスカレーというのはなかなかの美味であった……。たまには庶民の味も悪くない……」

またふらふらと歩き始めるデュナン公爵。

「……くそっ……。クローディア……それに遊撃士の小娘め……。どうしてこの私が……あんな小娘どもに……あんな小娘どもの言葉に……心を乱さねばならんのだ……」

「公爵閣下のご心痛、お察し申し上げますわ」

デュナン公爵の前に現れたのは、リシャール大佐の副官カノーネだ

った。
「な……。お前はリシャールの……」
「ええ、副官のカノーネです。公爵閣下におかれましてはお元気そうで何よりですわ。ふふ、あまりご機嫌は宜しくないようですけど……」
「な、何の用だ……。お前たちはたしか指名手配されている身では……」
デュナン公爵は一歩後ろに下がったが、背後から特務兵がやってきた。
「ひっ……！？」
「ふふ、そう警戒されると傷ついてしまいますわ。わたくしたちはただ……公爵閣下のお手伝いがしたいだけ。さあ、一緒に来て頂きますわよ」

―グリューネ門
「ヨ、ヨシュ――――」
エステルが走り寄ったが……
「あ……？」
「へっ……？」
そこにいたのは、ヨシュアではなくケビン神父だった。
「エステルちゃんか……？」
「ケビンさん……。ど、どうしてここに……？」
エステルは辺りを見回したが、ヨシュアの姿はどこにもなかった。
「い、いない……」
「いや～、ひさしぶりやなぁ。しかし、こんな所で再会するなんてオレら、やっぱり縁が――――」
「ねえ、ケビンさん！ここで誰か他の人に会わなかった！？」
「へっ……誰かって。まさかエステルちゃんもここで待ち合わせし

とんの？」
「う、うん……。……って、ケビンさんも？」
「ああ……手紙に呼び出されてな」
「あ、あたしもだ。えへへ、面白い偶然もあるもんね」
「はは、そうやねー。――って、そんな偶然あるかいっ！」
「や、やっぱり？それじゃあケビンさんもヨシュアに呼び出されて……」
「ヨシュア？それって……例のカレシやったっけ？」
「う、うん……」
「し、知らんかったわ……。ヨシュア君って実はいい年したオッサンやったんか。そりゃ、愛があれば年の差なんて問題あらへんけど……。それやったらオレかて充分チャンスは……」
「あのー。微妙に話が噛み合ってないんですけど。ケビンさんは誰からの手紙で呼び出されたわけ？」
「ああ、グランセル大聖堂にオレ宛ての手紙が届けられてな。届けたのは、身なりの良さそうな中年男性だったらしけど……」
「ヨ、ヨシュアはあたしと同い年だってば！オジサンなはずないでしょっ！」
「あ、やっぱり？や～。オレもなんかおかしいと思ったんよね」
「よく言うわよ……。でも、それって一体どういうことなの？」
「……お2人を始末するための罠でしょうね」
「誰やっ！？」
「レインさん！？」
「どうやらまだ無事だったようですね。安心しましたよ」
「ど、どうしてレインさんが……」
「あれ、エステルちゃんの知り合い？」
「うん、レインさんと言ってね……って、今はそういう場合じゃないわ。どうしてレインさんがここにいるのよ！？」
「エステルさんが途中でいなくなったものですから、ギルドから抜け出してエステルさんの後を追いかけてきました」

「そ、そんなことしてバレなかったの？」
「ええ、さりげなく抜けてきました。それよりも……これは間違いなく罠ですね。その証拠に……」
エステルたちの元に空中から機械兵器が寄ってきた。
「チッ、人違いですって雰囲気でもなさそうやな……」
「来ます！お２人とも、準備はよろしいですか！？」

「こ、こいつら……！？」
「！！」
機械兵器はそのまま逃げ去っていった。
「あっ……！？な、なんだったのよ……。それに今の……」
「ああ、城の封印区画にいた人形兵器と同じみたいやね。もっともアレとは違って最近造られたものみたいやけど」
「それってどういうこと？」
「封印区画の人形兵器が古代遺物（アーティファクト）の一種とするなら……」
「オーブメント仕掛けの現代のカラクリ人形……というわけですね？」
「ビンゴ！そういうことや」
「な、なるほど……。……。どうしてケビンさんが封印区画のことを知ってるわけ？」
「……ギク」
「おい、何をしている！？」
「あ、兵士さん……」
「何やら騒がしいと思ったら……。お前たち、いったいここで何をしていたんだ！？」
「ちょ、ちょっと待って！あたしたち、ここで変な機械に襲われただけで……」
「変な機械だと……？」

「ああ、お騒がせしてエライすんませんでした。実は彼女、ギルドに所属する遊撃士でしてなぁ。とある連中を追って捜査中の身ってわけですわ」
「へっ？」
「遊撃士……本当なのか？」
「ほら、エステルちゃん。ブレイサー手帳を見せてやり？」
「あ、うん……」
エステルは促されるままブレイサー手帳を提示した。
「……なるほど、本当らしいな。とある連中と言ったが、一体どういう奴等なんだ？」
「それが《結社》とかいう正体不明な連中でしてなぁ。各地で妙な実験を色々としとるらしいですわ。そいつらの手がかりを追ってここに来てみたらケッタイな機械に襲われたんです」
「……」
「……」
「そういえば司令部から《結社》とかいう連中について注意のようなものが来ていたな……。とすると周遊道に現れたのはその《結社》の者たちなのか……」
「え、ちょっと待って！周遊道に現れたって一体何が起こったの？」
「ああ、先ほどエルベ離宮の警備本部から連絡があってな。何でも武装した集団が離宮を襲撃してきたらしい」
「あ、あんですって～！？」
「……」
「幸い、シード中佐によって難なく退けられたらしいがな。現在、周遊道を封鎖してその集団を追っているところらしい」
「は～。エライことが起こったなぁ。こりゃオレらもギルドに戻った方がええかもな」
「え、あ……」
「ああ、ひょっとしたら君たちが追っている連中と同じなのかもしれない……。よし、付近の警備はこのまま我々が当たるとしよう。

君たちは急いで王都のギルドに戻るといい」
「おおきに！ほな戻るとしよか」
「ちょ、ちょっと……」
「エステルさん、聞きたいことは後にしましょう」

「ちょっと待って！一体どういうことなの！？」
「あ～……。やっぱり納得せぇへん？」
「あ、あたり前でしょ！あなた……いったい何者なの！？あたしたちの動きとか《結社》のこととか知ってたり……。本当にただの神父さんなわけ！？」
「ケビンさん、正体だけでも隠さず話してもらえますか？エステルさんが納得しないので……」
「そうやな。正真正銘、七耀教会の神父やで。まあ、確かに……ただの神父とはちゃうけどな」
「それってどういうこと？」
「その説明はまた後でな。さっきも言ったけど今はギルドに急いだ方がええ。ひょっとしたらとんでもない騒ぎが起こるかもしれん」
「とんでもない騒ぎって……ああもう……アタマがグチャグチャになりそう！なんで……なんでヨシュアに会えるはずがこんな事になっちゃうのよ……」
「そのカレシからの手紙なんやけど……。それ、本当にカレシからか？」
「えっ……？う、うん。手紙を預かった子の話ではヨシュアとしか思えないし……」
「その子はカレシのことを知っとるわけないんやな？だとしたら、似たような特徴の別人を用意させた可能性もある」
「で、でも……ヨシュアの字に似てるし……」
「筆跡なんちゅうもんはある程度似せられるもんや。動揺しとる人

間を簡単に騙せるくらいにはな。ちなみにオレが大聖堂で受け取った手紙はコレやで」
ケビン神父は懐から一通の封筒を取り出した。
「あ……」
「これは……」
「へへ、どうやら同じ種類の封筒らしいな。ちなみに手紙の中身はオレが調べていることについての情報を提供するって申し出やった」
「ということは……同じ連中の仕業ってこと？一体誰が、どうして!?」
「それは俺にも分からんわ。確実に言えるのは……お互いハメられたってことやね」
「……。……けんじゃ……わよ」
「へ？」
「エステルさん？」
「何者か知らないけどふざけてんじゃないわよ……。ヨシュアを騙って……あたしを呼び出したですって？許せない……絶対に許さないんだからあっ！」
「ひえっ……落ち着き、エステルちゃん。ここで熱くなったらまさに相手の思うツボやで」
「とにかく、ギルドに急いで戻りましょう」
「わかった……。だけど、ケビンさんのこと……完全に信用したわけじゃないわ。騙したりしたら……本気でぶっ飛ばすからね？」
「ああ、かまへんで。エステルちゃんにぶっ飛ばされるなら本望や。惚れた女のためなら身体を張る覚悟はできとるしな♪」
「な、なに言ってるのよ。まったくもう……調子狂っちゃうわね」
「和み系目指しとんねん」
「お2人とも、そこまでにしておきましょうか。早く戻りましょう」
「おお、そやったそやった」
「うん、急ぎましょ」

第9章　狂ったお茶会（26）

―王都グランセル
王都に着いた頃にはすでに夜になっていた。
「ふう……日が暮れちゃったわね。エルベ離宮の方はどうなっているのかしら」
「ま、ギルドの方に連絡が入ってるかもな。はよ、行ってみようや」
「……」
「あれ、レインさん、どうしたの」
「いえ、何でもありませんよ。気にしないでください」
「うん……？」
「エステル様……！」
突然、執事フィリップがやって来た。
「あれ、フィリップさん？」
「ど、どうも。今朝は大変失礼しました。あの、エステル様……どこかで公爵閣下を見かけていませんでしょうか？」
「へ……朝に会ったきりだけど……。公爵さん、どうかしたの？」
「昼過ぎに街に出かけたきり城にお戻りになっていないのです。閣下が行きそうな場所は一通り捜してみたのですが……」
「ああもう、この忙しい時に何をしてるんだか……。フィリップさん。これからギルドに戻るから一緒に付いて来て。公爵さんが迷惑をかけてたら連絡が入ってるのかもしれないし」
「そ、そうですな……。それでは同行させて頂きます。……と、こちらの方は？」
「あ、七耀教会の巡回神父、ケビン・グラハム言いますわ。どぞ、よろしくー」
「これはご丁寧に。私は公爵閣下の執事を務めてさせて頂いているフィリップと申す者でして……」
「あー、挨拶はあとあと。とっとギルドに戻りましょ！」

―遊撃士協会グランセル支部
「エルナンさん、ただい……」
エステルが受付を見ると、エルナンが倒れていた。
「エ、エルナンさん!?」
「なんと……!?」
「クソ、そう来たかい!」
エステルたちはエルナンの元へ寄った。
「エルナンさん!?エルナンさんってば!」
「呼吸は安定しとる……。どうやら眠っとるみたいやな。この人が王都支部の受付か?」
「う、うん……。……みんな!?」
エステルは2階に向かった。
「あ……」
2階では全員が倒れていた。
「アガット、オリビエ、ジンさん!」
机の上に倒れているアガット、オリビエ、ジン。
「ティータ、クローゼ!」
ティータとクローゼは本棚の横で倒れていた。
「あっちゃあ……。全員やられたみたいやね」
レイン、ケビン神父、執事フィリップが上がってきた。
「どや、無事そうか?」
「う、うん……。眠ってるみたいだけど……。一体全体、どうなっちゃってるのよ～!?」
「ふむ、どうやら一服、盛られてしまったようですな。皆さん、急に睡魔に襲われ崩れ落ちたように見受けられます」
「た、確かに……」
「おお、鋭いですやん」

「エステルさん、これを……」
レインがエステルに手紙を渡した。
「あれ、この手紙……」
「そこの机にあったものです」
「ちょっと待て……。それ、俺らが受け取った封筒と同じとちゃうか！？」
「う、うん！」
エステルは封を切って手紙の中身を確かめた。

娘と公爵は預かった。返して欲しくば『お茶会』に参加せよ。

「あ、あんですって～！？」
「こ、公爵閣下が……！？」
「『お茶会』の場所はやっぱり王都やったか……。そこに書いてある娘ってのは誰か分かるか？」
「はっ……！」
エステルは辺りを見回した。
「レン！？レン、どこにいるの！？」
エステルは3階に上がった。
「どうやらその子が掠(さら)われたみたいやな……。エステルちゃんの仲間か？」
「ううん、ある事情で預かっている子なんだけど……。よりにもよってこんな事に巻き込んじゃうなんて……！」
「エステルちゃん……」
「エステル様……」
「……」
「ごめん、フィリップさん……。ひょっとしたら公爵さんもとばっちりを受けたのかも……」

「いえ、そうとは限りますまい。仮にそうだとしてもこんな時間まで1人きりで遊び呆けている閣下の責任です。どうかご自分を責めないでください」
「そうやで、エステルちゃん。まずは手紙の『お茶会』が何なのか突き止めるのが先や！」
「う、うん……」
エステルは手紙を読み直した。
「そういえば『お茶会』って特務兵の残党の話が出たときにエルナンさんが言ってたような……。……って、ケビンさん。さっき手紙を読んだとき、『やっぱり王都やったか』とか言ってなかった？」
「なんや、聞こえてたんか。んー、実はちょっとした事情があるんやけど……」
「……その事情はあたしから説明させてもらうわ」
2階から上がってきたのは、あろうことかシェラザードだった。
「お、ナイスタイミング！」
「へ……シェ、シェラ姉！？」
「久しぶりね、エステル。ずいぶん大変なことになっているみたいじゃない？しかしケビンさん。お互い間に合わなかったみたいね」
「ええ、面目ないですわ」
「ど、どうしてシェラ姉がここに……。それになんでケビンさんと話が通じちゃってるわけ！？」
「あたしとアネラスが特務兵のアジトを発見したのは聞いていると思うんだけど……。ちょうどその時、この人と知り合ってね。消えた残党の捜索に今まで協力してもらってたのよ」
「そ、そっか……。だから事情に詳しかったんだ」
「へへ、そういうことや」
「シェラ先輩！」
アネラスが走って下から上がってきた。
「あ、アネラスさん！？」
「エステルちゃん！よかった、無事だったんだ！それにケビンさん

もこっちに来てたんですね！？」
「ああ、オレの方も間に合わへんかったけどな」
「で、下の通信器はどうだった？」
「駄目です……。パーツが抜き取られたらしくてすぐには使えそうにありません」
「とすると……」
シェラザードが3階の予備の通信器を確かめた。
「駄目ね、こっちも同じだわ」
「それって……『敵』が壊したってこと？」
「間違いないわ。一体、何を狙ってこんな事をしたのか……」
「そうだ、シェラ姉！この置手紙なんだけど……」
エステルはシェラザードたちに先ほどの手紙を見せながら事情を説明した。
「『お茶会』……。ようやく全てが繋がったわね。その子と公爵を掠ったのは特務兵の残党に間違いないわ。しかも背後には《身喰らう蛇》がいるはずよ」
「うん、あたしたちも変な機械に襲われたし……。でも『お茶会に来い』ってどこに行ったらいいのか……」
「とにかく心当たりを捜してみるしかないわね。アネラス。一つ頼まれてくれない？」
「はい、何ですか？」
「《エルベ離宮》の警備本部にこの事を連絡してきてほしいの。周遊道に現れた武装集団はおそらく陽動に間違いないわ」
「なるほど……」
「やはり狙いは王都やね」
「わかりました！それじゃあ離宮までひとっぱしりしてきます！」
「アネラスさん、気を付けて！」
「うん、エステルちゃんもね！」
アネラスは急いでエルベ離宮に向かった。
「執事さんは悪いんだけどギルドで待機していてくれる？公爵閣下

は必ず取り戻すから」
「……かしこまりました。待機している間、皆さんの介抱をさせて頂きましょう。どうか閣下をお願いします」

―エルベ離宮
「現在、周遊道北西エリアで第1～第2小隊が展開中。まもなく包囲が完了します」
「南東エリアでは特務兵数名がロマール池のさらに向こうに逃亡中。第3～第4小隊が追撃を続けています」
王国軍兵士がシード中佐に現状を報告した。
「ご苦労。現状を維持しつつ両集団の確保に努めてくれ」
「は！」
「しかし解せませんねぇ……。一体、何を考えているのやら。まさか陽動のつもりですかね？」
ベルク副長が難しい顔をした。
「グランセル城には一個中隊を配備している。我々をここに留めたところで彼らに制圧するのは不可能だ。それとも我々の知らない切り札があるというのか……？」
「切り札、ですか？」
「失礼します！」
またも王国軍兵士が入ってきた。
「どうした？」
「要塞司令部への連絡は完了。ただ、遊撃士協会の王都支部への連絡ですが……。何かトラブルでもあったのか先方に通じない状態です」
「なに……？」
「いかがしますか？」
「ふむ、そうだな……。……念のため保険をつかわせてもらうか。

副長、ここは任せた。私はしばらく通信室に詰める」
「了解しました。して、どちらに連絡を？」
「もう一度、要塞司令部だ」

第9章　狂ったお茶会（27）

―王都グランセル　南街区

「『お茶会』って……一体どこでやるんだと思う？」

「一番あり得そうなのはグランセル城だけど……。確か、かなりの数の兵士が詰めているはずよ。他を当たってみた方がいいわね」

「うーん、そうは言ってもこの街はごっつ広いしなぁ。おおよその見当は付けんと……」

「一般人に知られない所だとは思いますが……」

全員が首をひねっている。

「あ……！」

突然、ジークがエステルの元へやって来た。

「ジーク！」

「わわ、何や！？」

「ふふ、助っ人参上ね！」

「ピュイピュイ！ピューイ！」

「よ、よく判らないけど……。あたしたちを案内してくれるつもり？」

「ピューイ♪」

ジークは西街区の方に向かった。

「西街区方面ってことね……」

「うん、行ってみましょ！」

「は～……。自分ら、何か凄いなぁ」

「まあ、私も最初は驚きましたけどね」

―王都グランセル　波止場

「はっ……！」

シェラザードが急に足を止めた。向かってきたのは特務兵率いる軍用犬だった。
「や、やけに凶悪そうなワンちゃんたちやねぇ……」
「特務兵の軍用犬……！」
「こんなものを飼い馴らすとは、つくづく特務兵というのはワケのわからない集団ですね……」
「……来るわ！」

「は～、ビックリした。でも『お茶会』の場所はここで間違いないみたいやね」
「ええ、相手がそれを証明してくれましたね」
「うん……そうね！」
「さあ、慎重に進むわよ！」

―波止場の倉庫
「お、お前ら……。一体どういうつもりだ！こんなことをしてタダで済むと思っているのか！？」
倉庫の番をしていたダンケとフィリオが特務兵に脅されていた。
「フッ、元より覚悟の上だ」
「ケガをしたくなければ大人しくしているがいい。我々は一般市民に危害を加えるつもりはない」
「ただし……邪魔をしなければ、だがな」
「ひ、ひいっ。命ばかりはお助けをっ！」
「一般市民以外には危害を加えるつもりってわけね」
エステルたちが倉庫に突入した。
「なっ……」

「貴様ら……遊撃士か！？」
「一名は違うけどなー」
「ケビン神父……私も遊撃士ではなく協力員という立場ですが……」
「あれ、そやったっけ？」
「やっと、見つけた……。ずいぶんと引っ張り回してくれたわね。教会規約に基づき、騒乱・破壊活動などの容疑であなたたちを逮捕するわ！」
「さっさと降伏した方が身のためよ！」
「クソ……どうして気付かれた！？」
「まあいい、片付けるぞ！」
「おお！」

「ま、まあいい……。これで時間は稼げた……。あとは大尉殿にすべてをお任せするだけだ……」
「え……」
「じょ、情報部に栄光あれ……」
そのまま特務兵は気絶した。
「ちょ、ちょっと！？」
「アカン、気絶してもうた」
「ねえ、シェラ姉。『大尉』ってもしかして……」
「ええ……あのしぶとい女でしょうね」
「あんたたち……本当によく来てくれた！」
「ありがとう……君たちは命の恩人だよ」
ダンケとフィリオが感謝した。
「えへへ……どういたしまして。あれっ……」
エステルが奥に置かれていた新型エンジンに気が付いた。
「ああっ！」
「どうしたの、エステル？」

「なんかゴツそうなオーブメント装置やねぇ。何に使うもんなんや？」
「これはアルセイユ用に開発された新型エンジンのサンプルです。不戦条約締結の時に帝国と共和国に渡されるので2つこちらに持ち込まれたのですが、この場に1つしかないということは……」
「ああ、こいつらの仲間が運搬車で持っていったんだ。この先にある波止場の方に……」
「あ、あんですって～！？」
「嫌な予感がするわね……。波止場に急ぐわよ！」
「了解っ！」
「よしきた！」
「急ぎましょう！」

「フン、やはり来たわね」
カノーネ大尉がエステルたちを待ち構えていた。
「カノーネ大尉！」
「フン、元大尉ですわ。犬どもが騒がしかったからもしやと思って出てみれば……。遊撃士というのはよっぽど鼻が利くみたいね」
「なめんじゃないわよ！あんな真似をしておいて！しかも関係ない子まで……絶対に許さないんだからね？」
「何を言ってるのかしら？私はただ、公爵閣下の王位継承をお手伝いするだけ。部外者はすっこんでいなさい」
「はあ！？公爵さん！？あんたまた馬鹿なことを……」
「だ、誰がこのような無謀な計画に荷担するかっ！こ、こやつらは私のことを利用しようとしているだけだ！」
「うーん、何か本気で嫌がっとるみたいやねぇ」
「元大尉さん、いい加減本音を言ったらどうかしら？本当の目的はリシャール大佐の解放でしょう？」

「ええっ！？」
「うふふ、そこまで判っているなら話が早い……。――これより『再決起作戦』を開始する！あなたたち！2分間だけ持たせなさい！」
「イエス・マム！」
カノーネ元大尉たちが倉庫の中に入っていった。
「こら、待ちなさいよ！公爵さんはともかくレンは解放してくれても……」
「エステルさん、それはひどいですよ……」
エステルが倉庫に突っ込もうとしたが、特務兵たちに阻まれた。
「大尉殿の決意と覚悟、邪魔させるわけにはいかん！」
「来い、ギルドの犬ども！」
「こ、この～っ……」
「いい度胸ね……可愛がってあげるわ！」

「く、くそっ……」
「何て奴等だ……」
「往生際が悪いわよ！ほら、とっととどきなさい……」
その時、倉庫の扉が内側からへこんだ。
「わわっ……」
「な、なんや！？」
「まさか……これが設計図の……」
「ははは……間に合ったようだな……」
「じょ、情報部に栄光あれ！」
そして、扉が吹っ飛んだ！
「きゃああっ！」
「こ、こいつは……」
中から出てきたのは戦車だった。

「せ、戦車……！？」
「これが《オルグイユ》……」
「これはまた厄介なものを持ち出してきましたねぇ……」
「どうかしら……この《オルグイユ》は？情報部が独自に開発していた最新鋭・高機動の導力戦車よ。火力は帝国製戦車の２倍――ほぼ警備飛行艇に匹敵するわ」
「なるほど……分かりました。グランセル城の会計士が言っていた消えた予算はこれに使っていたのですね。しかし、今まで使えなかったのは……」
「うふふ、お察しの通りこれを動かせるだけの高出力なエンジンがなかったので完成一歩手前で保管されたけど……。まさか《アルセイユ》の新型エンジンが手に入るなんてね。うふふ、空の女神はわたくしに微笑んだみたいね」
「ちょ、ちょっと……。そんなものを使って何をするつもりなのよっ！？」
「言ったでしょう。公爵閣下の即位を手伝うと。そのためには女王陛下に認めていただかなくてはねぇ」
「ま、まさか……」
「狙いは城の女王様！？」
「ははは！今ごろ気付いても遅いわ！この《オルグイユ》ならたやすく城門も粉砕できる！城詰めの部隊も敵ではない！お前たちはせいぜい指をくわえて見ていなさい！」
《オルグイユ》はグランセル城に向かって進んでいった。
「し、しまった……！」
「追いかけるわよ！」
エステルたちは《オルグイユ》を追いかけた。
「ふふ……完全に引き離せたようね。このまま城を占拠して女王陛

下を拘束できれば……」
その時、《オルグイユ》に向かって砲弾が撃ち込まれた。
「な……！？」
「ふう……どうやら間に合ったようだな」
「お、王室親衛隊……！それに……ユリア・シュバルツっ！」
「久しぶりだ、カノーネ。まさかお前とこんな場所で相見えることになろうとはな」
「あなたたち……どうしてここに！？レイストン要塞で飛行訓練をしていたのではなくて！？」
「シード中佐から緊急の応援要請があってね。どうやらグランセル市街で変事が起こるのを読まれていたらしい。そこで我々が飛んで来たわけさ」
「くっ……ただの昼行灯（ひるあんどん）かと思えば……」
「中佐はリシャール大佐と同じくカシウス准将の元部下だからな。侮ったお前のミスということだ」
「どうやらそのようね……。それで、あなた達。何をしようというのかしら？」
「なに……？」
「アルセイユに搭載された移動式の導力榴弾砲……。そんなものでこの《オルグイユ》に対抗できるとでも思って？」
「対抗できぬまでも足止めくらいはできるさ。じきにシード中佐の部隊もこちらに到着するはずだ。投降した方が身のためだぞ」
「うふふ……。アーハッハッハッ！」
「……なにがおかしい」
「相変わらずね、ユリア……。真っ直ぐで凛とした気性は士官学校の頃のまま……。昔から顔を合わせるたびにいがみ合ってきたけれど……。わたくし、あなたのそういう所は決して嫌いではなかったわ」
「カノーネ……それは私の方も同じだ」
「でもね……。リシャール閣下の解放を邪魔するなら容赦しないわ

！」
「！！」
「仕方ない……。1番、2番共に発射用意！戦車の足を止めるぞ！」
「イエス・マム！」
王室親衛隊隊士が導力榴弾砲にエネルギーを充填した。
「撃て――――」
ユリア大尉が号令した時、周りの導力が全て停止した。戦車に積まれた《ゴスペル》の効果だった。
「な……！？」
「だ、だめです！機能停止しました！」
「くっ……導力停止現象か！？だが、そんな事をすれば肝心の戦車だって……」
しかし、《オルグイユ》の機能は停止していなかった。
「ば、馬鹿な！どうして動ける！？」
《オルグイユ》は導力榴弾砲に向かって砲弾を放った。
「なっ……」
「周囲の導力器を停止しながらも接続した機体は動かせるユニット……。うふふ……予想以上の力ですわね」
「くっ、カノーネ……。その《ゴスペル》はいったい……」
「うふふ、ある筋から入手したのよ。『実験』を手伝うのと引き換えにね」

「な、なによあれ！？」
「新型ゴスペルを使った《身喰らう蛇》の実験……！こ、こんな形でやるなんて！」
「ちっ……マズイな。アレが動いている間はアーツの類も使えへん。こうなったら……奥の手を使うしかなさそうや」
「へっ……！？」

「何か秘策があるのですか？」
「エステルちゃん、シェラの姐さん、それにレインの兄さん。今からやる事が成功すれば少しの間だけ《ゴスペル》を停止させることができるかもしれん。そのスキに戦車を足止めするで」
「なんですって！？」
「そ、そんなことできるの！？」
「確率は五分と五分……。せいぜい3人とも女神に祈っといてくれ」
ケビン神父は懐から杖を取り出した。
「あ……それって確か！？」
「『封じの宝杖』……。ダルモア市長が持ってたご禁制のアーティファクトや！」
ケビン神父は《オルグイユ》に突進した。
「喰らえッ！」
そして《ゴスペル》に『封じの宝杖』を叩きつけた。
「きゃあああっ！」
まばゆい光が辺りを包む。
「しょ、照明が戻った……。導力停止現象が止まったのか！」
光が消えた時にはあたりの導力が戻っていた。
「そ、そんな……。あなた、一体何をしたの！？」
「へへ、大したことはしてへんよ。アーティファクトが壊れる時に解放される膨大な導力を叩きつけてやっただけや。さすがのゴスペルもショートしたみたいやね」
「ば、馬鹿な……」
「ケビンさん、ナイス！」
「やったわね、神父さん！」
「見事な判断でした」
「いや～、それほどでも」
「くっ……だからどうしたというの！ゴスペルなど使えなくてもお前たちごとき敵ではない！《オルグイユ》の力見せてやるわ！」
再び《オルグイユ》を動かすカノーネ。

「ユリア大尉！ゴスペルがショートした影響で戦車の機能も低下しとるはずや！足止めするなら今しかない！」
「そうか……わかった！」
「ユリアさん、よろしく！」
「先生直伝の剣技、見せてもらうわ！」
「頼みましたよ、ユリア大尉！」
「フッ……心得た！」
《オルグイユ》の破壊作戦が始まった。

第9章　狂ったお茶会（28）

「や、やった……！？」
「ああ……。完全に足止めできたようだ」
「くっ……やってくれたわね……」
「カノーネ、お前の負けだ。今度こそ潔く投降してくれ」
「ふざけるなッ！こんな事で閣下の解放を諦められるものですかッ！」
カノーネは自ら戦闘することを挑んだ。
「ユリア！遊撃士ども！これで最後よ！いざ尋常に勝負なさい！」
「戦車まで使っておいてムシがいい気がするけど……。いいわよ！やってやろうじゃない！」
「お前との決着を付ける時が来たようだ……。……行くぞ、カノーネ！」

「くっ……うう……。リシャール閣下……申しわけ……ありません……」
「はあはあ……。こ、これで決着だ……」
「さ、さすがにクタクタ……」
「はあはあ……れ、連戦やったもんなぁ」
「ふう……何とかなったみたいね……」
「お、終わったのか……？」
デュナン公爵が《オルグイユ》から出てきた。
「あ、公爵さん……？」
「なんや……戦車に乗せられてたんか？」
「うむ、まあな……。今回ばかりはお前たちに礼を言わねばなるまいな……。感謝の証に、私の秘蔵する傑作劇画セットを譲ってやろ

う！」
「え、遠慮しときマス……。でも、まさか公爵さんに感謝されるなんてね――――」
そこでエステルはあることに気付いた。
「レンは！？レンは無事なの！？」
「い、いきなり何なのだ……。何だ、そのレンというのは？」
「女の子よ！白いドレスを着た！戦車の中にはいないの！？」
「そ、そやつら以外には私しか居なかったが……」
「ちょっと！レンをどうしたのよ！？どこに閉じ込めてるの！？」
「……？なにを言っている……？」
「こ、この期に及んですっとぼけるんじゃないわよ！あんた達がギルドから掠った女の子に決まってるじゃない！」
「エステルさん、彼女に聞いたところで戻っては来ませんよ」
「え……？何を言っているの、レインさん……」
「レンさん！そこにいるのでしょう！？出てきてはどうですか！」
レインが倉庫の上に向かって叫んだ。
「うふふ。エルベ離宮のかくれんぼの時といい、なかなか鋭いのね、お兄さん」
「……。……え」
「うふふ、こんばんは。月がとってもキレイな晩ね。今宵のお茶会は楽しんでいただけたかしら？」
「レン……。な、なんでそんな所に登ったりして……。あ、危ないじゃないの！？」
「……」
「まったくもう……ほんとネコみたいなんだから。今、助けてあげるからちょっとそこで待ってて……」
「エステルさん……。いいですか、よく聞いてください。レンさんは――《結社》の一員です」
「……うそ……」
「うふふ、本当よ。《執行者》Ｎｏ．ＸＶ。《殲滅天使》レン――

―そんな風に呼ばれているわ。ちょっと品がなくてあまり好きじゃないけど」

「……」

「クスクス。お兄さん、あなただけはレンのことに気付いていたようね？それに……ずいぶんと《結社》のことを追いかけ回しているようね？何が目的なの？」

「……。レンさん、あなたは……6年前のある教団の事件を知っていますよね？あなたはその関係者だったのですから……」

「！！！」

「私はその事件をずっと追いかけているのです。そのために《結社》のある人物――あなたもよく知っている人物を捜しているのですよ」

「そう……。でもレンは何も話す気はないわ」

「ええ、構いませんよ。最初からあなたに聞くつもりはありませんでしたからね。しかし、どうしてあの時以来《結社》に……いえ、これも聞かないことにしましょう」

「うふふ、あなたは《結社》のことについてよく知っているみたいね。でも、《結社》の計画は知らないようだし、知ったとしても止められないわよ？」

「それについては否定しましょう。何があっても止めて見せますよ」

「クスクス。言うじゃない。あなたたちに私たち《執行者》を止められるかしら？」

「こ、こんな子供が《身喰らう蛇》の一員だと！？」

「うふふ。《結社》に子供も大人もないわ。使えるか使えないか、それだけ。レンはとっても使えるの。昔の《漆黒の牙》みたいにね」

「！！！」

「そ、そんじゃあ……アレか？オレに手紙を出したのは嬢ちゃんやって言うんか！？」

「ええ、レンよ。脅迫状を9通。教会のお兄さんに1通。情報部の

お姉さんに1通。そして、エステルに1通。全部で12通――うふふ、何だか手紙を書いてばっかりね。レーヴェ、誉めてくれるかしら」

「!!!今、『レーヴェ』と言いましたね。彼はどこにいるのです!?」

「うふふ。それは教えられないわね」

「……」

「こ、この状況を全部作り上げたというの……」

「だってレンは、みんなをお茶会に招待した主人だもの。出席してくれたお客様を退屈させるわけにはいかないわ。とっても頑張ったんだから」

「……だったら……。だったら、パパとママは？レンのお父さんたちは一体どうしちゃったのよ!?」

「???ああ、何だ。まだ気付いてなかったのね。うふふ、実はレンってけっこう凄いのかも……。それともエステルたちがニブイだけなのかしら。そこのお兄さんを除いて」

「……」

「あ、あんですってぇ……」

「うふふ、怒っちゃイヤよ。……これの事でしょ？」

「……」

「……」

レンの隣にハロルド夫妻が現れた。

「あ……」

「こんなのレンのパパとママじゃないわ。もう用済みだから……こうしちゃおっと！」

レンは持っていた大鎌でハロルド夫妻の胴体を切り裂いた。

「なッ!?」

「ああっ？あ、あ、あんた……。何をやってんのよおおおっ！」

「エステル、落ち着きなさい！血が出てないでしょう！」

「え……あ……」

エステルはハロルド夫妻を調べた。
「……ホ……ホントだ……」
「《結社》が造った自動人形……しかも人間そっくりなヤツか……。とんでもないで、ホンマ……」
「うふふ、レンが側にいないと人間らしく操れないんだけどね。でも『人形の騎士』のペドロにも負けない自信はあるわ。あ、でも今回は、ユーカイされたりお茶会の主人になったりしたから……ティーア姫の役も多かったかしら？」
「じょ、冗談キツイで……」
「さてと、ほんとのパパとママを呼ばなくちゃ。来て――――《パテル＝マテル》」
レンがそう言うと同時にどこからともなく轟音が響き渡った。
「な、なにこの音……」
「皆さん、上に気を付けてください！」
そしてすぐに巨大なロボットが地上に降り立った。
「なああっ！？」
「ひいいっ！？」
「何て大きさ……！」
「な、なんやコイツ！？」
ロボットは《オルグイユ》から《ゴスペル》を取った。
「あっ……」
「《ゴスペル》を！？」
「これがレンのパパとママ。パパのように大きくてママのように優しいの。それ以外のパパとママなんていらない」
「あなたは……」
レインが口をかみしめた。
「も、目標を発見！」
「わわっ、何あれ！？」
すると、眠らされていたギルドのメンバーとシード中佐率いる王国軍兵士が到着した。

「きょ、巨人！？」
「まさか……！？」
「ど、どうなってやがる！？」
「レ、レンちゃん……！？」
ギルドのメンバーとシード中佐たちは困惑している。
「みんな……」
「うふふ、睡眠薬の効果も時間ピッタリだったみたい。昔ヨシュアに教わった通りね」
「！！！」
「ホントはね、エステルのこと殺しちゃおうかなって思ったの。だって教授が、ヨシュアが帰ってこないのはエステルのせいだって言ったから」
「え……」
「でも、楽しかったから今回だけは許してあげるわ。うふふ、特別なんだからね？」
「ま、待って、レン！」
「レ、レンちゃん！どーいうことなのっ？」
「うふふ、ティータもバイバイ。なかなか楽しかったからまた一緒にアイスでも食べましょ。それでは皆様……今宵はお茶会に出席して頂き、まことにありがとうございました」
レンがそう言うと《パテル＝マテル》が深夜の大空に飛び立っていった。
「レーン！！！」
ただエステルの叫び声がこだましていた。

その後、王国軍の警備艇によって夜通しの捜索が行われたが……結局、少女を乗せた巨大な人形兵器の行方は掴めなかった。

第9章　狂ったお茶会（29）

―翌日　エルベ離宮

「――カノーネ君。頼むから話してくれないか？あの少女はどういう形で君たちに接触してきたんだ？そして君たちは、どの程度《結社》の存在を知っている？」

シード中佐が一室でカノーネを尋問していた。

「……」

しかし、カノーネはいっこうに口を開こうとはしなかった。

「カノーネ……。意地を張るのもいい加減にしろ。このままではお前はおろか、お前の部下たちの罪も重くなる。それは本意ではあるまい？」

「フン、彼らもわたくしもとっくに死ぬ覚悟は出来ている。その程度の脅しに屈するものですか」

「軽々しく死ぬなど言うな！お前も見ただろう！あの巨大な人形兵器を！あんなものを使う連中が王国に潜入しているのだぞ！？事態の深刻さが分からないお前ではあるまい！？」

「……」

「カノーネ君……。リシャール大佐はある意味、高潔な愛国者だった。何者にもリベールの自主独立を脅かされないことを望んでいた。その事だけは私も真実だと思う。そして今、リベールに新たなる暗雲が忍び寄ろうとしている……。彼がその事を知ったらどう思うか考えてもらえないか？」

「……るさいですわ……」

「なに？」

「……うるさい、黙れ！」

カノーネが怒鳴った。

「リシャール閣下のお気持ちをもっともらしく語ったりするな！閣下を追い落とすことによってその地位を手に入れた輩がっ！」

「……」

「カノーネ、貴様！」

「貴女もそうよ、ユリア！昔からのライバルが落ちぶれたさまを眺めるのじゃさぞかし愉快でしょう！？ならば笑いなさい！いい気味だと嘲笑うがいいわ！」

「……カノーネ……」

「わたくしが今まで泥をすすって生きてきたのは閣下を助けるため！それが叶わなくなった今、わたくしが生きる意味などない！さっさと銃殺にでもするがいいわ！」

「おいおい……。馬鹿なことを言いなさんな」

入ってきたのはカシウスだった。

「邪魔させてもらうぞ」

「准将……！？」

「ど、どうしてこちらに……」

「今回に事件について陛下と相談したいことがあってな。それとは別の用事があって先ほど王都に到着したばかりだ」

「そうでしたか……」

「ご多忙の中、お疲れ様です！」

「カシウス・ブライト……。諸悪の根源が現れたわね……。貴方もわたくしを……嘲笑いに来たというのかしら？」

「やれやれ、嫌われたものだ。これでもリシャールに負けないくらいの男前だと自負してるんだがなぁ」

「ふ、ふざけるなアアッ！貴方さえいなければ……閣下は……リシャール閣下は……」

「コホン、准将……。あまり彼女をからかわないでもらえませんか？」

「え……」

「今のは……」

「ま、まさか……」

カシウスの後に入ってきたのは、服役姿のリシャールだった。

「……あ……」
「リ、リシャール大佐!?」
「……お久しぶりです」
「久しぶりだね。シード中佐、シュバルツ大尉。それに……カノーネ君もな」
「あ……ああ……」
「服役中の身であるが准将にわがままを言ってここに連れてきていただいた。どうしても君と直接、会って話がしたかったんだ」
「……わたくし……と?」
「ああ……。――すまない、カノーネ君。私の傲慢と視野の狭さが君たちを巻き込んでしまった。前途有望で有能な若者たちを犯罪行為に荷担させてしまった。そのことをずっと謝りたくてね」
「おやめください、閣下!わたくしたちは自分の意志で……」
「いいや、これは私の責任だ。君たちは、私の方針の元、動いてもらっていたに過ぎない。その意味では今回の事件も私の責任と言ってもいいだろう」
「そ、そんな……」
「だから……ここに改めて宣言しよう。――只今をもって王国軍情報部は解散する。以後、その任務は軍司令部に引き継がれることになるだろう。カノーネ君……今まで本当にご苦労だったね」
「……あ……」
「これでもう……君が無理をする必要はない。私など助けるために命を賭けなくてもいいんだ。だから死ぬなどと……哀しいことを言わないでくれ」
「リシャール……閣下……。……ううっ……あああっ……。うあああああああッ……!」

―遊撃士協会グランセル支部
「そうですか……。ええ……わかりました。それでは宜しくお願いします」
「どうだった、エルナンさん？」
「ええ、カノーネ元大尉が事情聴取に応じたそうです。詳しい事情が分かったらギルドにも教えてくれるでしょう」
「そっか……」
「あの強情そうな女が話をする気になったなんてね。どんな手を使ったのかしら？」
「ま、そっちの調査は王国軍に任せておくとしよう。俺たちは俺たちで情報を整理したいところだ」
「そうですね……。では、まずは今回の仕事の報酬をお渡しするとしましょう。細々とした依頼への対応も併せて査定しておきましたよ」
エステルは仕事の報酬を受け取った。
「あの、エステルさん。本当にレンちゃんは《結社》の……」
クローゼがエステルに尋ねた。
「うん……。《執行者》の１人で《殲滅天使》って名乗ってた……。本人が言ってたから間違いないわ」
「そうですか……」
「……」
クローゼとティータはそれ以上聞かなかった。
「で、でもあんな女の子が《結社》の手先だなんて……。しかも《執行者》ってものすごい使い手なんだよね？何かの間違いじゃないかな？」
「ううん、ホントだと思う。ヨシュアも同じくらいの歳で《執行者》だったみたいだから……」
「……あ……」
「少し《結社》についてお話しましょう。《結社》というのは《盟主》という人物を筆頭とし、７人の《使徒》と呼ばれる幹部がいま

す。その幹部の下に戦闘のエキスパートの《執行者》がいるのです。しかも《執行者》の年齢は様々……レンさんのように幼い者もいます」

「そんな……」

「レンさんも言っていた通り、《執行者》は戦闘能力が秀でた者を抜擢していきます。お分かりのようにあの歳で《執行者》になれたのは彼女が天才だったからです」

「……。前に『ある人物』を捜しているって言ってたよね？それで《結社》について詳しいのは分かるけど、どうしてそんなにレンについて知っているの？」

「……」

「ねえ、答えてよ、レインさん！」

「彼女は、レンさんは私が追っている事件の被害者なのです……。これ以上はどうしても言えません……。それはあなたたちのためでもあり、彼女のためでもあるのです……」

「レインさん……あなたは……一体何者なの……？」

「それについては自ずと判ることになるでしょう。今はただ協力員として手助けさせてください」

「……」

「今は、この状況を整理するのが先決だ。人には話したくないものがあるだろ？」

「うん、わかった……」

「しかし、徹底的に振り回してくれたわね。カノーネに《ゴスペル》を渡して戦車を使った再決起を唆したのもあの子だったみたいだし……」

「各方面に脅迫状を送ったのもあのガキだったらしいな……。一体何のためだったんだ？」

「なんとなく、だけど……。そうした方が面白そうだったからじゃないかな？」

「なに……？」

「レンは今回の実験を『お茶会』に見立ててたわ。そしてあたしたちを含めた大勢の人間を参加させるために色々と準備して招待した……。そんな気がするのよね」
「……マジかよ。脅迫状の一件があったから王都に来たのは確かだが……」
「それすら彼女は読んでいたということになりますね」
「ふむ、あの仔猫ちゃんならそのくらいはやりかねないね。ボクたちを眠らせた睡眠薬の量もコントロールしていたみたいだし」
「ちょうど俺たちがあのタイミングで波止場に到着できるようにだな……。ふざけたマネしやがって……」
「えっと、やっぱりみんなあの子に眠らされちゃったわけ？」
「ええ……恐らく。レンちゃんが百貨店で買ってきたクッキーを頂いた直後でしたから……」
「そういえばレインさんは途中で抜けたんだよね？もしかして、睡眠薬が入っていたのを……」
「……正直に言いましょう。実は、分かっていました」
「おい、テメエ。なぜ分かっていながら俺たちを止めなかったんだ」
アガットがレインの襟首を掴んだ。
「その事については謝ります。しかし、あの場で止めてしまったら全員、彼女に殺されてしまうかと思って……」
「はあ！？」
「なるほど……。もし眠らずに全員波止場に駆けつけていたら全員まとめて殺されていたのかもな」
「ええ、彼女も『お茶会』に参加させるのが目的であって私たちを殺すのが目的ではなかったはずです」
「ケッ、そこまで判っていながらあえて言わなかったのかよ……」
「しかし……痛い失態だったな。彼女が殺すつもりで毒でも使われていたら全員死んでいたのかもしれん」
「あ……」
「それは……俺たちの判断ミスだったな」

「いえ、それに関しては私の失態です。皆さんをバックアップする身としてもう少し気を付けるべきでした。本当に申しわけありません」
エルナンが謝罪した。
「や、やだな、エルナンさん。今回ばかりはあたしたち全員の責任だと思う。まさか《結社》があそこまでとんでもない連中だったなんて……」
「あの大きな人形兵器……。あんなの、おじいちゃんでも造るのは難しいと思う……。造れたとしても……あんな風に動かせるなんて……しかも……あのレンちゃんが……。……」
「ティータ……。もう、元気出しなさいよ！今度会ったら、絶対にあの子を《結社》から抜けさせるんだから！」
「ふえっ……？」
「ちょ、ちょっと待て！」
「5年前、父さんはヨシュアを《結社》から抜けさせた……。だったら娘のあたしが同じことできないはずがない！首根っこ掴んででも絶対に抜けさせてやるんだから！」
「お、お姉ちゃん……。うんっ、そうだよね！」
「ふふ……さすがエステルさん」
「うんうん、その意気だよ！」
「フッ、気持ちいいくらいのあっぱれな前向きさだねぇ」
「ったく……軽く言ってんじゃねえぞ」
「ふふ、いいじゃないの。これがエステルなんだから」
「そうですよ、アガットさん。この前向きさがエステルさんなのですから」
「こういう前向きさは旦那以上かもしれんなぁ」
「うーん、ええなあ。ますます惚れてしまいそうや」
突如ギルドに入ってきたのはケビン神父だった。
「あ……！」
「ケビン神父。お待ちしていましたよ」

「やー、遅れてスンマセン。今までカラント大司教にこっぴどく説教されてましてなぁ。それで遅れてしまったんですわ」
「……」
エステルはじっとケビン神父の顔を見ていた。
「どした？オレの顔に何かついとる？」
「あのー、今更といえば今更な質問なんですけど……。結局ケビンさんって何者なの？」
「ええ、それがあったわね。あたしたちも結局、はぐらかされたままだわ」
「もちろん普通の神父さんじゃないんですよね？」
「そやな……。改めて自己紹介しようかな。――七耀教会《星杯騎士団》に所属するケビン・グラハム神父や。以後、よろしく頼みますわ」
「《星杯騎士団》……？」
「ほう、これは恐れ入った。まさかキミみたいな若者が《星杯騎士》だったとはね……」
「オリビエ、知ってるの？」
「アーティファクトが教会に管理されているという話は聞いたことがあると思うが……。その調査・回収を担当するのが《星杯騎士団》と呼ばれる組織さ。メンバーは非公開ながらかなりの凄腕が選ばれるらしい」
「へえ、詳しいですやん。残念ながらオレは騎士団でもペーペーの新米でしてなぁ。凄腕ちゅうのは過大評価ですね」
「アーティファクトの回収……。それじゃあ、あの時使ったダルモア市長の杖って……！」
「ああ、あれは王国軍から正式に引き渡されたもんや。教会とリベールの間にはアーティファクト回収の盟約が結ばれているさかいな。それを無断で壊してしもうたんで大司教さんに説教されたんやけど……」
「そ、そうだったんだ……。でもあの場合、ああするしか方法はな

かったと思うんだけど」
「ええ、手段を選んでいる場合じゃなかったと思うわよ」
「へへっ。そう言ってくれると助かるわ。まあ、そんなわけでこれからもよろしく頼んます。《身喰らう蛇》について何か判ったら情報交換してや」
「えっ……！？」
「オレがリベールに来たのは《結社》の調査のためやからね。正確に言うと……連中が手に入れようとしとる《輝く環》の調査なんやけど」
「！！！」
「《輝く環》……！」
「女神が古代人に授けた《七の至宝》の一つ……。グランセル城の地下に封印されていると思われていた伝説のアーティファクトですね」
「ええ、そうですわ。どうもここ最近、大陸各地で《七の至宝》に関する情報を集めとる連中がいるらしくて……。教会としても、その動向にはかなり目を光らせていたんですわ。そんな折、リベールの方から《輝く環》の情報が入ってきた。そこで、真偽を確かめるべく新米のオレが派遣されたわけです」
「そうだったんですか……」
「それじゃあ《輝く環》って本当にリベールにあるわけ？封印区画に無かったってことはただの伝説だと思ってたけど……」
「そもそも、どういう物かも判ってねえそうじゃねえか？」
「ま、そのあたりの真偽を調べるのもオレの仕事なわけや。今日来たのは、こちらの事情を説明してもらおと思ってな……。つまり、また何かあった時はお互い協力しようってこっちゃ」
「なるほどね……。うん、こちらも望むところよ」
「そうだな。こちらとしても助かるぜ」
「これも何かの縁だし、困ったことがあったら連絡して」
「おおきに！ほな、今日のところはこれで失礼させてもらいますわ。

またな～、みなさん！」
ケビン神父はギルドを出ていった。
「行っちゃった……」
「オリビエとは違った意味で毒気を抜かされる神父さんね」
「フッ、ボクに言わせればまだまだ修行不足かな。もう少し優雅さが欲しい所だね」
「あんたの世迷言のどこに優雅さがあるってゆーのよ」
「しかし《輝く環》ですか……。《結社》が各地で《ゴスペル》を使った実験をしているのと何か関係があるのでしょうか？」
「そうですね……その可能性は否定できません。ちなみに、今回の事件で彼らは3つの地方で《ゴスペル》の実験を行ってきたことになります。この分だと、残りの地方でも実験が行われるかもしれませんね」
「そっか……。王都での騒動も片づいたし移動した方がいいのかしら」
「てことは、ロレント地方かボース地方になるな……」
その時、ギルドの通信器が鳴った。
「はい、こちら遊撃士協会、グランセル支部です。……。なんと、そうですか。……了解しました。こちらも注意しておきます。ええ、それでは」
「エルナンさん、どうしたの？」
「あの雌ギツネの取り調べでも終わったか？」
「いえ、それとは別件です。どうやら昨夜、ボース地方に空賊団の残党が現れたそうです」
「ええっ！？」
「また残党騒ぎですか……」
「情報部に空賊団……やたらと忙しい夜だったんだ。で、一体どこに現れたんだ？」
「以前彼らがアジトにしていた《霧降り峡谷》の砦だそうです。現在、軍の飛行訓練場として使用されているそうですが……。彼らは

そこに保管されていた空賊艇を奪って逃走したそうです」
「なんですって……！」
「ほほう、ミュラーが受け取りに行ったあれか……」
「ちょ、ちょっと待ってよ。何だかあまりにもタイミングが良すぎない？もしかしてそれも《結社》が絡んでいるとか？」
「可能性は否定できませんね。その意味では、この次に皆さんに向かっていただくのはボース地方がいいのかもしれません」
「確かに……」
「いいんじゃないかしら。現時点ではロレントとボースのどちらで事件が起こるのか判らないしね」
「うん……。って、シェラ姉も一緒に来てくれるわけ？」
「情報部の残党のケリがついてあたしたちの仕事も一段落したわ。敵は相当強いみたいだしあたしも助太刀しようと思ってね」
「やった！」
「へッ、《銀閃》の手並み、とくと拝見させてもらうぜ」
「ふふふ、シェラ君がついにボクの元に来るんだね」
「シェラザードさん。よろしくお願いします」
「頼りにしていますよ」
「ええ、こちらこそよろしくね」
「あ、もしかして……アネラスさんも一緒とか？」
「えへへ……私は残念ながら。そろそろクルツさんたちが強化訓練から帰ってくるんだ。そちらのチームに入れてもらうつもりなの」
「そうなんだ……」
「チームってことはやはり《結社》対策かい？」
「はい、《結社》の拠点を捜索することになると思います」
「拠点の捜索？」
「これまでの動きから見て《結社》は国内の何らかの拠点を築いている可能性は高そうです。そこを叩かない限り、根本的な解決にはなりません。今後は王国軍と全面協力して捜索活動を行う必要があるでしょう」

「確かにあの大きな人形兵器はメンテナンスが絶対に必要だし……。ちゃんとした施設がどこかにあると思います」
「へっ、結社対策チームがもう1つ必要になるのも当然か」
「うーん、そうなるとクルツさんのチームにも戦力が必要になりそうだし……。アネラスさんを取られちゃうのも仕方ないかぁ」
「えへへ、ごめんね。《結社》の拠点を見つけたらエステルちゃんの力も借りることになると思うから。その時に一緒に戦おう？」
「うん……そうね！」

―リベール王国某所
「うふふ、イノシシみたいな飛行艇はぜんぶ振り切れたわね。ありがとう、《パテル＝マテル》」
「よく帰ったな、レン」
「レーヴェ！」
やってきたのは銀髪の青年だった。
「うふふ、ただいま。言われた通りちゃんと実験してきたわ」
「ああ、ご苦労だった。しかしずいぶんと派手にやったものだな」
「だって今回は、人を殺しちゃダメって言われたんですもの。つまらないからせめて賑やかにさせてもらったの。おかげでとっても楽しいお茶会が開けたわ」
「ふふ……そうか。実験の成果はどうだった？」
「そうね。悪くないんじゃないかしら。教会のお兄さんの裏ワザに邪魔されちゃったけど……。動作も安定していたし充分実戦で使えると思うわ」
「ふむ、そうか」
「でも《ゴスペル》って量産はできないんでしょう？兵器として使えるかどうかはちょっと微妙だと思うんだけど」
「量産する必要はないからな。今回の実験にしてもあくまで新型の

《ゴスペル》の潜在能力を測るのが目的だ。別に兵器を造ることが目的じゃない」
「あら、そうなの。まあいいわ。あんまり興味はないしね。ねえ、それより……ヨシュアはまだ見つからないの？」
「ああ……。攪乱用に放たれた人形がすでに何体もやられたそうだ。おそらくあいつの仕業だろう」
「ふーん、さすがね。レンもかくれんぼは上手だけどヨシュアには敵わないし……。あーあ、つまんない。どうして意地を張って結社に帰ってこないのかしら？」
「さてな……」
「そういえば教授がエステルのせいでヨシュアが帰ってこないって言ってたけど。エステルも、ヨシュアのこと捜してるみたいなのよね～。どういうことなのかしら？」
「レン……。あまり教授の言うことを鵜呑みにしない方がいい」
「どうして？」
「真実というのは見方によって変わるものだ。たとえば月の顔が様々な形に喩えられるように」
「ウサギさんとか、カニさん？」
「ああ。教授が語る真実とレンにとっての真実は別物だ。実際に見て、感じたことからレンなりの真実を掴むといい」
「う～ん、難しくてよく分からないけど……。レン、エステルたちのことわりと気に入っちゃったかも。こんど会ったとしてもいきなり殺したりはしないわ」
「それでいい」
銀髪の青年はレンの頭を撫でた。
「偉いぞ、レン」
「えへへ……」
「フフ、ご苦労だったね」
「教授……それにカンパネルラ！」
「ご機嫌よう、レン。どうやら王都でかなりお楽しみだったみたい

じゃない？」
「うふふ、まあね。あなたが来るって分かっていたら絶対に招待してあげたのに。とっても盛り上がったのよ」
「ふふっ、それは残念だなぁ。僕の方は、遊撃士のお姉さんたちに人形劇を見てもらったけど……さすがに君のお茶会ほど盛り上がりはしなかったかな」
「はは、またの機会に誘ってもらうといいだろう。しかしレン……随分とエステル君のことを気に入ったみたいじゃないか？」
「うふふ、まあね。教授の言っているようなイヤなお姉さんじゃなかったわ」
「はは、私は別に、イヤな人間とは言っていないさ。むしろ、とても好感が持てる魅力的なお嬢さんだと思うよ。ただ、ヨシュアが戻ってこないのは彼女が原因であるのも確かでね。そうだろう、レーヴェ？」
「確かに……一因であるのは否定しない」
「どうだろう、レン。エステル君が仲間になったら君は喜んでくれるかな？」
「な……」
「エステルを仲間に？……うふふ。いいわ、とっても楽しそう！かなりの実力不足だけど鍛えればモノになると思うし……。それにエステルがいたらヨシュアも戻ってくるわよね？」
「フフ、もちろんさ」
「あはは、さすが教授。ホントいい趣味してるよね」
カンパネルラが愉快に笑った。
「戯れが過ぎるぞ、教授……。いくら貴方といえど、本人の意志を無視して結社に入れることなどできないはずだ。それが《盟主》の定めた《身喰らう蛇》の掟だろう」
銀髪の青年が教授を睨んだ。
「フフ、言われるまでもない。《蛇の使徒》たるこの私がそんな事をするとでも思うかい？君やヨシュアにだって決して強制はしなか

ったろう？」

「……」

「第一、そんなことをしてはせっかくの楽しみが台無しだ。あくまで自発的に仲間になってもらわないとね」

第9章　狂ったお茶会（３０）（前書き）

この話で『第９章　狂ったお茶会』が終了します。いかがだったでしょうか？

第9章　狂ったお茶会（30）

―朝　王都グランセル南街区
「さてと……次はボース地方ね。一通り準備を済ませたらさっそく発着場に行こっか？」
「まあ、空賊の事件については王国軍が捜査しているはずだ。緊急性も無さそうだしすぐに行く必要はねぇだろう」
「なるほど。残った仕事を片付けてから出発してもいいってことね」
エステルたちは残った仕事を片付けてからグランセル空港に向かうことにした。

―グランセル空港
「いらっしゃいませ。ボース市に向かう遊撃士様御一行ですね？」
「あ、はい、そうです」
「エルナン様からすでに運賃は頂いております。乗船手続をなさいますか？」
「手続きをしたら、船が来るまでここで待った方がいいだろう。もうグランセルでやり残したことはねぇだろうな？」
「うん、大丈夫よ」
「かしこまりました。では、ギルドに連絡して他の方もお呼びしますね」
エステルたちは乗船手続をしてから定期船の到着を待つことにした。

セシリア号が到着してエステルたちが船に乗ろうとした時、
「間に合ったか……！」

走ってやって来たのはナイアルとドロシーだった。
「あれ、ナイアル……それにドロシーじゃない？」
「エステルちゃん……」
こころなしかドロシーの顔は浮かなかった。
「は～、ギルドを訪ねたらすでに出発したって聞いてな。慌てて追いかけたんだがなんとか間に合ってよかったぜ」
「えっと、どうしたの？昨晩の事件についてなら一通り話したはずだけど……」
「いや……。ちょいと個人的にお前に知らせたいことがあってな。離陸までの時間、俺たちに付き合ってくれねぇか？」
「あたしと？えっとシェラ姉……」
「いいわよ。話してらっしゃいな。あたしたちは先に席を取っておくから」
「うん、よろしく」
「ごきげんよう。ナイアルさん、ドロシーさん」
「さよーなら！」
エステルを除くギルドのメンバーが船に乗り込んでいった。
「それじゃあ時間もないし話を聞かせてもらおっかな……」
エステルが背後に気配を感じて振り返るとオリビエが立っていた。
「って、何でオリビエがちゃっかりと残っているわけ」
「フッ、ボクのことはそこらへんに転がっている石コロだと思ってくれたまえ。さ、話を始めるといい」
「この男は……」
「ずいぶん自己主張の激しい石コロだな」
「姿が見えないと思ったらやっぱりね」
シェラザードがすかさずやってきてオリビエを掴んだ。
「ちょ、ちょっとシェラ君……」
「はいはい、さっさと座席につきましょうね～」
ずるずるとオリビエを引きずって行ってしまった。
「何というか相変わらずな兄さんだな……」

「あはは、まあね」
「……」
ドロシーはずっと黙っている。
「ドロシー。何だか元気なさそうね。確かボース地方に取材に行ってたんだっけ？」
「う、うん……。今朝戻ってきたんだけど～……。あ、あのね～、エステルちゃん」
「あ、思い出した！たしか霧降り峡谷にある空賊のアジトに行ってたのよね。今は軍が飛行訓練の基地に使っているという……。あれ、それって……」
「ようやく気付いたか。昨夜、空賊団の残党に襲撃された基地ってわけだ。こいつ、ちょうど空賊艇が奪われる現場にいたらしくてな」
「そ、そうなんだ……。それじゃあ、わざわざ情報提供に来てくれたのね？えへへっ、気が利くじゃない」
「ま、確かに情報提供ではあるんだが……」
「へ？」
「まあいい。ドロシー、渡してやれ」
「は、はい～……。あのね～、エステルちゃん。あんまり悪いように考えたらダメだからね～？写真って、全ての真実を映しているわけじゃないから～」
「ど、どうしたのよ？真面目な顔しちゃって……」
「これ……わたしが昨日撮った写真～」
エステルはドロシーから1枚の写真を受け取った。
「これって……空賊艇とあのボクっ子よね。で、こっちにいるのは……」
そこでエステルの言葉が止まった。
「……え」
エステルが黒髪の少年の姿に目を疑った。
「……今の所、この写真は王国軍には提出しないつもりだ。もちろん、誌面に載せる気もない。どうするかはお前の判断に任せるぞ」

第10章　インターミッション　ヨシュア（1）

―霧降り峡谷　王国軍飛行訓練場

「どうぞ、こちらです」

守備隊長がミュラーを案内していた。

「……ほう」

ミュラーが空賊団の飛行艇、《山猫号》を見て驚いた。

「ふむ……手入れが行き届いている。王国軍の方でしっかりと整備してくれたようですな」

「はは、何度か飛行訓練に使用させてもらいましたから。私も2回ほど操縦しましたよ」

「いかがかな？実際に操縦してみての感想は」

「いやあ、速度と機動性は我が軍の警備飛行艇以上です。確か、3年前に発表されたラインフォルト社製の高速飛行艇でしたな。失礼ながら、飛行艇といえばリベール製と思っていたので正直驚かされましたよ」

「帰国の警備艇と比べると装甲は心もとないし、武装も多く積めませんがね。かといって偵察機にするには製造コストがかかりすぎる。正直なところ、あんまり軍用には向かない船ですよ」

「ほう、そうなのですか。ふむ……いい船なのにもったいない気もしますな」

「本国ではもっぱら、貴族や資産家の道楽として使われているそうです。例の空賊団も、元々は同じ事情だったのでしょう」

「確か……《カプア男爵家》でしたかな？」

「元、男爵家です。借財で領地を失ったことにより既に爵位も剥奪されています。実は、この船も抵当に入っており債権者が引き渡しを要求していましてね」

「な、なるほど……。色々と事情があるそうですな」

「いずれにせよ、元帝国貴族が貴国で愚行を犯したのも事実。申し

わけなく思っています」
「はは、お気になさらずに。ところで、引き取りはいつ頃になりそうですか？」
「早ければ数日中に。もっとも、そちらも色々と忙しそうな様子ですが」
「はは……。クーデター事件の残党ですね。所詮は逃亡者たちの最後の悪あがきにすぎません。心配なさらずともすぐに逮捕できるでしょう」
「うわ～、前来た時と少し雰囲気が違いますね～」
突然、階下から賑やかな声が聞こえてきた。ドロシーの声だった。
「ああっ、空賊艇！？へ～、まだこんな所に置かれていたんですね～」
すかさずカメラを取り出すドロシー。
「ん～、いいですね～。夜の照明に照らされた姿もとってもキュートです～」
そしてシャッターを連射した。
「おいおい、嬢ちゃん。できたら撮影する前に許可を取っちゃくれねえか？」
「ああ～っ！」
全く無視して別のところに走るドロシー。
「月明りに照らされた真夜中の霧降り峡谷……。ん～、なんて幻想的で可愛いのかしら～。はい、チーズ？」
「だ、だからよ～……」
兵士も呆れている。
「……彼女は？」
「はは、マスコミの人間ですよ。先ほど、この訓練場に押しかけてきたんです。確かに予約は入っていたんですがこんな時間に訪ねてくるとは……」
「なるほど……」
「あああっ！？」

2度目のドロシーの驚き。
「へ～、見たことのない軍服を着てらっしゃいますね～。それに背もおっきいですし～。
どちらの部隊に所属されているんですか～？」
「……いや、自分は……」
「あっ、申し遅れました～。《リベール通信》っていう雑誌のカメラマンをしているドロシー・ハイアットで～す。雑誌の特集で、この訓練場の写真を撮りに来たんですよ～」
「……エレボニア帝国軍所属、リベール駐在武官のミュラーだ」
「エレボニアの軍人さん!?うわ～、お目にかかるのわたし初めてです～。１０年前の戦争では王都に住んでいましたから～」
「そ、そうか……」
「隊長、よろしいですか」
王国軍兵士が守備隊長のもとにやってきた。
「なんだ、どうした？」
「司令部からの連絡です。例の残党の動きについて大きな進展があったそうです」

―霧降り峡谷　飛行訓練場の裏口
「はあ～、眠い眠い。早く交替時間にならないかね」
裏口を守っていた兵士の２人が暇を持て余していた。
「第２種警戒体制ってのがこんなにヒマだったなんてな。さっきの嬢ちゃんがまた来てくれるといいんだが」
「あのメガネの子かよ？お前、変わった趣味してんなぁ」
「確かにユニークだったけど、なかなか可愛かったしさ……。お近づきになりたいな～って」
「はは、だったら休憩時間に声をかけてみろよ。しかし……情報部の残党ってのは何を考えてるのかね。何でもラヴェンヌ廃坑に隠れ

ていたそうじゃないか」
「さーな。元エリート部隊の考えている事なんて俺たちなんかに判るわけないって」
「……ご苦労、2人とも」
「こ、これは隊長」
「見回りご苦労様です」
「ああ、そのまま聞いてくれ。どうやら情報部の残党がグランセルに現れたらしい。カノーネ元大尉を始めとする全メンバーは逮捕されたそうだ」
「へえ、そうでしたか！」
「それじゃあこれで警戒体制は終わりですね？」
「いや、それなんだが……。『空飛ぶ巨大人形』というのが王都に現れたらしくてな。その捜索が行われているらしい」
「そ、空飛ぶ巨大人形！？」
「なんです、そりゃあ？」
「私にも分からんよ。いずれにせよ、夜明けまでは警戒体制を続けろとの指示だ。悪いがこのまま宜しく頼むぞ」
「うう……はい」
「……了解しました」
残念そうに答える兵士。
「はあ……。まったく冗談じゃないぜ。なんなんだよ……『空飛ぶ巨大人形』ってのは」
「さあな……。ま、いずれにせよもう襲撃の危険はないだろう。後は交替時間まで適当に立っていればいいさ」
「そうだな……。……あれ？」
1人の兵士が何かに気付いたようだ。
「なんだ、どうした？」
「いや、何か聞こえたような……」
周りを見渡し、警戒したが……
「あ……」

もう一方の兵士が睡眠薬を嗅がされ倒れた。
「お、おい！どうしたんだ……。う……」
振り返った兵士も同じく眠らされた。
「……」
睡眠薬を嗅がせたのはヨシュアだった。
「へへ、やるじゃねえか」
「お見事。あっという間だったな」
「ふ、ふん……。なかなかやるじゃない」
隠れていたカプア3兄妹がヨシュアの前に出てきた。
「……大したことじゃないさ。気が緩んだ兵士を眠らせるなんて造作もない」
「あー、はいはい。あんたに可愛げを求めたボクが馬鹿だったよ」
「しかし、本当に《山猫号》はここに置かれているんだろうな？てっきり例の要塞あたりに運ばれたと思っていたが……」
「調べた限り間違いない。飛行訓練に使われているから整備もされているはずさ」
「へへっ、ありがたいね。ただ、機体を動かすには《山猫号》の起動キーが必要だ。手に入れるアテはあるのか？」
「たぶん、先ほどの守備隊長が持っていると思う。帝国軍に飛行艇を渡す時に一緒に渡すつもりだろうからね」
「力ずくで取り戻すわけだね」
「ただし、殺さない方向で。必要以上に王国軍を敵に回さない方がいい。巡回中の兵士についてもなるべく隠れてやり過ごそう」
「まったく……無茶言ってくれるよね。まあたしかに、ボクも殺しは反対だけど」
「へへ、当たり前だ。俺たち《カプア一家》に殺しと暴行はご法度だからな」
「はあ、ホント俺たちって悪党になりきれないと言うか……。あの少尉の言った通りかもな」
「……ふふ」

「な、何がおかしいのさ？」
「いや……あまり時間はない。そろそろ始めよう」
「う、うん……」
「いよいよだな……」
「おーし……気合いを入れるぜ！」
カプア一家とヨシュアの《山猫号》奪還作戦が幕を開けた。

第10章　インターミッション　ヨシュア（2）

―守備隊長の部屋
「ここは……俺らが使っていた部屋だな」
「へえ……通信器なんか設置したのか」
「誰もいない……。ちょっと不用心だね」
「どうやらここが守備隊長の部屋みたいだ。ここで待ち構えていれば……」
その時、ヨシュアが気配を察知した。
「……戻ってきた。入ってきた所を叩くよ」
「え……」
そしてすぐに守備隊長たちが入ってきた。
「な……」
「え……」
「……遅い」
ヨシュアたちが先制攻撃を仕掛けた。

「あった……これだ」
ヨシュアが守備隊長の懐から山猫号の起動キーを取り出した。
「おお、呆気なく見つかったな！」
「さ、さすがに冷や汗をかかされたけどな……」
「……ねえ、ヨシュア。前にボクたちと戦った時、あんた、手加減していたわけ？」
「？どういう意味だい？」
「だってあんた、メチャクチャ強いじゃん。正直、あの時とは比べ物にならないくらいにさ」
「別に手加減はしていない。“スイッチ”が入っていなかったくら

いさ」
「スイッチ？」
「詳しい説明は省くけど……そのスイッチが入ると僕は極限まで目的合理的な思考・行動をすることができる。ただ、それだけの違いなんだ」
「う、うーん……。判ったような、判らないような」
「使える力は同じ……。ただ、その力をケタ違いに有効活用できるってわけか」
「そう思ってくれて構わない」
「ヘッ、大したもんだぜ。今のお前なら、あの特務兵の隊長ともやり合えるんじゃねぇか？」
「《結社》の手先だったっていうロランス少尉のことだな」
「いや……それはありえない」
ヨシュアがきっぱりと否定した。
「僕の能力は隠密活動と対集団戦に特化されている。一対一の戦いで《剣帝》に敵うはずがない」
「《剣帝》……？」
「それってあの少尉のこと？」
「ああ……。彼がいる限り、僕は決して正面から《結社》に挑めない。《漆黒の牙》の名の通り……暗闇から牙を突き立てるだけさ」
「……あ……」
「おめぇ……」
「何と言うか……ずいぶんハードな話だな」
カプア一家が目を伏せた。
「……つまらない話をした。時間がない、先を急ごう」

第10章　インターミッション　ヨシュア（3）

―地下2階　兵士の詰所
「さてと……。そろそろ交替の時間かねぇ」
「ぼちぼち出かけるとするか」
兵士たちが部屋から出ようとしていた。

「（おい……どうだ？）」
「（まずいな……。キールさん、僕が渡したS2弾を1つくれないか？）」
「（お、おお……）」
キールがヨシュアに怪しげな弾薬を渡した。
そしてヨシュアが部屋にそれを投げ入れた。

「んっ？」
「な、なんだ？」
たちまち白い煙で部屋が満たされた。
「う、うおっ！？」
「うわっ……」
そして、兵士たちが次々と倒れていった。
「だめだ……気が遠く……」
どうやら即効性のある睡眠弾だったようだ。

「す、すごい威力……」
「S2弾……睡眠ガス弾かよ」
「普通に出回っているものよりかなり即効性が強いみたいだな。中身は独自にブレンドしてるだろ？」
「……まあね。調合法は企業秘密だけど」
「ケチ」
「まあいい。とっとと先に行こうぜ」

―地下1階　一室
「は～、こんなご馳走が取材で食べられるなんて～。ドロシー、めちゃ感激です～？」
ドロシーとミュラーが食事をしていた。
「へへ、そう言ってくれると腕を振るった甲斐があるぜ。エレボニアの旦那はどうだい？」
「ああ……文句なく美味い。帝国軍で出る食事と比べたら天地の差と言えるだろうな」
「ほう、そうなのか。エレボニア軍ってのはどんなモンが出るんだい？」
「そうだな……。塩辛いだけのコンビーフ。煮崩れした味気のない豆。カビの生えかかった黒パン。この3つは必ず出てくるといってもいい」
「うへぇ……」
「うわ～、可哀想ですね～。そんな料理ばっか食べてるから戦争したくなっちゃうんですか？」
「む……」
「わはは。嬢ちゃん何気にキツイなぁ」
「まあ、さすがにそれはないと信じたいところだが。ただ、巨大な兵力を維持するために糧食の質を必要最低限に抑える……そういう

発想は確かにあるだろう」
「は～、厳しいんですね～……」
「あんたらも苦労してんだねぇ」

「……」
「???（ねえ、どうしたの？）」
「（ああ……どうやら食事中みたいだ。しばらく動かないだろうし、このまま通り過ぎよう）」
「（うん、わかったよ）」
「（とっとと先に進むか）」

―地上
「おお……！」
ついに《山猫号》を見つけたヨシュアたち。
「愛しの《山猫号》……ホント会いたかったぜ～！」
「見た感じ、ちゃんとメンテナンスされてるね！」
「へへ、さすがリベール軍。飛行船の扱い方が判ってるな」
「嬉しいのは分かるけど、あまり時間がないからね。起動キーも手に入れたし発進準備をしてくれないかな」
「はいはい、分かってるって」
「ったく……。少しくらい浸らせろよ」
「それじゃあ中に入ろっか」
ヨシュアたちは《山猫号》に乗ろうとしたが、
「……いたぞ！」
王国軍の兵士が追い付いてきた。
「げげっ……！」

「チッ、気付かれたか！」
「空賊ども！？」
「い、いつの間に……」
「こいつらが隊長たちを気絶させたのか！？」
「仕方ない……」
「おねんねしてなよ！」
ヨシュアたちは力ずくで解決することにした。

「ふう、一丁あがりだね」
「すぐに後続が来るはずだ。ここで食い止めるから貴方たちは発進準備を頼む」
「おお！」
「任せときな！」
ドルンとキールが《山猫号》に乗り込んだ。
「ジョゼット……君は行かないのか？」
「《山猫号》の発進なら兄貴たちがいればできるさ。ボクはここでアンタのサポートをしてやるよ」
「だが……」
「へへっ……。クールに振る舞ってるけどアンタ、やっぱり甘いよね」
「え……」
「今までも、何だかんだでボクたちを助けてくれたし……。ここでアンタを見捨てて逃げるとか思わなかったわけ？」
「……これでも人を見る目はあるつもりだよ。特に、君たちみたいなお人好しの人間に関してはね」
「お、お人好しはアンタだろっ」
「やれやれ……。騒がしいので来てみれば」
「え……」

「《カプア空賊団》……。このタイミングで現れたか。しかも君が同行していたとはな」
現れたのはミュラーだった。
「……覚えていましたか」
「こ、こんな所にエレボニアの軍人が！？あんたの知り合いなの！？」
「……顔見知り程度だよ。多分、不戦条約の前に船を引き取りに来たのだろう」
「お察しの通りだ。その船を奪われようが我々としても痛くもないが……。こうして居合わせた以上、見過ごすわけにもいかない」
ミュラーが剣を引き抜いた。
「改めて名乗らせてもらおう。帝国軍第７機甲師団所属――ミュラー・ヴァンダール少佐だ」
「くっ……！」
「気を付けて……一筋縄じゃいかなさそうだ」
「君ほどではないと思うがな。行くぞ！」
ミュラーと交戦！

「はあはあ……。な、何で倒れないのさ！？」
「達人（マスター）クラス……。しかも姓がヴァンダールか。オリビエさんの正体、大体、見当がつきましたよ」
「それを言うなら君の正体もなかなか驚きだ。ハーメルの遺児、ヨシュア・アストレイ君」
「！！！」
「え……？」
「やはりか……。あのお調子者のカンもたまには当たるらしい」
「……」
「ヨ、ヨシュア！？」

「聞かせてもらいましょうか……。どうして貴方たちがそれを知っているのかを……」
「どうやら本気にさせてしまったようだな……。ならば俺も全力で応えよう」
ヨシュアとミュラーの闘気がぶつかった。
「ちょ、ちょっと……！」
その時、《山猫号》の発進準備が整ったようだ。
「準備完了だ！２人とも飛び乗れ！」
「うんっ！」
ジョゼットが《山猫号》に飛び乗った。
「ほら！何やってんのさ！」
「……くっ……」
ヨシュアが口をかみしめて飛び乗った。
「な……！」
「に、逃がすな！」
兵士たちが発砲した。
「はわわ～、シャッターチャンスです～！」
ドロシーは飛びゆく《山猫号》に対してシャッターを切った。
「くそっ！」
「隊長殿はどうした！？」
「ハーケン門に連絡を取れ！」
兵士たちはせわしなく動き始めた。
「あれれ～……？今の男の子ってどこかで見たことあるような～」
ドロシーがカメラをチェックした。
「はわわっ、どういうこと～！？ナ、ナイアル先輩に相談しなくちゃっ……！」
「命拾いをしたのは果たしてどちらの方か……。ふふ、まだまだ俺

も未熟だな」
ミュラーは階段を降りながら独り言を言っていた。
「しかし《ハーメル》か……。どうやらあのお調子者の手伝いをするしかなさそうだ」

第11章　霧魔の標的（1）

―定期船　《セシリア号》

「……ふう……。……はあ……」

エステルは船の外でドロシーから渡された写真を見ながらため息ばかりついていた。

「（これって……やっぱりヨシュアだよね……。マフラーなんかしちゃってな～にカッコつけてんだか……。ちゃんとご飯とか食べてるのかな……）」

エステルは顔を上げた。

「（やっぱりヨシュアはリベールのどこかにいる……。空賊たちと協力しながら何かをしようとしている……。でも……だったらどうして……。どうしてあたしを……あたしたちを頼ってくれないの？）」

そして再び写真に目を落とした。

「（ヨシュアのバカ……。軍の基地を襲撃するなんて無茶なことをしちゃって……。こんなに冷たい……出会った時みたいな目をして……。それに……それに……）」

そこでエステルは写真から目を背け、

「どうしてボクっ子なんかと仲良さそうに映ってるわけ！？」

エステルが絶叫した。

「エステル？」

「ふえっ！？」

エステルが反射的に写真を隠した。

「シェラ姉……」

「なんだ、ここにいたんだ。フラッといなくなるから心配しちゃったじゃない。どうしたの？乗り物酔いでもした？」

「あ、うん……心配しないで。体調が悪いわけじゃないから」

「そっか。ふう、今日もいい天気ね。こんな穏やかな空の下で怪し

げなことを企んでいる連中がいる……。まったく馬鹿げた話だわ」
「うん……」
「……ね、エステル。1人で無理する必要はないのよ？」
「え？」
「記者さんたちの話が何だったかは聞かないけど……。今のあんたには頼っていい仲間が何人もいるわ。もちろん、あたしも含めてね」
「……あ……」
「もちろん、あんたが1人で心の整理をつけるのもいいわ。ただ、あたしたちは全員、あんたの力になりたいと思ってる。それだけは忘れないで」
「シェラ姉、あたし……」
「ふふ、話はそれだけよ。ボースに到着するまではまだまだ時間はあるけど……。途中でロレントに着陸するときはちゃんと席に戻るようにね」
「うん……」
そうしてシェラザードは船内に戻っていった。
「頼る、か……。ちょっとみんなと話をしてこようかな……」

～アガット
「エステル……どうした？」
「あ、うん。いつもの船内散策よ」
「そうか……。ヘッ、いつもいつもよく飽きねぇもんだな」
「ふんだ、いいじゃない。ボースまではまだ時間があるんだし」
「ま、一眠りするくらいの時間はあるかもしれねぇな。しかし、次はボース地方か……。ルーアン、ツァイス、王都と来て今度は何が起きることやら」
「うん……。何も起こらないのが一番だけど、そうも行かなさそうだし……」

「ああ……。とりあえずボースに着いたら空賊どもの調査でも始めるか」
「えっ……！？」
「……何を驚いてやがる。連中が結社の手先っていう可能性はゼロじゃねえだろう。お前が言い出したことだぜ？」
「あ、うん、そうだけど……。よ、よくよく考えてみたらその可能性は低そうかなって」
「……」
「ほ、ほら、あたしって何回か連中とやり合ってるし。結社の手先になるほどの悪党じゃないかな～って……」
「……ま、いいけどな。詳しい話はボースに着いたらルグラン爺さんから聞けるだろ」
「うん……そうね」

～ジン
「おお、エステル。どこに行ってたんだ」
「あ、うん……。ちょっと風に当たりにね」
「そうか。そういえば、次に着陸するのはロレントって町らしいが……。確かお前さんの家があるんじゃなかったか？」
「あ、うん。正確に言うと、町中じゃなくて町外れに家が建ってるんだけどね。父さんのこだわりだったみたい」
「ほう、そうなのか。しかし、旦那が建てた家ってことはさぞかし粋な佇（たたず）まいなんだろうな」
「うーん……どうなのかな？粋かどうかはともかく住み心地はいいと思うけどね。あたしと父さんとお母さんと……ヨシュアの思い出が詰まっているし」
「……そうか」
ジンはヨシュアと聞いて目を伏せた。

「や、やだなあ、ジンさん。そんな顔しないでよ。ロレントで降りるんだったらジンさんを招待するところだけど……またの機会ということで」
「ああ、そうだな。……ところでエステル。ボースって街に着いたら俺の稽古にでも付き合わんか？」
「へ……突然どうしちゃったの？」
「王都じゃ眠らされてロクに働けなかったからな。なまった身体をほぐしたいんだ」
「あはは、そっか。うーん、ジンさんの稽古相手が務まるかどうか分からないけど……。あたしでよければ喜んで」
「おう、よろしく頼むぜ」

～クローゼ
「エステルさん……」
クローゼは展望室にいた。
「クローゼ。こんな所にいたんだ」
「はい……いい眺めだったので。エステルさんの方はまたお散歩みたいですね」
「あ、うん、何となくね。……」
「……」
そこでお互い黙ったが、先に口を開いたのはクローゼの方だった。
「……ヨシュアさん、どうかなさったんですか？」
「ええっ！？ど、ど、どうして！？」
「クス……やっぱり。ナイアルさんたちの話はそういう内容だったんですね」
「……。……カマ、かけられた？」
「ふふっ……これでも女王候補ですから。駆け引きのたぐいはちょっぴり通じているんです」

「はあ～、敵わないわね。うん……確かにヨシュアの話だったわ」
「……ヨシュアさんは無事でしかもリベール国内にいる。でも、それを素直に喜べない何らかの事情がある……。そんなところでしょうか？」
クローゼは的確にエステルの内を当てた。エステルはただ茫然と聞いていた。
「えっと、当たりました？」
「クローゼ……。洞察力、良すぎだってば。充分、立派な女王様になれると思うんですけど」
「ふふっ、恐れ入ります。……でも、良かった。ヨシュアさんはご無事なんですね。それが分かっただけでも嬉しいです」
「うん……あたしはそれは嬉しいけど……。……」
「エステルさん？」
「ダルモア市長逮捕の時……市長が銃で脅した時のヨシュアの態度、覚えてる？」
「……はい」
「ヨシュアが今、あの時みたいな目をしてるって言ったら……クローゼ、どう思う？」
「あ……。……」
「ごめん、クローゼ。ちゃんと打ち明けられないのに思わせぶりなことを言っちゃって」
「いえ……いいんです。エステルさんの悩み、少し分かった気がしますから」
「そっか……。……。そ、それとは別にね……」
「え？」
「た、大した事じゃないのかもしれないけど……。こっちが散々心配してるのに女の子と一緒って、どう思う？」
「……。……その子の年齢は？」

「あたしと同じくらい」
「……。何だかこう、納得のいかない気持ちが沸き起こってきますね」
「そ、そうだよね！？やっぱり納得いかないよね！？」
「ええ、もちろんです。ヨシュアさんたら……一体何をやってるのかしら」
「まったくもう……小一時間問い詰めてやりたいわ」
女性陣に変な誤解を持たれているヨシュアであった。
「ぷっ……」
「ふふっ……」
お互い顔を見ながら笑いあう。
「ありがと、クローゼ。ちょっとだけ気持ちがラクになった気がするわ」
「ふふ、どういたしまして。お役に立てたのなら嬉しいです」
「気持ちの整理がついたらみんなにもちゃんと話すから。それまで待っててくれる？」
「はい、もちろん。……それでは私、そろそろ席に戻りますね」
「うん、また後でね」
クローゼは座席に戻っていった。

～ティータ
「……」
「ティータ。こんな場所でどうしたの？」
「あ……エステルお姉ちゃん。あのね、ちょっと考え事をしちゃって……」
「考え事？」
「うん……。……ねえ、お姉ちゃん。わたし、やっぱり頼りにならないのかなぁ？」

「へっ……？」
「お姉ちゃん、なんだか悩んでるみたいだったから……。それって、わたしじゃお手伝いできないこと？」
「あ、うー……。参ったなぁ。ティータにも見抜かれてたか」
「やっぱりそうなんだ……。わがまま言って付いてきたのにわたし、何の力にもなれなくて……。……レンちゃんのことも引き留められなかったし……。わたし……やっぱり足手まといだよね」
「ティータ……。バカね。そんなこと気にしてたの？」
「で、でも……」
「あたしは……悩んでるっていうよりはちょっと混乱してるだけだから。他の人に頼っても何の解決にもならないから……。だから今はちょっと……1人で考えさせてほしいんだ」
「お姉ちゃん……。わたしが今、お姉ちゃんの力になれることってないの？」
「もちろんあるわよ」
エステルがティータを抱き締めた。
「ふえっ？はわわっ、お姉ちゃん！？」
「ん～、やっぱり落ち着くわね～。あったかくてスベスベで、何とも絶妙な抱き心地じゃのう」
「はう～……。エステルお姉ちゃんってばぁ」
「あたし……ティータがいてくれて助かってるよ。もちろん、機械に詳しいとか専門的なことに関してもだけど……。ティータが笑ってくれるだけで頑張ろうって気分になれるのよね」
「え……」
「レンだって、ティータと一緒に楽しそうに遊んでいたじゃない？ひょっとしたら、あたしたちを騙す演技だったのかもしれないけど……。でも、全部が全部、ウソじゃなかったと思うんだ。きっとあの子に届いていると思う」
「そ、そうなのかな……。だったら……わたしも嬉しいな」
「ふふっ。ようやく笑ってくれたわね。うんうん。やっぱりティー

タは笑顔が一番！たまに見せるベソかいた顔も可愛いと言えば可愛いんだけどね」
「も、もう。お姉ちゃんったら……。ありがとう、お姉ちゃん。そんな風に言ってくれて……。わたし、そろそろ席に戻るね」
「うん、また後でね」

～レイン
「おや、エステルさん。どうしました？」
「うん、またちょっと風に当たろうと思って……」
「そうですか……」
そこでレインがエステルに唐突に尋ねた。
「エステルさん。本当にレンさんを結社から抜けさせる気なのですか？」
「えっ……？」
突然の質問にエステルは答えられなかった。
「あの波止場の時、彼女は６年前の事件の被害者だということを聞いていましたね？詳しいことは言えませんが、彼女はその時、結社に拾われたのです。それ以来彼女がどう過ごしたか判りませんが、今や執行者となっていました」
「そ、そんな……」
「その事件の後、私はレンさんについて調べました。彼女はその事件の関係者だったので重要なことが分かればいいと思ったのです。そこで私はレンさんの過去に衝撃を受けました。この先は非常に話しづらい事ですが……。……レンさんの両親は……レンさんを捨てたのです……」
「！！！」
「どのような状況でそうなったのか判りませんが、今、レンさんには両親が存在しないのです。そんな彼女の苦しみは計り知れません。

そのような過去がある以上、結社はレンさんにとっては唯一の居場所なのでしょう。今一度、問いましょう。エステルさん、本当にレンさんを結社から抜けさせる気なのですか？」

「……」

エステルは言葉が出なかった。

「……レンがどのような過去があったのかあたしには分からないけど……。でも、今結社にいることは間違っていると思う。結社にいることがレンのためには絶対にならない……。レンが結社から抜けるつもりがないなら、レンのためにもあたしが無理やりでも抜けさせてやるわ！」

「そうですか……。ふふ、やはりあなたは素晴らしい人ですよ、エステルさん」

「えへへ……。大きなこと言っちゃったけど、どうしたらいいか分からないけどね」

「それでもいいのですよ。その気持ちがあれば、すぐには伝わらなくてもいずれ必ず届くはずです。頑張ってください」

「うん、ありがと」

「……レンさんもこれをきっかけに変わってくれればいいのですがね。今はただエステルさんを信じましょうか」

第11章　霧魔の標的（2）

「……お待たせしました。まもなく本船はロレント市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早めに座席にお戻りください」
「あ……」
「ほら、エステル。さっさと座りなさい。立ってたら危ないわよ」
「ん、そうね」
エステルは座席に座った。
「本日は飛行船公社をご利用いただき、まことにありがとうございました。ロレントでお降りになるお客様はお忘れ物がないかご確認――――きゃっ」
客室乗務員の驚き声が聞こえると、いきなり飛行船の窓の外が白くなった。
「えっ!?」
「これは……」

「な、なんだこれは!どうしてこんな低い高度で雲の中に入ったりするんだ!?」
ペトロフ船長が突然の出来事に焦っている。
「い、いえ……これは雲というよりも……」
「管制塔より連絡がありました!どうやらロレント市一帯に突然、濃霧が発生したようです」
「なんだと……!?」

「な、なんなのこれ……」

「わあ……真っ白……」
「ふむ……雲の中にでも入ったのかな？」
「そうかもしれないけど……。その割には高度が低いわね」
「飛行船の着陸時にはこういうことがよくあるのか？」
「いや、珍しいと思うぜ。少なくとも俺には経験がねぇ」
「私もです……」
「……皆様、どうぞ落ち着いてください。管制塔からの連絡でロレント市一帯に濃い霧が発生している事が判明しました。現在、着陸時の視界確保のため夜間のサーチライトの準備を発着場の方で行っております。今しばらくお待ちください」
「霧って……。確かにロレントにも霧が出るけどせいぜいモヤくらいだったよね？」
エステルがシェラザードに尋ねた。
「ええ……。こんな濃いのは記憶にないわ。……イヤな予感がするわね」

―ロレント市
「うわ……真っ白だわ……」
「うん……。町の方が全然見えないね」
「定期船も霧が晴れるまで出航を見合わせるそうですね」
「この様子では霧が晴れるのはかなり時間がかかりそうですね。ということは、ここで足止めということになりますね」
「ふむ……。ここはいったん降りてギルドに向かった方がいいわね」
「へッ、そうだな」
「えっ……ど、どうして？」
「地元のお前さんたちが訝(いぶか)しがるような異常な濃霧……。《結社》が絡んでいる可能性もあるだろう」
疑問に思うエステルにジンが説明した。

「あ……」
「フッ……。残る地方はボースとロレント。そして次はボースではなくロレントだったということかな？」
「ええ……。おそらく間違いないと思います」

―遊撃士協会ロレント支部
「ふふ、まさかこんな時にあなた達が来てくれるなんて。確かボース支部に向かう途中だったのよね？」
「ええ、その通りよ。狙ったタイミングで足止めを食らっちゃたわ」
「おかげでウチはとっても助かったけどね。それにしても……エステルと会うのは訓練場に行く時以来かしら？新しい仕事用の服もだいぶ板に付いたみたいね」
「そ、そっかな……」
「ジンさん、クローディア殿下、ティータさん、レインさんとは初めてよね？私、ロレント支部の受付を務めるアイナといいます。よろしくお願いしますね」
「はい、こちらこそ」
「どうぞ、よろしくお願いします」
「あのあの……よろしくお願いします」
「はは、お前さんの噂は色々と聞かせてもらってるよ」
「あら……そうなんですか？ところでオリビエさん。そんな所でどうしたのかしら？」
オリビエは依頼の掲示板に身を隠してアイナと視線を合わせようとしなかった。
「ハッハッハッ……き、気にしないでくれたまえ。決してあの夜のことがフラッシュバックするとかそういう訳ではないんだからね？」
「？？？」
「ふふ……そっとしておいてあげなさい。そういえばアガットはア

イナと面識あるのよね？」
「まあな。ロレントにはあまり寄らねぇから何度か会った程度だが」
「ふふ、今回はよろしくね。挨拶はこれくらいにして早速、状況を説明させてくれる？」
「ええ、お願いするわ」
そして、アイナが今のロレントの状況を説明し始めた。
「……霧が発生したのは今日の明け方くらいになるわ。最初はうっすらとモヤがかかった程度だったけど……みるみるうちに濃くなって視界を遮るほどになったの」
「どういう原因で発生したのか現時点では分かりませんか？」
「ええ、今のところは。ロレント市の全域を覆っているのは確かですが……」
「霧にも色々種類があるからな。沖合いで発生して海岸に流れてくるものもあれば、盆地で発生するものもある」
「ふむ……王都地図を見るとロレントは盆地にあるようだね？」
「ええ、どちらかと言うと。単なる自然現象である可能性も否定できないわね」
「どちらにせよ……警戒はした方がいいみたいね。ボース行きは中断してこのままロレント地方で様子を見た方がいいんじゃないかしら？」
「その方が良さそうだな。どのみち霧が晴れるまでは定期船も動かねぇみてえだし」
「あ……その……」
「なんだ、エステル？」
「例の空賊事件はどうするのかなって……」
「そいつは元々、他に手がかりがなさそうだから調べてみようって話だっただろ？調査自体は王国軍がやってるし、俺たちが無理に行く必要はねぇだろ」
「で、でも……」
「……なんだ。気になることでもあるのか？」

「あ、ううん……。そういうわけじゃないんだけど。でも……あたし……」
「……エステル。あんたの心当たりが何なのかは知らないけど……少し冷静に考えてみなさい」
「え……？」
「空賊艇の奪還事件はある意味、終わった事件よ。人質が取られたのならともかく、ギルドが動く緊急性もない。そもそも空賊がボース周辺に留まっている可能性も低いしね」
「そ、それは……」
「一方、こっちの異常現象は今、起こりつつある事件だわ。もしも《結社》の仕業だったらさらに何か起きる可能性もある。さあ……どちらを取るのが正しいの？」
「……」
「……エステルさん」
クローゼは心配そうにエステルを見ている。
「あ、あの、シェラさん！たぶんお姉ちゃんにも事情があるんだと思うんです。だから、その……」
「……ううん、ティータ。シェラ姉の言う通りだわ」
「お姉ちゃん……」
「ゴメンね、シェラ姉……。あたし、ちょっと周りが見えていなかったみたい」
「謝ることなんてないわ。周りが見えなくなることは誰にだってあることだしね。あたしだってそうだし、そこのアガットなんて特にね」
「んだとォ？」
「でも、己を見失わずに常に最善の道を捜索するのも遊撃士には必要な心構えよ。言うは易し、行うは難しなんだけどね」
「そのあたりに関しては俺もまだまだ修行中の身だな。旦那の足元にも及ばんだろう」
「そ、そうなの！？」

カシウスの娘であるエステルが驚いた。
「どんな逆境でも己を見失わずユーモアすら漂わせる芯の強さ……。以前、旦那がカルバードに来た時、何度も死地を助けられたもんだぜ」
「そうなんだ……」
「まあ、あのオヤジの域なんざ簡単に届くわけはねぇからな。俺たちは俺たちなりに一歩ずつ進むしかねえだろう」
「焦る必要はないのですよ、エステルさん」
「うん……そうだね。アイナさん、ごめん。話を脱線させちゃって」
「ふふ、いいのよ。それでは話を進めさせてもらうけど……。現時点であなたたちに要請したい仕事は特にないの。何か起こった時のために待機してくれるだけでいいわ。家で待っててくれてもいいのよ？」
「あ、うん。家には戻るつもりだけど……。それ以外に気を付けておくことってない？」
「うーん、そうね。強いて言うなら、街道の様子を調べてきてほしいくらいかしら」
「街道の様子を調べる？」
「さっきも言った通り、霧はロレント市全域を覆っているんだけど……町外れの方にも結構、広がっているみたいなの。今後のことを考えると発生範囲がどのくらいか知っておきたいのよね」
「ふむ、このまま定期船が使えない状態が続けば陸路を確保する必要があるわけか」
「ええ、そういうこと。南のエリーズ街道、西のミルヒ街道、北のマルガ山道。この3つの道で、どこまで霧が続いているか確かめてきてくれる？」
「了解。そのくらいお安い御用だわ」
「さて、そうなると……。今回は、あたしとエステルが案内役になった方がいいみたいね」
「うん、そうね。ロレント地方なら大体知ってるし」

「仕方ねぇ……とっとと同行者を選びな」

「はあ……それにしても凄いわね。知り尽くしている町なのに迷っちゃいそうな気がするわ」

「そうならないように地図とコンパスがあるのよ。方向を見失ったら参照しながら進みましょう」

「うん、そうね。とりあえず、それぞれの道で霧の範囲を調べるとして……。クローゼ、ジンさん、レインさん。一度、家の様子を確かめに行ってもいいかな？」

「はい、お付き合いしますね」

「はは、早速招待させてもらうことになりそうだな」

「どのような家なのか、楽しみですね」

「さてと……。それじゃあ出発するわよ」

第１１章　霧魔の標的（３）

―ブライト家
「うーん……ここもかなり霧が出てるわねぇ」
「あ……ここがエステルさんのお家ですね」
「はは、予想していた通り、何とも趣のあるたたずまいだな」
「ええ、家自体にその人の柄が現れているようです」
「うーん……そういうもんかしら。お茶くらいご馳走するからよかったら上がっていってよ」
「お茶の用意はあたしがするわ。あんたは屋根裏部屋に上がった方がいいみたいね」
「屋根裏部屋……なんで？」
「ほら、あれよ」
シェラザードが屋根裏部屋の天窓を指した。どうやらエステルがロレントに帰ってきて以来、天窓を開けっ放しにしていたようだ。
「あ……そっか。さすがにこの霧じゃ家の中が湿っちゃうわね」
エステルはすぐに屋根裏部屋に上がって天窓を閉めた。

「はあ～……やっぱり家は落ち着くわ。外が霧だらけだから余計にそう思うのかもしれないけど」
エステルたちは紅茶を飲みながらテーブルで一息ついた。
「ふふ、それはあるかもね」
「しかし、シェラザード。なかなか勝手知りたる雰囲気じゃないか」
「ふふっ、そうね。ここの家とはずいぶん長い付き合いだし」
「あたしのお母さんが生きていた頃からだから……もう１０年以上になるかな」
「ええ、そうなるわね」

「たしかシェラザードさんは旅の一座にいらっしゃったとか。どんな風にエステルさんとお知り合いになったんですか？」
「ふふ、それはね……」
「ちょ、ちょっとシェラ姉」
「いいじゃないの、昔の話だし」
シェラザードはエステルに構わず話し始めた。
「あれは１２年前……。うちの一座がロレントに興行に来た時だったかしら。その頃のエステルは、今以上に好奇心旺盛な恐いもの知らずでね。興行の後、１人であたしたちの天幕に遊びに来ちゃったのよ。……旅芸人の一座なんていわば『ヨソ者』じゃない？普通、興行以外で地元の人が近寄るなんてなかったから最初はみんな戸惑ってたけど……。まあ、とにかく物怖じしない子でね。毎日遊びに来るうちに、すぐにみんなに気に入られちゃってたわ。もちろん、あたしを含めてね」
「まあ、今のエステルさんを見れば充分頷けますね」
レインが笑った。
「うっ……」
「そんなある日、日が暮れてからエステルが帰ることがあって……。仕方なく、あたしが家まで送っていったのよ。カシウス先生とレナさん――エステルのお母さんと知り合ったのはその時だったわ」
「はは……そんなことがあったのか」
「あ、あはは……。さすがに４歳の時だからあんまり覚えていないんだけど……。でも、その時からシェラ姉、巡業でロレントに来るたびにウチに遊びに来るようになったのよね」
「ふふ、そうだったわね」
「しかし、シェラザード。旅の一座にいたお前さんがどうしてリベールで遊撃士に？」
その言葉を聞いてシェラザードの顔が曇った。
「……色々と事情があってね。８年前、遊撃士になろうと思った時、カシウス先生を頼ることにしたの。それ以来ずっとリベールにいる

わね」
「なるほど、そういうことか」
「あ、そういえば……。あの、その頃にはもうヨシュアさんもいたんですか？」
「あ、ううん……。ヨシュアが引き取られたのはその3年後くらいかな。シェラ姉が正遊撃士になるために王国中を回ってた頃だったよね？」
「ええ、そうだったわね。旅から帰ってきたら見知らぬ男の子を紹介されてね。さすがにちょっとビックリしたわ」

その後、エステルたちは雑談や世間話に花を咲かせ……最後にお茶のお代わりをしてからブライト家を後にすることにした。

「さてと……。それでは再び街道の様子を調べに行きましょうか」
「うん、そうね」

「あ……」
エステルたちがエリーズ街道を進んでいくと、ある所で急に霧が晴れた。
「ほう……いきなり明るくなったか」
「霧の発生範囲はここまでのようですね」
「ふむ、ここの地点を記録すればいいですね」
「エリーズ街道、ロレント市からおよそ６０セルジュの地点と……。霧の範囲内に魔獣はいないし、何とか安全は確保できそうね」

「うん、そうね。他の街道もこの調子で調べて行けばいいわけね」
次にエステルたちはミルヒ街道に向かった。

「あれ……そこにいるのは先輩たちですか」
前からやって来たのは、ロレント支部所属の遊撃士リッジだった。
「あら、リッジさん、お久しぶり」
「リッジさん、お久しぶり」
「やあ、エステル。訓練場を出発して以来だね。アイナさんから聞いたよ。大変な仕事をしてるんだって？」
「うん、まあね。リッジさんの方は、ひょっとして護衛の仕事？」
「ああ、こちらのお客さんたちが王都に急用があるらしくてね。このままだと今日は定期船が運航しそうにないから僕が送っていくことになったのさ」
「なるほど、そうなんだ」
「ふふ、ご苦労さま」
「先輩たちの方こそ、霧の調査、ご苦労さまです。街道の状況はどうですか？」
「エリーズ街道の方はあまり霧は広がってないわ。少し歩いたらすぐに視界が開けるはずよ」
「ふう、助かりました。それじゃあ僕はこれで失礼します」
リッジは護衛の依頼人たちに声をかけた。
「それでは皆さん。王都に向けて出発しましょう。僕から離れないでくださいね」
「おお、よろしく頼むぞ」
「頼むわよ、遊撃士さん」
リッジは依頼人を率いて行ってしまった。

―ミルヒ街道
「ふむ……霧が晴れたか」
「ミルヒ街道、ロレント市からおよそ８０セルジュの地点と……。霧の範囲内に魔獣が徘徊してるから結構危険な状況かもしれないわ」
「一般人は街道に出ない方がいいかもしれません」
「うん……アイナさんに報告しましょ。さてと、これで残るはマルガ山道方面だけね」

―マルガ山道
「やっと霧が晴れましたね」
「マルガ山道、ロレント市からおよそ１４０セルジュの地点と……。広範囲に発生してる上に魔獣も徘徊してるから危険だわ」
「うん、確かに。これで３つの街道で霧の発生範囲を調べたし……。そろそろギルドに戻ってアイナさんに報告しよっか？」
「ええ。そうした方が良さそうね」
エステルたちはギルドに戻ることにした。

第11章　霧魔の標的（4）

―ロレント市

エステルたちがロレント市に到着した時、エステルが何かに気付いた。

「あれ……？」

エステルが周りを見回した。

「今……鈴の音が聞こえなかった？」

「ええ。遠くから聞こえてきましたね」

「ふむ……。なかなか雅な響きだな」

「誰かがどこかで鳴らしたのでしょう」

「うんうん。ウットリしちゃったわ」

「……」

しかし、シェラザードは何も言わずに驚いた顔で口を開けたままだった。

「あれ……。どうしたの、シェラ姉？」

「あ、ううん、何でもないわ。綺麗な音色だったから聞き惚れちゃっただけよ」

「なんだ、シェラ姉もか。鈴の音なんて珍しいけど、リノンさんの雑貨で新しく仕入れたのかしら？」

「そうかもしれないわね。それはともかく……これで霧が発生した範囲はだいたい掴めたわ。そろそろギルドに戻りましょう」

「あ、うん。アイナさんに報告しなくちゃ」

―遊撃士協会ロレント支部

「みんなご苦労さま。まずは、報酬を支払わせてもらうわね」

エステルは調査の報酬を受け取った。

「しかし、もっと漠然とした報告になると思ったんだけど……。そんなにはっきりと霧の境界が出来ていたなんてね」
「ええ……不自然と言えば不自然ね」
「実際、地図だとどんな風に広がってるの？」
「……ちょっと待ってて」
アイナは王国地図を取り出した。
「エリーズ街道方面に６０セルジュ、ミルヒ街道方面に８０セルジュ、マルガ山道方面に１４０セルジュ……」
アイナがエステルたちの情報を元に境界を書き込んだ。
「……こんな感じじゃないかしら」
境界はロレント市を中心に円状に広がっていた。
「うーん、これだとさすがに何も分からないか」
「そうですね……。霧の広がり方は、発生原因や風の流れで変化するそうですから」
「しかし、どうにもハッキリしねぇ状況だな。結局、ここで待機しつつ有事に備えるしかねぇってことか」
「うーん、そうなるわね。現状では王国軍も出動を決めかねてるみたいだし」
「あ、そういえば……。ねえ、ティータ！『霧除去装置』みたいな発明品、博士が造ったりしてないかな！？」
「ふえっ……！？うーん、えっと……。前に『除湿器』っていうのをおじいちゃんが発明したことがあったけど……」
「『除湿器』――名前の通り湿気を取り除く装置ってわけね。それって使えそう？」
「うーん、たぶんムリだと思うよ。屋外の大気を処理するには何百台も必要になっちゃうし……。それだけ用意できたとしても一時しのぎにしかならないかも」
「はあ……そう都合よくは行かないか」
「せめて《結社》が絡んでいる証拠でもあればいいんだが。連中の仕業にしては中途半端な感じもするしな」

ジンが腕を組んで悩んだ。
「中途半端っていうと？」
「これまでの事件だと《ゴスペル》が使われた時には『ありえない現象』が起こっていた。だが、今回の霧はそこまで大それたものとは思えなくてなぁ」
「それは確かに……」
「フッ、それともう一つ。彼らは毎回、何らかの形で『メッセージ』を発していた。しかし、今回はまだそれが見受けられないようだね」
「メッセージ？」
「亡霊騒ぎ、サングラスの男、そして各方面に送られた脅迫状……。こちらに『怪しい』と思わせる挑発的なサインがあったということさ」
「な、なるほど……」
「ふむ……確かに中途半端な気がするわね」
「……」
「シェラザードさん、さっきから浮かない顔をしていますが何か気づいたことでもありましたか？」
「……そのメッセージだけど。もしかしたら既に受け取っているかもしれないわ」
「え……？」
「ど、どういうこと？」
「た、大変じゃあ～っ！」
突然、クラウス市長が慌てて駆け込んできた。
「し、市長さん！？」
「ぜいぜい、はあはあ……。お、おお、エステル君……ずいぶん久しぶりじゃのう……」
「あ、うん。どうもお久しぶりです。でも、どうしたの？そんなに慌てちゃって……。……って、前にも似たようなやり取りがあったような」
「市長さん、まずは落ち着いてちょうだい。何があったの？」

「あ、あったもなにも……。ふむ、君たちの方は大丈夫だったようじゃな」
「？？？」
「あの、どういう事ですか？」
「……先ほど、うちのリタ君がいきなり倒れてしまったんじゃ。しかも、同じようにいきなり倒れた市民が他にもおるらしい」
「！！！」
「なんですって！？」

第11章　霧魔の標的（5）

―七耀教会　ロレント礼拝堂

エステルたちとクラウス市長はデバイン教区長に相談をして倒れた人たちの様子を見てもらった。

「一通りの家を回ってみましたがやはり全員、症状は同じですな……。呼吸も安定していますし、瞳孔にも異常はみられませんでした。ほとんど睡眠中と同じ状態ですのですぐに容態が悪化することはないでしょう」

「そ、そうですか……。不幸中の幸いと言うものじゃ」

クラウス市長は胸をなでおろした。

「ですが、このまま眠り続けたら体力の低下は避けられません。早急に対策を考えなくてはなりませんね……」

「うむ……」

「……」

エステルは真っ青な顔でうつむいていた。

「おい、大丈夫か？ひどい顔色をしているぜ」

ジンがエステルのことを気づかった。

「あ、うん……。まさかエリッサのお母さんやルックまでが倒れるなんて……。……ちょっと驚いちゃって……」

「エステル……。気分が悪いんだったらギルドに戻ってもいいのよ？それとも家に戻って休んでる？」

「ううん……ヘコんでられないもん。それで教区長さん。昏睡の原因は分かりそう？」

「残念ながら、今のところは……。ただ、教会秘伝の気付けが効かなかったことを考えると、毒や病気の類ではなさそうです。あえて言うなら何かに魂を囚われたような……そんな印象を受けましたね」

「何かに魂を囚われた……」

「……」

シェラザードが目をつむりながら考え込んだ。
「とりあえず、昏睡した人の家を一通り訪ねた方がよさそうね。どのような状況で彼らが昏睡状態に陥ったか……。家族から聞いてみたら何か掴めるかもしれないわ」
「あ……うん、分かった」
「エステル君、シェラザード君。今回の件は、ロレント市から正式にギルドに調査をお願いする。どうか原因を突き止めてみなの不安を取り除いてほしい」
「うん……任せて」
「微力を尽くさせてもらうわ」
「ねえ、みんな……。やっぱり……《結社》の仕業だと思う？」
エステルが礼拝堂を出たところで尋ねた。
「ああ……その可能性は高くなったな」
「協会の方にも判らない原因不明の昏睡状態……。『ありえない現象』と言えるかもしれませんね」
「しかも一度に４人もの人たちを昏睡状態に陥らせるとは……。到底考えられないことですね」
「やっぱりそうだよね……。それじゃあ、ひょっとして『メッセージ』もあるとか？」
「ええ……。確かめる必要があるわね。倒れた人たちのリストはちゃんと手帳にメモしてある」
「あ、ちょっと待って……」
エステルはブレイサー手帳を開いた。
「その４人の関係者を中心に街で聞き込みをしてみるわよ。一通り回ったらギルドに戻ってアイナに報告をすればいいわ」
「うん……！」
エステルたちは４人の昏睡者の関係者の聞き込みに向かった。

第11章　霧魔の標的（6）

―市長邸　メイドのリタ

「まあ、エステル……それにシェラザードさん」

クラウス市長の妻ミレーヌがリタの介抱をしていた

「こんばんは。ミレーヌおばさん。市長さんから話は聞いてる？」

「ええ、今回の事件の調査をして下さるそうね。私でよかったら何でも聞いてちょうだい」

「助かります。それではまず……リタさんの容態はどうですか？」

「ええ……まったく目を醒まさないわ。このまま朝になったら自然に目を醒ますといいのだけど……。今は様子を見るしかないわね」

「そっか……。リタさんが倒れたのはいつ、どのような状況ですか？」

「そうね……。あれは夕方の5時前だったかしら。私が下の台所から出ると玄関でリタさんが倒れていてね。慌てて書斎にいた主人を呼んでベッドまで運んでもらったのよ。でも、他にも同じようなことになった人たちがいたなんてねえ……」

「玄関で倒れていた……。その時、鍵はかかってたの？」

「たしか……掛かっていなかったはずよ。霧の対策を相談するために主人を訪ねる人も多かったから」

「うーん……。おばさんが仕込みをしていたのはどのくらいの時間だったの？」

「そうね……30分くらいかしら」

「なるほど……。だいたい事情は分かりました。最後に1つだけ……。リタさんが倒れる前後……変わったことはありませんでしたか？」

「変わったこと……？」

「見知らぬ人が訪ねてきたとか、変な物音を聞いたとか……。思いつくならなんでも結構です」

「そうね……。変わったことというよりも印象的な事があったけど。台所で仕込みをしている時、かすかに鈴の音が聞こえたのよ」
「鈴の音……」
「それって……あたしたちも聞いたアレ？」
「とってもキレイな音色でリタさんが鳴らしたのかと思ったのだけど……。そういえば見当たらないわね。どこにやっちゃったのかしら？」
「……色々参考になりました。また何かあったらギルドに連絡をください」
「ええ、分かったわ。あなたたちも……くれぐれも気を付けるのよ？」
「うん、分かった。ありがとね、ミレーヌおばさん」

―居酒屋　《アーベント》　トルタ
「あ、エステル。それにシェラザードさん？」
エリッサがトルタの介抱をしていた。
「こんばんは、エリッサ。どう、おばさんの様子は？」
「う～ん、気持ちよさそうに眠ってるだけなんだけど……。揺すっても声をかけてもぜんぜん起きないんだよね～。教区長様は心配ないって言ってくれたんだけど～……」
「そっか……」
「あたしたち、市長さんの依頼で今回の事件の調査に来たの。協力してもらえないかしら？」
「あ、はい、もちろんです～。何でも聞いちゃってください～」
「それじゃあ……まず、おばさんはいつどこで眠っちゃったわけ？」
「あ、うん……時間は夕方の5時くらいだったかなぁ。私とお母さん、外のテラスの椅子とかを片付けてたのね～」
「テラスの椅子を？」

「ええ。この霧だと湿気で痛みそうじゃないですか～？せっかく1階を目張りしたから椅子だけでも仕舞おうと思って～」
「なるほど……」
「そうして片付けてる途中で私、お父さんに呼ばれちゃって。戻ってきたら、お母さんが椅子にもたれて眠っちゃってたの」
「そっか……。眠った現場は見てないわけね」
「うん……。それで私、お母さんに声をかけたんだけど起きなくて……。慌ててお父さんたちを呼んで2階のベッドに運んでもらって……。それで……それで……。……」
エリッサは耐えられなくなり、下を向いて半泣きになった。
「エリッサ……」
エステルはエリッサを優しく抱き留めた。
「えへへ、ごめんね～……。エステルたちが来てくれたから、ちょっと気が緩んじゃって……」
「うん……分かってる。大丈夫だから心配しないで」
「うん……。ありがと～、もう大丈夫だよ。何か他に聞きたいことはない～？」
「うーん、そうね。シェラ姉、何かある？」
「そうね……。お母さんが眠った前後に何か変わったことはなかった？見知らぬ人が訪ねてきたとか、変な物音を聞いたとか」
「見知らぬ人……。そういえば、お父さんに呼ばれて中に入る時なんですけど～……。時計台から、女の人が出てくるのを見たんですよね～」
「女の人……。ロレントの人間かしら？」
「うーん、霧が立ち込めてたから顔は分かりませんでしたけど～……。不思議なデザインの服だったし、旅行者じゃないですかね～」
「不思議なデザインって……どういう所が不思議だったの？」
「うーん、黒くてゆったりしててドレスみたいな服だったような……。やっぱり霧で霞んでいたから詳しくは分からないんだけどね～」
「そっか……。でも重要な目撃情報かも。アイナさんに報告しなく

ちゃね」
「ええ……そうね。ありがとう、エリッサ。色々と話を聞かせてくれて」
「あ、いいえ～。お勤めご苦労様です～」
「おばさんのことはあたしたちに任せて。絶対に原因を突き止めて目を醒ましてもらうから！」
「うん……ありがと～、エステル」

―アストン家　ルック
「あ……エステルお姉ちゃん」
「おやまあ……。ブライトさん家のエステルちゃんじゃないか」
パットとマギー婆さんがルックの介抱をしていた。
「えっと、こんばんは。ルック……大変だったみたいだね」
「ううん、お姉ちゃん……。エステルお姉ちゃあん！！」
いきなりパットがエステルに抱きついてきた。
「わわっ……。どうしたの、パット？」
「無理もないさ……。倒れたルックを見つけたのはこの子だったらしいからね」
「そうなんだ……。パット……大変だったね」
「うっく……えっく……」
「マギーさん。お孫さんの様子はどうですか？」
「ああ、今のところグッスリと眠ってるだけさ。なあに、心配せずとも朝になれば起きてくるだろう。何たって元気だけが取り柄の腕白小僧だからねぇ……。このまま目を醒まさないなんてそんな馬鹿げたことがあるもんか……」
言葉の裏に不安を隠せないマギー婆さん。
「マギーさん……」
「……。……ねえ、パット。ルックが眠った

時のこと、あたしに教えてくれないかな？」
「……え……」
「あたしたち、市長さんに頼まれて今回の事件の調査を調べているの。パットが手がかりを教えてくれたら事件解決に一歩近づけると思う。だから……お願い」
「お姉ちゃん……。……うん……ボク……ちゃんと話すよ」
「ありがと、パット。それじゃあ、ルックはいつ、どこで眠っちゃったの？」
「あ、うん……ルックを見つけたのは時計塔の上だったんだ。時間は5時過ぎくらいだったと思う。その時、ボクたち霧の中でかくれんぼをしててさ……。ボクが鬼で、隠れてるルックを探している最中だったんだ。でも、やっと見つけたと思ったらルックが眠りこけちゃってて……。仕方ないから起こそうとしたらぜんぜん起きてくれなくって……」
「そっか……。ところで、ルックのことは誰がここまで運んでくれたの？」
「あ、うん。時計台守のパンデュ爺ちゃん。ボクが困ってるところにちょうど上に登ってきたんだ。霧で時計の調子が悪くなってないか確かめにきたみたい」
「そっか……。パンデュ爺さんらしいな。うん、大体状況は分かったわ」
「……ねえ、パット君。かくれんぼをしている時、他に変なことは起こらなかった？」
「変なこと……」
「見かけない人を見たとか、変な物音を聞いたとか。何でも構わないわよ」
「うーん……。霧で真っ白だったこと以外はあんまり覚えてないかも……。発着場に誰もいなかったのがちょっと怖かったくらいかなぁ」
「そっか……」

「特に不審なことは起こらなかったみたいね」
「ええ……そうね。2人とも、ありがとう。色々と参考になりました」
「そうかい……それは何よりだよ」
「エステルお姉ちゃん……。ルック、大丈夫だよね？」
「うん……もちろんよ。パットもこれ以上、ベソかかないようにね。ルックが起きたときにからかわれちゃうわよ？」
「う、うん……そうだね。ボク、もう泣かないよ」

―ラオじいさんの家
「おや、君たちは……」
「たしかエステルちゃんと……シェラザードさんだったかしら？」
フリオとエウリがラオじいさんの介抱をしていた。
「ええ、こんばんは」
「市長さんに依頼されて事件の調査にきたんだけど……。ラオじいさんの容態はどう？」
「ええ……変わりないわ。よく眠ってるみたいだけど何をしても全然起きなくて……」
「やっぱり、このまま朝になるまで様子を見るしかないのかな……？」
「ええ……今のところはそうした方がいいわ。それで幾つか聞きたいことがあるんだけど構わないかしら？」
「ええ、もちろんよ」
「僕たちに答えられることなら何でも構わない」
「ご協力、感謝するわ。まず、ラオさんがいつどこで眠ってしまったか教えてくれる？」
「時間は……5時半くらいだったかしら」
「場所は……その扉の向こうになるかな」

フリオが入口の扉を指差した。
「扉の向こうって……つまり廊下ってことよね？」
「ああ、扉を叩く音と一緒に『帰ったぞ』って声が聞こえてね。鍵を外して出迎えようとしたらお義父さんが倒れてたんだ」
「父さん、酒場に行ってたから酔い潰れたのかと思ったけど……ぜんぜん酒臭くなかったから今日は飲まなかったみたいなの」
「それなのに目を醒まさないからさすがに変だと思ってね……。教区長さんに相談に行ったのさ」
「なるほど……だいたい状況は分かったわ。最後に１つだけ……ラオさんが眠る前に何か変なことはなかった？」
「変なこと？」
「この霧のことかい？」
「ううん、それとは別に。見知らぬ人を見かけたとか、変な物音を聞いたとか」
「そういえば……お義父さんを運び込む時……」
「ああ……あなたも気付いたんだ？ゴタゴタしてたから今まで忘れちゃってたわね」
「えっと……どういうこと？」
「倒れたお義父さんをベッドに運ぼうとした時なんだけど……かすかに鈴の音が聞こえたんだ」
「……」
「ここでも鈴の音……」
「すごくキレイな音色だったわ。たぶん、誰かが外で鳴らしたんだと思うけど……」
「……ありがとう。色々と参考になったわ。もし他に何か思い出したらギルドに連絡してもらえるかしら？」
「ええ……わかったわ」
「それじゃあ失礼します。また明日、様子を見に来るね」
「ああ……よろしく頼むよ」
一通り聞き込みを終えたエステルたちはギルドに戻ることにした。

第１１章　霧魔の標的（７）

―遊撃士協会ロレント支部

「クラウス市長の依頼で昏睡事件の調査を始めたそうね。どう、聞き込みの様子は？」

「あ、うん。昏睡した人の家族から一通り話は聞いてきたけど……。」

「分かったわ。それではみんなを呼んでいったん情報を整理しましょう」

「……なるほど。色々調べてきてくれたわね。特に、昏睡した人たちの関係者の証言は興味深いわ。とりあえず、全ての証言において完全に一致している箇所がありそうね」

「あ、それって……目撃者が有無？」

「ええ、まさにその通りね。４人の件に共通すること……それは、昏睡した瞬間を目撃した人がいないという事よ」

「ヘッ、なるほどな。まるで狙ったかのタイミングで眠ったわけか」

「その意味では、この霧も一役買っているみたいですね。これだけ視界が狭いと目撃者も限られるでしょうし」

「霧の中から人知れずあらわれて犠牲者の魂を食らう悪魔……そんな妖しくも美しいイメージが浮かんでくるねぇ」

「ふえぇぇ～っ……」

「ううん、ゾッとしないわね」

「そうなってくると……その悪魔を特定するのに有効な証言がありそうね」

「それは『鈴の音』とエリッサさんの証言の『黒衣の女性』ですね」

「鈴はともかく、黒衣の女の人を見たのって確かエリッサだけだよ

ね。偶然って可能性はないのかな？」
「いえ……それはないわ。その女性が現れた場所で何があったかを考えるとね」
「あ……。ルックが昏睡した時計台……！」
「そう。黒衣の女性が出てきたのは時計台から……。そこでパット君がルック君を見つけたのよね」
「た、確かに……偶然であるわけないか。それじゃあやっぱりその黒衣の女の人が……」
「ああ、間違いあるまい。どうやらまた新たな《執行者》が現れたようだ」
「チッ……やはりか」
「原因不明の霧と昏睡が今回の『あり得ない現象』。そして鈴の音が『メッセージ』なんですね」
「これでようやく敵の姿が見えてきたわね。私はこれから、各地の支部と王国軍に連絡するけど……みんなはどうする？」
「そうね……。このままだと、またいつ他の市民が狙われるとも限らないわ。夜通しでパトロールすべきね」
「うん、あたしも賛成。交替でやれば少しは休めるはずだし」
「ああ、その必要はないぞ」
「えっ……？」
「夜間のパトロールは俺たち野郎どもに任せとけ。お前らはまとめて家でゆっくり休んどけや」
「で、でも……」
「そうね、エステルも今日は疲れたでしょう。姫様とティータちゃんを家まで案内してあげなさい」
「あ……。うん、分かった」
「あのな、シェラザード。何を他人事みたいに言ってる。パトロールは野郎どもに任せとけって言っただろうが」
「え……」
「お前とエステルには調査で頑張ってもらったからな。代わりと言

っちゃあ何だが、今夜はゆっくり休んでくれや」
「ちょ、ちょっと待って……。ランクBの遊撃士にそんな気遣いは無用だわ！」
「シェラザードさん。ここは意地を張るところではありませんよ。本当は疲労がたまっているのが目に見えていますよ。遊撃士なら休むところは休まないといつ休めるか分かりませんよ？」
「……っ……。……そうね」
「シェラ姉……」
「ジンさん、アガット、レインさん。夜間のパトロール、よろしくお願いするわ」
「ああ、任せとけ」
「その代わり、明日の朝からキッチリ働いてもらうぜ」
「それではお休みなさい」

「フッ、今夜はもう遅いからすぐに休んだ方が良さそうだね。それではエステル君。家まで案内してもらおうか！」
「って……どうしてアンタが来るわけ？」
「ハッハッハッ。そう警戒することはないさ。このオリビエ、たとえハーレム状態でも節度は守る紳士だからねぇ。ムフフ……」
「あ、あう……」
「オリビエさん……目がヨコシマですよ」
「まったく、このまま簀巻(すま)きにしてやろうかしら……」
「こら、スチャラカ演奏家。こんな所で何してやがる。とっととパトロールの順番を決めちまうぞ」
「え……。……ハッハッハッ。アガット君ったらお茶目さん。パトロールは、君とジンさんとレイン君の3人でやるって話だろう？」
「そんな事は一言も言ってねえ。俺たち野郎どもに任せとけって言っただけだ」

「へっ……」
「おら、とっとと来やがれ」
「ア、アガット君。ちょっと待ってくれないか？こんなハーレム状態なんて滅多にあることじゃないんだよ？君の分まで楽しんでくるからどうか見逃して……」
「あー、とっとと始めるぞ」
アガットは嫌がるオリビエを引きずってギルドの中に入っていった。
「うーん、オリビエ馴らしにはああいうのが一番みたいね……。しかもホントに緊張感のないヤツ」
「ふふ、本気なのか冗談なのかいまいち判りにくい人ですよね」
「１００％本気だと思うけど……。とりあえずティータの教育に良くない存在であるのは確かね」
「そ、そんなこと言ったらオリビエさんが可哀想だよ～」
「ふふ……」
「シェラ姉？」
「ううん、何でもないわ。オリビエの言葉じゃないけど今夜は早目に休みましょう」
「うん、そうだね。ティータ、クローゼ。案内するから付いて来て」

第１１章　霧魔の標的（８）

―ブライト家

「……あ……」

エステルが物音で目を醒ました。

「今の……扉の音よね……。……」

エステルはベッドから降りて様子を確かめることにした。

「……ン……。……ふぇ……。おねえちゃん……どうしたのぉ……？」

「ごめん、起こしちゃったね。戸締りが気になったからちょっと確かめてくるわ。すぐに戻るから眠ってて」

「……んぅ……わかった……。おねえちゃん……はやく戻ってきてね……」

「ふふっ……可愛い。うーん、なんだが無性にホッペをつつきたくなるわね。……おっと、イカンイカン」

ティータに布団をかけ直してエステルは部屋を出た。

「（シェラ姉かクローゼのどちらかだと思うんだけど……。一応、戸締りも確かめよう……）

―ヨシュアの部屋

「すー……すー……」

クローゼが安らかな寝息を立てて眠っている。

「よく寝てるみたい……。ふふ、クローゼってばヨシュアの部屋に案内したら慌てまくってたわね……。ちょっと可愛かったかも」

「……ン……。……先生……みんな……私は……どうしたら……。……。……。……すー……すー……」

「クローゼ……。……お互い、頑張ろうね」

―テラス
「はあ……相変わらずスゴイ霧ねぇ。……」
エステルの頭にヨシュアと過ごしていた日が浮かんだ。
「さてと……1階を確認しよっと」

―1階
「……」
シェラザードがテーブルの上にタロットカードを並べていた。
「シェラ姉……」
「あら……エステル、どうしたの？」
「うん、物音がしたからちょっと目が醒めちゃって。シェラ姉だったわけね」
「そうだけど……。ふふ、気配を感じて起きるなんて正遊撃士らしくなったじゃない？」
「えへへ……ちょっと緊張してるのかも。なんか色々あってアタマが混乱しちゃってるし」
「そっか……」
エステルがシェラザードの向かいの椅子に座った。
「ねえ、何か視えそう？」
「そうね……」
シェラザードがカードを1枚めくった。
「逆位置の『皇帝』。慈悲、共感、信用、障害、未熟さ。――――そして敵に対する困惑」
「な、なんか、思わせぶりなカードね。敵に対する困惑ってのはちょっと納得できないけど……」

「ふふ……。今のはエステルを占ったわけじゃないわ」
「え」
「ふふ、あんたの方にも思い当たるフシがあるみたいね。例の記者さんの一件？」
「あ……。……」
「急かしてるわけじゃないわ。ただ、気持ちの整理がついたら話してみるのもいいかもね」
「……。シェラ姉……相談、乗ってくれる？」
「あんたはあたしの妹分。そして姉貴分ってのいうのはこういう時のために使うものよ」
「シェラ姉……。……これ、見てくれる？」
エステルはドロシーの写真をシェラザードに差し出した。
「写真……？……。
……なるほど、ね。こりゃ、あんたがヘコんじゃうわけだわ」
「……うん……」
「さしずめ隠密活動のための隠れ蓑（みの）といったところかしら……。なるほど、遊撃士の身では使えない方法かもしれないわね。ふむ……狙いは何なのかしら？」
「シェラ姉……驚かないの？」
「正直、もっとハードな事をしてるじゃないかと思ったわ。でも、空賊艇の奪還事件って兵士が気絶しただけみたいだし。ヨシュアらしい手際の良さだと思うわよ」
「ま、まあね……」
「ただ、写真を撮られたのはちょっと迂闊（うかつ）だったわね。あの子らしくもないわ」
「それはまあ……相手があのドロシーだから。ことカメラに関しては天才的な運と実力みたいだし」
「なるほど、あの眼鏡の子か」
「……ねえ、シェラ姉。この写真って……ギルドに渡すべきだと思う？」

「前提として、遊撃士に課せられる義務はただひとつ。不当に傷付けられている民間人を助けるだけってことだけよ。ヨシュアが空賊とつるんで民間人を傷付けたりすると思う？」
「そ、そんなことヨシュアがするわけないってば！」
「だったらわざわざ報告する義務はないってこと。あたしもわざわざ報告するつもりはないしね。結局、あんたがヨシュアを信じていればそれでいいわよ」
「……」
「それとも……信じられない？」
「信じてる……信じてるけど……。でも……不安なの……。あたしの知らないところで冷たい瞳で……無茶をして……。自分のことなんてどうでもいいって考えてるみたいに見えちゃって……。いっそ父さんに相談して何とか保護してもらうべきかなって……」
「……エステル……」
「でも、だったらあたしは何のためにここまで来たわけ？ヨシュアをあたし自身の手で連れ戻すためじゃなかったの？……そこまで考えたらなんか頭が混乱しちゃって……」
「そっか……。でもね、エステル。焦らないでも答えは見つかると思うわよ」
「……え……」
「今のあんたは、自分の気持ちがちゃんと把握できていると思う。ただ何をしたいのかそれを見失ってしまっただけ。焦らないでもきっと答えが出てくるはずよ」
「シェラ姉……」
「船を降りた直後と比べるとずいぶん落ち着いたみたいだし。少なくとも、今やるべきことはちゃんと見えてるみたいじゃない？」
「う、うん……。ルックやエリッサのお母さんが倒れちゃった事を知った時……ヘコんでなんかいられないって逆にやる気が出てきちゃってね。そしたら、モヤモヤした気持ちも小さくなっていっちゃって……。あたし……やっぱ単純なのかな？」

「ふふ、そんなことないわよ。ただ、あんたはどうやら動いていた方がいいみたいね。前に前に進んでいくことで答えを見つけるタイプだと思う」
「ううう……イノシシみたいであんまり嬉しくないんだけど。でも、ありがとシェラ姉。何となく……答えが見えてきた気がする」
「ふふ……大したことはしてないわ。それにしても……ヨシュアもなかなかやるじゃない。まさかあの空賊娘とよろしくやってるなんてね？」
「そ、そっちに来たか……。ま、まだそういう関係だって決まったわけじゃないってば！」
「あら、そう？たしかちょっと気が強くてボーイッシュな子だったわね。それでいて、どことなく品の良さも感じさせるし……。なかなかイイ線行ってるかも？」
「シェラ姉、オヤジ……」
「一緒に危機を乗り越えるうちに愛が芽生えちゃったりして……。あ、でもエステル。心配することないんだからね？たとえヨシュアを取られても奪い返してやればいいんだから！」
「……今度こそシェラ姉にはこんりんざい相談しない……」
「ウソウソ、冗談だってば。ま、ヨシュアについて悩むのはその手の話にした方がいいかもね。その方が年頃の女の子らしいわよ？」
「それはそれでけっこう複雑なんですけど……。……そうでなくてもクローゼのことだってあるし」
「え？」
「な、なんでもない。なんか変に落ち着いたからあたし、そろそろ寝直すけど……シェラ姉はまだ起きてるの？」
「ううん、あたしももう寝るわ。せっかくアガットたちが気を使ってくれたしね」
「そういえば……。……」
「なに？」
「……シェラ姉の方こそ何か悩みでもあったりする？」

「そうね……あるにはあるわ。でも、2、3日中にはみんなにも話せると思う」
「そっか。うん、だったらあたし、余計な心配はしないから。でも……無茶だけはしないでよ？」
「ふふ、心配無用よ。手のかかる妹分の面倒も見なくちゃならないしね」
「もう……。まあいいわ。おやすみなさい、シェラ姉」
「おやすみ、エステル」
エステルは席を立って2階に戻った。

「逆位置の『皇帝』。慈悲、共感、信用、障害、未熟さ。――――そして敵に対する困惑。何をしたいのか見失ってるだけ、か……。ふふ……誰のことなんだか」

第11章　霧魔の標的（9）

―ブライト家
エステルたちが家を出ると、昨日よりあたりが真っ白になっていた。
「うわ……昨日よりも凄くない？」
「ええ……確実に濃くなってますね」
「アガットさんたち、大丈夫だったのかな……」
「うーん、確かに。パトロールだけとはいえちょっと心配かも……」
「とりあえずギルドに行きましょう。昨夜のことも含めて色々話が聞けるだろうし」
「うん、そうね」

―遊撃士協会ロレント支部
「おはよ～！」
「おはよーございます」
「あら、おはよう」
「おはようございます」
「おう、来やがったか」
「ゆうべは眠れたかい？」
「あ、うん。疲れはしっかり取れたわ」
「3人ともありがとう。夜のパトロール、大変だったでしょう？」
「あのあの。お疲れさまでしたっ」
「なぁに、交替しながら仮眠は取ったから大丈夫だ」
「約1名、今もホテルで爆睡してるヤツがいるけどな」
「あ……オリビエさんですか？」
「へえ、オリビエも一応、パトロールに参加したんだ？」
「ははは、まあな。ブツクサ文句は言ってたがやる事はちゃんとや

ってたぞ」
「ふふ、後で礼を言っておかなくちゃね。それで……状況はどうなっているの？」
「パトロールの甲斐あってか新たに昏睡した人は出ていないわ。ただし、昨日昏睡した人は今朝も目を醒ましていない状況よ」
「そっか……」
「心配だね……」
「霧の方はどうなの？昨日と比べると深くなってる気がするけど」
「ええ……濃度が上がったみたいね。それと合わせて発生範囲も広がったみたい。マルガ山道に至ってはほぼ全域が霧に閉ざされたわ」
「そ、そうなんだ……」
「いよいよ大変な事態になってきましたね」
「悪いニュースばかりじゃないわ。うちからの報告を受けて軍が部隊の派遣を決定したの。ロレント市を警備するためにね」
「ほんと！？」
「ええ、すでにヴェルテ橋方面から2個小隊がこちらに向かっているわ」
「それは心強いわね。街を軍に任せられるならあたしたちも自由に動けるし」
「ああ、その通りだぜ。早く《結社》の連中を捜してブチのめしてやらないとな」
「ふむ、ロレント近郊に潜伏しているんだろうか……。今のところ、見当も付かんな」
「ロレント地方は狭いけど、それでも隅々までは調べられないし……。うーん、何か具体的にできることって無いのかしら」
「それなんだけど……。まずは民間人の避難を手伝ってくれないかしら」
「民間人の避難？」
「昏睡事件は霧の発生範囲で起こされている可能性が高いわ。そして今朝、その発生範囲はさらに広がってしまった……。パーゼル農

園やマルガ鉱山が覆われてしまうくらいにね」
「あ……」
「なるほど……。農園の一家と、鉱員さんの安全を確保するというわけね」
「ええ、これはギルドに課せられた義務でもあるわ。敵の居場所を探す前に引き受けてもらえないかしら？」
「仕方ねえ……。どうやらそっちが優先だな」
「鉱山と農園というのはロレント市から離れた場所にありますから、このまま2手に分かれた方がいいかもしれませんね」
「ええ、その方が効率的ね」
「だ、だったらあたしたちが農園じゃダメ？友達の家族がやってるし……」
「ほう、そうなのか。それなら俺たちが鉱山の方に行ってくるか」
「ああ、決まりだな。オリビエのヤツを起こしてとっとと出発するとしようぜ」
「フッ、呼んだかい？」
リュートを鳴らしながらオリビエが入ってきた。
「おお、起きたか」
「なんでリュートをわざわざ鳴らすんだか……」
「ハッハッハッ。今朝もあいにくの天気だからね。せめてボクの華麗な演奏で雰囲気を明るくしてあげたい……そんなステキで心憎い演出だと思ってくれたまえ」
「ったく、朝からテンションの高いヤツだな」
「元気があるだけ結構じゃないですか」
「でも、オリビエってばちゃんと見回りしたみたいね。ちょっと見直しちゃったわ」
「ふふ、そうね。ご苦労さまだったわ」
「ハッハッハッ。紳士として当然の義務だよ。本当はパトロールがてらエステル君の家にお邪魔しようと思ったんだがね。思った以上に視界が悪くて泣く泣く諦めてしまったのさっ」

「まったくもう……見直したと思ったら」
「さてと、オリビエさんにも手短に事情を説明するわね」

「ふむ、いかにも遊撃士協会らしいしごとだね。いいだろう、ボクも手伝おうじゃないか。それではキミたち。農園に案内してくれたまえ」
「だ～からお前は俺たちと一緒だっつーの。わざと間違ってるだろ、コラ？」
「いやん、そんなにボクと一緒にいたいのねっ。アガット君ってばカワイイ？」
「おぞましい事を抜かすな！」
「はわわっ……そ、そーだったんですかっ！？」
「だーっ！お前も信じるなっつーの！」
「ああ、どんどん緊張感が……」
「ふふ……深刻になるよりいいじゃない。でもお互い、さっさと済ませた方が良さそうね」
「ああ、そうだな」
「それじゃあ俺たちは鉱山の方に行ってくるぜ」
「フッ、しばしのお別れだ。ボクの愛しい仔猫ちゃんたち」
「あなたたちも気を付けて行ってきてくださいね」
男性陣が先にマルガ鉱山に出発した。
「さてと、あたしたちもパーゼル農園に出発しようか」
「ええ、そうですね」
「えっと、お姉ちゃんのお友達のお家なんだよね？」
「うん、ティオって言って日曜学校からの親友なの。おじさんとおばさんと双子の姉弟の５人家族かな」
「護衛対象に子供もいるし気が抜けない仕事になりそうね。それじゃあアイナ。あたしたちも行ってくるわ」

「ええ、よろしくお願いね」
エステルたちはパーゼル農園に向かった。

第11章　霧魔の標的（10）

―ミルヒ街道

「あ……！」

エステルたちの前方から王国軍の部隊がやって来た。

「おや……。……みんな、止まれ」

その部隊を率いていたのはロレントに住むアストン隊長だった。

「アストンさん、お久しぶり！」

「久しぶりだね、エステル君。それにシェラザード君だったか。ギルドの仕事の途中かな？」

「うん、そうだけど……。もしかしてロレントを警備してくれる部隊って……」

「ああ、私たちだ。ハーケン門からの増援と共にロレント市を守らせてもらうよ」

「そっか……」

「本当に助かります」

「とんでもない。市民を守るのは王国軍の義務でもあるからね。ロレントの状況はどうかな？」

「うん、霧は深くなったけど昨日みたいに昏睡事件は……。あ、あの、アストンさん！」

「……ああ、ルックのことだね。眠りから覚めないだけで命に別状はないと聞いている。そんなに気を使わないでくれ」

「で、でも……」

「今はお互い、自分の責務を果たすことだけを考えよう。それが恐らく、ルックたちを助けることにも繋がるはずだ」

「アストンさん……」

「ええ、その通りだわ。アストン隊長。街はよろしくお願いします」

「ああ、任せたまえ。そろそろロレントだ！到着次第、すぐに警備体制に入る！」

「イエス・サー！」
王国軍はロレントに向けて再び進んでいった。
「今の隊長さんって眠っちゃった男の子の……？」
「うん……ルックのお父さん。本当は心配でたまらないはずなのに……」
「強い人……ですね」
「そうね……あたしたちも頑張らないと。パーゼル農園に急ぎましょう」

―パーゼル農園
「ティオの家……なんだかちょっと懐かしいな。それにしても……ここもかなりの霧だわ」
「とりあえずご主人に事情を説明するわよ。まさかこの霧の中、配達には行ってないわよね？」
「う、うーん……それはないと思うけど」
その時、農園に鈴の音が響き渡った。
「い、今のって……」
「……まさか……！」
「シェラ姉っ！」
「急ぐわよ！」
エステルたちは家へと急いだが……
「えっ……！？こ、こいつら！？」
「霧の魔物……！？」
「ふえええっ！？」
「迷ってるヒマはない！撃破するわよ！」

「や、やっつけた……？」

「ええ……でも今のは足止めだわ。早く家の人を捜さないと」
「う、うん！」

「あ……。フランツおじさん！？チェル、ウィル！？ティオ！ハンナおばさん！」
ティオの家族たち全てが昏睡していた。
「……うそ……」
「ダメ……眠らせらてしまっています」
「うん……この子たちも……」
「……っ……。また……間に合わなかった……」
エステルは膝をついた。
「エステルさん……」
「お、お姉ちゃん……」
「ダメね……まんまと逃げられたわ。あたしたちの動きを完全に読んでいたみたい」
「『黒衣の女性』ですね」
「……ええ、間違いないわ。エステル……とりあえずベッドに運ぶわよ。部屋に案内して」
「あ……うん……」

「何とかベッドに運んだわね。ふう……これからどうしたもんだか」
「……」
「エステル……。ショックなのは分かるけど気持ちを切り替えなさい。でないと、この人たちを助けることなんてできないわよ」
「……でも……あたしが未熟だったから……。父さんの足元にも及ばないから……。ティオたちをこんな目に遭わせちゃったのかもしれない……」
「……」

「今まで散々……強気なことを言ってたけど……これじゃあ……ただの強がりだよ……！こんなことじゃ……答えを見つけるなんて……あたし……あたし……」

「……。……エステル」

シェラザードがエステルの頬を叩いた。

「え……」

「シェラザードさん！？」

「お、お姉ちゃん！？」

クローゼとティータが部屋に入ってきた。

「……未熟なのはお互い様よ。あたしだって先生の足元にも及ばないけどいつも足掻き続けているわ。アガットだって、ジンさんだって、それからカシウス先生だって……。みんな力不足を痛感しながら必死になって頑張り続けている」

「と、父さんも……？」

「覚えているでしょう？先生がレナさんの死に際に間に合わなかったこと……」

「……あ……」

「でも先生は……レナさんの死を乗り越えて遊撃士としての道を歩き始めた。決して立ち止まることなく大切なものを守り続けてきた。王国軍になった今もそれは変わっていないと思う。エステル……あんたは、どうしたいの？」

「……」

「難しく考える必要はないわ。自分の奥底にある素直な気持ちを見つめなさい」

「……。答えは……出てないけど……それでもあたし……前に進みたい。大切な人たちを守るためにも……。自分が未熟だからといって立ち止まってなんかいたくない！」

「ふふ……ちゃんと分かってるじゃない」

「ごめんね、シェラ姉……。なんかあたし……手間のかかる妹だよね」

「それもまた姉冥利に尽きるってもんよ。手間のかかる子ほど可愛いっていうしね」
「むう……」
「くすくす……」
「ふふっ……」
「あ……ご、ごめん。心配、かけちゃったかな？」
「うん、ビックリしたけど……。お姉ちゃんとシェラさんってホントに仲がいーんだね。えへへ……ちょっと妬けちゃうかも」
「ふふ、とっても良い場面を見せていただいた気分です」
「も、もう……。でもシェラ姉、どうしよう。ギルドに戻って報告したいけどティオたちも放っておけないし……」
「そうね……。あたしかあんたのどっちかが残るしかなさそうだけど……」
「その必要はないで」
唐突に声が聞こえたと思うとケビン神父が入ってきた。
「あ……」
「ふえっ……」
「あら……」
「や～、どもども。七耀教会のケビンですわ。この前、王都で別れたばかりやのにこんな早く再開できるなんてなぁ。やっぱ女神のお導きを感じるわ」
「な、な、な……。なんでいきなりケビンさんが現れるのよ！？」
「あー、話は単純でな。昨夜、デバイン教区長から昏睡事件についての報告が王都の大聖堂に届けられたんや。そこで《星杯騎士》としていっちょ確かめたろと思ってな。霧だらけの街道を通って今朝ロレントに到着したわけや。んで、ギルドを訪ねたらエステルちゃんたちがこっちに仕事で行っとるって聞いて――」
「あー、はいはい。だいたい事情は分かったわ。ていうか全然、女神様のお導きなんかじゃないじゃない」
「なはは、バレたか」

「しかしケビンさん。さっき『その必要はない』って言ってたけど、どういう意味なの？」
「ああ、姐さんとエステルちゃんのどっちかがここに残るって話や。ここは俺に任せて2人ともギルドに戻るとええやろ」
「ええっ！？」
「あの、宜しいんですか？」
「これも神父のお仕事ですわ。医術の心得も多少はあるし、どうか任せたってください」
「あのあの……ありがとーございます！」
「ふふ、ありがたくお言葉に甘えさせてもらうわ。みんな、ロレントに戻るわよ」
「う、うん！ケビンさん……ティオたちのこと、よろしくね！」
「おう！大船に乗ったつもりで任せとき」
エステルたちはケビン神父にティオたちの介抱を任せてロレントに戻った。

第11章　霧魔の標的（11）

―遊撃士協会ロレント支部
「へっ、やっと帰って来たか」
「どうした？やけに遅かったじゃないか」
アガットたちはすでにギルドにいた。
「ええ、色々あってね」
「アガットたちはもう鉱山に行ってきたの？」
「ああ、すでに向こうに連絡が行ってたらしくてな。すぐに出発できたから意外に早くかえってこれたぜ」
「ただ、帰る途中で奇妙な魔獣が現れてな。その事を話していたんだ」
「奇妙な魔獣？」
「霧の中から現れて倒すと消滅する魔獣でね。『霧魔』とも言うべきかな？」
「そ、それって……！」
「あの魔獣と同じですね……」
「もしかして、エステルさんのところにも？」
「うん……」
「ケガはしてねぇだろうな？」
「えと、私たちは大丈夫なんですけど……」
「……」
「？？？」
「何かあったみたいね。報告してもらえるかしら？」
「ええ、実は……」
農園で起こった出来事について一通り報告した。
「そう……一足遅かったみたいね」
「……あたしの失態だわ。もう少し上手く立ち回れば犯人を捕まえられたのに」

「ううん……。シェラ姉は全然悪くないよ。悪いのは、肝心な時に動けなかったあたしだもん」
「気にすることはないわ。どうやらあなた達は、罠にかけられたみたいだし」
「わ、罠!?」
「農園に入ったと同時に聞こえてきた鈴の音……。待ち伏せしていた霧の魔獣、そして鍵のかかった正面玄関……。ギリギリのタイミングでお前さんたちが間に合わないよう計算された感じだな」
「た、ただの偶然じゃないの？」
「いえ、それはありませんね。今までのことを考えると、『黒衣の女性』は私たちの行動を全て監視しているようです。飛行船でボースに行こうとした矢先に霧でロレントに足止めしたこともそうです」
「う、うーん……。『黒衣の女』と言われても心当たりは全然ないし……。挑発される覚えはなんだけど」
「……」
「ふう、ただいま戻りました」
ギルドに入ってきたのは王都に依頼人を送っていたリッジだった。
「あれ、リッジさん？」
「そういえば護衛で王都まで行ってたのよね」
「ええ、朝早くに向こうを出てやっと戻って来られましたよ。それにしても……いったい何があったんですか？霧の範囲は広がってるわ、街を兵士が巡回しているわ……」
「実は昨日の夕方頃から色々大変なことが起こってね」
アイナは昨日から今日にかけての出来事をかいつまんでリッジに説明した。
「うわ……そんなことになってたんですか。マズイ時に出かけちゃったなぁ」
「ううん、気にしないでよ。定期船が止まっている以上、護衛だって大切な仕事なんだし」
「あたし達が、そういう仕事を請けている余裕はないからね。フォ

ローしてくれて助かるわ」
「こ、光栄です。そういえば……その『鈴の音』なんですけど。それって霧の向こうから聞こえてくるんですよね？」
「ええ、そうよ」
「何のために鳴らしているのかはっきりしてないんだけどね」
「そうか……」
「何か心当たりでもあるの？」
「さっき、エリーズ街道を通っていた時なんですけど……。かすかに鈴の音を聞いたんです」
「あ、あんですって！？」
「エリーズ街道のどのあたりで聞こえたの？」
「え、えっと……。グリューネ門から出てわりとすぐだったから……。ミストヴァルトの方ですね」
「ミストヴァルト……」
「たしかロレント地方の南東に広がる森だったな」
「最初、誰かいるのかと思って聞こえてきた方角に向かって大声で呼びかけてみたんですよ。でも、何の返事もないから気のせいかと思っちゃって……」
「ふむ……。ボクたちに伝わるのを見越してわざわざ鳴らしたのかもしれないね」
「今までのことを考えると間違いないでしょう」
「挑発……ということですか」
「ケッ、舐めやがって……」
「……。シェラ姉……どうする？」
「そうね……。罠の可能性は高いけど飛び込んでみるしかなさそうね。招待に応じさせてもらいましょう」
エステルたちはミストヴァルトへと向かった。

―ミストヴァルト
「……ここも完全に霧に覆われちゃってるね」

「ええ……。元々暗くて視界が悪いから歩きにくいことこの上ないわね」
「気を抜いたらすぐに迷ってしまいそうです」
「ちゃんとコンパスを確認した方が良さそうだな」
「気をつけて進んで行きましょう」

しばらく進んでいくと、鈴の音が鳴り響いた。それと同時にあたりがいきなり白くなった。
「わわっ……」
「むっ……」
「くっ……」
「これは……」
そして、しばらくしてから視界が元に戻った。
「な、なんなの今の……」
「鈴が鳴った途端、濃い霧に包まれたけど……」
「皆さん……辺りを見てください」
レインが皆に注意を呼びかけた。
「こ、ここは……」
「へっ……」
そこは全く知らない場所だった。
「!?こ、ここ……どこ!?」
「……いつのまにか景色が変わりましたね」
「まさか……奇門遁甲（きもんとんこう）の類か？」
「いえ、これは幻術の類でしょうね。どうやら私たちを試しているようです」
「シェラ姉……ど、どうしよう？」
「落ち着きなさい、エステル。これが敵の仕業なら……必ず抜ける方法はあるはず。まずはそれを探ってみるわよ」
「う、うん……」

しばらくエステルたちが進んでいると、進むたびに響き渡ってくる鈴の音が大きくなっていた。
「ねえ、シェラ姉……。さっきから鈴の音が大きくなっている気がしない？」
「ええ、間違いないわ。ひょっとしたら……そこにヒントがあるのかも」

ある所でひときわ大きな鈴の音が響き渡り、濃い霧に包まれた。
「またっ……」
「はっ……」
「……抜けたみたいね……」

「も、戻った……」
「ここは……セルベの大樹の近くみたい。どうやら《結界》に取り込まれていたみたいね」
「け、結界って……」
「多分、この先にカラクリがあるんだろう。準備を整えた方が良さそうだ」
「心して行きましょう」

第11章　霧魔の標的（12）

―セルベの大樹

「あっ！？」

「やはり《ゴスペル》……」

セルベの大樹に《ゴスペル》が埋め込まれていた。

「水面から沸き起こる霧……。ひょっとして、ここから霧が生まれているのかも……」

「だ、だったら早く《ゴスペル》を外さなきゃ！」

「エステル、待ちなさい！」

「え……」

エステルが《ゴスペル》を外そうと樹に向かった時、

「わわっ……！？な、なにコイツら！？」

霧の中から魔獣が現れた。パーゼル農園で現れたものと異なり、巨大だった。

「農園で戦った連中とは格が違うみたいね……」

「……来ます！」

「はあはあ……。と、とんでもなく強かったんですけど……」

「気を抜かないで！今のはただの使い魔よ！操っていた術者がどこかにいるはずだわ！」

「へっ……」

「ふふ……なかなか頑張ったわね。それではみんなにご褒美をあげましょう」

どこからともなく女性の声が聞こえてきた。

「！！！」

そこで、《ゴスペル》が黒い光を放った。

「な……！」

「しまった……！」

「あ……」

目を開けるとエステルの前に自分の家が見えた。

「ここって……家？」

改めて周りを見渡してもまぎれもなく自分の家だった。

「あたし……ミストヴァルトにいたのに。それに……いつの間に霧が晴れたの？」

エステルは自分の敷地に足を踏み入れた。

第11章　霧魔の標的（13）

「ふう……こんなものか」
家の外でカシウスが薪を割っていた。
「と、父さん……？」
「おお、エステル。どうした？ずいぶん早起きじゃないか」
「へ……」
「ハハ、そうかそうか。俺が久しぶりに帰ってきたから甘えたくてしょうがないんだな？よーし、いつものように父の胸にどーんと飛び込んで来い！」
「こ、子ども扱いしないでよっ。忙しいとか言ってたのにいつの間に休暇を取ったの？言ってくれればあたしだって都合を合わせられたかも――」
「あらあら。朝からにぎやかですね」
家の中から出てきたのは女性だった。しかし、その女性は――
「……」
「おお、レナ。薪割りをしてたらエステルが起きてきてな……。父娘のスキンシップを行おうとしていたところなんだ」
「ふふ、そうなんですか？そのわりにはエステル、戸惑ってるみたいですよ。あんまり強引にすると嫌われちゃったりして……」
「な、なぬ……！お、おい、エステル……まさか父さんのことキライになってないよな！？そりゃあ、普段は仕事でなかなか帰ってやれないが……。父さん、エステルのことを世界で一番愛しているんだぞ！？」
「ちょ、ちょっと……」
「うふふ……。久しぶりにあなたに会えて照れているだけでしょう。そうよね、エステル？」
「あ、あの……ひょ、ひょっとして……。……お母さん……？」

「あらあら、変な子ね。お母さんの顔、忘れちゃった？」
「あ……。おかーさん……ホントにおかーさんだ……。ううううっ……」
「あら……？」
「おかーさあああん！」
「あらあら……どうしたの、エステル？怖い夢でも見ちゃった？」
「ひっく……ひっく……。あ、あんまりおぼえてないけど……。あのね……おかーさんがどこかに行っちゃって……帰ってこないような……そんなユメを見たの……」
「そう……。ふふ、大丈夫よ。お母さんはここにいるわ。どこにも行ったりしないから。だから安心してもいいのよ」
「うん……うんっ……」
「えっと……。父さんちょっとだけ寂しいなあ、なんて……」
「あらあなた、いたんですか？」
「レナさん、ヒドイっ」
「うふふ、冗談です。……ほら、あなた」
「う、うむ」
「ぐすっ……えへへ。おはよ～、おとーさん！」
「おっと、いいタックルだ。よし、今日は父さん、エステルの好きな遊びに付き合ってやるからな～」
「ほんと！？」
「男カシウス・ブライトに二言はないっ！オママゴトでも何でも付き合ってやろうじゃないか！」
「んー、そうね……。だったらあたし、おサカナ釣りがいいっ！」
「おお、さすが俺の娘。いい趣味してるじゃないか……って、釣りって男の子の趣味だと思うんだが。オママゴトの方が良くないか？」
「や、おサカナ釣りがいいのっ」
「うーむ……いいのかなぁ」
「ふふ、好きなことをさせてあげるのが一番ですよ。どちらにしても……先に朝ごはんを済ませた方がいいんじゃありませんか？」

「おお、そうだな」
「ゴハン!?おかーさん!あたしおなかペコペコ!早く食べたいからあたしも手伝っちゃう!」
「ふむ、俺もコーヒーくらい淹れさせてもらおうか」
「ふふ、2人ともありがとう。ただしその前に……手を洗ってきてくださいね?」

それは――幸せな日々だった。
家族3人で食卓を囲む朝……
両親に見守られながら自然の中で戯れ……
時には家事を手伝い……
そして夜は、母のぬくもりに包まれながら眠りに落ちていく……
哀しいことなど何もない、優しく綴られていく日々……
それは確かに――満ち足りた時間であった。

「……それじゃああたし、これで帰りますね。エステル。今度は春に遊びに来るからね?」
「うん……待ってるけど……。せっかく遊びに来たのにもう帰っちゃうなんて……。もう1日くらい泊まっていけばいーのに」
「うーん、あたしもそうしたいのは山々だけど。一座のみんなが待ってるしね」
「むー、つまんない」
「ほらほら、無理言わないの。シェラちゃん、ありがとうね。エステルのためにいつも遊びに来てくれて」
「ううん。あたしも楽しいですし。それに、レナさんのご飯、美味しいから楽しみなんです」

「あらあら。嬉しくなっちゃうわね」
「また是非、遊びに来てくれ。よかったら俺の秘蔵のブランデーでもご馳走するぞ」
「うわっ、ホントですか！？」
「あ～な～た～？」
「じょ、冗談です、ハイ」
「シェラちゃんもダメよ？いくらお酒に強くたってあなたはまだ12歳なんだから。大人になるまでほどほどにしておきなさい」
「え～、でも～……」
「シェ～ラ～ちゃん？」
「あわわ、わかりました……。で、でもあたし言うほど飲んでいませんよ～。座長はともかくお姉の目が厳しいですし」
「ふふ、それならいいんだけど。それじゃあシェラちゃん。一座の皆さんによろしくね」
「今度はみんなと遊びに来るといい。この庭だったらバーベキューでもできるしな」
「はい、伝えておきますね。それじゃあエステル。……いい子にしてるんだよ？」
「うんっ！シェラ姉、バイバイね！」
シェラザードはロレント市に帰っていった。
「ふふ……寂しくなってしまいますね」
「ま、春になったら遊びに来ると言ってたしな。俺も休暇を取るから盛大にパーティでもやるか」
「ふふ、そうですね」
「おとーさん、おかーさん。あたし……キョウダイが欲しいな」
「な、なぬ？」
「あらあら……」
「だってシェラ姉とはたまにしか遊べないし……。あたし、いつもいっしょのキョウダイが欲しいなぁ」
「お、お前ねぇ……。そういうことは何というかデリケートな問題

があってだな」
「うふふ……エステルは兄弟が欲しいのね。でもね、こればっかりは必ずあげるとは約束できないわ。女神様がお決めになることだから」
「そーなの？」
「ええ、女神様が夜中、キャベツ畑に赤ちゃんを置いてね……。それをお父さんとお母さんが見つけてくるの」
「そーなんだ……。だったらあたし、女神さまにお祈りするっ！」
「ふふ、それもいいけど……。エステルがいい子にしていたら女神様がご褒美に赤ちゃんを置いてくれるかもしれないわね」
「だったらあたし、いい子になる！」
「やれやれ……。相変わらず見事な手並みだねぇ」
「あらあら、他人事みたいに言わないでくださいな。あなたにも一生懸命頑張ってもらわないとね」
「う、うむ。よーし、それじゃあ早速今から部屋で頑張ろうじゃ……」
「ただし常識の範囲内で。私はこれから晩ご飯の支度があります」
「……ハイ」
「？？？」
「うふふ、それじゃあ私は台所に戻りますね。あなたたちはどうするんですか？」
「そうだな……。エステル、また父さんと釣りでもして遊ばないか？」
「うーん……今日はいいや。ひとりで遊びたいきぶん」
「ガーン。仕方ない……部屋で本でも読んでるか」
「ふふ。フラれちゃいましたね。エステル。気を付けて遊ぶんですよ？」
「1人だから、なるべく池には近寄らないようにな」
「はーい」
レナとカシウスは家に入っていった。

「……キョウダイか……。……。なんでだろ……ムネのあたりがモヤモヤする……。どこかになにか……わすれちゃったような……」
そう言ってエステルは周りを見渡した。
「……さがさなくちゃ……」

第１１章　霧魔の標的（１３）（後書き）

久しぶりの投稿です。大学の実験というのは面倒ですね……。教授に実験報告書の内容で思いっきり絞られました……。Ａ４用紙３０枚の報告書を３回も作り直しとは鬼畜ですね……。

第11章　霧魔の標的（14）

～レナ
「そうね、昨日はシチューだったから……。うん、今夜はオムライスにしましょう」
「ホント!?わーい!おかーさんのオムライスあたし、だいすきー!」
「あらあら。そんなに嬉しいの？ふふ、お母さんもお父さんも好物だし、オムライス大好き一家ね」

～カシウス
「どうした、エステル？やっぱり父さんと一緒に遊びたくなったか？」
「ううん、べつに」
「そうか……」
「おとーさんはなに読んでるの？」
「これか？『各国の遊撃士協会（ブレイサーギルド）』だ」
「ぶれいさー？」
「エステルにはちょっと難しいご本だな。そうだ。母さんみたいに絵本でも読んでやろうか？」
「んー、今はいいや」
「そ、そうか……」

―2階
一番奥の部屋には鍵がかかっていた。

「あれ……。ここって何の部屋だっけ？うーん……」
しばらく考えるエステル。
「……わかんないや。おとーさんたちに聞いてみようかな……」

～カシウス
「ねー、おとーさん。２かいの奥にある部屋ってなにがあるの？」
「ああ、あそこは物置として使っているぞ」
「モノオキ？」
「ふだん使わない物が色々としまったあるんだ。ここ最近は使ってないからクモの巣のだらけかもしれんな」
「ふーん……。あそこのカギってどこに置いてあるの？」
「ああ、それなら……。……ちょっと待てあそこで何をするつもりだ？」
「んー……タンケンでもしようかなって」
「うーむ、まあいいか。カギなら母さんがどこかに保管してるはずだ。聞いてくるといい」
「うん、わかった！」

～レナ
「ええと……。確かタマネギの残りがここにあったような……」
レナは外で食品保管箱を探していた。
「おかーさん。ここにいたんだ」
「あら、エステル。うふふ、ひょっとしてもうお腹空いちゃったの？」
「あ、ううん。まだガマンできるけど……。それより、おかーさんに聞きたいことがあるの」

「？」
エステルは2階の物置部屋の鍵を探していることを説明した。
「あらあら……物置部屋を探検するの？うーん、ホコリだらけだし汚れちゃうと思うけど……」
「だめ？」
「……。うん、まあいいでしょう。お母さんたちのベッドの横に小さな戸棚があるでしょう？その1番上の引き出しに鍵が入っているはずよ」
「ありがと、おかーさん！」

―書斎
「えっと……1ばん上の引き出しだよね。うんしょ、うんしょ……。あ……あったぁ！」
エステルは物置部屋の鍵を手に入れた。

―2階　物置部屋
エステルは鍵を使って扉を開けた。
「うわぁ……いろんなものが置いてある！あれ……でも……」
エステルは物置部屋を見渡した。
「おかしいなぁ……。なんでこんなにムネのあたりがモヤモヤするんだろ……」
エステルはもう1度辺りを見渡し、奥にあった箱を開けた。
その中にはハーモニカが入っていた。
「うわぁ、キレイ……。これって……吹く楽器だったよね。ちょっとだけ吹いてみよっかな？」
エステルはハーモニカを吹いてみた。

「キレイな音だけど……ちょっとむずかしそう。でも、おかしいな……。この音……どこかで聞いた気がする」

～カシウス
「おや、どうしたんだ？ずいぶん綺麗なハーモニカじゃないか」
「モノオキ部屋にあったの。これっておとーさんのじゃないの？」
「いや、違うが……。レナの物とも思えないし誰が使ってたんだろうな？ん……ちょっと見せてくれ」
「あ、うん」
エステルはカシウスにハーモニカを手渡した。
「リーヴェルト社……こいつは帝国製じゃないか。こりゃ、ますます誰が使っていたか判らんなぁ」
「？？？」
カシウスはエステルにハーモニカを返した。
「まあ、お前がそれを見つけたのも何かの縁だろう。よかったら吹いてみるといい」
「うん……」

～レナ
「あらあら……綺麗なハーモニカね。ひょっとして物置部屋で見つけたの？」
「えへへ……。これっておかーさんのもの？」
「ううん。お母さんの物じゃないわ。お父さんもハーモニカなんて吹いていなかったし……。誰が使っていた物かしらね？」

―2階　テラス

エステルはハーモニカを吹いてみた。

「うーん……うまく吹けないなぁ。このハーモニカってなかなかクセモノよね。カンタンに吹けそうなのにちょっとムズカシすぎるよ」

『君がやってる棒術と較べたらはるかに簡単だと思うけど……。要は集中力の問題だと思うよ』

脳裏に声が響いた。

「ふえっ……？」

『でも、ホント良い曲よね。明るいんだけど、どこか切なくて……。他の曲も好きだけどやっぱりその曲が一番好きかな。あれ……何て名前だったっけ？』

「……。えっと……たしか……」

エステルはもう1度ハーモニカを吹いてみた。

「ううん……そうじゃない……。そう……こんな感じだったはず……」

「ねえ、ヨシュア……。『星の在り処』……初めてちゃんと吹けたよ」

「ふふ、とっても素敵な曲ね」

暗くなった空間にレナが立っていた。

「……お母さん……」

「正確に言うと……私はあなたの母親ではないわ。あなたの思い出から構成された擬似的な人格と言うべきかしら。今までの出来事は

すべてあなたの夢の中での出来事なの」
「そっか……。でも、夢の中だろうとお母さんはお母さんだよ。すごく楽しくて……幸せな毎日だった」
「ふふ……私もよ。それでも……あなたは行ってしまうのね？」
「……うん。今のあたしが戻るべき場所を思い出しちゃったから……」
「そう……。ヨシュア君と言ったわね？うふふ、なかなかカッコイイ男の子みたいね」
「お、お母さんってば……」
「あらあら。真っ赤になっちゃって。ふふ……不思議ね……。私は本物のレナではないけれど今、とても安らぎを感じている……。小さかったエステルがこんなに大きく頼もしくなって……そして真剣に恋をしている……。母親として……これほど嬉しいことはないわ」
「……お母さん……。あたし……あたし……」
「ほらほら。そんな顔しちゃダメよ。戻るべき場所を思い出したんでしょう？」
空間に光る扉が現れた。
「あれが夢の終わり……。今のあなたが生きている時間と空間への出口よ。さあ……胸を張って行きなさい」
「うん……。えへへ、最後にお母さんのオムライスが食べたかったな」
「あらあら……。でも、食べたくなったら自分で作ってみるといいわ。あなたが作ったオムライスは多分、私と同じ味の筈だから」
「え……？」
「家庭の味というのは母から子に受け継がれるもの。ちゃんと教えていなくても好みや味覚のような形でね。ちゃんとあなたにも受け継がれていると思うわ」
「そっか……。……。うん、それを聞いて何だか安心しちゃった。お母さん……あたし、そろそろ行くね」
「ふふ、お父さんとヨシュア君によろしくね」

「う、うん！またね……お母さん！」
エステルは振り返らずに扉をくぐった。
「さようなら……私の可愛いエステル」

第11章　霧魔の標的（15）

「エステル！しっかりしなさい！」
女性の声が頭に響く。
「ン……」
エステルは目を開けた。
「あれ……シェラ姉……」
「エステル！？よかった……起きてくれたのね！」
「あ……うん……。何だかとっても長い夢を見てた気がする……」
そう言って体を起こした。
「そっか……。……これのおかげで……」
エステルはカバンの中のハーモニカを握りしめた。
「2人とも！幸せなだけの時間は終わりよ！今の現実に戻ってきて！」
エステルはいまだ寝ているクローゼ、ジン、レインに向かって怒鳴った。
「エ、エステル！？」
しばらくして3人が体を起こした。
「あ……エステルさん……」
「そうか……夢に囚われていたか」
「相手の術中に嵌(はま)ってしまうとは……。私も修行が足りませんね……」
「よかった……みんな目を醒ましたわね」
「はあ……あんたには驚かされるわ。自力で起きたばかりか他の人まで起こすなんてね。さてと、それはともかく……」
シェラザードがセルベの樹にむかって叫んだ。
「いるんでしょ！ルシオラ姉さん！」
「え……」
「ふふ……やっと呼んでくれたわね」

鈴の音が鳴り響くと黒衣の女性が現れた。
「なっ……！？」
「……やっぱり……」
「久しいね、シェラザード。８年ぶりになるかしら？」
「ええ……そうね。まさか姉さんがこんな事をしてるなんて……。いったい、どういう事なの？」
「ちょ、ちょっと待って！この人……シェラ姉の知り合いなの！？」
「ふふ……つれないわね、おチビさん。あなたとも何度か会ってるはずなのだけど」
「へっ？」
「一緒にタロット遊びをした幻術師のお姉さんのこと……覚えていないかしら？」
「！！！」
エステルの記憶にハーヴェイ一座の人たちが浮かんだ。
「あ、あそこにいた……。たしか……ルシオラお姉ちゃん！」
「ふふ、正解よ。執行者Ｎｏ．？。《幻惑の鈴》ルシオラ。今はそう呼ばれてるけどね」
「ど、どうして……」
「ふふ、シェラザード。あなたは気付いていたみたいね？」
「鈴を使った幻術……。姉さんの十八番だったから。ロレントで発生した霧も幻術とか言わないでしょうね？」
「ふふ、まさか。あれは今回の実験のため、《ゴスペル》が起こした現象よ。人々の夢に干渉するための触媒といったところかしらね」
「触媒……。まさか《ゴスペル》というのは人の精神にも干渉するというの！？」
「ふふ、そうみたいね。私の鈴はあくまで誘導……。幻術とは比べ物にならないリアルな夢を構築するわ。苦しみも哀しみもないただひたすら幸せな夢をね」
「……」
「ふむ、なるほどな……」

「
「……くっ……」
「ねえ、ルシオラ……さん。どうして《結社》ってこんな事ばかりするわけ？こんな実験を繰り返して何をしようとしているの？」
「私はただの《執行者》。《使徒》の手足として動くもの。その意味では、今回の計画の手伝いをしているに過ぎないわ。詳しいことは教授とレーヴェに聞きなさい」
「！！」
レインがその言葉に反応した。
「教授、レーヴェ……。何度か聞いた名前だけどそれっていったい誰なの？」
「時が来れば分かるでしょう。ちなみに2人とも、あなたと面識があると聞いたのだけど」
「えっ……」
「……。……ルシオラ姉さん。これだけは言わせてくれる？」
「あら……何かしら」
「最初、あたしはリベールに長居をするつもりはなかった……。姉さんが帰ってくるまでの間、身を寄せるだけのつもりだった。でも、あれから8年が過ぎた。今の私には、友人や仲間たち、家族同然の人たち、そして誇りに思っている仕事がある。もう……ハーヴェイ一座の踊り子シェラザードじゃない」
「シェラ姉……」
「……」
「この新たな故郷……仇なすならたとえ姉さんでも許さない！」
「ふふ……それでいいわ。あなた達にとって《結社》はあまりにも強大よ。全力で立ち向かってきなさい」
ルシオラがゴスペルを取り鈴を鳴らすとルシオラの姿が霞んだ。
「あっ！」
「姉さん！？」

「ふふ……近いうちにまた会えるわ。つもる話はその時にでも……」
シェラザードがルシオラのところに走ったが、ルシオラは姿を消した。
「……」
「シェラ姉……」
「……ふう、まったく。また逃げられたけど……事件はこれで解決のはずよ。昏睡した人たちもじきに目を醒ますでしょう」

第１１章　霧魔の標的（１６）（前書き）

今回で『第１１章　霧魔の標的』が終了します。

第11章　霧魔の標的（16）

―ロレント市
ルシオラが去った後、ロレント市の霧が晴れ、昏睡した人たちも目を醒ました。

―遊撃士協会ロレント支部
「そう……そんな事があったなんてね」
「ごめん、アイナ。もっと早く心当たりについて話しておけばよかったけど……」
「ふふ、気にしないで。あなたの知り合いと分かってもなにか出来たわけじゃないしね。今度オゴってくれればいいわ」
「ええ、お安い御用よ」
「うーん、2人の飲みっぷりだと全然安くないような気が……」
「ガクガクブルブル……」
オリビエが2人の光景を想像して身震いした。
「霧もすっかり晴れたし昏睡していた人も目を醒ましたわ。みんな、本当にご苦労さまでした。今回は依頼が複数になったけどまとめて報酬を渡しておくわね」
エステルは報酬を受け取った。
「でも、やっぱり今回も根本的な解決じゃないよね。今度のゴスペルは人の精神まで干渉してきたし。それってやっぱり、今の技術じゃ説明できないの？」
「う、うん……。今までで1番説明できないかも。あとでおじいちゃんに報告書を送っておかなくちゃ」
「ま、《ゴスペル》については爺さんの解析を待つしかねえだろ。それより、やっと《結社》の勢力が見えてきた気がするな」

「ふむ、今回の件と合わせると……。５人の《執行者》が確認されたことになるのか」
「ええ……。Ｎｏ．？――《怪盗紳士》ブルブラン。Ｎｏ．？――《痩せ狼》ヴァルター。Ｎｏ．ＸＶ――《殲滅天使》レン。Ｎｏ．？――《幻惑の鈴》ルシオラ。Ｎｏ．０――《道化師》カンパネルラ。そして、この５人に加えて『教授』と『レーヴェ』という未確認の人物がいるみたいね。ひょっとしたらどちらかがロランス少尉かもしれないわ」
「うん……その可能性は高いかも。２人とも、あたしの知ってるヤツだって言ってたし……」
「確かに、ロランスという名前が偽名である可能性はありますね」
「しかし、たった７人ごときでここまでやってのけるとはな。ったく、やっかいな連中だぜ」
「そうね……。あたしたちも、これまで以上に覚悟を固める必要がありそうだわ」
「シェラ姉……いいの？」
「ふふ、言ったでしょう？リベールは新たな故郷だって。故郷を守るのに理由はいらないわ。たとえ、昔の故郷の思い出と戦うことになったとしても」
「シェラ姉……」
「なあ、シェラザード。最初から答えを決める必要はないと思うぜ」
ジンがシェラザードの言葉に口を開いた。
「え……」
「俺とヴァルターは互いに戦うことを納得している。もう、拳と拳を通じてしかお互い何も伝えられないんだ。だが、お前たちは必ずしもそうと決まったわけじゃあるまい？」
「それは……」
「ジンさんの言う通りだと思う。シェラ姉がどうしたいのか、これから見極めればいいわよ。あたしだって……やっと見つけられたんだし」

「え……」
「ねえ、みんな。こんな時に何だけど……見て欲しいものがあるの」
「あん……？」
「エステルさん……？」
「エステル、まさか……」
「うん……。これ、雑誌社の人たちにもらった写真なんだけど……」
エステルはドロシーが撮った写真をみんなに見せた。
「こいつは……空賊艇の奪還事件のブツか」
「なるほど……こんなものがあったのか」
「ふむ、左にいるのが武術大会にも出場していた空賊団の娘だな。そして右にいるのが……」
「あ……」
「なるほど……」
「ヨ、ヨシュアお兄ちゃん！？」
「えっと……今まで黙っててゴメン。ちょっと動揺しちゃってなかなか言い出せなくて……」
「お姉ちゃん……」
「エステルさん……」
「ヨシュアが何をするつもりかあたしには分からないけど……。多分、ヨシュアなりの方法で《結社》に迫るつもりだと思う。空賊たちと一緒になって悪さはしないと思うんだけど……」
「ええ、分かっているわ。写真も顔半分が隠れているから決定的な証拠にはならないしね。この情報はギルド内に留めておきましょう」
「ありがと、アイナさん」
「で、でも……エステルさんはいいんですか？せっかくヨシュアさんの手がかりが見つかったのに……」
「うん……。あたしがあたしである限り、ヨシュアとの絆はなくならない。そう思えるようになったからあんまり焦らないようにしたわ」
「あ……」

「違う道を歩いているけど目指す場所はきっと同じだから。だから今は……自分自身の道を行こうと思う。そうじゃないとあたしはあたしとして強くなれないから」
「エステルさん……」
「えへへ……なんてカッコ付けてるけど……。ヨシュアとボクっ子の関係とかやっぱり気になるのよね。まだまだ修行が足りない証拠だわ」
「ふふ……エステルさんったら」
「ふふ、ちゃんと答えを見つけられたじゃないの。どうやら森で見た夢が良い方向に働いたみたいね？」
「うん……。ヨシュアとの絆を改めて確かめられたし……。お母さんのぬくもりを思い出すこともできたわ。今回ばかりは《ゴスペル》に感謝してあげてもいいかも」
「ふふ、お姉ちゃんってば」
「ったく……。やっぱりお前、大物だわ」
「フッ、エステル君にかかっては《ゴスペル》も形無しみたいだね」

第12章　守るべきもの（1）

―翡翠の塔

「《翡翠の塔》――――どうやら……報告通りみたいね」

ルシオラが《翡翠の塔》に来ていた。

「王城の封印区画と連動した《デバイスタワー》の一角……。表と裏を利用した《第二結界》……。ふふ、教授もよく調べたものね」

その時、飛行艇の影がルシオラの上をかすめた。そして、塔の横にとまった。

「よお、待たせたな」

「ふふっ、お疲れさまだったね」

赤い飛行艇の中から現れたのは《痩せ狼》ヴァルターと《道化師》カンパネルラだった。

「あら……貴方たちが来るなんて。てっきりレーヴェが迎えに来ると思ったのだけど。どういう風の吹き回しかしら？」

「ふふ、レーヴェなら教授のお供をしているところでね。そこで僭越ながら僕たちがお迎えに参上したというわけさ」

「まー、次の段階までやる事も無くなっちまったしな。ヒマ潰しに来させてもらったぜ」

「ふふ、物好きなこと。しかし、教授とレーヴェが同行しているということは……。ついに最後の実験が行われるということかしら？」

「クク、らしいな。『福音計画』もいよいよ次の段階ってわけだ」

「人形と猟兵の仕上がりも上々だ。これで《β》が完成したらずいぶん忙しくなると思うよ」

―結社飛行艇内

「――――最後の実験ということは『あれ』が相手だったかしら。さ

すがに教授やレーヴェでも一筋縄では行かないでしょうね」
「クク、そうかもな。なんと言っても伝説の存在だ。強さの次元が違うだろうぜ。……しかしカンパネルラよ。てめえらしくねえじゃねえか」
「あらら、何がだい？」
「いつものてめえだったら喜んで教授に同行してるはずだ。それをしないってことは他に面白いネタがあるんだろう？とっとと吐いちまいな」
「やだなあ、ヴァルター。僕ってそんなに信用ないかな？」
「クク、信用してるさ。てめえのナンバーと同じくらいな」
「Ｎｏ．０――ふふ、信用ゼロというわけね」
「やれやれ、２人ともキツイなぁ。ま、見物したいのは山々だけどあいにく急ぎの用事があってね。あの方に《方舟》の使用許可を頂くつもりなのさ」
「クハハ！マジかよ！よりにもよってあんな化物を投入するとはな！」
「《紅の方舟》――グロリアス。まさかとは思うけど……リベールを焦土と化すつもり？」
「ふふ、それは教授とレーヴェ次第だと思うよ。そんな訳で、この後すぐに出かけなくちゃならなくてね。実験の顛末は、帰ったらゆっくり聞かせてもらうさ」

第12章　守るべきもの（2）

―霧降り峡谷

ワイスマン教授とレーヴェが霧降り峡谷を登って最奥に入っていた。

「……これは……」

レーヴェが目の前の存在に圧倒されていた。

「フフ……。やはりここにいたようだね。見たまえ、レーヴェ。何とも優美な存在じゃないか」

「……。本当にこんなものを使って『実験』を行うというのか？」

「君の危惧も当然だ。だが、《β》を仕上げるにはどうしても必要なデータだからね」

ワイスマン教授とレーヴェが話していると、声が響いた。

「……おぬしらは……」

「おお……起こしてしまったようだね。20年ぶりのお目覚めかな？」

「……」

「お初お目にかかる。私の名は、ゲオルグ・ワイスマン。《身喰らう蛇》を管理する《蛇の使徒》を任されている」

「……。……去れ……。おぬしが漂わせるその力……どことなく懐かしい気がするが……おぬしの目は気に入らぬ……。昏い悦びにしか生を見出せぬ……歪んだ魂の匂いを感じるぞ……」

「フフ、お誉めにあずかり光栄だ。しかし残念ながら貴方に拒む権利はないのだよ。女神の至宝に関わる話だからね」

「……なに……？」

「レーヴェ、見せてやりたまえ」

「……」

レーヴェが《ゴスペル》を取り出した。

「……それは……！」
「１２００年前の記憶が甦ったかね？レプリカに過ぎないがなかなか良く出来ているだろう？」
「……おぬしら……。……まさか《輝く環》を！！」
「フフ、そのまさかだ」
ワイスマン教授が杖を取り出した。
「それでは――最後の『実験』を始めよう」

第12章　守るべきもの（3）

―ロレント市

「さてと、最初の予定通りボース地方に向かわなくちゃね。まだ《実験》が行われていない唯一の地方になったわけだし」

「ええ、そうね。ただ現状で、ボース地方では妙な事件は起きていないそうよ。ある程度、ロレントの仕事を手伝ってから出発してもいいわね」

「うん、分かった。一通り用事を済ませたら発着場に行くとしましょ」

―ロレント発着場

「やあ、エステル。もう出発しちゃうのかい。せっかく帰ってきたんだからゆっくりして行けばいいのに」

「うん……色々と忙しくてね。今の仕事が一段落したら帰ってゆっくり休むことにするわ」

「うんうん、そうするといい。さてと、アイナさんからすでに運賃は貰っているんだ。さっそく乗船手続をするかい？」

「手続をしたら、船が来るまでここで待った方がいいわね。もうロレントでやり残したことはない？」

「うん、大丈夫よ」

「よしきた。それじゃあ、ギルドに連絡して他のメンバーも呼んでおくよ」

エステルたち乗船手続をしてから定期船の到着を待つことにした。

一方、ツァイス市　ラッセル工房
「なるほど、今度の《ゴスペル》は人の精神にも干渉してきたか……。そして霧の粒子を媒介に広範囲を掌握・コントロールする。ふむ……これで決まりじゃな」
ラッセル博士はティータから送られてきたロレントでの報告書に目を通していた。
「博士、お邪魔しますよ」
「おお、カシウス。1ヶ月ぶりくらいじゃの。レイストン要塞から来たのか？」
「ええ、ようやく仕事が一区切りついてくれたのでね。陣中見舞いにお邪魔しました」
ラッセル工房に入ってきたのは珍しくもカシウスだった。
「それは……お孫さんのレポートですか？」
「うむ、今朝ほどロレントから届けられてな。このレポートのおかげでようやく確信が持てたわい」
「《ゴスペル》の正体ですか」
「うむ、あくまで仮説だがな。思考実験と《カペル》を使ったシミュレーションは千回以上行った。聞くか？」
「是非とも」
「うむ、それでは――」
ラッセル博士が《カペル》に設置していた《ゴスペル》を取った。
「この《ゴスペル》が起こす『導力停止現象』じゃが……。お前さん、あの現象がどのようなものだと理解しておる？」
ラッセル博士がカシウスに『導力停止現象』について尋ねた。
「《ゴスペル》の周囲にあるオーブメントに連鎖して起こる機能停止現象……。そのように捉えていますが」
「半分正しくて半分間違っておる。お前さんが言った現象はどちらかというと導力魔法の『アンチセプト』に近い。内部の結晶回路をショートさせ一時的にオーブメントを働かせなくしておるわけじゃ。じゃが、《ゴスペル》が起こす現象はそれとは根本的に異なってい

てな……。オーブメント内で生成される導力を根こそぎ奪い取るのじゃ」

「つまり、『導力停止』ではなく『導力吸収』ということですか……」

「うむ、内燃機関でいえばガソリンを抜き取るわけじゃな」

「ふむ、確かにそれなら『アンチセプト』との違いも説明できそうですが……。いや……待てよ。それなら奪われた導力は《ゴスペル》に蓄積されるはず」

「うむ、良い所に気付いたの。結論から言ってしまえば、周囲から奪われたはずの導力は《ゴスペル》内部に存在しなかった。それこそ1EPたりともな」

「周囲に拡散した可能性は？」

「無い。キレイサッパリとどこかに消えてしまうのじゃよ」

「……」

「そして、エステルたちが出くわした一連の《新型ゴスペル》じゃが……。最新の導力技術では説明できない『あり得ない』現象を引き起こした。そのような現象をどうやって引き起こすのかは不明じゃが……。1つ確実に言えることがある」

「それは……？」

「小さすぎるのじゃ。これまで起きた大規模な異常現象を発生させる機構を、掌大に収めるのは物理的に不可能だと断言できる。たとえ《結社》とやらが我々より遥かに進んだ技術を持っていてもな」

「なるほど……何となく掴めてきましたよ。つまり、この《ゴスペル》は《端末》に過ぎないわけですね？」

「うむ……まさにその通り！《ゴスペル》そのものには異常な導力場の歪みのようなものを発生させる機能がある。その歪みは共鳴するように広がり、周囲のオーブメントから導力を奪う。そして奪われた導力は、歪みの中に吸い込まれて消滅する。いや、正確には消えたのではない。別の空間に送られたというわけじゃ」

「そして、その別の空間にはあり得ない異常を引き起こせる『何か』

が存在している……。つまり、そういうことですか」
「うむ、間違いあるまい。《結社》は《ゴスペル》を通じてその『何か』が持っている力を引き出すことができるのじゃろう。まったく《福音（ゴスペル）》とは良く言ったものじゃよ」
「……。だとしたら……『何か』の正体が気になりますね。遥かに進んだ技術で作られたオーブメントか、それとも……」
「それに関してはお手上げじゃ。色々な可能性が考えられるが、現状ではこれ以上確かめられん。さてカシウス――10年前と同じことを聞くぞ。この現状を踏まえてわしに今後、何をして欲しい？」
「はは、警備飛行艇の完成をお願いした時と同じ言葉ですか。ふむ、そうですね……。……」
しばらくカシウスは思考を巡らせた。
「《ゴスペル》が発生させるという異常な導力場の歪み――その共鳴現象を防ぐ手段を開発して頂けないでしょうか？」
「ふふ、そう言うと思ったぞ。今取りかかっているいる発明もそろそろ完成する頃合いじゃ。それさえ終われればすぐにでも始められるじゃろう」

第12章　守るべきもの（4）

―定期船　《セシリア号》
～オリビエ
「やあ、エステル君。いよいよボースに到着だね。ボクたちが初めて出会った思い出の地に戻ってきたわけだ。フッ……何とも感慨深いじゃないか」
「言われてみると確かに感慨深いかも……。でも、あの時のオリビエってけっこう失礼なヤツだったわよ？あたしのこと『色気がない』とか言ってバカにしてたし……」
「フッ、それは誤解だよ。好きな子にわざと意地悪してしまうシャイでキュートな照れ隠しだと思ってくれたまえ」
「また適当なことを……。シェラ姉とヨシュアには速攻モーションかけてたくせに」
「ま、それはそれとして。今のキミは彼らに勝るとも劣らない魅力を放っているよ。しなやかで健康的な色気と乙女ならではの恥じらい……。うんうん、成長したものだね」
「あ、ありがと……って、恥ずかしくなること言わないでほしいんですけど」
「フッ、照れることはない。だが、キミはようやく大人への階段を上り始めたばかりだ。更なる高みを目指すためにもお兄さんが手取り足取り導いて……」
「ケッコーです。オリビエを頼るくらいならシェラ姉を頼った方がマシだわ」
「ふむ、それは残念だ。しかし、シェラ君がエステル君を手取り足取り導くわけか……。……。……おおう」
何やらアブナイ妄想を働かせているオリビエ。
「な、なに想像してんのよっ！」

～ティータ
「あ、お姉ちゃん。またお散歩してるの？」
「うん、まあね。そういえばティータってボースは初めてなんだっけ？」
「うん、初めてだよ。すごくおっきなお店があるって聞いたんだけど……」
「あ、ボースマーケットね。王都にある百貨店をさらに大きくした感じかな。色々な店が入っていてすっごく賑やかなんだから」
「ふえ～、すごいね。えへへ……早くボースに着かないかな。そういえば、お姉ちゃん。ラヴェンヌ村って行ったことある？」
「うん、前に仕事で行ったわよ。たしか……アガットの故郷なのよね？」
「うん、ミーシャさんっていう妹さんが住んでいるんだよ。アガットさん、妹さんに顔を見せるために年に何度か村に帰るんだって」
「へえ、そうなんだ。しかしアガットの妹かぁ……。あんな無愛想な兄貴を持ってさぞかし苦労してそうよね」
「もー、お姉ちゃんたら。アガットさん、ぶっきらぼうだけどとっても優しい人だと思うよ？」
「あー、はいはい。不器用で照れ屋なのはあたしも認めるけどね」
アガットのいない所で言いたい放題の２人。
「えへへ……。わたし、ミーシャさんってすごく良い人だと思うんだぁ。アガットさん、ミーシャさんの話をした時、とっても優しい目をしてたから……。……」
突然、ティータの口が止まった。
「？どうしたの？」
「ううん、なんでもない。ただちょっと……胸のあたりがモヤモヤして……。えへへ、どうしてかなぁ？」

「（うーん……これはヤキモチみたいね）」

～ジン

「よう、エステル。今回はお疲れさんだったな。また一歩、遊撃士として成長したように見えるぞ」

「えへへ……まだまだ未熟よ。棒術の腕だって父さんの足元にも及ばないし」

「はは、あんまり旦那を意識する必要はないと思うぜ。Sランクの遊撃士っていうのは『理』に至った達人ばかりだからな。正直、俺なんざ一生かかっても辿り着けるかどうか怪しいところだ」

「そ、そうなんだ……。父さんが具体的にどう凄いのかいまだにピンと来ないけど……。その『理』ってどういう意味なの？」

「ふむ……そうだな。かつて旦那は『剣聖』と呼ばれる卓越した剣の使い手だったそうだ。しかし今では、慣れ親しんだ剣と同じように棒を自在に振るう。何故それができると思う？」

「えっと、物凄く練習したから？」

「勿論、それもあるだろう。だがそれ以上に、棒術の本質を即座に掴むことが出来たからだ。型の反復や反応、筋力や錬気を越えた所にある絶対的な次元……。あらゆる物事の本質を捉え、自在に操ることのできる境地……。それこそが『理』に他ならない」

「物事の本質……」

「恐らく、旦那が《百日戦役》で帝国軍を退けた知略も同じはずだ。戦争という物事の本質を掴めたからこそ、あんな大胆な反攻作戦を立案・実行できた。敵に回したらこれほど恐ろしい人はいないだろうな」

「な、なるほど……。でも、その父さんもある意味、《結社》に出し抜かれたのよね。クーデター事件の時に国外に誘き出されたみたいだし」

「ああ、恐らく旦那に匹敵する人物がいるのは間違いあるまい。それが『レーヴェ』なのか『教授』なのか判らんがな」
「えっと、あたしたちが戦った『ロランス少尉』なんてどう？」
「ヤツか……。凄腕には違いないだろうが旦那に匹敵するかどうかは判らんな。それに、ヤツの強さは『理』から来ているのではないような気がする。冷たく研ぎ澄まされ、鍛え抜かれた何者にも侵されることのない刃……。そんなものを感じたな」
「……うん。言いたいことは分かる気がする。あれから姿を見せてないけどいったい何をしているんだか……。……ヨシュアも拘ってたみたいだし」
「ああ、《結社》時代の因縁があるのかもしれんな。俺といい、シェラザードといい、どうも妙な因縁が多すぎるようだ。これもひょっとしたら……女神の導きによるものかもしれん」
「あ、そういえば……。ジンさんもあの時、眠らされちゃってたよね。やっぱり何かの夢を見たわけ？」
「ああ……。道場にいた頃の夢を見たぜ。キリカが今とほとんど変わってなかったのに気付いてな。夢の中で思わず笑っちまったよ」
「へ～、キリカさんって昔からあんな感じだったの？」
「ああ、あんな感じだった。あれでよくヴァルターと付き合っていたもんだと……」
「えっ……！？」
「……口が滑っちまったな。悪い、今のは忘れてくれ」
「う、うん」

～クローゼ
「エステルさん。またお散歩ですか？」
「えへへ、まーね。それよりゴメンね。ヨシュアのこと打ち明けるのが遅れちゃって」

「ふふ、とんでもないです。それにしても、ヨシュアさんに同行している女の子というのは空賊団の人だったんですね」
「うん、ジョゼットっていうやたらと生意気で挑発的な娘よ。自分のことをボクって言うからボクっ子とか呼んでるけど」
「そうなんですか……。でも、写真で拝見した限りだとなかなか魅力的な方みたいですね」
「むー、口を開かなかったら可愛いっていうのは認めるわ。最初に出会った時は完璧にお嬢様を演じてたし……」
「？？？」
エステルはロレントの市長邸でジョゼットと初めて出会った時のことを話した。
「まあ、そんなことが……。ずいぶん器用な人なんですね」
「何でもエレボニアの元貴族出身みたいだからね。ネコをかぶるのは得意みたい。地はさっきも言ったように生意気で挑発的な性格だけど」
「ふふ、でも聞いた限りだと何だか憎めない人みたいですね。話してみたら意外と気が合いそうな予感がします」
「うーん、あたしはダメかも。なんか性格的にウマが合わない気がするわ」
「ふふ、そういうのってどうしてもありますよね」
「そういえば……クローゼもあの時、眠らされちゃってたよね。やっぱり何かの夢を見たわけ？」
「ええ……《百日戦役》の時の夢を」
「《百日戦役》の時って……。そっか、確かクローゼってその時にテレサ先生と……」
「はい、先生たちに保護されてしばらく一緒に暮らしていました。でも……うふふ」
急にクローゼが笑い出した。
「ど、どうしたの？」
「いえ、１０年前の話なのになぜか途中でクラム君やジルたちまで

登場したのです。あのまま見続けてたらエステルさんやヨシュアさんも出てきたのかもしれません」
「あはは、さすが夢だけあって脈絡がないところもあるわけね」
「はい。でも……今考えると少し恐いんです」
「え……？」
「夢の中の私は本当に幸せで……。ずっとこのままで居たいって心の底から思っていました。でも、それって何かが間違っている気がするんです」
「うん……言いたいことは分かるよ。良い夢を見れてラッキーっていうのは確かにあるけど……。また見たいかって言われたらちょっと躊躇(ためら)っちゃうよね」
「はい……。《ゴスペル》の持っている別の意味での危険性……。それを垣間見た気がします」

～アガット

「……」
アガットは珍しく座席に座らずに別の場所にいた。
「あれ……。どうしたの、アガット？」
「……何でもねえ。お前の方はまた船内散策か？」
「うん、まあね。そういえば、アガットってラヴェンヌ村出身なのよね。久々の里帰りじゃないの」
「まあ、しばらくぶりだな。生誕祭が終わった後、一度、帰っちゃいるんだが――って、待てやコラ。なんで俺が里帰りするのが前提になっているんだ？」
「照れない照れない。たしかアガット、妹さんが故郷にいるって言ってたよね？むふふ、さぞかし可愛がってるんじゃないの～？」
「あのな……」
「そういえば、アガットの家ってラヴェンヌ村のどこにあるんだっ

け？前に空賊事件の調査で寄った時はそれらしい子に会わなかったのよね。ルゥイ君と一緒にいた女の子はちょっと小さすぎる感じだったし……」

「……ま、ミーシャについては近いうちに紹介してやるよ。村による機会があったらな」

「あ、うん、よろしくね。しかしそうなると……ティータも連れてかなくちゃね」

「な、なんでそうなるんだ？」

「だってティータ、アガットにずいぶんと懐いてるみたいだし。紹介してあげなかったらガッカリしちゃうと思うわよ？」

「……」

「あ、分かった！アガット、妹さんとティータを会わせたくないんでしょう～？」

「なッ……」

「あはは、図星か。アガットをめぐってお互いヤキモチ焼きそうだしね。いや～。お兄ちゃんはツライわねぇ？」

「なんだ……そういう意味かよ」

「？？？まあ、心配しないでもあたしがフォローしてあげるわ。だから安心してティータを妹さんに紹介してあげなさいよね」

「ヘッ……そうだな。その時はよろしく頼むぜ」

～シェラザード

「あら、エステル」

「シェラ姉、ここにいたんだ。えっと……ひょっとしてお邪魔かな？」

「ふふ、なに遠慮してるのよ。ルシオラ姉さんについて聞きたいことがあるんでしょ？」

「あ、うん……。昔会ったことがあるみたいだけど、ほとんど覚え

ていなくて……。どんな人だったのかなぁって」
「そうね……。《幻惑の鈴》ルシオラ。鈴と扇を使った『舞い』によって観客に幻を見せることのできる人……。あたしのいた一座の目玉と言うべき芸人だったわ」
「そうなんだ……。その幻って、オーブメントを使っているの？」
「いいえ、古くから伝わる《幻術》という技術みたいね。姉さんは元々、そういう家に生まれたみたいだったから」
「元々……？」
「旅芸人をやっている人間って大体、2種類に分かれているの。訳あって故郷を捨てた人間と身寄りのない天涯孤独の人間……。ルシオラ姉さんは前者で……そして……あたしは後者だった」

『あたしがハーヴェイ一座に拾われたのは7つくらいの時だったかしら。その頃のあたしは、街のスラムで荒(すさ)みきった暮らしをしていたわ。スリ、置き引き、かっぱらい……。ほんと、ロクな事をしてなかった。そんなあたしに手を差し伸べてくれたのがハーヴェイ座長と姉さんだった。他人を信じきれないあたしに家族の暖かさを教えてくれて……。自分の居場所を作れるようにって様々な芸や技術を教えてくれた。踊り、猛獣使い、タロット。全て姉さんから教わったわ。でも……8年前。事故で座長が亡くなってから一座はバラバラになってしまった。あたしは姉さんに付いて行くつもりだったけれど……『やる事がある』と言い残して姉さんは居なくなってしまった。途方に暮れたあたしは座長や姉さん以外で唯一頼りになる人に相談してみることにした。そう――すでに遊撃士として活躍していたカシウス先生にね』

「そんな事があったんだ……」
「あたしが遊撃士を目指したのは少しでも強くなりたかったから。

姉さんが帰ってくるまでの間、1人で真っ当に生きて行けるように。
でも……あれから8年経った。自分の道を見つめ直すには良い機会なのかもしれないわね」
「シェラ姉……」
「ふふ、そんな顔しないの。ジンさんに言われたように問答無用で戦うつもりはないわ。ただ、一度きちんと姉さんから話を聞きたいと思っている。どのような理由があって《結社》に与(くみ)しているのかをね」
「うん……そうだね。シェラ姉、ファイト！あたしも出来るだけ協力するわ！」
「ふふ、ありがと。しかしエステル……あんた、本当に成長したわね」
「な、なによ、やぶから棒に」
「さすがは先生の娘って今までずっと思ってたけど……。ちょっと認識を誤っていたかもしれないわ」
「へ……どういうこと？」
「あんたの強さは先生の強さとは少し違うみたい。先生は、海のように懐が深くて雄大な強さを持っているけど……。あんたはそうね……自分も他人も輝かせるような、太陽みたいな強さを持っているわ」
「え……」

『僕のエステル……お日様みたいに眩しかった君』

エステルの頭にヨシュアの言葉が浮かんだ
「……」
「みんな、あんたのそういう所に惹きつけられているんだと思う。あたしもそうだし……もちろんヨシュアもね。先生のことをプレッシャーに感じる必要なんてないと思うわよ」
「うん……。えへへ、やっぱりシェラ姉ってあたしのお姉さんだよ

ね。いつもいつも……励ましてくれてありがと」
「ふふ、どういたしまして。代わりと言ったらなんだけど今度、飲みに付き合いなさい。正遊撃士になったからにはお酒にも強くならないとね？」
「それは激しく関係ないと思うんですけど……」

～レイン
「……」
「あれ、レインさんはまた外？」
「ああ、エステルさんですか。ええ、こうやって風にあたるのが好きですから」
「そう……。……」
「そうしたのですか？もしかしてあの時のことが気になりますか？」
「あの時のことって？」
「夢の話ですよ。どうです、聞きたいですか？」
「あ、うん。レインさんが良かったら……」
「私は構わないのでお話しますよ。夢の内容は私が幼かったときの思い出でしたよ。貧しくも苦しくなく楽しかった頃の……。そう、あの日を境に私の人生の歯車が狂い始めた時までの……」
「え……」
「ちょっと口が出すぎましたね。少し私の半生についてお話しましょう」

『私はレミフェリア公国のある裕福な家に生まれました。幼少の頃――夢で見た時期でしたが――何不自由なく楽しく日々を過ごしていました。ところが、１６年前――８歳の時――父が突然家を出ていってしまいました。残された母は何とか仕事を探し、食

べていくだけの生活費を稼いでいました。とても貧しかったのですが、母が優しかったので苦しくはありませんでした。しかし、私が12歳の時、生活に疲れたのか……母が自ら命を絶ちました。父に家を出て行かれ、母が自殺した……。私は世の中が嫌になりました。その後、アルテリアの七耀教会に引き取られ生活していました。ただただ時間が流れていく中、ある教会の女性が私に剣術を教えてくれました。『君も男の子なんだから武術の心得が一つくらいあった方がいいだろう』と言われましてね。それからは、剣の腕を磨くことに打ち込みましたね。この剣術を活かすために、私はアルテリアを出て様々な地方で魔獣退治などをすることにしました。そして6年前、何度も話した『ある事件』に出くわしたのです』

「これが私の半生です。これ以降は前に話した通りですよ」

「レインさん……」

「そう哀しそうな顔をするものではないですよ。確かにつらい出来事でしたが、今の自分があるのもその出来事のおかげです」

「で、でも……」

「エステルさん。今回の夢について考えてください。人は楽しい時間が過ぎ去っていくのを恐れます。その後の苦しいことを考えてしまうからです。しかし、人は苦労無くして前には進めません。楽しい時間ばかり過ごすことは、時が止まった空間で過ごすのと同じです。何不自由ない生活をしていると、貧しくなるのを恐れます。そのためにさらに豊かになろうという欲望が生まれます。もし、私があのまま裕福な生活を送り続けていたら私もそうなっていたでしょう。不幸なことが起こってしまい悲しいですが、世界に対する視野が狭くならずに良かったとも思っていますよ」

「……レインさんは強いね」

「いえ、エステルさんほどではありませんよ。さて、ボース地方までもう少しですし、私は席に戻りますね」

「うん、また後でね、レインさん」

第12章　守るべきもの（5）

エステルが船内に入ると、アナウンスが流れた。
「……お待たせしました。まもなく本船はボース市に到着いたします。着陸の際、多少揺れますのでお早目に座席にお戻りください」

ーボース市　遊撃士協会ボース支部
「いや～、ロレントからわざわざご苦労じゃったな。しかし……《不動》《銀閃》《重剣》に加えて期待のルーキーの揃い踏みか。何とも豪華なメンバーじゃのう」
受付のルグラン爺さんが感心した。
「期待のルーキー？」
エステルがキョトンとした。
「わはは、お前さんのことじゃよ４つの地方で《結社》の陰謀を立て続けに阻止した驚異の新人……そんな風に噂されておるようじゃ」
「じょ、冗談！陰謀を阻止したなんて買いかぶりもいいところだわ。いつも《実験》が終わってから余裕で逃げられちゃってるし……」
「でも、ロレントではいい働きをしてくれたじゃない。胸を張ってもいいと思うわよ」
「あ、あれはその、偶然が重なったっていうか……」
「はは、照れるなっての。要は評判に見合うだけの働きをすりゃあいいんだからな」
「もう、簡単に言わないでよ。それはともかく……ボースでの状況はどうなの？」
「うむ、今のところ《結社》が関与していると思しき事件は起こっておらんよ。例の空賊艇の奪還事件以来、軍の警戒も厳しくなっておるしな。あえて言うなら……手配魔獣が増えておるくらいか」

「フン……そうか」
「ボースって、手配魔獣が現れるのが他の地方よりも多い気がするわね。前に来た時もそうだったけど何か原因でもあるの？」
「元々ボース地方は広いし、険しい地形に囲まれておるからの。そういった場所から凶暴な魔獣が降りてくることが多いんじゃが……。それにしても今月に入ってからすでに１０件も報告されておってな」
「それは多いわね……。スティングさんあたりが頑張ってくれてるのかしら？」
「うむ、それとクルツたちも先日立ち寄ったついでに何匹か退治していってくれた。できればお前さんたちにも手伝ってもらいたいんじゃが」
「ふむ……そうした方が良さそうだな。凶暴な魔獣の増加にしても《結社》が絡んでいるのかもしれん」
「うんうん、このまま放っておくと危ないし、ここは退治を優先しちゃいましょ」
「……」
しかし、アガットは反応を示さなかった。
「？？？アガットさん。どーしたんですか？」
「あれ、どうしたの」
「いや……何でもねえ。とりあえず、今報告されてる手配魔獣を片っ端から退治するか」
「……」
アガットだけでなくレインも何か思い悩んでいた。
「……失礼しますわ」
「メイベル市長……それにリラさんじゃない！」
ギルドに入ってきたのはメイベル市長とリラだった。
「うふふ、ご機嫌よう。エステルさん。ようやく再会できましたね」
「……ご無沙汰しております」
「うわ～、何だか久しぶりねぇ。生誕祭の時以来だったっけ？」
「ええ、そうなりますわね。エステルさんのお噂は色々な所で耳に

していますわ。他の皆さんもお久しぶりです。クローゼは……もう休暇に入ったのかしら？」
「いえ、実は一足先に休学にさせて頂いたんです。メイベル先輩とリラさんもお元気そうで何よりです」
「メイベル……先輩？」
「あ、王立学園の先輩でいらっしゃるんです」
「ふふ、公の場以外では威張らせてもらってるわけですわ」
「あはは、そうなんだ」
「それっと……アガット・クロスナーさん。お久しぶりですわね」
「……まあな」
「あれ、アガットって市長さんと顔見知りだったの？」
「何度か依頼を通じてお世話になっていますわ。それと１０年前に……」
「おい……嬢さん」
「……失礼しました。今日のところは、皆さんがいらっしゃったと聞いたので挨拶に伺わせていただいたのです。聞けば、王国全土を騒がす国際犯罪組織を追ってらっしゃるのだとか？」
「こ、国際犯罪組織……」
「少し雰囲気は違うけれど、そう思ってくれて構わないわ」
「ボース市としても犯罪組織の暗躍は他人事ではありません。可能な限りの協力をさせて頂きますわ」
「うん、その時はよろしくお願いします」
「フン……ま、せいぜい期待してるぜ」
「では、わたくしたちはこれで失礼させていただきます。何かありましたら市長邸までいらしてくださいね」
「……失礼します」
リラが一礼すると、メイベル市長とリラがギルドを出ていった。
「やれやれ、アガット。お前さん、もう少し愛想良くはできんのか？」
「悪いが、これが地でね。サービス業じゃねえんだ。その辺は勘弁

してもらうぜ」
「うーん、確かにアガットって誰に対しても横柄だけど……それでも対応そのものは割と丁寧な感じがするのよね。でも、さっきの市長さんには素っ気なく感じたんだけど」
「……エステルさん。あまり人の感情に突っ込むものではありませんよ。人それぞれ何かしらあるものですから」
「ヘッ、そういうこった」
「うーん……」
「それよりも、さっさと手配魔獣を退治しちまうぞ。爺さん、一通り教えろや」
「うむ……。報告されているのは3件じゃ。まずは、クローネ峠に出没する『ブレードファング』。そして、霧降り峡谷に出没する『ゴーストエピタフ』。最後に、琥珀の塔に出没する『オクトボーン』じゃ」
「うん……ちゃんとメモしたわ」
「よし、魔獣退治ってことは俺の『重剣』の出番のようだな。今回は俺に仕切らせてもらうぜ」
「へっ……？」
「ま、ボース地方はあんたの故郷でもあるしね。今回は適任じゃないかしら」
「ああ、俺も異存はないぞ」
「ヘッ、決まりだな。それじゃあエステル。とっととメンバーを選ぶぞ」
「むー、なんか強引ね」

「さてと、手配魔獣については各地に行ってみるとして……。せっかくだからラヴェンヌ村にも寄っちゃう？」

「あのな……定期船でも言ったはずだろうが。ラヴェンヌ村に寄るのはボースの事件が一段落してからだ」
「もう、ケチくさいわね～」
「ふふ、アガットさんの言う通りかもしれませんね。ティータちゃんを差し置いて私たちが寄るわけにもいきませんし」
「あ、それもそっか♪」
「そこで納得すんじゃねえ！」

第12章　守るべきもの（6）

「は～、これでラストね。それにしても……何だか様子が変じゃない？何か魔獣が怯えていたみたいだし」
「ああ、どの魔獣も様子がおかしかったな。やたらと凶暴化していたり、パニックに陥っていたり……」
「私も……そんな印象を受けました。どういう事なんでしょうか？」
「……」
「？どうしたの？」
「いや……ひょっとしたら何かの前触れかもしれねえ」
「前触れ……。ひょっとして《結社》の！？」
「それは判らねぇが……。前にも似たような事があった。いつになく魔獣どもが騒がしい日が続いてな……。そのすぐ後に……。……」
「？？？」
「……。（やはり、アガットさんは……）」
「ま、今はその話はいいだろう。とにかく、動物ってのは人よりもある種のカンには優れている。何が起こっても対処できるよう気を引き締める必要がありそうだ」
「うん……分かった。それじゃあ……一旦ギルドに戻ろっか？」
「ああ、そうするか」

―遊撃士協会ボース支部
「ただいま～、ルグラン爺さん。手配魔獣は全部片付けたぞ」
「おお、ご苦労じゃったな。どれ、では先に今回の報酬を渡しておくか」
エステルは報酬を受け取った。

「ふむ、かなり凶暴だったらしいが問題なく退治できたようじゃな」
「うーん、それなんだけど……。ちょっと気になることがあってね」
「？気になることじゃと？」
「ああ、実はな――――」
エステルたちは一連の魔獣退治での魔獣の様子を話し始めた。

～同時刻　ボース市街
「ご機嫌よう、ヤハトさん」
「おお、市長じゃないかね。教会に礼拝に行くのかね？」
「いえ、マーケットの視察に行くつもりですの。礼拝はその後するつもりですわ」
「お嬢様……。先日も、そんな事を仰いながら結局お行きになりませんでしたが」
「もう、リラったら。つまらないことを覚えてるわね。今日は絶対に寄りますわよ」
「ふぉふぉ、仕事も結構じゃが日々の生活を大切にする事じゃ。あんたみたいに責任のある立場にいる人間ならば特にな」
「ええ、肝に銘じておきます。それではわたくしたちはこれで失礼しますわ」
「失礼します」
メイベル市長とリラはボースマーケットに入っていった。
「お父上が亡くなった後、すぐに市長に立候補した時はどうなるかと思ったが……。今ではすっかり一人前の市長の顔になったのう。ふむ、もう少し肩の力を抜いた方がいいと思うが」
ヤハト老人がふと顔を上げると、何かを見つけた。
「……なんじゃ、あれは？」

「ふむ、魔獣が怯えたり、やたらと暴れておったか……。何とも気になる話だのう」
「うん、何だか不気味よね。そういえばアガット。前にもボース地方で同じようなことがあったとか言ってたよね？」
「む、そうなのか？」
「ああ……まあな。爺さんがボースに来る前の話さ」
「あれ、ルグラン爺さんって前からここにいるんじゃないの？」
「わしがこの街に来たのは《百日戦役》が終わった後じゃよ。かつてリベールの遊撃士協会はグランセルにしかなくてな……。各地方に支部が作られたのは戦争が終わってからなんじゃ。ちなみにわしは、１０年前までは王都支部の受付をしてたんじゃよ」
「へえ～、そうだったんだ」
「……その《百日戦役》の直前だ。魔獣の様子がやたらとおかしかったっていうのはな」
「へ……？」
「なんじゃと……？」
その時、外から轟音が響いた。
「な、なんじゃあ！？」
「な、なに今の！？」
「外だ……確かめるぞ！」

第12章　守るべきもの（7）

「ああっ！？」
エステルたちが目にしたのは、ボースマーケットの上に巨大な竜が乗っていた。
「な、何なの！？」
「はわわっ……」
「なんて大きさ……？」
「こいつは……竜か！？」
「まさか、これが伝説の……」
「はい……古代竜です！昔からリベールのどこかに棲息していると伝えられていましたが……」
「いやはや、たまげたねぇ」
「まさか……こいつも《結社》の仕業か！？」
「……まあ、否定はすまい」
ボースマーケットの上に銀髪の青年がいた。
「あ……！」
「てめぇは……！？」
「特務部隊隊長、ロランス・ベルガー少尉！」
「フフ、それはただの偽名だ。執行者Ｎｏ．？。《剣帝》レオンハルト。以後、そう呼ぶといいだろう」
「《剣帝》……レオンハルト」
「なるほど……『獅子の果敢（レオンハルト）』か。すると『獅子（レーヴェ）』というのはキミの愛称だったわけだね」
「あ、あんですって～！？」
「貴方が《レーヴェ》……」
「……いささか不本意だが、仲間内ではそう呼ぶ者は多いな。まあ、お前たちも好きなように呼ぶがいい」
「……舐めやがって……」

「……自己紹介は終わりましたか？」
「む？」
「私のことは覚えていますか、レーヴェ？」
「フッ、今までコソコソと《結社》のことを嗅ぎまわっていたと聞いていたが……。どういう用かな、Ｓ級遊撃士――――《水の剣神》レイン＝アクアライト」
「えっ……？」
「……。さすが、情報部幹部の腕は伊達じゃありませんね」
「フフ、見くびってもらっては困るな」
「別にみくびってなどはいませんよ。今こそ教えてもらいましょうか、６年前の『教団殲滅事件』の裏事情を！」
「６年前……？ああ、あの時のことか。話せと言われて話すと思うか？」
「あなたがその気なら力づくで聞き出すまでですよ」
レインが剣を抜いた。
「止めておけ。貴様がどの程度の実力を持つか知らないが、この現状を見捨てるつもりか？」
ボースマーケットから大勢の逃げる人たちがいた。
「くっ……」
その時、古代竜の口から火が吐かれた。
「ああっ！？」
「街を焼くつもり……！？」
「……やれやれ。手間をかけさせてくれる」
《剣帝》レーヴェが古代竜の背に乗った。
「ま、待てやコラ！」
「……今回の実験は少しばかり変則的でな。正直、お前たちの手に負える事件ではない。王国軍にでも任せて大人しくしておくのだな」
そう言い残して、《剣帝》レーヴェは去って行った。
「ど、どうしよう……。このままだと逃がしちゃう！」

「……俺はこれからあのデカブツを追跡する。お前らは軍が来るまで被害状況を確認してろや」
「えっ……！？」
「アガット？」
「後でまた連絡する！」
アガットは古代竜を追って走っていった。
「アガットさん！？」
「ちょ、ちょっと！？」
「しまった……！」
「き、君たち！いい所にいてくれた！」
ボースマーケットから1人の男性が走ってきた。
「頼む、手を貸してくれ！瓦礫の下敷きになった人や逃げ遅れた人がいるんだ！」
「なに！？」
「あ、あんですって！？」

―ボースマーケット
「ひ、酷い……」
ボースマーケットの中は惨状と化していた。
「……まずは、役割分担を決めなくちゃ！」
「シェラ姉！クローゼとティータと一緒に逃げ遅れている人たちを誘導して！」
「ええ、分かったわ！姫様、ティータちゃん、西口の方に向かうわよ！」
「はい！」
「わ、わかりましたっ！」
「ジンさん、レインさん、オリビエ！あたしたちは瓦礫の撤去を手伝いましょ！」

「おお！」
「了解です！」
「フッ、了解だ」

「お願い！返事をしてちょうだい！」
メイベル市長が
「くっ……駄目だ……」
「僕たちだけの力じゃ……」
「メイベル市長！」
「き、君たちは……！」
「エ、エステルさん！」
「手伝いに来たわ！誰か下にいるのね！？」
「リ、リラが……。リラがわたくしをかばってこの瓦礫の下に……！」
「！！！」
「このくらいだったら1人で持ち上げられるだろう。ちょいとそこから離れてくれ」
「あ、ああ……」
「た、頼みます」
ジンが瓦礫の下に手を入れた。
「……フンッ！」
ジンが瓦礫を持ち上げた。
「リラ！？」
「う……あ……。……お嬢……さま……」
「おお、生きてるぞ！」
「ああ、リラ！！」
「オリビエ！リラさんを運ぶのを手伝って！」
「フッ、任せておきたまえ」

「では、私は他に誰かいないか見てきます！」
「ええ、お願い！」

第１２章　守るべきもの（８）

―遊撃士協会ボース支部

「……とりあえず、みんな、ご苦労じゃったの。ハーケン門の王国軍部隊がすぐに駆けつけるそうじゃ。ボースマーケットの管理はそちらに任せるといいじゃろう」

「う、うん……。でもまさか、あんな化物を持ち出してくるなんて……。しかもあのロランス少尉が……」

「執行者Ｎｏ．？。《剣帝》レオンハルト。通称、《レーヴェ》か……」

「フッ、とうとう正体が明らかになったということだね」

「グランセル城で会った時は、このような非道なことをする人には見えませんでしたが……」

「ふむ……」

「……彼の実力は恐らく執行者の中で一番でしょう。私は今から１人でアガットさんとレーヴェを追います。すいませんが、この場はお任せします」

そう言うとレインはギルドを出ていった。

「え……。ちょ、ちょっと……」

エステルがレインを追いかけようとしたが、それをシェラザードが止めた。

「待ちなさい、エステル。彼は考えがあって行動しているのでしょうから行かせてあげなさい。私たちは状況を把握するのが先よ。しかし、あの人も素性を隠していたなんてね。まさか遊撃士で先生と同じＳ級なんてね……」

「うむ、信じられんな……」

「父さんと同じＳランクの人がこんな身近にいたなんて……。しかも、《剣帝》レーヴェと知り合いだったなんて」

「遊撃士協会には４人のＳ級遊撃士がおるが、４人以外にいたとは

のう……。いったいどういうわけか……」
ルグラン爺さんが首をひねる。
「あ、あの、ルグランお爺さん……。アガットさんからまだ連絡はありませんか？」
レインのことで悩む一同にティータがたまりかねてアガットからの連絡がないか聞いた。
「ああ……。うむ……残念ながらの。あの鉄砲玉め……いったい何をしておるのじゃ」
そこで、ギルドの通信器が鳴った。
「あ……」
「ひょっとして……！」
全員がアガットからの連絡と期待した。
「こちら遊撃士協会、ボース支部じゃが……。おお、あんたか。一体どうしたんじゃ……。……なんじゃと！？」
「（ど、どうしたのかな……）」
「（ただ事じゃない雰囲気ね……）」
「うむ、了解した。すぐに他の連中を送ろう。うむ、うむ、気をしっかりな」
ルグラン爺さんが受話器を置いた。
「……ラヴェンヌ村のライゼン村長からの連絡じゃ。先ほど、あの竜がラヴェンヌ村を襲ったらしい」
「！！！」
「何ですって！？」
「竜は果樹園を焼き払ってからすぐに飛び去ったらしい。その直後、アガットが現れて消火活動を手伝ったそうじゃが……」
「分かった！あたしたちも行ってみるわ！」
「お、お姉ちゃん！私も連れていって！」
ティータがすぐさま名乗りを上げた。
「えっ……！？」

「空飛ぶ竜が相手だったら導力砲が役に立つと思うし……。それに……それに……」

「……うん、分かった。でも……無茶をしたらダメだからね？」

エステルは意外に早く承諾した。

「はいっ！」

その後、エステルたちはジンとクローゼを連れてラヴェンヌ村に向かった。

第１２章　守るべきもの（９）（前書き）

どうもお久しぶりです。大学での試験でＭｙ研究室に籠っていたので更新できませんでした。使われなくなった研究室を改造して自分専用試験対策室としたのですが、これは失敗でしたね。そこいらが薬品の匂いで充満して……処理に時間がかかりました。その話はさておき、これからまた再開しますので、どうぞお楽しみください。

第12章　守るべきもの（9）

―ラヴェンヌ村

ラヴェンヌ山道を抜けて、アガットの故郷にやって来たエステルたち。ラヴェンヌ村は凄惨（せいさん）たる光景だった。

「あ……」

ラヴェンヌ村の命とも言える果樹園が全て焼かれていた。

「こ、これって……」

「ひ、ひどいよ……」

エステルとティータはその光景を目の当たりにして言葉を失った。

「……とりあえず、連絡を下さった村長さんを捜してみましょう。竜とアガットさんの行方をご存じだと思います」

「うん、……そうね」

エステルは悲しみをこらえてラヴェンヌ村の村長を探した。

「村長さん！」

エステルは果樹園の中にいたライゼン村長に声をかけた。

「おお……いつぞやの。ボース市のギルドからわざわざ来てくれたんじゃな？」

「うん、そうだけど……。あたしの事、覚えててくれたんだ」

「うむ、空賊事件の時には軍隊までやって来たからのう。忘れろと言う方が無理な話じゃよ」

「そっか……。そ、それはともかく！竜はどこに行ったの！？」

「そ、それにアガットさんはどこに行っちゃったんですか？」

エステルとティータがやつぎはやに尋ねた。

「う、うむ……。果樹園を焼き払ってから竜は北に飛び去って行った。その直後、アガットが現れて消火を手伝ったんじゃが……。火

が消えたあと、いつの間にかいなくなってしまったんじゃよ」
「！！！」
「それって、妹さんの所に行ってるだけなんじゃない？この村には住んでいるんでしょ？」
「……」
エステルの言葉にライゼン村長は何も答えなかった。
「そうか……アガットはそう言っておったか」
どこか寂しそうにつぶやいたライゼン村長。
「？？？」
「あのあの……どーいうことですか？」
「先ほど確認したが、アガットはミーシャの側にはおらなんだ。もちろん、あやつの家にもな」
「そ、そうなんだ……。それじゃあやっぱり、また竜を追いかけたわけか」
「ここから北というと……かつて七耀石の鉱山があった場所ですね」
「ふむ……ご老人。何か手伝うことはあるかい？」
「ああ、気を遣わんでくれ。何とか火は消し止めたし、後片付けをしとるだけじゃ。それよりも……どうかアガットのことを頼む。あの思い詰めた様子ではどんな無茶をしないとも限らん」
「わ、分かったわ。みんな、急いで北の山道を探してみましょ！」
「う、うん！」

～ラヴェンヌ村　墓地
エステルが墓地の石碑に目を向けた。
『七耀暦１１９２年、戦火によって失われし善良なる魂、ここに眠る。レフ、アベル、ニコル、ヴィム、イレーナ、ミーシャ。女神の御許（おんもと）にて、どうか安らかに』

「（って、ちょっと待ってよ……！ミーシャって……さっき村長さんが言ってた……）」
「どうしたの、お姉ちゃん？」
ティータが不思議そうにエステルに声をかけた。
「う、ううん、何でもないわ」
慌てて取り繕うエステル。
「（き、気になるけど……今はアガットを追いかけないと……）」

第12章　守るべきもの（9）（後書き）

実は今日、作者の誕生日です。

第１２章　守るべきもの（１０）

―廃坑
「あ……！」
エステルが声をあげた先には、廃坑の扉が開かれていた。
「ここって……廃坑の入口だったよね。扉が開いているってことはひょっとして……」
ティータが何かに気付いて廃坑の鎖を調べた。
「お、お姉ちゃん！この落ちてる鎖……ついさっき外されたみたい！」
「や、やっぱり……！」
「奴さんの仕業だろう。どうやら中に入ったらしいな」
「急いで追いかけないと……！」
「オッケー！」
「はいっ！」

―廃坑　露天掘り場所
そこでは、剣帝レーヴェが古代竜と共にいた。古代竜はそこでも暴れていた。
「……」
剣帝レーヴェは《ゴスペル》を取り出し、古代竜を静めた。
「よし……それでいい。ふむ、データを取るにはまだしばらくの時が必要か。まったく、面倒な仕事を押しつけてくれるものだな」
「……何が面倒だと……？」

「お前は……」
剣帝レーヴェのもとに現れたのはアガットだった。
「その金色の剣……やっぱりあの時の赤い隊長か。ずいぶん久しぶりじゃねぇか」
「ランクC《重剣》、アガット・クロスナー。いや、クーデター事件の後、Bに昇格したそうだな」
「ヘッ……さすがは元・情報部だ。あの時はネズミみたいにコソコソしてやったが……。今回はまた、ずいぶんと派手にやらかしたもんだぜ」
アガットが自慢の重剣を構えた。
「……今度ばかりは逮捕だの悠長な事を言うつもりはねえ。その澄ましたツラごと八つ裂きにしてやるよ……」
「威勢のいいことだ。だが、あの程度の被害、派手というほどではあるまい？１０年前……お前が見た光景に較べればな」
その言葉にアガットは動揺した。
「この国の遊撃士の経歴は一通り調べさせてもらった。フフ、やはりお前はどこか俺と似ているようだ」
「……。ククク……似てるだと？何も知らねえ野郎が適当な事を抜かすなあああッ！」
アガットが一気に剣帝レーヴェに飛びかかった。
「……腕の差が歴然なのは前の手合わせで分かっている筈だ。加えて竜の脅威もあるだろう。なのに何故、あえて１人で挑む？」
「勝算なんざ知ったことか……。てめえは気に食わねぇ……ただ、それだけなんだよッ！」
「やれやれ……その程度か。これでは竜を使うまでもない」
「なに……！？」
剣帝レーヴェが一瞬で３発斬り込んだ。
「うおッ！」
「似たところもあるが……俺とお前は決定的に違っている。それは剣を振るう理由（わけ）だ」

「な、なんだと……？」
「俺が剣を振るうのは人を捨て修羅となるがため……。しかしお前は、己の空虚を充たすがために振るっている」
「……」
「重き鉄塊を振るうことで哀しき空虚を激情で充たす……。怒りで心を震わす間は哀しさから逃れられるからだ。だが、それは欺瞞に過ぎない」
「……やめろ……」
「そして、欺瞞を持つ者が前に進むことはありえない。《理》に至ることはおろか《修羅》に堕ちることもない。今のままでは……お前はどこまでも半端なだけだ」
「黙りやがれえええッ！！！」

～廃坑内
「ア、アガットさんの声！？」
「この響き方だと露天掘りの場所みたいね。とにかく急ぎましょ！」

第１２章　守るべきもの（１１）（前書き）

読者の皆様、夏バテしてませんか～？

第12章　守るべきもの（11）

「ッらあああああッ！」
アガットが剣を振りかざすが、剣帝レーヴェはそれを全てかわす。
「ク、クソが……」
「無様だな……。せめてもの情けだ。そろそろ終わらせてやる。はあああああああッ……」
剣帝レーヴェが剣を構え、力をこめた。
「クッ……」
アガットも一歩退き、剣を構え直そうとしたが、
「――せいッ！」
それよりも速く、剣帝レーヴェが一気に間合いを詰めアガットに斬り込んだ。
「……かはッ……」
アガットの重剣は真っ二つに折られ、アガットもその場に崩れ落ちた。
「……」
崩れ落ちたアガットを尻目に剣帝レーヴェは剣をしまう。
「さてと……そろそろ時間のようだな。今のうちに《ゴスペル》の制御式を調整しておくか……」
「……ま、待ちやがれ……」
崩れ落ちたアガットが折れた剣を剣帝レーヴェに向け立ち上がった。
「ま……まだだ……。まだ終わっちゃいねえぞ……」
「この期に及んで砕けた鉄塊に縋(すが)るとは。いいだろう。至らぬ身のまま果てるがいい」
「……そこまでですよ」
「む？」
「ここから先は私がお相手しましょう」
「また、お前か……。いつまでも俺を追いかけずに他のことをした

らどうだ？」
「それはできませんね。あの事件は人道に関わるものですから。真相が闇に葬られるのは私としては耐えられません。あなたもそうではありませんか、１０年前のように」
「クッ……。よく調べたものだな。だが、教える気はないな。どうして、そこまでこだわる必要がある？お前には直接関係のある事件ではないだろう？」
「確かにそうです。しかし、関わってしまった以上放っておく気はありません」
「使命感、というやつか。そのような中途半端な心持ちでは何一つやり遂げることはできんな。所詮、そこのやつと同じだ」
「それはどうでしょうか。彼はまだ心の整理がついていないだけですよ。いずれ乗り越える時が来るでしょう。中途半端なのはあなたの方ではないですか？」
「何？」
「どうしたらいいのか分かっていないのはあなたの方でしょう？」
「黙れ！大切なものを失ったことのないお前に何が分かるという！？もう何も語ることはない！この場で２人ともども果てるがいい！」
「（まずいですね……。私１人なら防ぐことはできるのですが、それではアガットさんが……）」

「あ、あれは……！」
ようやく露天掘りの場所に到着したエステルたち。
「ア、アガットさん！」
「ティータ！？」

「だめーー！！」
ティータがアガットの前に立った。
「チビスケ……」
「ティータさん……」
「お前……なんで……こんな所にいやがるッ……」
「なるほど……エステルさんたちと一緒に来たのですね」
レインが露天掘りの入口を見た。
「ティータ！！」
エステルたちがアガットたちの所に走り寄ってきたが、
「……留めろ」
剣帝レーヴェが《ゴスペル》を取り出し、古代竜で足止めした。
「くっ……！」
「チッ、やっかいな……」
エステルたちはなすすべもなく立ち止まるしかなかった。
「……」
エステルたちを留めた剣帝レーヴェはアガットたちの所に歩み寄った。
「こ、来ないでくださいっ！」
ティータが導力砲を構えた。
「ティータさん！」
「ば、馬鹿野郎……。そんな物が通用するかっ！いいから……とっとと逃げろ……！」
「ラッセル博士の孫娘、ティータ・ラッセルか……。天才少女と聞いていたがいささか無鉄砲が過ぎるな。女子供を手にかけるのは趣味ではないが――必要とあらば斬る。大人しくそこをどくがいい」
剣帝レーヴェがティータの眼前に剣を据えた。
「くっ……」
「き、貴様ああっ！」
「ど、どきませんっ」
その言葉に3人は驚いた。

「わたし……アガットさんに助けてもらってばかりだから……。こういう時くらいしかお返しすることができないから……。ううん……違う……。ぶっきらぼうで……フキゲンな顔ばかりして……いつもわたしのことチビスケって子ども扱いするけど……。本当はとっても優しくて……いつも見守っていてくれて……。大好きで……大切な人だからっ！」

ティータが導力砲を置き、アガットを庇う。

「だからわたし……ゼッタイにどきませんっ！！」

「……あ……」

「ティータさん……よく言いました」

「フッ、健気なことだ。その半端者に、そこまで慕う価値があるとも思えないが……」

剣帝レーヴェが剣をしまった。

「邪魔も入ったようだし、今回はこれで退いてやろう」

「え……」

突然、古代竜に砲弾が浴びせられた。モルガン将軍率いる警備艇がやってきたのだ。

「フッ……。ようやくのお出ましか。これで最後の実験を始めることができそうだ」

剣帝レーヴェが古代竜の背に乗った。

「あ……」

「くっ……今度は何をする気ですか！？」

「ま、待ちやがれ……ッ！」

「忘れるな。アガット・クロスナー。欺瞞を抱えている限り、お前は何者にもなれない。大切なものを守ることもな」

「……ッ……」

「そして、レイン・アクアライト。真実を知りたくば、お前の使命感をもって俺を追い詰めてみせろ。その時に話してやる」

「……その言葉、忘れないでくださいよ」

「フッ……」

「ま、待ちなさいよっ。黙って聞いてたら勝手なことをペラペラと！絶対に逃がさないんだからっ！」
「エステル・ブライト。お前は心しておけ」
「へ……」
「今回の実験が終われば計画は次の段階に移行する。気を引き締めなければ必ずや後悔することになるぞ」
剣帝レーヴェはそれだけを言い残し、古代竜と共に去ろうとした。
「ちょ、ちょっと！それって一体……」
「おのれ竜め！逃がしてなるものかっ！総員、射撃開始！撃って撃って撃ちまくれ！」
モルガン将軍が王国軍兵士に命令を下す。
「フッ、伝説の古代竜にそのような攻撃が効くものか。行くぞ――――《古竜レグナート》」
古代竜は警備艇の砲撃や銃をものともせず、飛び去っていった。

第12章　守るべきもの（12）

―数時間後

「――ちょ、ちょっと待ってよ！手を引けってどういうこと！？将軍ってば、また遊撃士（あたしたち）を目のカタキにしているわけ！？」

エステルたちはモルガン将軍から古代竜の捜索から手を引いてほしいと伝えられた。

「そうは言っておらん。だが、警備艇の導力砲ですら傷付けることが困難な魔獣だ。おぬしらにいったい何ができる？」

「そ、それは……」

「確かに、警備艇を持たない私たちには捜索ができない。仮に見つけたとしても対処のしようがない……」

エステルたちは何も言い返せなかった。

「将軍……」

「……たとえ姫様といえどこればかりは譲れませぬぞ。勇気と蛮勇は異なるもの。姫様もボースやラヴェンヌ村の被害をご覧になったでしょう。これは最早、戦争と言っても過言ではありますまい」

「ええ……そうですね」

「餅は餅屋とも言う。戦争ならば我々プロに任せておくがいい。お前たちは、そうだな……《身喰らう蛇》の拠点捜索に集中してもらうと助かる」

「で、でも……！」

「……ざけんな……」

怪我の手当てをされていたアガットが足を引きずりながらモルガン将軍のもとにやってきた。

「アガット……！？」

「ア、アガットさん！」

ティータが慌てて駆け寄ってきた。

「手当てしたばかりだから無理しちゃダメですよ～」

「……」
「……おぬしは……《重剣》のアガットと言ったか。威勢のいい若手遊撃士だとカシウスから聞いたことがある」
「オッサンの事はどうでもいい……。なあ……将軍閣下よ……。餅は餅屋……戦争はプロに任せろだと……？そりゃ……本気で言ってんのか？」
「……無論、本気だが。人を守るだけの遊撃士と違って我々は国を守らねばならん。この場合、国とは民と国土の両方を指している。それができるのは軍だけだ」
「クク……民と国土を守るか……」
アガットが突然モルガン将軍の襟首を掴んだ。
「笑わせるんじゃねええッ！！！」
「ぐっ……」
「ちょ、ちょっと！？」
「ア、アガットさん！？」
「いつもいつも！てめえらは間に合わねえ！でかい図体を素早く動かせず！足並みを揃えることばかり考えて！命令なしじゃあ何もできず！守れるはずのものを守れねえ！今回も！１０年前の戦争でもなあッ！！」
「！！もしやおぬし、あの時の……」
「ケッ……誰がてめえらだけに任せておけるかってんだ……。今度は……今度こそは……。俺は……この手で……ミーシャを守らなくちゃ……」
そこでアガットはその場に崩れ落ちた。
「アガットさんっ！？」
「ちょ、ちょっと！？」
「……ふむ、傷口が開いたということはなさそうだ。気力と体力が尽きて気絶しただけのようだな」
「……アガットさん……」
「ま、まったくもう、人騒がせなんだから……」

「とりあえず、きちんとしたベッドに寝かせた方がよかろう。こやつの家もあることだし、ラヴェンヌ村まで送るとするか」
「あ、うん、お願いします。……。って、どうしてラヴェンヌ村にアガットの家があることを知ってるの？」
「……こやつに一度だけ会っていたのを思い出してな。あの時の少年が……ずいぶんと大きくなったものだ」
「あの時？」
「《百日戦役》が終わった直後……。こやつの妹と村人たちの墓碑が建てられた時のことだ」
「！！！」
「あ……！」
エステルの頭にラヴェンヌ村の墓碑のことが浮かんだ。

第１２章　守るべきもの（１３）

―ラヴェンヌ村　村長宅

「なるほど……。そんな事があったのか。エステル殿、将軍閣下。色々と面倒をかけたのう」

「ううん……。結局、竜の暴走を食い止められなかったし……。あんまりお役に立てなくて申しわけないんだけど……」

「まあ、そう気落ちするな。結果はどうあれ、おぬしらが早めに動いてくれたのは助かった。マーケットでの人命救助といい、果樹園での消火活動といい、な」

「あ、あはは……。将軍さんに誉められると何だかこそばゆいわね。それはともかく……アガットのことなんだけど。妹のミーシャさんって本当に１０年前の戦争で……？」

「うむ……。帝国軍と王国軍の戦闘が村の近郊であってな……。その時、帝国軍の焼夷弾（しょういだん）がいくつか村に届いたのじゃ」

ライゼン村長が重苦しく当時の様子を語り始めた。

「その結果、民家が焼かれ犠牲者を出すこととなった。ミーシャもその１人じゃ」

「……」

「……それはある意味、我々王国軍の失態でもあった。村を守るための防衛線が帝国軍の苛烈な攻撃を招き……結果的に甚大な被害をもたらしたのだからな」

「あ……」

「そして、その防衛線の構築はわしの指示によるものだった。全てはわしの責任と言えるのだ」

「……将軍閣下。あまりご自分を責めなさるな。あの時、王国軍はあくまで使命を果たしただけじゃった。結局、幾つかの偶然が重なって起きた被害でしかないんじゃよ」

「いや、どうか庇ってくれるな。肉親を亡くした者にそのような理

屈は通用しない。あの赤毛の若者のようにな」
「……それは……」
「村の犠牲者の葬儀が行われた時、わしは軍の代表として出席したが……。その時会った、赤毛の少年の目を今でもはっきりと覚えておる。底知れぬ哀しみを、怒りでねじ伏せるような……そんな痛々しい眼差しをな。そんな目をさせたのは……やはり、わしなのだろう」
「……いや。そうではないのじゃ。アガットが本当に責めていたのは帝国軍でも、ましてや閣下でもない。他ならぬ自分自身だったのじゃ」
「……？」
「ど、どういうこと？」
「詳しいことは話せぬが……。アガットは、ミーシャの死を自分の責任のように感じていた。決してそんな事はないんじゃが、そう思い込んでしまったんじゃな。そして激しく自分を責めた挙句、村から飛び出してしまった。どうすればミーシャに償えるか、その答えを探すために。おそらくルーアンで荒れた日々を過ごしていたのも、その答えが見つからなかったからじゃろう」
「……」
「その後、良い導きがあって遊撃士の道を志したようじゃが……。どうやら未だ、あやつは答えを見つけてはおらぬらしい。１０年前と同じように深い哀しみと、自分への怒りに囚われてしまっておるようじゃ」
「……やり切れぬ話だ」
「……ねえ、将軍さん……。やっぱりあたしたちも、竜対策に協力させてくれない？」
「なに……？」
「遊撃士（あたしたち）には軍にはない強みが確実にある。フットワークの軽さとか、市民との距離の近さとか……。軍人さんが普段入らないような奥地にも出かけたりするしね。きっとお役に立ってみせるから」

「だが……」
「アガットが遊撃士になったのはそうした所に可能性を感じたからじゃないかと思うの。どうしたら妹さんに償えるか、その答えを見つける可能性を……。……その意味では、アガットが父さんに誘われて遊撃士になったのはすごく納得できると思う。父さんも、お母さんを亡くしたことがきっかけで遊撃士になったから……」
「……」
「遊撃士の可能性をもう一度、確かめるためにも……。何よりも、目の前で困っている人たちの力になるためにも……。あたしは、今の自分にできる精一杯のことはしておきたい。だから……どうか協力させてください」
「エステルさん……」
「ふふ、よく言ったな」
「モルガン将軍……今は軍も遊撃士も関係ありません。今一度考え直してはくれないでしょうか」
「……。１０年前、ボース地方にも遊撃士がいればあるいは……」
「へ？」
「いや……何でもない。多忙なカシウスに代わって今回の竜対策の指揮はわしが行うことになった。そろそろハーケン門に戻って軍議を始めなくてはならん。おぬしの提案はその時に検討させてもらおう」
「そ、それじゃあ……！」
「早とちりするでない。あくまで検討するだけだ。今夜中に、軍議の結果をボース支部に連絡しよう。約束できるのはそのくらいだ」
「……うん、分かりました」
「連絡、お待ちしてますぜ」
「それではわしはこれで失礼させてもらおう。村長殿、お邪魔したな」
「いやいや。また来てくだされよ」

モルガン将軍は控えていた兵士と共に退席した。
「さてと、あたしたちもそろそろボースに戻らなきゃ。アガットは……まだ動かさない方がよさそうね」
「あの傷だと2、3日は安静にした方がいいと思います。今夜はゆっくりと寝かせてあげましょう」
「うん、そうね。じゃあ、様子を見るついでにティータと話をしておきましょ。……村長さん。大変な時に申しわけないけどアガットの事、お願いします」
「フフ、あやつは元からわしらの身内じゃからな。それに大変と言っても10年前に較べればマシじゃ。死者が出なかっただけでも女神に感謝しなくてはのう」
エステルたちはライゼン村長に礼を言って、アガットの家に向かった。

第１２章　守るべきもの（１４）

―アガット宅
「あ、お姉ちゃん……」
ティータはアガットの介抱をしていた。
「ティータ、ご苦労様。どう、アガットの調子は？」
「うん……深く眠っているみたい。でも、顔色は良くなってきたし、ゆっくり寝たら大丈夫だと思うよ」
「そっか。それにしても……ここがアガットの家なんだ」
「小さくても暖かい、居心地の良いお家ですね」
「ここで妹と２人で暮らしてたってわけだな」
「あれ……？この写真って……」
エステルが窓際に置かれた写真を手に取った。
「これって、アガットが子供だった時の写真よね。それじゃあ、この女の子が……」
「うん……。ミーシャさんじゃないかな」
「可愛らしい女の子……。さぞかしアガットさんと仲が良かったんでしょうね」
「えへへ、そーだと思います。アガットさんもミーシャさんもとっても良い顔をしてるから……」
「うん……ホントそうね。歳は、アガットが１４くらいでミーシャちゃんが１２くらいかな？アガットってばいかにも腕白小僧って顔してるし。ふふ、ちょっと面白いかも」
「あまり人の聞いていないうちに言うのはよした方がいいですよ」
「ま、男の昔の写真をあまり詮索してくれるな。気恥ずかしいモンだからな」
「あはは……そんなもの？」
エステルは写真を置いた。
「それにしても……。どうしてアガット、妹さんのことを黙ってた

のかな？まるで生きてるかのように話してた気がするんだけど……」
「うん……でもね。考えてみたらアガットさん、ミーシャさんが生きているなんて一言も言ってなかった気がするの。『たまに顔を見せに帰る』ってお墓参りのことだったと思うし……」
「言われてみれば……。でも、あたしたちが勘違いしているってことはアガットにも分かっていたはずよね。どうして訂正しなかったのかな？」
「それは判らないけど……。でも、アガットさん、仕事が一段落したら紹介するって言ってくれてたから……その時に、ちゃんと本当のことを教えてくれるつもりだったと思うの」
「私たちに余計な心配をさせたくなかったのでしょう」
「そっか……そうだよね。ま、どういうつもりだったかはあらためて聞いてみるとして。あのね、ティータ。あたしたち、そろそろボースに戻らないといけないんだけど……」
「え……？」
エステルはギルドで王国軍の連絡を待たなくてはならないことをティータに説明した。
「そうなんだ……。……。あ、あのね、お姉ちゃん」
「おっと、みなまで言いなさんな。アガットの看病をするためにここに残りたいと言うんでしょ？」
「ふえっ……！？」
「むふふ、お姉さんを甘く見るんじゃないわよ。妹分の考えていることなんかぜ～んぶお見通しなんだから」
「あ、あう～……」
「ふふ、こちらのことはどうか心配しないでください」
「お前さんはアガットが早く回復できるよう心を込めて看病してやってくれ」
「ティータさんにしかできないことなのでよろしく頼みますね」
「お姉ちゃん……みなさん……。あのあの……ありがとうございま

すっ！」
「も～、別にお礼を言われることじゃないってば。アガットが目を覚ましたらさっきの話を伝えといてくれる？」
「あ、王国軍と協力して動くかもしれないってことだよね？」
「うん、それとアガットがまた無理をしようとしたら身体を張ってでも止めること。本調子にならない限り、絶対ベッドから出しちゃダメよ？」
「うん……がんばる！お姉ちゃんたちも……くれぐれも気を付けてね」

―ラヴェンヌ村　入口
「さてと、日が暮れてきたようだし、そろそろボースに戻るか」
「うん、そうね。夜には将軍から連絡が入るから急いでギルドに戻らなくちゃ」

―遊撃士協会ボース支部
「いやはや……本当にご苦労じゃったのう。しかし、アガットのやつにそんな過去があったとは……」
エステルたちはギルドのメンバーとルグラン爺さん、メイベル市長にラヴェンヌ村での経緯を話した。
「そうですわね……。お話を聞いてようやく合点がいきましたわ。あの時、アガットさんがどんな気持ちでいたのかを……」
「あの時？」
「１０年前……《百日戦役》が終わった直後に、アガットさんが、わたくしの家を訪ねてきたことがあったのです」
「ええっ！？」

「先輩のお家に、ですか？」
「ええ、当時市長だった父に凄い剣幕で喰ってかかったのです。ボース市長は、地方全体を総括する責任を兼ね備えている……。なのにどうしてラヴェンヌ村を見捨てたのかと」
「あ……」
「まだ子供だったわたくしは父を責めるアガットさんの顔を見てとても頭に来てしまって……。それでつい飛び出していって平手打ちをしてしまったのです」
「あちゃあ～……」
「ま、不幸な事件だったわけね」
「ええ……。結局、父はアガットさんの問いに答えることはできませんでした。代わりに、復興のための援助金を村に贈るつもりだと説明したんです。それを聞いたアガットさんは父に向かって拳を振り上げて……。……でも、結局振り下ろせずにそのまま走り去ってしまいました」
「そんな事があったんだ……。だからアガットさんと市長さん、お互い妙な雰囲気だったわけね」
「……お互い、あの時のわだかまりがあるのでしょう。でも、アガットさんの妹さんが戦争で亡くなっていたなんて……。わたくし……あの方を誤解していたようですわ」
「まあ、それについては言わなかった本人の責任もあるし。市長さんが気にする必要ないってば」
「そう……ですわね。……アガットさんのケガはどの程度のものなのですか？」
「あ、うん、心配しないで。2、3日もすれば動けるようになると思うわ」
「ふむ……不幸中の幸いと言うべきか」
「ええ……大事に至らなくてよかった。……」
「そういえば先輩……リラさんのご容態はいかがですか？」
「……それが……。ケガの手当ては済んだのだけれどまだ目を覚ま

してくれなくて……」
「そう……ですか」
「ふむ……何とも痛ましいことだね。美しく可憐なお嬢さんはそれだけで世の宝だというのに」
「ふふ……リラが起きたらそのように伝えておきますわ。それにしても……モルガン将軍の話は僥倖でしたわね。軍とギルドが互いに協力できたらこれほど心強いことはありませんもの」
「まだ決定したわけじゃないから安請け合いはできないけれど……。できる限りのことはさせてもらうつもりよ」
その時、ギルドの通信器が鳴った。
「こちら遊撃士協会、ボース支部じゃが……。おお、将軍閣下。お待ちしておりましたぞ」
「（来た来た）」
「（さて……どうなったかしらね）」
「ふむふむ……ほうほう。おお、そんな事になったとは！なるほど……明朝１０時、国際空港で。あい分かった。しかと伝えておきましょう」
「どうだった！？」
「王国軍は明日、飛行艦隊を使った竜の捕獲作戦を決行するらしい。お前さんたちもオブザーバーとして軍艦に乗ってもらいたいそうじゃ」
「飛行艦隊を使った捕獲作戦！？」
「やれやれ……ずいぶんと豪勢な話だねぇ。王国軍の最精鋭というわけか」
「オブザーバーということは実際には何もできないけれど……。近くで竜の様子が観察できるのは正直ありがたいわね」
「ああ、軍の作戦が失敗した時は俺たちの出番というわけだ」
「うーん……。気が抜けないことになりそうね」
「ふふ……。光明が見えてきましたね。……あ……」

突然、メイベル市長の身体がよろけた。
「せ、先輩……？」
「ど、どうしたの、市長さん？」
「いえ……何でもありませんわ」
「今のは立ちくらみだろう？相当、疲れているようだね」
「……」
「市長として今の現状を回復させようと奔走しているのは分かりますが、身体が資本ですよ？」
「そうね、無理しすぎるのは良くないわ」
「フフ……無理などしてませんわ。《百日戦役》の時、父はあらゆる手段を用いてボース市民を守り抜きました。時には、帝国軍を騙すような危険な取引も行ったそうです。その時と較べたら……大したことはしてませんから」
「市長さん……」
「メイベル先輩……」
「エステルさん、皆さん。どうかよろしくお願いします。ボース市民とラヴェンヌ村の方々の不安を取り除いてあげてください」
「うん……まかせて！」

第12章　守るべきもの（15）

「…ねえ、お兄ちゃん……。……お兄ちゃんってば……。えへへ、今度のお誕生日、楽しみにしててね？お兄ちゃんが喜びそうな物をプレゼントしてあげるから♪」

「へえ……。オレが喜びそうな物ねぇ。なんか美味いご馳走でも作ってくれるのかよ？」

「も～、なんでそうなるのよう。お誕生日プレゼントっていったら形が残る物に決まってるじゃない」

「そういうもんか？うーん、形が残ってオレが喜びそうな物……。狩りに使えるナイフとか」

「ナイフは村長さんからもらったばかりでしょー。答えは、わたしの手造りのアクセサリーでーす！まだ完成してないんだけどね」

「ちょ、ちょっと待てよ！アクセサリーって女じゃねえんだからさぁ」

「もー、お兄ちゃん、遅れてるんだからぁ。男の子だってワンポイントアクセサリーを付けたらとってもオシャレなんだよ？ぶあいそーなお兄ちゃんでもモテモテ間違いなしなんだから♪」

「あのなぁ……」

「……ダメ、かなあ？わたし、いつもお世話になってるお兄ちゃんにお礼がしたくて……。一生けんめい作ってるだけどな……」

「うぐっ……。カ、カワイイのとか派手なのじゃねえだろうな？」

「えへへ、心配ご無用よ。お兄ちゃんにも似合うようなシンプルでカッコイイ形だから。お兄ちゃん、背が高いし、すっごく似合うと思うんだぁ」

「あー、分かった分かった。せいぜい楽しみにしてるから頑張って造ってくれよな」

「えへへ……うんっ！ね、アガットお兄ちゃん」

「なんだ、ミーシャ？」

「いつもいつも、ありがとう。わたしのことを守ってくれて……」

「あ……」

アガットが目を覚ます。

「……夢、か。ここは……」

「……うん、こんなものかな」

どこからか少女の声がした。

「ミーシャ……？」

アガットが声がした方を向くと、

「アガットさん！？よかった……目を覚ましたんですね！？」

調理場でティータが料理を作っていた。

「チビスケ……」

「あのあの、身体の方はだいじょうぶですか……？」

「ああ、別になんとも――――痛ッ……」

アガットは体を起こそうとしたが、傷がうずくようだ。

「ダ、ダメですよ～！おとなしく寝てなくちゃ。まだ傷がちゃんと塞がってないんですから！」

「ヘッ、このくらいのケガ、どうってこたぁねえっての。ほっときゃすぐに治るって……」

「ダ、ダメぇ！」

ティータが両腕を広げてアガットがベッドから出るのを止めた。

「わたし、お姉ちゃんと約束したんですからっ！アガットさんが良くなるまで絶対ベッドから出さないって！」

「お、おい……」

「う～っ……」

「わかった、わかったつーの」

アガットはしぶしぶベッドに入った。

「……ほっ……」

「ったく……ムキになりやがって。そういや、もう夜なんだな。エステルたちはどうしたんだ？」
「えっと、お姉ちゃんたちは一旦ボースの街に戻りました。将軍さんとの約束があるらしくて」
「将軍との約束だぁ？」
ティータはアガットに、エステルからの伝言を伝えた。
「……なるほど、あのモルガンを動かしたか。それじゃあ、そろそろギルドに軍からの連絡が入ってる頃だな。よーし、さっそく俺も……」
「……（じー）」
「……っと思ったが、さすがに今日は遅すぎるな。明日の朝にでもボースに戻るとしようぜ」
「で、でも……」
「たっぷり寝たから体力もかなり戻ってきた。怪我もカスリ傷ばかりだから普通に動いてても勝手に治る。大丈夫、心配すんな」
「無理……してないですか？」
「あのなぁ、俺は遊撃士だぞ？結社だの竜だのを相手に無理できるほど図太くねぇよ。……これ以上、お前を危険な目に遭わせるわけにもいかねえしな」
「え……」
「ま、おせっかいなお目付役を怒らせる度胸はねえってことだ。素直に信用してくれや」
「も、もう……アガットさんたら……。でも本当に元気そーな感じですね？」
「だから言ってんだろーが。てめえの身体はてめえが一番分かってるんだっての」
「えへへ……よかったぁ。……あ……」
「なっ、なんだぁ！？」
「えくっ……うくっ……」
ティータがいきなりすすり泣き始めた。

「だ、だから本当に大丈夫だっての！女神に誓ってウソは吐いちゃいねえよ！」
「えくっ……ち、ちがうんです……。ホッとしたら……わたし……胸が一杯になっちゃって……。ううううっ……。うわあああああああん……！」
「あー……。ったく、仕方ねえなぁ」
アガットはベッドから出てティータの頭を撫でた。
「……悪い。色々と心配かけちまったな。１人で突っ走った挙句、勝ち目のないケンカをやらかして……。しまいにはお前にあんな無茶をさせちまうとはな」
「……そうだよぉっ！アガットさんのバカぁっ！わたし……わたし……ホントに心配したんだからぁっ！」
「ああ、そうだな……。本当に……大馬鹿野郎だぜ」
その後もティータは泣き続けた。

「……」
「……落ち着いたか？」
「……（コクン）ご、ごめんなさい。いきなり泣いちゃって」
「ったく、あんまり驚かせるんじゃねえっての。銀髪野郎とやり合うよりも肝が冷えたじゃねーか」
「えへへ……。あ、そうだ。あのあの、アガットさん。お腹空いてませんか？村長さんに材料をもらってスープを作ったんですけど……」
「おお、道理で良い匂いがすると思ったぜ。……って、ちょっと待て。どうして台所が……」
「え……？」
アガットが家の中を見渡した。
「よくよく見たら……たまげたな。所々、違うところもあるがあの

頃とソックリじゃねえか」
そして、アガットはベッドの脇にあった写真に気が付いた。
「おまけにこんな物まで……。ヘッ……よく残っていたモンだぜ」
「？？？」
「おっと、ワケ分からねぇか。……実はこの家はな、１０年前に全焼しているのさ」
「え……」
「帝国軍の焼夷弾が流れ弾になって降り注いで……あっという間に火がついて黒コゲになっちまった。その後、村長たちが物好きで建て直したのは知っていたが……。まさか、家具や内装まで揃えたとは思わなかったぜ」
「……」
「俺も今まで中に入ったことは無かったんだが……。さすがに、ここまでされたら礼を言うしかなさそうだな」
「……。……それ……じゃあ……。その時に……ミーシャさんは……」
アガットがベッドに腰をかけた。
「……。……はは、バレちまったか。……俺の誕生日のな、プレゼントを用意していたんだ。手造りの……俺に似合うアクセサリってな。山道に避難する途中で、あいつそれを取りに家に引き返して……。そこに焼夷弾が落ちた」
「……」
「助けた時は……ひどい火傷を負っていた。それでもプレゼントはしっかりと手に握りしめて……。金具はダメだったが石の部分は無事に残ってた。コイツがそうだ」
アガットが首に付けていた石のアクセサリーをティータに見せた。
「……あ……」
「七耀石でも何でもない、ただの綺麗な石コロさ。多分、この近くにある小川で見つけたんだろう。こんな物のためにって何度思ったか分からねえが……不思議とあいつを責める気にはなれなかった」

アガットが石を強く握りしめた。
「形見のつもりはなかったが……。戦争が終わって村を出て、荒れた暮らしをしていた時もこいつだけは捨てられなかった。ハハ……情けない話だろ？」
「そ、そんなこと……！」
「実際、情けないんだよ。コイツを眺めている間は俺は怒りを忘れられずにすんだ。あの時、あいつを助けられなかった不甲斐ないてめえ自身への怒りを……」
「あ……」
「そうしてかき立てた怒りを重剣に乗せて叩き付けることで……どうやら俺はてめぇ自身を保っていたらしい。……欺瞞に陥って前に進めない半端者……。ククク……あの野郎の言う通りじゃねえか」
「アガットさん……」
「いや……もっとタチが悪いか。都合の悪いことから目を逸らして逃げているだけのクソ野郎……。俺が一番嫌いな負け犬ってわけだ。ハハハ、コイツは傑作だぜ！」
「アガット……さん……。……」
ティータがアガットに近寄った。
「わたし……アガットさんの気持ちはちゃんとは分からないけど……。どうして苦しんでいるのか分かってあげられないけど……。だけど、ミーシャさんの代わりにこれだけは言わせて欲しいです」
「……？」
「……わたしの大好きなお兄ちゃんをバカにしないで！お兄ちゃんの良いところを、なんにも分かってないクセに！お兄ちゃんのことはわたしが1番良く知ってる！悪く言ったりしたらたとえお兄ちゃん自身でも許さないんだからあっ！」
「な……」
そこで、ティータがアガットに抱きついた。
「……あ……」
「わたし、ミーシャさんには負けるかもしれないけど……それでも、

アガットさんの良いところを一杯知ってます。だから、悪く言われたらすごくかなしーですし……。アガットさんのこと何も分かってないクセにってとっても腹が立ちます……。だから……だから……」

「……。……はは……参ったな……。ミーシャそっくりの口調で啖呵切りやがったと思ったら……。ガキのくせに、ずいぶんマセた真似をしてくれるじゃねーか……」

「こ、子ども扱いしないでくださいっ……。わたし……わたし……。ホントーに悲しくて怒ってるんですからあっ……」

「……そうか……。……。俺は俺のことを何も分かっちゃいない、か……。……まったくその通りだぜ」

アガットがベッドから立ってティータの頭を撫でた。

「あ……」

「ありがとよ、ティータ。よく気付かせてくれたな」

「アガットさん……」

「……てめえのチンケな物差しでてめえ自身を計っても仕方ねえ。だったらせいぜい足掻いてみるさ。怒りも哀しみも関係なく……答えが見つかるまで、真っ直ぐにな。へへ、そうすりゃあ……コイツを持ち続けている意味もいつかは分かるだろうさ……」

第１２章　守るべきもの（１６）

―翌朝　ボース市街

古代竜の騒動から一夜明けた朝、ボースマーケットに王国軍の付添いのもと、立入許可が下りた。マーケット関係者は壊れずに済んだ販売物などを運び出していた。

―遊撃士協会ボース支部

「そっか、もうマーケットの修復作業が始まってるんだ」

「昨日の今日だというのにずいぶん手回しがいいのね」

「うむ、メイベル市長がずいぶんと頑張っているようじゃ。ラヴェンヌ村への援助物資もすでに搬送されたらしい。みな、不安を感じながらも精一杯頑張っておるようじゃな」

「王都と連絡を取ったのですが昨夜、お祖母さまが声明を発表されたそうです。竜の脅威に対する速やかな対策と、被害地への援助を約束されました」

「そっか、さすが女王様！」

「フッ、帝国のお偉方にも見習ってほしいところだね。何しろ、民を安堵させるよりもパーティの方が大事と来ている」

「オリビエさん、自慢げに言うことではありませんよ……」

「ま、それを言うなら共和国も同じようなものだ。互いの縄張りを意識しすぎて役人の腰がどうも重いからな」

「ふふ、それが小国ならではのフットワークかもしれません。いずれにせよ……これで竜対策への準備は万全に整うと思います」

「まずは王国軍のお手並みを拝見ってわけね。えっと、あたしたちは国際空港にいけばいいのよね？」

「うむ、第１発着場に午前１０時にとのことじゃ。今が９時くらい

じゃから買物をする余裕はあるじゃろう」
「そっか……」
「でも、ボースマーケットはさすがに営業していないのよね？」
「マーケットの商人は現在、ホテルに避難しておる。商いもしておるそうじゃから買物はそこで済ませるがいい」
「ふふ、なるほどね」
「空港に向かう前に、訪ねてもいいかもしれんな」

―ボース国際空港
「あっと……遊撃士の皆さんですよね？まもなく、軍の艦艇がこちらに到着する予定です。向かって右手にある第１発着場でお待ちください」
受付のテッドが案内してくれた。

～第１発着場
「うーん、軍の飛行艇はまだ到着していないみたいね」
「一応、買物をするくらいの時間はあるみたいだけど……どうするの、エステル？」
「うーん、それじゃあ、軍艦が来るまで待たせてもらうことにしましょ」
エステルたちは発着場で待つことにした。
「迎えに来る軍の飛行艇ってあのゴツイ装甲の飛行艇よね？」
「警備飛行艇ですね。軍の主力艦艇ですから多分、そうだと思います」
「火力、積載量、機動性の全てにおいて高い性能を持つ王国軍の警備飛行艇……。１０年前に開発されてから様々な改良がなされたそ

うね？」
「はい、基本性能の向上に加えて様々な追加兵装を加えることが可能になっています。哨戒機、偵察機、攻撃機……。各艦艇の兵装を変えることで柔軟な艦隊編成を目指すという構想に基づいていると聞きました」
「ふむ……。さすがは飛行船先進国だ。共和国にも飛行艦隊はあるが、張子の虎に近いからなぁ」
「フッ、それは帝国でも同じさ。飛行艦隊もあるにはあるが、やはり主力は戦車師団だからね」
「私の国はもともと小国ですからね。軍事力はありませんよ。でも、戦争がない分それでいいですけどね」
エステルたちが色々と話しているうちに飛行場にアナウンスが流れた。
「――まもなく第1発着場に王国軍所属艦艇が着陸いたします。関係者以外の立ち入りはどうかご遠慮ください」
「おっと、来たわね。あ、あれ？なんか聞いたことのないエンジン音のような気が……」
「ふむ、普通のエンジンはもっと重低音がするはずですが……」
「これは……」
「あ！」
エステルたちが上を向くと、王室所属の巡洋艦、《アルセイユ》が降りてきた。
「あ、あはは……。あたしたちを乗せる船って《アルセイユ》のことだったんだ」
「昨日、ユリアさんに連絡した時はそんな話は出ませんでしたけど……」
「よぉ、エステル」

「みんな、久しぶりだね～！」
《アルセイユ》が到着して中から出てきたのはナイアルとドロシーだった。
「へ……」
「あなた達は……」
「へへ、妙なところで再会するじゃねーか」
「よろしくね～、エステルちゃんたち！」
「ど、ど、ど……どうしてナイアルたちがアルセイユに乗っているのよ！？」
「……それは私の方から説明させてもらうよ」
「あ、ユリアさん！」
「ユリアさん……どうして。昨日は、アルセイユが来るなんて教えてくれませんでしたよね？」
「ふふ、殿下を驚かせたくて秘密にしておりました。どうも申しわけありません」
そういうユリア大尉の口は笑っている。
「もう……ユリアさんったら。では《アルセイユ》を使うのはお祖母さまの計らいなのですね？」
「ええ、ご推察の通りです」
「えっと……どうして女王様が？」
エステルがわけが分からずにユリア大尉に尋ねた。
「名高き新鋭艦を投入すれば竜の出現に怯える人々の不安を減じられるのではないか……。そのようなご配慮というわけだ」
「あ、なるほど」
「フッ、さすがはアリシア陛下だ。そちらの記者諸君がいるのも同じような理由なのかな？」
「ま、そういうことだ。今度の竜の出現はインパクトが大きすぎるからな。ウチの報道を通じて国民の動揺を防ぎたいらしい」
「ナイアル殿、くれぐれも……」
「わーってますって。機密は記事にはしませんよ。ただ、公正さを

保つためにもある程度は突っ込みますぜ」
「……了解した」
「フン……。時間通りに来たようだな」
「あ、モルガン将軍……」
「同行を認めてくださって感謝しているわ」
「まあ、女王陛下のご意向もあったからな。誤解のないように言っておくが、おぬしらはあくまでオブザーバーの身にすぎん。基本的には、我々の作戦を眺めてもらうだけにしてもらうぞ」
「うん、それでいいわ。軍の作戦でケリが付くならそれはそれでオッケーだし」
「せいぜいお手並みを拝見させてもらいますぜ」
「フン……まあいい。姫様、どうぞこちらへ。ブリッジに案内しますゆえ」
「ですが……」
「王家の船に、姫様を客人としてお乗せするわけには参りませぬ。クルーの士気にも関わりましょう」
「……分かりました」
クローゼはモルガン将軍に連れられて一足先にアルセイユに乗り込んだ。
「うーん、相変わらず素っ気ないヒトよねぇ～。いい加減、遊撃士を認めてくれてもいいのに」
「フフ、頑固な方だから態度をいきなり変えるのを良しとしないのだろう。君たちの案内は私がさせていただくよ。あらためて――ようこそ、遊撃士諸君！王室親衛隊所属、巡洋艦、《アルセイユ》へ！」
エステルたちが乗り込むとすぐさまアルセイユは空へ飛び立った。
「遅かったか……！」

「い、行っちゃった……」
アルセイユが出発した後発着場に駆け込んできたのはアガットとティータだった。
「もう少し早めに起きて出発しとくんだったな。仕方ねぇ、竜の観察はエステルたちに任せておくか」
「そ、そーですね。でもでも……あうう。一度、《アルセイユ》に乗ってみたかったなぁ……」
「なんだ。またメカフェチかよ？」
「だってだって、見所が満載らしーんですよ？新型エンジン８基を格納するエンジンルーム……。高度な情報処理機能を備えた次世代型ブリッジ……。は～、あこがれちゃいます」
「ったく……。目をキラキラさせやがって」
「えへへ……。でも、アガットさん。これからどうするんですか？」
「そうだな……。まずは代わりの重剣を調達しておきたいところだ」
「あ、そっか……。あそこまで折れちゃったら修理もできなさそーですね」
「ああ、買い換えるしかねえだろ。南街区の武器屋で同じ物を調達しておくか」
「アガットさん！」
そこで、受付係のテッドが発着場にやってきた。
「よお、テッド」
「受付のお兄さん……？」
「あ～、やっぱり間に合わなかったみたいですね。今なら導力通信が通じますけど、《アルセイユ》に連絡しますか？」
「いや……別にいいさ。しかし、わざわざ俺たちが乗れたかを確認しに来たのかよ？」
「あ、それもあるんですけど……。実は、昨日の最終便でアガットさん宛の速達物が届いていたのを見つけたんです」
「俺宛ての速達物だと？」
「ええ、ラッセルという方からの小包なんですけど」

「へっ……」

「お、おじいちゃんからの？」

第12章　守るべきもの（17）

―アルセイユ

「――では、王国軍による、『竜捕獲作戦』の説明を始める」

会議室に集まったエステルたちはモルガン将軍から今回の作戦の内容を聞き始めた。

「本作戦は飛行艦隊によって遂行されるものだ。地上部隊はリベール各地の警戒・防衛に徹するのみとする」

「リベール各地ということはボース地方だけじゃないわけね？」

「昨日の一件で、竜の飛行能力がかなりのものであることが判明した。いつ他の地方が襲われぬとも限るまい」

「うん、確かに……」

「そこで今回の作戦には、この《アルセイユ》に加えて警備飛行艇12隻を投入する。これは全警備艇の5分の2に相当する数だ」

「あの警備艇が12隻も……」

「それは大盤振る舞いだねぇ」

「なるほど……凄まじいですね」

「――ユリア大尉」

「は」

ユリア大尉がモニターを表示させた。

「これは……今回の作戦行動図ですな」

「わわっ……」

モニターにリベール王国の全土が表示された。

「うむ、その通り。今、この《アルセイユ》はボース上空を巡航しておる。本作戦で《アルセイユ》は作戦司令部として機能する。そして実際の哨戒活動は……広域レーダーを搭載した警備艇8隻に当たらせる。竜が上空に現れたら確実に捕捉できるはずだ。そして竜が発見された場合……警備艇が急行し、ガトリング砲で牽制しながら竜をヴァレリア湖上空に誘導する。そして竜発見と同時に、麻酔

弾を搭載した警備艇がレイストン要塞から緊急発進し……。――追い立てられた竜を迎撃。ありったけの麻酔弾をもって竜を沈黙させるというわけだ。これが『竜捕獲作戦』の概要だ」

「うわ～……」

「さすがにギルドとは作戦のスケールが違うわね……。竜が麻酔弾で倒れなかった場合、捕獲から退治に切り換えるのかしら？」

「うむ……。全艦隊による集中砲火をもって撃破するしかあるまい。女王陛下は、退治よりも捕獲を優先して欲しいとの意向だが……」

「へ……どうして？」

「竜といえば、伝承にも登場する極めて珍しい生物だからな。退治は忍びないと仰っていた」

「そうですね……。《結社》に操られている可能性も高そうですし……」

「そっか……確かに。そ、そういえば！竜を操っていたレーヴェって男、《ゴスペル》を持ってたわよ！？」

「うむ……。導力停止現象の危険だな。ラッセル博士によれば導力停止現象の範囲はおよそ５アージュだという。故に各艦艇には１０アージュ以上、竜に近づかないように徹底させる。そうすれば問題ないはずだ」

「な、なるほど……」

「うーん、恐れ入った。万全の対策というわけだね」

「我らも、伊達に《百日戦役》を経験したわけではないからな。まあ、この作戦が失敗したらさすがに打つ手に困るところだ。その時はよろしく頼むぞ」

「殊勝なこと言っちゃって……。作戦が失敗するなんて思ってもいないんじゃない？」

「フフン、当たり前だ。この作戦、問題があるとすれば竜が発見されるまで辛抱強く待たねばならんことくらいだからな」

「確かに……。無駄足だった場合はどうするの？」

「いや、これまでの《結社》の手口を考えたらそれはないだろう。

必ずや、あの竜を使って何かしでかすつもりに違いない」
「私もジンさんの通りだと思いますよ。剣帝レーヴェが『最後の実験を始められそうだ』と言ってましたからね」
「そっか……確かにそうね」
「それでは遊撃士諸君……。竜が発見され次第、アナウンスでお知らせする。それまでは艦内でゆっくり寛(くつろ)がれるといいだろう」

～シェラザード
「あ、シェラ姉。こんなとこにいたんだ」
「あら、エステルは散歩？」
「うん、そんなとこ。風にでも当たってたの？」
「ええ、いい天気だし、くつろがせてもらってるわ。出番に備えて休むことも私たち遊撃士の仕事よ。特に今回みたいに時間が空くときは尚更ね」
「うん、それは分かってるけど……。シェラ姉は今回の作戦が失敗すると思ってるの？」
「さあて、どうだろ……。ま、常識的に考えれば成功する可能性の方が高いわね。なにしろ、虎の子の警備艇が１２隻も出撃してるんだもの。どれほど古代竜が凄くても、逃げ切れるとは思えないわ」
「うん……そうだよね。今回はモルガン将軍もすごく自信ありげだったし」
「でも、それはあくまで表向きの顔に過ぎないわ。遊撃士を乗せることには少なからず反対があったはず。それを振り切ってまで同乗を許可したってことは……」
「……モルガン将軍にも不安があるってこと？」
「そう考えるのが自然でしょう。ま、だからこそ今はリラックスってわけよ」
「ふう、なるほど納得。あたしも散歩を続けてこよっかな」

「ふふ、そうなさいな。王家の船に乗る機会なんてそうそうないんだから」
「ん……そうだよね。じゃ、シェラ姉」
「ええ、また後でね」

～クローゼ
「あら、エステルさん。もしかして落ち着かないんですか？」
「うん、ちょっとね。じっとしてられなくて」
「そういえば、定期船でもいつもお散歩されてましたね」
「あはは……。言われてみれば確かに。行儀よく座ってるのってなんか窮屈なのよねえ」
「クスクス……。エステルさんらしいです。でも、《アルセイユ》ではそんな心配はいりませんよ」
「え、どういうこと？」
「王家の所有とはいえ、この船は巡洋艦ですから……。一般の飛行客船とは運動性能が段違いなんです。最大船速での飛行となれば立っているのも無理なくらいです」
「そ、そんなにすごいの！？」
「ふふ、きっと驚かれますよ。まるで嵐に遭ったようですから」
「そ、そうなんだ……。じゃあ、さながら今は嵐の前の静けさってトコね」
「ええ、仰るとおり……つかの間の平穏かもしれません。艦内をご覧になるなら、今の内だと思いますよ？」
「あっと、言えてるわね。じゃ、あたしは散歩を続けるとするわ」
「はい、では後ほど」

～ジン

「よう、エステルじゃないか。どうした、こんなとこまで」
「ジンさんこそ。こんなとこで何してるの？。あ、ひょっとして昼寝とか？」
「はは、そいつも悪くないが、少し稽古でもしようと思ってな。狭い所でじっとしているのはどうも落ち着かなくていかん。そういうお前さんも、散歩か何かの途中のようだが」
「あたしもじっとしてるのは何だか苦手なのよねぇ……」
「でも、稽古って言っても……」
エステルが客室を見渡す。
「……運動するには狭すぎるんじゃない？」
「なあに、動くばかりが稽古というわけじゃない。これだけの広さがあればできることはいろいろある」
「へ～、たとえば？」
「瞑想や呼吸法はもちろん、型の復習も重要な鍛錬になる。とかく俺たち遊撃士は実戦ばかりで崩れがちだからな。折に触れて基本に戻り、自らを正すことも重要だぞ」
「確かに、ここのところ型稽古なんてしてないわね。ジンさんに言われると何だか焦っちゃうかも」
「はは、そう気にするな。今のはあくまで一般論さ。だが、思うところがあるなら取り組んでみて損はないぞ。この俺でよければ、喜んで対戦の相手を務めよう」
「えへへ、その時はよろしくお願いするわね」
「おう、楽しみにしているぞ」

～オリビエ
「おや、エステル君。艦内の散策中かい？」
「ま、そんなとこだけど……」
そこで、エステルはオリビエの手の中のワインに目をやった。

「って、アンタ……作戦前に何飲んでるのよ」
「フッ、これは前祝の杯だよ。天才詩人と伝説の竜との運命的邂逅を祝っているのさ」
「天才詩人はともかく……伝説の竜……ねぇ。もしかして帝国にも竜の話があったりするの？」
「ああ、もちろんあるよ。ボース地方に程近い南部では竜の目撃談や伝承も多くってね。《百日戦役》の前には帝国科学院の呼びかけで調査隊が計画されたこともある」
「へぇ～、本格的じゃない。やっぱり帝国人にとっても古代竜は未知の存在なのね」
「ふむ、おおむねはそう考えて正しいだろうが……。だが、帝国人の場合はもっと割り切った考え方をするかな」
「割り切った考え……？」
「リベール王国と比べるとずいぶんと即物的なんだよ。今回の事件が帝国で起きていれば即座に捕殺の命が下っただろう。外敵には敢然と立ち向かうのが帝国流のやり方だからねぇ。竜だろうがなんだろうがお構いなしに叩き落とすはずさ」
「な、なんか殺伐としてるわねぇ」
「武を以(も)って国を安んずるがエレボニア帝国の流儀だからね。愛と平和の使者たる詩人にとってはいささか悲しいところではあるよ」

～レイン
「おや、エステルさん。どうしました？」
「うん、何か落ち着かなくて散歩してるのよ」
「そうですか。この船は素晴らしいですね。王国最新鋭の巡洋艦に乗ることができるなんて思ってもいませんでした。これが、作戦中でなければどれだけ素晴らしかったでしょうかね」
「うん、そうね。レインさん……今回の作戦、成功すると思う？」

「どうですかね。普通に考えたら、あの作戦は完璧だと思います。しかし、相手は未知の古代竜……。どうなるか先が見えませんね」
「そっか……」
「そうそう。エステルさんに謝っておくべきことがありました。あの時、1人で行動してしまったこと、すいませんでした」
「えっ……」
「私1人でアガットさんを助けるつもりだったのです。剣帝レーヴェはあまりにも強い……。エステルさんたちに危険な目に遭わせたくなかったのです。しかし、それが裏目にでてしまいました。ティータさんまで巻き込むことになるとは……。これではS級遊撃士失格ですね」
「そ、そんなことないわよ。今までレインさんにはたくさん助けられてきたし、色々アドバイスをもらったわ。しかも、あの状況でレインさんがいなかったら、アガットがやられていたかもしれない……。決して、間違った行動じゃないわ」
「エステルさん……ありがとうございます。しかし、剣帝レーヴェは非常に脅威です。彼が本気を出せば、私たち全てが一斉に取りかかっても勝てるかどうか分かりません」
「そ、そんなに……」
「エステルさん、これからが《結社》が本格的に動き出すと思います。彼の言う通り、心すべき時だと思います」
「うん……わかったわ」
「今は目の前の竜に集中しましょう。それでは、また後でお会いしましょう」
「うん、それじゃあ」

第12章　守るべきもの（18）

エステルがアルセイユ内を歩き回っていると、ユリア大尉のアナウンスが流れた。
「哨戒艇、《メルダー号》より連絡！マルガ鉱山上空にて飛行中の竜を発見したとのこと！全クルーは直ちに持ち場へ向かえ！ギルド関係者はブリッジに急行されたし！」
「――来たわね！」
エステルはブリッジへと急いだ。

―アルセイユ　ブリッジ
「ねえ、どうなった！？」
「聞いての通り、竜はマルガ鉱山上空に現れた。ディスプレイを見るがいい」
モルガン将軍がディスプレイを操作した。現在の竜と哨戒機の場所が表示された。
「マルガ鉱山……ロレントに現れたんだ！」
「よく見つかったわね……」
「迎撃地点はどこに設定されますか？」
ユリア大尉がモルガン将軍に尋ねた。
「そうだな……。湖に誘導するとはいえ、王都に近づけるわけにはいかん。――迎撃地点はレナート川の河口付近に設定！哨戒艇は川沿いに竜を誘導！攻撃艇は直ちに発進せよ！」
「アイサー！――こちら《アルセイユ》。作戦行動中の全艦艇に告げる。迎撃地点はレナート川の河口付近。全哨戒艇はフォーメーションBで川沿いに竜を迎撃地点へ誘導。全攻撃艇は直ちに発進し、迎撃地点に急行せよ」

ユリア大尉がモルガン将軍の作戦を無線で告げた。

―レイストン要塞

カシウスは攻撃艇が発信するのを見送っていた。

「……まさか彼が奴等の手に落ちるとはな。いっそ俺の手でケリを……。……いかんいかん。ここで俺が動いたら同じことの繰り返しだ。フフ、俺も彼も同じ立場というわけか。女神(エイドス)よ……混迷の大地に立つ我らをどうか導きたまえ」

―アルセイユ

「全攻撃艇、発進しました。配置完了の予定は１２：２０です」

「うむ……。《アルセイユ》発進。迎撃地点の南西へ急行せよ」

「アイサー。各部への導力伝達を再開。《アルセイユ》発進。レナート川河口南西へ急行せよ」

数分後、レイストン要塞からの攻撃艇とアルセイユが迎撃地点で合流した。

「全攻撃艇、所定の配置に付きました。麻酔弾の装填も完了」

「よし、後は竜が現れるのを待つのみだ。全攻撃艇、撃ち方用意。号令と共に攻撃を開始せよ」

「アイサー！」

「ゴクッ……」

「いよいよですね……」

見ているエステルたちにも緊張が走る。

そして数分後、アルセイユと攻撃艇の前に竜が現れた。
「撃てい！」
モルガン将軍の号令と共に攻撃艇から無数の麻酔弾が竜に浴びせられた。
竜はそれらを身に受け、河口に身を落とした。

「うむ……！」
モルガン将軍がその様子を見て満足げに頷いた。
「や、やった！？」
「……見事だわ」
「ふーむ、さしもの竜も手も足も出なかったか……」
「やれやれ……。スペクタクルだったねぇ」
「……」
エステルたちが喜ぶなか、レインだけは訝しげな顔をしていた。
「あれ、どうしたの、レインさん？」
「いえ、何でもありませんよ。それにしても見事なものでしたね」
「――ヴァレリア湖上に竜が撃墜したのを確認！このまま予定通りワイヤーで拘束しますか？」
「うむ……。安全が確認され次第、《アルセイユ》も降下せよ。着水して調査を行うぞ」
「アイサー！」

―ヴァレリア湖上

「《アルセイユ》着水完了。竜の反応、未だありません」
「よし……。この目で確かめるとするか。大尉、付いてくるがいい」
「は！」
「あ、ちょっと……」
モルガン将軍とユリア大尉がブリッジから出ていくのをエステルが引き留めた。
「ふふ、君たちも来るといい。伝説の古代竜だ。滅多に見れる機会はないだろう」
「う、うん」

―アルセイユ　艦首
艦首ではドロシーが早くも古代竜を撮影していた。
「ふわ～、おっきいですねぇ。でもこの子、ハンサムなのに眠ってたらもったいないかも～。早く目を覚まさないかな～」
「だ～から、目を覚ましたらヤバイんだっての。しかし……何ともたまげた生物だぜ」
エステルたちも艦首に出て古代竜を見た。
「うわ～っ……」
「これは……凄いわね」
「あ、エステルちゃん！」
「へへ、お前らも来たのか」
「殿下……あぶのうございますぞ。どうか船内にお戻りください」
「ふふ、大丈夫です。それにしても、間近で見ると本当に大きな生物ですね……」
「これって、本当に眠ってるの？」
「心音は確認されたから死んではいないはずさ。まあ、普通の魔獣なら千匹は眠らせられる量の麻酔が撃ち込まれているからね。簡単には目を覚まさないだろう」

「そっか……。あれ、そういえば……あのレーヴェって男はどうしちゃったのかしら？」
「ふむ、どこかに身を潜めている気配はなさそうだが……」
「『実験』の要となる《ゴスペル》はあのレーヴェ君が持っていたはずだね。それがここにないということは……『実験』を放棄したということかな？」
「竜を追っていた哨戒艇によると人の姿は確認できなかったそうだ。最初から乗っていなかった可能性は高いかもしれない」
「ふふ、無理もない。おそらく我々の作戦を知って恐れをなして逃げたのだろう」
「うーん、そんな殊勝な男とは思えないんですけど……」
「そうね……。油断はしない方がいいわ。ところで竜はこの後どこに運ばれるのかしら？」
「とりあえず、この状態のままレイストン要塞まで曳航（えいこう）させる。後の事は、陛下やカシウスと相談して決めるつもりだ」
「なるほど」
「あれ～……？」
古代竜を見続けていたドロシーが声を上げた。
「なんだ、ドロシー？」
「また何か見つけたの？」
「うーん……気のせいかもしれないけど～。この子の額の部分、変な風に盛り上がってない～？」
「へ……」
エステルたちが古代竜の額に注目した。
「ホントだ……。丸く盛り上がっているわね。切れ目があるみたいだから、ひょっとして目だったりして――」
「まさか……！皆さん、古代竜から離れてください！」
レインが声を上げた時、古代竜の額の切れ目から《ゴスペル》が現れた。
「！！！」

「まさか……！」
「そいつが本命か！」
気付いた時には遅く、《ゴスペル》から導力停止現象を引き起こす黒い光が放たれた。
「くっ……」
「ぬうっ……！？」
そして、古代竜の目が覚め、大空へと飛び去って行った。
「ああっ！？」
「おのれ……逃がすものか！《アルセイユ》、緊急発進だ！」
「了解（ヤー）！」

アルセイユが緊急発進し、古代竜に追い付き、誘導弾を撃つが全て外された。
「ダメです！誘導弾、ロックしません！熱源は探知しているのに！」
「何らかの妨害波を発しているということか……。ならば主砲に切り換えろ！」
ユリア大尉が号令したとき、
「竜の速度、さらに上昇中……！時速２３００セルジュ――――２４００、２５００、２６００……」
観測士エコーが竜の速度上昇を伝えた。
「クッ、何という化物だ。警備艇の最高速度を軽く上回るとは……」
「ですが、新型エンジンを搭載した《アルセイユ》なら追撃可能です！――全クルーに告げる！これより《アルセイユ》は最大戦速（３２００ＣＥ／ｈ）まで加速を行う！各員、Ｇに備えよ！」
「え、え、どういうこと！？」
「急加速のＧがかかります！しゃがんで姿勢を低くしてください！」
どうやら、急加速による慣性力に備えろということらしい。
「！分かった！」

エステルたちはかがんで姿勢を低くした。
「――加速開始！絶対に竜を逃がすな！」
「アイマム！」
操舵士は加速レバーを一気に上げた。とたんに後ろに思い切り引っ張られるような力がエステルたちを襲った。
「わわわっ……」

しばらくして、アルセイユは古代竜の間近まで迫ったが、古代竜は雲の中に潜ってしまった。
「……竜、高度を下げました。このままではロストします」
「ギリギリまで食らいつけ！……くっ。まだ雲は切れないのか！」
通常なら雲はすぐに切れるはずなのだが、いっこうに切れなかった。
「待って！ここはどの辺り！？」
シェラザードが何かに気付いたようだ。
「！？」
ユリア大尉がモニターにアルセイユの場所を示した。
「霧降り峡谷か……！」
「ひょっとしたらもう霧の中に入ってるんじゃ！？」
「うぬっ……」
「竜、高度１２００アージュまで降下！１１００、１０００、９００……．……ロストしました」
「くっ……」
「ユリアさん……」
「み、見失っちゃったの？」
「……ああ。霧降り峡谷の北西部……霧の深い難所に逃げられた」
「……例の空賊アジトにアルセイユを停められるか？」
「いえ……アルセイユの大きさでは不可能です」
「そうか……。――作戦終了。後続している哨戒艇に峡谷周辺を

監視させろ。《アルセイユ》はいったんボースに戻せ」

第12章　守るべきもの（19）

―アルセイユ　作戦室

王国軍による作戦が失敗したため、エステルたちの出番となった。

ボース市に到着した後、今後の方針を立てるため、ユリア大尉やモルガン将軍と話し合うことにした。

「竜が逃げ込んだのは霧降り峡谷の北西部……空賊アジトがあった場所より奥にある霧の深い難所です」

「つまり、飛行船を使った捜索は難しいということですね？」

「残念ながら……。地上から捜索部隊を派遣するしかないでしょう」

「ちょ、ちょっと待って！大勢の兵士を差し向けたらまた竜に逃げられちゃうわよ！」

「そうね……。ここは少人数で捜索して竜のスキを突いた方がいいわ」

「つまり、この先はおぬしらに任せろということか？」

「難所の捜索は、軍人よりも我々の方が慣れていますからな。適材適所というやつでしょう」

「……ふむ……。だが、おぬしらとて捜索するアテはあるのか？たしか、峡谷の北西部には道らしき道もなかったはず。行き当たりばったりでは何日かけても終わりはせんぞ」

「そ、それは……」

「……そいつは任せとけ」

突然、作戦室に入ってきたのはアガットとティータだった。

「おぬしは……」

「アガット、ティータ！？」

「よお、邪魔するぜ」

「えとえと、失礼します」

「どうしてここに……。そ、それよりももう動いて大丈夫なの！？」

「怪我の方は心配ねぇ。ただのカスリ傷だからな」

「……ティータ、ほんと？」
「う、うん……。アガットさん、無理はしてないと思うよ」
「そっか……だったら良いんだけど」
「フン、体力だけは有り余っているようだな。任せろと言っておったが、作戦の顛末は聞いているのか？」
「ああ、ルグラン爺さんから大まかなことは聞いてきた。竜は霧降り峡谷の北西部に消えたそうだな？」
「うん、そうだけど……」
「霧降り峡谷について詳しいヤツを知っている。そいつに頼めば、竜の隠れた峡谷の北西部に渡れるだろう」
「ほう……」
「そ、それって誰なの？峡谷の東側に住んでいるウェムラーってオッサンだ。昔、道もない北西部に渡ったことがあるらしい」
「フッ、さすが遊撃士。日頃の地道な情報収集が実を結んだということだね」
「……。しかし、実際に竜を見つけたらどうするつもりだ？おぬしらだけで退治できるような生易しい相手ではないぞ」
「竜の額には《ゴスペル》が仕込まれていたそうだな？まずはそいつを何とかするのが先決だろう」
「ふむ……」
「考えてみれば、あれのせいで竜が暴れたかもしれないのよね。今までにも《ゴスペル》は色々な異常現象を起こしているし」
「《ゴスペル》を無力化できれば竜の暴走を止められるということですね。確かにそれは頷けますが……」
「《ゴスペル》の無力化というと、ケビン殿が使った方法を思い出すな。あの時はアーティファクトを《ゴスペル》に叩き付けることでショートさせていたが……」
「問題は、どう無力化させるかですね。私たちにはアーティファクトなどありませんし……」

「そんな悠長なマネはしないさ。フレームごと《ゴスペル》を破壊するだけだ」
「なに……！？」
「ちょ、ちょっと待って！《ゴスペル》を壊すってそんなこと簡単にできるの？たしか物凄く硬いフレームで包まれてるんじゃなかったっけ？」
「それについてもなんとか目処が付いた。……コイツだ」
アガットが自分の重剣を見せた。
「それって……」
「根元に何かのユニットがはめ込まれているみたいね」
「今朝、ラッセルの爺さんが定期便で送ってきた新発明……。《ゴスペル》のフレームを破壊するためのユニットだ」
「ええっ！？」
これには全員が驚いた。超合金のカッターでも傷一つ付けられなかった《ゴスペル》を破壊することができると聞いたからだ。
「ふむ……。一体どういう仕組みなんだい？」
「えとですね……。このユニットが、フレーム素材のみ崩壊させられる波長の高振動をブレード部分に与えるらしいです。振動が原因で2、3回使ったら壊れちゃうそうなんですけど……。うまく刀身を食い込ませられれば《ゴスペル》を破壊できるそーです」
「よ、よく分からないけどメチャメチャ凄そうな発明かも」
「フッ……さすがは王国一の天才学者だ」
「さっきティータに付けてもらったばかりだが、どうやら問題なく動きそうだ。あとは実際に竜を捜しだして額に喰らわせてやるだけだが……。どうだい、将軍さんよ？」
「まったく……。そこまで用意されたのでは認めてやるしかないではないか」
「それじゃあ……」
「俺たちに任せていいんだな」
「うむ……。やれるだけはやってみるがいい。ただし念のため、飛

行艦隊を峡谷の周りに展開しておく。おぬしらが竜を逃がした時、即座に対応できるようにな」
「へッ、上等だ。ムダ弾を撃たせないようせいぜい気張らせてもらうぜ」

「この後、《アルセイユ》はボース地方の上空を巡航する。竜の居場所が特定できたらよろしく連絡をお願いしたい」
「うん、任せて」
「竜の居場所が分かったらジークに伝えてもらいます。私が同行していない場合も、エステルさんの近くにいるようお願いしておきましたから」
「殿下、同行するならばくれぐれもお気を付けてくだされ。……エステル・ブライト。それからアガット・クロスナー」
「へっ……？」
「……なんだ？」
「もし竜が峡谷から逃げたら軍が責任をもって何とかしよう。もう2度と、リベールの民を傷付けるようなことはさせぬ。だから、失敗を恐れずにやれるだけやってみるがいい」
「モルガン将軍……」
「……まさかアンタからそんな言葉が聞けるとはな。どういう風の吹き回しだい？」
「なに、ただの社交辞令だ。……大尉、出発するぞ」
「は！」
アルセイユは巡航に入るため、ボース発着場を飛び立っていった。

―ボース市

「さてと、霧降り峡谷にいるウェムラーって人を訪ねるのよね？」
「ああ、峡谷の東側の山小屋に住んでいるはずだ。それよりも……。……やっぱり付いて来るつもりか？」
アガットは心配そうにティータを見た。
「えへへ、もちろんです。振動ユニットが故障したらその場で修理できますし……。飛んでいる相手だったら導力砲が役に立つと思うんです」
「チッ……しゃあねえな。あまり無理をして足を引っ張るんじゃねえぞ」
「はいっ」
「な、なにお姉ちゃん？」
「……何だってんだ？」
「いや～、なんと言いますか。今まで以上に馴染んでるなぁって思って」
「くす……良い事があったみたいですね」
「あなた達が言わない限り、こちらも昨夜何があったかは聞きませんから安心してくださ い」
「ふえっ……？」
「な、なに言ってやがる」
「あはは、焦ってやんの。でも……気持ちの整理は付けられたみたいじゃない？」
「……まあな。もう1人で突っ走って自滅するようなマネはしねえさ。またどこぞのチビスケに怖い顔で叱られたくねえしな」
「あう……アガットさんったらぁ」
「ふふ……そっかそっか。よーし、それじゃあ霧降り峡谷に急ぎましょ！」
「うんっ！」
「おう！」

第12章　守るべきもの（20）

―霧降り峡谷
霧降り峡谷に着いたエステルたち。
「さてと……。まずは峡谷の東側にある山小屋を訪ねるのよね？」
「ああ、急ぐぞ」

―霧降り峡谷東部　ウェムラーの山小屋
「む……お前たちは」
「あのあの、お邪魔します」
「えっと、あたしたち遊撃士協会の者なんですけど」
「ああ、そのようだな。そこにいる赤毛の小僧はいささか知らんわけでもない」
「フン、小僧とは言ってくれるじゃねえか。久しぶりだな、ウェムラーのオッサン。元気にしてたかよ？」
「ふふ、まだまだ若い者に負けるつもりはないからな。それよりも、どうした？何か用があって来たようだが」
「うん、実は……」
エステルたちはボース地方に現れた竜が峡谷の北西部に消えた事を説明した。
「フン……なるほどな。道理で先刻まで外が騒がしかったわけだ」
「なあ、オッサン。あんた、前に北西部に渡ったとか言ってたよな？俺たちに、そのルートを教えてもらいてえんだ」
「……断る」
「ええっ！？」
「ちょっと待て！いきなり断るはねえだろ！？」
「1つ聞くが……お前たち、竜を見つけていったいどうするつもり

だ？」
「う、うーん……。操られているだけみたいだから、できれば退治はしたくないけど……」
「だが、《ゴスペル》を破壊しても暴れたら退治するしかねえだろ。背に腹は替えられねえってヤツだ」
「やれやれ……話にならんな。どうやら竜を、図体のでかい魔獣と同じくらいにしか考えていないようだが……。あれは断じて魔獣などではない。《大崩壊》前から生き続けている神獣というべき存在なのだぞ」
「《大崩壊》前からって……。ええっ！？」
「そ、それじゃあ１２００年以上前から……」
「はは、んなワケはねえだろ。長生きはしてるみてえだがいくらなんでも……」
「いえ、あり得ると思えます。竜の目撃記録は、９００年前のリベール建国まで遡りますから。当時は今よりも頻繁に姿を現していたそうです」
「私も文献で見たことがあります。何でも、女神の使いだとか」
「……マジかよ」
「た、確かに普通の魔獣とは一緒にしない方がいいかも……」
「そんな存在を退治するなど自殺行為以外の何物でもない。まあ、王国軍に任せて大人しくしていることだ。軍もアテにはならんが、あの男ならあるいは……」
「えっ……？」
「……とにかく、若い連中を死地に追いやる趣味はない。悪いが力にはなれんな」
「で、でも……」
「……。……なあ、オッサン。アンタの気遣いは有り難いが、ちょいと的外れじゃねえか？」
「……む」
「俺たちはすでにシャレにならない敵には何度だって出くわしてい

る。たとえば情報部だったり、古代の人形兵器だったりな。だが、そいつらも危険だからって見過ごせる相手じゃなかった。無い知恵絞りながら力を合わせて何とか乗り越えてきたんだ」

「……」

「今度の竜だって同じことだ。見過ごせる相手じゃねえが闇雲に突っ込むつもりじゃねえ。だから……頼む。俺たちに手を貸してくれ」

「アガット……」

「アガットさん……」

「ふふ……。なかなか良い面構えをするようになったじゃないか。そこまで言われたら俺も手を貸すしかなさそうだ」

「！」

「ほ、ほんと！」

「あ、ありがとーございます！」

「なに……大したことをするわけじゃない。俺は準備のため、一足先に向かうとしよう。西側の一番奥だから後から追いかけてくるがいい」

「後から追いかける？」

「おい、北西に行けるルートを教えてくれるんじゃねえのか？」

「教えるだけではたぶん見当も付かんだろう。とにかく、峡谷の西側に出てから歩いて行ける一番奥に来るんだ。待ってるぞ」

ウェムラーは先に行ってしまった。

「ちょ、ちょっと……！」

「……仕方ねえ。オッサンの言う通り、行ってみるしかねえだろう」

「そ、そうね……。えっと、峡谷の西側に出てから歩いて行ける一番奥だっけ？」

「ああ。入り組んだ地形だから迷わないように気を付けるぞ」

―霧降り峡谷西部　最奥

「……何とかここまでたどり着けたようだな」
「オッサン……」
「ひょっとして、その橋を渡ったら……」
ウェムラーは先回りして橋をかけていてくれたようだ。
「ああ、まっすぐ進めば大きな岩山があるはずだ。中は空洞になっていて、奥に進んでいけば上の方に登れるようになっている。竜はその先にいるだろう」
「そっか……」
「恩に着るぜ、オッサン」
「さてと……。俺はいったん小屋に戻るぞ。そうそう、岩山の空洞には危険な魔獣が徘徊していたはずだ。危なくなったと思ったら、思い切って引き返すがいい。小屋に来れば休ませてやろう」
「うん、ありがとう！」
「せいぜい気を付けるさ」
ウェムラーが小屋に帰るのを見送り、エステルたちも北西部へと足を進めた。

第12章　守るべきもの（21）

―霧降り峡谷北西部
「ここが竜のいる岩山……」
エステルたちが道なりに進んでいると洞穴の穴を見つけた。
「ごくっ……」
「ヘッ、どうやら気合いを入れる必要がありそうだな」
「あ、待ってください。そろそろ《アルセイユ》に連絡した方がいいと思います」
「そっか、それがあったわね」
クローゼがペンと紙を取り出し、現状についてしたためた。
「ジーク、来て！」
「ピュイピュイ♪」
「ふふ、ご苦労様」
「ありがとね、ジーク！」
「はあ、何度見ても驚きますね」
「ったく、相変わらず常識外れなハヤブサだぜ」
クローゼはジークの脚にメモを括り付けた。
「それじゃあ、ジーク。《アルセイユ》への連絡、お願いするわね？」
「ピューイ！」
ジークは頷くと、アルセイユへと向かっていった。
「さてと……。これで準備は終わりですね」
「うん……。気合いを入れていきましょ！」
「うんっ！」
「おお！」
「はい！」
エステルたちは洞窟の中へと踏み入った。

―ボース地方　上空
「ジーク！」
「おお、来たか！」
ボース地方上空で待機していた《アルセイユ》のもとにジークが到着した。
「ピューイ！」
ユリアはジークの脚からメモを取り外した。
「……エステル君たちが無事、竜のいる岩山に到達しました。これから内部を通り抜けて竜のいる場所を目指すそうです」
「そうか……。……全艦艇に通達！徹甲弾を装填した上で所定の位置に待機せよ！万が一、竜が逃げ出しても絶対に包囲を突破されるな！」
「イエス・サー！」

―霧降り峡谷北西部　最奥頂上
霧降り峡谷北西部を登り続けたエステルたち。ついに、竜の棲む洞穴を見つけた。
「（ああっ……）」
「（いたか……！）」
「（ね、眠ってるのかな？）」
「（……そうみたいですね）」
「（それに、剣帝レーヴェの気配も感じられません）」
「（これはチャンスかも……。アガット、どうする？）」
「（まずは俺１人で接近する。うまく行きゃあ、そのまま《ゴスペル》を破壊できるだろう）」
「（そっか……分かった）」

「（アガットさん……）」
「（大丈夫だ、心配すんな。失敗した時は援護を頼むぞ）」
「（はいっ……！）」
「（気を付けてね……！）」

アガットは重剣を取り出し、岩陰に身を隠した。
「（あれか……）」
《ゴスペル》を確認し、重剣についたユニットの電源を入れた。
「（……行くぜ！）」
アガットは竜に向かって一気に走った。
「らあああっ！」
ありったけの力で竜の額に重剣を食い込ませた！《ゴスペル》にヒビが入る音がした。
「やったか……！？」
しかし、《ゴスペル》から黒い光が放たれ、竜が目覚めてしまった。
「チッ……浅かったか！」

「アガットさんっ！」
ティータが竜に向かって導力砲を放った。
「アガット！」
「ヒビは入ったが破壊まではできなかった！こうなりゃもう1度チャンスを作るしかねえ！手を貸してくれ！」
「もちろん！」
「はいっ！」
「……行きます！」
「古代竜が相手ですか……。相手としては十分すぎますね」

竜を戦闘不能にしたはずのエステルたち。しかし、竜は倒れなかっ

た。
「あ、あう……」
「くっ……。倒したはずなのに！？」
「無限の生命力……。伝承の通りです！」
「まずいですね……。このままでは逃げられてしまいます！」
その時、アガットは高台を見つけた。
「ティータ！閃光弾を持ってるか！？」
「ふえっ……はいっ！」
「そいつで竜のスキを作れ！エステル、姫さん、レイン！一瞬でいい、動きを止めろ！」
「ええっ！？」
アガットは高台へと登っていった。
「あ……」
「なるほど……。そういうことですか！」
「あの高さならいけますね」
「ティータ！当てないで撃ち上げちゃって！あたしたちで動きを止めるから！」
「うんっ……！」
ティータが閃光弾を撃った。
「（……今だ！）」
エステル、クローゼ、レインは竜の脚に集中攻撃した。竜が地面に倒れる。
「……。うおおおおおっ！」
アガットはアクセサリーの石を握りしめ、その隙に、アガットは高台から竜の額の《ゴスペル》目がけて、重剣を叩き込んだ。さすがの《ゴスペル》も完全に砕け散った。
「やった……！」
「《ゴスペル》が壊れた……！」
「ふう……。ヒヤヒヤしましたよ」

「アガットさんっ！アガットさん！だいじょうぶですかっ！？」
「ああ……大丈夫だ。どうやら……上手くいったみてえだな」
「うんうん！大成功よ！」
「アガットさん……凄いです！」
「見事な一撃でしたよ」
「へへへ……。竜も何とか倒せたし、一件落着といった所か――――」
「……見事だ……」
突然、頭の中に声が響いた。
「え……」
「い、今の声は……」
「どこから聞こえてきた！？」
「ま、まさか……」
「竜、から……？」
竜が再び起き上がった。
「見事だ……人の子たちよ。我が名は《レグナート》。この地に眠る竜の眷族(けんぞく)だ」
「あ……」
「これは……お前が喋っているのか！？」
「私は、おぬしらのような発声器官を持っていない。故に『念話』という形で語らせてもらっている。おぬしらはそのまま声に出して語りかけるがいい」
「そ、そうか……」
「ふえぇ～……」
「まさか、竜と語る機会まで来るとは……」
「こ、言葉が通じるのなら確認したいんだけど……。もう、あたしたちと戦うつもりはないのよね？」
「うむ、あの機(はたらき)に操られていただけだからな。よくぞこの身を戒めから解き放ってくれた。礼を言わせてもらうぞ」
「あはは……ど、どういたしまして」
「フン……礼はいい。俺たちがここまで来たのはてめぇを解放する

ためじゃねえ。これ以上の被害を防ぐためだ」
「私が被害を与えてしまった街や村の事だな……。意志を奪われていたとはいえ、確かに私にも責任があるだろう。さて……どう償ったものか」
「ま、まあ、悪いのは《結社》の連中なんだし……。ケガ人は出ちゃったけど、亡くなった人もいなかったし……。誠意さえ伝われば許してもらえると思うわよ？」
「……」
「ふむ、誠意か……。このような物で伝わるか自信はないのだが……。人の子よ、もう少しこちらに近付いてはもらえまいか？」
「う、うん？別にいいけど……」
「……ったく、何だってんだ」
古代竜レグナートはエステルとアガットの手に何かを出した。
「な……」
「わぁ……！」
「これって……七耀石の結晶！？」
「金色の輝き……。空の力を秘めた金耀石（コルティア）の結晶ですね」
「これは……驚きです」
「私が付けた爪痕の償いだ。どうか、おぬしらの手から街と村の長に渡してもらえぬか？」
「な、なるほど……。うん、そういう事なら――」
「――駄目だな」
「ちょ、ちょっと！？」
「アガットさん……」
「ふむ、やはり物では誠意は伝わらぬという事か？」
「そういう意味じゃねえ。この大きさだと……1つ、1千万ミラといったところか。1万分の1でいい。これと同じ結晶を寄越しな」
「へ……？」
「犯罪でも絡まない限り、遊撃士を雇うのは有料でな。品物の運搬料だったら１０００ミラ貰えりゃ充分だ。それさえ払えば引き受け

てやるよ」
「あ……」
「まったくもう……。素直じゃないんだから」
「ふむ、そういう事か。それでは受け取るがいい」
レグナートは再び結晶を出した。
「よし……契約成立だな。この2つは、責任をもって村長と市長に届けてやるぜ」
「うむ、頼んだぞ。ふふ……しかし、先ほどの一撃は中々だったぞ。銀の剣士と戦っていた時は何とも頼りなかったが……。一皮剥けたようではないか」
「なっ……」
「は、廃坑の事を覚えているんですか？」
「操られてはいたが、意識は残っていたからな。小さき娘よ。おぬしの勇気と健気さにはなかなか感服させられた。ふふ……だから人間というのは面白い」
「あ、あう……」
「あはは、意外とお茶目な所があるじゃない」
「ふむ、そしておぬしは……。なるほど、道理で覚えのある匂いがするわけだ。《剣聖》の娘だな？」
「へ……！？」
「おいおい、どうしてオッサンを知ってやがる！？」
「20年前、眠りにつく時、最後に会った人間の1人だ。剣の道を極めると言って無謀にも挑んできたのだが……。いまだ壮健でいるのか？」
「う、うん……。ピンピンしてるけど。……まさか竜とまで知り合いとは思わなかったわ」
「ふふ……さすがカシウスさんですね」
「あ、そういえば……。ねえ、《レグナート》。ちょっと聞いてもいいかな？」
「ふむ、なんだ？」

「あなたに《ゴスペル》を付けたのは、あのレーヴェっていう男なのよね？《実験》とか言ってたけど……一体、何の実験だったか分かる？」
「ふむ……誤解を解いておくが。漆黒の機（はたらき）を私に付けたのは、あの銀の剣士ではない。『教授』と呼ばれていた得体の知れぬ力を持つ男だ」
「ええっ！？」
「なんだと……！？」
「銀の剣士は、『教授』の供としてここに現れた。そして私が暴走してからは、被害が大きくなりすぎぬよう様々な手を尽くしたのだ。彼が暴走を押さえなければ私は街や村を破壊し尽くすまで止まらなかったに違いない」
「う、うそ……」
「野郎……どういうつもりだ」
「……」
「そして、『教授』の目的はただ１つ。あの機（はたらき）が私に効くかどうかを見て完成度を確かめたかったのだろう。《輝く環》の《福音》としてな」
「な……！？」
「か、《輝く環》！？」
「ちょ、ちょっと待って！もしかして《輝く環》がどういう物か知ってるの！？」
「……。それは、何処にもないが遍（あまねく）く存在しているものだ。無限の力と叡智と共に絶望を与える存在でもある。それを前に出した時……人は答えを出さなくてはならぬ」
「へ……」
「それは……どういう意味なのでしょう？」
「私から言えるのはここまでだ。これ以上の関与は古の盟約により禁じられている。おぬしらを助けることも彼らを止めることもできない」

レグナートは翼をはためかせた。
「わわっ……」
「お、おい！？」
「さらばだ、人の子たちよ。おぬしらが答えを出した時、私はもう一度姿を現すであろう。その時が来るのを祈っているぞ」
レグナートは空へ飛び去っていった。

―ボース地方上空
モルガン将軍、ユリア大尉、ナイアル、ドロシーが《アルセイユ》の艦首で待っていた。
「ずいぶん遅いですねぇ。エステルちゃんたち、大丈夫なのかな～」
「まさか、返り討ちにあったんじゃねぇだろうな……」
「その場合、危機を知らせにジークが戻ってくるはずだ。今は彼らを信じて待つしかない」
「ですがねぇ……」
「……。夕刻まであと1時間……それを過ぎたら突入を開始する。大尉、準備をしておけ」
「了解しました……」
「その必要はない」
突如、４人の頭の中に声が響いた。
「な、なんだぁ！？」
「今のは……！？」
「どこから聞こえたのだ！？」
「あれ～？なんか大きいのが下から上がってきますよ～？」
「なにっ！？」
《アルセイユ》の前に古代竜レグナートが現れた。
「リベールを守る兵(つわもの)たちに告げる。我が名は《レグナート》。古よりこの地に眠る竜の眷族だ。悪しき者に操られていたが遊撃士たち

によって解放された。詳しい事情は彼らから聞くといい」
それだけを言い残し、レグナートはさらに上空へと上っていった。
「……」
「はわわ～……。見えなくなっちゃっいましたねぇ」
「えっと……。追いかけないんですかい？」
「……あの高度まで行かれたらお手上げだ。《アルセイユ》が無事でも我々の方が窒息してしまうだろう」
「やれやれ……。これは、あやつらから徹底的に顛末を聞き出さなくてはならんな」

こうして、ボース地方を騒がせた古代竜の騒ぎは幕を閉じた。
エステルたちは、モルガン将軍に詳しい事情の説明を求められ……ようやく解放されてから、竜から預かった金耀石の結晶を市長と村長にそれぞれ届けた。

第１２章　守るべきもの（２２）（前書き）

今回で第１２章『守るべきもの』が終了します。

第12章　守るべきもの（22）

―1週間後　ラヴェンヌ村

アガットとティータはミーシャの墓参りをしていた。

「あ……」

「あんた……」

モルガン将軍が石碑の前に立っていた。

「おぬしらか……」

「まさかあんたがこんな所にいるとはな。どういう風の吹き回しだ？」

「なに……ただの気まぐれだ。妹御に供えるのであろう？わしはこれで失礼しよう」

「おいおい。邪魔なんて言ってねえだろ。その花は……あんたかい？」

「……まあな。こんな事になるのであれば別の彩りを考えたのだが」

「毎年、俺と同じ花を捧げているヤツがいるとは思ったが……。あんたとは思わなかったぜ」

「さて、どうかな……。わしもいいかげん歳だ。どうだったか忘れてしまった」

「ヘッ、よく言うぜ」

「クスクス……。あの、わたしもお花、供えていーですか？」

「おお……」

「ああ、頼む」

ティータとアガットは石碑の前に花を供え、しばしの間、黙祷をささげた。

「ふう……。悪かったな、ティータ。わざわざ付き合わせちまって」

「ううん、私も一度、ちゃんとミーシャさんに挨拶したかったですから……。ありがとう、アガットさん」

「おいおい。礼を言うのはこっちだろ。それに、仕事が一段落した

ら会わせるって約束だったしな」
「えへへ……そーでしたね」
「ふふ……。竜にも言われたそうだがおぬし、変わったようだな。落ち着きのようなものを感じさせるようになったぞ」
「よせよ、まだまだ未熟さ。だが、てめぇの未熟さとまっすぐ向き合うだけの覚悟はできた気がするぜ。全てはここからだ」
「ふむ……。……おぬしの言っていた軍という組織の弊害だが……。改めて考えたら、おぬしの言葉も一理あると思ってな」
「あれはその……単なる八つ当たりだ。別に軍が間違ってるとかそんな風には思っちゃいないさ」
「まあ、聞け。今回の顛末で分かったのが、人と組織は異なるという事だ。軍の組織力が役立つこともあれば、遊撃士のフットワークが良い結果を導き出すこともある。どちらが欠けても今回の事件は解決できなかったと思わぬか？」
「……まあな。あんたらの作戦があったから竜の居場所が分かったわけだし」
「リシャールの言葉ではないが……オーブメントが発明されてから物と情報の流れは、早く大きくなった。それを効率的に処理するために組織というものは、巨大化しながら細分化されることを余儀なくされている」
「……軍がその良い例だな。国境師団、飛行艦隊、王室親衛隊、王都警備隊、情報部……」
「うむ……。そしてそれは、時代の流れに対応するための進化と言えよう。そこから抜け落ちるものが少なくないとはいえ……もはや後戻りはできんのだ」
「……」
「だからおぬしは……おぬしたち遊撃士は我々とは違うやり方で守るべきものを守るといい」
「……え……」
「互いの守るもののために時には対立し、時には協力し……そうす

ることで互いを補い、正しくあらんと確かめ合う。それが、わしらの関係の正しい在り方だとは思わぬか？」

「……へへッ、違いない。ま、これからもせいぜい突っ込まさせてもらうからな。覚悟しとけよ？」

「フッ、それはこちらの台詞だ。軽はずみな事をしないよう日頃から心がけておくのだな」

「クスクス……」

「フフ……。和やかな所を悪いが少し邪魔させてもらうぞ」

後ろから声が聞こえたと思うと、剣帝レーヴェが立っていた。

「！！！」

「ふえっ……」

「おぬしは……」

「将軍閣下とはこれが初めてか。《身喰らう蛇》の執行者――レオンハルトという者だ。以後、お見知りおきを願おう」

「なにっ！？」

「……てめぇ……どういうつもりだ……」

アガットが剣帝レーヴェに剣を向けた。

「ここは死者の眠る場所。するべきことは一つだろう。お前こそ、先日の続きをここで繰り広げるつもりか？」

「グッ……」

「アガットさん……」

「……わかってる」

アガットは剣をしまった。剣帝レーヴェは石碑の前に花を供え、静かに黙祷した。

「……」

「レオンハルト……《剣帝》レーヴェと言ったか。わしも死者の眠る場所を騒がしたくないのは同じだが……。ひとつ、聞かせてもらおうか」

「ご随意に……」

「今回の事件で、おぬしは被害が大きくなりすぎないよう竜の暴走

を抑えたそうだな。今も、死者を悼むためにそうして祈りを捧げている……。そんな者がどうして破壊と混沌を招こうとする？なにか……避けられぬ事情でもあるのか？」

「……フ……」

「竜の暴走を抑えたのは《実験》を正確に行うためだ。それ以外の意図はない」

「だが……」

「……俺は俺の命ずるまま《結社》の手足として動いている。何者の意志にも左右されずにな。《ハーメル》の沈黙を強いられたあなた方と一緒にしないでもらおう」

「！！！」

その言葉にモルガン将軍は驚愕した。

「《ハーメル》だと？どうしてその名前が……」

「さてと……。アガット・クロスナー。覚悟が固まったからといって実力が伴わなければ意味はない。今度は、剣が砕けるだけで済まされるとは思わないことだ」

「ヘッ……上等だ。てめえこそ、いつまでも余裕ぶってられると思うなよ。すぐに追い上げてやるから覚悟してろや」

「フッ……楽しみにしてるぞ」

剣帝レーヴェは去っていった。

「……あのおにーさん。寂しそうな目をしてました。お祈りしている間、ずっと……」

「……。おい……将軍。《ハーメル》ってのは国境を越えたところにある帝国側の村のことだよな？」

「おぬし……その名を知っているのか」

「戦争前は、ラヴェンヌ村とたまに交流があったはずだ。今じゃあまったく途絶えちまってるらしいが……。どうしてその名前が出てくる？」

「……。……その事についてはわしの口から言うことはできん。国家間の問題に絡むのでな」

「なに……！？」

「ただ、これだけは言える。もしも、わしの想像が当たっているのであれば……。……あのレーヴェという男、よほどの地獄を見たに違いない」

第１３章　絆の在り処（１）

―山猫号

「あれ……？」

ジョゼットが誰かを探していた。

「なんだ、こっちにいたんだ」

「……こちら側の方が月がよく見えるからね。風の流れも肌で感じられる」

ヨシュアは山猫号の入口の裏側に座っていた。

「あはは、ま～たカッコ付けちゃってさ。……よっと」

ジョゼットがヨシュアの横に腰を下ろした。

「カッコ付けているわけじゃないか……。必要なんだよね、それも？」

「月明かり、雲の位置、風の流れがけっこう重要になってくるから。失敗の可能性はなるべく下げておきたいんだ」

「な、なるべくって……。あんたねえ……できる限りって言いなよ！失敗したら死んじゃうんだよ！？」

「大丈夫、失敗の可能性は軽微だ。この程度のミッション、昔は毎日こなしていたからね。むしろ危険なのは……ミッションが成功してからだ」

「……。……ね、ヨシュア。本当にあんたがそこまでやる必要あるわけ？」

「え……？」

「あんたもボクたちと同じエレボニア生まれなんだよね。そりゃあお互い、事情があって故郷に帰れないかもしれないけど……。だからといって、この国に義理立てする必要ないじゃない？《結社》が何をしようが放っておけばいいんだよ」

「……」

「ね、今ならまだ引き返せるよ。このまま、ボクたちと一緒にリベ

ールを離れてさ……どこかの自治州あたりでパーッと一旗揚げてみない？空賊稼業が気に喰わなければ他の仕事を探してもいいんだし。アニキたちとも話したんだけど、この船のスピードを活かした運送業なんていいと思うんだよね」

「飛行船を使った運送業か……。今後も需要は増えそうだし、なかなか有望なビジネスかもね。少なくとも空賊よりは確実に稼げると思うよ」

「そ、それじゃあ！」

「そうだね……。《結社》の計画を潰して僕が生き残ることができたら考えさせてもらおうかな」

「……」

「ああ、心配しなくても僕たちの契約はこれで終わりだ。この作戦に協力してくれたら貸しは帳消しという約束だからね。いつでも出発してくれて構わない」

「……もういい」

「え」

「バカ！誰が貸し借りの話をしてるのさ！もういい！あんたなんか知るもんか！勝手に危険に飛び込んで勝手にくたばっちゃえばいいんだ！」

ジョゼットは山猫号の中へと走っていった。

「……ごめん、ジョゼット」

「まったく……鈍いフリも楽じゃないねぇ」

「……キールさん」

見張り台からキールが顔を出した。

「あいつもいい加減、ガキっぽさが抜けないんだが……。それでも今のはやっぱりお前の言い方が悪いと思うぜ」

「……そうだね。謝るつもりはないけどすまないとは思っている」

「やれやれ……。それがお前なりの気遣いだとは分かっちゃいるんだけどな。まあ、さっきの話は真剣に考えておいてくれや。全てのケリを付けた後、あの遊撃士の嬢ちゃんの元に帰るつもりがないん

だったらな」
「はは……それは無いよ。所詮、僕と彼女は生きている世界が違いすぎる。もう交わることは無いはずだ」
「ふーん……ま、いいけどな。だったら尚更悪い話じゃないだろう？」
「そうだね……。前向きに考えておくよ」
その時、山猫号が何かを探知したようで、サイレンが鳴った。
「おいでなすったか！兄貴、来たのか！？」
「おお！小僧の読み通りだ！北東の方からぐんぐん近付いているぜ！」
「聞いての通りだ。すぐにブリッジに来な」
「分かった」
ヨシュアは山猫号の中に入った。

―山猫号　ブリッジ
「おう、来やがったか」
「……」
ジョゼットはふてくされた顔をしていた。
「状況は？」
ヨシュアはその顔も気にせずドルンに首尾を聞いた。
「ヘッ、おめぇの読み通りだ。来な。こっちのディスプレイだ」
ヨシュアが小型のディスプレイを覗き込んだ。
「高度１５６０アージュ、時速２１０００セルジュの速度で北北東からリベール領に潜入……。高度・速度共に普通の船じゃないのは確実だぜ。おめぇが付けた特殊レーダーがちゃんと効いているみてえだな？」
「いや、まだ分からない。帝国あたりの偵察艇かもしれないからね。キールさん、目視は？」

「……捉えた！映像をそっちに回すぞ！」
映像には赤い飛行艇が映っていた。
「……間違いない。今回のターゲットだ」
「へへ……これで舞台は整ったか。ゾクゾクしてくるねぇ」
「おーし、おっ始めるか！小僧！心の準備はできてるだろうな！？」
「問題ない。僕が位置に付いたらすぐにでも始めてくれ」
ヨシュアがブリッジから出て行こうとした。
「あ……」
「ドルンさん、キールさん、それからジョゼット……。今までありがとう。契約上の関係だったとはいえ、本当に感謝している」
「え……」
「へっ……」
「はぁ！？」
「本当なら作戦が終わった後に言うべきかもしれないけど……機会がないかもしれないから今のうちに言っておくよ。それじゃあ、元気で」
「あいつ……」
「ったく……。最後の最後でそう来たかよ」
「……っ……！」
ジョゼットは慌ててヨシュアを追いかけた。

「え……」
ヨシュアが外に出たところでジョゼットに抱き締められた。
「最後の最後までホント可愛くないやつ！しおらしい顔で、な～にが『今までありがとう』だよっ！そんなの聞いたってボクは嬉しくともなんともない！そんな言葉、ボクは欲しくない！」
「……ジョゼット……」
「……約束、してよ。あんまり無茶はしないって……。必ず生きて

戻ってくるって……」
「……。相手が相手だけに安請け合いはできないよ」
「……ッ……」
「でも、これだけは約束する。たとえ、僕の目的が果たせなかったとしても……生きて帰って、いつの日か君たちに改めて礼を言おう」
「あ……」
「……それでいいかな？」
「うん……。忘れるなよ！絶対に約束だからね！」

―赤い飛行艇
「――高度１５５９アージュ。北北東よりリベール領内に潜入。このままヴァレリア湖上空まで針路を固定しろ」
「了解」
紅蓮の兵士が３人、航空していた。
「リベールの警備艇には気付かれなかったようだな。『ステルス機能』か……。便利な装置を積んでいるものだ」
「まあ、そんな機能でもないと大騒ぎになるだろうからな。この船はともかく、あの化物が侵入した日には」
「ハハ、違いない」
その時、外から砲撃音が聞こえた。
「な……！」
「敵襲か！？」
「うろたえるな！レーダーはどうした！？」
「レーダーに反応！４時方向から小型艇が接近！」
「データベース照合――出た！帝国ライフォルト社製、『カプア空賊団』所属《山猫号》！」
「空賊だと！？」

山猫号がギリギリまで赤い飛行艇に近付き、
「……。よし……！」
ヨシュアが山猫号から赤い飛行艇に鎖をひっかけて飛び乗った。

「やった……成功だよ！」
「おお！やりやがったか！」
「よーし！俺たちもずらかるぞ！」

「空賊艇、離脱したぞ！？」
「どうする、追撃するか！？」
「いや……放っておけ。王国軍の警備艇ならともかく、小物に構っている場合じゃない」
「そうだな……」
「今は《グロリアス》の航路確保が優先だ」
「……いったん帰投する。空賊どもに関してはカンパネルラ様に報告しよう」

「へへっ……あっちも退きやがったか。何から何まで小僧の読み通りだったな」
「……うん。……」
「ジョゼット、心配するな。あいつのことだ。きっと無事に戻って

くるさ」
「うん……そうだよね。約束したんだもん……。ちゃんと帰ってくるって」

第１３章　絆の在り処（２）

―遊撃士協会ボース支部

ギルドに戻ったアガットとティータはラヴェンヌ村で起きたことを話した。

「そっか……。そんな事があったんだ」

「《剣帝》レーヴェ。とんでもなく大胆な男ね」

「ああ、まったくだ。そんな訳で、みすみす敵を見逃しちまってな……。すまん、弁解の余地もねえ」

「いや、その場合は見逃すのが正解じゃろう。墓地で騒ぎを起こすわけにもいかんからな。それにしても……その『ハーメル』という名は妙に気になるのう」

「その名前、前に女王宮でロランス少尉と戦った時にも出てきた気がするのよね。クローゼ、何か知らない？」

「いえ……残念ながら。たぶんお祖母さまは何かご存じだと思うのですが……。国家間の問題と言うからには教えて下さらないかもしれません」

「そっか……。オリビエはどう？エレボニアの村なんでしょ？」

「ふむ……『ハーメル』か。それはまた奇妙な名前が出てきたものだね」

「奇妙？」

「『ハーメル』というのは帝国最南端にあった村だが……現在、その名前は帝国の地図には載ってないんだ」

「ええっ！？」

「載ってないって……どーしてなんですか？」

「何年か前に、山崩れがあって、かなりの死者を出したそうでね。今では廃村となっているらしい」

「廃村……」

「……そうだったのか」

「で、でも、かなりの死者が出たって……」
「軍が災害救助に出動したから詳しい話は知らないんだが……。一説では、全滅に近かったと言われているそうだよ」
「ぜ、全滅……」
「確かに、ひどい山崩れだと村が丸ごと呑み込まれることもあるらしい。『山津波』と言うんだそうだ」
「なるほど、言い得て妙ね」
「でも、それがどうしてリベールの女王様と将軍に関係してくるのかしら……」
「さて、今のところ全く見当も付かないねぇ」
「……。まあ、今は気にすることではないでしょう」
「ふむ、わしの方から帝国のギルドに問い合わせてその辺りの事情を聞いておくか。まあ、『ハーメル』についてはそのくらいにしておくとして……。まずはお前さんたちに今回の報酬を渡すとしよう」
エステルは報酬を受け取った。
「今回の竜騒ぎは本当にご苦労じゃったな。まさに遊撃士協会の面目躍如といった感じゃぞ」
「えへへ……そっかな？」
「だが、『実験』そのものは阻止できなかったからな……。あんまり威張れやしねえさ」
「それに、これで王都を含めた５つの都市全てで『実験』が行われたことになるわ。次に《結社》がどう動くか、すぐに見極めないといけないわね」
「それなんじゃが……。お前さんたち、ここで少しばかり骨休みをせんか？」
「へ……」
「骨休みって……どういうことだ？」
「そのままの言葉じゃよ。ルーアン地方から始まって立て続けに５つの事件じゃ。ここらで休んでおかんと身も心も疲れ果ててしまう

ぞ」
「で、でも……」
「また連中が何か起こしたら俺たちが出向く必要がある。オチオチ休んでられねぇと思うんだがな……」
「今回の竜の一件で王国軍の警戒も厳しくなった。その分、こちらに余裕ができたと考えてもよかろう。それに……どうやらクルツたちが目星を付けたらしいのじゃ」
その言葉に一同が驚いた。
「ええっ!?」
「目星というと……《身喰らう蛇》の拠点!?」
「うむ、数日中に確かな情報が入りそうじゃ。もし、連中のアジトが判明すれば一気に忙しくなるに違いない。じゃから休めるうちに休んでおいて欲しいんじゃよ」
「そっか……」
「ふむ、そういうことならお言葉に甘えさせてもらうべきだろう。コンディションの調整も遊撃士の仕事と言えるからな」
「確かに……」
「ここいらで軽く一休みも悪くねえか」
「フッ、いい感じに話がまとまってきたじゃないか。しかし、ご老人。骨休みを勧めるということは何か心当たりがあるのかな?」
「ふぉふぉ。鋭いのう。実は、メイベル市長からいい物を貰っておるんじゃよ。竜事件の報酬とは別にな」
「市長さんから……いい物?」
「ずばり、南の湖畔にある《川蝉亭》の特別チケットじゃ。お前さんたち全員が3日ほどタダで泊まれるぞ」
「ほ、ほんと!?」
「おお……。さすがは名高きボース市長だ」
「ふふ……先輩らしい心遣いですね」
「えとえと、それって……。みんなでどこかに出かけてお泊まりするってことですか?」

「ふふ、そうよ。ヴァレリア湖畔にある眺めのいい宿屋さんでね。お酒も料理も美味しいし、舟遊びとかも出来ちゃうわよ？」
「わぁ……！」
「ふむ……そいつは中々良さそうだ」
「へッ、確かにあそこならいい気分転換にはなるかもな」
「疲れを癒すには最適でしょう」
「うんうん！どうせだったら思いっきり羽根を伸ばしちゃいましょ！」

「さてと、あたしたちは一足先に《川蝉亭》に行ってるからね」
シェラザード、オリビエ、ティータは先に《川蝉亭》に行き、他のメンバーは用事をこなしてから行くことにした。
「うん、分かったわ。チェックインの方はよろしくね」
「ルグラン爺さんが連絡したから、部屋が取れないことはねぇだろ」
「はいっ、任せてくださいっ！」
3人は《川蝉亭》へと向かっていった。
「さてと、ギルドの掲示板を一応は確認した方がいいよね？ボース地方で、竜の騒ぎが収まっているかも気になるし……」
「ま、爺さんがせっかくあんな風に言ってるんだ。程々にして湖畔に向かうぞ」
「それは確かに……。うん、とにかく用事を済ませたらヴァレリア湖に向かいましょ！」
「はい！」

第１３章　絆の在り処（３）

―ヴァレリア湖畔

「お、ようやく来たみたいやね」

「あれ……！？」

シェラザードたちと共にいたのは、あろうことかケビン神父だった。

「ど、どうしてケビンさんがこんな所にいるわけ！？」

「いや～、それには海よりも深い事情があってやね」

「ここに来る途中、街道で出くわしたのよ。で、ついでに宿まで来てもらったわけ」

「街道の途中って……どうしてそんな所で出会うの？」

「はっきり言ってしまうと、目的は《琥珀の塔》の調査でな。実はオレ、ロレントでエステルちゃんと別れてから一通り《四輪の塔》を調べてたんや」

「四輪の塔を……！？」

「ってことは……他の３つの塔も調べたのか？」

「ま、そういう事ですわ。おかげでこっちも竜騒ぎが完全にノータッチになってしもて。ここで情報交換しようと、そう思って参上した次第なんや」

「それは構わないけど……。えっと、それじゃあ早速ここで情報交換をする？」

「ああ、できれば夕食の時がええかな。その方がお互い落ち着いて話をできるんとちゃう？」

「あ、それもそうね。……って、ケビンさんもここに泊まるつもりなわけ」

「なはは、聞けばここってわりと有名な宿やそうやんか？せっかくやからオレもエステルちゃんたちの休暇にご相伴させてもらおと思うてな」

「い、いきなりねぇ。でもまあ、ケビンさんには何度もお世話にな

ってるし……。みんな、どうかな？」
「あー、いいんじゃねえのか」
「ふむ、確かにこのあたりで借りを返しておきたいところね」
「えへへ、わたしも賛成です」
「フッ、ボクも異存はないよ」
「ふふ……これも何かの縁でしょうし」
「ま、せっかくだから楽しくやろうじゃないか」
「私も構いませんよ」
「おおきに！お礼と言ってはなんやけど、まだ用があるなら付き合うで。思う存分コキ使ってくれや」
「うーん、そうねぇ。せっかくだけど、あたしたちもそろそろ荷物を置いて休みたいかも」
「なんや、そうなんか。残念やな～、せっかく身体でご奉仕できると思ったのに」
「まったくもう。調子いいんだから」
「クスクス……」
「よし、それじゃあ部屋に案内してもらうぜ」

「本日は当館をご利用いただき、誠にありがとうございました。さっそくお部屋のご案内をさせて頂きますね」
「うん、お願いします」
「まず、こちらが女性の方々のお部屋になります」
「わあ……。落ち着いた雰囲気の素敵なお部屋ですね……」
「ここ、あたしたちが前に通された部屋だったわね。空賊アジトに潜入して結局泊まれなかったけど……」
「ふふ、そうでしたわね」
「フッ、ちなみにボクはベッドで一休みしたけどね」
「あれはシェラ姉に酔い潰されただけでしょーが」

「ふふ、今回は思う存分堪能させてもらいましょうか」

「こちらが男性の方々に使っていただくお部屋ですが……。2人部屋ですので隣の2つの部屋と合わせてお使いください」
「あ、オレは飛び入りですから皆さんの都合優先で結構ですわ」
「ふむ、どうする？俺は何でもいいが」
「俺は1人でも構わんぜ」
「では、私はケビンさんと話したいことがあるので同室でお願いします」
「おっ、兄さんひょっとしてオレに興味ある？」
「そういうわけではありません」
「なんや、つれないな～」
「フッ……ならばボクとアガット君を同室にしてもらおうかな」
「……ちょっと待て。なんで脈絡もなく俺を指名しやがるんだ？」
「ハッハッハッ。決まってるじゃないか。あの夜、村に残ったキミとティータ君の間にどんな事があったのか……。一部始終、懇切丁寧に教えてもらおうと思ってね」
オリビエの頭の中では妄想がフル回転しているそうだ。
「ふえっ？」
「なっ……！」
「なんて悪趣味なヤツ……。まー、あたしも少し興味があったりするけどね」
「で、でも……ただお話しただけだよ？」
「そのお話っていうのが大事だったりするのよねぇ。こちらも寝る前にじっくりと聞かせてもらっちゃおうかな～？」
「あ、あう～……」
「もう、2人とも……。あんまりからかったらティータちゃんが可哀想ですよ」

「では、ジンさんは1人と泊まっていただくことになりますが……」
「ああ、俺は構わんぞ」
「ふふ、では隣の2つの部屋にも案内させてもらいますね」
エステルたちは他の2つの部屋を見に行った。
「こ、こら！妙な所で話を切るんじゃねえ！」

第１３章　絆の在り処（４）

―川蝉亭　夕食時

「――なるほど。ゴッツイ事があったもんや。まさか伝説の古代竜がリベールに棲息していたとはな。しかも《輝く環》について警告してどこかに飛び去ったときたか……」

エステルたちはボース地方で起きた竜騒ぎの顛末をケビン神父に話していた。

「うん、色々ありすぎて頭が処理しきれない感じかも。どうして竜が《輝く環》について口を閉ざしたのかも分からないし」

「実は、教会の聖典にこんな一節が存在してな……。『至宝授けし女神、聖獣を遣わして人の子らの行く末を見届けさせん』」

「『至宝』に『聖獣』……。それぞれ《輝く環》と《竜》に相当しそうですね」

「しかも『見届けさせる』という文句がポイントかもしれないね。ただ見守るだけで、手助けをしてくれるわけじゃないらしい」

「ヘッ、ケチくせえ話だぜ」

「いずれにせよ、これで《輝く環》が実在する可能性はかなり高くなった。オレが調べた事と合わせると色々と推測できると思うんやけど……」

「ケビンさんが調べた事って《四輪の塔》についてよね。何か分かったことでもあるの？」

「まあな。４つの塔の頂上にある用途不明の古代装置やけど……。あれが今、光が灯って動いとるんは知っとるか？」

「そういえば、琥珀の塔で魔獣退治をした時にも光ってたわね。でも、それが《輝く環》とどういう関係があるわけ？」

「これは、あのユリア大尉から教えてもろうたんやけど……。城の《封印区画》の最奥で巨大な機械の化物が現れる直前に妙な出来事があったそうやな？」

「あ、うん……。確か、《ゴスペル》が使われた直後、遺跡の照明が全部消えちゃって……。その後、警告の音が聞こえてから周りの柱が下に降りたのよね」
「警告の内容は――『第1結界の消滅』と『デバイスタワーの起動』だったわね」
「そうそう、それです。で、目撃情報とも合わせて分かったんが……。4つの塔で装置が動き始めたのが、まさに《封印区画》で《ゴスペル》が使われた時間っちゅうことですわ」
「あ、あんですって～!?」
「そ、それじゃあ、警告にあった『デバイスタワーの起動』って……『第1結界の消滅』とは『封印区画の装置の機能の消滅』のこと、『デバイスタワーの起動』とは『四輪の塔の装置の起動』、ということになりますね」
「ええ、それ以外に考えられへんと思います」
「ふむ、状況を整理すると……。グランセル城の地下遺跡には《第1結界》なるものを作りだす機能が備わっていた。だが、大佐に《ゴスペル》が使われてしまったことによって《第1結界》は消滅してしまった」
「そして、その代わりに《デバイスタワー》が起動した……。ひょっとしたら《第2結界》と呼ばれるようなものを発生させるためかもしれません」
「《第2結界》……」
「ヘッ、第1があれば第2があるのも道理だな。問題は、その結界ってのがどういう代物だってことだが……」
「それなんやけど……。多分、《輝く環》の在り処を隠しておくような代物やと思う」
「そっか、《輝く環》は封印区画には存在しなかった……。このリベールのどこかに隠されているって話だったわね？」
「そゆこと。そして、仮に結社の目的が《輝く環》の入手なら……連中の『実験』とやらもその目的を遂行するための手段と考えた方

がいいやろね」
「う、うーん……」
「《輝く環》、《ゴスペル》、《結社による実験》……。フフ、どうやら全てが繋がってきたみたいだね。そして、その絵を描いているのが《教授》と呼ばれる人物なわけか」
「うん……そうね。竜の額に《ゴスペル》を埋め込んでボース地方を襲わせた張本人……。そして……。……」
エステルは急に黙り込んだ。
「……お姉ちゃん？」
「なんや、どうしたん？」
「うん……。その《教授》なんだけど。ヨシュアが居なくなった原因を作った人物じゃないかと思うの」
「え……」
「それって……。５年前、あの子が先生に引き取られることになった原因を作った黒幕ね？」
「うん……。それから、リシャール大佐やクルツさんたちの記憶を操作した人物とも同じだと思う」
「なに！？」
「ふむ、確かに記憶操作の一件はいまだ解決されていないが……。どうしてそう思ったんだ」
「うん、あのね……」
エステルはヨシュアが消えた日の夕方、出会った人物のことを思い出せないことを説明した。
「そんなことが……」
「お前……今まで抱えてやがったのか？」
「そういうわけじゃないけど……。……ゴメン、話すのが遅れたかも」
「でも……間違いなさそうですね。その人が、様々な事件の元凶である可能性は高いと思います」
「ふむ、かなりエグい性格をした人物のようだねぇ」

「ああ……。注意する必要がありそうだぜ」
「……」
「あっと……。ゴメン、ティータ。せっかく遊びに来たのにイヤな話をしちゃったわね」
「ううん……。気にしないで、お姉ちゃん。ただ、どうしてその人はそんな事ができるのかなって……。みんなにイヤな思いをさせて、ヨシュアお兄ちゃんを苦しめて……。わたし……分からなくって」
「も～、そんな歪んだやつの事なんか分かってあげる必要ないってば。ティータはティータらしくが一番！ね、アガット？」
「だ～から！なんで俺に振りやがるんだ！」
「クスクス……」
「ふふ……いいオチが付いたわね」
「……」
ケビン神父は何も言わず、エステルたちの話を聞いていた。
「ん？どうしたの、ケビンさん？」
「いや……何でもないで。とりあえず、情報交換はこのあたりにしとこうか？せっかくの料理が冷めてしもうたら勿体ないし」
「うん、それもそうね」
「フッ、そういう事なら話は早い。思う存分、酒池肉林を楽しむとしようじゃないかっ！」
「あら、ホントにいいの？」
「……ごめんなさい。無礼講くらいで許してください」
こうして……エステルたちは束の間の休暇を楽しむこととなった。

第13章　絆の在り処（5）

―川蝉亭　初日の夜

「いや～、腹いっぱい食った～。ここの料理はメッチャ美味いな～。そう思うやろ、レイン君」

「ええ、そうですね。お酒の方も良かったです」

「うんうん、ホンマ満足やわ。……で、いきなりやけど、話の方は？」

「本当にいきなりですね。あなたの方も私が何を聞くのか気付いているのではありませんか？」

「……まあな。大方、オレの正体とか本当の目的といったところちゃうか？」

「正解です。どうも、あなたの行動に不自然なところがあってこの機会に聞かせてもらおうと思ったのです」

「……。君は相当キレる頭の持ち主みたいやな。本当はすでに見当がついてるんちゃうか？」

「いえ……まだ全て分かったわけではありませんよ」

「じゃあ、どの程度気付いてるん？」

「……あなたがただの星杯騎士団ではないことと、目的がただ単に《結社》の《輝く環》の入手の阻止ではないという事です」

「ふうん……」

「どうですか、私の読みは？」

「いや～、お見事！としか言いようがないな～。その通りやで。オレはただの星杯騎士団やないし、目的もそれだけじゃない。なんで分かったん？」

「あなたは以前、『新米の星杯騎士団』と言いましたね。新米の星杯騎士団が《結社》の調査に1人だけで派遣するとは考えられません。目的については、今日の夕食時、《教授》の話が出てきた時です。あなたがその話を聞いている時、何か心当たりがありそうな顔

をしていました。恐らくあなたの目的は……」
「ああ～、それ以上はストップ！堪忍して、ホンマ。そうそう、君の想像通りやで」
「ご心配なく。このことは私の胸に留めておいて、誰にも話すつもりはありません」
「は～、想像以上の人物やな、S級遊撃士、《剣皇》レイン・アクアライトっちゅう人はな」
「へえ、あなたも相当調べましたね」
「あら、あんま驚かんなぁ。これじゃあ肩すかしくろうたみたいや」
「まあ、あなたの情報収集能力も優れたもののようですから想像の範囲内でしたよ」
「そうか……」
「これ以上話をすると休暇に来た意味がありませんからね。このあたりにしておきましょう。……お互い言えるのは『特定の人物にご執心』といったところでしょう」
「ホンマその通りやで。お互い大変な目的を持ったもんや……」

第１３章　絆の在り処（６）

日々の緊張から解放され、寝心地のいいベッドで爽快な朝を迎える朝……

午前中は、ボートを借りて湖上で水遊びを楽しみ……

お昼は、皆でランチを囲んだ後、腹ごなしの運動を楽しみ……

そして午後は、釣り糸を垂れながらゆったりと時間を過ごす……

楽しくも穏やかな時間はあっという間に過ぎていった。

―川蝉亭　３日目の夕方

「は～、遊んだ遊んだ？」

「えへへ……。とっても楽しかったぁ♪」

「ふふ、心身共にリフレッシュできましたね」

「いや～、お酒も飲まずに楽しめたのは久しぶりだわ」

「とか言っちゃって……あたしたちが釣りをしている間、果実酒とか飲んでなかった？」

「あら、あんな軽いの酒のうちに入らないわよ。ねえ姫様、ティータちゃん」

「あ、あはは……」

「ふふ……。コメントは控えておきますね。それにしても……エステルさんって釣りが本当にお上手なんですね」

「えへへ、そうかな？」

「うんうん！次々と釣っちゃうんだもん」

「ふふ、小さい頃からのこの子の趣味だからね。そういえば……ケビンさんも好調だったわね」
「あ、うん。けっこう好きみたい。ロッド捌きとかもなかなか堂に入ってたし。もう少し腕を磨けばあたしの良いライバルになるかもしれないわね♪」
「まったくもう……。すーぐ調子に乗るんだから」
「クスクス……」
「ふふ……。それにしても……もうすっかり夕方ですね」
「あ……」
エステルは外に目をやった。
「……」
そのままエステルは呆けるように外を見続けた。
「？」
「お姉ちゃん、どうしたの？」
「あ、うん……。あたし……ちょっと外で散歩してくるね。夕食までには戻るから」
「そっか……。遅くなったら、あんたの分は山分けにさせてもらうわよ？」
「あはは、分かってますって。それじゃあ、また後でね」
エステルは部屋の外へと出ていった。
「あ……。シェラさん、あの……」
「大丈夫よ、ティータちゃん。できれば今はそっとしておいてあげて」
「もしかして……ヨシュアさんの事ですか？」
「あ……」
「ふふ、よく分かったわね。そういえば、あの時も……こんな風に夕日が綺麗だったわね」

―桟橋
「は～……ほんと綺麗な夕焼けね～。あの時と同じだわ……」
エステルの頭に空賊事件の時に泊まりに来た情景が浮かぶ。
「……」
エステルは鞄からヨシュアのハーモニカを取り出した。
「空も水も夕焼けもあの時と同じなのに……。みんなと一緒にいてすごく楽しいのに……。やっぱり……全然違うよね」
深くため息をつくエステル。
「あーあ、ダメだな……。自分のペースで追いかけるってせっかく答えを出したのに……。これじゃあ、ヨシュアにもお母さんにも笑われちゃうよね。……そうね。夢の中で、一度だけ間違わずに吹けたし……。また、練習してみようかな？」
そう言って、ハーモニカで『星の在り処』を吹き始めた。
吹き終わると同時に、拍手の音が聞こえた。
「え……」
背後を振り返ると、ケビン神父が立っていた。
「へへ、いいモン聞かせてもらったわ」
「ケビンさん……」
「しっかし、誰が吹いとるのかと思って来てみれば……まさかエステルちゃんだとは思わへんかったわ。釣りとスニーカー集め以外にも意外な趣味を持ってるんやな？」
「エヘヘ……。あたしのキャラじゃないかな？」
「や、そんな事ないで。まー正直、釣りの方が得意そう見たいやけど……」
「あはは、正直に下手って言っちゃっていいわよ。自分でもあんまり向いてるとは思ってないし」
「うーん、確かにつたない所もあったけど……。音楽で大事なのは

ハートや。さっきの演奏、エステルちゃんの気持ちはばっちり伝わってきたで」
「そ、そっか……。……」
「隣、行ってもええか？」
「え……。あ、うん、どうぞ」
ケビン神父はエステルの隣に立った。
「……ひとつ、聞きたいんやけど。エステルちゃん、カレシに会ってどないするんや？」
「え……」
「聞けば、それなりの事情で君らの前から姿を消したそうやな。再会できても、そんな相手にどんな言葉をかけられるのか……考えたこと、あるかな？」
「……。ひっぱたいても連れ戻すって思い込んだこともあるけど……。さすがに、そんな無茶が本当にできるとも思えないし……。正直言うと、あたしの言葉はヨシュアに届かないかもしれない」
「それが分かっていても……カレシを追いかけるんやね？」
「うん……。ヨシュアの背負った事情とかあたし自身の至らなさとか色々なことを考えたんだけど……。結局、いくら考えてもヨシュアに何て言ったらいいか思いつかなかったの。だから――その言葉は会ってから見つけることにする」
「へ……」
「だって、あたしの想いはあたしだけのものじゃないから。ヨシュアと一緒にいる間に自然と育ってきたものだから。だから……ヨシュアに会えたら初めてそれは浮かんでくると思う。あたしだけが伝えられるヨシュアへの言葉を――」
「……」
「だから、会えないうちからウジウジ悩むのは止めにしたの。えへへ、さっきみたいに感傷にひたることはあるけど……。それは乙女の特権ということで」

「……はあ、参ったなぁ。こっちの考えていた段取りがメチャクチャやんか」
「へ……？」
「？感傷にひたるエステルちゃん。？オレの鋭いツッコミに戸惑い悩むエステルちゃん。？オレからのナイスフォロー。？エステルちゃん、立ち直る⇒オレの株、赤マル急上昇！――――ってな必勝の段取りを用意して挑んだんやけど……。？、？をいきなりすっ飛ばされてしもうたわ」
「あはは、ゴメンゴメン。でも、ケビンさんってけっこう立派な神父さんよね。あたしみたいに悩んだり困ったりしている人をいつも気にかけてくれるし……」
「ガクッ……。まあ、確かにそれも神父のお仕事なんやけど……。エステルちゃんには半分以上、プライベートな理由で気にかけてるんやけどなぁ」
「え……？それってどういう――――」
「……ちょっと待った」
ケビン神父が急にエステルの話をさえぎった。
「？？？どうしたの、いきなり？」
「いや、向こうの方からボートが来とるんやけど……。なんかその上で人がぶっ倒れてるみたいや」
「へ！？」
エステルたちのいる桟橋でボートが止まった。
「ク、クルツさん！？」
意外だったのは、その上で倒れていたのはクルツだった。

第１３章　絆の在り処（７）

―川蝉亭

「――応急治療はしたけど、かなりのケガを負っとるな。しばらくは動かさん方がええやろ」

「そっか……」

「まさかクルツのやつがここまでやられるとはな……。一体、何があったんだ？」

「確か、クルツさんのチームはもう少しで《結社》の拠点を突き止められるって話だったよね。という事は、アネラスさんやカルナさんも一緒だったはず……。あ……！」

「……まずいな」

「一応、宿の通信器でルグラン爺さんに連絡したわ。すぐに各地のギルドと王国軍にも連絡が行くはずよ」

「で、でも……！下手をしたらアネラスさんたちが……！」

その間にアネラスたちが結社にやられてしまう可能性があるだろう。

「ええ……分かってる」

「俺たちも出来る限りのことをやっといた方がいいだろう。問題はクルツを乗せたボートがどこから流れてきたかだが……」

「ふむ、確かヴァレリア湖には島や岩場は無かったはずだね？」

「はい、水深が深いので……」

「ならば、湖岸のどこかから流れてきたのは間違いない。その場所を特定するのはなかなかやっかいそうだが……」

「うん……。かなり大きな湖だもんね。軍の警備艇にも捜索を頼めるといいんだけど……」

「う……」

エステルたちが話している時に、クルツがうめき声をあげた。

「クルツさん！？」

「こ……ここは……。エステル君……それにアガットたちも…

…」

どうやら目が覚めたみたいだ。

「ここはボース地方南部、湖畔の《川蝉亭》だ。あんた、ボートに乗ってここまで流れてきたんだぜ」

「そ……そうか……。たしか他のメンバーたちと《結社》の拠点に乗り込んで……。……それで……」

そこからクルツは黙り込んでしまった。話そうにも話せないようだ。

「ク、クルツさん……？」

「まさか……」

「クッ……何てことだ……。1度ならず2度までも……記憶を奪われてしまうとは……」

「や、やっぱり……」

「どうやら《教授》とやらに記憶を封じられたみたいだねぇ」

「た、頼む……ジンさん！以前やってもらったように『気』を自分に当ててくれ……！このままではグラッツたちが……！」

「……あれはあくまで対症療法にすぎんからな。暗示によって封印された肝心の記憶は蘇らないはずだ。それに、今の傷ついたあんたには負担が重すぎる」

「だ、だが……」

「……それやったらオレが何とかしてみますわ」

ケビン神父が自ら名乗りを上げた。

「へ……」

「……君は……？」

「七耀教会の《星杯騎士》、ケビン・グラハムいいますわ。アネラスちゃんから話は聞いてへんですかね？」

「おお……君が……」

「で、でも、ケビンさん。暗示の解除なんてできるの？」

「まー、深層心理にまで喰い込んだエグいのになると無理やけど……一時的に封じられた記憶なら何とかなると思うで？まだ、掛けられて時間も経ってへんみたいやし」

「そうなんだ……」
「ふむ、教会に伝えられるという門外不出の法術ということかな？」
「ま、そんな所ですわ。多少、精神的なダメージを喰らうかもしれへんですけど……それでも構わへんですか？」
「問題ない……是非ともお願いする」
「承知」
ケビン神父が星杯の紋章が入ったバッジを構えた。
「――――空の女神の名において聖別されし七耀、ここに在り」
ケビン神父が呪文を唱えるとバッジから光が放たれた。
「（わわっ……）」
「（わぁ、キレイ……）」
「識の銀耀、時の黒耀――――その相克をもって彼の者に打ち込まれし楔、ここに抜き取らん……」
呪文を唱え終えると、一際光が大きくなり消えた。
「……ッ……！」
クルツが苦しそうに呻く。
「大丈夫、クルツさん！？」
「ああ……大丈夫だ……。……霧が晴れたように色々と……思い出してきた……」
「霧が晴れるのに任せてゆっくり心を落ち着けて下さい。その向こうにある暗闇は覗き込んだりせえへんように」
「ああ……分かった。ふふ、精神的なダメージというのがどういう物か分かったよ……。あれは……私のエゴというわけか」
「あら、分かります？」
「これでも瞑想などをたしなむ方なのでね……。……」
……」
クルツが目を閉じたまま心を落ち着けた。
「……もう大丈夫。必要な情報は思い出せた……」
「ホ、ホント！？」
「ふむ……見事な術だ」

「ヘッ、ただの不良神父じゃなかったみてえだな」
「ふふ……良くやってくれたわね」
「なはは、どういたしまして。それでクルツさん。必要な情報っちゅうのは？」
「ああ……。《結社》の拠点はヴァレリア湖北西の湖岸……。そこに彼らの研究施設が秘密裏に建造されていた……」
「け、研究施設！？」
「そんな物をいつの間に……」
「ヴァレリア湖北西といえば人里離れた場所ですけど……。それでも警備艇による捜索が行われているはずですが……？」
「奴等は特殊な方法で施設を隠しているようでした……。上空にダミー映像を展開して空からの捜索を防ぐような……」
「あ、あんですって～！？」
「そりゃまた……とんでもない技術のようだねぇ」
「げ、原理的には可能ですけど、ちょっと信じられないです……」
「ふむ……幻術かもしれませんね」
「そして地上に関しては……接近すると、周囲に濃霧が発生するようにしているらしい……」
「霧……」
「ロレントの事件を思い出すな」
「我々のチームは霧を抜けて研究施設に潜入したんだが……。《執行者》と名乗る手練たちの待ち伏せにあった……。完全に隙を突かれて我々は総崩れとなってしまい……ボートに辿り着いたところで私は気を失ってしまった……。くっ、仲間を残して自分だけ逃げ延びることになるとは……」
「クルツさん……安心して！アネラスさんたちは絶対に助け出してみせるから！」
「エ、エステル君……？」
「ヘッ、そこまで分かってるならいくらでもやり様はあるだろう」
「そうね。軍の支援も期待できそうだし」

「後は俺たちに任せておきな」
「あ、ありがたい……。すまない……よろしく頼む……」
クルツは気を失った。
「ちょ、ちょっと！？」
「大丈夫、気を失っただけや。しかし……一刻の猶予もないみたいやね」
「うん……！王国軍が動く前にあたしたちも動かなくちゃ！」
「エステル、言わなくても分かってると思うけど……」
「うん……分かってる。今までの任務とはケタ違いに危険ってことよね。でも、いずれこういう形で《結社》とは対決することは覚悟していたし……。それが早まっただけだと思う」
「エステル……。ふふ、短い休暇だったわね」
「ヘッ、充分だろ。せいぜい腹を括るとしようぜ」
「だが、全員で乗り込んだらかえって目立ってしまうだけだ。ここは数を絞るべきだろう」
「うん……そうね。ねえ、みんな。あの時みたいに……あたしが選んでもいいかな？」
「あの時というと……封印区画の捜索のことね」
「ああ、それで構わんだろう」
「ま、俺を選ばなくても恨みっこなしにしてやるぜ」
「フッ、ボクは選んでくれると確信しているけどね」
「回復役が必要ならぜひ連れていってください」
「わ、わたしも機械の事とかきっとお役に立てると思う……！」
「みんな……」
「あー、水差して悪いんやけど。まずはオレをメンバーに選んでもらえへんかな？」
「へっ……」
「どうやらアネラスちゃんたちは《結社》の手に落ちたみたいや。助けた時、さっきみたいな術を掛けられていたらどないする？」
「あ……」

「なるほど、道理だな」
「仕方ねぇ……。お前はメンバー確定だ」
「へへっ、おおきに」
「もう、お礼を言うのはこっちの方だってば。それじゃあ……残りのメンバーを選ぶわね」
エステルはジン、クローゼ、レインを連れてヴァレリア湖へと向かった。

第１３章　絆の在り処（８）

―ヴァレリア湖

真夜中、エステルたちはボートで《結社》の拠点を目指していた。

「ふう……静かね。そろそろ向こう岸が見えてもおかしくないけど……」

「ふむ……方向はあっているはずだ。焦る必要はないだろう」

「は～、それにしてもお月様がキレイやねぇ。こういう夜は、本当なら彼女を連れてデートでもしたいところや」

「また呑気なことを……。でもケビンさんってちゃんと彼女いるんだ？」

「フッ、これでも大陸各地の街に１人ずつ恋人候補がおってな……」

「候補ってことは要するにフリーなわけね」

「ガクッ……もう少し引っ張らせてや」

「エステルさんのツッコミも厳しくなりましたね」

「ふふっ……」

「……でも、ケビンさんってどうして１人で行動してるの？《星杯騎士団》ってそんなに人手不足なんだ？」

「ま、今回の件については色々と事情があってな……。結果的にオレ１人が派遣されたんやけど……。状況次第では他の連中もこっちに来るかもしれへん」

「そうなんだ……。えっと《星杯騎士団》って古代遺物（アーティファクト）の回収がお仕事だとか言ってたよね？」

「正確には、調査・管理・回収やね。そのうち回収に関しては主に個人所有のブツに関してや。稼働するアーティファクトを個人が勝手に所有することは教会によって禁じられてるからな」

「でも、どうして取り締まる必要があるわけ？」

「アーティファクトの種類は色々なものがあるんやけど……それがどのような原理で作動するのか誰にも分からへん。そのくせ、使い

方次第では途轍(とてつ)もない力を発揮してしまう。そんな代物を個人が持った時、どういう事が起こりがちやと思う？」
「う、うーん……。どうなっちゃうのかしら？」
「大抵の場合、魅入られてしまう。力の誘惑に逆らえずにロクでもないことに使うんや」
「そ、それってほんと？」
「残念ながら歴史的にも証明されてる事実でな……。エステルちゃんたちもダルモア市長は知っとるやろ？」
「あ……」
「確かに、あの時の市長はとても残忍だった気がします。操られているよりも歯止めをなくしているような……」
「絶対的な力を所有することは人に歪んだ自信を与え、自制心をなくさせてしまう……。それを未然に防ぐというのも《星杯騎士団》の使命でな。ま、綺麗事ばかりやないけど」
「そ、そうなの？」
「ま、遊撃士協会にだって公に出来ないことはあるやろ？それと同じようなもんや」
「う、うーん……。確かに否定はしないけど」
エステルたちが話していると、突然、視界が真っ白になった。
「あ……！」
「どうやら敵の拠点に近付いてきたようだな……」
「なら、このまま真っ直ぐ進んでいくしかなさそうや」
「うん……。待ち伏せの可能性もあるから気を引き締めて行きましょ」
ボートの速度を上げて一気に進んだ。

―湖畔の研究所
しばらく進むと霧が晴れて研究施設が見えた。

「……抜けたみたいやね」

「よし……到着ね」

ボートを岸に停め、岸に降りた。

「とりあえず、この辺りには人の気配は無さそうだけど……」

「油断は禁物や。とにかく上の建物を慎重に調べるしかないやろ」

「それに、相手が相手だ。危険だと思ったら迷わずここまで撤退するぞ」

「うん……そうね！」

エステルたちは準備を整え、研究施設に向かった。

エステルが研究施設の扉を調べると、固く閉ざされていた。

「ダメか……」

「どうやらこの扉は中からロックされているようです」

「別の入口を探すしかなさそうやね」

―研究施設1階

裏口から潜入したエステルたち。その中では驚くべき物が作られていた。

「な、なによここ……」

「何ともケッタイな場所に出たもんやな……」

「ふむ……。人の気配は無さそうだが……」

しかし、人の代わりに自動の哨戒機が出てきた。

「こ、こいつら！？」

「まさか……人形兵器（オーバーマペット）！？」

「話は後です！先に破壊しましょう！」

「は～、ビックリした。でもこれって……《結社》の人形兵器ってこと？」

「ああ……。アーネンベルクに現れたのと同じ、現代の導力技術で造られたヤツや」

「でも、不思議ですね……。あれだけ騒いだのに人が集まる気配がありません」

「確かに……。……アネラスさんたち本当にここに捕まってるのかな」

「多分、こいつらは自動巡回中の人形兵器やろ。とにかく他のエリアも調べるしかなさそうやね」

―1階　最奥

「あれ……！？」

部屋に立っていたのはグラッツだった。

「グラッツさん！」

「……」

しかし、グラッツは後ろを向いたまま振り向かなかった。

「よかった、無事だったんだ！クルツさんに事情を聞いてあたしたちも来たんだけど……」

「待った……様子が変やで」

「へ……」

グラッツは振り向くとエステルたちに向かって剣を抜いた。

「……」

「あ……！」

「……やられたか！」
「そんな……！」
「……やるしかなさそうですね」

何とかグラッツを止めたエステルたち。
「はあはあ……。さ、さすがに……かなり手強かったわね」
「……灯台で操られていた《レイヴン》の方々と同じですね」
「さてと……」
ケビン神父はクルツの時と同じように暗示を解除した。
「ぐっ……」
グラッツは
「……悪い……迷惑をかけたみたいだな」
「グラッツさん……！」
「どうやら状況は分かっているようだな？」
「ああ、顔は思い出せないが何者かに意識を奪われて……ここで新たな侵入者を撃退するように命じられたんだ……」
「例の《教授》ね……。アネラスさんとカルナさんがどこにいるか知ってる？」
「いや……別々に捕まったからな。たぶん、俺と同じようにどこかに捕まってるはずだが……。くっ……」
グラッツは立とうとして膝を落とした。
「だ、大丈夫！？ほら、肩を貸して。崖の下にボートがあるからそこまで案内するわ」
「だ、大丈夫だ……。建物の構造は分かっているから1人でも脱出できる……。これ以上、お前たちの足を引っ張りたくはねえしな……。代わりと言っちゃあ何だが、カルナとアネラスを頼むぞ……」
「グラッツさん……。うん……任せといて！」
グラッツは再び立ち上がると部屋を出ていった。

「だ、大丈夫かな……」
「今はあの兄さんを信じて先に進むしかないで。あと2人残っとんのやろ？」
「うん……」
「急ぐ必要がありそうだな……」

―2階　最奥
「あ……！」
そこでカルナがグラッツと同じく操られていた。
「……」
「やっぱりカルナさんも……」
「やるしかなさそうだな……」

「さ、さすがに苦戦させられたかも……」
「よし、オレの出番やな」
ケビン神父がカルナの暗示を解除した。
「くっ……。あ、あんたたち……こんな所までよく来てくれたねぇ……」
「カルナさん、大丈夫!?」
「ああ……大丈夫さ……。それよりも……他の連中は見つけたかい？」
「さっきグラッツさんを解放したばかりよ。アネラスさんはまだだけど……」
「そうかい……。例の《執行者》どもには出くわさなかったのかい？」
「ううん、人形とは何体も戦っているけど……。そもそも人の気配

がぜんぜん無いみたいなのよ」
「妙だね……。他にも兵士や研究員が何十人もいたはずなんだが……。もしかしたらもう……引き払った後かもしれない」
「ふむ……。油断は禁物だがあり得るかもしれんな」
「あたしは何とか1人で脱出できる……。アネラスのこと……一刻も早く見つけておくれ」
「うん……任せて！」
カルナは立ち上がると部屋を出ていった。

―2階　とある部屋
その部屋には、《封印区画》で出てきた《環の守護者》トロイメライがあった。
「あ、あの時の機械獣！？」
「は～、確かに城の地下にあったのと同じタイプやねぇ」
「ど、どうしてこんな物がここに……。ていうか、あんな化物がどうして2体もいるわけ！？」
「それは分からんが……どうやら予想以上にやばい施設だったようだな」

―3階　開発室
ケースの中には大きな《ゴスペル》があった。
「え……これって新型ゴスペルじゃない？」
「どうやら間違いないようですね」
「……新型ゴスペルはこの施設で造られてたんだ」
「まさか、《ゴスペル》がリベールで製造されとったとはね」

もう一方のケースの中には、『杭』の形をした装置があった。
「え……これってもしかして……」
「ふむ、ヴァルターが使っていた『杭』と同じ物のようだな」
「……あの装置までここで造ってたんだ」

―3階　最奥
「……！」
エステルたちの予測通り、アネラスがいた。
「やっぱりアネラスさんも……！」
「とりあえず、いったん抑えるしかないで！」

「ア、アネラスさん……。なんかメチャクチャ強くなってるんですけど……」
「よし……起こすとするか」
ケビン神父がアネラスの暗示を解除した。
「あうっ……。えへへ……エステルちゃん……。それにケビンさんも……助けに来てくれてどうもありがとね……」
「アネラスさん……身体の方は大丈夫？」
「う、うん……バッチリだよ……。それよりも……カルナさんたちは……？」
「大丈夫や、全員解放した。アネラスちゃんで最後ってわけや」
「そ、そうなんですか……良かったぁ……。ゴメンね、エステルちゃん……せっかく一緒に戦おうって約束したのに、こんな事になって……」

「ううん、気にしないで。アネラスさんたちのおかげでここの場所だって分かったんだし。充分、拠点探索のお仕事を果たしてくれたと思うわ」
「エステルちゃん……。そ、そうだエステルちゃん！私……伝えなくちゃいけない事があったんだ……！」
「へ……なに？」
「あのね……あのね……。に、逃げている最中にヨシュア君を見かけたの……！」
「！！！」
「あ……！」
「……そいつは……」
「見間違えとかではないのですか？」
「ううん……。私が兵士に追い詰められた時、いきなり現れて包囲を崩してくれて……見覚えのある服と黒髪だったから間違いないと思うんだけど……」
「……」
「エステル……ちゃん？」
「――あ。うん、ゴメン……。そ、それでアネラスさん！ヨシュアはどこに行ったの！？」
「分からない……。わたしもその場は逃れたけど結局は捕まっちゃったから……。でも……ひょっとしたら屋上に向かったのかもしれない」
「屋上？」
「この建物……屋上に飛行艇の発着場があるみたいなの……。ここにいた兵士と研究員はそっちに向かったみたいで……」
「そっか……分かった！」
「アネラスちゃん。１人で脱出できるか？」
「うん……大丈夫です。この先もまだ……何かあるかもしれない……。みんな……くれぐれも気を付けてね！」
アネラスは立ち上がると部屋を出ていった。

「……」
「まさか、ヨシュア君がここに来とったとはな……。とにかく屋上を目指すとするか！」
「……うん！」

―４階　最奥
部屋に入ると人が１人倒れていた。その人物は……ヨシュアだった。
「ヨシュアっ！？」
エステルたちはヨシュアの元にかけよった。
「ヨシュア！ねえ、ヨシュアってば！な、なんでこんなに身体が冷たいのよぅ……。起きて……起きてってばぁ！」
「そ、そんな……」
「……」
「……う……」
「ヨシュア！？」
「……エ……エステル……。どうして君が……こんなところに……」
「よ、よかった……無事……だったんだ……。待ってて、すぐに手当てを――」
「！いけません、エステルさん！」
レインがエステルを突き放してヨシュアの剣を受け止めた。
「くっ……」
「えっ……！？」
「ヨ、ヨシュア……」
エステルやクローゼはヨシュアの反応に驚いた。
「これは……ヨシュアさんではありません……」
「……」
ヨシュアが顔を上げると、顔は真っ白だった。

「！！！」
「人形……！」
「小癪な……！」
さらに、どこからともなく同じ人形が2体現れた。

「はあはあ……」
「くっ……さすがにキツイな……」
突然、奥から拍手が聞こえてきた
「あ……！」
暗闇の中に3人の人物がいた。
「クスクス……」
「……」
「はは、偽物と気付くのが少しばかり遅すぎたようだね。今回のゲームは私の勝ちにさせてもらうよ」
男性が指を鳴らすと、目の前にガラスの壁が現れ、閉じ込められてしまった。
「なっ……！」
「ヤバイ……！」
部屋にガスが放たれ、エステルたちの意識が遠のいていった。
「あ……」
「……こいつは！」
「クッ……意識が……」

「簡単すぎるゲームだったが、君の反応はなかなか楽しかった。お礼と言っては何だが……面白い場所に招待させてもらうよ」

「うー……」
「むっ……」
「あ……」
「くっ……」
しばらくして、3人が起き上がった。
「え、えらい目に遭ったわ……。エステルちゃん、大丈夫か――」
「！しまった……！」
「……どうしましたか？」
「エステルちゃん！？お、おい、冗談やろ……」
周りを見渡してもエステルの姿はなかった。
「皆さん、こちらに階段があります！おそらく、上に行ったと思います！」
「！！！」

―研究施設　発着場
ケビン神父たちが発着場に出た時、飛行艇が出る瞬間だった。
「しもた……！」
「あ……！」
「逃がすものですか……！」
レインが剣を抜き、ワイスマン教授たちに飛び掛かった。しかし、剣帝レーヴェに止められた。
「見苦しいよ、S級遊撃士レイン君。今回は私の勝ちなのだよ。エステル君は私が預かろう」
「くっ……」
飛行艇が高度を上げ、そのまま飛び去っていった。
「エステルちゃん……！」

ケビン神父の声はむなしく夜空に消えていった。

第13章　絆の在り処（9）

「……ここ……は……」
「……エステル……」
どこからともなく声が聞こえてきた。
「ヨシュア！？」
振り返るとヨシュアが立っていた。エステルはヨシュアに向かって走ったが、いくら走ってもヨシュアの元に行けなかった。
「な……なんで……？」
「いいんだ……。……もういいんだよ……」
すると、ヨシュアの右腕が取れた。
「ああっ……！」
「元々……僕は壊れた人形だから……」
次には左腕も外れた。
「人間には戻れないから……」
ついには、ヨシュアの身体が完全にバラバラになってしまった。
「だから……もういいんだよ……」
「……あ……」
エステルはヨシュアの頭を拾い上げた。
「ありがとう……。さよならエステル……」
ヨシュアの目が閉じられた。
「い……いや……。いやあああああっ！」

「……あ……」
エステルはベッドの上で目を覚ました。どうやら夢だったらしい。
「ビックリした……。エステル、大丈夫？」
ベッドの脇にはレンが立っていた。

「レン……。よ、よかった……夢だったんだ……」
「うふふ……怖い夢を見ちゃったのね？」
「うん……もう最悪な夢……。だいたい、あんな人形なんか出てくるから変な夢を――」
そこでエステルは飛び上り、身構えた。
「……ちょ、ちょっと！どうしてレンがこんな所にいるのよっ！？」
「うふふ……驚くタイミングがズレてるわよ。エステルったら相変わらずノンキなんだから」
「わ、悪かったわね、ノンキで・……って、ここ……」
エステルは周りを見渡した。
「ここにレンがいるのは別におかしい事じゃないわ。だって、レンたちの新しい拠点なんだもの」
「新しい拠点……」
「うふふ……。その窓から見てみれば？」
「……」
エステルはレンに言われた通りベッドから降りて窓から外を見た。
「な……！」
その光景にエステルは驚愕した。なぜなら、巨大な赤色の飛空艇の中にいて空中にいたからだ。
「……（パクパク）」
「《紅の方舟》グロリアス……。これ一隻で、一国の軍隊を圧倒することが可能よ。うふふ、なかなか面白そうなオモチャでしょう？」
「あ、あんたたち……こんな物を持ち出して何を……」
「やあ、お目覚めのようだね」
部屋のどこからか男性の声が聞こえてきた。
「ようこそ、エステル君。寝心地はいかがだったかな？こんな場所に連れて来られてさぞかし混乱しているだろう。だが、我々は君に対して危害を加えるつもりはない。安心してくれて結構だ」
「……」
「どうだろう、一度ゆっくり話してみるつもりはないかね？結社の

こと、我々の目的、そして共通の友人について……。色々な疑問に答えてあげられると思うよ」
「……いいわ。聞かせてもらおうじゃない」
「よろしい、待っているよ。レン、エステル君を案内してあげてくれたまえ」
「うふふ、分かったわ。それじゃあ、エステル。《聖堂》に行きましょう」
「《聖堂》……？」
「この艦の最上階にあるなかなかステキなお部屋よ。そこで《教授》が待ってるわ」
「……。……分かった。案内してもらおうじゃない」
「うふふ、そんなに緊張しなくてもいいわ。多分、エステルにとってもきっと悪くない話だから」
「へ……どういうこと？」
「お楽しみは後でね。ほら、レンに付いてきて」

エレベータに乗って最上階に着いたエステル。
「うふふ……ここが教授のいる《聖堂》よ。ここから先はエステル1人で行くといいわ」
「……ねえ、レン」
「なあに？」
「研究所で、ヨシュアの人形を操っていたのはレンなのよね？」
「ええ、そうよ。《教授》に頼まれたんだけどなかなか面白かったでしょう？」
「はあ……。……どうやらあんたも《結社》の被害者みたいね」
「え……？」
「……ま、今はいいか。それじゃあ行ってくるわね」

「うふふ、行ってらっしゃい」

―聖堂

聖堂ではワイスマン教授がパイプオルガンを弾いていた。エステルが来るとその手を止めた。

「ようこそ……《紅の方舟》グロリアスへ。久しぶりだね、エステル君」

「アルバ教授……。やっぱりあなただったんだ。さっき声を聞いてようやく思い出せたわ」

「フフ、さすがは《剣聖》の娘といったところかな。軽くとはいえ、封鎖された記憶を自力で思い出してしまうとはね」

「……」

「ちなみに本当の名前は、ゲオルグ・ワイスマンという。《身喰らう蛇》を管理する《蛇の使徒》の一柱を任されている」

「《蛇の使徒》……。《結社》の最高幹部ってとこ？」

「まあ、そのようなものだ。さてと――先ほど言ったように私には君の疑問に答える用意がある。何か聞きたいことはあるかね？」

「……。……聞きたいことがあり過ぎて何から聞こうか迷うんだけど……」

「焦ることはない。ゆっくりと考えたまえ。よかったら一曲、弾かせてもらおうか？」

「結構よ。ていうか、そんな趣味を持ってる人とは思わなかったんだけど……。貧乏な考古学者っていうのは完全に嘘っぱちだったわけね」

「フフ、貧乏はともかく考古学を研究してるのは本当さ。ちなみにパイプオルガンは教会にいた頃、嗜(たしな)んでいたものでね。あの帝国人ほどではないが、それなりの腕前だっただろう？」

「きょ、教会にいた……？」

「いわゆる学僧というやつさ。《盟主》と邂逅したことで信仰の道は捨ててしまったが……。その時に学んだ古代遺物（アーティファクト）の知識は今もそれなりに役立っている。そう、今回の計画においてもね」

「……。大佐をそそのかしてクーデターを起こさせたのも……各地で《ゴスペル》の実験をして色々な騒ぎを起こさせたのも……全部……あんただったわけね」

「その通り――全ては《福音計画》のため」

「『福音計画』……。あの研究所のデータベースにもそんな項目があったけど……。要するに《輝く環》を手に入れる計画ってわけ？」

「手に入れるというのはいささか誤った表現だが……まあ、そう思ってもらっても構わないだろう」

「《輝く環》って何？女神の至宝って言われているけど具体的にはどういうものなの？」

「《輝く環》の正体に関しては現時点では秘密にさせてもらおう。せっかくの驚きを台無しにしたくはないからね」

「驚きって……」

「計画も第3段階に移行した。もう少しで、その正体は万人に遍（あまね）く知れ渡ることになる。フフ……その時が楽しみだよ」

「……」

「そして《環》が現れたその時……我々は、人の可能性をこの目で確かめる事ができる」

「人の可能性……。《レグナート》もそんな事を言っていたような……」

「ほう、あの聖獣からそこまでの言葉を授かったか。ふむ、あながちお父上の七光りだけではないようだね」

「お世辞は結構よ。何よ……色々質問したってはぐらかしてばかりじゃない」

「これは失礼……そんなつもりじゃなかったのだが。だが、君が一番聞きたい質問にははっきり答えられると思うよ」

「……」

「おや、何をそんなにためらっているのかな？恐れることはない。勇気をもって訊ねてみたまえ」

「……。ヨシュアは……どこにいるの？」

「フフ……それは私にも分からない。どうやら空賊たちと一緒に何かを画策しているようだが……。いまいち動きが掴めなくてね。今のところ、生きているのは間違いないだろう」

「そ、そうなんだ……」

「ヨシュアの能力は、隠密活動と対集団戦に特化されている。そのように調整したのは私だが予想以上の仕上がりだったようだ。フフ……どこまで頑張ってくれるか楽しみだよ」

「あんた……」

「ああ、そんなに怖い顔をしないでくれたまえ。私の元に預けられた時、ヨシュアの心は崩壊していた。そんな心を再構築するなど私にも初めての試みだったのだ。その成果を気にかけるのは研究者として当然とは思わないかね？」

「……。……あの生誕祭の時、ヨシュアに何を言ったわけ？」

「封じた記憶を解除して真実を教えてあげただけだよ。君の家に引き取られた彼が無意識のうちにスパイとして《結社》に情報を送っていたこと……。そして、彼の情報のおかげでリシャール大佐のクーデターが成功し、我々の計画の準備が整った事をね。そのご褒美として、改めて《結社》から解放してあげたんだ」

「……。……やっと分かった……。ヨシュアがどうして……あの夜……姿を消したのか……。どうしてあんな顔で……さよならって言ったのか……」

「いや、それについてはさすがに遺憾に思っているよ。自分を取り戻したヨシュアが君たちの前から姿を消すとはね。そのまま素知らぬ顔で君たちと暮らしていくといいと勧めておいたのだが……。フフ、親切心が仇になったかな？」

「よくも……そんな事が言えるわね……。そんな道を選ぶしかない

ようヨシュアを追い詰めたくせに……。あんな顔をして……ハーモニカをあたしに渡して……。さよなら……エステルって……」
エステルは武器を構えた。
「全部、全部ッ！あんたのせいじゃないかああ！」
そして、ワイスマン教授に殴りかかったが、剣帝レーヴェがワイスマン教授の前に現れ、エステルを弾き飛ばした。
「あうっ……」
「……」
「《剣帝》レーヴェ……。い、一体どこから現れたの……」
「……最初からここにいた。お前が気付かなかっただけだ」
「やれやれ……何とも品のない振る舞いだ」
男の声が聞こえてきたかと思うと、怪盗紳士ブルブラン、痩せ狼ヴァルター、幻惑の鈴ルシオラたち《執行者》が現れた。
「やれやれ、私の挑戦をあれだけ潜り抜けたのだ。無様な姿を晒すのはやめてほしいところだ」
「クカカ、そう言うなよ。《白面》に殴りかかれるなんざ並の度胸じゃできねえはずだぜ」
「ふふ、腕はともかく度胸だけは大したものね。それとも鈍いだけなのかしら」
「あ……う……」
エステルは思わず後ずさりした。
「ウフフ……君が《剣聖》のお嬢さんか」
「フフ、初めましてかな。執行者Ｎｏ．０――《道化師》カンパネルラさ。以後、ヨロシク頼むよ？」
「くっ……」
「もう、みんなでエステルを脅かしたらダメじゃない」
「レン……」
「うふふ……心配しなくてもいいわ。別にエステルを殺すために集まったわけじゃないから」
「へ……」

「ねえ、教授。早く例の話をエステルにしてあげて？」
「フフ……そうさせてもらおうか」
ワイスマン教授が数歩前に出た。
「どうだろう、エステル君。《身喰らう蛇》に君も入ってみる気はないかね？」
「へ……。……ごめん。聞き違えちゃったみたい。もう一度、言ってくれない？」
「君も《身喰らう蛇》に入ってみる気はないかと言った。まずは《執行者》候補としてね」
「あ、あ、あ……あんですってー！？」
「フフ、そんなに驚くことではないだろう？考えてもみたまえ。君が《結社》に入ればヨシュアも意地を張らずに戻ってくるとは思わないかね？」
「あ……」
「エステルの望みはヨシュアと再会することよね？《結社》に入りさえすればその望みはすぐにでも叶うわ。うふふ……考えるまでもないわよね」
「……で、でも……。……あたし……」
「フフ、ゆっくりと考えたまえ。この後、我々はしばらく艦を留守にする必要があってね。帰ってきたら、その時にでも返事を聞かせてもらおうか」
ワイスマン教授が指を鳴らすと、紅蓮の兵士が2人現れた。
「申し訳ないが、それまでは君の自由は制限させてもらうよ。足りないものがあれば彼らに希望を伝えるといい」

第１３章　絆の在り処（１０）

―エステル監禁室

部屋ではエステルが１人思い悩んでいた。

「（《結社》に入ればヨシュアと再会できる……。確かにその可能性はかなり高いのかもしれない……。それに、何も本当に仲間になる必要はないよね……？仲間になったフリをして内情を探ってもいいんだし……。あたしの演技力じゃ厳しいけど、ここに閉じ込められるよりは……。……）」

エステルは椅子から立ち上がり、窓から外を眺めた。

「（でも……何だか違う気がする……。それは……あたしのやり方じゃない）」

「……邪魔するぞ」

ドアがノックされ、剣帝レーヴェが入ってきた。

「あ……。……」

「フ……そう警戒するな。先ほどのような考えなしの行動をしない限り、お前に危害が及ぶことはない」

「悪かったわね、考えなしで。なによ、あんたたち、どこかに出かけるんじゃないの」

「俺はただの留守番だ。出かけるのは教授と他の《執行者》たちになる」

「……一体、何をするつもり？」

「それが知りたければ教授の誘いに応じたらどうだ？一通りの情報が分かるだろう」

「……」

「フフ……。答えは出ているが迷いがあるといったところか？」

「！！！」

「俺個人の意見としては、お前は到底《結社》に向いているとは思えない。能力的にも、性格的にもな」

「うぐっ……。そうはっきり言われるとけっこう傷付くんですけど……」

「まあ、能力については可能性は秘めているだろう。だが、性格に関しては……《結社》と関わるにはお前の闇はあまりに小さすぎる」

「闇……」

「《結社》に属する者はみな、何らかの闇を背負っている。俺、教授、他の執行者……。そして無論、ヨシュアもな」

「……。ねえ《剣帝》……。あなたとヨシュアって一体、どういう関係なの？」

「……」

「ヨシュアはずっとロランス少尉のことを気にしてた。顔は分からないのに誰だか知っているみたいで……。それでいて正体を知ろうと必死になっていた気がする」

「フッ……無理もない。あいつは記憶の一部を教授によって封じられていた。《結社》の手を離れた瞬間から具体的な情報が思い出せなくなるよう暗示をかけられていたはずだ。自分が《結社》でどんなことをしていたか覚えていても関係者の名前は思い出せない……。そんなジレンマがあっただろう」

「あ……」

「幼い頃の記憶も同じ。恐らく、カリンは覚えていても俺の記憶は曖昧になっていたはずだ」

「そっか……それで……。って、『カリン』ってどこかで聞いたことがあるわね？」

「……」

剣帝レーヴェはエステルの隣に寄った。

「――カリン・アストレイ。俺の幼なじみでヨシュアの実の姉だ。10年前に亡くなった」

「！！！」

「お前の持つハーモニカは元々はカリンの物だった。それを形見としてヨシュアが受け取り……それをお前が受け取ったわけだ」

「ヨシュア……お姉さんがいたんだ……。……。あの……どうして……カリンさんは……お姉さんは亡くなったの？」

「……それを知ったらお前は真っ白のままで居られなくなる。ヨシュアや俺たちの居る闇の領域を覗き込むことになる。その覚悟はあるか？」

「……。……うん、教えて。覚悟があるかどうかはちょっと分からないけど……。あたしは……ヨシュアの辿ってきた軌跡をどうしても知っておきたい。その気持ちは本当だから」

「……いいだろう」

剣帝レーヴェが過去のことを話し始めた。

あれは１０年前……俺たちのいたハーメル村がまだ地図にあった頃のことだ。

ハーメルは小さな村でな……。子どもが少なかったこともあって俺たちはいつも一緒に過ごしていた。俺はいずれ遊撃士になることを夢見てヒマを見つけては剣の練習をし……それをカリンと小さなヨシュアが眺めているのが日課になっていた。

……練習が終わった後、俺とヨシュアは、カリンの奏でるハーモニカの旋律に耳を傾けた。カリンは何でも吹けたが、俺たちの一番のお気に入りは一昔前に流行った『星の在り処』だった。そんな日がいつまでも続く……そう俺たちは信じて疑わなかった。

村が襲われたのは、そんなある日のことだった。王国製の導力銃を携えた黒装束の一団……。彼らは村を包囲した上で住民たちをなぶり殺しにしていった。ただ一人の例外もなく、年寄りから赤子に至るまで。一息で殺された者はまだ幸せだったかもしれない。……女たちの運命はさらに悲惨だった。

俺たちは――その地獄の中を必死に逃げた。家族とみんなの断末

魔を聞きながら『逃げろ！』という声に押されてただひたすらに村外れを目指した。そして、村外れに出たところで俺は追っ手を攪乱（かくらん）することにした。すぐに追いつくと言い聞かせてカリンとヨシュアを先に行かせた。

だが……襲撃者たちは想像以上に用意周到だった。逃げた村人を始末する者を待機させていた。

俺が追い付いた時、その場は奇妙に静かだった。喉を撃ち抜かれた男の死体……。銃を握って呆然とするヨシュア……。肩から背中を切り裂かれながらヨシュアを抱き締めるカリン……。カリンは……まだ辛うじて息が残っていた。

なぜかカリンは……穏やかで満ち足りた表情を浮かべていた。愛用のハーモニカをヨシュアに託し、ヨシュアのことを俺に頼んで……。

そして――静かに逝った。

「……。……なん……で……。どうして……そんな事が……」

「帝国軍がリベールに侵攻したのはその直後のことだ。王国製の導力銃を携えた襲撃者によって起こされた国境付近での惨劇……。それは侵略戦争を始めるにはあまりにも格好の口実だった」

「……そんな……。本当にリベールの兵隊が……？」

「軍に保護された俺たちは最初そのように聞かされていた。だが数ヶ月後……帝国軍の敗退で戦争が終わった時、俺たちはまったく別の説明を受けた。村を襲った者たちは猟兵団くずれの野盗たちだったと。そして、決して襲撃のことを口外しないように俺たちを脅して……。軍は、土砂崩れが起きたと発表し、ハーメルに至る道を完全に封鎖した」

「ちょ、ちょっと待って！？なんでわざわざ嘘をつく必要があるわけ？それじゃあまるで……」

「クク……。全ては帝国内の主戦派が企てたリベールを侵略するためのシナリオだったというわけだ。戦争末期、その事が露見し、帝国政府は慌てふためいたという。なりふり構わず停戦を申し出、首謀者たちを悉く処刑することで事件を無かったことにした。これが――『ハーメルの惨劇』の真相だ」

「……」

「そんな日々の中……ヨシュアの心は完全に壊れた。姉の死、親の死、隣人の死、初めて人の命を奪ったショック、そして欺瞞に満ちた世の中……。6歳の子どもの心が壊れるには充分すぎるほどの出来事だった」

「……」

「多分、その先のことはヨシュアから聞いているだろう。心が壊れたヨシュアはハーモニカ以外に興味を無くし、次第に痩せ衰えていった。そんなヨシュアと俺の前にあのワイスマンが現れて……。俺は彼にヨシュアを預けて《身喰らう蛇》に身を投じた。そしてその2年後……。教授に調整されたヨシュアも俺と同じ道を辿ることになった」

「……」

「――これが闇だ。エステル・ブライト。お前とヨシュアの間にどんな断絶があるのか……ようやく理解できたか？」

「……。……うん。やっと、ヨシュアが居なくなった本当の理由が見えてきた気がする」

「なに……？」

「――教授の誘いは今ここで断らせてもらうわ。あたしは絶対に《身喰らう蛇》には入らない。《結社》が好きか嫌いかそういうのとは関係なく……あたしがヨシュアを追い続ける限り、絶対にね」

「……」

「せっかく仲間に誘ってくれたレンには申し訳ないけど……。ま、謝れば許してくれるよね？」

「フッ……おかしな娘だ。今の話を聞いて逆に迷いを吹っ切るとは

な。どうやら、ただ《剣聖》の娘というわけでは無さそうだ」
「そ、そう？よく分からないけど……。そういうあなたこそただヨシュアの昔の仲間ってだけじゃなかったわけね。お兄さん的な存在だったんだ」
「……。誤解のないように言っておくが俺があいつの兄代わりだったのは１０年前までだ。今の俺にとって、あいつは排除すべき危険分子に過ぎない」
「え……」
「教授はヨシュアを泳がせて楽しんでいるようだが……。俺の考えは教授とは異なる。いずれ近いうちに俺自身の手で始末するつもりだ」
「ちょ、ちょっと！どーしてそうなるのよ！？カリンさんに……ヨシュアのお姉さんに頼まれたんでしょっ！？」
「俺は俺の、選んだ道がある。その道を遮るものは如何なるものも斬ると決めた。たとえそれがカリンの願いであってもな」
「そんな……」
その時、《グロリアス》のどこかが開く音がした。
「あ……」
赤い飛行艇が５隻、飛んでいった。
「あれって……」
「教授と他の連中だ。計画の第三段階がいよいよ実行に移される」
「だ、第三段階って……」
「フッ……お前がそれを知る必要はない。事が成ったら、父親の元に返してやることもできるだろう。それまではせいぜいここで大人しくしているがいい」
剣帝レーヴェは部屋を出て行こうとした。
「ちょ、ちょっと！？」
「言っておくが……逃げようなどと考えるなよ。地上８０００アージュの高みだ。どこにも逃げ場などないぞ」
それを言い残して剣帝レーヴェは部屋を去った。

「……。逃げようなどと考えるな、か。そう言われたらかえってやってみたくなるのが人情よね。幸い、教授やレンたちは出かけちゃったみたいだし……。よし……そうと決まれば！」

エステルは部屋の隅々を確認した。そして、窓の所で立ち止まった。

「……。タイミングが命だけどそれさえ見極められれば……。油断させるために2時間ほど大人しくして……。……うん！試してみる価値はありそうね」

エステルは懐からハーモニカを取り出した。

「……お姉さんの形見の品だったなんてね。ヨシュアのバカ……そんなもの簡単に渡さないでよ」

第13章　絆の在り処（11）

―数時間後

「交替の時間だぞ。小娘の様子はどうだ？」

エステルの監禁室の前で見張っていた強化猟兵のもとに交替の猟兵が現れた。

「はは、大人しいもんだ。いくら遊撃士とはいえ、所詮は子どもということだな。恐くてベッドで震えているんだろうさ」

「フン……。ガキの見張りで留守番とはな。まったく、つまらん任務だ。俺も機動作戦に参加したかったぜ」

「そうボヤくなよ。レオンハルト様の命令なんだから」

その時、部屋の中から何かを叩く音が聞こえてきた。

「……ん？」

「なんだ、この音は？」

強化猟兵はドアを叩いた。

「おい！いったい何をしている！？」

そして、ガラスか何かが壊れる音が響いた。

「おい、まさか……」

「脱走か！？」

2人は部屋の鍵を開けて中に入った。

「や、やられた……」

「ば、馬鹿な！ここをどこだと思っている！あの娘、自殺でもするつもりか！？」

窓から下を見下ろしたが、エステルの姿はなかった。

「……。駄目だ、落ちたかもしれん……」

「おいおい、勘弁してくれよ……。レオンハルト様になんて言い訳

をすりゃいいんだ？あのクソガキが……余計な面倒を起こしやがって！」

「だ～れがクソガキですって？」

エステルが窓の上から現れ、猟兵の1人を足で吹っ飛ばした。

「き、貴様っ！？」

「甘いわよ、オジサン！」

猟兵の銃弾をかわし、棒で猟兵を壁に叩き付けた。

「ぐはっ、ゲホゲホ……」

「ふふん。遊撃士をナメないでよね。だいいち、失礼が過ぎるわよ？乙女をクソガキ呼ばわりなんて」

「ひ、人違いだ……。俺はそんな風に呼んでないぞ……」

「あれ、そうだったっけ？まあいいや、オジサンも同罪。しばらくオネンネしてなさいよね」

エステルは猟兵の頭を思いっきり棒で叩いて気絶させた。

「……う～ん……」

「さ～てと……。すぐに増援が来るだろうし、とっとと逃げるとしますか。何とか脱出方法を見つけないと……」

エステルは拳を握りしめ、心の中で叫んだ。

「（あたしは諦めない……。もう一度ヨシュアに……あのバカに会うまでは……絶対に諦めないんだから！）」

―グロリアス　甲板

「ああっ……！」

エステルが出た所は、甲板の上だった。

「マズったなぁ……。つい甲板に出ちゃったみたい。それにしても……馬鹿馬鹿しいほどの大きさね」

改めて《グロリアス》の大きさに驚くエステル。

「脱出するためにはパラシュートを探すか飛行艇を乗っ取るしかな

い……。とにかく先に進まなくちゃ！」

エステルが甲板の上を進んでいると、下の階から兵士がやってきた。
「いたぞ！」
「しまった……！」
慌てて引き返そうとしたが、
「くっ……」
すでに包囲されていた。
「フッ……ここまでのようだな」
「さすがS級遊撃士、《剣聖》カシウスの娘か。こんな状況で脱走とは恐れ入る」
「……」
「抵抗しても無駄なことは分かっているはずだ。大人しく投降するがいい」
「はは、無様だな。エステル・ブライト」
4人に包囲されて追い詰められているエステルの元にもう1人の兵士がやってきた。
「……？」
「フッ、この状態では僕のことが分からないか。仕方ない。特別に顔を見せてあげよう」
兵士が仮面を取った。
「へ……！？」
「フフ……。ようやく思い出したようだね。こんな所で僕と会えるとは夢にも思っていなかっただろう？」
「えっと……見覚えはあるんだけど。どちらさま……だっけ？」
その言葉に青年がキレた。
「ダルモア市長の元秘書、ギルバードだ！自分が逮捕した人間くらいちゃんと覚えていたまえ！」

「だ、だって意外過ぎるわよ！第一あんた、王国軍に引き渡されたはずでしょ！？なんでこんな所にいるわけ！？」
「フッ、クーデター事件の時、混乱のスキを突いて脱走してね。その後、《結社》に拾われて忠誠を誓うことになったのさ」
「た、たくましいというか諦めが悪いというか……。そんな格好してるけど、まさか戦ったりするわけ？」
「僕が戦ったらおかしいか？フッ、秀才の僕ではあるが、これでも文武両道なのでね」
「でも灯台で、特務兵に撃たれてものすごい悲鳴を上げてたし……。あんまり戦いとかには向いてないんじゃないかなって」
「う、うるさいッ！《結社》に加わってから僕は戦闘強化プログラムを受けた！身体能力は大幅に強化され、最高レベルの戦闘技術も習得した！遊撃士風情が勝てると思うなよ！」
ギルバードが銃を構えた。
「やれやれ……」
「仕方ない……少し付き合うとするか」
「さあ……エステル・ブライト。跪いて許しを乞うがいい。そうすれば許してやらないこともないぞ？」
「そりゃどうも。嬉しくって涙が出てきちゃう。でも悪いんだけどあたし、諦めが悪いのよね」
エステルが棒を振り回した。
「う……」
「《執行者》ならともかく雑魚なんかに負けるもんですか。さあ――かかって来なさいよっ！」

「バ、バカな……。これだけの人数を相手に……」
「はあはあ……。遊撃士の力、思い知った！？」
「さすが《剣聖》の娘……。少々見くびっていたようだ」

「……どうやらリミッターを解除する必要がありそうだな」
倒された4人の兵士が一斉に立ちあがった。
「はは、驚いたかい？我々は《結社》の技術力で身体能力を強化されていてね。常人より遥かにタフなのだよ」
「くっ……」
「……間に合ったか！」
その時、エステルの背後から1人の兵士がやってきた。
「苦戦しているようだな。俺も助太刀させてもらうぞ」
「はは、その必要はないさ。しぶとい小娘だが屈服するのは時間の問題だ。君はそこで眺めていたまえ」
余裕面をかますギルバード。
「……あなたに言ったんじゃないよ」
「へ……」
やってきた兵士が双剣を構えた。それを見て他の4人の兵士が慌てた。
「……遅い」
4人の兵士は一瞬で切り捨てられた。
「な、な、なんだあああっ！？」
「……え……」
「な、なんだよお前！？どういうつもりなんだ！？」
「悪いけどあなた……向いてないと思うよ」
「ぶぎゃ！」
兵士はギルバードを思いっきり殴り飛ばした。
「……」
「……まったく。どういうつもりなんだ」
兵士が仮面を取ると黒髪が現れた。
「正遊撃士になったのに相変わらず無鉄砲とはね……。あの場で意地を張るメリットが一体どこにあるっていうんだ」
「……あ……。あはは……ヨシュアだ……。えっと……夢じゃないよね？」

「夢だったらどんなに気楽でいいだろうけどね……。……どうやらそんなに都合よくは行かないみたいだ」
「え……」
「フフ……ようやく姿を現したか」
奥からやってきたのは剣帝レーヴェだった。
「……久しぶり、レーヴェ。僕が潜入していたことを予想していたみたいだね」
「お前の能力を考えれば充分ありえる話だからな。一体、どんな手段を使った？」
「この船が来る直前に航路確保の偵察艇を狙った。《執行者》もいなかったからわりと簡単に潜入できたよ」
「……教授が方舟を呼び寄せることまで読んだか。《執行者》としてのカンは完全に取り戻せたようだな」
「おかげさまでね。いつレーヴェたちに発見されるかヒヤヒヤさせられたけど」
「フッ、お前の隠形を見破れる者はそうはいない。だが、隠形というものは一度認識されたら終わりだ」
剣帝レーヴェが剣を構えた。
「お前は最大の武器を失った。この《剣帝》相手にいったい何をするつもりだ？」
「……」
「ちょ、ちょっと……！念のために言っておくけどあたしだって動けるんだから！いくらあなたが強くったってそう簡単には……」
「……下がって、エステル。レーヴェは強い。僕と君を合わせたよりも」
「う……」
「それが分かっていながらお前はこの場に現れたわけだ。別にその事を甘いと言うつもりはないが……。ならば、どうしてお前はその娘の前から姿を消した？」
「……っ……」

「あ……」
「守るなら守る。切り捨てるなら切り捨てる。そう徹底しろと俺はお前に教えたはずだな？」
「うん……そうだね。教授の調整が終わった直後……初めての訓練で教えてくれた」
「本当にその娘が大事なら、お前は消えるべきではなかった。罪悪感に苛まれながらもそばに居続けるべきだった。お前がそうしなかったのはただの逃避――――欺瞞にすぎん」
「分かってる……。レーヴェに言われなくてもそんなの分かっているさ……」
「……」
「ヨシュア……」
「でも……だったらレーヴェはどうなの……？本当なら、僕だけが払うべき代償だったはず……。なのに《結社》に入って《剣帝》なんて呼ばれて……。どうして今も教授なんかに協力しているのさ……！」
「……。俺が教授に協力するのはお前の件とは一切関係ない。あくまで俺自身の望みのためだ」
「レーヴェの望み……。それってやっぱりカリン姉さんの……？」
「復讐してもカリンが戻ってくるわけではない。だから俺は……この世を試すことにした。それが教授に協力する理由だ」
「この世を試す……」
「さて……お喋りはここまでだ。お前の選択肢は３つある。娘と共に投降するか。娘を守ってここで果てるか。娘を見捨てて一人逃れるか。さあ――――選ぶがいい」
「ヨ、ヨシュア……」
「……。悪いけど、４つ目の選択肢を選ばせてもらうよ」
「なに……」
突然、《グロリアス》が大きく揺れた。

「なっ！？」
「これは……」
「……導力機関に細工させてもらった。放っておいたらこの船は海の藻屑と化すだろうね」
「あ、あんですって～！？」
「……やってくれたな。まさか認証が必要な機関部に侵入するとは……」
「２２基のエンジン全てに異なる仕掛けを施している……。教授やレンたちがいない今、解除できるのはレーヴェだけだ」
「計画を阻止するための最後の切り札というわけか……。それをこのタイミングで切ってしまうという意味……。その欺瞞からいつまで逃げるつもりだ？」
「……っ……」
「フフ、今度会う時までに答えを用意しておくがいい。楽しみにしているぞ」
剣帝レーヴェは戻っていった。
「……」
「あの、ヨシュア……。あたし……あたし……」
「……話は後だ。脱出用の飛行艇を一隻確保しておいた。この先の階段を降りて船倉の格納庫を目指そう」
「あ……。うん……分かった」

第１３章　絆の在り処（１２）

―格納庫

「す、すごい……。船の中にこんな大きな発着場があるなんて……」

「《結社》の誇る戦闘空母、《紅の方舟》グロリアス。１２隻の飛行艇を格納することが可能だ」

「と、とんでもないわね……」

「脱出用に確保した船がある。一番奥の格納庫だ」

「うん、分かった！」

「うふふ……。遅かったじゃないか」

一番奥の格納庫に行ったところで、《道化師》カンパネルラが現れた。

「あ、あんた……！？」

「……カンパネルラか」

「つれないなぁ、ヨシュア。レーヴェとだけ話して僕には何の挨拶もなしかい？」

「君が船に残っているとは思わなかったからね……。僕の動きを読んでいたのか？」

「あはは、僕はこれでも『計画』の見届け役だからね。他の連中よりも色々と気付くことが多いだけさ」

「……」

「ふふ、それにしても……。５年ぶりに会ったら君もずいぶん変わったねぇ。なかなか男前になったじゃない？」

「そういう君は全く変わっていないんだな。その外見のまま歳を取っていないみたいだ」

「うふふ、お肌の手入れは毎日欠かしていないからねぇ。君もよく

女装するらしいし、いい化粧品を紹介しようか？」
「……」
「あーもう、じれったいわね。ここで待ってたってことはあたし達と戦うつもりでしょ！？さっさと構えなさいよ！」
「あはは、威勢のいい女の子だな。ヨシュアの彼女っていうからどんな子かと思ってたけど……なかなかお似合いなんじゃない？」
「か、彼女って……」
「おっと、彼女というのは空賊の女の子なのかな？モテモテだね、ヨシュアきゅん？」
「……」
エステルの目が厳しい。
「……戯言はそのくらいにしてほしいな。どうしてジョゼットのことまで知っているのかしらないけど……」
ヨシュアが武器を構えた。
「君の戦闘力は僕と同じくらいのはずだ。それでもやり合うつもりかい？」
「あはは、そんなつもりはないよ。さっきも言ったように、僕は『計画』の見届け役でね。積極的に君たちを捕まえる義務はないんだ」
「……」
「ふーん、そうなんだ。だったらどうしてこんな所で待ってたわけ？」
「うふふ、そりゃあ勿論、君たちに挨拶するためさ。でも、ただサヨナラじゃああまりにも芸がないからねぇ。君たちの脱出劇を少しばかり盛り上げてあげようと思ったんだ」
カンパネルラが指を鳴らすと、エステルたちの元に銃弾が飛んできた。
「な、な、な！？」
目の前に現れたのは機械兵器だった。
「高機動飛行人形、《ペイルアバッシュ》！もうロールアウトしていたのか！」

「かくして再会した2人の前に新たな障害が立ち塞がるのでした。
ああ、少年少女の運命やいかに！」

「あはは、やるじゃない。ヨシュアは当然だけど、お姉さんの筋も悪くないね」
「あ、あんたね～……。悪ふざけも大概にしなさいよ！」
「怒らない、怒らない。さて、出番が終わった道化師は退場しようかな」
「！？」
「うふふ……それじゃあ2人とも。近いうちにまた会おう」
道化師カンパネルラは炎に包まれて消えた。
「き、消えた……。幻術の一種だ。気にするほどじゃない。それよりも早く――」
「おい、本当にこっちに来たのか！？」
「ああ……間違いない！」
後ろから兵士の話し声が聞こえてきた。どうやら追いついてきたらしい。
「エステル、急いで！」
「う、うん！」
エステルたちは確保しておいた飛行艇に乗りこんだ。

「扉をロックして。すぐに船を発進させる」
「わ、分かった！」

「（起動キー認識……。認証コード入力……。……よし！）」
ヨシュアは飛行艇に導力を伝わらせた。
「わわっ……」
「遠隔操作でハッチを解放する。すぐに発進するから席に座って」
「……うん！」

「お、おのれ……！」
「撃て！絶対に逃がすな！」
兵士たちが追い付いた時にはハッチが解放される時だった。そして、そのまま船はハッチから発進した。

「お、落ちるっ！？」
「大丈夫、すぐに安定させるから。……よし！」

「くっ……。このまま逃がすものか！」
「我々も飛行艇で出るぞ！」

「わわっ……。これってレーダーよね。光が3つ、近づいてきてるわよ！」
「ああ、追っ手だ。何とかして撒く必要がありそうだな」
「ヨシュアって……飛行艇の操作ができたんだ？」
「一通りはね。ただ、この船には武装が積まれていないんだ。あま

りいい状況じゃない」
「そっか……。って、なんでわざわざ武装がない船にしたの？」
「……この船だけ整備中でセキュリティが甘かったんだ。緊急の事態だったから選んでいる余裕がなくてね」
「緊急の事態って……。あの……ひょっとして……あたしが《グロリアス》に捕まっちゃったこと……？」
「……。お喋りは終わりだ。揺れるから気を付けて」
突然、エステルたちの船に向かって銃弾が撃たれる音がした。
「わわわっ……」

「くっ……まずいな」
「追撃してきているヤツ、なかなか上手いわね……」
「《結社》の強化プログラムで操縦技術を修得したんだろう。応用は利かないけれど一方的な展開になると手強い」
「そっか……。でも、応用が利かないってことは何かアクシデントが起これば――」
その時、外で一際大きな銃弾の音がした。
「あ、当たった！？」
「いや……この船じゃない！」
エステルが外をのぞくと、空賊団の船、《山猫号》がいた。《山猫号》が銃弾を撃ち込み、敵の飛行艇を撃墜していた。

「あ、あれって！？」
「《山猫号》……どうして？」
「……ヨシュア！そこにいるのはヨシュアだよね！？」

スピーカーから聞き覚えのある声が聞こえてきた。
「（この声……）」
途端にエステルが不機嫌になった。
「ああ……ここにいる！どうして君たちがこんな所にいるんだ！？とっくにリベールを発ったと思ったのに……！」
「へへ、あんたが困ってないか兄貴たちが心配しちゃってさ。それであのデカブツの様子を遠くから伺っていたんだ」
「へへ、よく言うぜ。必死な顔で頼んできたのは誰だったかな～っと」
「キ、キール兄！」
「ま、俺たちも《結社》には色々と借りがあるからな。リベールを発つのは借りを返してからにするぜ」
カプア空賊団の3人だった。
「……そうか……。ありがとう、助かるよ」
「へへっ……せいぜい感謝しなよね！」
「しかし、さっきから見てると反撃してないみたいだな。何か問題でもあるのか？」
「武装を外した船しか調達できなくてね。ちょっと困っていたんだ」
「そうか……」
「ど、どうしよう……」
「……よーし、こうなったらこのまま二手に分かれるぞ！一隻だったら振り切れるな？」
「うん……問題ない」
「おーし、女神の加護を！」
「ヨシュア……気を付けてよね！」

第１３章　絆の在り処（１３）（前書き）

今回で「第１３章　絆の在り処」が終了します。如何だったでしょうか？

第１３章　絆の在り処（１３）

―数十分後

「エステル、レーダーは？」

「うん……もう光は消えたみたい。完全に振り切れたみたいね」

「そうか……。……」

「……」

２人の間に沈黙が続いた。どちらもどう声をかけていいのか分からないようだ。

「え、えっと……。あの空賊たち、けっこう気のいい連中だったみたいね。まさかあのタイミングで助けに来てくれるなんて……。すごく見直しちゃったわ」

「そうだね……。契約上の関係だと割り切っていたけど……人と人の関係はそう単純じゃないらしい」

「あはは……今さら何を言ってるんだか。顔を突き合わせてれば仲良くなったり、ケンカしたり、色々とあるわよ。それが人の付き合いでしょ？」

「ああ……。でもそれは、僕の生きてきた世界では当たり前じゃなかった」

「あ……」

「殺すか、殺されるか。奪うか、奪われるか。僕は君と出会うまでそんな事ばかり繰り返してきた」

「で、でも……。お姉さんとレーヴェと一緒にいて幸せだった頃もあるのよね……？」

「……レーヴェが話したのか。……。その記憶はあるけどまるで他人事みたいなんだ……」

「え……」

「心が壊れた時……僕はハーメルの思い出は自分の物じゃなくなった。人であることを辞めて人形になったからだと思う」

「……」
「姉さんが死んだ時の記憶もはっきりと覚えてはいるんだ。あの時、僕と姉さんは待ち伏せしていた男に襲われた。男は僕を殴り飛ばして……姉さんの上にのしかかった」
「……ッ……」
「幼い僕は、それが意味することは分からなかったけど……それでも嫌な感じがして男の背中に掴みかかっていた。もみくちゃになった挙句、すぐに弾き飛ばされたけど……。いつの間にか、僕の手には男の銃が握られていた」
「……」
「思えば、あの時から僕には人殺しの才能があったんだろう。教わりもしないのに銃のセーフティを外した僕はためらうことなく引金を引いた。喉に穴を穿たれた男は不思議そうな顔をしてから口から血を吐いてうずくまった。そこで僕は、ようやく自分が人を撃ったことに気付いた」
「……」
「でも、男はまだ死んでいなかった。血走った目でヒュウヒュウと喘ぎながら軍刀を抜いて躍りかかってきた。獣に襲われた時のように僕は身を竦めて目を閉じたけど……衝撃はなく、柔らかいものにぎゅっと抱きしめられていた」
「……」
「目を開いた時、そこには微笑む姉さんの顔があった。いつの間にか男は倒れ……呆然としたレーヴェがいた。レーヴェに支えられた姉さんはハーモニカを僕に渡して……そしてゆっくりと目を閉じた」
「……」
「……よく覚えているだろう？でも、こんな風に話してても僕はあんまり哀しくないんだ。他人の日記を読んでいるような……そんな不思議な違和感しかない。そしてそれは……君と一緒にいる時も同じだった」
「……え……」

「君の暖かさに触れて確かに僕は変われたと思う。君と共にいることに喜びを覚え、君を愛しく思うようにもなった。だけど僕は、どこかそれを他人事のように感じていたんだ」

――それは多分……本当の僕が感じていたんだと思う。虚ろで空っぽな……できそこないの人形みたいな僕が。

――ルーアン地方　メーヴェ海道

砂浜に降り立ったエステルとヨシュア。

「……お別れだ、エステル。もう僕のことは追いかけないで欲しい」

ヨシュアはすぐさまエステルから別れようとした。

「……」

「君ともう一度会えてとても嬉しかったけど……それでもやっぱり僕たちは一緒にいるべきじゃない。僕みたいな人間がいたら君のためにもならないし……正直、君がいても足手まといになるだけだ。だから……」

「……嘘つき」

「え……」

「ね、ヨシュア。あたし、色々と話を聞いて分かったことがあるのよね。どうしてヨシュアがあたしの前から消えたのか……。多分、ヨシュア自身も気付いてない本当の理由をね」

「……」

「心が壊れているからあたしといると苦しい？あたしと一緒にいても他人事にしか感じられない？ヨシュアがいたらあたしのためにならない？あたしがいても足手まといになるだけ？そんなの全部、嘘っぱちね」

「嘘なんかじゃ……！」

「いいから聞いて。あのね……ヨシュアは恐かっただけよ」

「え……」
「自分のせいでお姉さんが亡くなったと思い込んで……同じことが、あたしの身に起きることが耐えられなくて……。だからあの夜、ヨシュアはあたしの前から逃げ出したのよ。それ以外の理由は後付けだわ」
「……。はは、何を言ってるんだか……。教授に調整されてから僕は恐怖を感じたことがないんだ。任務の時の邪魔にならないよう感じなくされたみたいでね。君の指摘は……的外れだよ」
「ううん、そういう表面的な事じゃないわ。……ねえ、ヨシュア。お姉さんが亡くなったことをどうして他人事みたいに感じちゃうのか……その理由が分かる？」
「それは……。僕が……壊れているから……」
「ううん、違う。ヨシュアは……お姉さんを亡くした時のショックを思い出したくないだけ。無意識のうちに、他人事みたいに思い込もうとしているのよ」
「！！！」
「さっき、あたしを助けてくれたことだって同じよ。あの戦艦に忍び込むのに相当、苦労したんでしょう？なのに迷いもせずにあたしを逃がしてくれた……。まるであたしを一刻も早く危険から遠ざけるようにね」
「……」
「ヨシュアは壊れてなんかない。ただ恐がりで……自分に嘘をついているだけ……。今のあたしには自信をもって断言できるわ」
「そんな……でも……。……」
ヨシュアは何も言えずエステルに背を背けた。
「どうして君は……そんなことまで……」
「前にも言ったけど、あたしはヨシュア観察の第一人者だから。ヨシュアの過去を知った今、あたしに敵う相手はいないわ。教授にだって、レーヴェにだって絶対に負けないんだから」

「……」
「恐がりで勇敢なヨシュア。嘘つきで正直なヨシュア。あたしの……大好きなヨシュア。やっとあたしは……ヨシュアに届くことができた」
エステルはヨシュアを後ろから抱き締めた。
「……っ……」
「でもあたしは……守られるだけの存在じゃない。遊撃士を続ける限り、危険から遠ざかってばかりはいられない。ヨシュアがいようがいまいが、その事実は変わらないんだよ。だってそれは、あたしがあたしであるための道だから」
「……」
「だから……だからヨシュア、約束しよう」
「……え……」
「お互いがお互いを守りながら一緒に歩いていこうって。これでもヨシュアの背中を守れるくらいには強くなった。ヨシュアが側にいてくれたらその力は何倍にも大きくなる。《結社》が何をしようと絶対に死んだりしないから……。だからもう……恐がる必要なんてないんだよ」
「……エス……テル……。……あ……」
ヨシュアの目から涙がこぼれ落ちた。
「なん……で……。……涙なんて……姉さんが死んでから……演技でも……流せたこと……ないのに……」
「えへへ……そっか……」
――見ないであげるから……そのまま泣いちゃうといいよ……。
こうしてあたしが……抱き締めててあげるから……
「えへへ……な、何だか照れるわね」

「うん……そうだね」
「あ……そうだ！これ、返すからね」
エステルはハーモニカを取り出し、ヨシュアに渡した。
「あ……」
「まったくもう……お姉さんの形見なんでしょ？簡単に人に渡すんじゃないわよ」
「うん……。確かに軽率だったかな」
「お姉さんって……どんな人だったの？」
「うん……そうだな……。気立てが良くて優しいけどどこか凛としていて……レーヴェとすごくお似合いで子供心に少し妬いていたよ」
「気立てが良くて優しくて凛としたタイプ……。それって……クローゼみたいな感じ？」
「はは……そうだね。顔立ちとかは違うけれどタイプは似ているかもしれない」
「……」
「……エステル？」
「な、何でもないっ！……言っとくけど、クローゼも、他のみんなもすごく心配してたんだからね。帰ったらちゃんと謝りなさいよ」
「エステル……僕は……」
「戻る資格がないとか言ったって聞かないからね？教授のスパイをしたって言っても無意識のうちなんでしょ？空賊艇の奪還事件だって潜入捜査の一環みたいなもんだし。《結社》の計画についての情報を父さんにでも話したらチャラよ。いわゆる司法取引ってやつ？」
「ちょっと違うと思うけど……」
「それに《結社》を止めるにしたって、もうあの船に潜入するのは無理よね？だったらあたしたちと一緒に行動するしかないじゃない」
「……そもそも君が掠われなければ予定通り《グロリアス》を爆破できたんだけどな……」
「うぐっ……悪かったわね。って、爆破なんて物騒なこと言わないでよ。いくら《結社》だからって皆殺しにするつもりだったの？」

「……そうでもしないと教授やレーヴェは倒せないからね。まあ、爆破したところで倒せる可能性は低かったけど……」
「はあ、まったくもう……。あたし、やっぱり捕まってよかったかも。あやうくヨシュアにとんでもないことをさせるとこだったわ」
「ふふ……」
「あーっ、今あたしのこと『また甘っちょろいこと言って』とか思ったでしょ！？」
「いや、しばらく見ないうちに大人っぽくなったみたいだけど……エステルはやっぱりエステルだなって思ってさ。すごく嬉しかったんだ」
「うっ……」
とっさに背を向けるエステル。
「（こ、こらあたし！今さらヨシュアの笑顔になにドキドキしてんのよ～！ああでも久しぶりだから結構クルっていうか……。……）」
「？エステル？」
「ね、ねえ……。ヨシュア、あのボクっ子とけっこう仲良くなったのよね？」
「ボクっ子……ああ、ジョゼットのことか。そうだね、最初はずいぶんと嫌われていたみたいだけど……。最後はわりと打ち解けることができたかな」
「打ち解ける……。……。……キスとか、した？」
「は？」
「いいから答えてっ！」
「あ、ああ……。もちろんしてないけど」
「そ、それじゃあ……」
エステルはヨシュアに向き直った。
「ここで……あの夜のやり直しを要求してもいいよね……？」
「あ……」

「や、やっぱり初めてって女の子には大切なものだし……。ヨ、ヨシュアのせいで台無しになったんだから……責任……取ってくれるよね？」
「エステル……」
「……」
エステルは目を閉じてヨシュアを待った。
「（……エステル……。……）」
ヨシュアはエステルを抱き寄せ……唇を重ねた。
「（……あ……）」
「おーい、ヨシュア！」
声が聞こえて慌てて離れると、上から《山猫号》が降りてきた。
《山猫号》が着陸すると、ジョゼットが走って出てきた。
「ボ、ボクっ子！？」
「なんだ、あんたもちゃっかり脱出してたのか。まったく……あのまま捕まっていればいいのに」
「あ、あんですって～！？」
「こら、ジョゼット。ケンカうるんじゃないっての」
「遊撃士の嬢ちゃんもこの場は休戦で構わねえな？」
続いてキールとドルンも出てきた。
「うん、まあ……さっきは助けられたしね。改めてありがとう。本当に助かっちゃった」
「がはは、いいってことよ」
「フンだ、あんたを助けたつもりはないんだから。感謝される筋合いはないね」
「ぐっ……1人だけでも捕まえたくなってくるわね」
「それよりヨシュア。この後どうするんだ？」
「え……」

キールの言葉に驚くエステル。
「俺たちと一緒に来ないか改めて誘いに来たんだが……。ま、その様子じゃ聞くまでも無さそうだな？」
「うん……ごめん。先のことはどうなるか分からないけど……今はエステルと一緒に戻ろうと思っている」
「ヨシュア……」
「ヘッ、そうか」
「……。ま、いっか。まだチャンスはありそうだし」
「え」
「ヨシュア、覚えといて！その脳天気女に愛想つかしたらボクたちの所に戻ってきなよね！歓迎するからさ！」
「だ、誰が脳天気女よ！」
「はは……ありがとう、ジョゼット！ドルンさん、キールさん！本当にお世話になりました！」
「ヘッ、こっちこそな！」
「じゃあな！機会があったらまた会おうぜ！」
3人が乗り込むと《山猫号》は飛び去っていった。

「……ねえ、エステル」
「なに……？」
「……敵はあまりにも強大だ。多分、教授がエステルを掠ったのも僕を燻りだすためだったと思う。留守中に《グロリアス》を堕とされないようにするためにね」
「あ……」
「レーヴェだって、あの場で僕たちを始末してからエンジンの暴走を止められたはず。そうしなかったのは……僕があまりにも不甲斐なかったから情けをかけたんじゃないかと思う」

「……」

「他の執行者についても同じ……。単純な戦闘力でいったら僕を上回っている達人ばかりだ。正直、苦しい戦いになるだろう」

「うん……」

「でも……約束するよ。もう2度と……現実から逃げたりしないって。君と一緒に……最後まで歩いていくって」

「ヨシュア……。うん……あたしも誓うわ！」

第１４章　四輪の塔（１）

―翡翠の塔
「――こちら、《怪盗紳士》。設置は完了した。儀式開始まで待機する」

―紅蓮の塔
「《痩せ狼》だ。こちらも完了だぜ。とっとと始めてくれや」

―紺碧の塔
「こちら《幻惑の鈴》。《β》の設置を完了しました」

―琥珀の塔
「うふふ……《殲滅天使》よ。レンの準備も終わり。いつでも始めてくれていいわ」

―ヴァレリア湖　上空
「――刻は至った。これより『福音計画』の第３段階を開始する」
ワイスマン教授が杖を出す。そして、目の前の《β》の付いた装置にかざした。
「七耀の届かぬ闇の狭間に封結されし《環》よ――汝が《福音》

を通じて現世の有様を眺めるがよい」
装置から黒い光が溢れ、空間が歪んだ。
「見るがいい！四方にそびえし《杭》を！あれなるは汝を闇に繋ぐ最後にして最大の楔(くさび)なり！されどかの楔、人の手により偽りの相にて現世に現れり！全てを律するその手をもっていざ、真なる相を暴くがよい！」
空間の歪みから光が放たれ、《四輪の塔》の装置から幾何学的な模様が現れた。そして、塔の頂上を黒い光が包んだ。
「さあ諸君！祝祭の準備は整った！存分に楽しんできたまえ！」
「――――承知！」
「我ら《執行者》一同」
「大いなる盟主の代行者たる《蛇の使徒》の指示により――――」
「これより《杭》の解錠を始める！」

―同時刻　グランセル城　謁見の間
「――――以上が、これまでの顛末と《方舟》潜入時に掴んだ情報です」
エステルとヨシュアがアリシア女王とモルガン将軍にこれまでの顛末を説明していた。
「むむ……なんたる事だ。そんな化物じみた巨船がリベールに潜入していたとは……。そんなものを持ち出して一体何をするつもりなのだ……」
「『福音計画』の全貌はとうとう掴めませんでした。ですが、彼らはすでに次の行動を開始しています」
「たしか……第3段階とか言ってたわよね」
「大変な事態になりましたね……。モルガン将軍。王国軍の対応はどのように？」
「昨夜のうちに、この2人からカシウスに連絡が行ったようでして

な。すでに彼の指示で、全王国軍に第1種警戒体制が発令されております。さらに飛行艦隊を出動させて王国全土の哨戒に当たらせました」

「そうだったのですか……。エステルさん、ヨシュア殿。本当にご苦労さまでしたね」

「い、いえ。当然の連絡をしただけですし」

「正直……もう少し早い段階で連絡すべきだったかもしれません。空賊艇奪還事件の件を含めて本当に申し訳ありませんでした」

「ちょ、ちょっとヨシュア」

「いいんだ、エステル。裁きを受ける覚悟はできているから」

「ふむ……陛下、如何いたしますか？」

「そうですね……。超法規的措置にはなりますが。今回、ヨシュア殿が明らかにした《結社》に関する様々な情報……それをもって過去の行為は不問としましょう」

「ホ、ホントですか！？」

「ですが……」

「いいのです、ヨシュア殿。この程度の裁量……《ハーメル》の遺児たる貴方への償いにもならないでしょうから」

「え」

「……」

「……どうやらご存じだったようですね。わたくしがあの虐殺事件を知りながらも今まで沈黙してきたことを……」

「ええっ！？ど、どういう事ですか！？」

アリシア女王からその言葉が出ることを予想もしなかったエステルが驚いた。

「戦争開始時、エレボニアは宣戦布告をリベールに行ったが……その時、ハーメル村の虐殺が王国軍によって起こされたという断固とした指摘がなされていたのだ。しかし終戦間際、帝国政府は突如としてその指摘を撤回し、即時停戦と講和を申し出てきた。……ハーメルの一件について一切沈黙することと引き替えにな」

「！！！」

「……前後の事情を考えると、帝国内部でどんな事があったのか朧げながら想像がつきました。ですが、反攻作戦が功を奏したとはいえ、帝国軍は未だ余力を残していました。帝国本土から増援があったら王国は再び窮地に陥ることになる――そう判断したわたくしは……その条件を呑むことに決めました」

「あ……」

「……」

「……自国の安寧を優先してわたくしは真相の追及を放棄しました。背後にいるはずの被害者たちの無念を切り捨ててしまったのです。かつてロランス少尉がわたくしに告げた『哀れむ資格はない』という言葉……あれは真実、的を射ていたのです」

「女王様……」

「……どうかご自分をお責めにならないでください。そもそも虐殺に関わりがない上に自国の平和がかかっていたのです。国主としては当然の判断でしょう」

「ヨシュア殿……」

「このリベールという国は僕の凍てついた心を癒してくれた第2の故郷ともいう地です。その地を守った陛下のご決断、感謝こそすれ、恨みなどしません」

「ヨシュア……」

「ありがとう……ヨシュア殿。そう言って頂けると胸のつかえが取れた気がします」

「エステルさん、ヨシュアさん！」

「あ……！」

「みんな……」

ギルドのメンバー全員が謁見の間にやってきた。

「エステルさん、よくご無事で……。それに……ヨシュアさんも……」

「よ、よかったぁ……。2人とも帰って来てくれて……！」

「クローゼ、ティータ……」
「2人とも……心配をかけちゃったみたいね」
「まったくもう……。肝を冷やしてくれるじゃない」
「へへっ……。だがまあ、家出息子を連れ戻せて何よりだったな」
「シェラさん、アガットさん……」
「2人とも……よく無事に戻ってきたな」
「フッ、これも女神のお導きというものだろうね」
「えへへ……心配かけてゴメンなさい」
「まったくもってその通りやで」
「ちょっと、ケビンさん。いきなりそれはないでしょう。気持ちは分かりますが……」
「あ、ケビンさん、レインさん！」
「エステルちゃんが掠われた時は目の前が真っ暗になったわ。ホンマにもう……あんまり心配させんといてや」
「でも、本当に無事で何よりです」
「うん……ゴメンなさい」
「んで、こっちが例の……」
「初めまして、ケビン神父、レインさん。ヨシュア・ブライトといいます」
「うぐっ……予想以上のハンサム君やね。って、オレのこと知っとんの？」
「これは……驚きですね」
「あなたたちの存在については僕の情報網にも入っていました。エステルの危ない所を何度も助けてくれたそうですね。ありがとう……感謝します」
「むむむ……まあええか。仲直りしたんやったらオレから言うことは何もないわ」
「そうですね。私もエステルさんの悩みが解決して何よりです」
「ただな……」
ケビン神父がヨシュアにそっと耳打ちした。

「（……あんまり可愛い彼女を放っておいたらアカンで。オレみたいな悪い虫にコナかけられたくなかったらな）」
「（……肝に銘じます）」
「？どうしたの？」
「いやぁ、ちょいとな」
「男同士の話をね」
「なんかヤラしいわね……」
「失礼します、陛下」
エステルたちの父、カシウスが入ってきた。
「あ……」
「父さん……」
「カシウス殿、ご苦労様でした」
「各方面への指示は完了したのか？」
「ええ、先ほど終わらせてこちらの方へ飛んできました。そこで少々、父親としての義務を果たそうと思いまして」
「え……」
カシウスがヨシュアの前に立った。
「……昨日、通信で話したが実際に顔を合わせるのは久々だな」
「うん……そうだね。……ごめん。心配をかけてしまって」
「お前の誓いを知っていた以上、俺も共犯みたいなものさ。謝る必要はないが……義務は果たさせてもらうぞ」
カシウスはヨシュアの頬を叩いた。
「っ……」
「きゃっ……」
「ちょ、ちょっと父さん！？」
「……いいんだ、エステル。家出息子には……当然のお仕置きだからね」
「そういうことだ。思っていた以上に皆に心配をかけていたこと……ようやく実感できたようだな？」
「……うん。僕なんかのために――――なんて思ったら駄目なんだよ

ね」
「ああ……。人は様々なものに影響を受けながら生きていく存在だ。逆に生きているだけで様々なものに影響を与えていく。それこそが『縁』であり――『縁』は深まれば『絆』となる」
「……『絆』……」
「そして、一度結ばれた『絆』は決して途切れることがないものだ。遠く離れようと、立場を違えようと何らかの形で存在し続ける……。その強さ、思い知っただろう？」
「うん……正直侮っていた。確かに僕は……何も見えてなかったみたいだ」
「ヨシュア……」
「フフ、それが見えたのなら家出した甲斐もあっただろう」
カシウスはヨシュアを抱き締めた。
「ヨシュア……この馬鹿息子め。本当によく帰ってきたな」
「父さん……」
「グス……えへへ……」
「フッ、親馬鹿が……」
「ふふ……本当に良かった」
「失礼します！」
大急ぎで入ってきたのはユリア大尉だった。
「ユリア大尉……」
「王都を除いた5大都市の近郊に正体不明の魔獣の群れが現れました！報告から判断するにどうやら人形兵器と思われます！」
「あ、あんですって～！？」
「動き出したか……」
「どうやら、思っていた以上に第3段階は大きなもののようですね……」
「それと、各地の関所に装甲をまとった猛獣の群れと紅蓮の兵士たちが現れました！現在、各守備隊が応戦に当たっております！」
「そうか……」

「急いでハーケン門に戻る必要がありそうだな……」
「そ、それと……」
「なんだ、まだあるのか？」
「詳細は不明なのですが……《四輪の塔》に異変が起きました。得体の知れぬ『闇』に屋上部分が包まれたそうです」
「！！！」
「まさか、《四輪の塔》を用いるのが第３段階……」
「チッ……嫌な予感が当たりよったか」
「なお、哨戒中の警備艇が調査のため接近したそうですが……すぐに機能停止に陥り、離脱を余儀なくされたのことです」
「『導力停止現象』か……」
「地上からの斥候部隊は？」
「すでに派遣されたそうですが……」
「も、申し上げます！」
王国軍士官が慌てて報告に入ってきた。
「各地の塔に向かった斥候部隊が撃破されてしまったそうです！し、信じ難いことですが、どの部隊もたった１人によって蹴散らされてしまったとか……」
「なに……！？」
「そ、それって……！」
「ああ……《執行者》だろうね。父さん……彼らは一般兵の手に余る。ここは僕に行かせてほしい」
「ふむ……」
「ちょっとヨシュア……なに１人で行こうとしてるのよ。昨日の約束をもう忘れたの？」
「エステル、でも……」
「《結社》が動き始めた以上、遊撃士としても放っておけない。絶対に付いて行くからね」
「エステル……」
「エステルだけじゃないわ。あたしも付き合わせてもらうわよ。個

人的な因縁もあるしね」
「ああ、俺も同じくだ」
「シェラさん、ジンさん……」
「ま、拘りがあるのはお前だけじゃねえってことだ。抜け駆けはナシにしようぜ」
「そ、そうだよお兄ちゃん！こーいう時こそみんなで力を合わせなくちゃ！」
「アガットさん、ティータ……。……ありがとう、助かります」
「決まりのようだな。遊撃士協会にお願いする。《四輪の塔》の異変の調査と解決をお願いする。これは軍からの正式な依頼だ」
「うん……分かったわ！」
「しかと引き受けました」
「……お祖母様。私に《アルセイユ》を貸していただけませんか？」
「へっ……！？」
「で、殿下！？」
「ふふ……確かに一刻を争う事態です。わたくしも《アルセイユ》を提供しようと思いましたが……。そう申し出たということは覚悟が固まったという事ですか？」
「いえ……まだです。ですが、船をお返しする時には必ず答えを出すと約束します」
「ふふ……いいでしょう。リベールの希望の翼、好きなように使ってみなさい」
「ありがとうございます。ユリア大尉、発進の準備を。可及的速やかに《四輪の塔》へ向かいます」
「承知しました！」
こうして……リベールは《百日戦役》以来の未曾有の事態を迎えた。王国軍の全部隊を指揮するためにカシウスとモルガンはそれぞれレイストン要塞とハーケン門に戻り……。エステルたちは《アルセイユ》で各地にある塔に向かうことになった。

第１４章　四輪の塔（２）

―グランセル発着場

「うーん、まさかオリビエが帝国に帰っちゃうなんて……」

「ホント、随分いきなりね」

オリビエが急にエレボニア帝国に帰国しなければならないと《アルセイユ》に乗る前に言い出した。

「いや、本当はもう少し前に帰国する予定だったのだがね。エステル君が掠われてしまったので予定を伸ばして滞在していたのだよ」

「そうなんだ……。ゴメンね、あたしのせいで」

「フッ、気にすることはない。君の帰りを待ったおかげで愛しのヨシュア君とも再会することができたしね」

「はは、相変わらずですね。……あの、オリビエさん」

「おや、なんだい？」

「貴方は……。……いえ、何でもありません。今までエステルの旅を助けてくれて感謝します」

「フッ、望んでいたことなのだから水臭いことは言いっこナシだよ。だが、そこまで言うのならお礼に熱いベーゼでも……」

「えーかげんにしなさい。もう……最後くらいちゃんとお別れしようよ」

「はは、ボクはいつでも真面目なつもりなんだがねぇ。エステル君、ヨシュア君。シェラ君に他のみんなも……色々と大変だろうが気を付けて行ってくるといい。このオリビエ、帝国の空からキミたちの幸運を祈っているよ」

「うん、ありがと！」

「ふふ……あんたの方こそ気を付けて」

「……どうかお元気で」

「また機会があったら呑もうや」

「今度はその変人っぷりをちったぁ直してきやがれよ」

「あはは……。あのあの……さよーなら！」
「またすぐに会えるような気がしますが……その時までお元気で」
「いや～、短い付き合いでしたけどごっつ楽しかったですわ」
「お元気で……色々とお世話になりました」

―アルセイユ　ブリッジ
「あ……」
「お、おじいちゃん！？」
ブリッジではラッセル博士が待っていた。
「久しぶりじゃの。ティータや。元気にしておったか？」
「えへへ……うんっ！」
「おいおい、爺さん。なんでアンタがここにいる？」
「ま、色々あって数日前から乗り込んでおったんじゃ。それよりも……エステル、ヨシュア。２人とも本当によく無事で戻ってきたのう」
「あはは……うん、何とか」
「……心配をかけて申しわけありませんでした」
「なに、戻ってきたのならそれで万事オッケーじゃよ。しかし、《四輪の塔》に異変が生じたとはのう……。こりゃわしも、気合いを入れて調査する必要がありそうじゃな」
「うん、頼むわね。ところで……どの塔から行けばいいのかな？」
「そうだね……距離的なことを考えたら《琥珀》か《紅蓮》が近いけど……」
「《アルセイユ》の速さならどの塔でもあまり変わらないさ。敵の情報が分かっている所を優先した方がいいかもしれない」
「敵の情報？」
「先ほど、《翡翠の塔》に向かった斥候部隊から続報が入ってきた。現れたのは、仮面を付けた白装束の怪しい男だったそうだ」

「あの怪盗男！」
「斥候部隊とはいえ、たった1人で撃破するなんて……」
「ヘッ、ただの変な野郎じゃなかったみてぇだな」
「《怪盗紳士》ブルブラン……。分身や影縫いを始め、トリッキーな技を使う執行者だ。一筋縄では行かないと思う」
「そっか……。でも、敵の正体が分かっただけ、他の塔よりはマシだと思うし……。うん！まずは《翡翠の塔》に行きましょ！」
「了解した。発進準備！これより本艦は、ロレント地方、《翡翠の塔》に向かう！」

《アルセイユ》が飛び立つのを見届けたオリビエ。
「フッ……これで猶予期間（モラトリアム）も終わりか……。いや、まだ最後のチャンスが残っているかな」
「ま、待って～！」
「おや、君たちは……」
発着場に走ってきたのは、リベール通信のドロシーとナイアルだった。
「ああ、行っちゃった……」
「ぜいぜい……ま、間に合わなかったか」
「どうしたんだい、記者諸君？また竜事件のように乗り込むつもりだったのかな？」
「ああ、それとヨシュアが帰ってきたって聞いたんでな。まあいい、ドロシー。急いで《アルセイユ》を撮れ！望遠レンズを使えばそこそこ使える画が撮れるだろ」
「アイアイサー！」
「フフ……」
オリビエはその場を静かに去った。

「……挨拶は済んだのか？」
発着場の出口ではミュラーが待っていた。
「フッ、一応ね。そちらの準備はどうだい？」
「叔父上の方は何とかなった。宰相閣下も、むしろ好都合だと判断されたようだ」
「確かにあの人なら王国人受けしそうだからね。フフ……楽しくなりそうだ」
「まったく……何という悪趣味なヤツだ。彼らの驚愕した表情が今から目に浮かぶようだぞ」
「ハッハッハッ。まさにそれが狙いだからね」
オリビエは空を見上げた。
「（今度、相見えた時にはお互い敵同士というわけだ。くれぐれも《結社》ごときに遅れを取らないでくれたまえよ）」

第１４章　四輪の塔（３）（前書き）

第１の塔、《翡翠の塔》編です。

第１４章　四輪の塔（３）

―翡翠の塔　上空

「《翡翠の塔》上空に到着した」

「は～、さすがに速いわね。到着まで３０分もかからなかったんじゃない？」

「えへへ、そのくらいだと思うよ。定期船の3倍近くのスピードが出ているはずだから」

「なるほど……」

「《翡翠の塔》の屋上はどのようになっていますか？」

「今、ディスプレイに出そう」

ユリア大尉はディスプレイに《翡翠の塔》の屋上の様子を映し出した。

《翡翠の塔》の屋上は黒い球体に包まれていた。

「な、なにあれ……」

「例の《ゴスペル》が生み出す黒い波動に雰囲気は似とるが……」

「じゃが、波動と違って広がらずに塔の屋上を包み込んでおる。いずれにせよ、これ以上は近づかない方が賢明じゃろう」

「ユリアさん。地上に降りるにはどうすればいいんですか？」

「あいにく《アルセイユ》が着陸できそうな場所がなくてね。滞空状態でリフトを降ろすからそれに乗って降りてほしい」

「リフト？」

「榴弾砲を出す時などに使われる貨物用のリフトです。船倉に設置されているんですよ」

「そっか……」

「それじゃあ、塔の内部を調査するメンバーを選ぼうか」

エステルはケビン神父とクローゼを選んだ。

「わしはしばらく、下の工房に詰めておる。塔の調査中、オーブメントの整備やクオーツが必要になったら来るがいい」
「うん、そうさせてもらうわね」
「……敵の目的も未だはっきりしておらん。気を付けて行ってくるがいい」
ラッセル博士は工房室に戻っていった。
「さてと、準備を整えたらすぐに地上に降りなくちゃ」
「ああ、船倉のリフトだったね」

―アルセイユ　船倉
「やあ、来たね」
「あれ、フェイさん？どうしてアルセイユにいるの？」
中央工房にいるはずのフェイがアルセイユに乗っていたので驚いた。
「ラッセルの爺様と一緒に乗り込んだのさ。何でも整備士の手が足りないらしくてね」
「ふーん、そうなんだ」
「ま、今はヒマだから船の手伝いをしてるんだ。それで……早速リフトで降りるかい？」
「うん、頼むわ」
「ん、わかった。それじゃあ早速、リフトの上に乗っちゃって」
「オッケー」
エステルたちはリフトの上に乗った。
「それじゃあ降ろすよ。安定してるとは思うけどくれぐれも落ちないようにね」

―翡翠の塔　近辺
「さてと……いよいよ調査開始ね。とにかく急いで屋上に向かわなくちゃ」
「うん……でも様子が変だな」
「えっ？」
「あ、あんたたちは……！」
目の前から王国軍兵士が慌てて寄ってきた。
「ひょ、ひょっとして連絡にあった遊撃士かい？」
「うん、そうよ」
「あなたは斥候部隊の？」
「あ、ああ……。あんたらに塔の状況を説明するために残っていたんだ」
「何でも仮面の男にやられたそうやね？」
「そ、そうなんだけどそれだけじゃあないんだ。何と言うか……明らかにおかしいんだよ」
「おかしいって……何が？」
「み、見れば分かる。とにかく入口に来てくれ」
兵士はうまく説明できないと言うので、塔の入口に向かった。

「えっ……！？」
翡翠の塔の入口が奇妙な色の結界らしきもので塞がれていた。
「あ、あれって……」
「何かの結界……！？」
「俺たちが到着した時は既にこうなっていたんだ……。で、調べようとした矢先に例の仮面の男が現れて……」
「……。中に入ることはできないんですか？」
「仮面の男はそのまま入っていったから大丈夫だとは思うけど……。追いかけようとも思ったけど仲間が全員やられちゃって……」

「そっか……。ここはあたしたちに任せてあなたは部隊に戻って」
「わ、わかった……。女神の加護を！」
王国軍兵士が戻るのを見送って、エステルたちは翡翠の塔に入った。

―翡翠の塔　異空間
「へっ……！？」
「ここは……」
翡翠の塔の内部は、通常の物と違って封印区画のような風貌になっていた。
「ちょ、ちょっと待って……。あたしたち、確かに塔の中に入ったはずよね！？」
「空間転位……。どこか別の場所に飛ばされたみたいやね」
「あ、あんですって～！？そ、それじゃあ塔の屋上に登るなんて無理なんじゃ……！」
「落ち着いて、エステル。ブルブランが現れたということは必ず道はあるはずだよ」
「た、確かに……。……うん！とにかく慎重に進みましょ！」

「あっ……」
翡翠の塔を進んでいると、三角錐の形をした装置を見つけた。
「これって……何かの装置みたいね」
「ふーむ、見たところ何かの端末見たいやけど」
「……調べてみようか」
ヨシュアが装置を調べた。
「……。……これだ」
ヨシュアがスイッチを押すと、装置の上半分が浮き上がり、空間に

映像が映し出された。
「わわっ……！」
「どうやら情報が記録された端末みたいだ。内容を確認してみよう」
エステルたちは情報を確認して、端末のメモリーである『データクリスタル』を取り出したが、文字は最初の『セレスト・D・アウスレーゼ』という言葉以外ほとんど読める状態になかった。
「なによ、最初以外は読めなくなってるじゃない……って、この『アウスレーゼ』って」
「はい……リベール王家の姓です。縁（ゆかり）のある方かもしれません」
「……どうやら重大なことが記されている可能性が高そうだ。何とかして読めればいいんだけど……」
「うーん……そうね。ま、役に立つかもしれないし一応取っておきますか」
エステルたちはさらに４つのデータクリスタルを回収し、屋上を目指した。

―翡翠の塔　屋上
「こ、ここって……！？」
「塔の屋上みたいやけど、こいつは……」
「屋上を包んだ《結界》の内側ということか……」
塔の屋上は、通常の時と同じ景色だった。
「フフ……なかなか早かったようだね」
予測通り、《怪盗紳士》ブルブランが屋上で待ちかまえていた。
「やっぱり来てたわね……この変態仮面」
「フッ、はしたない物言いだ。それはさておき……ずいぶん久しぶりだな。《漆黒の牙》――ヨシュア・アストレイ」
「……そうだね。何故あなたが教授の計画に協力しているのか疑問だけど……」

「フフ、他の者はさておき私の場合は趣味を兼ねていてね。このリベールという国は不思議な気品に満ち溢れている。人も、土地も、空気すらも。その気品が本物かどうか見極めてみたいと思ったのだよ。困難に直面した時、それは一層輝くものだからね」
「なるほどね……。ある意味、あなたは教授と似ているのかもしれない」
「はは、私が求めるのは美だが、教授の場合は明らかに違う。それは君も知っているはずだ」
「……」
「しかし、まさか姫殿下がこの場に来られたとは……。私の崇拝を受け入れる気になったと考えてよろしいかな？」
「残念ですが……私は貴方の期待に応えられるような人間ではありません。真に気高き人間であるならどうして迷ったりするでしょう。《アルセイユ》を陛下に返す時、私は答えを出さなくてはいけない。私は……その時が恐いのです」
「クローゼ……」
「……」
「フハハ！その畏れこそが気高さの証！地を這う虫けらが焦がれて止まぬ翼の輝きなのだ！」
怪盗紳士ブルブランがステッキを振ると、２体の巨大な人形兵器がエステルたちを取り囲んだ。
「！」
「わわっ！？」
「強襲用人形兵器、《バランシングクラウン》！」
「さあ、見せてくれたまえ！影横たわる地すら照らし出すその輝きを！」
「ふむ……思っていたよりもやる。ならばこちらも本気で――――」

その時、塔の屋上の装置から出ていた幾何学的な光が消え、
「む！？」
「！」
屋上を覆っていた黒い光も消え失せた。
「あ……！」
「元に戻ったんか……！？」
「ふむ、どうやら役目はこれで終わりのようだな。……仕方あるまい。引き上げるとしようか」
「へっ……」
怪盗紳士ブルブランがステッキを振った。どうやら逃げる気らしい。
「ちょ、ちょっと！？」
「ま、待ってください！」
「ハハ、殿下は勿論だが遊撃士諸君の戦いぶりにも輝きを感じさせてもらった。それが真実であるかは次の機会に確かめさせて頂こう。それでは諸君、失礼する」
怪盗紳士ブルブランはそのまま消えた。
「に、逃げられた……」
「……」
エステルたちは古代装置に残された《β》を調べた。
「これが《β》……。《結社》が造ったゴスペルの最終型か。今までの新型よりもさらに一回り大きいみたいだ」
「塔の屋上が元に戻ったのはいいんだけど……。問題はこれを使って何をしていたのかってことよね」
「今まで動いていた装置もまた止まってもうたみたいや。何かイヤ～な予感がするわ」
「それに、先ほどまで屋上を包んでいた結界……。あれは何だったのでしょう」
「……。とりあえずこれでこの塔は元通りになったと思う。一旦、《アルセイユ》に戻ろう」
「うん……。戻って博士に報告しないとね」

―アルセイユ　作戦室
「なるほど……。そんな事があったのか」
「とりあえず、その《β》は博士に渡しておくわね。あ、それと塔の中でこんなのを見つけたんだけど」
エステルは翡翠の塔で入手したデータクリスタルを渡した。
「ほう……古代導力文明で使われていた情報を保存するための記録媒体か」
「内部のデータが破損してしまっているのですが、何とか復元はできませんか？」
「そうじゃな……。モノ自体は結晶回路（クォーツ）と同じ七耀石素材を使っておるようじゃ。時間はかかるが《カペル》なら何とか解析できるかもしれん」
「お願いしちゃってもいい？」
「うむ、任せておくがいい。しかし、『裏の塔』とも言うべき別の空間に広がる内部構造か……。うむむ……わしも付いて行けばよかった」
「お、おじいちゃあん……」
「おそらく、あれこそが《四輪の塔》本来の姿でしょう。《輝く環》を封印する《デバイスタワー》としての」
「それが元に戻ったってことは安心してもいいハズやけど……屋上の装置も止まったのはちょいとばかり気になるなぁ」
「ふむ……確かにな」
「いずれにせよ……このまま《結社》の連中を放っておくわけにはいかないわ。急いで次の塔に向かわなくちゃ！」
「ユリアさん。他の塔の情報は入っていますか？」
「先ほど、ツァイス方面の斥候部隊から情報が入りました。《紅蓮の塔》に現れたのは黒眼鏡をかけた男だったそうです」

「あ……」
「《痩せ狼》か……」
「へへ……。やっと直接、やり合えるチャンスが巡ってきたか」
「ジンさん……」
「エステル、ヨシュア。《紅蓮の塔》には俺も付き合わせてもらうぜ」

―トラット平原道
平原道で王国軍の守備隊が《結社》の人形兵器を撃退せんと防衛線を敷いていた。
「……来たようだな。榴弾砲、撃ち方用意！」
王国軍士官が懸命に指揮をする。
「撃て！」
しかし、人形兵器はものともせず守備隊のもとに迫っていた。
「撃ち方止め！総員突入！一匹たりとも街に近付けるな！」
「イエス・サー！」

―遊撃士協会ツァイス支部
キリカが無線器で誰かと通信していた。
「……なるほど。だいたい状況は分かったわ。こちらは軍の守備隊が先ほど作戦を開始したみたい。万全の態勢だったからギルドの援護は不要でしょう。……。……そう、次は《紅蓮の塔》に向かうのね。分かった……武運を祈るわ」
キリカは受話器を置いた。
「……相変わらず隠し事が下手な人。全然変わっていないわね。さて……そうなると色々と忙しくなりそうね」

第１４章　四輪の塔（４）（前書き）

第２の塔、《紅蓮の塔》編です。

第１４章　四輪の塔（４）

―アルセイユ

「《紅蓮の塔》上空に到着した。やはり屋上部分は漆黒の結界に覆われている」

「それじゃあ《翡翠の塔》と同じように……」

「内部が別の空間になっている可能性は高いだろうね」

「おう、待たせたな」

ジンが準備から戻ってきた。

「あ、ジンさん。キリカさんからの連絡って何だったの？」

「ああ、こちらの状況がどうなっているのか聞いてきた。《翡翠の塔》であった事を一通り話しておいたぜ」

先ほどの通信はキリカとジンのものだったらしい。

「そっか……」

「ご苦労さまでした」

「よし、それじゃあ早速、《塔》に乗り込むとするか」

エステルはあと１人にケビン神父を選び、《紅蓮の塔》に降りた。

―紅蓮の塔

《紅蓮の塔》も《翡翠の塔》と同じく、結界で入口が塞がれていた。

「《翡翠の塔》と同じね……。やっぱり、あの訳の分からない場所に繋がっているのかな？」

「本来の姿である『裏の塔』やね」

「ええ……間違いないでしょう」

「まあ、一筋縄じゃいかない場所のはずだ。気合いを入れていくとしよう」

―紅蓮の塔　異空間

エステルたちは《紅蓮の塔》でも４つのデータクリスタルを入手した。

―紅蓮の塔　屋上

「や、やっと着いた……」

「思ったよりも時間がかかったな……」

「ククク……そろそろ来る頃だと思ったぜ」

装置の所でヴァルターが待ち構えていた。

「ヴァルター……」

「ジン……やはりてめぇが来たか。それと《漆黒》の小僧。ずいぶん久しぶりじゃねえか」

「……そうだね。でも、貴方とジンさんが同門だったとは知らなかったよ」

「ククク、俺は《泰斗流》以外にも様々な流派を取り込んでいる。どうすれば人を壊せるか、その窮極の境地に届くためにな。気付かないのも無理はねえ」

「ヴァルター、あんた……」

「てめえの方はどうだ……ジン？いまだに《泰斗流》なんていう古くせえ流派にしがみついてんのか？」

「……俺は不器用だからな。師父（せんせい）に追いつくことが精一杯でそれ以外に目を向ける余裕はないさ」

「チッ……つまらねぇ奴だ。まあいい、さっきからどうにも退屈だったからな。ここらへんで死合といこうじゃねえか」

ヴァルターが指を鳴らすと装甲獣が３匹現れた。

「わわっ……！」

「《スティールクーガー》……」
「《結社》の装甲獣かい！」
「クク、ガキどもはそいつらと遊んでいやがれ。ジン……見せてもらうぜ。この6年間でてめえが練った功夫（クンフー）をなぁっ！」
「……望むところだ！」

「くっ……」
「さすがに手強い……」
ヴァルターを止めたものの、エステルたちの身体は一戦するだけで疲弊してしまった。
「……どうやら功夫だけはそれなりに練っていたようだな。だが、動きが愚直すぎるぜ。古ぼけた《泰斗流》なんぞにいつまでも固執してるからだ」
「ふふ……」
「……何がおかしい？」
「あんたは確かに天才だが、肝心な事が分かっていないな。師父もさぞや無念だっただろう」
「ほう……。てめぇ、ジジイの代わりに俺に説教しようってのか？」
「そんな大それた事は考えちゃいないさ。だが、拳を交えてみて一つ分かったことがある。今の俺が、あんたに勝つのは難しいだろうが……代わりに負けもしないだろう。あんたの拳じゃ俺は倒せんよ」
「……。クク……面白れぇ。まさかてめえの口からそんな台詞を聞けるとはな。ヒマつぶしに味見するだけのつもりだったが、気が変わった」
ヴァルターが気を練り始めた。
「構えろ、ジン……。格の違いってヤツを思い知らせてやる……」
「……」
ジンもそれに応えるように気を練る。

「（ど、どうしよう！？）」
「（これは……入り込めなさそうだ）」
そして、ジンとヴァルターの一対一（サシ）の勝負が始まった。
屋上の柱を壊しながら互角の勝負が行われた。
「クク……でかい口を叩くだけあってなかなか粘るじゃねえか……」
「あんたこそ……それだけの天賦の才を持ちながらどうして武術の闇に引きずられた！そのまま師父の元で励めば正道の極みに至れただろうに！」
「フッ、てめぇがそれを言うか。どうやらジジイの死んだ原因がてめぇだと分かっていねえようだな」
「……な……！？」
「クク、顔色が変わったな。万が一、お前が勝ったらそのあたりの話をしてやろう。賭けるのはてめぇ自身の命だ」
ヴァルターがさらに気を練り始めた。
「……。……いいだろう。この命、賭けさせてもらうぞ」
ジンは全ての力を振り絞るように気を練り始めた。
「（ジ、ジンさん……）」
「（だめだエステル……これは止められない）」
「コオオオオオッ……！」
「はあああああっ！」
2人が激突しようとした瞬間、何らかの武器が2人の間に割って入った。
「なに……！」
「偃月輪（えんげつりん）……まさか！」
塔の屋上に登ってきたのはキリカだった。
「キ、キリカさん！？」
「どうしてここに……」
「ツァイス市の防衛戦がやっと終わってくれたから。受付をウォンに頼んで少し様子を見に来ただけよ」

「よ、様子を見に来たって……」
「あの『裏の塔』を1人で登ってきたんか……」
「キリカ、お前……」
「クク……相変わらずだな。様子を見に来たついでにジジイの仇を討ちに来たのか？」
「まさか……。勝負の結果だったのでしょう。どうして私が父の決意を踏みにじらなければならないの？」
「……」
「キリカ……」
「私がここに来たのは6年前、居なくなった誰かに伝えるべき言葉があったから。ただ、それだけのためよ」
「伝えるべき言葉……だと？」
「ええ……。……ねえ、ヴァルター。どうして私を私として見てくれなかったの……？」
「！！！」
キリカの言葉にヴァルターは驚いた。
「貴方が父に何を言われたのか詳しいことは分からない。でも、それは私たちの付き合いに何の関係もなかったはずだわ。ましてや、ジンには尚更ね」
「！？」
「……」
「……やっぱりそうだったのね。ヴァルター……馬鹿なひと。父がそういうことを考える人だとでも思ったの？」
「ジジイは関係ねぇ……俺自身のケジメの問題だ」
「ちょ、ちょっと待て……。ヴァルター！師父に何を言われたんだ！？それと俺と何の関係がある！？」
ジンには2人の話が全く分からなかった。
「るせえ……てめえに教える義理はねえ」
「ええ、ジンには関係ない。でも……私に話す義務はあったはず。そうしないで消えたのは怠慢以外の何物でもないわ」

「……」
「私は……私を私として見られない人に未練なんてない。何処へなりと消えればいいし、堕ちるなら堕ちればいい。私はあくまでギルドの人間として対処させてもらうわ」
「……ククッ……。アーッハッハッハッ！」
ヴァルターが高笑いを上げていると、《翡翠の塔》の時と同じく、装置の機能が止まった。
「あ……！」
「戻るのか……！」
そして、結界は解け、屋上に風が吹いた。
「クク……今回のお役目は完了か。……キリカ。最後に会えて嬉しかったぜ」
「私は嬉しさ半分、憂鬱半分ね。もう会うこともないでしょう」
「ああ……後は俺とコイツの問題だ。しかしお前、こんな時くらいしおらしく振る舞えねぇのか？最後までキツく当たりやがって」
「ふふ……そこに惚れていたのでしょう？」
「クク……違いない」
「お、おい！？」
「……ジン。どうして俺とジジイが死合うことになったのか……それが知りたければ俺を打ち負かしてみせと。ジジイがてめぇに遺した『活人拳』をもってな」
ヴァルターはためらうことなく塔から飛び降りた。
「なっ……！」
「ちょ、ちょっと！？」
エステルたちは慌ててヴァルターの飛び降りた所にかけよった。
「……」
「じょ、冗談でしょ！？《執行者》ってこの高さから落ちても平気なの！？」
「全員が全員じゃないけど……彼ほどの使い手なら無事でいても不思議じゃない」

「ああ、外壁を抉ることで落下速度を落としやがった。凄まじい硬功と化勁だぜ」
「まったく……人騒がせにも程があるわね」
「キリカ……。どうしてヴァルターがここに来てると分かった？」
「分からないとでも思った？まったく……貴方といいヴァルターといい。男っていうのはどうしてこんなに不器用なんだか」
「うぐっ……」
「……（じー）」
隣のヨシュアをじとっとした目で見るエステル。
「……反省してるからそんな目で見ないで欲しい」
「うーん……耳の痛い話やねえ」
「さて、私用も済ませたし、私はそろそろツァイスに帰るわ。……武運を。次の塔でも気を付けなさい」
「キリカさん……」
「ああ……分かってる」

―アルセイユ　作戦室
「なんと……。たった1人で乗り込んだとは。いつもながら大した娘じゃわい」
「ツァイス支部のキリカ殿といえば非常に優秀な女性だと聞いている。一度会ってみたいものだな……」
「（うーん……ユリアさんとキリカさんか）」
「（優秀さでは良い勝負かもしれないね）」
「それはともかく……。今回も、塔は元に戻ったが屋上の装置も止まっちまったな」
「ええ……そうですね。屋上に現れた結界の正体もいまだに分かっていませんし……」
「問題は、何のために屋上を覆っているのかですけど……」

「ま、悩むのは後だ。とにかく今は次の塔に急ぐしかねえだろ」
「うん……そうよね。ユリアさん。他の塔からの続報はある？」
「ああ……。今度は《紺碧の塔》だ。現れたのは鈴の音を響かせる黒衣の女性だったそうだ」
「あ……」
「《幻惑の鈴》ルシオラ……。たしかシェラさんの知り合いだったんですよね？」
「ええ、昔馴染みよ。次はあたしの出番みたいね」
「シェラ姉……」
エステルは不安そうな顔でシェラザードを見た。
「そんな顔しなさんな。姉さんは姉さん、あたしはあたしだわ。あくまで遊撃士としての使命を果たすだけよ」

―メーヴェ海道
王国軍兵士がマーシア孤児院のテレサ院長と子供たちをマノリア村に送り届けようとしていたが、《結社》の人形兵器がしつこく追跡していた。
「くっ……まだ追ってくるのか」
「もう少しでマノリアの守備隊と合流できるのに……」
「ひるむな！必ず無事に届けるんだ！」
兵士たちは追跡してくる人形兵器を必死に牽制した。
「せ、先生……」
「大丈夫……心配いりません。あなた達には指一本触れさせませんから」
「さすがにピンチなの」
ポーリィが後ろを振り返った。
「！！！」
前からも人形兵器が現れ、挟み撃ちにあってしまった。

「な……！」
「反対からだと！？」
これでは3人の兵士では到底相手できなかった。
「ふえええええん！」
「こ、こうなったらオイラだって……！」
「いけません！下がっていなさい！」
テレサ院長が子供を守るように前に出た。
「（女神よ……無力な我らを救いたまえ）」
その時人形兵器に銃弾が浴びせられ、その隙にクルツ、アネラス、グラッツが一掃した。
「あ、あんたたちは！？」
「も、もしかして……」
「遊撃士さん……！？」
「へへっ、待たせたな」
「大丈夫？ケガはないかな？」
「う、うんっ……」
「平気なのー」
「ふふ……間に合って何よりだ」
「まあ、カルナさん……！」
茂みから銃弾を浴びせたカルナが姿を現した。
「久しぶりだね、院長先生。マノリアに避難する途中かい？」
「ええ、軍の方々に送って頂いてたんですが……」
「軍の方々！ここは我らが引き受けた！」
「子供たちを連れてマノリアに急いでください！」
「か、かたじけない！」
「みんな！我々に付いてきてくれ！」
「うんっ！」
「了解なの～」
王国軍兵士たちは子供たちを連れて先へと進んでいった。そして、人形兵器たちは数を増やしてクルツたちに迫ってきた。

「さ～てと。なかなか骨が折れそうだな」
「だが……やるしかなさそうだね」
「大丈夫、何とかなりますよ！《塔》に向かっているエステルちゃんたちに比べればこんなの軽いもんです！」
「ふふ、そうだな。彼らが心置きなく戦えるよう最善を尽くさせてもらおう。方術――貫けぬこと鋼の如し。いくぞ、みんな！」
「おおっ！」

第１４章　四輪の塔（５）（前書き）

第３の塔、《紺碧の塔》編です。

第１４章　四輪の塔（５）

―アルセイユ

「ルーアン地方か……。テレサ先生やあの子たちは今ごろどうしているのかな」

「多分、軍の部隊に守られて避難している頃だと思います。無事だといいんですけど……」

「大丈夫、心配いらないよ。父さんの指示で、軍とギルドが協力して鎮圧に当たっているから」

「ヨシュアさん……」

「確かに、あの父さんに限ってその辺は抜かりはないかもね」

「ああ……あり得ねえな」

「――遊撃士諸君。あと５分もしたら《紺碧の塔》上空に到着だ」

「シェラ姉……」

「ええ……。到着しだい出発するわよ」

エステルはもう１人にケビン神父を選び、《紺碧の塔》に向かった。

―紺碧の塔

「《紺碧の塔》……。今度はどんな場所に飛ばされちゃうのかな」

「入ってみないと分からないだろうね。『表の塔』と違って、空間的な制約を受けないから内部構造はかなり違うみたいだ」

「は～、落ち着かん話やね」

「とにかく……入ってみるしかなさそうね。慎重に、そして確実に進むわよ」

―紺碧の塔　異空間
《紺碧の塔》は一直線だった。エステルたちが進んでいると情報端末を見つけたので、データクリスタルを取ろうとしたその時、鈴の音が聞こえてきた。
「えっ……」
「今のは……」
「……下がって！」
上から人形兵器が降ってきた。

―紺碧の塔　屋上
その後も、情報端末の前で2度戦闘があり、《紺碧の塔》でも4つのデータクリスタルを手に入れ、屋上に到着した。
「ふふ……少々、遅かったみたいね」
「姉さん……！」
「いらっしゃい、シェラザード。それからヨシュア……久しぶりに会えて嬉しいわ」
「ルシオラ……どうして貴女が教授に協力しているんだ？それほど教授と親しくはなかったと思っていたのに……」
「ここは私にとっても巡業で訪れた懐かしい地だから……。つい興が乗ってしまった、といったところかしら」
「な、懐かしい場所だっていうのにどうしてこんな事をしてるの！？シェラ姉の気持ちも考えないで……！」
「エステル……いいわ。言葉で尋ねるだけじゃ姉さんは何も答えてくれない。答えるに値する実力をあたしが証明しない限りね」
「あら……うふふ。さすがに私のことをよく分かっているみたいね」
「芸を教えてくれた時はいつもそうだったから……。だから姉さん……約束して。あたしが力を証明できたら《結社》に協力する理由を教えてくれるって……！」

「ふふ……いいでしょう」
幻惑の鈴ルシオラが式神を召喚した。
「で、出た……！」
「善鬼と護鬼――陰陽司る式神たち！」
「東方の符術を私なりにアレンジしたものよ。シェラザード。見せてごらんなさい。私の元を離れてからあなたがこの地で得た力をね」
「……分かった。《銀閃》の力、とくと見てもらうわ！」

「あら……私の式神が倒されるなんて。《剣聖》の指導の賜物（たまもの）かしら？」
「はあはあ……」
「姉さん……どう！？」
「ふふ……頑張ったご褒美に教えてあげる。私が《結社》に入ったのは……自分の闇を見極めたかったからよ」
「え……」
「8年前……座長が崖から転落して亡くなった事は覚えているわね？」
「あ、あたり前じゃない。あの事故がきっかけであたしたちのハーヴェイ一座は……」
「そう……一座は解散してバラバラになってしまった。でも、どうして座長が一人であんな人気（ひとけ）のない場所にいたのかとうとう誰にも分からなかった……。一体、どうしてだと思う？」
「ど、どうしてって……」
「答えは簡単……。あの時、座長は一人きりで崖の近くにいたのではないの。私が座長の側にいて……そしてあの人を突き落したのよ」
「……。……なに……何を言ってるの姉さん？」
ルシオラの言葉が理解できないシェラザード。

「ふふ、だから言ったでしょう。ハーヴェイ座長は私がこの手で殺したの」
「あはは……冗談キツイよ。だってあの時、姉さんは……」
「自分の手で座長を殺してから何食わぬ顔でみんなの元に戻る。そしてその場で鈴を鳴らして座長の叫び声の幻聴を聞かせる。――私の幻術を使えば造作もないトリックだったわ」
「やめて……やめてよ！姉さんは座長を殺したなんて……そんな事あるわけないじゃない！本当の親子みたいに……それ以上に仲が良かったのに！」
「だからこそ赦(ゆる)せなかった。あの人が私たちの元から去って行こうとしたことが……」
「え……」
シェラザードが驚いた時、
「また……！」
「戻るんか……！」
《紺碧の塔》が他の塔と同じく元に戻った。
「ふふ……どうやら時間切れのようね」
「ね、ねえ……。ここにあった結界って何のために張られていたの？《結社》は一体、何をしようとしているわけ？」
「残念だけど、私たちも詳しい事は教わっていないの。教授に指示された通りのことをやっていただけだから。ただ、隠された塔の内部を見て何となく見当はついたのだけど」
「え……」
幻惑の鈴ルシオラが鈴を鳴らすと、その姿が薄らいだ。
「待って姉さん！まだ全部答えてもらってない！どうして姉さんが座長を殺さなくちゃならなかったの！？……あんなに優しかった……みんなの親代わりだった人を……！」
「ふふ……悪いけど今回はここまでよ。今度会えた時に続きは全部教えてあげるわ。それまで良い子にしてなさい」
そのまま幻惑の鈴ルシオラは消えてしまった。

「姉さん……！」
「あ、あの、シェラ姉……」
「シェラさん……」
「……大丈夫、心配しないで。あたしは姉さんの真実に一歩、近づくことができた。今は……それだけで充分よ」
「姐さん……」
「《四輪の塔》もこれで3つ……。《アルセイユ》に戻って最後の塔に向かいましょう」

エステルたちが《四輪の塔》の事件を解決している間、王国軍警備艇が《結社》の飛行艇を追いかけていた。
「ふん……往生際の悪い。多少、速力で勝ろうとも包囲網から逃れられるものか。そのまま追い詰めて拿捕（だほ）せよ！」
「イエス・サー！」

―王都グランセル
王都周辺の人形兵器を掃討した兵士たちをシード中佐とベルク副長が見守っていた。
「やれやれ、何とか夕刻までに人形どもを掃討できましたねぇ。ようやく一息つけそうです」
「そうだな……兵たちも疲れているだろう。後の警備は後詰めに任せて今日はゆっくり休ませてやれ」
「了解ッ」

―レイストン要塞
指令室で王国軍士官がカシウスに現状を報告していた。
「――以上をもちまして各方面からの報告は終わりです。《アルセイユ》の遊撃士も含め、おおむね順調と言っていいかと」
「ふむ……そうか」
「しかし、《結社》と言っても所詮は犯罪者の集まりですな。王国軍の敵ではなさそうです」
「油断するな。例の《方舟》が残っている。警備艇には引き続き王国各地の哨戒に当たらせろ。なお、緊急指令は全部隊に徹底させるように」
「了解しました！」
王国軍士官が出ていくと、カシウスは一息ついた。
「緊急指令……異変時における行動指令書か。杞憂に終わってくれればいいのだが……。……」
カシウスは立ち上がると無線器を手に取った。
「――ご苦労。カシウス・ブライトだ。突然ですまないが彼をここに呼んでくれ」

第１４章　四輪の塔（６）（前書き）

第４の塔、《琥珀の塔》編です。

第１４章　四輪の塔（６）

―アルセイユ

「《琥珀の塔》上空に到着した。斥候部隊からの続報もようやく入ってきたところだ。……塔から現れた襲撃者は巨大な鎌を持つ少女だったそうだ」

「そっか……予想はしてたけど」

「……レンちゃん……」

「《殲滅天使》レン……。僕が結社にいた頃はまだ《執行者》候補だったけど……。まさか、あの《パテル＝マテル》を動かせるようになっていたとはね」

「ヨシュア……あの巨大人形を知ってるの？」

「結社ラボで開発された戦略級の巨大人形兵器だった。制御が困難で、開発計画は凍結されたはずだったけれど……」

「それをあの嬢ちゃんは楽々使いこなしてたんか……。末恐ろしいチビッコやで」

「……」

ティータの顔がどんどん曇っていった。

「大丈夫、ティータ。そんな顔しないでってば。絶対にあの子の目を覚まさせてあげるから！」

「お姉ちゃん……」

「……」

「えっと……ちょっと楽観的すぎるかな？」

ヨシュアが何の反応も示さないので少し不安になるエステル。

「……いや。ひょっとして君ならあの子の心に届くかもしれない。一緒に呼びかけてみよう」

「……うん！」

「すいません、話に水を差すようですが、私も付いていって構いませんか？」

「へっ……？」
「レインさん？」
「私としても彼女に聞きたいことがあるのですよ。それを今、話すことはできませんが……」
「うーん……どうする、ヨシュア？」
「……。別にいいんじゃないかな」
ヨシュアはレインを一瞥するとそう言った。
「そうね、うん、頼りにしてるわ」
「ありがとうございます」
こうして、エステル、ヨシュア、レイン、ティータの４人で《琥珀の塔》に向かうことになった。

―琥珀の塔
「いよいよ最後の塔か……。前みたいに一本道だったら迷わなくていいんだけど……」
《紺碧の塔》のことを思い出すエステル。
「手強いガーディアンに立ち塞がれるのも大変だけどね。もうすぐ日が暮れる……なるべく急いだ方が良さそうだ」
「うん、レンを止めなくちゃね。みんな……気合いを入れていきましょ！」
「うん……！」
「了解です！」

―琥珀の塔　異空間
《琥珀の塔》は想像以上に複雑だったが、何とか屋上に辿り着いたエステルたち。

「もう……待ちくたびれちゃったわ」
「レン……！」
「うふふ。エステルってば悪い子ね。レンが留守にしている間に《方舟》から逃げちゃうなんて。でも、まあいいわ。こうして遊びに来てくれたんだし」
「レ、レンちゃん……」
「うふふ、ティータも遊びに来てくれたのね？アイスクリームはご馳走できないけど、ゆっくりしていくといいわ」
「あ、あう……」
「それから……うふふ。やっと姿を見せてくれたわね。会いたかったわ、ヨシュア」
「……まさかこんな所で君と再会できるとは思わなかったよ。大きくなったね……レン」
「うふふ、当然よ♪レンはもう１１歳なんだもの。ヨシュアも、しばらく見ないうちにすごくハンサムになったのねぇ。冷たい瞳をしていないのはちょっと変な感じがするけど……。でも、今のヨシュアも悪くないわ」
「そうか……ありがとう」
「まったくもう……相変わらずマセてるんだから。……あのね、レン。あたしたち、《結社》の計画を阻止するためにここに来たのよ」
「うふふ、そうみたいね。レンも退屈なのはイヤだし、付き合ってあげてもいいわよ」
レンが大鎌を取り出した。
「クスクス……楽しませてちょうだいね？」
「……レン……」
「悪いけど、あたしはレンと争うつもりはないわ。それよりも……話をしに来たの」
「お話？わあ、ひょっとしてお伽話でもしてくれるの？」
「ううん……《結社》の仲間になるって話。せっかく誘ってくれたんだけど、改めて断らせてもらおうと思って」

「ま、ヨシュアと再会できたし、仕方がないかもしれないわね。でも、考え直した方がいいわよ？エステルたちが頑張ったって《身喰らう蛇》は止められない。それはヨシュアが一番よく分かっているはずよね？」

「……それは……」

「それに《結社》に入ればエステルはもっと強くなれるわ。そうすればレンと同じ《執行者》になれるのよ？うふふ、ステキだと思わない？」

「うーん、強くなれるっていうのは心惹かれないでもないんだけど……。でも……それは本物の強さじゃないと思う。少なくともあたしにとってはね」

「……え……」

「あたしは確かに強くなりたい。お母さんみたいに大切な人を守れるくらいに。ヨシュアを心配させないよう自分自身を守れるくらいに」

「エステル……」

「でも、《結社》に入ったりしたらあたしはあたしじゃなくなっちゃう。本当の自分として強くなれなくなる。それじゃあ意味がないと思うんだ」

「……分からない。エステルの言っていることはレンにはちっとも分からないわ。本当の自分ってなに？それってどういうものなの？」

エステルが一歩前に踏み出す。

「あたしは……レンのことが好きだよ。マセてて、イタズラ好きで意外と思いやりもあって……。色々と騙されちゃったけどあんたのことは憎めないのよね」

「……エステル……」

「でも、だからこそ……だからこそあたしはレンに《結社》に居て欲しくない。大人になって、自分自身の意志で選ぶならともかく……子供のあんたが、そんな場所にいること自体間違ってると思う。このまま大人になったら取り返しがつかなくなるから……。だから

……」
「……。……気が変わったわ」
「え……」
「……ッ……！」
レンがエステルに向かって鎌を振ったが、すんでのところでヨシュアが弾き返した。
「！！！」
「ふふ……さすがヨシュア。なかなかの反応速度だったわ」
「君こそ……大したものだ。どうやら《殲滅天使》の異名は伊達じゃなさそうだね」
「そう、レンは強いわ。闇に紛れて動くしかない《漆黒の牙》よりずっとね」
「ちょ、ちょっとレン！いきなり何をするのよ！？」
「うふふ、気が変わったの。レンの仲間に入らないんだったらエステルなんか死ねばいいわ。ヨシュアも、他の人たちも全員ね」
「っ……死ねばいいなんて物騒なこと言うんじゃないわよ！も～、アッタマきた！お尻百叩きにしてやるんだから！」
「エステル、落ち着いて。彼女を甘く見たら――」
「ヨシュアは黙ってて！子供のしつけと同じよ！」
「クスクス、甘いわね。エステルのそういうところ、わりと好きだったけれど……。今は大嫌い」
突然、エステルたちの周囲を人形兵器が取り囲んだ。
「Ｎｏ，ＸＶ――《殲滅天使》レン。これより敵集団の殲滅に入るわ」

「あら、連れてきた子が全部やられちゃうなんて……。クスクス、結構やるじゃない」
「い。いい加減にしなさいよ！こんな事ばかりして本当にレンは楽

しいわけ！？」
「うふふ、もちろんよ。レンはね、人が苦しむ姿を眺めるのがとっても好きなの。ぽっかり空いた胸の穴が埋まっていく感じがするから。レンはね、人が痛がる声を聞くのがとっても好きなの。夜、ぐっすり眠れるから」
「……ッ……」
「そうか……君は今でも……」
「……ヨシュアは黙っててて」
「ねえ、エステル。レンには小さな頃、ニセ物のパパとママがいたわ」
「え……」
「ニセ物のパパとママ。2人とも大好きだったけどお仕事が失敗しちゃってね。レンのこと、悪い大人たちに引き渡しちゃったのよ。『必ず迎えに行くからね』って泣きながら何度も繰り返してね」
「そ、それって……」
「その人たちに引き取られた後、レンは色々なことをやらされた。大抵のことはすぐに慣れたけど痛くされるのだけは慣れなかった……。同じくらいの子たちもいたけどすぐに具合を悪くしちゃって居なくなっちゃうことが多かった。そんな生活が半年くらい続いたわ」
「……くっ……」
「……レン……ちゃん……」
「……。それは、ある教団の仕業ですね。6年ほど前から子どもたちが大勢消える事件がありました。彼らはその子どもたちを使って人体実験をしたそうです。あなたもその1人ですね？」
「あら、お兄さん。その事を知ってるの？」
「ええ、私はあの教団を長い間追い続けていますからね。色々と調べさせてもらっています。そして6年前のある日。教団が壊滅状態に陥った時、《結社》はあなたを引き取った……」
「うふふ、その通りよ。ヨシュアとレーヴェがレンを迎えに来てくれたのよ」

「え……」
エステルがヨシュアを見た。
「……《結社》はたまに下劣な犯罪組織を潰すことがある。もちろん正義のためじゃなく自らの秩序に組み込むためにね。そんな任務の1つだったんだ」
「《結社》に引き取られてからレンは色々なことを学んだわ。ヨシュアからは隠形術を、レーヴェからは武術を教わった。他の人たちも、それぞれ得意とする分野を教えてくれた。そして《十三工房》では人形とお友達になる方法を教わって……。――そこでレンは本当のパパとママに出会った」
上空からパテル＝マテルが轟音と共に降りてきた。
「あ……！」
「あの時の人形ですね……」
「な、なんて大きさ……」
「ゴルディアス級戦略人形、《パテル＝マテル》……！」
「子供のレンが《結社》にいること自体間違っている……？このまま大人になったら取り返しがつかなくなる……？」
レンがパテル＝マテルに飛び乗った。
「そんなのウソ！《結社》に引き取られてからレンは本物のパパとママに会えた！この世で一番幸せな女の子になれた！」
「……レン……」
「それを否定するならエステルはレンの敵よ……。パパとママに潰されて苦しみながら死ねばいい……」
何とか《パテル＝マテル》を退けたエステル。
「ふう……さすがに硬い装甲ですね」
「パワーも装甲も《パテル＝マテル》以上だなんて……」
「……しぶといわね。いいわ、もう飽きちゃった。《パテル＝マテ

ル》！出力全開でエステルたちを――」
レンが叫んだその時、装置が機能停止した。
「あ……」
結界が解けて空が見えたが、すでに夕方だった。
「も、戻った……」
「《塔》が解放されたのか……」
「……つまらないわ。もう少し保ってくれたらまとめて皆殺しにできたのに」
「ちょ、ちょっと!?」
「うふふ……レンは《グロリアス》に戻るわ。《β》が役目を果たしたら戻ってくるように言われたの」
「きょ、教授が!?」
「《β》が役目を果たした……？《塔》が元通りになるのも計画の一部だったというのか!?」
「さあ？レンも詳しくは知らないわ。ただ、ここを包んでいた結界は《環》の“手”だって聞いたけど」
「《輝く環》の……手!?」
「クスクス……どういう意味なのかしらね？うふふ、それじゃあまたね。今度会った時は――まとめて殺してあげるから」
レンは《パテル＝マテル》に乗って去っていった。

第１４章　四輪の塔（７）（前書き）

『第１４章　四輪の塔』が終了します。いよいよ女神の至宝、《輝く環》が現れる！

第１４章　四輪の塔（７）

―夜　アルセイユ

「各地に現れた人形や装甲獣はひとまず退治されたとのことです。警戒体制こそ続いていますがじきにそれも解除されるでしょう」

「そうですか……」

「色々分からねえこともあるが《塔》の異変も収まったし……一息つけそうな感じだな」

「そうね……そうだといいんだけど」

「だが……どうにも敵の意図が見えんな」

「……」

「エステルちゃん。なんか元気あらへんなぁ。あのチビっ子のことか？」

「……うん……。あの子の事情も知らないで余計なおせっかいを焼いて……酷いこと言ったのかなって……」

「お姉ちゃん……」

「エステルさん……」

「それに関しては私が彼女のことを教えなかったせいですね……」

「ううん、レインさんのせいじゃない。あたしなんか、人生経験もないしみんなに守られてばっかりで……。そんなあたしが、あの子のこと救ってあげようだなんて……ムシが良すぎたのかもしれない……」

「……それは違うよ」

「え……」

「レンはね……本当の意味での天才なんだ。あらゆる情報を瞬時に吸収して自分の力として取り込んでゆく……。どんな環境にも即座に適応して自分と周囲を制御してゆく……そんな能力を生まれながら持っていたらしい」

「そうなんだ……」

「《結社》に引き取られる前、あの子が置かれていた環境はとても酷いものだったけど……。でも、僕と違ってあの子の心は壊れなかった。どんな環境すら、対処すべき環境変数として把握できたから……。だから自分を保ったままでいられた」
「で、でもそれって……！」
「うん……そうだね。いくら感情を制御できても心が痛くないはずはないと思う」
「……」
「僕が知っている限り、レンがあんな風に昂ぶったのは見たことがない。それは多分、君の言葉がレン自身も気付かないような本当の部分に届いたからだと思う。……君だから出来たことだよ」
「ヨシュア……。……そういう事ならヘコんでばかりもいられないか。見てなさいよ～、レン！今度会った時は、本当のあんたと徹底的に向かい合ってやるんだから！」
「お、お姉ちゃんてば……」
「ふふ、やれやれ……」
「ははっ、それでこそエステルちゃんやで」
「ま、それはともかく……。とりあえず、これからどうする？《結社》の意図が分からない以上、王都に戻るのも何だと思うし……」
「それなんだが、今日のところはレイストン要塞に寄ってはどうかな？そうすればカシウス准将と今後についても相談ができるだろう」
「あ、確かに……」
「そうした方が良さそうですね」
「それでは、ユリアさん。レイストン要塞に向かってください」
「了解しました――」
「た、大変じゃあ！」
突然、ラッセル博士がブリッジに駆け込んできた。
「お、おじいちゃん？」
「ど、どうしたの？そんなに慌てちゃって……」
「お前さんたちが塔で見つけたデータクリスタルじゃが……その1

つを、たった今、《カペル》が解析したんじゃ！」
「えっ……」
「何が記されていたんですか？」
「《デバイスタワー》の機能じゃ！４つの塔は、《輝く環》を異次元に繋ぎ止めておくために建造されたものらしい！」
「い、異次元……？」
「そんな所に《輝く環》が！？」
「ちょ、ちょっと待ってや！それじゃあもしかして、あの《裏の塔》の空間は……」
「うむ、その次元に属していた空間なんじゃろう。そして《ゴスペル》の正体は……」
「――ええ。《輝く環》の『端末』です」
いきなり、モニターが動き、ワイスマン教授が映し出された。
「！！！」
「きょ、教授！？」
「なにッ！？」
「こ、この人が……」
「……」
「ど、どうして勝手に……。リオン！一体どうなっているんだ！？」
ユリア大尉が通信士リオンに尋ねた。
「わ、分かりません！先ほど通信が入ったと思ったらいきなり制御が奪われて……」
「ハッキングというやつか……。高度な情報処理システムが仇になってしまったようじゃの」
「フフ……初めまして、ラッセル博士。それだけのシステムを自力で実現されたとは驚きです。さすが、かのエプスタイン博士の直弟子の１人だけはある」
「ふん、イヤミか。言っておくが、航行制御はシステムから独立しておる。操ろうとしてもムダじゃぞ」
「いえいえ。そんな事はしませんよ。せっかくの決定的な瞬間を見

逃して欲しくなかったのでね。わざわざ連絡しただけなのです」
「なに……？」
「決定的な瞬間……まさか！」
「フフ、その位置だと前方甲板に出るといいだろう。それでは皆さん、よい夜を」
ワイスマン教授はそれだけを言い残し、通信が切れた。
「ヨシュア……！」
「ああ……甲板に出よう！」

―アルセイユ　甲板
「ど、どこ……！？」
「前方甲板から一番よく見える方向……」
「……あれや！」
ケビン神父がヴァレリア湖の方向を指さした。

ヴァレリア湖上空に一閃の光が走ったと思うと空間が割れ、巨大な輝く浮島のような物が現れた。それはまさに『浮遊都市』というにふさわしいものだった。

「な、な、な……」
「まさかあれが……あの巨大な都市が……」
「うん……間違いない……」
「《輝く環》……オーリオールっちゅう事か！」
「――いかん。ユリア大尉！急いで艦を降ろすんじゃ！」

ラッセル博士が我に返って叫んだ。
「……え……」
「カシウスが伝えた緊急指令があったじゃろ！急がんと手遅れになるぞ」
「！！！」

しばらくして《輝く環》から黒い光――導力停止波が放たれ、王国中の光が消え失せた。

―紅の方舟　《グロリアス》
「おお……！」
「これは……」
「クハハ……マジかよ！」
「うふふ……ステキね」
「あはは！確かにこれはスゴイや！教授が勿体ぶってたのも納得だ！」
「フフ……お気に召したようで何よりだ。《輝く環》は永きに渡って異次元に封印されていた……。だが端末たる《福音》があればこちらの次元にも干渉できる。問題はレプリカの精度をどこまで上げられるかだったのだ」
「そして幾度もの実験を経て真なる《福音》は完成した……。《環》はそれらを通じて己を繋ぐ《杭》を引き抜き……そして今、昏き深淵より甦った。――それが第３段階の真相か」
「ククク……その通り」

――諸君の働きのおかげで第3段階は無事完了した！これより『福音計画』は最終段階へと移行する！――

第１５章　混迷の大地（１）（前書き）

『第１５章　混迷の大地』始まります。

第15章　混迷の大地（1）

―山猫号

「あ、ありえない……」

ジョゼットが望遠鏡で《輝く環》を目の当たりにして驚愕していた。

「な、なんなのアレっ!?あの大きさ……メチャクチャすぎるよっ!」

「ありゃあ、間違いなく5千アージュ以上はあるな……。巨大な浮島ってところかよ……」

「いや……基本は人工物みたいだな。島っていうよりは浮遊都市って言うべきかもしれん……」

「ふ、浮遊都市……」

「……こうしちゃいられねえ……」

ドルンは船全体に指示を出した。

「……よーし、野郎ども!このまま浮遊都市に乗り込むぞ!」

「あ、兄貴!?」

「ほ、本気なの!?」

「本気も本気、大本気だぜ!もしも《結社》の連中がアレを甦らせたってんなら……ドデカイお宝がわんさと眠ってるに違いねえ!」

「か、勘弁してくれよ～……。さすがにアレは俺たちの手に負えないぜ!ジョゼットもそう思うだろ!?」

「う、うーん……。ボクも、ここまで来た以上色々と確かめてみたいかも……」

「ガクッ……」

「ま、まあ、昨夜から様子が変だし用心はした方がいいと思うよ。導力通信も全然入ってこないし……」

「確かに、軍やギルドはともかく民間の通信も入らねえってのは――」

その時、金色の光の波が山猫号に差し込んだ。

「うおっ……」
「な……」
「ひ、光の波……？」
光の波が消えたかと思うと、山猫号のモニター、レーダーなどの導力で動くものが全て機能停止した。
「ええっ！？」
「何だ、故障かよ！？」
「お頭、大変だっ！」
空賊団員が血相を変えてブリッジに入ってきた。
「導力機関、飛翔機関共にいきなり停止しちまったぁ！」
「な、なんだと～！？」
「ど、どうなってるわけ！？」
「……こりゃあマズイな……。飛翔機関による反重力フィールド低下……。ついでに舵も無反応ときた」
「ちょ、ちょっと待て！？」
「な、何とかならないの！？」
慌てても何もできないこの状況。
「……。……この段階で俺たちに出来ることは１つしかない」
「それって！？」
口を揃えてキールに尋ねるジョゼットとドルン。
「このまま天に召されないよう女神に祈ることくらいかな……」
そして、山猫号は重力に任せて落下していった。

昨夜の導力停止現象で各地は混乱状況にあった。
―ツァイス中央工房
市民たちは中央工房に押し寄せ、事情の説明をマードック工房長に求めていた。

―ミルヒ街道
突然の導力停止現象により王国軍の警備艇が街道の真ん中に墜落していた。

―ヴァレリア湖上
間一髪で墜落を免れたアルセイユ。甲板ではユリア大尉とラッセル博士が今後の方針を話し合っていた。

―遊撃士協会ボース支部
「ふむ、四輪の塔でそんな事があったとはな……。まったくご苦労じゃったな。ともあれ、お前さん達には報酬を渡しておくとしよう」
エステルは報酬を受け取った。
「……しかし、とんでもない事態になってしまったものじゃ。まさか、オーブメントが使えなくなってしまったことがこれほどの混乱を呼ぶとはの……」
「うん……日頃どれだけオーブメントの恩恵を受けていたのか思い知らされたわ……」
「そうだね……。通信、交通、国防、生産ライン……。国家機能がマヒしたのと同じだからね」
「市民にとって心配なのは照明と暖房でしょうね。昨日の夜はずいぶん街が混乱したんじゃないの？」
「うむ……。ギルド、工房、市長邸に市民が押し寄せて大変じゃった。何が起こっているのか聞かれてもこちらも答えようがなくての

う。おかげで寝不足じゃよ、ふう」
ルグラン爺さんは頭を押さえた。
「そっか……お疲れさま」
「例の浮遊都市の件もあるし、かなりマズイ状況みたいだな。パニック一歩手前ってところか」
「まあ、リベールは治安がいいから暴動の心配はなさそうだが……この状況が続けば皆、参ってしまうかもしれん」
「うむ……早急に対策を取らなくてはな。――で、お前さんたち。ラッセル博士から託された起死回生の策というのは何かね？」
「起死回生というほど大げさなものじゃないけど……」
「ラッセル博士が、新発明の試作品を提供してくれたんです」

―昨夜　アルセイユ　作戦室
「――これが試作品の『零力場発生器（ゼロりきば）』じゃ」
「零力場……発生器？」
「簡単に言うと、《ゴスペル》が発生させる特殊な波長の導力場……。それによる共鳴を相殺する力場を発生する回路というわけじゃ」
「……ちっとも簡単に聞こえないんですけど……」
「それはもしかして……『導力停止現象』を阻止できるということですか？」
「ええっ！？」
「ほ、本当ですか！？」
「うむ……その通りじゃ。結局、『導力停止現象』とは《ゴスペル》を通じてオーブメントの導力が吸収されるという現象じゃ。『何処へ』というのが謎じゃったがここへ至ってようやく明らかになった」
「あの浮遊都市……《輝く環》ということですね」
「うむ、その通りですわい。《輝く環》は、異次元から《ゴスペル

≫という穴を通じて『導力停止現象』を起こしていた。その穴は余りに小さかったため影響範囲は狭くてすんでいたが……。≪輝く環≫が解放されたことでその範囲は一気に広がってしまった。それこそ王国全土を巻き込んでしまうくらいにな」

「王国全土……」

「それが今回の現象ですか……」

「うむ、おそらく王国にあるありとあらゆるオーブメントが動かなくなってしまっているはず。じゃが、この『零力場発生器』は≪環≫の干渉を阻止できる働きがある。――言い換えれば、これの側にあるオーブメントは問題なく動くということなんじゃ」

「わぁ……！」

「す、凄いじゃない！」

「ヘッ、そいつを使えば万事オッケーってわけか」

皆の顔が華やいだ。

「いや……そこまで都合は良くない。まず第一に、この試作品が守れる対象は限られておってな。せいぜい両手で持てる大きさくらいのオーブメントくらいなんじゃ」

「両手で持てる大きさ……」

「むう、そうなるとかなり限られてきちまうな……」

「第二に……数に限りがあるということじゃ。カシウスに頼まれていたとはいえ、１６個しか完成できなかった」

「１６個……結構多いと思うんだけど。って、父さんに頼まれていた？」

「うむ……しばらく前にわしの所に来て開発を依頼していったんじゃよ。その時は、こんな騒ぎになるとは夢にも思っておらんかったが……」

「そ、そうなんだ……」

「さすが旦那。先の先まで読んでいたわけか」

「しかしそうなると……１６個の使い方というのはほぼ決まってしまいますね」

レインが腕を組みながら言った。
「ほう……お前さん、なかなか鋭いな」
「え、え、どういうこと？」
「王国全土のオーブメントが止まってしまっているという事は、当然通信網が断たれているということです。もし、ある地方で騒動が起こってしまった時、通信網がないと応援を呼ぶこともままなりません。これは物資などにも言えることです。つまり、情報交換ができるというのが混乱を抑える最善の方法なのです。これを考えると１６個の使い方は……」
「各地にある通信器を回復させるために使う……つまり、そういう事ですね？」
「ええ、その通りです」
「そっか、確かに……」
「軍としても、導力銃や飛行船が使えなくなったのは致命的だが……。司令部や各部隊との連絡が途絶してしまったのも深刻だ。特に王城、ハーケン門、レイストン要塞の間の連絡は早急に回復しておきたい」
「ギルドにしてもそれは同じ……。支部間の連絡が取れなかったら何か起こっても対処できないわ」
「ふむ、異存はないようじゃの。それではユリア大尉。王国軍には１０個の『零力場発生器』を渡そう。それだけあれば、アルセイユ、王都、レイストン要塞、ハーケン門、各地の関所がカバーできるじゃろ」
「……かたじけない。早速、伝令を出して各地に届けさせるよう手配します」
「そして遊撃士協会には６つの『零力場発生器』を渡そう。各地のギルドにある通信器を回復させられるはずじゃ」
「うん……分かったわ！」
「間違いなく届けます」

「なんと……通信器が使えるようになるか！それは助かる！早速、その『零力場発生器』とやらを試してもらえんかね？」
「オッケー」
「ティータ、お願いできるかな？」
「うん。ちょっと待っててね」
ティータは通信器の蓋を開いて『零力場発生器』を中に入れた。
「……。……うん。これで設定は完了だよ♪」
「なんだ、えらく早いな？」
「えへへ、通信器の中に固定しちゃうだけですから。それじゃあ……」
ティータは通信器のスイッチを入れた。すると、通信器の電源が灯った。
「おお……！」
「やった……！」
「ふふ、どうやら本当に『導力停止現象』の影響を受けずに済むみたいね」
「えっと、それじゃあ続けてちゃんと通信が届くかテストしてみますね。アルセイユに残っているおじいちゃんに連絡してみます」
ティータは通信器のダイアルを回した。
「もしもし……。あ……おじいちゃん！？うん！今、ボースのギルドにいるの。だいじょうぶ。ちゃんと動いているから。……うん……うん。おじいちゃんも頑張ってね！」
どうやらちゃんと通信できているようだ。
「えへへ……ちゃんと通信も繋がりました」
「やった！」
「さすが博士の新発明だね」
「いやはや、博士には何とお礼を言ったらいいものか。ところで、ラッセル博士はアルセイユに残ったようじゃが……。姫殿下やケビ

ン神父はどうしたのかね？」
ルグラン爺さんが2人の姿が見えないことに気付いた。
「あ、その2人なら親衛隊の隊士さんたちと一緒に朝一番で王都に向かったわ。クローゼは女王様と、ケビンさんは大司教さんと、それぞれ話し合うつもりみたい」
「なるほど……。王家には王家の、教会には教会の有事における務めがあるようじゃな」
「それと、王都のギルドに『零力場発生器』を届けるのはその2人が引き受けてくれました。しばらくしたら、こちらにも連絡が入ってくるかもしれません」
「そうか……助かるわい。では、お前さんたちはこれから残りの3つのギルドを回ってくれるというわけじゃな？」
「うん、そのつもり。……本当なら、あの浮遊都市を何とかしたいところなんだけど……」
「そうね……。すでに《結社》の連中は乗り込んでるみたいだし……」
「だが、飛行船が使えねえんじゃあ手も足も出ねぇからな……。ヘッ、どうにも歯がゆい状況だぜ」
「……」
「ま、焦っても仕方あるまい。今は自分たちが片付けていくしかないだろう」
「だな……」
「え……気合いを入れていきましょう！」

「さてと……当然、飛行船が使えないから徒歩での旅になるんだけど。ロレント支部とルーアン支部、どちらから回った方がいいかな？」
「そうだね……どちらから回っても構わないと思う。大変なのはど

の地方も同じだからね」
「そっか……確かに」
「ま、こんな状況だ。どちらに行くにせよ、各地の様子を確かめながら移動する必要はあるかもな」
「恐らくどの地方にも何らかの問題は出ていると思います」
「ああ、困っている連中がいたら力になってやらんとな」
「うん……そうね！」
エステルたちはロレント支部から回ることにした。

第１５章　混迷の大地（２）（前書き）

地方都市ロレント編です。

第１５章　混迷の大地（２）

―遊撃士協会ロレント支部

「あら……」

「どうも、アイナさん」

「……お久しぶりです」

「良かった……無事だったのね。あなた達が《塔》に行ってる時に異変が起きたから心配したのよ」

「うん、危なかったけど何とか大丈夫だったわ。そっちの方こそ大変だったんじゃない？」

「そうね……さすがに騒ぎは起きたけど大事には至らなかったわ。クラウス市長やデバイン教区長が混乱を治めてくれたのが大きいわね」

「そっか……」

「それはともかく、ヨシュア。本当によく戻ってきたわね」

「はい……。色々と心配をおかけして申し訳ありませんでした」

「ふふ、いいのよ。受付にとって遊撃士というのはある意味、子どもと同じようなもの。まして最初のブレイサー手帳を渡した相手なら尚更だわ。戻って来てくれて本当に良かった」

「アイナさん……」

「えへへ……よかったね、ヨシュア。そうだ、アイナさん。実は色々と話しておかなくちゃいけないことがあるんだけど……」

「ええ……あの浮遊島についてね。くわしい事情を知っているなら教えてくれるかしら？」

「はい、それでは――」

エステルたちは《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。

「そう……あれが《輝く環》。想像していたものからはかなり違っていたけれど……いずれにせよ、今の私たちがどうこうできる相手

ではなさそうね」
「ああ……ムカつくことにな。まずは体勢を立て直すしかねえだろ」
「ええ、その意味でも通信器が使えるようになるのは助かるわ。さっそく、その装置を設置してもらえるかしら？」
「ええ、それじゃあ……」
ヨシュアが『零力場発生器』を通信器に取り付けた。
「……これで大丈夫です」
そして、電源を入れると通信器が復活した。
「動いた……」
「これで通信器は使用可能になりました。ただし、先方の通信器が直っていることが前提ですが」
「助かるわ……本当に。ありがとう、みんな。この借りはきっと返すわね」
「もう、アイナさんってば水臭いこと言わないでよ」
「僕たちの仕事にも関わりがあることですから」
「まあ、この調子で残りのギルドの通信器も直していくつもりだが……他に手伝うことはあるかい」
「そうですね……。掲示板に出ている仕事は一応チェックしてくれますか？それと、ロレント近郊で問題が生じていないか確かめてもらえると助かります。特にリッジが行っているマルガ鉱山は気になりますね……」
「え、鉱山で何かあったの？」
「いえ、事件ではなく警備の仕事よ。以前の落盤事故で、坑道の一部が魔獣の巣と繋がったことは覚えている？数日前に本格的な封鎖工事を始めた矢先だったのよ」
「そんな時にこの異変が起きたわけか……。……確かに気になりますね」
「ええ、時間があるならぜひ様子を見てきてちょうだい」
「うん、了解よ。ティオの家とか鉱山とか人がいそうな場所を回ってみるわ」

「そうだね……なるべく気を付けておこう」
「ふふ、よろしく頼むわね」

―マルガ鉱山
「うう～む……。こりゃあ、参ったぞ」
鉱員のラングがエレベーターの前で1人唸っていた。
「あの、どうかしたの？」
「おお、誰かと思えば遊撃士の姉ちゃんたちか。いつぞやは世話になったねぇ」
「あはは、懐かしいわね」
「七耀石の運搬に来て、落盤が起きた時のことだね。確かに懐かしい話だけど思い出話をしている場合じゃないよ」
「おっと、そうね」
「ああ、実はエレベーターが動かなくなっちまってよ。坑道にいる親方たちと交代もできねえ状態なんだ」
「坑道では工事をしていたと聞いたが？」
「ああ、例の落盤で空いた穴を塞ぐ作業をやっているところだったんだ。骨組みはもう入れちまったけど、地盤を固める処理がまだでよう」
「例の落盤で開いた穴って……」
「うん、僕らが来た時に魔獣の巣と繋がった所だね」
「おう、そこの穴のことさ。あの後すぐ親方が発破で埋めちまったんだが……。魔獣の巣に繋がっている物騒な場所だからなぁ。きちんと工事をしようってそういう話になったわけさ」
「なるほど……。それでリッジさんに警備を要請したんですか」
「でも、そんな工事の最中に停止現象が発生したわけよね。……何も起きてないといいけど」
「ヤバそうな状況だな……。ここは下に降りて状況を確認した方が

いいぜ」
「おう、もちろんそうして欲しいトコだが……。でも、どうやって下に降りるつもりなんだ？肝心のエレベーターが動かねえんだぜ？」
「む、むう……。そういえばそうだったわね」
「あれもオーブメントで駆動している機械だからね」
「他に下に降りる道はないのか？」
「何言ってやがる。あれば俺がとっくに使ってるぜ」
「おっと、そりゃあそうだな」
「でも、だからって諦めるわけにはいかないわ。こうしてる間も鉱員さんは地下で待ってるんだから」
「そうだね。ここはどうにかしないと……。すまねえが、知恵を貸してくれ。きっと親方たちも助けを待っているはずだ」

エステルがエレベーターのスイッチを押したが反応がない。
「やっぱり動かない……」
「エレベーターの制御キーは挿してある。機能しねえのは導力停止現象の影響だな」
「導力停止現象の影響……。もしかすると……」
レインが独り言のようなことをつぶやいた。
「レインさん、どうかしたの」
「このエレベーターの導力で動く部分はさほど大きくないようです。それならば、ラッセル博士の『零力場発生器』を使えば……」
「あっ……！」
「なるほど……。このエレベーターは駆動部を内蔵したタイプですよね？」
ヨシュアが鉱員ラングに尋ねた。
「え……？あ、ああ……確かにその通りだぜ」
「そうですか……」

ヨシュアはエレベーターの駆動部を覗き込んだ。
「制御キーの差込口はここ……。……とすれば、駆動用のオーブメントはその直下か」
ヨシュアが零力場発生器をエレベーターの操作盤に押し当てた。すると、《ゴスペル》から放たれる黒い光――《環》の干渉波が放たれた。
「う、うおっ！？」
「あ……。こ、この光って……」
「あのゴスペルと同じ光だな……」
「大丈夫……導力波が干渉しているだけです」
「ということは……」
しばらくすると干渉波が消えてしまった。
「き、消えちまったぞ……」
「いえ、これでいいと思います。私の考えが正しければ干渉波が消えたことで導力が回復すると思います」
「……」
スイッチを押すと、エレベーターが下がった。
「う、動いたっ！？」
「よし……導力が戻った！早く乗って！行くなら今しかない」
「おう！」
「お、俺も行くぜ！」
「おじさんダッシュ！」
「降下開始します！」
「わわっ……。わ、わ、わ、わ……」
エレベーターは下がったり止まったりの繰り返しで動きはぎこちなかった。

―マルガ鉱山　地下

「ふう……」
「な、なんでこんなにガタつくのよ……」
「たぶんオーブメントの導力が十分じゃないんだろう。ともかく降りて状況を確認するとしようか」
「おっと、灯りが用意してあるじゃねえか。……坑道の方も静かなもんだ。もしかすると、俺たちの考えすぎだったかも……。……おんやあ？」
「どうかしましたか？」
「あ、誰かこっちに来るんだよ。おお、なんだよ。ありゃあティントの奴じゃねえか。お～い、ティント！そんなとこでどうしたぁ？」
鉱員のティントが大慌てで走ってきた。
「お、おい……何を焦ってやがる？」
「う、うしろ……」
ティントは来た方向を指差した。
「……は？」
「だ、だから後ろだってば！」
ラングが振り向くと、魔獣の群れがラングに迫っていた。
「ふ、ふおおおおっ！！」
エステルたちがラングの間に割って入った。
「チッ、いきなりお出ましかよ」
「はは、大歓迎ってとこだな」
「まさか、また魔獣の巣が？」
「だと思うけど……。考えてる暇はどうやらなさそうだね」

「何とか撃退できたわね……」
「思ったより手強かったな」
「ええ、油断は禁物ですね」
「お、おい……遊撃士さん」

「も、もう出て行っても大丈夫？」
「あ、うん、大丈夫よ」
後ろで震えあがっていた2人はホッとした様子だった。
「はあ～ありがとう助かったよ。君たちのおかげでおいしくゴハンが食べられるさ」
「こら、バカ。なに悠長なこといってやがる。親方たちはどうした？まずそいつを教えやがれ」
「うん、とにかく今は状況を把握することが先決ね」
「やはり事故が起きたんですか？」
「う、うん……そうなんだ。昨日の工事中に魔獣除けの導力灯が消えちゃってね。仕方ないから工事を中断してここで待機してたんだよ。そしたら今朝、現場から魔獣の大群が溢れ出して……。ブルルルル……ぼ、僕も危うく食べられちゃうところだったよ」
「ちょっと待った。ギルドから警備に来た遊撃士がいたはずでしょ？」
「あ、ああ……。そのお兄さんが僕らのために時間を稼いでくれたんだ。けど、最後にはあの人もま、魔獣の群れに飲み込まれて……」
「！！」
「……」
「マズイな……」
「……すぐに行動すべきですね」
「とにかく、鉱員を探した後に遊撃士の救出に向かいましょう。まずは鉱員の方たちが先ですね。」
「……ん、了解よ。心配だけど、それがあたしたちの使命だもんね」
「ぼ、僕はお腹が減っちゃって飛び出してきちゃったけど……きっと親方たちはまだどっかに隠れているはずだよ」
「ここには全部で何人いる？」
「あと４人いるはずだ。遊撃士の兄ちゃんを入れれば５人さ」
「了解したわ。すぐに捜索を始めましょ」
「うん、急ごう！」

「は、早く戻って来てくれよ～」

「く、くそ～、ティントのヤツ、1人で逃げるなんてズルイぜ。の、残された俺が寂しすぎるじゃないかよ……」

鉱員のポンズがぼやいている時、背後から魔獣の群れがやってきた。

「うっ……やばい……」

慌てて逃げようとしたが、前からもやってきて逃げ道が塞がれてしまった。

「げげっ!?や、やばい!!絶体絶命じゃねえか!うわ～、だ、誰か～!!」

エステルたちが慌てて駆け込んだ。

「あ、あんたたちは!?」

「その質問は後でね!」

「すぐに助けますから!」

「はあ、はあ……。あ～～。死ぬかと思った」

「ふう、何とかやっつけたわ……」

「ギリギリのタイミングだったね」

「ひゅう……ほんと間一髪だったな」

「まったく……心臓に悪いですね」

「あれ、もしかして君たち……落盤事故で助けてくれたあの遊撃士さんたちかい?」

「うん、ご名答」

「もっとも、当時の僕らはまだ準遊撃士でしたけど」

「へ～、それじゃあ無事正遊撃士になれたわけか。んー、そう言われてみると何か風格が出てきた気もするね」

「えへへ、本当に？……なーんて、なごやかに談笑してる場合じゃないわね」
「うおっと……そ、その通りだね。で、これから僕はどうすればいい？」
「すぐにエレベーター前に避難してください。魔獣に見つからないよう迅速にお願いしますよ」
「う、うん……わかった。それじゃ、君たちも気を付けてな」

「おお、女神エイドスよ……。我らにどうか救いの手を……」
「シーッ、静かにしろい！なにブツブツ言ってやがる。魔獣が寄ってくるだろうが！」
「ふん、この前の落盤の時だってこのお祈りで助かったんだぞ。君もちょっとは信仰心を持ったらどうだい」
鉱員2人がヒソヒソと話し合っていた。
「あ、あんたたちは！？」
「遊撃士協会の者です。みなさんの救助に来ました」
「2人とも、怪我はない？」
「あ、ああ……何とか……」
「おお、女神よ……」
「信仰深いのは結構だが、感謝を捧げるには早すぎるぞ。今は一刻も早くここを脱出するとしよう」
「確かに……少し早かったみたいですね」
エステルたちの後ろから魔獣の群れがやってきた。
「う、うわっ！？」
「女神よ、ご慈悲を！」
「来るぜ！気をつけろ！」

「よし、撃退したわよ」
「ブルブル……。おお、女神よ……」
「冷や汗もんだったな……」
「すぐエレベーター前に避難してください。魔獣がいるので迅速にお願いします」
「お、おう！了解したぜ！」
「君たちにも女神のご加護があらんことを」
鉱員の2人は逃げるように避難していった。

「あっ……！？」
「あれは……」
エステルたちの先ではガートン親方が魔獣の群れに囲まれていた。
「ち、畜生……。魔獣をこっちにひきつけたまでは良かったが……。う、うーむ……」
ガートン親方の後ろに逃げ道はなかった。
「……こりゃあ、どうやらやりすぎちまったようだな。アーニャ、フリッサ……すまねえ……どうやら俺はここまでらしい」
「親方さん！」
エステルたちが飛び出した。
「お、お前さんたち！」
「諦めないで！ぜったい助けるから！」
「正攻法では間に合わん。一気に血路を開くぞ！」
「はい！」

「ふう、なんとか……」

「……片づいたみたいだね」
「大丈夫か、オッサン？」
「お、おう……。この程度はカスリ傷だ。いやぁ、それにしても良く駆けつけてくれたな。たまには事故以外で会ってみたいもんだぜ」
「あはは、確かに……。なぜかいつも鉱山に来ると緊急事態になっちゃうわね」
「ふう、まったくです……。でも積もる話はまたの機会にしましょう。今は一刻も早く避難してもらわないと……」
「おっと、そうだったな」
「ティントさんたちはエレベーター前にいるわ。とりあえずそこまで避難してちょうだい」
「おう、そうさせてもらうぜ」
ガートン親方が避難しようとした時、エステルたちに振りかえった。
「……そういや、おまえさんたち。支部から警備に来てくれた遊撃士の兄ちゃんだが……あいつはもう避難したのか？」
「あ、リッジさんのことね……」
「いえ、残念ながら……。僕らもまだ姿を見ていないんです」
「やっぱりそうか……。もし見つからなかったら工事現場に行ってみてくれ。あの兄ちゃんはあそこで時間を稼いでいたんだ」
「……ん、わかった」
「うむ、参考にさせてもらおう」

「さてと……これで全員よね？」
「うん、鉱員さんたちはすべて救助できたはずだよ」
「となると、後はリッジか……。今まで調べた場所にはどうやらいないようだな」
「確か、親方さんは現場に行けって言ってたわね。リッジさんはそこにひとりで残ってたって……」

「考えてる場合じゃねえな。手遅れになる前にその現場とやらに行くぞ」
「落盤現場はこの北西のはずです」
「よし！行きましょ！」

―落盤現場
「この先が魔獣の巣……」
「こりゃひでえな……。魔獣の匂いしかしねえぞ」
「踏み込んだらもう後には退けない……。エステル、装備の確認は大丈夫？」
「うん……準備ＯＫよ」
「よし、それじゃあ行こう！」

―魔獣の巣
「うっ、ううう……」
そこではリッジが１人で魔獣の群れと戦っていた。
「ぐあっ……！う、ううう……」
しかし、体力は限界で成す術がなかった。
「リッジさん！」
「大丈夫ですか！」
エステルたちが突入し、リッジをかばった。
「あ、あれ……エステルにヨシュア。な、なんで……こんな場所に……？」
「もちろん、助太刀に来たのよ」
「後は僕たちに任せてください」
「そ、そうか……助かるよ。で、でも、気を付けて。敵は目の前だ

けじゃ……」
そこでリッジは気を失ってしまった。
「むっ……。いかん、退がれ！」
ジンが叫ぶと、巨大な魔獣が上から現れた。
「な、なによアレ！」
「俺が知るか！」
「はは、これはたまげたな」
「正体はともかく……歓迎されていないのは確かだね」
「！？」
「やれやれ……。ここは私1人に任せてエステルさんたちはリッジさんを連れて避難してください」
「な、何を言うの、レインさん！？」
「これだけの数を相手にするのは無茶です！」
「なに、これでもS級遊撃士の端くれです。今はリッジさんを避難させるのが先です。事態は一刻を争いますから早くしてください」
「で、でも……」
「確かに……リッジさんやエレベーター前に避難している鉱員の皆さんが心配だ。エステル、ここは……」
「……っ……。わかった、レインさん、無事でいてね」
「こんな所でくたばるんじゃねえぞ！」
「鉱員の所はまかせておけ！」
「ええ、よろしく頼みますよ！」
エステルたちはリッジを連れて避難していった。
「さて……。巨大魔獣が1匹と、取り巻きが10匹ですか。面倒ですが、相手ではありませんね」
レインが剣を構える。
「全てまとめて私の剣の錆にしてあげましょう」

―エレベーター前
「レインさん……大丈夫かな？」
「今は無事を信じるしかないね」
エステルたちが心配そうに待っていた時、
「いえいえ、心配しなくても大丈夫ですよ」
「あっ、レインさん！」
「無事でしたか……。しかし、こんなに早く帰ってくるとは……さすが、S級遊撃士ですね」
「そんな事はありませんよ。しかし、こちらも無事のようですね。あまりこのような所に長居したくありませんから、早く上に上がりましょうか」
「うん、そうね」

導力停止現象に端を発したマルガ鉱山の危機はこうして無事に終結を迎えた。
鉱員たちと無事を喜び合い、彼らを地上へと脱出させた後……
リッジを町に送り届けるため、事件の報告に向かう鉱山長と共に一路ロレントを目指すことになった。

―遊撃士協会ロレント支部
「――なるほど、そんな事が。一歩間違えればひどい結末を迎えていたかもしれないわね」
「ああ、俺たちが助かったのはここにいる姉ちゃんたちのおかげさ。前に助けてもらった時は危なっかしく感じたもんだが……。今日は落ち着き払ってて別人を見ているみたいだったぜ」
「え？そ、そうかな……。べ、別にそんなに変わってないと思うけ

ど」
「謙遜するこたぁねえぞ。こいつぁ、俺が感じた本当の話なんだからな」
「謙遜というか……エステルの場合、本当に気付いてなさそうだけど」
「違いねえぜ。こいつは単純だからな」
「でも、それがエステルさんの良いところでもありますけど」
「む、むう……。ほめられてるハズなのに何だかうれしくないわね」
「誰しも自分自身の変化には気づき難いものよ。少しずつ、時間をかけて変化していくものだから」
「ああ、俺は久々だったから気付いたのかも知れねえな。ともかく、遊撃士として立派な働きだったぜ」
「エステルにヨシュア。それにジンさん、アガット、レインさん……。本当によくやってくれたわね。私もギルドの一員としてあなたたちを誇りに思うわ」
「うん、どういたしまして」
「これからもよろしくお願いします」
「まあ、使命を果たしたまでさ」
「へっ、これくらい当然だぜ」
「ええ、当然のことをしたまでです」
「さてと、まだきちんと礼をしてないのに悪いが……。そろそろ鉱山の方に戻らせてもらうとするぜ。事故があった後とはいえ、一応は操業を続けてるんでな」
「あれ、そうなんだ」
「ああ、上層の坑道でも十分仕事はできるからな。警備に来てくれた兄ちゃんにもよろしく言っておいてくれよ。あいつ、大丈夫だったのか？ひどくやられていたようだが……」
「ええ、あちこち痛めているけど遊撃士にとってはかすり傷よ。もう意識を取り戻して今はホテルで休んでいるわ」
「そうか……。それなら一安心だな。そいじゃあ、これで失敬する

ぞ。まったく今日は助かったぜ」
「親方さんも気を付けてね」
「お仕事がんばってください」
「おう、またな」
ガートン親方はギルドを出ていった。
「さて、これで一件落着ね。リッジもあなた達も、今日はよく働いてくれたわ。これからもその調子で活躍を続けてちょうだい」
「はい！」
エステルたちは次にルーアン支部に向かうことにした。

2024

第１５章　混迷の大地（３）（前書き）

海港都市ルーアン編です。

第１５章　混迷の大地（３）

―遊撃士協会ルーアン支部
「やあ、何かお困りの事でも――――あれっ……！？」
「どうも、ジャンさん」
「……ご無沙汰しています」
「エステル君……それにヨシュア君も……！そうか……みんな無事で何よりだよ。君たちが《塔》に行ってる時に例の現象が起こったからさすがに大丈夫か心配だったんだ」
「あはは……心配してくれてありがと」
「こちらは何とか大丈夫です。ルーアンの方こそなかなか状況は厳しそうですね」
「ああ……かなり混乱している最中さ。あの貝殻みたいな巨大な物体が湖の上に現れたかと思ったら全ての導力器が動かなくなったんだ。新市長のノーマン氏もさすがに対応しきれなくてね。正直、《レイヴン》のメンバーや七耀教会の人たちがいなかったら市内はパニックに陥っていたと思う」
「え……」
「《レイヴン》の連中が……何だってぇ？」
なぜここで《レイヴン》の名前が出てくるのか不思議で仕方ないエステルたち。
「例の導力停止現象の直後、パニックが起こりそうになった時に率先して混乱を収拾してくれたんだ。今も有志としてギルドに協力してくれているよ」
「マジかよ……」
「そっか……やっとやる気を出したんだ」
「さらに面倒なことが１つ。よりにもよって跳ね橋が上がっている時に例の異変が起きてしまってね……。おかげで手漕ぎのボートでしか街区の移動ができなくなってしまったんだ」

「そうなんだ……。確かにそれしか方法はないもんね」
「ただまあ、いつまでもこの状況が保つとは思えない。各地の支部や王国軍と協力して対策を立てていきたいんだけど……。通信器も使えないから連絡が滞っている有様でね……」
「安心して、ジャンさん！あたしたちが良い物を持ってきてあげたから！」
「良い物……？」
「はい、実は……」
「エステルたちはジャンに《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。
「そうか……。やはり巨大な物体は《結社》の仕業だったんだな。でも、通信器が使えるのはとんでもなく助かっちゃうよ！さっそく設置してくれるかい？」
「はい、それでは」
ヨシュアが通信器に『零力場発生器』を付けた。
「……これで設置は完了です」
そして、通信器の電源を入れた。
「おお～！？」
「これで通信器は使用可能になりました。ただし、先方の通信器が直っていることが前提ですが」
「いや～、それでも大助かりさ！この状況で、情報があるのとないのとでは天地の差だからね。ラッセル博士と君たちにお礼のキスをしたい気分だよ！」
「あはは……気持ちだけ受け取っておくわ」
「まあ、この調子で残りのギルドの通信器を直していくつもりだが……他に手伝うことはあるかい？」
「そうですね……。一応、掲示板に出ている仕事をチェックしておいてください。それと、ルーアン近郊で民間人がいそうな場所の様子を確かめに行ってくれると助かります」
「確かに、こんな状況だしパトロールは必要かもね」

「できる限り気を付けて回ってみることにします」
「ああ、よろしく頼むよ」

―ヴィスタ林道
「うわあああああ～っ！！」
奥の方から少年の声が聞こえてきた。
「今のは……！？」
「急ごう、エステル！」

「あうっ……。く、くそ……どうしてこんな事に……。は、早く報せなくちゃ」
ジェニス王立学園の生徒、ミックがヴィスタ林道を走っていると、装甲獣が追いかけてきた。
「ひっ……」
装甲獣がミックに飛び掛かった時、エステルがそれを弾いた。
「あ、あんたら……！？」
「話は後で！こいつらを追い払うから！」
「下がってて。巻き込まれると危険だ」
「なんでこんな場所に装甲獣がいやがる……！」
「……来るぞ！」

「ふう……さすがに手強かったわね」
「ああ……何とか間に合って良かった」
「た、助かった……。エステル……それにヨシュアだったな。すま

ねえ……危ない所を助けてくれて……」
「ま、それがあたしたちのお仕事みたいなもんだから」
「それよりも……いったい何があったんだい？今の魔獣、このあたりで普通にいるヤツじゃないよ？」
「そ、それが……。学園が……王立学園が襲われたんだ！」
「なっ……！？」
「……詳しく話せ」
「あ、うん……。俺……いつものように校舎裏で授業をサボってたんだけど。紅い装甲の兵士たちがいきなり正門から入ってきたんだ。用務員のオッサンが止めようとしたんだけど……。そ、そいつらが銃で……オッサンを、う、撃って……」
「そ、そんな……」
「まずいな……」
「それを見て俺……頭が真っ白になっちゃってさ……。何とか助けを呼ぼうとここまで逃げてきたんだけど……」
「……事情は分かった。このままルーアンに行ってギルドに伝えてくれるかい？僕たちはこのまま学園の近くまで行ってみるから」
「わ、分かった……。あいつら、今の魔獣以外にもでかい人形みたいなのを連れてた……。くれぐれも気を付けてくれ！」

―ジェニス王立学園前
エステルたちはシェラザードとティータを呼び寄せた。
「話を聞いて飛んで来たはいいけど……かなり危険な状況みたいね」
「い、一応ジャンさんが王国軍に連絡したけど……。応援が来るにしてもちょっと時間がかかるかもって……」
「そっか……」
「どの道、導力兵器が動かない以上、軍の部隊もアテにならないだろう。白兵戦に慣れている俺たちがケリをつけるしかなさそうだ」

「ただ、学園の関係者が捕まってる可能性が高いだろう。迂闊に動くのもヤバイぞ」
「確かに……。何とか内部の状況が分かるといいんだけど……」
「……。……少しだけ待ってて。学園内の様子を調べてくるよ」
「ヨ、ヨシュア！？」
「……どういうこと？」
「偵察などの隠密行動は僕が最も得意とする分野です。敵戦力と人質たちの状況を一通り調べられると思います」
「なるほどな……」
「ふむ、それが可能なら是非ともやってほしいところだが」
「で、でも！それって危険なんじゃ！？」
「大丈夫、もっと厳しい状況で潜入活動をしたこともあるから。心配はいらないよ」
「で、でもでも～っ！」
「……ヨシュア。どうしても1人で行くつもり？」
「私も手伝いたいと言いたいところですが……。潜入活動は1人の方が動きやすい上に見つかりにくいですからね」
「ええ、その通りです。だから1人で行かせてほしい」
「そっか……。……1つだけ確認。あの時の約束……ちゃんと覚えているよね？」
「最後まで一緒に歩いていく、だね。大丈夫――絶対に忘れないから」
「うん、それならよし！ヨシュア……くれぐれも気を付けてね」
「うん、分かってる。それでは行ってきます」
ヨシュアは学園内に潜入した。
「おい……いいのか？」
「……うん。この状況で付いていったらかえって足手まといになるし。それに……ヨシュアを信じているから」
「お姉ちゃん……」

「ふふ……いい女になったじゃない」

―ジェニス王立学園

「……」

ヨシュアは建物に身を隠し、中庭の様子をうかがった。

「（……どうやら建物の裏手を移動した方がよさそうだ。あとは建物にいる人質と大体の敵戦力さえ掴めれば……）」

まずはすぐ側の男子寮を確認した。

「（男子寮内の敵兵は2名……。こんな風に、全ての建物を一通りチェックしておこう……）」

―男子寮

「（男子生徒2人と撃たれた用務員の人か……。あの様子だと致命傷じゃなさそうだ。まずは一安心かな……）」

次に食堂・クラブハウスに向かおうとしたがかなりの距離があった。

「（……仕方ない。一気に駆け抜けるか）」

ヨシュアは得意の隠形術で一気に駆け抜けた。

―クラブハウス

「（敵兵士は4名……。何か起こった時のための待機要員といったところか。もしかしたら2階には人質がいるかもしれない）」

―学園本館
～学園長室

「ギルバード君……。一体どういうつもりだ。何故このような狼藉を働く？」

「フフ……目的は2つです。まず我々は、王国内に更なる混乱をもたらすよう上から指示されていましてね。そこで我が懐かしの母校を舞台に選ばせてもらったんですよ」

「……変わったな、ギルバード君。学生時代の君はあんなにも熱心に政治への道を志していたのに……。いつから君の情熱は失われてしまったのかね？」

「理想は理想。現実とは醜いものですよ。ミラと権力こそ全て……。ダルモアの秘書をしていた時に僕はその真実を悟ったんです。いずれは市長を追い落として後釜に座るつもりでしたが……遊撃士どものおかげで目論見がパーになりましてね。そこで、別の形で権力を掴むことにしたのです」

「愚かな……」

「クク……何とでも言うがよいでしょう。そしてもう一つの目的は……リベール王家の姫君ですよ」

「！」

「噂によると、この学園に在籍なさっているようですね。どの生徒がそうなのか教えて頂きましょうか？」

「……何を言っているのかさっぱり分からないな。確実に言えることは……この学園にそのような娘は存在していないということだ。君の完全な見込み違いだぞ」

「はは、あくまでトぼけるおつもりですか。まあいい、時間はたっぷりある。じっくり見定めるとしましょう」

「くっ……」

「（彼が今回の首謀者か……。そういえば学園のＯＢという話だったな）」

～職員室
「（教師の姿が見当たらない……。多分、別の場所で監禁されているのだろう）」

～受付
「（死角になって分からないけど廊下の方から気配がする……。多分、見張りの兵士だろう）」

～教室
「（あ……）」
中にはジルとハンスを含めた人質の生徒がいた。ヨシュアが窓をノックして

「なんだ……？」
「今……何か音がしなかった？」
窓の方からノックの音が聞こえた。
「……こっちか？」
ハンスが窓際に寄った。
「なっ……！」

「（……静かに、ハンス。大声を上げたら見張りに気付かれるよ）」
「（わ、分かった……。……しかしお前ねぇ。この状況で大声を出すなんてかなり無茶なこと言ってるぜ？）」
「（はは……ゴメン）」

「（ちょっとハンス……。窓の外に誰がいるわけ？）」
ジルが興味深げに寄ってきた。
「（おい、押すなって。あのな……絶対に大声上げるなよ）」
「（はいはい。この生徒会長のジル様がそんじょそこらのことで大声を上げるわけが……）」
とはいうものの、ジルが叫び声を上げそうになり、ハンスがとっさにジルの口を覆った。
「（～～～っ！！！）」

「（やっぱり大声を出しそうになったな……）」
「（そ、そりゃ驚きもするわよ！何よヨシュア君！どうしてそんな所にいるの！？）」
「（久しぶりだね、ジルさん。時間がないから手短に説明するけど……）」
ヨシュアは今までの経緯とミックの報せで学園の異変を知ったことを説明した。

「（なるほどな……。要するに、学園を解放するためにギルドが動いているってわけか）」
「（そういう事。他のみんなが動揺しないよう君たちには伝えようと思ってね）」
「（そっか、助かるわ。他にあたしたちで協力できそうなことはある？）」
「（そうだな……。現在、学園内にいる生徒と職員のリストが欲しい。救出時の助けになるからね）」
「（なるほど）」
「（オッケー。メモに書くから待ってな）」
ジルとハンスは、現在学園にいる生徒と職員の名前を書き、窓の隙間からヨシュアに手渡した。
「（……ありがとう。一時間もしないうちに本格的に動き始めると思う。それまで我慢してて欲しい）」
「（ええ、分かったわ）」
「（お前らの方こそくれぐれも気を付けてくれ。それと……無事片付いたら学食でメシくらい付き合えよ？今まで何をしてたのかみっちり話してもらうからな）」
「（はは……分かった。お手柔らかに頼むよ）」

―講堂
「（控室の方からも人の気配はしない……。どうやら無人のようだな）」

―女子寮

～一室
「（女の子が3人か……。他の子たちは本校舎の方かな？）」

～入口
「（見張りの敵兵が2名……。他の部屋にいる気配もなさそうだ）」

―裏門
「（この先は旧校舎か……。そうだな、念のため）」
ヨシュアはツールを取り出して素早く鍵穴に差し込んだ。すると、鍵が開いた。
「（これで一通り調べたか。この程度の戦力ならなんとか僕1人でも……。……。いや……今はまだその時じゃない。急いでみんなの所に戻ろう）」

―ジェニス王立学園前
「……以上が偵察で判明した学園敷地内の大まかな状況です」
「そうか……。良く調べてきてくれたな」
「ああ、これで何とか作戦が立てられるってモンだ」
「しっかし、あのギルバードが学園を襲った張本人だなんて。しかもクローゼのことを狙ってたみたいですって～？《方舟》で会った時、足腰が立たなくなるくらいぶっ飛ばしておけば良かったわ！」
エステルは怒り心頭のようだ。
「かつて有能な市長秘書で、今は《結社》の使い走りか……。挫折して根性が歪んじゃった元エリートの典型って感じね」

「うん、まさにそんな感じ。……でも、どうしよう。兵士の数もそれなりだし、人形兵器や装甲獣もいるのよね？」
「それに人形兵器を動かしてるってことは……《結社》の人たちは、この状況でオーブメントが使えるってことだよね？」
「あ……」
「どうやら博士の発明した『零力場発生器』と同じような技術が使われているみたいだ。しかも数に制限はないらしい」
「ってことは、連中の方は銃もアーツも使い放題か……。さすがにちょいと厄介だな」
「ま、定番かもしれないけどここは二手に分かれるべきね。正面から戦力を誘い出して裏から別動隊が突入するみたいな」
「だが、それをするにはちょいと戦力が不足してるな。正面からの攻め手は６人くらいはほしいところだ」
「そうですね……。それだけいれば待機中の兵士をこちらに引き付けられそうです」
「でも６人だと１人しか裏から回れないじゃない。このまま王国軍の部隊が到着するのを待つしかないわけ？」
「いえ、それだけの時間はないでしょう。仕方ありません……こうなれば私１人が正面で敵を引き付けましょうか？」
「……その必要はない。それについては自分たちが補わせてもらおう」
後ろから声が聞こえてきたので振り返ると、クルツチームの４人がやってきた。
「あ……」
「ああ～っ！アネラスさんたち！？」
「はは、何とも絶妙なタイミングで来てくれたな」
「へへ、ついさっきルーアン支部に到着してね」
「ジャンから話を聞いて慌てて駆けつけてきたわけさ」
「まったく……これ以上ないくらいの援軍だわ」
「……エステルちゃん。湖畔で助けてもらって以来だね。あの時は

ありがとう。危ない所を助けてくれて。あの後、エステルちゃんが掠われちゃったって聞いて私、ホントに申し訳なくて……」
「あはは、いいってば。こうしてちゃんと無事だったし。それに……ヨシュアも戻って来てくれたしね」
「そっか……。えへへ……久しぶりだね、ヨシュア君！お姉さんのこと覚えているかな？」
「はい……もちろん。僕がいない間、エステルがお世話になったそうですね。どうか礼を言わせてください」
「ふふ、お世話になったのはむしろ私の方なんだけどね。それよりも私としては、君がいない間、エステルちゃんがそれだけ寂しそうにしてたか教えてあげたいんだけど……」
「ちょ、ちょっと～！？」
「えへへ、冗談だってば。……どうやらあんまりゆっくりできない状況みたいだし」
「うん……実はそうなのよ。ヨシュア、もう一度、学園内の状況を話してくれる？」
「了解」
ヨシュアはクルツたちに学園内の状況を説明した。

「なるほど……そういう状況か。確かに、二手に分かれて迅速に事を運ぶ必要がありそうだ」
「そうなると11人いるから……。正面6人、裏手5人に分かれるのがいいんじゃないか？」
「ま、妥当な線だろうな。問題はどういうメンツで分かれるかってことだが……」
「あ、それならあたし、裏手から突入する方にするわ。この学園のことだったら他の人より詳しいと思うし」
「僕も同じく。と言うか、ついさっき偵察してきたばかりですから」

「それじゃあ私も裏手からの突入班に参加してもいいかな？前にエステルちゃんと一緒に戦おうって約束したしね」
「アネラスさん……」
「フットワークの軽さを考えると妥当なところでしょうね。ただ、あんたたちは3人とも前に出て戦うタイプだから……。サポートできる人間が1人は欲しいわね」
「ならば自分が務めさせてもらおう。方術でエステル君たちをバックアップできるはずだ」
「クルツさん……」
「よろしくお願いします」
「それならあと1人の別動隊は私でいいですか？サポートも攻撃もできますし……」
「レインさん……」
「それなら、お願いします」
「へッ、どうやら決まりだな。そういやカルナ……あんた、得物は大丈夫なのか？」
「ああ、導力銃のことだね。さすがに困り果てたんで、こんな物を調達したよ」
カルナは普段の導力銃よりも数段大きい銃を見せた。
「な、なにそのゴツイ銃！？」
「あ、それってもしかして……！」
「ふふ、ラインフォルト社製の火薬式アサルトライフルさ。武器屋のエーファさんがコレクションしていた年代物でね。無理言って貸してもらったのさ」
「そいつはまた珍しい物を……」
「確かに火薬式の銃なんて最近じゃ全然見かけないわね。って、ティータちゃんも火薬式のガトリング砲を持っていたっけ？」
「えへへ、はい。おじいちゃんが貸してくれた秘蔵のコレクションなんです」
「正直、導力銃と比べると重いし、すぐに弾切れするしで使い勝手

が悪いんだけどね。威力だけは大した物だから充分、これで戦えると思うよ」

「ふむ、これで正面からの陽動班も問題なさそうだな。早速、作戦を始めるとするか」

「オッケー！」

「頑張ります！」

こうしてギルドによる学園解放作戦が始まった。

アガット、シェラザード、ジン、カルナ、グラッツ、ティータの６人は正面から強化猟兵を誘き出し……エステル、ヨシュア、アネラス、クルツ、レインは裏から突入して人質を解放することになった。

王立学園内の中庭では猟兵が雑談をしていた。

「……ギルバードのヤツは何を考えているんだ？こんな所を占拠したってガキどもをビビらせるのが関の山じゃないか」

「確かに王国内を混乱させるなら都市を狙った方が良さそうだが……。ただ、この学園には各界の良家子女が集まっているらしい。噂じゃ、リベール王家の姫君がお忍びで在籍してるって話だぞ」

「王家の姫君……クローディア姫のことか！？」

「はは、それはないさ。王城で暮らしているという話だし。ただ、《怪盗紳士》がご執心だという娘がここの生徒でしかも王族であるのは確からしい。ギルバードは、それが誰なのか突き止めるらしいぞ」

「なるほど……それが本当ならいい点数稼ぎにはなりそうだな。しかしそうなると、軍やギルドが本気でかかってくるかもしれん。警戒する必要がありそうだ」

「なに、占拠したばかりだしすぐには気付かれないだろう。それに連中は俺たちと違って導力兵器が使えないんだ。火力を集中すれば撃退できるさ」

「ふむ、確かに……」
その時、門の前から弾丸を打つ音が聞こえてきた。
「か、火薬式の銃器だと!?骨董品を持ち出しやがって……」
「このままだと突破される……。待機している連中を呼ぶぞ!」
その隙に、エステルたち別動隊は旧校舎から潜入した。
「……始まったわね!」
「うん、私たちも急がないと!」
「この先の裏門の鍵は先ほど外しておきました。すぐに開くと思います」
「分かった。速やかに各施設に潜入し、拘束された人々を救出する。救出した者は『人質リスト』でチェックしていくことにしよう」
「了解ッ!」
「レッツ・ゴーですね!」
―男子寮
「……お前らは?」
「チッ、まだ捕まえてない生徒がいやがったのか――」
呑気に話している見張りがエステルたちを面倒くさそうに見た。
「そ、その紋章は……」
「ゆ、遊撃士だと!?」
「然りだ」
「よろしく覚悟、しちゃってください!」

見張りを倒し、エステルたちはヨシュアが確認した部屋に入った。
「お、お前ら……！」
「エ、エステルさんにヨシュアさんじゃないですか！」
「２人とも、お久しぶり」
「手短に事情を説明させてもらうよ」
ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そ、そうだったのか……。くー、やっぱ遊撃士ってスゲー格好いいよなぁ！」
「ど、どういたしまして。――って、それより用務員さんは大丈夫なの？撃たれたって聞いたけど……」
「撃たれた傷はそれほど深くなかったんですが……。手当てをした直後に疲れて眠られてしまったんです。新学期が始まったばかりで忙しくされていたらしくて……」
「そっか……」
「顔色が良くないのは疲労も原因みたいだね」
「ふむ……少々いいかな」
クルツが用務員の側に寄った。
「方術――穏やかなること白波の如し」
「わわっ……」
「回復系の方術、ですか」
「相変わらずお見事ですね」
「えへへ、先輩のこの術にはいつもお世話になってるんだよね」
「確かにオッサン、さっきよりも顔色がいいな」
「ええ、このままゆっくり寝かせておいてあげましょう。――皆さん、どうもありがとうございます。僕たちにお手伝いできることは何かありませんか？」
「悪いけど、安全になるまでここで待ってて欲しいんだ。まだ外は

危険だからね」
「そうですか……分かりました」
「くれぐれも気をつけろよ！」
エステルは人質リストからロディー、ロイス、パークス用務員の名前をチェックした。

―クラブハウス　2階
「な！？」
「お前たちは……！」
2階では見張りの兵士が2名いた。
「居たわね！」
「行っくよー！」

～女子ロッカー
「おや、あんたたちは……！？」
「エステルさんにヨシュア君……どうしてこんな所にいるの！？」
中には3人の職員がいた。
「あはは……ビックリさせちゃったかな」
「実は……」
ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そう、あなたたちが……。ありがとね、助けに来てくれて」
「それで……学園内の様子はどうかしら？まだ戦闘は続いているの？」
「正門付近での戦いを含めていまだ予断を許さない状況だ。先生方も、安全が確認できるまでここで待機をお願いしたい」
「そう……仕方ないわね」

「先生たちのこと……どうかよろしくお願いします」
エステルは人質リストからデポラ、ヴィオラ先生、ミリア先生の名前をチェックした。

―男子ロッカー
「お前たちは……!?」
「エステル君とヨシュア君!?」
「えへへ、お久しぶり」
「ご無沙汰しています」
2人にギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そうだったのか……」
「すまん……感謝するぞ。俺たちも、生徒を助けるために何か協力できることはないか？」
「気持ちは分かるが、敵はプロの傭兵部隊だ。安全が確認できるまでここで待機をお願いしたい」
「そうか……分かった」
「生徒たちのこと、よろしくお願いします」
「ええ、任せてください！」
エステルは人質リストからラティオ先生、エフォート先生の名前をチェックした。

―本館
「貴様ら……!?」
「ゆ、遊撃士だと!?」
目の前から兵士が2人やってきた。

「出たわね！」
「……制圧するよ！」

～学園長室
「おお……！」
「皆さんは……！」
「えへへ、助けに来ました」
「……ご無沙汰しています」
「エステル君、ヨシュア君。君たちが来てくれるとは……。後ろの諸君もギルドの遊撃士のようだな？」
「はい。クルツ・ナルダンと申します」
「初めまして！アネラス・エルフィードです」
「お初お目にかかります。レイン・アクアライトと申します」
これまでの経緯と、学園解放作戦について2人に説明した。
「そうか……感謝する。兵士を率いているのが誰なのかは知っているかね？」
「元市長秘書のギルバードでしょ？あいつ、クローゼのこと狙ってるって聞きましたけど……」
「ああ、ただ、クローゼ君が王家の姫君であるということは気付いていないようだ。そういった人物が学園にいるという情報だけをどこかで入手したらしくてね」
「そ、そうなんだ……。あの怪盗男のことを考えたら知ってもおかしくなさそうだけど」
「執行者とただの戦闘員では権限に天地の差があるからね。多分、余計な情報は知らされてないんだと思う」
「なるほど……」
「でも、そうなると……他の女の子がとばっちりを受ける可能性は高そうですね」

「ああ、危険かもしれないな」
「私もそれが心配でね……。すまないが、そのあたりも気を付けておいてくれないか？」
「うん、分かりました！」
エステルは人質リストからコリンズ学園長、ファウナの名前をチェックした。

―2階　渡り廊下
「おい……近くで銃声が聞こえなかったか？」
「……お前も聞こえたか」
「見たところ、正門の防衛戦は突破されていないみたいだが……」
兵士が窓から様子をうかがった。
「あ、そっちは陽動だから」
「なッ……！」
「ば、馬鹿な！どうして侵入者が！？」
「フッ、答えは簡単……」
「それは私たちが遊撃士だから！」
「（答えになっていないような……）」

―社会科教室
「き、君たちは……！？」
「エステルさんにヨシュアさん！？」
「えへへ、お久しぶり」
「久しぶりだね、みんな」
「ど、どうして君たちがこんな所にいるんだ。はっ、もしかしてあの連中の仲間なのか！？」

「もー、ロジック君ったら。そんなことありえないでしょ？」
「ふむ、さしずめ遊撃士として助けに来てくれたということか」
「うん、そういうことなの」
ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そ、そうか……。私としたことが早とちりとは……。それで君たち！我々はどうすればいいんだ！？」
「今はまだ外で戦闘が行われています。安全が確認できるまでここで待機をお願いします」
「だ、だが、ここにいてまた連中に捕まったら……！」
「うーん、その可能性もあるけど外に出るよりは安全だと思うよ？」
「流れ弾に当たっちゃったり、猛獣にパクッとされたくないでしょ？」
「あ、あう……」
「も～、アネラスさん。脅かしたりしちゃダメじゃない」
「そんな訳で、しばらくの間、ここで待機してもらえるかな？」
「はい……分かりましたわ」
「頑張ってね、遊撃士さんたち！」
エステルは人質リストからロジック、アジル、モニカ、セルマの名前をチェックした。

―自然科教室
「あなた方は……」
「みんな、大丈夫！？」
「ケガをしている人は……うん、いなさそうだね」
「エステル……それにヨシュア！？なんでこんな所にいるんだ！？」
「うん、それがね……」
これまでの経緯と作戦についてジノキオたちに説明した。
「なるほど……。そんな事があったんですか。これはミック君にも

感謝しなくてはなりませんね」
「ふ、ふん……。授業をサボった挙句に自分1人逃げただけじゃないか。これだから落ちこぼれは」
「よせよ、デニス」
「この状況に限って言えば彼の行動は正当かつ有意義です。おかげでエステルさんたちがここに来てくれたのですから。不当な侮辱と非難は貴方自身の価値を下げますよ」
「むぐっ……」
「まあまあ、みんな落ち着いて」
「とにかく安全が確認できるまでここから動かないで欲しいんだ。お願いできるかな？」
「で、でもよ……」
何か言いたそうなジノキオだったが、皆に見られて
「……分かった、了解だ」
撤回した。
「……他の生徒のことはくれぐれもお願いします」
「うん、任せといて！」
エステルは人質リストからジノキオ、パトム、デニス、レイナの名前をチェックした。

―1階　人文科教室
「来たわね、2人とも！」
「や～、今か今かと待ちくたびれちゃったぜ」
「えへへ……。ゴメンね、待たせちゃって」
「あれから状況に変わりは？」
「うん、実はね……」
ジルとハンスがエステルたちに小声でささやいた。
「（さっきギルバードが来て王家の姫がいないか聞いてたのよ。素

直に名乗り出れば特別待遇にしてやるとか抜かして）」
「（あっちゃあ～……）」
「（……見込み違いもいいところだね）」
「（ま、何とか俺たちで適当にあしらっといたけど……。ありゃあ、業を煮やしたら何をするか分からねえぞ）」
「（うん、そっちは何とかする）」
「な、なあ……」
「それで、私たちはどうすればいいのでしょう？」
他の生徒が不安そうに尋ねてきた。
「あ、ゴメンゴメン。悪いんだけど、安全になるまでここで待っていてくれる？まだ外で戦闘が続いているから」
「了解しました」
「ふう……。もうカンベンして欲しいよ」
「こ、心細いですけどがんばって待ってます！」
「ごめん、なるべく早くケリをつけるつもりだから。ハンス、ジルさん、君たちも……」
「はいはい、分かってますって。下手に動いてあんたたちの足手まといにはならないわ」
「ケリが付いたら来てくれ。その後の対応は俺たちがさせてもらうからさ」
「うん、その時はよろしく」
「それじゃあ、また後でね！」
エステルは人質リストからジル、ハンス、カンノ、アリス、パープルの名前をチェックした。

―女子寮
「な、何だ貴様ら！？」
「どうしてこんな所に！？」

「それはこっちの台詞。あんたたちみたいなオジサンがよりにもよってこの場所に居座っていいとでも思ってんの？」
「な、なに……！？」
「女子寮といえば花も恥じらう乙女の園……。せめてリボンでも付けて出直してきてほしいですねぇ」
アネラスの台詞に兵士が脳内で妄想した。
「ふ、ふざけるな！」
「お、思わず想像しちまっただろうが！」

「あ、あなた方……！」
「エステルに、ヨシュア君！？」
「えへへ、お待たせ」
「手短に事情を説明させてもらうよ」
ギルドの作戦で、捕まった人々を解放しに来たことを説明した。
「そうだったんですか……。はふぅ……気が抜けちゃいました」
「そ、それでわたくし達はどうすれば？」
「他のみんなと合流できそう？」
「うーん……まだ戦闘が続いているからちょっと待ってて欲しいかな」
「必ず全員救出するから安心して待っていて欲しい」
「そっか……」
「……分かりました。どうかよろしくお願いします」
エステルは人質リストからニキータ、フラッセ、ティラの名前をチェックした。

―中庭

「いや～～～～っ！」
どこからか悲鳴が聞こえてきた。
「今の声……！」
「この方向は……学園の裏手からだ！」
「リストの残りは1人……その人物ということか！」
「急ぎましょう！」

―旧校舎
「やはり君たちか……」
ギルバードが少女を人質に待ち構えていた。
「ギルバード……あんた！」
「おっと、それ以上は近づかないでくれたまえ。このお嬢さんを傷付けたくなかったらな」
ギルバードが少女に銃を突きつけた。
「い、いやっ……」
「（あ……！クローゼの後輩の……）」
「（フェンシング部に所属している子だったね……）」
「いつもいつも君たちは僕の邪魔ばかりしてくれる……。だがッ！今度ばかりはそうはさせないッ！この娘を手土産に、僕は《結社》の階段を上り詰めるのだからねッ！」
「へ……！？」
「どうやら《身喰らう蛇》は想像以上に巨大な組織らしい。今、リベールに来ているのもあくまで氷山の一角……。おそらくその影響力は大陸全土に及んでいるはずだ。フフ、さぞかし出世のしがいがあるに違いない」
「なるほど……そういう発想もあるんだ」
「頭の中は天晴れというしかありませんね」
「何て言うか……いじましいまでの上昇志向ね」

「黙りたまえッ！元々、リベールなんていう小国ごとき僕には狭すぎたのだッ！《身喰らう蛇》こそ僕が上り詰めるのに相応しい舞台ッ！君たちなどに邪魔はさせないッ！」

「まあ、せいぜい頑張ってと言いたいところだけど……。その子を掠ったところで出世の役には立たないと思うわよ？」

「フッ、どうやら君たちは何も知らないみたいだな……。この娘が、身分を隠したリベール王家の姫であることをッ！」

「だ、だから違うって言ってるじゃないですかぁ！」

「フッ……しらばっくれるのは止めたまえ。僕が聞いたところによると、その姫は細剣をよく使うそうだ。そして現在、フェンシング部の女生徒は君しかいないという……。ならば君以外にあり得まいッ！」

ギルバードがどうだと言わんばかりに叫んだが周りは呆れ果てた。

「そ、それって……」

「はあ……何と言うか」

「思い込み、ここに極まれりだね」

「どうやら想像以上に目出度い人物のようですね」

「な、なんだその反応は……」

「あのねえ……。あんた、前にバレンヌ灯台で逮捕された時のことを覚えてないの？」

「わ、忘れるはずがないだろうッ！あの時のことを思い出すと今でも腸（はらわた）が煮えくり返るくらいだッ！」

「だったら僕たちに同行していた女生徒のことも覚えていますよね？一応、面識もあったみたいですし」

「……ああ、クローゼ君のことか。そういえば拘束した生徒の中には見かけなかったような……。……え」

ようやくギルバードは気付いたようだった。

「そういう事。灯台でもクローゼ、細剣を使っていたでしょ？」

「そういえば……。……い、いやッ！そんな馬鹿な事はありえない！ここまでやったのに無駄足だったなんてことは……」

「うーん……現実逃避を始めましたねぇ」
「……哀れな」
「だ、黙れッ！どの道、人質を取っている以上、僕が有利なのは同じことだッ！傷付けられたくなかったら全員、すぐに武装解除しろッ！」
「ひっ……」
「（……なんか本気でぶっ飛ばしたくなってきたわね）」
「（何とか隙を突ければ……）」
「ど、どうしたッ！言う通りにしないんだったらこの可愛い顔に傷をつけて――」
その時、ジークが飛んできてギルバードを吹っ飛ばした。
「ぐあッ！」
「リチェル、こっちよ！」
エステルがすかさず手招きした。
「は、はいっ！」
「ピュイ！」
「な、な、な……」
「ジーク……どうしてここに！？」
「もしかしてクローゼに頼まれたのかい？」
「ピューイ？」
「はは、これは参った」
「スゴい！スゴすぎるよ！」
「ば、馬鹿な……。そんな馬鹿なあああッ！？」
エステルたちが喜ぶ中、ギルバードは地面を叩きつけた。
「さてと、それじゃあ……」
「お仕置きと行きますか♪」

「……あうあう……」

呆気なく倒されたギルバード。
「お、お願いします……。命ばかりはお助けを……」
何をするかと思えば土下座して命乞いを始めた。
「まったくもう……。いきなり卑屈にならないでよ」
「あはは、最後は何だか弱い者イジメみたいだったね」
「自業自得というものだ。それでは協会規約に従い、君の身を拘束させて――」
クルツがギルバードを拘束しようとした時、
「それは困っちゃうなあ」
どこからともなく声が聞こえてきたかと思うと、道化師カンパネルラがエステルたちの前に現れた。
「あ、あんた……！」
「廃坑に現れた……！」
「……カンパネルラか」
「ウフフ、ごきげんよう。君たちが学園に突入するあたりから見物させてもらったけど……。いや～、これが面白いの何のって！まさかあのタイミングで飛び入りの役者が登場するとはねぇ」
道化師カンパネルラがジークをちらりと見た。
「ピュイ？」
「カ、カンパネルラ様……。助けに来てくれたんですね？」
しかし、ギルバードの問いかけに道化師カンパネルラは何も答えなかった。
「……ねえ、ギルバード君。僕、王家の姫君を掠えなんて命令した覚えないんだけどなぁ？」
「ッ……」
「そりゃあ、現場には現場の判断があるからね。あんまり細かいことを言うつもりはないんだけどさ。……でも、それで失敗したら意味ないよね？」
「ひっ……ひいッ……」
道化師カンパネルラの冷笑にギルバードが後ずさった。

そのギルバードに道化師カンパネルラは指を鳴らすと、ギルバードの身体が炎で拘束された。
「ひあああああッ……！？」
「な、なんなの！？」
「炎の舌（フレイムタン）……。ルシオラが使うのと同じ攻性幻術の一種か」
「うふふ、さすがに彼女ほど上手くはないけどね。でも、これくらいなら操れる」
そういうと、ギルバードの身体が持ち上がった。
「うわあああああああッ！！！？」
「ま、ギルバード君の道化っぷりもなかなか愉しませてもらったし。今回だけは死なない程度のお仕置きで勘弁してあげようかな」
道化師カンパネルラはギルバードへの幻術を解いた。
「……ううう……」
そして、そのまま去ろうとした。
「ちょ、ちょっと！？」
「ま、また逃げるの！？」
「あはは、まあ今回は申し訳なかったと謝っておくよ。今後、《結社》がこの学園に手出しすることはないと誓おう。それでは皆様――お騒がせさま」
道化師カンパネルラとギルバードは消えてしまった。
「ま、また……」
「逃げられちゃったねぇ……」
「今回は人質も助かったことだし、仕方がないでしょう」
「《道化師カンパネルラ》……何とも得体の知れない少年だな」
「ええ……そうですね。ですが、彼の約束はある程度信用できると思います」
「そうか……」
「まあ、心残りはあるけど……。これで一応、一件落着と言っていいのかな？」
「うん、いいんじゃないかな？」

「ピュイ♪」

こうして強化猟兵たちによる学園占拠事件は幕を閉じた。
王国軍が到着した頃には学園の内外にいた猟兵たちはことごとく撤退してしまい……
学園長やジルたちの働きによって生徒の動揺も収まっていった。

「クルツさん、アネラスさん。カルナさんにグラッツさんも。今回は本当に手伝ってくれてありがとう」
「あはは……水臭いこと言いっこナシ！」
「ああ、これも同じ遊撃士としての務めさ」
「フフ、やっと湖畔での借りを返せた気分だよ」
「また何かあったらいつでも力になるからな」
「ふふ、期待してるわね」
「皆さんはこの後、どちらに向かう予定ですか？」
「クローネ峠を抜けてボース方面に向かうつもりさ。今回のような事件が起きないよう各地の見回りをしながらね」
「そうか……」
「ご苦労さまです」
「あのあの……気を付けてくださいね」
「はは、お前さんたちもな」
「この状況が続く以上、地道にやるしかないからね」
「ああ、せいぜいお互い気張るとしようや」
「そうだ……ねえ、エステルちゃん」
「ん、なに？」
「今回一緒に戦っていて感じたことなんだけど……。エステルちゃ

んの動き、迷いがなくてのびのびしてた。まっすぐに成長してるなあって正直、感心させられちゃったよ」

「や、やだな～。おだてても何も出ないわよ？それにアネラスさんだって凄く腕が上がってたじゃない」

「そりゃあ実戦を繰り返せばね。でも、エステルちゃんの場合、武術の腕だけじゃなくて心の芯まで強くなった気がする。それは多分、ヨシュア君を捜す旅の過程で自分の道を見つけたからだと思う。本当に……強くなったね」

「アネラスさん……」

「えへへ、ライバルとして私も負けてられないかな。機会があったらまた一緒に戦おうね？今度は私がエステルちゃんをビックリさせてあげるから！」

「あはは……うん！楽しみにしてるからね！」

その後、シェラザードとティータも一足先にルーアン支部に戻り……王都から来てくれたジークも再びクローゼの元に帰っていった。

エステルたちは、学園のみんなに挨拶してから出発することにした。

第１５章　混迷の大地（４）（前書き）

工房都市ツァイス編です。

第１５章　混迷の大地（４）

―遊撃士協会ツァイス支部

「ふう……思ったより遅かったわね」

キリカは振り向きもせずにエステルたちを迎えた。

「って、お前なぁ……。どうして俺たちが来るのを読んでやがるんだ？」

「今回の導力停止現象はあの浮遊都市が原因でしょう？直接、手出しが不可能になれば各地の様子を確かめるしかできることはないはずだから」

「むむっ……」

「あはは、確かにそうね」

「ヘッ……相変わらず頼もしい女だぜ」

「とりあえず、こちらの状況は想像している通りだと思うわ。リベール一（いち）、導力化が進んでいた街だけあって余計に混乱が大きかったみたい。マードック工房長が頑張ってくれているけれど市民の不安は収まっていないわね」

「そっか……。工房長さん、大丈夫かしら」

「何かお手伝いができればいいんですが……」

「まあ、話くらいは聞いてあげるといいでしょう。それと……もう１つの問題はカルデア隧道よ。照明が消えてしまったために通行が困難になってしまったの」

「うん……。あたしたちも、そこを通ってツァイスに来たんだけど」

「確かに視界が狭くてかなり危険な状況でした」

「あとはそうね……。エルモのポンプ装置が止まって温泉に入れなくなったと聞いたわ」

「そうなんだ……」

「マオさんもさぞかし気落ちしているでしょうね」

「……そんな所かしら。さて、今度はそちらの話を聞かせてもらい

ましょうか。《紅蓮の塔》で別れた後、一体どんな事が起こったの？」

「ああ、実はな……」

エステルたちはキリカに《浮遊都市》が現れた経緯と『零力場発生器』について説明した。

「なるほど。やはりあれが《輝く環》……。恐らく彼らに《塔》が奪われた時、この事態は決定していたのでしょうね」

「ああ……だろうな」

「そう考えると《塔》に向かったのは無駄足だったってことか……。さすがにヘコんじゃうわね……」

「過ぎたことを後悔しても意味はないわ。《塔》に行ったことで新たに見えた真実も結構あるじゃない。大切なのは、そこから何を見出して未来に活かせるかよ」

「キリカさん……」

「……というわけで早速、通信器を直してもらえるかしら？より良い未来を導くためにもね」

「ガクッ……。いい話をしてたんだからそんな風に繋げるなよ」

「あはは……分かった」

「それじゃあ早速、『零力場発生器』を設置します」

ヨシュアは『零力場発生器』を通信器に設置した。

「……これで完了です」

そして、電源を入れると通信器が復活した。

「……さすがラッセル博士。いい仕事をしてくれたわね。あなた達もご苦労様。さすがに助かってしまうわ」

「えへへ、どういたしまして」

「はは、何だよ。ずいぶんと素直じゃないか」

「それは心外ね。私ほど素直な女はそうはいないと思うけど？」

「素直っていうより遠慮がないだけだろうか。まあいい、これで全ての地方支部の通信器が直ったんだ。各地の状況と合わせて任務の報告をさせてもらうぞ」

エステルたちはこれまでの報告をした。
「ふふ、お疲れさま。これでようやく迅速な対応ができそうだわ」
「他に手伝うことはあるか？」
「レイストン要塞が近くにあるから治安の方は問題ないけど、一応、掲示板はチェックしておいて。あと、余裕があったら中央工房やエルモの様子を確かめておくといいでしょうね。何か困っているかもしれないし」
「うん、分かったわ！」
「心に留めておきます」

エステルたちがギルドを出ようとした時、通信器が鳴った。
「あ……」
「早速、連絡がきたみたいね」
キリカが通信器の受話器を取った。
「こちら遊撃士協会、ツァイス支部ですが……。……ああ、貴方だったの。こちらも今しがた直ったばかりでね。……ええ、そうよ。ちょうど目の前にいるわ」
「（あたしたち……？）」
「（どうやら話がありそうだね）」
「……ふむ……ふむ……。……。……分かったわ。本人たちに伝えておくわね。こちらの状況についてはまた後で連絡させてもらうわ。……そうね。お互い頑張るしかないわね」
キリカが受話器を置いた。
「キリカ。どこからの連絡なんだ？」
「王都支部のエルナンさんよ。何でも、アリシア陛下があなた達に話があるらしいわ。グランセルに寄ったら王城を訪ねてほしいですって」
「女王様が！？」

「そりゃあ驚きだな……。一体何の話なんだ？」
「詳しくは聞いてないわ。ただ、導力通信では話しにくい内容みたいね」
「通信では話しにくいこと……。そっか、導力通信だと傍受される危険があるから……」
「どうやら機密性の高い話があるみたいね」
「ただ、今すぐ来てほしいという訳ではないみたい。王都に立ち寄ったらでいいそうよ」
「そっか……分かったわ」
「折を見て訪ねてみるさ」

―中央工房　工房長室
「おお……エステル君にヨシュア君」
「工房長さん、お久しぶり」
「ご無沙汰しています」
「うむ、無事に戻ってくれて何よりだ。博士の新発明はお役に立っているかね？」
「あの発生器のこと？もっちろん、大助かりよ」
「むしろ僕らよりも王国軍の方が感謝しているかもしれません。通信が回復するまでは多くの拠点が孤立していましたから」
「ふむ、なるほど。まずは予想通りの効果を発揮しているようだね」
「うん、それは良かったんだけど……。それより、工房長さん。……中央工房は大丈夫なの？」
「この状況では活動の再開は難しそうですね」
「ああ……非常に厳しい状態だよ。山積みになった問題に対応するだけで手一杯さ。実は今もその問題の処理に当たっていたところなんだ」
「そっか、大変そうね……」

「僕らにできることなら何でも協力しますから。困ったことがあればギルドに連絡してください」
「うむ、ありがとう。君たちも気を付けてな」
エステルたちは街を確認した後、王都グランセルへと向かった。

第１５章　混迷の大地（５）（前書き）

王都グランセル編・前編です。

第15章　混迷の大地（5）

―キルシェ通り

エステルたちがキルシェ通りを歩いていると、上空から機械音が聞こえてきた。

「あれ……これって」

「なんだ、飛行船のエンジン音じゃねえか……」

しばらく5人が考え込んだ。

「ちょ、ちょっと待って！？」

「この状況で飛べる飛行船ってことは……！」

「あれだ……！」

ヨシュアが上を指すと、3隻の《結社》の飛行艇が王都に向かって飛んでいった。

「《結社》の飛行艇……。ど、どうしてこんな所に！？」

「まずい……。あの方向は王都だ！」

「まさか王都を……」

「冗談じゃねえ！とっとと追いかけるぞ！」

―王都グランセル前

1隻の飛行艇から4人の執行者が飛び降りた。

「さて……それでは始めるとしようか」

「ったく、《剣聖》がいればちったぁ楽しめたものを……。銃が撃てない兵士なんざ肩慣らしにもならねえぜ？」

「うふふ、いいじゃない。デクノボーさんたちを倒しながら歩いていくのも楽しいと思うわ」

「では、パテル＝マテルは呼ばないようにしておきなさい。皆、あっという間に逃げてしまうでしょから」

「あら、つまらないわね。せっかくあのキレイなお城を粉々にできると思ったのに♪」
「壊れゆく美か……。それもまた悪くなさそうだ」
４人が談笑していると市街地から王国軍兵士たちが駆けつけた。
「貴様らは《身喰らう蛇》！おのれ……この状況で飛行艇を使うとは……」
「フフ、お初お目にかかる。我が名は《怪盗紳士》ブルブラン」
「クク……《痩せ狼》ヴァルターだ。せいぜい足掻いてもらうぜ」
「《幻惑の鈴》ルシオラ。短い間ではあるけど、どうかお見知りおきを……」
「クスクス……《殲滅天使》レンよ。みんなどんな声で鳴いてくれるのかしら？」
４人は顔色一つ変えずに自己紹介をした。２０人ほどの兵士などでは相手にならないと言いたげのように。
「な、名乗りとは悠長なことを……！総員構え！突撃ィィィッ！」
ルシオラ、ヴァルター、レンが８人ずつ一瞬一撃で兵士たちを蹴散らした。
「……え」
王国軍士官はただただその様子を見て唖然とするしかなかった。
「――――所詮この世は夢幻（ゆめまぼろし）」
「ひっ……」
怪盗紳士ブルブランが王国軍士官の背後から現れ、あわてて振り返った。
王国軍士官も一瞬のうちに倒され、グランセル市前は地獄絵図と化した。
その場で、《執行者》たちは物足りなさそうに不満を漏らした。
「チッ、雑魚どもが……」
「んもう……ちょっと脆すぎるわ」
「ふふ……贅沢は言わないの。まあ、女王陛下の親衛隊ならば少しは楽しめるのではないかしら？」

「ふむ、そう願いたいものだな。……さて」
怪盗紳士ブルブランは後ろに控えていた猟兵たちと人形兵器に指示を下した。
「執行者(われら)はこれよりグランセル城に向かう！諸君は予定通りグランセル市街を制圧せよ！」
「了解(ヤー)！！」

しばらく後、エステルたちはグランセル市前に到着し、地獄絵図を目の当たりにした。
「あ、あれは……！」
「……急ごう！」
「こ、こいつは……」
「どうやら手当てをした方が良さそうだ」
「そ、その必要はない……」
かすかに意識を残していた王国軍士官がエステルたちに言った。
「だ、大丈夫！？」
「あ、あんたたちは遊撃士だな……。今しがた……《結社》の執行者どもがここを通っていったばかりだ……。どうやら狙いは……グランセル城にあるらしい……」
「やはり……」
「その他の敵部隊は市街を制圧しているらしい……。……頼む……街と城を……」
それだけを言い残し、王国軍士官は気絶した。
「エステル……！」
「うん……！兵士さんたちには悪いけど先を急がせてもらいましょ！」

―王都グランセル
エステルたちがグランセル市街に入った時には、すでにあちこちから火の手が上がり、戦場と化していた。
「ひ、ひどい……！」
「ほぼ無差別か……」
「クソが……！」
「……どうやら私たちも歓迎されているようですね」
レインが剣を抜くと結社の人形兵器がやってきた。

「はあはあ……ど、どうしよう……。こんな状況じゃいったい何をしたらいいのか……！」
「――皆さん！？」
ギルドから受付のエルナンがエステルたちの元にやってきた。
「エルナンさん！」
「いい所に来てくれました！女王陛下の用件で王都に来てくれたんですね！？」
「はい……状況は？」
「現在、軍の守備隊が東街区と西街区で交戦中です。かなり厳しい状況ですが今は任せるしかないでしょう。皆さんは、城に向かった執行者たちを追ってください」
「で、でも！」
「市街の方はいいのか？」
「この付近の街路にいた人々はギルドに避難してもらいました。他の街区でも、軍の部隊が避難誘導をしているはずです」
「そうなんだ……。……だったら申し訳ないけど城の方に急がせてもらうわね！」
「ええ、よろしくお願いします。武運を……くれぐれも気を付けて

ください」
エルナンはギルドに戻っていった。エステルたちもグランセル城へと急いでいった。

―グランセル城前
「あら……城門が閉じちゃっているわね」
「ふむ、旧い城のようだから人力でも開閉可能なのだろう。かなり大変ではあっただろうが」
「ふふ……ご苦労様といったところかしら」
「どうする？やっぱりパテル＝マテルを呼ぶ？」
「おいおい。あんなデカブツ呼ばれたら俺たちが楽しめねえだろうが。ここは俺に任せとけや」
「どうするの？」
「クク……ま、見とけって」
ヴァルターは城門に手を当てると気を練り始めた。
「コオオオオオオッ……」
すると、城門の一枚が見る間に瓦解した。
「わあ……！凄いわ、ヴァルター！」
「泰斗流の奥義……寸勁ね」
「フフ……相変わらず見事な技だ」
「ククク……大道芸みたいなもんさ。さて、もう一枚行くとするか」

―グランセル城内
城の中では王室親衛隊と王家の人たちが様子を見守っていた
「まさか城門が……」
「くっ、もう保たんか……。クローディア！女官長！い、急いで陛

下を女王宮にお連れするがいい！」
「お、小父様……」
「デュナン……貴方」
「わ、私とてリベール王家の一員だ！その権威を侵そうとする者を黙って見過ごすことなどできぬ！ユリアがおらぬ今、ここの指揮は任せてもらおう！」
「で、ですが……」
「ええい、グズグズするな！きゃつらは、陛下とそなたの身柄を奪おうとしておるのだ！女王と王太女の身柄をな！」
「！！」
「今、そなたが優先すべきは陛下とそなた自身を守ること！己の使命を全うするがいい、小娘！」
「小父様……分かりました。お祖母様、ヒルダさん！急いで女王宮に向かいましょう！」
「ええ……分かりました。デュナン……くれぐれも無事で」
「ハハ、神をも恐れぬ狼藉者、返り討ちにしてご覧に入れよう」
「……どうかご武運を。フィリップもどうか気を付けてください」
「お気遣い、痛み入れます」
アリシア女王とクローディア姫、ヒルダ夫人の3人は女王宮へと急いだ。
「……閣下、お見事でした。このフィリップ、今この時ほど閣下にお仕えして良かったと思ったことはありませなんだぞ」
「ふ、ふん、大げさなヤツめ」
その時、もう一枚の城門が破壊され、執行者たちが入ってきた。
「き、来おったか……！」
「ふむ、何という鬼気……。どうやら魔人の類いのようですな。閣下……わたくしが倒されたらどうか構わずにお逃げください」
「なに……！？」
執事フィリップが2階から飛び降り、執行者たちの前に立ちふさがった。

「フィ、フィリップ殿！？」
いきなり執事フィリップが現れたことに王室親衛隊が驚いた。
「あら、細目のオジサン？」
「なんだァ、てめえは？」
「デュナン公爵閣下の執事にして元・王室親衛隊大隊長、フィリップ・ルナールと申します」
執事フィリップが剣を抜いた。
「昔取った杵柄……どこまで通用するかは分かりませぬがせめて一太刀は浴びて頂きますぞ」
「ほう……」
「はは……これは面白い！」
「フフ……少しは楽しませてくれそうね」

城門前へと着いたエステルたち。
「こ、これって……」
「これは……多分素手で壊した跡だ。恐らく《痩せ狼》の絶招技……」
「ああ……ゼロ距離からの寸勁だろう」
「マジかよ……」
「なんていうか……。強さの次元が違うんですけど……。……って感心している場合じゃないわ！何とか連中に追いつかないと――」
「エステル！」
ヨシュアが叫ぶとエステルたちに向かって銃弾が撃たれた。
「こんな所で……！」
「時間稼ぎが狙いのようですね……」
「ブチ壊すぞ！」

「はあはあ……じょ、冗談じゃないわよ！」
「時間がない……とにかく中に入ろう！」

―グランセル城　エントランス
入口では王室親衛隊が全滅していた。
「こ、これって……」
「王国軍きっての精鋭部隊までもかよ……」
「エ、エステル様……」
「フィ、フィリップさん！？それにデュナン公爵も……」
「もしかして……彼らを食い止めようとして？」
「は、恥ずかしながら……。ですが歳ですかな……さほど時間は稼げませなんだ……。こ、公爵閣下のご様子は……？」
「心配ない。当て身をくらっただけのようだ」
「あ、安心しました……。陛下たちは女王宮に……ど、どうかお急ぎくだされ……」
執事フィリップはその場に倒れおちた。
「フィ、フィリップさん！？」
「大丈夫、気絶しただけだ。急ごう……クローゼたちが危ない」
「う、うんっ！」

―空中庭園
「ふむ……あれが女王宮のようだ」
「つまり、終点というわけね」
「他愛もねえ……。歯ごたえがあったのはあのジジイくらいじゃねえか」

「ふふ、確かに……。なかなかの達人だったわね」
「でも、レンたち４人相手に勝ち目があるわけないじゃない。おバカさんもいいところだわ」
「フフ、そう言うものではない。誇り高き忠義とは彼のような者を言うのであろう。それにデュナン公爵とやらも少々噂とは違っていたようだ」
「そうね、少なくとも放蕩者には見えなかったわ。すぐに気絶してしまったのはご愛敬だったけれど……」
「き、来たぞ……」
女王宮から王室親衛隊が展開された。
「くっ……ユリア大尉がいてくれたら！」
「弱音を吐くな！親衛隊の誇りを見せろ！」
「チッ……雑魚どもが」
「……さすがに興醒めね」
「うふふ、そうだわ。誰が一番早く女王様たちを捕まえるか競争しない？」
「ほう、それは面白い」
「クカカ、乗ったぜ」
「では――始めましょう」
執行者たちは８人もの親衛隊を一蹴し、女王宮になだれ込んだ。

「ほう……君たちか」
エステルたちが女王宮に着いた時、すでにアリシア女王たちは囚われの身だった。
「クローゼ！女王様！」
「エステルさん……ヨシュアさん……」
「皆さん……よく来てくださいましたね」
「クソッ……」

「……間に合わなかったか」
「あ、あんたたち……一体どういうつもりなの!?クローゼたちを放しなさいよ!」
「うふふ、それはダメよ。だって教授に、個人的に頼まれちゃったんですもの」
「きょ、教授に?」
「個人的にということは……『福音計画』には関係ないのか?」
「うふふ、そうみたいね。思っていた以上にみんなの元気がいいから色々試してみたくなったんですって」
「げ、元気がいいって……」
「各地の通信を部分的に回復させたみたいだけど……。どうやら教授はそれがお気に召されなかったらしくてね。あなたたちの苦しむ姿をもう少し見たいのだそうよ」
「……っ……!ふ、ふざけんじゃないわよ!そんな事のために王都を襲わせたっていうの!?」
「……あの人らしい」
「クク……確かに悪趣味だとは思うぜ。ただ、浮遊都市の制圧がレーヴェ1人に任されてな。ヒマになったから引き受けたってわけだ」
「ヴァルター……貴様」
「……話は分かりました。ならば、わたくし1人を虜囚にすれば済むことでしょう。どうかクローディアは解放していただけませんか?」
アリシア女王が自らが人質となることを申し出た。
「いけません、お祖母様!囚われるならば私が……」
「ふむ、確かに教授の注文はどちらか1人だったはず……。さてさて、如何したものか」
怪盗紳士ブルブランはアリシア女王とクローディア姫を交互に見た。
「あら、たしか貴方は姫殿下にご執心ではないの?」
「フフ、籠の中の鳥にはいまいち魅力は感じなくてね。まあ、囚われていてもなお輝く気品を見てみたい気もするが……」

「……」
「あ、あんたたち……いい加減にしなさいよね……。そんなこと……絶対にさせないんだから！」
「クク、笑わせるな。仮に人質がいなかったとしても俺たち全員に勝てると思うのか？」
「うふふ、今度会った時にはまとめて殺してあげるって約束したわよね？ちょうどいい機会だし……ここで殺しちゃおうかしら」
「くっ……」
怯むエステルにヨシュアがささやいた。
「（……抑えて、エステル。彼らの言う通り……戦力差はどうしようもない。ここは勝機を窺うしかない）」
「（で、でも……）」
「フフ、無駄だヨシュア。あるいは君の隠形なら我らのスキを突けただろうが……」
「そうして姿を見せた状態では私たちの隙を突くのは不可能よ。いくら《漆黒の牙》でもね」
「……そうだね。でも隙を突くのは僕がする必要もなさそうだ」
「なに……」
突然、執行者たちの横から1人の男が襲いかかった。しかし、その攻撃はレンによって防がれた。
「えっ……！？」
「やあ、みんなご苦労だったね。――陛下、殿下。遅くなって申し訳ありませんでした」
強襲したのはシード中佐だった。
「シード中佐……」
「……よく来てくれました」
「ほう……《剣聖》に連なる者か」
「うふふ……惜しかったわね。あともうちょっとでレンたちのスキが作れたのに」
「ああ、正直ショックだよ。まさか今の打ち込みが返されてしまう

とはね」
「クク、いいねえ。せっかくだから俺たちとこのまま遊んでいくかよ？」
「いや、遠慮しておこう。自分はあくまで囮に過ぎないからね」
「なに……」
「！！！」
その瞬間、ジークが飛んできて
「……っ……」
「チイッ……」
軍服の男が幻惑の鈴ルシオラと痩せ狼ヴァルターをアリシア女王たちから引き離し、
「くっ……」
「きゃあっ……」
シード中佐がその隙に怪盗紳士ブルブランとレンに一太刀浴びせ、４人を完全に隔離させた。
「間に合ったか……」
「あ、貴方は……」
「おいおい……」
「なんとまあ……」
「リ、リ、リ……リシャール大佐っ！？」
軍服の男性はリシャール大佐だった。
「はは……久しぶりだ、エステル君。だが、今の私は、階級を剥奪された服役中の国事犯にすぎない。大佐と呼ぶのは止めてくれたまえ」
「や、止めてくれたまえって……」
「リシャール殿。……お久しぶりですね」
「……陛下と姫殿下も壮健そうでなによりです。すでに准将から話は聞いておられるとは思いますが……。どうか一時の間、この逆賊たちに御身を守らせて頂きますよう」
「ふふ、もちろんです」

「よろしくお願いしますね」
「……ありがたき幸せ」
「も、もう何がなんだか……」
「僕たちが知らない間に事態が動いていたみたいだね」
「さすが《剣聖》というわけですね」
「《剣聖》を継ぐ2人……。それに《漆黒の牙》とS級遊撃士、さらに腕利きの遊撃士たちか」
「ふふ……少し遊びすぎたかしら」
「フッ……こちらとしては助かったがね。ちなみに市街の方も既に手は打たせてもらったよ」
「えっ……！？」

―グランセル市街地
「これより人形兵器と猟兵団の掃討を始める！市民の保護、及び正規軍の支援は最優先で行いなさい！」
「イエス・マム！」
カノーネ率いる元情報部の特務兵たちが市街地で交戦を繰り広げていた。

「おいおい、マジかよ！どうして特務兵がいきなり現れやがるんだ！？しかも《結社》の手先を攻撃しているみたいだが……」
ナイアルとドロシーが茂みに隠れてその様子を取材していた。
「うふふ、きっと反省して助けに来てくれたんですよ～♪こういうのって汚名挽回っていうんでしたっけ？」
「汚名を挽回してどうする……。それを言うなら汚名返上だろ。ああ、もうどうでもいい！せっかくカメラが使えるようになったんだ

！約束の時間が来るまで撮って撮って撮りまくれ！」
「アイアイサー！」

「わわっ……。猟兵たちが押されてる！？」
「ああ、さすがだね」
「ヘッ……やるじゃねえか」
「さて、どうする。《身喰らう蛇》の諸君？この期に及んで我々とやり合うつもりはあるかな？」
「……チッ……」
「……気に入らないわ。こうなったらパテル＝マテルを呼んで――」
「止めたまえ、レン。我らは機を逃したのだ。これ以上拘るのはいささか美しくなかろう」
「女王陛下と姫殿下の確保も可能ならばという条件よ。２人とも、ここは退きましょう」
「フン……仕方ねえな」
「……」
「それでは諸君……我々はこれで失礼しよう。だが次なる試練は君たちの前に控えている。気を抜かないようにしたまえ」
「次なる試練……」
「な、なによそれ！？」
「ふふ……すぐに分かるでしょう。それでは皆様、ご機嫌よう」
執行者たちは消えてしまった。
「あ……！」
「退いてくれたか……」
「ふむ、これで猟兵どもも市街から撤退を始めるだろう。深追いができないのが残念だがまあ、贅沢は言うまい」
「うん……って、それよりも！どうして大佐がこんな場所にいるわ

け!?服役中じゃなかったの!?」
「だからもう大佐ではないんだが……まあいい」
「とりあえず今はこの混乱を収めることが先決だ。君たちも手伝ってくれないか?」
「う、うん……それはもちろん」
「まずは消火と怪我人の手当てをする必要がありそうですね」

こうして……《結社》による王都侵攻作戦は辛くも食い止められた。
エステルたちは、軍の部隊と共に消火と混乱する市民へのフォローに回り……
その内に、連絡を受けて駆けつけた仲間たちとも合流することができた。

第１５章　混迷の大地（６）（前書き）

《結社》の侵略は防げたものの、新たなる試練が王国に襲いかかる！

第１５章　混迷の大地（６）

―グランセル城　謁見の間

「先ほど話に出たように全てはカシウス准将の指示でね。王都に危機が訪れることを前もって察知されていたんだ。だが、導力兵器が主武装である正規軍では守りきれそうにない……。そこで白兵戦の経験が豊富な特務兵の投入を決断されたわけだ」

「無論、服役中の我々を投入するための名目は必要だ。そこで我々は、王都へ護送中に今回の騒動に巻き込まれて、結果的に市街を守った形になる」

「な、なるほど……。って、どう考えても無理があると思うんですけど」

「どうやら陛下たちはご存じだったようですね？」

「ええ、この件に関してはカシウス殿と話し合いましたから。後々、様々な批判を受けてしまうとは思いますが国民の安全には代えられません。何よりも、リシャール殿の愛国心をわたくしは信じることにしました」

「……もったいないお言葉」

「そっか、そういう事なら……。そういえば……あたしたちをお城に呼んだのはその事と関係していたんですか？」

「ええ、それもありますが……。実は、クローディアのことでお伝えしたいことがあったのです」

「えっ……？」

「……クローゼの？」

エステルとヨシュアはクローゼに視線を向けた。

「はい、実は……略式ではありますが、今朝、立太女の儀を済ませました。今の私は、リベール王国の次期女王という身分になります」

「ええっ！？」

「わぁ……！」

「……よく決心したね」
「いえ……ただの我がままなんです。エステルさん、ヨシュアさん。それから他の皆さんも……。学園のみんなを助けてくださったそうですね。本当にありがとうございました」
「あ……うん。でも、協力してくれたのはあたしたちだけじゃないわ。アネラスさんたちやジークも助けてくれたしね」
「ピュイ♪」
「ふふ、そうみたいですね。事件のことを知った時、私は自分に何ができるのかを真剣に考えさせられました。大切な人たちを守るために自分が何を果たせるのかを……」
「それが……王位を継ぐことだったんだね？」
「はい。未熟な私には、王国全てを背負える力も自信もありません。それでも、私が王位を継ぐことで大切な人たちを守れるのなら……。そして、その事が結果的に王国を守ることに繋がるのなら……。――そう思い至ったんです」
「そっか……」
エステルはクローゼの手を握った。
「クローゼ、おめでとう！とうとう自分の道を見つけることができたんだね！」
「エステルさん……ありがとう。でも、まだまだ未熟ですし、自分に何ができるのかも判りません。困った時は……力をお借りしてもいいですか？」
「あはは！そんなの当たり前じゃない！第一、未熟なのはあたしたちも同じなんだし」
「君が今まで僕たちを助けてくれたのと同じように……必要な時はいつでも力になるよ」
「エステルさん、ヨシュアさん……。……本当にありがとう」
「（……自分の愚かさが今更ながらにこたえるな。未来を担う若者たちの可能性に気付くこともなく、あんな事をしでかしたのだから……）」

「（リシャールさん……）」
「（ふふ、何を言っているのです。貴方だって、未来を担う若者のうちに入るでしょうに）」
「（陛下……）」
「（ご、ご冗談を……）」
「も、申し上げます！」
いきなり、王室親衛隊の1人が声を張り上げながら入ってきた。
「どうした？市街で何かあったのか？」
「い、いえ、そちらの方は何とか収拾がつきました。猟兵たちもことごとく王都から撤退した模様です」
「ならば、どうした？」
「さ、先ほどハーケン門と連絡が取れたのですが……。国境近くに、帝国軍の軍勢が集結し始めているのだそうです！」
その連絡に一同が驚愕した。
「ええっ！？」
「やはり来たか……！」
「……軍勢というのはどの程度の規模なのですか？」
「現時点で集結しているのは1個師団程度のようですが……。ど、どうやらその中に戦車部隊が存在するらしく……」
「なんだと！？」
「ちょ、ちょっと待て！導力停止現象の中でどうして戦車が動かせる！？」
「まさか《結社》と同じ技術を使っているの！？」
「いえ……どうやら導力機構を搭載していないタイプのようです。観察した限りでは『蒸気機関』で動いているとか……」
「蒸気……機関？」
「えとえと……内燃機関よりも原始的な蒸気の力を使う発動機だけど……。オーブメントの普及と共にすぐに廃れてしまった発明なの」
「蒸気機関は非常に効率の悪いものですからね。今この時代で、そのような古い技術を使うことなど考えられませんが……」

「……そんな物で動く戦車などどの国も保有しているはずがない。導力戦車と比較するとあまりに経済効率が悪いからな」
「ならば答えは一つ……。秘密裏に帝国内で製造されていたわけですな」
「そ、それって……」
「……この事態を見越していたということか。では、結社の連中が言っていた『次なる試練』というのは……」
「ええ……恐らくこの事だと思います。そして彼らは、今度の事件で王都を人質に取ってしまった」
「その気になればいつでも王都を狙える……そういう意図もあったわけか」
「加えてもう一つ……。恐らく父は、あなたの存在を隠し札として考えていたはずです。緊急事態が発生した時に自分の代わりに派遣できるとっておきのジョーカーとして。ですが、そのカードはすでに切られてしまいました」
「……」
唖然とするリシャール。
「《身喰らう蛇》……そこまで狙っていたのか」
その場の全員が沈黙する中、クローゼが緊縛を破った。
「……お祖母様。どうか私をハーケン門に行かせてください」
「ええっ！？」
「クローゼ……」
「ここで動かなかったら私たちを逃がすために負傷した小父様たちに申し訳が立ちません。必ずや、お祖母様の代理として帝国軍との交渉を成し遂げてみます」
「……分かりました。不戦条約が締結されたとはいえ、王国と帝国の間の天秤はいまだ不安定と言えるでしょう。今回の事件は、さらに大きな揺り戻しにつながりかねません。その天秤のバランス取り……どうかよろしく頼みましたよ」
「……はい！」

アリシア女王とクローゼが話し合っている間、エステルたちはお互いに目配せを行った。
「あの……。だったら、あたしたちも一緒に付き合ってもいいですか？」
「え……」
「王太女殿下をハーケン門まで無事、送り届けさせて頂きます」
「それと万が一、戦争が起こりそうになったら出来るだけの協力はしてやるぜ」
「無論、ギルドの規約により戦争には協力できませんが……」
「中立的な立場からの仲裁なら幾らでもさせてもらいましょう」
「国の安定を図る思いは同じですからね」
「皆さん……」
「ふふ……。願ってもないことです。どうかよろしくお願いします」
「はい！」
「どうかお任せください」
「……エステル君、ヨシュア君。《結社》の動きに関しては我々に任せておいてくれたまえ」
「たとえ、あの巨大人形が王都に現れても対処できるよう万全の体勢を整えておくつもりだ」
「２人とも……」
「よろしくお願いします」

こうしてエステルたちはクローゼたちを護衛しながら一路ハーケン門を目指した。
グリューネ門を越え、ロレント地方をできる限りの早さで通過してから……
エステルたちはついにハーケン門に辿り着いた。

第１５章　混迷の大地（７）（前書き）

王都グランセル編・後編です。次回、ＳＣ最終章『第１６章　空の軌跡』が始まります。

第15章　混迷の大地（7）

―王国・帝国国境付近

「説明してもらおうか！ゼクス・ヴァンダール中将！何故、このような場所に帝国軍の師団がやって来る！？締結されたばかりの不戦条約、よもや忘れたとは言わさんぞ！？」

モルガン将軍が帝国のゼクス中将と言い争っていた。

「モルガン将軍……。説明していただきたいのはむしろこちらの方です」

「なに……！？」

「先日より、帝国南部の街で導力器が働かなくなるという異常現象が続いている状態です。そしてそれは、謎の巨大構造物が貴国の湖上に現れてからという確かな報告が届けられています。これは一体どういう事ですかな？」

「……どういう事も何も今、お主が言った通りだ。我々も、突然現れた災厄に混乱しきっている状態にある」

「どうやらその様ですな。そしてその災厄が帝国領土を侵しているのも事実。ならば、我々がここにいる理由も理解して頂けると思うのですが」

「おぬしら……我らの弱味に付け込むつもりか？」

「そのつもりはないと一応、言っておきましょう。異常現象に乗じて怪しげな犯罪組織が王国内で跋扈（ばっこ）しているとも聞いています。不戦条約を結んだ同盟国として何とか力になれないか……。帝国政府としてはそのような意向のようです」

「戯言を……。ならばその戦車は何だ！？蒸気によって動く戦車などわしは今まで聞いたことがない！どうしてそんな代物をこの状況で都合よく連れてきた！？」

「それは……軍事機密と申し上げておく。だが、この戦車があればこそ市民たちの不安を和らげられるし、帰国の窮状を救うことも適（かな）

いましょう。どうかご理解いただけませんか？」
「くっ……」
「……お気遣いとても嬉しく思います」
「！？」
モルガン将軍が振り返ると、クローゼとエステルたちがこちらに向かって来ていた。
「な……！」
モルガン将軍はひどく驚いたようだ。
「（ひ、姫様！？どうしてここに！？）」
「（モルガン将軍、ご苦労様です。どうかこの場の交渉は私に任せていただけませんか？）」
「（で、ですが……。それにどうしておぬしらまでいるのだ！？）」
「（一応、クローゼの護衛なの）」
「（それと、いざという時には仲裁をさせてもらうつもりです）」
「（むむ……）」
「（未熟な私に交渉役は務まらないかもしれませんが……。ですが、王太女としての務めを果たすべき時だと思うのです。どうか……お願いします）」
「（……分かり申した。ですが、いつ牙を剥くか判らぬ軍勢の前です。いざという時はすぐに門に逃れる準備をして下され）」
「（……分かりました）」
「どうやら交渉相手が変わったようですな。見ればやんごとなき身分のお方とお見受けいたすが……」
「お初お目にかかります。わたくしの名は、クローディア・フォン・アウスレーゼ。リベール女王アリシアの孫女にして先日、次期女王に指名された者です」
「！！こ、これは失礼いたした！自分の名は、ゼクス・ヴァンダール。エレボニア帝国軍、第３師団を任されている者です」
「あなたが……御勇名は耳にしております」

「（あのオジサン、有名なの？）」
エステルがヨシュアに尋ねた。
「（『隻眼のゼクス』……帝国でも5本の指に入る名将だ）」

「しかし以前、殿下のお姿を写真で拝見したことがあるのですが……。お髪をお切りになられたのですな？」
「恥ずかしながら……立太女の儀を済ませたばかりの身。身に余る重責に立ち向かうための小娘の決意の表れとお考えください」
「いや、しかしそのお姿もとても良く似合ってらっしゃる。改めて……王太女殿下におかれましては誠におめでとうございます」
「ありがとうございます、中将」
「して……王太女殿下がどうしてこのような場所に？モルガン将軍と同じように我々に抗議するおつもりですか？」
「いえ……そのつもりはありません。帝国南部の方々もさぞかし不安な思いをなされている事でしょう。夜の闇、寒さ、情報の途絶……。どれも不安をかき立てるのに充分すぎる出来事でしょうから」
「……」
「ですが、考えて頂きたいのです。このまま貴国の軍隊が我が国に入ってきた場合の問題を。ただでさえ、貴国以上に全土が混乱しきっている状況です。そこに他意は無いとはいえ、動揺する市民は少なくないはず……。貴国の善意が誤解されてしまうのはわたくし、余りにも忍びないのです」
「で、ですが……」
「目下、わたくしたちはこの異常現象を解決する方法を最優先で模索しております。また、件の犯罪組織についても自力で対処できている状況です。不戦条約によって培われた友情に無用な亀裂を入れないためにも……。どうか、わたくしたちにしばしの時間を頂けないでしょうか？」

「……むむ……」
「……残念だが、それはそちらの事情でしかない」
ゼクス中将の後ろから金髪の青年――オリビエが現れた。
「……皇子……」
「ここは私が引き受けよう。下がっていたまえ、中将」
「は……」

「……へっ……」
「まさか……」
「冗談だろ……」

「お初お目にかかる。クローディア姫殿下。エレボニア皇帝ユーゲントが一子、オリヴァルト・ライゼ・アルノールという」

「！！！（皇帝の一子って……お、皇子様ってこと～！？シェラ姉、知ってたの！？）」
「（し、知るわけないじゃない！てっきり帝国から派遣された諜報員だと思ってたわよ……）」

「オリヴァルト皇子……名前だけは存じていましたが」
「フフ、皇子とはいってもしがなき庶子でしかないのでね。公式の場で出ることも少ないから顔を知らなくても不思議はない。そかし、そうは言っても少しばかりショックではあるな。縁が無かったとはいえ、かつての縁談相手の顔くらいご存じかと思ったのだかね」

「!?（あ、あんですって～!?）」
「（そうか……大佐が進めていた話か）」

「そうでしたか……。存じなかった事とはいえ本当に申し訳ありません」
「まあ、女王陛下の与り知らぬところで進められていた話とは聞いている。その事は別に気にしていないが……。だが……今回の事態は見過ごせないな」
「……あ……」
「クローディア姫。今、帝国本土でどのような噂が囁かれているかご存じかな?」
「……いえ、寡聞にして……」
「ならば、教えてあげよう。彼方に見えるあの巨大構造物……あれが王国軍の新兵器という噂だ」
「!!!」
「『リベール軍が導力を止めてしまう画期的な新兵器を実用化したそうだ。彼らはそれを使って10年前の復習を企てているらしい』――こんな噂がまことしやかに流れているのだよ」
「そ、そんな……。誤解です! わたくしたちはそんな……」
「ならば……誤解である事を証明できるかね?」
「……っ……」
クローゼは何も言えずに口を閉じてしまった。
「出来ないのであればこちらもそれなりの対応をさせてもらうしかないわけだ。それどころか、噂の通りならば不戦条約を隠れ蓑にした重大な背信とすら言えるだろう。フフ……正当防衛もやむをえまいと思わないかね?」
「いい加減にしなさいよ!」
「エステル……!」
「お、お姉ちゃん!?」

エステルがたまりかねてクローゼの前に出た。
「さっきから聞いてれば勝手なことをペラペラと！オリビエだってこっちの事情は大体分かってるんでしょ！？どうしてそんな意地悪なことばかり言うわけ！？」
「エ、エステルさん……」
「おや……何だね君は？私のことを知っているようだが、どこかのパーティで会ったかな？」
オリヴァルト皇子は顔色一つ変えずにエステルを見た。
「へっ……」
「いや、貴族にしてはいささか品位に欠けるな……。ふむ、どこからどう見ても庶民の娘でしかないようだ。で、何者なのだね？」
「……上等じゃない。あくまでシラを切るわけね。そっちがそのつもりならあたしだって考えがあるわよ？」
「ほう……？」
「あたしの名前はエステル・ブライト！リベール遊撃士協会に所属するＡ級遊撃士よ！あくまで中立の立場からこの問題に介入させてもらうわ！」
「エステルさん……」
「ほう……遊撃士だったのか」
オリヴァルト皇子はそれを聞いても何の反応も示さなかったが、
「（Ａ級遊撃士といえば大陸でも有数の遊撃士じゃないか。フフ……エステル君もやるものじゃないか）」
心の中では笑っていた。
「それで、中立の立場からというがこの状況で何をするつもりかね？」
「あの浮遊都市がリベールの兵器じゃないことをここではっきりと宣言するわ！『支える籠手』の紋章に賭けて！」
「ほう……大きく出たものだ。確かに遊撃士協会の発言には無視できぬ影響力があるが……。果たしてその宣言にどれだけの根拠があるのかね？」

「根拠も何も、あたし達がこの目で見てきたことだもの。浮遊都市を出現させたのは今もリベールで暗躍している《身喰らう蛇》という結社よ。あたし達は、王国軍として彼らの陰謀を止めるために戦ってきた。何だったら、詳細な報告書を帝国政府に提出したっていいわ」

「ふむ……。そのように言われては少々考えざるをえないが……。どうやら肝心な事が抜け落ちているのではないかな？」

「え……」

「仮にその結社とやらが犯人だったとして……この異常現象を止める方法が果たして君たちにあるのかね？」

「そ、それは……」

《結社》を止めたとしても導力停止現象が解決するという根拠がないエステルは押し黙ってしまった。

「ないのであれば、我々としてもてをこまねいているつもりはない。幸い、蒸気戦車に搭載しているのは火薬式の大砲でね。あの浮遊都市を落とすにはもってこいだとは思わないかね？」

「じょ、冗談でしょ！？大砲なんかで、あの巨大な都市を落とせるはずないじゃない！」

「フフ……やってみなくては分かるまい。いずれにせよ……一つ、確実に言えることがある。君たちには、我々の善意と正義を退けるだけの根拠も実力もないということだ」

「くっ……」

「……。ならば……証明すれば宜しいのですね？」

「ほう……？」

「この状況にあってあの浮遊都市を何とかする可能性を提示できれば……。わたくしたちにしばしの猶予を頂けるのですね？」

クローゼは自信をもって言った。

「ふむ、そうだな……。一時的ではあるがそうせざるを得ないだろう」

「（お、皇子……！？）」
「（落ち着け、中将。不戦条約を結んだ相手に当然の礼儀というものだろう。それに証明できれば、だ）」
「（……は）」
「それでは……。君たちが可能性を提示できたら一時的に撤退することを約束しよう。『黄金の軍馬』の紋章と皇族たる私の名に賭けてね」
「その言葉、しかと聞きましたぞ」
突然、どこからか男性の声が聞こえてきた。
「い、今の声は……！」
「ひょっとして……！」
「ああ……間違いない」
「おいおい、マジかよ！」
「……父さん」
上空から導力停止現象の状態にもかかわらず動いているアルセイユが降りてきた。
「これが現時点で我々が提示できる可能性です。どうぞじっくりとご覧あれ」
「父さん……！」
「カ、カシウス・ブライト！？」
「ゼクス少将、久しぶりですな。おっと……今では中将でしたか？」
「そんな事はどうでもいい。ど、どうしてこんな所に……。それよりもその船は何なのだ！？どうしてこの状況で空を飛ぶことができる！？」
「それは国家機密と申し上げておきましょう。貴国がどうして蒸気戦車を保有しているのかと同じようにね」
「ぐっ……」

「ふむ……。これが噂の《アルセイユ》か。そして貴公が、かの有名なカシウス・ブライト准将なのか？」
「お初お目にかかります、殿下。何やらどこかでお会いした事があるような気もいたしますが……」
「奇遇だな、准将・私もちょうど同じ事を感じていたところでね」
「それはそれは……」
「まったく……」
そして2人は笑い合った。
「お、皇子！」
「クローディア姫、エステル君。私も誇り高きエレボニア皇族だ。先ほどの約束は守らせてもらおう。すぐにでも、この付近から帝国軍の全部隊を撤退させる」
「オリビエ……」
「……感謝いたします」
「しかし、そうだな……。可能性を示されただけでは我が帝国市民も納得すまい。ここは一つ、私自身がアルセイユに乗せてもらって視察するというのはどうだろう？」
「お、皇子ッ！？」
オリヴァルト皇子の言葉にゼクス中将は驚いた。
「ふむ、皇子自らの視察とあらば帝国政府も納得しましょう。如何です、クローディア殿下？」
「勿論、願ってもないことです。リベールとエレボニアの友情もさらに固く結ばれる事でしょう。歓迎いたします。オリヴァルト皇子殿下」

「……皇子！一体どういうおつもりか！久々に顔をお見せになったかと思えばこ、このような猿芝居を……！」
ゼクス中将は納得いかんとばかりにオリヴァルト皇子に詰め寄った。

「ハッハッハッ。やっぱりバレちゃった？」
「当たり前ですッ！よもや皇子がリベールでこのような事を企んでいたとは……。ミュラー！お前が付いていながら何事だ！」
「お言葉ですが叔父上……この男が、俺の言うことなど素直に聞くとお思いですか？」
「ぐっ……」
「それに俺も少々、納得がいかないこともある。『ハーメルの惨劇』……今度の一件で初めて知りましたよ」
「！！！」
ミュラーの言葉にゼクス中将顔色が一変した。
「……やはりご存知でしたか」
「ハハ、先生があの事件を知らないはずがないだろう？当時からすでに軍の重鎮だったのだからね」
「……」
「いやいや、先生。あなたを責めるつもりはないよ。一部の主戦派が企てただけで、先生たちは一切関与していなかったという話だからねぇ。あまりに酷いスキャンダルゆえ、徹底的に行われた情報規制……。賛成はしかねるが、納得はできる。臭い物にはフタを、女神には祈りを。国民には国家の主義をと言うわけだ。だが……」
オリヴァルト皇子はゼクス中将を見据えた。
「――同じような欺瞞を繰り返すことは許さない」
「……ッ……」
「先生、あなたも本当は気付いているはずだ。唐突すぎる蒸気戦車の導入……。そして不自然極まるタイミングでの出動命令……。全ては《鉄血宰相》ギリアス・オズボーンの描いた絵であることを」
「！！」
「今回の事で確信したよ。彼は間違いなく《身喰らう蛇》と通じている。その事が、帝国にとってどのような影響をもたらすかは何とも言えないが。いずれにせよ、一国の宰相にふさわしい振る舞いではあるまい？」

「……。皇子、まさか貴方は……」
「フフ、そのまさかだ。１０年前に頭角を現して帝国政府の中心人物となった軍部出身の政治家……。帝国全土に鉄道網を敷き、幾つもの自治州を武力併合した冷血にして大胆不敵な改革者。帝国に巣食うあの怪物をボクは退治することに決めた。今度の一件はその宣戦布告というわけだ」
「……何ということを。皇子、それがどれほど困難を伴うことであるのか理解しておいでなのか？」
「そりゃあ勿論。政府は勿論、軍の７割が彼の傘下にあると言っていい。先生みたいな中立者を除けば反対勢力は衰え始めた諸侯のみ。さらにタチが悪いことに父上の信頼も篤いときている。まさに怪物というべき人物さ」
「ならばなぜ……！」
「フッ、決まっている。彼のやり方が美しくないからさ」
オリヴァルト皇子はきっぱりと言い張った。
「！？」
「リベールを旅していてボクはその確信を強くした。人は、国は、その気になればいくらでも誇り高くあれる。そしてボクの祖国と同胞にも同じように誇り高くあってほしい。できれば先生にもその理想に協力して欲しいんだ」
「……。……皇子。大きくなられましたな」
「フッ、男子三日会わざれば括目して見よ、とも言うからね。ましてや先生に教わった武術と兵法を教わっていた時から７年も過ぎた。少しは成長したということさ」
「フフ……そうですな。……撤退に関しては了解しました。ただし、我が第３師団はあくまで先駆けでしかありませぬ。すでに帝都では、宰相閣下によって１０個師団が集結しつつあります。今日を入れて３日……それ以上の猶予はありますまい」
「ああ……心得た」
「ミュラー。お前も皇子に付いて行け。危なくなったら首根っこを

掴んででも連れて帰るのだぞ」
「ええ、元よりそのつもりです」
ゼクス中将は後ろを振り返ると帝国軍兵士に指示を出した。
「全軍撤退！これより第3師団は、パルム市郊外まで移動する！」
「イエス・サー！」

「やれやれ……。これで少しばかり時間は稼げたか。それにしてもホント、ボクって信用ないんだねぇ」
帝国軍が引き上げていくのを見て、オリヴァルト皇子は一息ついた。
「……当たり前だ、阿呆。正直、ここまで大げさにやらかすとは思わなかったぞ」
「どうせやるなら派手な方がいいしね～。それに君だって律儀に準備を進めてくれただろう？言わば、甘い蜜を吸い合った相思相愛の共犯者というわけだ」
「おぞましいことを言うなっ」
「オリビエっ！」
2人が雑談している所にエステルたちがやってきた。
「やあ、エステル君。ご苦労様だったねぇ」
「ご苦労様じゃないわよ！一体、何がどうなっているわけ！？」
「どうしたもこうしたも、まあ、見た通りのまんまさ。帝国内で怪しげな陰謀が進行していたものだからね。ちょっと一芝居をうって出鼻を挫いてやったわけだ」
「一芝居って……あんたね」
「敵を欺くためにはまず味方からと言うからねぇ。君たちとの本気の交渉を経てあのタイミングでアルセイユが来る……。これが今回、ボクとカシウスさんが考え出したシナリオだったのさ」
「や、やっぱり……」
「そうだと思いましたよ」

「……ま、そういう事だ」
「父さん～っ！？」
カシウスがノコノコとやってきた。
「そう恐い顔をするな。導力通信で聞いていたがなかなかの交渉ぶりだったぞ。おかげでアルセイユの登場が効果的に演出できたからな」
「導力通信で聞いてたって……」
「まさか……あのアーティファクトで？」
「おっと、シェラ君。それは言わないでくれたまえ。彼に聞かれると少しばかり面倒だからね」
「……何を白々しい。今さら隠したって遅いですわ」
カシウスに続いてやってきたのは、ケビン神父たちだった。
「ケ、ケビンさん！？」
「お、おじいちゃん！」
「ユリアさんも……」
「殿下……。王都での襲撃は聞きました。本当に……ご無事でよかった」
「ごめんなさい……。心配をかけてしまいましたね」
「いや～、アルセイユの改造がもっと早く終われば王都の危機にも駆けつけられたんじゃが……。思っていた以上に時間がかかってしまってのう。じゃが、皆無事で良かったわい」
「そ、そういや……。どうしてアルセイユが空を飛んでやがるんだよ！？」
「ひょっとして……『零力場発生器』の大型版なの」
「うむ、その通りじゃ。お前さんたちに渡したのは大型版を開発するために試作したプロトタイプでな。今までアルセイユに閉じこもってようやく完成にこぎつけたんじゃ」
「そうだったんですか……」
「要するに、何もかもが父さんの差し金だったわけね？」
「人聞きの悪いことを言うな。俺はただ、皆が動きやすいようにお

膳立てをしただけにすぎんさ。お前たちも自分自身の意志で今まで行動してきたんだろう？」

「そ、それはそうだけど……。そういえば、ケビンさんがどうしてここにいるわけ？」

「ああ、ぶっちゃけ大聖堂に騎士団本部からの連絡が届いてな。《輝く環》がどういう物で、どうすれば災厄を抑えられるか大体のところが分かってきたんや。それをカシウスさんに話してたらこんな所まで付き合わされてな」

「ええっ！？」

「《輝く環》の正体……ですか？」

「ああ……。《輝く環》っちゅうのはあの浮遊都市そのものやない。都市全体に導力を行き届かせてコントロールする古代遺物らしい。そして、その端末があの《ゴスペル》だったわけや」

「都市をコントロールする古代遺物……」

「で、でもどうしてそんな物が導力停止現象を？」

「これは推測やけど……《環》は外界に存在する異物を排除する働きを備えてるらしい。この場合、異物っちゅうんは現代に造られた新たな導力器――すなわちオーブメントってことや」

「影響範囲内にある異物をことごとく無力化する……。いわば防衛機構といったところか」

「その可能性は高いじゃろう。そしてそれが本当なら一条の光明が見えてくる。あの巨大さゆえ、都市そのものをどうにかするのは困難じゃが……。都市のどこかにあるという《環》の本体さえ発見できれば対策の立てようもあるはずじゃ」

「なるほど……そういうことですか」

「本体を叩いて全てを無力化するというわけですね」

「た、確かに光明かも……」

「ふむ、いい感じで最終目的が定まってきたようじゃないか。それでは早速、《アルセイユ》であの浮遊都市を目指すわけだね？」

「それを決めるのは《アルセイユ》を所有するリベール王家になり

ますな。姫殿下……どうかご決断を」
「……分かりました。これより《アルセイユ》はヴァレリア湖上に現れた古代の浮遊都市へと向かいます。ユリア大尉、発進の準備を」
「了解しました！」
「そして遊撃士の皆さん……。どうか窮地にあるリベールに皆さんの力をお貸しください。恐らく、この件に関しては最後の依頼になると思います」
「ふふ……そうね」
「ま、答えは決まっているようなもんだが……」
「ここはひとつ代表者に答えてもらうとしようか」
「ん……代表者？」
「あのな……エステル。お前の事に決まってるだろ？」
「ええっ！？」
「ふふ……何を面食らってるんだか。確かに、それぞれ個人的な因縁は持っているけれど……。でも、何だかんだ言ってあたしたちは皆、あんたの旅に付き合わされたようなものよ」
「その意味では、エステル。お前さんは間違いなく俺たちのリーダーってわけさ」
「あ、あうあう……」
「やれやれ……。まだ荷が重いんじゃないか？」
「……そんな事はないよ。どんな時もエステルは前向きに、決して希望を諦めずにいてくれた。その輝きはどんな時でも僕を――僕たちを導いてくれた。だから……エステルじゃなきゃ駄目なんだ」
「ちょ、ちょっとヨシュア！」
「えへへ……お姉ちゃん、真っ赤だよ？」
「恥ずかしがることはありませんよ、エステルさん。自分の思いを言えばいいだけなのですから」
「～～っ～～～～。あーもう、分かったわよ！クローゼの依頼……つつしんで請けさせてもらうわ！必ずや、あの浮遊都市にある《輝く環》を見つけ出してこの事態を解決してみせるから！」

「ふふ……よろしくお願いしますね」
「やれやれ……何とか話がまとまったか。これで俺もようやく司令部に戻ることができる」
「父さん……やっぱり付いてきてくれないんだ？」
「ああ……悪いな。一時的に撤退したとはいえ帝国軍の脅威は無視できん。ハーケン門だけではなく、海からの侵攻の可能性もあり得る。もちろん王都で起こった《結社》の襲撃も予想できるだろう。この状況で王国軍を留守にするわけにはいかんのだ」
「うん……わかってる。あたしはあたしで頑張ってくる。ヨシュアと……それからみんなと一緒にね。だから父さんも……倒れない程度に頑張ってね」
「ああ……任せておけ。ヨシュア……お前にはこれを渡しておこう」
「え……」
カシウスはヨシュアに一通の手紙を手渡した。
「これは……？」
「ま、ちょっとした親心さ。男と男の話だからエステルには刺激が強すぎるかな」
「な、なによそれ……」
「……分かった。後で読ませてもらうよ」
「ああ、そうするといい」
「まったくもう……。男っていうのはこれだから」
「まあ、そう拗ねるな。全てのケリが付いたら俺も休暇を取るつもりだ。その時は久しぶりに家でのんびりと過ごすとしよう。その時は、エステル。またあのオムライスを作ってくれ」
「あ……。……うん、任せといて！」

「……」
カシウスはモルガン将軍と共に門の上から《アルセイユ》を見送っ

ていた。
「いいのか……カシウス？そんなに心配ならば行っても良かったのだぞ？」
「いや、いいんです。例のワイスマンという男……。思っていた以上に危険極まりない。私が同行していた場合、恐らく手段を選ばないでしょう」
「確実に抹殺してくるか……。……やれやれ。お前も随分買われたものだな」
「まったく、えらい迷惑ですよ。ですが、逆にそこに付け入る隙が出てくるでしょう」
「虚実入り混じった読み合いか……。《鉄血宰相》の方はどうだ？」
「あちらもあちらでやっかいな御仁ですが……。まあ、こちらがこれ以上隙を見せなければ大丈夫でしょう」
「ふむ、そうか……。全ては《アルセイユ》の一行にかかっているというわけだな……」
「ええ……」
カシウスは空に向かって祈りを捧げた。
「（レナ……それに空の女神よ……。あの子たちの足元をどうか照らし出してくれ……。この大いなる空の下……自らの道を見つけられるように）」

第１６章　空の軌跡（１）（前書き）

いよいよＳＣ最終章、『第１６章　空の軌跡』が始まります！

第16章　空の軌跡（1）

―アルセイユ

「――安定翼、格納完了。そのまま最大戦速まで加速しつつ、湖上の浮遊都市に向かえ」

「イエス・マム」

「敵の迎撃があった場合は？」

砲術士として座っていたミュラーがユリア大尉に尋ねた。

「……そうですね。困難ならば強行突破を行いますが、都市への着陸を最優先とします」

「了解した。ちなみに、自分に敬語は無用だ。階級はともかく、こうして砲術士として手伝っている以上、貴官の指揮下にあるのだからな」

「……了解した」

「へえ、ミュラーさんって砲術士なんかもできるんだ？」

「帝国軍で最も導力化された機甲師団で鍛えられたからねぇ。顔に似合わず、その手の業務は一通りこなせるわけさ」

オリビエが笑いながら言った。

「……顔に似合わずは余計だ」

「なるほど、そういう事か。ところでオリビエってばいつの間に着替えちゃったの？」

いつの間にか軍服から普段の軽装に着替えていたオリビエ。

「帝国皇子として視察するんじゃないんですか？」

「ハッハッハッ。そんなのただの建前さ。これが終わったら、ボクの自由で優雅な時間は終わりを告げてしまうからねぇ。せめてそれまでは気楽な格好でいさせてもらうよ」

「はは……最後のモラトリアムというわけか」

「はあ、エレボニアの国民が知ったらどう思うことやら……」

「ボクとしては知られても一向に構わないのだがねぇ。どうだい、

記者諸君たち。リベール通信でスッパ抜いては？」
後ろに立っていたナイアルとドロシーに振り返った。
「おっと、いいんですかい？」
「だったらバンバン写真撮っちゃいますけど～」
「頼むから、そいつの戯言をいちいち真に受けないでくれ……」
「えっと、それはともかく……。どうしてナイアルたちがいつの間に船に乗っているわけ」
「竜事件の時のようにお祖母様が手配したんですか？」
「ええ、お察しの通りです。陛下がカシウス准将に口添えをしてくれましてね。従軍記者扱いで乗艦させてもらったんですよ」
「ハーケン門での、姫様たちのカッコイイ姿も撮っちゃいました♪現像、楽しみにしててくださいね～？」
「あ。ありがとうございます」
「やれやれ……どうにも緊張感がねえな」
「でも、緊張で気疲れするよりかはマシだと思いますよ」
「あ、あはは……。そういえば、おじいちゃん。『零力場発生器』の調子はどう？」
「うむ、今のところ順調じゃ。何も起きなければ浮遊都市に着陸するまでは持ってくれるじゃろう」
「ちょ、ちょっと待った。ってことは……何か起こったらヤバイとか？」
「うむ。問答無用で墜落じゃろうな」
「サラッと言わないでよ……」
途端に背中に冷や汗が伝わった。その時、レーダーに反応が起こった。
「レーダーに反応あり……！ステルス化された艦影が５つ、急速接近してきています」
「来たか……」
「《グロリアス》に搭載された高速艇みたいですね……」
「ふむ、敵のステルスも何とか見破れたようじゃの」

どうやら、『零力場発生器』以外にもラッセル博士は新発明をしていたようだ。
「――――主砲展開用意！最大戦速のまま強行突破する！立ち塞がる艦のみ撃破せよ！」
「イエス・マム！」

「1番、2番、5番を撃墜。3番、4番も完全に引き離しました」
「やった！」
「ああ、見事だ！」
「いやはや……これが最先端の空中戦か」
「ふむ……。この主砲は素晴らしいな。かなりの威力のはずだが、大した精度と反動の小ささだ」
砲台を操作していたミュラーが絶賛した。
「わはは、当然じゃ。本来なら、レーダーと連動した迎撃砲も付けたかったが……。ま、それは次の課題じゃの」
その時、さらにレーダーが反応を示した。
「レーダーに反応あり……！」
「8時の方向から全長250アージュの超弩級艦が接近中……！」
「そ、それって……！」
「例の《方舟》ってヤツか……」
「……ヨシュア君。《グロリアス》の基本性能と武装は分かるか？」
「機動性、最大戦速共に《アルセイユ》には及びません。ですが、強力な主砲に加え、無数の自動砲台に守られています。攻撃・防御ともに完璧でしょう」
「そうか……。4時方向へ全速離脱！敵戦艦の追撃をかわしながら浮遊都市の上空を目指せ！」
「アイ・マム！」
雲の切れ間から《グロリアス》が現れ、《アルセイユ》に向かって

大量の砲弾を撃ってきた。
《アルセイユ》は急旋回することで全ての砲弾をかわし、最大戦速のまま《グロリアス》との距離を引き離した。

「……《グロリアス》の射程圏内から離脱しました」
「ふう……」
「こ、恐かった～……」
「さすがに緊張したわね……」
「うん、もうドキドキだわ。でも、これで敵の妨害は全部かわせたんじゃないかな」
「いや……油断しない方がいい」
「ああ、常識は通用しねぇ相手だ。最後の最後まで気を抜かねぇ方がいいだろ」
そしてまたレーダーに反応があった。
「前方に雲の切れ目……！浮遊都市の上空へ出ます……！」

《アルセイユ》が雲を抜けると、巨大な浮遊都市の全貌が見えた。
浮遊都市は緑豊かな庭園であり、まさに空中庭園の名にふさわしかった。
「と、都市上空に到達しました……」
「……すごい……」
「これが……古代ゼムリア文明の精華ですか……」
「……想像以上の代物やな」
「ふむ……向こうの方に巨大な柱のようなものが見えるな。おそらく、この都市にとって重要な施設の一つであるはずじゃ。着陸するならまずはあの近くがいいかもしれん」

「了解しました。エコー、周囲の状況はどうだ？」
「……はい。５０セルジュ以内に敵艦の反応はありません。《グロリアス》も完全に引き離せたと思われます」
「よし……。ルクス、速度を落としながら前方の《柱》付近に着陸するぞ」
「アイマム」
「あれ～？」
突然、ドロシーが声を上げた。
「どうしたの、ドロシー？」
「なんだ？感光クオーツでも切れたかよ？」
「あ、ううん。それは大丈夫ですけど～。なんか、向こうの方から変なものが近づいて来るな～って」
「なに！？」
「う、うそ！？」
エステルたちは慌てて前を振りかえった。
「――な、なんだあれは！？」
「この気配は……まさか剣帝レーヴェ！？」
前方から黒い竜の形をした人形兵器の上に剣帝レーヴェが乗っていた。

「――さあ、見せてもらおうか。希望の翼が折られた時……お前たちに何が示せるのかを」
そして、《アルセイユ》に急接近すると左翼のエンジンを切り裂いた。

エンジンの一方を壊された《アルセイユ》は安定を失い、瞬く間に

墜落していった。

第16章　空の軌跡（2）

「……エ……テル……。……エス……ル……起きて……」

「……大丈夫か……エス……ちゃん……」

「……エス……さん……起きて……さい……」

誰かが私を呼ぶ声が聞こえる。

「……ん……」

エステルは目を覚ました。

「あ……」

「よかった……目ぇ覚めたか」

「大丈夫？どこかケガしていない？」

「あ……うん……」

エステルは体を起こして立った。

「……ちょっとヒジを擦りむいたくらいだけど……。……みんなは……？」

「ま、なんとか無事だぜ……」

「……あ、あうう～……」

「だ、大丈夫……です……」

「やれやれ……スリル満点だったねぇ……」

「ふう……さすがにダメかと思ったわ」

「九死に一生を得たといったところか」

周りにいた全員が無事のようだったが、ドロシーだけは……

「……えへへ～……。そんなにたくさん……食べられないですよ～……」

寝ぼけていた。

「はあ……ったく。こらドロシー！もう朝だぞ！」

「ほえ……ナイアル先輩……？」

ドロシーは慌てて飛び起きた。

「そちらの方はどうだ？」
ユリア大尉はミュラーたちに声をかけた。
「……問題ない」
「な、何とか無事じゃ」
「……問題ありません……」
「こ、こちらも何とか……」
「し、死ぬかと思いました……」
ミュラーたちも無事のようだった。
「……まさに奇跡だな。それとも……ただ手を抜かれただけなのか……」
「そ、そうだ！」
「さっきアルセイユを攻撃した黒いヤツに乗ってたのって……」
「……ああ。間違いなくレーヴェだと思う」
「近づいてきた時に見ましたが、剣帝レーヴェでした」
「……野郎か」
「となると確かに手を抜かれたのかもしれんな。奴さんがその気だったら完全に撃墜されていただろう」
「……なんか複雑ね」
「……」
「そういえば……私たち、どこに落ちたのでしょう？」
「浮遊都市の周縁部のようですが……。まずは外に出て状況を確認した方が良さそうですね」
エステルたちは外に出て周りを見渡した。

―リベル＝アーク市
「こ、ここって……」
「うわぁ……キレイ……」
「こ、これはもう撮って撮って撮りまくるしか～！」

ドロシーはなりふり構わず写真を撮り始めた。
「おいおい……。感光クオーツを使い切るなよ？」
「しかしここは……えらく浮世離れした場所やね。都市っちゅうよりは庭園といった方が良さそうや」
「そうですね……。大都市における公園のような場所なのかもしれません」
「た、確かにそんな雰囲気だけど……。それにしては、同じような場所が遠くまで続いてるんですけど……」
「やれやれ……。とてつもないスケールだねぇ」
その時、鳥の鳴き声がした。
「ジーク！？」
「ピュイピュイ！」
ジークはクローゼの肩に停まった。
「よかった……。はぐれたのかと思ったわ。大丈夫……私たちも平気よ」
「ピューイ♪ピュイ！ピュイピュイピューイ！」
「そう……分かったわ。どうやら私たちは、浮遊都市の最西端に不時着したようです。そして《グロリアス》はちょうど反対側の東側に停泊しているみたいですね」

―アルセイユ　作戦室
「――アルセイユの損傷はそこまで深刻なものではない。導力機関はほとんど無傷じゃし、反重力発生機関の損傷も軽微じゃ。じゃが、スタビライザーをはじめ、細かい導力系統に不具合が生じておる。このままでは、まともに浮き上がることもできんじゃろう」
「そうですか……」
「とにかく人手をかき集めて修理を始めるしかないだろう。及ばずながら自分も協力させていただく」

「……かたじけない」
「アルセイユはそれでいいとして問題は、この都市のどこかに存在する《輝く環》の方だろうね。どうやら《結社》の方は着々と準備を進めているようだ」
「はい……。彼らの手に《輝く環》が渡ったらどのような事になってしまうか……」
「まあ、どう考えてもロクな事にはならないでしょうね。今までの事から判断する限り」
「ヘッ……違いねえ。こりゃ、すぐにでも動いた方が良さそうだな」
「だが、闇雲に動いたらかえって混乱を招く恐れがある。ここはやはり、探索班を組むべきだろうな」
「確かに……。まずは移動ルートを確保しないと《輝く環》も探しようがないしね」
「……」
「どうしたの、ヨシュア？」
「いや……何でもないよ。――――とりあえず、探索班にはバックアップも必要だと思います。アルセイユに戻ってきたらすぐに交替できるようにするのが望ましいかもしれません」
「そうだな……。私も探索に加わりたいところだが、今はアルセイユの修理が急務だ。当面の役割分担を話し合う必要があるな」
「それならば、探索班を決めた後、残りの方たちがアルセイユの修理班にすべきですね。修理班の方たちは順次休憩を取りながら探索班の方たちと交代を繰り返すといったような方式を取りましょう」
「うん、それがいいかもね」
話し合いの結果、エステルたち5名が探索班になり、それ以外のメンバーは修理班となった。
「それではエステル君以下、5名のメンバーに探索をお願いする。

何が起こるか分からないからくれぐれも無理はしないでくれ」
「大丈夫、心配しないで」
「まずは移動ルートの確保を優先的に行います」
「よろしくお願いする。残りの者は待機メンバーとして船体の修理を手伝ってもらいたい」
「はいっ！」
「……おっと、そうじゃ。ちなみに朗報が1つあってな。どうやら浮遊都市の上では《導力停止現象》は起こらんらしい。アルセイユから離れていても戦術オーブメントが使えるはずじゃ」
「ほ、ほんと！？」
「ど、どうして分かるの？」
「実は、例の『零力場発生器』が不時着の衝撃で壊れたんじゃが……。それにもかかわらず、艦内の装置を問題なく動かすことができたんじゃ。どうやらケビン神父の推測がおおよそ当たっていたようじゃな」
「どういうこと、ケビンさん？」
「《環》は外界に存在する異物を排除しようとする機能を備えている……。つまり、都市の中にいる限り、オーブメントは異物としては認識されんちゅうわけですな？」
「うむ、そういうことじゃ」
「は～、良かった。さすがに探索している時にアーツ無しじゃキツそうだし」
「それでは、艦内にある工房施設も使えそうですか？」
「うむ、そちらも問題ない。更なるオーブメントの改造も可能じゃから立ち寄るがいい」
「了解！」
「分かりました」

「さてと……。早速、艦の外に出て捜索活動を始めちゃおうか？」
「ええ、そうですね」
「……ごめん、エステル。色々と装備を切らしていて補充しなくちゃいけないんだ。少し待っててくれるかな？」
「あ、そうなんだ」
「おっと、それやったらオレも準備があるから付き合うわ。エステルちゃんたちはそこの休憩室で待っといてや」
「そっか……分かった」
「では、お待ちしています」
エステル、クローゼ、レインは休憩室に入っていった。
「まったく……君もいいかげん罪作りやね」
「……すみません」
「謝るんならエステルちゃんに謝り。……ホンマにええんか？」
「もう、決めた事ですから。ケビン神父……どうかよろしくお願いします」
「ったく、しゃあないな……。よし、時間もないことやしとっとと医務室を借りるか」

しばらくした後、ヨシュアとケビン神父が帰ってきた。
「あ、ヨシュア、ケビンさん」
「……お待たせ」
「おや～、スマン。遅くなってしもうたわ」
「それはいいけど……。……2人とも、なんだか疲れた顔してない？」
「……そうですね。特に、ヨシュアさんの顔色が良くないですね」
「へっ……」
「細々とした補充にけっこう手間を取られてね。大丈夫、探索には支障ないよ」

「そ、そうそう！めっちゃ役に立ってみせるで～！」
「それならいいけど……。よーし。それじゃあ出発しますか！」
エステルたちは《アルセイユ》を出て、浮遊都市の捜索を始めた。

第１６章　空の軌跡（３）（前書き）

データクリスタル編、第１回目です。
今回は＃０～＃３です。

第16章　空の軌跡（3）

『封印機構について（1／4）』

――私の名は、セレスト・D・アウスレーゼ。

『封印機構の』の設立者にして『封印機構』の実行責任者である。

後世、塔による《第二結界》が発動し、異次元に封印された《環》が甦りそうになった時のために幾つかの情報断片を残すものとする。

もし、このメッセージを読む者が《環》の復活を阻止するつもりならば参考にしてもらえれば幸いである。

だが、《環》の復活を望む者ならばどうか今一度考え直してもらいたい。

《環》の力は余りにも強く、人の子に扱える存在ではないのだ。それを受け入れてしまった時、我々は昏き煉獄に繋がれるであろう。

『封印機構について（2／4）』

本機構は、《環》による干渉を無くすことによって、人の実存を守るために設立されたものである。

ここで注意しておきたいのは《環》そのものに、人を支配する意志は全くないということだ。全ては《環》に頼ってしまう我らの弱さに起因するものであろう。

大いなる至宝は、未熟な魂には余りにも過ぎた力だったのである。

故に、女神の慈悲と全能はいささかも揺らぐことはないのだ。

『封印機構について（3／4）』

封印機構の目的は、いわゆる民主主義の理念からは完全に逸脱する

ものであった。
我々の中にすら、無限の力を持つ《環》を有効利用するべきであるという意見が少なからず存在していたのだ。
だが、自律性を持ち始めてから、《環》は社会と市民生活の双方をすさまじい勢いで変えようとしていた。あろう事か、物質面の充足だけでなく、精神面の充足にまで着手していたのである。

『封印機構について（４／４）』
例えば、《環》は《ゴスペル》を通じて多幸感をもたらす仮想現実を市民に見せ、時には脳内物質の制御までやってのけた。
それは強力極まる麻薬や幻覚剤がいつでも摂取できることと何ら変わりない。しかも質が悪いことに、その薬には生理面での副作用が存在しないのだ。
そのような恩恵が、人の実存にどれほど深刻な影響を与えることか……
すでに影響は多くの市民に現れており、残された時間は余りにも少なかった。
故に我々は、意見の対立を乗り越え、様々な困難を覚悟した上で『封印計画』の実行に着手したのである。

第１６章　空の軌跡（４）（前書き）

浮遊都市編・第１話です。

第16章　空の軌跡（4）

―公園区画・カルマーレ
公園区画には至る所から水が流れていて癒しの場と思われる場所だった。
「綺麗……」
「は～、大したモンやね」
「な、なんていうか……。とても空の上にあるとは思えないんですけど……」
「これも全て《輝く環》の力というわけですか……」
「古代ゼムリア文明……。単に技術が発達していただけの社会じゃなかったみたいだね」

―西カルマーレ駅
導力技術による乗物で上に辿り着くと、浮遊都市の全貌が見渡せた。
「すごい……！」
「圧巻の一言やね……」
「こ、こんなに大きな都市だったんだ……。さすがに……住んでいる人はいないよね？」
「うん……多分ね。どうやら異次元に封印された時、住民のほとんどが退去したらしい。多分、リベール国民のルーツはその人たちなんじゃないかな」
「そ、それって……あたしたちのご先祖様たちがこの都市に住んでいたってこと！？」
「……可能性は高いと思います。リベールだけに限らず、大崩壊以前の文明の痕跡は驚くほど少ないそうですから……」
「はー、なるほどな……。地上に痕跡がないのは空で暮らしてたか

らってわけやね」
「な、なんか途方もない話になってきたわね……。それにしても……やたらと見晴らしがいいけど、ここってどういう場所なんだろ？」
「ただの展望台かもしれないけど……。向こうに端末みたいなものがあるから調べてみようか」

エステルたちが端末を操作すると画面に情報が映し出された。
《レールハイロゥ》　西カルマーレ駅

※現在、《レールハイロゥ》の運行に大幅な制限が加えられています。お手数ですが、当端末から可能なサービスを手動で入力してください。

※非常時につき、《ゴスペル》による市民ＩＤの認証は必要ありません。

《リベル＝アーク》市・交通管理センター

「な、なにこれ……。気になる単語が幾つも出てきたんですけど……」
「《レールハイロゥ》……。何かの交通機関みたいだね。そしてどうやら、この浮遊都市は《リベル＝アーク》という名前らしい」
「《リベル＝アーク》……」
「おそらく、リベール王国の名前の元になったもののようですね」
「な、なるほど……」
「それから《ゴスペル》だけど……。どうやら、ここの市民にとっ

てなじみのある物だったみたいだね。公共サービスを受けるのに必要な身分証明を兼ねた携帯端末……かな」

「ああもう、頭が混乱してきた……。とにかく《ゴスペル》がなくてもできることはあるのよね？早速、色々と調べてみましょ！」

「了解――――可能なサービスの一覧を出すよ」

エステルたちはまず、非常通路のゲートのロックの解除を選択した。すると、

「当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道７８号の利用が可能です」

との知らせが表示された。

さらに、《レールハイロゥ》の非常運行モードを選択すると――――光の道のようなものが現れた。

「あ、あれって……」

「……何か来る……」

西カルマーレ駅に来た物体は、何かの乗物のようだった。

「な、なにこれ……！？」

「どうやらこれが《レールハイロゥ》みたいですね。どういう仕組みなんでしょうか……」

「一部の国で運用されとる鉄道を進化させた感じやね。透明なレールっていうのが無性に不安を誘うけど……」

「これだけの広さを移動するのは大変だったでしょうから、市民の通常の移動手段だったのでしょう」

「うーん、よく分からないけど移動手段として使えるんだったら試してみない手はないよね。早速、乗ってみるとしましょ！」

「ちょっと待ってください。おそらくまだこの《レールハイロゥ》は使えません」

「え、どうして、レインさん」

「たった今、この西カルマーレ駅の非常運行モードを選択したばか

りです。他の駅の非常運行モードを選択しない限りはどこにも行けないはずです。まあ乗ってみれば分かると思いますが……」
レインが《レールハイロゥ》に乗り込もうとすると、
「現在、非常運行モードが起動されている駅が他にありません。《レールハイロゥ》は利用できません」
というアナウンスが流れた。
「ほ、本当だ……。じゃあ、どうすればいいの？」
「端末で地下道のロックを解除しましたので、そこから他の区画に行きましょう。そこにも同じ端末があると思われます」
「そっか、それじゃ地下道を探していきましょ」

―居住区画
「は～、やっと外に出たわね」
「……ここは……」
見渡す限り、家らしきものが立ち並んでいた。
「綺麗な街並み……。どうやら古代人が暮らしていた場所みたいですね」
「確かに、不時着した場所よりかは人が住んでた雰囲気があるかもな」
「うん……。静かで良い感じの雰囲気かも。でも……なんで昔の人たちはこんな立派な街を捨てちゃったのかな？」
「……調べて行けば当時の状況が分かるかもね。新たなルートを探す必要もあるし、さっそく周囲を探索してみようか？」
「ん、オッケー」

「ヨシュア、あれ……！」

「……うん。どうしてこんな所に……。！！」

隣の街区に入ると、ジョゼットが人形兵器に囲まれていた。

「そ、それ以上近寄るなっ！これ以上《山猫号》を傷付けたら絶対に許さないんだから！」

ジョゼットが銃で人形兵器を退けていたが、一際大きな人形兵器がジョゼットに攻撃を食らわせた。

「あうっ……！うう……キール兄……ドルン兄……。……ヨシュア……」

「ふふん、お困りみたいね？」

「ノーテンキ女！？……そ、それに……」

「だ～から、誰がノーテンキよっ！」

エステルはいきなりノーテンキと言われ、人形兵器に構わず口論をしそうになった。

「話は後だ！まずはこいつらを片付けるよ！」

「う、うんっ！」

「まったくもう……ブツブツ」

「ふう……何とか片づいたわね。大きいヤツはやたらと固かったけど……」

「結社の重人形兵器、《レオールガンイージー》だ。普通は拠点防衛用に使われることが多いんだけど……」

「何にせよ、このような場所に振り撒くのは止めてもらいたいですね……」

「まあとにかく……本当に無事で良かった。でも、なんで君たちがこんな場所にいるんだい？」

「う、うん……。ボクたち、あんたと別れた後、国境近くに潜伏してたんだけど……。いきなり空に変な物が現れたから近寄って様子を見ようとしたら山猫号の導力が止まっちゃって……」
「それで墜落しちゃったわけね。あれ、そういえば……。……あんたのお兄さんたちはどうしたの？姿が見えないけどどこかに出かけちゃってるとか？」
「……っ……。ううう……うぐっ……」
ジョゼットがその言葉を聞いて泣き始めた。
「わわっ、な、なんなのよ！？」
「ジョゼット……落ち着いて。ゆっくりでいいから事情を話してもらえるかい？」
「ううっ……。ヨシュア……ヨシュアああっ！」
ジョゼットは泣き叫びながらヨシュアの胸に飛び込んできた。
「……あ……」
「あらま……」
「な、な、な……」
「け、結社の連中に兄貴たちが捕まったんだ！ボクを逃がすためにみんなで囮になって……。ねえヨシュア……。ボク、どうしたらいいの！？」

エステルたちはひとまず無人の家でジョゼットから詳しく話を聞くことにした。
「……ごめん……。驚かせちゃったみたいだね。もう落ち着いたから大丈夫だよ」
「まったくもう……。色々な意味で驚いたわよ」
「ジョゼットさん。それでどのような事があったのですか？結社にお兄さん方が連れ去られたと言いましたが……」
「あ、うん……って、あんた誰？どうしてボクの事を知ってるの？」

「おっと、申し遅れましたね。私はレインと申します。エステルさんから色々と話で聞かせて頂いてたので知っているのですよ」
「ふうん……ま、今はどうでもいっか。それで、どのような事を聞きたいの？」
「そうですね。他の人たちが捕まった時の状況をもう少し詳しく教えてくれますか？」
「……うん……。ボクたち、ここに墜落してから、すぐに《山猫号》の修理を始めたんだ。エンジンは何とか無事だったけど、それ以外の装置は壊れちゃってさ……。修理に使えそうな材料がないかこのあたりを探索してたんだけど……」
「オレらとほぼ同じ状況やね」
「……3日後くらいかな……。足りなかった材料も揃って本格的に修理しようとした矢先にタコみたいな人形兵器が現れてさ……。ボクがそいつを撃った後で紅い飛行艇が飛んで来たんだ……。着陸するなり、例の猟兵たちがわらわら降りてきちゃって……」
「哨戒中の《ヴォーグル》を倒してしまったのか……。多分、破壊された時に発せられる緊急信号が敵に伝わったんだろう」
「やっぱりそうなんだ……。ど、どうしよう……。ボクが余計な事をしたせいで兄貴やみんなが……」
「ジョゼット……」
「破壊しなかったとしても、いずれは結社の連中がやってきたと思いますよ。結社は邪魔者は誰であれ排除しようとするはずですから」
「で、でも……」
「あ～もう！そんな顔するんじゃないわよ！捕まってるんだったら助ければいいだけじゃない！」
「え……」
「いくら犯罪者といえど不当に監禁されているんだったら遊撃士の保護の対象だわ。どうせ《結社》とは決着を付けなくちゃいけないんだし……。あんたのお兄さんたちもついでに助けてあげるわよ」
「エステル……」

「ちょ、ちょっと待ちなよ！どうしてボクたちが遊撃士なんかに助けられないといけないのさ！？」
「へ～、“なんか”にねぇ。だったらあんた、自分1人で助けられるわけ？」
エステルはここぞとばかりに嫌味たっぷりに言った。
「うぐっ……」
「それに、あんたたちには《グロリアス》を脱出する時に助けてもらっちゃったし……。ここらで借りは勝手に返させてもらうからね」
「～～～～っ～～～～」
「ジョゼット……。エステルの言う通りだよ。君が一人でここに居たって何の解決にもならないはずだ。それは分かるよね？」
「……」
「よかったら、しばらくの間、アルセイユで待っているといい。多分、キールさんたちは《グロリアス》に捕まっているはずだ。このまま探索を続ければ停泊場所へのルートが見つかるかもしれない。その時は必ず君に伝えるから」
「……。……分かった。ヨシュアがそう言うなら。でも、ただ世話になるのはカプア一家の名折れだからね！探索だろうが、船の修理だろうがきっちりと協力させてもらうよ！」
「あー、はいはい。ほんと素直じゃないんだから」
「ふ、ふん……。どこかのお人好しみたいに単純にできてないもんでね」
「あ、あんですって～！？」
「ふう、まったくもう……。……何が原因か知らないけど少しは仲良くできないのかな」
「あのねぇ、ヨシュア……」
「……あんたがそれを言う？」
「え……？」
「（アカン……踏んでしもうたか）」
「（……鈍感）」

「（仲良くできないのはあなたが原因の1つだというのに……）」
「ねえ、ジョゼット……。ここは一時休戦にしない？」
「……そうだね。どうやら当面の敵はお互いじゃあなさそうだし」
「えっと、その……。打ち解けられたのはいいんだけど……何かマズイことを言ったかな？」
「ううん、ちっとも」
「気のせいじゃないの～？」
「そ、そう……。（目が笑ってないんですけど……）」

「さてと、それじゃあこのエリアの探索を再開しますか。ジョゼットの言うには他の場所に通じている出口はまだ見つかっていないそうだけど……」
「ああ、隣の街区に渡る橋も完全に落ちているみたいだね。とにかくもう一度、街の中を一通り調べてみよう。ひょっとしたら何か手がかりがあるかもしれない」
「了解」
エステルたちはさらに居住区画を探索することにした。

第３５クレイドル市役所
「皆さん、こちらで《ゴスペル》の再発行ができるそうですよ」
レインが装置を調べていた。
「えっ、そうなの？」
「しかし、登録された氏名と生体パターンが一致しないと再発行ができないようです」
「それじゃあ意味がないんじゃない？ここに住んでた人の名前はもちろん、その人の生体パターンなんて……」

「いえ、そうでもないと思いますよ。名前は分かりますし、生体パターンももしかすると一致するかもしれません」
「どうして分かるの？」
「以前、《翡翠の塔》の端末にあった『セレスト・D・アウスレーゼ』という名前は覚えていますか。それをこちらに打ち込んで、その縁のある人が認証を受ければあるいは……」
「そうか、なるほど！ここはクローゼの出番だね」
「え、私が……？」
「『アウスレーゼ』は王家の姓だってクローゼが言ってたよね？もしかすると一致するかもしれないよ」
「……なるほど。では試してみますね」
クローゼが端末を操作した。
「氏名……該当者アリ。生体パターン……73％合致。申請者本人を『セレスト・D・アウスレーゼ』であると暫定確認しました。《ゴスペル》の再発行を行います」
端末の前に《ゴスペル》が現れた。
「あ……」
「わわっ……！」
「空間転位か……」
オリジナル・ゴスペルを手に入れた。
「……どうやら大昔に使われていた本物の《ゴスペル》みたいですね」
「うん……。《結社》が造ったレプリカと雰囲気が似てるかも」
「まさか、生体パターンが私と似ていたなんて……。さすがに偶然によるものだと思いますけど……」
「えへへ、偶然じゃなくて女神様のお導きだったりしてね。とりあえず、持っていたら何かの役に立つかもしれないし……ありがたく貰っちゃいましょ」
「うふふ、そうですね」

―第３５クレイドル駅
「来た……！」
エステルたちが《レール ハイロゥ》の非常運行モードを起動させると、あの乗物がやってきた。
「さてと、これでやっとこの乗物が使えるのよね？」
「今は乗っても戻ることしかできませんから、もう少し先に進んでからにしましょう」
「うーん、仕方ないわね」
そして、ゲートのロックを解除しようとしたが、《アクシスピラー》の指示により認証が必要になったとの警告が出た。
「って、何よそれ……」
「どうやら前のようには行かなくなったみたいだね」
「しかし、さっきは可能だったのに《アクシスピラー》からの指示によって止められるとは……。おそらく、《結社》の仕業でしょうね」
「そ、そんな……」
「いえ、心配はいりませんよ。さっき手に入れた《ゴスペル》をこの端末の前で使ってみてください」
「う、うん……」
「当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道１２５号の利用が可能です」
「やった……！」
「これで他の区画に行けるようになるね」
「これからもこの《ゴスペル》が必要になってくるでしょう。大切に持っておきましょう」

エステルたちは地下道へと進み、先の区画を目指した。

第16章　空の軌跡（5）（前書き）

データクリスタル編・第2回目です。
#4～#7です。

第16章　空の軌跡（5）

『湖岸の地下施設について（1／4）』

『封印機構』を形あるものにするには莫大なエネルギーと大がかりな施設の両方が不可欠であった。

我々は、エネルギーの拠り所としてまず、《環》そのものの利用を検討した。

《環》は人の願いに反応し、恩恵を与えてくれる――すなわち願うことで、必要とするエネルギーを《環》から引き出せないかと考えたのだ。

……だが、それは叶わなかった。《環》が自律を得たしばしの後、その恩恵は人々の願いに関係なく、ただ一方的に与えられるようになったのである。

『湖岸の地下施設について（2／4）』

――《環》の力を利用することは叶わない。

都市の外に目を向けた我々は、大地の地下深くに眠る七耀脈にエネルギーを、そしてその場所に施設の建造を求めた。

だが、我々はすでに《環》の監視下に置かれていた。どうやら《環》は、都市の存続を第一とし、そのために邪魔となる要素は全て排除するという思考に至ったようなのだ。

それゆえ、施設の建造は《環》を欺くため、七耀脈を観測するという名目で進められた。

『湖岸の地下施設について（３／４）』

施設はヴァレリア湖南東の岸辺の地下５００アージュに建造された。そこは調査によると、七耀脈が効率よく集まる場所であった。都市の下に広がる大地はうっそうたる原生林に包まれていた。人の営みは一切なく、建造に際立った障害はなかった。

我々は《環》の監視を逃れながら、持てる技術の全てを結集し、地下施設の完成を急いだ。

『湖岸の地下施設について（４／４）』

地下施設の建造を進める間、我々は《環》に知られることなく、その地上の周辺に2種の巨大建造物を築き上げた。

その内壁が等しく《環》の方向を向く《アーネンベルク》。そして、《環》を取り囲むようにしてそびえる４つの《デバイスタワー》。

これら2つの建造物は計画においてそれぞれに重要な役目をもっており、地下の施設と同様、『封印機構』に欠かせない存在であった。

第１６章　空の軌跡（６）（前書き）

浮遊都市編・第２話、《グロリアス》潜入編です。

第16章　空の軌跡（6）

―工業区画　ファクトリア
「ここは……」
「かなり広い場所に出たね……」
「こらまた、見渡すかぎりゴッツイ建物が並んどるな～」
「道もかなり広いですし……一体どういう場所なんでしょう？」
「おそらく、工業エリアでしょう。これだけの水を必要とするのは工業としか考えられません」
「なるほど、確かに言えてるかも。……よーし、さっそく探索を始めますか」

―第7ファクトリア駅
「えっと、これで3つの駅が使えるようになったのよね？」
「うん……かなり便利になったね」
「パ、パスワードって……」
「ネットワークを管理する中枢から操作されたということか……。どうやら《結社》は都市機能をかなり掌握しつつあるみたいだ」
「パスワードを手に入れるまで、今は放っておくしかなさそうですね……」

―第3ファクトリア
「――まさか、こんな所まで連れて来られちまうなんてな。これから俺たち、何をさせられるっていうんだ？」
「さあな……。ただ、教授と執行者が揃って出かけたことを考える

と大した任務は残っていないだろうさ。せいぜい、空賊のような連中を捕まえる程度じゃないか？」
「そういえば……たしかリベールの飛行船が不時着していたはずだろう。そちらへの対応はいいのか」
「教授たちが戻るまでは放置しておけとの命令だからな。ま、船を修理するまでは連中だって何もできないだろうさ」

「（《グロリアス》……こんな所に停まってたんだ）」
「（ジークの言っていた通り浮遊都市の東側でしたね……。それにしても、なんて大きい……）」
「（しかし……どうやらチャンスみたいやね）」
「（教授と執行者たちが出払っているようですからね）」
「（空賊団の救出もあるし思い切って突入してみようか？）」
「（ちょ、ちょっと待って。突入するのはいいけど、ジョゼットに声をかけた方がいいんじゃないの？あの子のお兄さんたちを救出するわけなんだし……）」
「（エステル……）」
「（か、勘違いしないでよ？別にあの子を気遣ってるとかそういうわけじゃなくて……その……遊撃士としての仁義をねぇ）」
「（エステルさん、言葉に出ていますよ……）」
「（うふふ……エステルさんらしいです）」
「（よっしゃ、そういう事なら一旦アルセイユに戻るとしよか）」
「（も、もう……）」
「（それじゃあ急いで《レールハイロゥ》を使おうか）」
「（ん、そうね）」

―西カルマーレ駅
「な、何だかあっという間に到着しちゃったわね……」
「かなりのスピードだったのにほとんど揺れなかったし……。正直、大した技術だと思うよ」
「それはそうだけど……。せっかくの景色なんだからもう少しゆっくり走って堪能させてほしかったかも……」
「うふふ……確かにそうですね」
「しかし、コイツのおかげでぐっと捜索がラクになりそうや。新しい駅を見つけたらすぐに使えるようにせんとな」
「そうですね。これなら、探索班の交代も楽にできそうです」

―第7ファクトリア
ジョゼットを連れて再び《グロリアス》にやってきたエステルたち。
「（一度、艦内に入ったらキールさんたちを救出するまで脱出している余裕はない……。《グロリアス》に突入するかい？）」
「（オッケー！ジョゼット……ちゃんと付いてきなさいよ？）」
「（それはこっちの台詞だよっ）」
「（しかし、見張りに騒がれると面倒な事になりますね。ここは私に任せてください）」
「（えっ、どうするつもりなの？）」
「（なに、一瞬で口を塞がせてもらうだけです。では行ってきますね）」
レインは言うが早いか、一瞬で見張りの所まで近づいた。
「な、なんだ貴様は！？」
「どこから来た！？」
「遊撃士ですよ。《アルセイユ》からここまでやって来ました。あなたたちには少しばかり眠っていただきます。それでは……」

「ぐはっ……」
見張りが武器を構えるよりも早く、レインは流れるような動きで見張りを気絶させた。
「ふう……。中に入ってからはこんな事ばかりしなければならないのでしょうね」
見守っていたエステルたちがレインの元にやってきた。
「す、すごい……」
「……見事なお手前です」
「へえ……やるじゃん」
「あまり悠長に話している暇もありません。さっそく突入しましょう」
「あっと、そうね」
エステルたちは《グロリアス》に突入した。

―《グロリアス》艦内
「こ、これが《グロリアス》の中……」
「……とても船の中とは思えない広さですね……」
「まー、実際ウンザリするほど広いわよ。それに結社の人形兵器があちこちに放たれてるだろうし」
以前、脱出したエステルが面倒だと言いたそうだ。
「……。あんたたち、この艦から脱出したことがあるんだよね？兄貴たちの居場所、見当はつく？」
「あ、うん……そうね。あたしが最初に閉じ込められていた船室あたりかもしれないけど……」
「いや……あそこは一応、客室だからね。多分、監禁用の牢屋に閉じ込められているはずだ」
「か、監禁用の牢屋～！？」
「そ、そんな物まであるんだ。前に脱出した時には見かけた覚えは

なかったけど……」
「あの時は、脱出防止用の電磁バリアが展開されていたから行ける場所が制限されていたんだ。今はまだ、電磁バリアが展開されていないみたいだから……ドルンさたちを助けるチャンスかもしれない」
「そ、それで……その牢屋はどこにあるの!?」
ヨシュアがあたりを見回した。
「……この先の通路に下の階に続く小階段があった。そこを降りれば牢屋のはずだよ」
「牢屋に降りる小階段ね……。よーし、まずは調べてみましょ！」

―グロリアス監禁室
「みんな！」
監禁室に辿り着くとカプア一家と空賊団が閉じ込められていた。
「なっ……!?」
「ジョゼット……それに小僧じゃねえか！」
「お、お嬢!?」
「ど、どうしてここに!?」
「よ、良かった……みんな無事だったんだね……。今、助けてあげるから待っててよ！」
「た、助けてあげるって……。……おい、ヨシュア！いったいどうなってるんだよ！と言うか、どうしてお前らまでこの浮遊都市に来てやがるんだ!?」
「うん、実は……」
空賊たちに今までの経緯をかいつまんで説明した。
「なるほど……そんな事があったのかよ」
「あのなぁ、ジョゼット……。俺たちはお前を逃がすために身体を張って捕まったんだぞ？それなのにお前ときたら……」
「か、勝手なこと言わないでよ！独りぼっちになってまでボクは助

かりたくなんかない！兄貴たちと一緒に捕まった方がまだマシだったよ！」
「馬鹿、お前は女だろうが！少しは自分の身の安全を心配しろっての！」
「そ、そんな言い方はズルイよ！だいたいキール兄はいつも都合のいい時だけボクのことを女扱いしてさっ！」
「（な、なんか……すっごく仲がいいわねぇ）」
「（ふふ……ちょっと羨ましいです）」
「仲睦まじいところすいませんが、あまり時間がないのでそこらで止めていただけますか？」
「そこの兄ちゃんの言う通りだぜ。ったく2人とも……いつまで経ってもガキのままだな」
「ドルン兄……」
「で、でもよ……」
「来ちまったものは仕方ねぇ。一緒に脱出するしかねえだろう。それで小僧……どうやって俺たちをここから出す？」
「……そうだね。どうやら、このエネルギー障壁は完全にロックされているみたいだ。プロテクトを外すのは正直、難しいかもしれない」
「……なるほどな」
「そ、そんな……」
「うーん、力づくでこじ開けられない？爆弾か何かを使っちゃうとか」
「いや、このエネルギー障壁は普通の爆弾じゃ傷一つつかない。かといって強力すぎる物を使ったらキールさんたちが危ないだろうしね。ここは、最新のセキュリティカードをどこかから調達するしかなさそうだ」
「セキュリティカード？」
「そ、それを使えばこの障壁を消せるの！？」
ヨシュアが側にあった端末を見た。

「たしか、あの端末にカードを通せば障壁が解除されるはずだ。僕が潜入時に入手したものはもう使えなくなっているはずだから、最新のカードが必要だけどね」
「な、なるほど……」
「それで、最新のカードってどこに置いてあるものなの？」
「前方区画の第二層――前に君が監禁されていた部屋の周辺に保管されているはずだ」
「そっか……」
「早速、調べに行った方が良さそうですね」
「キール兄！ドルン兄！それからみんな！そういう事だからもうちょっとだけ待っててね！すぐにカードを見つけて戻ってくるから！」
「はあ……仕方ねえな」
「小僧……それに遊撃士の嬢ちゃんたち。その跳ねっ返りが無茶をしないように頼んだぜ」
「ああ、任せて」
「ま、ちゃんと手綱を握っとくから安心してて」
「ふ、ふん……。ボクなんかよりも遥かに無鉄砲なクセに良く言うよね」
「あ、あんですって～？」
「はいはい、その位で。――それじゃあ、いったん出口付近にまで戻ろう。前方区画の第2層に行くには反対側にあるエレベーターを使う必要があるからね」
「わ、分かった」
「では、行くとしますか！」

―前方区画第2層
「えっと、確かこのあたりがあたしが捕まっていた区画よね」
「うん、前方区画の第2層だ。猟兵たちに作戦を伝えるためのミー

ティングルームとしても使われている。最新のセキュリティカードはこのあたりに保管されているはずだよ」
「そ、それじゃあさっそく調べてみようよ！」
ジョゼットは早く助け出したくて気が焦っている。
「はいはい、分かってますって。とりあえず、部屋を1つ1つ調べていきましょ」

「ひょっとしてそれが……！」
「さっき言ってた最新のセキュリティカード？」
「うん……間違いない。これを牢屋の端末に通せば障壁を解除することができるよ」
「やった！」
「よかった……これで……」
「ふふ……急いで牢屋に戻りましょうか」

エステルたちが監禁室に向かっていると、突然、エネルギー障壁が起動した。
「な……！？」
「ど、どうなってるの！？」
「ククク……やっと捕まえたよ」
目の前からやってきたのはギルバードだった。
「ギ、ギルバード！？」
「まあ……先輩？」
「……艦内にいたのか」
「やれやれ……艦に侵入した連中がいると聞いてどんな愚か者かと思ったが……。やはり君たちだったわけか」

「あれ……。……ねえコイツ、あんたたちの知り合いなの？」
事情を知らないジョゼットが尋ねてきた。
「ええ……王立学園のＯＢですが……」
「学園を襲った時点でＯＢの資格なんかないってば。汚職市長の元腰巾着であたしたちが捕まえたんだけど……」
「クーデターの時の混乱で脱走して《結社》に身を投じたらしい」
「あはは、やっぱりそっか。ボクたちと同じく、レイストン要塞の地下に捕まっていた市長秘書だよね？『僕は無罪だ！』とか言って泣き喚いていたからよく覚えてるよ」
「なっ……！？」
「まあ……」
「え、えーっと……。まあ、そんなに気にする必要ないと思うわよ？そういう情けない経験を糧にして人って成長するもんだと思うし……。……そんな格好をしてる時点で糧にはなっていないみたいだけど……」
エステルは笑いをこらえながら言った。
「……エステル。全然フォローになってないよ」
「き、き、貴様ら、どこまで僕をコケに……。いいだろう……もう手加減などしてやるものか……。この新・ギルバードの力、思う存分見せつけてくれるわッ！」
ギルバードが手を上げると、奥から獅子の形をした人形兵器が現れた。
「！！！」
「な、なななっ！？」
「き、機械仕掛けの獅子！？」
「《十三工房》の新型か……！」
「ハハハ、獅子型人形兵器、《ライアットアームズ》だ！その驚異の性能に戦慄するがいいッ！」

「ば、馬鹿な……。この僕が……新・ギルバードが……」
「あ、あの～、ちょっといい？確かに今までの人形兵器より段違いに強力だったけど……」
「でもそれって、あんた自身が強くなったわけじゃないんだよね？」
「え……」
「確かに、『新』というのは少し違うような気が……」
「……ぎゃふん」
ギルバードはその場に崩れ落ちた。
「あ」
「え」
「まあ……」
エステルたちは少しばかりその場に立ち尽くした。
「さ、さ～てと。急いで牢屋に戻ろっか？」
「そ、そうですね……」
「うんうん。兄貴たちを助けないと」
「（さすがに可哀想かな……）」
「（いえ、彼はこの程度で理想を諦めたりはしないでしょうから大丈夫でしょう。今は放っておきましょう）」

「――認証しました。ロックを解除したい障壁の番号を選んでください」
エステルがヨシュアが1番を選択すると、空賊団たちの目の前から障壁が消えた。
「おお……！」
「た、助かった……！」
「キール兄ぃ、ドルン兄ぃ！」
「ジョゼット……」

「へへッ……。お前らにも、でかい借りを作っちまったようだな」
「いや、お互い様だよ」
「そうそう、前に脱出した時にはこちらが助けてもらったんだし」
その時、《グロリアス》内に警報が鳴り響いた。
「やばっ……！」
「どうやら僕たちの動きが完全に掴まれたみたいだ……。みんな、急いで脱出しよう」
「う、うん！」
「よーし……いっちょ逃げるとするか！」
「野郎ども、遅れるんじゃねえぞ」
「アイアイサー！」
エステルたちは急いで《グロリアス》から脱出した。

―グロリアス　聖堂
聖堂では、道化師カンパネルラがモニターでエステルたちの動きを見ていた。しかし、ただ見ているだけで何の動きも示さなかった。
「フフ、なかなか楽しませてくれるじゃないか。あの様子だったら今日中には《中枢塔》まで辿り着けそうだな。でも、ここまで予定通りだと『見届け役』の意味ってないよねぇ」
道化師カンパネルラは溜息をついた。
「真の最終幕が上がるまでもう少し時間がありそうだ……。それまでギルバード君でもいじって愉しませてもらおうかな？」

こうして、エステルたちは空賊団たちと共に《グロリアス》から脱出の成功を果たした。
途中、追っ手の強化猟兵と何回か交戦を繰り広げたあと……

エステルたちは追撃を振り切って何とか居住区画まで戻ってきた。

―第３５クレイドル　空き家

「――そんなわけで俺たちは《山猫号》の修理をとっとと始めちまうつもりだ。幸い、材料は調達してあるから何とかなるとは思うんだが……」

「機体はともかく問題は例の『導力停止現象』だ。要するに、無理して飛んだとしても都市から離れた途端に墜落するんだろ？」

「うーん……。『零力場発生器』の大型版がないとそうなっちゃうと思うわ」

「アルセイユのラッセル博士に応援を頼んでおこうか？」

「ま、都市の中なら導力通信も使えるみたいだから必要ならこちらから連絡するさ。それよりも、お前らの方はこのまま《輝く環》を探すのかよ？」

「うん、そのつもりだよ」

「それがこの浮遊都市に来たあたしたちの本当の目的だし」

「あ、そういえばそんな事も言ってたっけ……。宝探しとかじゃなかったんだ？」

「あのね……あんたたちと一緒にしないでよ」

「……だったら、ジョゼット。お前、このままヨシュアたちと一緒に行動したらどうだ？」

「えっ……！？」

キールの言葉にジョゼットは驚いた。

「《山猫号》の修理は俺たちだけでも充分だからな。お前にはどちらかっていうと情報収集をしてもらいてぇのよ」

「あ、なるほど……」

「確かにこうなった以上、アルセイユと山猫号の間の連絡役も必要になりそうだし……。いいかもしれないね」

「うん、あたしも同感。《結社》に対抗するためには味方は一人でも多い方がいいしね。ジョゼットだったらサポート役としても信頼できるし、来てくれたら助かっちゃうわ」
「……」
ジョゼットはエステルの言葉に驚いたのか口を開けたまま何も言わなかった。
「あれ、どうしたの？」
「いや、その、何て言うか……」
ジョゼットは困ってヨシュアに耳打ちした。
「（……ねえヨシュア。これって本気で言ってるわけ？）」
「（はは……そういう子だからね）」
「（アタマ痛くなってきた……）」
「な、なによ。その微妙に呆れた顔は？」
「いや、微妙じゃなくて思いっきり呆れてるんだけど」
「あ、あんですって～！？」
「ガッハッハッ。どうやら話はまとまったか」
「それじゃあ俺たちは《山猫号》に戻るぜ。ジョゼット。くれぐれも気をつけろよ」
「あ、うん……。兄貴たちも気を付けてよね。また《結社》の連中が襲ってこないとも限らないし」
「ガハハ、心配するなって！」
「ま、せいぜい気をつけるさ」
ドルンとキールは山猫号に戻っていった、エステルたちも少し休んでからさらに別の区画を目指した。

第１６章　空の軌跡（７）（前書き）

データクリスタル編・第３回目です。
＃８～＃１１です。

第16章　空の軌跡（7）

『《環》の封印について（1／4）』

地下施設の完成があとわずかに迫った頃、不覚にも我々は、《環》に『封印計画』の存在を知られることになる。

同胞の1人が《環》の甘い誘惑に落ち、その精神に介入されたことが原因であった。

しかし、その同胞が計画の全容を知る立場になかったことは不幸中の幸いであった。

《環》の目は、《アーネンベルク》と《デバイスタワー》に向かうことはなく、湖岸にある地下施設のみを捉えたのだ。

『《環》の封印について（2／4）』

我々の計画を知った《環》が取った手段は強行的なものだった。

《環》は自らの守護者として《トロイメライ》という存在を幾体か生み出すと、施設にいる我々の元へそれを差し向けたのだ。

――しかし、施設が地下に建造されていたことが幸いであった。

地上と施設を繋ぐ経路はわずか1本。《トロイメライ》の攻撃が地下500アージュまで届くことはなかったのだ。

だが、《トロイメライ》の攻撃は昼夜を問わず執拗に続く。その内に我々の堅固な防衛線にも限界が迫った。

『《環》の封印について（3／4）』

《トロイメライ》の攻撃を受ける中、施設はついに完成に至るが、七耀脈から計画に必要なエネルギーを確保するにはまだ時間がかかった。
だが、施設が完成したことで油断を覚えてしまったのか――――我々は《トロイメライ》の一体に施設内部の侵入を許してしまう。
一度内部に侵入されると、その侵攻を止めるのは容易ではなかった。
《トロイメライ》はあっという間に最深部までやってきたのだ。
――――まさに間一髪であった。最深部に来た《トロイメライ》が破壊活動に及ばんとしたその時、必要分のエネルギーはついに集まり、我々はすぐさま《第一結界》を起動させたのだ。

『《環》の封印について（４／４）』

施設より放たれた光が《アーネンベルク》を介して増幅され、空に浮かぶ《環》を捉える。
すると、《環》は我々の前から姿を消し、《トロイメライ》も動きを止めた。
こうして《第一結界》は無事その発動が確認されたのだ。
《環》は《七の至宝》の内、空間を司る至宝である。空間の絶対支配という力を持った《環》を無力化するために必要とされること――――それは《環》による空間への干渉、更には時間への干渉を一切断つということであった。
我々が苦心して生み出した『封印機構』は《環》の都市ごと異次元へと送り込み、『時間凍結』させることに成功したのである。

第16章　空の軌跡（8）

―山猫号

「そうだ……一つ忘れてた。お前たち、『O・R・P・H・E・U・S』って言葉をどこかで聞いたことはないか？」

キールが唐突に意味ありげな言葉を言い出した。

「な、なにそれ？」

「ORPHEUS……オルフェウスって読むのかな？」

「……その言葉がどうしたの？」

「いや、俺たちを見張っていた猟兵どもの会話に出てきたんだ。妙に意味ありげな言葉だったから覚えておこうと思ったんだが……」

「そうなんだ……」

「うーん……確かに気になるわね。（あ、ひょっとして！）」

「エステルさんも気がつきましたか？」

「うん、工業区画の端末のパスワードね」

「ええ、おそらくそうでしょう」

「？どういうことだ？」

工業区画の駅の端末で、新たな地下道のゲートを開くためのパスワードを要求されたことをキールに説明した。

「なるほど……そいつは確かにクサイな。試してみる価値はあるんじゃないか？」

「えへへ、やっぱり？」

「ありがと、キール兄！」

「早速、確かめてくるよ」

―第7ファクトリア駅

エステルが端末に《ゴスペル》をかざすと端末から合成音が流れた。

「ゴスペルによる認証を確認しました。お手数ですが、コンソールからパスワードを入力してください」
キールから教えられたパスワードを入力すると
「パスワードを確認しました。当駅付近にあるゲートのロックを解除しました。地下道２４６号の利用が可能です」
地下道のロックが解除された。
「やりましたね、エステルさん」
「うん、これで先に進むことができるわ」

―中枢塔（アクシスピラー）前
「ま、まぶし……。あれ、ここって……」
「エステル……あれ！」
地下道から出たエステルたちが目にしたのは、《アルセイユ》が本来到着するはずだった所の《塔》の近くだった。
「あれが《中枢塔（アクシスピラー）》かい……」
「遠くから見てもかなりの大きさでしたが……。ここまで大きな塔だったんですね……」
「ええ、それだけこの都市にとって重要な役割を果たす建造物なのでしょう」
エステルがしばらく《中枢塔》を見上げてヨシュアに尋ねた。
「……ねえ、ヨシュア。あそこにレーヴェや教授たちがいるのかな？」
「……可能性は高いと思う。どうやら都市の中枢を司る場所みたいだ。《輝く環》の手がかりだってあるのかもしれないからね」
「そっか……。……どうする？このまま突入しようか？」
「……レーヴェたちがいるなら、今までとは比較にならないほど厳しい戦いになると思う。一度、《アルセイユ》に戻ってから万全の準備をすべきかもしれない。ユリア大尉にも探索状況を報告してお

きたいしね」
「うん……そうね」
「そんなら早速、駅を探すとしようや」

―アクシスピラー前駅
エステルたちが《レール ハイロゥ》の非常運行モードを起動させると、乗物がやってきた。
「よし……。これで《カルマーレ》から《アクシスピラー》まで簡単に行き来できるようになったね」
「はぁ……長い道のりだったわ」
何時間も探索を続けて全ての駅を結びつけたエステルはさすがにお疲れのようだった。

―アルセイユ　ブリッジ
ユリア大尉に報告に向かったエステルたち。
「……ああ、諸君。探索の方はどうだろうか」
「うん、えっと……」
エステルたちはこれまでの探索の経緯と、これから《中枢塔》内部の探索に入ることを説明した。
「……そうか……」
「……ええ、これから《中枢塔》内部の探索に入るところです」
「《中枢塔》……都市機能を統括している場所のようだな。《輝く環》、そして、我々の敵がそこにいるのは間違いないだろう」
「……よし。私も探索に参加しよう」
ユリア大尉が立ち上がると自分も探索に参加したいと名乗り出た。
「えっ……？」

「私も自分の足で外の状況を把握しておきたい。それに……どうやら《中枢塔》からは様々な都市機能に干渉できるようだ。何もせず、このまま放置しておくのも危険だろう」
「でもユリアさん、アルセイユの方は……？」
「ふふ、大きな作業はあらかた片づきました。飛翔機関のテストも必要な指示は出してあります。後は博士やクルーたちに任せておけば問題ないでしょう」
「そ、そっか……。うん、ユリアさんが手を貸してくれるなら大いに心強いわね！」
「……ならば自分も協力させてもらおう」
側で話の始終を聞いていたミュラーもユリア大尉と同じく捜索の参加に名乗り出た。
「しょ、少佐……？」
「この付近の安全は確保できたのだろう。ならば自分がここにいてもできることは少ない。武人は武人らしく、役立たせてもらおう」
「で、ですが少佐の手をお借りするのは……」
ユリア大尉が畏れ多いと遠慮がちに言った。
「……いらぬ気遣いだ。正直に言わせてもらえば、あのお調子者を外に出すのが些か心配ということだからな」
「少佐……」
「……というわけだ。我々の手を借りたいときはいつでも言ってくれ」
「うん、分かったわ」
「こちらこそ、宜しくお願いします」
エステルたちはパーティと準備を整え、《中枢塔》へと向かった。

第１６章　空の軌跡（９）（前書き）

データクリスタル編・最終回です。
＃１２～＃１５です。

第16章　空の軌跡（9）

『デバイスタワーについて（1／4）』

《第一結界》は無事発動し、《環》を異次元において『時間凍結』させることに成功した。
だが、その名が示す通り『封印計画』における結界はこれだけではない。
『封印計画』の最後の砦、《第二結界》。
――それは4つのデバイスタワーが鍵を握るのだ。

『デバイスタワーについて（2／4）』

この機構は《第一結界》が解除され、《環》が再び時を刻みだす時にこそ、その発動を開始する。
この《第二結界》は又の名を『重力結界』といい、異次元において重力を発生させるという機能を持つ。
もしも《環》がその活動を開始した時、重力の楔で異次元に繋ぎ止めることで、現世への出現を防ぐことが目的なのである。

『デバイスタワーについて（3／4）』

《第二結界》が発動する時、《環》はすでにその動きを開始している。
よってその端末たる《ゴスペル》を使えば、その力を自由に引き出

すことも可能なのだ。
《リベル＝アーク》内に残る《ゴスペル》は《環》と同じく封印されている。
だが、後世において《ゴスペル》に代わるものが生まれれば、《環》はその力を現世に及ぼすであろう。

『デバイスタワーについて（４／４）』

我々は《環》を封じることに成功したが、無論その力が消え去ったわけではない。
我々はこの地に根付き、《環》を見守っていくつもりである。
そしてこの記録が誰の目にも触れないことを祈る。
しかし、同時に我々はそれが叶わないであろうことを予見する。
《環》が再び現世に現れる時、後世に生きる人々はいかなる選択をするのであろうか――
人が再び過ちを犯すことなく、《環》から解き放たれる時を信じ、この記録を後世に託すものとする。

第１６章　空の軌跡（１０）（前書き）

アクシスピラー編第１話です。

第16章　空の軌跡（10）

―中枢塔第一層

まずはエステル、ヨシュア、クローゼ、オリビエのパーティで向かった。

中枢塔は見上げても上が見えないほど高く、下は青白く光る液体で満たされていた。

「ほう……これが《中枢塔》の内部か」

「まるで大きな装置の中にいるみたいですね……」

「それに、この光る液体はいったい何なのかしら……。得体の知れない感じだけど……」

「……高圧の導力に満ちた液体かもしれない……。直接手に触れるのは止めておいた方が良さそうだ」

―中枢塔第二層

「あ……！」

「外に出たね……」

中枢塔の外に出たエステルたちが周りを見渡すと相当な高さにいるのが思い知らされた。

「どうやらかなりの高さまで登ったみたいね……。あれ……？」

エステルたちの先の広場には何やら装置みたいなものがあった。

「あれって……何なのかな？」

「ほう……。何かの端末みたいだがずいぶん思わせぶりだねぇ」

「どうやら調べてみる必要がありそうですね」

「いや……それは後回しにしよう」

「え……？」

「フフ。さすがは《漆黒の牙》。気配を断つということは隠れた気

配を察するのと同じか」
広場に現れたのは怪盗紳士ブルブランだった。
「か、仮面男……！」
「ブルブラン……貴方か」
「ようこそヨシュア……それにエステル・ブライト。そしてまさか、我が姫と好敵手までいるとは……。この怪盗紳士、最高の歓びをもって諸君らを歓迎させていただこう」
「か、歓迎って……」
「フッ、なかなか芝居がかった登場をしてくれるじゃないか」
「……どうやら貴方が最初の障害のようですね」
「フフ……最初にして最後の障害だ。ここにあるのは、《中枢塔》上層に通じるゲートをロックするための端末でね。これが働いている限り諸君は永遠に《環》に辿り着けないだろう」
「あ、あんですって～！？」
「……ブルブラン。貴方は、今回の計画のためリベールに来た執行者の中ではもっとも因縁の薄い人物のはずだ。この上、教授に従って僕たちと戦う理由はどこにある？」
「フフ……別に私は教授に従っているわけではない。知っての通り、我々、《執行者》は望まぬ命令に従う義務などないのだ。《使徒》はもちろん、たとえ《盟主》の命であってもね。フフ、教授の人形だった君は少々事情が違っていたようだが」
「……」
「ヨシュア……」
「私が拘る理由はただ一つ……。そこに盗む価値のある美しい物があるかどうかだけだ。だからこそ私はここにいる」
「盗む価値のある美しい物……」
「ふむ、いったいそれは何だい？」
「フフ……それは諸君の『希望』だ」
「！？」
「逆境であればあるこそ『希望』という物は美しく輝く。その煌め

きを見るために私はこの場で諸君を待っていた。その結果、夏の花火のように『希望』が消えてしまっても……私はその極みが見てみたいのだ！」

怪盗紳士ブルブランがステッキを振り、人形兵器をエステルたちの周りに出現させた。

「さあ、見せてくれたまえ！希望という名の宝石が砕け散るときの煌めきを！」

「か、勝手なことを抜かしてるんじゃないわよ！」

「ならば逆に証明しましょう……。絆が生み出す希望というものが決して砕け散りはしないということを！」

「そして愛があれば、希望の灯火は永遠に燃え続けるということを！」

「……く……馬鹿な……。よもや私の仮面に……ヒビを入れようとは……」

怪盗紳士ブルブランは割れた仮面を押さえながら跪(ひざまず)いた。

「はあはあ……。どう……思い知った！？」

「……砕け散ったのは貴方の傲慢だったみたいだね」

「絆が生み出す希望の強さ……分かっていただけましたか？」

「フッ……そして希望の灯火を燃やし続ける愛の偉大さ、思い知っただろう」

「……。よかろう……ここは大人しく退いておく。だが、教授のゲームはまだ始まったばかりでしかない。今回のような幸運は、これ以上続かぬものと覚悟した方がよかろう」

「忘れるな……。諸君はこの私を退けたのだ……。立ちふさがる絶望の壁を乗り越えて必ずや美の高みへと至るがいい。……それでは、さらばだ」

「あ……」

「……どうやら……完全に手を退いたみたいだ。誇り高い人だから約束は違えないと思うよ」
「そっか……」
「フッ……敵ながら天晴じゃないか」
「……安心しました」
「それじゃあ奥の端末を停止させてしまおう。上層に行くためのゲートを開けることができるはずだよ」
「うん……了解！」
エステルは奥にある端末を操作した。
「上層エリア方面への隔壁および、転位ゲートのロックを解除します」
案内が発せられると、扉の隔壁が消えて開き、転位ゲートが使えるようになった。

第１６章　空の軌跡（１１）（前書き）

アクシスピラー編第２話です。

第16章　空の軌跡（11）

―アクシスピラー第三層　外

第3層からはエステル、ヨシュア、ジン、ケビン神父で向かった。

「クク……待ちくたびれたぜ」

「サングラス男！」

第二層の時と同じく、端末の前には執行者が待ち受けていた。今回は痩せ狼ヴァルターだった。

「《痩せ狼》か……」

「……ヴァルター」

「クク……よく来たじゃねえか。ここに来たってことは覚悟はできたみてぇだな？」

「ああ……師父（せんせい）から継いだ《活人》の拳。あんたの邪拳を打ち砕くために振るわせてもらうつもりだ」

「……クク……。どうやらジジイの目論見通りになったようだな」

「師父の……目論見通り！？どういうことだ、ヴァルター！あんたと師父が仕合ったのは、やはり俺が関係しているのか！？」

「ハハ……だから言っただろう。もし、それが知りたかったら俺を打ち負かしてみせろッてな」

痩せ狼ヴァルターが指を鳴らすと、装甲獣の《スティールクーガー》が現れた。

「腑抜けた拳を振るったら、その場で終わらせてやる……。さあ、死合うとしようぜ！」

ヴァルターを退けたエステルたち。

「クッ……。てめえ……いつの間にそこまでの功夫を……」

「ヴァルター……あんたは確かに天才だ。だが、その才能ゆえにどうしても積み重ねが欠けるんだ。そして功夫とは、愚直なまでの繰り返しの鍛錬で積まれてゆく……。だからこそ格下の俺の拳があんたにも届くんだ」

「……。ククク……格下か。ジジイのやつはそうは思ってなかったみたいだぜ？」

「……え……」

「ジジイは俺に言ったのさ。活人、殺人の理念に関係なく……素質も才能も……てめえの方が俺よりも上だとな」

「なっ……！？」

「そしてジジイは、より才能のある方に『泰斗流』を継がせるつもりでいた。……それが何を意味するのか鈍いてめぇにも分かるだろうが？」

「だ、だが……。俺があんたよりも格上なんてそんなの冗談もいいところだろう！？それに師父が、キリカの気持ちを無視してそんなことをするはずが……」

「……ククク……だからてめぇは目出度いんだよ。流派を継ぐわけでもないのに、師父の娘と一緒になる……。そんなこと……この俺が納得できると思うか？」

「……」

「だから俺は、てめぇとの勝負で継承者を決めるようジジイに要求した。だが、ジジイはこう抜かしやがったのさ。『――ジンは無意識的にお前に対して遠慮をしている。武術にしても、女にしてもな。お前が今のままでいる限り……あやつの武術は大成せぬだろう』と」

「……な……」

「ククク……俺も青かったから余計に納得できなかったわけだ。そしてジジイは、てめぇの代わりに俺と死合うことを申し出て……そして俺は――ジジイに勝った」

「……」

「ククク……これが俺とジジイが死合った理由だ。お望み通り答えてやったぜ」

「……。俺はずっと確かめたかった……。師父がなぜ、あんたとの仕合いに立ち合うように言ったのかを……。ようやく……その答えが見えたよ」

「……なんだと？」

「ヴァルター……あんたは勘違いをしている。これは俺も、後でキリカに教えてもらったことなんだが……。あの頃、リュウガ師父は重い病にかかっていたそうだ。悪性の腫瘍だったと聞いている」

「……な……！」

「だからこそ師父はあんたとの仕合いを申し出た。無論、あんたの武術の姿勢を戒める意味もあっただろうし……未熟な俺に、武術の極みを見せてやるつもりでもあったのだろう。だが、何よりも師父が望んだものは……武術家としての生を一番弟子との戦いの中で全うしたいということだったんだ」

「……。……クク……なんだそりゃ……。そんな馬鹿な話が……。じゃあ何だ？俺は体よく利用されただけか？そうだとしたら……俺は……」

「確かにそれは……身勝手な話なのかもしれん。だが、強さを極めるということは突き詰めれば利己的な行為なんだろう。それが、俺たち武術家に課せられた宿命といえるのかもしれない。だからこそ師父は……あえて己の身勝手さをさらけ出した。そうする事で、あんたや俺に武術の光と闇を指し示すために……」

「……」

「……ヴァルター、構えろ」

ジンが話し終えると、戦う構えを取った。

「なに……？」

「師父とあんたから学び、遊撃士稼業の中で磨いてきた『泰斗』の全てをこの拳に乗せる。そして、修羅となり闇に堕ちた不甲斐ない兄弟子に活を入れてやる。多分それが、あんたの弟弟子として俺が

できる最後の役目のはずだ」
「……。……ケッ……ずいぶん吹くじゃねえか……。だったら俺は、結社で磨いた秘技の全てを拳に込めてやる……。『泰斗』の全てを葬るためにな」
「……」
「……」
「はあああああああっ……！」
「こおおおおおおっ……！」
2人が同時に気を練り始めると周りの空気が大きく震えた。

「（す、すごい……）」
「（このままだと片方は……）」
2人の様子を見ていたエステルたちにもその威圧感で飛ばされそうになっていた。

「おおおおおおおおっ！」
「らあああああああっ！」
そして2人の攻撃が同時に交差した。
「……」
「……」
「……くっ……」
先に膝をついたのはジンだった。

「あ……」
「ジ、ジンさん！？」

「ククク……仕方ねえやつだ……」
ヴァルターがジンの方を振り返り、煙草に火をつけた。
「……それだけの功夫を宝の持ち腐れにしてたとはな……。ククク……ジジイの言うことが……ようやく分かったぜ……。……ふぅ

……美味ぇ……。本当に……タバコが……美味ぇ……」
ヴァルターの手から煙草が落ちると、糸が切れたように倒れてしまった。
「も、もしかして……」
「うん……ジンさんの勝ちみたいだね」
「いや～！ごっつ凄かったですわ！」
「うんうん！まさか、このとんでもない男に真剣勝負で勝っちゃうなんて！」
「……いや……」
ジンがゆっくりと立ち上がった。
「勝てたのは、俺が『泰斗流』を背負っていたからに過ぎんさ。もしあいつが『泰斗』の正当な使い手としてこの勝負に臨んでいたら……倒れていたのは多分、俺の方だっただろう」
「も～、そんなことないってば。それよりジンさん……ケガとかしてるんじゃない？」
「手当、しておきましょうか？」
「いや……大丈夫だ。……ヴァルターのやつもしばらくは目を覚まさんだろうし、このまま放っておいていいだろう。今はとにかく上を目指すぞ」
「……うん！」
「それじゃあ奥にある端末を操作しましょう」
エステルたちは端末を操作し、扉の隔壁を消した。そして一度、《アルセイユ》へと戻り。パーティと準備を整えた。

第１６章　空の軌跡（１２）（前書き）

アクシスピラー編第３話です。

第16章　空の軌跡（12）

―アクシスピラー第四層　外

第四層からはエステル、ヨシュア、シェラザード、ケビン神父で向かった。

エステルたちが外に出ると、鈴の音が響いた。

「フフ……よく来たわね」

待ち構えていたのは、幻惑の鈴ルシオラだった。

「あ……！」

「《幻惑の鈴》……貴方か」

「ルシオラ……姉さん」

「ブルブランとヴァルターを破ってここまで辿り着くなんて……なかなかやるわね、貴女たち」

「姉さん……約束を果たしてもらうわ。今度会った時には、ハーヴェイ座長のことをちゃんと話してくれるって……」

「ああ……彼を殺した理由だったかしら？」

「……ッ……」

「そうね……。……」

幻惑の鈴ルシオラはしばしの間、黙った。

「……ねえ、シェラザード。貴女にとって、座長はどんな人だったかしら？」

「そ、そんなの決まってるじゃない！孤児だったあたしを拾って育ててくれた恩人よ！あたしは両親の顔なんて全然知らないけど……お父さんってこういう感じなのかなってずっと思っていた……。……なのに……それなのにどうして……！」

「そう……暖かくて優しい人だったわね。でもね、旅芸人の一座なんて優しいだけじゃやって行けないの。汚い取引をしたり、女の芸人に客を取らせたりするところもあるわ。でも座長は……あの人は一切そんなことをしなかった。そうして私財を使い果たして……莫

大な借金を背負ってしまった」
「う、うそ……!?だって座長、そんな素振りなんて全然……」
「フフ、人が良いくせにとても芯が強い人だったかしら。私たちに悟られないようあちこち資金繰りに奔走して……。……そして最後に一座を手放すことを決意した」
「!!!」
「知り合いの裕福な貴族に一座を丸ごと預けようとしたの。自分がこのまま座長を続ければ私たちに苦労をかけることになる……。ならば、信頼のおける人に面倒を見てもらった方がいい……。……そう考えたみたいね」
「そ、そんな、どうして……。相談してくれたらあたしたちだって協力して……!」
「話を打ち明けられた時は私も同じように説得したわ。でも、あの人は頑ななまでに聞き入れてくれなかった。不甲斐ない自分がいたら私たちのためにならない……そう思い込んでいたみたいだった」
「……。それが理由で……姉さんは座長を……?」
「ええ、そうよ。私にとって、彼の決断は許しがたい裏切りでしかなかった。安らぎと幸せを与えておいてそれを取り上げるなんて……そんな事をするくらいなら最初から手を差し伸べて欲しくなかった。だから、私はあの人を殺したの」
「……。……だったら……あたしはどうなるの?」
「え……?」
「あたしは……座長と姉さんから安らぎを与えてもらったわ……。スラムで感じたことのない暖かい気持ちに満たされていた……。でも……座長が死んで……姉さんまで去ってしまって……。そんなの……もっと酷い裏切りじゃない!」
「……ふふ、そうね……。シェラザード。あなたは私を恨む権利がある。その恨みをもって立ち向かってくるといいわ」

幻惑の鈴ルシオラは式神を繰り出した。
「姉さん……！」
「私ごときを倒せないようではこの上で待ち受ける者たちには遠く及ばないでしょう。《幻惑の鈴》の舞……見事、破ってごらんなさい」

「フフ……なるほど。これならば……上に進む資格があるかもしれないわね」
「……姉さん。ひとつだけ訂正させて。あたしは姉さんを恨むことなんてできないわ。あたしの元を去ったことも、座長を殺めてしまったことも。ただ……どうしようもなく哀しいだけよ」
「シェラ姉……」
「……シェラザード……」
「それに、やっぱり信じられない。姉さんがそんな理由で座長を殺めてしまっただなんて……。あたしたちのことを思って辛い選択をした座長のことを……」
「……。……ふふ……さすがに誤魔化せなかったか」
「え……」
「さっきの話にはね……続きがあるの。あの人を説得しようとしてそれでも決意が固いと知った時……私は、ずっと秘めてきた想いをあの人に打ち明けてしまっていた」
「！！！姉さんが……座長のことを……。……そう……だったんだ……」
「ふふ、親子ほども離れていたから想像できなかったでしょうね。そして……それはあの人にとっても同じだった。娘のように大切に思っているけど想いに応えることなど考えられない。一時の感情に流されず、相応しい相手を見つけるといい……。……そう、諭すよ

うに拒まれたわ」
「……」
「拒まれたこともショックだったけど、私はそれ以上に怖くなってしまった。私を惑わせないように……相応しい相手を見つけられるように。あの人が、本当の意味で私から離れていってしまう可能性が」
「あ……」
「……そう悟った瞬間、私の奥底で何かが弾けていた。……離れていかないように……永遠に私のものにするために……。その囁きに従って……あの人をこの手にかけていた」
「……ルシオラ……姉さん……」
「自分の中に潜んでいた闇に気付いたのはその時からよ。私は、その闇に導かれるように《身喰らう蛇》の誘いに応じて……いつの間にか……こんな所にまで流れてきてしまった。フフ、そろそろ潮時かもしれないわね」
「え……」
幻惑の鈴ルシオラは後ろを向いたまま飛び降りようとした。
「姉さん、だめええっ！」
シェラザードは鞭を使ってすんでのところで落ちようとしていた彼女の身体に鞭を巻きつけた。しかし、シェラザードも重みに耐えられず塔から落ちそうになっていた。
「くっ……」
「ふふ……なかなか鞭さばきも上達したじゃない。最初の頃はあんなに不器用だったのにね」
「シェラ姉！」
「エステル、ヨシュア……。少しの間でいいから……このままこの娘と話をさせて」
幻惑の鈴ルシオラはぶら下がったまま上に上がるつもりはなかった。
「で、でも……！」
「ルシオラ……貴女は……」

「は、話なんかしてる場合じゃないでしょう!?引っ張り上げるから掴まってて!」
「ねえ、シェラザード……。あの人を手にかけた事は今でも後悔していないけれど……唯一、気がかりだったのが貴女の元を去ったことだった。貴女がどうしているか、それだけが私の心残りだった。でも、私がいなくても貴女はしっかりと成長してくれた。自分の道を自分で見つけていた」
「姉さん……お願いだから……」
「それが確かめられただけでもリベールに来た甲斐があったわ。本当は貴女に私のことを裁いてほしかったのだけど……。さすがにそれは……虫が良すぎる話だったわね……」
「……お願いだからちゃんと掴まっていてよおっ!」
「フフ、お酒もいいけど……程々にしておきなさいね。さようなら……私のシェラザード」
「ルシオラ姉さあああんっ!」
幻惑の鈴ルシオラは扇でシェラザードの鞭を切ると、そのまま落下していった。最後に聞こえたのは鈴の音だけだった。
「……」
シェラザードはしばらく塔から下を見下ろしていた。
「シェ、シェラ姉……」
「シェラさん……」
「……大丈夫……。……あの姉さんが落ちたくらいで死ぬはずない。いつの日かきっと……きっと……また会えるわ」
「う、うん……きっとそうよ!だって、あんな凄い式神とか転位術とか使える人なんだもん!絶対に……絶対に大丈夫だってば!」
「ふふ……そうね……。……」
「姐さん……あまり無茶せんとき。一旦、アルセイユに戻った方が……」
ケビン神父がシェラザードの顔色がよくないのを察し、気遣った。
「ううん……その必要はないわ。……ここでへこたれてたら姉さん

に笑われてしまうから……。だから、今は先に進みましょう」
「シェラ姉……。うん……分かった」
「それじゃあ……端末を解除しましょう」
エステルたちは端末を解除し、一度アルセイユに戻った。

第１６章　空の軌跡（１３）（前書き）

アクシスピラー編第４話です。

第16章　空の軌跡（13）

―アクシスピラー第五層　外

第五層からはエステル、ヨシュア、ティータ、レインで向かった。

「クスクス……やっぱりここまで来たわね」

待ち構えていたのは予想通りレンだった。

「あ……」

「……レン！」

「やっぱり君か……」

「あの3人を倒すのはけっこう大変だと思ったけど……。でも、レンは信じていたわ。エステルとヨシュアがレンの所に来てくれるってね」

「レン……」

「それでも……君は戦うつもりなんだね？」

「うふふ、どうしようかしら。せっかく約束していたのにお城であった時には殺しそこねちゃったし……。エステルの態度次第では見逃してあげてもいいわよ？」

「あたしの……態度？」

「うふふ……簡単なことよ。この間、レンに言ったことを取り消すだけでいいわ」

「へ！？」

「前に、レンが《結社》にいるのが間違ってるって言ってたわよね。あの言葉を取り消すだけでレンはこの場を退いてあげるわ。どう、悪い取引じゃないでしょう？」

「……」

「レンちゃん……」

「レン……そんな取引は間違っている。たとえ望んだ言葉を引き出せても本心が違っていたら何の意味も……」

「ヨシュア……いいの。ここは……あたしに任せてくれないかな？」

エステルはヨシュアを制した。
「エステル……。分かった……頼む」
「……ありがと」
エステルがレンの前に一歩進み出た。
「うふふ、やっとその気になってくれたみたいね？さあ、言ってちょうだい。レンが《結社》にいることは間違ってなんかいないんだって」
「レン……。……甘ったれるのもいい加減にしなさいよね」
「……え」
期待していたものとは違うエステルの言葉にレンは驚いた。
「世界はレンを中心に回っているわけじゃないわ。レンのために都合よく変わってくれるものでもない。たとえレンが、物凄く大きな力を持っていたとしても……あの大きなパテル＝マテルが助けてくれたとしても……それでも……人の心までは自由にはできない」
「……」
「レンに結社にいて欲しくないのはたしかにあたしのエゴかもしれない。だから無理強いするつもりはないけど……。でも、できればレン自身に気付いてほしいと思う。いつでもヨシュアみたいに後戻りができるんだって……」
「……エステル……」
「……。……そう……。せっかくチャンスをあげたのに棒に振っちゃうんだ……。救いようのない大バカねぇ」
レンが大鎌を取り出し、パテル＝マテルを呼び寄せた。
「……みんな、ゴメン。ひょっとしたら避けられた戦いだったかもしれないけど……」
「……謝る必要はないよ。君は……僕が言いたいことをあの子に全て伝えてくれた」
「わ、わたしもお姉ちゃんの言う通りだと思う。レンちゃんがこのままなんて……そんなのイヤだから……」

「ええ、彼女はまだ戻ることができます。彼女を救うためにも戦いは避けられません」
「みんな……」
「……気に入らないわ……。本当の本当に気に入らない……。《パテル＝マテル》！リミッターを解除しなさい！出力全開でエステルたちを殲滅するわよ！」

レンとパテル＝マテルを退けたエステルたち。
「ど、どうして……。どうしてエステルたちなんかに《パテル＝マテル》が負けるの！？」
「ゴルディアス級の人形兵器はまだ制御系が不安定らしいからね……。関節部分に負荷がかかって作動不能になったのかもしれない」
「……そんな……。《パテル＝マテル》！ねえ、早く立ち上がって！早くエステルたちを皆殺しにしちゃってよぉ！」
レンの悲痛な叫びにパテル＝マテルが立ち上がろうとしたが右足が動かずに止まってしまった。
「……あ……」
レンはパテル＝マテルが動かなくなるとその場に崩れ落ちた。
「……」
「レン……」
エステルたちがレンの元に寄った。
「なによぉ……。エステルたちの勝ちなんだからもうどうでもいいじゃない……。さっさと端末を解除して上に行っちゃいなさいよぉ……」
「……そっちも大事だけど後回しにするわ。今はあんたの方が大事だからね」
「なによぉ……エステルなんてレンのこと何も知らないくせに……！どうしてそんなに……構ってくるのよぉ……！」

「フフン、決まってるじゃない。あたしがレンのこと、好きだからよ」
「！！」
「だからこそ……あたしはレンにやっておかなくちゃならないことがある。悪いけど、軽く行かせてもらうわよ」
「え……」
エステルがレンを立たせるとレンの頬を叩いた。
「……あ……。……ぶった……」
「悪いことしたらぶたれるのは当たり前よ。じゃないと、他の人の痛みが感じられなくなっちゃうからね。あたしも小さい頃は父さんに散々ゲンコをもらったんだから」
「エステルも……同じなんだ……。痛がってるのに……ぜんぜん止めてくれなかった……。レンを……レンに酷いことをした……あの人たちと同じ……」
「同じかどうかはレンが自分で考えてみて。どう……本当にそう思う？」
「……。……わから……ない……」
「だったら……これならどう？」
エステルがレンを抱きしめた。
「……あ……」
「あたしは何も言わない……。……レンが自分の心で感じるままに判断しなさい」
「……。……頭がモヤモヤしてなんだか良く分からないけど……こんな風に抱きしめられるのは……キライじゃない……かも……」
「そっか……」
「……。……帰る……」
「え……」
「《パテル＝マテル》！関節部のアクチュエーターを止めてブースターのみで姿勢制御して！」

レンの声に反応してパテル＝マテルが立ち上がると、レンはパテル＝マテルの手に飛び乗った。
「レン……！」
「頭がこんがらがっちゃったから1人でゆっくり考えてみる……。エステルたちはこのまま屋上まで登っていけばいい……。レーヴェが待ってるはずよ……」
「あ……」
「……そうか。教えてくれてありがとう」
「大丈夫なの……ヨシュア？レーヴェってば本気で通せんぼするみたいだけど……」
「うん……分かってる。でも、僕の方ももう覚悟はできているから……。だから……心配はいらないよ」
「そう……。じゃあ、レンは行くわね」
「レンちゃん！？」
「レン……待って！」
「……じゃあね。エステル、それにティータ。レンはもう行くけど……死んだりしたら許さないんだから！」
「……。これで……良かったのかな？」
「うん……大丈夫。色々なことが起こりすぎてあの子も混乱してるだけだと思う。すぐには無理だと思うけど……いずれ自分で答えを出せるはずだ」
「そっか……」
「えへへ……また会えるといいな」
「うん……そうね。……。……さてと……気持ちを切り換えなくちゃ。端末を停止させて先に進みましょ」
「うん……そうだね」
ヨシュアの顔に少し不安の表情が見えた。
「あ、そっか……。屋上でレーヴェが待っているって言ってたわね」
「うん……。執行者Ｎｏ．？。《剣帝》レオンハルト。《執行者》たちの中でも一、二を争う戦闘力の持ち主だ。万全の準備をして屋

上に向かおう」
「……了解！」
エステルたちは一度、《アルセイユ》に戻り、準備を整えた。

第16章　空の軌跡（14）

―中枢塔　屋上

「……来たか」

屋上では剣帝レーヴェが待ち構えていた。

「レーヴェ……」

「……意外と早かったな。もう少しばかり待たされるかと思っていたぞ」

「ま、あたしたちも少しは成長してるってことよ。さすがに、あなたのお仲間にはかなり手こずらせてもらったけど」

「フフ……言うじゃないか。だが、この《剣帝》を彼らと同じには考えないことだ。正面からの対決において俺を凌駕する者はそうはいない。たとえS級遊撃士や《蛇の使徒》といえどな」

「ケッ……吹いてくれるじゃねえか」

「……あなたの強さはイヤと言うほど分かっているわ。でも、あたしたちも理由があってこんな所までやってきた。《輝く環》による異変を止めて混乱と戦火を防ぐために……。沢山の人たちに助けられてあたしたちは今、ここにいる。だから……退くつもりはないわ」

「フ……理由としては悪くない。だが、レイン・アクアライトはともかく、ヨシュア。お前の理由は違うようだな？」

「え……」

「お見通し……みたいだね。僕は……自分の弱さと向き合うためにここまで来た。あの時、姉さんの死から逃げるために自分を壊したのも……教授の言いなりになり続けたのも……全部……僕自身の弱さによるものだった。それを気付かせてくれた人に報いるためにも……大切な人を守るためにも……。僕は……正面からレーヴェや教授に向き合わなくちゃいけないんだ」

「ヨシュア……」

「……。……巣立ちの時か。もうカリンの代

わりに心配する必要もなさそうだ」
剣帝レーヴェが剣を構えた。
「……これでようやく手加減する必要はなくなった。本気で行かせてもらうぞ」
「ちょ、ちょっと！どうしてそうなるのよ！？ヨシュアのことを心配しておいてどうして――」
「いいんだ、エステル。覚悟を決めただけではレーヴェは納得してくれない。その覚悟を貫き通せるだけの力が伴っていないと駄目なんだ」
「フフ、そういうことだ」
剣帝レーヴェは2体の獅子型人形兵器、《》を呼び寄せた。
「――俺にも俺の覚悟がある。もし、お前たちの覚悟が俺の修羅を上回っているのなら……力をもって証明してみるがいい！」
「うん……！」
「……望むところよ！」
「ヘッ、今までの借り利子付けて返してやるぜ……」
「真実を闇に葬らせないためにも……貴方に問い質させてもらいます！」

剣帝レーヴェを跪かせたエステルたち。
「や、やった……！」
「ヘッ……見たか！」
「いえ……まだのようです」
「えっ……？」
「……なかなかやるが、俺の修羅を止めるほどではない」
剣帝レーヴェはまだ余力を残しているようで、すぐさま立ち上がった。
「ど、どうして……！？」

「所詮、お前たち遊撃士は人を守るだけの存在だ。『理』に至りもしなければ『修羅』に届く道理はない。小手調べはここまで――――そろそろ全力で潰してやろう」
剣帝レーヴェは再び剣を構えた。
「くっ……」
すでに体力を使い果たしたエステルたちに勝機はないに等しい。
「……だったら、レーヴェ。ここから先は僕1人で挑ませてもらうよ」
しかし、ヨシュアが意外なことを言い出した。
「ほう……」
「ヨ、ヨシュア……!?」
「無理を言わないでください、ヨシュアさん！あなたのダメージは軽くはないはずです。ここは私が……」
「大丈夫、エステル、レインさん。確かにレーヴェは強すぎるけど、それでもレーヴェにもダメージは効いている。あとは……僕にやらせてほしい」
「ヨシュア……」
「……仕方ありませんね。本当は私が戦いたいところでしたが……」
「ヘッ、本当なら俺も落とし前を付けたいところだが……。仕方ねえ、お前にだったら譲ってやってもいいぜ。その代わり……絶対に負けるんじゃねえぞ！」
「はい、必ず」
エステルたちはヨシュアを見守るべく後ろに退いた。
「フフ、確かに今の戦闘で俺の機動力は幾らか落ちている。その一点においてのみ、勝機があるかもしれないが……それでも勝率は限りなく低いぞ？」
「……分かってる。姉さんが救い、教授が繕い、父さんが解き放ち、そして今、エステルと共にあるこの魂……。遊撃士としての心得と《漆黒の牙》としての技……」
ヨシュアが双剣を構えた。

「その全てをもって……《剣帝》に挑ませてもらう！！」
「いいだろう……」
剣帝レーヴェも剣を構え直した。
「来い……《漆黒の牙》！」
先に仕掛けたのはヨシュアだった。得意の隠形術で剣帝レーヴェの背後から攻撃を仕掛けたが、それを簡単にかわされた。
避けた剣帝レーヴェにさらに追い打ちをかけようとしたヨシュアだが、逆に隙を作ってしまい剣帝レーヴェが一閃を食らわせようとした。
しかし、ヨシュアは一瞬で姿を消し、危機を脱出した。
カウンターを食らわせようと一瞬で間合いを詰めたヨシュアだが、剣帝レーヴェはその剣を跳ね返し、逆に間合いを詰めた。
ヨシュアの挙動も早く、近くの柱を利用し、間合いを詰める剣帝レーヴェを分身で包囲しようとした。対する剣帝レーヴェは慌てもせず一斉に仕掛けてきたヨシュアの分身を一太刀で切り捨てた。
分身を消されたヨシュアは背後から襲いかかったがかわされてしまい、遠距離から小太刀を投げた。
剣帝レーヴェはそれらを避けながらヨシュアとの間合いを詰め、剣を振り下ろしたが、その隙を突いてヨシュアは再び分身を出し――剣帝レーヴェに一閃を食らわせることに成功した。
「フフ……やるな。……ならばこちらも全開で行かせてもらうぞ」
「！！！」
剣帝レーヴェが剣を構え直し、気を練って一気にヨシュアとの間合いを詰めると――一閃を食らわせた。
そこからは圧倒的だった。ヨシュアは防ぐのが精いっぱいの状態だった。
「くっ……！」
剣帝レーヴェの剣を押しとどめるヨシュア。
「どうした、ヨシュア！唯一勝るスピードを活かさずにどうやって勝機を掴むつもりだ！？」

本気を出せばこの程度かと言う剣帝レーヴェ。
「……。……ねえ、レーヴェ。1つだけ答えて欲しいんだ。どうして教授に協力してこんなことをしているのか……」
ヨシュアの言葉に剣帝レーヴェの顔色が変わった。
「前に……カリン姉さんの復讐が目的じゃないって言ったよね。『この世に問いかけるため』……それは一体……どういう意味なの？」
「……。……大したことじゃない。人という存在の可能性を試してみたくなっただけだ」
「人の可能性……」
「時代の流れ、国家の論理、価値観と倫理観の変化……。とにかく人という存在は大きなものに翻弄されがちだ。そして時に、その狭間に落ちて身動きの取れぬまま消えていく……。俺たちのハーメル村のように」
「！！」
「この都市に関しても同じことだ。かつて人は、こうした天上都市で満ち足りた日々を送っていたという。だが、《大崩壊》と時を同じくして人は楽園を捨て地上へと落ち延びた。そして都市は封印され……人々はその存在を忘れてしまった。まるで都合が悪いものを忘れ去ろうとするかのようにな……」
「……」
「真実というものは容易く隠蔽され、人は信じたい現実のみを受け入れる。それが人の弱さであり、限界だ。だが《輝く環》はその圧倒的な力と存在感をもって人に真実を突きつけるだろう。国家という後ろ盾を失った時、自分たちがいかに無力であるか……自分たちの便利な生活がどれだけ脆弱なものであったか……。そう……自己欺瞞によって見えなくされていた全てをな」
「それを……それを皆に思い知らせるのがレーヴェの目的ってこと……？」
「そうだ。欺瞞を抱える限り、人は同じことを繰り返すだろう。第

2、第3のハーメルの悲劇がこれからも起こり続けるだろう。何人ものカリンが死ぬだろう。俺は――それを防ぐために《身喰らう蛇》に身を投じた。そのためには……修羅と化しても悔いはない」

「……。それこそ……欺瞞じゃないか」

「……なに？」

「僕も弱い人間だから……レーヴェの言葉は胸に痛いよ。でも……人は大きなものの前で無力であるだけの存在じゃない。１０年前のあの日……僕を救ってくれた姉さんのように」

「……ッ……」

「そのことにレーヴェが気付いていないはずがないんだ。あんなにも姉さんを大切に想っていたレーヴェが……。だったら……やっぱりそれは欺瞞だと思う」

「……クッ……」

剣帝レーヴェがヨシュアの剣を押し返した。

「カリンは特別だ！あんな人間がそう簡単にいてたまるものか！だからこそ――人は試されなくてはならない！弱さと欺瞞という罪を贖うことができるのかを！カリンの犠牲に値するのかを！」

「だったら――それは僕が証明してみせる！姉さんを犠牲にして生き延びた弱くて、嘘つきなこの僕が……。エステルたちと出会うことで自分の進むべき道を見つけられた！レーヴェのいるここまで辿り着くことができた！人は――人の間にある限りただ無力なだけの存在じゃない！」

「！！！」

その言葉に驚き隙を見せた剣帝レーヴェのもとにヨシュアは一気に間合いを詰め、すべての力をもって剣帝レーヴェの剣を弾き飛ばした。

「あ……」

剣を落とされた左手をみつめる剣帝レーヴェ。

「はあっ……はあっ……はあっ……」

その前で荒く息をつくヨシュア。

「や、やった……」
「へッ……勝負アリ、だな」
「なかなかの作戦でしたね」

「ふうっ……はあっ……ふうっ……ふうっ……」
「俺に生じた一点の隙に全ての力を叩きこんだか……。まったく……呆れたヤツだ」
「はあ……はあ……。……ダメ……かな……？」
「フッ……。《剣帝》が剣を落とされたのではどんな言い訳も通用しないだろう。素直に負けを認めるしかなさそうだ」
そういう剣帝レーヴェはどこか楽しそうだった。
「……あ……」
「やったあああああっ！」
すぐさまエステルたちが駆けつけた。
「凄い！凄いよヨシュア！あの《剣帝》に勝ったんだよ！しかも……剣だけを弾くなんて！」
「そうでもしない限り……万に一つの勝ち目もなかったからね。なるべく相手を傷付けずに無力化することを優先する……。父さんに教わった遊撃士の心得が役に立ったよ」
「そっか……」
「なるほどな……。《教授》に仕込まれた技術と《剣聖》から教わった心得……その2つを使いこなせば俺が敗れるのも道理か……」
「レーヴェ……」
「……。俺は人という存在を試すために《身喰らう蛇》に協力していた。その答えの一つを出した以上、もはや

協力する義理はなくなった。そろそろ……抜ける頃合いかもしれないな」

「あ……！」

突然、ヨシュアが剣帝レーヴェに抱きついた。

「良かった……本当に良かった！……レーヴェが……レーヴェが戻って来てくれた！」

「お、おい……」

「父さんに引き取られてからもずっと気にかかっていたんだ……。……声や顔は思い出せるけど誰なのかぜんぜん思い出せなくて……。やっと思い出せたと思ったら……敵として立ち塞がっていて……。……ずっと……不安だったんだ……」

「そうか……」

「あ、あの～……」

割り込めない雰囲気に戸惑うエステルたち。

「（ここはそっとしておいてあげましょう。兄弟の本当の再開と言えるのですから……）」

「（やれやれ……。マセてても、まだまだ甘えたい盛りのガキってところか）」

「（そ、そうなのかなぁ？）」

「ご、ごめんエステル……何だかはしゃいじゃって……。まだ何も解決してないのに……」

「ヨシュア……。もう、そんなことでいちいち謝らなくていいわよ。久しぶりの仲直りなんでしょ？いっぱいお兄さんに甘えなくちゃ！」

「あ、甘えるって……」

「フフ……。エステル・ブライト。……お前には感謝しなくてはな」

「ふえっ……！？」

「レンといい、こいつといい……。俺には出来なかったことを軽々とやってのけたのだから。そして、様々な者たちを導いてここまで辿り着いた……。フフ……本当におかしな娘だ」

「な、なんか全然、感謝されてる気がしないんですけど……」

「アガット・クロスナー。竜気をまといし必殺の重剣技、なかなかどうして大したものだ。フフ……少しは前に進めたようじゃないか？」

「お、おう……。って、したり顔で分かったような口利いてんじゃねえっての！オッサンそっくりだぞ、あんた！」

「フ……剣聖に似ているとは光栄だ。……それと……レイン・アクアライト」

「……いよいよ、教えてくれる気になりましたか？」

「そうだな……。教えてやりたいところだが、生憎俺は教団について詳しくは知らない」

「……どういうことですか？」

「《身喰らう蛇》は時として下劣な集団を潰すことがあることは知っていると思うが……俺はただ一部の《ロッジ》を潰しただけであってその全貌を知っているわけではない」

「そんな……」

「期待に応えられず申しわけないが……これだけは言えるだろう。あの教団は確かに壊滅状態に陥ったが、まだ水面下で復活を画策している者がいるだろう」

「やはりそう思いますか……。おそらく生き延びた幹部クラスの人物がどこかに潜伏しているのでしょう」

「ああ。あれから6年経ったが、あと数年の間に何か行動を起こすかもしれん。用心しておくことだな」

「ええ……」

「えっと……」

あまりよく理解していないエステルたちは気まずそうだった。

「おっと、すいません。先にこの事件を解決しなくてはなりませんね」

「うん。そういえば……どうしてレーヴェはここにいたの？まさか、この魔法陣みたいなのが《輝く環》ってことはないわよね？」

「いや、これは単なる光学術式だ。《根源区画》より送られた力を

“奇蹟”に変換するためのな……」
「！！！」
「《根源区画》……そこに《輝く環》があるんだね？」
「ああ……。この《中枢塔》はいわば、《環》の力を都市全域に伝えるためのアンテナ兼トランスミッターにあたる。その直接的な影響範囲はおよそ半径１０００セルジュ。端末である《ゴスペル》を中継すればリベールはおろか、大陸全土にも影響を及ぼすことができるそうだ」
「と、とんでもないわね……。それじゃあ、異変を止めるには《根源区画》にある《輝く環》をどうにかする必要があるのよね？」
「そういうことだ。だが、《環》はそう簡単にどうにかできる代物ではない。アーティファクトの一種らしいが、自律的に思考する機能を備え、異物や敵対者を容赦なく排除する。１２００年前、《環》を異次元に封印したリベール王家の始祖もさぞかし苦労させられたそうだ。そしてお前たちは、その苦労に加えて《白面》も相手にしなくてはならない」
「！！」
「……当然、そうなるだろうね。でも、レーヴェが協力してくれたら教授にだって対抗できる気がする」
「こいつめ……。俺が付いて来るのを当然のようにアテにしてるな？」
「へへ……」
「フフ……仲直りしたようで結構だ。しかし少々、打ち解けすぎではないかな？」
突然、ワイスマン教授があらわれ、杖から電撃を放ち、剣帝レーヴェを吹き飛ばした。
「ガッ……」
「あ……」
「レーヴェ……！」
ヨシュアが慌てて剣帝レーヴェにかけよった。

「フフ……ご機嫌よう。見事、試練を乗り越えてここまで辿り着いたようだが……。こういうルール違反は感心しないな」
「な、なにがルール違反よ！あたしたちは正々堂々と執行者たちと戦ったわ！そしてヨシュアは……レーヴェとの勝負に勝った！変な言いがかりを付けてるんじゃないわよ！」
「フフ、まだまだ今回の計画の主旨に気付いてないようだね。結社に属する者は皆、それぞれ何らかの形で《盟主》から力を授かっている。そのような存在が君たちに協力してしまったら正確な実験は期待できないだろう？」
「じ、実験……？」
「……まさか……。僕たちがここに来たことすら計画の一部だったというのか！？」
「フフ……幾分、私の趣味は入っているがね。少なくとも計画の主旨の半分を占めているのは間違いない」
「やはり『福音計画』は《輝く環》を手に入れるだけではなかったようですね……。手に入れるだけならこのような遠回りな事はしませんからね」
「クク……全ては《盟主》の意図によるもの。その意味では、ヨシュア。君も実験の精度を狂わす要素だ。非常に申し訳ないが……そろそろ私の人形に戻ってもらうよ」
「！！！」
ワイスマン教授が指を鳴らすと、ヨシュアの肩にあった《結社》の刺青が反応を示し、ヨシュアが苦しみ始めた。
「ぐっ……！」
「ヨシュア！？」
「……」
一瞬にしてヨシュアの姿が消えたかと思うと、ワイスマン教授の隣にヨシュアが立っていた。
「……」
「！！！」

「野郎……！」
「まさかあの刺青は……！深層意識の最下層に埋め込んだ暗示の……！」
「フフ……さすがS級遊撃士。教会関連に関しても知識があるとはね。ではこの《絶対暗示》がどういった物か見当はつくだろう」
「くっ……」
「ヨシュア……嘘だよね……。ねえ……こっちに戻って来てよ……」
「……」
しかし、ヨシュアは何の反応も示さない。
「お願いだから……そんな目をしないでよおおっ！」
「フフ、無駄なことは止めたまえ。かつて私は、壊れたヨシュアの心を修復するために《絶対暗示》による術式を組み込んだ。その時に刻んだ『聖痕（スティグマ）』がいまだ彼の深層意識に眠っていてね。その影響力は大きく、働きかければたやすく身体制御を奪い取ってしまう」
「……そんな……」
「ああ、ちなみにヨシュアの肩にある紋章は刺青ではなくてね。私が埋め込んだ『聖痕』に対するヨシュアのイメージが現出したものだ。フフ……記憶が戻ったのと同時に現れたから彼もさぞかし不安に思っただろうね」
「……。……嘘、だったんだ。ヨシュアを散々苦しめた挙句に自由にしてやるって言っておいて……。それすらも……嘘だったんだ……」
「別に嘘は言っていないさ。君と共にヨシュアがこんな所まで来さえしなければ私もここまでしなかっただろう。クク……全ては君たちが選んだ道というわけだ」
「っ……ふざけんじゃないわよ！あんたなんかにあたしたちの歩いてきた道をとやかく言われたくなんかない！ヨシュアを操ったからって今更へこんだりするもんですか！あんたなんかぶっ飛ばして絶対にヨシュアを取り戻すんだから！」
「フフ……そう来なくては。だが、私もこれから外せない大切な用

事があってね。《根源区画》で待っているから是非とも訪ねてきてくれたまえ」
ヨシュアはワイスマン教授と共に消えてしまった。
「ああっ……！」
「《根源区画》ですか……。一体どこから行けば……」
「……奥にある……大型エレベーターを使え……」
倒れていた剣帝レーヴェが苦しそうに言った。
「レーヴェ……！よかった、無事だったんだ！奥にあるエレベーターって……」
エステルの先には大きなプレートがあった。
「まさか……あの大きなプレート！？」
「《環》が眠る《根源区画》に……降りることができるはずだ……。急げ……もう時間がない……」
「わ、分かった！」
エステルたちはすぐさまエレベーターに乗ろうとしたが、２体の巨大な機械人形が現れた。
「チッ……アルセイユを撃墜した……！」
「《トロイメライ＝ドラギオン》……。ワイスマンめ……俺の機体以外にも用意していたのか……」
「この忙しい時に厄介な相手ですね……。こうなったら、私が１人で受け持ちますからエステルさんたちは先に……」
「――いや、ここは我々が引き受けよう」
後ろを振り返ると、アルセイユのメンバーに加え、カプア空賊団のメンバーも来ていた。
「ユリアさん、ミュラーさん！それにみんなも……」
「皆さん、どうしてここに……」
「ふふ、アルセイユの修理がそろそろ完成しそうなのでね！動けるものを集めた上で加勢しに来たというわけだ！」
「わしはオマケじゃが……こりゃ、凄い所にきたのう！」
ラッセル博士は目の前の機械人形に感心していた。

「フフン、言っとくけどボクたちも忘れないでよね！」
「ま、山猫号の修理もそろそろ終わる頃合いだからな」
「お前さんたちの様子をちょいと見に来たってわけさ」
「そっか……」
「とにかくここはあたしたちに任せなさい！」
「エステルさんたちは早くヨシュアさんの所に……！」
「みんな……ありがと！」
「行け……！エステル・ブライト……！……その輝きをもってヨシュアを取り戻すがいい……！」
「……うんっ！！」
「行くぞ、みんな！」
「二手に分かれて撃破する！」
「おおっ！」
エステルたちは仲間に任せてエレベーターへと急いだ。

第１６章　空の軌跡（１５）（前書き）

もうすぐ最終決戦！

第16章　空の軌跡（15）

「まさかエレベーターシャフトだったとはな……。一体どこまで降りるんだ？」
「中枢塔の高さよりも遥かに深いようですね……。浮遊都市全体の中心にあるようです」
「……」
エステルはヨシュアの事が心配で一言も話さなかった。
「エステルさん、心配する必要はありません。ヨシュアさんと共に歩いていくと決めたのでしょう？私たちも協力しますので……」
「レインさん……ありがと。そうだよね……約束、破るヤツじゃないし。それにあたしを差し置いてあんな眼鏡男の好きなようにさせてたまるもんですか……。乙女パワーで取り戻すっ！」
「ヘッ、その意気だ」
その時、上から轟音が響いてきた。
「な、なにこの音……」
「まさか……あの機械人形ですか！？」
エステルたちの頭上から《トロイメライ＝ドラギオン》が降りてきた。
「も、もう一体いたなんて……。くっ……こんな所でどうすれば……」
「ここは私に任せてくれませんか？エステルさんたちにここで体力を使わせるわけにはいきませんから……」
「えっ……でもレインさん1人じゃ……」
「私のことは心配いりません。……一瞬で決めますから」
言うが早いが、レインは1人《トロイメライ＝ドラギオン》の前に対峙すると、
「驟雨一刀流、三の型――――《氷雨》」
レインの姿が消えたかと思うと、次の瞬間、目の前の《トロイメラ

イ＝ドラギオン》が凍りついて粉々になり、氷の粒となって下に落ちていった。
「なっ……」
「さて……あとはこのまま降りるだけですね。さすがにもう一体来るなんてことは遠慮してほしいですが……」
「ちょ、ちょっと……。圧倒的じゃない、レインさん」
「てめえ、今まで手加減してきたってのか……」
「少々違いますね。今の技は体力を使いますから使わなかっただけです。いざという時のためのものですね」
「そっか……。でも、そんな技を今使ったんじゃ……」
「いえ、まだいけますよ。こんな所で休むわけにはいけませんからね」
「ヘッ、そう言ったからには途中でへばるんじゃないぞ」
エステルたちはそのまま最下層へと降りていった。

「な、何とか……終点まで辿り着けたわね。ここが……《根源区画》なのかな？」
「ええ……奥の方から凄まじい力が感じられます。どうやら間違いなさそうですね」
「つまり《輝く環》がこの先にあるってことか……」
「……。……多分、これが最後の戦いになると思う。《輝く環》を何とかして異変を食い止めるためにも……。あの《白面》からヨシュアを取り戻すためにも……。２人とも……最後の力をあたしに貸して！」
「言われるまでもねえ！」
「もとより承知です！」
エステルたちはヨシュアを取り戻し、異変に終止符を打つため、《輝く環》のもとへと向かった。

第16章　空の軌跡（16）

「ようこそ……大いなる秘蹟の源たる場所へ」
そこには金色に光り輝く幾何学的な輪があり、ワイスマン教授とともにヨシュアがいた。
「ヨシュア……！」
「……」
しかし、依然としてヨシュアは何も話さず無表情のままでいた。
「フフ、最後の試練も何とか潜り抜けたようだね。それでこそ《環》の復活に立ち会う資格があるというものだ」
「そんなものに興味はないわ！あたしが望むのは今回の異変を終わらせること！それと……あんたがヨシュアを解放することよ！」
「フフ……残念だが、それは無理だな」
「！！！」
「君たちが幾ら取り繕ってもヨシュアの心が造り物であるのは否定できない事実なのだ。この肩の『聖痕』がその証……《身喰らう蛇》の――私の所有物である証明なのだよ」
「……あんた……」
「フフ、あるいはヨシュアが自分の意志で『聖痕』を消せたら真の解放もありえたのだが……。残念ながら今回は、そこまでは至らなかったようだ。今しばらく私の研究素材として在り続けてもらうことにしよう」
「……」
「人間がここまで外道になるとは俄かに信じられませんね……」
「舐めやがって……」
「やれやれ、人聞きが悪いな。おそらくヨシュアは、肩にある『聖痕』の意味に気付いていたに違いない。そして、この事態が起こり得ると予想して悩んでいたことだろう」
「！！！」

「にもかかわらず、彼は君たちに一言も相談しなかったようだ。そして君たちもまた彼の悩みを察してやれなかった。ククク……君たちの『絆』などその程度ということではないかね？」

「……ッ……」

「……チッ……」

「……」

その言葉に3人は黙らされてしまった。

「まあ、そう悲観することはない。ここに辿り着けた時点で君たちには資格が与えられた。後は正しい選択をするだけだ」

「……資格……選択……。それって……どういうことなの？」

「フフ、君たちはどの程度知っているのかな？――この《輝く環》を巡って１２００年前に何が起きたのかを……」

「あ……」

「やっぱりそれが《輝く環》か……」

「その通り……。無限の力を生み出し、奇蹟へと変換することのできる究極のアーティファクトの１つだ！しかし、古代人は１２００年前、この大いなる至宝を封じてしまった！一体、どうしてだと思う？」

「く、詳しいことは分からないけど……。人や社会の在り方が悪い方向に変化したからだって裏の塔の記録には残されていたわ」

「ほう、あれを解析したのか。フフ……ならば話は早い。その真相を君たちに教授しよう」

ワイスマン教授はエステルたちにこれまでの歴史を話し始めた。

「――数千年前。女神は人に《七の至宝》を授けた。それらは『世界の可能性』をそれぞれ異なる方法で利用することで奇蹟を起こすアーティファクトだった。そして至宝ごとに七派に分かれた古代人たちは様々な形で『理想』を追い求めた。その一つこそが、《輝く環》を中心に建造されたこの実験都市、《リベル＝アーク》だ。汎用端末の《ゴスペル》を通じてあらゆる願いが《環》に叶えられる人の手によって築かれた空の楽園……。そこで人は、一切の争い

のない豊かな生活を享受できるはずだった。しかし人は《ゴスペル》を通じて《輝く環》がもたらす人工的な幸福に次第に魂を呑み込まれていった。物質的快楽はもちろん、《環》が構築する夢――仮想現実に精神的な充足すら見出してしまったのだ。……そして人は麻薬のように奇蹟に依存することで破滅への道を歩き始めてしまった。倫理と向上心を失い、精神的に失調してゆく市民たち……。出生率が低下する一方、自殺・異常犯罪は増加し続け、社会全体が緩慢な死に向かい始めた。しかし《環》は我関せず、求められるまま奇蹟を与えてしまう。そうして空に築かれた楽園は、虚ろで醜悪な培養槽と化していった。リベール王家の始祖たちが《環》を封印する計画を立てたのはそうした背景があってのことだ。《環》が妨害のために放った《守護者》に苦しめられながらも封印区画とデバイスタワーを建造し……そして遂に、《環》は浮遊都市ごと異次元に封印されることとなった」

「それが……１２００年前に起こった事……」

「……とんでもねぇ話だぜ」

「確かに、王家の始祖たちは良くやったと言ってもいいだろう。――しかし、考えてもみたまえ。その代償として、人は混沌の大地へと放り出され一からやり直すことになったのだ。そして今も、覇権を巡って飽くなき闘争を繰り返している……。果たしてそれは正しい選択だったのだろうか？」

「……それは……」

「そして一方で人はオーブメントという技術を手に入れ、再び豊かな生活を享受し始めている。だが、今のままでは行き着く先は２つしかあり得ない。飽くなき快楽を求め、自ら律することも叶わぬまま世界を巻き込み滅びてゆくか……。もしくは古代人のように全てをシステムの管理に委ねることで家畜のような生を続けてゆくか……。物質的な破滅か、精神的な破滅か、どちらかしかあり得ないのだよ」

「……」

「それを防ぐためには、人自身が進化するしか道はない。――いかなる誘惑、逆境にも揺らぐことのない絶対の理性！感情に囚われることなく、正しい答えを出せる究極の知性！その両者を兼ね備えた段階に人という種を導いてやること……。まさにそれこそが『福音計画』の最終目的なのだ！」

「……どうかしてるぜ……」

「そのようなことができるはずがありません。できたとしても……それは正しいものではないでしょう」

エステルたちは信じられないという目でワイスマン教授を見た。

「クク……そんな誇大妄想狂をみるような目で見ないでくれたまえ。人は想像を絶する事物に直面した時、畏れとともに変革を余儀なくされる生き物だ。その意味で《輝く環》はまさに格好の存在と言えるだろう。私はこの巨いなる至宝をもって人を正しい進化に導いて見せる……。それこそが《盟主》より授かった《使徒》としての使命なのだ！」

「はあ……。正直、余計なお世話なんですけど」

エステルはワイスマン教授の大仰な言葉にため息をついた。

「……」

「――いかなる誘惑、逆境にも揺らぐことのない絶対の理性？感情に囚われることなく、正しい答えを出せる究極の知性？そんなものにどんな価値があるっていうの？」

「……君は人の話を聞いていなかったようだね。物質的、もしくは精神的な破滅を避けるために人は進化するしか……」

ワイスマン教授が繰り返し同じことを言おうとしたが、エステルの言葉に遮られた。

「そんな話をしてるんじゃないわ。あたしが言いたいのは……そんなご大層な存在になる前に出来る事があるんじゃないかってこと」

「……」

「ヨシュアも言ってたけど……あたしたちは無力な存在じゃない。今回の異変にしたって、みんな最初は戸惑いながらも次第に協力し

て前に進もうとしていた。王国各地を巡って……あたしはそれをこの目で確かめた。別に進化しなくたって何とかやっていけると思わない？」

「……群れて生き延びるのは獣や虫ですらやっていることだ。その程度の行動をもって君は人の可能性を語るつもりかね？」

「別に同じでもいいじゃない。あたしたちだって生き物であるのは確かなんだし。それが生きているってことの強さなんじゃないかな？」

「なに……？」

「もちろん人は……それだけの存在じゃないと思う。そうした命の輝きを原動力に自分らしく生きて行こうとする……そんな存在だと思うの。でも、それはあんたの言うような万能超人である必要なんかなくて……みんなが、ちょっとした思いやりでお互い助け合うだけでいいんだと思う」

「……」

「多分……《輝く環》を封印した人たちも同じ考えだったんじゃないかな？奇蹟に頼りきっちゃうことも良くないことかもしれないけど……それ以上に、人と人がお互い助け合う余地がなくなることが何よりも良くないことだって……」

「エステル……」

「人は、人の間にあってこそ真に人として立つことができる……。まさにその通りですね」

「クク……何を言うかと思えば助け合いか……。そのような事は、歴史を振り返ってから言いたまえ。例えば幾度となく繰り返されてきた戦争という名の巨大なシステム……。その狭間において、人の絆は無力な存在でしかなかっただろう？」

「――――そんなこと、ない！」

エステルはその言葉を真っ向から否定した。

「お母さんは戦火の中、命がけであたしを守ってくれた！その事がきっかけで、あたしは遊撃士の道を志してそして今……ここに立っ

ている！この異変を止めて戦火を未然に防ぐために！それでも……人は無力だと言えるの！？」

「フン……。……ああ言えばこう言う……」

「もし、あなたが本気で人が無力だと信じてるのなら……。だから進化させる必要があるんだと思い込んでるなら……。だとしたら、あなたはとっても可哀想な人だと思う」

「！！」

「だって信じ合って、助け合うことの喜びを知らないんだもの。あたしたちが……人が足掻いているのを見ることにしか喜びを見出せないなんて……。そんなの……寂しすぎるよ」

エステルはワイスマン教授を哀れみの目で見た。

「……」

「でも、あたしは遊撃士だから……。あなたが、自分の事情にみんなを巻き込むことは見過ごせない。悪いけど……力づくでも止めさせてもらうわよ」

エステルたちは武器を構えた。

「……。クク……無知な小娘が大層な口を利く……。ならば、その身をもって己の言葉を証明したまえ」

ワイスマン教授が指を鳴らすとレインとアガットの動きが止まった。

「か、身体の自由が……！？」

「まさか、これは聖典にあった《魔眼》……！」

「なっ……！」

「フフ、君たちはそこで大人しく見ていたまえ。さぞかし面白い見物になるだろう」

「あ、あんですって～……」

「……ヨシュア。少し遊んであげたまえ」

ワイスマン教授がヨシュアにつぶやくとヨシュアが武器を構えた。

「……」

「ヨ、ヨシュア……」

「ククク、エステル君。是非とも私に見せてくれたまえ。絶望の中、

人という存在がそんな強さを見せてくれるのかをね」
「くっ……！」
するとヨシュアがエステルに飛び掛かり、一太刀でエステルを切り伏せた。
「……」
「……くっ……ヨシュア……」
「ほう……なかなか見事な技だ。どうやら《剣聖》の所に預けた甲斐があったみたいだね。これでまた、私の作品の完成度が上がったというわけだ」
どこまでも卑劣な言葉を浴びせるワイスマン教授。
「あ、あんた……！」
「さて……真の余興はここからだ。ヨシュア、彼女を無力化したまえ」
「！！」
ワイスマン教授の言葉でヨシュアはエステルの上に乗りかかった。
「あうっ……」
「エステルさん……！」
「エステル！」
レインとアガットは成す術もなく見る事しかできない。
「フフ、どうやら君では人の強さを証明できないようだね。だが、私も学者の端くれとして実証の必要性は理解しているつもりだ。だから君の代わりに……ヨシュアに証明してもらうとしよう」
「……え……」
「なに、簡単な実験だ。……このままヨシュアに君の息の根を止めてもらう。しかる後、暗示を解いて元に戻してあげるというだけさ」
「！！！」
「フフ……果たしてヨシュアはどんな表情を浮かべるのだろう？ゾクゾクするとは思わないかね？」
ここまでいくと悪趣味の域を超えて存在を否定したくなるような言葉だった。

「ふ、ふざけんじゃないわよっ！そんなことになったらヨシュアは……ヨシュアは……」

「はは、今度こそ完全に心が砕け散ってしまうかもしれないね。だがそうなったら、また私が新たな心を造ってやれば済むことだ。そしてもう一度、同じように人に戻るチャンスを与えるとしよう。フフ……今から楽しみだよ」

「やめて……そんなの……酷すぎるよ……」

「ワイスマン……それ以上ふざけた真似をすると……貴方を殺します……」

レインは殺気立たせ動こうとするがしかし動けなかった。

「ククク……動かぬ身では何を言っても無駄だ。それではヨシュア……止めを刺してあげたまえ」

「……」

ヨシュアは剣をエステルの喉の上に持ち上げた。

「……ヨシュ……ア……。ごめんね……絶対に死なないって言ったのに……。ごめんね……一緒に歩くって約束したのに……」

「ヨシュアあっ！とっとと目を覚ましやがれえっ！」

「でも……あたしは……信じているよ……。ヨシュアは絶対に……負けないって……。あたしが居なくなっても……現実から逃げたりしないって……」

「……ごめん。ちょっと自信はないかな」

そこで今まで何も話さなかったヨシュアから言葉が漏れた。

ヨシュアがエステルから離れるとワイスマン教授に攻撃を仕掛けた。

「な……！？」

ワイスマン教授は驚愕して飛びのいた。

「おお……」

「《魔眼》が……解けましたか」

「……ヨシュ……ア……？」

「……ごめん、エステル。ずいぶん辛い思いをさせてしまったみたいだね」

「ば、馬鹿な……。あの状態から意志を取り戻せるはずが……」
ワイスマン教授はそこでヨシュアの肩にあった暗示の紋章にないことに気付いた。
「待て……！お前……肩の『聖痕』はどうしたのだ！？」
「……。もう僕の深層意識に貴方が刻んだ『聖痕』はない。たった今、砕け散ったからね」
「な、なにッ！？」
「『聖痕』のある一点に、暗示の楔を打ち込んでもらったんだ。そして、そこに負荷がかかった時、『聖痕』が崩壊するような自己暗示を僕はずっと繰り返してきた」
「！！！」
「あ、暗示の楔……」
「――このままだと君との約束が果たせなくなりそうだったからね。都市に不時着した直後にケビンさんにお願いしたんだ」
「ケ、ケビンさんが！？」
「なるほど……あの時の疲れがその結果だったのですね」
「あ、あはは……。そうだったんだ……」
「ケビン・グラハム……。騎士団の新米と侮っていたが小癪な真似をしてくれる……」
「そうなるとあの助言者がきっかけだったようですね」
「な、なに……」
その言葉にワイスマン教授はすぐに思い立った。
「まさか……カシウス・ブライトの入れ知恵か！」
「あ……」
エステルはアルセイユに乗り込む前にカシウスがヨシュアに渡していた手紙を思い出した。
「そっか……あの時の……」
「うん……手紙にはこうあったんだ。『お前の呪縛を解く鍵はケビン神父が持っているだろう。だが、その鍵をどうやって使いこなすかはお前自身の問題だ。ワイスマンとやらの行動を見抜いて自由を

勝ち取ってみせろ』ってね」
「へへ……あのオッサンらしいぜ」
「まったくもう……ほんと父さんらしいわ」
「……」
ワイスマン教授は歯を噛みしめた。
「正直……かなり悩んだよ。再び僕を操った貴方が一体、何をやらせるだろうと。そして僕は……その一点に全てを賭けてみた。貴方が、僕が最も恐れることを僕自身の手で行わせる可能性にね」
ヨシュア自身の手でエステルを殺させるという予想通りだったのだ。
「そして貴方はその通りに命じ、結果的に『聖痕』は砕け散った。もう僕は……完全にあなたから自由だ」
「ヨシュア……」
「……愚かな……。このまま私に従っていれば遥かな高みに登れたものを……。新たなる段階へと進化させてやったものを……」
「エステルと同じく……僕もそんなものに興味はない。それに道というのは……他人から与えられるものじゃない。暗闇の中を足掻きながら自分自身の手で見出していくものだ」
「はは……それが出来れば世話はない！人の歴史は、闇の歴史！大いなる光で導いてやらねばいつまで経っても迷ったままだ！」
「違う――――！人は暗闇の中でもお互いが放つ光を頼りにして共に歩んでいくことができる！それが……今ここにいる僕たちの力だ！」
そういうヨシュアに迷いはなかった。
「ヨシュア……」
「……クク……出来損ないの執行者風情がずいぶん大きな口を叩くものだ。ならば見せてみるがいい……。闇の中でも輝くというお前たちの光とやらをな……」
ワイスマン教授は杖を振るうと、高機動兵器、《戦術殻》を出現させた。
「《盟主》の忠実なる僕――――《蛇の使徒》が一柱、《白面》の力、見せてやろう！」

「……望むところよ！」
「全力で行かせてもらうよ！」

第16章　空の軌跡（17）

「ほう、これは驚いたぞ。まさか貴様らごときがここまで食い下がるとは……」
エステルたちに敗れたワイスマン教授。
「はあはあ……。教授ってば、どんどん口調がぞんざいになってるんじゃない？」
「ヘッ……余裕がないんじゃねえのか？」
「ククク……哀れなことだ。自分たちが既に死地にいるとも気付かずに……」
ワイスマン教授は敗れたのにも関わらず、笑みをこぼす。
「え……」
ずると、ワイスマン教授は《輝く環》の真下に移動した。
「あ……！」
「……どうするつもりだ！？」
「このまま《盟主》に献上するつもりだったが気が変わった……。貴様らが歯向かった相手がどのような存在かを思い知るがいい」
そのままワイスマン教授が《輝く環》の中心に入り込んだ。
すると、《輝く環》から波動が流れ始めた。
「な、なんなの……」
「こ、これは……」
「まさか、《輝く環》と融合する気ですか！？」
エステルたちは何もできないまま、しばらくするとワイスマン教授は《輝く環》と融合し、異形の姿、《アンヘル＝ワイスマン》へと変わり果てた。
「あ……」
「こ、こいつは……！？」
「こ、この霊圧は……！」
「ククク……この感覚……思った以上に悪くない……。さて……ま

ずは試させてもらおうか……。人を新たなる段階へと導く《天使》の巨いなる力をね……！」

エステルたちは《輝く環》と融合したワイスマン教授、《アンヘル＝ワイスマン》に立ち向かったがこちらの攻撃を一切受け付けなかった。

「フフ……やっと思い知ったようだね。これが真の力というものだ」

「そ、そんな……。何でこっちの攻撃がぜんぜん当たらないのよ……」

「何らかの障壁を展開し続けているんだ……。でも……ここまで通用しないなんて……」

「クク、七至宝の中でも《輝く環》は空間を司る存在……。導力魔法とは比べ物にならない圧倒的な『絶対障壁』を展開できる。もはや私と君たちとでは存在の次元が違いすぎるのだよ」

《アンヘル＝ワイスマン》は《魔眼》でエステルたちの動きを封じ込めた。

「うぐっ……」

「こ、この状況で魔眼ですか……」

「チッ……サド野郎が……！」

「ワイスマン……貴方は……」

「クク……その目……やはりお前は殺すには惜しい……。じっくり調整しながら再び『聖痕』を埋め込んでやる……。そしてまた希望を与えてからその芽を摘み取ってやろう……。希望が絶望に変わる表情……今から楽しみだよ……ククク……」

「やれやれ……。もはや悪趣味と言うより病気と言った方が良さそうだな」

エステルたちの頭上から突然聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「！？」

現れたのはドラギオンに乗った剣帝レーヴェだった。

「あ……！」

「レーヴェ！？」

剣帝レーヴェはドラギオンを操り、《アンヘル＝ワイスマン》の『絶対障壁』に攻撃を加え始めた。
「フン……止めを刺しておくべきだったか。しかしレーヴェ。君が来たところで何ができる？いかにドラギオンといえど《環》の障壁を破ることは不可能だ」
「……だろうな。ところでワイスマン。一つ聞いておきたいことがある。『ハーメルの悲劇』……貴様はどの程度、関与していた？」
「！？」
剣帝レーヴェの口から『ハーメルの悲劇』という言葉が出てきてヨシュアは驚いた。
「おお、人聞きの悪いことを言わないでくれたまえ。あれはあくまで帝国内の主戦派が企てた事件だろう？どうして私が関与するのかね？」
「それは貴様が“蛇”だからだ。弱味を持つ人の前に現れて破滅をもたらす計画を囁く……。そして手を汚すことなく、自らの目的を達成してしまう……。……それが貴様のやり口だろう」
「あ……」
「実際、主戦派の首謀者たちは当時あったという政争に敗れて後がない者たちばかりだったと聞く。もし、１０年前の戦争すら今回の計画の仕込みだったのなら……全てのことに説明がつくと思ってな」
剣帝レーヴェの考えは、《百日戦役》を引き起こすことによって、リベール王国の軍事力の弱さをリシャール大佐に考えさせ、《輝く環》の第一結界を解くことへと繋げたということだ。
「ククク……なるほどな。まあ、おおむね君の指摘通りと言えるだろう」
「！！」
「もっとも私がやった事は、彼らに猟兵くずれを紹介してハーメルの名を囁いただけさ。それだけで事態は動きだし、瞬く間に戦争へと発展してしまった。ククク……人間の業を感じさせる実験結果だったよ」

ワイスマン教授は戦争で亡くなった人たちを全く顧みなかった。
「……貴様……。……貴様のせいで……ミーシャは……俺の妹は……」
「あまりのことに言葉も出ませんね……」
「……吐き気がしてきたわ」
「なるほど……。大方、予想通りということか」
「……おや、意外と冷静だね。私としてはもう少し、憤って欲しいところではあるが」
「フフ、俺の心はとうに冷め切っているからな……。しかし先ほどの、貴様に背後から昏倒させられた失態、《剣帝》としては屈辱の極みだ。その借りだけは返させてもらうぞ」
「なに……」
剣帝レーヴェは自らの剣を《輝く環》の『絶対障壁』に叩き付けた。
「くっ……」
すると、何物をも寄せ付けない『絶対障壁』にひびが入った。
「ば、馬鹿な……。《環》の絶対障壁が……。！！！そうか……その剣は！」
「そう……。俺が《盟主》より授かった剣……。貴様の杖と同じく、『外』の理で造られた魔剣だ……」
「クッ……迂闊であったわ……。……ええい……離れろ……離れろ……この痴れ者がッ！」
ワイスマン教授は剣帝レーヴェに容赦なく連続で攻撃を浴びせた。
「グウッ……。フフ……もう遅い……」
しかし、剣帝レーヴェは退くことなく剣を叩き付け……自らが吹き飛ばされるのと同時に『絶対障壁』を壊すことに成功した。
「ああっ……！」
「レ、レーヴェっ！？」
「俺に構うな……！道は拓いた……！……あとはお前たちが切り拓け……！」
「くっ……」

「……やってくれたな……。まあいい……絶対障壁など《環》の力のほんの一端だ……。……全ての力を解放して貴様らに絶望を味わわせてやる……」
「それはこっちの台詞だッ……！」
「遊撃士として！リベールの市民として！そして何よりも人として！」
「ワイスマン……僕たちは貴方を倒す！」
「貴方の全てを今ここで！壊させて頂きます！」
エステルたちは全てを終わらせるために《アンヘル＝ワイスマン》へと立ち向かった。

第16章　空の軌跡（18）

死闘の末《アンヘル＝ワイスマン》を倒したエステルたち。
「ここまで粘るとは……。だが所詮……無駄な足掻きというものだ。無限の力を秘めた《環》の前では――」
だがそこで《アンヘル＝ワイスマン》の身に異変が起こった。
「な、なんだ……？《環》が……私の中の《環》が……！」
その時、地下から蛇のような生命体が登ってきて《アンヘル＝ワイスマン》と一体化した。
「ぐっ……おおおおおっ……！」
それにより、《輝く環》と融合した《アンヘル＝ワイスマン》の姿はさらに変化し、凄まじい力が迸った。
「な、なんて圧迫感なの……！」
「このままでは……」
「ここから先は私が1人で相手します。皆さんは早く剣帝レーヴェの元へ！」
「そんな……無茶よ！あれだけの戦闘をした後に、しかも1人でなんて！」
「そうです、レインさん！ここは僕たちも……」
「ならば、エステルさんたちは剣帝レーヴェを見捨てるというのですか？」
「それは……」
「私のことは気にしないで剣帝レーヴェの元へ行ってください。私は必ず無事で戻ると約束しましょう」
「……。分かったわ。でも必ず約束は守ってね！」
「どうかご無事で……！」
「ヘッ、何だかんだでてめぇは必ず1人で無茶しやがるな。だが、こんなやつに負けるんじゃねえぞ！」

「はい、必ず」
エステルたちは急いで剣帝レーヴェの元へと向かっていった。
「ククク……。何をするかと思えば、1人で私に挑む気か。しかし、もはやレーヴェは助かるまい」
「ええ、あれだけの重傷を負ったのですからおそらく助かりはしないでしょう。しかし、それでも最期くらいは見届けさせてあげるべきでしょう」
「S級遊撃士、《水の剣神》レイン・アクアライトか。いかなお前の力をもってしても今の私には敵うまい。すぐにレーヴェと同じところに送ってくれる」
「それはご遠慮願いたいですね。私にはまだまだやるべきことがあるのですから。あなたの方こそ、今この場所で葬り去ってくれます」
「ハハ、貴様の剣ごときでこの《輝く環》と融合した私を倒せるものか」
「果たしてそうでしょうか？」
レインは腰に差したもう1本の剣を引き抜いた。
「黒耀石で造られた《時の魔剣》……。これをもって貴方を倒します」
「ほう……？まさか貴様がアーティファクトを持っているとはな。しかし、それは使用者の移動速度を速めるかわりに身体を傷付けてゆく物。面白い、自らの剣で果てるがよいわ！」
「いいえ、私はここで死ぬつもりはありません！ワイスマン、死ぬのは貴方です！」
ワイスマン教授は胸元から光を放ち、レインとともに異空間へと移動した。
今、《アンヘル＝ワイスマン》とレインの決闘の幕が開けた。
「行きますよ、《光連斬》！」

レインは刹那の内に姿を消し、神速のごとき太刀筋で《アンヘル＝ワイスマン》を斬った。
「ほう……なかなかやる。しかし、その程度では先に貴様が死ぬぞ？」
「くっ……」
確かに攻撃は効いているが、レインの身体からは血が流れ出ていた。
「ならば、仕方ありません。私のほぼ全ての体力をもって、一撃で倒させてもらいます」
「ハハ、できるものならやってみるがいい。倒せなかった時が貴様の最期だ」
「剣技、夢幻泡影（むげんほうよう）！」
レインは《アンヘル＝ワイスマン》の周囲を分身で取り囲み、全身を斬った。
すると、《アンヘル＝ワイスマン》の斬られた所が凍りつき、崩れ落ちっていった。
「なっ、なんだと……！？」
「これで終わりです！」
最後に、《アンヘル＝ワイスマン》の胸元を斬ると、光の塊が出現し、強く光り輝いた。
光が消えると、元の空間に戻ったが、その時にはワイスマン教授の姿が元通りになり、《輝く環》は消えていた。
「そ……そんな……。《輝く環》が……き、消えてしまっただと……。馬鹿な……そんな馬鹿なあああああっ……！！」
ワイスマン教授は杖を振りかざすと姿を消した。
「逃げましたか……。しかし、彼はもうお終いですね……。それよりも……」
レインは血だらけになった身体を押してエステルたちの元へと向かった。

「レーヴェ……しっかりして！今……手当てをするから……」
「……その必要はない……。お前なら……判るはずだ……。助かる傷ではないことを……」
「イヤだ……そんなのイヤだ！レーヴェまで……姉さんみたいに……！そんなの……そんなの酷すぎるよ……！」
「フフ……そんな顔をするな……。……幼い頃のような……泣き虫に戻ったみたいだぞ……」
「そうだよ！僕は弱くて……甘ったれで……。まだまだ……レーヴェが必要なんだ……。だから……お願いだから……」
「……やれやれ……。なあ……ヨシュア……。……納得できないのなら……お前は俺たちのようになるな……。大切なものを……守るために死ぬのではなく……。……守るために……生きろ……」
「！！！」
「エステル・ブライト……。……頼みがある……」
「うん……なに……？」
「こいつは強いようで……芯が脆いところがある……。全ての呪縛が解けた今……本当の意味で……強くなる必要があるだろう……。……だから頼む……。これからもこいつを……俺たちの弟を……支えてやってくれ……」
「えへへ……言われなくてもそうするつもりだったけど……。でも……今ここでちゃんと約束する。だから……どうか安心して」
「……すまない……。そして……レイン・アクアライト……」
「えっ……！」
エステルたちが振り返ると、レインが血を流しながらそこに立っていた。
「エステルさん……約束通り、戻ってきましたよ……」
「ちょっ、ちょっと……！どうしてそんなに傷ついてるのよ！」
「ふふ、かなり激しい戦いでしたからね……。まだ生きていますから……大丈夫ですよ……」

「そ、それじゃあ、早く手当を……」
「それは後回しで構いません。……それよりも……剣帝レーヴェ……」
「ああ……。お前はこれからも……真実を追い続けるのだろう……。それならば必ず……見つけてみせろ……。真実を……明るみにしてみせろ……」
「ええ、必ず……」
「……ふふ……。しかしやっと……分かったぞ……。……あの時……カリンが……なぜ……微笑むように逝ったのか……。こんなにも……満たされた……気持ち……だったん……だな……」
そのまま剣帝レーヴェの頭が崩れ落ち――静かに逝った。
「……」
「レ……レーヴェ……？」
ヨシュアは剣帝レーヴェを抱きかかえ呼びかけたが反応はない。
「……」
「じょ、冗談はやめてよ……。ちゃんと……聞こえるんだよね……？」
「……」
「だってそうだろう……！？やっとまた会えたのに……！……やっとまた……笑顔で話せるようになったのに！」
「……」
「頼むから……頼むから返事してよおおおっ！」
「ヨシュア……」
「勝ち逃げ……されちまったか……」
「惜しいことです……」
「おーい！！」
エステルたちがうなだれているとユリア大尉たちがやってきた。
「あ……」
「よかった……無事だったか」
そこでユリア大尉が亡くなった剣帝レーヴェを見た。

「……ひょっとして彼は……」
「……うん……」
「そうか……」
ユリア大尉はそれ以上何も聞かなかった。
「……君たちが降りた後、新手の機械獣が何匹も現れてな……。絶体絶命に陥った時、彼がそこの機会竜を呼んで戦況を覆してくれたんだ」
ミュラーは剣帝レーヴェがここに来る前に助太刀してくれたことを説明した。
「そうだったんだ……」
「……ワイスマンと《輝く環》はどうしたんじゃ？」
ラッセル博士があるべきはずの《輝く環》がないことに気づき、尋ねた。
「……ワイスマンはどこかに逃げてしまいました。さらに《輝く環》は消失してしまったようです……」
「なに……消えたじゃと？ううむ……それはマズイかもしれんな……」
「え……」
その時、急に建物が揺れ始めた。
「こ、この揺れって……」
「……《輝く環》は、浮遊都市を維持してきたエネルギー源でもある。それが無くなってしまったら……じきにこの都市は崩壊するじゃろう」
ラッセル博士の言葉にエステルたちに焦りの表情が浮かんだ。
「そ、それでは……！」
「急いで《アルセイユ》に戻った方がよさそうですな……」
「うむ……。すぐに導力が尽きることはないが急いだ方がいいじゃろう。おまえさんたちの船はどうじゃ？」
すぐそばにいたカプア三兄弟に船の修理が終わっているか尋ねた。
「ああ、今ごろ完全に修理が終わっているはずだ」

「戻ったらすぐに飛べるだろうぜ」
「よし……それでは皆、これより撤退を開始する！」
「エレベーター近くに転位用のゲートがあった。順次、それを使って《中枢塔》より脱出するぞ！」
「それとレイン君。君はその様子では歩けまい。誰かに運ばせようか？」
「すみません……。正直……助かります……」
そう言うとレインはその場に倒れ落ちた。
「わわっ……レインさん！？」
「大丈夫だ。気力と体力を完全に使い果たし、気絶したようだ。これだけの重傷を負って生きているとは凄まじい身体だな……。ここは俺が運ぼう」
ジンはレインを抱え上げ、アルセイユのメンバーたちは急いで脱出口に向かった。
しかし、ヨシュアは剣帝レーヴェから離れずうつむいたままだった。
「……」
「ヨシュア……その……。つらいとは思うけど……早く行かなくちゃ……」
「ごめん……エステル……。頼むから先に行って……。僕のことは……気にしないでいいから……」
「……」
そう言うヨシュアにエステルが近づき、立たせると平手打ちを食らわせた。
「あ……」
「ヨシュア……しっかりして！レーヴェが言ったこと、ぜんぜん判ってないじゃない！守るために生きろって……そう言われたんじゃないの！？」
「！！」
「あたしは忘れない！」
「ヨシュアを支えるってこの人と約束したことを！絶対に、忘れな

いんだから！！」
「エステル……。……ごめん……本当に僕は……弱虫だな」
ヨシュアは剣帝レーヴェの使っていた剣を拾った。
「あ……」
「レーヴェ……これ……預かっておくよ。ハーメルに……姉さんにちゃんと届けるからさ」
「……ヨシュア……」
そこで、アガットとユリア大尉がエステルたちを探しにやってきた。
「エステル！ヨシュア！」
「時間がない！とにかく急いでくれ！」
「う、うん……！」
「すみません……今行きます」
ヨシュアは最後に剣帝レーヴェに別れを告げた。
「（……。さよなら……レーヴェ）」

第16章　空の軌跡（19）

―中枢塔

そこではワイスマン教授が傷を押さえながら独り言を言っていた。

「……馬鹿な……そんな馬鹿な……。こんな事態……《盟主》の予言には無かった……。……ま……待てよ……。た、試されたのは……私も同じだったということか……。くっ……戻ったら問い質さなくては……」

「悪いけど、それは無理やね」

前からやってきたのはケビン神父だった。

「ケビン・グラハム……。いつの間にこんな所に……。どけ……貴様のような雑魚に関わっている場合ではない……」

ワイスマン教授が杖を振りかざし、ケビン神父に《魔眼》を使ったが、ケビン神父は星杯の紋章を掲げると《魔眼》を無効化した。

「……貴様……《魔眼》が効かないのか！？いくら星杯騎士とはいえ新米ごときに防げるわけが……」

「あー、スマン。ちょいと三味線弾いてたわ。オレは騎士団の第五位。それなりに修羅場は潜っとる。ま、それでも本調子のあんたに勝つのは難しかったけど……。今なら付け入る隙があるからな」

「なに……」

ケビン神父はワイスマン教授に向かってボウガンを放った。

「くっ……」

ワイスマン教授は避ける暇なくその矢をまともに食らった。

「……オレの本当の任務は《輝く環》の調査やない。最悪の破戒僧、ゲオルグ・ワイスマン――あんたの始末というわけや」

「クク……なるほどな……。だが、この程度の攻撃でこの《白面》を滅するなど……」

その時、ワイスマン教授の身体に異変が起こり始めた。

「な……なんだ……」

瞬く間にワイスマン教授の身体が白く固まり始めた。
「し、『塩の杭』……。かつてノーザンブリア北部を塩の海に変えた禁断の呪具……。私一人を始末するためにこんなものまで持ち出したのか！」
「あんたは少々やりすぎた。いくら教会が中立でも、もはや見過ごすわけにはいかん。大人しく滅びとき」
ケビン神父は塩へと変わっていくワイスマン教授に冷たく言い放った。
「おのれっ……狗があああっ！」
最期の叫びをあげワイスマン教授は完全に塩の塊と成り果てた。
「狗か……。ま、その通りなんやけどね。……。ヨシュア君、君は運がいいで。オレなんかと違ってまだまだやり直せるんやから」
「ウフフ……それってジェラシー？」
突然現れたのは道化師カンパネルラだった。
「《守護騎士（ドミニオン）》第五位――《外法狩り》ケビン・グラハム。うふふ……噂に違わぬ冷酷ぶりじゃない」
「君は……たしか《道化師》やったな。悪いけど……彼の方は手遅れやで」
「フフ……聞いてるかもしれないけど僕の役目は『見届け役』なんだ。計画の全プロセスを把握し、一片の例外もなく《盟主》に報告する。教授の自滅も単なる結果であって防ぐべき事態じゃないんだ」
「なるほどな……。《身喰らう蛇》――まだまだ謎が多そうや」
「フフ、君たち騎士団だってそれは同じだと思うけどねぇ。さてと……これで僕の役目も終了だ。落し物も回収できたし、そろそろ帰るとしようかな」
「なに……！？」
道化師カンパネルラは指を鳴らすと塩となったワイスマン教授が崩れ去った。
「あはは！それではどうもご機嫌よう！また次の機会に会えること

を祈っているよ！」
そして、道化師カンパネルラはワイスマン教授の杖とともに消え去っていった。
「落し物って……まさか……。……。まあいい……これ以上はオレの権限外や。急いでエステルちゃんたちと合流せんとな……」
ケビン神父は最後にワイスマン教授を一瞥すると、エステルたちと合流するため急いで引き返していった。

第16章　空の軌跡（20）

……こうしてエステルたちは断続的に発生する揺れの中、《中枢塔》から脱出した。
急激な導力低下のためか《レールハイロゥ》は完全に使用不可能となっており……
エステルたちは地下道を通って公園区画に停泊するアルセイユを目指すことにした。

エステルたちは急いで地下道を走っていたが、ヨシュアが突然崩れ落ちた。
「ぐっ……」
「ヨシュア!?だ、大丈夫!?どこかケガしていたの!?」
「いや……何でもないよ。ちょっと……目眩(めまい)がしただけだから……」
「目眩って……ど、どうしていきなり……」
「……たぶん《聖痕》が消滅した後遺症やろね」
「え……」
突然、ケビン神父がエステルたちの所に駆け寄ってきた。
「何しろ、意識の根っこに巣食ってた部分や。それを取り除いたら、何らかの形で揺れ戻しが起こる。目眩、頭痛、吐き気……しばらくの間は悩まされるやろ」
「そ、そんな……」
「いいんだ、エステル……。全部覚悟した上で……ケビンさんにお願いしたんだから……」
「……ヨシュア……」
「おーい!何をやっとるんじゃ!急がんと置いていくぞ!」
奥からラッセル博士のはやし立てる声が聞こえてきた。

「あ……うん！もう走れる、ヨシュア？」
「ああ、問題ないよ」
「よーし、そんなら急ぐで！」
エステルたちは再び走り始めた。
しかし、走っている途中、ヨシュアが何かの気配に気づき、
「エステル！」
後ろを追いかけてきていたエステルを抱え後ろへと飛びのいた。
その後すぐ、エステルたちの前の通路が落石により破壊され、ケビン神父たちと分断されてしまった。
「……あ……」
「さっきの揺れで脆かった部分が崩れたんだ……」
「だ、大丈夫か！？」
先を走っていたケビン神父が心配そうに言った。
「う、うん……何とか！」
「エステルさん……！？」
「……ヨシュア……！？」
先を走っていたメンバーも騒ぎを聞いて引き返してきた。
「お姉ちゃん！お兄ちゃん！」
「チッ、何てこった……。他に通り道はねえのかよ！」
「《中枢塔》に向かう通路はここだけだったはずよ……。……くっ……何か方法は……」
「え、えっと……。あたしたちに構わずにみんな先に脱出してよ」
「僕たちは何とかして脱出の方法を見つけますから」
「馬鹿言うんじゃないわよ！」
シェラザードが突然、声を荒げた。
「ここであんた達を置いていったら先生にどう顔向けすればいいの！いいから何か方法を考えるわよ！」
「シェラ姉……」
「すみません……」
「実際問題、ジャンプして飛び越せる距離じゃない……。となると

……別のルートを探すしかなさそうだ」
「それならあります……」
レインがジンの肩の上で目を覚ました。
「この地下道は他の地下道と繋がっています。《中枢塔》の前に一つ……開いていなかった地下道がありました。確かあの地下道は《カルマーレ》に通じる非常用避難通路だったはずです……。おそらくこの揺れの影響でそのロックが外れたと思います……。そこに辿り着ければ……」
「なるほど……！」
「エステルちゃん、ヨシュア君！もう他に選択肢はなさそうや！そっちの方から《アルセイユ》に戻るんや！」
「うん……！」
「分かりました……！」
「き、気を付けてね！お姉ちゃん、お兄ちゃん！」
「待っています……《アルセイユ》で！」
「うん！みんなも気を付けて！」
先に行っていたメンバーも先へと急いだ。
「さあ……僕たちも急ごう。どうやら崩壊まであまり時間はなさそうだ」
「うん……了解！《中枢塔》前にある緊急用の避難通路よね！」

地下道を抜け、何とか外へと脱出できたエステルとヨシュア。
そのまま《カルマーレ》をめざし、外郭を走っていたが――
「きゃあっ……！」
「……くっ……！」
一際強い揺れが起こり、目の前の通路がひびが入り、崩れ始めた。
「……あっ……！」
「しまった……！」

エステルとヨシュアは慌てて進もうとしたが目の前で通路は完全に崩壊した。
「ああっ……」
「戻ろう、エステル！」
2人はすぐさま戻ろうとしたが、揺れで脆くなっていた通路は戻ろうとした矢先に崩壊した。
結果、2人は1本の梁の上にある柱に取り残された。
「……。戻れなく……なっちゃったね」
「うん……。多分、下の細い梁じゃここは支えきれないだろう」
「そっか……」
「ごめん、エステル……。僕があの時、足をもつれさせなければ……」
「そういう事は言いっこなし。あたしだって岩の下敷きになるところをヨシュアに助けてもらったしね」
「でも……」
「えへへ……何でかな。こんな状況なのにちっとも怖くないのよね。ヨシュアはどう？」
「あ……。うん……そうだね。僕もぜんぜん、怖くないかな」
そして、下の梁に亀裂が入り始めた。
「ね……ヨシュア。2つ、お願いしてもいい？」
「いいよ」
「1つ目は……あたしのこと、抱き締めててくれる？」
「喜んで」
ヨシュアはエステルを抱き締めた。
「えへへ……」
「……それから？」
「えっと、その……。しつこいって思われたらちょっとイヤなんだけど……。やっぱりその……悔いは残したくないっていうか……」
エステルは恥ずかしそうで言葉が続かなかった。
「……ごめん。その先は僕に言わせて」

代わりにヨシュアがエステルの言いたいことを察した。
「エステル……キスしてもいいかな？」
「あ……。……うん……！」
2人が向き合いキスをすると、そのまま梁の限界がきて、2人は――落下していった。

その直後、中枢塔に亀裂が入り、そこを中心として浮遊都市、《リベル＝アーク》が大きく崩れ始めた。
一度崩れ始めるとそこからはものすごい速さで崩れていった。
瓦礫が落下していく中、アルセイユと山猫号はこれ以上待つことは不可能と判断し、エステルたちを取り残したまま浮遊都市を周回しつつ離れていった。

―山猫号
「お願い、キール兄！このままじゃヨシュアたちが……！」
「駄目だ、ジョゼット……。……あの様子じゃ、もう……」
「そんな……」
「……クソッ……最後の最後でなんで……。こんな時に……女神は一体何やってやがる！」

―アルセイユ
「そ、そんな……」
「ま、間に合わへんかったか……」
「う、嘘だろ……」

「や、やだ……。そんなのやだあああっ！」
「ユリアさん！どうかお願いします！避難通路の方向から考えてエステルさんたちは北西の端にいるはずです！どうかアルセイユをそこへ！」
クローゼは必死にユリア大尉に懇願した。
「……申し訳ありません……。いくら殿下の命令でもそれは……従いかねます」
「……アルセイユの推力も完全には戻っていない状態だ。今、再び都市に近付けば間違いなく崩壊に巻き込まれる。そうですな、ラッセル博士？」
「……その通りじゃ」
「……そ、そんな……」
「はは……参ったな……。場を和まそうと思っても頭が真っ白だよ……」
「……ああ、俺もだ」
「くっ……私がおめおめと生き残るとは……」
「あいつら……うう……。これからだってのに……こんな事になっちまって……」
「エステルちゃん……。……ヨシュア君……。あれ～……？」
皆が悲しみに暮れる中、ドロシーが声を上げた。
「おい……ドロシー……。こんな時くらい……大人しくしてろっての……」
「いえ、その～……。なんだかジーク君が嬉しそうに飛んでいったなあって」
「へ……」
「あ……」
その時、ユリア大尉が何かを発見したようだった。

ジークが飛んでいった先には――古代竜レグナートに乗っていたエステルたちがいた。
加えて、カシウスも乗っていた。
「ちょ、ちょっとレグナート！どうしてあなたがこんな所に……。それにどうして父さんまでここにいるのよっ！」
「なに、王国全土の導力がようやく回復してくれたんでな。モルガン将軍に後事を任せてこうして彼に乗せてもらったんだ」
「の、乗せてもらったって……」
「さすがに驚いたよ……。……初めまして、レグナート。あなたの事はエステルから聞いています。危ないところを助けて頂いて本当にありがとうございました」
「フフ、礼には及ばぬ。新たな風が吹いたのでな……そのついでに翼を運んだだけだ」
「えへへ……でも、本当に助かったわ。あれ、そういえば……確かあなたって、人を見守るだけの存在なのよね？あたしたちを助けてよかったの？」
「それは《輝く環》を前におぬしらが答えを出すまでのことだ。そして答えが出された今、古の盟約は解かれ、禁忌も消えた。ゆえに《剣聖》の頼みに応じ、こうして迎えに来たというわけだ」
「古の盟約……」
「訳、分からないんですけど……」
「安心しろ、俺にも分からん。何しろこの堅物ときたら肝心な事はロクに喋ってくれないのだからな」
「フフ、許せ。竜には竜のしがらみがある。ただ一つ言えることは運命の歯車は、今まさに回り始めたばかりということだ。そして、一度回り始めた歯車は最後まで止まることはない……。心しておくことだな」
「そうか……」
「ちょ、ちょっと待って……！」
「また同じようなことがリベールで起こるというの？」

「いや、その運命は別の場所で、別の者たちが引き受けることになるだろう。――とにかく今回はお前たちも本当によくやった。今はただ何も考えず、ゆっくり休むといいだろう。かけがえのない仲間と共にな」

「あ……」

そして、エステルたちは甲板に出た仲間と再会することとなった。

ここに今、エステルたちはベールの異変を完全に終結させることに成功したのだった。

第１６章　空の軌跡（２１）（前書き）

今回の話で空の軌跡ＳＣ編が完結します。

第16章　空の軌跡（21）

―ハーメル村

エステルとヨシュアはハーメル村のカリンの墓碑を訪ねていた。

「……姉さん、ただいま。これ……レーヴェから預かってきたよ」

ヨシュアレーヴェの剣を墓碑の前に供え黙祷した。

「……」

「よかったね、ヨシュア。レーヴェも……喜んでるんじゃないかな？」

「……うん……。レーヴェと姉さんは本当に仲が良かったから……。多分、将来は一緒になるつもりだったんだと思う」

「そっか……。ね、あたしもお姉さんに挨拶させてくれる？」

「うん……是非」

「初めまして、カリンさん。あたし、エステル。エステル・ブライトっていいます。弟さんの家族で、姉妹で……一応、恋人ってことになるのかな？」

「心外だな……一応なんてつけないでよ」

「で、でも……まだ慣れないっていうか……その……気恥ずかしいっていうか……」

「まったくもう……。ま、そういうところもエステルらしいけどね」

「むっ……なによ。1人で余裕ぶっちゃってさ。そういうヨシュアだって2人っきりの時は意外と……」

そこで、エステルは慌てて墓碑に向き直った。

「す、すみません。挨拶している途中で……。あの、今日はヨシュアの里帰りに付き合わせてもらう形でお姉さんに挨拶に伺いました。これからも……よろしくお願いしますね」

エステルは花を供え静かに黙祷した。

「……」

「……ありがとう、エステル。姉さんも……きっと喜んでると思う

よ」
「えへへ……そうだといいんだけど。あたし、子供っぽくてまだまだ頼りないところがあるし……。『弟の彼女失格』とか思われたらどうしようかなって心配で……」
「はは、考え過ぎだって。むしろ姉さん、君とは気が合ったんじゃないかな。性格とか雰囲気が好対照だしね」
「えへへ、そうかな……。……って、それって微妙に誉めてない気がするんですけど。お姉さんみたいに芯が強くて落ち着いている性格じゃないってことよね？」
「う、うーん……芯は強いとは思うけど。落ち着いてるっていうのは……ちょっとどうかなぁ」
「ガクッ……」
「でも、それでいいじゃないか。いつも明るく、前向きでお日様みたいに輝いてて……。僕が好きになったのはそんな女の子なんだから」
「！！」
いきなり直球で言われてエステルは慌てて背を背けた。
「ま、まったくもう……。よくそんな恥ずかしい言葉をシレッと口にできるわね……」
「あれ、嬉しくない？」
「嬉しいわよ！わ、悪かったわね！」
「怒られても……」
「あーもう、挨拶も済ませたし、そろそろ出発しましょ！このまま続けたらお姉さんに呆れられそうだし」
「あ……うん。……」
ヨシュアはそこで言葉に詰まった。
「？どうしたの？」
「……ねえ、本当にいいの？僕に付き合う形でリベールから離れても……」
「……」

「《結社》時代の償いのため、大陸各地を回るのは僕の問題だ。レーヴェに追いつくため、もっと強なりたいっていうのも。君を巻き込んでもいいのか正直……まだ迷っているんだ」
「まったくもう……肝心なところで抜けてるんだから」
「え……」
「レグナートも言ってたけどこれから先、色々なことがこの世界で起こるかもしれない。また《身喰らう蛇》が何かしでかすかもしれない。そのためにも、あたしは父さん以上に強くなっておきたい。あたしにとってはその修行の旅でもあるんだから」
「父さん以上って……また大きく出たね」
「どうせなら目標は大きくよ。レーヴェとの約束もあるし、レンがどうしてるのかも気になるし。見たことのない土地を旅するのもすごく楽しみだし……。それに……」
エステルはヨシュアの手を取った。
「エ、エステル？」
「そもそも、あたしとヨシュアが一緒にいるのに理由なんて必要？」
「あ……。……。うん……そうだね。そんなもの……必要ないかな」
「でしょ？ほんとヨシュアって肝心なところで抜けてるんだから」
「はは……本当にそうだな」

「――行こう、エステル。道はどこに通じているのか今はまだ分からないけど……。きっとその先に何か見えてくると思うから」
「うん……！あたしたちのペースで一歩一歩、歩いて行こうね！」

第17章　特務支援課（1）（前書き）

零の軌跡開幕です！

第17章　特務支援課（1）

「――はっ！？」

列車内で1人の青年――ロイドがはっと顔を上げた。

「……ここは……。そっか……そうだった。叔父さんたちに挨拶して……荷物を送ってから列車に乗って……。……それで……」

ロイドは一つ一つこれまでのことを思い出していく。

「……あなた、大丈夫？」

前に座っていた老夫婦が心配そうに声をかけてきた。

「目が覚めたようじゃな。うなされておったがどこか具合でも悪いのかね？」

「い、いや……ちょっと寝不足だっただけで。なんだか……変な夢を見ていたみたいだ」

「ほほう、変な夢か。もしや色っぽい女子（おなご）どもに迫られてあたふたする夢でも見てたかの～？」

「い、いや～……そんな良い夢じゃなかった気が」

「もう、おじいさん。若い人をからかっちゃ駄目ですよ。そうだ、眠気覚ましに冷たいレモネードでもいかが？凍らせたものを水筒に入れて持ってきているの」

「あ……それじゃ、ありがたく」

ロイドはコップに入ったレモネードを受け取ると一気に飲み干した。

「んくっ、んくっ……。ぷは～～っ！ごちそうさま！冷たくて凄く美味しかった」

「ふふ、お粗末さま」

「しかしその格好……帝国人ではなさそうじゃな。やはりクロスベル出身かね？」

「あ、うん。……しばらく外国で暮らしていたんだけど戻ってくることになったんだ。っそういうお爺さんたちもやっぱりクロスベル

出身？」
「うむ、共和国方面を旅行してちょうど戻ってきたところじゃよ。……しかし、そういうことなら今のクロスベルを見たら驚くかもしれんな」
「そうですねぇ。ここ2、3年で街並みもけっこう変わってしまって……」
「やっぱり、そうか……。……実は最近、何度か列車でクロスベル市を通り過ぎたんだけど……ずいぶん背の高い建物が建つようになったみたいだね？」
「うむ、元々クロスベルは大陸有数の貿易都市の一つじゃ。金融業も発達していたため、諸外国からミラが集まりやすい傾向にあったのじゃが……。一昨年の《不戦条約》以来、その流れが加速したようでな。莫大なミラの投資対象としてデパートやらオフィスやらが次々と建てられているのじゃよ」
「色々便利になったのはいいけれど、少し目まぐるしくなったわねぇ。誰もがみんな、時間とミラ儲けに追われているようになったというか……」
「……」
その言葉にロイドの顔が曇った。
「あら、ごめんなさいね。せっかく帰って来てくれたのに。悪いことを言ってしまったかしら」
「いや、気にしないでよ。手紙で色々と聞いているし……それにどんなに変わったとしても故郷（クロスベル）は故郷（クロスベル）だから」
「そう……」
「ふむ、若いのに分かっとるのう。それに引き換え、最近の政治家どもときたら……。やれ帝国派だの、やれ共和国派だの利権争いばかり繰り広げおって……。もはや信頼できるのはマクダエル市長しかおらんわい」
老人は最近の政治情勢について熱く語り始めた。
「おじいさん、おじいさん。……ごめんなさいね。この人ときたら、

政治の話になるといつも我を忘れてしまって」
「いや……勉強になるよ。外国でも《クロスベルタイムズ》は取り寄せていたんだけど……。実際に話を聞いてみないと本当のところは分からないから」
「ほう、お前さんも《クロスベルタイムズ》の愛読者か。多少ミーハーなところもあるがなかなか良い記事を書く雑誌じゃろ？もう少し自治州行政の問題に突っ込んで欲しいところじゃが……」
「なるほど……やっぱり色々あるみたいだね」
そこでロイドが外の景色に目をやった。
「あ……！」
目の前にクロスベル市が近づいていた。そしてそれを知らせるアナウンスが流れた。
「――乗客の皆さんにお伝えします。まもなく、クロスベル自治州、クロスベル市に到着します。リベール、レミフェリア各方面への定期飛行船をご利用のお客様はお乗換え下さい。なお、大陸鉄道公社規約に基づき、当列車はクロスベル駅にて３０分ほど停車させていただきます。エレボニア方面に向かわれる方は入国申請書をご記入の上、臨検官への提出をお願いします」
「……フム、到着のようじゃの。帝国軍人の顔など見たくもないし、とっとと支度をするとしようか」
「ははっ、そうだね。……」
ロイドはクロスベルに帰ってきたことを実感し始めた。
「（あれから3年、か……。セシル姉とは何度か導力通信で話してるけど……。……）」
そして胸のポケットから1枚の写真を取り出した。
「（……兄貴、セシル姉……。俺、やっと帰ってきたよ。クロスベルに……みんなで過ごしたあの街に）」

第17章　特務支援課（2）

―クロスベル市　中央広場

ロイドは老夫婦の荷物を手伝いながら中央広場にやってきた。

「うわ～……ずいぶん様変わりしたなぁ。デパートなんか完全に新しくなってるし。あれ、そっちの建物は……？」

ロイドが一際ネオンで装飾された建物を見た。

「去年オープンしたばかりの《オーバルストア》じゃよ。最新の導力製品から動力車まで扱っておる店舗でな。帝国製、共和国製、リベール製、エプスタイン製、全て取り扱っておるぞ」

「は～、大したもんだね。それに……けっこう車も増えたみたいだ。3年前はほとんど見かけなかったんだけど……」

「ふふ、お金持ちにしか縁がないものだとは思うけど……。導力バスの本数が増えたのは正直、ありがたわねぇ。南にある病院方面なんか30分ごとに走っているのよ」

「へえ、それは便利になったね。そうか……3年でそこまで変わったんだ」

「さてと、ここまででいいぞ。就職先に顔を出すんじゃろ？」

「あ、うん……。せっかくだから家まで運ばせてもらおうと思ったけど」

「あらあら、ダメですよ。せっかくの初出勤、遅刻でもしたらどうするの？」

「そうそう。何事も始めが肝心じゃ」

「はは、確かにそうだね」

ロイドは老人に荷物を渡した。

「しかし、戻ってきたばかりで住むアテはあるのかね？東通りでよければ下宿先を紹介できると思うが」

「あ、気持ちはありがたいけど寮が用意されているらしいんだ。送った荷物もそちらに届いてるはずだよ」

「ほう、そうじゃったか」
「私たちは東通りの外れの方で暮らしているの。何か困ったことがあったらいつでも頼ってらっしゃいな」
「うん、ありがとう。落ち着いたら挨拶に伺わせてもらうよ」
「うむ、しっかりな」
「それじゃあまたね」
老夫婦は東通りへと向かっていった。
「あれ……」
ロイドは中央広場の一つのビルに目をやった。
「あの雑居ビル……ちゃんと残っていたんだ。たしかクロスベルタイムズが入っていたはずだけど……。はは、懐かしいけどこの街並みじゃ浮いているよな。さてと……そろそろ時間だ」
ロイドは懐から一枚の封書を取り出した。
『ロイド・バニングス殿。クロスベル警察本部、特務支援課への配属を命ずる。指定日時に警察本部へ出頭せよ。クロスベル警察・人事課』
「特務支援課……。警察学校のカリキュラムじゃ聞かなかった名前だけど。まだ制服も受け取ってないし、どういう部署なんだろう……」
ロイドは手紙をしまった。
「――まあいい。とにかく行けば分かるよな。さすがに警察の場所までは変わってないだろうし……。よし、初出勤と行きますか！」
ロイドは行政区のクロスベル警察本部へと向かった。

―クロスベル警察本部
「（クロスベル警察……。前にも何度か訪ねてるけど……。ここが……今日から俺の職場になるんだな。――さてと。まずは受付に挨拶しておこう）」

ロイドは入ってすぐにある受付に向かった。
「こんにちはー。ようこそ、クロスベル警察へ。どのようなご用件でしょうか？」
受付嬢は明るい声で挨拶してくれた。
「あ、いや……。――今日からここで働かせてもらうことになったロイド・バニングスといいます。どうかよろしくお願いします」
「あ、そうだったんですか。ふふっ、嬉しいです。一緒に働くお仲間が増えて。あれ、でも……。うーん、おかしいですね。今日新人が来るっていう連絡は受けてないんですけど……。その、警察本部じゃなくて警備隊の方ではないですよね？」
「いえ、警察本部で間違いないと思います。一応、警察学校の方で捜査官の資格を貰いましたし」
「え～っ、捜査官試験に合格されているんですか！？凄いですね～！新人の方では珍しいですよ！」
「い、いや～。運が良かっただけですよ。それに今回、試験を受けたのは自分だけみたいだし……」
「またまた～。謙遜しないでくださいよ。でも、おかしいですね。だったらこちらにも連絡が来てるはずですけど……。あの、どちらの部署に配属される予定なんですか？」
「はあ、それが……『特務支援課』っていう部署らしいんですけど」
「『特務支援課』……。えっと……？そんな部署ありましたっけ？」
受付嬢も知らない部署であった。
「……あの、無いんですか？」
配属される部署がないかもしれないという事態に困惑するロイド。
「ちょ、ちょっと待ってください。……どこかでその名前を聞いたことがあるような、ないような」
「……」
「……おー、来やがったか」
奥から煙草をくわえた無精ヒゲの男性が受付にやってきた。
「あ、セルゲイ警部……！」

「フラン。こいつは俺が引き取ろう。ウチの新人なんでな」
「あ、なるほど……。警部が立ち上げた新部署の名前だったんですね」
「ああ、よろしく頼むわ。ま、半年も経たないうちに無くなってるかもしれんがな」
さらりと恐ろしいことを言う。
「あ、あはは……」
その言葉に苦笑いするしかない受付嬢フラン。
「……えっと……」
「特務支援課課長、セルゲイ・ロウだ。ふむ……お前がロイドか」
「は、はい。ロイド・バニングスです。クロスベル警察・特務支援課への着任を報告させて――」
「ああ、それはまだいい」
ロイドの言葉はセルゲイ課長に遮られた。
「えっ……」
「着任報告をするのはまだ早いと言っている。付いて来い。他の連中を紹介しよう」
それだけ言うとセルゲイは奥へと戻っていった。
「え、あ……？」
「え～っと……その、頑張ってくださいね？色々大変だとは思いますけど、ガッツがあれば大丈夫ですよ！」
「は、はあ……（激しく不安だ……）」
とにかく、ロイドはセルゲイを追っていった。

―1階　会議室
会議室の中には3人が座っていた。
「あら……」
「おっと。おいでなすったようだな」

「……」
「待たせたな。こいつが最後のメンバーだ。おい、自己紹介」
「あ、はい」
ロイドは一歩前に出た。
「（あれ……先輩にしては顔ぶれが……。同じ新人……？いや、それにしたって若すぎる子もいるような……）」
「おい、どうした？名前と出身だけでいい」
「す、すみません。――ロイド・バニングス。ここクロスベル市の出身です。しばらくの間、外国で暮らしていたんですけど……。この度、警察に入るにあたり戻ってくることになりました。これからよろしくお願いします」
「おーおー。真面目だねぇ。俺はランディ。ランディ・オルランドだ。趣味はナンパ、ギャンブル、グラビア雑誌の鑑賞ってところだ。あとでお前さんには俺の秘蔵のコレクションから取って置きを貸してやるよ」
赤毛の青年はランディと名乗った。かなり偏った趣味の持ち主のようだ。
「ええっ……！？」
「……コホン。――初めまして。エリィ・マクダエルです。あなたと同じクロスベル出身です。よろしくお願いしますね」
銀髪の娘はエリィと名乗った。
「あ、ああ……」
「ティオ・プラトー。レマン自治州から来ました。……よろしく」
黒衣の少女はティオと名乗り、頭を下げた。
「よ、よろしく……」
3人ともとても警察の人間とは思えないロイド。
「えっと、セルゲイ課長……？」
「ん、なんだ？」
「『特務支援課』というのは一体どういう場所なんですか？その……自分も含めてずいぶん若い顔ぶれのような」

「ま、色々あってな。ちなみに全員、お前と同じく期待のルーキーばっかりだ。ククク、気楽でいいだろう？」
「は、はあ……」
「……いいのかしら」
「ま、口やかましい先輩がいないってのは有り難いねぇ」
「……」
「（な、なんだこの状況……。何だか無性に不安になってきたぞ……）」
激しく不安が募るロイド。
その時、セルゲイ課長の通信器が鳴った。
「こちらセルゲイ……。……おお、ご苦労さん」
「（あれは、携帯用の通信端末？そんなものまで実用化されているのか……）」
「……ああ、了解だ。それじゃあ後始末の方は任せてくれ」
セルゲイ課長は通信器を切った。
「よし、喜べルーキーども。この『特務支援課』がどのような仕事をするのか……これから素敵な場所でじっくりと体験させてやろう」

―駅前通り
「ここは……」
「駅前通りの外れ……。一体、何があるのかしら」
「後始末とか言ってたが……。まさか資材を片付けろとか言うんじゃないだろうな？」
「……」
４人はとにかくセルゲイ課長の後に続いた。
「――ここから先は、クロスベル市の地下に広がる『ジオフロント区画』になる。今から、この中に潜ってもらう」
「ええっ！？」

「も、潜るって……」
「おいおい。どういうことッスか？」
「お前たちの総合能力、および実践テストのためだ。ジオフロント内部はそれほど手強くはないが魔獣の類いが徘徊している。それらを掃討しながら一番奥まで行ってもらおう」
「なるほど……」
「実践テストか。ま、それなら気が楽かね」
「ちょ、ちょっと待ってください！テストはともかく……どうして魔獣の徘徊する場所にわざわざ入る必要があるんですか？警備隊じゃあるまいし……捜査官の仕事じゃないですよね？」
「クク、確かに普通は捜査官の仕事じゃないだろう。――だが、特務支援課に所属するメンバーは話が別だ」
「え……」
「――詳しい説明は後だ。まずはコイツを受け取れ」
セルゲイ課長はロイドたちに携帯端末らしきものを手渡した。
「これは……」
「新型の戦術オーブメント？」
「へえ……ずいぶん洒落たデザインだな」
「第５世代戦術オーブメント、通称『ＥＮＩＧＭＡ（エニグマ）』……。ようやく実戦配備ですか」
「ああ、財団の方から先日届いたばかりの新品だ。お前たちの適性に合わせてすでに調整もされている。使い方は――ティオ。お前がレクチャーしてやれ」
「……面倒だけど了解です。新型用の結晶回路（クオーツ）はありますか？」
「ああ、少ないが受け取れ」
セルゲイ課長が各種の結晶回路をもらった。
「それと、肝心のこいつだ」
さらに目の前のジオフロントＡ区画を開くための鍵を受け取った。
「それじゃあ、一通り魔獣を掃討したら本部に戻ってこい。細かい話はその後してやろう」

「ちょ、ちょっと課長！？」
「――ああ、それとロイド。とりあえずお前、リーダーな」
「へっ……」
「今のところ、捜査官としての正式な資格を持っているのはお前だけなんだよ。そんじゃあ任せたぞ」
それだけを言い残し、セルゲイ課長は戻っていった。
「ハッハッハ。押し付けられちまったなぁ？」
他人事のように笑うランディ。
「ふふ、でも捜査官の資格を持っている人がいて心強いです。ロイドさん。よろしくお願いしますね」
エリィは一番の良識者と言えるだろう。
「あいや、呼び捨てでいいよ。見たところ歳も近いみたいだし」
「そう？ちなみに私は１８だけど……」
「ああ、それなら同じ歳だ。えっと、あなたたちは……？」
「俺は２１だが堅苦しいからタメ口でいいぜ。よろしくな、ロイド、エリィ」
「ええ、こちらこそ」
「ああ、よろしく頼むよ。……えっと……それで君の方は……？」
「――１４ですが、問題が？」
ティオは一番若い――もとい子供のように見られるのが嫌なようだ。
「い、いや～。問題があるわけじゃ……って、１４歳ッ！？」
「ハハ、なんだ。見た通りの歳ってわけか」
「驚いた……そんな若くて警察に入れるものなのね」
「いやいや！どう考えてもおかしいから！たしか一般の警察官でも１６歳以上だったはずだし……。日曜学校も卒業していない子がどうして警察なんかに――」
「……正確に言うとわたしは警察官じゃないです。エプスタイン財団から出向したテスト要員ですので」
「へっ……！？」

「エプスタインっていやぁ、さっきの戦術オーブメントの……」
「そう……なるほどね。ここ数年、クロスベル市が財団と協力して大規模な計画を進めているのは聞いていたけど……」
「『導力ネットワーク計画』ですね。そちらにも少しは関わっていますがわたしの出向目的は別にあります」
ティオは杖のような形をした機械を見せた。
「それは……」
「機械仕掛けの……杖？」
「『魔導杖（オーバルスタッフ）』といいます。この新武装の実戦テストのため、わたしは財団から出向しました。……ロイドさん。ご理解いただけましたか？」
「ちょ、ちょ、ちょっと待ってくれ！もしかして……その杖を使って君も戦うのか？」
ロイドは戦うには危険すぎると言いたいのだろう。
「……捜査官の資格があるのにずいぶん察しが悪いんですね。『実戦』テストのために出向したと言いましたが……？」
「うっ……」
「まあまあ。ここでモメてても仕方ないぜ。この先のジオフロントってのがどれだけ危険かは知らないが……。まずはあのオッサンが押し付けてきた任務（ミッション）をクリアすることを考えようや」
「そうね……納得できないことも多いけど」
「……分かった。すまない、ティオ。気分を悪くしたら謝るよ」
「別に……あなたの反応は常識的だと思いますから。ところで、私の武装はこの『魔導杖』ですが……皆さんの武装は何ですか？」
「ああ、それじゃあ――俺の得物は、これだよ」
ロイドは自分の武装を見せた。
「それは、警棒の一種……？」
「トンファーか。東方で使われている武具だな。殺傷力よりも防御と制圧力に優れているらしいが……」
「なるほど。警察官らしい装備ね」

「色々試してみたんだけどこれが一番しっくり来てね。で、エリィとランディの得物は？」
「私は……これね」
続いて、エリィが武装を見せた。
「導力銃……少し古いタイプですね」
「ずいぶん綺麗な銃だな……」
「競技用に特別にカスタムしてもらったものよ。旧式だけど、狙いの正確さは期待してくれてもいいと思う」
「おっ、自信満々だねぇ。そんじゃあ、俺はコイツさ」
最期にランディが武装を見せた。
「それは……ずいぶん大きな武器だな」
「中世の騎士が使っていたハルバードみたいな形ね……」
「……財団の武器工房で見かけたことがあります。導力を衝撃力に変換するユニットが付いていますね」
「ああ、スタンハルバードだ。ちょいと重くて扱いにくいが一撃の威力は中々のもんだぜ」
「なるほど……。ティオの杖がどういうものか分からないけど……。魔獣との戦闘になったらバランスよく戦えそうだな」
「確かに……」
「ま、そのあたりも考えて俺たちを集めたのかもしれんな。あのオッサン、とぼけた顔して結構したたかそうだったし」
「とにかく、中に入ってみよう。まずは安全に気を付けて進んだ方が良さそうだ」
「ええ、そうね」
「……了解です」
「んじゃ、行くとしますか」
ロイドたちはジオフロントA区画の中へと入っていった。

第17章　特務支援課（3）

―クロスベル警察本部

「あ、こんにちは～。クロスベル警察本部へようこそ。本日はどのようなご用件でしょうか？」

クロスベル警察本部にやって来たのは、青い髪をした青年だった。

「こちらにセルゲイという方がおられるはずですが、取り次いでもらえますか？」

「かしこまりました～。それで、あなたのお名前は……」

「おっと、失礼しました。私は、レイン・アクアライトと申します」

―会議室

「お久しぶりです、セルゲイさん」

「ああ、そうだな。あれから7年か……。ククク、ずいぶんと偉くなったものだな」

「まあ、私もあれから色々ありましてね。それにしてもこのクロスベルの変貌は驚きましたよ。これなら二大大国が併合しようとする理由が分かりますね」

「まあな。だが、そのせいで国の内政も大きく変わっちまった。正直、見ていられないというのが現状だな」

「そうですね。それよりも私がこの国に来た理由は分かりますか？」

「ククク……そんなの決まってるだろ。……『教団』についてだろう？」

「ええ、その通りです。私は7年前以降、各国を回ってきました。去年、リベール王国に『教団』を知る者がいましたが、追いかけていましたが結局は重要な情報は得ることができませんでした。そこで、次にこの国を調べることにしたのです」

「そうか……。だが、今のところ関係がありそうなことはないな。ク……空振りといったところか」
「笑い事ではありませんよ。あなたも事件以降、色々と気になっているのではありませんか？」
「……。……さすがだな。まあ、そのあたりはこれからウチの若い奴らに任せるつもりだ。今は全然駄目だがな」
「『特務支援課』の方たち……ですか？」
「ああ、クセのあるやつばかりだ。１人１人の力は知れているが、４人集めることでそれぞれの欠点を補えると思ってな」
「なるほど、どのような方たちか実際に会ってみたいですね」
「クク、いくらでも見れるぜ。レイン、お前遊撃士辞めてこっちに来ないか？」
「……セルゲイさん、いきなり何を言い出すのですか？冗談でも笑えませんよ」
「分かっている。そこで考えたのだが、『顧問』という形でこっちに助力をしてくれないか？ああ、手伝ってくれるのは適当に暇な時でかまわんからな」
「ずいぶんといきなりですね。しかし、願ってもいないことです。警察と遊撃士協会、２つの情報を合わせれば、私としても動きやすくなりますからね」
「決まりだな。まあ、あいつらが戻ってくるまでゆっくりとしていってくれ」
「ああ、その前に先に遊撃士協会に行ってきますね。今のことについて話をしなければならないので……」
「そうか。……まあ、こっちも今日と明日は色々ごたごたしそうだから明後日にでも来てくれ」

第17章　特務支援課（4）

―ジオフロントA区画

ジオフロントの中は想像もできないほど広大であった。まさに、地下の巨大迷路というにふさわしかった。

「ここが『ジオフロント』……」

「話には聞いていたけど、こんな場所が都市の地下に広がっていたなんて……」

「は～、たまげたな。中世の地下水道あたりが残っている場所かと思ったが」

「データベースの記録によると、２０年前の都市計画と同時に建造が開始された場所らしいです。上水道、下水道、ゴミ処理施設に加え、導力ケーブルや各種プラントなども後から増設されたらしいですね」

ロイドたちは周りを見渡すやいなや、その広さに驚いた。

「……いや、これは確かに予想外の場所だったかもしれない。しかし、この上はたしか中央広場になるんだよな？その下に魔獣が徘徊しているのか……」

「普段は封鎖されているため都市に現れることはありませんが……たまに工事現場の作業員の方々が襲われてケガをする事があるようです。ですが現在、警察の方では対処しきれていないみたいですね」

「……そうか……」

警察の現状を見たようでロイドは顔を伏せた。

「そのための特務支援課……ということかしら？」

「ま、それならそれで分かりやすくていいけどな」

「――状況は分かった。捜査官の役目かどうかはともかく、必要な仕事であるのは確かみたいだ。テストであるかどうかは別にしてきちんとやり遂げておこう」

「おーおー、真面目だねぇ」

「でも、確かにそうね。一つ一つ基本を確かめながら確実に進んでいきましょう」
「……了解です」
ロイドたちはジオフロントを奥へと進んでいった。

「……ヒック……ヒック……」
ロイドたちがジオフロントの奥を目指していると、途中で子供の泣き声が聞こえてきた。
「この声は……!?」
「こ、子供の泣き声……!?」
「おいおい、どういう事だよ?確かジオフロント内部は封鎖されてるんじゃないのか?」
「……わたしに言われても。あくまで公式的にそうなっているだけの話です」
「話は後だ!とにかく一刻も早く泣き声の主を探してみよう!」
「ええ……!」

「ヒック……ううう……」
ロイドたちは通風口の中で子供の影を発見した。
「……どうしよう……このままじゃ……ヒック……」
「おーい、誰かいるのか!」
ロイドはその声に向かって叫んだ。
「!!!だ、だれ~っ!?」
「よかった。こんな所にいたのか。大丈夫かい?どこかケガしていないか?」
「うううううっ……。ふえええええええっ……!」

ロイドが男の子に近寄ると突然泣き始めた。
「わわっ……」
「あらら……」
「安心したとたん、気が緩んじゃったのね。ロイド、私が代わるわ」
「あ、ああ……」
「……よしよし、恐かったね。もう大丈夫だから……お姉さんたちが付いてるからね」
「ううううっ……ヒック……。……う、うんっ……！」
「外にいた恐い魔獣はお姉さんたちが退治したわ。ここは暗くて狭いからいったん外に出ましょう。さ、抱っこしてあげるからしっかりと掴まっていてね」
「だ、だいじょうぶです……。ボク……もう立てますから！」
「そっか……。ふふっ、男の子だもんね。名前は何ていうのかしら？」
「えとえと……アンリっていいます！」
「（うーん……）」
「（はは、鮮やかなもんだねぇ）」
ロイドたちはエリィの見事な手管にただただ感心していた。

「――それで、アンリ君。どうしてこんな場所に？鍵がかかっていたはずだけど、どこから入ってきたの？」
「えと、その……。ボクたち、中央広場の鐘のある場所で遊んでて……。そこにあった蓋を開いたらハシゴがあるのを見つけて……。そ、それで……」
「なるほど、あのマンホールから入って来ちまったわけか」
「……あの入り口はデータベースに追記する必要がありそうですね」
「ちょ、ちょっと待った！『ボクたち』っていうことは……他の子も一緒に入ったのか！？」

「あ……！」
「は、はい……。友達のリュウが一緒に冒険してみようって……。で、でも……途中でコワイ魔獣に見つかって逃げているうちにはぐれちゃって……。ううううっ……」
「そうだったの……。――ねえロイド、どうする？」
「そうだな……」
ロイドはしばらく思考を巡らした。
「――時間がない。この子と一緒に奥まで行こう」
そして、引き返さずにそのまま先に進むことを選んだ。
「……いいんですか？その子を先に脱出させなくて」
「いったん二手に分かれて捜索を続けるって手もあるぜ？」
ティオとランディは二手に分かれることを提案したが、ロイドはその時間が惜しいことを説明した。
「とにかく一刻を争う。いきなり戦力分散するのもあまり得策じゃないだろう。……エリィ。この子のお守りを頼んでいいか？」
「ええ、任せておいて。もし魔獣と戦闘になっても私がこの子に近付けないわ」
「――アンリ。これからお兄さんたちは君の友達を捜しに行く。ここにいたら君も危ないからできれば付いてきてほしいんだ。……どうだい？」
「う、うん……。ボク、リュウのことが心配だし、いっしょに行きます……！」
「よし、いい子だ。護衛対象を守りながらの捜索だ。今まで以上に慎重に進んでいくことにしよう」
「ええ……！」
「……了解です」
「そんじゃ、もう一人のワンパク小僧を捜すとしますか」

―ジオフロントA区画　最深部
「く、くるなよ～っ！うわあん、助けてえぇっ！女神（エイドス）さま～っ！」
悲鳴の先には男の子が魔獣に囲まれていた。
「あっ……！」
「リュウっ！」
「（くっ……！）」
ロイドは少し焦ったが、すぐさま突撃することを選んだ。
「――このまま突っ込むぞ！魔獣の不意を突きつつ、子供の安全確保を最優先で！」
「よしきた！」
「ええ！」

「ふう……」
「何とか片づいたわね……」
「さすがにちょいと手こずっちまったかな」
「……疲れました」
「び、びっくりしたぁ……！」
「リュウ、大丈夫！？ケガとかしてない！？」
「う、うん……。ぜんぜんへーキだぜ。それよりもオマエも無事でホントーによかったぜ！オマエ、どんくさいからな～。オレが助けてやんない魔獣に喰われちまうと思ってさぁ」
「よ、よく言うよ。自分だって魔獣に食べられそうになってたくせに……。だいたい今度だってリュウが入ろうって強引に……」
「な、なに言ってんだよ！最初に『じおふろんと』の話をし始めたのはオマエの方だろー！？」
「だ、だからって本当に入るとか言い出すなんて……！」
アンリとリュウは言い争いをし始めた。
「はいはい。言い争いはそこまでだ」

ロイドはその様子を見かねて2人を制止した。
「ご、ごめんなさい……」
「へ～、兄ちゃんたち、初めて見るカオだね。けっこう強いみたいだけど、新人のヒトたち？」
「へ……」
「ったく……調子のいいガキンチョだな。助けられたんだったらまずはお礼を言うのが先だろ？」
「へへっ、まあ助かったよ。危ない所もあったけどオレもカスリ傷ひとつなかったし。わりと手際がいいんじゃね？」
リュウはずいぶんと大人びた性格らしい。
「そりゃどうも……ってホント調子いいなあ」
「ふふ、でも無事で良かった。とにかく一度、外に出るとしましょうか」
「……そうですね。どうやら終点みたいですし。一応、セルゲイ課長の課題もクリアしたことになりますね」
「そうか……」
「ま、こんなハプニングがあるとは思ってもなかったけどな。そんじゃ、ガキどもを送ったら警察本部に戻るとするか」
その言葉を聞いて、アンリとリュウは顔を見合わせた。
「ん、どうしたんだ？」
「あのさ……兄ちゃんたち。兄ちゃんたちってやっぱり新人なんだよな？」
「あ、ああ……そうだけど。しかしよく分かるな。制服だって着てないのに……」
「せ、制服……？」
「あ、あのー、ひょっとして。お兄さんたち……ギルドの人じゃないんですか？」
「えっ……」
「ギルドって……《遊撃士協会（ブレイサーギルド）》のこと？」
「ギルドっていったら他にあるわけないじゃん。え、なに！？本当

に遊撃士（ブレイサー）じゃないの！？」
「い、いや……。俺たちは、クロスベル警察に入ったばかりの新人だけど……」
「ええっ……！？」
「ケーサツの人間っ！？」
ロイドが警察の者だと言うと2人は驚いた。
「うっそだぁ！どうしてケーサツのお巡りがこんなところにいるんだよ！？」
「あ、ああ……ちょっと事情があってさ。任務の途中で君たちを見つけたって訳なんだけど。……でも、そんなに不思議なことか？」
あまりのリュウの驚きようにロイドが逆に驚いた。
「だってさぁ！ケーサツのお巡りっていったら腰抜けで有名じゃんか！」
「え」
「態度もオーヘイなわりに何の手助けもしてくれないって父ちゃんが言ってたぞ。いざという時は、遊撃士の方が何十倍も頼りになるって」
「……」
「……やっぱり……」
「リ、リュウ、失礼だよ。いくら警察のヒトだってボクたちを助けてくれたんだし」
「そ、そうだけどさ～。せっかくギルドの新人に助けてもらったと思ったのに……」
「ふーん？色々とあるみたいだな。……って……」
ランディが何かに気付いたようだ。
「おい、マズイぞ！？」
「え……」
「っ……！？」
「上……！？」
ロイドたちが上を見上げると巨大な魔獣が降りてきた。

「ひっ……」
「うわあっ！？」
「くっ……！？」
「なんだコイツは」
「な、なんて大きさ……」
「……まずいです。背後の扉はロックされています」
「くっ……このままじゃ……！」
ロイドは武器を構えた。
「おい、どうするつもりだ！？まともにやっても今の装備じゃ勝ち目はねぇぞ！？」
「分かってる！ここは俺が引き付けるからみんなは何とか脱出してくれ！」
「ちょ、ちょっと……！？」
「正気ですか……？」
「この状況じゃそれしか方法はない！ランディとエリィでその子たちを抱きかかえてとにかく隙をついて逃げろ！」
「ちっ……それしかねぇか……！？」
「そ、そんな……」
「に、兄ちゃん……」
「――やれやれ。自己犠牲も結構だが少々、短絡的すぎるな」
上から声が聞こえてきたと思うと、男が剣を携えて立っていた。
「……」
男は飛び降りると、無数の剣戟で魔獣を切り刻んだ。
「あ……」
ロイドが声を上げた時には、魔獣はすでに倒されていた後だった。
「！！！」
「マ、マジかよ……！？」
「し、信じられない……」
「……見えませんでした」
その太刀捌きの速さにロイドたちはただただ驚いていた。

「す、すっげーーーっ！」
アンリとリュウは感激して男の元に近寄った。
「すげーっ！すごすぎるよ、アリオスさんっ！うっわ～っ！いいもん見ちゃったなああ！」
「あ、ありがとう、アリオスさん！でも、どうしてここに……？」
「ああ、広場のマンホールに子供が入っていくのを見たという報せがあってな。しかし無茶をする。もしものことがあったらどうするつもりだ？」
「ううっ……ごめんなさい」
「その……悪かったよ」
「フ……まあ、無事ならそれでいい。もう夕方だ。とっとと出て家に帰るぞ」
「うんっ！」
「わ、分かりました」
「――どうした？お前たちは戻らないのか？」
男が歩き出すと呆然としていたロイドたちを振り返った。
「え、ああ……。……そうですね。一緒に戻らせてもらいます」
「なら、グズグズするな。先程のようなこともある。最後まで気を抜かないことだ」
それだけ言うと、男は先に歩いていった。
「……」
「かあ～っ！なんていうオッサンだよ？まとってるオーラが尋常じゃないというか……」
「……腕前の方も普通ではありませんでした。いったい何者なんでしょう？」
「そう、あの人が……」
エリィは男の事を知っている様子だった。
「お嬢、知ってるのか？」
「名前くらいだけど、ね。……というか、何で私をそんな風に呼ぶのかしら？」

「いや、何となくノリで。それで何者なんだよ、あの凄まじいオッサンは」
「ええ、多分――」
「――アリオス・マクレイン」
エリィが答えるよりも早くロイドがつぶやいた。
「クロスベルタイムズで何度か読んだことがある。遊撃士協会・クロスベル支部に所属する最強のＡ級遊撃士――どんな依頼も完璧にこなし、市民から絶大な信頼を得ているクロスベルの真の守護神……《風の剣聖》アリオス・マクレインだ」

第17章　特務支援課（5）

―駅前通り
「なんだ……？」
ロイドたちがジオフロントを出ると女性がアリオスを撮影していた。
「いや～、アリオスさん！またしてもお手柄でしたねぇ！ずさんな市の施設管理の下、危機に陥ってしまった少年たちを鮮やかに救出した手際の良さ……！最新号にバッチリ、スクープにさせてもらいますから！」
「すっげえ！オレたち雑誌に載っちゃうの！？」
「で、でもそれって何かうれしくないような……」
「……グレイス。あまり騒ぎ立てないでくれ。確かに市の管理も問題だが、この子たちの行動にも問題がある。偏った記事には感心しないぞ」
「いえいえ、あくまで読者のニーズに応えているだけですから♪――それに今回は面白いゲストもいるみたいですし」
女性はロイドたちに寄ってきた
「！？」
「クロスベル警察の未来を背負う『特務支援課』初めての出動！しかし力及ばず、いつもと同じように遊撃士に手柄を奪われるのであった！ああ、未熟さを痛感した若者たちは果たしてこの先に待ち受ける数々の試練を乗り越えられるのか！？」
女性はロイドたちの反応を気にせず、カメラを取りながら話し続けた。
「な、なにを……」
「（おいおい……一体なんだってんだ？）」
「（マスコミの人間みたいですけど……）」
「（……どうやら《クロスベルタイムズ》の記者の人みたいね）」
「――彼らに関しても決め付けはあまり感心しない。一応、この

子たちを最初に助けたのは彼らだ。まあ、ツメは甘かったようだが」
「！！」
「あらら、やっぱりそうなんだ。ま、記事で色々書くと思うけどあんまり気にしないでね？お姉さんからのエールだと思ってこれからも頑張ってちょうだい。――それで、アリオスさん。一度、独占インタビューをですね」
「それに関しても前に断わっているはずだが……」
アリオスたちは賑やかに話しながら去っていった。
「……何でしょう、今の」
「俺たちのことをピエロに仕立てようって肚（ハラ）みてぇだが……。結構好みのお姉さんだけどちょいとクセがありそうだなぁ」
「ふう……そんな問題じゃないでしょう。それでロイド、どうするの？」
「あ、ああ……。……セルゲイ課長が出した課題はクリアしたし……いったん警察本部に戻ろう。子供たちの件についてもきちんと報告しないと……」
その時、ロイドの懐から着信音が響いた。
「これは……さっき貰った戦術オーブメント……。もしかして通信が入ってきているのか？」
「ええ、そうみたいですね。そこの赤いボタンを押せば通信モードに切り替わります」
「ああ、これか……」
ロイドはティオに言われた通りに、オーブメントの赤いボタンを押した。
「えっと……ロイド・バニングスです。セルゲイ課長ですか？」
「あ、ロイドさん！あの、わたしです。先ほど受付でお会いした――」
聞こえてきたのはクロスベル警察本部受付嬢のフランだった。
「あ、さっきの……。えっと、一体どうしたんですか？」
「えっと、それがですね……。その、急いで警察本部に戻って来て

いただけますか？何でも副局長がお呼びみたいで……」
「ふ、副局長……？」
ロイドたちは急いで警察本部に戻った。

―クロスベル警察本部　副局長室
「――まったく！いったい何のつもりだね！？」
急いで戻ったロイドたちにピエール副局長は罵声を浴びせた。
「任務に関係ないことに首を突っ込んだあげく……！あのアリオス・マクレインに手柄を持っていかれて……っ！お、おまけに《クロスベルタイムズ》にすっぱ抜かれてしまうとは！！！」
「いや、ですが……」
ロイドが事情を説明しようとしたがピエール副局長は聞く耳を持たなかった。
「うるさい、言い訳無用だ！まったく、だから私は新部署設立など反対だったのだ！あの忌々しいセルゲイのヤツが交換条件を持ちかけなければこんな事には……！」
「あの、それはどういう……」
「ええい、君たちには関係ない！い、いや……そう、そうだな。部下が一人も居なくなればあの疫病神だって動きようが……」
急にピエール副局長は独り言を言い出した。そして、ロイドたちに向き直りこう言った。
「君たち、悪いことは言わない。『特務支援課』への配属を一両日中に辞退したまえ」
「えっ……！？」
「おいおい……どういうことっスか？」
「……意味不明です」
「どういう事も、そのままの意味だ。どうせ半年も保たない部署だ。絶対に出世の役には立たないぞ。それどころか、問題に巻き込まれ

て経歴を汚す可能性もある……。バカバカしいとは思わないかね」
その言葉にロイドたちは考え込んだ。
「ロイド君は捜査官志望だったか？ならば捜査課のどこかに回そう。他の者も、それぞれ適性に合った新しい配属先を用意しておく。なに、悪いようにはしない。一晩じっくり考えてみたまえ」

―警察本部　1階

「……」
「やれやれ……なんか妙なことになったな。しかし配属を辞退しろと言ったって……」
「どうやら警察内部でも色々とあるみたいね……。噂には聞いていたけど」
「……そうですね。これでは約束が違います」
ティオは溜息をつきながらうつむいた。
「あら、約束って……？」
「……いえ、こちらのことです。それよりもセルゲイ課長はどちらにいるんでしょう……？」
「そういや、そうだぜ課題を出すだけ出しておいて出迎えもナシってのはどういう事だ？かわりに嫌味な副局長ってのにネチネチ絡まれちまうし……」
そこで一言も話さないロイドにランディが声をかけた。
「なんだよ、ロイド。元気ないじゃないか？」
「配属を辞退しろっていうのがそんなにショックだったの？」
「ああ、いや……。……何だか思っていた場所とずいぶん違っていたからさ……」
「？？」
「んー……？」
「……」

「よお、新人ども。災難だったみてぇだな」
そこに髭面の男性と金髪の青年がやってきた。
「あなた方は……」
「ドノバンだ。捜査二課に所属している」
「同じく二課のレイモンドだよ。へ～、噂には聞いてたけどこんな小さな子までいるのか」
「（……むっ……）」
小さいと言われて反応するティオ。
「……初めまして。ロイド・バニングスです」
「エリィ・マクダエルです」
「ランディ・オルランド。よろしくッス」
「おう。ようこそ、クロスベル警察へ。そうか、オメーがあの……」
ドノバン警部はロイドを見て呟いた。
「……えっ……」
「警部……？」
「……いや、何でもねえ。しかし、セルゲイのヤツも無茶なこと考えやがるぜ。こんな新人どもばかり集めて市民の人気取りとはなぁ」
「えっ……」
「それは……いったいどういう事ですか？」
「なんだ……まだ話を聞いてないのかよ？うーん。マズイ事を言っちまったか？」
「いや～、しかし君たちも貧乏クジを引いちゃったよね。大変そうな割には報われなさそうだし僕だったら辞退してるだろうなぁ」
「……」
その言葉にロイドたちは言葉を失った。
「オメーはもうちょっと根性入れた方がいいじゃねえか？今からでもセルゲイのところに預けてやってもいいんだぞ？」
「や、やだなぁ警部。カンベンしてくださいよ～」
「ま、大変だとは思うがセルゲイに付き合うかどうか、一応考えてみてやってくれ。ただ、無理はすんなよ？何だったらまとめて二課

で引き取ってもいいからな」
「ど、どうも……」
「それじゃ、頑張ってね～。あ、エリィちゃんだっけ？今度一緒に食事でもどうだい？実はいいレストランを見つけて――」
「オラ、とっとと行くぞ！」
ドノバン警部はすかさずレイモンド捜査官を蹴った。
「あいた！単なる社交辞令ですってば～」
2人はそのまま去っていった。
「……」
「はー、何だか知らんが散々な言われようだったな」
「……貧乏クジはともかく、大変そうなのはイヤかも……」
「とにかく課長本人から詳細を聞いてみないと……。受付で聞けばどこにいるか分かるかしら？」
「あ……うん、そうだな――」
その時、ロイドの通信器が鳴った。
「もしもし。ロイド・バニングスです」
「おー、キツネの小言と嫌味は終わったみてーだな。なかなかウンザリするだろ？」
電話の相手はセルゲイ課長だった。他人事のように楽しんでいる口調だった。
「ええ、それはもう……――じゃなくて！一体どこにいるんですか！？警察本部で待ってるって言ってたじゃないですか！？」
「ああ、お前らの荷物が届いたから引越し屋に立ち会ってたんだ。なかなか親切な上司だろう？」
「荷物って……ひょっとして寮ですか？」
「ああ、詳しい話はそこで改めてしてやろう。待ってるからとっとと来い」
「ふう……分かりましたよ。それで、寮っていうのはいったい何処にあるんですか？」
「ああ、正確には寮じゃないぞ」

「へ……」

「正確には、クロスベル警察、『特務支援課・分室ビル』だ。そこの2階と3階が、お前たちの部屋になっている」

第17章　特務支援課（6）

―特務支援課・分室ビル

分室ビルというのはロイドが中央広場で見た雑居ビルだった。

「ここは……あの雑居ビルじゃないか」

「なんだ。ずいぶんボロイ建物だな。あっちのデパートと比べると古ぼけて見えるっていうか……」

「築30年……取り壊し間近って感じです」

「……本当にここが『特務支援課』の分室なの？」

ロイドたちは期待とは大違いの現実にため息しか出なかった。

「あ、ああ。間違いないとは思うけど……」

「おう、遅かったな」

扉があいてセルゲイ課長が出てきた。

「セルゲイ課長……」

「とっとと中に入れ。この『特務支援課』がどういった部署なのか……お前たちの疑問の全てにちゃんと答えてやるからよ」

「市民の安全を第一に考え、様々な要望に応える部署……！？」

セルゲイ課長が『特務支援課』の目的を聞いてロイドたちは驚いた。

「そう、それが新たに設立された『特務支援課』の行動方針だ。市民の生活に密着できるよう、こんな街中に分室も用意された。ク ク、なかなか合理的だろう？」

「で、でもそれって……！」

「完全に遊撃士（ブレイサー）協会（ギルド）の真似っていうか……」

「ありていに言えば、パクリですね」

「だよなぁ」

「知っているかもしれんが、現在、このクロスベルにおいて遊撃士

協会の評判は大したもんだ。A級遊撃士アリオス・マクレイン――――《風の剣聖》なんて呼ばれているあの男に加えて、かなりの実力者がクロスベル支部に常駐している。それが警察のお偉方にとって何を意味するか分かるか？」

「そ、それは……」

「警察とギルドの比較評価と組織としての問題点の指摘……。更には自治州政府への批判に繋がっているんですね」

「なるほど、そういう事か。要はギルドのお株を何とか奪って人気取りをしようって肚なわけだ」

「……なんか露骨ですね」

「ま、ぶっちゃけて言うとお前らの指摘する通りだ。だが、警察の基本理念は治安維持と自治州法の遵守……。市民へのサービスってのは本来、二の次ではあるわけだ。だからこそ、警察内部ではそうした人気取りを快く思わない声も多くてな。『便利屋』だの『ニセ遊撃士』だの『猿回しのサル』だの……まあ、早くも散々な陰口を叩かれてるってわけだ」

「……（パクパク）」

「なるほど……色々と合点がいきました」

「やれやれ、そんな部署で俺たちを働かせようってか？」

「……正直、想定外ですね」

「まあまあ、そう急くな。――――聞いているかもしれんが、配属を辞退することは可能だ」

「あ……」

「正式に配属された場合にやってもらう仕事は様々だ。今日みたいな、魔獣退治の仕事なんかも入ってくるし……落し物探しや、本部の手伝いなど細かい雑用も入ってくるだろう。――――その気がない人間に勤まるとはとても思えんからな」

ロイドたちは何も答えることはできなかった。

「一晩、考える時間をやろう。配属を辞退した場合、他の部署に配属されることになるが、今ならデメリットはない。全てはお前たち

次第というわけだ」

「……」

ロイドは自分の部屋にこもって今後のことを考えていた。そして懐から写真を取り出した。

「……何だかとんでもない場所に回されたみたいだな……。遊撃士の真似事か……。そんな事をするために警察に入ったんじゃないんだけど……。……兄貴が配属していたのはたしか『捜査一課』だったよな。大事件や政治的・国際的な案件を一手に引き受けるエリート集団……。……やっぱり遠すぎるよな……。……」

ロイドはベッドから腰を上げた。

「……他のみんなはどうするつもりなんだろう？あの3人……警察学校も出ていないみたいだし、色々訳アリみたいだったけど……。ちょっと話を聞いてみるか」

ロイドは自室を出て、3人の様子を見に行った。

～ランディの部屋

「ここは……ランディの部屋だったな。さっきまで物を動かすような音が聞こえてきたけど……」

ロイドは扉をノックした。

「……ん、誰だ？」

「ロイドだけど、ちょっといいかな？」

「おお、いいぞ。遠慮なく入ってこいよ」

「それじゃ、お邪魔するよ」

ランディの部屋の中に入ると、すでに内装がランディの好みに変わ

っていた。
「あ……」
「ようこそ、俺様の城へ。お前さんの方も荷解きは終わったのか？」
「い、いや……まだだけど。――どうやらランディはもう結論が出てるみたいだな？」
「ああ、配属を辞退するって話か。ま、デスクワークは少なそうだし、気楽そうなのも性に合っている。職場と住む場所が一緒なのもラクで良さそうだし、このまま厄介になるつもりだぜ」
「そうか……」
「お前の方はさすがに迷ってるみたいだな？せっかく取った捜査官の資格を無駄にしたくないってところか」
「はは……それもあるけどね。それ以上に、目指している目標から遠ざかっていきそうな気がして……」
「目指している目標……？」
「いや、まあ……大したことじゃないんだ。そういえば……ランディはどういう経緯でここに配属されたんだ？俺たちより年上だけど……警察学校は出てないんだよな？」
「ああ、その通りだが。うーん、俺がここに配属された経緯ねぇ……。――本当に聞きたい？」
急に真面目な顔になったランディ。
「あ、ああ。差し支えなければだけど」
「そこまで言うなら仕方ねぇ。実はな――女絡みのトラブルだ」
「へっ……」
呆気にとられたロイド。
「いや～、前の職場で複数手を出したのがバレてさ。あやうくクビになりかけた所をオッサンに拾ってもらったんだよ。これも女神（エイドス）のお導きってところかねぇ」
「えっと……ランディの前の職場って？」
「ああ、クロスベル警備隊さ。帝国方面にベルガード門ってあるだろ？あっちの方に詰めていたんだ」

「警備隊……そういう事か。道理であんなハルバードを自由自在に振り回せるわけだ」
「ま、国境付近の詰所あたりじゃ訓練とパトロールくらいしかやることが無かったからなぁ。その点、クロスベル市勤務なら歓楽街とか行きたい放題だ。いや～、マジで警備隊を辞めて正解だったぜ♪」
今から期待を膨らませるランディであった。
「はは……まあ、気持ちは分かるけど」
「おっと、気が合うじゃない。……いやさ、実は何軒か色っぽい姉ちゃんたちがいる店を見つけているんだよ。正式にお仲間になったら一緒に遊びに繰り出そうぜ？お嬢は固そうだし、お子様もお呼びじゃないし、男同士の付き合いってやつだ」
「はは……わかった、考えておくよ」

～エリィの部屋
「ここは……確かエリィの部屋だったな。もう寝てないといいけど……」
ロイドは扉をノックした。
「……どなたですか？」
「えっと……ロイドだけど。今、ちょっといいかな？」
「あ、うん、別にいいわよ。鍵は開いてるから入ってきて」
「それじゃ……お邪魔します」
エリィの部屋の内装は女性らしく、丁寧に飾られていた。
「……」
「ふふっ……何とか片付けが終わってよかったわ。そこに座ってくれる？今、紅茶でも淹れるから」
「いや、お構いなく。しかしエリィも……もう結論は出ているみたいだな？」
「ああ、配属を辞退する話ね。少し迷ったんだけど……ここで頑張

ることにしたわ」
「そうか……」
「……あなたの方はさすがに迷っているみたいね。でも、無理もないと思うわ。この特務支援課だけど……正直、無理があり過ぎるもの」
「無理がある？」
「話を聞く限り、色んなしがらみや打算によって出来た部署でしょう？組織としての合理性に欠けるし、目的も今一つはっきりしていない。これで成果が上がらなければ予算の都合で、本当に無くなる可能性が高いんじゃないかしら？」
「……まあ、普通に考えればそうだよな。でも、そこまで分かってどうしてエリィは残るんだ？何か理由でもあるのか？」
「そうね……。……色々な歪みを観察するには割と良さそうな場所だから、かな」
エリィは意味深な言葉を言った。
「へっ……」
「ふふっ、なんちゃって。多分私は、ずっと警察に勤め続けることはないと思うの。そういう意味では、出世コースから外れてもあんまり関係がないから」
「そうなのか……。確かエリィは、警察学校には行ってなかったんだよな？どういう経緯で警察に？」
「うーん……ありていに言うと社会勉強ね。ちなみに入る時の試験は筆記と射撃だったんだけど……。どちらも満点だったから断りきれなかったみたいね」
「な、なんか聞けば聞くほど俺の場合とは違うような……」
「あら、あなただって新人で捜査官資格を取ったのは珍しいんじゃないかしら？やっぱり事情があるんでしょう？」
「……それは……」
「ふふっ……ここから先は、正式な同僚になってからの方が良さそうね」

「ああ……そうだな。悪い、気を遣わせたみたいだ」
「いえいえ。でも、私個人の意見で言えば、あなたが居てくれた方が嬉しいかな」
「えっ……」
「まあ、お互い新米だからまだまだの所もあったけど……。今日だって、慣れない状況でもリーダーとして頑張ってくれたし。指示も的確だったから、私も安心してサポートできたもの」
「はは……そう言ってくれると助かるよ。――ありがとう。話に付き合ってくれて。あとは自分なりに考えてみる」
「うん……そうね。おやすみなさい、ロイド」
「おやすみ、エリィ」

～ティオの部屋
「ここは……ティオの部屋だったはずだ。さすがにもう寝てるかな……」
ロイドは扉をノックしたが、返事がなかった。
「返事がない……というか、全く気配がしないな。もしかして部屋にいないのか……？」

―1階
1階ではティオが何やら大きな機械を組み立てていた。
「ティオ……何やってるんだ？」
「……ロイドさん。見ての通り、端末のチェックをしていました」
「端末って……それのことか？」
「ＺＣＦのカペルシステムを財団で改良した汎用端末です。警察本部から、導力ネットワークを通じて情報を受け取ることが可能です」

「へ……？ちょ、ちょっと待て。いきなり訳が分からないぞ」
先端技術に関しては全く知識がないロイド。ティオの言っていることが全く理解できなかった。
「……そうですね。ロイドさんは、『導力ネットワーク計画』についてどこまでご存じですか？」
「『導力ネットワーク』……。雑誌の記事でたまに見るけど、ちゃんと理解はしていないな。確かエプスタイン財団が提唱してるとか何とか……」
「元は、エプスタイン財団とＺＣＦ（ツァイス中央工房）が共同してスタートさせたプロジェクトです。今では、主に財団によって進められていますが……。その大規模な試験運用が現在、このクロスベル市で進められているんです。まあ、これもその一環ですね」
「よ、よく分からないけど……。結局のところ、どういう事をする計画なんだ？」
「ふう……。要するに、旧来の通信器を発展させた技術ということです。単に会話のやり取りをするだけでなく、演算能力を持った端末同士を結んで効率的な情報ネットワークを構築する。分かりやすく言うとそんな所です」
「全然分かりやすくないんだが……。えっと、要するに警察内部の連絡や指揮系統を効率化する装置ってところか？」
「……まあ、この端末については間違いはないです。わたしの専門ではありませんが端末の操作くらいはできますし。今後のことを考えると一応、チェックしておこうかと」
「そ、そうか……。その様子だと、ティオは配属を辞退するなんて考えてもいないみたいだな？」
「え……」
「いや、そもそも……俺がティオくらいの歳はまだ遊びたい盛りだったよな。財団から出向したって話だけど、その、無理矢理働かされてるとかそういうわけじゃないんだよな？」
「……」

「え……!?まさか、本当にそうなのか?どんな事情があってもそんなの我慢したら駄目だぞ!?その、俺でよかったらいくらでも力を貸すから――」

ティオが何も答えなかったのでロイドは焦った。

「あの、落ち着いてください。……別に強制されて働いているんじゃありません。それどころか……今回の出向は、むしろわたしが我侭を言わせてもらった結果です」

「え……」

「わたしはわたしでここにいる理由がある……。つまりはそういう事です。ロイドさんは人の心配をする前に自分の心配をするべきでは……?」

「あ、ああ……。はは、そうだな。ティオの言う通りだった。ごめんな。差し出がましいことを言って」

「いえ……。ただ、あんまりお人好しなのは捜査官としてはどうかと。遊撃士と違って、人を疑うこともしなくてはならない仕事ですよね?」

「うぐっ……痛いところを突いてくるなぁ。うーん、やっぱり俺ってまだまだ甘ちゃんなのかな……。警察学校の訓練で徹底的に自分を鍛えたつもりだったけど……。でも、確かにそれだけじゃ捜査官は務まらないだろうし……」

「……」

ティオは何も言わずにロイドの顔を見ていた。

「ティオ……?」

「……端末のチェックは一通り終わりました。明日、導力ケーブルの接続工事があるようなので今日は早目に休みます」

「そうか……。おやすみ。ゆっくり休んでくれよ」

「はい。それでは――」

ティオはその場を去っていった。

「……3人ともちゃんと自分のやるべきことを考えているみたいだな。迷っているのは俺だけか……。……」

しかし、どうするべきか考えても何も思いつかなかった。
「……だめだ。なんだか煮詰まってきた。少し外に出て風に当たるか……」

「ふう……いい風が吹いてるな。それにしてもやっぱりクロスベルは大都会って感じだよな……。叔父さん家があった町も決して小さくはなかったけど……」
ロイドはふとすぐ近くにあったマンションを見つけた。
「《ベルハイム》……そっか、ここから見えるのか」
ふと昔の生活が浮かび上がった。
「はは……今はもう別の人が入ってるんだよな。セシル姉の実家はさすがに残ってるだろうけど……。そうだ、おばさんたちにも後で挨拶しておかないと……」
ロイドはこれまでのことを思い返した。
「（あれから3年……。叔父さん家で厄介になった後、警察学校に入って……。がむしゃらに勉強と訓練をして捜査官の資格も取ったけど……。結局、俺は……俺は……捜査官になって何がしたかったんだ……？）」
「お～い！」
声が聞こえてきたと思うと、ジオフロントで保護した2人の男の子がやってきた。
「君たちは……」
「いや～、探しちゃったぜ。警察に行ったんだけど兄ちゃんたちはいないって言うじゃんか」
「それで、この場所を教えてもらったんです。あの、ここが支援課ってところでいいんですよね？」
「あ、ああ、そうだけど。どうしてわざわざ……？」
「い、いやさ……その、ちゃんとお礼を言ってなかったと思ってさ」

「え……」
「お兄さんたちがいなかったらたぶん、ボクたち2人とも大ケガをしてたと思います。だからその……もう一度お礼を言おうと思って」
「……そっか……。2人とも、ありがとな。こんな時間に訪ねてきてくれて」
「ま、まあ、アリオスさんと比べたらかなり頼りなかったけど……。警察のお巡りにしたらなかなか見所あると思うぜ。実力不足は、これから頑張ればいいんじゃね？」
「ちょ、ちょっと、リュウ。お礼を言いにきたのになんだかエラそうだよ～」
「ははっ……。――そうだな。これから精進すればいいか。そうだ、2人ともどこらへんに住んでるんだ？よかったら送っていくよ」
「ああ、へーきへーき。西通りだからすぐ近くだしさ」
「えっと、ボクは住宅街の方だけど平気です。その、お姉さんたちにもよろしく伝えておいてください」
「ああ、伝えておくよ。2人とも、気をつけて帰れよ」
「おう！」
「それじゃ、さようなら！」
2人はすぐに帰っていった。
「ハハ……俺も単純だなぁ。あんなお礼ひとつでこんなに気分が晴れるなんて……。要は自分自身の気持ちの持ち方しだいか……」

――いいか、ロイド。男だったら、目の前のものに体当たりでぶつかってみろ。てめえの心で、てめえだけの真実を掴みとってやるんだよ。そうすりゃ、てめえが何をしたいか見えてくるはずだ。

「……。うん、そうだよな。まずはぶつかってみないと何も分からないか……」
ロイドはビルの中へと戻っていった。

中に入ると通信器が鳴っていた。
「通信器のベル……？」
ロイドは急いで受話器を取った。
「はい、もしもし。えっと……こちらクロスベル警察、特務支援課・分室ビルです」
「――ロイド？その声はロイドね？」
電話の先の声は女性だった。
「なっ……セシル姉か！？」
「はあ、よかったぁ……。警察の方に連絡したらこちらの番号を教えてもらったの。『特務支援課』だったかしら。そういう部署に配属になったのね？」
「あ、いや……まだ正式じゃないけどさ。それよりも、ごめん。本当はすぐにでもセシル姉に挨拶しに行きたかったんだけど……」
「ううん、気にしないで。私の方こそ、あなたを駅まで出迎えるべきだったのに……」
「それこそ気にしないでよ。仕事、忙しいんだろ？休暇が取れた時でもいいからさ」
「ううっ、ロイドが冷たい……。せっかく3年ぶりに再会するお姉ちゃんに対してなんて素っ気ないのかしら……」
「ああもう……何とか時間を作るからさ。それと、おばさんたちには明日にでも挨拶しに行くよ」
「うん、そうね。お母さんたちもロイドのことをすごく心配してたから……。でも、ふふっ……嬉しいな。やっと……クロスベルに帰ってきたのね？」

「うん……――ただいま、セシル姉」
「おかえりなさい、ロイド」

第17章　特務支援課（7）

―翌日

「さて……返事を聞かせてもらおうか」

セルゲイ課長は返事を聞くべく4人を部屋に集めた。

「俺は問題ナシ。このまま厄介になりますよ。っていうか、俺を警察本部に引っ張ったのはアンタでしょうが」

「クク、何なら一課あたりに推薦したっていいんだぞ？連中もお前の戦闘力なら欲しがるかもしれねぇしな」

「うご……ゴメンこうむりますよ。警備隊暮らしならまだしも、ギスギスした所はちょっとね」

「エリィの方はどうだ？」

「私もこのままこちらでお世話になります。セルゲイ課長。改めてよろしくお願いします」

「まあ、お前に関しては俺も想定外だったけどな……。本部のお偉いさんはこの課を安全な雑用係と思って推薦してきたんだろうが……。当然、そんな甘いもんじゃないのは覚悟してるんだろうな？」

「ええ、それはもう。密度の濃い仕事ができるのを今から期待しています」

「フッ、上等だ。ティオはまあ、聞くまでもないか」

「ええ、最初からそういう約束でしたし。それより……今日の午後、導力ケーブルの配線工事があるそうです。端末のセッティングはわたしに任せてもらっても？」

「ああ、元よりそのつもりだ。さてと――そんじゃ残るはお前だけか」

セルゲイ課長はロイドに目をやった。

「――ロイド・バニングス。警察学校のカリキュラムを座学・訓練共に優秀な成績で修了――。そのまま捜査官試験に挑戦し、見事これに合格した。正直、ウチには不釣り合いなくらい真っ当すぎ

る人材だ」
手元にあった資料をセルゲイ課長は読み上げた。
「……」
「お前なら、どの課に行ってもそれなりにやっていけるだろう。ウチが手放したら引き取りたいって話も幾つか来てるしな。迷う余地はないんじゃねーか？」
「――いえ。色々考えた上で決めました。セルゲイ課長。これから宜しくお願いします」
「へへっ……」
「ロイド……」
「……」
「なんだよ、つまらんなぁ。もう少し悩みまくるのを期待してたんだがよ～……」
セルゲイ課長は面白くないようで椅子にもたれかかった。
「……あのですね」
「まあいい、今日一日は全員休暇というかたちにしてやる。地獄のように忙しくなる前の最後の休暇だと思っておけ。ああ、ティオ。端末のセットだけは頼んだぞ」
「ええ、了解です」
「おっと……そういや忘れてたな。改めて――ロイド・バニングス」
「はい！」
「エリィ・マクダエル」
「はい」
「ランディ・オルランド」
「うっス」
「ティオ・プラトー」
「……はい」
「本日０９：００をもって以上４名の配属を承認した。ようこそ、特務支援課へ。バラエティ豊かな仕事を山ほど回してやるから楽し

みにしてるといいい――」

―クロスベル大聖堂　墓地

―天に坐(ま)します我らが女神(エイドス)よ。御身に向かう魂のため、天の門を開き賜(たまわ)らんことを――

「（信じられないぜ……。あの元気の塊みたいだったヤツが……）」

「（可愛い恋人もできてそろそろ結婚かと思ってたのに……どうしてこんな事に……）」

「（クソ……！警察は何をやってるんだ!?身内が殺されたんだろう!?また迷宮入りにするつもりかよ!?）」

「（確か……ご両親は亡くされてるのよね?弟さん、どうするのかしら……）」

葬式の中、参列した人たちは思い思いのことを口にしていた。しかし、その言葉は頭には入ってこなかった。

「……大丈夫、ロイド?無理したらダメよ?あまり寝ていないんでしょう?」

「……セシル姉こそ。色々手伝ってもらってゴメン。本当なら俺が一人で片付けなきゃいけなかったのに……」

「……水臭いことを言わないで。家族同然の付き合いじゃない。それに……ガイさんのことは私にとっても……。……」

「……」

「……セシル姉……」

「……ごめんね。一番つらいのはロイドなのに。これから大変だとは思うけど、遠慮なく頼ってちょうだいね……?あなたが一人立ちするまで、ちゃんと見守らせてもらうから……」

「……。……はは。我ながらガキだったんだな。素直に頼ればよかったのに……変な意地を張ったりして……」

ロイドは墓前に花を供えた。

「（――兄貴、ただいま。今まで顔を見せなくてゴメン。少し、意地を張ってたみたいだ。でも俺……帰ってきたから。兄貴と同じ捜査官としてクロスベルに戻ってきたから。一人前には程遠いし……なんか変な部署に配属されちゃったけど……。まあ、何とか頑張るからせいぜい見守ってくれよな）」

第17章　特務支援課（8）

「――さて、改めて今日から初仕事というワケだが。まあ、何はともあれ改めて説明を補足しておこう。ロイド、操作手帳を出せ」
「あ……はい！」
ロイドは操作手帳を取り出した。
「警察紋の入った黒手帳か。何だかソレっぽい感じだよな」
「確か、警察官としての身分証明にもなるんですよね？」
「ああ、その他にも色んな注意や説明事項をまとめている。――だが、コイツの最大の目的は『捜査状況』の記録と確認にある」
「『捜査状況』……？」
「ロイド、説明しろ」
「あ、はい。――警察の規則では、どんな捜査任務にも記録を付けることになっているんだ。捜査任務を受けてからそれを進めている間の状況をこの捜査手帳にメモしていく。それを元に報告が行われるし、捜査査定や特別手当も決定する。だからなるべく細かく簡潔にメモする必要があるってわけさ」
「なるほど、合理的ね」
「うげ……けっこう面倒くさそうだな」
「ま、基本はそんなところだ。しかし、この特務支援課ではちょいと状況が違ってくる。正規の『捜査任務』以外にも『支援要請』ってのがあるからな」
「え……」
「ティオ、用意を頼む」
「……はい、皆さん、こちらへ」
ティオは席を立ちあがると、端末の前に立った。
「ああ、一昨日の……」
「たしか、導力ネットワークに繋がっている端末だったかしら？」
「はい、昨日のうちにセッティングしました。基本、常時起動した

ままでログオンするとこの画面になります」
ティオは画面を見せた。
「なんか文字が出てきたな……」
「ここに……その『支援要請』が？」
「ああ、正規の任務以外の各方面からの依頼が届けられる。市民や観光客からの頼み事、クロスベル市からの協力要請など様々な依頼が考えられるだろう。必ずしもやる必要はない――が、放っておけば遊撃士あたりに片付けられてしまう内容ではある」
「あ……」
「はは、なるほどな」
「遊撃士協会への高い評価を少しでもこちらに持ってくる……。つまり、そういうことですね？」
「ま、微々たるモンだろうがな。それ以外にも、本部が忙しい時に手伝いに駆り出される事もあるだろ。市内のパトロールとかどうでもいいデスクワークとかな」
「はあ……マジかよ」
「はは……まあ、それはともかく。もう『支援要請』はこの端末に来ているんですか？」
「おっと、そいつは自分で確認してみろ。確認した『支援要請』は捜査手帳にメモしておけよ」
「了解です」
ロイドは端末をチェックした。すると、支援要請が一つ届いていた。依頼先はクロスベル警察本部だった。
「なんだ、どっちかと言うと業務連絡のたぐいみてぇだな。とりあえず警察本部に行って色々と説明を受ければいいのか？」
「ああ、そうみたいだ。でも、『導力ネットワーク』か……。何となくどんなものかは判ったような気がする」
「通信器と違って、声意外に画像や文字も送れるのね。話には聞いていたけど……確かに色々と応用できそうかも」
「ええ、現在クロスベルでは様々な試験運用が行われています。警

察に導入されたこのシステムもその一環ですね」
「ま、ギルドでも同じ技術を試験的に導入したって話だがな。――概要はそんなところだ。早速、お前たちにはそこに来ている『支援要請』を達成してきてもらおうか」
「了解しました。えっと、その後は何をすればいいんでしょうか？」
「好きにしろ……と言いたいところだが本部での説明の後、正式な支援要請が何件か入ってくるはずだ。……そうだな。最初だし、本部への手前もあるから1つくらいはこなしておけ。そうすりゃそこまで嫌味を言われることはねぇだろ」
「（そういう問題なのか……？）」
セルゲイ課長の適当な発言に呆れるロイドたち。
「それと、ロイド。道案内をしてやれ」
「道案内……ですか？」
「これから自分たちが守る街がどういった場所なのか、一通りその目で確かめて来い。そうそう、出てすぐの所にある武器商会と、≪オーバルストア≫だけは訪ねておけよ。警察官としてやっていくなら今後とも世話になるはずだ」
「なるほど……了解です」
「俺は大抵、そこの部屋にいるが昼寝やら雑誌を読むので忙しい。あんまりアテにしないでなるべく自分たちの力で解決しろ。ああ、仕事を片付けて帰ってきたらお前たちに心強いサービスをくれてやるから期待しておけ。そんじゃーな」
それだけ言うと、セルゲイ課長は部屋に入っていった。
「ちょ、ちょっと……」
「おいおい……。いい加減なオッサンだな」
「ふう、大丈夫なのかしら」
「……先行き不安ですね」
セルゲイ課長の適当さにため息しか出ない。
「ま、まあ……とにかく俺たちの初仕事だ。一通り市内を見回りながら『支援要請』を片付けよう。最初だから焦っても仕方ない。確

実にやって感じを掴んでいこう」
「ええ、そうね」
「了解です」
「そんじゃま、行きますか」

第17章　特務支援課（9）

―中央広場

中央広場は行きかう人々で活気があった。

「やれやれ……相変わらず騒がしい通りだな」

「クロスベル市の中心みたいな場所だからね。大きな店が建ち並んでいて、大抵の買い物はこのあたりで済むし……他の街区に向かうにも便利な場所だよ」

「最近では導力車も増えて一層賑やかになっているみたいね」

「はは、みたいだね。そうだ、みんな。《オーバルストア》にも寄ってみようか」

「ああ、さっきオッサンが言っていたオーブメント工房のことだな？なんか随分新しい内装の工房だっていうのは聞いてるが」

「より商業性を高めた新しいタイプの工房ですね。一応、警察と契約を結んでいるので戦術オーブメントの改造や結晶回路（クオーツ）の調達もできると思います」

「確かにこの先、お世話になりそうね。なら、他の街区に向かう前に挨拶しておきましょうか」

「ああ、そこの角にある建物のはずだ」

―オーバルストア《ゲンテン》

オーバルストア《ゲンテン》の内装は外装と劣らず、豪華絢爛なものだった。

「へえ……ここが《オーバルストア》かよ」

「最新の導力車から家庭用の生活導力製品まで……。ずいぶん、近未来的というか真新しいデザインの内装みたいね」

「3年前には普通の工房店だったと思うんだけど……。ええと、と

もかくオーブメントの調整を頼んでみよう。場所は……」
「確かサポートカウンターがあると聞いています。カウンターで頼めば各種調整を行ってくれるはずです」
「そうか……。よし、行ってみるとしよう」
ロイドはカウンターへと向かった。

「ちわ～す！こんにちは～！《ゲンテン工房》……。……じゃなかった、オーバルストア《ゲンテン》へようこそ～。って……わわっロイドじゃない！」
「ウェンディ！？こんな所で何をしてるんだ？」
カウンターにいたのはロイドの幼馴染であるウェンディだった。
「ぶー、失礼ねー。私がこのストアの技師（エンジニア）だからに決まってるじゃな～い」
「そ、そうなのか！？そういや就職したって聞いたけど……。いや、ちょっと意外だったからさ」
「なんだよ、ロイドの幼馴染か？へえ～、可愛い子じゃん。今度俺とデートでもどう？」
さっそくナンパを始めるランディ。
「……どさくさに紛れて何を言っているのかしら。こんにちは。この噂は聞いていましたけど随分と綺麗なお店なんですね」
「あ、ロイドの同僚の人？あはは、まあ、店の見栄えは完全に店長の趣味なんですけどね～。ちなみにここはカスタマーサービス用のカウンターなの。戦術オーブメントのお手入れなんかも扱ってるわよ」
「そっか、ウェンディに頼めば一通りのことはできるみたいだな。あ、でも俺たちのオーブメントは『エニグマ』っていう新型なんだけど……大丈夫かな？」
「あれ……ロイドたちも新型を使ってるんだー。うんうん、任せと

いて。新型用のクオーツの調整器もあるし……。実はこの前からちょくちょく遊撃士の人が利用していくのよね～」
「そ、そう……なのか？」
「遊撃士協会の方でもエニグマの実戦配備が始まっていたようですね」
「ハハ、やっぱ遊撃士どもは行動が早いねぇ」
「あまり笑い事じゃないけれど」
「いや、大したことじゃないんだけどさ。ともかく、ウェンディにはこれから何度もお世話になると思う。よろしく頼むよ」
「うん、こちらこそよろしく！」

―西通り
「ここは……クロスベル市の西通りですね」
「ああ、アパルトメントが多くてベッドタウンみたいな感じだよ。知り合いが何人かいて……ちょっと挨拶しときたいんだけどいいかな？」
「そっか、お前ってここの出身なわけだ。ま、いいんじゃねえか？のんびり行こうぜ」
「そうね、久しぶりでしょうし私たちも付き合わせてもらうわ」
「サンキュー、助かるよ。（ベルハイムにいるおばさんたちと……あとはオスカーだな。パン屋に勤めているはずだけど……）」

―ベルハイム
ロイドは台所にいたレイテに声をかけた。
「あら？あらあら？その顔は……」
「ははは……おばさん、ただいま。顔を出すのが遅くなっちゃった

かな」
「ロイド君じゃない……！まあまあ、よく帰ってきたわね！無事に警察に就職したって聞いたけど……。……どうなの、職場の方は。もうお仕事は始まったの？」
「うん、まあ……とっても（気楽で）いい所だよ。課長も放任主義みたいでさ」
「あらあら、そうなの？何だか楽しそうな部署なのねえ。まあ、何はともあれ、元気に顔を出してくれて嬉しいわ。これは女神（エイドス）に感謝ね。……ロイド君、寮暮らしで困ったことがあったらいつでも言ってちょうだいね？おばさん、寮まで駆けつけるから！」
「いや、もう子供じゃないんだし。警察学校も寮だったから全然平気なんだけど……」
「……ダメよ、ロイド君！ようやく戻ってきたんだからおばさんに世話を焼かせてちょうだい！」
「ゴ、ゴメンおばさん……今度菓子折りでも持ってくるからさ……！」
ロイドはこのままでは埒があかないと思い、慌てて会話を切った。
「（ロイド、押されてるなぁ）」
「（優しそうなのにパワフルな方ですね。……血縁の方ではないようですが……）」
「（ふふ、でも家族って感じね。……少し羨ましいかも）」

―ベーカリー《モルジュ》
「やあ、オスカー！」
「おっと、ロイドじゃねーか！ははは、やっと顔見せやがったなコイツ！久しぶりだなぁ。えーと、1年ぶりだったか？」
「……あのな。顔を合わせるのは3年ぶりだろ？お前、そういうと

ころは相変わらず大雑把っていうか……」
「わはは！何度も手紙でやり取りしてたからそんなに離れてた気がしなくてなぁ。かなり背は伸びたみたいだがお前、相変わらず童顔だしよ」
「むぐっ……」
「はは っ」
「クスクス……」
「どうやらロイドさんのご友人みたいですね……？」
「ああ、俺はオスカー。このベーカリー《モルジュ》で見習いパン職人をやってんだ。あんたらはえーと……ロイドの同僚ってところか？」
「ああ、俺はランディだ」
「エリィです。よろしく」
「……ティオ・プラトーです」
「おう、よろしくな！」
「（俺たち別に制服を着てないのに、このメンツを同僚と見抜くなんて……。相変わらず鋭いんだか、大雑把なんだか……）」
「なんだなんだ、変な顔しやがって。そうだロイド。お前、相変わらず料理はしてんのか？」
「え、ああ……。まあ、叔父さんの家でも家事は手伝ってたからそれなりかな」
「だったら再会の印にコイツをプレゼントしてやろう。せいぜい役立ててくれや」
オスカーはロイドに料理手帳を渡した。
「サ、サンキュー。……へえ、面白いなこれ。レシピのバリエーションまで記録できるのか」
「ああ、複数の人間で共有できるから便利だぜ」
「ま、ありがたく貰っておくよ」
「おう、また機会があるなら顔を出してくれや」

―住宅街
「クロスベル市北西エリア……。この辺りは昔から高級住宅街なんだよな」
「なるほど、大きなお屋敷ばっかだな」
「……そ、そうねぇ」
エリィは住宅街に入った途端に表情をこわばらせた。
「……？（エリィさんの様子がおかしい気が）」

「ここは……？ずいぶんと立派なお屋敷だな」
ロイドは一際大きな屋敷の前で足を止めた。
「門は閉じているみたいね。ね、ねえロイド……特に用事がないならお邪魔することはないんじゃない？」
エリィは早くそこから離れたそうだった。
「そうだな……格式のある家みたいだし。無闇に訪ねるのはやめておくか」
「……」

―歓楽街
「ん？あれは……」
ロイドたちの先には大きな建物の前で観光客たちが騒いでいた。

「……まあ、素敵ですわね！」
「これがあの有名な最高の劇団『アルカンシェル』ね！」
「ふむふむ、チケットはかなりの高額と聞いたが……」

「皆さん、ご堪能いただけましたか？それでは次へ参りまーす！」
「ええ～、アルカンシェルの公演は観れないんですか～？」
「ふふ、実は今日の公演は夜の部だけなんです。夜は自由時間にしますからファンの方は是非訪れてみてくださいね。……そして、次にご案内しますのは……」

「俺もこの辺りには結構遊びに来てるが……やたらと観光客を見かけるな」
「ああ、最近は導力バスを使って外国からツアーで来てる人も多いらしいね」
「この辺りは歓楽街だから観光客は必ず立ち寄るそうよ。外国人に何かあったら国際問題にもなりかねないし……警察（あたしたち）の働きが重要なんじゃないかしら」
「なるほど、納得です」

―裏通り
裏通りと呼ばれる通りは昼間でも薄暗く、通行人も少なかった。
「この通りは……？」
「ま、いわゆる裏通りだな。歓楽街の延長みたいなもんだが、粋なバーからキャバレーまでなかなかいい店が揃ってるぜ」
「……ランディ、妙に詳しいな？」
「ああ、ロイドには言っただろう？この辺りには何軒か色っぽい姉ちゃんたちのいる店があってな……」
「……それ以上言わなくていいわ」
「（はは……ランディは結構入り浸ってるみたいだな……）」

「……おい、ガキども。この先に何か用事か？」
「ここから先は私有地だ。入ってくるんじゃねえ」
ロイドたちが奥まった道路を入っていくと全身黒づくめの男たちに止められた。
「（……何者だ……？）」
ロイドたちは大人しくその場を立ち去った。
「随分と柄の悪い連中だな」
「ああ、ヤクザ者だと思う。機会があれば調べたいところだけど……下手に刺激しない方が良さそうだ」

―東通り
東通りにはやたらと赤い建物が並び、魚屋が多く立ち並んでいた。
「ひゅー、随分とエキゾチックな街並みだな」
「東方風ですね……。話には聞いていましたが少し驚きです」
「東通りの露天街……私もあんまり来たことがないわね」
「お、んじゃあ適当にブラブラしてみるか」
「あのな……買い物目当てじゃないんだけど。（それに……確か東通りには遊撃士協会（ブレイサーギルド）があったはずだな）」

―遊撃士協会クロスベル支部
「ここは――遊撃士協会（ブレイサーギルド）か」
「遊撃士協会……民間人の保護・支援を請け負う国際的な非政府組織ですね」
「いわゆる正義の味方、俺たちの商売敵ってやつだな」
「一応、名目上は協力関係にあるはずだけど……」
「あら、いらっしゃい。ひょっとして、アナタ達が《特務支援課》の坊やたちかしら？」

受付からピンク色の服で女装した男性が声をかけてきた。
「え……！？」
「どうして私たちのことを……」
ロイドたちは受付に近寄った。
「――はじめまして。クロスベル警察、特務支援課のロイド・バニングスです。えっと、あなたは……？」
「アタシの名前はミシェル。遊撃士協会・クロスベル支部の受付を担当させてもらってるわ。アナタたちのことはアリオスから聞いてるわよ」
「ああ、そうだったんですか」
「せも、よく私たちが支援課だと気付かれましたね？」
「フフ、その胸のエンブレムと顔ぶれを見たら一目瞭然よ。どうやらウチと似たような活動をするみたいだけど……」
「そ、それは……」
「まあ、否定できませんね」
「やっぱギルドとしちゃあんまり面白くはねぇか？」
「あら、とんでもない。ウチとしては大歓迎よ。なにせ、依頼の数が多すぎてね。今いるメンバーだけじゃ回しきれなくなってるのよ。アナタたちが分担してくれたらこちらとしては大助かりだわ」
「そ、そうですか。それを聞いて安心――」
「――ただし、使い物になるんだったらね」
「っ……」
「こう言ったらなんだけど、ウチの遊撃士たちは優秀よ。アリオスはもちろん、他のメンバーも全員粒ぞろい……エース級の実力を持っているわ。さらにあと一人、アリオスと互角以上の実力を持つ遊撃士がいるんだけど……何でこんな子たちに……」
「えっ……？」
「……何でもないわ。とにかく警察が市民の人気取りのためにでっち上げた新人ばかりの部署……。そんな所に果たして代わりが勤まるかしらねぇ？」

ミシェルは嫌味そうにロイドたちに言った。
「そ、それは……」
「（……反論できないわね）」
「（ま、正直厳しいかもなぁ）」
その言葉に反論できなかった。経験が浅いロイドたちにベテランの遊撃士には到底かなわない。
「フフ、まあイジめるのはこのくらいにしてあげるわ。アナタたちはアナタたちでせいぜい勝手に頑張りなさい。しくじったとしてもこちらがフォローするから」
「……精進させてもらいます」
ロイドたちはそのまま遊撃士協会を後にして次の場所に向かった。
「ふう……。レイン、あの子たちは実際に見てみてどう思う？」
ロイドたちが去っていったあと、レインが2階から降りてきた。
「そうですね……。やはり今はまだまだだとは思いますが、これからかなり成長すると思いますよ」
「本当にあの子たちについていくの？今から考え直しても……」
「いえ、もう決めたことですから。彼らと共に行動していればそのうち……」
「本当にあなたも頑固というか、よく分からないわね……」
「ふふ、そうですね。自分でもある程度は自覚はしていますよ。まあ、私が抜けた分はアリオスさんたちに頑張ってもらいましょう」

―港湾区
「ルピナス川に面し、南のエルム湖を臨む港湾区画（ウォーターフロント）……。この辺りはオフィス街なのよね。北側には会社ばかり建っているわ」
「はは、でもいいカンジで公園があるじゃん。休んでけってことじゃねえ」
「データベースによると『港湾公園』というそうですね。……その

ままですが」
「あ……」
ロイドが視線を向けた先には雑居ビルにあったクロスベルタイムズが建っていた。
「クロスベルタイムズだ。こんな所に移転してたのか。（うーん、やっぱり3年も経つといろいろ変わってるなぁ）」
3年での発展の大きさを改めて実感するロイドだった。

―IBCビル前
「ここは……あのIBCの本部があるビルだな」
「クロスベル国際銀行（International Bank of Crossbell）……。幾つもの支店を持つ巨大銀行にして幅広い事業を展開する一大グループ。十年前には総資産額も大陸一を達成したし……今やクロスベルの実質的な柱ね」
「ええ、特に金融・建設・不動産業界では無くてはならない存在と聞きます。クロスベルで進められている大きな公共事業計画……ジオフロントや導力ネットワークの整備にもIBCの資本が投入されているそうですね」
「はー……なんか俺には縁遠い場所みてぇだな」
ランディは自分には全く縁がないと興味を示さなかった。
「……あの、ランディさん。わたしたちのお給料もIBCの口座振り込みですよ？」
「な……そうだったのかよ！？」
「クロスベル市内だとそっちの方が便利なんだよな。でも……今日は休みみたいだな」
IBCの門は閉鎖されていた。
「まあ、週末は休行日だから……。また立ち寄ってみることにしましょう」

―行政区

「クロスベル市庁舎に警察本部、市立図書館……お役所の建物が集まっている官公庁街ね」

「のどかな所ですね。噴水にベンチまでありますし」

「市内でも一等地なんだけど……日中はいつもこんな感じなのよね」

「まあ、警察本部があるし、これから何度も訪れると思う。支援課からの道順はしっかり覚えておこう」

「了解、リーダー。本部には『支援要請』とやらでも呼び出されてたんだったか。ついでに顔を出してもいいかもな」

第17章　特務支援課（10）

―クロスベル警察本部
「あら……」
「あ、ロイドさん！」
「はは……どうも、こんにちは。端末にきていた連絡を見て参上したんですが……」
「はい、お待ちしていました。初めまして――クロスベル警察、受付担当のレベッカと申します」
眼鏡の女性はレベッカと名乗った。
「同じく受付担当のフラン・シーカーです。えへへ、皆さんとは一昨日すでに話していますけど……」
「はは、そうだね。何だかみっともない所を見せちゃったけど……」
「……まあ、具体的には遊撃士に見せ場を奪われた挙句、副局長のお叱りを受けたわけですが……」
「うぐっ……」
「ティ、ティオちゃん……」
「あはは……本当に災難でしたねぇ」
「ふふ、あまり気にすることはないと思います。立ち上げたばかりの部署ですから、最初は慣れないこともあるでしょう。私たちも、皆さんの助けになるよう可能な限りお手伝いさせて頂きます」
「あ、ありがとうございます」
「や～、そう言って頂けると百人力ッスよ！」
「よろしくお願いします。それで……支援要請に関する補足説明をしていただけるそうですが？」
「そうですね。早速始めさせていただきます。――まず、皆さんには専属のオペレーターが付くことになります。こちらのフランですね」
「よろしくお願いしまーす」

「オペレーター……？」
ロイドたちは首をかしげた。
「例の《エニグマ》を通じてサポートしていただけるとか？」
「えっと、現場レベルでのサポートではなくって……主に『支援要請』を達成した時の報告を処理させていただきます。《導力ネットワーク》を通じて」
「ムム、ちょいと話が難しくなってきやがったな」
「……要は、わたしたちがこれから片付ける様々な依頼……それを達成した時の報告を支援課の端末から導力ネットで受け付けてくれるということです」
「えっと、それはつまり……」
「警察本部に出頭しなくても各種報告ができるわけですね？」
「ええ、一連の報告はその場で査定された上で特別手当なども支給されます。あと、実績を積まれたら捜査官としてのランクが上がりますが、それについても連絡できると思います」
「へへ……そういった一連の手続きのオペレーションをわたしが担当させていただくんです」
「なるほど、そういう事か……」
「つまり、面倒な事務手続きはあの支援課の端末でぜんぶ出来るってことだな？」
「ええ、これも導力ネットワークの試験運用の一環になりますね。ティオさん。支援課の端末のセッティングはもう大丈夫でしょうか？」
「ええ、いつでも報告可能です」
「わかりました。それでは最後になりますが支援要請に関する概要について改めて説明させて頂きます。分からないことがあったら遠慮なく聞いてくださいね？」
「では、まず支援要請について説明をお願いします」
「はい、支援要請とは特務支援課に届けられる各方面からの様々な“依頼”です。簡単な手伝いから本格的な捜査、魔獣退治など、様

々なタイプの依頼が来るのではないかと思われます。一部の例外を除いて、実際に引き受けるかどうかは皆さんにお任せしますが……期限以内に達成しないと消滅するのでそれだけは注意してください」

「分かりました。では次に報告はどうすればよいのですか？」

「報告は、支援要請を達成したら特務支援課の端末から『報告』を行ってください。導力ネットワークを通じてすぐに査定させて頂きます。内容に応じた特別手当など出ますので、こまめに報告されるとよろしいかと思います」

「では、最後に捜査官ランクについて教えてください」

「捜査官ランクは通常の捜査任務をこなしたり、支援要請を達成していくことで皆さんの実績は上がっていきます。現状ではランクは１５段階あります」

「分かりました、ありがとうございます」

「では、これをもちまして『支援要請の補足説明』を“達成済み”とさせていただきます」

「えっと、支援課に帰ったら端末から『報告』してみてください。改めて、新しい支援要請をそちらの方に送りますから～」

「分かりました、試してみます」

初めての支援要請を達成したロイドたちは支援課に戻ることにした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3106l/

絆が紡ぐ運命の軌跡

2011年11月20日04時00分発行